烈風のアヤキ

海乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
烈風のアヤキ

【Ｎコード】
Ｎ０５１９Ｇ

【作者名】
海乃

【あらすじ】
夢ならさめろ！ドッキリだと言ってくれ！龍にさらわれ魔物に襲われ一体俺が何をした！？バスに乗って気がつけば乗り合わせた人達と異世界に！？龍の神子になり、武闘大会に出場し、湖での策謀巡らす吸鬼との攻防、そして雪積もる地にて封印された魔獣との決戦へ。
４章『古今の異邦者』連載開始。暇を見つけて誤字脱字と矛盾の修正中。現在１８話まで修正済みのはず。誤字多いです注意

『それは唐突に』（前書き）

この物語はフィクションです。
実在の人物・国名・歴史とは同じ名前、事件が出たとしても一切関係有りません。
「事実と違うぞ歴史と違うぞ」と言うご意見は一部例外を除いて受け付けませんのでご了承ください。（もちろん描写方法や誤字脱字、話の展開や人物の主観、人体の構造としてあり得ない動き等々の意見や話の感想などはもちろん大歓迎です）
それと、軽度と言えるかどうかは人によりますので断言しかねますが、人や生き物の血や死といった表現が入ってきますがＲ１５にはしておりませんのでそのあたりも了承、承諾したうえでお読みください。では、ごゆるりとページをめくってくださいな

第一章　～龍の神子～

『それは唐突に』

日本海沿岸、高速バスは海沿いを走っている
たいした揺れもなく、むしろ心地よい温度に設定された冷房と、バスの中へと差し込む柔らかな陽光が強い眠気を誘う

乗客は数名
恐らくバスの運転手を含めても十人ほどだろう
一番後ろの長い座席には3人の家族が座っている。
その前に座っている若い男女はカップルだろうか
その前には少し大柄な男の人が座って本を読んでいる
皆楽しそうにしている中、携帯音楽器から伸びるイヤホンを耳に付けて俺は一人で適当な座席に座って外を眺めていた
隣には誰もいないため、持参した小さなリュックを置いた

まぁお盆だからなぁ・・・

地平線を望むことができるほど広い海を見てそういえばお盆って水場で事故が多いよなとか思う

バスに揺られること3時間ほどだろうか

何度か料金所で発生した小さな渋滞に巻き込まれつつも、さほど支障はなくバスは進んでいく

途中事故した車を見たりもしたが別に同情したりはしなかった

曲が終わり、次の曲に入る

最近話題になった曲で有名歌手が自分で作曲した曲だったはずである

ゆったりとした曲調である意味癒し系の部類にはいると思う

そんな曲が耳元から入ってくる

いつの間にか俺は眠りに落ちていた

紅葉色の陽光が瞼の裏にうつる

目覚めは良いほうなのですぐに目を覚ます

覚醒が早いとでも言うのだろうか？とにかく脳も寝起きを理解したのかちゃんと働いてくれたようで目はすぐに覚めた

膨大な数を入れてある携帯音楽器だが、全ての曲のうちどの程度まで終わっていたのかが分からず、俺はそれをお気に入りの曲まで飛ばして再び再生する

陽光はちらちらと見え隠れしておりその度にバスは影に入り、暗くなったり明るくなったり、視界の中の光りが明滅を繰り返した

窓の外を覗き、草木がキラキラと光るように見えるのは風で葉が揺れているのと差し込む木漏れ日のせいだろう

俺は揺れるバスがいつの間にか山の中に入っていることに気がついた

そして陽差しの色が弱まっているのは恐らく日が傾いて、そらが夕焼けに染まっているからだろう

腕時計を確認すると午後５時３４分をさしていた

予定ではもう少しだな

もう少しでバスは有料道路を降りて近くにあるバス停に止まる事になっている

俺も周囲と同じように実家に帰るためにこのバスに乗っている

強制ではないはずなのに、それをしないといけない気がするのは何故だろうか

日が傾き、背の高い樹木が日の光を隠した

暗い影が道路一杯に広がりバスや周囲の車を覆い隠した

「君も里帰り？」

突如通路を挟んで隣にある席に座っていた女性がいつの間にか立ち

上がっており、走っているというのにバスの通路に立っていた

顔がこっちを向いていることから自分に話しかけていることが分かる

「はい。このバスの人は全員そうでしょうね」

音量を低めにしておいてよかった

でないとその声は音楽でかき消されていただろう

イヤホンを取って電源を切る

「でしょうね。すいません話しかけたりしてしまって。一人旅でつまらなかったもので」

「いえ、俺もすること無かったですから」

話しかけてきたのは２０代前半であろう女性

落ち着いた色の上着を羽織っており若干渋めな感じもするがそれでいて胸元のアクセサリーやその整った顔立ち、サラリと背中まで伸びる髪が美しさを思わせる

「見たところ高校生みたいですけど？」

「そうです。高校２年です」

「私は自由気ままな占い大好き大学生。隣、いい？」

ちゃっかり自己紹介に趣味を混ぜてきている

断る理由も無いので俺はその人を隣に座らせた

話題が入ることで次の会話につなげそうな感じである

自分も自己紹介の時に何かを入れておけばよかったか？

とは思いつつも時間が逆戻りするはずもなく、俺は彼女の話題の種に乗ってみる

「占いですか？」

「そう！」

と目をぱちくりとした目がキラキラと輝くように俺を見つめる

聞いて欲しかったのだろうか

リュックの小さなポケットからカードの束を取り出す

カバーを外してそのタロットカードをシャッフルする

「大アルカナですか？」

「お、分かるかね？」

・・・・しばらくバスの中で占いをしながら会話が続いた

「君はたぶんリーダー気質があるとでているね」

彼女が自ら考え出したという占い方で占って貰うとどうやら俺はこれからリーダーになるらしい

彼女曰く、自ら考えた方法にしてはなかなか当たると大学の友人に高評価を貰っているらしい

まぁリーダーになる予定なんてないし、それほど人に自慢できる程の事をしている訳でもないんだけど

「うぇ!?お隣の高校だったの!?お姉さんビックリだー!」

そして一番意外だったのは彼女の通う大学、そして自分の通う学校がすぐ隣にあると言うことだ

目と鼻の先の大学に彼女は通っていたらしい

「もしかしたらどこかで見かけていたかもしれませんね」

「おぉ・・・ということはもしやこれから通学路でばったりという可能性も・・・!?漫画やアニ・・・エロゲで良くあるシュチュエーションではないか!?」

「いや、アニメを言い直してエロゲをたとえに出す理由が分かりません」

「お、エロゲに食いついたね?いまエロに反応したな!?お姉さんの胸を見たな!?嫌らしいぞ思春期真っ盛りの高校生!」

と、隣に座る女性が頭をバンバン叩いてきた

痛かった

なんなんだこの女性

「はぁ・・・いや、俺そんなところ見てませんから」

と、焦りかかったがこれは良くあるパターンだなぁと思いため息をついて落ち着けーと自分を促し返答する

「いやいやいや、もうちょっと焦ったりしてよ！つまんないじゃない！」

予想通り、年上だからって俺を手玉に取らないでくださいよ

「手のひらで転がされるほど甘くないですよ俺？」

「おおぅ、自分で言うかね自分で」

少し考えてみて・・・自分でも発言に嫌気がさした

そとの景色を見て、見慣れた景色な事に気がついた

「もうそろそろで着きそうですね」

毎年変わらぬその道をバスが行く

吹き付ける風がバスにぶつかり、そして流れていく

「もう少しで・・・ぶべっ！？」

彼女がバランスを崩して身を乗り出した状態で目の前の座席に顔を打ち付ける

俺も必死に前の座席にしがみついた

というのもバスがもの凄い動きをしたからだ

な、何が・・・！？

そう思うことすら忘れるぐらいに強烈な揺れがバスを襲う

「何かにつかまってッ！！」

座席に顔を打ち付けた彼女が片手で顔を覆いつつバス全体に聞こえるように叫んだが、ギュルギュルとバスにかかる急ブレーキ音のおかげで彼女の声はかき消されたように思えたし、そんな言葉を聞いている暇すら内容に思えた

縦揺れとも横揺れとも言えないようなすごい揺れに周囲の人たちも叫んでいたりするが皆一応何かにつかまっていたようであった

「何がっ・・・」

窓ガラスが割れる

荷物が宙を舞い、黒い影が視界を覆い隠す

あ、子供だ

遙か前方の席に座っていた子供が座席をいくつも飛び越えて飛んで

きた

「きゃぁぁぁ！」

彼女の悲鳴と共に、少女の小さな尻が俺の顔面に直撃した

ぐらりとバランスを崩して倒れた俺は床に頭を打ち付け、俺の意識は暗闇へととけ込んでゆく

ポニーテール・・・だったなぁ・・・

ぶつかってきた少女の髪型を思い出して俺は気絶した

風が吹いた

風はグルグルとつむじを作り、古い落ち葉を巻き込んだ

落ち葉はその中心まで渦を巻いてパサリと地面に落ちた

道路上を走っていたバスが一台、地球上から消えた

『それは唐突に』（後書き）

物語のはじまりはじまり～

修正なんかもしていますが、出来る限り修正は少なくして当初の気持ちを壊さないように修正してます。少しばかり長い物語ですので作者の成長なんかも楽しみながら見てもらえると嬉しいです。まだまだ未熟ですが、楽しんでいってくれると嬉しいです。

『アルデリア王国』

アルデリア王国

王都・アクリス

水の国ともいわれるこの国には太古より水の精霊が住むといわれている

国の中央に位置する巨大な城

そして並び立つようにして城の側にたつ精霊殿とアルデリア城が眼下の城下町を見下ろしている

この国の王女、長女セレシアは建国の始祖である人物、アヴァルス・アルデリアの子孫である

名も無き国は彼の性を取ってアルデリアと名付けられた

その王家の名前を引き継ぐセレシアは日課である儀式を行うために精霊殿へと向かった

セレシアは数人の従者を従えてまっすぐその精霊殿へと向かう

幼少の頃より母と共に行ってきた儀式はこの国の精霊との対話によるものである

とはいえ、精霊そのものと対話をするわけではない
精霊との対話は名称のようなものであり、後々セレシアも精霊と契約を結ぶ時のための準備という形となっている

現在この土地の精霊と契約をしているのはそのセレシアの母、ファルアナリア只一人

代々王族に生まれた女性は精霊と交感出来る血を受け継いでいる。
精霊と契約を交わし、その後は精霊使いと呼ばれるようになる

17を越えた時点で男女共に成人とみなされるこの世界では、王族の女性、それも直系の女性のみが儀式を行い精霊と契約を交わす

そのための訓練を毎日行ってきたセレシアだったが今日はファルアナリアがどうしてもずらせない仕事が急遽できてしまい、今は別室に籠もっている

いつも付き添っている母が居ないとは言え、サボるわけにも行かず、（サボるという事自体思い浮かばないのだが）彼女は精霊殿の門をくぐった

見慣れた場所

水の精霊が祭られる場所でもあるこの場所は、いつも汚れ無き美しい水が精霊台から絶え間なく溢れ出している

満たされた水が、さらさらと音をたてながら精霊殿の外へと外へと

流れていき小鳥たちが囀る（さえず）

「こんにちは、ユェンさん」

王女セレシアは近くに立っていた青年、ユェンに挨拶をする

ユェンと呼ばれた青年も膝をついてそれに答える

彼の後には巨大な石のアーチの中に満たされた水が満ちている

決して横に零れることが無く、アーチの中にとどまる水はゆらゆらと揺れている

水鏡と呼ばれるその巨大なものは他にもいくつかの国に同じように存在し、互いに言葉のやりとりや姿形を相手の水鏡に映すことができる便利な代物である

「セレシア様、たった今、火、光の精霊殿より通信が入りました」

ユェンがそう言うとセレシアは進めていた歩を止め、振り向いた

その振り向く様に、純白のドレスが翻る

その美しさに息をのむ者も居るほどだ

「この時間に・・・ですか?定例通信・・・の時期では無いから緊急を要する事なのですか?」

この水鏡は滅多な事では使えず、それは王女であるセレシアですら勝手に使うことは許されない代物であった

この精霊殿が立てられたときから存在する水鏡と、中央に位置する精霊の台座は今も健在で、その二つに関しては取り扱いが厳しくなっているのだ

精霊殿を仕切っているのはファルアナリアなのだが、その母は今城で執務をこなしているはずである

母を呼ぶにしろ、相手を待たせるわけにも行かないために今は自分がその通信をすることになるであろう

「はい。緊急を要するとの事です。火の精霊殿からはアルフレア様、光の精霊殿からはアーマルジュン大魔導師が代理で通信に入っております」

「分かりました。お下がりなさい」

ユェンは水鏡の前をどいてセレシアに場所を譲る

目の色を変え、仕事モードに入るセレシア

「こんにちはアルフレア。それにアーマルジュン大魔導師殿も」

水鏡の左半分に映し出される女性の姿

対して反対側には老人の姿が映し出される

アルフレアは隣の国、グレアント王国の第一王女であり、数少ない友人の一人である

そしてもう一人、アーマルジュン大魔導師はそのグレアントとアルデリアの北方に隣接する位置にあるリーナと呼ばれる大国に居るゼリアル魔術師団の団長で、何度かセレシアとの面会もある

この国は少々独特で国が大きいためだろうか、権力が大きく二つに分かれており二つの城が別々の場所にたっているのである

それでも互いに独立はしておらず、東西に分裂しているという訳ではないらしい

長い白ヒゲを紅いリボンで括られているのは彼の国の王女によるいたずらであるらしい

あちらではどうやら今ではすっかりその姿が定着しているらしい

太めの体型をしたその老人はゴホンと咳をする

「リリアやルラは其処に居ないのですか？」

セレシアの口から出た2人の名はリーナに居る双子の王女の名である
本来ならこのような伝令には各国の精霊使いが出るしきたりであり、
彼のようなその他に含まれる人物が代理を務めることは滅多にない
もし精霊使いが居ない場合は代理を立てる事になるのだが今回はそ
のうち全員が精霊使いとは別の人間とは珍しいこともある物だ

『お二人とも、ただ今ダリアに向かっております故この場に出るこ
とはできず、変わりに私がこの場を任されておりました』

白髭を蓄えたその男は少し寂しそうな声で言う

「ダリア？あそこはたしか・・・」

『お察しの通りでございます』

「それで、用件があるのではなくて？」

『そうでございました。アルフレア殿の所でも同じ現象が起こった
のです』

「現象・・・ですか？」

現象？いったい何が起こったというのだろうか

それも二つの国から同時に通信が来るほどの
そして、その伝令がこちらへ回ってきたと言うことは、アルデリアにも何かしら関係があることなのだろうか
となれば共通点としてまず思い浮かぶのはこの精霊殿の事である

『じゃぁその件は私から言うね』

と、アーマルジュン大魔導師の代わりにに左側で静観していたアルフレア王女が声を発した

こういった通信を行う場合、大抵は周囲の従者達を下がらせるのだが緊急を要することらしい

そのためか、単なる彼女のミスなのか、まだ何人かの従者がその場でその伝令を聞いていた

皆一様に「何事か！？」といった顔をして聞き耳を立てていた

『ついさっき、炎の神殿での祈りの最中、精霊台から炎の柱が出現たの』

祈りの儀式はこの国だけで行われるわけではない

周辺国はもちろん、この大陸の精霊台のある国には精霊教が浸透している

精霊教は大まかに言えば精霊を神に近い存在として崇める宗教のようなものである

事実精霊は存在している

精霊台の存在する9の国では何処もこのように自国の発展と実りを願って祈りを捧げている

それも精霊教の浸透する国の王族がその宗教をを拒絶するはずもない

「炎の柱？」

『私の所は光の柱でございます』

アーマルジュンが隣で付け加えた

炎と光。それぞれが自らのあがめる火の精霊、光の精霊に対応しているかのようである

『それでどうなったと思う？突然炎の柱の中から人が現れたのよ！もうびっくりびっくり』

彼女は声を荒げて興奮したように言い出した

そういえばいつの間にか彼女は普段の口調に戻っていた
それほどの事が本当に起こったのだろうか
あり得ない、と言い返したかったがそれもできない
わざわざ水鏡を使って通信をして、さらに彼女が嘘をつくなんて考えられないからだ

「人？一体どこから？転移の類？」

『さぁね？その辺はわかんないんだけど突然現れたんだよ。光の精霊殿の方も同じような感じ』

「それで、現れたというその人は？」

『それがさ、妙な事に変な服を着てるんだよ。私たちが知らないような異国って感じの服着てね。しかも燃えてないし・・・』

「見知らぬ土地から来たと言うことですか？」

『詳しいことは分からないけどさ、これってあれに似てない？ほら、始祖の話にさ』

昔から多くの国に伝わるその話は現代でもしぶとく生き残っている話の一つである

先人が残したその原文は今でも各国に伝わっている

各国いろいろな伝説や過去の記録の話などがあるがそれをひとまとめにしたものを『過去幻の書』と言う

その中でもどの国にも伝わる話の一つに始祖の話という話があり、その話に酷似している気がすると彼女は言う

「始祖の話・・・ですか」

アルフレアは続ける

『そう。その始祖の話に似てるわよね。精霊の代わりに現れたのは人間だったけどさ。何ていったって精霊台の魔力の奥には精霊の世界が広がっているはずでしょ？そこから人が現れることなんて、ありえると思う？』

たしかにそうだ

あの奥は精霊の住む世界とつながっていると聞いている

母ならともかくセレシアにはまだ完全に精霊と会話するという技量は無い

精霊台は各国の精霊が現れたとされる場所に立てられた精霊殿の中心に位置する台座である

台座には何本かの柱が立っており、その中心つまり精霊台には各国それぞれ違うが、無限なる魔力が注がれている

この国ならば魔力が満ちあふれた水があり、火の精霊殿なら大量の魔力が詰め込まれた炎が、光の精霊殿からは微弱だが、尽きることのない光が漏れている

触れることができないほど表面に膜を張った魔力の奥には、昔から精霊の住む世界があると言われている

なぜならば精霊はその台を通して現れることがあるからだ

最もそれしか方法が無いという訳ではないが昔からそういう風にセレシアは言い聞かされていた

「どういう事なのかしらね」

『これまでに無いことだったからね。かと思って驚いていたら同盟結んでるリーナから通信がくるしさ』

『他の国にも伝令を回そうとしたのですがやはり仲の良いお二人方へ連絡を入れるべきかと思いまして。ファンダーヌの方にも連絡を入れてみたのですがどうも応答が無くて・・・』

水鏡が同時に通信できるのは3つまでである

もとより水鏡が4つしかないためもある

故にアーマルジュン大魔導師は普段リリアとルラの双子が仲良くしているセレシア、アルフレアの同盟国に連絡を入れたのだ

ただどうやらもう一つの国、ファンダーヌとは連絡がとれていないらしい

この４国は諸事情により他国から狙われやすい関係にあった

そのため４国は各国の王女の名の頭を取り、他国の牽制となるアセアル同盟を結んだのだった

尤も、この同盟は前にあった同盟に不備が合ったために結び直したものでもあるので前の世代には別の名で呼ばれていたらしい

そしてそのうちの一人は今通信に出ていない

「現れたという人は今はどうなされているのですか？」

『あぁ、今隣にいるわよ』

アルフレアがちょいちょいと手招きをする

するとハジッコからひょこっと女性が顔を覗かせる

大人のようである。それもまだ成人して間もないのではないかというような感じである

黒髪は綺麗だし、水鏡越しに見ても背が高いのが分かる

アルフレアよりも背が高く、そして美しい

大人の雰囲気というものを上手く醸し出していると思う

見たこともない衣服を身に纏っているが、それでも彼女の風貌にそれは見事に合っているとしか言いようがない

「お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

と、その女性の名を聞くことにした

『え、私のことですかい？』

彼女は親指で自分のことを指さす

こくりと頷くと

『私は一条唯！２２歳独身でぇっす！』

と、ビシッと敬礼のポーズを取る・・・が

「わ、若いんですね」

『マジでッ！？』

『ほほぅ・・・』

『なんだそのリアクションーーーー！？』

『五月蠅いわねー！』

グイッと水鏡の奥に彼女を押しやるアルフレア

ザワザワ

周囲がざわめく音で彼女は意識を後に向ける

そう言えば皆を待機させたままだったわね

セレシアはクルリと振り向いてついてきた従者と彼女が来るまで精霊殿の周囲を警護していた兵を下がらせようとした

が、その言葉が喉にでかかったところで彼女は目を丸くする

振り向いた瞬間に、とある光景が目に飛び込んできたからだ

「ねぇ、フレア・・・もしかしてそれって・・・」

『んーどうしたー？』

アルフレアが後から問いかけるが振り向く気配が無いセレシアを見る
いつの間にか彼女をいつもの呼び名で呼んでいる自分が居た

『おーい、生きてるー？』

アルフレアが水鏡越しに手をブンブンと振っているが、後を向いて
いるセレシアにはまったく見えないため気がつかない

『ねー本当にどーしたのー？』

するとスッと体をずらして彼女は水鏡の前から退く

水鏡から姿が消え、彼女の後の光景が映し出される

すると其処には天井近くまで渦を巻く水が精霊台から伸びている光
景が2人の目に飛び込んできた

ぐらぐらと揺れていた水の渦は徐々に垂直におさまりはじめる

そしてその中に、いつの間にか現れた黒い人影

人影は地上から数メートルの地点に現れており、精霊台の上に居る
ためさらに高い場所に居るかのように見える

渦はゆっくりと精霊台へと戻っていき、その人影もゆっくりと水と
共に降下してくる

ん・・・・

目を覚ました桜（さくら）　彩輝（あやき）は瞼を開いた

最初に視界にうつったのはぼやけた世界だった

ゆらゆらと揺らぐ世界が其処にはあった

世界と彼の目の間には水があった

そのため周りが揺らいでいるように見えたのだが起きてすぐの状態
で、しかも体験したことのない状況に一気に目が覚める

「うわぁっ！？」

あわてて手足を動かそうとするが水圧で上手く動けない

それなのに皮膚に水の感触が無い

妙な浮遊感につつまれた彩輝は自分に落ち着け、落ち着けと二度復唱して落ち着こうとする

何があった？バスが事故した

俺はどこにいる？分からない

皆はどこだ？周囲には居ないようだ

俺は誰だ？桜彩輝だ

ゆっくりと水が引いていき、それと同時に体が降下していく

降りると足に水の感触があったのが分かった

だが足は水に浸かることなく、体をいつものように支えている。水の上で

な、なにが・・・！？

視界が水が無くなったことにより、とてもクリアになった

周囲には人だかりができている

小さな台座のような場所の上に立っている俺は自分の頭がどうかしてしまったのではないかと思いこんでしまう

何が起こった!?と、脳内で問いかけて見るも、彩輝の質問には誰も答えない

ザワザワと周囲がざわめき、その中心となる人物は恐らく自分であろうと予測

円形の床にその周囲には水が満ちている

床にはいくつもの溝が掘ってあり、彩輝が立つ台座の下にはそれよりも大きめの溝があいており、そこから水が溢れているようだ

天井を支える柱は長方形の室内の端に無数にたっており天井を支えているようだ

そしてその柱の奥には町が見えた

大きな町が広がり、其処にはここから流れ出した水が用水となって町の隅々まで水が引かれているが分かる

空を飛んでいる鳥が遠くを旋回しているのが見え、遠くには山々が連なっている

雲一つ無い空と深緑の山が手前にある町と合わせてみることでとても綺麗な風景となっている

是非とも写真に納めたいものだ。と彩輝は思う

ぴちゃぴちゃと水の上を歩き台座から出ると周囲が再びどよめいた
それにしても彼等は誰で、一体ここはどこなのだ?
日本じゃ・・・ないよなぁ、と彩輝は思うのだがバスに乗っていたときは確かに日本だったし・・・
彩輝はいろいろと考えてみるが結論はもちろん出るはずもなく、ハッと気がつくと自分の荷物が無いことに気がついた
うぁー・・・まじかよ・・・・
あの中には財布やら携帯電話、あとは実家へのお土産や着替えなどが入っていた
要するに手持ちにあるのはポケットに入っている携帯音楽器とイヤホン、それと抜き忘れた5円玉と腕時計だけだった
こんなものでどうしろというのだ
そうしていると人だかりの後から女性の声が聞こえた
「退きなさい!」
その一言で人垣はザッと割れる
おー、モーゼの何とやらみたいだ

道をつくり、皆その女性に対して膝をついて低頭している

凛とした声でその女性は彩輝の立つ台座の麓まで来ると此方を見上げた

肌は白く美しい

身に纏うドレスも光り輝くように煌びやかに風に揺れる

それと同時に長い髪も又、同じように風に揺れた

ぱっちりとした目が彩輝の目を捕らえ、視線が交わる

反射的に彩輝は羞恥により視線をそらしてしまう

おそらく彼女は地位の高い場所に居る人間なのだろうと推測

周りの人間を従えているあたり、結構偉かったりするのだろうか？

「名前を訪ねても良いですか？」

「誰だお前？人に名前を尋ねるときはまず自分からって言わないか？」

ちょっとムッとした

普通に名前を言えば良かったのだろうが、なんで反抗してしまったのだろうかと後悔する彩輝

見るからに偉そうな雰囲気なのにさ。なにやってんだ俺

周囲がまたザワザワとする

まぁお偉いさんに反抗したから・・・かな?

と、大体の憶測を立ててみる

実際周囲からは「何て事を・・!?」とか「ぶ、無礼な!」と言ったりする声が聞こえた

「セレシア様、無礼ですね。斬りましょうか?」

そう言って突如一人の男が立ち上がった

深紅の髪、渋めの色のマントを着ておりちらりと中から剣が見え隠れしている

まて・・・剣?

それに此奴今斬るって言ったよな?あれ?剣?

「剣を納めなさいアルレスト」

柄に手を添えて半分ほど抜きかけていた剣を鞘へと戻した

男を右手で制すると、女性は「失礼しました」と彩輝に頭を下げた

「セレシア様が頭を下げた!?」そんな声が彼女の後の方からいくつか上がった

「それが貴方の住む世界の礼儀なのですね」

あー、さっきの名前の事か

「まぁ・・・そうっすね。絶対って訳では無いですけど」

ていうか目上の人に対する礼儀じゃねぇなと俺はなんだか謝りたくなった

「申し遅れました。私、セレシア・ルミレ・キルト・アルデリアと言います。この国の第一王女です」

お、王女でしたか・・・

どうりで皆さんお騒ぎになるわけで

「お、俺は桜彩輝。え、えっと、ここは何処?」

最初から疑問に思っている事を聞いてみる

「アルデリア王国首都アクリス、水の精霊殿です。貴方はどこから来たのですか？」

「ん、俺は日本・・・だけどアルデリアなんて国は俺は知らないぞ」

世界の国をすべて知っている訳ではないが、少なくとも俺はアルデリアなんて国は聞いたことも無かった

「あなた達は精霊の世界に住む人だと思うので恐らく互いの世界の事は分からないんでしょう。私も貴方の言うニホンと言う場所が分かりません。それは村の名前ですか？」

「いや、国の名前。とりあえずその精霊の世界ってなんだ？俺は精霊でも何でも無いぞ？」

彼女は台座の階段を上り、彩輝の横につく

彼女が指さしたのは彩輝の後にある水の溜まった場所

彩輝は振り向いてその小さな泉をのぞき込む

自分の顔と、隣に立つセレシアの顔が水に映り、揺れる

「この奥は昔から精霊の住む世界が広がっていると考えられています。ですがこの奥に行くことはおろか、触れることすらできません」

「触れることができない？」

「はい。この表面には魔力の層ができており、全ての物を遮断してしまいます」

「え、ちょ、待ってくれ。精霊？魔力？なんだよそれ。いや、ゲームとか漫画とかでなら聞いたことあるけどさ。魔法とかが存在するってのかここ？」

「ありますよ？それが何か？」

彩輝は焦った

本当にどこなのだここは？

魔法が存在する世界！？ふざけるなよ！

地球上には存在しない場所に出てしまった事を悟った彩輝は頭を抱えてしゃがみ込む

精霊台に映って揺れる自らの顔を見つめた

俺が映っていた

どういう事だ!?どういう事だ!?おい、ちょっと待て!何が・・・
え、マジ?マジなのか!?

現実味が全くないにもかかわらず、彩輝はこれが現実だと分かってしまう

夢?自我を持った夢などこれまで見たことがない

ゲームに入り込んだ?そんなアニメのような事があるわけがない

これは現実?ていうか何処の漫画だこの世界!?

夢ならさめろ俺!

彩輝は自分の頬を思いっきりバチンと叩いた

い、痛い・・・・

あたりまえだった

現実だな・・・

「レノア、母様をここへ呼んでください。緊急事態と言えば多分来ますから。それから皆さん、ここで見たことの口外を一時的に禁止します。外部に漏れないように注意してください。それと退室して各持ち場に」

周囲がまたざわめく

王女自らの命令により、各々精霊殿を出て行くが

「セ、セレシア様とこの者を二人っきりになど・・・」

皆が出て行く中、逆に王女の方に近寄ってくる女性が一人

「ユン、これは命令です」

「し、しかし・・・」

「いくら私の侍女とはいえ、命令を無視するならデノンの侍女にさせますよ？」

「ひぃっ、それだけはご勘弁をっ！」

セレシアとか言う王女が自らの侍女に軽く言うと異動はイヤーー！と叫んで部屋から出て行った

「さて、やっかい払いもすみましたし、ゆっくりと話をしましょうか。主に貴方の事について」

まぁそうなるよなぁ、と担任教師に別室に連れて行かれ説教されているみたいだと感じつつ、彩輝は台座の階段に腰掛けた

「それは困るな。聞きたいことが山ほどあるのはこっちなんだが・・・・まぁいいや。この状況を説明してくれるなら」

彩輝は目の前のセレシアに向かってそう言った

「入りなさい」

ドアがノックされる音を聞き、そう答えるとすぐにドアが開いた

その人物は自分の娘であるセレシアの侍女の一人、レノアであった

娘の侍女は彼女の母である自らが決めているために、もちろんノックしてきた人物が誰であるかは何年も聞いていればすぐに分かった

「どうしましたかレノアさん？」

現在、ファルアナリアは自室で書類を読みあさっていた

山のように詰まれたその書類に一枚一枚目を通して彼女はサインをする

提出期限が明日の物だけを振り分け、その分だけにシャシャッと羽ペンでサインをしていく

羽は虹色に輝いており、トルロイン家で買った掘り出し物の最高級品で、フェリーの巣の真下で見つけた品なのだという

フェリーと呼ばれる鳥は翼をひろげると全長約５メートル近くになる巨大鳥でその尾羽は七色に輝いていることから虹鳥とも呼ばれる

フェリーはアルデリアとグレアントをまたぐようにして存在する山のにある森、テルミアの森に生息している

元々一生で卵を一つしか産まない性質のため個体数が非常に少なく、両国の間でも捕獲や直接の干渉が禁じられている鳥である

ならばそもそもどのようにして現在まで個体数が増えたのか、どれほど生きながらえるのかすら分かっていない謎多き長寿な鳥である

観測史上最も生きながらえているものは現在４０年を越えている

が、その個体がいつの時代から生きているのかすら不明なのである

人を襲うことは無いが、その希少性の高い尾羽のために密猟者が現れることもしばしばある

フェリーの尾羽は美術品としてとても高値で売れるために密猟者は年々増えるばかりというのが現状だ

そのため、両国では連携体制をとりフェリーの保護をしていこう、という書類である

今彼女が目に通していたものはグレアントと共同で作るフェリー保護団体の設立に関する文章であった

「セレシア様が精霊殿でお呼びになっております」

「理由は聞いていますか？私が何のために祈りの儀式を休んだかは貴方も知っていますよね？」

今日彼女が祈りの儀式を休むことをセレシアに伝えたのは他でもないレノア自身である

急遽舞い込んだ書類をかたづけるために忙しいのである

仕方がないとはいえ、一分一秒ですら時間がほしいくらいである

しかしレノアの表情は困ったという顔のままだ

「しかし緊急の伝令ですので・・・」

そう言われると内容を確かめないといけない

セレシアが命令したとはいえ、わざわざ作業を中断させてまで伝えることだとレノアは判断したのだろう

「で、その内容は？」

「精霊台より若い男が出現しました。風貌からしてこの近辺の人民では無いようで年は１０代後半ぐらい」

その言葉を聞き、目を見開くファルアナリアに対してレノアは落ち着いた雰囲気で伝令を伝える

ファルアナリアもつい先ほど、突如として現れた魔力を感じ取っており、気になっては居たのだがどうやらそれが原因のようだ

魔術師隊が魔法の訓練をしているのかとでも思っていたがどうやら違うようである

しかも膨大な量の魔力を感じていたため、それが一人の男が発したものと考えると恐ろしいレベルであることが伺える

「・・・・分かりました」

娘にあまり対応を任せるべき事柄ではないと判断し、仕方ないと椅子から立ち上がるとフェリーの羽ペンをペン立てに立てる

そして机に立てかけてあった大きな杖を取る

杖の先端には透き通った巨大な宝石がついており、蒼く光るそれはずっしりと手に重みが伝わる

「ティリア。ここで私の部屋の見張りをお願いします。レノアはチル隊長に伝令を伝えてきてください」

「見張りですか?了解しました!」

黄色い髪の女性がどこからか現れた

彼女はファルアナリアの侍女の一人でレノアの先輩にも当たる人物であった

レノアはファルアナリアに伝言を聞くと一目散に廊下を駆けていった

途中で足をもつれさせて転けた事は2人とも見なかったことにしておこう。と無言で頷いていた

大丈夫かなぁと哀れみの目で彼女を送り出す2人であった

城の頂上

屋根の一番上に立つ女性が一人

若い女で長く白い髪が地上よりも強い風を受けて靡いている

青と白のコートはアルデリア王国を象徴しておりそのマントは他の一般騎士との違いを見せつけるかのような威厳を放っている

腕を組み、眼下に広がる城下を見下ろしているのは聖水騎士団、通称アクアサンタ騎士団の隊長、チル・リーヴェルトである

歴代リーヴェルト家は代々アクアサンタ騎士団に務めており、父は過去に副隊長、兄は第3位の地位まで登りつめた身である

だが両者とも数年前の戦争により殉職しており、母は物心が付く頃に、チルの目の前で死んでからというもの今は妹と2人暮らしである

そんな唯一の身内も一ヶ月ほど前にアクアサンタ騎士団の見習いとして入隊し、つい5日前、正式に入隊の儀を終えはれて騎士の仲間入りを果たしたのだった

そして第2位に居たチルは副隊長であるアルレストとの一騎打ちの末、隊長の座を掴んだ

そんな彼女は屋根の下に人の気配がするのに気がついた

「あれー・・・ここにいると思ったんだけどなぁ・・・」

聞き覚えがある声だ

屋根の頂上から外に突き出している手すりに飛び、其処で上手くキュッと音をたてて城の方に向き直る

そしてピョンと窓から部屋の中へと入る

「うっす、レノア」

「あ、いた！君はどこから入ってきてるのよ毎度毎度」

レノアとチルは幼少時代からの友人で、今ではこうして道を分かれて職に就いているのだが、2人とも国のために働くという内容については同じである

「うるさい。あと君いうな。隊長と呼べ！」

「仕事柄仕方ないですね・・・悲しいかな。隊長、ファルアナリア様からの伝言を言付かってきました」

「王妃の？」

「はい」

「話せ」

「実は・・・・」

話を終えて一息つくレノアに対し、チルはうんうんと頷きながら腰に手を当てる

「ふむ・・・確かに気になる話ではあるな。まぁ誰だかわからない以上、警戒は必要だしな」

「賛同も得られたことですし行きますしょう」

「うむ。では近道と行こうか」

話を聞き終えたチルはガシッとドアに向かおうとしたレノアの襟首を掴む

え？と声を立てて止まるレノアをズルズルと窓の方向へと引きずっていく

そして片足を小さな柵の上にのせる

「へ？」

レノアは嫌な予感がした

活発なチルに対し、そうではないレノア

それは昔から同じでよくチルに振り回されたものだ

木の上に一緒にのぼらされ、なれていないレノアは木から落ち（実際には上から蹴り落とされた）

浅瀬の川の石の上を飛び跳ねるチルに無理矢理引っ張られ、濡れた石に足を滑らせ川に落ち（実際には突き落とされた）

結局被害を被るのはこっちなのだ

タンッと軽い音を響かせて、人影二つが空を舞う

数羽の鳥の真横を地面に向かって急降下していく
どんどんと先ほどまでいた場所が小さくなっていく

「よっ」

チルが服の中から小さなお札を取り出してそれを下に突き出すようにして向ける
するとその札には術式が書かれていたようで巨大な魔法陣が出現
基本的にチルは符術師ではない
あらかじめ札に魔力を込め、その効果を式にして札に書いたものが術式符とよばれるものでいろいろと応用が利く道具である
レノアは恐らくそれが衝撃を吸収する吸収符であると予想する
能力は一度だけ衝撃を札の中に吸収することができる
ただそれは打撃に対してのみで剣で切ろうとすれば他の紙と同じように切れてしまうし魔術を防げるわけでもない
これを下にして着地の衝撃を吸収しようと言うのだろうか？
吸収符はさして高いものではなく、魔術学と術式学を習得した者ならば誰にでも製作可能である

安いとはいえその力は打撃にのみ、最高級の盾となる

それがたとえゴーレムの蹴りだろうがいん石だろうが止める力を持つ

まぁ流石にそのレベルまで行くとある程度数がいるが・・・

そしてどんどんと近づくのは精霊殿の屋根

城の真下に位置する精霊殿のためこれならショートカットが可能なのである

声にならない叫びをこらえて行く末を見守る

札を思いっきり地面に向かって投げる

そして札が自分たちより早く屋根に到着

ピタリと屋根に張り付き魔法陣が展開する

そしてその上に、着地

ズドオオオオン！！！！

もの凄い破壊音を立てての着地だった

その破壊音に混じって「あれ？」とチルが呟いたのだがレノアはそんな彼女の声を聞き取ることはできなかった

屋根が、二人を巻き込んで大きな音をたてて崩れ落ちた

ファルアナリアが精霊殿に到着すると目の前では自らの娘と見知らぬ男が精霊台の階段に座って話をしていた

セレシアが此方に気づいて駆け寄ってくる

「あの方です」

そう言って指を指すのはこっちを見ている男

成人・・・はしているようね。黒髪黒眼・・・・

「どうも。私はこの国の王妃ファルアナリア・ユネレイア・キルト・アルデリアと申します。長いからファルアナリアで結構ですよ」

「王妃・・・・んっ、俺は桜　彩輝って言います」

サクラアヤキ・・・妙な名前ね、と最初にファルアナリアは思う

サクラが名でしょうか？

ファルアナリアは聞き慣れない異国の名前に戸惑いつつも

「んー・・・あー・・・やっぱり口調は変えた方が良いですかね？王妃って偉いんだろうし？俺平民だし・・・」

「いえいえ、別に強制は致しませんわ。むしろこのままの方が良いかしらね」

ファルアナリア自体あまり砕けた口調をする相手がおらず、居るとしてもそれはほぼ家族や侍女などごく一部の親しい人間にのみ向けられる

「わかりました。じゃぁこのままでいいっすかね」

「ええ。しかし・・・」

「？」

ファルアナリアは少しばかり困惑した

「貴方は精霊台から現れたと聞いています」

「精霊台？」

意味が分からない。というツラで顔をかしげる

あぁ、とファルアナリアは君が腰掛けている物がそうだと教える

「この精霊台は精霊の住む世界と繋がっています。ですがどうやら貴方は精霊とは異なる者のようですね」

ファルアナリアは精霊殿の外にいるときから感じていた膨大な量の魔力が彼の体から出ている事を知るとすぐさま魔術を行使しようとマナを体に取り込む

彼の体からは魔力が異常なほどにあふれ出ている

彼が元から持つ魔力か、それとも精霊台を通ってきた事による、精霊台の魔力が周囲に付着しているだけなのか

そんな詮索は兎も角、早めにこの魔力を押さえ込まないとそのうち魔力だけが周囲に四散して危険がでてくるかもしれない

セレシアも彼の体を取り巻く魔力の力を感じ取っており、早く対処をしなければと思っていたのだ

しかし彼女はまだそのような高等魔術を習得しては折らず、母であるセレシアを呼んだのであった

「今の貴方は魔力が体を取り巻いています。なので今からそれを押さえ込む魔術を使用するのでちょっとだけ我慢してくださいね」

「は、魔術!?おい、マジでどこのゲームだこれ・・・」

ファルアナリアは目を閉じ持ってきた杖を彩輝に向ける

意識を集中させ魔術を発動させる

「水の精霊よ、加護を受けし者に力を貸し与えたまえ」

ボウッとファルアナリアは青いベールに包まれる

驚きで声がも出ない彩輝

「聖なる鎖よ、鉄の音響かせ絡みつけ、ジェヴォス・インフォディリス」

彼女がそう唱えると数秒後、ゆっくりと彩輝の周囲に何重もの鎖が出現した

鎖はグルグルと彩輝の周囲を回転する

その間ファルアナリアはその鎖を凝視する

一本一本の鎖に精神力をとけ込ませる

この術は相手の魔力を固定するするための術で、鎖の数が多ければ多いほど強い魔力を押さえ込むことができる

その代わり鎖の数はそのまま自らの意思によって強度を変えるため、集中を欠くわけにはいかない

鎖の数はそのまま使用した魔力の数に等しい

ファルアナリアも過去に１５本もの鎖を出現させたことはなく、しかもその一本一本に意識を集中させて魔力を押さえ込むなどという行為は初めての試みだった

「あの、これ危険は無いんですか？」

彩輝が周囲を取り巻く鎖に驚きつつ、自らの体を心配した

自らの体を魔力が取り巻いている

目には見えないが何となくではあるが彩輝はその魔力を感じ取っていた

だがそれよりもやはり異形の力を目の当たりにされ驚いている一方、その魔術とやらに好奇心が湧いてきた

「はい。貴方の魔力を固定するだけなので危険はありません」

「そ、そうですか・・・」

集中しているファルアナリアには彩輝の声は届かず、逆にセレシアが答えを返してくる

セレシアも冷静に答えを返しているがこれでもかなり驚いている

精神力の強さで術の力が決まってくる精神術を使用する母を見て感心する娘であった

おそらく自分がやれば5本と出ないだろう

ジャラジャラと鎖が音をたてて、ゆっくりとその輪を縮めてくる

ファルアナリアもその美しい美貌を歪めて歯を食いしばっているようにも見え、うっすらと汗が見え始めている

するとセレシアは何か思い出したようにパタパタとどこかへ駆けていった

「思ったより・・・きついですね・・・」

ファルアナリアはこの彼の体を取り巻く魔術を彼の体内に固定させるために鎖は最低１５本は使わないといけないと予想をしてはいたが、予想通り流石に苦しい状況だ

鎖を出現させるだけならともかく、実際に使うとなると話は別だ

少しでも気を抜けば鎖全てが押し返されそうな感じである

彩輝も流石にそんな彼女を見ていて自分も何とかできないかと考えていた

とはいえ魔力の扱いなんて分かるはずもなく頭をひねっていた

とりあえず彼女は俺の中にその魔力とか言う奴を押し込もうとしているんだよな

そしてあの鎖はそのために必要な物らしく、彼女が辛そうにしている所を見ると力を使う・・・いや精神をとけ込ませているのだろうか？と推測してみる

ということは魔力をこっちでコントロールできれば彼女の負担も減るのではないかと彩輝は考える

だがそのコントロールができない

当たり前か。魔法なんてなかった世界から来たのだから

一旦考えを変えてみるか。逆転の発想という奴だ

彩輝は考えを魔力を押し込む、から魔力が何故押し込むのに力を使うのかを考えることにした

あれだけ苦労していると言うことは逆に体に魔力が反発しているの

ではないか?と彩輝は考えた

魔力が体内にはいるのを拒んでいる、としか思えない

魔力自体がなんなのかを彩輝は知らなかったがとりあえず推理してみる

型にそぐわぬ物を入れようとするから入らない

固い粘土を型に入れようとしても無理だ

今やっているのは無理矢理その粘土を上から押さえつけて型、つまり俺に詰め込もうとしているという事だ

ということは、魔力を型に合うようにしてやればいい

ただ魔力をコントロールできないのでは意味がない

ということで逆に型の穴を広くして押し込むすることを考えてみるか・・・

彩輝は無心になる

今思い浮かぶ方法はこれだけだったので試してみる

これでダメならまた他を考えてみるか、と思いつつ目を閉じ座り込む

息をゆっくりと吐き、精神をとぎすませ、無心で居続ける

できるだけ、何も考えないように脳内からすべてを排除する

瞑想みたいなものだな

すると妙なことに胸の当たりから何かが入ってくるような感覚を覚えた

重く、鋭い感じの物が胸の当たりから入ってきて、それらは体の中心から根を張るように広がっていく

そんな感覚を感じ取れた

息が苦しく、胚が重く感じ取れる

ジャラジャラジャラッ

１５本の鎖は一気に彩輝の体に向かって締め付けるように縮まり、そして青白く光ると鎖は砕け、空気中へと消えていった

「終わりましたよ」

ファルアナリアがふぅとため息をついて汗を裾でぬぐい取りながら歩いてくる

彩輝は重くなった胸がすっと軽くなるのを感じて目を開く

「これでもう問題はありません。貴方を取り巻いていた魔力は貴方の体に馴染んだようですね」

「・・・・どうも」

そこまでする重大さはよく分からなかったが、とりあえずお礼を言っておくべきか、とお礼を言って頭を下げる彩輝であった

一方ファルアナリアも急に魔力がおとなしくなったようにすんなりと彼の体に入っていったことに驚いていたのだが、無言で彩輝のお礼を受け取るのであった

『小学生高校生大学生』

「さて、一段落ついたところで話を戻しましょうか。貴方はいったいどこから来たのですか？」

「何処・・・といわれてもなぁ。日本から来たとしか言えないなぁ。あ、日本ってのは国名ね」

「ニホン・・・ですか。確かに知らない場所ですね」

「俺だってアルデリアなんて所知らないし。俺の世界にはさっき言ってた魔力？とか言うものは架空上の産物だしな。別世界とか異世界っていうのが一番しっくり来るかな」

「別世界ですか・・・。ちょっと待っていてください」

そう言い残してファルアナリアは突如どこかへと行ってしまった

その場に彩輝とセレシアが取り残された

・・・待っていろといわれてもすることないしなぁ

そんな風に思いながら彩輝は周囲を見渡す

そこで後にある精霊台とやらを見つめ、そして数段しかない小さい階段を上る

そして自分が現れた場所を見下ろす

台座の水が溜まっている穴はどうやらもの凄い深いようで底までを肉眼で見ることはできなかった

次に彩輝の目に止まったのは巨大なアーチ状の物体

そのアーチの中にはどういう構造なのか水が壁のように溜まっている

その前には先ほどの第一王女様が立っている

近寄ってみるとどうやらその水に向かって話しかけているようだ

のぞき込むように彼女の裏に回ってみるとなんとその水の中には人が2人立っていた

一人は美しい赤髪の女性

もう一人は何故か白く長い顎髭を赤いリボンで結ばれている太めの体型のハゲ

中年はとうに超えているような貫禄があり、存在感たっぷりである

それにしても、魔法・・・か

正直そんなもの人間の空想から生まれたものだと思っていた

けど、この世界にあって俺たちの世界になく、それでも魔法そのものは俺たちの世界で皆が知っている言葉なのに誰も使えないからと、だから使えないと思ってばかりいたんだ

「えぇ。こちらでも同様のようです。つい先ほど母が魔法で魔力を固定させたところです」

『流石だな。私も試したけど無理だった・・・。仕方なく取り巻いていた魔力の方は全て魔道具で吸い取ったが、まさかアレを全て押さえ込むとは・・・』

「実際母も苦しかったようです。固定のための鎖を１５本も出してましたから。精霊の加護もありましたことですし」

『じゅっ、１５・・・・たまげるわね。そっちはアーマルジュン大魔導師が押さえたのか？』

「なんとか１７本で押さえ込みましたがここまで強力だとは思いませんでした』

『うひゃー・・・大魔導師とうのは飾りじゃないようで流石ですね。ん、セレシア。後の方は？』

アルフレアがセレシアの後を指さす

セレシアが振り向くとそこには水鏡をセレシアの後ろからのぞき込む彩輝がいた

「どうも、桜彩輝といいます」

手をピッと挙げて挨拶をする良宏にアルフレアがお辞儀をして挨拶をした

『私はグレアント王国の第一王女のアルフレア・シャレル・ヴィラート・グレアント』

『ワタクシ、リーナ王国のゼリアル魔術師団長、アーマルジュン・デルタールと申します。以後お見知りおきを』

「あ、どうも」

2人に挨拶を交わすとまじまじと水鏡をのぞき込む

凄いなぁ・・・テレビ電話みたいだなぁこれ

彩輝は物珍しそうにしてそれを見る

『んんんっ、その声はっ!?』

突如アルフレアの後からひょっこりと長い髪の女性が現れた

『ああっ!!君はっ!!』

「あ、貴方はバスの!!」

なんと出てきたのはバスの中で出会った女性であった

叫んで俺を指さす彼女は驚いて目を見開いた

何故彼女までこんな所に!?

というか俺以外にも来ていた人がいたのか・・・

「えっと・・・お知り合いですか?」

セレシアが問いかけてくる

まぁ確かに気になるよな

「えっと・・・んー。一緒にバスに乗ってた人です。名前はえっと・・・」

『おっと、自己紹介まだだったな!一条(いちじょう)　唯(ゆい)だ。よろしくな少年!』

「少年じゃありません。桜彩輝です」

『そうかー。んー彩輝・・・彩ポン・・・彩ノスケ・・・彩ヤン・・・あーや?ちがうな、あーやん・・・うん、あーやん!おっけ、じゃぁ君はアーヤんだ!』

「・・・え？」

ぐっと親指をだしてグッドのサインをだされた

いや、ってか、アーヤんって・・・

『アーヤん。うん、しっくり来るね！』

「いや、来ませんって！彩輝で良いですって！」

『いや、アーヤんはアーヤん以外の何者でもない！というわけでよろしくアーヤん！』

どうやら彼女の俺の愛称はアーヤんとなったらしい

普通に桜とか彩輝で呼んでくれる方がいいんだけどなぁ・・・

そう呟くも彼女は完全無視を決め込んでくれた

『にしてもアーヤんもこっちに来ていたとはね』

「あの、バスって何ですか？」

セレシアが先ほどの発言の中で意味の分からなかった単語を聞いてくる

そうか。こっちにはバスないもんな

ということは別の馬車みたいな乗り物でもあるのだろうか？

「あー、まぁ沢山の人を乗せる乗り物です。こっちにも乗り物って有るんですか？」

「乗り物でしたか。そうですね・・・一般に使われるのはクェトルの籠台や水上ならダトルの水上籠とかが使われます」

「ふーん」

と、セレシアに説明をして貰うもあまりピンと来ない

クェトル？ダトル？なんぞそれ？

こんなゲームじみた世界だ。大方動物とか魔物とかそういう系が引っ張る乗り物だろうと彩輝は考える

こんな世界なら魔物とかそういうのが居ても不思議じゃないな

むしろ魔法があるくらいだ。全然あり得る

いや、でももしかしたら会社名みたいなものかもしれないなぁ

「ではそのバスってどのようなものなんですか？」

「ん、バスか？」

逆に質問されてしまった

まぁ確かに気になって質問したのは向こうも同じだ

とはいえバスをどう説明するかな

「んーあー・・・お金払って乗る乗り物なんだがえーっとガソリンって奴で動いて、あー、こっちにガソリン無いもんなーたぶん」

セレシアが頭にハテナを浮かべている

向こうじゃ常識でもこっちじゃ意味の分からない単語だよなぁ、と頭を掻く

確かに彩輝も先ほどのクェトル等という知らない言葉を聞いたばっかりだからな

『バスっていうのは大きな箱みたいな乗り物で人を運ぶ乗り物で原理は違うでしょうけど人を乗せて運ぶっていう目的でいえば此方の乗り物と大して変わらない解釈でいいと思う』

と、話を盗み聞きしていた唯がバスの説明をする

まぁ恐らくお金を払って人や物を乗せるといった点では同じだろうが

「あえていうなら生き物に引っ張って貰わなくても走る乗り物だ」

「そうなんですか？じゃぁどうやって走っているんですか？」

んー・・・どうやって・・・かぁ

「たぶんこっちの世界にはエンジンとかガソリンとか無いからわかんないと思う。暇があったら説明するよ」

「そうですか。ではその話はまた別の機会にでも。私も異世界の文明には興味がありますから」

「あぁ。で話の続きだな。そのバスっていう乗り物に乗っていたんだが突如バスが揺れて気がついたらここに出てた」

『そのバスに貴方も乗っていたのですかユイさん？』

アルフレアが隣に立つ唯に話しかける

唯はこくりと頷いて彼とは同じバスに乗っていたと言うことを話す

『バスには運転手を含めて９人。さっきアルフレアちゃん・・・長

いな。フレアちゃんに聞いたところこの大陸に存在する精霊台の数も9あるそうよ』

「ってことはあとバスに乗っていた奴等もこっちに来ているってことか？」

俺、一条さん、親子の3人とメガネをかけた若い男と女性のカップルらしき2人、そしてもう一人ごつい男と運転手

彩輝はバスに残っていた人物を思い出す

彼等もここに来ている・・・という事か

『そう考えた方がいいと思う。現にここには3人もバスに乗っていた人間がいるわけだしね』

「3人？」

ということはもう一人、水鏡に映る老人のいる国にいる訳か

「えっと、あー・・・アーマルジェ、あ、アーマルジュンさん？のところにも誰か居るんですか？」

『えぇ、居ますよ。かわいい少女が一人』

そう言ってしゃがみ込むとその女の子を巨大な指でつまみ上げた

ひょいと現れたのは見覚えのあるポニーテール
水玉のワンピースに赤くて小さな靴
背負ったリュックをアーマルジュンにつままれてずいっと下から引っ張られる女の子が一名
あー、最後俺にぶつかってきた女の子か
彩輝は彼女の一撃により途中で気を失っていたので何となく覚えていた
顔まではちらりとバスの中で見ただけなので良くは覚えていないが意外にかわいい子だと思った
というより気絶したあの後、いったいどうなったのであろうか
「なぁ、俺途中から気を失ってたんだがあの後どうなったんだ？」
『え？あぁ、あの時アーヤん気を失ってたのか！んー、あの後か」
彼女は気を失った後の説明をしてくれた
どうやら俺が気を失った後、突如窓の外が真っ暗になり、バスは動きを止めた
揺れがおさまり、各々立ち上がって状況を確認する

その瞬間、まず若いカップルの男性が消えた

次に女の子、運転手といったふうにどんどんと消えていったのである

そして気がついて目が覚めたらここにいた、ということらしい

気になるのはその真っ暗な空間

バスが動きを止めた、というより止まったのはその空間に入ってしまったからだろう

揺れがないということは浮遊では無いのだろうか？

「なるほどね・・・その真っ暗な空間も気になるけど、ここが一体何処で俺達は帰れるのかが問題だよな」

『そうね。私たちが出てきた場所、精霊台だっけ？には出入り口みたいなのがあったけど・・・』

「あぁ。手を入れるどころか触れることもできなかったな」

『場所によって精霊台のに溜まってる魔力？の物質が違うらしいけどこっちなんか炎よ！？恐くて入れるわけ無いじゃない！まぁどちらにしても炎には指一本触れられなかったけどね。そしてそんな炎の中から出てきたらしい私スゲー。なんか神々しくね？』

「魔力の層があるらしい。こっちは水が溜まっているんだが無理だった」

『・・・・・』

「ん？」

視線を横に向ける

背負ったリュックをつままれている女の子が凛としたかわいい声を響かせる

「そういえば君の名前は？」

『ちーは千尋っていうの。湊千尋（みなとちひろ）。小学一年生』

『じゃぁちーちゃんって読んでいい？』

一条さんは千尋ちゃんに向けて手を振っている

こくんと頷いていいよーと言ってくる

まだおさない小学生が一人で居るのか・・・

そういった事を考えるとちょっと可哀想にも思えた

実際両親とははぐれた訳だし親の方も慌てるだろうなぁ

というか現実を直視できてるか心配だよなぁ

現実逃避してなきゃいいけどなぁ

大人の脳はこんなファンタジーの世界にどう思ってるのかね

「で、どうするよ」

本題突入

今後どうしていくかを決めなければならない

『そうねー。一旦皆と合流するべきじゃないかと私は思うわ』

「でも集まって何をするんですか？現状元の世界に帰る方法は見つかっていませんし」

現状は・・・だ

「今は無理に集まらず情報を集めたらいいと思うんですよね、俺は」

隣の国までの距離は知らないがそれよりも今はこの世界の事を知るべきだと彩輝は考えていた

そうすればもしかしたら元の世界との接点が見つかるかもしれないと

各国に飛ばされたのならその国々にしかない情報を集めることができるかもしれない

帰るヒントみたいな物が見つかったとき、その時は集まって話し合いでもなんでもすればいいと思う

「俺はこういう風に考えています。どうですかね？」

『んー、確かに情報を集めれば帰る方法も見つかるかもしれないわね。もしかしたら前例とかがあるかもしれないしね。だけどちーちゃんはどうするの？』

俺は失念していた！と、あっと小さく声を上げてしまう

たしかに彼女を見知らぬ土地で一人にしておくのはまずいと思う

保護をしてくれるとしても彼女自身、両親に会いたいというのが本望だろう

その両親も離ればなれになっているし居場所もわからない

カップルの方も互いに会いたいと感じているかもしれない

運転手もお客の安全を確認したいと思っているかもしれない

「失念してた。気が利かなくてごめん・・・。まぁ皆で集まれば安

心もできるしな」

『まぁまぁ、でも確かに情報を集めるってのも大切な事だしねー。ちーちゃんはどうしたい？パパとママにあいたいよね？』

『ちーは・・・合いたいっ・・・』

「そうか。んー・・・一応この水鏡って奴で他国と連絡を取れるんですか？」

彩輝は振り向いてセレシアに確認を取る

聞いたところによると3つまでなら他の国との交信に使えると言っていた

あと一国分、通信に使えるという事なのだろうが気になっているのはこの2国以外との交信ができるかどうかが知りたい

「同盟を結んでいる国とならできますが」

「他にも国があるんですよね？この2国と、あとどれくらいの国と交信できる？」

「この二国を覗いて交信できるのはあと1国だけです・・・あまりお役に立てずすいません」

「そうですか。いやいやそんなこと無いですよ」

「ですが私は、あなた方が無事に向こうの世界に帰ることができるように全面的に支援するつもりでいます！」

セレシアはグッと拳を握る

その様子は王女という風にはあまり見えなかった

「・・・ありがとう」

『私もあなた達にできる限り協力するわ』

『ワタクシは王子でも王女でもありません。ですがこの子を守るために、あなた方に協力したいとは考えております。主らが帰られたらワタクシの方から話をしておきましょう』

アルフレアも、アーマルジュンも、俺達が帰るために手伝ってくれていると言ってくれた

俺はとても嬉しくなった

思ったより、目の前の道は真っ暗ではないらしい

彩輝は見知らぬ土地で受けた優しさを噛みしめながら両国との対話を続けようとしたとき、精霊殿にファルアナリアが戻ってきた

『三国会談と落ちる騎士隊長』

「これを見てください。昔、私の祖先が宝物の一つとして残したものです」

ファルアナリアが戻って来るなり一枚の紙を彩輝に手渡した

古びたその紙は綺麗に折られており、それを破れないように慎重に開く

セレシアもその紙をのぞき込み、水鏡の向こうにいる彼等も見えないながらもアルデリアの宝物の一つと言われるその紙に興味を示しているようであった

「私たちには解くことができなかったその文、もしやあなた方の世界の文ではないかと思い持ってきたのですが何しろ古い物でして一切情報が残っていないのです」

『それって各地に残ってる精霊文字の事ですか？』

と聞いたのはアルフレアだった

「えぇ。恐らくそうだと思います」

この世界には精霊文字とよばれる文字があるらしい

いつの時代から存在しているのかは定かでは無いが、その文を解き明かすことは誰一人としてできなかったと言われる文字である

一説には精霊が使う文字ではないか？といわれ、精霊文字と呼ばれる名が付いたのである

各地に残るその精霊文字は石に刻まれた物、紙に書かれた物などが残っていると言われるが誰が、何のために書いたのか

またそこに刻まれた意味は何なのか

全てが謎に包まれた文字なのである

「驚いたな・・・・」

彩輝は紙を開いて中の文字を読む

見慣れた字ではあるが現代の文じゃない

たしかにそれは日本語ではある

が、おそらくは大昔に書かれた物であろう

「意味が分かるのですか！？」

「ごめん。昔すぎるし文字も滲んでる。紙も傷んで字が消えかかってるのが殆ど。解読は・・・無理・・・だね」

「そうですか。ですがこれで精霊文字があなた方の世界のものだということが分かりましたわ」

「こっちこそ、前例があった・・・とまでは行きませんけどどうやら向こうの世界と此方の世界はどこかで繋がっていると言うことが確かめられました。でなければこんな物があるはず無いですからね。もしかしたら帰る方法もあるかもしれない」

『ちょっとー、話がわかんないんですけどー』

蚊帳の外にされていた一条さんが話しかけてきたことで向こうにもこのことを知らせておくべきだと思い紙を見せる

『なぁに、これ？』

まぁ字も読めないし仕方ないか

一条さんは首をかしげて見せられた妙なその紙を眉をひそめて凝視する

「日本語で書かれた手紙。だけど字が殆ど見えない位に痛んでるから解読は不可能だね」

『え!?本当なの!?』

「嘘言ってどうするんですか。ただ結構昔の字体だからこの人物が今ここに居る訳じゃないと思うんですけど・・・。帰ったのか、それとも帰れなかったのかは分からない」

『そ、そっか・・・』

「ところでさ」

彩輝が話を変えようと水鏡に向かって話しかけた

その瞬間、もの凄い爆音が背後から聞こえた

爆風と土煙が同時に襲いかかってくるため、一瞬にして視界がふさがれてしまった

一体何が起こったのだろうか?

「波状の風よ、大地を流れ、我が身を駆けよ。ドリーゼヴォス!」

「払拭の羽よ、風を導き、上昇の風を、モーリンアベント!」

すぐさまその土煙の中、それもすぐ近くから発せられた声が精霊殿に響いた

ファルアナリアの声にセレシアの声が続く

ガラガラと地面に天井の残骸の欠片が落ちる中、気づけば周囲の土煙が一気に精霊殿の外に追い出されていた

精霊殿の周囲には風によって追い出された土煙が空中に舞い上がった

「げほっ・・・大丈夫ですか？」

最初に声を発したのはセレシアのようだった

近くにいるのは分かるが砂埃が目に入り目が開けられない

それは2人も同じようであった

こういうときは無理して目を掻かずに痛みで滲み出る涙で汚れを・・・なんて言ってられなかった

痛い

こう、まつげが目に入った感じ

とっさに目を掻く

涙も出る

だがすぐに涙も収まり、裾で涙をぬぐう

すると目の前には瓦礫の山

天井のなれの果てがそこにはあった

山のように詰まれた瓦礫に、穴の空いた天井から差し込む光がその山をスポットライトのように照らしている

ガラガラッ

未だに小さな欠片が上から落ちてくる

うしろの水鏡では唯が『何事ー!?』と、真後ろで起こった惨劇の一部始終を捕らえていたため慌てている

どうやらそれはアルフレアもアーマルジュンも同じのようである

『敵襲!?』

『そんな・・・え?敵?敵って何よ!?アーヤーーん!?』

『みてみて!爆発したよぉ!!』

『・・・・ですね』

彼等にはバッチリ後の天井が爆発するのが見えていた

水鏡を通していたため、彩輝やセレシア、ファルアナリアの後が見えていたのである

突如として爆発した天井が土煙を巻き上げ、一気に画面全体を覆い隠してしまう

だがすぐにセレシア、ファルアナリアの声が聞こえる

水鏡越しでもよく分かる

彼女たちを中心にして一気に土煙が晴れていくのを見ていた

セレシアを中心に風が吹き、その風が一気にファルアナリアの声の後で舞い上がる

アーマルジュンが自分のつまみ上げていた少女を大きな肩の上にのせると一条さんに向かって語りかける

『あなた方は魔術の無い世界から来たと聞きました。ですから少し解説をと思いましてね』

アーマルジュンは右手で赤いリボンのしてある髭をいじる

『魔術と言っておりますがそれは全体的にひとくくりにした言い方なのです』

『うーん。てことはこの世界における魔法やそれによって起きる現象全てを魔術と呼ぶのね』

『はい。魔術にはいくつか分類があり、大きく分けると人間などの生物が発現させる事象を魔法と呼び、それ以外による事象を魔天と呼びます。魔法にも通常魔法、上位魔法、精神術の３つに分けることができます』

『魔天ってのは聞いたこと無いな。あと精神術ってのも。一応こっちの世界では魔法ってものは架空上のものなんだけどそれでもみんなが知ってるわ。その魔天ってのは聞いたことが無いのよ。実際どういうことを魔天と呼ぶのかしら？』

『存在せずとも皆が知る、あなた方の世界では魔法は妙な位置に存在するようですね』

『そうね』

『魔天とは・・・いえ、後でまとめて話しましょう。今は彼等の様子が先決です』

『おおっと、そうだった！』

唯はすっかり先ほどの天井爆発事件を忘れていたようで未知なる魔法について聞いていたがアーマルジュンの一声により我に返る

そうだ。アーヤんは？

『げほっ・・・』

砂煙から解き放たれた彩輝は水鏡越しに目をこすっているようだった

そして奥の方にできた瓦礫の山、もとい元天井の慣れの果てができあがっているのを見つける

『ちょっ、大丈夫!?』

「あ、あぁ。目に砂が入っただけだ。それよりも・・・」

彩輝も目の前にできた瓦礫の山に目を配らせる

ガタン

突如瓦礫の一つが上空に飛んだ

天井に空いた穴から飛んでいった瓦礫がどこか遠くでゴトンと音をたてて落ちた

一同それを静観する

「ぶっはぁー!!」

「う〝ぇぇぇぇぇん！！」

そして残った瓦礫の表面の一部が最初にあがった声と同時に吹き飛んで壁にあたる

そしてもう一つの声が瓦礫の山から体と一緒に這い出てくる

「チル隊長！？」

「レ、レノアっ！？」

「うぉぉっ！？」

はい出してきたレノアはズルズルともの凄い勢いで地面をはって此方へ向かってくる

まるでどこかのホラー映画のようだ

尤どこぞの映画と違って髪は短めで、涙で顔をグチャグチャにした女性がセレシアの目の前までくる

「レ、レノアさーん・・・？」

セレシアが足下まで這いずってきたレノアをうかがう

ウルウルとした、というか涙で目が赤いのだがまるで助けを求めるように、懇願の眼差しでこんどはファルアナリアを見上げる

「ひっぐ・・・・うぇぇっ・・・・すみませぇぇん・・・」

「・・・貴方はよく頑張ったわ」

「うぇぇぇぇん!!」

よしよしと頭をなでて上げるファルアナリア

「すいませーん。吸収符と衝撃符間違えちゃいましたー」

「あなたはよくもまぁ・・・歴史ある精霊殿を何度壊せば気が済むのですか」

ファルアナリアはため息をついて現れた白い髪の女性に睨みをきかせる

「で、用件をうかがいましょうか」

彩輝は突然現れた2人の女性を見比べる

片やメイド服を庶民っぽくした感じの服を着た紫の髪の女性
片や白を地とした青のコートを纏い、腰に剣を提げた白髪の女性

「いっづも・・・あの方はああやってうぅぁたしぅぉ虐めるんでずぅぅ・・・」

「なっ、何時私がお前を虐めたというのだ？」

「自覚なかったんですねぇぇぇぇ・・・」

小声で軽く項垂れる紫の髪の女性

『あんときのセレシアの侍女か。それにありゃーアクアサンタ騎士団の３番隊隊長か？』

「ん、ご無沙汰しておりますアルフレア王女」

遠くからだが一礼をするチル

「失礼ですが今では騎士団長を務めております」

『お、昇格したんか。おめでとう』

「もったいないお言葉です」

「チル隊長。挨拶も良いですがどういう事か説明してくれますか？」

「え、あー・・・悲しき事ですね。何という悲劇！不幸が重なりに重なって・・・」

「チル隊長」

身振り手振りで説明をしようとしたチルにファルアナリアはにっこりと笑う

それはもう不気味なくらいに笑っている

間近で見ていた彩輝はそんな大人な女性に恐怖した

女を怒らせると恐いとは良く聞くが、やはり間近で見ると流石に迫力が・・・

水鏡に視線を戻すとアーマルジュンが大きな指でちーちゃんの目を隠していた

いや、別に隠すような事でも・・・あ、殴った

ファルアナリアがガツンと音をたてて握り拳で白髪のチルの脳天に鉄拳を食らわせる

その一撃で地面に沈むチル

仮にも自分で団長っていってたから一番強い・・・はずだよな？

それとも、俺が彼女を隊長イコール超人か何かだと思っていたから俺は避けなかったことをがっかりしているのか？

どこかのアニメや漫画じゃ在るまいし・・・そんな事を・・・ね

まぁそうだとしても、避ける場面では無いけども

「失礼、お見苦しい場面をお見せしてしまいましたわね」

・・・・恐ぇよ王妃・・・・

あれ？拳から煙上がってね？

「さてと、これからどうします？」

「そうですね。現状帰る方法も分からない訳ですし俺達にとっちゃ別世界なわけですからいろいろ学んだ方が良いと思うんですよね」

『ん、それには私も同感だね。帰る方法が見つかるまではどうやって生きていくかが大事になってくるわけだしな』

一条さんの言う通りである

俺達には知らないことが多すぎる

帰る方法が分からない以上、長期間の滞在になる可能性もあり、最悪帰れないかもしれないのだ

そうなった場合、まずどうやって生活していくかを考えなくてはならない

「その辺は後々各国で話し合えばいいと思います。それよりもあの子の両親をどうやって捜しましょうか？」

『確かにそうね。早く両親に合わせたいのは山々なんだけどね』

セレシアがちーちゃんの事を気にかける。するとそれはどうやらアルフレアも同じように考えていたらしく考えるそぶりを見せた

たしかにそっちの方も大事だな

この3国に居ない以上、どこか他の国に居るということになりそうだがそれが近くなのか遠くなのかも分からない

水鏡を持っているのはこの3国ともう一つの国、ファンダーヌとしか交信はできない

セレシアがその訳を話してくれた

元々一つの大国が4つに分断されたうちの一つがこのアルデリアである

その4つの国を作り出したのがアルヴァス・アルデリア、フィーナ・

グレアント、ガーヴァンド・リーナ、エルー・ファンダーヌである

この四人の将軍は一つだった頃のアダンという国に仕える将軍であった

まだ小さかった小国をどんどんとまとめ上げたその王は、大きくなりすぎた国に対し地方の自治を認めるために国を４つに区切り、彼等４人をそれぞれの地域の長として配属させた

４人はそれぞれのやり方で地方を活性化させていき、結果として国全体が発展していった

そんな中で起こった一つの事件

国王暗殺

これまでは４人の将軍が彼の身を守っていたのだが彼等が地方へ飛ばされた事をいいことに内部で誰かが国王を暗殺したのである

犯人は国王の弟

国王を殺して自分が王の座に着こうと考えていたらしい

だがその企ては中途半端に失敗した

結局、国王の弟は斬首刑にされた

４人は国王が死んだことを深く嘆き悲しんだ

彼等はその後王をたてることなくその国を４つの国に分け、それぞ

れが王となり国を守護した

国が４つになったとはいえ、その辺は国が一つだった頃の名残なのか互いに協力してこれまでやってきた

だが各国が分裂、規模が縮小したということで統率力が無くなり他国から目をつけられるのは仕方のない事だ

４国のしめる領土には鉱山や綺麗な水が湧き出る地など取り合いになるような場所がいくつも点在しており、他国はこの領土をほしがっていたのだが強大な力を持つ国だけに、これまではうかつに進入できなかった

そのために周囲の国々は静に息を潜め、力をためていたのだがそこで国の４国分断が起こった

そこで徐々に領地の拡大を続ける周辺国からの侵略を防ぐためにこの４国の結びつきを強め、それを周囲の国に知らしめるために同盟を結んだ

後にこの同盟に不備が合ったため、現在ではアセアル同盟となったのだが

「・・・といった感じですかね。ですからこの同盟は他国への牽制の意味を込めているのです」

「なるほどねー。他国とは今から友好的な立場はとれない、つまりあまり協力は得られないかもしれないということ・・・かぁ。下手したら取引に使われるかもしれないしね」

「すいません。ですが一応向こうも悪い国というわけではありません。昔と今は違いますし外交もそれなりに上手くいっています。私から文書を送りましょう」

「そのほうが・・・いいでしょうね」

ちらりと水鏡の中に見える千尋を見つめた

早くこの不安とかを取り除いてやりたいのは山々だが、あまりこのことで他国ともめて欲しくはない

聞く限りこの国は日本とは違い、戦争をする国のようだ

意識を切り替えないといけないかもしれない

むしろ人間は・・・争うのが当たり前ってことなのだろうか

この世界でもこうやって争いがあるんだから

『私の方からもファンダーヌに連絡を取ってみます』

『このことはしかと主に伝えましょう』

アルフレアは連絡が取れなかったファンダーヌにこの話し合いの事を伝えてくれるようだ

アーマルジュンも不在の王女2人に伝えてくれると言ってくれた
彩輝はこくりと無言であまたを下げた

『さて、ちーちゃんの事は手紙を送って様子見るって事で決まりみたいね』

「あぁ。ちーちゃんも早くお父さんとお母さんが見つかるといいな」

『うん。ありがとうお兄ちゃんお姉ちゃん』

お兄ちゃん・・・か

少し照れつつも水鏡にうつる一条さんに目を向けると彼女も照れ隠しをするかのようにあははーと頭を掻く

「さて、そろそろ水鏡の魔力が尽きるころね。まだ定例通信から日がたってないから魔力が十分に溜まっていないことでしょうし」

「ん、これって魔力ってやつで交信してたのか？」

「というより魔力で幻視魔術を発動している状態に近いですかね。アーチには4つの水鏡全てに同じ触媒の魔力を溶かした銀をとけ込ませてありますので他の水鏡との交信が可能なのです」

「銀が水鏡のアンテナのような物で魔力が原動力ってところか。でこの水が画面で・・・声は何で届くんだ？この銀って声とかも送れ

るのか？」

「そうですね。なんだかよく分からない言葉がありましたけど、銀は水鏡と水鏡を繋ぐ糸のようなものです」

ふーん。水が映した俺等を魔力に変換して銀から銀へと飛ばしているってことだろうか

いろいろと応用が利きそうな装置のためもっと色々と面白い物があるかもしれないな

「では通信を切りますね。今のうちに話しておくこととかありますか？」

セレシアが俺、そして鏡に映る異世界から来た者達に問う

次に何時こうして話ができるか分からないからな

『じゃぁ一言いいっすかー？』

「どうぞイチジョウさん」

一条さんがバッと手を挙げる

『生きてまた合おう！』

『うんっ、またねお姉ちゃんとお兄ちゃん』

「あぁ。生きて帰ろう」

「これから俺はどこに住めばいいですかね？あの、流石にお城に住むとなるとちょっと問題があるかと・・・」

「城には部屋が一杯余ってることですしね・・・え？」

「そうですね。その辺については至急確保を・・・え？」

ファルアナリアさんとセレシアが顔を見合わせた

「貴方はもう少しお勉強が必要のようですね」

あうあうと考え出したセレシアさんはなんだか少しかわいかった

確かに城で過ごせば何不自由なく過ごせるだろう。むしろ国の王様が住んでるお城だから衣食住は城下に比べて不自由はあまり無いだろう

だが流石に周りの目とかもあるだろう

常識的に考えて突如現れた異世界の人間を国家の中枢に住まわせるとかあり得ない

それにどうせ異世界に来てしまったのだ。こっちの世界をもっと楽しみたい

とりあえず庶民的に

「というわけで下の城下に住みたいんですがー」

「へぇ、楽しむ余裕があるんですね」

「んー・・・確かに不安はありますよ。今だってこれが夢か何かだと思ってますもん。だって異世界とかあり得ないし」

「そうですね。だけど新しく家を建てるのは簡単だけど貴方はどうするの？この世界の常識とかは貴方の住む世界とは異なると思うんだけど」

「あー、そっちの問題もあったかーって・・・家を建てる？」

俺的にはマンションや宿みたいなのを想像していたんだけど・・・

「あまりお気になさらず。そろそろ大工の方にも腕が鈍らないように古くなった屋敷を建て直させようと思っていたのでそこを使って貰うことになると思いますが、まぁそれまでの間はお城で保護という形をとらせてもらうかと」

「保護・・・えぇ、まぁそれで問題は無いと思いますけど」

「それと、何かと分からないことも多いと思うので召し使いを一人アヤキさんにつけましょう」

確かに知らないことが多いとはさっき自分でも言ったがすっかり忘れていた

そうだよなー俺まだここ来たばっかりで何も知らないんだよなー

「あれ?でも違う世界なのに何で会話が成立してるんだ?言葉は違って当たり前なのに」

「あれ?そう言えばそうですね」

セレシアが首をかしげる

確かに別々の世界だ
言語が違うのはあたりまえなのに何故俺は話ができているんだ？

「聞いてみましょうか」

は？

誰に？と俺が聞く前に彼女は俺の横を通り過ぎていき精霊台と呼ばれていた場所の前に立つ

俺が現れた場所でもあるその台座にある数段の階段を上る

ファルアナリアは両手を広げ目を瞑る

「母はこれから精霊を召喚致します。アヤキさんの世界に精霊は？」

「精霊・・・か。いや、居ないぞ。架空上としてなら知られていますけど・・・」

これまでは空想上の物でしか無かった

だが先ほどは魔術という物を見せられ、今度は精霊

ゲーム染みた世界なのにどうして、どうしてこうも・・・

もしかしたら元の世界にも本当にあったのかもしれないな

「鳳声の名の下に誓う者、ファルアナリア・ユネレイア・キルト・アルデリア。我、貴殿と誓約を交わせしアヴァルス・アルデリアの子孫なり」

響き渡るファルアナリアの声

いわゆる召喚の呪文みたいなものか

彩輝はそう解釈して精霊を呼び出す儀式を見守る

するとゆっくりとだが、精霊台に溜まる水が光輝く

『我、アルヴァス・アルデリアと誓約を交わす者、貴殿、我に何を望む?』

・・・・!?

彩輝の脳内に響く声

その声は耳からではなく、直接脳に聞こえている

美しい、女性の声だった

初めての感覚に戸惑いながら、それが精霊と呼ばれる者の声だと気

がつくのにさほど時間はかからなかった

「我、貴殿に問う。汝、異国より参りし者について知りたいと願う者」

『我、ソナタの問いに答えよう』

ゆっくりと精霊台の光が強くなった

それと同時にせり上がる水は渦を巻きながら垂直に伸び、そして一瞬のうちにその水は周囲にはじけ飛び、蒸発してしまった

渦の柱があった場所には一人の女性が立っていた

人型ではあるが、直感的にアレは人では無いことが分かった

うっすらと青い皮膚に多少破けている布を纏った青髪の女性

全体的に水色一色のように見える彼女は俺よりもちょっと背が高かったりする

神秘的な雰囲気のその女性はゆっくりと精霊台に降り立つ

さりげなく、ちょっと色っぽいなぁとか思った

「驚いたなこりゃ・・・」

俺は本当にこれが現実なのかどうかが分からなくなってきた

「さて、早速本題だが・・・ソナタ、まずは我と早急に契約を結べ」

「は、へ？」

先ほどまでの口調とは一変、姿を現した精霊は俺にそんなことを言ってきた

「聞こえなかったのか？我と契約を結べと申しているのだ」

「お久しぶりです。水の精霊様」

「おぉ、久しいのファルーよ。久々に此方の世界に来てみれば何とまぁ面倒くさい事になっているな」

「分かりますか？」

「それ故に我を呼んだのだろう？」

「はい。私にも、分からないことぐらいはあります」

「ほぅ・・・」

「あのー・・・」

俺は恐る恐るその会話に割ってはいる

正直どういう反応をすればいいのか分からない

「ふむ、混乱するのは分かるがちと落ち着くがいい。ほれ」

水の精霊は小さな水の球体を宙に出現させる

いや、出現というよりかは其処に水ができたといった方が正しいのだろうか

「飲め」

命令口調かよ・・・

とりあえず従わないと何されるか分からないしな

とはいえ未知の物体を口に入れるかのように恐ろしいのは恐らく普通の水じゃないという先入観からだろうか

水を飲むのに躊躇いなんてすることがこれまであっただろうか・・・

彩輝はその水の弾に触れてみる

以外とそれは水なのだが手で掴むことができた

口に入るくらいの大きさだったのでそれを一口でいただく

ゴクリ

セレシアとファルアナリアも真剣な眼差しで俺を見ている

なんなんだよいったい・・・

その水は大して味はしなかったがすんなりと喉を通っていった

体に変化は無いようだ

「まぁ儀礼的なものは完璧に短縮して吹っ飛ばしたがこれで契約は完了だ」

「えっと・・・なんで？」

「ん、理由？ま、その辺のことはゆっくりと話していこうや」

精霊はにっこり笑う

「精霊を召還している間は魔力を消費し続けるためあまり長い会話はできません。できるだけ早くお済ませくださいね」

ファルアナリアは息を少々荒げながら言う

「あ、はい。えっと、まず契約？とやらをしたことには何の意味が？」

「我を召還したことは正解であったぞファルアナリアよ。いつ出て行こうかと迷っていたところだ。一つはお主に加護を授けてやろうと思ってな」

「精霊の加護なんて凄いですっアヤキさん！」

ごめんセレシア。何が凄いのか全然わかんない

「それにお前に溜まっている魔力、一人で扱うには少々荷が重いであろう。全属性なんて一人で使おうとしても難しいからな。その補助にもこの契約は役に立つはずだ」

自分がついさっきやった事の質問をしてみるとどうもよくわからない回答が帰ってきた

わからないことが沢山あるがすぐさま次の質問に移ることにした

その辺のことはファルアナリアさんにでも聞けば良いだろうと思ったからだ。貴重な時間だ。有効に使わないといけない

そう。一番気になっている事を俺はこの精霊にきかなければならない

「えっとじゃぁ次いいですか？すぐに元の世界には戻れますか？」

精霊はその問いに、俺の期待した答えをかえしてはくれなかった

『異世界初の朝』

俺がこの世界に来たその翌日

俺はふかふかのベットから身を起こした

見慣れない天井

豪華な装飾の施された家具

窓から見える景色は日本ではない

やっぱり現実・・・なのか

夢であって欲しいと思ったがそうも行かないようだ

両手をんー、と空に向かって思いっきり伸ばして俺は寝癖のついた髪をぼさぼさといじる

ベットから降りて此方の世界に来たときに来ていた服に着替える

借りたパジャマのような服をたたんで布団の上に置く

はぁ・・・

こんな状況、嫌でも二度と味わえないな。うん

彩輝は部屋を出る

さて・・・どうしたものか

「あ、お起きになりましたかアヤキ様」

部屋の横で立っていた女性が俺に声をかける

ぺこりとお辞儀をしたのはティリアと呼ばれる召使いの女の子である

年は俺の一つ上らしく、まだ若いというのにこうして立派に働いていることに俺は驚いた

昨日精霊と一通り話をして俺は現在の状況を知った

精霊が言うには二つの世界は隣り合っている存在のようで、その二つの世界の周りにはレ・ミリレウと呼ばれる『無』が存在するらしい

そのレ・ミリレウは恐らく一条さんが言っていた真っ暗な空間のことだということ

精霊は俺たちの世界も含めて二つの世界を行き来できる存在だが精霊はこの世界でしか認識することはできないらしい

というのも向こうの世界は此方の世界の人間と体質が違うため、大気中のマナや魔力を無意識のうちに吸い取ってしまう体質らしい

もちろん例外なく俺も無意識に吸収しているらしい

精霊は周囲にマナが無ければ体を維持できない存在のため、向こう

の世界へ行くことは無いに等しいそうだ

そして向こうの人間は吸い取ったマナや魔力を自動的に生命力へと変換されてしまうため、体内に魔力が溜まらず魔法が使えないのだという

とはいってもすでにほとんどのマナが吸い尽くされている状態なので吸収する機会は今では少ないらしい

此方の世界では魔力を持つ人間と持たない人間に分けられ、吸収するような体質を持つ者はいないためにそのような過度な吸収現象は起こらないそうだ

また体質が違うために吸収量は少なく、使った魔力を回復するには時間がかかるらしい

まぁちょっとややこしいところもあったが簡単に言うとこんな感じでまとめられる

そしてその例外が俺達だと言うこと

異能体質

向こうの世界の一部の人間、たとえば俺達の体はどうやら魔力を生命力に変換しない体質のようで空気中のマナがそのまま魔力になって体に蓄積される体質のようである

つまり、魔力が生命力へと変換されないということは今、俺の中には生まれてから今この瞬間まで魔力がどんどんと溜まり、周囲から吸収し続けているらしい

まぁ生命力に変換できないといっても俺達には生命力が無いわけではなく、それはあくまで補助的なものである

人間には元々生命力が満ち足りているものらしい

それが欠けることは滅多にない

ということはそう言うときにしか使われないということであり、余分な魔力は再び体外へと自然に放出されるらしい

そんな他人が放出した魔力も俺のような存在がこれまた無意識のうちにため込むらしい

俺は其処で一つの仮説を立てる

『気』とは魔力のことではないのか？と

向こうの世界で言われる気の力

たまにテレビでやっている気の力

目に見えない謎の力

動物を眠らせたり体の調子を良くしたり

魔力をそのまま生命力へと変換する向こうの人間の体質だとするともしかしたら説明が行くかもしれない

原因不明で歩けなかった車いすの男の子がその気、魔力を打ち込ま

れることで不足していた生命力が足へと行き渡り歩けるようになる

・・・かもしれないという予想だけどね

まぁ自己暗示とかそんな感じなのかもしれないけどさ

あくまで仮説だ仮説

確証は無いがそういった人は魔力を扱える人間、つまり生命力へと変換しない体質の、俺たちのような人間が行える行為なのだと思う

その一人が俺であるということ

意識はしていなかったが今までもそんなことが無かったかと言われればあるかもしれない

小学一年生の時の夏休み

皆が当番制で行うアサガオの水やりをとある奴等が連続でサボったせいで枯れかかった

当番の日が来て俺が行ったその日、すでにいくつかのアサガオが連日の猛暑により枯れかかっていたアサガオを見て俺は愕然とした記憶が残っている

その日、水をやって俺は帰ったのだがその次の日気になって見に来てみると何と全てのアサガオが奇跡の全回復満開の異常な光景を見た覚えがある

そして俺は登校日の日からスーパー彩輝と呼ばれるようになった

手を出さずに職員室から毎日見ていた先生が最初に俺をそう言ったのを覚えている

あれってもしかしたら俺が水に無意識のうちに魔力を込めていたのではないか？

やり方は覚えていないがもしかしたらその魔力が生命力となり、あの奇跡の全回復満開をなし得たのではないか？

もう一つそれに似た事件がある

ミニトマトを一人一つの苗を育てるという授業があったのだが俺のミニトマトの苗は成長に成長を重ね、俺のトマトだけ支柱が立てられた

１メートル近く育ったもはやミニじゃなくなった苗からできたトマトの数は４０個弱

その全てがとても甘く熟していた、と先生から聞いた覚えがあるが当時の俺は熟すなんて言葉を知らなかったので、とりあえず美味しいんだなぁと記憶していたのを思い出した

その日から俺の称号は植物マスター彩輝とグレードアップされた

なるほど、そういう事だったか

つまり俺は向こうでは珍しい魔力を扱える人間であったという事か

魔力を生命力に変える行為が行われないために溜まった魔力が手か

らじょうろに伝わっていたのではないか

とはいえそんなことがいつも起こるわけでもなかった事を思い出すと制御ができていない、あるいは意思の強さにもよるのではないかと推測した

そんな俺は今度この国の魔術師隊の方から魔力の扱いを教えて貰えることとなった

というのも俺が自ら魔力を使いたいと思うようになったからだ

だって・・・小さい頃に夢見たものが今俺にあるのだから使わなきゃ損だろ

それにロマンだろ。男の

そしてそんな体質の者達が何という偶然か、一つのバスに乗り合わせた事が原因の一つ

魔力を自然と吸収してしまう体質の人間が生きているうちにため込んだ膨大な魔力が一カ所に集まったことにより、その場の時空間がずれたのだと言っていた

向こうの世界ではすでにマナは枯渇しかかっている世界である

世界そのものがマナを必要としておらず、世界そのものがマナ離れしているらしい

そこにマナを溜め込む体質の俺たちが集った場所は偶然にもレ・ミリレウに飲み込まれ、俺達はレ・ミリレウとこの世界との唯一の通

路である精霊台からこちらの世界に放り出されてしまったらしい

そしてそこはどうやら俺がここに来たときに言っていた精霊の住む世界と同じという意味を持つ場所らしい

レ・ミリレウは精霊達の住む世界ということになる

時空間がずれた理由であるが一定レベルの魔力が一カ所に溜まるとそれは鏡で光を当てた紙のように焼き切れてしまうのだそうだ

紙は燃え、燃え広がる。それを防ぐために存在するシステムが作動したらしい

そのシステムこそが時空間を切り取る行為なのだということなのだつまり、燃え広がらないためにその空間を隔離する必要があり、俺たちは世界に異物と判断されたらしい

ま、見捨てられたと言っても過言じゃないな

そしてその自然に存在するシステムの発動条件にはもう一つあるそうでどうやらその部分の時空間に、歪みが出ていないといけないらしい

時空間が定まらない不安定な場所。そして偶然それが路上にあったそうだ

時空間のひずみとはその場にできたひびのようなものらしく、小さな歪みなら魔力が少なくなった俺達の世界にはそこらじゅうにあるらしい

ただ俺たちが放り出されるほどの空間が歪んでいることは滅多にないとのこと

だから本当にこれは偶然なのだ

カラッカラに乾いた地面のひび割れみたいなものを想像してもらえるとわかりやすいと思う

そこに、水ごと吸い込む巨大な亀裂。大量の魔力を持ったバスがその歪みに突っ込んで水が周囲に染み渡るのを防ぐためにひびが穴となり、世界がその穴の開いた場所を切り取った

さしずめ魔力は水、時空間の歪みは地面のひび割れ、染みこんだ水は地面から出てくることは決してない

そのおかげで俺達はここに出たらしい

さらに言うと向こうの世界には精霊台のような固定された出口が無いために出るのは困難を極めるという

ただ方法が無いというわけではない

同じように、今度は逆に裏側から地表のその僅かな歪みを完全なる歪みとする

すると世界はその歪みを正そうとするためにレ・ミリレウに落とし、存在を消そうとするらしい

すると一瞬だが向こうの世界とレ・ミリレウの間に穴が空く

其処に精霊台のように魔力の膜を張るのだそうだ

元々は精霊台もそのようにして作られたと聞くがどうやったかまでは現代では分からない

それこそ神とも言えるような膨大な量の魔力の膜を張らないとすぐにその魔力の膜は無に飲み込まれ、消滅するという

そして現状そんな力を使える魔術師はファルアナリア、セレシアも知らないとのこと

てなわけで帰るための具体的な方法を見いだせないまま俺は異世界初めての一夜をこの巨大な城で明かした

ちなみに何故別世界の俺がこの世界で彼等と会話できるか聞いてみるのだがそれはどうやら俺達に妙な魔法がかかっているらしい

恐らくこっちに来た奴等も全員かかっていると思われる

普通に皆と会話をした一条さんやちーちゃんを見て俺は確信した

ただどんな魔法がかかっているかまでは分からなかった

というのも精霊は元々魔術を使わないらしいしファルアナリアとセレシアも見たことのない術の効果を知っているはずもなかったからだ

「ん、おはよう。なぁ、どこかに洗面台ないか？」

「洗面台ですか？」

こうして会話をする分には不自由が無い

翻訳をするような魔法がかかっているとはいえ、やはり車やバスなどといった此方にない世界のモノは流石に通じないようである

恐らく英語も通じないだろうな

「あぁ。やっぱり井戸とかで水をくまないとダメとか？」

「いえ、城の者の大抵は流れている城内水路の水を使っていますね」

城内水路

この城はどうやら中央の精霊台の周りからあふれ出る水が城下まで流れているらしく、城内には至る所にその水が流れる水路がある

しかもその水路は廊下の壁に付いた雨樋のようなものを流れている

この国は水が豊富でいたるところからわき水などが出るらしい

故に豊富な水を使った産業が発達しているそうだ

まだ城下に降りたことはないが城から見る限り、この水路は東西南北に流れており、その巨大な水路からまたいくつもの支流があり町中を覆っているようである

巨大な水路は四方大水路と呼ばれているらしい
さらに町には大きな川が一つ流れている
水路の一部はその川とも繋がっている

「城内水路ってあの壁に流れてる奴だろ?あれってそのまま使って大丈夫なのか?城下の水路に流れたりとかは・・・」

顔を洗ったり手を洗ったり、そうした水が城下に流れていくのは好ましくないのではと俺は考えたがどうやら杞憂だったらしい

「いえ、この城内水路は四方大水路には流れません。城内水路は一旦城の地下の地底湖に流れるようになっています

「へぇ、この下って地底湖があるのか」

「はい。東に広がるレサド連峰の豊富な雪解け水が巨大な岩盤にあたり、この国の地下に巨大な地底湖ができたそうです」

「ってことはこの国に水が豊富なのはそのおかげってこと?」

「そうですね。浄化の水とも言われていて簡単な汚れやゴミならすぐに分解してしまうらしいです。ですがさすがに排便等は別の場所で処理しますが」

一度城から四方を見渡したとき、確かに大きな山が見えた

あれはレサド連峰っていうのか

この城から周囲を見渡すとこの国は大きな城壁がぐるりと町を囲んでおり、左右を巨大な山脈に挟まれた谷のような場所にあることが分かった

また東南に延びる川が国を二つに分けている

「そっか。ありがとな」

「いえ。アヤキ様はまだ何も知らないので仕方ありませんよ。しばらくしたら朝食が運ばれてきますのでそれまでにお戻りになるようにしてください」

「わかった」

にしても俺なんかに様をつける必要があるのだろうか・・・

なにこのリアルメイド

と、ぶつくさ言いながら探索ついでに歩いているとなんだか妙な場所に出てしまった

広い広間のようであるが人は誰一人としていない

「おはようアヤキ君」

「うぇ？あ、おはようございますチルさん」

「どうしたこんなところで？迷ったか？」

巨大な部屋に入った俺の後から騎士団の隊長であるチルが現れた

突然話しかけられて妙な声を出してしまったがまぁ気にしないで欲しい所だ

「いや、確かに迷子になりそうなくらい広いですけど・・・」

「ふむ、散歩といったところか？」

「えっと、そんなところですかね。興味はあったんで。俺の住んでたところにもお城は在りましたけど完全に別物ですもん。どちらかというと洋風ですねここ。何ですかこのバカでかい広間は」

「ここか？ここはまぁいろいろな催し、舞踏会とかをやるところだな」

白い髪を靡かせて部屋に入ってきたチルはすでに帯剣しており騎士団長の羽織を羽織っている

「にしても早いな。朝に強いのか？」

不意にそんなことを聞いてくる

「え、そうですかね？」

「あぁ。まだ太陽が昇って間もないぞ」

「俺はいつもそんなもんですよ」

むしろ俺は高校は電車通学だからな

それに時間に余裕を持って登校するタイプなため俺は毎朝６時半起きだ

体に染みついた起床時間はなかなか変えられないものである

これぐらいならまだ余裕の時間帯だ

「チルさんもこんな朝早くから・・・。ご苦労様です」

「なぁに、気にするな。いつものことだしこれが仕事だ。王妃相手に文句も言えまい」

「ははははっ、そうですね」

たしかにファルアナリアさん相手にそんなことは流石に言えないよなぁ

殺されると思う。きっと

「まぁこれは巡回とはまた別でな。そっちは見張りの兵がやっている。騎士団の仕事じゃないな」

「え、じゃぁ何をしてるんですか？」

「うむ、ちょっと下の修練場で日課の鍛錬をな。その道中だ」

「あ、覗いても良いですかね？」

「む、それは構わぬが・・・。何か剣術でも学んでいたか？」

俺は軽く驚いて眉がぴくりと動いてしまった

というのも彼女の発言が的を射ているからである

確かに俺は剣術？かどうかは分からないが剣道をやっていた

それも一度は全国大会まで進んだ事がある

もっとも、それは小学生の頃であり、今では剣道なんてできない体

であるが

彼女の発言は、学んでいたか。つまり過去形で聞いてきたわけある

そこまでわかっちまうものなのだろうか・・・

「よく分かりましたね。勘ですか？」

「まぁな。予想だがなかなかの腕利きだっただろうな。お前達の世界にも剣が存在する国なのか」

「あー、まぁ昔は存在しましたけど今じゃ日本刀は美術品レベルです。人を殺すことは禁止されていますしね。まぁ居合いとか抜刀とかには使われますけど」

「ふむ、だがお前がそれなりにその道に入った者であるということは技そのものは無くなったわけでは無いのか」

「そうですね。今じゃ竹で作った刀で力を競い合う位ですかね。あ、もちろん鎧じゃないけど防具はつけますね」

「ふむ、異世界の剣術、興味はあるが・・・」

そこで彼女は俺の右腕を見つめた

あ、やっぱり分かってたかぁ

まぁ隠し通すつもりは無いので打ち明けておくことにする

「やっぱりバレますよね。ちょっと訳ありで右肩を壊しましてね。ほら」

俺は右手を上げる

スーッと上がる手はピタリと斜めに止まってしまう

それ以上、俺の肩は上がらない

「ここまでしか上がらないんですよ」

「利き腕をやったか・・・なるほどな」

「ってなわけで今じゃ剣道から退きました。まぁ理由としてはもう一つあるんですけど」

右手は使えないとはいえ、剣道はやろうと思えば出来たことだっただからある意味後者が本当の理由なのだがそれを言わなかったのはどうしてだろうな

「剣道と言うのかその競技とやら。なるほど剣の道か」

「手が上がらない以上、やむを得ないんですよ。でもまぁ私生活に

さしたる問題はありませんけどね。でも何処でばれたんです？」

「阿呆、バレバレだよ。右手を庇って生活しているんだ。その道の人間ならすぐに分かるさ」

「流石隊長」

俺は手を下ろした

「じゃぁ暇だし見せてもらおうかな。鍛錬の様子」

2人は鍛錬場へと向かった

サラリと流れた白髪が大きな室内の中央でブワッと翼のように広がる

静かな空間にダンッ！と大きく彼女が踏み込む音が響く

青白いその刃は空中に青白い傷跡のような光を靡かせて消えていく

息を止め、精神をとぎすませたその一振りは、敵がいない空を切る

ブンッと音が響くと同時に次の動きに入る
しばらくすると「ふぅ」と呟いて彼女は汗がしたたる白髪を掻き上げる
ぱちぱちぱちと乾いた拍手が朝の修練場に響いた

「早いですね」

「ありがと。でもまぁこれぐらいなら見切ってたよね。君ならさ」

「目では追えましたからね。まぁ今の体だとついて来られないかもしれませんけどね。それがいつもの練習ですか？」

「んー、一人の時はこれを永遠とやり続けるわね」

さっきのは手加減していたのは分かっていたが、もし本気でそんなスピードで剣を振るわれたら正直目ですら追えないだろう

「凄いッスね。そんなスピード振るえませんよ普通。どんな体してるんですか？」

その細腕にどれほどの力があるというのか、正直彩輝には信じられなかった

「日々の鍛錬よ」

「何をしたらそんな体になるのやら」

その力に嫉妬した俺はちょっとした嫌味も込めた発言をしてみたが
彼女はどうやらあまり気にしていなかったように見えた

それにしても彼女は強い

それもおそらく半端じゃ無いレベル。超人と言っても過言ではないかもしれないな

人間としての限界を超えているのではないかとも思えるような技だ

彼女が持っているのは形状は日本刀に似ている

ぱっと見、最大の特徴は刀身が薄い青みがかかっているように見える事だろうか

「・・・見たいか？」

チルが自らの持っていた剣を彩輝に差し出した

そこまで俺は物欲しそうに見ていたのだろうか・・・

彩輝は目を丸くして驚いたが鞘に戻した剣を受け取る

スッと刀身を抜く

彩輝の祖父は刀匠でもある人間であり、普段からこういった刀を見せられてきた

剣道の道に進んだのも日本刀を見てかっこいいと思ったからだ

多少テレビや漫画にも影響された部分があるかもしれないがそれが一番の理由である

昔から叔父の家に行くたびにそう言った工場を覗いた事がある

それから刀の善し悪しを教えて貰っていた

だから自分は刀に関しては多少見る目があるつもりだ

「驚いたなぁ・・・日本刀そっくりだ・・・。刀身は薄い水色で刃紋は広直刃(ひろすぐは)かぁ・・・。少し幅と厚みが大きいのは実戦用だからかな。長さはーっと・・・2尺ちょいか」

「ふむ、よく分からんがなかなか見る目があるらしいな」

「気になることがあるんでもう一つ剣ありますか」

その感触を確かめるためにチルにもう一つ剣を貸して欲しいと頼む

彼女はこくりと頷いて修練場の端に置いてある大きな棚から一本刀を持ってきた

鞘から抜くとこれは先ほどの刀に比べ、どちらかというと反りが強いサーベルに似た形をしている

カラァン

そのサーベルで右手に持つ刀を軽く当てる

綺麗な澄んだ音が響いた

「これは・・・」

「もうそこまで見破ったか。剣を持ってこさせたのは確認か？」

「これっ・・・なんて一品だよおい・・・」

彼女はニヤニヤとにやけながら座って鑑定をする俺を見下ろしている

おい、笑うな。もはや笑いで済ませるレベルじゃないぞこの剣

俺はすぐさま落ちたブレードの先端を拾い上げる

「軽く叩いただけなのに・・・」

「これこそ神の力だ。これに対抗できるのは同じく高密度の魔石を

使った物ぐらいだろうなうん」

軽く叩いたブレードの先端はスッと抵抗も無く地面に落ちたのである

これはもう刀で紙を斬るような感覚ではない

まさしく空を切っているかのような感覚だ

「切れ味が良すぎる・・・」

「この剣は聖天下十剣のうちの一振り、名を蒼天駆（そうてんく）と言う」

「聖天下十剣？」

見知らぬ名に耳がぴくりと動く

なんだそのものすごい、名前からして高レベル武器

「ふむ、知らぬのは無理無いな。聖天下十剣とは絶大な力を持つ１０の剣の事を言う。作者不明にしてこの全てを集めれば天下を収める力を持つことができるという言い伝えが残っている。とはいえ十本集めたとしても腕は二本しかないのだがな」

聖天下十剣

確かにこんな化け物みたいな剣が１０本も集まればとんでもないことになるな

通常の刀を、感覚が無くなる程までに切り裂くような剣がそうほいほいあってたまるかと思いつつも、１０本もあることに恐怖する

「鞘の素材はなんですか？」

そんな切れ味の良すぎる刃を治める鞘の材質は何なのだろうか

鞘を確認してみる

周囲を黒く太い糸で巻いており、中は鉄の用になっている

が、恐らく普通の鉄では無いのだろう

出なければ鞘など抜刀する時にズタズタに切り裂かれているはずだからだ

柄巻きも黒い糸でできており、ぱっと見真っ黒だ

「密度の高い、それこそもう見つからないであろうほど高密度の魔石を溶かして混ぜた鉄の上にミンクスの毛皮を鞣した革を張ってそいつとチートルの毛で編んだ糸を巻いている。柄巻きはリットンの尻尾の毛を利用している」

「ミンクスもチートルもわからんが黒い生き物なんですか？」

巻かれているのは太い糸だがその糸を作る毛は黒い
それによくよく見るとその毛にも濃さの違う二種類の毛が入っているのが分かる

「あぁ。耐火性に優れている鞘だ。ちょっとやそっとの炎なら熱すらも完全に遮断する代物だ。まぁ持っている手は焼けるんだけどね」

「なるほど」

鞘には魔石を溶かして混ぜた鉄が入っているにもかかわらず軽い
これまでに持ったどんな鞘よりも軽いことに驚く

剣の方はやはり重いがそれを軽々とあのスピードで振るう事ができる彼女はやはり凄いな

重さ的には祖父のところで握った日本刀と同じくらいか

軽く剣を左手で振るが剣が重いのと左腕をあまり使わないためかピタリと止められずに少し剣がぶれてしまう

「良い仕事をしてるな。銘が無いのが気になるけど・・・」

「なぁ、一度貴殿の力を見てみたい。手合わせ願えないだろうか」

・・・・

それは俺にまた剣を握れということか？

この動かない右腕を知っていて？

「本気ですか？俺の腕が動かないの、分かっていて言ってるんでしょ？」

剣を返すときに彼女を見上げるがあれは本気の眼差しだ

「私が思うにお前には剣の道が似合う。まぁ気がするだけだけどな」

「俺はもう剣の道から退いたつもりだったんだけどな」

「なぁに、両手を使わずに左手だけで行けばいいだろう？」

・・・無茶苦茶言うな

あんな重い剣、なれない片手で振るう代物ではない

彩輝はため息をついて立ち上がる

「そんな片手であんな重い物、どうやって振るえと?右手は動かないから仕方ないがそれでも軸もぶれるし力も落ちる」

「そんなことはないだろう。短刀でも使えばどうだ?」

「短刀・・・か」

確かにアレなら力が無い左手でも十分振るえるが・・・

「あるのか?」

「もちろんあるとも!」

そう言って彼女は別の棚の鍵を外して短刀を取り出す

やっとやる気になってくれたかといった顔で俺に渡してきた

なんか負けた気分だ。別にいいけどさ

俺の手に渡ったその剣の鞘を抜く

銀色の刀身には俺の顔がうつっている

軽く、そして左手でも震える

盲点だったな

「いいぞ。だけどこんな物振るうの初めてだからな。手加減くらいはしてくれよ。てか木刀みたいなの無いのか？真剣なんて正直人に向けたことは無いぞ」

正直木刀や竹刀のような物があるなら其方の方がいい

人に剣を向ける何て事は本当はしたくない

「ないな。私は訓練は元々真剣でのやりとりしかしないタイプだ。鍛錬とは、真剣での精神がとぎすまされた状態でするものだ」

チルはそう言って身を翻す

マントを脱ぎ捨てて魔剣・蒼天駆を壁に立てかけると腰のベルトに差した予備の剣を抜く

此方はどうやら普通の剣のようである

俺は自らの手にする小刀を見つめる

俺の顔が、俺を見つめ返していた

小鳥のさえずりが聞こえてくる早朝、俺は騎士団の隊長に斬り合いを申し込まれました

やるしかねぇのかなぁ・・・

現実世界で真剣を振り回した事なんてないからね

これぱっかりは俺でも初体験である

現実世界でしたら、問答無用で刑務所行きだよ

とりあえずそれで俺を突き刺さないでくださいよ・・・・いやマジで

「俺も貴方に刺さらないようにする技量がありませんからね！！手加減できませんよ！」

「大丈夫だ。すべての責任は私が負う。ま、そんなことは何も起こらないけど、本気できてね」

『品定め』

「さぁさぁ、どこからでもかかってきたまえ！」

白髪の騎士隊長が日本刀を手にする

今彼女は騎士隊の制服を脱いでおり、白くて薄い胴着のような物を着ている

何故日本刀が、と問いただしたいがそんなのを聞いてもどうせろくな答えは返ってこないだろう

俺は左手に握られる小さな短刀を見返す

刀身は約２５センチほど

綺麗な銀色をしている

不純物など無いかのように感じさせるその銀色が修練場に差し込む太陽の光を反射する。そのとき

「隊長～、いますか～」

ズバンッ！！

何事だ!?とふり返った俺の後には赤い髪をした男が一人、ドアの前で立っていた

彼が着ている服は先ほどまでチルが着ていた騎士隊の制服である

遠目で良くは分からないがチルが着ていた女性物とは多少違う点が見受けられる

そしてその顔の横には先ほどまで彼女が持っていた真剣が木の壁に突き刺さっている

前に向き直り彼女の手を見ると投擲のポーズで固まったままの彼女の手に剣は無い

・・・恐っ!!

「危ないな・・・」

「ごめんなさいね~。手元が狂ったわ~」

なんで投げた!?何で!?

っていうか危機感まったく無いように感じるぞそこの男!

にっこり笑ってチルは彼に歩み寄る

スタスタと俺の横を通り過ぎ、脇目もふらず彼の目の前に立って並んでみると両者ほぼ身長が同じように見える

だが若干長身であるチルの方が男よりも多少背が高いように彩輝には見えた

というかこいつって俺がここに現れたときに俺を斬ろうと王女に提案した奴じゃなかったか？

「何？修練場使ってるときは入って欲しくないんだけど」

「俺より先に居るじゃないですか」

ほらと俺に指を向けて・・・

ゴッ！！！

あ、殴った

チルは突如目にもとまらぬ勢いで右腕を振るった

右拳は吸い込まれるように赤い髪の男の左頬に直撃

振り抜いた右拳をポンと腰にあてる

だがも男は微動だにせず、殴られたときに横を向いた顔を元に戻す

「用件は？」

「王妃がお呼びだ」

「・・・わかった。ってわけで御免ねー、あの人待たすと恐いから～」

チルはこちらを振り向いてパンッと手を合わせて頭を下げた

「い、いえ・・・」

何がなんだかよく状況が飲み込めなかったがおそらくはあの王妃に呼ばれたのだろう

チルと赤い髪の男がなにやら話しているようだが遠くてよく聞き取れない

しばらく黙視しているとチルが再びこちらに向き直る

「話し合いの結果、彼があんたの稽古を見てくれるってさ」

いや、別に俺そこまでやりたいわけじゃ・・・

確かにまた剣を振るえるかと思うとやってみたいという気持ちもあったがやはり真剣では気が引ける

何より元々簡単な散歩のついでで彼女の鍛錬を見ていたのだ

なんだか成りゆき場やらないといけないような雰囲気なんですけど

なんだかんだでチルは脱ぎ捨てた騎士服を着て部屋を出て行った

ぽつんと残される俺と赤い髪の男

視線が重なる

・・・・・空気重いじゃねぇか・・・

「俺はアルレスト・ビロディンだ。さっきの馬鹿の下で働いてる者だ」

男は俺を見定めるかのように顎に手を添えていろいろな角度から俺を見て回る

ふむ、と呟いて正面に立つと突如腰の刀を抜いた

いっ!?と思ったときにはすでに体が動いていた

キィン!

反射的に体が動いて弾いたがその後のことを考えていなかった

まさか追撃までしてくるとは予想していなかった

さらになれていない左手を使っている事で動作が遅くなる
踏み込んできたその男は振りきった刀を翻してきた
俺は無意識のうちにフリーな右手を凄まじい速度で迫る刀身に添え・・・
相手の目が見開かれて、俺がその目を見返す
交差した視線はすぐに逸れた
その瞬間が、一瞬で、それでももの凄く長いことのように感じられた
足で地面を蹴り右手で剣の峰を掴むとそのまま体を一回転させた
といっても俺は腕が上がらない体質のために体が斜めまで飛んだところで剣を放す
そのまま空中で一回転した俺は赤髪の男の背後に着地した
ズシンと着地したときに負担が足にかかるがあまりその痛みは気にならなかった
体を左に回して振り向き様に立ち上がる
だが今度はあっけなく剣を弾かれてのど元に剣を突き立てられ、詰んだ
「まずまずだな。だがあの反応速度・・・」

男が剣を引いて鞘に治めてぶつぶつと呟く

俺は右手を開いてグッと握りしめ、そして開く

なんだったんだ・・・今の・・・

俺は空中で一回転できるほど運動神経が良いというわけではない

ただ、あの動きに違和感を感じたのである

俺にこんな事が出来るはずがない

そう、出来るはずが無いんだ

出来たら多分体操の選手になれる

彩輝は視線を自らの手からアルレストに向ける

「ふむ・・・アヤキとか言ったな。お前、剣を握って何年だ?」

「え、っと・・・7年くらいですかね」

小学校3年生の時に叔父の刀に見せられて入った剣道の道

現在俺は高2なのだが、実際中学を卒業してすぐに引退したため約7年ほどとなる

「専門は短刀か？」

「いや、真剣なんか使ったことがないですよ。包丁は剣じゃないし・・・。竹刀、まぁ木刀みたいなものを使っていたと思ってください」

「そうか。それであの動きか・・・」

「あ、いやでも普通はあんな動き出来ませんよ？たぶんまぐれです。あんな風に体が動くとは思ってませんでしたから」

「無意識でやったと？」

「え、まぁそうですねぇ・・・。意識してませんでしたし」

思い出してみると自分は意識せずに動いていたんだなぁと自覚した

そう思うと先ほどまでの自分が何故あんな動きが出来たのかが分からなくなりそうだった

だって・・・ねぇ

くるっと一回転したしさ

「気に入った。ついてこい」

なんてことを考えていると突然アルレストは手招きをして室外へと向かった

俺はその後をついていく

「あの、どこに行くんですか？」

「俺の部屋だ」

何故？

彩輝は疑問を持ちつつもすることが無いのでついていく事にした

そんな中でやっぱりお城は大きいなぁと感じた

至る所、美しい装飾や美術品が置かれている

部屋につくまでに5分ほどかかった

これでも近い方だと彼は言うが大方間違いでもない

まだここは城の中腹あたりだからだ

そして立ち止まる2人

真っ赤に血塗られたドア

城壁に似合わぬ紅に染まっている

隣でアルレストさんが拳を握りしめて「あんのやろぉ・・・」と呟いていたので恐らく心当たりはあるのだろうが俺には現段階では皆目見当がつかない

部屋に入るとそこは意外にも普通の部屋だった

ベッド、窓、書棚、机等々、様々な物が置かれているがシンプルな部屋ではある

彼が自らのベッドを掴んで、上部分を取り外す

するとその中には・・・

「うぉぉ・・・」

思わず唸ってしまった

ベッドの中には数々の剣が治められている

きちんと並べられた剣の数、ザッと見積もって１００本以上

よくこんなに入ったなぁ・・・っていうか何でベッドの下が剣山なんだよ！？怖くて俺なら寝れないよ！

「好きなのやるよ」

「へ？」

「好きなの一本やるっていってんだよ」

アルレストはポケットに腕を突っ込んでドサッと後にあった椅子に座る

「えっと・・・なんでですか？」

「まぁ護身用だ。それだけの実力があって真剣を使ったことが無いってことは、普通は使えないような法律なんだろう？変な世界だな。人を斬れないくせに人を斬る練習試合をするなんて」

「まぁ包丁ぐらいなら使えますけど料理ですからね。流石に人を切るためのような物は出回ってませんし」

「だろうな。でなけりゃこんな不用心にしてるわけないもんな」

彼が言いたいのはつまり、自分の身は自分で守れという事なのだろう

俺たちが居た世界と違い、まぁこちらでも恐らく人を殺すのは流石に罪だろうが、それでも日本より治安が良さそうとは思えない

恐らく魔法が存在することにより、文明の発達が若干遅れている部分があるのだろう

「護身用だよ」

「理解しました」

そうなれば自分の身ぐらいは自分で守らないといけない

もし後ろから刺され出もしたらどうなるかなんて考えたくもない

ただ自分がこちらにとって異世界の人間であることがこの世界の人々に、どのように関わってくるかが分からない以上、用心は必要だろう

俺の無知から起こる死なんてまっぴらゴメンだ

知らない世界のしきたりとかで殺されたくはない

特に貴族とか言う存在、なんというか小説とか漫画とか見てるとどうもいい印象を受けない

だからあくまで護身用

自分から人殺しの殺人狂になるようなマネはしないと思うからね

これからどうなっていくかは分からない

が、間違っても死にたくはない

生きて彼等と再会する義務が俺にはある

そう約束を交わしたときから俺にはこの約束を守らないといけない
何かができたように感じている

だから無理はしない

そのためにも、力があるに越したことはない

とはいえ、そうほいほいと俺に刃物を渡しちゃっていいのかな？

俺の信憑性が完全では無い今、そういう行為は慎むべきなのではないだろうか

でもまぁ好意だしいっか、と俺は軽く考えておくことにした

彩輝は短刀が沢山入ったベットを見下ろして品定めをする

多種多様な短刀を実際に手に取り、左手で一振りずつして確かめていく

そして約３０分後、全ての剣を振り終え、良さそうだと思うものを横にずらしておいておく

その中から一本を選ぶのにはいろいろと決断させるものがあったのだがなんとか一本に絞り込んだ

結局、青の波紋が美しい、日本刀を短くしたような短刀を選んだ

握り心地も良く、手に負担がかからない

それにきちんと鞘がついているのも嬉しかった

おおよそ半分以上の剣には鞘が無い物が多かったためである
こういうところから見てもやはり西洋のような剣が多いように感じている
今じゃ日本刀は美術品であり、武器ではない
あのような形の刀に出会うのは今後無いかもしれないな

「これにします」

そういって俺は剣を見せる

アルレストはただ無言で頷いただけであった

「作者不明の無名の剣、とだけ言っておこう。ところでお前、早めに戻った方が良いんじゃないか？」

「へ？」

「朝食。まだなんだろう？」

「あ・・・」

「まったく、おそいです！とっくに朝食覚めちゃいましたよ！」

「すいませんティリアさん！」

目の前で朝食を乗せた台車を持っていたティリアに向かって今俺は土下座をしている

全面的に俺が悪うございます

煮るなり焼くなり好きにしてください・・・

なんてことを考えていると

「何してるんですかお二人とも？」

「ひゃっ！？」

「お？」

ティリアは首を後に回し、おれは顔を上げる

ティリアの後に立っているのはファルアナリアであった

綺麗な青地に白色の模様があるドレスを着用しての登場だ

「え、あ、いや・・・おはようございますっファルアナリア様っ！」

うろたえすぎだろ

突然の来訪者とはいえ、元々この人の侍女であったはずだが・・・

「見たところアヤキさんが謝ってるように見えましたけど何かいたしましたか？」

「あ、まぁそうですけど」

俺が一応肯定する

遅れたのは全面的に俺のせいなわけだし・・・

「ティリア。お客様に謝らせるなんて、そんな態度をとらせる権限があなたにありますか？」

ファルアナリアはスッと人差し指を流れるように振るう

すると空中に小さな米粒のような氷が出現し、ティリアのおでこに

直撃した

あうっ！と声を上げて目を瞑るティリア

「い、いやいや。俺が悪いんですって。朝食の時間に遅れて彼女を待たせてしまったんですから」

とりあえず正座になっている俺

「そんなことですか。ティリアもそれぐらい耐える訓練はしてるでしょう？」

「はい。すいませんでしたアヤキさん」

そう言って俺に向き直って今度は逆に謝るティリア

いやいやいや、と俺は立ち上がって手を振る

「ティリアさんが謝る事じゃないですよ。悪いのは全面的に俺なんですから」

「それでもです。ところでその腰の短刀はどうしたんですか？」

ファルアナリアはベルトにさした短刀を見つめる

「あ、えっとアルレストさんって方から貰いました」

「副騎士団長ですか。なるほど。彼が貴方にその剣を？」

「はい。選んだのは俺ですけど」

「そうですか。まぁ確かに彼の考えは正しいかもしれませんね」

「というと護身用ということで？」

「誰を信用するか、ですよね」

・・・たしかにな

人間は所詮人間

信用できないような人間も、この城には居るかもしれない

「出来るだけ私はあなた方を助ける考えでいますが、もしもの時は・・・」

そこで言葉を途切れさせたファルアナリア

その後に続く言葉を俺は予想してみる

彼女には王妃という立場があるからあまりこの件に関して無理強いはしたくない

上に立つ者はそういった逃れられない責任があるということ

故に、信用できる人間を俺は俺で見定める必要がある

立場が関係なく、俺を守ってくれる力のある人・・・って守られてばっかりは不味いな

俺にだってこの立場がどう影響してくるのか全くわからない

「ファルアナリア様、そろそろ移動しないと謁見の時間に間に合わなくなります」

「あら、本当ね。ではこれにて失礼致します」

ファルアナリアとその侍女はスタスタと行ってしまった

そこで俺は「あ」と声を上げる

意識を引き戻されたティリアはそんな声を上げた俺を見た

「どうしました？」

「あのさ、頼みたいことがあるんだけど」

この世界の食事は二度目だった

1度目は昨日の夕食で、2度目は朝食

基本一般の兵達は城外にある宿舎に泊まり、武官、文官の数名のみがこの城に住むことを許されている

一般兵はこういった上級身分の者達とは別に、宿舎の食堂のような場所で食べるらしいが王族は家族で食事を取る専用の場所があり、その他の者達は直接部屋に食事が運ばれるようになっている

客人や俺なんかのようなそんな存在もここに入るようで俺の部屋には今、その豪華な料理が目の前に並んでいる

机の上に並んだそれは平民である俺の常識を覆すような豪華さであった

「てか朝食のレベルじゃねぇ!!」

この客間のような部屋の机は横2メートル、縦1、5メートルほどの大きさである

まぁその上全てに豪華な皿にのせられた豪華な料理が隙間なく並べられている

誕生日とか祝いごとの日なら分からなくはないが・・・これは一人じゃ食いきれない

しかも見たことの無い料理ばっかり・・・

肉の塊や（たぶん）魚の切り身のような料理がずらっと並んでいる

恐る恐る一口食べてみると以外にも美味しかった

まぁまずい物は流石に食べないでしょうけどね

この世界でもフォークやスプーンに似たモノがあり、箸まであったのが意外だった

彼女が見せてくれた日本語――俺には解読不可だが――の紙といい、妙なところで元の世界との接点があるよなぁ

「とはいえ、出された物は食わないといけないよなぁ」

出されたものはすべて食う

これすなわち、我が桜家の家訓である

腕が、いや、喉が。ちがうなぁ。あ、腹か。腹が鳴るぜ！

ん・・・？なんか違うな。まぁいいか

いざ、勝負！！

俺は箸を持って

「いただきます！！！」

「アヤキさん。頼まれていた物持ってきましたって・・・うぁ」

ティリアが部屋に戻ってくると其処にはすでに息絶えたような彩輝が机に突っ伏していた

うーんうーんと呻いている俺は差詰めトドのように見えているのだろう。まぁこの世界にトドが居るかどうかは知らないが

そしてその両脇には大きく積まれたお皿がこれでもかというほど天井を目指して伸びている

「このお皿は片づけますね」

ティリアはそう言ってお皿を台車に乗せる

彩輝は「おーぅ」と手を挙げて返事を返すも小さすぎる返事のため、

彼女に届いたかどうかも分からない

「アヤキさん。頼まれた品、机に置いておきますね」

「た、助かる」

「あと勝手ですが消化作用を助けるフルーナの葉を煎じたお茶です」

「サンキュー・・・」

サンキューという耳慣れない言葉を耳にしてティリアは顔をかしげる

彩輝は震える手でカップを掴んでお茶を一口で飲む

正直に言うともの凄く苦かった

「良薬口に苦し・・・か」

口の中一杯に苦みが広がる

こんなものよく飲めるな・・・・

俺は苦みを我慢してお茶を啜った

「うん。苦い」

『異世界生物図鑑』

「これが『ら』の音で、これが『り』の音か」

腹の痛みが無くなった俺は今、この世界の文字を学んでいる

子供用の本を手にして俺は唸る

まさに外国語の授業の真っ最中である

「そうです。そしてこれが『る』の発音になります」

「なるほどね。五十音とさほど変わらないみたいだから何とかなりそうだよ」

ティリアに文字を指して貰いその文字の発音をこうして白紙の紙に書いていく

とりあえず自らの発音に対し、ティリアがその文字の音を本に書いてあるモノを指さして照らし合わせる

見たこともないような文字を俺はひたすら凝視する

パッと見なんじゃこの子供の書いたような訳の分からん文字は

まぁ日本語に比べれば全然楽なんだろうなきっと。とはいえ言葉は通じているのだからあまり大きな問題は無いのだがせめて自分の名前ぐらいは書けるようにならないと

とりあえずこの早見表を完成させて練習しないとな

そして・・・

「おっしゃー完成～」

「お疲れ様です」

これでとりあえず読めないという事は無くなった。この表を見れば時間はかかってもとりあえずは解読できる

自らの書いた紙をうんうんと頷いて眺めていると、ティリアがいつのまにやら退室していた事に気がつく

さてどうしたものかとベッドに座る

紙を机の上に放り、バタリと倒れ込む

天井を見上げる

が、何もない

「何しようかな」

枕元に置いてあった刀を左手で引き寄せる

鞘をまじまじと見つめる

本当に俺、異世界にきちまったんだなぁと実感した

机の上に置かれた本のうち、一冊を手に取る

この本はティリアに頼んで持ってきてもらったものである

中には子ども向けの本もあるが俺にとってはちょうど良いくらいである

文字の書き方、生物、礼儀作法、地図、魔法基礎等々、俺に無い知識を取り込むためのモノをとりあえず適当に持ってきて貰った

早見表を手に取り、早速題名を呼んでみる

分厚く茶色い表紙に書かれた文字を読みとってみると其処には生物図鑑と書かれていた

ペラッと適当にめくってみる

すると其処に描かれていたのは

「これって・・・ドラゴンか？」

ゲーム、漫画、アニメなどでもドラゴンは最強のモンスターとして描かれている

硬い鱗、鋭い爪、巨体を浮遊させる翼、ずらりと並んだ牙が描かれているのだが、黒一色で色は塗られていない

恐らくハンコのようなもので押して量産しているのだろう

「本当に居るのかよ・・・ファンタジー世界恐るべし」

そこに乗っていたのは巨大なドラゴンの絵

大きさを比べるためか人が横に小さく描かれているが全く大きさが違う

桁違いなほどにその巨体は大きい

人間なんかがかなうとはとうてい思えないような姿形をしている

深紅の瞳、翼についたかぎ爪、巨大な四肢、岩石すら砕けそうな牙が二本口からはみ出ている

撓（しな）る尾が巨木を一撃で吹き飛ばしている様子が描かれている

「・・・出会ったら死ぬなこりゃ」

こんなのと戦ったら１０秒ぐらいで負けると思う

束になってかかっても多分勝者はあちらだろう

彩輝は絶対にドラゴンと出会ったら戦わずに逃げようと心に誓った

いや、そもそも逃げ切れるのか？

数ページめくるとそのドラゴンの他にも何匹かの種類があった

巨大な翼を持つモノや水中を泳ぐモノ、大きな四肢を持つモノから浮いている変なモノまで、彩輝達のいた世界では信じられないような生物が多数描かれていた

他にもグリフォンやサイクロプス、ゴブリンなども描かれている

「ま、滅多な事じゃこいつらと出会うことは無いかな」

こんな町中にそんな魔物が居たら大騒ぎだ畜生め

というより俺たちの世界で思い描いた空想の生物が何でこんなところに居るのやら

いや、案外もしかしたら本当に向こうの世界にもいたのかもしれないな

俺はその図鑑を閉じ、次の本に手を伸ばそうとした
その時ドアがノックされた

「どうぞ～」

「やぁ、少年」

そこに入ってきたのはチルであった
白髪を揺らし、騎士服を纏いながら部屋に入ってきた
ただ、彼女は俺と別れる前と少し様子が変わっていた
というのも頬に大きな赤い手痕がついていたからだ

「どうしたんですか？」

「ん？あー、これ？王妃にやられた」

チルはそう言いながら頬をさする
あの暴力女めーと呟きながら視線をそらす
てか王妃に対してそんな口調でいいのか？

あぁ、その対価がその手痕か

「ところで俺になにか用ですか？」

「あ、そうそう。さっきの続き、やらない？」

・・・食後の運動か・・・

とはいえ・・・

「パス。あーえっと。止めときます」

年上なのを思い出し言い直す

「あり？予想外だなぁ、楽しみにしていたのに」

「いや、まぁ確かにこいつの感覚は覚えておきたいところなんですけどね、この後ちょっと行くところがありまして」

「あらそう。しょうがない。手合わせは延期だね。午後からは仕事だし」

「多分勝てませんけどね」

「気にすることないさ。一応君の力を見ておきたいっていう興味のが大きいんだよ」

異世界の剣術に対する興味、みたいなモノだろうか

彼女はまだ自分の知らない剣の世界を見ようとしているのだろう

ちょっとばかり落ち込んだそぶりを見せた彼女だったがすぐに笑顔に戻る

「楽しみにしてますよ」

「こっちこそ」

退室したチルはドアの横の壁に寄りかかったアルレストを見つける

アルレストはチルが出てきたことに気づくと閉じていた目を開いた

「どう思う？」

「いやぁ、あんたの方が強いんだから私よりも見る目はあると思うけど？」

「・・・恐らくあいつはまだ発展途上だろう。お前の話を聞く限り、途中怪我ででで剣の道から外れたらしいがそのせいで多少腕も落

ちていると思ったんが・・・」

多少加減したとはいえ、しっかりと剣を目で追い、さらにはその動きを完璧に読み切っていた

そうでなければ振るわれる刀に手を添えて飛び越えるなんて事は出来ない

全くの初心者でないことは、身なり、足の運びなどを見ても分かる

「あれで腕が落ちたとなればまだ上を知る人間ということだ。腕が落ちていないとすれば・・・それはあいつが俺達の力を盗めば」

「対当、あるいはそれ以上」

利き手じゃない左手を使い、さらにはしっかりと体を動かす所まで来ている

それは此方の戦い方をしらない上で取った、ある種の本能や反射に相当している

そしてそれを使いこなせるようになった暁には

「よし、今度機会が合ったらしごいてやる」

チルはニヤニヤとにやけながら廊下を後にする
残されたアルレストも閉じられた扉を見つめ、そして視線を外してその場を去った
そしてその１０分後、部屋から彩輝が出てくる
彩輝は昨日ファルアナリアに頼んだ住まいの件について、朝食の後に来るように言われていたのである

「刀持ってた方がいいのかなぁ・・・」

下手したら合わせてくれないかもしれない
そんな気もしたので部屋の中に短刀を戻すと扉を閉める
ファルアナリアの部屋は最上階
もちろん警護の兵も居る
そんな甲冑着てて重くないか？
全身を鎧でかためた男達が槍を手に、最上階の階段の上に立つ

「だれだお前は」

「えっと・・・桜彩輝って言うんですけど・・・あの～、ファルア

ナリアさんに呼ばれてたんですけどぉ・・・」

気迫で押しつぶされそうな感じがする彩輝は言葉がどんどんと小さくなっていった

重圧

「少し待て。確認を取る」

男はそう言うと角を曲がって歩いていく

ガッチャガッチャと甲冑が音をたてる

早くこないかなぁ

ドキドキしながら待っていると先ほど消えた男が戻ってくる

するとその男はスッと身をかがめる

それを見たもう一人の男も低頭をし、すぐにファルアナリアが廊下の角から姿を現した

こうして大の大人が頭を下げている光景を見るとやはり偉い人なんだなぁと思う

あまりこうした光景は見たことが無かったから実感が湧かなかっただけなのだろうが俺も頭を下げた方が良いような気がした

そんな俺が頭を下げようとすると、「ついてきてください」と言われる

2人の騎士の間を抜けて俺はついていく

「食事等はどうでしたか？」

「え、あぁ、美味しかったですよ。見たこともない料理ばっかりで怖かったですけど」

「それはなによりです。困ったことが合ったらなんでも言って良いのですよ。別に私が王妃だからといって遠慮することはないのですから」

「はぁ。どうも。でも今のとことは特に」

「そうですか。さて、貴方の住居の話なんだけど、本当にこの城に住まなくて良いのですか？」

「はい。これ以上お世話になるわけにもいかないですし、それにこんな機会、二度と無いですから。出来ればいろいろと体験しておきたいんですよ」

これ以上ここに甘えるわけにはいかない

そんな卑しい存在になる気はもとより無い

何でもあるが、上を知ると人間は下には居られなくなるものである
長居は無用
生きるだけならここじゃなくてもいい
それに俺は庶民だ。こんな暮らし、合わない
ファルアナリアの部屋に入る
いろいろなモノがあったあり目を部屋中に泳がせた

「珍しいですか？」

「えぇ、なんかよく分からないものがいっぱいです」

フフッと笑ってファルアナリアは数枚の書類を俺にわたす
完璧には覚え切れていないがいくつかの文字は練習したとおりに読める
どうやら俺の家に関する書類らしい

「とりあえずこれは大事に管理しておいてね。まぁ王族が買った土地に妙なことする輩はいないとおもいますけどね」

勧誘とかそういうのだろうか？

まぁ確かに・・・王族が買った土地にいちゃもんをつける人間はあんまりいないだろう。よっぽどのことが無い限りだが

「貴方の家は第４地区、シリル水路通りの第三水門の側に立っています」

この国では道より水路が多い

物資の補給などは基本的にはこの水路を使用するらしく、通路を使う事は少ないという

四方大水路から枝分かれするそのシリル水路は比較的第４地区の中でも城に近い場所だ

とはいえ、城の周囲を囲んでいるのは貴族達の屋敷であり、そこは第２、第３地区となる

その周囲には比較的裕福な国民が住む第４、一般の国民第５地区が広がっている

第４地区は商業区を兼ねているため、おそらくは大通りをさけた場所に立っていると思われる

水路だらけな国のため、橋も多い

ただどうしても水路だけでは無理があるため、この前ちらりと耳に

したクェトルの籠台のような乗り物が少ない陸路を行き交うのだという

見たことは無いがどうやら生き物が引っ張る乗り物のようである

「本当にいろいろとありがとうございます」

「気にしないで。でも実際に住めるのは一ヶ月後くらいだからしばらくはこの城で過ごす事ね」

「ま、そのうちにいろいろと勉強しておきます」

このまま社会に出てもまぁ通用するわけ無いもんな

それにお金の支援は最初の方だけということになっているため、蓄えが尽きる前に自分で仕事も探さないといけない

この国では１５歳からが仕事をすることができる制度になっているため俺が仕事をすることにはなんら問題はないように思える

あるとすれば、身分証明がかなり難しい事ぐらいか

出身、異世界とは言えないわけだし・・・

まぁ支援を断ったのは自分なんだけどね

あんまり支援に頼りすぎる訳にもいかない

とはいえ、苦労するかもなぁ

いざとなったら城で働かせてもらおうかな・・・

「じゃぁ公務があるので私はそろそろ」

「あ、わかりました。お時間とらせてすいません。ありがとうございました」

一礼をして俺は部屋を出る

「これがクェトルか」

自室に戻った彩輝は生物図鑑を手にしてベッドに転がっている

度々耳にするそのクェトルなる生物が気になったためである

見た目は馬のように見えなくもないが決定的に違うのは・・・

「甲羅がある・・・」

馬のような型ではあるが体には鱗があり、馬よりも足回りが太く、
少し短い

どっしりとした体型に、背中には平坦な甲羅

ただそれは背を覆っているのみで亀のように甲羅の中から手足が出
ているわけではないようである

鬣（たてがみ）は無く、変わりに二本の角が横に伸びている

文字を読んでみると気性は穏やか、人畜無害とある

まぁ向こうでいう馬のような存在なのだろう

その他にもいろいろな生物がいた

額に一本角のある魚、レクコインや翼が４つ、顔が二つある鳥、フ
ーフェル等々、興味をそそられる生物が沢山のっていた

中には巨大なサソリやクモなどといった、元の世界でも見られた生
物によく似た生き物なども見受けられる

まぁ大きさが桁違いではあるが

両者とも人と同じ、あるいはそれ以上の大きさをしている

得に気になるのはこの二つの？マークで描かれた謎の生物だ

此方の世界でいう?マークの記号が二つ描かれていたそれに興味を持った彩輝は先ほど作った文字早見表で説明文を読んでみることにした

「そ・・う・・・魔獣?そうは双ってことか?対になってる魔獣・・・大昔に北方で現れた魔獣で・・・」

片方は鳥、片方は甲獣でそれぞれ一度しか目撃されていない謎の魔獣・・・ねぇ

一体それが何なのか、いくら考えてもそれは実際に見たわけではないので彩輝には分かるはずもなかった

そもそも他のページに比べて書かれている事が少なすぎるためその程度の事しか分からなかった

この事を彩輝はサラリと流して次のページをめくっていってしまうだがこの対なる魔獣と彩輝は遠くない未来において出会うこととなるのだが、それを今の彩輝が知る訳も無かった

「なんでもありだなこの世界・・・」

こんな人よりも恐ろしい生物が居る中でよくこれだけ繁栄できたなぁと苦笑いする

それも魔法が関係しているのだろうか・・・？

そういや魔法ってどうやって扱うのだろうか

昨日彩輝はファルアナリアに自らの体内に吸収された魔力についての説明を受けていた

すぐにそのコントロールを覚える必要は無いが自分の体には大量の魔力が内蔵されていると言うことを忘れるなと言われた

それというのも俺がどうやら魔力を吸収しやすいタイプの人間なのだからだそうだ

詳しいことは分からないが俺は元々魔力を無意識のうちに吸収する体質なのだそうだ

昨日ファルアナリアが彩輝の周囲をとりまく魔力はまた別物でこれは精霊殿とレ・ミリレウの狭間に存在していた魔力の層を通過した時にまとわりついたものらしい

一度魔力についても詳しく聞きたいなぁ

そう思った俺は居るかは分からないがとりあえずティリアを呼んでみることにした

「ティリアさん。いるー？」

「います。何か御用でしょうか？」

間髪開けずに部屋に入ってくるティリア

「あのさ、ティリアさんって魔法って使える？」

「え？えぇ。使えますけど、どうしたんです唐突に？」

ティリアは首をかしげる

「いやさ、なら話が早いんだけどさ、俺に魔法教えてくれないかな？」

どうせ夢にまで見た魔法が使える世界ならはやくならって使ってみたいと思う彩輝なのであった

『新教科。それすなわち魔法の授業』

「いいですか？魔術は大きく分けて３つに分けられます。攻撃魔術、防御魔術、補助魔術の３つです」

ティリアは指を３本出して俺に説明をしている

「魔術など、マナを元とした全ての現象を魔法と呼び、人間の起こす魔法を魔術と言います。そしてその魔術の使用レベルの難易度別に分けたものが通常魔法、上位魔法の二つです。ま、みんな面倒くさいから二つ合わせて魔術で通ってますけどね」

「ってことはその攻撃、防御、補助の３つはレベル別に通常魔法と上位魔法、精神術の３つにわけられるんだな」

「その通りです」

そういってにっこりと笑うティリアさん

「ただ精神術はちょっと特殊で通常魔法、上位魔法とは別の扱いになりますけどね」

と軽い訂正を入れる

「それ以外の、つまり自然界での現象を魔天といいます。マナは大気中に漂っているものなのですがそれが一カ所に集まったり風のマナなどの他のマナに動かされたりすることでその現象を引き起こします

・・・アノ、ヨクワカラナインデスケド？

第一、マナってよく分からない

「マナはすべての物体が持つ成分のようなもので水のマナは川や海などが多く発しています。補足ですけどこの国には多くの水路、つまり大量の水が存在するために国内何処でも水の魔法が使い放題なのです」

そりゃまぁ聞いたことくらいはあるけどさ。ゲームとかで

ただマナの扱いがよくわからない

分子や原子のような存在とはなにか違うような感じだし

そもそもなんでこの世界はこんなにも漫画やゲームじみているのか、もの凄い謎だ

顔を傾ける俺に細くを入れるティリアさん

「たとえば落雷などは雷のマナが一定量集まることで起きますし、氷のマナが風のマナに乗る事で雪ができて吹雪になったりという具合です」

なんというか現象そのもの、たとえば雷の発生メカニズムとかって科学的に解決しているものではないのだろうか？

先入観かそれ故に、説明されてもマナがどういうものなのかがピンと来なかった

「実際に見せてみましょうか。私が使える魔法は水の属性です。魔法は体内にマナを取り込み魔力とします。魔力を消費し、後は感覚で術式を刻み込むことで魔術は発動します」

ティリアさんは右手を胸の前で人差し指だけを伸ばす

まるでこのゆびとまれーって感じである

その人差し指の上に、ゆっくりと何かが現れる

それがすぐに一滴の水であることが分かった

水はゆっくりと大きくなり、最終的には野球ボールぐらいの大きさになった

「確かにマナは目に見えない分、収束するのが難しいです。そして体内に取り込み魔力に変換するのにもなれないといけません。ですがそれさえできてしまえば」

ティリアさんは立ち上がり左手で窓を開けると外に向かって人差し指を向ける

外には何も無いが２００メートルほど先に木が一本立っている

下では一人の女性がその周辺の花壇に柄杓で水をあげていた

其処の木の根本に向けて

パシュッ　バシャァン

ちょ、早くね？

２００メートルを１秒も立たずに、正確に根と土の間に打ち込んだ水は四散して地面に染みこんでいく

其処に木にも水をあげようとした女性がいつの間にか出来ている水の跡に首をかしげてる

「といった具合に、上手にマナの収束が出来ると、形、スピード共に威力が上がります。これはまぁある程度の鍛錬をしてコツを掴む

しか無いですね」

ほえー・・・と窓の外を眺める俺は頭を掻いた

確かにこれは化学じゃ解明出来ないのではないかと思わせるものを見た

とりあえず化学と魔術による現象は別と見ていいのだろうか

「マナにも種類ってあるのか？」

「はい。水、火、雷、土、風、氷の６種類が主ですね」

「主？ってことは他にもあるのか？」

「あります。木、光、などがありますがこれは遺伝的なものですので普通の魔術師に習得は不可能とされています」

ってことは家系ごとにそう言った魔法が伝えられているのだろう

それプラス遺伝といったところか

「魔法を使えるのはこの国では約５０人ほどですね」

「少ないんだな」

「はい。元々魔法を使える者も殆どが遺伝によるもので、たとえ親などが使えたとしても子に遺伝する確率は五分五分のうえ、自らの才能が開花することなく一生を終える者も少なくはありません」

「ってことは年々減ってるってことなのか」

「とはいえ親家族等に使える者が居なくても、希に能力が発現する者も居ます。まぁ本当に希な話ですけどね」

実は私もなんですけどね、とちゃっかり追加

そんな希な人物に教えて貰えるとはね

「なぁ、もう少しマナを簡単に説明できないかな？なんかピンとこなくて・・・」

「簡単にですか。まぁ水のマナは水の元、雷のマナは雷の元、火のマナは火の元といったかんじですかね。水火雷土風氷（すいからいどふうひょう）で通っていますがまぁこの五つのマナはそれぞれ水、火、雷、土、風、氷の元となるようなものだと思ってくれればいいかと」

「あー、そういう感じなのか」

「身の回りの世話、必要最低限の教育などの命令を王妃から預かっておりますので私で良ければご指導致しますが」

「おお、マジか！サンキューな！」

サンキューと言った事ではっとしたがやっぱり英語でもちゃんと相手に通じているようだ

「今時間はありますでしょうか？」

「ん、まぁ。暇だしだいじょうぶっすよ」

「では早速始めましょうか。貴方に膨大な魔力が埋蔵されているのはファルアナリア様から聞いています」

あんまり言いふらしてないよなあの人

たぶん、必要最低限の身の回りの人物だけ・・・だと思うんだけどなぁ

ティリアさんも一応俺の身の回りの世話をしてくれるから説明はしたんだろうとは思うが

「なぁ、気にならないのか？」

「何がですか？」

「俺の事、聞いたんだろ？」

「一応経緯等は大方聞きました。ですが深くは散策するものではないと独断で判断いたしました」

「なるほど・・・ね」

ま、それはそれでいいのかな

俺も逆の立場なら言いふらす気にはなれないな

「さぁ始めましょうか。と、その前にもう一つ覚えて貰いたいことがあります」

「ん？」

「マナの相性です」

「あぁ、ポケ○ンのタイプみたいな感じの奴か」

「ポケ○ン？」

「あ、気にしないで」

水は扱いやすく

炎は氷を溶かし

氷は物質を凍らせ

土はマナを溜め込み

雷は水を伝い
風は全てを切り裂く

「それぞれの特性はこれが基本ですかね」

「なんかちょっと違うんだな。てっきり一周ぐるりと強弱が繋がってると思ったんだけど」

ポケ○ンだけではなく、他のゲームでもそういった感じであると思うのだが

「一概には言えませんが魔術どうしがぶつかり合った場合、一番強いのは風の魔術です。ですがこの風の魔術はあまり多くの者が使えません」

「そうなの？」

「この国で使えるのは王妃のファルアナリア様と第一王女のセレシア様、それともう一人だけです」

「少ないな」

この国には約５０人ほどの魔術師がいて、そしてその内、風の魔法を使えるのは３人

いや、もしかしたらもっと確率的には低い可能性も無くはない
そう言えばあの煙を吹き飛ばしたのも風だったよなぁと思い出す
ティリアは王妃と王女は風と水の魔法を使えると補足を入れた

「風は全てを切り裂きます。その他全ての魔法は風の魔法に太刀打ちするのは難しいです」

「技のレベルとか頭を使った作戦とかでも無理なのか？」

「風の魔術師は風を操ります。体の周囲に風を纏えば全ての魔術が弾かれます」

うぁー、なんかク○ャルダオ○みたいだなおい
ネタがわからなかった人、ごめんなさいｏｒｚ
ん？って俺誰に謝ってるんだ？
とはいえ其処まで完璧だとある意味無敵じゃなだろうか

「水は炎を打ち消します。ですが力量の差によっては逆に炎に蒸発させられてしまいます」

「確かにそうだよな。一概にはって言ってたのはこういうことか」

「はい。炎も同様に、氷を溶かしきることが出来なければ思い一撃が直撃しますしね。そして風魔法の次にやっかいなのが氷魔法の使い手です」

「氷か」

「水を凍てつかせ、驚異である炎を凌ぐ手段はいくつもありますし雷なども氷の盾で防ぐことが可能です」

「それってやっぱり水がないと使えないのか？」

「いえ、氷魔法自体、元々水魔法が進化したようなものですし氷のマナは水のマナと同種なんです実は。ですので空気中から水分を集めて凍らせることが出来るのです。まぁそんな事ができるのは水の守護霊様が守護するこの国内ぐらいでしょうけど。実際に国外で使うならば液体としての水が必要になります」

なるほど。空気中から水を集めることは不可能ではないがそれは水の精霊によるものなのか

気化している水分を使って水魔法が使えるのはこの国だけであり、国外では液体の水がないと仕えないのか。そしてそれは氷魔法にも同じと

ある意味変幻自在だな

ってことは別の国ならそれぞれ別の精霊が司る属性が使いやすくなるのだろうか？

「水の魔法ですと防御にやや難点があります。物としての強固性が無いですしね。しかも水魔法は他の魔術にくらべて攻撃が劣ります。その分扱いやすいんですけどね」

空気中に水分さえあれば何処でも使えるというのは水魔法の長所か。国内限定だけど

「ですから国外に行くとき、水、それと氷の魔術師は常に水の入った小さな瓶を携帯しています」

なるほど、それで補う訳か

逆に形をとどめにくく、ぶつかった後の衝撃に耐えきれずに四散するのが関の山

その点を解消したのが氷魔法か

確かに水魔法のように水さえあれば何処でも使え、なおかつ攻撃と防御の力を高めているわけか

「雷は土に対抗する手段は一つもありません」

「土には・・・ということは」

「はい。土以外には驚異的な攻撃力を誇ります。防御が難しい魔法ですが唯一風魔法に対して有効打を与えることが出来やすい魔法です」

無敵の風魔法にもやはり弱点はあるわけか

最も攻撃に突出した魔法であると言ってはいたが防御が出来ないのが痛いな

恐らく形をとどめにくいのだろう

「風魔法の最大の弱点は力です」

「力？」

「生半可な魔法ではじき返されるか受け流されるかのどちらかですが、正面から当たった場合どうなると思います？」

「え？」

そりゃぁ・・・はじき返すか受け流すかの二択だし・・・正面から来た場合は押し返すだろうか

「正解です。これはつまり、纏う風の流れに他の魔法のマナが乗って弾かれるのでは無く、力押しにより強制的に魔法をぶつけているのに近いですね」

つまり、受け流せないほどの圧力をかけてやればいいのか

横の流れで流せないほどの押し

押しに弱いとはこういうことか

たとえるなら、槍の一突き

「つまり、一点攻撃に特化した雷魔法は最もその風の反発力を正面から突き破りやすい魔法なのです。まぁ力が弱ければそのまま風のマナに乗って相手の風に力を乗せてしまう事になりますけどね」

それは恐ろしい

相手をとりまく風に雷が纏えばそれだけで全身武器と化す

「要するに魔術は使えても力が無いと逆に利用されちまうってことか」

「そうですね。土は先ほど言ったように雷魔法に対しては絶対的な防御を誇ります」

そんな最強の攻撃を持つ雷魔法でも土魔法の前には効果一つ無いらしい

難しいな

簡単な相性表なんかでは表せないな

「ただし、火に当てられれば乾燥してバラバラに、水を含みすぎるとビチャビチャになってばらけます」

「弱くないか？」

聞く限りこの魔法は他の魔法に対する耐性が低いような気がする

「通常の状態ですと弱いです。ですがこの土魔法は他の魔法とは多少違う点があるんです」

「違う点？」

「マナの吸収によって他属性を纏うことができるんです」

「付属効果みたいなもんか？」

「たとえば先ほど見せたような水弾を土魔法で使うとします。さっきも説明した通り、空気中にはマナが漂っています」

そこでこのように

そういってティリアさんは先ほどよりも小さな水の玉を作る
腕を一振りすると水の玉は空気中に霧となって消えていった

「空気中にあるマナは属性を持っています。まぁマナは魔力の元、エネルギーと思ってください。今やったのは水属性のマナを収束して空気中の水分を繋がりやすくしたものです」

「マナが集まるとその属性と同じ属性の物質の収束をしやすくなるって事か？」

「はい。そのマナを操れる人のことを魔術師と言うのです」

「なるほどな」

「さて話の続きです。土属性のマナは多く集まると他属性とのマナと結びつきやすい性質を持ちます」

土属性のマナを集めると其処に他属性のマナを取り込み、外殻に別の属性を纏うというわけか

上手くいけば複数の属性のマナを結びつけられそうだな

そうなれば使いこなせればかなり良い魔法なのではないだろうか

「それ故に土魔法を扱う魔術師は空気中のマナをより敏感に感じ取ることが出来ると聞きます」

「ティリアさんも今マナとかを感じるんですか？」

「えぇ。この国の殆どは水のマナで覆われています。水が豊富な土地柄が現れているとも言えますね。ですから水の魔術師の見習いなどはこの国で修行を人が多く訪れます。とはいえ他の属性のマナが少ないというわけでは無いですよ」

なるほどねぇ・・・

「ねぇ、マナってどんな風に感じてるんだ？」

ティリアは目を閉じてうーんと唸る

「言葉で表すならば、周囲が星空のようになる感覚ですね」

「綺麗そうだな」

「まぁ実際に星空が見えるわけではないですから綺麗かどうかは分かりかねますけどね。ですが、感じるだけならとても澄み切った綺麗なものだと思えます」

「そっか」

「では実践に入るのですがまず最初に貴方に合う魔術の属性を調べないと行けません」

「調べるって・・・」

「そのためにこれを使います。もっと力のある魔導師レベルの方ならすぐに見分けられるのですが・・・」

そういってティリアさんは一本の木の枝を取り出す

小さな小枝をはいと俺にわたされる

見た目は普通の小枝だが何か秘密でもあるのだろうか

「その小枝はディアグノと言う木の枝です。ディアグノは体内にマナを取り込むとその属性の効果を示します。まぁ言うより見るのが早いでしょう」

ティリアさんは小枝をもう一本取り出して手のひらにのせる

すると小枝は折られた断面からじわじわと水が出てきた

「ディアグノは元々水気の多い土地にしか育ちません。というのも水のマナを取り込み、体内で水を生成して成長するからです。私は水の魔術師ですので私の魔力には水のマナが多いためこのような現象が起きます」

「ってことは他の地域だったらどうなるんだ?」

「水のマナが少ないと水を生成できずに枯れてしまい、またこの木は多くの水を必要とする木ですので通常の土地でもあまり見かけないかもしれませんね。まぁ川沿いなら普通に生えていると思いますが」

「へぇ、ってことはこの国には一杯生えてるのか？」

「はい。ディアグノの栽培は産業の一つにも組み込まれているので主に輸出等に使いますね」

「なるほどねー。じゃぁ水以外のマナが入ったらどうなるんだ？」

「元々この木の皮は水以外のマナを通しません。ですがこのように断面が見えている場合、そこから魔力を流し込むと変化が現れます」

「たとえば？」

「そうですね。火属性なら燃えて消し炭に、雷属性なら放電、氷属性なら断面が凍ります。風なら木は真っ二つに裂けます。反応がなかった場合、それは土の属性を現していると言われます」

マナを流すだけで変化する木か

水の変換に使われる機能が他のマナで行われるってことなのだろう

もしこういった木で家を建てたらどうなるのだろうか

誤ってついた傷口に火のマナが流れ込んだとしたら、それは恐ろし

いことになるんだろうなぁ

「どうしましたか？」

おっと、無意識に苦笑いしてたな俺

「なんでもない。ところでさ、どうやってその魔力って扱うんだ？」

「これは感覚なので言葉で伝えるのは難しいのですが・・・あえて言葉にするなら無意識になってその中から何かを練り出す感覚です」

「う、わかんねぇ」

「これぱっかりは誰しも最初は苦労する所なんです。私も結構苦労しましたね」

難しすぎる

確かに感覚だと相手に伝えるのは難しいよな

「そういやさ、マナと魔力の違いって何だ？」

唐突に俺が聞く

そんな突然の質問にも彼女は丁寧に答えてくれた

「マナとはそれぞれ6つの属性をもった魔術の元となる物質です。自然界にあるマナを自らの器に溜める。この器に溜まった分が魔力です」

ティリアはコップを一つとり、その中に出現させた水を注いでいく

このコップが魔力の器、溜まっていくのはマナ

「この器はある一定の属性のマナしかため込みません」

なるほど

小さい頃に遊んだ記憶があるおもちゃのようなものか

形が違う積み木を、それぞれの形の穴に入れる遊び

形が違う穴には入らず、ぴったりの穴には入る

まぁそんな感じのイメージに似ているだろう

「それが自分と相性の良いマナです。元々一人の人間がため込めるマナの種類は一つですが希に二つの属性を扱える者も居ますけどね」

穴は一つ
それに合う積み木を探し出さなければいけない

「小枝を」

考えるより行動に移す
わたされた小枝を手のひらにのせ、目を閉じる
よく分からないが、感じ取れば良いんだろう？
俺は目を瞑り、息を吐き、そして止める
周囲から、全てが無につつまれる空間
目を閉じているからか、それとも・・・
俺は感覚を研ぎ澄ませ、感じる

どこだ

どこだ

どこだ

そして見つけた

小さな光の粒を

小さい光が見える

七色の光の粒

それを引っ張り出すようにして右手に集中させる

目を開くと何かが方から肘へ、肘から手の甲へ、手の甲から手のひらの小枝に

その何かが小枝と俺の体を結びつけ、そして

パスッ

小枝が小さい音をたてて真っ二つに裂ける

これってたしか・・・

「これは・・・風のマナ!?」

数が少ないと言われる風の魔力を受け取った小枝は二つに裂けて手のひらに転がっている

唖然と見つめるティリアはそんな言葉を発して、ただただ手のひらに乗る小枝に視線を注ぎ続けて

「これって俺の魔力の器が風と相性が良いってこ・・・と・・・・」

俺が言葉を発している最中に事件は起こった

俺は手のひらにのる小枝を見ていたのだが突然その木がパチッと小さな音をたてて放電したのである

ちょっとまて・・・これって

「え、嘘!?」

「お、おい、これってさっき言ってたやつじゃ・・・・」

希に二つの属性を扱えるという話は本当だったらしい

だが驚きは止まらなかった

真っ二つになった木の断面から水が滲みだし、その水は外気に触れると同時に凍ってしまい、最終的にゴウッと小さな音をたてて炎に包まれた

木は文字通り消し炭になってしまい、窓から入ってきた風で燃えカスは部屋の隅へと飛んで行ってしまった

言葉を途中で途切れさせてしまった俺、あり得ないようなものを見たかのようなティリアは無言で今起こった現象を必死で理解しようとしている

これはどういう事なのだろうか

無い頭をひねって考えてみたがよくわからなかった

ただ隣で驚いているティリアを見る限り、なんだかすごいことらしいというのは実感できた

『新教科。それすなわち魔法の授業２』

ティリアが部屋を出て行って数分後、彼女は一人の女性を連れて部屋に戻ってきた

俺の部屋に入ってきたのは緑色の髪をした女性だった

髪は肩までしか伸びておらず、おっとりとした顔立ちの女性は緑地に黒のラインが入ったフードを被っている

そして同時に入ってきたティリアと比べるとずいぶん小さく見える

ティリアは彩輝の身長よりも少し小さいくらいだったが、今入ってきた女の人の身長は１５０センチあるかどうかぐらいでよりいっそう小さく見えた

そんな彼女をティリアさんが紹介しはじめる

「こちら私の先生で現在この国の魔法隊の隊長であるシオン・ウェンヴァーさんです。数少ない風の魔術師の一人です」

隊長・・・ちいさいのに・・・・隊長なんだ

「彼が・・・そう？」

「はい」

「えっと・・・桜彩輝・・・ん？」

ふと思ったのだがこっちの世界の人の名前ってなんだか外国人みたいだな

ミドルネームや姓名逆になっているあたりが外国そっくりだ

ってことは俺も姓と名を逆にした方が良いのかな

「彩輝桜・・・？です。えっとー名が彩輝で桜が姓です。俺のいた世界では姓を先に言っていたので桜彩輝なんですけどここでは反対になるっぽいので・・・」

先ほどティリアが誰かに報告しに部屋を飛び出していったのだが、どうやら目の前にいる彼女を呼びにいっていたようである

その女性はどうやらシオンと言うらしく、国内最強と言われる魔術師なのだそうだ

まぁ魔術の強さなんて俺にはわかんないんだけどね

「事情は聞いた。見せて・・・ください」

そう言って俺に先ほどわたされたものと同じディアグノの小枝
何となくのコツはつかめたのでもう一度同じ事を試してみる
今度は目を開いた状態でも出来た
腕を伝う妙な感覚が小枝に到達すると小枝は先ほどのように真っ二つに裂け、最終的に消し炭となって手の上に残った

「おかしい・・・です。あり得ないです」

シオンは持ってきていた杖をふりかざす
ボウッっと杖に緑色の光が灯り、足下には魔法陣が浮かび上がる
うおおおお、すげぇ、光ってる!!

「無色の虹よ、彼の者を巡り、色となれ。アークエンシェルインクオローレ」

振るわれた杖は虹色の軌跡を空中に残す
虹の筋はすぐに消えるがいつの間にか俺の足下にも無色の魔法陣が描かれていることに気づく

「うおっ！？」

「じっと・・・していてください」

杖を振るう彼女はどうやら空中に何かを描いているようにも見える

虹の筋はすぐに消えてしまうので実際には何を描いているのかは分からないがジッとしているしかないようだ

言われた通りにジッとしているとすぐに彼女は杖を振り切り、制止させる

「アィ・ソノディ・リライヴォン」

ぽつりと呟くシオン

その言葉が言い終わると同時に、俺の足下に浮かび上がっていた魔法陣が明るくなったり暗くなったりと明滅し始める

赤、青、黄等々、様々な色が移り変わっていき、最終的に虹色の魔法陣ができあがる

いや、どちらかというと緑や青の割合が多い感じがする虹色だったな

「興味深い・・・ですね」

彼女が言うにはどうやら俺の体には全属性の魔力が詰め込まれているという

中でも風と水の魔力が多いらしく、その影響で魔法陣に寒色系の虹色が浮き上がったらしい

そういえばこの前体質が違うとか言ってたよなぁ・・・

俺の体は魔力を吸収、ため込む性質だと言われた

元の世界でため込んだ多くのマナが魔力となって溜まっている状態ということだろうか

「普通、体に合ったマナしか体内で魔力に変換できない。貴方、全てのマナを取り込める。つまり、いろんな属性の魔法が使える」

「そういや俺の体質って無意識に空気中のマナをため込んでしまうらしいんだが」

「それが原因。普通、マナを体内で魔力にして魔法を使う。故に、いつもは空っぽ」

空っぽというのは魔力の器のことだろう

彼女はそれを手で輪っかを作って表現している。なんかかわいい

その場でマナを取り込み、魔力にして魔術にするのが普通で通常は魔力は体内にたまるものではない。俺がこちらの世界の人と違うのは魔力をため込む事ができ、必要なときに取り出すことが出来るという事だ

それに加え、属性に関係なく取り込めるというのが俺の体質

つまり俺の体の中にはいろんな属性の魔力が大量にあるらしく、特に風の魔力との相性が良いらしく風属性のマナを多く取り込んで魔力になってたまっているということらしい

ちなみに先ほど俺の中には風と水の魔力が多いと言ったがどうやら水のマナの多くは俺がここに召喚されたとき、ファルアナリアさんに鎖で詰め込まれて魔力になったと考えていいと言われた

「そういやあの鎖ってどういう属性の魔術なんだ？なんか風とか水の魔力って感じじゃ無かったけど」

思い出してみるとあの鎖はこういった自然に関する魔法とはなんだか違う感じがする

「その鎖というのは精神術。補助的な魔術でどの属性にも属していない。属性に関係なく魔力さえあれば使える魔術」

「精神術は意思の強さによってその術の効果を高めるんです」

そう細くするティリアさん

「あぁ、なるほど。だから普通の魔術とは別なんだ」

「そうですね。確かに」

なるほどねー

「あなたにはいろいろ聞きたいことがある。でも時間。私仕事ある。またの機会に」

「え、あ、はい。ありがとうございました」

「あ、はい。忙しいところありがとうございました先生」

シオンはそう言って部屋を出て行った

やはり隊長と言っていたからいろいろと忙しいのかもしれないな

退室したシオンは静かに顔を覆っていたフードを外した

「六属性を扱える六天・・・あの人と同じ・・・興味が湧いた。アヤキ・サクラ」

静かに彼女は呟いた

「でもすごいですねー。そんな人始めてみましたよ」

シオンの退室後、俺をキラキラとした目で見つめるティリアさんは俺へと詰め寄ってくる

「そ、それよりさ、ほら。はじめようよ」

「そうですね。アヤキさんは風と水の属性が適性のようですので私も少しは役に立てるかもしれません。私の専門は水ですから」

「あ、うん。よろしく」

彼女は胸をぽんと叩くと俺から一旦距離をとる

「まずは基本となる水の生成を行います」

彼女はそう言って机の上に置いてあった空のコップを手に取る

そしてコップの上に人差し指を向ける

するとどこからか水が現れ、コップの中に綺麗な水が溜まっていくではないか

おおおーと感心する俺をよそに、満タンになったコップの水を空中にばらまいた

水は一瞬のうちに分散して霧のようになって空気中にとけ込んでいった

「まずは水のマナを、っと、貴方の場合はちょっと違うみたいですね。マナの吸収は省いていいから魔力の扱い方からか・・・」

と、ぶつぶつ言ったあげく、最終的に俺にコップをわたした

とりあえず受け取っておく

「先ほどやったように魔力を手の先に集中するんです。ですがこのままだといろいろな属性の魔力が一気に出るかもしれません。私もさすがに水属性以外の魔力は扱えないのでどうなるのか分からないんですが・・・それをまずコントロールする必要がありますね」

うん。理屈はわかる

まずやるべきはそこからだろう

「具体的にはどうすればいいんだ？」

「そうですね。私は二種類以上の属性を扱ったことが無いので詳しくは分かりませんが、とりあえずマナを感じ取ることから始めるといいと思いますよ」

「さっき言った星空のような感じにか？」

「そうですね。その中から水のマナだけを感じるんです」

「そのためにはマナを感じられないと行けないんだよな」

俺は目を閉じて集中する

魔力の扱いは先ほどから使っているから何となく分かった

じゃぁマナってどんな感じのものなんだろうか

マナは確か周囲に存在してるんだよな

体内に存在する魔力とはまた別なのか

とりあえず思考はここまで

一旦感覚にのみ体を任せる

開いた窓から聞こえていた風の音が聞こえる

鳥のさえずりや揺れる木の葉のざわめき
隣にいるティリアの呼吸の音
聞こえる

こんな感覚になったのは彩輝自体も初めてであり、目を閉じただけなのに周囲の音が聞こえてきてその光景が思い浮かべられる

あぁ、落ち着くっていいなぁとか思ってみるも、いやいや今はマナを感じるんだ！と自分に言い聞かせる

ヒントとしては周囲にたくさんあるってことだよな

・・・・・わからん

真っ暗だちくしょう

まぁ目を瞑っているのだからあたりまえなのだが

彩輝はとりあえずもう少し目を瞑っていることにする

でもまぁ何となくいつもと違う感覚なのは分かる

こっちの世界に来たときから感じていた違和感

それはどうやら別世界に来たというとまどいではなく、別のものにあったらしい

ここにきて、ようやく何かが分かった

文字通りピンと来た感じだ

これか！

暗闇の中にぽつりと光る小さな粒

光の粒は淡い青色をしている

そして光の粒はどんどんと増えていく

いつの間にか、赤や黄色、水色や緑といった色とりどりの粒が俺の体をとりまいている

「なるほどこれか」

たぶんこの粒こそがマナである

おおーと感動していた俺にティリアさんの声が届く

「マナを感じ取れましたか?飲み込みが早くていいですね。そのマナの色を思い浮かべながら一カ所に集まるような感じで意識してみてください。まぁ人それぞれやり方は違うんですけど、要はイメージの問題です」

この中から、えっと水だったよな

水って事はこの青いので良いのかな?

あれ、違う違うそれは黄色で!

意識をしてしまうともういつの間にか黄色い光の粒が集まってくるイメージしかあつまらなくなっていった

「いっ!?こ、こっちですっ!!」

咄嗟にティリアは部屋の窓を開けて大きなソファーの後ろに飛び込んだ

そうこうしている間になんだか魔力っぽいのが手を伝い、その先の方からダシャァァンと轟音をたてて何かが飛び出し、部屋が真っ白になった

「目があぁぁ!?」

「キャーッ!?」

二人の叫び声が真っ白な部屋を埋め尽くす轟音に掻き消された

「あの、なんか・・・・すいません」

「い、いえ、お気になさらず・・・」

部屋は窓枠が粉々に吹き飛んだ以外に目立った損害はなさそうだ

ティリアさんが開けてくれた窓めがけてどうやら俺の雷魔術が発動したらしい

魔術というより単なる雷の放出だったらしいとソファーの後ろから顔を出したティリアさんが教えてくれた

「な、なんで無事なんですか・・・？」

「え、それって嫌みですか！？」

「あ、いえいえ、違います！普通雷の魔術はそのまま出したら魔術師の方が少なからず感電してしまうはずなんですが・・・」

と、俺の体をマジマジと見つめるティリアさん。なんか恥ずかしい

「と、とりあえずもう一回」

今度は間違えないようにと俺は青色のマナを頭でイメージする
それに呼応するかのように一瞬その青色のマナが光る
一瞬の出来事だったのだが、僅かに青いマナが輝いた

これを一カ所に・・・

周囲のマナを集めるように脳内でイメージする
と、そこへ来訪者が現れる
ドアがノックされ、ティリアがドアを開ける
俺はイメージを中断して部屋のドアへとふり返る
そこには白髪の女性がいた
腕を組み、後に侍女と騎士を従えているその女性は視線をティリアから俺へと移す
食い入るように見つめるその女性が手を腰にあてる

「お前が噂のアヤキか」

噂になっているかは知らないけど確かにおれは彩輝だ

こくりと俺が頷く

「アルレストに聞く限りだともう少し骨のあるような奴かと思ったがまだガキじゃないか」

カチンときたね

俺がガキだとコノヤロー！？

「初対面に向かってそれは無いんじゃないか？」

「そうだったな。許せ」

「態度でかいなコラ」

「あ？」

ジリジリとにらみ合う俺達2人の間にティリアが仲裁に入る

「だれなんだよお前」

突然入ってきた見ず知らずの女性の名を問う

「私はこの国の第二王女、シキア・チェヴァリ・キルト・アルデリア。私に向かってそんな口がきけるとは本当に異世界から来たようだな。時に、その吹き飛んだ窓はなんだ?さっきの轟音と関係があるのか?」

「あ、えっと、あぁ、まぁそうですね。ちょっと彼が吹きとばしちゃいまして」

「ふん。まぁいい」

王女との身分にもなれば国民にもその名前は知られている

それを知らないという素振りやふてぶてしい態度を見るからに、噂が本当なのだとシキアは実感した

対して彩輝は第二王女という身分を聞いた時点で彼女が恐らくセレシアの妹であることを推測した

が、髪の色は違い、セレシアよりも背が高く、こうした性格もプラスされてとてもそうは見えない

身長的には彩輝と同じくらいではあるがスラリとした体型で彼女の背の方が彩輝には高く見えた

「お前、セレシアの妹か?」

「ふん、私に対してお前とはいいご身分だな。立場を弁えぬ平民が」

「悪いな。俺は平民だけどこっちの世界の平民じゃないんでね。別にお前等にへこへこ頭を下げる理由がなくて悪かったな」

どうやら俺はこいつと相性が悪いらしい

そうじゃ無ければこうして出会い頭に喧嘩などしないだろう

なんというか反発し合う

「無礼者の此奴、斬り捨てましょうか？」

そこで前に出てきたのは彼女の侍女らしき女性

腰に差した刀の柄を握りながら彼女の前に躍り出る

あいにく似たような台詞、ここに来たときすでに貰っている

「お前は気にしなくてもいいカーン。さて、本題だが私はお前に母様から伝言を言付かってきた」

「ファルアナリアさんの？」

「顔見せのついでに伝えてきて欲しいと頼まれてな。近いうちに一度城下の視察に行けとのことだ」

「城下の視察？それって第二地区の事か？」

この城の一番近い第二地区が俺は城下だと思っていたがそうではないらしい

城下はどうやらこの外壁で囲まれた中全てをさすらしい

視察って・・・なんでよ？

「お前、城下に住むらしいな」

「まぁね。いつまでもここで甘えてるようなら俺はたぶんこの世界で生きていけないと思ってね」

これは事実

実は俺が城とは別に住みたいと言ったとき、ファルアナリアさんは反対をしていた

というのも俺のような異世界に住む俺に対して何かあったときの対応が遅れるというものであった

少し前、俺は精霊と契約を交わした

俺は今精霊の加護を受けているらしい

精霊が言うには俺とこの世界の存在を馴染ませる事が目的であるそ

うだ

俺は今別世界に居る

別の時空間から来た俺が今此方の世界に存在するということそのものがおかしい

もしかしたらそれが原因で時空に歪みが出る可能性があるというらしいのが精霊の見解

そうなれば俺はもちろん、周囲の空間を切り取りレ・ミリレウに引き込んで消滅するということだ

それは恐いな

精霊と契約をすることにより、俺の周囲に精霊の力で膜を張るらしい

これが精霊の加護というそうだ

まぁ目に見えるわけでもないし何不自由なくこれまで通りに過ごせるから大して気にはしていなかった

この膜のおかげで俺はこの世界の時空間を同じにして過ごせるらしい

あと俺には特殊な力が備わりその精霊を召喚することが可能らしい

まぁ困ったことがあったら呼んでみようと思っている

っと、話がずれたな

ファルアナリアさんは一応王妃でありながら国内で唯一の精霊使いだそうだ

彼女ならば何か問題が合ったときにすぐに対応できる

たしかに一人ならばまずいかもしれないが、俺には今独自に精霊を召喚できる力を精霊から特例として与えられている

そのため俺は彼女の誘いを断った

肩身が狭いのは御免だ

彼女たちも王族

仕事もあることだろうし俺にかまってばかりも居られない

「そうか。まぁ母も無理強いはしないと言っていたしな。お前にはお前の考えがあるのだろう」

「下見って意味でも良いかも知れないな。うん。城下に住むまでにはしばらくかかるって言ってたし、その間に勉強もしておかないとなぁ」

「ふ、精々頑張るが良い。確かに伝えたからな。帰るぞカーン」

「はっ！」

退室するシキアの後に侍女がついていく

開けられたままのドアをティリアさんが閉めた

「本当に顔見せのついでだったんだな」

「そうですね。王族の仕事は大変ですからね」

「そう思うとよくファルアナリアさんとか俺に付き合ってくれたな」

「心配しておられるのでしょう」

「かもなぁ。俺に侍女までつけるくらいだし・・・」

そこで俺はちょっと疑問に思った

なんで俺に侍女がついているんだ?

今更な疑問だ。なぜ今まで考えなかったのだろう

普通に接してたぞ俺・・・

別に俺は別に守らないと行けないほど重要な人物でも無いし普通客人に侍女ってつけるものなのだろうか?

「なぁ、なんでティリアさんって俺の侍女みたいなのになってるわけ?」

不思議そうに考える俺にティリアさんがすぐに回答する

「私は元々王妃の第3侍女でしたがアヤキさんはいろいろと分からないことがあるだろうということで王妃の命令でアヤキさんの補佐をしろと言われています。それに貴方は自分で思っているよりよっぽど重要な人間なんですよ?異世界の知識を持っているというだけでも重要な人間です」

「あぁ・・・なるほど。それって俺が城下町に移動したら終了なのか?」

「いえ、住居を城下に構えた時には其方に移動して生活をお助けする予定です」

にっこり

んー・・・マジか・・・

ボリボリと髪を掻く

直接甘える気はないが・・・・これくらいならいいのかなぁ

城に住むのは抵抗があるがそれならば別に良いかもしれない

監視の意味も込めてるんだろうね

「そっか。長いつきあいになるかもしれんな。よろしくな」

「此方こそ、よろしくお願いしますアヤキさん」

と改めて挨拶を交わす二人だったが、そう遠くないうちに二人はしばらく離ればなれとなることはまだ誰も知らない

『修練場の少女』

俺は次の日、修練場へと足を運んだ

もちろん使用の許可はきちんと取ってある

見慣れない人間が早朝に道場を使いに来たことで見張りの兵は首をかしげていたが、使用許可を取っているためとりあえず入れてくれた

床には茶色い土が広がっているが土を敷き詰めたという感じではなく、そのまま大地の上に屋根と壁をつけたという構造のようだ

前回足を踏み入れたときに、硬く踏みならされた感じがすることからいつもここでは兵達が鍛錬をしているのだと推測した俺は誰もいない早朝を選んでここを訪れることにした

草や石は無く、きちんと手入れが行き届いているのが一目でわかるが壁などには傷跡で埋め尽くされている状態となっている

壁の木の板にはいくつもの斬り傷や焦げ後が残っている

魔法でも使った痕なのだろうか？焦げ目の上から新しい木の板で継ぎ接ぎしたようである

ちなみにここは第2修練場

第1修練場は城の側面に位置している

ここは城の裏手の方にある修練場であり、第1修練場は主に多くの兵達が使うようで曜日ごとに使える隊が決まっているらしい

中でも騎士団と魔術剣士隊が中心のようである

ごくまれに近衛隊の方も訓練に来るようではあるがいつもは警備を中心にしているため時間があまりとれないとのことだ

魔術剣士隊は文字通り、魔術を使う剣士の隊のことだ

魔術師隊とは違い、中、近距離の戦闘を主としている

軽くティリアさんに説明して貰っただけなので詳しくは分からないがかなり重要な部隊らしい

ただ魔法を使える人数が元々少ないために、魔法剣士隊は本当に少なく少数精鋭という感じなんだとか

近衛隊はその魔法剣士隊と騎士団の中でもある程度の実力を持った者を抜粋している部隊だ

主に王族の警護などをしている

騎馬隊は馬ではなく、トトルという生物に乗った騎士の事らしい

馬では無いのだが翻訳機能が何故か騎馬隊と翻訳してしまうためとりあえず彩輝も騎馬隊で通す事にした

トトルはパッと見ダチョウのような姿をしている

長いクチバシに繋いだ手綱を片手で操りながら上部からの攻撃を行う部隊だ

機動力が高く、このトトルは手紙などを運ぶ仕事などでも使われるそうだ

それほどトトルの動きは速いらしく、最高時速約６０キロほどまで出せるそうだ

尤も人が乗った状態で６０キロという速度を出せるのだから人が乗っていなかったら１００キロぐらいは余裕だという意見がでているが実際のところは不明である

体の構造上は可能らしいのだが誰もそれを見たことがないのであくまで仮説の域である

スピードが速いことが特徴なのだが彼らはあまり筋力が無いために重い荷物を運ぶことはできない

せいぜい人を一人乗せて走るくらいが限界だ

騎士隊は通常の歩兵である

彼等の通常勤務は城などの警備であるらしく、一番数が多いらしい人数が一番多いため、警備は当番制のようなものになっているそうでそれ以外の時は寮や自宅待機なのだという

緊急の時には城から警鐘を鳴らして集合をかけるのだそうだ

魔術師隊は数が少なく、後方での役割が多い隊である

魔術剣士隊とは違って敵との直接戦闘ではなく、後方から相手陣地に高火力の魔術を集団で叩き込んだり前衛の補佐をするのが仕事になる

戦などのときは兵達が前方で戦っている隙に大がかりな魔術で敵を一掃するのがオーソドックスである

ただし集団で魔術を行使すれば味方の陣地のマナが一気に消費されるため、使いどころは重要である

戦局を左右するので正面からのぶつかり合いにはタイミングが重要となる

最後に竜騎兵

竜にまたがり戦をする部隊であるが一番人数が少ない隊でもあり、この国には竜に乗れるのは人数は僅か3人だけだという

通常は上空からの監視や偵察などに使われるそうだ

竜1匹は大体兵力として１００人ほどに匹敵するらしく、最強の生物といっても過言ではない

しかし竜騎兵になるのはとても難しい

まず竜そのものの数が少ないこと

人間に力を貸してくれる竜などまずいない

そのために多くは卵からふ化させ、共に育った竜でないといけない
人間への警戒心からか、生長してしまった大人の竜では手懐ける事はほぼ不可能と言ってもいい
そしてその竜の卵も滅多に手に入るものでは無い
新に兵を増やすことが出来ないが、兵力としては最高の戦力が竜騎兵でもあるのだ
そう考えると3人という兵の少なさにも納得がいった
多くの兵は大きな第1修練場で鍛錬を行う
第二修練場は設備が整っていない事と城からの距離が第1修練場よりも若干遠い事もあり、ここは逆に人が少ないのである

「とはいえ、先客が居るとは思わなかったな」

そう。俺の目の前には先に来ていた先客がいたのである
こんな朝早くからどんな物好きかと思えばまだ年端もいかない少女のようであった
修練場に入ると同時に俺はその女性と目が合ってしまう
誰もいない修練場の真ん中で剣を握っているその少女はしばらく固

まり、ハッと我を思い出すとザザザッと後ずさりをして壁にドンとぶつかる

驚かれたのか、それとも怯えているのか、あるいは警戒されたのか

とりあえず気にせず俺は俺で新しく手に入れた短刀を振るう事にした

今回修練場に来たのはそれが目的である

竹刀は握ったことがあるが流石に短刀は無い

早い内に体に馴染ませておこう

ここは日本では無いのだ

自分の身は自分で守らなければ行けない

でもまぁ、護身用とはいえ使うときなんか来るのかねぇ・・・

短刀を見下ろし、そんな事を考える

自分の命を狙われる理由が何一つとして思い浮かばない

考えすぎで、こんな事をしている自分がおかしくなったのではないかとすら思う状況だ

何が悲しくて早起きして小刀を振り回さなければならないのだと

「しかし流石にリーチは短いな。というか短すぎるだろ」

短刀ともなれば腕から少し離れた場所には攻撃が出来ない
普通の剣なら相手から数歩離れた場所からでも斬りかかることは出来るが短刀はそうはいかない
最低限、踏み込める距離にいないと攻撃は届きもしない
試しに一度振ってみる
横一線に薙ぎ払うようにして短刀を振るう
一度こうして振るってみるといろいろと分かってくる
まず、横に振るうには一度腕をまげないといけない
肩の上に手が来るようになる感じである
そして実際に振るう
これは腕を引きながら肘を伸ばす動きになる
そのため、実際に刀が相手に傷を負わせることが出来る場所はかなり体に近い場所になる
つまり、それだけ相手に密着しないと短刀は攻撃出来ないということになる
ここまでリーチが短い武器というのもなかなか無いな

「見ない顔ですね。どちら様で？」

「ん？」

ふり返ると先ほどまでここで鍛錬をしていた少女がいた

剣は鞘に戻しており、俺を見上げている

こんな小さな少女でさえ本当に切れ味の鋭い本物の剣を先ほどから振っていたというのだからまったくもって異世界というのは恐ろしい場所である

あながち保身のために剣を持ち歩くのもオーバーでは無いのかも知れないと俺は思った

「アヤキ・サクラ・・・かな」

一応姓と名を逆さまにしておく

んー・・・何というか、どういう世界なんだろうなここ

俺が多分日本語に聞こえているのは多分、翻訳か何かがされているのだろう

出なければ異世界の言葉なんて分かるはずない

事実、字は読めなかったので日本語では無いはずだ

「ここの隊士じゃないですよね」

「え、まぁそうだね」

「そうですか。・・・えっと・・・・不法侵入者か！？」

少々考えるそぶりを見せたかと思うと、突然声を張り上げて少女は抜刀

鞘と剣がジャリンと音をたてて擦れる音がする

「・・・うぇ？」

突然の事に開いた口がふさがらず、瞬きを忘れてしまう程だった

意識が戻った瞬間にはすでに少女は剣を振りかぶっていた

慌てて短刀を盾にする

ガキンという音と一緒に剣の重みが加わる

強いて言えば、剣の重さのみが加わる

彼女自身の筋力はあまり乗っていないと彩輝は見た
振り回すだけの力はあるが、それに上乗せするほどのパワーは見た目通りないようである

「ちょ、ちょっとまてよ！」

「うりゃあぁっ！」

何度も剣を振るってくる少女の剣を全て弾く
というか相手はなんだか俺のこと目に見えていないようで剣を適当に振り回している感じである
とはいえこれは真剣
包丁やカッターと同じ、すぱっと切れる武器であり凶器だ

「ちょ、あぶねっ！？」

押し返しても良かったが出来るだけ安全な方法をとりたい
危険なのは俺だけでなく彼女も同じなのである
小さな女の子が包丁を持つだけでも危ないというのに、剣を持って振り回しているとかどんな展開だよ！？

俺は次に振り下ろされる剣を避ける

これまで剣を弾いていたのに突然避けられると、少女は驚いた顔をしたままふらついてしまう

振り下ろされた剣が地面すれすれのところで止まる

俺はその剣を軽く蹴って平らな面を上にするとその上から４５００円の靴で踏みつける

持っていた剣を地面に押さえつけられ、少女はさらに前かがみになってしまう

「おい、俺に何の恨みがあるんだ～？」

ゆっくりと機械のようにして首を上に向けた少女は目の前に立つ男、この場合俺と目が合ってしまう

そしてゆっくりと目元に涙を浮かべ始め・・・

「うえええええええええん！」

「ったく、泣いて許すわけないだろ。下手したら死んでるっての」

剣から足をどける

ぺたんと座り、少女はキッと俺をにらみつける

「おまえかあああ！？ミーナを泣かせたのはあああぁぁぁ！？」

少女が口を開こうとした瞬間、殺気を感じ取り振り返る

そこには般若のような形相で俺に向かって走ってくる鬼が一匹

「え？あ？グハッ！？」

全身に鳥肌が立ち、次の瞬間にはその男のとび蹴りによって俺は昏倒させられた

目が覚めた俺は白い天井を見つめている

起き上がった俺はどうやらベッドの上にいるようで白いシーツがかけられていた

「あ、起きた」

横を見るとそこには修練上にいた女の子が小さな椅子の上に座っていた

しっかりと先ほどの剣を帯剣しており、よくよく考えてみると彼女が着ている服はたしか聖水騎士団（アクアサンタ）の騎士服である

この国には聖水騎士団というものがあり、彼らは城や国土の守護を主にしているそうだ

たまに要人の警護などもやるらしい

近衛隊はあくまで王族の守護のみをするらしい

貴族たちはこの聖水騎士団の一部から警備などに派遣してもらうらしい

人数や質の方はお財布と相談である

そして俺の目の前にいる少女もまた、聖水騎士団の騎士服を着ている

アクアサンタ騎士団は主に王都周辺を活動場所としており、外壁の外側にある村などの魔獣退治などはギルドなどに所属する憲兵などが担当している

たしかにそういう危険度は多少低いかもしれないがこの少女がこうして剣を手にして騎士服をまとっているのはどういう訳か？

俺ですらこの少女の剣を止められたのだからおそらく彼女が神童などという訳ではないと思うが・・・

「えっと、ここは?」

「城の医務室だよ。ごめんね。お父さんが・・・」

「あ~・・・」

なんとなくおぼろげに思い出してきた

確か俺は突然現れた謎の男に蹴り飛ばされて・・・

どうやらあの突然現れた男はこの少女の父親らしい。家族そろって理由も聞かず俺に襲いかかってくるとか何なんだこれ・・・

「うー、頭が重い・・・。どれくらい寝てたんだ俺?」

「んー一時間くらい気絶してたかな?」

「そうか・・・とはいえまだ朝か」

俺が修練場で蹴り飛ばされたのが早朝

一時間たって日がのぼり、気絶する前より明るくなっているがまだ朝である

それよりも俺としては部屋の隅に隠れて笑いをこらえているやつの方が気になる

いろいろと物が乗った台の裏手にいるそいつは白髪がこちらから見えていることに気がついていないようだ

会話を止めてじーっとその一点を見続ける

どうやら相手の方も急に止んだ会話と視線を感じてかやっとばれたかという感じで立ち上がった

「くっ・・・いやーなかなかにおもしろい。くくっ・・・」

「なんなんですかチルさん。そういうのって頭隠して尻隠さずって言うんですよ」

少女が着ている騎士服とは少し違ったデザインをしてマントをつけている彼女はこちらを見つめながら笑いをこらえている

なんか腹立つ

「ほう、おもしろい言葉だな。いや、日課の鍛錬をしようと第2修練場へ行ってみればおもしろいことになっていたものでな・・・フフフッ」

聞くところによるとどうやら俺は昏倒した後、俺を蹴り飛ばした騎士によってロープにぐるぐる巻きにされた上に、逆さまにされて天井につるされていたらしい

一体俺が何をした・・・

そこにチルがやって来たらしく、こうして気を失っていた俺は医務室に運ばれたらしい

「まったく、騎士アーガストもおもしろいことをする」

どうやら俺を蹴り飛ばした騎士はアーガストというらしい

「この子はミーナという、ま、騎士団の見習いとでも言っておこうかな」

「さっきはごめんなさい」

シュンと下を向く彼女に俺は苦笑いしてよろしくと言って自己紹介した

「ちなみに年はこれでも１８だ」

「嘘ダっ！！」

「本当だよっ！！」

俺は思わず叫んでいた

そして反論する彼女を再度見て思わずこう漏らした

「うそだぁ～・・・」

「ほら、やっぱりこれが普通の反応なんだよ」

「そんな・・・」

少女はがっくりと肩を落としていた

「ところで・・・だ、俺を吹き飛ばしたそのアーガストとかいうやつは？」

「そうだな、時間帯的に今頃城の警備にでもついてるんじゃないか？」

「そうか・・・」

仕事中なら仕方ない

次あったときにボッコボコかっこはーとにしてやる

年上だろうが人を問答無用で殴るような奴に殴られて殴り返さない訳ないだろう

「では私も仕事があるのでな。さすがに隊長職は大変だよまったく。肩がこる」

肩をぽんぽんとたたきながら退室するチルはドアの取っ手に手をかけたところで振り返る

「それから今医師のアーミル女医は別件ができてここを離れているがしばらくは安静にしていろとのことだ。いいな？ミーナ、そいつを勝手に出歩かないように見張っていてくれ」

「はっ！」

びしっと敬礼をして答えるミーナはチルが退室すると同時にため息をついて椅子にすわる

敬礼をしたりするところからして本当に彼女は騎士であり、チルは隊長なのだということを認識させられる

「さて・・・と。さっきは本当にゴメンね。つい勘違いしちゃって・・・」

「勘違いで斬りかからないでほしいな」

怒鳴りたいがそれを我慢して苦笑いする俺。偉い

そんな俺を見てミーナも苦笑いを浮かべた

おや、汗が止まらないようだな？

「あ、あははは・・・でも他国の貴族とかじゃなくてよかったよ～。そうだったらたぶんクビだね～」

「なぁ、今思ったんだが周りからみて俺の立場ってどうなってるんだ？」

ちょっと気になっていることを聞いてみる

俺は異世界から現れた異世界人

知っている者は多くはないが、周りからみたら俺はいったいどのような位置にいるのだろうか

客人・・・？でも客人でもここまでフレンドリーに話すものなのか？

「どうなんだろうね。事情は一応聞いたけどあなたが噂になってたあのアヤキさんだったんですね」

「噂になってんの俺？ってかそれ知ってるのに斬りかかったわけ？俺名乗ったよね？名乗ったよね？」

「それはもう、城の中では一番の噂ですよ。精霊台から現れた男の人、とまでは聞いてましたけどね。あのときは、ついうっかり」

ついうっかりで殺されそうになっていたらしい。恐ろしや、異世界

まぁそれはおいておいて、どうやら俺のことはある程度噂にはなっているらしい

今のところ広げてもまずいことはないと思うんだけど・・・

「でもある程度の、上流貴族ぐらいのおもてなしはされていると思いますよ。じゃなければ王妃様直属の侍女がつくはずないですし」

「特例ってのはわかってるつもりなんだが・・・こういうことには少し疎くてな」

向こうの世界じゃこんなメイドがつくなんてことはあり得なかったしね

「そこなんですけど実際どこから来たんですか？」

ま、彼女からしたらその辺は気になるところだろう
身を乗り出して好奇心満々の目で俺を見つめてくる

「ん～、できるだけ他言はしないでね。俺にも何が起こったのかよくはわからないんだけどさ、別世界ってやつ？」

「別世界ですか？それって精霊の世界のことですか？」

彼女は眉をひそめて首をかしげるそぶりを見せる
まぁそういう反応がふつうだよなぁ・・・
こっちの世界でいえば人間とはまた別に精霊という存在がいる
だからか無意識のうちに精霊の世界と混同してしまったのだろう

「いや、俺たちの世界には精霊はいなかったから違う・・・と思う」

「そうなんですかー。帰り方、わからないんですか？」

「うん。帰れるんなら早く帰りたいんだけどさ・・・」

方法が見つからないのが現状
水の精霊にも聞いてはみたがお手上げのようで進展の報告は来てい

ない

「どうやって帰ろうかな・・・」

帰りたいなぁ・・・

ふと頭に浮かぶ親の顔

別れの挨拶は確か「行ってきます」だったっけか？

それとも「おじいちゃんによろしくね～」だったか？

あの時はどうでもいいことだと流していたが、母の軽々とした声だけが耳に残っている

その時はこんなことになるなんて思ってなかったしなぁ

覚悟も何もしていなかった突然の別れ

今頃は行方不明で騒がれているんだろうなぁ

母さん、心配してるだろうなぁ

「その剣」

「ん？」

「その短剣、名前ってありますか？」

「名前？いや、無いけど？もらったばっかりだし」

「へぇ、誰からですか？」

「えっとなんていったかな。赤い髪のえーっと・・・あ、あ、アルレスト？だっけ？」

「副隊長じゃないですか！そんな方からその剣もらったんですか！？」

「え、あー、うん。もらった。そう、もらったんだ。俺は剣の道にいるべきだとか言ってさ。昔はちょっとやってたんだけどさ」

「へぇ・・・あながち初心者でもないんだ。なんなら手合わせしてみる？」

「はい・・・？」

なぜ俺はこんなにみんなから手合わせしようといわれるのやら・・・

訳わかんねぇよちきしょう

でもまぁ、寝起きの運動程度にやるくらいなら大丈夫・・・なのか？

俺はベッドから降り、体をひねる

先ほど安静にしろと言われたことをすっかり忘れた俺は短刀を手に

とる

もう俺が剣道経験者だとは言わないようにしておこうと俺は心の中で誓った

『彼は何処から来たのだろう』

「なんだ、ちゃんと木刀あるじゃん」

俺は手にした木刀を左手で持つ

やはり右利きの俺には多少辛いものがある

右手で持ったところで、どうせやりとりに夢中になってしまえばその不便さに苦しむだろう

なら初めから左手でやってやる。いずれ慣れないといけないしな

「それ、練習用に差し上げます。私予備の木刀をあと2本持っているので」

「ん、悪いな。こういうのって支給とかされてるものなのか？」

「いや、これは一応練習用に私が自分で作ったものです。部隊での通常鍛錬は真剣を使いますので」

鍛錬のくせに真剣使うとか、信じられん・・・

「そういやチルとかいう隊長もそんなこと言ってたな」

「意外にサクラさん来たばっかりなのに人脈があるんですね」

「逆に言えばそれだけ俺は重要視されてるんだろう。こっちの世界の人から見れば不確定要素満載な存在だからな、俺。いつ俺が手のひら返して王様の寝首をかくとか、みたいな心配も無くはないんだろうな」

「え、アヤキさんそんなことするつもりなんですか！？」

「いや、マジに受け止められても困るんだけど・・・。俺にそんな力はないけどさ、アグレシオンってやつらが前にここに攻めてきたんだろ？警戒するのも無理ないかなって」

そう。この大陸中を巻き込んだ大戦争

その発端が突如現れたアグレシオンと呼ばれる者たちによる、侵攻

大陸が唯一、一つにまとまった時代の話である

どこから来たかもわからない彼ら

突如として異世界にとばされてきた俺達

この世界の人たちから見れば、俺達は彼らとどう違うのであろうか？

大陸支配戦争と呼ばれたその戦争はこの国ができるより遥かに昔に起こったそうだ

約半月で大陸の半分がアグレシオン達の手に落ち支配された、彼らの力は人々に恐怖を覚えさせ、絶望という言葉を作り出した

１０名にも満たない、そのアグレシオン達の力はこの世界の人間の力を逸脱していた力を持っていたそうである

まだその時代は高度な魔術が少なく、戦うすべも少なかったと聞くちょうどその時代のあたりから剣という武器が現れたそうである

異国の騎士がこの大地に刀を持ち込んだのが始まりだと言われているがその彼もどこから来たのかはわかっていない

その騎士はこの大陸の現状を知り、１０本の剣を自らつくった

蒼き天を駆ける剣、蒼天駆

天を舞う炎の剣、炎天舞

轟く雷牙の剣、轟雷牙

地に花開く剣、地開花

水の流れと生きる剣、生流水

氷の龍が泳ぐ剣、氷龍泳

白き光りの影の剣、白影光

風の王が奏でる剣、風王奏

音の境を創る剣、創音境

黒き血を喫する剣、黒喫血

剣を授かった１０人の騎士は救世騎士と呼ばれたそうである

１０人の救世騎士はアグレシオン達を見事打ち倒し、この大陸を守り抜いたという言い伝えが残っている

十の聖剣はその後、子孫に受け継がれた物、盗賊によって闇へと流された物、行方のしれなくなった物、王宮に納められた物など、世界中へと散り散りとなっている

俺が前に見た聖天下十剣のうちの一本、蒼天駆を間近に見ている。
その切れ味も同時に

あんな化け物みたいな剣を使わないと勝てないような

それほどまでに強いアグレシオン達は何百年も後の、この後世にまでも恐怖の象徴にもなっている

今思うとよく信じてくれたよな。アグレシオンじゃないって

そうじゃなかったら今頃勘違いされて殺されている可能性も捨てきれない

いや、まだ聞くところによると俺をそいつらと一緒にしている者達も居ないわけでは無いらしい

そういった者達には気をつけろとファルアナリアさんやセレシアさん、ティリアさんからまでも助言をもらっている

となるとやっぱり監視とかつけられてるんだろうなぁ

「確かにそうですけどアヤキさんがもしアグレシオンならたぶん私は殺されて、今頃はこの国は落ちていると思います」

「んな馬鹿な」

「いえ、過去の記録によるとその昔存在していた大国、アーガルバム聖帝国は、えっと大陸の北方に位置していた国なんですが、そこは一人のアグレシオンの襲撃にあい、一日で壊滅まで追い込まれたと聞きます。でもまぁまだ魔法が正確に確率されていない時代だったんですけどね」

「・・・本当に俺が今皆から疑われてないのが奇跡に感じるわ」

そんな恐ろしい前例があるのだ。警戒しない方がおかしい

これはやはりティリアさんが俺の監視役と見た方が良さそうだな

それならば王妃直々の侍女が来たことにも納得がいく

それにアクアサンタ騎士団の隊長と副隊長との早期の接触

結果的には魔術師団の隊長とも接触している

精霊の言うことが無かったらまだひどい状況だったんだろうなぁと思う

今思えばこうしてあの二人から実際に斬り合いをしようと言ってくるのは俺の力を試そうとしているから出はないのかと思えてきた

事実、副隊長とはすでに一戦交えている

右腕の事や俺の力量などが調べられた、と言ったら聞こえがいいだろうか？

んー、となるとファルアナリアさんは俺を信用しているとか言っていたけど、やっぱり不安はぬぐえなかったって事なのかなぁ・・・？

俺が力を隠しているとでも思う、ま、警戒すればそう思えてくるか

用心には用心をってな

「ん～、こうして考えてみると俺ってやっぱりイレギュラーなんだよな・・・。あれ？さっきも言ったような・・・。ええぃ、今はそんなこと考えても仕方がない、やるぞ！」

俺はもらった木刀を叩き折る

折れてとがった断面を俺は地面で思いっきり削る

多少のとんがりは消えたがまだとげとげしい

「えっと・・・何をしてるんですか？一応あげるとは言いましたけど・・・」

「俺は今はこのサイズの剣を右手で振るえなくてな。ということで俺の獲物は短刀になった。リーチの練習もかねてこれで行く」

「わかりました。ちなみに剣を握ってどれくらいですか？」

「ん、7年だが多少のブランクがあるな。短刀はこっちに来てから握ったしまだ間合いとかもわからんから正直いろいろ試していくしかないかな」

「わたしは剣を握って4年です。ですのでそれなりに戦えるはずです！」

「・・・さっき剣適当に振り回して無かったか？」

「・・・気にしないでください。あのときの私は騎士じゃなくて女の子だったんです」

少女に対して剣を向けるのは忍びないが俺は折った二本の木刀を構える

一定の距離をとり、俺は木刀を握る

こうして見ると本当に刃が小さい

これは受け止めるより避けた方が無難かなぁ
力も直接伝わるし、右肩への衝撃は出来るだけ避けたいところだ

「では、仕掛けさせてもらいます！」

「おし来い！」

少女は木刀を右手で逆手に持っている
左手を柄の尻に添え、体は低く屈むようにしていた
地面を蹴り、一気に小柄な体格の少女は加速する
妙な構えをするなぁと思っていた彩輝は駆け寄ってくる少女のスピードに驚く
体が軽い分、体を動かすのが楽なのだろう
弾丸のようにつっこんでくる少女が持つ木刀は右の脇のあたりにある
俺から見て振るわれる方向は左から右
初撃が俺に襲いかかる
ただ、早いとはいえ、見切れない早さではなかった
今の俺の目はあの剣道少年だった頃の自分を思い出すかのようにそ

の太刀筋を目で追った

あの体格だからといって油断はできない

少なくとも彼女は４年間、重い剣を握っていたのだ

だから、リーチの長い相手の剣を避けるのは不可能と踏んでいるので両手で防ぐ事を考える

両手ならば、あのスピードと筋力を耐えきる事ができるはずだ

ガンッ！と二つの木刀が彼女の木刀を受け止めた

予想通り

おそらく片手だったならばこの木刀はあっけなく飛んでいったはずだ

両手にびりびりとした感触が伝わる

先ほどとは違うその一撃に、思わず驚きそうになってしまう

勢いを止めたことにより、俺は片手の木刀で支えきれると判断

思い切って右手の木刀をはなして彼女のへと素早く手を伸ばす

人差し指が彼女の肩に触れる

そこで少女は俺の視界から消える

俺の双眼が彼女を追いかける

これはまずいな・・・

俺の真下から、一発の肘鉄が飛んでくる

全身をバネのようにしたその少女は思いっきり右手の肘を突き出して彩輝の顔を狙う

とっさに彩輝は伸ばした右手と木刀を持つ左手を顔の前まで持ってくる

後から考えれば良く間に合ったという気もするほどのタイミングだった

自然と交差させる形になり、両手に重い一撃が腕に直撃した

とはいえ、少女の体格からして、その一撃を余裕で耐えきる事ができた

「いっ・・・てえええぇ!?」

その瞬間、予想外に右の弁慶の泣き所を思いっきり蹴り飛ばされる俺

交差した腕の隙間から、にやりと笑う小悪魔が一匹

尻餅をついて右足を押さえる俺にその小悪魔は何故か木刀から手をはなした

木刀が地面に落ち、見上げている俺は引きつった笑みを見せることになった

理由はわからないがこれはおそらくマナが収縮していく感覚だと思う

第2修練場を、膨大な白光があふれ出した

アルデリア王国、王都アクリス

その中央に位置する場所にたつアルデリア城

その会議室に、国の重要人物が集まっていた

王族、それと武官、文官、それに加えて国内外でも力を誇るアルデリアの3大貴族の当主が参加している

ざわついていた彼らはとある人物の登場で一斉に静まる

一つの大きな机の周囲に彼らが座っており、最後に現れた国王、ヴァルナンディア・エルアモ・キルト・アルデリアが一際高価そうな椅子に座る

「この度、忙しい中集まって頂き、誠にうれしく思う。ただトルロ

イン家のご当主は現在病床についているため不在なのが残念である。そのため息子であるエフレル殿に来てもらった事を理解してほしい。では早速話を進めようか。たのむ」

「進行は私、ファルアナリアが致します。よろしいですね」

ファルアナリアが周囲を見回し、会議室に集まった者すべてが無言でうなずく

「では・・・。今回集まってもらったのはほかでもありません。異邦人、サクラ・アヤキという人物の事です。このことはすでにここに集まった者全員にお話ししてありますが、一度皆さんの意見を聞きたくこの度は招集をかけさせて頂きました」

「たしかに、話を聞いてから彼の事は我々も気にしております」

アルデリア王国の3大貴族の一人がそう言うと隣に座る貴族もうなずく

「危険で不確定すぎる要素ですな。私としての意見は一刻も早くすぐさま死刑台に送るべきかと・・・」

「私もそう思いますな。歴史に刻まれたあの大惨事をお忘れですか？大陸の半分があの数名のアグレシオンによって支配されてしまった事を」

はじめに口を開いたのは3大貴族の一人、初老の男性である

この初老の男性はロートベルト家の当主であり、現在3大貴族の中ではもっとも力を持つと言われている

その隣に座るのがそれよりも少し若い中年ほどの男である

彼はレディアル家と呼ばれる貴族の当主である

彼もまた金髪であり、たいそう煌びやかな服装を着ている

この二つは昔から続く有名な家柄である

そしてその横に座る若者はトルロイン家の子息で、ほかの二貴族と違い、赤髪の家系を持つ珍しい貴族である

アルデリア王国の貴族の多くは金髪碧眼の持ち主であり、彼のような貴族は周りの貴族から若干省かれたりすることがあるのだが現当主であるシャルクスは大商人として他の貴族との関わり合いが深いのである

売り手であるためか一歩下手の接し方をし、派手な行動を慎んでいたため、これまで他の貴族からはそこまでマークされていなかったりもした

さほど貴族達は気にかけていないとはいえ、今年に入り前3大貴族の一家、バンデルト家はとある事件により没落貴族と化したため、トルロイン家が国王の推薦により成り上がったのである

それまでノーマークだったトルロイン家が三大貴族になった事で他の貴族達が猛反発

やることなすことすべてに他の貴族達がいちゃもんをつけてくる始末

現当主であるシャルクスが病気で倒れ、それを好機と見た貴族達は一斉にトルロイン家を没落させようと裏でいろいろと働いているのだがそこは一枚トルロイン家が上手であった

元々商人である貴族なために、世渡りはそこらの無能な貴族達よりも遙かにうまく、また貴族以外の者との交流が多かったためにそういった場所からの手回しも上手くいかなかったらしい

お金で買えないものでトルロイン家はその立ち位置を確定させたのだ

そのトルロイン家の若い当主が口を挟む

「それは軽率すぎませんか？僕たちが集められたのはサクラ・アヤキ個人に対するものであって、彼がアグレシオン達と同じと考えるのは判断が速すぎろと考えますが」

「だがしかし彼がアグレシオンと同じだった場合の事を考えると一刻も早く殺すべきではないのかね？」

「たしかにそうだった場合はそれはもう取り返しのつかないような被害となるでしょうね。しかしそんな力を持っている相手をそもそも拘束し、処刑する事など可能なのでしょうか？そしてそんな彼がタイミングを見計らってこの国を落とそうとしたところで、彼を取

り押さえる事ができるのでしょうかな。その辺の事は私より聖水騎士団の隊長さんのほうが詳しいかと思いますが」

話を振られたチルは面倒くさそうに頬杖をついてその目を紅い髪の貴族に向けた

「取り押さえるのはいいけれど、それよりも私が乗り気じゃないわね」

そうため息をつく彼女にレディアル家の当主が声をかける

「たとえ貴殿が隊長だといえども、そのような自分勝手な考えで物事を決定するのはどうかと思うがね？」

「そりゃ上の決定には従うわよ。あくまで私の気分とか考えの事だからその辺は無視していいわよ。でもやはり、実際に彼がアグレシオンならすでにこの国は落ちていると考えるべきよ。アーガルバム聖帝国がどうなったか知らない訳じゃないでしょう？」

「だが油断させて好機をうかがっているのかもしれぬ。それに当時と今とでは魔術や兵の質は明らかに向上しているのもまた事実」

と文官の一人が反論する

そこへアルレストがチルの意見に乗っかった

「俺は隊長と同意見だ。あいつにはたいした力は無い。俺やチルなら余裕で取り押さえられる力だ。魔力こそは大量にためこんでいるみたいだが・・・扱う統べも知らない。剣をあわせてみて俺は悪い奴では無いと思った。これもあくまで俺個人の意見だが」

実際に手合わせをしたがあれが彼の本気なのは一目瞭然

一度反射的な動きを見せたことに驚きはしたものの、所詮その程度力を隠す気なら、ふつうはあんな真似はしないと彼は付け加える

「右腕をけがしている事から見てもそれほど危険度は無いと俺は思う」

その発言に、ファルアナリアとセレシアはぴくりと表情が変化した事に気づいた者は居なかった

「手を抜いている風には見えなかった・・・と？」

「俺の考えです。どう思います？シオンさん」

アルレストはここで話を魔術師隊の隊長であるシオン・ウェンヴァーに振る

「私は・・・判断しかねます。あの魔力の量は、力無き者が持つに値するとは思えない量。でも彼の体質がマナを集めずとも魔力をそのまま取り込めるという体質で、彼が魔術の使い方を知らないという報告は一応受けている」

「異常ってことね。特異体質だけど、それは彼の本質とは関係ないだろう？」

チルがまたもや割って入ってくる

「力があるからって、彼が力の使い方を知ってるとは限らない。でも彼の普段の様子からはどうもそれほど脅威に思える要素がそれぐらいしか無い」

「その特異体質、アグレシオン達が使っていたという能力の一種とは考えられないのか？」

アグレシオンは一人一人魔術とは別の妙な能力を持っていたという言い伝えが残っているのは有名である

彼がそのような疑いをかけられるのはさけられないだろうとは思ってはいたが

「あり得ますね。元々この世界の住民では無いのですから。そのよ

うな体質を持っていても不思議ではありませんしね」

「ですがそれ以外の能力があると確認をとったんですか？」

「むぅ・・・」

「現状ではとれていない。と言ったところですかね」

「そういった体質なんだ。膨大な魔力を持っていることの説明はつく。それにそんな悪そうな奴には私は見えなかったがな」

「根拠も無い事を言わないでくれませんか？」

「まぁまぁ、いったん落ち着こうではないか」

ここで国王であるヴァルナンディアが話し合いを中断させる

「一つづつ解決していくべきだろう」

「申し訳ございません。ついつい感情が先走りしてしまいました」

そういって頭を下げたのは貴族の二人

チルも無言で椅子に座る

トルロイン家のエフレルはあまり発言をしなかったので座ったまま会議を傍観していた

「ふぅむ・・・ではまず最優先に考えなければいけないことはなんだ？」

「それは・・・」

「アヤキ・サクラの信憑性」

「珍しいわね、シオンが自分から発言するなんて」

隣に座っていたチルは驚いてついつぶやいてしまったがこれは本当に珍しかったことだからだ

自ら発言をするのは本当に珍しいたいていは聞かれたことに答えるのが彼女の会話のスタイルだからだ

「信用できるかはわからない。だけど、悪い人じゃ無いと思う」

「そう。奇遇ね、私もよ」

と、騎士団長と魔術師団長が意見をそろえたところで、反対側の席では議論が白熱していた

「信憑性？そんなもの、信じるに値すると思うのか？確証もなく何

故そのようなリスクを冒せる？」

「そうね、確かに証人無しでは彼が何をしにこの世界に来たのかわからないわね」

ファルアナリアがそこで口を挟む

「だけど、私と娘は事実この目で精霊台より召還されるところを見ているのよ」

「いやしかし、この世界の住人やアグレシオンが何らかの手を使ってその場に転移してきたと考えられないのかね？」

正直そんなことできるわけがないというのが王族や臣下達の思うところだ

一応この大陸には転移魔法という魔法がある

とはいえそんな転移魔法を使う術者はほとんど居ないうえ、表沙汰にはしていないが城の周囲には転移防止の結界まで張られている

場所を転移させるということは遠く離れた地へと現れた時点で移動距離の時間が短縮されることになる

移動分の時間を零と出来る、それはつまりその転移の一瞬のうちに移動した距離のぶんの時間を体に受ける事になる

だがその距離を時間で表すことは不可能

速く走れば短くなるし、ゆっくり歩けば長くなりその測定は計算すら意味を成さない

転移魔法を使えばその代償を受けることになる

代償は自身の時間を感じることが出来なくなること

世界の時間軸からずれたその体は、その時間軸に沿って起動しなくなるのだ

とはいえそんな無謀なことを言う彼ら貴族としては彼のような存在は早めに処分したいと考えているのだろう

彼の話では彼の世界では貴族制度をとっていないという話が彼らの中で広まっている事もあり、彼がこのように王族や武官を見方につけてしまえば、もしかしたら・・・という考えがあるようである

保身のために他者を蹴落とす

最近の貴族も質が落ちたわね。と考えるファルアナリアであった

が、トルロイン家は別のような感じである

発言を控えて出来るだけ事態の収集をしているのではないかと思うほど彼はジッと座って事の成り行きを見守っていた

むしろ彼にはどちらかというと、いろいろと彼からあやかりたいのでは無いのだろうか

異国の文化、道具、文明等、商人にとって彼はまさに宝箱のようなものだからだ

しかもそれが自分たちより進んだ文明の世界から来ているとなればなんとしてでも聞き出したいだろう

聞くところによると生き物を使わなくても人を運べる乗り物があったりするそうである

おそらくは、自分たちよりも遙かに進んだ文明を持つ世界から来た人間なのであろう

それに反して、あまり不便といった感じの顔を見せないことにも少々気になるが

「証人は一応います。彼が本当に別世界から来たという証人が。おいでください、水の地の守護精霊様」

特別に用意した術式を刻んだ符を取り出し地面に設置する

ファルアナリアがそう言葉にするとかちりと音を立てて魔法陣が展開された

言葉がキーとなっているこの精霊を呼び出すための特別な召還符が使えるのは精霊と契約を結んだ者だけである

この地を納めるのは国王である夫なのだが、実際にこの血筋を受け

継いでいるのは私である

直系にのみに扱えるその精霊の召還を私は行った

魔法陣からゆっくりと半透明の存在が現れる

「よんだかえ?ファルーよ」

「えぇ。この者達に何故サクラ・アヤキがこの世界に来てしまったのかを聞かせて差し上げてください。私の口から言うのはあまり意味をなさないもので・・・」

周囲がざわつく

それもそうである。精霊など一生に一度あえるかどうかの代物である

しかもそれもごく限られた者達にしかあえる機会は訪れず、一般の民衆には一生あえない者がほとんどだ

精霊がこちらの世界に姿を現すときは、契約者の名の下に召還される、あるいは精霊台を通して精霊の意志でこちらに来るかのどちらかである

後者はほとんど無いと言っても過言ではない

つまり、ほとんどが契約者に呼ばれて出てくるときである

精霊の権力は国王にも勝ると言われており、神の象徴に近いものと

されている

この場に居る者全員が頭を下げる

「ふむぅ・・・別によいが何か報酬はくれるのか？姿を維持するのは疲れるのだが」

「そうですね。王城専門の料理長が作ったお菓子などはいかがですか？甘くておいしいものがそろっておりますよ？」

ファルアナリアがこの精霊が甘いもの好きだったことを思い出す

「よし、よかろう。出てきた甲斐があった」

ポンと手を打ち、にやりとにやける精霊はお菓子と代償に情報を引き渡す

「確かにサクラ・アヤキは異世界から来た人物である。まぁ以前来たアグレシオン達とは別口だがな」

周囲が再びざわざわとなる

ファルアナリアも驚いて追求をしてみた

「それはいったい・・・？」

「異世界が、一つと言うことではない、といったところかの。ここもその一つ。今現れた彼らが居た世界は、過去に現れたアグレシオンと呼ばれて折る者達とは違う世界ということだ。これでよいかの？」

大陸中を回ってもこの情報はどこにも残っていないだろう

衝撃な事実を意外と軽々と教えてもらったことに困惑する一同

ファルアナリアも彩輝が現れるまでは別の世界があるなんて考えもしなかったのでさらに多くの世界があるとなれば考えを改める必要がある

「あの・・・何故あのときそれを早く言ってくれなかったのでしょうか？」

「聞かれなかったからの」

一同しーんと静まりかえる

精霊は頭にはてなマークを浮かべながら空中に浮遊している

「ん？何かおかしな事を言うたか？」

「というわけで、今日の議会は終了だ」

国王が手を叩いてお開きを宣言する

「ですがしかし・・・」

まぁもちろん渋る貴族達も居るわけで

「彼は妾と契約をした。それで十分な理由になると思うが、ほんの少し前まではこの国は精霊を神とも崇めていたように思うのは気のせいだったかの？」

そこまで言うと精霊はスッと姿を消した

「では、会議はこれにていったん終了とさせて頂きます。彼の処遇はまた後ほどこちらからお伝え致します。意見のある方はいつでもいらしてください」

顔をしかめる貴族二人は立ち上がり渋々といった感じで退席していく

それに続いて文官やら武官が退席する

貴族達はアグレシオンではないと精霊から直接聞いてしまったことで反論の余地は無かった

彼を信頼した武官達数名も内心若干ホッとした部分はあっただろう

多少なりとも彼を警戒して接する必要があったであろうから

だが少なくとも侵略のために現れた者達でない事が精霊によって約束されたためにその心配は無くなった

そうして皆が退室していこうとドアに近寄ったとき、白銀の魔力がドッと城全体を覆い尽くした

びりびりとした感覚の中、それを感じ取った者はあーあ、またか。と思うのである

「おいおい、またミーナちゃんが魔法ぶっ放したんじゃないのー？」

「だな。次は誰が犠牲になったのやら・・・」

「誰かもうちょっとまともな先生つけてやれよ」

そんな会話が武官達の中から聞こえてくる

「えと確か騎士団の３番隊長のえーっと、娘さんだっけか？」

アルレストがつぶやく
隣を歩くチルがにこにことした顔でうなずく
「なんだ、なんか知ってるみたいだな」
「あぁ、まぁねー」
にこにことした笑いが、にんまりとした笑いに変わる
ドアを開けて退室したところでアルレストはちょっとした考えに行き着く
「お前・・・もしかして」
「んー？何？」
「わかっててやってるな・・・」
小声で言ったにもかかわらずちゃんとチルは聞き取れていたようでフフーンと胸をはった
「当たり前よ。おもしろいことは何でもやって見ないとね～」
「あーぁ、同情するよ・・・」

アルレストもチルにはいろいろとひどい目に遭わされているためかそういったことには妙に勘が働くのである

「親と子供にぼこぼこにされる。うん、いい絵図～！」

飛び跳ねてチルは職務に復帰していき、その後ろ姿を見ながらアルレストは項垂れた

あの少年とはいい理解者になれそうだとふと思ったのである

『8人の囚人』

暗い部屋に最後に通されたその女性は腕に石の枷をされていた

白いローブを纏って少女は無表情に進む

自動であいたドアが締まり、招待された者達がすべてそろう

最後にやって来たその女性は17、8ぐらいの年頃で白い髪が足下すれすれまで伸びている

美しい見た目に反して、睨むような、それでいて諦めるような目で部屋を見渡す

「なんだぁ？ゲッカも呼ばれてんのかよ！？」

同じく白い髪をした男がギザギザの歯をちらつかせながら聞いてきた

男は白い髪で顔を隠しており、表情が読み取りづらいがニヤリと笑っているのがわかる

その男も同じようにゲッカと呼ばれた少女と同じように枷をされており、机に座ってこちらを見ていた

頭に何十にも包帯を巻いており、服のサイズが体の何倍もあるように大きく、裾や袖が地面にだらりと垂れている

「・・・悪い？」

「べっつに～」

机の上に足を上げ、そっぽをむく

暗い部屋には多くの機械が置いてあり、その機械が発する光のみがこの部屋を照らしている

とはいえ、小さなランプのような光のため、明るいとは言えないだろう

長方形の長い机を取り囲んでいるのは今来たゲッカという女性を入れて９名

奥の方に居る者の顔はすでに暗闇で見えない

「収集に応じて頂き、光栄ですよ皆様方」

ゲッカが椅子に腰掛けると、主催者らしき男が声をあげた

「ご託はいいからさっさと用件を話したらどうなんだぁ？」

さっきの男がケケケと不適に笑いながら男に向かって言い放つ
ほかの者達は静かに傍観しているところを見ると、あの男は落ち着きのないその性格がより浮きだってみえる

「今回、君たち第一級囚人達に来てもらったのはほかでもない」

ここにいる者達は皆、ここに誰が集まったのかを知らされては居ないだが、この顔ぶれを見れば一発でわかる
それほどに有名だからだ
この国で捕まっている囚人達である

それも、国でもっとも危ないと言われる第一級囚人、その全員がこの小さな会議室に集められている
ある意味国内もっとも危ない場所とも言えなくはない

「君たちに頼みたいことがある」

「おいおい、ふざけんなよ～。俺たちを長年牢獄に閉じこめやがったくせによぉ、頼みを聞いてほしいってか？それなりの報酬はあるんだろうなぁ？」

机を踵でドンと叩いて男は髪で隠れた目で唯一囚人じゃないその男に向かって言い放つ

ほかの囚人達も同じような事を考えているのだろう

「成功した暁には、君たち８人の犯罪レベルを下げ、準２級囚人としての待遇にしてやろうじゃないか。さらにその１０年後には監視付きだが釈放してやろう。はれて身柄の自由という報酬を差し上げようではないか。それと、望む者には可能な限りのお金やその他生活の援助をさせてもらうよ」

「これまた大きく出たな」

今度は長身の男が呟いた

顔には継ぎ接ぎの痕があり、その男にもやはり手枷がしてある

この手枷は能力封じの力がある希少な石を削り取って作られたものである

この世界では能力者というのは珍しいものではない

世界の人口の約半分ほどの人間が何かしらの能力を持っている人間で、その能力は生まれながらにして政府に登録する仕組みになっている

この能力と呼ばれるものは一人として同じ能力は無く、約数百年前から発生し始めたと言われている

微々たる能力から、強力な能力などがあり、すでにその能力の発動メカニズムはすでに解明されているがそれを規制するには限度がある

その能力を例外なく封じるのがこの封石の手枷である

どのような能力も、この石の前では効力を失うのである

「それを民間が許すとでも思っているのか？」

継ぎ接ぎ顔の男の言う通り、そんなことをすれば民衆は自分たちのような凶悪犯罪者を許すとは到底思えない

「その辺は何とかしよう。そもそも君たちが気にすることとは思えないのだがな」

「まぁな」

「で、本題を話してもらおうか。何する気だ？他国の王様でも殺して戦争でもしろとか？」

継ぎ接ぎの男はめがねをしており、その落ちてきた眼鏡をくいっと鼻の上に持ち上げる

「他国の領土には違い無いが、先代達が築いたこの友好関係を崩してみろ、周囲を囲まれているのだぞこの国は。４つの国を敵に回すことになり、物資の補給ができなくなるのは必然だろう」

「そんなもん、レテスタの能力使えば一発だろうが」

頭に包帯を巻いた男はギラギラと歯を見せて話す

レテスタと呼ばれた女性は男の後ろで彼らの会話を書き写している

その彼女は書きながら口を開く

「私の力はそんな長距離は持たない。せいぜい５キロから１０キロが限界」

「あっそ」

「というわけだ。さて、本題に移るぞ。いいか、よく聞いてほしい」

男が改まって立ち上がると一つの丸めた大きな紙を取り出す

その紙を転がすようにして机の上に広げる

「あ？なんだこりゃ？」

「とある大陸の地図だ」

「ほほぅ、見たことない地図だが？」

しばらく剃っていないように見えるひげをゾリゾリとさわりながら一人のおっさんがつぶやく

たしかに、この世界のどこにも無い大陸である

「記憶力に自信はあるんだが・・・ここは知らない場所だなあ」

「もしや現段階で発見された世界には存在していない大陸とかか？」

立って地図を見下ろしていた者達もある程度その地図を眺めると座っていった

「ご名答。この世界にはまだ発見されていないといわれる新世界のものだ」

「ほぅ。ということは、見つけた（・・・・）と？」

「我々はこの世界を第7世界、セプティエムと呼ぶことにしている」

「ちょ、待てよ。おそらくその新世界を発見したのはテリアだろうよ。だが、今の今まで何で発見できなかったんだ？これまでは能力が使われてからは短期間で見つかったんだろう？」

この世界で言う世界発見者はただ一人、テリエという女性であることはこの中の誰もが知っている有名人である

その能力は、異世界発見

文字通り、自分たち以外の世界を見ることができる能力である

彼女が正式に政府の人間になったことは、囚人になって監獄の中にいても聞こえてくるニュースの一つである

彼女が政府について、新たに見つかった6つの世界はおよそ3日ほどで見つけられている

が、今回見つかったそのセプティエムと呼ばれる世界はそれから約2年ほどがたっている

ずいぶんと時間差があるではないかと男は言った

「妨害している者がいてね」

「それは、この世界でか?それともそのセプティエムとかいう世界の方か?」

「セプティエム、には違いないがその周囲には無が取り巻いていてね、発見が非常に困難だったこともあるが、その無すらも発見されないようにしている生物がいてね。なんとその中にすんでいるのだよ!驚きの連続だよまったく」

「可能なのかクーフォロンド？」

おっさんがつぎはぎ男にむかって聞く

どうやらこの継ぎ接ぎ男はクーフォンドと言うらしい

クローフォンドは首を軽く傾げる

「さぁな。無とは何も存在しないということだ。その中に何かが存在する時点で、それは無ではない。というより、無として存在できなくなるはずだが」

「じゃぁそれは無とは違うってことか？」

「現段階では実物を見たわけでは無いからな。断言はできないが・・・おそらくその生物とやらが無を固持、永続させているのではないか？」

「どうやらそれは人型をしているようだが、人間とは違う存在のようだ。そして、その無が包み込んでいる世界は二つあるそうだ。というわけで私たちはもう一つの方の世界をユイットと名付けた」

「二つ・・・ねぇ」

「だが何で今になって発見を？」

司会を務めるその男はそれだよそれ！といった感じで立ち上がる

「実はね、古い古い文書にはすでにこのセプティエムを発見したという記録が残っていたのだよ！そこにこの地図と座標が残っていてね」

座標特定はもちろん、大陸の地図まで残っているというのは意外であった

つまり、この地図を残した能力者はおそらくテリアよりも異世界発見能力が強かったということになる

いや、だが二つとして同じ能力は無いはずだから厳密には少し違う能力なのだろう

「あれ？おかしくないか？だってセプティエムとやらの世界はこれまで見つかってこなかったんだろ？なんで記録なんかが？」

男は一冊の古い本を机の上に置く

「この記録自体、禁断書庫に眠っていたものでね、私も手に入れるのには苦労したさ。それこそセキュリティを突破するために何人を犠牲にしたことか・・・」

「その代償がその一冊の本ってわけか？」

「あぁ。ここには2級犯罪ランクの9人がそのセプティエムに向かったことがわかった。ただ、それ以後の情報は記載されていない」

「なるほどねー。で、どうすればいいわけ?」

「単刀直入に言おうか。このセプティエムを、制圧して欲しい」

「なるほど。俺たちは捨て駒ってか?行けば死ぬって事だろ?」

なかなかに的を得ている答えである

未知の世界にたった9人で挑み、しかも制圧してこい。と言われても無理だと考えるのが普通である

「君たちは一生を牢獄につながれたまま生きる気かい?」

「ぐ・・・だが、現に前回の隊は戻って来なかったんだろう?」

「何年前の話だと思っている?数百年も昔、ここまで能力者が力を持った時代があったか?」

「そういわれりゃそうだがよぉ、一応これが外に漏れたら大変な事になるんじゃないのか?」

「もちろん。だからこうやって秘密裏に進めている」

「バカ言うなよ。そりゃぁ異世界討伐隊の編成はこれまで秘密裏に

囚人達から力のある奴を選んで送り込んでるらしいが・・・。だけどよぉ、第3世界に行った3級囚人がどうなったか覚えてるか？」

「あれは悲惨な事故だったな」

第三世界

聞くところによると、光をエネルギーに変える力が発達した世界だという

その世界に入るまではその世界がどのような文明を築いているかはわからない

ある意味ギャンブルのようなものだ

劣った世界ならたやすく制圧でき、発達した国ならばやられてしまうのが落ち

第3世界はある程度の文明を持ち、光に関する扱いはどの世界に置いても最先端を行く国だった

故に、突入した囚人達は一瞬で防衛センサーに引っかかり、突入１０秒後に、何キロも離れた場所から光線を浴び、蒸発したという噂が広がっている

男が否定しないところを見ると、どうやら本当のようだが・・・

「国を治めるだけじゃ飽きたらず、世界までも手中にしたいのかね

ぇうちの国王は」

「人間、そんなものさ」

「言えた義理かい？お前も同種のくせに」

「そうだな。だが、やるかやらないかは自由だ。行きたくない奴は残ればいい」

「ちっ、いつ殺されてもおかしくない状況を選ぶか、階級ダウンで釈放をとるかってことかよ」

「もちろん、行った場合はリスクを伴うがな。さて、採決を行うが異議のあるものは？」

一同静まりかえり、誰も手を挙げない

「では採決を行う。あくまで個人の意志を聞くものだ。周りに流されぬようこの紙に〇か×を書いてくれたえ」

彼らの前には来る前から置いてあった白い一枚の小さな紙、それとペンが置いてある

手枷をさせられている状態ではあるが、ペンを握り記号を書くことぐらいはたやすい

「では皆書いたようだし集めるぞ」

男は皆がペンを置いたのを確認すると人差し指をくいっと自分の方へやる

すると紙はひとりでに男の前にたまる

その一枚一枚を見ていき、見終わるとにやっと笑う

「全員参加、という事でいいんだな？」

「はっ、こんなところからいい加減出してくれるんだ、これ以上のおいしい話はねぇよ！」

「ツキナは、返してくれる？」

ゲッカがつぶやく

「君たちの武器は出発と同時に返却しよう。厳重に保管してあるから心配はいらない」

「なら、いい」

「一ヶ月後くらいには準備も整うはずだ。それまではこれまで通り生活してくれ」

「了解りょうかーい。じゃ、マイ牢獄に帰ってもいいか？」

「ご自由に」

男はそういうと囚人たちを残して一人で勝手に部屋を出て行ってしまった

こうして最初の集会は終わりを告げる

「悪気は無かったんです。すいません」

「嘘付け」

俺は覚えている。あの小悪魔の笑顔を

あれは絶対に悪気があっただろうという笑みだ

医務室の白いベッドに横たわる少年を見下ろす女性が二人

チルとミーナである

俺は再びベッドの上にいる

「病み上がり？病気じゃないから違うな・・・。いや、目覚めたばっかりで体動かしたかっただけなんだ。なのに・・・」

「まったく、また本気で魔法をぶっ放したのかお前は」

「も、申し訳ありません・・・」

ゴツンと頭を軽く叩かれミーナはうつむいており、声のトーンも下がっている

またってなんだ？前にもやらかした事があるのか？

「なーにいってんだよ。こうなるってわかってたでしょう隊長」

いつのまにかアルレストがドアを開けて入ってきた

え、ていうかわかってたのかこの人？

ジッと俺がチルさんを見つめていると彼女はじっとりと汗をかき始めた

その様子を見る限り、わかってたってことでいいんだよな？

退路はアルレストが塞いでおり、逃げ場を失っている

「さ、ミーナちゃん。何を言われたかこのおっさんに話してみろ」

「え、あ、えっと・・・・・」

ミーナの顔がチルとアルレストをなんども往復する

俺はピンときた

「問題ない。後は俺が何とかするから」

「えと・・・あの・・・アヤキさんを～・・・えっと、そのチル隊長に命令されまして・・・」

「何を命令されたんだい？」

「えっと・・・」

チルの顔を見るが彼女の顔はすでにすべてをあきらめたような、そんな絶望感たっぷりな顔になっていた

「えと・・・彼は強いから、えと・・・私の代わりに本気で戦って欲しいと・・・」

「あ、あ、なるほどね」

ピキリとこめかみに浮かぶ血管

ゆらりと立ち上がろうとした俺を見てあたふたし始めるチルだったが、退路はすでにアルレストさんにふさがれており・・・

チルさんは迷ったあげく、俺がアルレストさんにもらった短刀を手に取り

「あー、あんなところにー！」

と、大声かつ棒読みに叫んでアルレストの後ろを指さす

ただ、誰一人そちらの方向を向かなかったがチルはそんなことお構いなしに脱兎の如くベッドの上を飛び越え、パリンと窓ガラスを割って外へと飛び出していった

お前は何処の怪盗だ

てかここ何階？自殺じゃないよなたぶん・・・

「えーっと窓の修理費銀貨2枚、それと職務放棄による代理人への

休日出勤の給料分を給料から引いてっと・・・」

アルレストさんはなにやら計算をしている

あの人なりの仕返しのつもりなのだろうか？

地味に怖い

「職務放棄もいいとこだな。ったく。で、どうする？刀、取り返しに行くか？」

「えっと、あの、仕事とかあるんじゃないですか？」

「今日の俺の役回りは城下の見回り。それと強いて言うならお前の護衛も兼ねることもできる」

「迷惑じゃ無いですか？」

「見回りの小隊の方に別行動するとでも言っておけば大丈夫だ。第一お前あいつを追いかけられないだろう」

「そのうち帰ってくるんじゃ無いですか？」

自分で言っておいてなるほどと思うのだがたしかに待っていればいつか帰ってくるはずである

それにわざわざこの倒れた俺の体にむち打って外出する意味が・・・

あれ？

俺は自分の体が思った異常に軽い事に気がつく

「あぁ、それか。お前、自分の体質の事忘れたか？」

「え？あ、えっと・・・魔力の吸収？」

「そ。つまりお前はミーナに食らった打撃の数十倍もの威力の魔法の魔力を吸収したわけだ」

「・・・つまり？」

「あー、そういやまだ話して無かったな。ミーナの魔力はちょっと特殊なんだ」

横で話を聞いているミーナは突然自分の話題になったことに驚いている

「この子の力は白銀魔法という特殊な属性の魔法を使えることにある。そして彼女が使う魔力には癒しの力が含まれているんだ」

「それで俺は回復したと？」

「通常ならそうはならない。この子はまだ未熟で扱い方を知らない。故に魔法を使おうとすると魔力が暴発して回復どころかその魔力の勢いで吹き飛ばしてしまうレベルだ」

「へー。だからこんなにも体の調子がいいのか」

「おそらくな。専門ではないからその辺は医療班か魔術師に聞いた方がいいけどな。魔法剣士は使いこそするが詳しくは知らないからな」

なるほど。使い方はわかるがその詳しい仕組みは知らないということか

パソコンを使えても作り方は知らない。みたいな感じかな

ふむふむとうなずきながら彩輝は仕方なく立ち上がる

「お前は城下の下見に行く予定だったんだろ？」

そういえば、と俺は思い出した

「あ、そういえばそうでしたね。それじゃぁ行こうかな」

「よし、じゃぁ下の正門で待ってろ」

そう言ってアルレストさんは振り返ってドアに手をかけた

「あれ?アルレストさんは?」

「なに、ちょっと断りを入れてくるだけだ。すぐ行く」

「わかりました。ミーナちゃんはどうする?」

「え、私ですか?私はいいです。まだ日課の素振１００回も終わってないので」

あー・・・俺が修練場に行ったときこれやってたのか

たしかに一日にそんなに剣振ってたのならあの力の強さも納得がいく

さーて、俺も下に行って待つとするか

３人は廊下に出たところでそれぞれ分かれた

城下かぁ・・・どんな感じなのだろうかと期待をしながら彩輝は城の階段を下りていった

『城下見学』

「すごいですね。全部見たこと無いものばっかりです」

俺は見たことのない未知の食べ物や商品を前にして目をきらきらと輝かせていた

城下に降り、自分が住むという第４地区へと足を運ぶ

第４地区は半分が居住区、もう半分が商業区となっており、活気があふれている

王都の第１地区が王城、精霊殿など国の中心部

第２地区は上級貴族

第３地区は下級貴族

第４地区は商業区と居住区を兼ねている

第５地区は居住区となっている

民間人が住むことができるのは第４、第５地区のみであり、第４地区に住む者のほとんどが商人である

それぞれ輪を描くように等間隔で区切られている

地位のない民間人として俺が住める限界は第４地区

できるだけ城に近いところにするという意図もあったらしいが、その申し出を俺は断った

そのために地位を貰うというのはなんだか気が引けたからだ

貰えるものは貰っておいた方が良いのかも知れないかとも思ったのだが・・・

「いやー来るときもすごかったけど、やっぱり初めて見るものには興味がそそられるなぁ！」

ここに来るのに俺は乗り物を使った

重要人専用水路があり、そこをダトルと呼ばれる生物に船のようなものを引っ張ってもらったのだ

見かけは亀そっくりなのだが大きさが1~2メートルくらいある大型での生物でその甲羅の上にはダトルを操る人が乗っている

そしてなんといってもそのスピードが凄まじい

モーターボートに乗っているかのような感覚を味わった（モーターボートには乗ったことはないが）

なぜこんなに早いのか聞いてみると

「ダトルは見たとおり水の魔物でな。魔法で水を押して体を進めてるんだ」

というのがアルレストの回答であった

正直ピンと来なかったが、それよりも興味をそそられるものがたくさん目の前にあったため、そちらに意識が行ってしまう

にぎわうその地はたくさんの人であふれかえっている

貴族街と市民地区の境目にある第４地区は多くの人が利用するためにこのような形になっている

外からの物資が届きやすく、またお客が買いやすい場所になっているこの第４地区はいつもこのような感じなのだという

そして第４地区は他の地区に比べて歩道が多いのが特徴である

これは買い物をするのに船だと不便であることと物資の補給のほとんどが陸路からによる事から第４地区は数十年前から歩道が中心の地区になり、水路のほとんどは地下を通り、橋を架けたりしている

もちろん水路専用の場所もあり、船着き場のような場所も用意されている

「ほら、あいつ探すぞ」

「あ、はい」

おいていかれそうになり、俺はあわててアルレストさんを追った

人が多くて走りにくかったが何とか追いついた

「でも居場所がわかるんですか？」

「まぁな。一応あいつの魔力の痕跡を追っている」

「魔力の痕跡ですか？」

「あぁ。まぁ説明は難しいがとりあえずあいつに近づいているってことは確かだ」

そこまで言うとアルレストはあたりをきょろきょろしていた俺の腕を引っ張った

果物が並ぶ店の前に行き、銅貨を数枚出して果物を一つ受け取った

そしてその果物を俺に渡す

「ほら、興味があるなら一度食べてみるといい」

「あ、そんな、いいのに」

「気にするな。ほれ」

果物を受け取りまじまじと眺める

「この世界では割と親しまれている果物でシビルの実だ。そっちの世界には無かったのか？」

渡されたシビルの実は黄色い皮に包まれた果実でつるつるとした皮が太陽の光を反射してきらきらと輝いて見えた

「えぇ、たぶん無いと思います。少なくとも俺は見たこと無いですから」

「別名黄金の実ともいう。今はみれないが次の月になる頃には木になるシビルの実は黄金色のように輝くんだ」

「へぇ・・・」

皮ははがしやすいように上に切れ目が入れてあった

俺は人混みを抜けて脇にでる

それを摘んで皮をむくと中から真っ白い果肉が現れた

「おぉ、バナナっぽい触感！それで居てリンゴのような味・・・」

甘い甘いと食べていると種のようなものが歯にあたる

「普通はそれは切ってから食べるものだ。そうやって食う奴は初めて見るな」

「え、そうなんですか？」

「果物なんて一口大に切ってから食べるのが普通だ。帰ってから食べるものだと思って買ったんだが・・・」

「ふーん、それが普通なんだ・・・」

やっぱり異世界になると妙なところで生活の違いを感じる

そりゃまぁこの世界でも切ったりした果物を食べるけどさ、でもスイカとかバナナとかは普通にかぶりつくよな

リンゴとかも普通は切るけどかぶりつく事も無くはない

「そうやって食べるのは獣がほとんどだからな。人前でやると下品に見られたりするからやらない方がいい」

「あ、そうなんっすか。わかりました。以後気をつけます」

なるほど、果物をそのまま食べるのは下品っと・・・

勉強になるなぁ

俺は口に含んだ数個の種をプププッと地面にはき出す

「これがスイカならなぁ・・・」

「起用だなお前」

そしてその光景を建物の陰からこっそり見ていた子供達がその真似をして、種をはき出し何処までとばせるか、というゲームが子供達の間ではやったりするのだがそれはまた別のお話

「これって皮まで食べても大丈夫ですか?」

「ん?別に害は無いと思うが・・・」

「んじゃ」

むいた皮もすべて平らげた彩輝を見てアルレストが奇妙な目で見つめる

それに気がついた彩輝はどうしたのかと尋ねるとどうやら皮は普通は捨てるものだという認識があったらしく、そのためその皮まで食べてしまった俺に驚いているらしい

「残さず食べるのがお前らの世界の常識なのか？」

「いや、常識ってわけでは無いですけど・・・。皮なんて林檎ぐらいに薄いですし気にならないですよ？それに皮と実の間が栄養詰まってるってよくいいますし」

「そうなのか？」

「でもこんな薄い皮なのにバナナのようにむきやすいとは・・・恐るべし。そのままかぶりついた方が・・・、いやでも無礼に見えるんだし・・・」

「ほら、どうせ食べるなら早く食べてしまえ」

「あ、はい」

俺はあわててそのシビルの実を飲み込むとアルレストさんを追いかける

一方アルレストは少し急いでいた

早く隊長を見つけて職務復帰させないとあとでとばっちりを受けるのは自分なのだ

あーぁ、またきつく叱ってもらわないとな・・・

血塗られた扉にしてくれたお礼もしないとな

左右をたくさんの店が並ぶ中、二人は大きな広場に出た

中央には噴水があり、その周囲をあけて多くの人たちが集まっていた

あたりにはベンチや木々が立ち並び、花壇のようなものも見受けられて市民の憩いの場というのを言葉で表したような広場だった

「何ですかこの人だかり？」

「これか？これはグエラーといって、まぁこの国に伝わるルールに則った方法の決闘方式のことだな。この場所は王都の中でも開けていてよく決闘に使われる場所だからな。そこまで珍しいものでもない。むしろ名物みたいなものだ」

「へー、決闘って・・・さすがに殺したりはしませんよね？」

「そういう対戦方式はあることにはある。このグエラーという決闘だがいくつかルールがあってな。守らなかった場合、周囲の観客からボコられる」

「怖っ！」

「まずは決闘をすることを両者がこの広場で叫ぶことが決闘の合図になる。聞いた決闘審判者の資格を持つ者、今の場合はこの観客全員が資格持ちだな。民衆の半分以上は資格を持っている。そして資

格を持つ者は絶対に審判をしないといけない。ルールその1、決闘をするときは決闘の審判者全員に決闘理由を述べること。その2、対戦形式に沿わない戦い方をした場合、その違反者の命の保証はできない。周囲の観客の感情しだいだなこりゃ。その3、途中棄権は審判者の過半数以上了承が必要。これを守れば大人から子供までだれでも決闘ができる。故に殆どこのルールを破る者はいない」

彩輝はこのものすごい人数の人間が一斉に殴りかかる姿を想像して身震いする

「グエラーには『ガート』『レディス』『カウズルモルト』という三つの形式がある。『ガート』は相手が負けを認めるまで死なない程度にいたぶる試合に近いと言えばわかりやすいかな。ちなみに魔法禁止な。『レディス』団体戦の時に行われる方式だ。複数人数での決闘の時にはさすがに場所が場所だからな、大抵王都の外で行われる野外戦だ。まれに市街戦になることもあるが・・・これは魔法の使用が可能だ。この二つは人殺しまでには発展しない。何しろ殺したら逆に周りの観客兼審判にやられるからな。まぁルール違反は無いといっても過言じゃない。この国の住民はそれほどグエラーにだけは逆らえない性分なんだよ。『カウズモルト』どちらか片方が死ぬまで続けられるというルールということになるかな。それと手段を問わずっていうのが鍵になる。これは国に申請する必要があるな。原因や理由を聞いて承認されればはれて公認の殺し合いという事になる。ここ数年は行われていないけどな」

「へぇ・・・って、ガウズモルトはどちらかが相手を殺すまで続くんですよね?でもいいんですかそんなルール」

「まぁ昔からあったからなグエラー。実は法はあれど、このグエラーにはいっさいの法律は関与できないんだ」

「え、でもそれだったら大量に殺戮しても罪にはとられないって事ですよね？」

「その代わりにすべての審判となる観客が居るんだ。この観客になるには実は試験が必要でな・・・。んまぁよっぽのどの事が無いとそこまでは発展しないし、それを観客が了承しないとグエラーは成立しないというルールがある」

「審判であり、制裁者ってことですか・・・」

俺ならたぶん一瞬で死ぬなこりゃ

今この試合を見守る制裁者は約１００ほどである

買い物帰りの主婦のような人から頭にはちまき巻いた大工のような格好の職人、下は小学生くらいの年齢から上は腰を曲げて杖をつくしわくちゃのおじいちゃんまでと幅広い年齢層だ

「これ、賭け事とかにならないんですか？」

「賭け事？なんだそりゃ？」

「あー、そういうのは無いんだ。えっと簡単に言えばどっちが勝つかを予想してお金をかけるんです。で、勝った方にお金をかけた人は掛け金よりも多くの、つまり相手のお金をもらえるというものな

んですけど・・・でも無いならないでいいと思いますよ俺は。お金は人を盲目にさせますからね」

「なるほどな。確かに一見遊び感覚の用だが恐ろしい一面があるな。人によっては中毒症状が出そうだ」

「こっちの世界でもそれで借金をしている人とかたくさん居ますしね。悪い文化は持ち込まないようにしないとなぁ・・・」

二つの世界は別々の文明の中で生きている

いいところを持ち込むことは許されるだろうが、悪いものを持ち込むべきではない

そういったところにも注意を払わなければいけないと俺は再確認させられた

これで賭博が流行り、借金まみれになる人が増えたら俺は責任を負わされるんだろうなぁ。怖い怖い

「今言った事は忘れてください」

「人ってのは何処までも醜い存在だな・・・わかった。賭け事の話は忘れよう」

「ところで今はえっと・・・『ガート』をやってるんですかこれ？」

「ん、だろうな。大人数の『レディス』ならばここでやらないだろ

うからな」

そこで俺はふと思ったのだがこれは決闘であり、殺人では無い
人の死を伴うことは昔から伝わる決闘とはいえ重いことではあるはずだ
だが決闘とただの殺し合いとを分けるためには、両者の承諾が最低限必要だ
その証言を人前でやらないことにはここまで人は集まらないのでは無いのだろうか？
これは確かルールの一つにあったはずだ

「あぁ、それか。まず決闘をする者はこの広場に来て、それから決闘の宣言をする。グエラーとは戦うことに意味があるのだからな。まぁ詳しい歴史は後で調べておくといい。こっちの世界の文字にもなれないといけないからな」

「実はですね、今文字の早見表を持ってきてるんですよ。役に立つかと思って」

実は城を出る前に俺は一度部屋に戻り、前に作ったこの世界の文字の早見表をジーパンのポケットにつっこんできていたのである

「あれ？アルレストさん、あの『じゅうや』って何ですか？」

適当に並んでいる店の看板の一つを俺は持ってきた文字の早見表で読み取る

すると現実世界では聞き慣れない『じゅうや』という文字が読み取れた

「あぁ、あれはまぁ魔物を買う店だな」

「魔物を買う・・・ペット？」

詳しく聞いてみるとじゅうやとは魔物を売っているお店のことで観賞用から家畜用まで多様な魔物が売られているそうだ

ちなみにこの世界で言う魔物とは魔力を持つ人間以外の生物すべてをさす言葉らしい

向こうでいう動物みたいなかんじかな？

「ま、国ごとによって魔物の定義は少し変わってくるがな。アルデリアでは人間、獣人を人間種として扱っているが、獣人などを魔物として扱ってる国もある」

人種差別、という事でいいのだろうか？

魔物の中でも野生のものを魔獣と呼ぶらしい
野生の魔物であれば魚だろうが虫だろうが獣じゃなくても魔獣となるらしい

「魔力を持ってるのに危なくないんですか？」

「まぁ見て和んだり楽しんだりするようなランクの魔物だ。そこまで危険な奴は売ってないはずだ。おとなしいはずだしそういった危険なのは店の方でも手に負えないからな」

魔物はどうやら種類別にランク分けがされているらしく、危険度の高いもの、希少性の高いものは売買の対象にしてはいけないという法律があるらしい

「家畜用は文字どおり家畜用の魔物だ。中型が多く草食なのが一般的で王都の外で主に放牧させて育てている」

「へぇ・・・。あ、なるほど。漢字なら『獣屋』ってことになるのか。うーむ、この変換の方法は奥が深いな。言葉とリンクして漢字まであるんだな・・・。ってことは英語とかでもいけるのか？」

試しに俺は聞いてみる

「そのランクの分け方ってどうなってるんですか？」

「ランクか？最上級がＳ。これはほぼ龍を指すといってもいいな。次に上からＡランク、Ｂランク、Ｃランク、Ｄランクがある。獣屋で売ることができるのはＤランクのみで、すべてのランクには＋と－という分け方ができる。つまり全部で１０段階に分けられるってことになるな」

「おぉぅ・・・英語が出てきた・・・」

ＡやＢの文字が使われるってことに俺は驚いた

なんという翻訳能力

「え、ってことは龍が一番強いんですか？」

「そうだな。Ｓを表すドラゴンは成獣の時期を指していることになるがな。生まれてから１年の幼少期の間はＢランクに指定されている。とはいえそこまで強くは無いから危険ではないとは思うんだがな」

「珍しいんですか？龍って」

「珍しいも何も王都まで現れることはまずほとんど無い。それに龍自体人に危害を加えることはほとんど無い。見た目に反して普段はとてもおとなしい」

なにか引っかかる言い方をするなぁ・・・

うん。普通はってところだね

「普段は？」

「普段は、だ。繁殖期に入ると凶暴化する。まず卵を産むために体力を蓄えないといけない。そのために普段よりも空腹による興奮でまれに人里まで餌を求めて降りてくる」

「人里って山に住んでるんですか？」

「巣は切り立った崖に足のかぎ爪で穴を開けてそこに卵を産む。それに子供が生まれた後は子育てであまり動けない雌と幼体の龍のために雄の龍は自分を含めて3匹分の餌を探さないといけない。そこで餌がなかなかとれないとこれまた興奮して人里に降りてくる可能性が高くなる」

「人を襲うんですか？」

恐る恐る聞いてみた

「当たり前だ。人間も肉の塊だからな」

「そ、そっすか」

おっかない

繁殖期にはあまり山には近づきたくはないなぁ・・・・

特に切り立った崖のある山には

「まぁ魔力補給もかねてほとんどが魔力を持つ魔獣を狙ってる奴がほとんどだ。魔力を感じ取って獲物を探すっていう説が有力で魔力の無い人間は襲われにくいという説がある」

ますます行きたく無くなった

なんといったって俺の体の中にはかなりの魔力があるらしいのだ

実際どれだけの量があるかはわからないが何となく俺は真っ先に狙われそうな気がするのは俺だけか?

「ま、ここまで来ることは無いし、気にとめておくぐらいでいいだろうな」

「はぁ・・・」

何というか、命の危険に関するお話なだけに手に汗握った俺はズボンで汗を拭く

あ、そういやずっと俺この服着てるな

洗濯機は・・・・無いよな。うん

となると手洗いか

で、その間別の服が必要になるな

そっか、服も買わないといけないんだなぁ・・・

と、俺がのんきに服の事を考えていたとき、目の前の人だかりが大きな声を上げる

決着でもついたのかなぁと思い、視線をあげる

が、一目でそうでは無いと確信した

なぜならばそれは賞賛の雄叫びでも、ルールを破った者に送る言葉でも無く、恐怖に怯える叫び声だったからだ

沢山の悲鳴はまるで人から人へと伝染するかのようにどんどんと広がっていき、すぐにそれはこの広場を埋め尽くした

アルレストもすでに異変に気がつき腰に差した刀の柄を握っている

上空を見上げる者

地面に倒れ込む者

崩れ去る人垣と中央で戦っていたと思われる二人の男は互いに武器を持ったまま天を見上げている

逃げまどう人々の何人もが彩輝やアルレストの肩にぶつかっていくが、その光景を見た二人もまた、そんなことが気にならないほどの事態になっていることに体が動かなかった

アルレストも彩輝もまた、動かぬ体と止まった思考回路が回復するのには数秒を要した

現状を何とか理解したアルレストが無言で腰に差した二本の刀を鞘から抜き放った

『龍襲来』

「ばかな・・・ありえん・・・」

アルレストは腰に差した二本の刀の柄を握りながら固まっていた

周囲の者達は遠くに逃げるか、あるいは身近にある建物の中へと逃げていく

周囲の異変を察知する人がまるで波のように広がっていき、同じように人々の叫びが段々と大きくなっていく

その様子を見て彩輝も危機感を抱いた

あれは、だめだ

そう感じた

周りの逃げまどう人々の声で我に返った彩輝は隣で固まるアルレストの肩を揺さぶった

「アルレストさんっ！！」

アルレストは彩輝の耳元での叫びを聞いてゆっくりと現状を把握したらしく、ゆっくりと二本の剣を抜く

二つの銀光が交わり、ジャリンと音をたてる

「くそ、なんだってこんなところに・・・」

遙か上空に居たそれは長い首を持っていた

巨大な翼を持ち、鞭のようにしなる尻尾が空に踊る

二本の角と紅に染まる鱗

刺々しい棘はおそらく鱗が変化したものだと感じさせる

そしてそれは、以前彩輝が見た本の中に描かれていたものにそっくりだった

ドラゴン・・・

「くそったれ、外壁の奴らは何やってやがった!?おいアヤキ!お前、離れて逃げろっ!」

「は、はいっ!」

俺はくるりと向きを変えてダッシュする

全力疾走。この彩輝、死ぬ気で走ります！死にたくないもん！！

少なくとも自分が何を出来て、何が出来ないかぐらいはわかっているつもりだ

今俺が出来る事は逃げること。逃げて生きる事だ

この場に自分が残ったところで出来る事なんて殆ど無いに等しい

俺はただの高校生なのだから

人々はどんどんと広場から逃げていき、逃げるのが遅くなれば標的が少なく絞られるとういう事だ

この身が確実に狙われやすくなっていることは確かだ

俺ができることはただ一つ、アルレストさんのじゃまにならないところへと逃げること

アルレストさん一人であの山のように大きな龍をしとめられるとは考えにくい

となると俺がしなければ行けないことは・・・助けを呼ぶこと！

だが誰に・・・！？

俺は舌打ちをして遙か遠くに見える城を見上げる

あの辺りまで行けば十分な戦力は整っているはずだと俺は予測する

恐らくこんな状態だ。もう情報は伝わっているかも知れない。いや、伝わっているだろう

近衛は出てこないだろうが聖水騎士団は確実に出てくるはずだ

いや、少なくとも一名は俺の後ろにおり、もう一名は行方不明になっているがこの周辺にいるはずなのですぐに駆けつけるであろう

「糞ッ！死にたくねぇ！」

異変を察知した奴が城へ報告してくれればいいが・・・

水路が多いこの国で走っていればおそらくすぐに行き止まりになるとはいえ、俺がダトルを乗りこなせるとは思えない

とりあえず物陰に隠れ、それから落ち着いて考えよう

俺はそう思い近くの建物の陰に飛び込んだ

離れることよりも、あまりの恐怖に動転した俺は隠れることを選んだのだ

こんなことが・・・あっていいのか・・・？

アルレストは空中でこちらを見下ろす龍を睨みつけている

巨大な翼が羽ばたくたびに太陽からの光が遮断され、石畳の地面を暗くする

翼の大きさとあの長い尾の形状を見る限り、オラージュ山脈より飛来したレッドテイルのシェレンフェル種である事がわかる

一年中あの山脈には豪雨と雷が入り交じるあの険しい山頂付近で生活できるのは、龍の中でも巨大な翼とその暴風雨の中でも飛ぶことができる飛行能力を持つこのシェレンフェル種のみであろう

レッドテイルの系統の種は本来、翼はここまで大きくは無いのだがこのオラージュ山脈に住むシェレンフェル種は生活環境に適応した翼が特徴であり、本来の種よりも１・５倍くらいの大きさを持っている

オラージュ山脈は隣のグレアント王国の北方に位置する場所にあり、周囲は暴風と雷雨により町は一つもない

麓の横を通る街道ともっとも近づく場所は別名『風の関所』と呼ばれ、山から吹き降りてきた風が街道を横切るために通過するには飛ばされないように注意しないといけない場所なのである

それほどまでに強い風が吹き荒れるオラージュ山脈の山頂に住む故

に、手に入れたその飛行能力の高さから考えればこの周囲まで飛来することは容易であることが伺える

とはいえ謎は残る

何故、このような時期に山を一つ越えてまでにこの王都まで来る必要があるのだろうか

ちょうど繁殖期に重なるとはいえ、もうすでに卵を産み終えた後であることは時期的に間違いない

それに餌を求めるにせよ、山一つ超える理由がわからない

龍にもある程度の知識を持つという説が出ているがその行動のほとんどは謎に包まれており、アルレストはその理由を考えてみても全く思いつかないのである

何を思ってこのような場所に迷い込んだのかは知らないが、できる限りの対応はさせてもらう！

一人では心もとないが、それも仕方がない

王都外壁の守護につく騎士からの警鐘が無かったことを考えると、何かあったと考えてもいい

連絡が遅れているということは援軍が来るのも遅れるという事

とはいえ、何もしない訳にはいかない

これでもアルレストはこの国の騎士団の副長なのだ

「力不足ですまないが、しばらく貴様の相手は俺一人で我慢してくれよな・・・」

龍はそんなアルレストの言葉を理解しているのかは定かではないが、喉をうならせながらゆっくりと降下を始める

ここでまた疑問が生まれた

龍は基本、上空からの攻撃を得意としているのである

龍はブレス、火球などによる上空からの攻撃手段を持っている

魔術、弓兵がいても届かぬ高さからの攻撃が可能な龍にとって、この行動は理解しかねる

わざわざこちらの攻撃が届く場所に来ることなく俺を仕留める事が可能なはずである

何故・・・？

二つの剣を構え、俺は握る力を強くする

愛剣も強固な龍の鱗相手に何処まで保ってくれるだろうか・・・

と、両者のにらみ合いが続く中、先に動いたのは龍の方だった

龍は降下中に息を大きく吸い込んだ

そして、口から漏れる火を見てアルレストはとっさにその場から離れる

次の瞬間、アルレストの真後ろで大きな爆発が起こり、石畳が砕け散る

砕けた岩が爆発と同時に周囲に吹き飛び、その爆風でアルレストも飛ばされそうになりなるが姿勢を低くして爆風を耐えきる

土煙がはれると龍は地面すれすれの位置にいた

龍はゆっくりと地面に降り立ち、大地を揺らす

ズズンと揺れる足場に顔をしかめるアルレストだったが揺れはすぐに収まる

藍色の瞳がこちらをギロリと見つめている

自分の何倍あるのだろうかこの山は

「うおおおお！紅蓮月！！」

怯えと恐怖を忘れたアルレストは志気を叫ぶことによって高め、瞬速の足で間合いを一気に詰めて龍の足に斬りかかる

しかし、魔力による攻撃はその特殊な鱗に阻まれてしまい、鱗の方も軽く傷がついた程度で龍には効果は無さそうだ

龍の鱗は魔力をはじき返す力をもち、非常に貴重な防具や武器の材料となる

だが、それを全身に纏ったそれはもはや手も足も出ない動く砦と化す

「紅蓮撃！！」

剣の色が銀色から紅の色に変わる

この剣には言葉をスイッチとして発動する魔術が刻み込まれており、人はそれを魔武器と言う

言うなれば、技名を言葉として言えば剣に込められた魔術が自動的に発動するという仕組みになっている

真っ赤な刀身が炎に包まれ、他人が見れば炎の剣と勘違いしそうな姿をしている

取り巻く炎は周囲のマナを取り込んで発動するため、マナの無い場所では発動しない

先ほど龍が吐いた火球のおかげで火のマナが周囲に溢れかえっている

ちなみにアルレスト自身が修学したのは火属性と水属性の術を主に学んでいる

といってもアルレスト自身は魔術を使えない人間だ

しかし彼の家には彼が持つこの二本の剣が代々伝えられており、その剣に刻み込まれている魔法の属性が火属性と水属性の剣だったからである

水のマナはこの周囲に流れる水路のおかげで大量にあるため、これで存分に戦うことができる環境がそろった訳である

後はできるだけ周囲の店に被害が及ばぬように戦うしかない

未だあの店の奥には隠れた人々が居る可能性もあるのである

突き出した炎の剣はガキンという音と共に、龍の膝の位置に突き立てられる

とはいえ中まで刃は通らず、炎も魔力を無効化する鱗のせいで決定打にならない

アルレストは龍の膝を蹴り、距離をとって着地する

着地するときにはさすがに衝撃が強かったことに加え、高さがあったことが原因で多少痛さもあったが目の前の魔獣に比べれば気にはならなかった

「さぁて、どうするかなぁ・・・」

剣は弾かれ、魔法は意味を成さない

そもそも人によって成獣の龍を倒したという話自体無いに等しい

まれに偶然が重なり合って倒されることもあるらしいが、どれも人がとどめを刺した訳ではなく、巨大氷柱が落ちてきて首を貫いたとか地盤が崩れ土砂と岩に押しつぶされたとかいうのがほとんどである

未だワイバーンなどの下級龍種以外の巨龍に対する有効な攻撃手段が見つかっていない中、勝つなんてのはほぼ無理な話である

最大限譲歩して時間稼ぎができるか、追い返すことが出来るか、といったところか

そして最悪は死

確率的には死の方が半分以上を占める

「水弾（すいだん）！」

もう一つの剣を振りかぶる

術式が刻み込まれた剣が蒼く変色し、周囲のマナを集めて剣の切っ先に人の顔ほどの水の球を作り出す

その状態を維持したまま、今度は先ほどの炎の剣を振りかぶる

「炎月刃（えんげつは）！」

右の紅剣を振り下ろす

剣が纏っていた炎が振り下ろされると同時に三日月の形をした炎が龍の顔めがけて一直線に飛んでいく

龍はそれを翼の一ふりで起こした風で消し飛ばしてしまう

その風が起こる直前にアルレストは大地を蹴っており、風が吹き荒れる頃には先ほどまで炎を纏っていた剣を石畳の隙間にさして飛ばされないように耐えきる

風が止むとすぐに剣を引き抜き、水球を作り出した剣を水平に構えた

「加勢するぞっ！！」

背後から、聞き慣れたあいつの声がした

龍が飛来するその少し前、騎士隊長であるチルは裏路地にいた

というのも数分前、アヤキの短刀を奪って逃走したはいいものの、冷静に考えれば後からファルアナリアの鉄拳が飛ぶことが容易に想

像できた

というわけで一気に第４地区まで逃げてきたのだがぶらりとしながら城へ帰ろうかと思ったところで偶然、目の前で万引きが発生

第４区画の中でもこの周囲のみに広がる裏地区と呼ばれる場所があり、そこは家族を失った者たちや捨てられた子供たちなどが身を寄せ合って住まう場所になっているのだ

そしてこの周辺で起こる事件は大抵この裏地区に住む子供達が起こすものである

追い剥ぎ、窃盗、恐喝

一歩路地裏に足を入れればそんな現状が待っているのである

近いうちに、ここもなんとかしなければいけないな

治安が悪い場所とはいえ、ここはあまりにも酷い

ここまで酷いのは周辺の治安部隊が関わっているのでは無いかと推測する

チルは窃盗にあった人から話を聞いて特徴にあうような少年を捜すことにした

だが一瞬でそんな気は失せてしまった

後ろの方で起こる喧騒

それもただの争いごとではない程の大勢の悲鳴
何事かと思い路地裏を飛び出ると目の前には沢山の人だかりがあった
皆一斉に広場から離れて逃げていくのがわかった
な、なんだこれは!?
チルはあわてて目の前を走り抜けようとした男を呼び止めた
「おい!なんだこの騒ぎは?」
「あ!?きっ、騎士隊長様っ!?たたっ大変です!龍が・・・」
「龍だと!?」
最初は嘘ではないかと思ったのだがこれほどの人数が一度に逃げるということは・・・
ここからでは建物が邪魔で見えないが、突然の爆音が鳴り響きここで考えている訳にはいかないとチルは走り出す
捕まえた男の肩から手を退け、人の波をさけるためにもう一度裏路地へと戻り、空いた場所から向かおうと考えたのだが気がつけば後ろの裏路地にも沢山のひとで埋まっていた
「どうやら本当らしいな・・・」

それはそれで大問題である

警備体制を問われるのは必然か

とりあえず現場に向かわないと・・・

チルは蒼天駆を抜き、天へと構える

この蒼天駆は蒼き天を駆ける剣

宿す力は『天駆け』

持つ者の意志により、天に足場を作り出す剣

上方向に飛び、落下が始まる前に足場を作り出し、その見えない足場をチルは蹴る

そうして落下前に生み出した足場で屋根の上まで上ると目の前には信じられないような光景が広がっていた

「・・・おいおい・・・冗談じゃないぞ」

チルは屋根に飛び移り、その上を走る

家から家へと飛び移り、上空からゆっくりと降りてくる龍に視線を

向けながら汗ばむ蒼天駆を握る手をぎゅっと握りしめる

そしてもう片方の手で腰に差したアヤキの短刀を抜いた

そして

「加勢するぞっ！！うおおおっ！！」

大きく振りかぶって大小二本の刀を龍めがけて振り下ろす

龍は異様な力を感じ、腕では止めようとせず羽ばたく風で追い返そうとする

が、

「天駆（あまが）けの力を見くびるなよ！」

目の前に飛び出してきたその女性は自分の目線よりも上の位置でいったん足場をつくりそこに着地する

羽ばたく風がいくら強くても、その風の当たらない場所に居れば意味が無いのだ

チルは蒼天駆を逆手に持ち替えアヤキの短刀を鞘に戻す

あいた左手も使って両手で蒼天駆を逆手に持つ
そして一気に龍の頭上めがけて飛び降りる

「せいっ！！」

蒼天駆の切っ先は剣や魔法を跳ね返す鱗をいとも簡単にまっぷたつにして一気に頭の肉へと進入しようとする

が、龍は頭を大きく前に向かって振り下ろした

長い首が一気にしなり、蒼天駆は切れ味が鋭いばかりにずるっと抜けてしまった

振り落とされたチルはなれたように空中で足場を出してその上に着地する

「あっぶないわねぇ～・・・」

「とても驚いているようなふうには見えない動きだな」

「バカ言わないでよ！龍なんかどうやって相手しろってのよ！？というか何があったのよ！？」

「知らん！！俺が知りたいくらいだ！それと俺の攻撃はきかん。お前の蒼天駆だけが今のところ有効打になりそうだな」

つまりアルレストは囮にまわると言っているのだ
あの聖天下十剣の切れ味ならばあの強固な龍の鱗をも切り裂けることが実証された

「とりあえず火球とブレスを周囲に当てないように俺は足下に行く！」

「踏みつぶされないでよね！」

アルレストはチルの返事も聞かずにダッシュする

「こっち向きやがれ！」

構えた状態のまま龍の懐まで潜り込み、左の剣を振り上げる
剣の先でフロートしていた水の球は剣を振るう速度と同じ速さで遙か上空まで飛んでいく
龍がアルレストの声に反応して下を向いたとき、目の前で水の球が破裂した
といっても猫だましのようなものなので効果は一瞬でしかない

その一瞬で龍はチルから気をそらしてしまった

「神速一点・・・」

チルは気をそらした龍をみてすぐさま行動を起こす

蒼天駆を構え、目を閉じる

斬る相手は・・・

暗闇の中、一筋の光が足下からまっすぐに伸びる

そこに居っ!!

蒼天駆の力で一気に後ろから力をかけ、体を前に倒す

1・・・

踏み出すその一歩は大きく

2・・・

踏み込む一歩を強く踏みしめ

3・・・

飛び出すその体は矢の如く!!

「矢衝白路（やしょうびゃくろ）！！」

バネのように飛び出したチルは目に見えないその足場をしっかりと踏みしめた

一瞬のうちに踏み出した右足一本だけですでに、数メートルあった距離を縮めていチルは柄を両手でしっかりと握り突き出した

その軌道は寸分の狂い無く、一直線に飛んでいくチルはまるで矢のように突き進む

まるで空を飛んでいるのは矢なのではないかと勘違いしそうなその光景を見ていたのは、下にいたアルレスト

それと建物の物陰から見守る彩輝であった

隠れたまではよかった彩輝だが、やはり不安になって見に来てしまったのだ

初めてみるその巨大な生物は巨大な翼を広げ、二本の足で堂々と大地に立っていた

龍が一歩踏み出すごとに石畳は、砕け、陥没する

大きな足跡を残した大地は尻尾の一振りで地面に大きな溝をつくった

先ほどみた火球

いったいどうやって体の中で炎を生成するのか不思議である
あの炎も元は魔力だから効かないのだろうか？
とにかく、図鑑にすら詳細が不明と書いてあったのだ
こんな化け物みたいな奴を調査できる奴がいたら拝んでみたい
見つかったら恐怖で硬直してしまいそうになる

「俺に・・・何ができる？」

神に頼むか？

否。神がいて、人を救おうとするならば、そもそもこんな場所に龍は来ない
ちくしょう、無力ってこういう事を言うんだな・・・
何かできるならばしている
それができない
できないことがわかることが、悔しい

『相手を知る事。それが人であろうとなかろうと、少しでも何かを

知っていれば何とかなるものだ』

それだ！

こんな時に思い出すなんてなんと都合のいい！じいちゃんありがとう！

相手を知る

知らなければ友達にだってなれないし、戦いに勝つことも出来ない

彩輝は昔、他人となじめなかった頃に祖父から聴いた言葉を思い出す

相手を知ることは知らない事よりも、何事も優位に立ちやすくする

相手の趣味を知っているならばその話題を振ってやればいい

相手が嫌いなことはしないようにすればいい

相手の手の内を知っていると言うことは、自らが勝利するための布石となる

龍そのものの生態がよくわかっていない今、俺にできることは知ることだ

今一番危険な事は何か

それは市街戦になっている今、他の市民が巻き込まれる事だ

暴れ回った龍が周りの店や家を壊したりすること
そしてその中には逃げ隠れた人々が残っているかもしれないということ
今は広場で戦ってくれているからいいが火球やブレスが飛んできた場合、安全は保証できない
その射程距離はわからないものの、先ほど見た火球の大きさや速さや威力から予想するに、１００や２００じゃ到底収まらない
５００メートルは確実に飛ぶ
そしてその威力
地面を大きくえぐったそれはまるで爆弾のようである
あの火球を封じるにはどうする？
予備動作として大きく息を吸い込み首をくの字に曲げた
そして口から火があふれ出て、はき出した
つまり、息を吸い込まないと火球を吐けないのではないかと彩輝は推測する
よけいな詮索よりも考えが頭の中で整理されていく
息を吸えなければ火球を打ち出せない

そうするにはどうするか。この近くで使えそうなものは・・・

きょろきょろと当たりを見渡し、流れる大きな水路を見つけた

四方大水路は必ずすべての地区を通ることと交通の多くを占めるために水路が少ないこの地区でも橋がかかっているとはいえ、埋め立てられたりはしていない

水の中に押し込むか？

だが正直無理だと思う

確かに水中に顔を入れてしまえば息はできないし炎を吐くことはできない

だが、どうやってそれをすればいいのか彩輝ではまったく思いつかなかったのである

そこで次に火球を吐くメカニズムを考えてみた

どこか特殊な臓器があり、その中で炎を生成しているのかもしれないし、そうだった場合はお手上げなのだがそうでない場合、止める手だてはあるのではないかと予想する

たとえば、炎は元々作れないと仮定する。そういったとき、どうやったらあのような炎を作り出せるのか

しかもあんなに巨大で強力な

・・・・もしかして

「ガスか？」

体内でガスを作り出し、それを口の中で引火させ、息と一緒に吐き出す

だがどうやって引火させるのだ

口の中で自然発火するような温度でも無いだろうし・・・

先ほどドラゴンが歯を打ち鳴らしていた事を思い出す

あれはもしや歯を打ち鳴らして火花を出してガスに点火させていたのではないだろうか？

だが、ガスが体の中にあるなら引火したときに体の中で大爆発が起こるのでは？

息を吸うのはガスの生成、あるいは口へと押し出すために使う

口の中に溜まったガスと体内のガスが溜まる臓器か何かにはフィルターがあり体の中が燃えるのを防いでいると考えれば何とか筋は通るかな

歯を打ち鳴らしてつけた火花はガスに引火

引火したガスを魔力で球形に口の中で整える

そして吐き出す息と同時に炎の球を押し出す

そこまで考え、それがどうなると言うのだと彩輝は思った

考え、推論でしかないその考えを、どうするのだと

俺が戦いから目を離してその考えに至った瞬間、頭上で何かがぶつかる音がした

バサッ

「な・・・!?」

確実に龍はこちらを見ていなかった

それに加えアルレストが放った水球が龍を一瞬ひるませたはずだ

いったい何が起こったのか理解できなかった

チルの目の前に居たはずのその巨体は翼をたった一度動かしただけでチルのさらに頭上に舞い上がっていたのだ

チルは目の前から巨大な龍の体が消えたことに一瞬頭が真っ白になる

攻撃対象が一瞬のうちに消えてしまった事に戸惑う瞬間すら与えられず、すぐさま龍の反撃がきた

チルの体を覆い隠したその巨体はぐるんと後ろに反り返る

空中で後ろ向きに一回転したその時、鞭のようにしなるその巨大な尾の腹がチルの体を捉えた

接触の際、突き出すようにしていた蒼天駆が龍の左腕を切り裂き、チルは手の感触から一瞬だけ剣が龍を捉えたことで意識が戻る

が、次の瞬間にはチルの体はものすごい速度で飛ばされてしまい、彼女は近くの商店に撃墜させられてしまう

屋根を大きくへこませた後、勢いはそれで止まらず反動で後ろへと体が舞い上がり後ろの路地へと落ちていった

龍の切り落とされた巨大な左腕がどすんと地面に落ち、切断面から大量の血が吹き出す

龍は翼の一振りで体制を立て直し、巨体は再び地面を揺らして降り立ったかと思うと苦しむように龍は叫ぶ

アルレストにしてみればあのような巨大な体が一瞬目で追いきれないような動きをしたことと、長い尾が地面に触れて石畳を削り取った事に恐怖した

そしてその一撃を食らったチルが飛んでいった方向に反射的に目がついて行ってしまう

ぽかんと口をあけて見ているアルレストはギリギリと歯ぎしりをしながら二本の刀を構える

「うわぁっ！」

物音がしたかと思って頭上を見上げたその瞬間、頭上から何故か向こう側で戦っているチルが降ってきた

あわてて両手を伸ばして彩輝はダイブした

腕に重い感触が伝わり、地面に頬を擦らせながら止まった体を起こして腕の中にいるチルを確認する

目立った外傷は特に見あたらない

とはいえ、苦しそうにして目を開かないチルを見ると何かあったに違いないはずだ

「ち、チルさん！」

「いってて・・・・」

彼女の名前を呼んでみると意外にもすぐに彼女は意識を取り戻した

頭を押さえながらむくりと起きあがる

「な、何があったんです！？」

「あ？なんでお前ここに・・・」

チルは何故龍の居るこんな場所に彩輝が気になって仕方がなかったのだがそうも言っていられなかった

「そ、それよりもはやくあれをなんとかしないと・・・！！何かできること無いですか！？」

これだけ辛い思いをしているのに見過ごせるはずがないといった顔でチルに言い寄るも

「だめだ！何故ここに居るかはしらないが早く走って遠くまで逃げろ！まだ見つかっていないんだ、まだ間に合う！」

チルはこの非常事態にこの場にいる彩輝を逃がそうとするが、彩輝は首を横に振った

「嫌です。普通なら逃げてますけど・・・俺は二人を見捨てられません」

「バカいってんじゃねぇ！逃げないと今この場で私がお前を殺すぞ！」

チルは諭すのは無理だと考え彩輝の短刀を抜いた

切っ先は俺の彩輝の喉に軽く突き刺さっており、一滴の鮮血が刀身をつたう

「俺は後悔だけはだいっ嫌いなんだ！後悔するくらいなら、俺は死ぬ！」

「な・・・」

脅せば帰ってくれると思っていたチルは絶句した

本来ならばこの世界の住民でもないアヤキがこの世界で死ぬことは望んでいないはずだ

絶対に、元いた世界に帰りたいと思っているはずだ

死なないこと、それが絶対条件で彼は城下に住むことを望んだはずだ

だがどうやら間違っていたのだ

彼は、自らが後悔しないようにすることを最優先としていたのだ

「本当に殺す。それでも後悔しないな?死んだら後悔できないぞ」

「後悔しない。それが俺の最優先事項だ。後悔する道を選ぶなら、死んだ方がましだ。俺はちょっと常人とは別の感覚らしいんです。別に死ぬことに抵抗を持っている訳じゃないんだ」

そんなことより、後悔したくないという気持ちの方が強いのだと彩輝は叫んだ

チルは目を細め、短刀を持つ手の力を強める

「本当に・・・いいんだな?」

「あぁ。殺せよ」

彩輝は後悔はしていなかった

だから別にここで死んでもかまわないと思った

これも・・・俺のわがままってことなんだなぁ

チルが目を細めて俺の顔をにらみつけている

死ぬ

別に怖くは無い

俺の中では生きることよりも後悔しないことの方が優先である
そのおかげで俺はこれまでトラブルを起こしまくってきた
だけど後悔はしていない
今回も同じだ
たとえそれで生き残ったとしても、後悔が俺を殺す
もう、二度と、あんなことは、起こって欲しく無い
だから俺は誓った
だけど、約束破ったことになるなぁ
通信が切れる前に交わした約束
『生きてまた会おう』
彼らと交わしたその約束
まだ、知り合って間もない彼女たちと、共に帰ること
元の世界へと帰る
帰りたかった
けど、俺はここで後悔をして帰りたくない

もし後悔したくないからといってこの世界に残ることになっても、俺はそれでもかまわない

後悔だけは、絶対にしたくない！！

俺はまっすぐとチルの目へと視線を向ける

左手で俺は剣を持つチルさんの左手を上からつかむ

「後悔はしていない。だけど、死ぬつもりは今は無い。殺される理由も、自分で納得できない。刀、返してください」

チルはゆっくりと短刀を握る力を弱める

手から滑り落ちた短刀が地面に転がる

「はじめから、殺す気なんて無いよ。どうにかして帰って欲しかった」

「ごめんなさい。罰なら後で受けてもいいです。だから、協力できることは無いですか？」

チルはあきらめたようにスッと立ち上がり深呼吸をする

そして蒼天駆を握りしめる

俺はチルさんから鞘を返してもらい、下緒をベルトに結びつける
刀を拾い、鞘に収める

「逃げろおっ！！」

そのとき表のほうからアルレストの叫び声が聞こえた
それと同時に真横の家の壁が崩れ、龍が突っ込んできた
龍の体は完全に空中に浮いており、体当たりによって砕け散った岩のがれきが周囲の家に穴を開けていく
その瞬間、首根っこを捕まれて俺は空中に飛んでいった

「え？あれ？」

「ぼけっとするな！生きて帰りたかったらがんばって避けてろっ！」

一瞬のうちに龍の頭上まで来ており、翼を広げた龍がいかに大きいかをまざまざと見せつけられた
いつの間にか龍の左腕は無くなっているが、血はもう殆ど止まりかかっているように見える

そんな龍はすぐにこちらに向き直った
ギロリと蒼い目が俺たち二人を捉えると

「ちょ、こっち来た!?」

「え?うそっ!?」

チルは大あわてで空中を走って逃げる
追いかけてくる龍がすぐ後ろまで迫ってくるその迫力は本当に死ぬかと思うほどに恐ろしかった
紙一重でチルが方向転換し、真横を龍が飛び抜けていった
その際ずらりと並んだ牙がちらりと見え、彩輝は冷や汗を流す
そのまま上昇していった龍はくるりと方向を変え、今度は急降下して突っ込んできた

チルはそれを待っていた
この場所は地上から数メートルの場所であり、龍が急ブレーキをかけても止まれないほどのスピードで地面に突っ込む自滅を誘っていたのだ
正直火球やブレスを撃ってこなくて良かったとほっとするがあんなのどうやって避けるんだよ!?

ある意味ジェット機が突っ込んでくるかのような感覚だ

チルはいつでも逃げられるように体勢を低くして足に力を入れた

だが、龍は二人の頭上獣数メートル上で一気にスピードを落とし、体を起こした

チルはとっさに足が動きその場から逃げて地面に降りる

そして龍が降ってきた。というより落ちてきた

二つの大きな足が地面を捉え、衝撃と共に土埃が龍の胸の当たりまで覆い尽くした

地面から吹き上がる土煙に飲まれた三人は龍から離れようと走り出す

だが次の瞬間には横に薙ぎ払うかのようにして振るわれた巨大な尾がチルとアルレストを捉えた

二人を捉えた尾は頭上へと振り上げられ、土煙から二人が放り出される

チルは足場を作って直撃したアルレストの服をつかむ

「あー、もうっ！さっきもそうだけど吸収符使わなかったらやばかったかもね・・・」

先ほど龍の尾を食らったときと屋根にぶつかったときも寸前のところで吸収符を使って難を逃れていたのである

アルレストは左腕を犠牲にして体を守ったのだが、直撃した左腕はまっぷたつに折れ、激痛が走る左腕を押さえていた

「後で治癒班にでも行って治してもらえばいいわ」

そんなアルレストをその一言であしらってとりあえず龍から距離をとって着地する

一方彩輝はというと、先ほど龍が着地したときに逃げようとしたのだが衝撃波が襲いチルの腕から吹き飛ばされていた

吹き飛ばされた彩輝は地面に頭を打ち気絶してしまい、そのままごろごろと地面を転がっていった

そして龍は大きな翼でその土煙を払う

倒れる彩輝を見つけた龍はそっと右の足で彩輝をつかみ取るとそのまま大空へと羽ばたいた

飛び去ろうとする片腕の龍の足に捕まった彩輝をチルが見つけたのは、もう追いつけないほどまでに距離を離された後だった

『龍の巣窟』

「あーぁ・・・どこだよここ・・・」

目を覚ました俺は空にいた

上空何百メートルだろうか?想像もつかないくらいにとにかく、高い

前に旅行で行った東京タワーよりたぶん高いと思う

というより龍に連れ去れ、こんな空高い場所に自分はいるというのに驚きを通り過ぎてしまい、彩輝は落ち着いていた

体はがっちりと龍の右足で捕まれており短刀に触れることもできない

ものすごい早さで雲と雲との切れ間を縫うようにして飛行する龍は風を切り裂くかのような音を立てて飛んでいる

俺、餌にでもされるのかな・・・ってか超寒い

嫌な光景が脳内に展開される。あの鋭い牙でムシャムシャと・・・

しばらくすると大きな山脈を一つ越える

歩けばどれほどの時間がかかるのだろうか?そんな巨大な山脈をあっという間に飛び越えてしまう

彩輝はもうどうとでもなれといった風に開き直り、大空のフライト

を堪能することにした

そうして意識を変えてみると、なかなかに絶景ではないか

遙か前方にはどこかの国の王都と思わしきものが見える

上から見るとまた違って見えるもんだな

さーて、本気でどうしようかなこの状況

彩輝は身動きがとれないまま遠くを眺める事しか出来ない

山を越え、しばらく平地を行き、眼下には大きな城が見えた

周囲には城下が広がっているのが見える

そしてその奥に見えるのは巨大な山脈

連なる山々の頂上には灰暗い色をした雲がかかっており、そこだけが別の空間のように歪んで見える

雲の中ではちかちかと雷が光っているのが遠目でもわかった

（オラージュ山脈か・・・）

以前目にした地図を思い出す

アルデリア王国は二つの巨大な山脈に挟まれており、方向から考えるに先ほど通り過ぎた場所はグレアント王国であろうと予測する

そうなると必然的に奥にある山脈はオラージュ山脈となる

一年中暴風雨が吹き荒れるその過酷な環境で育つ生物は少ない

その数少ない生物の一つがドラゴンだ

「あそこにつれてかれるのか・・・・」

成り行きとはいえとんでもないことになった

生命の危機だ

俺はこれで死ぬってか

ジ・エンド

（目が覚めたか、龍の神子≪みこ≫よ）

ん？何か聞こえたような・・・空耳か？

（否、我は汝に語りかけているぞ）

えーっと・・・・はい？

なにかが聞こえるぞ？

耳じゃなく、脳内に直接語りかけてくるような感じだ

「もしかして・・・お前か？」

（いかにも。汝に語りかけたのは我だ）

・・・嘘ぉ！？

え！？俺このデカブツと会話してるのか！？

（デカブツとは心外だな）

「え！？ってか聞こえてるのか！？」

彩輝は心の中で考えたことに返答してくる龍に驚く

「ちょ、え？ま、まって・・・くれ」

彩輝の脳内で思考がぐるぐると輪を描く

会話?龍と?会話?

「いや、えと・・まぁ・・・あの・・・俺彩輝って言います」

パニクった彩輝は何故か龍相手に自己紹介をしてしまった

龍はグルルと喉を鳴らす

えっと俺は今・・・会話してるのか?

信じられない

人ではない生物と・・・会話

翻訳機能がついていたのはわかっていたがまさか人外にまで有効とは・・・

と思ったりもしたのだがすぐに龍の方から訂正が来た

(龍の神子よ。我らは正確には人とは話せない。会話出来るのは龍の神子であるお前だけだ)

「はぁ、そうっすか。ってことは翻訳機能とは別ってことか・・・。あの、分からないんだけどさっきから言ってる龍の神子ってなんぞ?」

先ほどからちょくちょくと会話に盛り込まれる龍の神子という言葉が気になって彩輝は聞いてみた

というか神子って女だったよなたしか?俺男なんですけど

(もしや神子様は何も知らぬ・・・と?)

「知らぬも何も突然拉致されて状況がつかめないのですが・・・」

(神子とは神獣の力を宿した者に送られる言葉。汝は我が龍族の王たる虹の風刺龍の血を宿す者)

「不死龍?・・・あぁ・・・どんどん話がおかしくなっていく・・・」

だってあり得ないだろ!

突然異世界に放り出され、ものの数日で俺は龍に拉致されて、そして俺の体には不死龍の血が流れている!?畜生、理解がおいつかねぇ

誰かわかりやすく教えてくれ、そう彩輝は心の中で叫ぶ

しかしここで彩輝は大きな勘違いをする

それに気がつくのはもっともっと先の事である

(神獣は9種いてそれぞれが守護する地域を持つ。そしてその力を

持つ神子が9人。汝はその一人なのだ。そして汝にはやってもらいたいことがある）

俺が神獣である龍の王様の力を持っていると？

そりゃぁ大抵主人公とかは特殊な能力や運命を背負ってこそ成り立つがこれはやりすぎだと思う

一時期は漫画の設定に夢見たこともあり、漫画やアニメの主人公になりたいと思ったこともあった

が、幻想は幻想でしかなかった

前言撤回。そんな変な力はいらないからさっさと元の世界に返してくれ神様！

（神により近い存在の汝が神頼みか）

ついに俺は神に近い位の存在になったか

現実味ゼロ

実感ゼロ

ていうか俺は食われないのか？

（神子を食うなんぞ恐ろしいことを考えるはずが無かろう）

彩輝はほっと胸をなで下ろす

とはいえ、まだ自分がいったいどうなるのかを聞いていない

食べられないだけで、何かこう、酷い目にあわされるのでは無いかと彩輝は内心冷や冷やである

「なぁ、俺をさらっていったいどうする気なんですか？」

（汝には使命がある。それを伝えに来た。詳しい話は山に戻ったときにしよう）

「そ、そうっすか」

ただただ圧倒された彩気はそう返すしか言葉が思い浮かばなかった

・・・・ん？使命？

龍は雷雲を突き抜けた

轟音と雨風に耐えながら彩輝は意識を保つ

「冷たいぃー寒いぃー！！雷うるせぇ鼓膜やぶれるううーー！雨痛いー！！」

すぐ側で鳴り響く雷を龍は巧みに避けながら山の頂を目指す

降り注ぐ頭上の雨は龍の巨体で防げるのだが横風の強風に乗った雨が顔に当たる

「痛い痛いっ！いててててて！！」

（我慢しよ神子殿）

龍は巨大な翼を広げて切り立った岩肌の方へと飛んでいく

正面から見て裏手に回り込んだそこは巨大な崖のような場所になっており、巨大な横穴がいくつもあいていた

そのうちの一つに龍は減速して入っていった

体勢を起こし、地面に着地すると龍は翼を折りたたむ

俺はゆっくりと地面におろされる

立ち上がった俺は驚愕した

そこには俺を連れてきた龍と同じような姿をした龍が１０もいたのだ
龍達はいずれも巨大な体をしており、体に昔についた大きな傷跡が残っているものも見受けられる
彩輝は２２の碧眼に見つめられ、その存在感に圧倒されて後ずさる
そしてその龍が１０もはいるその巨大な洞窟に、不思議な匂いが立ち込める
龍の匂いというやつだろうか？

（恐れずとも良い龍の神子よ）

一際大きく、それでいて体にいくつもの傷跡が残る龍が一歩踏み出した
その一歩は洞窟内を軽く揺らした
おそらくはこの中で一番年をとっていると思われ、俺を連れてきた龍と比較すると長い年月を生きてきたかのようなオーラを纏っているように彩輝は感じた
おそらくはここの長なのであろう
鱗は汚れ、傷だらけ。翼は何カ所も破れている

（我らは紅龍一族の者である）

「紅龍一族？」

（蒼龍、紅龍、翠龍、白竜、黒龍。龍族はこの五つの種族に分けられる。もっともお主ら人の世では別の分け方をするらしいがな）

「それって色で分けてるんですか？」

彩輝は予想したことを聞いてみる

蒼、紅、翠、白、黒

どの種族にも色が入っている

そしてその予想は的中した

（龍族の色は我々の始祖、虹の風刺龍様が生み出したものだ。五つの色を持つ虹の風刺龍様は龍族を５つの部族に分け、それぞれが支配する地域を決めたのだ）

「虹の不死龍・・・。そういえばさっき俺のこと龍の神子って言ってて俺の血は虹の不死龍の血だって・・・」

後ろを向いて俺をつれてきた龍の方を向いた

龍は唸っただけで特に何も言ってこなかった

（左様。お主は龍の王である風刺龍様の血を宿す身。我らは太古より風刺龍様の血を宿す人間を龍の神子と呼んできた）

「ちょ、ちょっと待てって！なんで俺がそのなんだっけ？不死龍とかいう奴の血を引いてるんだ？それに何でそれが俺ってわかるんだ？」

（我らにも詳しくはわからぬ。一定期間で人界の世界で神獣の血を受け継ぐ人間が現れるようになり、その者達を神子と呼んだ。神子は神獣の血をその身に宿し、神獣の納める種族の者達と心通わす事ができるという）

それでか。俺がドラゴンと話できているのは

それに元から龍に人の言葉を話すことは無理なはずだ

声帯の構造上あり得ないからな

「でだ。俺がその神獣？とやらの血を引いてるからって言われてもさ、それがどうしたんだ？」

用も無しに俺を連れ去ってくるわけない

それも低知能な獣と違い、ドラゴン達は俺と会話できていることから高い知能を持って行動している

だからこそ、何かしらの理由があるはずだ

「理由ぐらい聞かせてくれよ」

彼らが俺を連れてこようとしたのなら、チルさんが怪我した事やアルレストさん達を騒動に巻き込んでしまったのは俺のせいということになる

そんな事を考えて見たがおそらくこの思考は読み取られているはずだ

先ほども口には出していないのに何回か龍は俺の考えを読み取っていた

つまり、心を通わせるというのは口に出さずともお互いの感情や考えが読み取れるということだ

（ふむ。時にイセルアよ、腕は大丈夫か？）

龍の方も俺の考えを読み取って思い出したのか俺を連れてきた龍の腕が片方無いことに気がついた

そこで俺を連れてきたイセルアと呼ばれた龍が俺と龍の長との会話に入ってきた

（大丈夫だ。止血はできている。それに元から覚悟の上だ）

「覚悟の上って・・・どういう・・・」

（はじめからお前が広い場所に強い力を持つ者と出てくる機会を待っていたのだ）

「？？？」

意味がわからず彩輝は首をひねった

（我らはあまり人とは干渉しない。それは人が我らを恐れるからだ。何故ならばそれは我らを殺せる力を持たぬからだ。それ以前に傷すら付けられぬだろう。故に我に同情してもらわねばならなかった）

「同・・・情？」

（たださらうだけでは確実に我をお主は悪だと思ってしまうだろう。何故なら人は傷つけた者を怨むと言うではないか。となればお主が我らの話を聞かぬという事は避けたかったのだ）

「だからチルさんと一緒に出てくるのを待って自ら怪我を負う真似をしたってことか」

確かに彩輝の心の中では腕を失った龍に対して多少の同情をしていたところがある

龍に連れ去られたときも、チルさんを怪我させたときも、目が覚めたときには憎しみ一つ抱かなかった

俺自身が龍の血を引くということが関係していたかもしれないけど、確実にあの時点で龍が俺に語りかけられたとしてもたぶん龍には恐怖しか感じなかったはずだ

思考が恐怖から入れ替わったのはいつからだったか？

（神子殿、お主にはやってもらわねばならぬ事がある）

そういえばさっきあの龍も言っていたなぁと思い出す

「俺が。俺がその神子って存在なのと関係がありますか？」

（そうだ。神子には神獣様の力の解放をやってもらわねばならぬ）

「よくわからないんですけど俺がそれをしなかったらどうなるんですか？」

（次の年になるまでに力の解放を行い、大地を満たさねばその土地は次の龍の月が来れば痩せた大地となるだろう）

彩輝は思う節がありそれを訪ねてみた

「もしかしてその力ってマナの事ですか？」

（人の世ではそういうらしいな）

なるほどね

神獣自体、神ってついてるからよっぽどな存在なのだろう

そしてその神獣がもつ力。言い換えればマナを解放させる力を俺が持つらしい

そういえば神獣はそれぞれの地域を守護するとか言っていたな

虹水の月

火翼の月

金閣の月

土天の月

風龍の月

氷牙の月

星音の月

夜眼の月

白翼の月

これらは一年周期で訪れる月の名である

もしかしてこの世界にマナが満ちてるのってこの解放とかいう事をしてるからなのだろうか

（いかにも。９の神獣が守護する地域のマナは一年おきに自らの月が来るまでに一新しなければマナは次第に大地を離れ、やがてマナを失った大地は生き物が住めぬような土地と化していくだろう）

「な、なんだよそれ・・・。もし誰か一人がさぼったらその土地完全にアウトじゃないか」

一年おきにマナを解放することが神子の仕事ということは毎年神子は変わるということか

（それは違う。各地域の守護地にはそれぞれの守人がいてその神子が代々力の解放を行ってきた）

「え？ってことは神子って一年おきにやめるものじゃ無いって事か？」

（神子は生涯を通して神子である。そのものが命尽き果てるとき、次の者にその使命が託される）

「え、ってことはもう前の守人は・・・死んでるってことか」

（いや、今回は特別だ。前年までの守人はまだ生きておる）

「特例？何で突然守人が俺に変わるわけ！？しかも俺この世界の人間じゃ無いのに・・・」

（我らにはわからぬし他の守護地がどうなっているかは知らぬ。が、我が盟主、風刺龍様のお着きの神龍様が今年の守人がお前になったことを我ら伝えに来たのだ）

「あー、なんでこうなるかなぁ・・・・」

頭をがりがりと掻く

何がどうなってこうなる！？

また面倒な事が増えたじゃないか

しかも今度は俺がこの大地にマナを満たす役割を果たさないといけない？なんじゃそりゃ・・・

俺ってこんなにトラブルに巻き込まれ型だったか？

そんなの漫画やアニメの主人公の体質だろ！俺そんな主人公じゃねぇし！

「と、とりあえず確認なんだけど、俺しかできないんだよねそれ」

（論ずるまでもなくお主、龍の神子殿しかできぬ事だ）

「で、これをしないと次の年からはこの土地は不毛の大地となると」

（不死龍様の力が途絶えればそれは大地の死を表す）

これは引き受けざるを得ない

世界を転覆させようとする輩ならまだしも、全くこの世界に関係のない俺がこの世界の人々を苦しめる訳にはいかないよなぁさすがに

「ふむふむ・・・なんだこの超絶異世界ライフ・・・普通にやってもこうはならねぇ。絶対ならねぇ」

（神子殿にはもう一つ、やってもらいたいことがあるのだ）

「まだ何かあんの？」

ぶつぶつと呟いていたところ、さらに注文される

あの・・・これ以上重荷を増やされたらたまらないんだけど

（神子殿には代々、龍の卵を授けるという風習があるのだ）

「はい？卵？」

（ついて来い神子）

そこで一匹の龍がくるりと反転した

狭い中起用に尾を動かして後ろを向いた龍は洞窟の奥へと入っていく

左右には龍が立っており、俺は歩いていった龍が立っていた場所を抜けて洞窟の奥へと向かった

洞窟内は薄暗く、ごつごつとした岩肌がひんやりとした冷気を放っている

蜘蛛の巣一つ無く、視界の隅でかさかさとうごめいた一匹の虫を龍は小さな息吹に炎を乗せて燃やしてしまう

どんどんと奥へと入っていく

予想以上に深い洞窟で奥にはほとんど光が差し込んでいない

この山脈では常に雲が空を埋め尽くしているため光があまり差さないのである

意外にも外ではずっと雨が降り続き、雷の音が絶えないというのに洞窟内はあまりじめじめとした感じがしなかった

そのために奥へと行くごとに闇はさらに深くなっていく

そこで彩輝は足を止めた

頭上に居る龍の息の音がかすかに聞こえる

だがそれだけではない

もう一つの息吹が闇の向こう側から聞こえてくる

「何が居るんですか？」

（誰が、の間違いだ）

目がゆっくりと慣れてくる

地面に横になるそれは他の龍同様に紅い鱗をした龍であった

（紹介しよう。我が花嫁、イリスだ）

横たわる龍はゆっくりと首をあげ、こちらを確認する

（イリスよ。龍の神子殿だ）

どうやら龍同士の会話でも俺に聞こえるようだ

心に語りかけるとはいえ、実質には会話と同じなのか
ただそれが耳で聞き取るのではなく、心の中に直接響いてくるかの違いなだけである

（龍の神子には代々、使い魔として龍子が送られる）

「え？龍子って・・・龍の子供ってことですか？」

（龍子は9年に一度、龍の月になると龍の神子によって孵化される）

「って俺が孵化させるのか！？しかも9年に一度なのに今年がそうなのか！？」

（いかにも。地上に住む龍族は5種、そして龍族はそれぞれ9年に一度、龍の月になると一つの種族に卵を一つ産む。そして龍の神子はそれを孵化させる役割も兼ねているのだ）

うぇ、責任重大・・・

（5つの卵のうち、最初に孵化させた卵の龍子は神子の使い魔となる。他の種族の卵は一つの卵が孵ると同時に連動して孵化する）

「で、あなたたち夫婦が今年のその紅龍種族の卵を産む役目にあたったと」

（そうなるな）

一端整理しよう

ちょっとややこしくなって頭がこんがらがってきはじめたので彩輝はもう一度整理することにした

「まず、俺は龍の神子ってことでマナを解放してこの周囲に行き渡らせるという役目があると。それは毎年あって今年は何故か俺になってしまったと」

（うむ）

「で、龍の神子は9年に一度龍の子供を孵化させて使い魔にすると。一族の繁栄がかかってるじゃねぇか・・・」

なんで自分がこんな大役をしなければいけないのやら

「あれ？でも9年に一度孵化させるって事はさ、それまで使い魔だった龍はどうなるんだ？」

（9年も経てば龍は人の手に負えるような代物では無くなる。そして使い魔となった龍子は神龍へと進化する。そのときには人の手を離れ、不死龍様に仕える事になる）

「別れが辛そうだな。9年か・・・。あのさ、気になってるんだが俺はこれからも神子をやらなきゃならないのか？」

神子の交代は現存の神子が死ぬとき

これまでは血族で受け継がれてきた重大任務も今では全く関係のない俺の手に握られている

俺が死んだ場合どうなるのか

まず子供も血族もこの世界には居ない

そもそも俺自身が元々の神子の血族じゃない時点でおかしい

っていうか今から死んだ後のこと考えてもなぁ・・・

しかも異世界の後の事を

俺の居るべき世界じゃ無いというのに

（どうだろうな。神龍様は神子変更の事しか伝えなかったからな）

俺が神子になったことのみしか知らされていない・・・か

第一俺がここに来る事自体本来はあり得なかったことだ

予期せぬ事がどんどん起こっていくが、所詮俺たちは世界に合わせるしか無い

選択肢なんて無い、小さな存在なのだから

「まぁいいか。死んだ後の事を考えても仕方ない。俺が来たときに龍の神子になったのなら俺が居なくなったら代わりに誰かがなるだろう」

（深く考えても結論は出ぬしな。さて本題に戻ろう。神子殿、イリスのところへ）

俺は言われるがままそのイリスと呼ばれた龍に近づく

先ほどの龍と比べて体のゴツゴツ感があまり無く、どちらかというと丸みを帯びているように感じる

俺は首をあげたイリスの顔の前に立つ

イリスの鼻息が彩輝の髪を軽くたなびかせる

（我が子をよろしくね。小さな神子さん）

龍がゆっくりと体を起こした

その巨大な体に守られていた巨大な卵が彩輝の目の前に姿を現した

白く、そして見るからに厚そうな殻には地面と龍の鱗が擦れた痕がうっすらとついている

俺はその卵に触れる前に一つ聞いた

「俺が、いやちがう。あなた達は、本当に見ず知らずの俺に我が子を預けていいんですか？」

我が子

自分には子供は居ない。まだ学生だし

だが、子は親を知って育ち

親は子を知って親となる

俺は家族と一緒に暮らしてきた

今では離ればなれだが、一緒にいるというのはそれはもう俺が生まれた瞬間から決まっていた事だ

俺は母の温もりと父の逞≪たくま≫しさに育てられた

母の優しさと父の背中を知って育ってきた

俺は意識はしていなかったけど、幸せな時間を過ごしてきたと実感できる

親にしてみれば、子供はどういったものなのだろうか？

どういった感情で、どんな気持ちで俺を育ててくれたのだろうか
今の俺にはわからないけど、それは絶対に嫌な事じゃ無かったと思いたい
そうでなければ、子供を産みたいとは思わないはずだ
子は願って生まれてくるものだ
そしてその子を・・・俺なんかに・・・

「俺なら、渡したくは無い・・・。そうしないとマナが無くなったり、不都合があったりしても・・・抵抗は・・・すると思う。わかんないけど」

（ふむ、どうやら我らとお主達との考え方は違うようだな。いいか、確かに子と一緒に育つという事は大事な事だ。仕付けや空の飛び方、いろいろなことを覚えさせなければいけない。だがそれ以上に、龍の神子殿に選ばれるという事は光栄なのだ）

「そんなもんなんですか？」

（私は神子には選ばれなかった。神子に選ばれた龍は成長すると虹龍様に仕える神龍として進化する事ができる。それもまた、子を育てること以上の我々の幸せなのだ）

「・・・本当、俺らとは全く考えが違うってことですね。だけど、俺を信用することにはつながらない。今ここで卵を受け取らずに壊すという手もある）

（そのような事を考える者が龍の神子な訳が無いだろう。神子とは一族を束ねる不死龍様の血を引く者。もし我らを殺そうとしても、それは不死龍様の意志ということになる）

「はぁ・・・ここまで信用されて、俺がそんな事をできる訳ないじゃないか・・・。卵を」

岩の上にぽつんとある白い卵に俺はそっと触れる

その瞬間触れた卵から彩輝にドクンと、しっかりとした鼓動が腕を伝わってきた

それと同時にビシリと卵に亀裂が入る

そこで俺は手を離した

少しずつ、口先で殻を崩すようにして現れた小さな命は途中で嫌になったのか思いっきり殻をまっぷたつにして出てきた

出てきた龍は俺の前後に立つ巨大な姿の縮小版のような姿をしていた

赤い鱗が外気に触れ、小さいながらも長い尻尾はくねくねと犬のようにうれしそうに振っている

親の姿と違うところ言えば四本足で歩いているところと大きさの違いくらいだ

「かわいいお子さんですね」

俺はそっとその小さな龍にむけて手をさしのべた

自分でも珍しいほどに柔らかく笑っているのがわかった

（名前はお前が決めてくれ）

小さな龍は首をかしげて俺の手をまじまじと見つめている

肩に乗るほどの大きさながら、それでも体に対して大きい翼が閉じたり開いたりする

小さな龍はさしのべた手にぴょんと飛び乗りトトトと腕をつたって肩まで移動してきた

俺の顔の横には小さな龍の顔があり、俺はその龍の額を人差し指でなでてあげた

器用に四つの足で俺の肩にとまり、長い尾は首の後ろをまわって反対側で動いている

「名前かぁ・・・。まさか高校生で名付け親になるとは思ってなかったなぁ・・・」

自分の子供って訳じゃないのにさ・・・

全く奇妙な話だよ

なににしようかさんざん迷ったうえ、俺はこの命に一つの名前を付けてあげた

紅い鱗、碧眼の眼が俺の目をジッと見つめる

「お前の名前は・・・」

『ヴェント街道での出会い』

俺は今、山の林を駆け下りている

肩には先ほど孵化したばかりの龍の子供がのっている

雨と風が体を打ち付けながら、茂みを掻き分け全力疾走している

不死龍の居場所はこの肩に乗る龍が知っているというが、まだ会話という会話をしたことがない

そしてその理由というのが今俺が全力疾走しているからだ・・・だと思う

それか生まれたばかりで言葉を知らないのかのどちらかだろう

本当ならば龍に頼んでこのオラージュ山脈の麓の街道まで送ってもらう予定だった

が、実は龍の神子は使い魔を孵化させた瞬間から龍族の助けを借りることができないというのだ

掟だなんだと、とりあえず従わなければいけないなと思った・・・というか恐かっただけだ

おかげで雨の降り続くこの山を歩いて下りることになったのである

どうせびしょ濡れになるのだし、風も強いので歩いて麓まで行きたかったのだが、予想外の事態が起こったのだ

それは山の中腹あたりまで来たところで起こった

突如現れた魔獣に囲まれたのだ

雨と風の音で近くまで接近していたことに俺は気がつけず、気がついたのは龍の子供が警告の鳴き声を発した時だった

周囲を見渡した俺はそこに数体の魔獣の姿を見つけた

その時点でかなり接近されていた為に、俺は驚いた

茂みに隠れていたものの、何とか肉眼でそれを見つけた俺はダッシュで山を駆け下り始めた

木々を避けつつ、ぬかるんだ足場に注意する暇もなく走った

ブルーの毛が茂みから飛び出して走って追いかけてきた

何度か転びそうになったが何とか持ちこたえながら走る

そして今に至る

高いところには確か龍が居た

頂上は今よりも雨風が酷かったために、元々生物が生活するような環境では無いのだろう

そこに住めるのは、荒れ狂う嵐に適応できる龍のみ

そしてその下に行けば魔獣のテリトリーが広がっているのは明らかだ
上に住めないのだ。下に住むしかない
それはまるで食物連鎖のピラミッドのようだった

「どこだここぉーーー！？」

と俺は叫びながら駆け下りていく
迷子なのかも知れないが下に向かって走り続けているのだからそのうち平地に出るだろうと思っている
すくなくとも、足場の不安定な相手の庭で相手しようなんて考えていない

そして気がつけば雨も風も止んでいた
俺は突然平坦な足場が変化したことに驚いて、逆にバランスを崩して転倒した

ごろごろと転がった俺の服は濡れた上に地面の砂をくっつけてどろどろになっていた
靴の中の靴下までびちゃびちゃになり、俺は一度呼吸を整える

しかし、四つんばいになって息を整える俺を魔獣達は待ってはくれるはずもない

いつの間にか追いついていた魔獣の姿はまるで日本の図鑑で見たオオカミのようだった

犬に似ているが、野良犬とも違うオーラが漂って見える

それにこれは前に見た異世界の魔獣図鑑のようなものに乗っていた気がする

ただ名前までは見ていなかった

濃い群青の毛並みは水を弾き、並んだ牙に水が滴る

俺を取り囲んでうなり声を上げる魔獣は４匹

四方を囲まれており、俺はどうも逃げられそうに無い

やばいやばいやばいやばい・・・なんかこう、ありがちなパターンだ・・・

物語が始まったばかりでレベルの低い主人公を襲うピンチ

展開的にはそのあとに誰かが助けてくれるといった展開が待ち受けているはずだがそんな訳無い

現実は甘くないのだ

「現実を見ようね俺♪って語尾に♪つけてる場合じゃねーよ！！」

一瞬、自分でも本気で頭が逝かれてきた瞬間だと思った

そんな俺に、魔獣達は容赦なく一斉に襲ってきた

俺は叫びながら左手で短刀の柄を握り、刃を抜いた

が、それが獣を斬る事は無かった

ドドドッ

何かが刺さる音がする

左右、それと正面に居た3匹の魔獣が飛びかかった体勢のまま、刺さった矢の勢いでバランスを崩した

左の奴は体勢を崩して俺の後ろの方に落ちる

右の奴も同じように体を反らせて地面に落ちた

前方に居た奴の右前足に矢が刺さっているのが見え、とりあえず前屈みになった魔獣避けるために前方回転する

すると後ろから飛びかかってきていた魔獣とぶつかり、二匹は地面に落ちた

そしてへたり込んだ俺の前方から男女が走ってきた

俺が振り返るとそこには倒れた魔獣にとどめを刺す二人がいた

よく見ると前方にはダトルに惹かれた荷馬車のようなものが3台あった

どうやら突然のことでパニックを起こしていた俺はその荷馬車が見えていなかったようだ

確かに妙なことを口走っていたりしたしな・・・俺

「大丈夫かい君?」

俺に先ほど駆け抜けていった男女のうちの男の方が声をかけてきた

手をさしのべられて俺はその手をつかんで立たせてもらった

「いやー、驚いたね。突然林から飛び出てきたと思ったら後ろからグレイが四匹も出てきたんだから!さすがに一人で囲まれたらあれは無理だよなぁ」

「はぁ・・・。あの、危ないところを助けて頂けてありがとうございます」

「いやぁ、なんのなんの。ほら、頭あげて」

俺は頭を上げてその人の顔を見る

急所以外の部分に防具はつけておらず、背中には矢筒が見える
手には弓。ということは彼が先ほどの矢を放った人物なのだろう

「それにしても酷い格好だねぇ。何があったのさ？」

「え？っと・・・」

たぶん龍の神子の話はしない方がいいと直感的に思った

ん、龍？

そこで俺は肩に居たはずの龍の子が見つからないことに気がついた

「あれ？・・・あれ！？」

当たりをきょろきょろと見渡すが何処にもその姿は無い

・・・・ソーレが居ない・・・

ソーレ

それが俺があの龍の子に名付けた名である

イタリア語で太陽を意味するソーレからとったのだ
大きく、暖かく、そして大きな力の意を込めた
鱗が紅く、俺にはそれが太陽の色のように感じられた
ちなみに雌だ

と、俺が当たりを見渡してソーレを探していると茂みの中から首だけを出してこちらをのぞき込むソーレを見つけた
ホッと落ち着いて俺はソーレに歩み寄る
ソーレは茂みから飛び出してきた
ソーレは小さいながらも広げると直径5、６０センチになる翼で空へと飛び上がり俺の方へと飛んできた
俺はソーレを肩に乗せる
ずっしりとした重みが体に伝わり、軽くかぎ爪が痛いと思ったので後で何か餌掛け（えがけ）のようなものが居るかも知れないと思った
あれ？餌掛けって手につけるものだったよな
それだと少し小さいから肘当たりまでのものを作る必要があるかも知れないな

「それ、レッドテイルか!?しかもシェレンフェル種の子供じゃないか!?」

「え?」

驚いた男がソーレを指さした

「シェレンフェル?レッドテイルにも何種類かいるのかな?そうですけど?」

「な、なんでそんなに君になついているんだ・・・?」

「なんでって・・・」

どうやって説明したものか・・・

龍の神子なんて話をしても信じてくれるとは思えないし・・・うーん

とりあえず俺は無難に、山の中で餌付けすると懐かれたと説明しておいた

「そ、それにしても・・・・・・」

男はまだ何か言いたそうな顔をしていた

が、次の言葉は出てこなかった
代わりに俺の後ろから声がかかる

「それ、龍の子供？」

「え、あぁ」

俺はうなずきながら後ろを見る
そこには同年代くらいの女性が立っていた
左手には薙刀のような武器を持っており、右手には先ほど殺した魔獣から剥ぎ取った毛皮が握られている
服や手がまだ死んで間もないグレイの血で染まっている

「珍しいね。君が飼ってるの？」

「え、あー・・・まぁそうなる・・・のかな？」

「いい値段したんでしょうね。金貨２、３０枚くらいが妥当かしら。どこかの貴族なの？」

「え、あ、いや・・・」

「いやさ、こいつ山の中で出会ったんだとよ・・・ありえねーよな・

・・こんな希少種に好かれるなんてよ・・・」

「あ、うらやましいとか思ってるんでしょう」

「ばっ、ち、ち・・・・違うと言い切れないぜ・・・」

「とりあえず質のいいグレイの毛皮四枚も手に入ったんだし、幸運だったわ。最近高騰中だったからいい値段になる」

少女はそういって後ろに止まる荷馬車の方へと歩いていった

荷馬車にグレイの皮を置きに行ったんだろ

「ま、理由はなんにせよ、命が助かって良かったな！」

背中を容赦なくバンバンと叩いてくる

俺はもう一度お礼を言ったところで交渉に入る

「あの、この荷馬車って何処に向かってるんですか？」

「ん？これか？今はグレアント王国に向かってる最中だな。行商人の一団ってところかな。で、俺は警備を頼まれたギルドのリーダーってところだ」

「ギルド・・・とことんしつこいけどゲームかよ・・・」

小声でボソリとつぶやく俺

いやまぁ昔は外国でもギルドとか合ったよなぁ

俺は前に見た異世界の地図を思い出す

たしかグレアント王国はアルデリア王国の東側にあったよな・・・

間には大きな山脈が・・・・

彩輝は遠目でアルデリア王国の方向を見つめる

うっすらと霞がかかっているが連なる山々が見える

たしか街道は大きく山脈を迂回していたはずだ

で、現在地がオラージュ山脈の麓でこの街道がグレアント王国につながっているのだとしたらここはヴェント街道という事になる

彩輝は頭の中からうっすらと記憶している街道の名を引っ張り出してくる

で、彼らが歩いてきた方向から考えるとどうやらリーナから来たようである

とにもかくにも、大きな山に囲まれているアルデリア王国まで、かなり遠いという事がわかった

「遠いなぁ・・・」

遠くを見つめる俺を見て男が聞いてきた

「ん？どこか行くところがあるのかい？」

「え、まぁ・・・。アルデリアまで行きたいんですけどそこまで行きますかね？」

「うーん・・・グレアントでの滞在は一月ほどだしなぁ・・・それからの出発でアルデリアに行くかファンダーヌに行くか決めるのは俺じゃないしなぁ・・・」

この先、街道は二つに分かれる

一つは山を迂回、洞窟を越えてアルデリア王国へと続く街道

もう一つはそのまま平坦な道を歩き続けてファンダーヌへと続く街道

そしてグレアント王国から出発するのが一月

うーむ・・・時間がかかるなぁ・・・

とりあえずグレアントまで行って、そこからはまぁ何とか考えるか。

グレアントには確か一条さんも居たはずだしどうせなら会っておきたいんだよなぁ・・・

「アルデリア王国に行くの？」

「え？」

聞き耳でも立てていたのか突然先ほどの少女が話しかけてきた

頭にはゴーグル

髪は肩にとどくかとどかないかの当たりで風になびいている

先ほどの持っていた薙刀のような武器は持っていないので先ほど持っていたグレイの毛皮と一緒に荷馬車に置いてきたのだろう

「おー、そういやお前はアルデリア王国まで行くんだったな！」

「えっと・・・」

「紹介しよう、っとその前に遅れた自己紹介もしないとな。ガッド・グンデルト。ギルド、『赤銅≪しゃくどう≫の器』のリーダーだ。そしてこっちは商人のツキ・ルベル」

「ツキです。よろしく。早速だけど私と一緒に来ない？」

「利害が一致するんですか？見ず知らずの人を信用するような理由くらいあるでしょう？」

「んー・・・実はですね、十分な資金がそろわずにギルドを一つしか雇えなかったんです。それであなたを引き込もうかと・・・一応は武器を持っているようですけどあなた戦えるんですか？」

「ん？あぁ、これ？」

すらりと銀の刃を抜く

「名は無いです。それに護身用。警備をさせるにしろ俺には正直なところ魔獣なんかと戦えるとは思えないよ？」

それに魔獣と戦ったことがない。つまり経験値ゼロな俺がそんな警備に向いているとは思えない

そんな初心者な俺を本気で雇う気でいるのだろうか？

「ところでお前、何処の人間なんだ？珍しい髪と目の色をしているが・・・」

やはり黒髪黒眼は珍しいのだろうか

さて、どう返答したものか・・・

これもまた真実を言っても信じてもらえるとは思えない

「えーっと・・・結構遠くから来たばっかりなものでこの辺の地理に詳しくなくて・・・えっと、で、道に迷ってこの山で迷子になっちゃってたところなんです」

「ふーん・・・そう」

「で、どうするよ？入る？入らない？一人旅なら家の事を心配する必要は無いしさ」

そう・・・だな

家かぁ・・・

帰るべき場所

今でもそこが俺の帰る場所なのだ

心配じゃないといえば嘘になるけど、そんなことを考える必要は無い

俺は俺で今を精一杯生きるのみ！

「行きます。とりあえずはグレアント王国まで」

「よーし、旅仲間が一人増えたぜ皆の衆！！」

「とりあえず、服を着替えてください」

俺の服は、どろどろだった

忘れてた。どうやって洗おうこの服

「うむ、黒髪黒眼は初めて見るがなかなかに似合うじゃないか」

俺は荷馬車の中から売り物にならない商品の一つである古い服を借りて着ることになった

服はそのうち川か何かで洗うことにしてとりあえずベルトだけを抜き取った

それと携帯音楽器を城に置いてきておいて良かった

そうでなければ雨で濡れて水没していたことだろう

ベルトを腰に巻き、下げ緒を結び直す

ソーレは今も俺の肩の上にのっており、下げ緒を結び直す光景をおもしろそうに見つめていた

「さて、では改めて自己紹介しようか。『赤銅の器』リーダーのガッド・グンデルトだ。よろしく」

差し出された手を取り、握手をしながら今度は俺が自己紹介をした

「彩輝桜です」

なんだか異世界に来て名前を逆さまに言うことにも少しずつなれてきた

最初の方はやはり違和感が残っていたがようは慣れということか

「アヤキ・サクラか。年は？」

「１７です」

「若いっていいなー。俺は２３で独身である」

ばーんと胸を張って独身を強調した

「とりあえずは俺たちは歩いて移動する。警備だからな」

「疲れませんか？」

「これぐらいで疲れるようならギルドはやっていけんぞ」

「はぁ・・・」

「とはいえさすがにずっとそれだといざというときに力を出せないからな。ギルドメンバーが半分に別れて片方は荷馬車で休んで交互に警備をしてるんだ」

「あー、なるほど」

「一日三食は確保してやろう。それと夜の警備は睡眠を取りながらギルドのメンバーと交互に行う」

「あれ？そういえばさっきのえっとツキさん？あの人って商人なんですよね？なんで武器持って前衛だったんですか？」

「彼女？あぁ、彼女は魔術師でもあり、少し前はファンダーヌの騎士見習いだった時期があるんだよ」

「ファンダーヌの？」

「たぶんこの中なら俺の次あたりに強いんじゃないかなぁ？魔術師自体も希少だしね」

「なんでやめたんですか？騎士」

「さぁね？本人に聞きな」

ガッドはピョンと荷台から飛び降りる

大きく声を張り上げギルドのメンバーに休憩の終了を伝える

ギルド『赤銅の器』のメンバーはおよそ１０人前後くらいの少人数ギルドのようだ

「お前も飯と寝床と安全をもらってるんだ。警備とかはしっかりしろよ。とりあえず今は休め。さっきまで結構運動してたみたいだからな」

お礼を言って数分後、俺はドッと押し寄せた眠気に負けて荷馬車の揺れを無視して昼寝を始めた

人と出会えるとは思っていなかったししばらくは一人で食べるものもなく歩かねばならないのかと思っていたがこうして仮住まいも手に入れた

ラッキーと言うべきか

現実はちょっとだけ甘かった

『夜営警護』

ツキ・ルベルは商人である

彼女は渡商人（としょうにん）と呼ばれる部類の商人に入る

一定の場所に居座り続け、そこで生活を営む商人とは違い各地を渡り歩きながら物を売って生活する商人の事を渡商人と呼ぶのである

そして渡商人は町から町へと渡り歩き、他の地域では手に入らないものを買ってそれを別の地域に出向いて売るという形をとっている

手に入らない物をわざわざ遠くに行かなくても手に入れることができるため、町などに定住する人達にとって渡商人はありがたい存在なのである

渡商人はある程度の人数を集めてから町を出る

これは渡商人にとっては当たり前の行為である

人の気配から、つまり町から遠ざかれば遠ざかるほどに多くの魔獣が外をうろついているからだ

渡商人は費用節約のため、共同でお金を出し合って（まぁ要するに割り勘）ギルドを雇う

ギルドは3人以上の人が集まって組むチームのような物である

ギルドといっても決して元の世界のような商工業者の独占的、排他的な同業者組合では無いらしい

ギルドの統括組織のようなものは国ごとにあり、ギルドは国に申請することで依頼を受ける権利を手にする

ギルドもこれまた魔物と同じようにランク付けされており、上からＳＳ　Ｓ　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄとなっている

こちらは見たとおりプラスとマイナスのランク付けがされていない

何故そうなっていないかと言うと、たとえばランクＢを基準に考えてみよう

ランクＢが受けられる依頼はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの四つ

自分の居るギルドのランクの一つ上までの参加が認められている

だが代わりに上位のランクをクリアするのはかなり難しい

このランク分けは全部で６段階評価であり、その一つ一つのランクの差が激しい

もしＢランクのギルドが同じランクのＢを受けたとしても、Ｂランクの中でも達成内容の難しさに高低が出てしまうのだ

そして理由はもう一つある

それはギルドそのものが上位の依頼を受けたがらないのだ

何故か？それは自分の所属するギルドより上のランクの依頼を受け、依頼を達成した時にもらえる報酬が半額以下となってしまうからだ

ギルドへの依頼は簡単な物から危険の高い物までいろいろと入ってくる

掃除、子守などがある中で、中には人捜し、護衛、農村を荒らす魔獣の討伐なんてものも混ざってくることも少なくはない

故に、Ａランクを受けるギルドはほとんど居ない

ランクの付け方が曖昧な中で上位のランクを受ければ、しかもそれが危険度の高い場合だったとき、それは命の保証ができない

無駄な死を減らすためにも上位のランクをできる限り受けられなくする事が大切なのだ

だがもし国を挙げての一大事、それこそ俺が味わったばかりの龍の襲来のような

そういった予想外の突然の事態にも対応できるように一つ上のランクまで受けられるようにしてあるのだ

もちろん受けるか受けないかは自由だが

そしてさすがにギルドだけで生計を立てるには無理がある

他にも多くのギルドがある中で、成功料金だけをもらって生活するにはきつすぎるのだ

ギルドの依頼板には依頼が朝昼夜と3回に分けて張り出される
大体一度に張り出されるのは１０ほどである
そんな数少ないギルドへの依頼をすべてのギルドが受けきることはできない

つまり、大抵ギルドをやっている者は他にも職業に就いている者が多いということになる

要するに、それはある種のギルド同士が自然と行う調整のようなものなのである

そしてそんな中でこのギルド『赤銅の器』はツキ・ルベル達商人が割り勘してギルドに依頼した護衛の任務を受けることになったのだ

本来ならこのような渡商人にはギルドが二つほどつき、人数は２０は超える

依頼書には依頼する人数とギルド数の限度がかかれている

今回の依頼書には定員数１５、ギルド数１という珍しい内容であった

これはツキ達が持つ資産が残り少ないことを指していた

渡商人といえども売れるときと売れないときぐらいはある

集まった商人は皆そのような感じであり、売れ行きに悩みが出ていたのである

売った物は生活費に変わってどんどんと無くなっていく
そこがつきる前に次の町へ行き、物を売らなくてはいけない
売れない町に長くとどまる理由は無いのだ

「と、いうわけだ」

「へー・・・やっぱり仕事って大変なんだなぁ」

彩輝は遠くから来たためにこの辺の事がわからないと言う設定で突き通していろいろと話を聞いていた
おかげでギルドの簡単な仕組みや渡商人という存在も知ることができた

「ってことはやっぱり海産物とかは喜ばれるんですかね？」

「そうだな。海でとれた物は保存食にするか魔術で凍らせて運ぶかのどちらかなんだが冷凍した場合、それを長期間保つために氷の魔術師を雇わないといけないし、それに重くなると持ち運びに時間がかかるからなぁ」

この世界には冷凍したまま物を運ぶことが難しいということになる

これもまた、一儲けのネタの一つになるなぁと彩輝はそっと心にとどめておく

異世界に来てからというもの、もとの世界のいろんな物がありがたく思える

自分で火を起こすことはままならないしな

魔法つかえたら楽なんだけどなぁ～

俺はそう思いながら歩く

それはもう、ひたすら歩く

歩いているのだ

どれだけ歩いたことか

想像もつかない

万歩計の限度ってどんなもんだっけか？持ってないからわかんねぇけどたぶん結構な数字をたたき出したと思う。持っていたらの話だが

夜が近づき始め、そろそろ何処で夜を明かすのかを皆が考え始めた頃だった

「結局お前はどこから来たんだ？」

「え？えっと・・・たぶん知らないところだと思いますよ？日本って国なんですけどね」

「ふーむ・・・確かに、この大陸には無い名前だな。海を渡ってきたのか」

「ま、まぁそんな感じですかね」

暗闇の中で二人の男が焚き火を挟んで小さな丸太に座っている

残った渡商人は荷馬車の中で、ギルド『赤銅の器』面々は荷馬車に近いところで軽く布をかけて眠っている

ただいま夜

太陽が沈み、どれだけたっただろうか

焚き火にうつされた影が地面に伸び、火が揺れては影も揺れる

二人は小さな乾燥した豆のようなものをぽりぽりと食べる

この世界での保存食のようなものなのだとか

不味くはないがおいしいとも言い難い微妙な味だった

「いつまで起きてる気？二人とも」

「カゥッ！！」

「ごめんなさい。三人だったわね」

にこっと笑いながら荷馬車から降りてきたツキがこちらに歩いてくる

そして自分を抜かすなと言わんばかりの顔で足下にいたソーレが鳴く

ソーレは翼をたたみ、犬のように丸まりながら地面に寝ている

「にしても珍しいよなぁ。龍の子供なんて。何者だよ・・・まさか盗賊とか言うなよな？」

「盗めるような代物じゃないでしょ・・・普通に行ったらだけど・・・」

「親龍が追いかけてくるってこともあり得るかもしれないな」

「あー、たぶんないと思いますよ」

「なんでだ？」

んー、どう説明しようか

親公認と言っても信じてもらえる訳ないし・・・

「まぁ、ね。まぁ事情があるって事で・・・・ね？」

「・・・まぁいい。にしてもいいよなぁ。龍の子はランクBだがそれなりにおとなしいと聞くからなぁ。人気もあるだろうに」

まぁ確かにかわいいと言われればかわいいし、かっこいいと言われればかっこいい

ドラゴン自体珍しいもんな

確かに親の龍の事を考えると盗んでくるなんて事はできないしな

「さーて、俺の見張り時間は終わりだ。ツキ、後頼む」

「はい」

ツキの片手には昼見た薙刀のような武器が握られている

ガッドが立ち上がり、背伸びをしてあくびをしながらふらふらと荷馬車の方へと歩いていった

「おやすみ～」

「おやすみなさーい」

「お休み」

「あーでも確かに眠いなぁ・・・俺も早く寝たいや・・・次の交代まで1時間か」

二時間交替で一人ずつ1時間ずらしている

先ほどまではガッドさんが二時間、そして1時間後に俺が到着

そして1時間が経過してガッドさんは眠りについた

代わりにツキが夜営警護についた

そして俺が最後に話した言葉で会話がしばらくとぎれてしまう

うら若き男女がこうして夜中に二人っきりっていうのもなんだか気まずいものだ

アヤキはさすがに直視するわけにも行かず、視線をはずして横になるソーレをなでていた

「ツキさん、確かファンダーヌの騎士団にいたんですよね？」

口が勝手に動いてしまった

視線と手は未だにソーレを向いている

「えぇ。騎士団には1年ほどいたわ」

「若くて女子なのによく入れましたね。あ、魔術師ってのも関係してたのか。でもなんでやめたんですか？」

言った後で後悔したのだが聞いて良かった事だったのだろうか？

「えっと、言いたくなかったらいいですけど」

「別にたいしたことじゃ無いわ。気を利かせなくてもいいわよ」

「あ、そっすか」

「嫌になっただけよ。騎士になったのは私が住んでた城下の治安をもっと良くしたいと思ったから。でも、現実はそうもいかなくて・・・で、やめた」

「城下の治安・・・か」

「それから数ヶ月は城下で地域を自主的に警備していた。だけどふと自分の今のあり方を疑問に思って・・・」

「疑問？」

「このままずっと、この地にとどまっていていいのか、ってね。外の世界を、知りたくなった・・・ってことかな？うん、たぶんそん

な感じだと思う」

「外の世界？」

「そう。世界は広いのに、そしてもっともっと知るべき事があるんじゃないかなって。それを知れたら、うん、もっと自分は成長できるなって思って」

「それで渡商人を？」

「そ。各地を回る職業は少ないからね。これならいろいろな地域を回れるし、いろんな人たちとも関わりを持てるなぁと思って」

世界が違うだけで、人はこうも違う物なのだろうか

「前向きだねぇ・・・宿題で悩んでる自分が情けないよ」

彩輝は頭を掻いて焚き火の火に瞳を奪われた

音を立てながら燃えるその赤い火の熱が体を暖める

手をかざして暖をとる彩輝に向かいに座るツキはふぅとため息をついて空を見上げた

「この世界にも、星があるんだなぁ・・・」

「この世界？」

「え、あ、いや、何でもないよ」

「ん、そう・・・」

「ただ、星はやっぱりきれいだなぁって思ってさ。俺の家からはここまできれいに星は見えなかったからさ」

こちらの世界にも宇宙が存在するのだろうか？

もしかしてブラックホールに吸い込まれた星とかってこっちの世界に来てたりってことは無いよな・・・さすがに

いや、そもそも世界ってなんだろうか

世界が違うとは、星が違うのとどう違うのだろうか

自分がいる場所が分からない。だから別の世界に居ると思い込んでいるが、ここが同一世界の別の惑星なのだとしたら

考えてもきりがない

前の星空は、数え切れないほど無数にある

とりあえず宇宙を飛んで地球を探すという案は無しだ。それだけは確実だ

「あーぁ、眠いなぁ。眠気覚ましのブラックコーヒーが欲しいぜ」

「ブラックコーヒー？」

「あー、まぁそうだな。苦い飲み物だと思ってくれれば」

「苦い飲み物ですか・・・。デス茶のような物ですか？」

「なんだその名前からして飲んだら死んでしまいそうな飲み物は？」

「一部の人には人気あるんですよ、デス茶。飲みます？」

「あるの？」

「デスの葉の在庫はまだ残ってたと思います。二人分くらいならあるかと」

「じゃぁもらおうかな」

眠気が飛ばせれれば俺はそれで良かったのだ

そう。目的としてはそれだけだったのだが・・・

「どうぞ」

一番茶が俺の目の前にコトリと置かれる

焚き火で沸かしたお湯を器に注ぐ

なんだか昔の茶器のような器だ

見た目は石をくりぬいたように見えるがたぶんそんな面倒くさいこ
とはしていないと思うのでやはり粘土のような物を焼いたと思われる

うーん・・・そりゃぁ確かに夜だし暗いって言うのもあると俺は思う

しかし、異常だ

器にそそがれたのは漆黒の飲み物

飲んだら即、暗黒面に落ちてしまいそうな気がする

湯気まで黒いのはたぶん錯覚だろう。そうであって欲しい

臭いはたいしたことは無いが見た目がデスだ

「飲めるの？これ？」

「初見ですか？」

「これは流石に見たことが無いなぁ・・・。っていうか見たくなか
った。これ飲むのか？俺？死ぬぞ」

「いやですね、死にませんよ」

笑顔なのが怖い

怖いよツキさん

「と、とりあえず頂くぜ。見た目で判断しちゃだめだもんな。うん。先生も言ってた」

人を見かけで判断しちゃだめなんだぞ！

顔はブスでも心は白雪姫かもしれないじゃないか！！

ん？なんか違うって？気にしない気にしない

訂正。見た目は悪くても美味しい可能性はゼロじゃ無いはずだ。てかそうであってくれ！

最後のはもはやお願いだった

「いただきます・・・」

ズズズ

ん？

ズズズズ

んんん？

ゴクゴク

もしかしてそこまで酷くない？

あれ？意外に大丈夫？俺生きてるのか？俺のさっきまでの前振りは？ここはパターン的に思いっきり吹く場面だろうに・・・ん？

あれ？あれあれ？あれれれれ？

あ、やべ、後から効くタイプか

ふっ、油断したぜ

「ガハッ！！ゲホゲホッ、ウォエッ！！！？」

盛大に吹いた

吹いたと言うよりもはや吐いたに近かった

クスクスと笑うツキがデス茶をズズッと軽く啜った

「そこまで思いっきり飲む人は始めてみました」

「ゲホッ、ウーェェェッ、やべぇ、ゲホッ、死ねる。余裕だ、イチコロだ、喉が死んだ」

水ー！と叫ぶ俺に水が満たされた器が手渡される

その水を一心不乱に飲む俺を見てツキがニヤニヤと笑っている

「ゲホッ・・・あー酷い目にあった、喉がもうだめだ。暗黒面に落ちた」

喉の奥に違和感が残る

前にティリアさんにもらったフルーナのお茶より２０倍ぐらい苦かった

後から来るって先に言ってくれよぉ・・・

本気でやばかった

マジでやばかった

ソーレが心配そうにこちらを見上げている

やめろ、そんな某ＣＭのワンちゃんみたいな瞳で俺をみるなぁ～！！

「どうぞ。喉の苦みがとれますよ」

そういってツキが渡してくれたのはフルーナのお茶

「またこれか・・・」

「消化を助けるだけじゃなくて口の中の苦みを和らげるんですよ」

「なんというか、あれだろ。とてつもない苦みで感覚麻痺した舌で苦い物を飲んでもそれほどまでに苦みを感じないみたいな感じだろう。あれだ、前に食べた高レベルよりもレベルが低いときの原理みたいな」

後半はもはや自分で言っておいて何を言っているか彩貴にすらわからなくなっていた

どうやら舌だけでなく脳まで麻痺しかかっているとみた

「カウガーッ！」

「んへ？どしたソーレ？」

突如ソーレがバタバタと飛び起きて羽ばたいて俺の肩に止まった
まだあの大きなドラゴンのような咆吼は出せなく、なんというか逆にかわいい気がするその鳴き声が夜闇に響き渡る

「お、おい、静かにしないとみんな起きちまうぞ」

「いや、起こした方がいいと思う。すぐに」

「え？」

ツキは武器をとり、立ち上がる
それと同時に魔法陣が地面に広がった
ツキは置いてあるコップすべてを手に取り周囲にぶちまける

「足りるかな・・・。優麗たる、白銀の、音色。ディフュージョントーン」

その音色は、周囲に居るものたちすべてに向けて放たれた

『眠れぬ夜』

ガッド・グンデルトは唸っていた

というのも風避けとして使おうと思っていた荷馬車裏にギルドメンバー達がぐっすりと眠っていたからだ

明日のためにぐっすり寝たかったが仕方がないと風が直撃する表側へと移動した

小さな布きれを一枚はおり、風で飛ばないようにつけられているロープを二つ地面に打ち付ける

ヴェント街道から遠ざかったとはいえ、まだまだ山から吹き降りてきた風がせき止められるような場所はここにはない

平地が続き、グレアント王国王都まではあと一日とかからない距離にある

明日には到着するであろう

ギルドの依頼は王都到着までの護衛のため、この渡商人達が王都についた時点で依頼は終了となる

そうなれば次の依頼を求めるべくリーナに戻らなければならない

リーナ王国の王都までは片道約４日くらいの場所にある

ギルドメンバーの中には所帯を持つ者も居るため、ギルドは一カ所

在住型となっている

渡り歩くギルドも無くは無いがあまり数は無い

渡り歩くギルドに限ってはどこの国にも所属していないため、登録さえしてしまえば別の国で何をしようと自由なのだ

その利点は自国だけでなく、世界中にギルドの名が広がると言うことだ

だが都合の悪い利点もあり、登録した国のギルド監理機関の目が届かないことにある

ギルドを監理する機関も、もし自国から他国で悪事をはたらくギルドが出てきたとしてもギルドの監理体制では到底手が足りないのである

そのためそのような場合には悪事をはたらかれた国が手配所を張り、他のギルドに討ち取らせるように命ずる事が可能となる

といったある意味暗黙の了承のようなものがある

だがその悪事をはたらくギルドも各国を渡り歩くためになかなか捕まらなかったりする

そういった場合には各国が連携して追ったりすることもあるがそんなことは稀である

それにこのギルドはそういうものではなく、家計を養うためにしている者が半分をしめている

ある意味お小遣い稼ぎのようなものに近い気分で入っている者がほとんどであり、設立者であるガッドもその一人である

ただまだ独身ではあるが・・・

とにかくリーナに帰還して依頼をこなしたという報告もしなければならない

依頼人は国のギルドの監理機関に報酬金額を渡し、その分に見合った依頼書を張ってもらう

達成したギルドは監理機関を通して報酬を手にする

つまり料金は国の機関から出るためなんとしてでも働いた分の報酬をもらうにはリーナに帰還する必要があるのだ

そしてその依頼を達成するのもあと一日ほど

明日以来を完遂したら帰還のための準備を整えなければいけない

早めに寝て体力を蓄えないといけない

瞼を閉じて眠りに入ろうとするがどうも寝付けない

何なのだとガッドは上体を布から出して起こす

別に何一つとして異常はは無い

が、何か気になる

こういった時は大抵何かがあるのだ

勘というものはあながちバカにはできない

周囲で頭では理解できないほどの微妙な違いを体が感じ取っている場合があるのである

そして何か違うというのはこの場合、静けさと風の臭いであった

「静かすぎる・・・」

普段ならこの時期は夜になれば虫たちが草原から心地よい音色を出しているはずなのだ

だが今はそうではなく、風になびく草が擦れる音と少し離れたところで座るツキとアヤキという少年のぼそぼそとした会話が聞こえるくらいである

そしてもう一つ、風の臭いだ

普段ならここまで風に臭いはつかない

何か別の臭いが風に混じっているのだ

「ふーむ・・・風上に何か居るのか？」

そう思って横に置いてある弓を手に取ったそのとき、ツキが氷魔法、ディフユージョントーンを使用した

ディフユージョントーンは氷魔法の中でも補助魔法に分類される魔法である

レベル的にはそれほど高くなく、氷の鐘を作り出し、鳴らすという簡単なものである

そしてその空中に浮いた鐘をツキは薙刀の尻で思いっきり数回叩く

反響した音が周囲一体に広がっていく

軽く叩くだけでもかなりの音が出るのだがそれを思いっきり叩くとどうなるか

「だーっ！うるせー！！」

両耳を塞いだガッドが駆け寄ってくる

矢筒を背負っており、弓を握った手で耳を塞いでいる

「早いですね。起きるの」

「ばっか、寝てなくて変な感じがしてたから警戒して起きてたんだっつーの！」

「早く残りのギルドメンバーを集合させてください」

「見たのか？」

「いえ、ですがおそらくかなりの数がいるかと・・・」

「やっぱりか」

「氷の魔術・・・。あ、えっと・・・・何事？」

俺は突如ツキが使った氷の魔術に驚いたがとりあえず二人の様子からして何か深刻な事態だという事を察する

その原因を聞いてみたのだが

「ん、あぁ、グレイが近づいている。もしくは向こうの茂みにすでにいて俺たちを取り囲んでいるかのどっちかだろ」

「うげ・・・」

アヤキは顔を引きつらせてそっと短刀に手を触れる
こんなときのために俺を引き入れたんだな・・・護衛って・・・
まぁでも一人じゃなくて良かった
むしろ一人だったらもう死んでるかもな。最初に出くわした四匹に取り囲まれた時点で

「とにかく、今の鐘でギルドメンバーは起きたと思うのでガッドさんは警備体制につくように言ってください」

「おーけー・・・。運が悪いぜまったく」

ガッドは振り向いてギルドメンバーに事情説明するために走っていった

「えっと・・・何すればいい？」

俺ができることは少ないけれど一応聞いておきたかった

「そうね。戦えるなら前衛になって止めて欲しいけど無理なら自分に向かってきたのだけ相手にすればいいわ」

「う、さすがに前衛は無理っす・・・」

短刀を抜いて周囲を見渡すが何処にも魔獣の姿は見えない

とはいえ油断は禁物

寝ている人たちまで起こすくらいだからよっぽど危ないのだろう

ツキは予備用の携帯水入れを取り出して空中に振りまく

水は雫となり、それをツキは魔法で凍らせる

たちまちにして氷の礫（つぶて）ができた

無数に空中に浮かぶ氷の礫をフロートさせながら荷馬車に上る

そして自分を中心に円形に礫を配置する

浮遊する氷の礫はどれも棘のようになっており、殺傷能力が高くなっている

街道の地面は土になっており、その横は平原になっており、所々腰の当たりまで草が伸びている場所がある

潜むとすればそこしかない

昼間の時のようにまたあの獣が襲ってくると思うとゾッとした

龍と出会ったときよりかは何とかなりそうな気もしたが逆にそういった獣類はリアルすぎて怖い

荷馬車にはガッドともう一人が弓を持って上っていた
きょろきょろと周囲を見渡しているのをみるとどうやら上からでも魔獣の姿は見えないようである

「アヤキ、そこの荷馬車の中にある矢をできる限り持ってきてくれ」
「あ、はい！」

俺はガッドさんに言われた通り、荷馬車の中へと矢を探しにいったおろされた布をまくって荷馬車に飛び乗る
中は暗くてよく見えなかったが小さな明かりを出す石が入った透明な器が合ったので俺はそれで当たりを照らして矢を探し始める
荷馬車の中にはいろいろなものが積まれており、服や鎧、剣や盾、茶葉を詰めた袋や食料品、そして昼に仕留めたグレイの毛皮もあったきちんと皮は革へと鞣してあり、つやつやとしたその毛皮に触れてみるとサラサラとした感触であった
と、そんなことをしている場合じゃないと俺はランタンを置いて矢筒をもてるだけ持つ
一つの矢筒には２０～３０くらいの矢が入っていた

荷馬車から飛び降りて上に居るガッドさんに投げ渡す

それを何度か繰り返し、すべての矢を荷馬車の上へと移動させた後、
俺は光る石が入った器をもとあった壁に掛けた

俺が外に出るとすでにギルドの面々が荷馬車3台を囲むようにして
間隔を開けて立っていた

ツキ以外の商人はすべて荷馬車の中に逃げており、きっちりと布で
入り口を塞いでいるがすぐにあれぐらいなら破られて突破されてし
まうと思うのは気のせいだろうか・・・

とにかく自分の心配をしないといけない

他人を守るためには自分をまず守らなければならない

「気は・・・抜けないな」

「どうしたー？怖じ気づいたか？」

荷馬車の上からガッドがのぞき込んできた

矢筒から矢を取り出し、矢をつがえる

「やるならこれ以上集まってこないうちにしたいな。誘い出すぞ？」

「えぇ。お願い。出てきたところを私が・・・撃つ」

「了解。じゃぁルダも適当に草むらに矢を撃って誘い出してくれ」

「あいよ」

ルダと呼ばれた男も弓を構えて茂みの奥を狙う

「いいかー！今から誘い出す！気を引き締めろ！！３！２！１！！」

二つの矢がビュッと音を立てて茂みの奥へと消えていく

茂みの奥で小さな音がする

「手応えありでぃ！！」

すぐさま次の矢をつがえるガッドとルダの横でツキがフロートさせていた礫をいつでも放てるようにする

そしてすぐに茂みの奥からグレイが出てきた

群青色の毛皮のグレイが前方から五匹、後方から４匹飛び出してきた

茂みの奥からグレイの遠吠えが聞こえ、それを合図にするかのように先に飛び出したグレイの後から何匹もグレイが飛び出してきた

そこにツキがすかさず氷の礫を放つ
放った無数の礫はグレイの体を貫く
何匹かのグレイは致命傷をうけて動かなくなる
最初に飛び出してきたグレイのほとんどが礫の直撃を受け地面に倒れ伏す
その上を飛び越えてくるグレイたちに向かって二人の弓使いが矢を放つが全然足りない

「引きつけて挟み込んで殺せ！そこまで群れは大きくない！」

今動いているグレイの数はおよそ１０匹ほど
前衛の剣士が二人ペアで２つ
それぞれ荷馬車を挟んだ風上と風下に一ペアずつ
街道を挟んだ両側の茂みからグレイは飛び出してくるのでとりあえずはそれで大丈夫である
そして自由に動けるフリーな剣士が４人の剣士が二人ずつ風上と風下にいる
状況に応じて動けるように配置されている

そして後方支援のガッドとルダと呼ばれた弓使いが荷馬車の上から矢を放つ

矢を当てたグレイは多少怯むものの、致命傷にならなかったグレイは矢が刺さったまま前衛の剣士に襲いかかる

アヤキは邪魔にならないように渡商人たちの逃げ込んだ荷馬車の入り口の警備をすることにした

もちろん何かあったら駆け付ける位のことはするつもりだが体が恐怖で動かなくなる可能性も無くはない

事実少し怖かったりする彩輝は左手に構える短刀に映った自分の瞳を見つめて心を落ち着かせる

大丈夫。大丈夫だ

こんなところでは死なない

誰がこんなところで死ぬもんか

「守り抜くぞソーレ」

「かぁーっ！！」

小さな龍が天に向かって雄叫びをあげて俺の肩から離れる

そういえばいつのまに空を飛ぶことを覚えたのだろうか？ヴェント
街道でソーレが茂みから出てきたときも飛んでいたような・・・

本能的なものかと俺は勝手に納得する

離れたソーレは少し上昇して二メートルくらいの高さにとどまる

俺が、何で剣の道に入ったのか思い出せ

何となく？否！

親に言われたから？否！

皆を守れる心と力にあこがれたからだ！そのための力！ここで守れずに何が力だ！

「一匹抜けたぞっ！」

前方に居たギルドの人たちの間をかいくぐって一匹のグレイがこちらに向かって走ってくる

やはり目当てはこの荷馬車か

この中に食料があると言うことをしっているということだろうか

地面に二発の矢が突き刺さる

どちらもガッドが放ったものだったがグレイはきちんと矢の軌道を

見ながら走っていたためにどれもかわされてしまう
ある程度の知能はあるようでただ欲望に身を任せる獣という訳ではなさそうだ
それはそれでやっかいなのだが
一直線に走ってくるグレイに怖じ気づきそうになるが肩に乗りながら唸るソーレの息づかいが聞こえてくる
ここで足がすくんだらそれこそ死んでしまうだろう
殺さなきゃ殺される
仏みたいなことを言っていられる余裕なんてない
こんな獣を狩るなんて行為は初めてだがなるようになるか
「はぁぁっ!!」
短い短刀
リーチが短いためにギリギリまで引き寄せなければならない
そして相手の攻撃を避けることが前提である
こちらの攻撃が届くということは相手の攻撃も届くということにつながる

左腕をスッと引き、右手と足をいつでも動かせるように力を込める

近づいてくるグレイが数メートル手前で大きく地面を蹴って飛びかかってきた

ガッドが三本目の矢をつがえるがもう遅い

ツキは俺なんかにかまう暇は無く、魔術で氷の礫を周囲のグレイに飛ばしてギルドの人たちを援護している

頼れるのは俺の体のみということだ

だけど・・・

見える!!

剣道で鍛えた目はまだいきていた

これまで瞬速の剣を何度も見てきた俺にはその動きは遅すぎた

飛びかかってくるグレイの鋭い爪が射程圏内に入る前に俺は身をかがめて一歩踏み込む

そして斜めに振り上げるようにしてグレイの胸の毛を右手で鷲掴みにする

振り上げると言っても振り切った訳ではなく、つかんだところでその右手を後ろに引く

それと同時に腰の位置、右から左へと俺は剣を振る

グレイの胸が大きくさけ、血がドバッと噴き出した

服に染みこんだ血が服を少しばかり重くする

銀の刃にも血がべっとりと付いており、俺は刀を一降りして血を落とす

が、それでもすべての血が落ちきったわけではないので後で紙か何かで拭いておかなくてはいけないな

にしても・・・ここまでの鮮血を見たのは初めてだな

気持ち悪いものなんだな・・・よく漫画とかアニメとかで吐く場面とかあるけど大げさだと思っていたが・・・

これは慣れだな・・・

「おぉ、動けるやん！」

上からガッドの声が聞こえた

ガッドはすでに矢をつがえて別の場所にむけて矢を放つ

放った矢は見事グレイに命中する

怯んだグレイに二人がとどめを刺す

オオオオオオンンッ！！

突如夜闇に響く一際大きなグレイの遠吠えが聞こえてきた

俺はとっさに身構えた

他の者達も一様に何事かと周囲を見渡す

その大きな遠吠えの後、残っていたグレイは一度人間達から距離を置いた

「あー、くそっ・・・本当についてねぇ。主付き(ボス)かよ・・・」

ガッドが舌打ちをして愚痴を漏らす

どうやら先ほどの鳴き声はグレイの群れを統率するリーダーのものらしい

「今ので仲間を集めなきゃいいんだがな」

「主は私が仕留めます。援護お願いしますね」

ガッドにそう言い残してツキが荷馬車から飛び降りる
ツキは俺の横を通り過ぎ、グレイとにらみ合いを続けるギルドのメンバーを後ろに下げる

「ツキさんって強いんですか？」

俺はとりあえず下がってきたギルドの一人に聞いてみる

「ん？あの子か？たぶんこの中じゃぁ一番強いと思うぞ？今回限りの護衛だしあまり詳しくは知らないけど魔法を使えるって団長から聞いてるし」

「やっぱり魔法かぁ・・・」

何かと魔術師って重宝されるんだな

まぁ確かに強そうだとは思うけど

しばしの沈黙の後、前方の茂みから一匹のグレイが歩いて出てきた
そのグレイは片目を怪我しているのか目を閉じており、大きな傷跡がついている
他のグレイよりも一回り大きな体をしており、流石群れを率いてい

るというだけはある

かなり手強そうに見え、威圧感がある

ボスグレイは片目でしっかりとツキを捉えると天に向かって大きく吠えた

すると左右の茂みからこれまでの倍のグレイが飛び出してきた

戦いは振り出しどころか一気に劣勢にまで陥ってしまう

数的には最初の倍にまで増えてしまった

「一気に仕留めます。主さえ倒してしまえば何とかなります。いえ、何とかします」

ツキはそういって薙刀を天高くに放り投げ、腰から水の入った小さな瓶を二つ取り出す

水の入った瓶はベルトのようなものに結びつけられており、瓶の方を引っ張るだけでほどけるような仕組みになっているようだ

瓶の蓋を親指で弾いてはずすと水を空中に撒く

その氷を一瞬にして凍らせる

今度は先ほどのような小さな氷の礫では無く、少し大きめの氷柱のようなものをいくつも作り出す

ツキは落ちてきた薙刀を手にとって走り出す

一方ボスグレイの方は唸るだけで動こうとはせず、むしろ相手の出方をうかがっていたように彩輝には見えた

ツキが浮遊させた氷柱の一つをグレイに向かって放つ

だがこの氷柱もグレイの周囲にできている見えない障壁に阻まれてしまう

「なんで当たらないんだ!?」

「魔法障壁さ」

「魔法障壁？」

「魔獣はどいつも多少なりとも魔力を持っているからな。極端に魔力が多い奴はその魔力を体に纏ってるんだ」

「障壁・・・・」

ガッドが丁寧に教えてくれた魔法障壁はどうやら魔力の壁がグレイを纏っているらしい

それが無くならない限り、魔術は通用しない

もっともその魔力の壁を破る威力の術を使うというのなら話は別だ

だが大量の水もないここではそんな大きな技を使うことは無理である

「水か・・・・」

大量の水さえあれば何とかできるかもしれないのだがそんな水は何処にもない

そもそもあのグレイの魔法障壁を破るだけの魔法を使えるかどうかも彩輝にはわからない

「え、援護しろ！」

ガッドがギルドメンバーに指示を出す

増えたグレイはこちらに攻撃を仕掛けては来ない

が、逆に攻撃をしてこないのではなく、こちらが怖いのだとしたらどうだろうか

いや、そんな訳ない

あの数なら一気に囲んで攻めてしまえば終わってしまうだろう

こちらが

何かが引っかかるのだがなんだろう

と、そこへ一発の爆音が響き渡る

その爆発は荷馬車三台を取り囲むグレイ達、ちょうど俺から見て右側で起こる

爆発で吹き飛んだ数匹のグレイが地面にたたきつけられる

今まさにツキとボスグレイが接触しようというときにそれは起こる

「畳みかけろ!!」

その声と同時にいくつもの声がグレイの輪をこじ開けて入ってきた

何事だと両者動きを止めてそちらの方へと目がいってしまう

俺の目にうつったのは沢山の男達が剣を片手にグレイ達に向かって突っ込んできた光景だった

『眠れぬ夜』（後書き）

みてみんの方にテストも兼ねて彩輝のイラストをあげてみました
妙なところとかいっぱいありますけど大目に見てください（照

『夜の風』

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

ツキが男に頭を下げた

あの後、グレイ達に囲まれた俺たちを助けたのはギルド『夜の風』だった

人数的には同行している『赤銅の器』よりも少し多い

所詮小遣い稼ぎで集まったメンバーに比べ、こちらは俺たちよりも幾分も実践を積んでいる経験者であった

『夜の風』が戦闘に割っては行ってきたことにより、一気に俺たちも反撃に出て、ツキは見事ボスグレイとの一騎打ちに勝利

ボスグレイは種類的にはグレイと同じなのだが群れの中で力を持ったグレイの一匹はリーダーとして群れをまとめる力を表現するためにその体格を変化させるという

グレイのランクはＣ＋

ボスグレイのランクはそれよりも一つ上のＢ－という事になる

普通の人間なら確実にやられるレベルである

つまりそのボスグレイを倒す実力をツキは持っていたということだ

統率を失ったグレイ達は半分ほどの数を残して茂みの奥へと逃げていった

「気にすんな。人助けだよ」

男はニヤリと笑いながら剃るのを怠っているかのような髭をゾリゾリといじる

戦闘が終わって一同ホッとしたのかその場に座り込む中、こうしてツキは『夜の風』と名乗るギルドのリーダーにお礼を言っている

ガッドも荷馬車から飛び降りて二人の元へと向かっているし俺はすべてが終わったことを悟って荷馬車の影へと腰を下ろした

夜風が涼しく、冷や汗を俺は服の裾でぬぐった

ぬぐいきれなかった微量の汗が風で蒸発するその感覚が気持ちよかった

荷馬車から安全を確認した渡商人が数人出てきて、彼らもまた『夜の風』のリーダーにお礼を言った

俺はそれを座りながら見ている

ソーレは何事もなかったかのように俺の横で翼をたたんで丸くなっている

だが、そんなソーレの姿を見ても未だ俺の中には違和感が残っていた

最も、俺はその違和感を体験したことのない事態に巻き込まれたことでの不安感、解決した後の安息感とどっくんどっくんと動く心臓の音にかき消されていたことが重なって気がつくことは無かった

あー、眠くなってきた

そういやまだろくに寝てないもんな俺

まだ寝るような時間じゃなかったことと自分に振り当てられる警備の時間帯が夕食後から近かったこともあり、まだ今日は一睡もしていなかった

「はぁ・・・眠い」

このまま寝てしまったらどんなに楽か

というか寝る前に服変えたいな

自分が来ている服にはべっとりとグレイの返り血が付いている

殺したのか・・・俺が

虫や魚を殺すのとは訳が違う

同じ命を奪っているのに、何かが違うのだ

「ま、殺さないと殺されてたしな」

今の俺にはそう割り切ることしかできない

短刀についた血を俺は大きめの草をちぎってそれで拭き取る

短刀を鞘に収める

「護身用・・・か」

アルレストさんにもらった護身用の短刀を俺はジッと見つめる

身を守った

自分だけでなく、他の人も、守ることができた

それは、いいことだ

自分には何もできないと思って後方に居た

でも、そんな俺でもやらなければいけないことがあった

俺はグレイを一匹殺した

そのおかげで荷馬車に隠れる渡商人達は助かった

それでいいじゃん

俺は深く考えるのをやめにした

そこで俺は妙なものを見つける

ギルドのリーダーに向かってツキが何かを話している

だが様子からして先ほどのようにお礼を言っている訳ではなさそうだ

いつの間にか横にいるガッドも、そして話をしているツキも真剣な眼差しになっている

渡商人達も何か言っているようだが少し遠くて聞き取れない

気になった俺は立ち上がって彼らの元へと歩いていった

途中でソーレが起きあがり、翼を広げて俺の肩に留まる

「そんな・・・」

「どうしたんですか？」

「ん、アヤキか」

ガッドは顔をこちらに向けると目を細める

「お前にも関係あるからな。呼ぼうと思っていたところだ」

「え、俺・・・ですか？」

予想外にも俺に関係があるらしい

俺何かしたか？

疑問に思いつつも俺は首をかしげて男を見つめる

人相悪・・・

俺の一人感想としてはそう言わざるを得ない

好きになれないタイプだな

「なんですか？」

「対価だ」

「対価・・・？助けた事への対価ですか？」

「あぁ。こちらとただ働きは割に合わないんでな。突然だったとはいえ依頼外の仕事だ。何か見合うものを欲しいなと思ってたんだよ」

「はぁ・・・」

「とはいえ俺たちも別に鬼って訳じゃねぇ。そこでだ、何か高価な

ものを一つもらいたいなと思ってる訳よ。こんな夜中に月明かりだけで突っ込むなんて自殺行為をしたわけだし、ついでに言っちゃ悪いが俺達は命の恩人ってわけだろ?見たところ渡商人の商団のようだしよ、何か持ってるだろ?」

「・・・それで?何で俺に関係があるんですか?」

「その龍子を譲れ」

「ソーレを?」

俺は目を細める

一瞬、相手の男の欲望が顔に表れたような気がしたからだ

「あぁ。おそらくこの中で一番高価なものっていったらそいつだろう?」

確かに龍子は希少である

一般には出回らない代物のうえ、龍の子はその希少性から大金で売られるという

龍の子は9年に一度しか生まれない

龍の神子制度が人間にも知れ渡っているのかは知らないが9年で5匹という非常に少ない龍は希少すぎる存在だ

「そいつが一匹いれば何でもできる。売れば大金になるし自分たちが道具として使うことも可能だしよ」

俺はその一言を聞いてため息をついた

道具・・・か

俺自身、こいつの事をどう思ってるんだろうな。なぁソーレよ

少なくともこいつは生きている

道具じゃないことは確かだ

ツキは金貨2、３０枚くらいが妥当と言っていた

この世界ではリア金貨、ベル銀貨、ルド青貨、ガル銅貨が流通している

ガル銅貨１００枚でルド青貨1枚分

ルド青貨１０枚でベル銀貨1枚分

ベル銀貨１００枚でリア金貨1枚分となっている

大抵、民間に行き渡っているのはガル銅貨、ルド青貨、ベル銀貨である

裕福な家なら数枚金貨を持っているであろう

その中でも一般的に使われるのがガル銅貨とルド青貨である

青貨はその名の通り青い金属でできた通貨である

彩輝は出回る通貨とその値段を計算してみる

大体ガル銅貨はおよそ１０円ほどに相当し、ルド青貨は一枚１００円ほどでベル銀貨は１００００円ほどである

そして金貨の値段だが１００００円相当のルド青貨が１００あるのと同じということで一万×１００＝一枚百万円相当の値段が付いている

ただし元いた世界よりも物価が低いため、お金の価値が多少違うが大体こんなものだろう

金貨一枚が向こうの世界での１００万円に相当するというのには流石に驚いた

そして１００万×２、３０枚ということでソーレの値段は大凡２００万～３０００万という事になる

確かに大金だ

めっちゃ大金や

おぉ・・・家が建つ

「お前ってなんかものすごい奴だったんだな」

俺の肩に乗る３０００万

そこで苦笑いする俺を現実に引き戻したのは俺の前に立つ男が声を発したからだ

「冗談じゃない。こいつは渡せません。ていうか商品じゃないです。俺の所有物なんで」

「さっきからそうこのねーちゃんからも言われてるんだがよ、命の代償としちゃぁ安いもんだろ？渡してくんねーかなぁ？」

「勝手に助けに入ってやる事じゃないよな。でも、他に代わりになる物は無いんですか？」

俺は視線をツキへと移す

ツキはため息を一つついて後ろを向く

「とりあえず、私が持ってる一番高価な物を持ってきます。それで考えてもらえませんか？」

「そうだな、まぁとりあえず持ってこい。俺が決める」

ツキはそう言って荷馬車へと向かった

顔をしかめているのは俺だけでなくガッドも同じであった

グレイに襲われるのは予想の範囲内であった

もちろん出会わないという可能性もあったが今回はいろいろと不運が重なってしまったかのように思える

まず渡商人達が十分なギルドを雇えるだけのお金を持っていなかったこと

そのせいでギルドが一つしか雇うことができなかったことにつながった

そしてグレイの群れとの遭遇

群れにボスグレイという群れを統率するワンランク上の魔獣が混ざっていたこと

群れを率いるボスグレイが居るか居ないかでその群れの驚異度はかなり変わってくる

ボスグレイが居れば知能の低い獣であるグレイが統率を取って襲ってくるからだ

そして危機的になった俺たちを助けたのがこの『夜の風』というギルドだったこと

お金があり、十分な人数のギルドを雇えればグレイも簡単には襲ってこなかっただろうし『夜の風』に助けられることも無かった

言ったら悪いが助けられたことへの恩を要求してくる時点でろくな奴じゃないと俺は思った

「いやぁ、もっとこの辺の街道を通りたければギルドをつけるべきでしたね」

嫌味かこの野郎

ガッドも自分のギルドの事をバカにされているようで悔しかったのだろう

右手の拳をギュッと握りしめて耐えている

「もっと護衛をする実力をつけていたらこうはならなかったでしょうに」

ごもっともな意見だな

しかもそれをお前が言うか

ガッドさん、耐えれるかな・・・？

ちらりとガッドさんの顔を見上げてみたがガッドさんはニッコリと

笑っていた

逆に怖いなこうなると

その妙にすがすがしい作り笑いを見たのは俺はたぶん初めてだと思う

人ってこんな笑い方できるんだなぁと俺は頬を引きつらせた

そうこうしているうちにツキさんが荷馬車から戻ってくる

その手には直径１０センチほどの小さな球が乗っていた

これが一番高価な物？と疑いたくなるような物体である

月明かりを反射するその黒い球体をツキは男に差し出した

「これが今私が持っている一番高価な物です。だからこの龍の子は取らないであげてください」

はぁ・・・女の子にここまでさせるって最悪だな俺

不幸の原因の一つは俺にもあるかも知れないな

俺のソーレの身代わりに何かはわからないが高価な物を差し出させてしまった訳だし・・・

とはいってもソーレを渡すわけにもいかないしまさか実力行使で乗

り切るわけにもいかない

「こいつは？」

男も差し出された物体がなんなのかわからない様子で首をかしげている

見た限りただのつやつや光る黒い球だが

「黒玉。宝玉コレクションの一つ」

「宝玉コレクションだと!?あ、あの、黒騎士の生み出した宝玉の一つだと!?んなもんなんでお前が・・・いや、そもそも本物なのかこれ!?」

なんか驚いてるな

黒騎士とか宝玉コレクションとかよくわからんのだが

「なぁ、なんかよくわかんない単語があるんですけどいったいなんなんです？」

俺は隣にいるガッドに聞いてみることにした

「ん、そういやお前は遠くから来たから知らないのか。何がわかんないんだ？」

「黒騎士、それと宝玉コレクション」

「黒騎士ってのは過去幻の話の一つなんだけどさ。大昔に何処からか全身黒ずくめの男が現れて純色宝玉って魔道具を作り出したんだ。そいつが黒騎士」

「それがあの黒い球だと？」

「さぁね。本物かどうかは俺にもわからんしな。宝玉コレクションってのは純色宝玉を指す言葉なんだ」

「全部でどれだけあるんですか？」

「いろいろと噂は飛び交ってるけど一番有力なのは7つあるって噂かな」

「へぇ・・・具体的にどんな魔道具なんですか？」

この世界でいう魔道具とはマナを取り込み魔力を生成することで何かしらの効果が現れる道具の事を言う

マナの吸収はキースイッチと呼ばれる言葉により行われる

マナを溜め込んだ魔道具はそのマナを魔力へと変換し、その魔力を消費して効果を発動させるという代物のことを魔道具という

「キースイッチは『黒翼の堕天使の黒光』」

ツキがそうつぶやくと黒い球は光輝き、そしてその周囲を黒い靄のようなものが覆い隠してしまった

黒い球は差し出す手の中へと同化していく

黒い球が完全にツキの手の中に埋まってしまい、それと同時に妙な靄がツキの周囲を取り巻いた

「能力は闇に紛れる事ができる事と黒翼を使えること」

「黒翼だぁ？」

「今見せる」

ツキはそう言って目を瞑った

周囲を取り巻いていた黒い靄がツキの体をつたい、背中へと集まる

集まった靄はゆっくりと翼の形を作り出しながら大きくなっていく

最終的にツキの背中には黒い靄でできた翼が現れた

黒翼には羽も毛も艶も無く、ただ翼としての形を保っていた

「飛べるけど、私は上手くないから好きな風に練習して使うといいよ」

「どうやら本物みたいだな・・・まさかこんなところで純色宝玉の黒玉に出会えるとはな。世の中捨てたもんじゃねぇな」

「そうですか。黒翼の堕天使の黒光」

ツキはそう言って手から再び黒い球を捕りだした

手のひらからずぶずぶと現れたその球をツキは男に渡す

「んまぁこれでもいいか。こいつも十分な値段するわけだし、今回はこれで勘弁してやるよ」

「どうも」

「い、いいのか？」

「問題ありません。どうせあんな高価すぎるもの、売れませんよ」

「嘘つけ、純色宝玉なら国レベルで珍しいもの好きな王族や貴族が勝手に買い取ってくれる値段まで上げてくれただろうに・・・」

「すぎたことは気にするなってか？」

「まぁそんなところね」

「んまぁいいぜ。これで手を打とう。じゃぁな」

男はそう言うと球を持って仲間達とさっさと切り上げてしまう

「あいつら盗賊って言い直した方がいいんじゃないですか？」

「んー・・・かもね。グレアントの王都についたら手配書はったほうがいいかな？」

「知るか。好きにしろよ」

さて、そろそろ寝るかな

あくびをして背伸びをした俺を突然ツキが呼び止めた

なんだと思い後ろを向く

「別に気にする事じゃないから」

「・・・わかったよ」

俺はそう言って寝床についた

とっくに俺の警備時間は過ぎているのだ

翌日、俺たちは準備を整えて移動を再開した

朝食には軽く乾燥食品をいただいた

何かの干物のようなもので何を干したのかはわからないが噛めば噛むほどいい味が出てくる

にしてもなんなんだろうなこれ。トカゲか？

俺は歩きながら最後にもらった一匹の尻尾をつかんで目線の高さまで持ち上げる

尻尾を摘み、足は固まった状態なので逆さまになっても微動だにしません

油断したらソーレが飛びかかって横取りしてくるのだが今ソーレは就寝中

今回特に彼の活躍は無かったが生まれたばっかりのこの子には少し辛かったかも知れないなと思い俺はソーレを優しく抱きかかえて荷馬車に腰掛けている

にしても、未だに脳内では昨日の出来事が頭を駆けめぐっている

城下に出たと思ったら突然龍の襲撃にあい、連れ去られた俺は龍の神子になっていて妙な使命を背負わされていた

山を下りようとしてグレイに追いかけられ、助けてもらったと思ったら今度はその倍以上のグレイに襲われて

通りがかったギルドに助けられたと思ったらなんだか盗賊みたいな真似をしてきて何か彼女にとって大切なものを奪われたような気がする

それが俺が居たせいでソーレの代わりに差し出すという形になった事も頭の中で渦巻いている

自分が居ても居なくてもあの黒い高価な球を渡すことになっていたとはいえ、自分のせいのように感じてしまう

守れたのか、守れなかったのか

最悪の結果だったのか、最良の結果だったのか

俺の左手は無力だったのか、それとも・・・・

彩輝はため息をつくとゆっくり揺れる荷馬車の横から顔を出す

籠もった空気が一新されて清々しい空気が彩輝の喉を潤す

荷馬車の中にも窓のようなものがついている

窓といっても四角く壁をくりぬいた場所に布をかぶせただけの小さなものである

前方に広がる大きな壁が見えてくる

国外からの侵略や魔獣などから都市を守るためにそびえるその石垣は高々とそびえ立っている

小さな川にかかる橋を越えて荷馬車はゆっくりとその大きな都市へと近づいていく

グレアント王国王都、リッドクルス

それがあの巨大な都市の名前である

あの壁に守られた奥にはいくつもの家や店が建ち並んでいることだろう

そしてここからでも見える、その大きくそびえ立つ城には一国の主が居るのであろう

そして彼女もあそこに・・・

鳥たちが空を飛び交っている

緑の草木が風に揺れている

到着まで、残り1時間もかかるまい

『炎国の王都リッドクルス』

グレアント王国は別名『炎国』とも呼ばれている

アルデリア王国の東側に位置し、北方にはリーナ聖王国、南方にはファンダーヌ王国が存在する

昔は一つの国だったグレアント、リーナ、ファンダーヌ、そしてアルデリアは今も友好的な国交を交わしている

アルデリア王国は水の精霊が守護する地域であり、水を有効に使って大量の食料などを輸出する国である

一方グレアント王国は火の精霊が守護する地域であり、地下深くには巨大なマグマだまりが存在する

そのためこの地域は寒冷期が来るころでも暖かく、また温泉が有名な地域としても有名である

昔からこの地域に住む人たちは熱や炎、吹き出す蒸気などを有効利用して鍛冶職や観光業が発達してきた

各国からは温泉好きの者達や腕利きの剣士達がこの地域に集まるようになり、今では商業的にも他国の追随を許さぬ発展を遂げてきたのだ

人が集まれば文化や情報といったいろいろなものが集まるようになってくる

そしてその恩恵を与えてくれるのが王都から少し離れた場所に位置する大陸唯一の活火山、ゼルタール火山である

ゼルタール火山からは耐えることなく噴煙が上がり続けており、３００年に一度の周期で大噴火が起こるのである

とはいえ前回の噴火は１００年ほど前であり、次噴火するまでにおよそ２００年ほどあるためしばらくは噴火の心配は無い

鍛冶が発達している国であり、かの有名な聖天下十剣もここで打たれたという

また良質な鉱石がとれるところとしても有名であり、魔剣や魔道具などの材料となる魔石の産出国としても各国に大きな影響を与えている

王都に入るための門を抜けるとそこはアルデリアとはまた違った光景が広がっていた

アルデリア王国の王都は少し特別で水の水路が多かったのに対し、隣のグレアント王国では大地がほとんどをしめている

「おぉ・・・そこらかしこから煙が・・・」

温泉地のように多くの煙突から煙が立ち上っている

立ち上る煙は風に流されてすべて同じ方向へと流れていく

荷馬車が止まり、中にいた人たちが外へと出て行く
俺は最後に眠っていたソーレを起こして荷馬車から降りた
暖かい
肌に感じるその暖かさに俺は驚き、また多くの人が居ることにも驚いた
アルデリア王国の第４地区の商業区のように人があふれている
それがまだ王城のある中心部から遠い、入ってすぐの場所ということでも驚いた
「人がすごいですね～・・・」
「あぁ。なんていったって商人から旅人までいろんな奴らがここに来るからな」
よくよく見れば一般民のなかにも鎧を着た人や武器を持つ人も見受けられる
「で、このあとどうするんですか？」
俺は隣に立つガッドさんに聞いてみる

「そうだなぁ・・・向こうに戻ったら『赤銅の器』は一端解散させるからな・・・おみやげでも買っていこうかな～」

これは昨日決まった事だがリーナに戻った暁には『赤銅の器』は解散する予定なのである

昨日のような事件があり、一気に皆の闘志が薄れたのである

簡単に言えば、怖いから止めよう。ということらしい

何度かギルドとしても働いたことはある『赤銅の器』だったのだが今回のような中規模な戦闘になったのは初めてなのだという

これまでグレイの群れに出会ったことは何度かあったものの、今回のようなボスグレイが混じっていることも無く、比較的小さな群れだったこともあり問題は何もなかったのだ

が、今回のような自分たちの数より遙かに多い魔獣が現れ、とてもではないが今のままだと死んでしまうといった危険の方が高いと言うことが彼らにもわかったのだ

半数以上は家族を持ち、家計の助けにするために始めたギルドだった

軽い気持ちで始めるギルドも少なくはない。が、それでも途中で消えていくギルドも少なくは無い

組んだパーティが全滅なんていうのは当たり前

もし外に出たらすぐ隣に危険が迫っているという事と同じであり、
それを自覚せぬまま集まった者達が多かったせいで今回の解散の件
につながったということにも少なからず原因があるだろう

一方渡商人達のほうはここしばらくはグレアント王国での商いを続
けることになるらしい

だが俺とツキはアルデリア王国に向かうために早めにこの国を出る
予定ではある

とはいってもツキもせっかく商業が盛んな国にきたのだから店を出
さねば利益も無い

ということで『赤銅の器』は数日中にリーナへと帰還する予定であ
り、渡商人達はしばらくグレアント王国にとどまり、俺とリーナは
アルデリア王国に行くために近日中にこの王都を離れるという事に
なり、事実上解散となった

解散した俺とリーナは『赤銅の器』に一端別れを告げた

彼らも数日はここに滞在する予定なのでもしかしたらどこかで会う
かも知れない

「でさ、なんでアルデリアに行きたいんだ?」

「私?そうね、届け物ってところかしら」

「誰に何を?」

「さぁ、何かしらね」

教えてくれたっていいじゃん・・・まぁいいか。言いたくないことくらいあるかも知れないし

「で、どうするんだこの後？」

「そうね。とりあえず商業許可証をもらいに王城の近くまで行ってそれから2、3日商売をするってところかしらね」

「王城か・・・」

王都の中央にそびえ立つその巨城を俺は見上げる

城の周りには二つの巨大で白い輪のようなものが浮いている

「なぁ、あれなんだ？あの白いの」

「あれ？あれは魔術防壁。あれで強力な魔術から城を守ってるの」

「へぇ・・・」

つまりあの輪が取り囲む城には魔術で手出しはできないって訳か

どうやらあの巨大な白い輪は城とその周囲を取り囲むようにして防壁を張っているらしい

ツキは一台の荷馬車を引いているダトルの綱を引っ張り、ダトルはそれにあわせて足を動かした

王城のかなり近くまで来た

ツキは商業許可書をもらいに施設に入っていき、俺はダトルと荷馬車の見張りというお留守番を言い渡された

仕方なく手綱を受け取り小さな段差に腰を下ろす

空は青いし路地裏を縫って吹いてきた風も心地よい

「どうしたもんかな」

ソーレはダトルの頭の上で寝ており、ダトルも腰を下ろして地面に伏せている

のどかなひとときだったが隣を何名かの騎士達が駆けていった

変わったことと言ったらそれぐらいである

しばらくしてツキが戻ってきた

「許可とれた？」

「えぇ。問題ないわ」

「んじゃ行くか。起きろソーレ」

俺とソーレは荷馬車に戻った

ソーレは俺から離れようとしない

それ故にソーレをつれて町を歩けない

龍の子なんて連れて外はろくに歩けないからな

そのうち袋か何かに詰めて持ち運びしようかと検討する彩輝であった

渡商人専用の商業許可地域に来る

沢山の渡商人が自らが出向いた地で手に入れた商品をこれでもかという風に紹介している

活気がいいとはこのことだろう

その一角にツキは商座を決めたようでそこで荷馬車をとめて商品を

荷馬車から降ろし始める

俺はソーレが起きないようにそっと荷馬車から降りてツキの荷物並べを手伝い始める

見知らぬ道具を並べ終わった俺はたぶんここにいてもすることが無いのでツキがお小遣いをくれてそこら辺を回ってこいという使命をもらった

というわけで一人で心細いがしばらく当たりを見て回ることにした

そこで俺は王城に行くことを思い出した

王城の城壁の前までつくと甲冑を着た多くの兵が槍を持って城門を守っていた

城壁の門の周りには巨大な堀、といっても水は無く、城と道をつなぐのは巨大な橋だけである

さて・・・どうしたものかなぁ・・・

とりあえず近づかないと・・・ね

とはいっても怖い

甲冑を着た人たちが全員こっちを見ているのではないかと思わせる

無言で立って職務を続けるその甲冑男が纏う雰囲気に妙なものを感じさせる

一人が城の敷地内へと戻っていった

交代でもしにいったのだろうか？もしかして尿意を催したとか？

まぁ一人になった方がやりやすい

と、とりあえずアタックだ！！

俺は橋を渡った

「え、っと・・・すいません。あの・・・」

「ん、誰だお前？」

誰・・・

「えっと・・・彩輝桜と言うんですけど」

「アヤキ・サクラ？知らん名だな・・・。で、ガキが何用だ？」

ふむ・・・俺の事を知られてないってことはおそらく兵達には俺のことを知らせてないんだろうな

まぁ行くなんて言ったわけでも無いし、知らなくて当たり前か

「えと、あー・・・そうだなぁ・・・じゃぁ王女のアルフレアさんか一条さんに俺が来たって伝えてくれませんかね？」

「お前、どこかの貴族か？」

「いや、そういう訳じゃ無いんですが・・・」

「じゃぁだめだな。重要な人間でも無いお前を城内に入れる訳がないだろう」

隣に居た兵士も俺の事を笑い飛ばす

「バカだろお前！なんでお前の事を王女に話さないといけないんだ！？第一誰だよそのイチジョウとかいうの？」

ふむ・・・多少気に障るが一条さんの事もしらないみたいだな・・・

てか嘘でも貴族の子とでも言っておけば良かっただろうか？

とりあえず通って二人のうちのどちらかに合えば誤解は解けるわけだし

失敗したなぁ・・・・

「まぁいいか。しょうがない。また来ます」

「帰れ帰れ。ここはお前のようなガキが来る場所じゃねーんだよっ！帰ってかーちゃんのおっぱいしゃぶってな！ギャハハハハッ！！」

酒に酔ってんのかあいつら？

あんな笑い声なんかだして・・・

とりあえず一端引き上げてもっとまともな兵士に変わるのを待つしかないかな

戦略的撤退？あれ？なんか違うな。まぁいいや

結局言いくるめられて俺は帰路についた

帰り道、俺のおなかがぐーっとなった

・・・腹減ったな・・・

何か食べてから帰ろうかな

もう昼飯時か

とはいえ俺は店の場所も知らない

仕方なく昨日びちゃびちゃになった早見表を乾かして持っておいてよかった

昨日のオラージュ山脈で濡れた文字早見表を俺は一日中洗ったズボンと服と一緒に干しておいた

なんとか乾いたのだが多少文字がふやけたりしているところもあり、多少の翻訳ミスはするかも知れないが取り合えず飯屋さえ探せれば何とかなるかと思い早見表を開く

そして文字と看板の文字を見比べて読むが店名が書いてあるだけで実際何屋なのかよく分からなかったりする

紙をたたんでポケットにしまった彩輝は仕方なく通りがかった人に聞いてみることにした

「すいません、この辺で食事できるところってありますかね？」

「ん？それならあそこのラーデルの店がいいですよ。美味しくて安いですから」

「ありがとうございます」

ら・・・でー・・・でー・・・で、あ、これか。

早見表でラーデルという店の看板を探し、俺はそのドアを開けた

「いらっしゃい！」

さて、どこに座ろうかな・・・

むぅ、人が多いな

さっきの人が言ったとおり安くて旨いのならば人が集まるのは当然

しかもお昼の昼食時というのも重なっているせいもあってか人がごった返している

「相席でもよろしいでしょうか？」

「え？あ、はい」

「こちらへどうぞ」

ウエイトレスのような女の子に連れられて小さな座敷のような場所につれてこられた

先に座っているのは少し大きな体格をした男であった

肩から先は破けており、黒いシャツの上にその破けた服を着ているようである

腕だけを見るならごつい筋肉の上に脂肪だけが付いたような感じであり、腹のふくらみを見るなら脂肪だけのような感じである

うぅ・・・相席・・・ね

男はがつがつとチャーハンのようなものを食べている

と、とりあえず何か頼もうかな

メニューをもらい、解読してみようとするも全く持ってどんな料理なのか想像がつかない

くそぉ・・・博打って訳にもいかないしなぁ・・・

適当に頼んで変なものが出てきても困る

ということで彩輝は簡単かつわかりやすく店員に説明した

「この人と同じのください」

ぴくっと男が動きを止めたが気にもとめないようで漠々とチャーハンを食べ続ける

というよりお米が合ったんだなこの世界にも

まさか米があるとは・・・感激だ

店員は店の奥へと戻っていき、俺は料理を待つため壁にもたれかかった

にしても繁盛してるなぁ。

人はどんどんとやってくる

いったいいつがピークなのだと言わんばかりの人だかりである

お小遣いとして俺はルド青貨3枚とガル銅貨を数十枚もらった
それだけあれば十分にいろいろできるはずだ
そうだなぁ・・・今のうちに店でソーレを入れられる袋を探しておかないとな
ソーレは今ツキに預けており、未だに荷馬車の中で眠っている
故に置いてきたができるだけ早く少し大きめの袋を探さないといけない
でなければソーレをつれたまま出歩けないからだ

「へいおまち！」

これも翻訳機能のおかげか
元の世界で聞いたなんというか・・・ありがちな台詞と同時にチャーハンが出てきた
知らない野菜や豚肉とは違う別の肉が入っていたりするが確かに見た目はチャーハンっぽい

「いただきます」

俺は空腹を満たすためにがつがつと口の中にチャーハンを放り込む

うむ、旨い

ほどよい甘みが噛めば噛むほどにじみ出てくるかのようだ

久しぶりに食べたご飯の味はまた格別であった

うめぇうめぇ

「おっちゃん、勘定ここにおいとくぞ」

「おぅ、まいどあり！」

店内で鍋やフライパンのようなものを振るう男が目の前に立つ男を見送った

男はルド青貨を一枚置いていった

ふむ・・・おつりはいらないとな？

男はおつりをもらおうとはせず、そのまま店を出て行ってしまった

そんななかで別の席に座っていた男達がふとこんな言葉を漏らした

「昔は有名だったのに今じゃただの大飯食らいか」

騒がしい店内の中で聞き取ったその言葉を耳にして俺は出て行った男の出口を見つめる

誰なんだろう、あの人？

昔は有名だから昔騎士だったとかそんなかんじなのだろうか？

立ち去った男に聞くすべはもう無い

というか聞くつもりはさらさら無いが

店を出て俺が向かったのは商人達が店を並べる場所だ

俺はとりあえずここで大きくて丈夫な袋を手に入れようと向かった

手頃な袋があるかどうかは分からないがとりあえず探してみるだけ

探してみようと俺は人混みの中へと入っていく

一つ一つの店を回っていくがどれも見たことのないものばかりを売っていた

とりあえず袋だ

龍を入れて持ち運べるくらいのちょうどいい袋が見つかればいいのだが・・・

しばらく探しているとそれらしい袋を見つけた

「おばちゃん、これ見てもいい？」

「スゲサの草で編んだ丈夫な袋だよ」

ようやく目当てのものにたどり着いたようで俺はその袋を手に取ってみる

隙間もなく、なかなかに丈夫そうだ

「これ、引っ張っても破けないよね？」

「あぁ、もちろんだとも。ダトルが引っ張っても破けないさ」

ふむ・・・じゃぁためしに

「ふっ・・・んぬぅっ!!だーっ、かてー!!」

思いっきり袋を引っ張って破いてみようとがんばってみるが袋はしわ一つ作らず、破けることも無かった

袋口にはひもが通してあり、引っ張ると口が閉じるようになっている

「気に入った。これにするよ。いくら？」

「１０ガルだよ」

「おっけー、銅貨銅貨っと・・・はい」

俺は銅貨１０枚を取り出してしわしわの手のひらに置く

「ありがとね」

俺は袋をもらって店を後にした

「さて・・・することが無くなったがどうしたものかな・・・」

目当ての袋は手に入ったし飯も食った

することがない・・・・

彩輝は周囲を見渡すがとくにしたいことが見つかるわけでもなく、
仕方なく歩き回って疲れたので道の脇に座り込む

「異世界でも・・・人間にはかわりはないんだよな・・・」

だからこうやって国はでき、人々は商売をして・・・・

元の世界と何が違うと聞かれれば・・・違うところなんて無いのだ

住む世界が違うけど、人の本質というものは変わらないのだろうか

グレアント王国は今、王都全体に兵士を配備していた

王都を守るラドルク防壁とその入り口のある門の場所には通常の倍の兵士を配備してある

というのも昨日、オラージュ山脈に住む紅龍、レッドテイル・シェレンフェル種が隣の国、アルデリア王国に現れたという情報が始まりだった

レッドテイルには飛行能力に優れたシェレンフェル種以外にも普通種、レディアル種などが居る

龍について未だ解明されていないことも多くあり、そのうちの一つが生息域の謎だ

龍にはそれぞれ種類がついているのだが、大陸をその龍の色別に分けるとちょうど7つに分けることができるのである

龍は大陸中に住んでいるが色別に分けられるという事もあり、それらをまとめて七龍と呼ぶ

今では七龍は独自の縄張りを持っており、他の種族とは別々の生態系を持っていると言うことになっている

互いに不可侵の条約でも結んでいるかのように、七龍のどれもが他の龍の縄張りを犯さない事はすでに周知の事実となっている

この周辺に住む龍は一般に紅龍と呼ばれ、７つに分類されるうちの一種である

紅龍は鱗の紅い龍の総称であり、種類が違えど紅い鱗を持つ龍は紅龍と呼ばれる

この紅龍の縄張りはグレアント王国、リーナ聖王国、アルデリア王国、ファンダーヌ王国の４つの領域とほぼ同じである

とはいえアルデリア王国に、生息地であるオラージュ山脈から離れた場所に龍が襲来するという異様な事態が起こり、両国とも大あわてである

生息域から大きく離れたアルデリア王国の王都を襲撃した龍はシェレンフェル種という事が分かっており、龍の活動が活発になっているのではないのかという事でグレアント王国は警戒態勢に入っていた

そして新たに入った情報によるとそのアルデリア王国から少年が一人連れ去られたという情報が入っており、さらにその少年を連れ去ったという龍を見たという情報も国内からもいくつか入っている

同盟を結んでいる友好国ということもあり、緊急にオラージュ山脈へと兵を派遣することになった

可能性は薄いがもしかしたらまだ少年は生きている可能性があるからだ

派遣隊を緊急で募集するもなかなか人数が集まらない

流石に龍という圧倒的な存在を敵にするような事は誰だって嫌なのである

というか殺されて当たり前のような場所に何故少人数で行かなければいけないのか

助かるより死ぬ確率の方が高いようにも思える

グレアント王国第一王女、アルフレア・シャレル・ヴィルラート・グレアントもそれに苛立ちを覚えた

我が国の兵士は腰抜けどもばかりなのかと

流石に兵達の前に出て行って募るのも手の一つだがそれでは自らやりたいという意志に反し、逆に強制させているような形になってしまう

というわけでアルフレアは今、城の大講堂で兵達でオラージュ山脈へと向かうものを決めさせるように命じ、本人はその確認のためにこっそり隠れてこの光景を見ていた

そして一人で勝手にため息をつくのであった

これはもうちょっと兵士の志気を高めないといけないわね・・・

ただでさえ龍の行動が活発化しているらしいのにこんなにまったりとした空気でいいのだろうか

町の守護に当てた兵以外のほとんどはこの大講堂に集まっている

かれこれ1時間

すでに隊を編成してもいい頃だ

アルフレアも我慢の限界である

もともと短気な性格でもあったのだが1時間も持ちこたえたのは初めてではないのだろうかと思えるほど待ってみたが誰も志願しようとしない

「お、お嬢様・・・」

とっさに隣にいた執事のジュルダがアルフレアの肩を押さえようとする

が、時すでに遅し

アルフレアは大講堂のホールのど真ん中まで行く

意外なことにまだ誰も気がついていない

それほどまでに誰かに押しつけようと必死なのか、皆討論に必死である

「そんなに行きたくないのなら私が直々に行こうではないか」

「お嬢様！？」

幕の裏から発言に驚いたジュルアスが飛び出してきた

腰に携えた護身用のレイピアを抜き放つ

「我は勇敢なる女騎士、フィーナ・グレアントの血とグレアントの名を継ぐ者なり。ここで我が炎の意志を持つ国の主となるべき者が行かずに誰が行くか！！」

一瞬討論をしていた騎士達がそろえて口をぽかーんとあけている

「お嬢様！！いったい何を・・・！？」

「離せ爺(じい)！！このような腰抜けの腑抜けの甲斐性無しどもが我がグレアント王国の炎の意志を通せる訳が無かろう！！私に行かせろ！！」

「な、なりませんーっ！」

その後結局乱心した王女を見て志願する兵が殺到したとさ

「まったく・・・こうでもせねば誰も動かぬとは・・・我が国も落ちたものだな」

「まぁまぁ・・・お茶を入れましたよ」

「うむ。すまんな」

お茶を一口飲み、落ち着いたアルフレアはため息を漏らす

「もちろん全員という訳ではない。中には国のためにまじめになっている兵も少なくはない。だが、いささかやる気のある者無い者との志気の高さに差があるとは思わぬか？」

「そうでございますね」

「ここは私自らが行くべきでは無かろうか？」

「流石にそれはなりませんよ。お嬢様には国を継ぐ第一王位継承権があるのですから」

「そうなのだよなぁ・・・私が第二王女くらいなら誰も何も言わぬのだろうが・・・。とはいえあのような者達に任せてはおけぬしなぁ・・・」

とりあえず彼の似顔絵を美術の学校に行っているという一条に頼んで作ってもらった

これまた異常な上手さで本人そっくりな似顔絵を作ってくれた

さらわれたのがこれまたサクラ・アヤキというのがまた面倒くさいことだ

これでは放っておく事もできやしない

おそらく龍が向かった先はオラージュ山脈。一番近い我が国が行かねばさらに面倒なことになる可能性もある

「何がどうなってこうなるのやら・・・」

「お困りですかい王女様っ？」

「おお、ユイか」

王女の部屋にノック無しで入ってきたのは一条唯であった

ジャケットを肩にかけ、汗をタオルで拭いている

こちらの世界に来てからというもの、何故かこのイチジョウ・ユイはひたすら走り込んだりして運動をしている

それにしてもこの年でこの若さというのがまた信じられない

何をどうしたらこんな若さを保っていられるのやら

王女も女としてその美しさには軽く嫉妬するのであった

「少し我が兵の質に・・・な」

「んん？」

「何でもない。忘れてくれ。さて、それよりもよく落ち着いていられるな。知り合いが龍にさらわれたというのに」

「そうだね。じゃぁあわてればいいってのかい？」

「いや、別にそういうわけではないのだが・・・」

「でしょ？私は無力。魔法が使えるわけでも剣の腕がたつ訳でもない。魔力自体は私にもあるらしいけど使い方分からなきゃ・・・ねぇ」

こちらの世界に来てからというもの、何度も一条は魔法の練習をしていた

だが進展という進展は無かった

魔力を操るどころか魔力を感じることすらできない事にしばらくは苛立ちを覚えたものだ

今は何とかマナや魔力を感じ取るまでには至ったものの、まだその先へは進めていない

「私が騒いでも何も変わらないからね。効率的に行こうよ」

「むぅ・・・私としては今すぐにでもオラージュ山脈へと駆け付けたいのだがなぁ・・・」

「とりあえず私はできることをやるだけやった。その結果が・・・ちょいとまっててね」

一条は部屋を出て行った

しばらくして戻ってくるとその手には紙が山のように積まれていた

「な、なんだこれは？」

「おぅ、似顔絵」

どさっという音が聞こえてきそうな感じで一条は机の上にその紙山を乗せる

そのすべてにはサクラ・アヤキの似顔絵が描かれていた
しかも一枚一枚手書きの上、すべて水鏡を通して見たときに見た彼の顔そっくりなのであることにアルフレアは驚きを隠せなかった
たった一度、水鏡を通して見ただけなのに、よくまぁここまで描けたものだ

「こ、こんな枚数をいったいどうやって・・・」

「ふふふ、禁則事項だよ～」

ニヤニヤと笑いながら一条は紙山のてっぺんをぽんぽんと叩く

「これでこそ美術学科に進んだかいがあったというもの。まぁ手配書みたいなものとして使えばいいさ。だけど流石に作りすぎたな・・・。もしかしたら逃げ出して町に来ている可能性も無くはないからね」

「ふむ、その可能性は考えていなかったな。オラージュ山脈からならば一日かかるかかからないかでつく位置だからな。居てもおかしくはないな」

「やっぱりビラ配りするよりかは電柱みたいなところに貼り付けたいな。電柱なんか無いだろうから壁か何かでいいが」

「ふむ・・・では早速暇な兵どもに命じてやるとするか」

「というわけで、お前達にはこの紙に描かれた人物、アヤキ・サクラを探し出してもらいたい。そのためにまずやって欲しいことはこの紙を王都内に適当にはりに行ってくれ。なぁに、王族命令とでも行っておけば大丈夫だ。とはいえ、民家や店などには張るなよ？」

とりあえずオラージュ山脈への派遣隊と居残り組も含めてビラを配る派遣する兵達にもこの顔は覚えてもらわなければいけない

アルフレアはうんうんと手配書が配られる光景を見ていたのだが・・・

「あ・・・あっ、あーーーーーっ!!?」

兵の一人が突如大きな声を出した

何事かと周囲の兵達もその男に振り返る

「こっ・・・こ、こいつは・・・・」

汗をだらだらと垂らすその兵は、昼間アヤキが城壁の門まで来たと

きに追い払った兵士だった

『彩輝、捕縛される』

「キュイイッ？」

袋から顔をのぞかせるソーレは周囲をきょろきょろと見渡し、最終的に首をかしげて鳴いた

試しに買った袋にソーレを入れてみたのだが大きな羽も尻尾もすっぽりと入り、サイズもちょうどいいのか袋から顔をのぞかせるカンガルーのような状態になっている

大きな袋はナップザックのような感じになっており、彩輝の肩にかけられていた

「でもまぁちょっと重いかな・・・」

苦笑いしながら俺はソーレの頭をなでてあげた

うれしそうにするソーレを見ていると和む

家に犬とか居る家ってこんな感じなのかなぁ・・・これならペットを飼ってる気持ちも分からなくはないな

和むぜ。

お茶と和菓子が欲しいなぁ・・・。

爺臭いかな?とか思いつつ暖かい陽気の中、彩輝はツキの後ろで座って行き交う人々を眺めていた

が、すぐに飽きてしまい、ツキは商売をしていて忙しく、することがない俺は昼寝することにした

ただでさえ昨日はいろいろなことがあり、筋肉痛が酷いのだ

運動不足だな俺。

そのうえ睡眠時間も少なかったのでそれも相乗効果を発揮して眠気を誘っていた

素直に眠気に身を任せるのも悪くないかもな。

そのうち自分を追い返した兵が交代するだろう。それまで昼寝することにしよう。うんそうしよう。

横になった俺の横に、袋から出てきたソーレが寄り添う

「バカ、お前は窮屈だろうが入ってろ。さらわれても知らんぞ」

いつ何処でさらわれてもおかしくないからな。歩く大金みたいな奴だし

出てきたソーレを俺は袋の中に戻し、再び横になる

今度はソーレの入った袋を近くまで持ってきてしっかりと口を締めておく

首が自由に動かせる緩さまで締め、俺は大きなあくびをする

一人と一匹が暮れゆく太陽の暖かな陽光に包まれて居る中、王都の中央はあわただしくなっていた

すでに日は昇りきって、降下の一途をたどっている

「なんとしてでも今日中に探し出すのだ！」

アルフレアがお立ち台のような場所から叱責する

あれから数時間経つが未だ手がかりが無い

数人、彼を見た飯屋の主人やすれ違ったという人間に出会えたものの、今どこにいるのかを知るものは居なかった

赤く、薄いドレスを身に纏う王女の後ろに一条があらわれる

「軽挙妄動っすなー」

「けいきょもーどー？」

「深い思慮無く軽々しい行動するってこと～」

両手を頭の後ろに持って行き、にひひと笑う

「この件に深い思慮がいるのか？」

「さぁ、どうかな～」

分からない

彼女の考えることがよく分からない・・・

アルフレアはため息をついて眉間を押さえた

妙な行動や思考を取るのが彼女の世界の普通なのだと思いたいのだが、それでもその頭の中を読み取るのには苦労する

ある意味彼女は独特な人間だったりする

いったい何を考えているのやら

とにかく今は彼の捜索を早急に行うべきである

追い返してしまったというのは不味かったがまだ生きているという点とすでに王都についているという点においては幸運だった

これで兵を向かわせずにすむ

その分を捜索に当てることができる

そうすれば早めに彼を見つけられるだろう

ビラには城までつれてきた者には金貨1枚の贈呈が記されている

「結構な大金を出すんですね」

「主要人物だからな」

「主要・・・ね・・・」

唯は顎に手を添えた

いったい何をどうしたら自分たちが主要人物になるのやら。特に国に貢献したわけでも無いんだけどなぁ。

自分がそんなに大事な位置にいる人間という訳ではない

自分が死のうが消えようが、この世界の人たちには気にすることは何もないというのに・・・

「おーきーてー」

「あだっ！？」

ガツン！！という衝撃と棒読みの声で俺は起きた

ついでに間抜けな声も出てしまった

後者だけでも十分起きれたと俺は思う

とりあえず俺は頭を抱えてもだえ苦しんでみた

「な、何？」

「今日はこれでおしまい。早めに宿を見つけておかないといけないからね」

彼女のつけるゴーグルがオレンジ色に染まり始めた太陽を反射させたとはいえまだ日暮れには少し時間があると思うのだが

「売れた？」

「ぼちぼち」

「そ・・・」

ツキは残った商品を後ろに止めておいたダトルの引く荷馬車に入れる
手早く、手慣れた様子でかたづけるツキを尻目に俺はまだ眠ったまま
まのソーレの入った袋を担ぐ
その揺れで起きたのかソーレは数回瞬きをして俺の方、つまり上を向く

「おはよう。今から宿探しだとさ」

「カゥ？」

「やっぱかわええなお前」

本当にこんなにかわいい奴があんな恐ろしい姿に成長するのかちょっと疑問に思えてきた

「和風でもなけりゃ洋風でもないな・・・。足して2で割った感じか？」

俺はソーレを押し込んだ袋の口を開いた

部屋にはベッドが一つ、そしてタンスが一つと緑地のカーテンが窓に
床はフローリング、全体的に部屋はシンプルだった

「することねぇ・・・」

夕食は後々食堂のような場所で取るらしく、その時間になるまでは
自由である

というかお金を彼女に出させっぱなしでなんか男としては意気消沈
する

アルデリアについたとしても返せるお金が無いしなぁ・・・

所持金５円。しかも向こうの世界の

使えない上に俺の気が晴れない

窓が風でがたがたと揺れる

ベッドに横たわり、天井を見上げると同時に部屋をノックする音が
響く

「どうぞー」

入ってきたのはツキだった

俺は体を起こしてドアを閉めるツキを見つめた

ゴーグルははずしており、服装も結構ラフな感じになっている

俺の服装は今、洗って乾かした元の世界の服装に戻っている

流石に泥全部を落とせたわけでは無いがかなりきれいに戻っている

「いや、たいした事じゃないけど、まだ合ったばかりだけどお互いのこと何も知らないから」

ふむ・・・そういえばそうだな

アルデリアに行く目的や相手の素性など、まだほとんど何も知らない

「そういえば、そう・・・だな」

「私はツキ・ルベル」

「俺は桜彩輝。だけどたぶんここの通りに名前を言うなら彩輝桜が正しいかな」

俺はベッドの上であぐらをかき、ツキは椅子に座った

ぎしっとベッドが軋んだ

「あなたの国じゃ名前が後なの？」

「まーね。でもまぁ俺の事は彩輝でいいよ」

「わかった。じゃぁ私のこともツキでいい」

「おーけー。じゃ、簡単な自己紹介も終わったことだし、何から話そうかね？」

「共通目的かな」

「俺がアルデリアに行くのは・・・そうだな。今のところ俺の帰る場所がそこしかないからかな」

自分で言っておいてなんだが俺の帰る場所は今、アルデリアなのだ

そりゃまぁ帰れるなら元の世界に帰りたい

が、この世界での俺の居場所は何処なのだろう？と問われたら、俺はどう答えるだろうか

やはり、アルデリア王国が帰る場所なのだろうか

ちがうな。ここは帰る場所じゃない。居場所だ

帰るって言葉を使えるのは、元の世界の、我が家にという意味を持

つときだけだ

「私は合わないといけない人が居るから」

「そういや前もそんなこと言っていたな。あのときは教えてもらえなかったけど」

「いろいろあって薬をおじいちゃんに渡さないといけないの」

「おじいちゃん・・・って自分のだよな？」

「うん。数ヶ月前から病に倒れて、それでその薬を取りに北方の方まで取りに行っていたの」

「へぇ、でもそれだったら直接アルデリアに行った方が早いんじゃないの？」

ふとした疑問をぶつけてみる

アルデリア王国は縦に伸びる二つの山脈、レサド山脈とシドア山脈が王都を挟んでいる

北方から来るなら直接その間を通って来た方が早いはずなのだが・・・

「あそこはだめ。あそこは荒れ地だから魔獣がいっぱい居るの」

「魔獣かぁ・・・。そういやこいつも魔獣なんだよな」

ソーレは昼にたっぷり睡眠をとったため、今になって元気よくはしゃぎはじめた

今はちょうどベッドの四方についている小さな支柱のような場所にとまって翼を舌でなめている

「これでもれっきとしたBランクだからね」

「そういや生後一年間の幼少期の間はBランクなんだっけ」

「でも言うほど危険じゃないはず。口から火を吐くのは一週間から1ヶ月の間でできるようになるって聞いたことあるけど」

「へー、やっぱり火は吐くんだな・・・。何というか・・・かっけぇ・・・」

最後にぼそっとつぶやいた声はツキに届いたかどうかは分からないがソーレは聞こえたのだろうか、俺の肩に留まる

「なぁ、魔術師なんだよなツキって。魔法ってさ、俺のいた国じゃ無かったちょっと、いや、かなり興味があるんだが」

「魔法が無いの?そんな国あるんだ・・・。伝わってないのかな?」

「いや、純粋にその国の人たちの体質からして使えないらしいんだわ。例外もいるけど魔法自体が架空の産物だからね。信じる人は居ないし、使い方も分からないからさ」

「アヤキは使えるの？」

「あー、まぁ、使える素質はあるんだが、まだマナとか魔力を感じるぐらいが精一杯ってところかな」

「誰か師でもいるの？でもあなたの国じゃ魔術は無いんでしょ？」

「えっと、魔法が使えるって聞いたのも、師って言うかまぁ魔術師の人にちょこっとご指導をいただいた程度でまだまだ」

「適正は見てもらったの？」

「適正ってえーっと、属性の？」

「そう」

むぅ、言って信じてもらえればいいんだが

信じてもらえるだろうか。全属性の魔法使用可能って

「全部」

「え？」

「俺は全部の属性を使える人間なんだってよ。えーっとなんて言ったかな・・・ディラ？いや、ディナ？違う違う、えーっとディ、ディ」

「ディアグノ？」

「そうそれそれ！」

思い出せずにいた俺に変わってツキが回答した

すっかり記憶の片隅の奥深くに置き去りにしてきていた

なんというか、最近はいろいろありすぎてすっかりど忘れしてしまった

「それ使って調べてみたんだけどなんつーか、全部でた」

我ながらどういう説明の仕方だとあきれる

まぁ全部出たことに代わりはないのだがもう少し具体的に説明できたはずだ

「全部？」

ほらみたことか

ツキも流石に顔をしかめている

「先に言っておくけど嘘じゃないぞ。魔法でも調べてもらったし。だからたぶん氷魔法も使えると思う」

「すごいね・・・そんな人がいるって聞いたこと無いけど・・・」

「疑わないのか？」

「少なくとも私は聞いたことは無い。でも、それが本当ならすごい。証明は、この場じゃ無理だし、私はその手の魔法は苦手だから」

「へぇ」

そんな感じで俺たち二人は自分の事を話し合った

腕が上がらないことや魔法、ギルドや渡商人のこと

実は渡商人という言葉は元々行商人という言葉が廃れてできた新しい言葉なのだということもここで初めて知った

確かに行商人も同じような意味だったなぁと俺は思い出す

そうこうしているうちに時間は過ぎ去り、夕食の時間となった

ちなみにこの場ではまだ俺が異世界の人間だってことは打ち明けていない

そのうち言うことになるだろうが今言っても混乱するだけだろうし俺の身元がそう言った、過去で言うアグレシオンと同じだと悟られたくない事もある

もしここでツキが俺を敵視するような事はしたくなかった

これからアルデリアへ向かう、そのための仲間をここで失うことは、この先の道のりがさらに過酷なものとなると思ったからだ

俺とツキは食堂へと降りた

食堂は一階にあり、階段を下りて二人は食堂へと入った

「あ」

「どうかした？」

俺は足を止めた

奥の方に座っているのは確か昼に飯屋で相席になった男だった

今度は麺類をずるずると食べていた

「いや、何でもない」

俺とツキは注文をすませた

もちろんどんなものが出てくるかは分からない

とりあえずツキのおすすめで注文したので間違いは無いはずだ

食券を受け取り俺とツキは近くの席に腰掛けた

後で番号が呼ばれるはずなのでそれまでは暇になる

「あー、腹減った」

「そうね」

後ろのドアが開いた

「紅炎(こうえん)騎士団だ。この男を捜しているのだが心当たりのある者は・・・者は・・・」

ばっちり目があった

鎧を着込んだ男が俺の顔が描いてある紙を突き出しながら制止した

「俺？」

「だね」

「どゆこと？」

「さぁ？何かしたの？」

「記憶にございません」

「そう」

「み、見つけたぞーーー！！」

男は外に向かって大声で叫ぶ

「私が居ない間に何かしたの？」

「だから記憶に無いって言ってるじゃん」

「とりあえずソーレ迎えに行かないと」

「呼んだら来るんじゃない？」

「来るかな？ドアに鍵はかかってないけど」

「さぁ？」

「声も届くかな？ソーレー！！」

遠くで爆音がした

何かが吹き飛び、砕ける音と、文字通り爆発音が

音に男は気を取られて後ろをむいた

「逃げるべきか、捕まるべきか」

「んー、悪いことしてないっていうんなら向こうにも何か事情があるだろうし、おとなしく捕まっておけばいいんじゃないかな?うん、美味い」

「そうかな、ってオイ」

いつの間にか先ほどまで麺類食ってた男が俺の隣で今度はサラダを食べていた

何故にこんなフレンドリー?

「知り合い?」

「いや、昼に相席になった人」

「そうだな、あそこの焼き飯は美味かったぞ、うん」

「いや、そうじゃなくて」

「かぅーっ！！！」

がしゃぁぁん、と大きな音を立てて男が地面に転がった

長い机をまっぷたつにへし折り、男は沈んだ

「やりすぎだぞソーレ」

ソーレは騎士の男の頭を蹴飛ばして俺の肩にとまる

「でも紅炎騎士団が出てくるなんてよっぽどのことだろう？」

「紅炎騎士団って・・・この国の騎士団ってことでいいのか？」

「そうだけど」

アルデリアではアクアサンタ騎士団って名乗っていたがそれと同様の組織みたいなもんか

と、横でサラダを貪っていた男が騎士が落としたビラのようなものを拾った

そこには俺の顔が描かれていた

「ふむ、この者を見つけた者には金貨一枚を報賞金とする・・・・・・金貨か。いいなぁ・・・どれだけ飯食えるかなぁ・・・」

「え？」

「男を捕らえましたー」

「裏切り者めぇーーー！！」

「別に仲間になってないから裏切ったわけじゃないと思うけど？」

「かぅ～」

城門の前に立つ３人と一匹

いつの間にか縄で縛られた俺は男に連れられて城門をくぐった

ソーレも後ろからぱたぱたと羽ばたきながらついてくる

ツキは付き添いとして入城を許された

彼女も彩輝を助けようとするそぶりすら見せず、ただただついてきた

ちなみに俺は縄で縛られて地面を引きずられている

そのうち広間に通され、しばらく待つようにと付き添いの兵に言われ俺たちはしばらく待つことに

「ちきしょう、別に縄で縛ることないだろうが」

「念のためだ。見知らぬ輩を王女の前に、手枷も何もさせずに出すわけにはいくまい。そして俺の食費のために犠牲になってくれ」

「誰がお前の食費だ」

「お前だ」

くっ・・・。見知らぬ輩はお前だろうが

「覚えてろ・・・えっと・・・名前は？」

「レイル。レイル・ルニセンダ。ま、覚えてもしょうがないけどな」

そこにガチャガチャと音を立てて二人の騎士が現れた

騎士は俺たちの前方に立つ

「アルフレア様がいらっしゃる。静かにしろ」

室内の空気ががらっと変わり、ツキとルニセンダは膝をついて低頭した

俺は縄で縛られ身動きがとれないので倒れたままで顔だけを見上げた

カッ、カッと靴音が次第に大きくなり、ドアの前で音が止まった

ドアノブが回る音がしてすぐにドアが開いた

開いたドアを開けて入ってきたのは以前水鏡で見たあの女性であった

「おや？誰かと思ったらルニセンダじゃないか。君だったのか」

「お久しぶりですアルフレア様」

「ふむ、二人とも、下がれ」

アルフレアは二人の騎士に命じた

意外にも素直に引き下がった騎士達だったが顔にはやや不満そうな顔が出ている

そんな二人の心配を察したのか

「心配無い。こいつらは信用できる客人だ」

「しかし・・・」

「こいつは元・私の側近だった信頼できる奴だ。紅蓮の側近といえばお前達でも分かるだろう?」それにそこで縛られているのはアルデリアから来た私の知り合いだ。別に私に危害を加えるわけでも無いだろうしそもそも探していたのはこっちなのだからそんな心配は無用だ。レノンに叱られそうになったら命令で仕方なく~とでも言っておけば良いだろう」

二人の騎士は顔を見合わせて部屋を出て行った

「さて・・・・・よもやこんな出会いをするとは思っておらんかったぞアヤキ」

「は・・・はははは・・・・ども~」

「昼は部下が追い返した上に失礼なことをしたようですまなかったな。昼真っから酒を飲むとはまったく・・・。とはいえアルデリアから捜索願が来た時点で門番に知らせておかなかったのは失策だったな。それでだ、つれてきたのが何でお前なんだレイル」

「成り行きです。別に他意は無いですよ?」

「何処が成り行きだ何処が」

明らかにお前金、いや、飯が目的だろう

レイルはアルフレアが取り出して投げた金貨を受け取る

「本当か～？さて、顔を上げてよいぞ。そなたは誰だ？見たところアヤキに付き添っているようだが？」

ツキが顔を上げる

「ツキ・ルベルと申しますただの渡商人でございます。先日、こちらのアヤキ・サクラと出会い、道中を共にしてきました」

「ふむ、保護されたか。して、どうやって逃げ出したのだ？とても興味がわくのだが」

「え、あいや、逃げては無いんですよ？いや、グレイからは逃げましたけど・・・」

何処から話すべきか

「えーっと、簡単に言うとですね、さらわれて龍の神子って事をしらされて・・・で、なんかソーレの、あ、この龍の子の名前なんですけどこいつの孵化と使命とかいうのを聴かされましてですねー。まぁなんやかんやでツキ達の渡商人一行に助けられ、アルデリアに戻るべく旅をしている途中なのです」

「ほぅ・・・なかなかおもしろい事に巻き込まれているようだな」

「笑い事でもおもしろいことでも無いですよ。まったくもって何がなんだか。下手したら死んでましたしね」

本気で死ぬかと思った

ドラゴンに連れ去られ、グレイに追いかけられ、追ってきた大きな群れと遭遇して・・・

寿命縮むわ！！

「まぁ気になることも多いが旅の土産話は後々聞くとしよう」

そういってアルフレアは再びツキを見つめた

「お前にもアヤキを助けた褒美をやらねばな。ほれ」

そういって金貨をもう一枚取り出してツキに放り投げる

ていうかお金の扱い雑だなおい！俺だったら金貨をそんな風になげねぇ

ていうか俺の扱いずさんすぎるだろ！

とか内心思いつつ、あわてて金貨を受け取るツキをみてやっぱりお金持ちは違うなぁと思った

「今後の予定は？」

「えっと、ツキと一緒にアルデリアに向かう予定です。まぁ数日は滞在する予定ですけど」

「ふむ、なら城に泊まっていくといい。それとお前達が無事だという知らせも向こうに送っておいた方がいいな。まぁそれは後でいいとして、レイル、お前はどうするんだ？今なら反乱分子は居ないが」

「そうですね。昔を思い出すのも、また悪くないかも知れないな」

「ふ、言ったな！よし、そうと決まれば・・・っと、レイル、お前は昔の寮、たしかお前の部屋は開いていたはずだ」

「げっ！？またあそこに戻る・・ってまだ空いてるのかあの部屋！？」

「昔に戻るがいい」

クスクスと王女は笑う

対するレイルは苦笑い

「ぐ・・・いいさ。久々に皆に顔も見せておきたいしな」

「そうしろ。皆よろこぶ」

「では、お先に失礼します」

レイルは部屋を出て行った

どうやら会話からしてこの男は昔この城につとめていたらしい

今は違うらしいがそれなりに王女とも親しい仲と彩輝には見えた

というより、もっと違う何か、何か違うものが二人の間にあるように見えたがたぶん気のせいだろう

「と、そろそろ来る頃か。もう一人のゲストだ」

ドアが開き、現れたのは・・・

「・・・・君は蓑虫(みのむし)か!?」

「や、やぁ・・・ってちげぇよ!!」

やっと出会えたというのにそれは違うんじゃないかと思った彩輝であった

『彩輝、捕縛される』（後書き）

テストが近いため3月の頭ぐらいまでの更新がきつくなると思います
更新を一時停止しますが了承ください
再開までにはネタとかも探しておきます（汗
これからも烈風のアヤキをよろしくお願いします

『謝罪と差し伸べる手』

一条唯の手には今、小さな札が握られている

札には唯が直接刻み込んだ術式が書かれており、今日一日でつかんだ魔力の使い方と習っていた術式学を生かして試作品を試しに作ってみたのだという

「発火」

キースイッチとなっていた言葉を述べると札はボウッとその札は音を立てて燃えてしまう

「やった!成功!!」

「燃えた・・・」

「私の手にかかれば晩飯前よ!」

「朝飯前じゃないんですね。まぁもう夜ですし・・・。よくこんなに早くできるようになりましたね」

「そこは、ほら、あれだ。私って天才だから」

「自分で言って恥ずかしくないですか?」

「うん。恥ずかしい」

やっぱりか、と思いつつも彩輝は他にも彼女が握る札に興味が言ってしまう

彼女が作ったという符はまだ

「そっちのは何ですか？」

「ん、これかい？。そうだなぁ。じゃぁこれ！何が出るかな～何が出るかな～、爆！！」

ポンッと小さな音をたてて札が爆発した

爆発と言うよりはじけ飛ぶ感じに近い

「これはちょっと応用したオリジナルのやつね。火属性と風属性を混ぜてみたんだけど・・・、ちょっと火力が足りないわね。もう少し改良する必要がありそうね」

「火力を上げて何処で使う気ですか」

「ゆくゆくはこれと色式を合わせて花火のようなものをと画策中。色も一応術式を組み込めば変えられるみたいだし」

「でも、なんかそう言ったことはなんっていうか・・・すでにこっ

ちの世界にあるような気がするんですけど」

「そうでもないさ。基本これを作るのは魔術師でそれぞれ使える魔術の属性は限られてるからね。それに他人の魔力が込められるとその札の効力がなくなるらしくてさ」

「あ、そっか。でも後者は初耳です。組み合わせりゃいろいろとできるだろうに」

「というわけでこれで一儲けを考えてる訳よ。フフフフ」

不敵な笑みを浮かべながら唯がぱちんと指を鳴らす

札の一枚が大きく光を放つ

照明がついたかのように部屋が明るく照らされる

そんな中で俺は何か妙なものを感じ取っていた

なにか、前に一度、バスで会ったときとは何か違うような気がすることに

でもなんだろうなぁ

「でもさ、冗談じゃないよな、突然こんな世界に飛ばされていい迷惑だよ」

「あー、ほんとよね。私が何をしたっていうのかしら。ったく、悪

いこと何もしてないわよ私」

「どうやったら帰れるんでしょーねー」

「わかんないわよそんなの」

「でさ、ずーーっと気になってるんだけどさぁ、そのちっちゃい爬虫類っぽいのに属しそうな生物は何？」

唯は自分のために宛われた部屋で横になっているソーレを指さした

「ドラゴン？」

「何で疑問形なのよ。確実にドラゴンじゃないのよ！断定しなさいよ」

まず何故俺が疑問形で言葉を発したことに突っ込んだ？

そしてなぜ後から驚いた？

というか何故俺は疑問形で答えた？

「俺がさらわれたの知ってるんですから事前に分かってたでしょう？」

「え、えぇ・・・ちょ、本当に・・・いるとはね・・・」

「うん。まぁでもまだこれでも可愛い方だよ。大きくなったらやばいぞ。実際に出会ったから分かるんだけどさ、あれは半端無いよ。うん」

「いや、そりゃまぁ・・・そうでしょうね。じゃぁなんで生きてるのよ」

「説明した通り、俺が龍の神子とかいうのだからかな」

とりあえず龍の神子であるという事と成すべき事はすでに一条さんやアルフレアさんにも伝えてある

アルフレアはそれを聞いてすぐさま活発化したと思いこんでいた龍への特別警備体制を解いてくれた

どうやら町中で結構兵士を見かけたのはそのせいだったらしい

「紹介しよう。俺の使い魔、ソーレだ」

「かぅ？」

うんうん。何となく自分の名前を覚えてきたっぽいな

日数は全く立っていないのにソーレと言ったときに振り向いてくれるようになったあたり、かなり賢いと見える

まぁ、ちゃんと知能はあるわけだし、会話もできたし
ちかいうちにこいつとも会話できるような日が来るんだろうか

「でもさ、なんか何でもありだよねこの世界。魔法は使えるしドラゴンは出てくるし・・・次は何よ」

「さぁね。次はヒロインでも登場するんじゃないですか？あと世界の危機を救ったりとか」

「ふふ、王道ね。格好いい王子様でも期待しましょうかしら」

「でもこの世界って王様とか王子とか普通に居るしあり得そうだよな。王子」

どんなルートだ。それはそれで波瀾万丈そうだけど

まぁフラグすら立たないだろうけどな俺の場合

たてるつもりも無いがな

そういった王族関係じゃないとしても、だ。こっちの世界での恋愛は無いだろうな。たぶん

そうなったら、きっとそれが枷になる

それだけはだめなんだよな

俺の居場所は、ここじゃないのだから
残ろうと思える要素を作ったらだめだ

「でもさ、こっちの世界で生きるって言うのも一つの選択肢よね」

「俺は選びませんけどね。そっちの道は。向こうで俺を待ってる家族も居ることですし」

「そーよねー。それで、そっちの物騒な刃物は何？」

一条さんは俺の腰に提げた短刀を指さす
俺はその短刀を抜いて見せた

「包丁？」

「ちげぇよ！刀刀！！よく見て！」

包丁とか言うな

「ほぇー・・・すごいね。本物だわ」

「本物ですよ。あ、刃の方はさわったら切れますよ」

「なんか、包丁とは別の輝きが・・・」

「だから包丁と比べないでくださいって」

「ふふ、そう・・・ね」

空気ががらりと変わる

彼女が発した声のトーンが落ちたからかもしれないし、それと同時に視線を落としたからかもしれないし、つい先ほどまでの明るい雰囲気がすっかり部屋から消えてしまっている

数秒、両者無言になる

「なんですか？」

重い静けさの空間に耐えかねて先に口を開いたのは彩輝の方であった

「あのさ・・・これからどうしよっか」

「これからですか」

なんだか、これまで必死で溜め込んできた明るさをすべて出し切ったかのように彼女はうつむきながら声を発した

あぁ、無理してたんだな

「さぁ、どうしましょうかね。帰れるかどうかもわかんないですし・・・」

違う

「とりあえず俺は龍の神子にさせられたんでソーレが教えてくれるまでは・・・」

違う

「アルデリアで待機しようかなーっと。なんか俺のために家とか用意してくれるらしいですし・・・」

違う

違う違う違うっ！！！

「違うんだ！」

ダンッと壁に拳をたたきつける

そうじゃないだろ俺！！

分かっていたんだ

分かっていたはずなんだ

気がつけたはずなんだ

俺はガキだけど、これぐらいのことに察してやれないバカじゃないはずだ！！

俺はスッと立ち上がり、座っている唯さんを見下ろした

「わかるさ。俺だって、同類なんだ」

「・・・え？」

話している内容が突然変わり、意味が分からないとでも言いたげな顔で俺を見上げる

静かで、だけど部屋の隅々までしっかりと聞こえるような声で

「だけどさ、あきらめたら、終わりだからさ」

「うん」

「だからさ、なんていうか・・・道の先を見つめていたいんだよ。俺。この先に待ってる事が、きっと自分を、ここから引き上げてくれるって」

あーくそっ・・・何が言いたいんだろうな俺

意味なんか分からないし、自分でも何言ってるのか分からない

だけど・・・・・・・

「そりゃ、さ、俺だって・・・親とか友達とか全く居ない世界に飛ばされて、頼るものなんか何もなくて、最初から無条件で力を貸してくれる友達とか家族とか居ない世界に放り出されて、帰れない・・・とは思いたくない。けど、心のどこかで思っていて・・・でも思っちゃだめで。それはつまり負けっていうか納得できないっていうか」

思ってしまうんだ

もし帰れなかったらって

これまで異世界で過ごした夜、寝る前にいつも思っていた

帰れなかったときのことは考えないようにして

きっと変える方法があるはずだって希望を持ち続けて

でも、心の中のどこかで思ってしまう

俺は知っている。それはたった二文字で言い表せることを

不安

そう。俺は不安なんだ

帰れなかったらどうしよう

決して消えてはくれないその思いを、俺も、彼女も持っている心の共通点

俺が思うのはそんなこと

そんな不安を彼女も抱えているはずで

「だからさ、こう、立って前をさ、向いてないと、だめなんだよ。きっと」

年上だけど、俺よりも遙かに折れてしまいそうなもろい存在を前にして俺はただ黙ってる事はできなくて

前を向いてないと・・・心が折れそうなんだよ・・・俺も。表面上こうやってるけどさぁ

そう言ってしまいたい。だけど、この人の前で弱みを見せたらいけ

ない気がする
その弱みを見せるのは、今じゃない
手をさしのべる人が、弱かったらなんてこと、あっていいはず無いんだから
俺は手を差し出す
「引き上げる。何があっても、今は頼りないけど、一人の男として頼られるような存在に、あなたを元の世界に返す」
ぽかーんと口を開いて俺のことを見ていた唯さんが視線を落として開いた口を閉じる
彼女が何を思っているのかは知らない
弱々しい本心を隠して俺は言う
俺が言えるのはただ一つ
普通だったらクサイとか言われても仕方ないような言葉でも、それが彼女の救いになればと信じて
「年下だけど、今は俺が上から手を差し伸べるの、許してくれますか」

「・・・・・・・許す」

触れるとすぐにでも壊れそうな小さな声で、許すと言ってくれた

俺の手を取り、でも視線だけは地面に落としていて

流れた涙は、暖かそうに見えて

俺座り、背中合わせに手をつないだ

背中越しに感じられる体温に少しドキリとさせられたが、でもそんなことをすぐ忘れるくらいに、俺も一度思いっきり泣きたい気分になった

もらい泣きするような柄じゃないだろ、俺。

涙をこらえつつ、俺は真っ白な天井を見ながらそんな事を思い、早く帰れる日が来ることを願った

目を覚ますと真っ白な天井が見えた

窓から差し込む光で俺は朝になっていることに気がついた

そして・・・

「あれ！？」

昨日合った事と途中から消えている記憶を思い出してバッと体を起こした

体にかけられた小さな毛布、そして俺が寝ているのは高級そうな部屋のベッド

そして極めつけは昨日一条さんと一緒にいた部屋と同じ部屋

「なんで俺はベッドで寝て居るんだ・・・？」

確かあの後俺は背中合わせに手をつないで、そしてその後・・・寝たのか？

記憶が無い

寝たのか・・・

「おぉ、起きたかアーヤん」

「え、あ、おはようござ・・・います？」

でも何故ベッドで？

背中合わせに座っていたのは地面であって、ベッドの上では無かったはずだ

ってことは俺を持ち上げて?いやでも俺の体・・・

俺は彼女の細い腕を見つつ、自分の体重を思い出して

「何故に疑問形なんだね?まぁいいや。早く顔を洗って来るといい。スッキリするぞ」

「え、あ、はい・・・」

・・・あれ?

なんだろう。何か流されてないか?

確かめないと

ドアノブに手をかけたところで俺は振り向いた

「あの・・・・立ち上がって、前を向けましたか?」

「うん。いつまでも座ってばかりは居られない。それに後ろに何があるっていうんだアーヤん」

「そっすか。じゃ、顔洗ってきます」

うん。大丈夫そうじゃん

心配なかったかな

俺はドアを閉めて、ぴたりと立ち止まる

「何か弁明は？」

「はい。すいませんでした」

とりあえず謝っておくことにしよう

俺は顔を洗ってすぐにツキの泊まった部屋に通された

というより連れ込まれたに近い

肩に乗ったソーレは何を感じ取ったかは知らないが部屋の隅っこで俺を見ている

止めろ、そんな哀れみの目で見るな

もうだめだーみたいな目でみるなぁぁぁぁ！

いやでもまぁ、でもこうなるよな。予想はできてたわけで、いつ突っ込まれるかは気になってはいたんだ

いろいろと黙ってた事がばれちゃったわけだし

異世界から来たことや龍の神子の事

話していなかった、ゴメンですまされるような小さな事では無い

「ごめん。でもあんまり心配もさせたくなかったわけだし、何かと面倒なことになるかも知れないからさ。アルデリアに行くまでの間柄だし、そこではいさようならってなっちまうわけだし」

「人の間柄はそんなに柔な物ではありません。一度つながった糸は切っても切れない縁となると私は信じています。私には少しでも旅をするにあたって、これも忘れることのない出会いの一つなんです」

「そうっすね」

「聞けばアルデリアの王室ともつながりがあるようですし。それに異世界から来た・・・それで迷子って言ったのね。確かに遠くからは来てるけども・・・」

「もう、なんっていうか、いろいろとごめんなさい」

DO・GE・TA

誠意を込めて土下座します

「顔を上げてください。私は今大変怒っています。私は嘘は、嫌いです」

「はい。改めて自己紹介します。異世界、地球の日本っていう島国の石川県から来ました、桜彩輝、いや、彩輝桜です。嘘ついたことは謝ります。ですので今後ともよろしくお願いします」

「改めまして、こちらこそよろしくお願いします。もう、嘘はつかないでください。信じたくても、信じられなくなります」

許してもらえて何より

っていうか怖かった

別に鬼のような形相だったわけでも、悪魔のような形相でもなく、真剣な真顔だったのに、雰囲気だけはそれ以上に感じられる

「かぅ～」

「え？あ、あぁ、そうだな」

「くぁ？かぅかー？」

「ん？え？あ？え・・・・えぇっ・・・・と・・・うぇ！？」

ちょ、ちょっとまて！

俺はどだどたと立ち上がってソーレに近寄る

ソーレを持ち上げて一言

「お前、しゃべれるのか！？」

「かぅっ？」

「ふぅむ・・・白煙上る地にて天高く架かる橋、虹を越えて空の大地へ・・・か」

「抽象的なのか具体的なのかよく分からないわね。白煙上る地って言うのはここの事かしら？」

「っぽいよな。じゃぁ天高く架かる橋ってのは？」

「実際そんな物は無いからたぶん何か別の物を表してるんじゃないかしら。雲とか」

「あ、じゃぁあれじゃないか？ほら、えーっとなんて言ったか、あのなんたら山とか言う火山？あれじゃね？」

「もしかして噴煙の事かしら？」

「あ、それだそれ。きっとそうだ」

俺とツキは先ほどまでとはうってかわって部屋で謎解きをやっていた

というのも何故か会話ができるようになった俺がソーレから聞いた

ヒントのようなものが龍の神子の使命に関係する事だからだ

ソーレに教えてもらえる事ができること、それは神獣、不死龍の居場所だ

「で、その噴煙が上った先にある空の大地ってところに不死龍は居るって事か？」

「断言はできないけど、そうっぽいわよね。比較的連想しやすい言葉で助かったのだけれど」

そう。内容からしてわかりやすかった

龍の住む地域は大陸南方のこの周囲のみであり、その中から場所を特定することはさして難しいことではなかった

故にソーレから教えてもらった不死龍の居場所のような場所は大方検討がついた

空だ

雲の上、あの大きな空の上に俺は行かないといけないらしい

っていうか飛行機もないのにどうやって空の上までいくんだよ

龍に乗せてもらうってのはまぁ無理だな。助けは貸してくれないっていっていたし

とはいえ方法は無いわけではないはずだ

とりあえず、まず最初に向かう場所が決まった

火山、そして空！！

『謝罪と差し伸べる手』（後書き）

読者の方々、遅くなって申し訳ございません
やっとテストも終わって自由の身となったので執筆を再開したいと思います

あと彩輝の出身を石川にしたのはまぁ何となくなんですが、とりあえず作者の住んでるのが石川だったからです。特に深い理由はありません

『王女の思案』

「ふむ、なるほどな」

話を聞き終えたアルフレアは少し考えるそぶりをしながら椅子に座っている

俺と一条さんは今謁見の間にて王女と話をしている

内容はもちろん龍の神子の事について

あの後ツキは商売のために城下へと降りていった

残された俺は先ほどあったソーレの話のことを一条さんに話して王女に意見を仰ごうという事になった

あまり勝手な行動ができない立場にある上に、二人だけじゃ何もできないということも分かっていたからだ

「確かにゼルタール火山のような感じはするな。いろいろと接点もあるようだしそれで間違いないだろうな。龍の神子はこの周囲、龍の生息域内の大地へマナを満たす大事な役割、それ故に慎重に行動しないといけないことは分かっているな？」

「まぁ、一応は」

「すぐさま向かってもらいたいのだが、何せお前達だけで行くのに

は無理があるだろう」

「そうですね。ツキは同行するかは分かりませんが俺も一条さんも戦いの経験はほとんど無いですからね」

火山にはいろいろな魔獣が住み着いている

俺は剣道をやっていたといっても、それはもはや過去の話

腕は上がらないしこんな体で戦うことは厳しい

そして一条さんはそれこそ符術を少し学んだくらいで戦力とはなりづらいと思われる

故に、協力者が必要なのだ

「そうだな。少し時間をくれ。同行させる者を数名用意しよう」

「分かりました」

二人は部屋を後にした

「思ったよりも早かったな。もう少し場所が判明するのは後かと思っていたんだが」

それから数分後、アルフレアは予想より早い彩輝とソーレの意思疎通に驚きつつも、成り行きで兵士を貸すという約束をしてしまった事に、誰を同行させようかと迷い始めた

あまり雑な兵を貸すことはできず、上位の騎士達は任務のためグレアント王国各地に散っており、王都に残っている上位騎士は第一位、シレンシス・ルーと第二位、リンカー・ジョーぐらいである

とはいえそんな一騎当千に値する二人を王都から遠ざけるのは極力避けたいというのが本音である

どちらにしろ父上の許可も下りないだろう

となると後出せるのは魔術師団からだ

前線よりも後方支援に向く魔術師を戦闘できない者達の護衛としてつけるのは些か問題があるがもう一人二人、前衛として使えそうな奴を入れておけば問題ないだろう

となると誰を入れるかだ

手元の資料を漁りながら誰にしようかと考えていると謁見の間のドアをノックすると音が聞こえた

私に用か？

普段は王女であるアルフレアにも王家の次代を継ぐ者として簡単な

雑務を部屋でこなしているのでおそらく部屋に居ないのでこちらに来たのである

今日は特に予定は無かったはずだが

いや、さっき話の途中でレイルを呼ぶようにと執事のジュルダに頼んでおいたのを忘れていた

の割には早かったな

ともかくこれで前衛は決まりだ

「来たか。入れ」

「失礼致します」

「顔を上げよルニセンダ。お主に今から命令をだす」

「はっ」

「アヤキ・サクラ、ユイ・イチジョウと共に同行、ゼルタール火山へと向かえ」

「ゼルタール火山ですか？」

「うむ。流石にこの地方一帯に関係することなのだがあまり上位騎士が王都に残っていなくてな。護衛ならお前の本業だろう。頼まれてはくれまいか？」

「そ、そんな。私が王女の命を蹴る訳がありません。快くこの使命、受けさせてもらいます」

「ふむ、そう言ってくれると思っておった」

「ところで同行するのは私だけでしょうか？」

「いや、そうだな・・・。あと一人二人、魔術師を入れようと考えているんだが」

前衛は決まった

後は後衛だ

さて、誰を推薦したものか・・・

「そうですね・・・。セルディアなんてどうでしょうか」

セルディアか

先ほど読みあさった資料の中にもあった名である

アルフレアは何度か実際に合って何度か話をしたことはある

セルディア・カルノン１９歳　女性　雷の属性の使い手　第三位魔術師

性格的にも実力的にもこれといった問題はない

「三位か。ずいぶんと上の人間を引き抜くんだな。珍しい」

「はっ。団長、副団長は常時城で警備を行わなければいけません、三位である彼女なら問題は無いかと。重要人なのでしたらなおさらです。それに彼女と数名は今遠征でレシュトール方面へ遠征に向かっていたと昨日同僚から耳にしております」

「レシュトールか・・・そう言えばそうだったな。方向的には道中立ち寄るという形になるな」

「人数的にあまり多くなると移動に支障をきたす可能性もありえます。後一名ほど回復系の魔術師を入れるのがよろしいかと」

「ふむ、そうだな。とはいえ回復系の魔術師か・・・。また難題をだすなお主は」

「いざという時のためです。このことが原因でアルデリアと仲がこじれるのはあまり得策では無いと思いましたので」

たしかにそうだが・・・

回復系の魔術師は特殊な魔術師しか使用することが出来ない

これは家系に代々伝わる魔術の一種であり、使用できるような人間は国内に4、5人いるかいないかである

通常の医者にくらべて、こちらは魔術を使用した回復魔法であるため、多くの治療器具を使わず、また迅速に効果的な医療を出来ることが利点である

そうした貴重な人材をわざわざ危険な場所にやる事に、はいそうですか。じゃぁ同行させましょう。といった簡単な返事は出来ない

とはいえここでもし彼ら、特にアヤキ・サクラに何かがあった場合、どう責任を取るのか

現段階で彼が所属するのは自らが現れたアルデリア王国にあり、また彼自身もまたそこを拠点としているような雰囲気ではある

彼には、ユイ・イチジョウと同じように精霊文字を読み解く力があると聞く

精霊文字は各地に残っており、こちらと同じくあちらもそれが意味するものにはとても興味があるはずである

別世界の知識をもつ彼らはまるでその存在自体が宝のようなものであり、聞くところによるとカガクというものが発達した世界のようでこの世界よりも文明が進んでいるのだという

そんな世界の言葉が記された謎の言葉を読み取る。失われた歴史や過去が記されていると言われるそれを読み解くことが出来ればそれは国の大きな発展へとつながる可能性もある

そして彼自身が大きな戦力ともなり得る力を持っているというのも一種の牽制のような存在になりつつある

何せ全属性の魔術の使用が可能などといった人材はどの国を探したって全部で9人しか居ないのだ

今はまだ未熟だが、彼らが魔法を使えるようになるとすれば大きな力となり得る

国が彼らを取り込もうとするのは分かり切っている。今はまだ原石磨けばもっと輝いてくる

その輝きはおそらく、各国に何かしらの変化をもたらすだろうと私は考えている

アルデリアも同じ。アルデリアとは同盟を結んでいるものの、国が一つであったのはもう昔話とでも言うような過去の話

今までは平穏を保ってきた

先のアルデリアとセントノーラ間との短期戦争でも物資補給等をしたこちらに借りも作っている

あそこには我が友、セレシア達も居るし戦争になるような事態は早々起こるとも思えぬが・・・。決めるのは父上達

戦争なんかゴメンであり、それよりも心の友が一人減ることの方が恐ろしい

何せ、外に出ることの少ない私たちがもてる友など、一握りだというのに

しょうがないな。あまり亀裂は作りたくない

アルフレアはため息を一つついて国をまとめる者の重さを感じた

なかなか上に立つ者というのはいろいろなことを考えなくてはいけないな

「ここはもう一つ借りを作っておいても良かろう。父上には私から話を通しておこう」

父上なら私の提案と聞いたらおそらく許可はもらえるはずだ

私にゾッコンラブだからな

「ということは」

「そうだな。セルディア・カルノン、シェルディ・ハルベイド、レイル・ルニセンダ、以上の三名を特別護衛選抜隊に任命する。アヤキ・サクラ、ユイ・イチジョウの護衛と共に無事任務を果たしてここに帰還する事を命ず」

アルフレアは依頼書をすぐに書き上げる

その依頼書とは別の書類を数枚、これもすぐさま書き上げてしまうサインを書き、それをクルクルと丸めてドレスの裾についていた装

飾の紅いリボンをぶちりと千切る
その千切った紅いリボンで丸めた紙が戻らないように結ぶと、それを低頭しているレイルに渡す

「こちらを父上、それと魔術師団長のところへ行って渡してくるように。そしてこちらは医療長に。最後にこれをお前が持って直接セルディア、シェルディの両名に見せ同行するようにと頼むように」

「御意のままに」

両手で数枚の封書を受け取り、それを両手に抱える
計4枚の紙を受け取ったレイルは立ち上がり部屋を後にしようとする

「そうだ。忘れていた。場合にもよるが・・・そうだな。アヤキ・サクラ、ユイ・イチジョウに同行する者が居る場合、そちらもきちんと護衛するように」

「分かりました」

「それと出立は明朝だ。日が昇ると同時に移動を開始できるように門前に集合するように伝えてくれ。私も見送りぐらいはしにいこう」

「そう伝えておきます。では」

レイルが部屋を出て行き、静まりかえる部屋に残されるアルフレア

突如現れたと思ったらもう出発か

彼にはどうやらゆっくりする暇も無いらしい

あまり期間を空けずに出発するのにも意味がある

後回しにしたくないというアヤキの意志もあるのだが、一番の理由は向こう（アルデリア）が彼の即時期間を要求してきたからである

水鏡であちらに発見の連絡を入れたときに出来るだけ早い帰還を求めてきている

本来ならば時間をかけて安全に帰還させれるようにしたいところなのだがここに来て神子としての使命だ

もし目的地が火山にあるのなら、ここから向かう方が近い

こんな未知の異世界に飛ばされて日も経っていないうちにいろいろあって大変だとは思うが・・・

人知れずアルフレアはアヤキに精霊の加護があるように祈った

夜

俺は今、食堂にいる

兵達専用の食堂であり、それはもう巨大な食堂である

学校の体育館ぐらいはあるかと思われるその食堂にはちらほらと数人の騎士が見えるだけだ

騎士と言っても見た目は私服の男女である

流石にこんなところまで騎士服だったり鎧だったりを着たりはしないらしい

そういう生々しいところが逆にゲームとかと違うなぁと思ったり思わなかったり

実を言うととっくにシェフは厨房には居ない

残っているのは酒に酔って寝ている者、仲間達と話をしている者などがほとんどである

静かな空間に、そんな男達の話し声が聞こえている

たまに妙なものを見るような目でこちらを見てくるのはまぁ仕方ないのかもしれない

未だに俺たちが誰なのか、それをアルフレアは公言しては居なかったが上位の者達にしかその正体は明かされていない

一応自らの父や母である国王、女王などには話は通してあるらしい

そしてそれは俺にも言える

周りからすれば誰だお前って感じなのだろう

っていうかこうも王族とかと親密な関係になってしまっていいのだろうか

本来なら身分的なもので俺たちは会うことすら許されないような人間なのかもしれないのに

そうそう。忘れるところであった

なぜ自分はシェフも帰ってしまった食堂に居るのか

もちろん食堂に居る理由は一つで飯を食べるためである

タイミングを逃した俺と一条さんは食堂に着たまではいいものの、シェフが居ないということで一条さんが（ほとんど勝手に自分で）料理をすると言い出したのである

俺も手伝おうかと思ったのだがそこで俺は酔った騎士の一人に捕まった

半分意識が飛んでいたのが幸いしてすぐに酔いつぶれてしまったので俺は少し離れた席に座り直す

そして今に至る

と、今度は向こうで話をしていた3人組に呼ばれてしまう

意味無く逆らうような事はしたくないため渋々席を立つ

さて、厨房に立ったまでは良かったもののどうしたものか

適当に使ってもいいものなのだろうか

と、それより先に食材はいったい何処だ？

冷蔵庫はもちろん無い

周囲を見渡しても食材らしきものは見あたらない

とりあえず厨房の扉という扉をすべて開けていく

調味料やら箸やら包丁やらは見つかるがどうも食材だけが見あたらない

こういった場合、何処に保管しているのだろう

毎朝足すといっても多少何か余っていてもいいと思うのだが・・・

一条はそこで足下の取っ手に気がつく

どうやらスライド式のようでその取っ手を横に引く

すると床の下に大きな空間が広がっていた
そこには大量の野菜があった
正確には野菜だけ（・・）があった

「ここは肉とか魚とか欲しいところなんだけどなぁ・・・」

流石にそこまでは監理する場所が無いから全部使い切ってしまったのだろうか
こういう時に冷蔵庫のありがたみを感じる
はしごがあり、その下へと降りてみる
暗くてよく分からなかったので符を使って明かりをつけることにしたちょうど良さそうな燭台を見つけ、そこに数枚の作り置きしておいた発火性の符を一枚置く
その下に火をともすときに使うと思われる小さな木々が置いてあるのを見つけ、それを符の上に配置

「発火」

符は勢いよく燃え、その火が木に引火する

なんとか食材が見える程度にまでは明るくなった

「さて、どれがいったいなんなんだ?」

初見の食材が沢山置いてあるがいったいどれを使えばいいのかさっぱりだ

一応一人暮らしの身であり、料理ぐらいは子供の頃からやっているため得意ではあるのだが未知の食材をいったいどういう風に料理すればいいのか全く分からなかった

「味が分からん以上、何を作ればいいのかさっぱりだ」

腕組みをして大量の野菜とにらめっこする

とりあえず何種類か持って行って味見だな。

唯はいくつかの野菜を手にとって火を消すとはしごを登る

野菜をまな板の上に並べ、そして食材を眺めてみる

下で見るのと上で見るのは大違いだな

思っていた以上にこれは勇気のいる食材だ

特に一番左に置かれたそれは野菜なのかどうかすら分からないほどの異形をしていた

もう見るのもだめなぐらいに酷い

モザイクをかけるべきだ！

「混沌・・・カオスだなこれは。流石に料理する気が失せる」

そりゃまぁねばねばだったり臭かったりといった野菜はあちらにもあっただろう

だがこれは何かが違う

とりあえずそれを鷲掴みにして野菜の山に放ると手を洗って料理を開始した

「何を作ろうかな。無難に野菜炒めとかか？だが流石にそれだけだと食欲も失せるし王道すぎるな」

スープもいいしサラダもいいかな

幸い調味料はあるので野菜だけという事にはならずにすみそうである

汁物、あと本来の味も知りたいから生のサラダ・・・いやでも火を通さないと怖いよな

火を通したら大抵食べられる・・・と思う
調味料の味見もして組み合わせを考えないとな
腕が鳴るわ！

「手伝おうか？」

と、やる気満々の私の隣にやって来たのはツキちゃんだった
たしかここまでアーヤんと一緒にやってきた商人と聞いている
自分より若いのにしっかり者だなぁと思う

「お、じゃぁさ、どんな味とか食感とか教えて欲しいな。あとどれをどうやったら美味しくなるかとかいろいろ」

「いいですよ」

厨房から女性陣の叫び声と炎が唸る音が聞こえる
いったい何を作っているのやら

と、厨房を見てみると巨大な火柱が立っていた
真っ黒焦げなものとか出てこないよね。たぶん

「ほぉ、ってことは旅人ってことか」

「え、あぁ、まぁ大体そんなものですね」

「とはいえ、所々で王女と親しげにしているという噂を聞いて居るんだが」

「えっと・・・まぁ、成り行きで」

「成り行きでそうなる普通？私が思うにさー」

男二人と女一人で構成されたその三人組に俺は質問攻めに会っていた
そしてしばらくすると目の前に料理が出てきた

二人して運んだそれはスープや野菜炒め、サラダなどであり、あえて言えば野菜しか具材が無かった

おそらく野菜以外の食材は無かったのだろう

とりあえず腹の足しにはなるか

「いただきます」

スプーンを手にとってスープを一口飲む

お、なかなかいける？

薄くもなく、濃くもなく、飲みやすい一品

「ところでさー」

二人も席に座ったところで橋に持ち替えて野菜炒めを摘みながら俺は話を切り出した

「明日ってツキはどうするんだ？」

「私？ん、美味し・・・」

「そ。俺と一条さんはゼルタール火山に行くんだけどさ、どちらかというとおじいさんに薬を届けるためにアルデリアに行く予定なんだろ？」

「ゼルタール火山？なんで？」

「んー、ちょっと龍の神子関連の話でさ。こっちの都合でつきあわせるのも悪いしさ、出立の予定は明日か明後日か、どっかそんなところだろ？往復でどれだけかかるか分からないし」

「うーん、そこまで急病って訳でもないから別に大丈夫ではあるんだけど」

「じゃぁツキちゃんもくるの？」

スープを啜りながら一条さんが聞いた

「そう・・・ね。そうしようかしら。火山ならもしかしたら希少鉱石があるかもしれないし」

「希少鉱石ね・・・商売で使うの？」

「元手がただならそれなりに売れるから」

それもそうか

「じゃ、明日はツキも同行決定ってことでいいんだな。明日の早朝に城門集合らしいんで早起きよろしく」

「わかった」

ツキはスープを一気に飲み干して器を厨房まで持って行って洗うタオルで水滴を拭き取りその器を他の器と一緒にしまう

そして部屋を出て行こうとするところで

「何処いくん～？」

ツキは脚を止めて振り返る

「荷馬車の預け期間を伸ばしてくる」

荷馬車とダトルは専用の預けるところに預けてあるらしく、その期間を伸ばしてくるということだ

「おう。んじゃおやすみー。また明日」

「お休み」

そう言ってツキは部屋から出て行った

俺と一条さんも適当に料理をたいらげて食器をかたづける

少し残してもらった野菜炒めの皿を持っておれは自室で留守番しているソーレのために夕食を持って行ってやることにした

ソーレが野菜炒めを恐る恐る食べている中、俺は明日のことを考えてた

火山・・・かぁ

こちらの世界に来て一週間と立っていない

日にちをかぞえるのはもう止めた

意味もない

ただ、まだ一週間と立っていないにもかかわらずいろいろなことが合った気がする

異世界に来て、龍にさらわれ、龍の神子にされて、魔獣に二回も襲われて、ツキ達と出会って、縛られて、で今度は火山に行って神子の力で大地にマナを満たしに行くってか

密度濃すぎるわ

もう何日経ったかなんて数える気にもならない

ただ、まだ数日しか経っていなくて、元の世界にいた時、どれだけ時間を無駄に過ごしていたかがよく分かる

時間って長いようで短いようでよく分からない

いつか帰れる日が来るのは、すぐなのか、それともう来ないのか

でも、ジッとして待ってる訳にもいかない

出来ることをやればいいし、それが今ってだけのこと

やることは、この世界の人のためになる事

使命。そう、これは使命だ

俺に課せられた、使命

俺にしかできない、使命

やり遂げる

やり遂げてやる

それが出来れば、何かが変わる気がするんだ

翌日

一人は一つの短剣と一匹の龍を肩に乗せ

一人はポーチを腰に巻き、ブルーの髪留めをして

一人は薙刀を片手にゴーグルをしっかりとつけ

一人は上着を腰に巻いて幅広の剣を持ち

一人は白き衣装を身に纏い同じく白い杖を持つ

夜明け前の薄暗く肌寒い空の下、彼らは城門前に集い、そして旅立

った

『王女の思案』（後書き）

お、遅くなって申し訳ありませんｏｒｚ

『昔話』

「セルディアさんってどんな人なんですか？」

揺れる荷馬車に乗りながら俺はレイルさんにこれから合流するという人について聞いてみた

レイルさんはめんどくさそうにしながらもこちらを振り向いた

「セルディアか？外見は青髪の女性で雷属性の使い手だ。気が強くて国内じゃ３番目に強い魔術師だ」

「結構強い人なんですね」

「馬鹿、結構じゃない。ものすごく強い。詠唱速度が半端なく早いし威力も申し分ない」

どうやらかなり実力のある人が同行するらしい

そのセルディアという人はどうやらずっと先の火山の麓の町に遠征に行っているらしい

たまに騎士や魔術師の派遣、視察などをやることがあるらしく、それもかねて魔術師の人たちの戦力強化を含めて鍛錬をしにいくということらしい

ちょうどそのあたりの魔獣被害の届け出が出ているらしく、今回はその魔獣の掃討も兼ねているらしい

その部隊長を務めているのがそのセルディアという人らしい

「俺がまだ城に使えていたときはそりゃもう天敵としかいいようのない奴だったよ」

「レイルさん、天敵って・・・まぁそうでしたね。あのころは名物みたいなものでしたから」

おしとやかな声で話しに混ざってきたのはシェルディさんだった

数少ない治癒術を使える人らしいのだがあまりピンとこない

彼女には俺たちの一連の事情は伝えてあるらしい

「レイルさんって城に仕えていたんですか？」

そこに一条さんも興味を示して皆で大きな円を囲むような形になる

最後にツキも一条さんの横にちょこんと座って話を聞きたそうにする

「ん？まぁ数年前まではな。今は町はずれでしがない鍛冶職人をやっているけどな

「鍛冶って剣とか作るんですか？」

「別にそうでもないさ。鍛冶ってのは金打ちがなまってできた言葉らしいが言葉通り金物専門に作るってところだ。頼まれりゃぁ剣だろうが打つけどよ。そっちよりかは剣の手入れとか日常品の鍋とかをうって生計を立ててるさ」

「へぇ」

「っと、話ずれてるずれてる」

一条さんが話を修正して元の、レイルさんが城に使えている話へと戻す

「話は数年前に上るんだが城内でいろいろといざこざがあったんだ。大きくいえば勢力が二分化してな」

「前国王派と現国王派に分かれたんです」

「現国王って今のアルフレアさんのお父さんってこと？」

俺は気になって聞いてみる

シェルディさんは無言でうなずいた

「でもあの、よくわかんないんですけど」

「あ、長いから前国派と現国派って略すけど今の国王になってから数年して、突如前国派の人間が現国派の政権奪取を目論んだのです」

「それって・・・」

「簡単に言えば前国派の、主に文官なんですがその人たちに前国王は金を秘密裏に渡していたんです」

「それがばれて前国王は権利剥奪されてな。それで今の王が国王になった。それでもばれずにすんだ文官たちの数名がそれまで入っていた金が途絶えたってことで反乱を企てたんだ」

なるほど

人っていうのは上を知ると元には戻れなくなるもんだしな

いい思いをしたらそれにしがみつこうとしたわけか

「ん？あれ？でも今のアルフレアさんって名前に国の名前ついてますよね」

「そうだが？どうかしたか？」

「ってことは前の人も国の名前を継いでたってことですよね。前の国王が・・・直系ってことですか？」

別の人が国王になったのに二人が国の名前を継いでいるってのは妙じゃないか？

「何かおかしいところがあるか？二人は兄弟だぞ？」

「え・・・あー・・・なるほど」

そうか。日本じゃないもんな

総理大臣みたいな感じでとらえてたよ俺

別の人がなるのじゃなく、同じ血を引く兄弟が国王になったのか

「それでまぁ、少し話は飛んだが戻すぞ。それで対立が始まったんだが相手はアルフレア王女をさらおうとしたんだ」

「アルフレアさんを？」

シェルディさんとレイルさんは同時にうなずいた

「俺は当時、近衛の隊長でな。まぁ王族近辺を守る少数の付添人みたいなもんなんだが俺一人に対して雇われた憲兵１５人を送り込んできやがってな。さすがに１５人相手は俺でも少し無理があってな」

「それで？」

「王女をさらう目的で来てた奴らのうち、数人を王女が受け持って二人で応戦した。本来なら逃がすべきところなんだがちょうど逃げ場のない部屋に追い込まれてな」

「絶体絶命って奴ですね」

「あんときは本当に焦ったぞ。それでまぁ王女自身も多少剣術は学んでいたわけだし何より魔術師でもある。でまぁ王女もその、なんだ。人殺しをさせてしまってよ。それだけはさせちゃぁいけんかった」

うつむいたレイルはぼりぼりと髪をかく

力不足で守るべき主を戦わせてしまったことに後悔しているのか、人殺しをさせてしまった己の無力さを嘆いているのかは彩輝にはわからなかった

そのレイルに代わってシェルディさんが話を続けた

「そのときに取り逃がした一人がそれを反乱した文官に話して、もともと頭の切れる悪知恵が働く方々でしたのでそれを国中に広めたんです」

「王女は人殺しってな」

レイルが力無く声を発した
一気に馬車の中は暗い雰囲気になってしまう

「そのときは城内の内乱を国外に公布するわけには行かなくて、事実を知らない国民たちはそれを鵜呑みにしたんです」

なるほど
うまい手ではある
憎たらしいくらいに

「結果、国民の大半が前国派についてしまってな」

「現国派には紅炎騎士団、魔術師団、近衛隊の主に武官達が、前国派には武官と国民達という形になってしまったの。そこで彼は王女の汚名をかぶったの」

「でもそれじゃぁ具体的な解決にはなりませんよね？」

一条さんが言ったとおり、具体的には解決していない

「えぇ。だけど現国派は内乱があることが国外に知られると言うことはできるだけ阻止したかった。だからそれまでは内乱の事実を伏

せていたんだけど国民がここに関与してきた時点で王女の（・）無実を公表したの」

「あのときは隣のカナンと一触即発の雰囲気だったからな。あまり国内のがたつきを知られたくはなかったんだ。でもまぁここまで来たらそうも言ってられなくて」

「そこで殺したのは王女ではなくの近衛の隊長である彼ということにしたの。王女が殺していないってことで国民は文官達から翻ってこちらについた。負けを悟った彼らは実は国外と内通していたらしくて逃げようとした。でも彼がその文官達を殺して・・・重臣殺しは例外なく、城からの永久追放と権力の永久剥奪。公表したのは王女の無実ということだけ。国民から見ればただの仲間殺しなのよ。彼は」

「それって・・・」

一条さんは言葉を発しようとして、でもそれ以上の言葉が出てこなかった

俺も同じだった

決して悪いことではないはずだ

彼は・・・レイルさんは・・・王女の悪くない言葉ばかりの汚名を背負い、裏切りの仲間を殺したことで地位も権力も失って・・・

だけどそれを公表するわけにはいかなかっただろうと思う。文官が一斉に居なくなった。これすなわち国力の衰え

彼一人がすべてを背負って、国民に真実を知られることなく犠牲になって、王女も、国も守ったというのか

「同情はいらん。ちょっとした昔話さ。むぅ・・・セルディアの話から一気に重い話になりすぎじゃねぇか？」

そういえば最初はそんな話題だったような・・・・・

と、とりあえず話題を変えよう

「ところでセルディアさんとはどういう仲だったんですか？」

「ん、おー。何かと俺と喧嘩していた覚えがあるな」

「レイルさんが只単にうっとおしかっただけなんじゃないですか？」

「シェ、シェルディ・・・そりゃねーぜ」

「なんかこう、いつも迫ってましたよね」

「あのころは、俺も若かった」

「今より痩せていた」

「うるせぇってシェルディ！ったく・・・まぁでもあのころは本当に・・・・」

ん・・・？

俺はふと思う

数年前の話だろ？

「あれ？セルディアさんって今１９何ですよね。で、数年前の話ってことは・・・・」

「迫ってた～？？？（ニヤニヤ）んん～、レイルさんって実はロリ○ン？」

「ちげーよ！！ってか止めろ！今はもう大人だし！それだけは本気で凹むから・・・」

ってかその言葉が通じることに俺は驚きだ

こっちの世界でもそれっぽい言葉があるってことか？

「あんときは俺も十代だからいいんだーー！」

一人レイルさんが天に向かって叫ぶ

言い訳にもならねぇな

「ふふ、あのころは本当によかったわよね」

一人、一番年上のシェルディさんがほほえむ

シェルディさんは金髪碧眼で貴族の出身なのだという

むしろ代々治癒術が使えて王族に仕えているから貴族と言うべきなのか

「二人とも仲いいですね」

「ん？まぁそうだな。同じ貴族出身で幼なじみってのもある。こいつの方が年上だがな」

「お姉ちゃんみたいなかんじと？」

「まーそれに近いわな」

「へぇ。俺にも同い年の幼なじみは居るんですけど、どうしてんのかなぁ今頃・・・」

「なんだかそんなに日が経っていないのに懐かしく感じるね」

「そうですね」

あの日常が、ものすごく遠くに見える

果てしなく、手を伸ばしてもけっして届かないくらいに

気がつけば、ずいぶんと遠いところに来てしまったんだな

俺は揺れる馬車の外に大きな火山から立ち上る白煙を見た

『合流』（前書き）

今回の話は視点切り替えが多いため、切り替わるときには◆のマークを入れてあります

『合流』

レシュトール

レシュトールは村の名でグレアント王国最東端の村である

山一つ越えれば隣の国、カナンに行くことが出来る

そしてその村の隣に立つ巨大な山、それがゼルタール火山である

山を越え、麓に降りた時点で向こうの領地のため、ゼルタール火山自体はカナンのものではなく、完全なグレアント王国の領地である

そして王都側の麓に広がる巨大な森、シトレの森の入り口にその村は立っていた

つい先日から依頼していた魔獣の掃討をしにきたらしい

村としては最近魔獣による農作物の被害が酷く、それを押さえられないことに手をやいていた

何度か人材不足で申請を退けられたものの、やっと王都から使者がやってきた

彼らは滞在初日で被害のあった場所や時間帯などを調査し、次の日からは魔獣の討伐に当たっていた

そしてそれから3日目の夕刻・・・

「よし、比較的被害の大きかった2カ所は何とか出来た。他の出没ポイントはばらつきが見えるからこちらは一匹一匹群れからはずれた奴が現れていると思われる」

部隊長をつとめるセルディア・カルノンは大きな地図を前に部下達と共に今夜行う作戦の手順を再確認していた

一昨日、前日と続いて主だった出没ポイントで待ち伏せをして見事討伐に成功している

残った魔獣の出没場所はばらつきがあり、発見した回数も少ないことから群れとは別行動を取っている魔獣と思われる

数は不明だが村の近くにいた魔獣は大方二日間で殲滅したと言っても過言ではない

残った数匹の魔獣をどう仕留めるか

大きな森の中で探すのは分が悪いとみて逆にこちらからおびき寄せる作戦をとることにした

村の食料の一部を分けて頂き、畑の真ん中に設置する

そこで先に土魔法を使える部下が土の中に巨大な空洞を作り、落としてから総攻撃するという罠を考えた

実戦訓練という意味もあるこの遠征で、何処までスムーズに戦場作

りが行えるかもまた、重要なことの一つだ

一昨日は広いところで戦闘を行い、補助効果で身方の攻撃力を上げつつ一気に殲滅する連係プレー

昨日は森の中という視界の悪い中での戦闘するという特殊状況下での戦闘の仕方

後者は流石に夜になると危ないので昼間に行った

初日の大規模な殲滅作戦により、警戒して森から出る気配のない魔獣達を倒すために仕方が無い行為だったがまぁいい経験にはなっただろう

そして今日

敵より早く戦場に来て前もって罠を作り、戦況を有利に進める戦闘訓練

「今日はおそらくそれほど危険な戦いにはならないだろうと予想している。とはいえ夜闇の中での戦闘は二日目の時に感じたと思うが危険が付き添っている。相手はこちらとは違い、夜でも目や鼻がきくからな」

今回相手にするのは夜行性のグレイ

昨日一昨日と二つの群れにはきちんとボスグレイがついていたが初日は一気に殲滅した事により被害はゼロ

次の日は森の中での遭遇だったが運良く昼寝中であったのでこちらも問題なく殲滅に成功した

大きな群れが無くなり、おそらくボスグレイはもう出会うことは無いだろう

森の奥にいるのは管轄外であるし、ここまで出てくることも無いはずだからだ

「いいか、絶対に気は抜くな！確実な勝利など無いと知ることが大事だ！相手は獣だからいいがこれが人間だった場合、相手は裏を、裏の裏をかいてくる事など当たり前で油断は速、死に直結する」

メンバー全員がごくりと唾を飲み込む

「訓練といってもこれは実践以外の何物でもない。いいか、勝利は我らの手に！」

『我らの手に！！』

全員が杖で地面を突き、復唱する

仮設テントをでてセルディアはすぐそこに見える森の奥を見つめる

が、もう当たりは薄暗い
夜は、すぐそこまで迫っていた

◆

「おっしついた～！」

両手足を大きく伸ばして真っ先に地面に降りたのはレイルであった
ドスンと音を立てるかのようにその巨体はしっかりと大地に脚を踏みしめた
綺麗な月が空に浮かんでいる

「なかなかに空気がきもちいな。とぅっ！！」

続いて唯さんが馬車から飛び降りる
びしっと脚をくっつけ両手をＹの字に広げた

「１０点１０点１０て～ん。わー・・・」

俺は頭をぼりぼりと掻き、やる気のなさそうな声を出して拍手をしながら馬車を降りた

なんでこう女性って話に花が咲くんだろうね

一行に終わりの見えないお話の旅からやっと解放された・・・

ここにつくまでの間、ずっと女性三人は世間話のような事をしていた

意外にもいつもは静かだったツキが会話に積極的に参加したのには驚いた

俺の勝手な偏見だけどツキってなんかクールとか静かってイメージが合ったんだがなぁ・・・

所詮は女かっ・・・

何処の世界もこんな感じなのかな

ちょくちょくいじられて少々つかれた

「さて、セルディアは何処かな」

「レイルは何年ぶり？」

「あれ以来合ってないからなー」

「あなた理由も言わずに消えたものね」

「それが男だ」

「ちげーよ」

とりあえず反論してみる

馬車を止めて小さな村の前に全員が降り立つ

小さい家が沢山あり、ガラスの内側から暖かそうな光が漏れている

「ここはやっぱり村長当たりにきいてみたらどうですかね？」

俺の提案にレイルはぱちんと指を鳴らす

いや、こう、ゲームとかではよくありがちな事だと思うけど

てか気づけよ

レイルはどたどたと駆けていき、とある家をノックする

少しして中から老人が一人でてきて何か会話をしているようであった

そして老人は家の中に消え、レイルは手を拱いて俺たちを呼んだ

「町はずれのシトレの森の入り口のところで夜営してるってさ」

「じゃぁ行きましょうか」

そして数分、小さな村のはずれに行くまでにはそれぐらいしかからなかった

たどりついたそこには3つの白いテントが立っていた

だが人影はなく、どうも無人のようだ

おそらく魔獣の討伐に行っているのだろうと思う

悲鳴が聞こえたのはそのときであった

◆

「天来の雷(いかずち)よ、一筋の光となりて、敵を穿て！ライジングアロー！！」

高速で紡がれた呪文と共に、１０本もの雷撃が矢の如く放たれた

「業火の炎よ、灼熱の風と衝撃と共に、敵を飲み込め！ボルテックブラスト！！」

炎が現れ、巨大な渦が出来た

「命の水よ、我らに聖なる結界と、悪を退ける力を！アクアプロテクション！！」

巨大な聖水の結界が周囲を包み込む

雷の矢は暗闇に消え、炎の渦は大地を焦がして消滅し、近くを流れる川で周囲を取り囲んで作った結界に、巨大な閃光が走る

迸る閃光はすぐさま消えるが殺気だけは未だに残っている

周囲を、何かが取り巻いているのだ

グレイではない、何かが

「くそっ！何が起こっている！？」

セルディアは歯ぎしりをしながら再び杖を構える

何かに向かって攻撃を放つも、何一つとして当たらない。手応えが全くないのだ

空中に向かって攻撃をしているかのように感じられるが、確実にそこには何かが居るのだ

なのに・・・

「何故何もいない！？」

先ほどから結界を張り、攻撃が止むと同時に魔法を放っているのだがどれ一つとして敵を捕らえることは無かった

だが結界を張らなければ今頃全員血祭りに上げられていたはずだ

待ち伏せの時、念入りに周囲に結界を張ってもらって居なければ、敵の襲撃に気がつくことは出来なかった

奴らは、餌ではなく、私たちを狙っている・・・・！

いや、むしろ私たちが餌か

うかつだった？否！そんなはずは無い！

見えない相手にセルディアは翻弄されて頭が働かなくなっていた

焦りが彼女の思考能力を低下させている

「くっ、仕方ない。今のところ退魔の属性を持つ聖水でリリアに結界を張ってもらっているがこれでは膠着状態が続くだけで事態の打開には至らない。何しろマナの消費が激しい。よって朝まで待つ時間は無い」

現状、リリアが持ってきていたアルデリア産の退魔の聖水を魔術に混ぜて何とかしのいでいる

が、その聖水にも、そしてもちろんマナや魔力を作るための体力にも限りがある

こちらの攻撃が効かないという事は敵がそもそも存在していないとしか考えられない

魔術の無効化出来るのは龍族ぐらいであり、こんな芸当ができる魔獣なんてきいたことが・・・

「おー、いたいた」

背後から声がする

男の声だ

いつの間にっ!?

振り向くと結界の外に男女数名の姿が見える

そして聞き覚えのあるその声

数年ぶりに聞く

懐かしい・・・

そう思うより先に口が動いた

「に、逃げろっ！いや、リリア、結界を解除して・・・」

彼らを結界の中に・・・そう言おうとしたが

バチバチバチッ

先ほどから嫌と言うほど何度も聞いた音と閃光が再び当たりを包み込む

それでやっと彼らも異変に気がついた用で・・・・

「はぁ～。そりゃまぁ気にはなってたんだけどさ」

先頭に立つ大男は大きなため息を一つついて背負っていた巨大な幅広の剣を持つ

そして閃光の出所の真横まで行って剣を大きく振りかぶる

片手で振りかぶれるほどの大きさでは無いはずなのだが剣が幅広と言うだけでそこまで厚みが無いことと、男の筋力で無理矢理といった感じで振りかぶっているように見える

そして

バスンッ！！

大きな音を立てて見えない何かが切れる

あっけにとられる私たち

そして男は再び大きく剣を振りかぶる

森の方向へ剣を横に薙ぎ払う

またしてもバスンと大きな音を立てて何かが切れた

「結界解除していいぞ～」

そう言いつつ男は何度も剣を振るう

その度に同じように大きな音が周囲に弾ける

水の結界が解除され、皆よく分からない様子では合ったがホッとしているのは分かった

「お前・・・」

「よっ、久しぶり」

片手をあげつつもう片方の手を空中へ振るう

懐かしさがこみ上げてきて、それと同時に怒りもこみ上げてきて

ガツッ

とりあえず杖で殴っておくことにした

◆

「ぐほ・・・」

セルディアが持つ杖のさきっちょでごつんと脳天を叩かれる

片手で頭を押さえつつも右手で剣を振ることを忘れない

というよりこんな事で何やってんだこいつら

「いってぇ・・・ってか初っぱなからそりゃねーぜ・・・」

「五月蠅い！突然居なくなって！！私がどれだけ心配したかわかっ

てんの！？」

「知るか！てかお前が心配する姿とか想像できんわ！」

「な　ん　で　す　っ　て　！　？」

「ったく、ちょっと見ない間におとなしくなったかと思えば未だにこれか？ちったぁ成長しろよな！身長、性格、アンド胸っがあっ！？」

今度は正拳が鳩尾にきまる

後ろでアヤキがジャーストミートォゥとかほざいているがもう痛くて痛くて聴いている暇など無かった

どさりと崩れ落ちる俺

そしてふんとつれない顔で俺を見下ろすセルディア

せっかくの再会にそりゃねーぜ・・・・

「っぐ・・・そんなことよりお前・・・何やってんだよ」

「あんたを地面にひれ伏させてあげてるの」

「ばか、ちげーって。あんなところで結界出すからにはなんか合ったんだろ？」

「む、あんたが斬ってた見えない何かの襲撃」

「襲撃って・・・やっぱりバカだな・・・っと。お前、あれが何かわかんなかったのか？」

「五月蠅いわね。もう一回沈むか？」

「か、勘弁勘弁。冗談にしてもおもしろくねー」

「冗談に、聞こえる？」

にっこー

あ、本気か

「もう、俺にはそんな体力残ってない」

「で、何あれ？」

「・・・殺気だよ」

あれぐらい見極めろよな第三位

「殺気？」

っていうかもう俺をにらむの止めろ

なんか悲しくなってくるわ

「妙なものに惑わされすぎなんだよお前は」

「な、何よ」

「なるほどね。聖水混じりの結界を張って見えない殺気に向かってわざわざ魔力を使って攻撃してたと。こんなばかばかしいことよく出来るな」

「五月蠅い！結界に引っかかったら何か物理的なものが攻撃してきてると思うじゃない！第一あんただって今こうやってその殺気とやらを斬ってるじゃない！害のない殺気ならそんなことしなくてもいいはずよ！」

おーおー、自分の勘違いを正当化しようってか

せっかく行為でやってあげてる事なのに

まぁこいつらにはちと経験させておくのも悪くはないか

ここまで巨大なのもまた出会う経験は無いからな

まぁセルディアが殺気と分からなかったのも無理はない

普通は殺気なんて結界に引っかかるものじゃないから・・・、いや、

聖水の成分が結界に混じっていたから引っかかったのか？

まぁどちらでもいい。そんなことはさしたる問題ではない

「しゃーねーな。じゃぁ俺がこの殺気を斬るのを止めてやる。せっかくの行為を無駄にしやがって。あ、別に怪我するとかじゃないからあまり驚くなよお二人さん」

異世界から来た二人にはまぁ初めての経験、いや、皆初めてか

とりあえずその二人だけには害のないものと先に教えておく方が身構える余裕もできるものだろう

先ほど俺がセルディアの拳に倒れたときは空気を読んでくれたシェルディィがとっさにこの殺気を癒しの魔術で押さえてくれていたが俺は首を縦に振るとシェルディも分かったようでその魔術を解除した

魔術といってもただ単に彼女の魔力を周囲にカーテンのように張り巡らせてあるという簡素なものなのだが

おそらくあそこにいる土属性の魔術師なら見えているだろう

土属性の魔術師はマナや魔力をもっとも視覚として見やすい人材であるはずだからな

真っ白な、それでも普通の人には見えないその魔力のカーテンが消える

そして押し寄せる、殺気

ドンッ！！！

◆

彩輝はとっさに腰の短刀に手を伸ばしかけた

おそらくレイルさんが行ってくれていなければとっさにこの短刀を抜いていたはずだ

それほどまでに感じる恐怖、恐れ、そんなものが針となって突き刺すような感じ

重い・・・

その空気の重さに押しつぶされそうになる

殺されるのではないか

そう連想させるかのような殺気が周囲一体を包み込んだ

レイルさんはさっき、こんなものを斬っていたのか？いや、こんなもの、斬れるのか？

じわじわとにじみ出る汗が滴となり、頬をつたって地面へと消えていった

立っているのが辛いほどに

そしていつの間にか俺は気を失い、そのままその場に倒れた

『平和を願う者で在りたいと』

アヤキが目を覚ますとそこは簡素なベッドの上だった

何度目だよこの寝起き・・・

絶対にこちらに来てからの日数より寝起きの回数が多いような気がする

2度目の気絶からの寝起きはあまりいいものでは無かった

ちなみに外が明るくなっており、気絶が睡眠になってしまっているようであった

「朝・・・？」

寝起きはいい方なのですぐに自分のおかれた状況を察する

「あぁ・・・俺あの時気を失って・・・」

あのとてつもない量の、それこそ肩に何かがのしかかるような、そんな重い殺気を感じて俺は気を失ったのだと思い出す

隣を見ると真横には一条さんが横になって寝ていた

ん・・・・・？ハァ！？

「ちょ、ちょ、え！？」

かけられたシーツをとっさにめくる

するとそこには一条唯がすやすやと眠っているではないか

「何この状況？」

とりあえずここを出ないと・・・

誰かに見られたらいろいろと言われそうな気がしたので俺はベッドから降りようとする

が

「ちょっ、洒落になんねーって！」

がっしりと俺の腕をつかむ一条さん

それはもうがっしりとつかんでいる

とりあえずそーっとはがせば起こさずにすむかと思い、膝立ちになる

そして捕まれた腕をはずそうとしたところで・・・

「うぅん・・・待って」

俺の腕を引っ張る

だがどうやらまだ寝起きしたという訳ではなさそうでどうやら寝言のようである

一条さんはシーツをめくられて寒いのかくるりと丸まり、そして・・・

「嫌っ！！」

「いっ――――！！？」

思いっきり俺の両膝をまとめて蹴り飛ばした

というわけで腕を捕まれた俺はそのまま前のめりに倒れる

訳にはいかなかった

無理矢理ふりほどいて俺は何とか踏みとどまる

「ぎ、ギリギリセーフ」

ふぅ。あぶねぇあぶねぇ

このままだったら胸の谷間に顔を突っ込んでいるところだった・・・

冷や汗だらだらの俺

さ、流石にここで誰かが来て気まずい雰囲気になるのは恐ろしいと

俺は体を起こす

「お、起きたか」

それと同時にレイルがドアを開けて入ってきた

本当に危機一髪だった

「どうした?汗だくじゃないか」

「え、あぁ、本当だ・・・なんか悪夢を見た気がするわ」

流石に暑かったとか言ったら病気かと疑われる可能性があったからな

よけいな心配はかけたくないし

「大丈夫か？」

「えぇ、ほんと。大丈夫です」

そう言うしかなかった

その後、一条さんも起きてきて二人は外へ出た

「事情は大体分かった。命令ならば断るわけにも行かぬしな。それにしても王女から命ぜられるとは意外だな。国王当あたりからの直筆かと思ったのだが」

「話は通してあるが直接は関与していないそうです。アルフレア様に今回の件を一任させたらしくて」

「一任？丸め込んだのほうが正しくないか？」

「まぁ・・・そうですね」

「起こしてきたぞ」

セルディアさんとシェルディさんは夜営に張ったテントの前で話をしていた

セルディアさんは書状を丸めてひもで結び直してシェルディさんに渡した

「お前がアヤキ・サクラか」

「は、はい。初めまして」

セルディアさんは腕を組んで俺の瞳を見つめた

昨日は暗くてよく分からなかったが俺より少し背が高い

青髪で髪は肩にかかるくらいの長さである

目はややキリッとしており、その口調と合わさって強気な性格が現れている

魔術師と聞いてはいたがむしろ切り込み隊長のような風貌である

周りにいたローブをきた魔術師達とは違ってローブの下には騎士服を着ている

腰には剣を提げているため剣術のたしなみもあるようである

「なるほど。年は？」

「えっと、１７です」

「なるほどな。二つ下か・・・。とてもそうは見えない雰囲気をしている。これが異世界の人間か。姿形は同じとはいえ、私にはまる

で別の生き物のように思える」

別の生き物・・・か

今まで気にしていなかったけど、別の世界に、同じように人間が存在するのってすごいことだよな

確かに全く別々の世界で生きてきたんだ。別の生き物っていうのもあながち間違ってはいないなと俺は思った

「別の生き物ってお前なぁ。人間にはかわりねぇんだからさ」

レイルがあきれた顔で言う

それもまた正しい

別々の世界で育ったとしても、人間であることは間違いないのだ

「人間にはかわりない、か。かつて破壊の限りを尽くしたアグレシオンもまた人間だ。突如現れた彼ら。彼らもまた、別世界の住人なのだろう。現にここに別世界の人間がいるのだ」

アグレシオンか

よくきく言葉だな

やっぱり、この世界の人には、俺たちは彼らと姿が重なって見えるのだろうか

実感は無い

だけど

「俺は・・・」

「ん？」

「俺は、別に好きでこの世界に来た訳じゃないです」

好きで来たからこそ分からなかった自分

たとえ彼らの目に姿が重なって見えたとしても

「何いってんのアーヤん？」

「アグレシオンって人たちには会ったことも見たこともありません。でも――」

自分は違うのだと

「でも彼らがこの世界を侵略しようとした人たちならば――」

俺はここで宣言しておく

分からない自分に区切りをつけ、どう在りたいかを

「俺はこの世界のために、守る立場、平和を願う立場の人になります」

やっと分かった

俺はどうしたいのか

元居た世界に帰りたいっていうのもあるけど

この世界に居る間、俺は何をしたいのか。何をすればいいのか

どう在りたいかのか

ずっと疑問に思ってきた

自分がこの世界に飛ばされて、この世界での自分の存在が分からなくなってきていた俺は思った

桜彩輝がこの世界にいる間、自分はいったい何なのか

学生でも無い

父さんと母さんの子供として在ることも出来ない。親である二人は
この世界にはいないのだから

この世界にいる俺は、名前しか持たない桜彩輝でしかない

自分がこの世界に居る間だけでいい

自分はいったい、この世界の何なのかを

そしてたどり着いた答え

この世界の人間達とも違う

アグレシオン達とも違う

住人でも、侵攻者でもない第三の立場として

住む者でも、攻め滅ぼす者でもなく、守る者、平和を願う者として
ありたい

「平和な日本に生まれた性分かな・・・。平和ボケしてんだろうな
俺」

「そ、そんなこと無い！！私も、そう思う！！」

一条さんは俺に賛同してくれたようだが、そんなの、別世界から来

た俺たちにしか沸かない感情があるからこそ

俺も、一条さんも、この世界の住人ではない故にわき上がる謎の感情

「なんていったらいいんだろうなこの感情。まさか自分が何かなんて、考えるような事でもないだろうに・・・」

こういった状況だからこそ、自覚させられた

向こうの世界なら、自分は見えないレールの上を歩いていた

幼稚園や保育所、小学校や中学校、高校や大学、そして就職

何かのために自然としていたことがあった

その中で、テストでいい点を取りたい、友達を作りたい、仕事につきたい、進学したいと思うようになり、そこが同時に自分の居場所でもあった

だけど根本となるレールが無くなり、いったい自分は何のために、いったい自分は何をしたいのか

自分が何処に立っているのかすら分からない

すべてが抜け落ちた気がしていた

だけど、今決めた

前は彼女を守ると決めて
次はこの世界を守り、平和を願う人間として在ることを決めて

「俺は、強くなる。力をつけて、守ることが出来る人間に。願うだけじゃなくて、それを自分でつかめる力を持つために、俺は強くなる！！！」

「これで宣言二つ目だねアーヤん」

二つ目の誓い
彼女を元の世界に返すこと
この世界の身方であること
一つ目は彼女のために
二つ目は自分の基礎となるレールを作るために

「そう・・・ですね」

「よく分からんが、まぁお前が別世界の住人でも、この世界のために居てくれるっていうなら、俺は歓迎するぜ」

「そうですよ。あなた達はアグレシオン達とは違う、優しい心を持って居るんですから」

「私には今お前が何をもって宣言したのかは分からん。が、敵で無いならば迎え入れない理由が無い。お前達が別世界の住人であるということはシェルディに聞いた。いろいろあって大変だとは思うしあまり私たちもやることがあるからあまりかまってはやれないが、今回の護衛の件、全力で当たらせてもらう」

「よろしくお願いします」

セルディアさんは右手を差し出し、俺も右手で握手を交わした

その日はその村でもう一夜を明かすことになった

不足気味の食料を補充し、セルディアさんはやり残した魔獣の討伐の指揮をとるためだ

「いやぁ、昨日は悪かった。耐性が全く無いとはいえ、まさか先に言っておいたにもかかわらず二人とも気絶しちまうんだからよ」

「しょ、しょうがないでしょ！私たち別に騎士って訳でもない一般市民だし」

「ですね。あれって本当に殺気なんですか？」

俺と一条さんはその日、レイルさんに昨日のことを訪ねていた

殺気で倒れたのは俺だけではなく、一条さんも同じだったという

戦場にも出たことがある人、それなりの訓練を受けた人達とは違い、俺も一条さんもただの一般人

むしろ殺気だけで気絶してしまうほどのレベルである

「そうだな。魔獣たちもその殺気に当てられたのが原因でこの村に現れてたらしいしな」

「その殺気って誰が誰にむけたものなんですか？」

一条さんが素朴な疑問を口にする

殺気。ようは殺そうという気迫だ

誰かが誰かにむけるというのが一般的な考え方だ

「まだ詳しくは分からんが、おそらく在る程度の知識を持った魔獣だと思う。恨み、辛み、悲しみを知る魔獣が、その対象に向けて殺気を飛ばしていると思うんだが」

「あの、殺気って斬れるんですか？」

殺気って、不可視のものである
見ることは出来ず、でも感じることは出来るという不思議な存在である
もともと殺気自体を向けられることがほとんど無い生活環境の中で、耐性の無い二人が気絶してしまうとういう自体を招いた
それほどまでこの殺気は、恐ろしく、重いものだった

「あぁ。ある一定レベルを超えた殺気は、相手の精神に直接響くようになる。そのへんまで行けば殺気を断つ事が出来る。とはいえそこら辺の人間じゃ、俺もそうだがあんな殺気は感じたことがない」

「でも気絶しなかっただけマシですよ。戦場だったら確実に死んでます」

気絶して、敵にやられて、はい終わりだ
やっぱり騎士とかって多少耐性とかあるもんなんだなーと実感する
それ以前に、殺気に耐性とかあるなんて初耳だけど

「ま、別に龍とかそんなレベルじゃ無いはずだ。せいぜいAランクBランクの魔獣だし、森の奥に居る訳だしあまり関係ないさ」

あれ？ランク高くね？

「でも森に行く訳じゃ無いですしね。あー、でもこういう時ってやっぱり耐性のあるレイルさん達がいるってなんか安心ですよね？ね？」

別にその魔獣を倒さないと目的地に行けないって訳でもないし、そういうのは騎士とか魔術師とかに任せておけばいいわけだし

「俺たちがそのシトレの森を通ってゼルタール火山へ向かうことになっていなければな」

ボソリと付け足しやがったこの人

「前言撤回。マジっすか？」

「マジマジ。森を迂回してたら火山からの帰りの分の食料が持たなくなるんでな。まぁ現地調達でいいって言うなら考えてやらなくもないが」

ま、そーなるわな

なんかありがちな展開っていうかなんていうか

あれ？なんか笑ってねこの人？

「とりあえずはシトレの森を抜けてそのまま登山することになるな。目指すのはおそらく山の頂上。頂まで上れば何か分かるだろうしな」

「そうですね。まだどうすればいいかよく分かりませんし」

ソーレと会話できるようになったとはいえ、分かったのはその目的地へのヒントだけ

詳しいことはそこに言ってみなければ分からないと言っていたしあまり頼ることは出来ないと思われる

「正直怖いのは、殺気の主ですかね」

「ただ妙なのは昨日あの後ぱったりと殺気が止まったんだよな。結局何だったのやら」

レイルは髪の毛をいじりながら首をかしげた

村を発つまで、あとわずか

『いざ、火山へ突入！』

「ここがゼルタール火山かぁ。でっけー・・・」

そびえ立つ巨大な火山にたどり着くまでに、山を一つ越え、そして、ついた

その火山は富士山のような綺麗な形では無い

雪も、植物もない、ただただ荒れた岩場のような山であった

頂上からゆっくりと白煙が上昇しては風に流され消えてゆく

「坑道の入り口はもう少し先だ。そこから頂上近くまで通じている。一端そこから外に出てそのまま頂上まで向かうがそれでいいか？」

レイルが皆に移動通路を説明する

遠くに小さな穴が見える

そこがおそらく入り口なのだろう

外側を上るのはほぼ不可能といってもいい

ゴツゴツとした岩肌が、頂上までの道のりを拒むかのように存在しているため移動は火山内部の坑道を使うことになっている

坑道自体はもう使われておらず、火山ということで温暖な坑道内部には魔獣が居ることが予想される

「というわけで決して離れるなよ二人とも」

「いえっさー！」

「それ返事か？」

「イエス！いざ、火山へ突入！」

なんだか意外と一条さんはノリノリだった

まぁ元近衛隊隊長と魔術師の第三位、それに治癒術の仕える人が居るならたぶん大丈夫だろう

あれから順調に進んだ俺たちはシトレの森を抜け、山を一つ越えた森を抜けるのに半日、山で野宿をしてその次の日にはこうして目的地にたどり着いていた

とはいえ本当の目的地はもっと上なのだけれども

坑道に入ると外とは違い、とても暖かな空気に包まれていた

亀裂の入った壁から白い煙がわずかに漏れている

壁に触れるとほんのりとした暖かさが伝わってきた

「にしても暗いですね」

松明を片手に俺はつぶやいた

坑道内に光りは届かない

上へ上へと上る道を照らすのは二本の松明のみ

先頭を照らす俺の光り、それと足下を照らす一条さんの松明だ

レイルさんとセルディアさんには護衛を頼んでいるので両手をあけておきたいと二人が言ってきたからだ

だがまだ魔獣には一匹も出会っていない

肩に止まるソーレは今は肩には止まっておらず、空をパタパタと羽ばたきながら俺の頭上をゆっくり飛んでいる

「お、最初の魔獣だ。危害は加えんから安心していいぞ」

レイルさんが前方を指さした

俺は持っている松明で少し先を照らす

そこに居たのはピンクっぽい毛をした生き物だった
見た目はまん丸でフワフワとしていて空気中に漂っている
丸い目が俺たちを見つけるやいなやゆらゆら揺れながら闇の奥へと消えていった

「何ですかアレ？」

「フモモっていう魔獣よ。ペットとして人気があるの」

シェルディさんが答えた
なんかうっとりとした目でフモモを見つめていたような・・・

「暖かい場所に居て熱を食ってるんだ」

「熱を？」

「正確には食っているというより取り込んでいるってのが近いな。熱を吸収して冷気を放出する生き物だ。ここがまだ使われていたときに大量の熱を和らげるために使われていた奴が野生化した、あるいは野生のフモモが火山の熱に引かれて坑道に住み着いたかのどちらかだな」

「なんか地球温暖化に貢献しそうな生物だな」

「それに可愛い～」

一条さんもうっとりしていた

「あいつが居るからここも暑すぎない温度に保たれてる。そのおかげで魔獣も住み着く。坑道内にも生態系ができあがるわけだ。熱を取り込み、生き物が住める環境になって、そして新たに住み着いた生き物を食べる生き物が住み着いて、そして死んだ生き物は坑道内にマナを残して小さな生物によって土に帰る」

「死んだらマナになるんですか？」

「いや、魔獣は人間とは違って元から魔力を持っている。つまりマナを取り込み魔力にしなくてもいいわけだ。新たに魔力を取り込むには魔力を持つ魔獣を食らうしかない。だがそれは肉体にとけ込んだ微量の魔力しか取り入れられない。ということはだ、残った魔力は大気中に放出され、そしてそれはマナへと戻る。さて！そのマナを吸収するのは何か？分かるか？」

「え、ここで聞いてくるんですか！？」

「何事も学習学習。さ、なんだと思う？」

突然の事でちょっと驚きつつも俺は考える

魔力を吸収するのは何か？魔獣は取り込めないっていっていたし人間は違うよな

魔獣がマナを取り込むには魔力を持った魔獣を食べるしかない

そしてその行き着く先

「植物・・・ですか？」

「あー、惜しいっ！！」

く、はずしたようだ

いい線行っていると思ったんだけどなぁ

「一条さんはどう思います？」

「え、私！？突然振らないでよー・・・。うーん、そうだなぁ。たぶん草も魔力を多少持ってるとは思うんだけど、それを二酸化炭素や酸素みたいに呼吸や光合成のような取り込み方じゃないとすると・・・やっぱり土の養分からだよね」

「お！」

「答えは土・・・かな？」

「お見事！ズバリ、土なんだよ！」

わーぉ、当てちゃったよ。すげー

一条さんは恥ずかしそうにしながらもうれしがっている

「魔術師でもそうだが土はマナを吸収するんだ。ほら、土の魔術師でも言えることだがマナや魔力を感じる力が高いだろ？」

「あ、そういえばそうですね」

気づくのが少しばかり遅かったか

もう一歩踏み出せば答えだったんだけどなぁ

「あー、悔しい・・・」

「ほっほっほー！私の勝ちよっ！！」

「ぐっ・・・」

なんか悔しさが倍増したんっすけどー？

ふふーんと自分が上位であるかのように振る舞う仕草に俺は悔しさをかみしめる

レイルさんもシェルディさんも口には出してはいないが笑っている

「あ、また分かれ道」

俺は目の前にあらわれた二つの道を前にして脚を止めた

坑道内に入ってこれで何度目の分かれ道だろうか

坑道内は深く入り組んでおり、こういった分かれ道が沢山あった

とりあえずこの坑道が使われていた時期の人に譲ってもらった地図を元に進んでいる

俺は松明をレイルさんが出した地図に近づける

「ここは左か」

レイルさんは左の道へ向かって歩き出す

俺は松明を少し上にやって奥まで照らしてあげた

地図が合ったから迷わず進めているが、無かったらどうなっていたことか

ここに来るまでで一度、６本に分かれた分かれ道に出会った

地図がなかったら絶句物だ

「っにしても複雑よねこの坑道」

一条さんがつぶやいた

確かにそれは言えるな

いつになったら外に出られるのやら

「そうだな。昔は良質の鉱石が沢山採掘された場所だったんだ。大陸唯一の活火山だ。ここでしか取れない鉱石とかも合ったらしいが、今はもうほとんど取り尽くされているらしい」

「だからもう使われてないんですか？」

「まぁな。もしかしたら取りこぼしのもんがみつかるかもしれんぞ」

「ツキはそれが目当てなんだっけ？」

「まぁあれば儲け程度の気持ち」

なんかツキが空気なのは気のせいか？

まぁ発言回数少ないし、物静かな性格だしな

こういうのってクールっていうのだろうか？

「お？」

先を歩くレイルさんが声を漏らす

「どうかしましたか？」

「いや、地図にはない場所に出ちまってよぉ。この先も同じような通路が広がってるはずだよな？」

「地図ではそうなってますよ」

一条さんが地図を広げる

確かに現在地は通路のはずなのだが、目の前には巨大な空間ができていた

「なんでしょうね、ここ？」

最後に広間に入ったシェルディさんが首をかしげた

頭上が大きく抜けた広間の天井は、持っている松明では光が届かないほど高い場所にある

「声が結構響くな」

セルディアさんも見えない天井を見上げた

セルディアさんの声が巨大な空洞に反響する

「がーっ！カウガァ～ッ！！」

突如ばたばたとソーレがせわしなく羽ばたき始めた

「お、おい、どうした？」

「ガウッ！！カァッ」

「危険？」

危険って・・・何か居るのか？

ソーレが大きく息を吸い込んだ

もしかしてこれって・・・

そして大きく歯を打ち鳴らし、そして

「ガァッ！！」

「うぉー！火吹いた！！」

口の大きさからは想像もできない、握り拳二つくらいの大きさの火球がソーレの口から飛び出した

火球は頭上に放たれ、火の放つ光が壁を照らしながら上昇していき、そして何かに当たる

その瞬間に火球は爆発して周囲を照らした

「げ！？」

一瞬、天井が光で包まれ、そして俺たちはその存在に気がつく

赤い４つの目が、俺たちを見下ろしていた

「よく気づいた！お手柄だっ！！」

セルディアさんはソーレをほめると杖を振りかぶった

「走れ！この先の通路を抜けたところで待っていろ！」

「私は戦えるから残りましょうか？」

ツキが残ることを提案するが

「いや、もしもの時のために護衛についていてくれ。あっちは誰も戦える奴が居ないからな」

レイルさんはそう言って背負っていた剣を構える

俺が松明で奥を照らすと横穴が続いている場所があった

一条さんとシェルディさんは一目散にその穴に向かって走っていった

その後をツキが走ってついて行く

「あ、危なくなったら戻ってきてくださいね！」

「もちろん！足止め程度にすませるつもりだ。いいから早くいけ！」

俺はレイルさん達を振り返ることなく横穴へと走り抜けた

その直後、大きな地鳴りと共に、松明で照らした広間に立ちこめた土煙が二人の姿を消してしまった

◆

「あーあー、ついてねぇなぁ！」

剣を構えて3人が横穴にたどり着くのを見守り、最後にアヤキが駆け込んだのを見て視線を上に戻す

その瞬間、大きな揺れとともに何かが上から落ちてきた

土煙が周囲の視界をさらに悪くさせた

真っ暗な上にここまで煙がすごいともはや何も見えない

レイルは小さな小石を拾い、壁に向かって投げつける

カツーンと音を立てて、石が壁に当たる

そして大きなドスンドスンという音と共に、見えない何かがその音のした方向に歩いていく

「万雷よ、幾万の槍となり、敵を貫け！イラディアント！！」

煙の奥に雷光の玉が浮かび上がった

その光はバチバチと音を立てて周囲を照らし出した
煙の中に、巨大な影が浮かび上がる
昆虫を思い浮かばせるような四肢、そして巨大な二本の鎌

「アラミアント！！やっぱりか！」

ズドオオォォンと大きな音と共に、雷光が一気に放射状の無数の雷となり敵を貫いた
砕けた甲殻が周囲にはじけ飛ぶ

キュォォォッ！！！！

雄叫びが広間に響き渡る

「おし、もう一発撃て！次に俺が突っ込む！」

「万雷よ――――」

俺は土煙を剣で吹き飛ばす

「幾万の槍となりて――――」

剣を構え、腰を落とす

「敵を貫け！！」

雷光が敵を再び浮かび上がらせた

赤い四つの目が俺を睨んでいた

ズドォォン！

放射状に広がる雷が、敵の右前足と両手の鎌を吹き飛ばし、残った雷はすべてアラミアントの体を貫いた

巨体が地面に倒れ伏し、そして・・・・

キュォォォォォンッ！

もう一つの鳴き声が、遙か頭上から俺たちの耳へと届く

「もう・・・一匹！？」

すでにセルディアは頭上に向けて攻撃態勢をとっている

俺は目の前の傷ついたアラミアントを仕留めにかかる

剣を構えて俺は走り出す

未だ体を貫かれてなお、体を動かそうとするアラミアントの体には電気残っているようである

微弱な電気を放電しているアラミアントの右後ろ足を蹴って振りかぶる

「――――ライジングアロー！！」

「紅蓮輪月！」

魔剣であるこの剣の属性は火

後ろで天井に向けて雷を放つセルディアの後ろで、剣にいくつもの魔術が込められているうちの一つを発動させる

剣が炎に包まれ、そしてそのまま一気に縦回転をする

体の上に着地し、まっぷたつに縦に裂けた足が地面に落ちる

「確かこのあたりが心臓だったかな。紅蓮炎衝！！」

キースイッチである言葉を発したとたん、再び剣が炎を纏う

炎の剣と化したその柄をしっかりと握りしめて逆手に持ち帰る

そして大きく振りかぶり、割れた甲殻の裂け目に剣を突き立てた

その瞬間、大きく剣から炎が吹き上がる

突き上げるかのようにして吹き上がるその炎は使用者に対しては効果をなさない

俺は炎に飲み込まれつつも力一杯剣を押し込む

肉が焼けこげ、アラミアントが悲鳴を上げる

炎が高く吹き上がり、そしてその炎が消えると俺は剣をアラミアントの死体から引き抜いた

「仕留めたぞ。そっちはどうだ？」

「ちょこまかと・・・」

天井にはいくつも穴が開いていた

天井から光が差し込んでいる

「上はもう外なのか。っていうかあそこまで上らないといけないのかよ」

目指す場所はまだまだ先か

天井を器用に移動するもう一匹のアラミアントは飛んでくる雷をよけつつも相手が隙を見せるのを待っているようにこちらを見つめている

「じり貧だな」

「うっさいボケ！黙っとれ！」

「そうかりかりすんなよ」

とは言ったものの、雷をよけるとはなんつースピードだ

前に一度戦ったときはさすがにふつうの剣一本でかなり苦労した覚えがある

暗闇を住処にして、見た目よりも恐ろしい自慢のスピードと両手の鎌で相手を仕留める

四つの赤い目は暗闇でもちゃんと機能するため相手の方がどちらか

というと有利ではあるが・・・

天井が抜けて光が差し込んできているためこちらからでも何とか相手を黙認することはできる分、遠距離攻撃できているこちらが有利ではあるな

近づけばそのぶん攻撃が当たりやすくなるからうかつに近づいてはこないだろう

まぁ確かに雷の魔術師だからマナ不足になることは無いと思うが・・・

雷のマナというものは非常に少ない

空や雲、雷が落ちた場所になら多少はあるだろうが、そもそも雷のマナは希少性が高い

いつどこで戦うかわからない戦場などで使うとなれば大変不利である

だが雷の魔術師は雷のマナ以外にも、他の属性のマナを取り込むことができる

雷の魔術師が持つ特性、取り込んだマナは、体内で魔力に代わる際に雷の魔力になる

これのおかげで雷の魔術師はどこでも雷属性の魔術を使用できる利点がある

ただし通常よりも多めのマナを消費しなければならないが

と、俺が天井を見上げているとき、突如穴の奥を影が通り抜けていった

つまり、外で何かが、穴を覆い隠すほどの大きさをした何かが飛び抜けていったのだ

ここで、そんな大きな生物が居るとしたら、それは――――――――

『いざ、天空へと駆け上がれ！』

「引くぞセルディア！」

「は！？」

昔から、こういう直感だけは信用しているつもりであった

その直感が、俺をここから離れさせようとしているのも何となく分かった

そしてその原因が先ほど見えた巨大な影であるということも

俺はセルディアのローブの襟首を持って思いっきり肩に担ぐ

攻撃が止んでアラミアントがゆっくりとこちらを見つめている

警戒しているのかは分からないが、横穴にまでは十分追いつかれずにたどり着けるはずだ

「ちょ、なんでよ！？」

セルディアが理解できないとでも言いたそうにしながら俺の顔を睨み付けているが気にはしていない

そして突如、前触れ無く天井が音を立てて崩れた

大きな破壊音と共に、巨大な影が飛び込んできた
崩れた瓦礫とアラミアントが落下してくる
そして二人は見た
一匹の紅い龍が、脆くなった地表を壊してこの縦穴に飛び込んできたのだ
そして落ちてゆくアラミアントを崩れた瓦礫を避けながら巨大な脚で鷲掴みにする
ギロリと俺たち二人を睨み付け、そして龍は上昇を始めた
一気に差し込む光が、瓦礫の影と共に床を照らし出す
瓦礫は、退路を断って縦穴の底を埋めるとしーんと静まりかえり沈黙した
間一髪、横穴に飛び込んで二人はホッと一安心する
「だ、大丈夫ですか?」
真っ先にサクラ・アヤキが俺たちの元へと駆け寄ってきた
◆

横穴の先、巨大な縦穴の空洞で戦う二人が突如こちらに向かって走ってきた

いや、二人ではなく、セルディアさんをレイルさんが肩に担いで走ってくる

それと同時に巨大な音が遥か上空で鳴り響く

二人が横穴に駆け込むと、すぐさま穴の奥に巨大な瓦礫が落ちてきたのが分かった

瓦礫はそのまま俺たちの居る横穴の出入り口を塞いでしまった

「だ、大丈夫ですか？」

俺が二人に駆け寄り声をかける

レイルさんはぜーはーぜーはー息を荒げて仰向けになり、肩に担いでいたセルディアさんを放り出す

セルディアさんは落とした杖を拾って壁にもたれかかった

「何があったの？」

シェルディさんが後ろから出てきて二人に聞いた

「龍よ。龍が一匹、天井突き破って来たのよ」

「うぁ、マジですか」

俺は一度龍と対面しているから分かるが、あれは確かに逃げざるを得ないな

「まぁ向こうはアラミアント持って出て行ったけどな。まぁ餌探ししてたんじゃないか？」

「にしてもなんでこんなところにあんな大きなのが2匹もいたんですかねー？あんなでっかいのが入ってくる穴なんて無かったわよね」

ふさがった入り口を松明で照らしながら一条さんは言った

入ってきた穴とこの穴、その二つしか横穴は無かったと思う

「おそらくまだ子供の時期にここで育ったんだろう。巣穴自体は自分で作るからな」

「あの縦穴はあのでっかい奴の巣だったんですか？」

「そうだな。さて、先は長いようで短い。さっさと上を目指すぞ」

レイルさんは剣を杖代わりに立ち上がった

ってか少しぐらい休んでもいいのに、あの人どれだけ体丈夫なんだよと俺は思った

「さて、ようやく実験が成果になるときが来ましたね」

「そうそう。そうだね」

一人の女性と一人の男がいる

部屋は薄暗く、異様な光景が広がっていた

幾つもの蝋燭の火がゆらゆらと揺れて人影二つを映し出す

真っ昼間であるというのにこの部屋は闇に包まれている

机の上に置かれたグラスには紅い液体が入っている

真っ白なテーブルクロスに紅い光りがユラリと見える

それを二人は手に取りカチンとグラスを合わせた
そしてグラスに入った紅い液体をごくりと二人は飲み干す
長かった
どれほどこの時を待ち望んだ事か
どれほどこの瞬間を求めた事か
どれほどこの思いを募らせた事か

「長かった」

女はそう言ってグラスを机に置いた

「予想外に手に入った事ですこし予定が早まったが、まぁいいでしょう」

「あれはもういつでも使えるのか？」

「そうね。すぐに同調すればすぐにでも解き放つ予定よ」

「これを手に入れるのにも長い長い苦労をした。だーがだがだがその肉体を手に入れるのにも苦労したものだよ。わーざわざエスタニアにまで遠出をしたのだからな。まぁそれも今日この瞬間のためな

らば安い安い物だ」

男はそう言って部屋の隅にある地下への階段を下りていく

手すりもないその急な階段をゆっくりと下りていき、女性もその後へと続いた

階段を下りるとそこには広い空間が広がっていた

じゃらじゃらと小さく鎖の音が室内に響く

「そうあわてるな。今すぐ出してやるよ」

ギュアァァッ！！

バシンッと鎖が一気に張り、つながれている壁が大きく軋む音がしたが、壁が崩れることは無かった

代わりに小さな塵がぱらぱらと落ちてくる

「脆い脆い脆すぎる。全く、結界の設計者はどんな設計をしているのやらやら」

「あら、私に言ってるのそれ？」

男はため息をついてぼさぼさの髪を引っかき回す

「そう言うな。結界の期限も近づいている事だし、そろそろやろうか」

「何か気に障るんだけど・・・。まぁいいわ。皆が戻ってくる前に早く終わらせましょ。シアン、アラン」

女は闇に向かって自らの下部を2匹呼ぶ

闇の中から現れたのは2匹の魔獣

見かけはコウモリに似ている彼らは2匹で何かを脚でつかんでいた

それを女が受け取る

黒い物体はうっすらと自らの顔を映し出している

「なんと美しい輝きか」

「どれどーれ?私にもその輝きを見せてくれないか?」

「えぇ喜んで」

女が差し出すその黒い物体を男が両手で受け取った

まるで瞳を貫いて、その奥にある物までも見透かすような美しさをしている

「おーぅおぅ。これはこれは、なんと素晴らしい。まさに求めるだけの価値がある。さて、では彼を待たせるのも悪い。始めようか」

男は目を細めて闇の奥を見た

光りが無くとも物を見ることが出来る自らの目は、今、目の前の生物に注ぎ込まれている

期待と高揚感、

「教えてもらったキースイッチは？」

この特殊な魔道具の発動にはキースイッチが必要だ

これが分からなければこんな物に価値などありはしない

言葉と対になっている魔道具

鍵はすでに、これと共に手に入れてある

「キースイッチは――――」

女は言った

これが、この言葉こそが始まりだと

「『黒翼の堕天使の黒光』」

「おっしゃぁー、外だー！！」

「ッ高いわねー」

一条さんが下を見下ろす

断崖絶壁

なんでこんなところに出口があるのやら

続く道は壁づたい

ロープこそは壁に付いているものの、なんでこんな場所を歩かないといけないのかと思えてくる

高所恐怖症じゃなくても怖いぞこりゃ

腰が引けてくる

彩輝は引きつった顔で一条さんの隣に立つ

一条さんとは逆に俺は上を見た

山頂までは後少し

１０分もかからないだろうという場所に出口はあったが、そこまでの道のりが険しい

壁伝いにものすごく細い道を通り、そして断崖絶壁にかけられたはしごを登る

一歩間違えたら死ぬなこりゃ

転落死とか、なんかめっちゃ嫌だ

かっこわるすぎて嫌だ

そして・・・

つ、ついた・・・

たどり着いた

眼下の景色がすごい事になっている

「すげー・・・」

「ここまで来る人間は本当にわずかだろうな。ほら、見てみろ。あそこがさっき崩れた場所だろう」

レイルさんは少し下にある大きな穴を指さした

確かにそこにはぽっかりと穴が空いた場所があった

あれのずっとしたを通ってきたんだなぁ俺達

「って、帰りどうするんですか!?穴埋まっちゃいましたよ!」

俺は今更ながら突っ込んだ

今思えば穴は落ちてきた瓦礫で埋まっているしどうやって帰るのだろうか?

「ふっ、聞いて驚けノープラン!」

「・・・・」

「おい、驚けよ」

「もう驚けないです。リアルに怖くて驚けない」

え?なに?そのまま下山するとか?この急斜面を?無理無理無理

「まー何とかするさ。それよりも、このあとはどうすればいい?」

そうだったそうだった、このあとどうするかだ

まさか何も在りませんでしたで帰る訳にもいかないからな

「ソーレ、何か分かるか?」

「きゅー」

そうか、まだわかんないか

肩に止まるソーレにも聞いてみるが分からないとの答えが返ってきた

さて、どうしたものかな

「やっぱり火口かなぁ・・・・」

一番何かありそうな可能性が高いのは火口だよなと推測してみる

ここから火口までは少し距離がある

ここは少し火口から離れている

「ちょっと火口の方まで見に行ってきます」

「ん、分かった。とりあえず護衛としてついていこうか？」

「いや、大丈夫だと思います。すぐそこですし」

「そうか。じゃぁここで少し休憩しとるわ。暑いし」

そう。ここは暑い

すぐそこが火口なのだ

標高が高いとはいえ下はマグマ

「やっぱりあんまり近づくと危ないよな」

「かぅっ」

「だよなー。どこかいい場所ないかな・・・」

俺は眺めが良さそうで出来るだけ近づけそうな場所を探す

すると少し先にゴツゴツとした岩場があった

積まれた岩場の上までいければ当たりをよく見渡せそうだ

周りは結構高い場所まで岩の壁があり、前方は行き止まり

火口を見るにはこの上に登らなければいけなさそうだ

傾斜が緩やかな場所を見つけ、ちょうどゴツゴツとした岩場があったので岩を手で登っていく

「ほぇー・・・すげー。爆発とかしないでくれよなー・・・」

こんなところで噴火したら流石に死ねる

一瞬で蒸発だ

「お？なんだあれ？」

「きゅ？」

俺は登った岩場を降りる
先ほどの場所からは見えなかったがそこからまた一段凹んだ場所に、
小さなほこらがたっていた

「なんだこれ？」

ほこらに刻まれている文字
この世界の文字が石の祠に刻まれている

「うむ、ここはやはり皆を呼ぶべきだよな」

俺はみんなを呼んだ
皆はすぐに俺のところに集まる

「ふむ、なかなかに古ぼけた祠だな」

「祠に術式が刻み込まれてるな。それも結構強力な守護陣の術式だ」

セルディアさんは祠に刻まれているのは術式だと言う

術式は魔術の行使をするときに作り出す術の数式のような物と教えてくれた

魔術を使うためにはマナを吸収して魔力に変換する

変換した魔力を魔術として使う際に魔法陣が出現するのだがその魔法陣が術式なのだという

魔法陣それぞれが術の構成をするため、術式がぐちゃぐちゃだと、魔力は魔術として行使できなくなってしまうらしい

「術の式、それを文字として残したものがこれだ。彼女が使う符術もその一つだ。術式を文字として紙に刻み込む。そしてキースイッチを言う事で発動させる」

「つまり魔法陣が術式で術式は文字？」

あれ？なんかこんがらがってきた

なんだか魔法とかの説明に関してはよく分からないことが多い

「まず魔術という物は魔力を・・・・そうだな。計算をイメージしろ。魔力を数字、術式は数字から答えの魔術を行使するための式そのものだと言えばわかるか？」

「あー、なんとなくは」

「これはその魔力、術式を魔法陣ではなく文字として使う事でここに封じ込めてあるのだ。そして条件がそろうと術が発動する仕組みになっている。符術はキースイッチである言葉がそうだ」

「えーっと、じゃぁ術式ってのは魔力を魔術に変化させるものだと思えばいいんですか？」

「まぁそんなところだ。これは熱に反応するようになっているな。それもかなりの熱が発生した場合のみに発動するようになっている守護陣だ。規模からして直径約５００メートルほどか？」

セルディアさんは立ち上がって四方を見渡す

「みろ。ここを中心に約５００メートル。このエリアは周囲よりも凹んでいるだろう？これはおそらく火山が噴火したときのみに術が発動して溶岩が流れ込むのを防いでいるんだ」

「へぇ。そういえばここだけ周りより少し低いですよね」

「まぁ魔力の残量からしてあと数十回は使えるぐらいの膨大な魔力が刻み込まれている。誰だこんなものを設置したのは？」

セルディアさんが首をかしげながら祠を調べる

俺は立ち上がって先ほど登った岩山を見上げた

あれはおそらくあそこが高かったのではなく、こちらが低かったと

いうことなのだろう

「これだけの優れた術式を刻み込める者はそう多くはないはずだが・・・。まぁもう死んでいるだろうな。これだけぼろぼろになっていれば」

俺は祠を見直す

至る所が欠けており、風が当たってかなり丸みを帯びている

たしかにかなり昔に作られたものなのだろうと思われる

ん？

俺は石の祠のドアが少しずれているのが見えた

あの隙間に手を入れてあけられないだろうか

中に何かあるかもしれない

俺は迷わず両手を隙間に突っ込んだ

それを見たレイルさんと一条さんも手を入れる

そして思いっきり石のドアを引っ張る

石が擦れる音もせず、思い石のドアはゆっくりと開いていく

そして中をのぞき込むとそこには自分の手のひらほどの大きさの虹色の板が置かれていた

板と言っても木製ではなく、それでも金属でもない板である

強固で叩いても割れそうもないそれは縦長の六角形のようにも見える

「なんだこりゃ？」

それを手に取ったレイルさんは日の光に照らす

虹色がきらりと反射する

美しいその光を俺は手に取った

虹色か・・・・

虹色虹色・・・なんだかどこかで聞いたことあるな

どこだっけか確か――――

手に取った虹色の板が突如光り出したところで俺は思考を止めた

虹色のそれは日の光に当てられて美しくきらめいている

が、反射の光ではない。自らが虹色に輝いているのである

「カゥカッ！」

「え？戻せって？」

ソーレがこれを元に戻せと言っている

俺は言われるがままにその虹の板を祠の中に戻した

すると祠が一瞬きらりと光ったかと思うと突如、そこから光りの球体が現れた

光りの球体はそのまま上空へと消えてゆく煙の中へと入っていく

そしてその光る球体は煙の中ではじけ飛んだ

それはまるで水晶がきらめくかのように太陽の光を反射して虹を作り出す

いや、あのきらめきはむしろ水滴のように・・・

虹を越えて空の大地へ

天架かる橋

ソーレの紡いだ言葉が唄となり、頭を駆けめぐる

白煙上る地にて天高く架かる橋、虹を越えて空の大地へ

「・・・・・虹の不死龍・・・」

そうか。そこで虹か

さっきのはおそらく、鱗

煙はゆっくりと固まっていく

実体がないその煙はゆっくりと集まり、やがて雲の橋が架かる

架かった橋は雲の向こうへ

架かった橋は虹を越えて

「道は出来たか」

レイルさんが祠を閉じる

「いや、すごいねこりゃ」

一条さんがたまげたように空を見上げる

「綺麗・・・」

シェルディさんが空を見上げて心の底から声を漏らした

「これ、わたれるのか？」

と疑問の声を出すセルディアさん

「雲に乗れるなんて夢みたい」

と珍しくうれしそうに言ったのはツキ

「きゅぃっ！」

と鳴くのはソーレ

「よし、行くか！」と空の先を見つめた俺

雲に触れる

雲は固まっている

フワフワとしたそれに俺は脚をかけ、そして登り出した

天空へと続く橋の向こう側に行くために

いざ、天空へと駆け上がれ！！

『雲の上』

「不思議だよなー。これ本当に雲なのか？」

レイルさんは恐れることなく雲の上を飛び跳ねる

なんだかフワフワとした不思議な感触に俺も触れてみる

雲に触れようとするが手はそのまま雲の中にスッと入っていく

そこにあるのは、気体である雲

普通は立ってること自体おかしい話なのだが

「何処だろうねーここ。変な場所」

一条さんも周りを見渡しながらつぶやく

今、俺たちは妙な場所にいる

地上に居たときにはそんなに雲が無かったと思うんだけど・・・

上も下も、右も左もすべてが雲で覆われている場所

雲で出来た橋を俺たちは駆け上がり、気がつけば雲のど真ん中で視界は真っ白

みんなの顔すらよく見えずに霞んでいる

「とりあえずみんないるか?」

「番号!いち!」

「にー」

「さん」

「しー」

「よん」

はっ、被った!?

俺の声と一条さんの声が被った

「あ、じゃぁ俺ごで良いです」

「ろく」

「かぅっ」

「よし、全員居るな?さて、勢いとノリでここまで来たはいいものの、どうするよこれ」

レイルさんが少し離れた場所で全員の点呼をとり、ソーレが最後でしめた

まぁ確かにどうしましょうかねぇ・・・・

だれも道なんてわかんないし

「先に進むしか無いんじゃない？」

「先って何処だよ」

「知らん」

「うがーっ！とりあえずむやみやたらに行動するのは避けた方が良い。まとまっていないとはぐれそうだ」

数メートルも視界が持たないここで、自分たちで勝手に歩くとすぐにはぐれてしまう

「とりあえず近くに居る奴を見つけて合流しよう」

ぼんやりと見える人影のところに俺は向かう

そこに居たのはツキだった

そしてすぐにシェルディさんが合流した
最後に後ろからレイルさんと一条さん、それにセルディアさんが一緒になって雲の中から現れる
その上をパタパタと飛びながら追いかけてきたソーレも俺の肩に止まり、うれしそうに鳴いた

「さて、どうするかな。行き先も方向も何も分からん」

レイルさんが唸って雲の上に座った

「ソーレ、何かわかんないか？」

「かぅ？」

「うーん、んじゃぁ上まで行って何か無いか探してきてよ」

「クゥッイィッ」

ソーレはパタパタと羽ばたいて雲の上に向かって飛んでいった
すぐに龍の影は消える

「にしても本当にお前ら話ができてるんだな」

レイルさんが不意にそんなことを言ってきた

「え、あぁ。まぁそうですね」

「龍の神子ってやつの能力なんだろう？」

「らしいです。まぁ詳しいことはわかんないですけど」

「でも興味はわくわよね」

シェルディさんが話に加わってきた

「その会話って龍から貴方、貴方から龍っていうのだけなのかしら」

「いや、龍から龍っていうのも入ります。龍同士の会話聞いたんで」

だからどちらか一方通行って訳じゃないと思う

「ってことはその龍の神子っていうのは何なのかしらね」

何なのかしらって・・・何なんだろう

血筋とかそんなのか？

「というと？」

「その力は貴方が突如与えられたものなのでしょう？能力そのものは元から誰かが持っていたと貴方が言っていたのだからその能力は譲渡という形なのか、それとも適合者の力の序列で決まるのか」

「どうなんでしょう。何人も能力を持っていて力の序列で高い人間が龍の神子に選ばれるとしたら、少なからず他にも龍の声って聞くことが出来ると思うんですよね。んでそれだったらもっと龍の事とか分かってると思うんですよね」

「まぁ龍にはまだまだ分かっていないことが沢山あるからな」

「あ、そうだ。もしかしたら今からその龍に会いに行くことになるかも知れません」

・・・・・・・・・・

『は！？』

見事に全員の驚く声がハモる

あれ？言ってなかったっけ？まだそのことって伝えてなかった・・・

ような・・・気が・・・

「ちょ、ちょっと待って。龍に、合う？」

「はい。紅龍の巣に行った時に聞いたんですけど俺は確か虹の不死龍ってのに会って力の解放、つまりマナの解放をしてもらってこの周囲の大地にマナを満たさないといけないんです」

「マナで大地を満たす・・・。一年が９の月からなっていて次の龍の月はほぼ一年後。なぁ、それって毎年行っているのか？」

「マナの解放をですか？えぇ、っと確かそうだったと思います。毎年自分の月が来たときにはマナを解放するって。あ、ただ神子は毎年変わるわけではないらしいですけど」

「マナの実り・・・か。なるほど。そういう事か」

「マナの実り？」

聞き慣れない言葉が出てきた

一条さんも首をかしげる

「あの、マナの実りって？」

「あぁ、お前らは知らないのか。この大陸では毎年、膨大な魔力が大陸を巡るんだ」

「マナが、大陸を巡る？」

「あぁ。大陸中にあふれているマナ。これっていったい何処から来たと思う？」

「え？マナの出所ですか？」

出所？元々マナって何処からできるかってことだよな

土・・・は只単に空気中のマナを吸収するだけだから違うし

俺は火山の中で聞いた話が浮かんで候補に土を出したがこれはどうも違うということで候補からはずす

それぞれ属性があるから現れかたはそれぞれ別々なんじゃないだろうか

「分かりません」

「私もちょっと分からないけど、たぶんそのマナの実りって言うのが関係してるんじゃないかしら？」

一条さんがビシッと指摘する

あ、なんか答えそれっぽいような気がしてきた

「なかなか勘が鋭いなお前は。さっきの問題もすぐに答えられちまったしよ。ま、それが答えって事になるかな」

一条さんは軽くガッツポーズを取る

レイルさんは苦笑いしつつも説明を始めた

「マナの実り、これはこの大陸に存在するすべてのマナの素となるマナが毎年各地を巡ることをいうんだがまだその素となるマナが何処から現れるのははっきりしていなかったんだ。その素マナは各地の自然、大気の中に溶けていき、そして定着する。それは土であったり水であったり風であったりってな」

「補充みたいなもんですか？」

「まぁそんな感じだ。だがそうなると答えはどうやらここに在りそうだな」

レイルさんはスッと立ち上がる

力の解放こそがマナの実りの正体ってことか

まだマナの実り自体はピンと来ないけどやっぱり自分は重要な位置に居ることを再確認させられた

そしてちょうどそのとき、頭上からソーレが戻ってきた

「カゥウッ！」

「お、ほんとか？」

「そいつはなんだって？」

「なんか上のほうにあるってさ」

「それは何だ？」

「さぁ、口で表現しづらいんじゃ無いですか？なんかソーレにもよくわかんないって言ってるし」

「じゃ、上いくか。全員ちょっと俺の周りに集まれ」

『はぁ・・・』

「？」

「？」

俺も一条さんも、後ろにいたツキまでも頭にはてなマークを浮かべる

いったい何をする気だろうか

俺はいろいろ考えながらレイルさんの前に行く

レイルさんはニヤニヤと笑っているし、シェルディさん、セルディアさんは何故かため息をついた
しかも綺麗にハモった

「じゃぁ先方は誰が行く？」

レイルさんが俺たちを見渡す

「わ、私が行こう。だがお前はどうするんだ？」

「飛ぶ。んじゃいくぞ」

セルディアさんがどうやら最初のようだ
最初といっても何をするかは見てのお楽しみって事だろうか
レイルさんは腕をぐるんぐるんと振り回す

え、ほんとうに何を・・・・

「じゃぁ準備はいいか？」

「お、おぅ。これ、久々だな。何年ぶりだよ」

「そうだなぁ・・・。まぁ語るより思い出せだ！」

セルディアさんはまた一つため息をついて雲の上に寝そべった

そしてその足首をレイルさんがつかみ、振り回す

徐々にスピードが上がっていき、そのうちセルディアさんが悲鳴を上げ始める

ただぐるぐると回されて悲鳴はとぎれまくって俺たちの耳に届いている

「いざ、飛んでけー！！」

「うおおぉぉぉぉ」

セルディアさんは杖を持ったまま斜め上前方へと消えていく

唖然と見つめる俺

隣の一条さんは周りを忘れてぽかんと口を開けていた

「どうだー？ついたかー？」

遠くに向かって叫ぶ

するとかすかに返事が返ってきた

どうやら無事上にたどり着いたようだ

レイルさんは無言でうなずいてこちらを振り返る

「いやいや、これってジャイアントスインっひゃ！？」

最後まで言うことなく、一条さんは逆さまに持ち上げられる

「おっりゃぁ！！！」

「いやあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

何処まで飛んでいったのか

それすらも分からない恐怖

そして自分の番が来た

「お、お手柔らかに」

「何を、どう、お手柔らかに?俺の手は常にかたく、ごついぜ!」

ぐるぐると回る俺

遠心力で体が吹っ飛んでいきそうだ

体が回る。景色が回っている

回っているのは景色?それとも俺?

「そら行ってこい!!」

「だあああああ!!」

雲を突き抜け俺はミサイルのように飛んでいく

というか真っ白で何処をどう飛んでいるのか分からない

前後左右上下の感覚が吹っ飛び、俺も吹っ飛び

気がつけば俺はお天道様を見上げていた

「やっほ、気がついたか?」

「ん・・・」

ひょこっと視界に顔をのぞかせた一条さん

突然のことで驚いたがこうしてよくよくみると整った顔立ちをしているなぁと思った

ただたまに親父っぽいしゃべり方をするのが少々残念だが

「どうした？見惚れたかね？」

おぅ、ばれた？心を読まれたのか俺？

「見惚れてました」

「はぅ！？」

くねくねと身をよじらせる

いやいや聞いてきたのはあんたでしょうに

俺はゆっくりと上体を起こす

「俺いつから気絶してたんですか？」

なんかもう雲の中に居たときからすでに記憶が飛んでいるのは気のせいか

「さぁ。見つけたときには気絶してたし」

ですよねー

「そう言えばレイルさんは？」

「さぁ？アーヤんは私が飛んできた後すぐに目を覚ましたからそれほど時間は経ってないんだけどまだレイルさんは来てないなぁと思うけど」

周りを見渡すとレイルさん以外の全員が雲の上に到着しているようであった

何処までも続く巨大な雲の大地

もちろんこんな広い空間の雲、下からは無かったはずなんだけどなツキは酔ったのか何故か四つんばいになっており、背中をシェルディさんがさすっていた

あのぐるぐるで酔ったのだろうか

まぁ確かになんか、こう、衝撃的だった。うん

なんつー原始的な方法だよ。ジャイアントスイングって
たしかあれって結構難しいらしいよな
もちろん腕の力もいるけど自分も体勢を崩さないようにしないといけないから結構バランス感覚が重要ってのを聞いた覚えがある

「全員上まで来たけど肝心のレイルさんはどうやって来るつもり・・・・・」

後半俺は言葉を失った
それもそのはず少し離れた場所からレイルさんが飛んできた
雲を突き抜け上昇していき、勢いを失ったレイルさんはそのまま落ちてきた
雲がクッションになったのか、レイルさんの着地が綺麗だったのか、けろっとした顔でこちらに歩いてくる

「ど、どうやって来たんですか？」

「ジャンプ」

超人が居る

俺の目の前に超人が居る

超人と書いて鳥人とも書く

見た目からして俊敏には動けそうもなく、もちろんこんな馬鹿みたいな距離をジャンプだけで飛べる人が居るのかと俺は自分を疑った

だが、目の前に確かに垂直に飛んできた男が一人

見た目どうこうの以前に人間やめてるんじゃないかこの人？

「そのチビ龍が言ってたのはあれか」

俺は後ろを振り向いた

皆の視線の先には巨大な雲の塊があった

平坦な雲の上にそこだけどっさりと雲を盛った感じの場所がある

四方には巨大な雲の柱が立っており、そのどれもがとても巨大

２０メートルは在ろうかという巨大な柱、そして巨大な雲

どうも怪しいのはあそこだ

「でもなーんか嫌な予感がするんだよなぁ・・・」

ボソリと誰にも聞こえない声でつぶやいた

だが、その場所に感じていたのは興味。それよりも今の俺は何か不安なものを感じ取っていた

だから、それを違和感の元だと勘違いしていた

それ意外にそんな要素は何処にもなかったのだから気がつけなかった

俺たちは巨大な柱の前まで来た

雲で出来たその柱は風で揺れながらもその形は崩さない

「近くで見るとでけー・・・」

圧倒される俺たち

雲の上、日差しが強く、そして寒い変な場所

俺は、その巨大な雲に触れる

触れないといけないような気がした

だから触れた

次の瞬間、雲ははじけ飛び、空気中に消えていった

『虹翼碧眼』

やっとたどり着いたか
私が思う以上に、長かったようで短かったようで
だがこれで今年も約束を果たせそうだ
澄み切った碧眼が、一人の人間の子供を映し出した

（たどり着いたか龍の神子よ）

俺は言葉を失った
何に、と問われれば目の前で俺を見下ろす巨大な龍だと答えよう
以前出会った龍達よりも大きい
虹色の鱗が太陽の光りを受けて輝く
青い目が俺を写している
ずらりと並ぶ鋭い刃の奥に見える舌
揺れる尾、呼吸、その虹色の存在すべてが、俺を見とれさせてしまう美しさ

神だ

そう思うほどに美しく、圧倒的すぎる存在

まるで体全体が地に触れさせてしまうと思わせるほどの圧迫感が、

俺の心臓を握っているようにすら感じる

皆も同じように思っているだろうと思う

自分は今、神の前に立っているのだと思わされるほどに

「あ、貴方が、聖獣虹の不死龍・・・」

振り絞って出した声は霞むように小さかった

それでも巨大な虹の龍は首を縦に振った

（いかにもそうだ。我は虹龍。この世界最古の龍だ）

突如として現れた虹色の龍は穏やかな声だった

でもたぶん俺にしか聞こえていないのだろう

「マナの、力の解放をしに来ました」

このために、ここまで来たのだから

（分かっている。これは神子にしか出来ぬ事。突然のことですまなかった。こちらもあまりにも突然の事で驚いてしまってな）

「突然って・・・俺の事ですか」

（神子が突如変わったこと。お主がこの世界に来て、神子が変わった。それがつい先日。まさかここまで早く来るとは思わなかったがな）

「いろいろ、ありましたから」

（さて、早速だが前の順番である虹魚はすでに解放を済ませている。次は我らの番だ）

「具体的にどうすれば・・・」

（我に触れる。それだけだ）

俺は虹色の龍に歩み寄る

左手をゆっくりと出す

そしてそっと、脚の鱗の一枚に俺は手を触れた

それと同時に龍は大きく吠えた

後ろにいた皆は耳を塞いだ

俺も空いた手で耳を片方塞いだ

空気が振るえる

びりびりと空気が震え、それが体にぶつかっていく

空気の震え、それはゆっくりと渦を巻き始める

虹龍を中心に空気が渦を巻き、それはやがて俺と皆とを遮断してしまう

虹色の龍は尚も天に向かって吠え続ける

いつになったら終わるのか

俺は手を離しても良いのだろうか

鼓膜破れてないよな？

いろんな事が頭を駆けめぐり、気がつけば龍は口を閉じていた

吠えるのを止めてまだなお空気がびりびりと揺れているように感じる

圧倒的すぎた

その一吠えは天を貫き

その一吠えは空を震わせ
その一吠えは虹色に輝く
強力な力の奔流が、下へ下へと流れ込んでゆくのが分かる
分かるからこそ、その力の強さがとんでもないものだと分かる
敏感じゃない人でも感じるだろう
敏感な人ならどれほどの恐怖に当てられるだろうか
いや、むしろ歓喜に酔うだろうか
これが・・・異世界・・・
もといた世界との違いを、まざまざと見せつけられたかのようだった

（ここは外界とは隔絶された場所。我が力で張った結界で囲まれた
全くの別の空間だと思っていい）

「別の空間・・・」

どうりで下から見たときにはこんなに巨大な雲は無かった訳だ
ここは、地上とは別の空間だということだ

（そして言うなれば神子は鍵でもある。一年で溜め込んだ力を下界に流し込むための鍵なのだ）

「神子が居ないと力は解放できない。マナは地上から消えていく、と」

（そう。そして我はお主がこの世界に来たとき、神子が変わったことを悟った。すぐに迎えを出したがきちんと使命は果たしたらしいな）

「なんで・・・なんで俺が別の世界から来たって知ってるんですか」

俺はまだ一度もその事を虹色の龍には語っていない

不自然である

（お主が現れた場所が龍族の守護する地域だからだ。そのくらいの事、すべて見通しておる）

「別の世界の事を知ってるってことを前提に言ってるんですよね。それ」

（もちろんだとも。別の世界、その存在は知っている。無に囲まれた二つの世界。その一つがお前達の世界であり、もう一つが我らの世界。お前達がもう一つの世界から来たという事も知っている。そして、お主の事もだ）

龍は一条さんの方を見た

俺も振り返って一条さんを呼んだ

「ま、まじで？食われたりしない？」

「大丈夫ですよ」

一条さんは恐る恐る近づいてくるが危険が無いと分かると少しは心を落ち着けたようである

（お主達二人はこの世界では異形。空間を越える際、一度お主達の体は分離しておる）

「分離？」

（お主達が通ってきた精霊台の穴。あそこに溜まる魔力の壁を越えるには形なき者しか無理である）

「分離って・・・もしかして体が・・・って事ですか？」

（そう。そして体が再構築された時、お前の体に紛れてしまった。我が血が）

「血が紛れる？なんで貴方の血が俺の中に入るんですか？」

（あの精霊台の魔力を提供したのは私だからだ）

「魔力を提供?誰かがあれを作るために貴方の魔力を使ったってこと?」

(如何にも。今はバラバラの地を治める我らもあのころは一匹の使い魔としていた。この周辺にある精霊台はいずれも一カ所に密集している。元は一つの国だったらしいが今は4つになっていると聞く)

なるほど。だから大陸にはあれだけ多くの国があるのに精霊台が4つも密集しているのかと疑問に思っていたのだが

(水の精霊台を作ったのは我、炎の精霊台を作ったのは一角天馬殿、光の精霊台を作ったのは咲魚殿、そして空の精霊殿を作ったのは金角殿。我ら四体は今では離れておるが、昔はあの地に住まう者であった。そして我はこの地に残り、彼らは約束を交わし、各地へと散っていった)

龍の瞳はしっかりと俺の目を見つめている

その瞳には俺が映っている

青い瞳は、俺の心の中までのぞくような、そんな深い青色をしていた

(彼女もまた、一角天馬殿の血を引いておる)

「一条さんが、ですか?」

龍は首を縦に振る

そうか

「ってことは、彼女も、神子であると？」

（そうだ）

そうなのか

一条さんは目を丸くしていた

「一条さん、貴方も神子なんだってさ。あとこっちの世界に来た人全員神子の可能性たかそう」

「マジ？」

俺は首を縦に振る

俺も、彼女も、こちらの世界に来たときに体を再構成したせいで神子になった

ならば他のみんなも神子である可能性が高い

「それは、俺たちが元の世界に帰る上で、問題ありますか？」

（無い。元々こちらの世界にも神子はいる。お主らが元の世界に返ること自体は問題はない。だが方法はあるのか？）

方法か

分かってたらとっくに帰ってると思うけどそれは言わない

「まだ分かっていません。貴方は何か知ってますか。帰る方法」

俺は帰る方法に当てがないかを聞いてみた

聞くところ、彼はかなり長生きをしているらしい

不死龍って呼ばれてたくらいだし

そして他の世界のことも知っている。もしかしたら・・・と俺は期待をしてみた

（残念だがそこまでは私にも分からぬ。むしろお主達はどうやってこちらの世界に来たのだと問いたい）

どうやってって・・・

「なんか元の世界にあったゆがみってところから無に入っちゃってそのまま飛ばされて・・・なんというか詳しくはわかんないです」

マナが毒とか俺たちがマナや魔力を溜め込むとかいろいろ言っていた気がする

が、結構大半の事は忘れてしまったような気がする

（そうか。帰り方は分からぬ。が、ヒントくらいならあげられるかもしれぬ）

「マジ！？」

これは思ってもいない事だ

マナの解放をしに来たのだがどうやら思ってもいないところで帰るヒントがつかめるかも知れないと期待した

「それって・・・」

（あまり期待はしない方が良い。役に立てば良いのだがな。我らは精霊台を作った。それは抜け落ちた世界をつなぎ止めるための処置。お主達も抜け落ちた世界と共にこちらに飛ばされたのだろう）

あー・・・なんかそんなことを水の精霊が言っていたような気がする
数日前なのになんで忘れるんだよ俺と自分を責める

（我らが抜け落ちた場所を戻すために魔力を主に貸し与え、そして膜を張った。もしこれを無、レ・ミリレウのほうから起こし、穴を開ければ、あちらの世界に出られるかもしれぬ。だが、それには難題が多すぎるがな）

「それは精霊も言ってました。だけどそれだけじゃたぶんだめなんですよね。一つ一つ、出来ないところを出来るようにしていかないとこれは意味がない。でもやっぱり精霊も龍も同じ事言うくらいだから他に方法無いのかなぁ・・・」

（お主、精霊に合ったと申したか？）

意外にも精霊の話に虹龍は食いついてきた

「え、合いましたけど？水の精霊って言ってましたけど」

（そうか。水の精霊台を通ってきたのだから干渉していてもおかしくは無いか）

「知り合いですか？」

なんだか親しそうな言い方をしたため俺は聞いてみた

（あやつはこちらの世界に穴が空いたとき、こちらの世界に放り出された一人だ。水の精霊台の魔力の膜を通り抜けられるのはあやつのみ。他にも穴が空いた場所から放り出された精霊が何体か居るようだが）

へー・・・あの精霊も俺たちと同じ境遇だったりしたのかね？

なんて事を思ったそのとき、遙か後方で巨大な音がした

俺と一条さんは振り返る

皆の背中が見える

その遙か奥に見える小さな黒点

なんだろう。少しずつ近づいている気がする

（結界が破られた。なんだあれは？）

龍は目を細める

そして突如大空へと羽ばたいた。いや、十分ここも大空だけどね

龍はゆっくりと上昇する

そして再び吠えた
その声は、先ほどとは違う響きをした
俺には聞こえていた
虹翼碧眼の龍は吠えた
何処までも響くその声で
（集え、我が騎士達よ）と

『黒翼隻眼』

対象は神の領域に飛び込んだ

その瞬間、画面に大きなヒビが入る

続いてノイズ音が響き渡り、画面には砂嵐が巻き起こる

それを見て一人の少年がソファーの上で脚をばたつかせた

「ありゃ?カメラ壊れちゃった。ちょっとー、なおれー!なおれよぉー!!」

少年はバンバンと画面を叩くが砂嵐は全く止まない

問題が在るのはこの画面ではなく、カメラのほうかな?

「むぅぅ・・・。楽しみにしてる二人のために録画しておいたのにこれじゃ見せられないなぁ」

「だねー」

もう一人の少女がピョンと少年の後ろから現れた

少女はソファーの上に着地する

クッションの弾みで少年はバランスを崩して少女の方に倒れ込む
それを避けて少女は地面に着地する
そして砂嵐で埋まったテレビの画面を見つめる

「まぁ仕方ないよ。それよりもどうやって言い訳しようか」

「片方はやけに起こるからね」

「だねー」

「今のうちに言い訳考えておこうか。二人が外出しているうちに」

「だね。どうしよっか?」

「うーん。カメラに原因があったら僕らのせいにされそうだよね。ここは原因不明ってことでいいんじゃないかな?だって耐久度は仕方ないよね。うん。あれ以上頑丈に作れなかったんだからさ」

「うん。私たちじゃあれ以上のカメラは作れなかったよね」

「そうともさ!」

そう。自信を持って言うがあのカメラは自分たちが作れる最高強度のカメラである

あれが壊されたらもうどうしようもないよと少年はテレビの電源と録画を切った

まぁ何か分かることも在るかも知れないし後で画面がきれる直前の映像を解析してもらうとしよう

そこまでに録画されているのは何の変哲もない空の旅

後の解析は専門外だ

「あれって貴方の知り合い・・・じゃ無いですよね？」

（知らぬな。神域に立ち入るとはなんと愚かか。我が領域に入る者は神子と我が従者以外は罰せられる対象にある。お主達の仲間は例外だ。決定権は我に在るからな。では・・・よそ者を排除しようか）

虹色の龍はそう俺に語りかけて大きく翼を羽ばたかせた

そして俺たちと敵との間に割ってはいると大きく翼を広げる

対象はゆっくりと空中でスピードを落としてこちらに向かってきた

それは漆黒の龍であった

漆黒の龍は全身を真っ黒な鱗で覆っており、右目に走る大きな傷跡

が見える

よく見れば体中ぼろぼろのようで右目も開いていない

なのにどうして、どうも穏やかには済みそうもない雰囲気がするんだろう

彩輝はとっさに腰の短刀に手を伸ばし欠けたが、止めた

どうせ、意味がないからだ

目の前に居る存在にはこんなちっぽけな金属片、効くわけが無い

ま、どうせ自分なんかがしゃしゃり出る場面じゃない

この巨大な虹色の龍より一回り小ぶりとはいえ、それでも人間からしたらそりゃもう恐ろしすぎる大きさだ

隣の一条さんもびびっているようで、一歩後ろに後ずさりした

そりゃ初めて見るからなぁ

俺もたぶん龍と会話できていなかったらテンパってたと思う

でもま、龍と会話してなけりゃこんなところまで来ていなかったけどなぁとどうでも良いことに思考を働かせた

そして事態は動いた

といっても、動いたのは虹色の龍でも漆黒の龍でも無く、もう一つの存在

新たに現れた６つの影が視界に入る

６つの影は統制されたかのように一斉に上空から六角形に分かれ、そして漆黒の龍を包囲した

現れた影の主は６匹の龍であった

これまで見てきた龍とは姿形が異なっていた

これまでの龍は四肢を持ち、翼があった。だがこの龍は違う

どちらかというと今までに見た龍は西洋龍（ドラゴン）といった感じがしていたが、これは日本や中国あたりで屏風などに描かれるような龍であった

体は蛇のように長く、翼はなくて四肢は細い

全身は真っ白な鱗と鬣で覆われており、体をくねらせながら浮遊している

その真っ白な龍が６体

黒龍を取り囲み、睨みをきかせている

数秒の膠着状態

そして動いた

まず先手を取ったのは白い龍

大きく息を吸い込み、そしてブレスをはき出した

ブレスと言っても炎では無く、雷である

轟音をたてて空を横に走る6つの稲妻は漆黒の龍に直撃、そして大きな爆発をたてる

爆煙に飲み込まれる黒の龍

「やったのか！？」

レイルさんが体を前に乗り出してきた

だがそう簡単には終わらなかった

しぶとく漆黒の龍は煙を突き破ってものすごい早さで上昇をしてゆく

そして一匹の白鱗の龍がそれを追った

追撃しながら今度も稲妻のブレスを放った

稲妻が漆黒の龍の体を掠めるが効いているそぶりは全く無い

白鱗の龍は何発も稲妻を放つ

何本もの稲妻が地から点へと遡り、消えてゆく

そこで漆黒の龍は空中でぐるりと反転した

こんどは漆黒の龍が白鱗の龍へと向かって飛んでゆく

両者ぶつかろうかというところで白鱗の龍がそれを器用に避けた

するりと抜けた白鱗の龍はそのまま漆黒の龍に絡みつく

白と黒が絡み合い、そしてそれめがけて残りの5体の龍が急接近する

白鱗の龍の口からは冷気がこぼれて空に帯を引く

5体の龍が同時に口から冷気を噴射する

絡みついていた白鱗の龍はその瞬間に黒龍を離し、自らも冷気を吐きながら後退する

すると冷気の息は空気中の水分を凝結させながら漆黒の龍を飲み込んでゆき、やがて黒龍は氷と周囲を漂う冷気に完全に飲み込まれる

周囲を漂う白い冷気が氷を纏い、閉じこめられた漆黒の龍の姿を隠すかのようにしている

氷の塊はどういう原理か空中に浮かんだままであり、その周囲を6体の白鱗の龍が取り囲む

完全に詰んだ

彩輝はそう確信した

「あれって貴方の呼んだ龍ですか？」

（如何にも。あれは我が結界内を守護する神龍。神の名を与えられた我が僕）

「神ってついてるのにあなたの方が偉いんですよね？」

（まぁそうだな）

そう言えば神龍って神子の使い魔の龍がなると言っていた気がする

俺は以前紅の龍に聞いたことを思い出した

神龍は使い魔の龍が成長した姿だと言っていた。それならばいずれソーレもあんな龍になるのだろうか

氷の周囲に集まった六体の龍はそれぞれ大きく口を開いた

並んだ牙の奥に、エネルギーが集まり出す
６体の龍は漂うマナを口内に収束していく
収束したエネルギーは球体となる
そしてそれを氷に閉じこめられた漆黒の龍に向けて放つ
冷気に隠れるその氷めがけて六体が同時にその球体をはき出した
高速で飛んでいくその球体が漂う冷気の中に吸い込まれていく
そして爆発
砕けた氷が周囲にはじけ飛び、あかね色に輝きながら消えていく
そして飛び出してくる、触手
突如飛び出してきた６本の触手が神龍たちへと向かって伸びてゆく
伸びた触手はそれぞれバラバラに逃げた神龍達を追尾する
が、触手は動きを止める
冷気の靄の中から飛び出してきた黒龍の背中から黒い触手が伸びている
触手は龍の体ように鱗で覆われておらず、柔らかい皮膚のようになっているように見える

「な、なんだよあれっ！！」

俺は一歩後ずさりした

体が、拒絶をした

「あんなもの、見たことすらないな。見たところブラックテイル種だが・・・なんだあの触手は」

「な、なんなのよここ・・・」

「レイルさん・・・セルディアさん・・・」

俺はそこから視線をずらして歩み寄ってきた二人に声をかけた

レイルさんは顔をしかめ、セルディアさんは恐れを顔に浮かべている

この場に居る全員が、そんな気分にさせられるほどに異様な何かを感じ取っていた

そのとき、彩輝は虹色の龍に語りかけられた

（よく聞くのだ神子よ。今ここは結界が破られて外界であるお前達の世界とつながっている状態にある）

「つながった?ってことは・・・」

(左様。外界とつながっているということは、奴もまた、外界へと出て行けるという事だ)

それって・・・やばい事だ

通常の龍ならば問題ないだろう。龍はもともと下の世界に住んでいるのだから

だが今は不味い

あれを下の世界に行かせることは人々にとって驚異になる

あれは、普通じゃ無い

俺は見上げた先に居る一匹の龍を見た

そしていつのまにか肩に止まっていたソーレが居なくなっていたことに気がついた

触手が一匹の神龍を狙いに定め、神龍めがけて殺到する

神龍は長い体を上手にくねらせその触手を避けるが限りがないかのように触手の長さはどんどんと伸びる

自分の何十倍にも伸びるその触手で神龍を捕らえようとするがうま

くいかない

そこで漆黒の龍は自ら動いた

スピードを上げて神龍へと迫っていく

神龍はそれでも黒龍の倍ほどのスピードで飛び去って逃げる

そこで黒龍に背後から一匹の神龍が噛みついた

そのまま神龍は長い体を黒龍の周りに絡みつかせ、それに続くようにもう一体が腕に噛みつきからだを絡みつかせると、残った4体はその周囲を取り囲む

だがそこで絡みついていた2匹の龍は触手にはじき飛ばされ、そのうちの一体は取り囲んでいた神龍の一匹と接触してもつれるように雲の下へと消えていった

空中には鮮血が舞っていた

振り払われたもう一匹の神龍の体は先端が鋭くとがった触手に貫かれていた

黒い触手を紅い血が伝い、落ちていく

そして目にも留まらぬ早さで打ち出された残りの触手の先端が鋭く変形して神龍を狙う

2体はその直撃を受け、一体は体を掠めた

（我が出ねばなるまいか）

その光景を見て虹色の龍は大きく翼を広げた

虹色に輝くその翼を夕日が紅く染めた

残った一匹の神龍、そして雲の中から飛び出してきたもう一匹の神龍が漆黒の龍を睨んだ

漆黒の龍はその神龍達を見向きもせず、俺たちの方を向いた

そして、その龍は翼を大きく羽ばたかせてこちらへと飛んできた

虹色の龍も翼を羽ばたかせ、浮き上がる

そしてその巨体からは信じられないスピードで迎え撃った

一瞬皆の目には虹色の龍が消えたように感じられただろう

気づけば両者は絡み合い、黒龍を押し返しながら虹色の龍が首元に噛みついた

黒龍も負けじと虹色の龍に噛みつこうとするが見えない障壁に阻まれ、噛みつくことが出来ずにいる

そこで黒龍は触手を動かした

そして虹龍の背後から6本の触手を打ち込んだ

が、それも見えない障壁に阻まれた
虹色の龍の牙は尚も深く食い込んでいく
そしてその口の奥に炎が漏れた
虹色の龍は零距離から虹色の炎を吹き出した
引きはがされた黒龍は炎から何とか脱出する
両者がにらみ合う中、彩輝は居なくなったソーレを探して周囲を見渡していた
何処だ・・・ソーレ!!

あれはだめだ
あれは、敵だ
あれは、存在してはいけないと思わずには居られない
同族だからこそ、僕の中に通う血が騒いだ
あれは、違うと思った

あれは、いったい何なのだろうと思わずには居られない
だから、あれとは戦わないといけない
体が、血が、騒ぐんだ
僕は体の思うままに翼を動かした
もう思考なんて必要なかった
あれは、敵だ　と。それだけで良かった
太陽が、落ちた
周囲を闇の中に引きずり込む、夜が来た
空には綺麗な月が浮かび上がっていた

彼はまだ二十数年しか生きていない人生で若者と呼ばれる部類にいながら、近衛隊の騎士隊長にまで上り詰めた男であった

近衛隊は王族を守るという任務のため、彼も外交のため国外へ行く国王や王女の護衛につく事も度々あった

その度に各国の騎士や魔術師達と話をすることもあった

どの騎士達も魔術師達も、これ以上ないくらい、自分より強いのが分かる

経験の浅い自分に比べ、精神と肉体に置いて極限を目指した者達の姿がそこにはあった

いつか自分も、そんな中に入れる日が来ることを目指して毎日鍛錬に励んだ自分がそこにはあった

だけど俺は、いつからか分かっていたのかも知れない

自分は高みには上れないと

結局今の自分は鍛錬もせず、一日中ハンマーを鉄に向かって振り下ろす日々を送っている

所詮はその程度か・・・と思った

そのとき自分の限界を俺は知った

きっと自分はこれ以上先へ進めないのだと

なのに今では主のために働くことも出来ないくせに、何故かその元主に命令されて俺はここにいる

まるで自分が幼き頃から妹のように接してきた女性はいまや一国の跡取りともなる器にまで成長している

世界は広い

今まで生きてきた中で、これほどまでに広い世界を知りたいと思ったのは恐らく、俺が力というものを感じたからだろう

力を感じて俺の心は奮い立った

俺はあのころに戻りたいと思った

まだ、戻れる。いや、ちがう。進むんだ

上を、力を、求めているものはもっと高みにあるのだから

私がそれに恐怖し、また心酔した

力の波動を感じられる

魔力とはまた違う、別の力を私は感じ、その力の虜となった

その力には、それだけの威力を持っていた

かろうじて私は立っている

今にも膝をついてしまいたいほど、私は、酔っている？

力に酔っているのか、私は？

私は疑った

まさか自分がこんな、禍々しい力に酔い、自分を忘れかけてしまうとは思うはずもなかった

私は成人したとはいえこの世に生を受けてまだ１９年しかたっていない

自分は、未熟だ

そう思わされた

これまで、この若さで第3位まで上り詰めて、でも知らず知らずのうちに私は・・・

思うだけで悔しくなった

だけど、それもまた一つの経験だと今は自分にそう言い聞かせた

後悔なら後でいくらでも出来る

そうでも思っていないと、この戦いを見ていられなくなる

この絶対的な力のぶつかり合いを見逃す事なんて、出来るはずがない

虹色と黒色が闇に落ちる

雲の上に光り輝く月と星の明かりだけが2体の体を闇夜に浮かび上がらせる

虹色と黒色は互いに絡み合いながら雲を突き破る

噛みつき、弾かれ、絡みつき

轟雷が空を飛び交い、黒炎が空を走り、黒の触手が空を切り裂く

荒々しい2匹の獣は牙を月光に反射させる

そうしてもみ合いながら2体は地上へ向けて落ちていく

雲が2体を避けるかのように穴を開け、二つの巨体は地上に墜落した

巨大な土煙が立ち上り、轟音が静寂の夜に響き渡り、巨大な揺れが地面を揺さぶった

その光景はグレアント、ファンダーヌ、ゼルタール火山の向こう側のカナンからも確認することが出来た

はじけ飛ぶ稲妻と黒い炎が空を落ちていく光景はまさに壮観であり、
またその異常事態に何事かと各地があわただしくなった

2体が落ちたのは王都リッドクルスとゼルタール火山との間にある
巨大な平原であった

名をヘルダ平原という

ヘルダ平原に落ちた2体の龍は土煙の中、見えない相手に攻撃を放
っていた

黒い龍の攻撃は手数では勝るものの、虹龍の纏う不可視のシールド
に阻まれて攻撃が届かず、虹龍の攻撃は確実に相手に当たって致命
傷をいくつも負わせていた

首から流れ出る血は未だ止まらず、片方の翼は妙な方向に折れ曲が
っており、恐らくもう飛べないようにも見える

だが怯む気配一つ見せず、黒い龍はただ攻撃を続ける

虹色の龍は雷を放つのを止め、長い尾を思いっきり煙の奥を薙ぎ払
うように振るう

黒龍はその一撃を食らって体を大きく地上から浮かせながら煙の外
に吹き飛ばされた

草原の原っぱの上を滑り、そして止まると黒龍が地面を削った後が
平原に大きく残っている

その上を滑空して煙から飛び出してくる虹色の巨体はそのまま黒い

巨体にぶつかり、地面に向かって強引に腕で押し倒した

顔を地面に押さえつけ、そして虹色の龍は大きく息を吸い込んだ

黒龍は押さえつけられた状態で懸命に吠えた

月夜にその咆吼が響き渡る

そして、刹那の輝きが当たりを虹色に包み込む

一瞬の静寂、そして訪れる一瞬の爆発

その爆発は2体が地上に落ちたときよりも大きな土煙が立ち昇った

そして俺たちはその光景を上から見下ろしていた

なんという戦いだろうか

一切の割り込みも出来ないこの戦いを、俺たちは見守ることしかできなかった

虹と黒が煙の中に消える

すぐさま黒色の龍が体勢を崩した状態で平原の上を滑っていく

そして飛び出してきた虹色の龍はその巨大な翼を広げて超低空飛行をしながら黒色の龍にぶつかっていた

そのまま黒色の龍の上に覆い被さる

そして、爆破

巨大な轟音と共に、爆発の衝撃で巻きあがった土煙が視界を悪くする

威力が強すぎたせいか雲のあるこの辺にまで土煙は昇ってきており、

今や地上の様子はほとんど分からないに等しかった

何が起こっても言いようにレイルさんとセルディアさん、それとツキが剣と杖を構えた

こういうところでも油断をせずに行動できるって、やっぱり彼らは軍人なんだなぁと思わされた

それに加えて何も出来ない自分が悔しい

黒い龍から感じる禍々しい波動

依然として黒龍の動きは止まらず、触手もまだうごめいている

そしてそれほどまでの力を持ってしても、虹色の龍は未だ無傷

両者がいったい俺たちとどれだけの力の差を持つのかは分からない

が、恐らくはまともに戦う奴など居るわけ無い

雲から飛び降りてあんなところに割って入っていく勇気は俺には無い

在るのは、恐怖だけだ

黒色の龍は距離を取ろうと大きくジャンプして黒の翼を羽ばたかせた

その一降りで砂埃が虹色の龍を飲み込んだ

たった一度羽ばたいただけで数百メートルの距離をとった黒龍は月夜に吠えた

それに呼応するかのように触手が再び生気を取り戻した

そして、次の瞬間には黒龍は虹色の龍に投げ飛ばされていた

いつの間にか虹色の龍は黒色の龍を鷲掴みにして思いっきり空へ向けて放り投げた

グルグルと体勢を崩して回転しながら空へ空へと飛んでいく黒色の龍

体の重心が定まらず、翼を広げるも風の抵抗を受けて上手く飛ぶことが出来ない

ほぼ腕力だけで投げられた黒色の龍何とか雲の手前で制止して6本の触手を虹色の龍へと放つ

6本は放射状に広がり、そして同時にかくっと曲がり虹色の龍を穿とうとした

だが虹色の龍には見えない防壁があるため攻撃が届かない

白い閃光を放ちながら黒い触手は見えない結界を攻撃し続ける

虹色の龍に攻撃は届かない

一方的に傷を負い続ける黒龍は誰の目から見ても不利に見えた

だが、次の瞬間、見えない障壁に大きな亀裂が入った

バシィッ!!とまるで空気が弾けるような音を立てて亀裂はさらにもう一段階広がった

虹色の龍は目を細め、一気に上空まで飛び、気づけば黒龍と同じ高さの空にいた

虹色の炎が龍の口からはき出される

黒い触手が下の方から迫ってくる

黒龍は虹色の炎を避け、そして触手を操作する

まるで軌道を読まれないようにするかのように6本の触手は違う動きをする

虹色の龍は再び加速して黒の触手を振り切る

そして真っ正面から黒龍に向かって突っ込んだ

だがそれが当たることはなく、虹色の龍は黒色の龍に突っ込み、そしてすり抜けた

黒龍と触手の姿が急に消えた

文字通り、消えた

黒い巨体は、暗闇の中へと消えていった

「き・・・・消えた・・・・？」

俺は唖然とした

二体の戦いは突然止まる

ただ眼下で虹色の龍が羽ばたく音が聞こえるだけだ

何が起こったのか、まだよく分からない

俺以外の人も皆困惑していた

何せ突然あの巨体が視界から消えたのだから

虹色の龍の飛行速度はまだ目で追えるレベルであった

だがこれは移動したときの残像すら映らない、完全な消失だった

「え、何!?どういうこと!?」

「わからん。何が起こった・・・?」

俺たちが消えた黒龍を目で探していた

そして、現れた

突如暗闇の中、黒の霞の中から現れた触手が虹色の龍の背後を襲う

とっさに現れた殺気に気がついた虹龍は上空へと逃げる

5本の触手が虹色の龍の影を貫いた

だが、一本の触手が虹色の龍の尾を捕らえ、絡みついた

そして下に思いっきり引き落とす

虹色の龍はそのまま触手に振り落とされた

襲いかかる6本の触手が虹龍の障壁にぶつかり、巨大な亀裂が虹龍の周囲全体に広がった

ついに見えない障壁はまるでガラスのように砕け散った

虹龍は全力で翼を広げて空へと飛ぼうと試みる

が、触手の一本が虹龍の鱗を突き破り、右足を貫いて地面に突き刺さる

鮮血が緑の草原に染み渡り、その一点だけが紅い草原へと染まる
黒龍の片目が、虹色の龍を捕らえた

この状況の中でその中に飛び込む勇気を持った奴がいた
それはもうすでにこの場には居なかった
俺の目に飛び込んできたのは、眼下に広がる広大な草原の上で戦う
二つの影に向かって行く
真っ直ぐ、なんの迷いも無いかのように・・・
俺は手を伸ばした
戻れと叫びたかった
でもその声は届かないと思う
二人の距離はすでに、龍の咆吼と放たれる雷や炎の轟音で彼の耳に
届くはずも無かった
だけどやっぱり俺は叫んだ

「戻れーーーっ！ソーレエエエエエエエェェェ！！！！」

俺はまた、後悔するのだろうか？

残った5本の触手がまさに虹龍へと向かって放たれようとした

その時、黒龍の後頭部で小さな爆発が起こった

黒龍はゆっくりと顔を後ろに向けた

そこには空中で威嚇する一匹の龍子がいた

大人の龍に比べ、その声は高く、威嚇になっているかどうかは怪しいものだったが本人は必死だっただろうと思う

現にアヤキにも、虹龍にもその声は届いていた

懸命に羽ばたきながら再び火球を放ったソーレだったが、触手の一本がその炎をはじき返し、そして小さなソーレの体の半分を抉り飛ばした

真っ赤な体色と同じ色の液体がどばっとあふれ出て、液体に月が写り込む

焦点の合っていない目が、空にぼんやりと浮かび上がる月を映し出

していた

触手はソーレの体を空中へとはじき飛ばした

雲を突き抜け見えなくなった

虹龍は、月夜に吠えた

黒龍は、神に唸った

紅龍の子は、最後に一人の少年の姿を眼に写した

それが、誰であったかを認識できたかどうかは、誰にも分からない

「っ・・・！！！！！」

駆け寄った俺が左半身が抉られて無くなっているソーレを手のひらにすくい上げた

どれほど歯を噛みしめただろうか

どれほどこの拳でものを叩いてやろうか

どれだけこの悲しさを叫んでやろうか

行き場のないその感情を発散したかった

後ろから駆け寄ってきたセルディアさんやシェルディさんが俺の手
の中で目を閉じたソーレを見つめた

スッとしゃがみ込み、シェルディさんは鱗が薄いのど元に指を触れる

何をしているのか分からなかったし、自分が今何を考えているのか
も分からなかった

思考が、ぐちゃぐちゃだったから

「まだ息があるわ！龍族は生命力が強いからあと少しは耐えてくれ
るはず・・・。アヤキさん！！」

「は、はい！？」

俺はまだ悲しみに浸るには早いようであることに気がついた

「まだ、今なら・・・。今なら転精術が使えます！」

なんだろう

この人は今何を言っているのだろうか？

まだ、ソーレが生きている？

馬鹿な。体半分をあの禍々しい触手に抉られたんだぞ？

体の半分を失って、まだこの小さな命は生きているというのかこの人は

そうであるならば

「転精・・・術ってなんですか？」

「その人の精神を別のものに宿らせる術です。息を引き取っていないのならまだ間に合います！」

「そんな・・・ことが・・・うつし、かえるって・・・どういう・・・」

「良いですか。時間が無いので早めに説明します」

シェルディさんは早口でしゃべっている

慌ててのか、それとも急いでいるのか

「この世の生き物はすべて、肉体と精神で出来ています。それを強制的に引きはがして別の物に意識だけを移し替える術があるんです。普段なら禁忌に触れるのですが・・・」

肉体と精神を、引きはがす？

「どういう・・・こと・・・え、そんなことが・・・？」

「我が家系に伝わる秘術のような物です。やりますか？」

俺は・・・

「ソーレの命が助かるなら」

その救いの手に、ソーレを任せてみることにした

「正確には、肉体が死に、精神のみを生かす術です。ではセルディアさんとユイさんに手伝ってもらいたいことがあります」

「え、私も！？」

一条さんが驚いた顔で自分を指さした

あわてふためき自分に何が出来るのかという様子で駆け寄ってきた

そしてソーレの体を見て眉をひそめた

「はい。この術のために至急１０枚の術式を刻んだ符を作ってくだ

さい。貴方はきっと符術師の才能があると睨んでいます。良いですか、これと同じ術式をこれに刻んでください！正確に、間違えずにです。それをこれから出てくる魔法陣の周囲に均等に配置していください。その私は祭壇を作って精霊を呼び出します。この術は精霊の加護無しでは使用が出来ないので・・・。セルディアさんも祭壇の基礎を手伝ってください！」

「わかった。だが属性雷しか無理だぞ？」

「火なら最良なのですがこの際雷でもいいのでお願いします。何とかして見せます」

セルディアさんは分かったという顔でうなずくと杖を構えた

巨大な魔法陣が広がり、それがいくつも重なる

５つほどの、速度や大きさの違う魔法陣が重なり、それらはバラバラに回り続ける

一条さんはもらった符を見てそれを魔力を込めて書き写す

それをシェルディさんに指示された通り、大体一定の間隔をあけて配置した

地面に置かれた符はゆっくりと光りを灯し、そして空中に浮かび上がった

その中心に立つセルディアさんは両手で杖を持ち直し、それを足下の雲に突き立てた

いや、実際には雲ではなく、その上の魔法陣に突き刺さったのだろう
ガキンと音を立てて挟まった5つの魔法陣の中心に立つ木製の杖は
もうびくともしないだろう
セルディアさんは杖を突き立てるとそっとその魔法陣の外へと出た
浮かび上がる魔法陣の中心で杖を握ったのはシェルディさんだった

「この地を守護する者よ、古よりの盟約に従い、そのお姿を・・・」

杖から迸った光りが魔法陣を伝い、魔法陣が大きく光り輝く
そして空に向かって光りが伸び、その中から一人の女性が現れた
真っ赤な色をしたボロ服を身に纏い、髪は燃えるような赤色のショート
空中で座って腕を組んだその女性はにんまりと笑って呼び出したシェルディさんを見下ろした
その姿は半透明で、向こう側が透けて見える
前に見た精霊よりか姿が薄いように見えた

「久しぶりだな。お主を見るのはお主が幼少期の頃以来だ。」

「お久しぶりです。早速で悪いのですが、私に精霊の加護を・・・」

「よかろう」

赤色の精霊は地上を見下ろした

雲の切れ間から見えるそこには、二つの巨大な影が戦っていた

精霊はゆっくりと両手を広げ、そして両掌を顔の前に持ってきた

そっと吹きかけるようにして息吹を吹き込む

その息吹は光りの粒となってシェルディさんの姿を取り囲む

光りは集まり、やがて渦となり、そしてシェルディさんの体の中へと吸い込まれていった

「感謝致します」

「礼には及ばぬ。ところでそこの二人がもしや・・・」

精霊は俺と一条さんを見つめる

「別の世界から来た者達か？」

「は、はい」

「そうです」

「話には聞いていたが、そうかそうか。なるほどな。ということはお前がアヤキか？」

「え！？」

何で俺の名前知ってんの！？

「お主らの言うところの水の精霊というやつから聞いた」

心読まれた！？

「おー。まぁ我々は別に口伝で話を伝えるわけではないからな。まぁ口伝も出来るのだが・・・ってそんなことはどうでもよいか」

「そうです。アヤキさん、こちらへ」

俺はシェルディさんに呼ばれて魔法陣の中へと入っていく

「アヤキさん。今から彼の魂を引きはがします。そのことについて異論は無いですね？」

シェルディさんはそういって俺を見つめた

俺はソーレを見つめる

短い間だった

出会って一ヶ月も経っていない

だけど・・・俺は・・・

「はい」

迷いは無い

それでソーレが助かるなら別にいい

別れの言葉も言えなかったし、あれだけ俺になついてくれていた

短い間だったけど、そこには確かに何かが生まれていた

友情・・・では無いと思う

どんな言葉で言い表せばいいのか分からないけど、二つの心の間には、確かに心を繋ぐものが存在していた

少なくとも俺はそう感じていて――――いや、そんなものでは表せ

ないのかもしれない
たとえ血は繋がっていなくとも、最初に出会ったあのときから
俺はこいつの親だったんだ

「では魂の拠となる物を」
「よりどこ・・・ろ・・・か」

魂を引きはがし、それを別の場所に移し替える
その肉体の代わりとなる器を探さなくてはいけない

「出来るだけ、いつも身近に持つ物がよろしいかと。その方が移された魂も喜ぶかと・・・」

いつも持ち歩く身近な物
俺がこの世界でもつ物
この世界で俺が肌身離さず持っている物はあまり無い
在るとすれば・・・こいつくらいだろうか

左手を静かに動かし、触れるは短刀の柄

それは、俺を守る唯一の武器

名もない短刀をアルレストさんに譲り受け、これまでずっと旅を共にしてきたもう一つの相棒

俺は腰に結んだ紐を解いた

そしてそれをシェルディさんに渡す

手から手へと渡された短刀

俺が身を守るためにと譲り受けたそれに、今ソーレが宿るというのだろうか

無言で受け取ったシェルディさんはその短刀をそっと魔法陣の上に置く

浮かび上がる光りの上で宙に浮く名も無き短刀

「悠遠へと響く鼓動。過去の足跡を追想し、思いを馳せる大地へと我踏む足跡思い浮かべる」

そういえば、お前には名前が無かったんだよな

「決意を秘めし心、勇気を持ってこれを受け入れる。揺るぎなきそ

の意志、望む者に永久の祝福を」

たぶん、来るべき時っていうのが今なんだろうな

「欲する者、別れ路の艱苦を超克し」

名前か・・・・

「願いを礎に、心に宿れ」

魔法陣が大きく光り輝き、闇の中に皆の姿が浮かび上がった

「輪廻転生（サムサラ）！」

浮かび上がっていた魔法陣の層がゆっくりとソーレの体に集まっていく

横たわるソーレ

そしてシェルディさんはしゃがみ込んでソーレの顔をのぞき込んだ

ソーレは目を閉じているため、恐らくシェルディさんの姿は見えていない

「君は、どうする？」

しゃがみ込んだ女性は、優しく語りかけた

虹色の龍は予想していなかった

まさかこの空間の結界を破るだけでなく、自らが纏う結界までも破壊してしまうとは予想すらできなかった

この結界を破ることが出来る者は、この世に一人として居ない

神の力とも言うべき絶対的な力がこの体を取り巻いていた

それが――――――破られた？

そしてもう一つ気になる点がある

それは一瞬にしてあの巨体が闇に溶け込んでいったことだ

その瞬間、奴は闇そのものになっていた

結界を破る奇妙な触手、そして闇に消えるその巨体

何だというのだいったい
いや、何だと問われれば、恐らくではあるが答えは出ている
だがそれはあり得ないはずだ
合って良いことではない
でもこの力
普通の一匹の龍が持つには異常すぎる力
多生驚いたとはいえ、ここまで自分と対等に渡り合えるとは思っても居なかった
いったい誰がこの事態が予想できただろうか
同族を殺すのは忍びないと思っていたが、やむを得ない
もはやあれは、同族ですらない只の獣
油断も、情けも、哀れみも同情もいらない
在るのはたった一つ
殺意だけだ
だがその覚悟をした瞬間、自らの脚に触手が絡みつく感覚が伝わった
強固な鱗のおかげで圧迫されてもそれをはじき返せているとはいえ、

このままでは不味かった

触手が地面の方へ向かい、もう離さないとでも言わんばかりの力で足首に絡みついた

そして地面に叩きつけられ再び土煙が上がった

そこで、心のどこかがうずうずとうずく事を感じ取っ

今、自分は叩きつけられた後に巻き付けられた触手によって身動きが取れなくなっている

両手両足を縛られているので爪で切り裂くことも、牙も触手には届かない

だが、腕力には自信が在るため思いっきり両腕に力を込めた

力に物を言わせて触手の先にあるものをたぐり寄せる

黒龍は翼を羽ばたかせ抵抗をする

そのとき、後ろの雲が異様に明るいことに気がついた

あの場所に、新たに一つ、生体反応が増え、さらにその周囲に巨大な力の渦が渦巻いていることを感じる

あれは、この周囲を守護している火の精霊

また懐かしい者が現れたようだな

触手をたぐり寄せる力を強めた

地上で戦いたくは無かったが、今あの場で行われていることを邪魔するわけにはいかないだろう

何をしているかは分からぬが恐らく先ほど倒れた同族の子供を助けるために高度な魔術を行使しているのだろう

今彼らに近づけさせる訳にはいかない。幸いこの当たりは運良く人里が無い平原である

草原にいた魔獣達はすでにこの騒ぎでこの当たりから避難しているだろう

ならば、もう少し暴れても良かろう。

虹色の龍は口を開いたのが見えた

その奥に見える絶望を見た黒龍はより一層抵抗を強めた

これから放たれるそれは、これまでの比では無いことが分かるからだ

だが二本の触手をしっかりと捕まれているため逃げることが出来ない

一度離れた触手が虹色の龍に殺到した

だがそれが虹色の龍を捕らえるより先に、触手を虹色の光りが飲み込んだ

放たれたそれは一筋の光りとなりて闇を飲み込み、目指す一点へと

伸びていく

そこで黒龍は二本の触手を根本から断ち切る

そして全力でに放たれた光線の軌道からそれようとしたが虹色が黒翼を貫いた

まるで触れたものを巻き込むかのようにして翼はまるで布きれのように形を変え、絞られたぞうきんのようになって虹の光りの中へと消えた

虹色の光線は雲を貫き、周囲の雲を巻き込んで空気中に霧散していった

黒龍は片翼を失い空を飛ぶことが出来なくなったため地上へと落下していく

その光景を見つめていた者がいた

虹色の龍

そして雲の上に立つ者達

迷いは消えた

見届けるつもりでいた

邪魔になるから・・・と

今、俺の手に収まるこいつの鼓動が聞こえてくる

今、俺の頭の中に虹色の龍の言葉が語りかけられている

先ほど放たれた虹色の龍の光線

圧倒された

だがそれを遙かに上回る力が俺の体を取り巻いているのが自分でも分かる

何故かは分からないが、今なら俺は、神でも殺せる気がする

自分に何が起こったのか

精霊が力を貸してくれたのか

ソーレが力を貸してくれたのか

そんなことはどうでもいい

ただ分かるのは、俺はあいつを倒す役目を担ったと言うことだけ

これだけは確実に分かった

虹色の龍は俺に言った

あの異形の力。それは付属された偽りの力だと
それを破れるのは虹色の龍の力
そしてその血が流れる俺だけだと
虹色の龍は言った
動きを止めるから、とどめを刺せと
俺とソーレと、二人で
もう、虹色の龍には分かっているのだろう
ソーレが俺の短刀になっていることも気がついているはずだ
だから二人で、なんて言ったのだろう
いいよ
やってやる
不思議と恐怖は無い
こんな高い場所に居るけれど
向かう場所に絶対的な力の壁が立ちはだかっているはずなのに
勝てる保証は全く何もない

倒せる技の一つも知りやしない
不思議だな
俺は短刀を抜き放ち、月が刃に映る
うっすらと刀身が鈍い赤色を纏う
出会った頃の青の波紋はいつの間にか赤みを帯びている
名前を付けるなら、今か
これまで道理ソーレと呼んでも良かったが、俺は何となく違う気がした
これまでのソーレとは違う
そんなものを俺はこの短刀から感じている
紅き翼を持つ龍が宿る短刀
紅き翼の持ち主は太陽の名を持つ
紅き翼の太陽。すなわち
紅翼太陽
皆が雲の切れ端まで歩いていく俺を制止させようとするが気にはな

らなかった

勝手に体が動き、俺の体は雲の切れ間へと飛び込んだ

直後、加速が始まった

『紅翼太陽』（後書き）

ぇぅ・・・遅くなってすいませぬｏｒｚ
なかなか納得がいかなくて書き直しとかしていたらなんか思っていたより遅くなってしまって・・・
だ、だけどその代わり一杯書いたから許してください！なんか最近の執筆ピンと来ないんです・・・初心を思い出せ俺！！

『終結の時』

声が届いたのか届かなかったのか

一本の短刀を持った彼は制止の声に聞く耳を持たず、脇目もふらずに雲の切れ間から飛び降りていった

そんな・・・こんな高さから落ちたら・・・

私の頭の中を最悪の結末がよぎった

雲の上には今、幾つもの切れ間が空いている

彼はその中でも大きめの切れ間から飛び降りていった

慌てて駆け寄って彼が落ちていった場所から下をのぞき込む

その目の先には落下していく彼を捕らえ、そして彼の下に2匹の龍を捕らえる

虹色の龍が黒色の龍を地面に落とした後、すぐに虹色の龍は黒色の龍を魔法のようなものを使って身動き取れなくしていた

突如空中に現れた何十本もの巨大な杭が翼や腕、触手を貫いて地面と黒の巨体をつなぎ止めている

その杭はまるで根でも張っているかのようにびくともしない

そして、夜の空に、太陽の翼が広がった

体の中に広がった力

なるほど。魔力ってのがよく分かる

俺は今、空を落ちている

当ても何も無いけれど、不思議と怖くはない

落ちて死ぬことも、黒龍にやられて死ぬことも、全く頭の中で考えることが出来ない

そんな結末を、想像できない

だけど違う結末も想像できない

自分がいったいこれからどうやって死なずに着地すればいいのだろうか

うーむ、分からん

ここは戦隊者みたいにスタっと剣を構えて着地するのが格好いいのだろうか？

そして、着地方法を考えながら落下する俺の体の中から暖かい力が流れ出る

意識はしていなかった

その力は腕を通り、刀身に集まっていく

そしてついに剣は炎を纏った

すごく近いところで炎があるというのに全く熱くないのはどういうことだろうか

炎は次第にゆっくりと形を作り出していく

左右にゆっくりと広がり、そして爆発するかのようにして巨大な炎の柱が左右に広がった

俺がそれを見たとき、炎が何を象ったのか分かった

翼だ

巨大な炎の翼が剣から現れたのだ

熱は感じないが、ほんのりとした暖かさを体全体で感じる

不思議な感覚だった

そして徐々に近づく黒龍めがけて俺は剣を突き出した

落下の加速ですぐに黒龍の真上まで来た俺は目をつぶってなるものかとしっかりと黒龍に狙いを定めた

そのとき、黒龍を大地につなぎ止めていた杭がすべて空中へと抜けて吹き飛んだ

杭には紅い血がべっとりと付いていてその血が空中に糸を引いた

黒龍はすぐさま立ち上がり近づく俺を見た

そして大きな口を開いた

警告か、威嚇か

その咆吼が俺の体を押し戻そうとするが落下の勢いはその空気の震えを切り裂いた

翼が大きく広がり切っ先からも炎が立ち上る

それは龍の頭を形作り、そして黒龍が開いた口の中に突っ込んだ

口の中に入りきらずあふれ出した炎の翼が口から吹き出し、炎の龍の頭が黒龍の頭を貫いた

炎はすべて口の中でせき止められ、あふれ出した炎は黒龍の体を外と内から焼いていく

触手がまるで苦しむかのようにのたうち回り、黒龍は叫ぼうとするがもはや声を出す場所はすべて焼け落ちている

ぼろぼろと鱗がはがれ落ち、黒色の鱗を焦がして炎はついに全身を埋め尽くす

尻尾が地面を叩くがすぐに動きを止めてしまう

もがく両手は空を切り裂き、もがく頭を何度振ろうと包み込んだ炎が消えることは無かった

片目を見開き敵を探すもすでに目は焼けて何も見えない

鱗が落ち、皮膚を焼く

口から体の中へ燃え移った炎は臓器を焼いていく

そして、まるで助けを求めるかのようにして空へ空へと向かって動く４本の触手が昇ってきた炎に包まれ、四つの炎の柱が草原に高々と浮かび上がる

自ら切り落とした触手はいつの間にかに消滅していた

黒煙と悪臭が草原を立ち昇る

炎が煙を照らし出す

俺はその横を再び生えた炎の翼を使ってゆっくりと地面に降りたった

「やった・・・のか？」

俺が着地して振り向くとすぐに大きな地響きがした

ズズゥンと大きな音を立てて黒い巨体が草の上に倒れ伏す

触手も動きを止め、４つの巨大な炎の柱は燃えかすになって風にさらわれて跡形もなく飛んでいってしまった

巨大な命が燃え尽きて、月は空の天辺へと昇り俺たちを見下ろしていた

虹色の龍は傷ついているにもかかわらず翼を広げ、ゆっくりと空へととんだ

その行き先が先ほどまでいた雲の上だというのが分かった

俺は緊張の糸が抜けて地面に尻餅をついてしまった

まだ左手に握る短刀にはほんのりとした、暖かさが残っている

炎は消えてしまっているが、刀身に宿した熱はまだ冷め切っていないらしい

いろんな事があって、分からないこともたくさんあるが、それもどうでも良くなった

たぶん今だけの、この一瞬だけの感情だろうと思う

全部終わった、今だけの感情

達成感と安堵感が入り交じった妙な感情が今の俺を埋め尽くしている

ヤッターヤッターと叫ぶのも違う気がするし、安心感から全身の力が抜けていくのとも違う

俺は草原に寝そべった

空には未だ立ち上る煙が見えた

そのずっと奥には雲があり、切れ間から星と月が見えた

そこに俺は紅翼太陽を重ねた

「お前は――――そこに居るのか？」

しばらくして虹色の龍が降りてきた

背中には一条さん、ツキ、レイルさん、セルディアさん、シェルディィさんを乗せている

おっこらしょっと、なんて事を言いながら俺は状態を起こした

虹色の龍がゆっくりと大地に降り立った

最初にセルディアさんとシェルディィさんが飛び降りて、そのあとにツキと一条さんをお姫様だっこしたレイルさんが降りてきた

まぁ背中から地面まで高さがあったからな

みんな駆け寄ってきて俺を取り囲んだ

「何か言うことはあるか？」

「え・・・？」

レイルさんにジト目で見られた

えー・・・何か言うことですか？

んーと

「ごめんなさい？」

「なんで疑問系なんだよ！ったく・・・お前なぁ、なんで俺らが護衛してやってるっていうのにあんなところ飛び込んでいくんだよ。無茶も程々にしろよな！！寿命縮むぞこら！」

そういえばレイルさん達って俺と一条さんの護衛なんだったっけ

すっかり忘れてたよ

ってか俺護衛されてたんだっけか

「すいません。なんか体が勝手に・・・」

「ったく、お前死んだらなんて言われると思ってるんだよアホ！国際問題に発展するかもしれんだろうが！」

ゴツンと頭を軽く叩かれた

でも全く痛くはなかった

代わりに責任を感じた

勝手な行動を取ったし、無事無傷で相手を倒したとはいえ、今思えばあれは自殺行為とも取れる

それにこれは自分一人の問題じゃ無かったわけだ

「馬鹿っ・・・」

俺は振り向いた

後ろにいた一条さんはうっすらと目元に涙を浮かべていた

あれ？俺泣かせるようなことしたっけ？

「えっと・・・・・・」

言葉に詰まってい何を言えばいいのか分からない

言葉が、出てこない

あなたはなんで涙なんか目元に浮かべてるんですか？

「馬鹿」

うぇ・・・ツキにも言われた・・・

なんなんだよぉ・・・

「死なないでよ」

振り絞って出した声が俺の耳に届く

そう・・・か。そうだよな

この世界で唯一実際に会えた相手

そして俺は彼女の拠り所となってしまった

たとえるなら添え木のようなもので俺はあのとき彼女に手を差し伸べた

その手を、俺自身が死んで離れてしまうと思わせてしまった

不安にさせてしまったのか・・・俺は

「ごめん・・・俺・・・気がつかなくて・・・」

俺も、一条さんを支えとしているようなところはある

何をするにも一人でやるのは心細い

知らない人だらけのせいで頼れる人が居なかった。それは俺にも一条さんにも言えたことだ

だけど、俺は彼女よりも先に彼女へ手を差し伸べた

だからこそ俺は手を離してはいけなかった

届かない存在になってはいけなかった

誓っただろう。あの夜に

「不安にさせちゃいましたか？」

「もう会えなくなるなんて、思いたくなかった。だから・・・居なくならないで。勝手に」

「この世界で退場禁止か。こんな物騒な世界で難しいことを言いますね。まぁ努力してみますけど」

◆

彼が居なくなると思うとつらかった

心が、泣いた

最初はまさか自分が泣いているなどとは思いたくも無かったけれど、
でも私は泣いていた

何でだろう

あの子が死んでしまうと思ったから?

それが怖かったから?

私は、なんて身勝手なんだろう

勝手に彼にすがりついてしまった

弱っていた私は差し出された彼の手を、取ってしまった

きっと彼もこの世界に来て辛いだろう

帰ることが出来ないのも、家族に会えないのも彼も同じであるはずだ

なのに彼は一緒にいた世界から来た人間でありながら、私のような
弱みを見せたことがない

少なくとも私の前ではだ

だというのにすがりついた私は何も出来ず、ただ彼がこのまま居なくなることを怖がる自分が居る

そりゃ私は人で、人が死ぬのは怖いことだと思う

それが知っている人ともなればその恐怖は倍以上になるだろう

「ごめん、勝手だね・・・私」

落ちる涙を拭きながら言った

でもその恐怖を感じているのは私だけなのだろうか？

不安なのは私だけじゃない

彼もそうだし、もっと幼い小学生も居る

背中をシェルディさんがさすってくれていたおかげで少し落ち着けた

自分の勝手さに嫌気がさす

私は年上だ

それでも彼はちゃんと私を引っ張り上げてくれた

彼が支えとなってくれている。希望となっていてくれるから今の私は立っていられる

彼が現れなかったら、支えになってくれていなければ私は何処まで耐えることが出来ただろうか

心は、いつまで折れずにすんだだろうか

なんて、もはや終わったことを考えていても仕方ないし、今の私には支えとなる人が居るだけで大丈夫

一条唯はそう自分に言い聞かせるとちょっと充血した目で支えとなってくれている高校生に目をやった

彼の目はホッとしているような、でも今私が言ったことで戸惑って迷っているような目をしていた

と、そこで虹色の龍がうなり声を上げた

静かな夜に黒龍が燃える音だけが聞こえていたなかで、そのうなり声だけで皆が振り返るには十分だった

◆

「いやぁー、なーかなかにおもしろい見せ物だったよぉ。うんうん！」

空中にいたのは一人の男だった

暗闇で黒いフードを被っているのが見える。だがその黒色のせいで上手く男の顔が見えない

破れた布のような翼でその場に滞空しており、独特なしゃべり方をするその男はパチパチと拍手をしてみせた

俺はその男を見つめる

暗くて見えないが、成人男性くらいは在りそうな体格と声色をしていた

月光が男の背後から差し込んでちょうどこちらからは影になって見える

だけど少しだけ、燃える黒龍から放たれる炎の光りがうっすらと男の顔をのぞかせた

口元が、人を見下す不適な笑みを浮かべていた

「何者だ!!」

レイルさんが剣を構えて男に問う

男は首を横に振った

「答える必要無し無し!!いーみが無い!逆に君たちは誰なんだい？」

男に何者かを問いつめるが男は逆にこちらに問いつめてきた

「せーーっかく苦労して捕まえたのに、ぜぇんぶ台無しにしちゃって・・・。特にそこの男の子?まさか君みたいな子にあのデカブツを倒されるとは思って無かったんだよね・・・。まぁそこまで期待してなかったから代わりに見に来たんだけどおもしろいものがみれたよ。その点では彼にも感謝かな。さて君たちは誰?何で邪魔するだい?」

何だろう

俺は男に対して無性に腹が立った

自分に対してではなく、まるでなんだかあの黒龍が馬鹿にされていると思ったから

利用・・・されて居たのか?

俺はそう分かった瞬間短刀を鞘から抜き放った

後ろで燃え続ける数刻前まであったその生命に黙祷し、そして怒りをあらわにした

だがそれより早く行動に出ていた者がいた

レイルさんだった

腰から隠して持っていたであろう短剣を取り出して稲妻のごとき早さでそれを男に向けて投げつけた

その短剣の切っ先が男を貫く前に、短剣は男の腕に弾かれていた

普通突き刺さってもいいような気がするが金属と金属がぶつかる音がしたためフードの下に何かをつけていたのだろうか

「レイルさん・・・」

「お前、あいつを利用したって事か？」

いつもよりトーンを落として低い声を出したレイルさんであったが男にはしっかりと伝わっていたようだ

「それぐらいは読み取って当たりまぁえだろ？」

男はそう言って鼻で笑った

隣でレイルさんが歯ぎしりをたてた

「おーぉ怖い怖い。もっと落ち着こうよ。別に今君たちを相手にす

るのは分が悪すぎるし穏便に済ませたいの分かってくれない？そっちには強力な手駒がそろってるんだ。別に俺を警戒する必要はないんだぜ」

男はゆっくりと翼を羽ばたかせながら移動を始めた

ゆらゆらとバランスを取りながらやがて燃える黒龍の死骸の真上にまで来る

炎は未だ勢いを衰えることなく燃えており、煙は緩やかに流れる風で横にそれているため男には被っていない

「ということは俺はお前達に何もしない、というのを分からせておきたいから。武力行使は専門じゃないんだ。だからそっちのおっきいの？さっきから立ち去れ立ち去れ五月蠅いけど用事を済ませたらすぐに出て行くんであんまり起こらないでくださいよ。ねっ！」

男はそう言って翼を羽ばたかせるのを止めた

頭が下になり、男はそのまま落下していく落下スピードはグングンと増していき、やがて臆することなく炎の中に突っ込んだ

そしてすぐに上昇する

まとわりつく炎を回転しながら振り払い再び翼を広げる

「僕の用事はこれ。これだけでも持って帰らないと怒られるからね。いやぁー、黒龍から分離して宝玉化してくれて助かったよ」

その男の手に握られているものを、俺は一度目にした事があった

以前とあるギルド、『夜の風』に奪われた黒玉

「それはっ！！」

ツキが叫んだ

黒玉は以前ツキが所持していたものでソーレの代わりに取られた大事なもの

まさかこんなところで再会するなんて思っても居なかったのだろう。

ツキの目はいつも異常に見開かれていた

「おや、これが何か分かるのかい嬢ちゃん？」

「それは・・・私のです」

「おや、おかしな事を言うね。これはとあるルート、って言い回しはよすか。これはとあるギルドの人間を殺したときに冥土の置きみやげに置いていったものだ」

夜の風・・・か

殺した・・・殺した・・・殺した・・・？

「殺した?何で・・・」

ツキが声を振り絞っていた

その声は振るえていた

「何で?おかしな事を言うね。欲しかった物を手にするために、犠牲があるのは仕方のないこと。手にするためにはその手で奪う。拒否するのであれば、その拒否する口も、脳も、意志も生も、全て全て全て奪うまで」

「なんて・・・ことを・・・」

「それじゃぁ俺の仕事は終わり終わり。さてさてさて、後は帰るだけ・・・っておっきいのが返してくれそうもなさそうな雰囲気だよね・・・」

虹色の龍が翼を大きく広げた

男はこちらに攻撃する意志は無いように受け取れるが果たしてこの余裕はなんだ?

先ほどの龍の戦いを見ていたのだろう？ならば虹色の龍から逃げるのは至難の業だと

飛んでいる限り地上に居る俺たちを撒くことは出来ても同じく空を高速で飛べる虹色の龍から本気で逃げきる保証があるというのか？

にやっと笑って男は手にした黒玉を月にかざした

「でもこれでさようならだ。それじゃぁ、ね」

男が最後にもう一度にやっと笑ったのが見えた

「黒翼の堕天使の黒光」

黒い球は黒光を放ちながら男を暗闇の中へと覆い隠していく

やがて男は完全に夜の闇へと姿を消してしまった

闇が支配する夜。そしてその中へと逃げていった男

虹色の龍は翼をたたんだ

それはもう、虹色の龍でも彼を追う事が出来ないという印でもあった

夜の草原に残されたのは唖然とその光景を見つめることしかできな

かった俺達だけであった

『それは実りの祭日』

全てが終わった

そういった和やかな雰囲気を味わう間もなく、突如どこからともなく一人の男が現れてあっという間に黒玉を持ち去っていった

この事件に黒玉が関わっていた事に驚きもしたがむしろあの黒龍の襲撃が人為的だったことに俺は驚いている

黒龍が俺たちの前に姿を現したときにすでにボロボロだったこともこれで納得がいった

恐らくあの黒龍は捕まえられ、そしてあの男に利用されたということ

そして男の口ぶりからして他にも仲間がいるということも僅かながらに聞き取れた

それは組織的なものを感じさせ、今後黒玉を使って再び何かをしてくるかもしれないという予測もたてられた

『夜の風』から黒玉を奪われて日が浅いことも、アジトがそこまで遠くないということを表しているとも思われた。が、奴らは飛べると言うことでいくつでも山を越えることは可能だったと思われる

そうなれば歩くより何倍も早く移動できると言うことになり、どこから来たのか見当もつかなかった

魔力も闇と共に感じなくなった

情報もなく、追う手段は完全に断たれてしまった

俺たちは虹色の龍と別れを告げた

神龍達は元々の生命力が強いためかシェルディさんの魔術を使うとすぐに回復して治す本人もびっくりしていた

その後、数日をかけて一行は王都リッドクルスへと帰還した

その王都はというとものすごい活気に満ちあふれていて俺たちが王都を出る前とは遙かに規模が違うほどだった

「これって・・・」

王都への門をくぐった先には数々の出店が並んでいた

そしていつもの倍以上の人たちが街を行き交っていた

「これはマナの実りが巡ってきたことを祝う祭りだ。そうか、この前あの虹色の龍がマナを放出したからこの土地にマナが行き渡ったんだろう。やはりあれがマナの実りの正体だったか」

レイルさんは説明をして何故か一人で勝手に納得した

「ま、でも少し遊ぶのは早いかな。先に王女のところへと戻らないとな。そこまでが俺等の仕事だ」

セルディアさんとシェルディさんもこくりとうなずいて同意する

結構この人たちには助けられたなぁ

自分が実際に大怪我をしたりすることはなかったが無事に帰ってこれた事に感謝である

「なんか家に帰るまでが遠足って感じだね」

隣にいた一条さんがクスリと笑う

遠足にしちゃハードすぎましたけどね～

なんて俺も笑ったりして

なんだかんだでいろいろ合ったけど、誰一人欠けることなく戻ってこれて良かった

街中は人が多く、大通りを走る馬車なども使えなくなっているため仕方なく裏道を通って俺たちは城へと戻った

「アルフレア様、レティール並びにロルワートからの使者が間もなく到着するとの事です」

「そうか。アルデリアの王妃は早めに手を打ってくれて助かったよ。ファンダーヌから返答は合ったか？」

アルフレアは椅子に座って書類を眺めながらその奥に居るジュルアスの報告を聞いていた

突如やって来て火山へと向かった彼らが出て行って一週間弱

登山だけなら半日ほど在れば頂上までたどり着くがそこまでの道のりが大変だからな

まぁもうしばらくかかっても無理は無いと思うが無事に帰ってくることだけを祈っておくか

「今朝方使者が到着し、返答をお持ち致しております」

「わかった。先にそちらを通してくれ。その後に使者二人を通す」

「畏まりました」

ジョルジュが礼をして部屋のドアを閉めた

静かな部屋に彼が立ち去る足音が聞こえてくる

先日送ったファンダーヌへのサクラ、イチジョウ等の異世界人の事に関しての文章をファンダーヌへと送ったのだがどうやらその返答

が来たらしい

内容は確か彼らの事情と今後どうするか、そちらにも同じように異世界人が現れているのであればその情報の掲示を求めるような内容を書いた気がするが果たしてどういう返答が来るのか

もし居るのであればリーナに居る子供の親で合って欲しいと願っている

出来るだけあの子には親と再会して欲しいからな

あの子も寂しい思いをしているであろうに・・・

ファンダーヌはグレアント、アルデリアの南方に隣接する国でリーナのように西東に伸びる国である

海に面しており、ファンダーヌからは豊富な魚介類がここ、内陸の国にまで流れてくる

ファンダーヌに行くには街道を下り、セルホトの森、リト川を越えて行かなくてはならない

そう言えばアヤキ・サクラもアルデリアに行くと言っていたのでこの街道を下っていくことになるだろう

この街道はアルデリアを囲む山脈を迂回していく道で途中ファンダーヌとアルデリアへ行く道が分かれている

ファンダーヌに行ってあの少女を安心させるというのも一つの手だろうか・・・

っと・・・今日中に終わらせないといけない書類がいくつか在るのだったとアルフレアは手元の書類に目を通し始めた

「おーい、これ武官に回す奴だろう。なんで私のところに・・・」

何の手違いか目を通した書類は紅炎騎士団の派遣要請の許可書だった

派遣場所は少し遠目の村だが数日かければつく距離であった

が、その内容に目を通して言葉を止めた

「ふむ？まだそんな時期じゃ無いはずだが・・・」

「失礼致します」

「ん、入れ」

アルフレアは一端その書類を机の上に置いた

ジョルジュが部屋に入ってきた

その手には一通の紙筒があり、綺麗なリボンで結ばれていた

「返答ってのはそれか」

「はい。読み上げましょうか？」

「いや、いい。渡せ」

「はっ」

アルフレアはファンダーヌから届いた手紙の返答を読むべくリボンを解いて紙を開いた

「・・・・ふんふん・・・・・ほぅ・・・・・」

肩肘をついてその書状を摘んで垂らして読む

「黒髪黒眼、中年の異邦人一名を保護。殺されては居ないようだな。んで、我々はそちらと同意見で指示に従う、と。そうか。ま、上出来上出来」

ぽいっと放り投げた書状をジョルジュが受け取り、次いで投げられたリボンもジョルジュに投げつける

「保管庫に閉まっておけ」

「分かりました」

とりあえず殺されては居ないしこちらの提案ものんでくれたようで助かった

さて、お次はわざわざ使者をよこした2国か

アルフレアはサッと立ち上がり壁に掛けられていた紅いマントを羽織った

二つの国はどう返答してくれるのかな

「ジョルジュ、謁見行くから使者を通しておいてくれ」

「畏まりました」

アルフレアはマントを翻して謁見の間へと向かった

謁見の間にてその二人の使者を待つ

しばらくして二人の使者が近衛の騎士に警備されながら謁見の間に入ってきた

「近衛隊は部屋のドアを外で守っていろ。盗み聞きはするなよ」

「「はっ！」」

釘を刺しておいて二人は部屋を外出する

「報告は少し待て。今母上も来ることになっている」

「待たれる必要は無いわ」

母が来るのを待つつもりが声を発し終えてすぐに母が室内に入ってきた

アルフレアと同じように紅いドレスを身に纏っている

が、その風格はまだ幼さを体に残すアルフレアと違い、大人な風格を感じさせる

これがアルフレアの生みの親、オリシアである

「お二人とも、お顔をお上げになってくださいな」

「私、レティールより使者を仰せつかったミリオと申す者」

「私、ロルワートより使者を仰せつかったアルダートと申す者。主より書簡を預かっております」

「同じく主より返答の書簡をお持ち致しました」

二人はそう言って懐からそれぞれ紙を取り出した
綺麗な箱に収められたその書状を差し出す二人
それをアルフレアとオリシアはそれぞれ一つずつ受け取った

「レティール、精霊台保持国会議に参加」

「ロルワート、精霊台保持国会議に不参加」

・・・・

「そうか、不参加か・・・・あのじじぃめ・・・・」

「こらフレア、そんな言葉を使ったらだめですよ。理由は大方分かりますが・・・・」

私も何となくは分かっていた

今確か北方の国々ではいろいろともめていると聞く

一歩間違えば戦争へと発展しそうな勢いの中で国王が抜けるわけにも行かない

それにロルワートはあまり他国との交流をしない国であり、何年も独裁政治が続いている国と聞いている

そういう場所こそ参加して異邦者の安全を確保しておきたかったのだが・・・

とりあえず一国だけでも参加国が増えてくれるのはありがたい

これでグレアント、アルデリア、ファンダーヌ、リーナ、そしてレティールが参加を表明した

これは精霊台を保持する9国、上記の6国に加え残りの3国にも書状を飛ばしては居るのだがなにぶん遠いためにまだ書状の返答は届いていない

私が各国の精霊台の保持国に書状を送ったのはこの一件の責任者が私に選ばれたからだ

アルデリア、グレアント、リーナの水鏡での交信があった後日、2国からこの一件を我々グレアントが受け持つようにという書状が届いた

アルデリアよりグレアントの方が位置的に交通面や国力がやや上で在ること

リーナは帝都が二つに分かれているためあまりそういったまとめごとをするのにはむいていないとのこと

結果この国に彼らの一件を任されたのだが父も母も忙しいためこれも勉強と何故か父母から押しつけられたというのもあるけれど

とりあえず国同士の大事な決めごとの時には母か父に同席して確認

などをとってもらうことはしている

「一つ聞くがアルデリアからも書状は届いているか？」

前回水鏡で会談したときにセレシアも書状を送るとか言っていたはずだ

「は。立ち聞きした話では在りますがどうやらアルデリアからも同じような書状が届いたと言う話を聞いております」

「ロルワートはアルデリアからの書状を確かに受け取っております。この書状の件に関してはお話しできません」

なるほどね。この（・・）、か。ロルワートは少し遠い北方の国であるためついでに、といった感じで彼に2国の文書を渡したのだろう

恐らくそうであろうという予想を立てた私は少し聞いてみる

「なるほど、では貴方は今もう一通、他国、括弧アルデリアへの書状をお持ち、ということでいいんだな？」

「は、え、えぇ！？」

「驚きようからして確かに持っているようだな。別に取ったりはしないさ。というか狼狽えるなよな使者なら。命取りだぞ」

こういう場合には同じ使者に二つ以上の国の書状を持たせるものではない

国にはそれぞれ思惑がある

仲が良くない国ほど、相手の動向を探ろうとするもの

それを悟られるようではまだまだ

「我々に良心が合って良かったな。なぁ母様」

内心使者の方は汗だらだらかも知れないな

私は少し遊びすぎたかと反省した

「フフッ、そうかもしれませんね。では確かに受け取りました。でこれを主にお渡しください」

オリシアはそう言って懐から2通の書簡を取り出した

片方をレティールの使者に

もう片方をロルワートの使者に

あらかじめ用意していたその書簡を手渡す

「確かにお預かり致しました」

「同じく、確かにお預かり致しました」

「確かにお渡し致しました。ちゃんと届けてくださいね」

「「はっ！！」」

二人は違う国の使者だというのになんだか息ピッタリだな

そんなことを思いながら私は窓の外を眺めた

彼らはいつ帰ってくるのだろうか

そんなことを最近はずっと考えてるなぁとふと自分に返り、今はまだ公務中だと自分に鞭打って仕事モードに戻す

私が見下ろした城下では、盛大に祭りが行われていた

あそこに■■■■遊びに行きたいな・・・

・・・自分はいったい何を考えているのか・・・

「おっしゃ！」

「よし、持ってけ泥棒！！」

「サンキューおっちゃん！」

俺は手にした二つの大きな串焼きを隣にいた一条さんとツキに渡した

あの後少し城に行く前に城下の祭りを楽しんでも良いだろうという事で羽目を外す感覚で俺達は街を探索していた

っていうか前言撤回ですかレイルさん？

祭りの風景を見てたら自分も遊びたくなったとかそんな感じですかね？

一応レイルさんとセルディアさん、俺、一条さん、ツキ、シェルディさんのメンバーに分かれての行動となった

まぁ保護者的な役割、あと空気を読んでシェルディさんが俺たちの護衛を引き継いでいる

レイルさんもセルディアさんも再会をゆっくりと喜ぶ場が無かったからな

それにしても何処に行っても店店店！！

毎年行っていた近所の祭りの何倍在るだろうか

俺はこういった祭りなどは大好きだ

よく電車で二つ隣の市で行われる大きな祭りに行っていた事を思い出すがそれの比じゃ無いくらいの盛り上がりようだ

俺たちはツキと一条さんとの3人で行動している

レイルさん、シェルディさん、セルディアさんも、3人とも久しぶりに昔に戻った、そんな顔をしているようであった

っていうかあの人達まだ護衛の任務中だけど職務放棄とかにはならないのだろうか？

ま、そんなことはどうでもいいか

今はこの祭りを楽しもうと思う俺だった

ちなみにこの祭りはマナの実りを祝うためのものであり、似たような祭りは他でも行われている

アルデリアも、リーナも、ファンダーヌも、この周辺の国々は龍族の守護地に当たる場所のためあのとき開放したマナの実りは同時期に訪れたはずだから当たり前である

「そういやアーヤん両手に花じゃん！！」

「は！？」

彼らがグレアントに戻ってきたのは全４日の祭りの最終日

周辺国は数日間の祭りに大いに沸いた

『始まりの終わり』

「それじゃぁ・・・」

「あぁ。若い女性、大柄な男、それと中年の男が見つかり現在各国で保護されているという状況だ。私からも事情を少し話した上で書状を3国に送った」

俺と一条さんは顔を見合わせて喜びの顔を浮かべた

良かった。少なくともあと最低3人は無事なようだ

「私はこの件で一度精霊台を保持する国で集まって会談しようと思ったのだが他国にもいろいろと事情が在るらしくてな。3国のうち2国しか色よい返事を返してくれなかった。が、それでも無事が確認できただけでも上出来だ」

とりあえず無事が分かったことが唯一の成果だとアルフレアさんは言っていたがそんなことは無いと反論した

「俺たちのためにそこまでしてくれるなんて思ってませんでした。本当にありがとうございます」

深々と感謝の念を込めて何度もお辞儀する一条さんと俺

「気にするな。お前達にしてみれば災難続きだったのだ。突然異世界に飛ばされて頼るものが無いというのも辛いだろうからな」

「いえ、頼るものならできました」

隣にいる一条さんが間髪入れずに即答した

いや、ちょ・・・

何故俺をニッコリと見ているんだい一条さん？

「そ、そうか。まぁいい。とりあえずその辺のことは我々上の人間に任せてくれ。あまり自らの立場が上であることを強調したくは無いのだが・・・」

彼女のような人が居てくれて本当に助かっている

俺たちだけなら絶対にこういった国同士の関わりを持てなくて歩いて各地を旅する羽目になっていたかもしれない

「いえいえ、こういうときこそ貴方という人と知り合いになれていて本当に助かってます」

「何せ王女ですもんね」

「まぁあまり難しいことは私の一存では決められないことも在るが、仮にも私は第一王女である程度の権力はすでに握っているからな。私の親はもう引退間近でいろいろな事を私に任せるようになっているからな」

あれ？フフフフと笑うアルフレアの背後にドス黒いオーラが見えるのは気のせいか？

「気のせいだよ」

「！？」

一条さんに心読まれた

何この人達！？

「兎に角、それは置いておいてとりあえず話を伺う限り相当いろいろ合ったらしいな」

「え、えぇ、まぁ」

なんだか龍にさらわれたことよりも壮絶な事に巻き込まれた・・・と思う

龍にさらわれた時はこれ以上驚くことは無いだろうとすら思う驚愕の事件だったのだが、軽くそれを上回った自信がある

それに何せこの手で龍を一匹殺してるからな・・・

そして魂だけのもう一匹は今俺の腰に居るけれども、言葉も聞こえないし俺の声も届いているかどうか

本当に魂が宿ったのか実感があまりわかない

だけど持っているだけで、なんだか落ち着くこと、黒龍を倒したときに出たあの魔法

どうしても完全に宿っていないとは言えないのが今の微妙な現状

「あまり無茶はしないでくれよ。守る方も大変だ。あいつの苦労が伺えるよ全く」

「あ、ははは・・・」

返す言葉もありません。はい

あいつというのはレイルさんの事だろうか

「一段落ついたことだし、これからはどうするのだ?やはりアルデリアへ戻るか?」

「あー、はい。一応そのつもりですけど」

「そうか。ならば何も言うことは在るまい。出立の予定は？」

「えーっと、数日後じゃないかなぁ。ツキの準備も在るし」

俺はもうしばらくしたらツキと一緒にこの国を出る予定である

ツキもクスリを早く持ち帰りたいだろうし俺も一度戻っていろいろ

と報告したりすることとかある

「ならばついでにこれを持って行ってくれないか？」

アルフレアは一枚の紙筒を取り出した

俺はそれを受け取ったが中身を見るような真似はしない

「それをセレシア、いや、ファルアナリアさんに渡してくれ」

「これは？って聞かない方が良いですよね」

「くれぐれも中身を覗くんじゃないぞ。見たら死ぬぞ」

「死ぬの！？」

「まぁ大事なものだししっかりと頼むぞ。中身はお主も後々分かる

はずだ」

「分かりました。しっかりと届けます」

俺はその書状をしっかりと手にして覗かずと届ける事を言うと、隣にいる一条さんの顔を見た

「一条さんはどうするんですか？これからもここにとどまるんですか？」

一条さんは突然話を振られて驚きつつも考えを口にする

「そうね・・・。私は・・・・・今はとりあえずここに残ろうと思う。アーヤんのおかげでちょっとは元気になれたし、今度は私の番かなぁなんて」

「私の番？」

「そ。近いうちにえっとー、そう、湊千尋ちゃんのところに行ってみようかなーと画策中」

「あの小一の？」

「そそ。あの子も一度あってどうするか聞いておきたいしね。いつまでも一人にさせて置くわけにも行かないでしょ？」

「そうですね」

「せっかく会えたっていうのにまた離れることになるけど・・・・いいよね？」

「俺は大丈夫ですよ。一条さんこそ寂しかったりするんじゃないですか？」

「寂しいわよ～。もう、夜な夜なベッドですすり泣いてやるわ！」

そう言いながら彼女の顔は笑っていた

せっかく遠い場所から予想外の再会を果たして、こうして出会えたまた離れることに、寂しくないと言われれば嘘になる

けれど、気がつけば俺は今はもっといろんなものを見たくなっていた

別世界

何だろうな。この世界に住み続けたい、という感じじゃなくて、こう別の・・・

言葉で例えるならば、「知りたい。見たい。感じたい」

俺はこの世界に惹かれている、というのが正しいのだろうか

この気持ち・・・そう、オラわくわくすっぞ！！って感じだ

俺は世界に興味を持ち、惹かれ、世界の広さを知った

これまでは一つの県の中でくすぶっていた己が爆発したかのようだ

「帰る方法を探すにしても一国でうろうろするよりも手分けしてバラバラの場所から手がかりを探すってのも一つですしね」

「あぁ。・・・・・私はな」

一条さんがうつむいて話し出した

「不安だったよ。内心怖くて怖くてしょうがなかった」

俺もアルフレアさんもその言葉を静かに聞いて、割り込むような真似はしなかった

「でもな、なんだか今では世界が変わったように感じられる。恐怖も、不安も感じていない」

それはきっと一条さんの心の底からの本音のように俺は感じられた

「だから、私は平気だ。だからもう、大丈夫だ」

あぁ、そうか。と俺は思った

彼女の言葉は俺に向けて放たれたものなのだと

一度弱みを見せてしまった

それが逆に俺の枷になると思ったのだろう

だが彼女は言った。もう自分の支えは出来た。だからもう、大丈夫だと

だから俺はその言葉にこう返した

「わかりました」

俺は思い残すこと無く、この地を後にすることを完全に決意した

数日後

目覚めはすこぶる良かった

なんだか清々しいようでいて、そして若干筋肉痛だったりする

いやまぁここしばらくは運動しっぱなしだったわけだしね。登山とか龍退治とか

いろいろあったこの地ももう少しでおさらば、となる

城下でやっていた店達は夜のうちに店を畳んで今ではすっかりいつもの朝の静かな町並みとなっている

そんな城下を俺はバルコニーのような場所から見下ろした

広いな。

これだけ科学や文明が発達していないこの世界でも、こんな巨大な建造物や、これほどまでに大きな町並みが作れるということに俺は静かな驚きを覚える

「凄い・・・なぁ」

人間って、どれだけ凄い生き物なのだろうか

可能性の果てが、今の俺には全く見えない

人間の限界はいったい何処なのか

「何してるの？」

「うぉ！？」

背後から突如話しかけられて俺はびくりと反応してしまう

振り向くと其処には寝衣姿のツキがいた

「おはようツキ」

「おはよう。何してるの？」

2度目の問いかけ

「いやちょっと人間のすごさを実感してただけ」

「？？」

俺は再び振り返って城下を見下ろした

「俺さ、別世界の人間だろ。それなのにやっぱり人間は何処の世界でも同じなんだなぁってさ」

「どういうこと？」

「ほら、人間って家を作って家庭を作って子供を育てて、で、その家を造ったり料理を作ったり、技術と知能を使って世界をまわしてる。それって凄いことだよなーって思ってたりしただけ」

「よくわかんないな」

「まぁ俺にも何言ってるかよく分からん！でも、さ。これ見てよ。この街。王都リッドクルス・・・だっけ？凄いな。人間がこういうものを作れるって」

この下に広がるそれを俺は左手でサッとなでるようにしてツキに見せた

ツキも横まで来てやって城下を見下ろした

その横顔を見たけど、そこにはいつもと変わらぬツキの無表情な顔があっただけだった

「こんなでっかいもの、ちっぽけな人間が作ったって思うと凄いよな。あのさ、恨むなよ。俺等の世界じゃこれよりも本当にでっかいビルとか、あ、建物の事ね。それを同じ人間が作ったものって思うと、こっちの世界がなんだか劣ってるように感じてしまうこともあるんだ。文明も発達していないし」

ツキが目線を城下から俺へと移した

自分の世界が劣っていると言われた事に腹を立てたか、それとも言った俺に腹を立てたのか

はたまた腹を立てているのかどうかすら今の俺では無表情のツキの顔からは読み取れない

「だけど、俺はこの世界が好きだ。劣ってるっていっても実際はそうじゃない。あちらの世界にあるものがこちらの世界にないだけでそれを劣っているとか言うのは間違ってる。こっちの世界には向こうにはない魔法っていうチョー便利なものとかあるしね」

ただ、そう感じてしまうだけ

この世界は何一つとして劣っていない

むしろ良い世界だ

自然が多く、人々が生き生きとしている

まるでみんながみんな、あの小さかった頃の夏休みを思い起こさせるような目をしている

自分が勝手に、ただそう感じているだけ

「一概にどっちが凄いとか偉いとか優秀か劣等かって言うのは判断

できる事じゃないし、したらいけない事だと思ってる。でも、その世界に住む人間は変わらないなぁって感じてたんだ。ここからこの景色を見たときに」

「・・・・そう」

それだけを言ってツキは部屋へと戻っていった

着替えをするのか、二度寝をするのか

よく分からなかったけど戻るツキの後ろ姿を見て、着替えをするツキの姿を脳内に思い浮かべた時点で俺は自分を思いっきり殴った

所詮自分もそこら辺の男なのかぁ、と思って頬をさすりながら力を込めすぎたことを後悔した

「痛てぇ・・・・」

「それじゃぁ、ありがとうございました」

「うん。また合おうね！」

「あぁ。またな！」

また合えると思うから、彼女はさようならを使わなかった

俺もそれに答えた

そして一条さんにツキを襲わないようにと釘を刺された

俺にそんな度胸も勇気も無いよと全否定した。そりゃもう全力で全否定

そしてアルフレアさんと意外にもその母オリシアさんも見送りに来てくださった

その後ろにはレイルさんとシェルディさん

セルディアさんは最初に出会った場所でやっていた遠征へと戻っていったらしい

オリシアさんとは合う機会は無かったが一目で彼女がアルフレアさんの母だと言うことが分かった

同じ髪の色に目元も若干似ているように感じた

やっぱり親と子は似るんだなぁと思いながら俺は手を振った

一条さんはもう少ししたらリーナへと向かうらしい

其処にいる小一の湊千尋ちゃんに合うのだとか

俺も出来れば寄ってみたかったがツキはクスリを運んでいるからあまり時間は取れないらしい

それにこれから旅を共にする渡商人の集団はファンダーヌを経由しないでアルデリアに行く集団であるためそれもかなわない

俺と一条さんは最後に握手を交わした

柔らかく、繊細な感じがした

たった一度握手しただけで俺はなんだか力をもらえたような気がした

彼女の目はもう、弱さを感じさせてはいなかった

しっかりと俺に語りかけるような目で俺の瞳を見つめていた

その瞳には、彼女の希望の支えが映っていた

もそれに答えて、再会を約束した

そして俺とツキはアルデリアへと向かって荷馬車を走らせた

「またね・・・か」

荷馬車はゴトゴト揺れて道を行く――

また、いつか会えるだろう

その時までに、果たした約束を果たせるようになっていられるように

きっと、また出会うそのときが訪れることを祈って

この地に別れを告げよう

少年は決意をしました

次に彼を待つ出来事は？

さぁさ行ってみようかお次の話

物語はまだまだ続く

まだここは始まりにすぎない

これから起こる大きな出来事の、ほんの序章なのである

第一章　龍の神子　これにて閉幕

『始まりの終わり』（後書き）

これでとりあえず第一章、龍の神子編を終わりたいと思います。なんか微妙で曖昧な表現とかも多くて見苦しかったりする場面が多々ありましたがまぁ気にせず突っ走っていきたいなーとｗ（気にしろや）正直章名になっていた龍の神子の話に乗れたような乗れなかったような話になっていたり居なかったり・・・。（伏線がどれだけ出来ることか）作者は正直作った話を見返したりしなかったりと矛盾とか多々出てくるかも知れませんがそう言うのがあったら是非ご一報を（いっぱい来そうで恐い・・・）。設定とかはほとんどうろ覚えで書いてます！！（断言）ちまちまと読み返して変なところとかあったら直して行きたいですが正直乗り気になるときしかそう言うことはしないんですよね。面倒くさがり屋とはこういう人のことを言うんですよね。はい。すいません。そうこうして長かったような短かったような微妙な感じで一章終わりました。これも皆様の応援あってのものです！第２章、『アクリス武闘大会』もよろしくお願いします！

『ツキのおうち』

俺にも在るのだろうか
男は瞳を閉じる
ただ――ただただこの一振りを求めるために全てを犠牲にした俺
にもそんなものが
まだ――間に合うのだろうか？
男は自らに問いつめる
全てを犠牲にしたその後でも
今の俺には見えていなかったものが、こいつには見えている
その瞳は、俺が何時か目指した眼差しで
その意志は、俺が失った何時かの自分にそっくりで
迷いのない彼の存在は、俺が思い描いた理想の自分で
そいつは、俺の目指した全てを持っていた
そしてそれを目指した俺は、目指したもの全てを失っていた
男は目の前に立つ、若き頃に目指した存在を見つめた

「大事なのは過去を引きずる事じゃない。心を入れ替えたならばそれはもう、あなたを問いつめる者は何処にもいないと言うことです」

心を締め付け、問いつめていたのは誰だったのだろう?

あぁ、そうか――――――自分だったのか・・・・

狂った自分は、空へと大きな笑いを響かせ、そして消えていった

第二章　アクリス武闘大会

本日は晴天なり

雲一つ無い澄みきった空が何処までも続いており

そんな空を飛ぶ鳥たちも、気持ちよさそうに風に乗っていました

少なくとも一人の高校生はそう思っているようでした

「あのおおぞらぁーにぃーつばさぁーをひろぉ～げ～ひしょう～してぇ～よぉ～」

ゴトゴト揺れる荷馬車の上で空を見上げてへんな唄を唄う彩輝は大の字になって寝そべっていた

時たま小石に馬車が乗り上げてガタンと弾むときに頭が痛い思いをすること以外は最高な場所でした

「景色は良いし、風も気持ちいいな～。広大だ・・・・なぁソーレ」

隣に置いてある一本の守り刀に向かってそんな事を語りかけるも返事は無い

だけど彩輝はそんなことを気にすることなく空を眺め続けました

「あー・・・日焼けしてそうだなぁ俺・・・・」

ずっと太陽の光に浴びっぱなしでそんな心配をした俺は守り刀の紅翼太陽（ソーレ）を手に取った

それまで日の光をずっと浴びていた鞘には結構な熱が溜まっていてかなり彩輝の手にはその温もりが伝わってきた

「よっ・・・と」

荷馬車の後ろに手をかけて脚から荷馬車の中へと飛び降りる

すると目の前ではツキがぐっすりと眠っていた

机に向かって伝票のようなものと羽ペンを握ったままのツキに俺は寄り添った

インクの瓶の蓋をしてはねペンのインクを拭き取ると俺はその羽ペンをペン立てにたてた

暖かいし別に上には何もかけなくて良いだろうと勝手に判断して俺は荷馬車の角に座り込んだ

リッドクルスを出て約一週間とちょっと

俺たちはようやく目的地であるアルデリア王国王都アクリスを目の前にしていた

いくつかの渡商人の荷馬車が先行していて俺が乗る荷馬車は一番後ろ
この荷馬車を引っ張っているクェトルはツキの家で飼っているもの
らしく、名前はサナという雌のクェトルだという
にしても本当に奇妙な生物だ
太く短足な脚に背中の甲羅
横に伸びた太い角にロープを結び、荷馬車を力一杯引いて歩く姿は
亀のような馬のような非常に微妙なものであった

「これってもっとスピードでないもんなのかねぇ・・・」

そしてこいつがまた遅いのなんの。まるで亀のようにゆっくりと歩
く生き物であった
この間道中にツキに聞いてみたこともあったのだがこいつは危機が
迫れば猛スピードで走るらしい
らしい、だ。実際俺も、ツキですら見たことがないらしい
そのときのために力を残しているのか、それとも基本的に動きが遅
い生物であるせいでたまにしか見られないレアな姿なのか
どちらにせよもう少し早く歩いてくれれば今頃は王都ついているん
だけどなぁ

正直人が歩くのと大差ないんじゃないかとすら思えるスピード
でもこのゆっくり加減がまた良い感じにゆりかごのように感じられて眠気を誘う
現にツキもぐっすり寝ている
寝込みを襲う気は全然無いがむしろ寝息とか無防備な寝顔にちょっとばかり意識させられる

「降りてきたのは失敗だったかな・・・。上いこうかな・・・」

そんなことを思って荷馬車についている取っ手や布やらを器用に足場にして上まで昇る

と、そこで俺は気がついた

後ろの方に男の人が見えた

先ほどまで空を見上げていたときに抜かしたのだろうか？

ああやって各地を旅する人も居るのか

放浪人か、はたまた武者修行の旅か

「まぁ物好きな人もいるもんだね・・・」

その反面、彼は結構自分の腕に自信はあるように俺は見えた
そうでなければ魔物に出会う確率の高くなる場所を一人で歩いたりはしないのが常識だからだ

「そういや腰に刀差してるっぽいような・・・」

ボロボロのローブを被った男の腰に一本の刀ようなものがぶら下がっているのがみえた

「ま、いいや、寝よ」

もう少しでつくのだからそれまで寝ていても誰も文句は言わないだろう

俺は張った茶色い布の上に寝っ転がった

やっぱり空に雲は無かった

俺たちがアクリスに到着して、検問とかを受けて中に入ると其処には大きな道路が一本、真っ直ぐ王都の中心にそびえる城へと伸びて

いた

水路が多く、移動も船ですることが多い王都とはいえこういった運搬物などいろいろな物を運ぶためにいくつかこうした大通りもあるのだとか

王都に入ってすぐにツキは荷物などを検問所の近くに預け、そこから水路に向かった

簡単な荷物だけをそろえてツキは一艘の船を借りてきた

「アヤキはどうするの？」

「お、俺？そうだな・・・。別に急ぎって訳でもないしついていってもいいんなら同行する」

特に俺には用事はない

城に行くにしても今すぐに行くための理由も無い

そういえば王都で回ったことがあるのは第４地区のみで他の地区は見回ったことはない

城に近づくにつれて大きな屋敷が建ち並ぶ第２第３地区の範囲は第四第五地区のそれぞれ半分も無いほどに狭く、王都のほとんどは一般人が住む区域になっている

まぁ貴族っていうのがそれほど沢山いるってわけでも無いらしいしね

「私は別に大丈夫。取られた我が家の家宝の話もしないといけないし」

黒玉は家宝でしたか・・・悪いことしちゃったな

ソーレの代わりに差し出したとはいえ、代々伝わってきた物を差し出して・・・

「じゃぁ一緒に行こうかな・・・ってあれ？なんでそんな大事な物を持ち歩いているんですか？家に置いておけば良いじゃないですか」

俺はそう言いながら先に小舟に乗ったツキの手を取って船に飛び移る

船が多少揺れたものの俺はバランスを取って座る

「・・・家に置いておいたら、危険だったから」

「き、けん？」

「あれは代々我が家に伝わってきた大切な物。価値なんて絶対につけられないもう、国の宝といっても過言じゃないほどの物なの」

俺はそれを聞いてぽかーんと口を開けてしまった

あれにそれほどまでの価値が合ったのか

他に方法が無かったのか・・・

俺は少し落ち込んだ

あのときはそんな事も知らないで言ってしまったんだよな・・・

『他に代わりになる物は無いんですか?』

俺は少し自分の無神経さに腹が立った

彼女がどういう思いであれを差し出していたのか

あのときはツキにそう言うことをさせてしまった自分に俺はいらだったが今は彼女のことを何も考えていなかった自分にいらだっていた

「・・・ごめん」

「なんで謝るの?あのとき言ったけど気にしないでいいから。それに・・・少しホッとしてるから」

「?」

どういう意味かと俺は首をかしげるがツキはオールを手にして船をこぎ出した

皆が通るであろう水路はそれなりに幅も広く、１０台くらいなら余裕で平行して船を走らせる幅があるように見える

そこからいくつも枝分かれした小道のような水路があり、石垣の上に立つ家々にはそこからいけるようであった

その証拠に支流の奥には昇ることが出来る船着き場のような場所がいくつも見えた

そのうちの一本に俺たちの乗る船は入っていく

そしてとある家の前にぴたりと船を止めた

すぐさまなれた手つきでロープで船を岸に止めた

俺はツキに荷物を渡して自分も船から陸に上陸した

「これがツキの家？」

「うん。ルベル家」

家は木と煉瓦のような物を組み合わせた家でツキはその扉を迷わず開けた

「ただいまー」

「お、おじゃましまーす・・・」

靴は・・・脱がなくても良いのかな？

「む・・・？ツキか？」

「ただいまお祖父ちゃん」

「久しぶりだの。おや、隣におるのは・・・お主、まさかこんな男と・・・！？いかんぞいかんぞ！！」

「ひ、ひぃ・・・！？」

おじいさんは突如目をカッと見開きドスドスドスと迫ってきた

それをツキは一瞥して家の奥へと向かう

「今お茶入れるから」

「あ、うん・・・」

「お主、いったい何者じゃ！？ツキのいったい何なのじゃ！？」

俺はツキに返事を返しながらおじいさんの猛攻を受けていた

両肩を捕まれてガックガックと揺さぶられる

「う、っえ、やぁめぇてぇくだぁぁっさい！？」

揺すられて声も変な風に出てしまう

っていうか早く戻ってきてぇっ！！

「ちょ、ちょっ・・・っと！」

俺は何とかおじいさんの腕をふりほどいて距離を取った

にらみ合う両者の間にツキがいつもの無表情で入ってきた

「お茶・・・」

「あ、どうも・・・」

俺はお盆にのったコップに注がれたお茶を手に取った

カランと氷の音が気持ちよく部屋に響いた

喉を潤して俺は近くにあった椅子に腰掛けた

ツキのおじいさんは俺を睨み続けていたがツキがおじいさんの方を

見るとにこにこと笑って反対側の椅子に座った

ちっ、猫被ってやがるなこのヤロゥ

このおじいさんは孫の前ではどうやらそう言うキャラを作っているらしかった

ツキも席についてお盆を机の上に置いた

深呼吸だけしてツキはおじいさんに向き直った

「お祖父ちゃん。話があります」

これまでの出来事を話し終わるとおじいさんは目をつぶってお茶を一口飲み、それからしばらく腕を組んで考え始めた

だがその後、「そうか」とぽつりとつぶやいただけであった

「すいません。俺がいなかったら彼女も差し出すことはなかったと思うんです」

俺がいたせいでソーレよりも高い品物を差し出さなるをえない状況になってしまった

ツキはそんなこと無いというが俺も多少は罪悪感を感じてしまう

おじいさんもツキと同じように俺に責任はないと言ってはくれるものの、俺は素直にそうは思えなかった

「とはいえこれで我らは怯えることなくすごすことができそうじゃの」

「どういうことですか？」

俺はおじいさんの発言に対して問いかけた

怯える？いったい何にだろう、と

「あの黒玉は我ら先祖代々が受け継いできた家宝であり、また悩みの種でもあった」

「あれのせいで我々のところに幾度もこの国から譲り渡すようにという催促がなんども来ておったのだ」

その言葉に何かが引っかかった

なんだろう。催促？あの優しそうな人たちがそんなことをするのだろうか？

そりゃあ確かにものすごくレアな代物だと言うことは分かるが其処

までして国がほしがる理由は何なんだろう
前にもちらっとこの宝玉の話があがっていたが・・・

「あの、この宝玉ってどういう物なんですか?まだちょっと理解が出来ないんですが」

「む?お主もこの大陸に住む者ならそれぐらい分かるだろう」

「えっと、ちょっと事情がありまして。さっきの話にも関係するんですけど・・・」

俺は自らが異世界人だと言うことをあかした

おじいさんはさして驚く様子は見せなかったが何か納得するようにうんうんと首を縦に振っていた

「確かにこの大陸では黒髪黒眼という人種は聞いたことがないからの」

「こっちの世界の人は頭カラフルすぎです。染めてるように見えるぞ・・・」

正直こっちの世界に来てからというもの、その、人の髪が無性に気になっていた

そりゃもと居た日本じゃ周りがみんな黒とか茶色とかそんな感じの色だったしな

まぁ例外もあるっちゃあるけど・・・

「まぁ結構君も街じゃ浮いてたけどね。リッドクルスにいた時とか」

「うあ、マジでか・・・。いや確かになんか周りの目線がたまに俺に向けられていたような気はしたんだがまさかそういう理由だったか」

そう言えば周りに黒髪の人が全く居なかったな

「そ、それよりもあの、たまの話を・・・」

「む、そうだったな。あの宝玉についてどこまで知っておる?」

「えーっと・・・たしか黒騎士ってのが作った魔道具とかなんとかってくらいしか・・・」

「そう。過去幻(かこげん)の話というのは知っているかね?」

その単語はどこかで耳にしている

そう、ガッドさんの説明の中にあったような気がする

「過去幻の話？そういや耳にはしてますけど何のことなんですか？」

おじいさんはうむと首を縦に振って話し始めた

「過去幻の話というのは正式には過去幻の書という書物の中にあるものを差す言葉じゃ」

おじいさんは立ち上がって横にある古ぼけた書棚の中にあった書物を一つ手に取った

埃をパンパンと払ってその本を開いた

「たとえばここには一つの物語がのっておる。過去幻の書に記された無数の物語のうちの一つ。このように過去幻の話の一部は一般の人でも普通に知ることが出来る。一部はな」

「ですけど原文はもちろんあるんでしょう？」

「もちろんだとも。原文は今行方不明なのだ」

「行方不明？」

「以前はイリーユという中原の国に合ったのだが昔の大戦で行方不明となってしまったらしい」

「大戦・・・あぁ、戦争かぁ。物騒な世界だよなぁ全く」

とはいえ普段は流石にそんなことはしていないであろうはずなので一応均衡的なものは保たれているといってもいいのだろう

「その過去幻の書の話の一つに黒騎士という伝説上の人物、まぁ実物が存在する以上伝説というのもおかしな話なのだがその男が見る者を虜にするほど美しいいくつかの宝玉を作ったという。世間では一般にそれを純色宝玉と言い、またそれを宝玉コレクションとも言う」

おじいさんは本をめくった

古びたその紙に絵が乗っていた

黒い髪

黒い服

黒い目

本当に全身黒ずくめの男が両手で大きな球体を天高く掲げている様子が描かれていた

球は虹色に光り輝き、その男の腰には鞘に収められた剣がぶら下がっていた

「だがな」

おじいさんは続ける

「儂はこの呼び方はふさわしくないと思うておる」

「呼び方・・・ですか?この純色とかコレクションとか?」

「考えても見ろ。儂等が受け継いでおった黒玉。黒は純色ではないのじゃからな」

「あっ・・・」

純色には黒や白は混ざらなかったはずだ

色相において最も彩度、つまり鮮やかさが高いもののことを純色と言ったはず

黒の宝玉がある時点でこれは純色とは呼べないはずなのである

「で、でもそれじゃぁなんで訂正しないんですか?」

「現段階で公に公表されておる宝玉は6つ。紅玉、蒼玉、黄玉、翠玉、空玉、紫玉。赤青黄薄緑に水色紫。非公式を含めると黒で7つか」

「ちょ、え？これはずっと公開しないで隠し続けてたんですか？」

「無論。それを持つ者で公開しておる者は大抵が国や貴族などといった者。我らのような権力的にも武力的にも弱者な我らがそれを世間にあかせばいろいろと不味いことがおおかろう」

そうか。たしかにそうかもしれない

国がほしがるほどの宝

そしてそれをもし一般人が持っていると知られた場合、それを奪おうとする輩も出てくるだろう

奪って金にすれば一生遊んで暮らせる金が手に入るかもしれないのだから

「で、でもアルデリアからは黒玉の譲与の催促が来てたって事はあっちは黒玉があることを知っている・・・ってことですよね？」

「うむ。だからいつ取り立てにやってこようとも手元に無ければおとなしく下がってくれると思って持たせておいたのだ」

おじいさんはツキの方を向いた

その結果は言うまでもなかったが

でもだからさっきあんな事を言ったのか。ホッとした、悩みの種、と

「先ほど儂は純色という名が相応しくないと言ったが、ならば儂はそれをなんと呼ぶことにしたか」

「あ、そういや純色じゃ無かったんですもんね」

ならば何と呼ぶことにしているのか

「この話にはもう一つ続き、いや、先ほどの話の前につく話があっての。『剣は空を裂き、玉は空に架け橋を繋いだ。その先の闇を照らす架け橋の光りは絶えることなく輝き続け、そして空へとかかる架け橋を登り、消えていく古の精霊達』という一文がある。本当にごく一部抜粋じゃがの。仮説だが剣は精霊の国とをつなぎ、道を造ったのは宝玉。他の話にも関わったりするがここに現れる精霊達は黒騎士によって助けられた精霊達で彼らは今もこの地を守る守護精霊ではないかと儂は思っておる。そのためには精霊に証言を取らねばなるまいが精霊なんぞに会えるはずもないの」

俺はその一人、いや二人に心当たりがあった

水の地の守護精霊、そして炎の地の守護精霊

俺は鳥肌が立った

何故だろう

各地に在る精霊台

おじいさんが言うその空の切れ目の裂きに在る場所

抜け落ちた世界

この世界に放り出された精霊

虹龍の主であったという騎士が張った精霊台の膜

宝玉を作り出した黒騎士

これは、この話はもしかして・・・・・・

「儂はこれを精霊宝玉と呼ぶことにしておる。ネーミングセンスあるかの儂？安易すぎた名前じゃったかのぅ？」

おじいさんはお茶を啜った

『来訪者』

大陸の北方、一年中雪が積もる小さな村がありました

過去にこの村から旅立った一人の少年が英雄になったことから、其処は英雄が生まれる町と昔から言われるようになったのです

村を苦しめていた巨大な魔獣を打ち倒し、その村には英雄が使ったとされる剣が納められた

それからというもの、村では毎年魔獣を倒す英雄の演劇が行われるようになった

始まりは英雄を模した仮面と服、そして納められた英雄の剣を使って彼らは祭りを盛り上げた

そしていつしかその村では英雄を目指す者達は決まって仮面を付けるようになった

仮面はいつしか英雄から昔から村の守り神であると言われる氷鳥、グリシェという魔獣を模すようになった

ですが村はいつしか吹雪にのまれ、人の温もりは徐々に消えていきました

英雄を生み出すと言われた村を再建するために、一人の若者がその地を旅立ちました

英雄が振るったとされる剣を持ち、村を救う英雄になろうという思

いを込めて氷鳥の仮面を被り各地を巡りました

そして気がつけばどこか遠く、雪が積もらぬ大陸の南の方までたどり着きました

お金を貯め、そして脚を止めたその場所で彼はまた一つ大きな儲け話に出会いました

それは水の国、アルデリア王国での出来事でした

いや・・・まだここで結論は出せない。うん。

桜彩輝はお茶を一口飲み干した

これまでの話、何故か一つに繋がりそうな気がする

だけどそれを今ここで結論が出せるものではない

出せるものではないが心にはとめておく必要がある話だとは思っている

精霊がこちらの世界に来てしまい

騎士が空を切り裂いて、玉を使って道を造った
虹龍が騎士に力を貸してそこに膜を張った
そこが精霊台と呼ばれる場所
いやでも精霊台は空にはない
ちゃんと精霊台は地面に接していた
精霊台のある場所は城のすぐ横の精霊殿
精霊殿は一階しかないとはいえ高い丘の上に在るため城下を見渡すぐらいの高度にはある
地面に接しているその場所は空ではない
城もその大きな丘の上に建っている
考えても答えは出ないしすぐさまそれが帰るヒントに繋がるわけではない
ただこれはそのヒントになりうる情報でもある
今のところ考えられる方法としては無、レ・ミリレウの内側からあちらの世界への壁をこじ開けて其処に魔力を張って扉とする方法
これはあの虹色の龍がやったという方法と同じだろうと俺は思う
こちらの世界から無への扉を作った

ならば無からあちらの世界への扉を作れたとしても不思議ではないからだ

だがそんな魔力も術者も方法も全く分からない今、それに頼るよりかはもっと現実的な方法を探すのも一つ

とりあえずありとあらゆる方法を模索していく必要があり、その方法を探す上で材料として使えそうなものを俺は一つ見つけている

かつて黒騎士が作ったという宝玉

その宝玉の使い道は分からないがパズルのピースの一つとなってもおかしくは無いはず

それだけの力はあると思う

「だけどそうなったら全部集めないといけないしなぁ・・・。でも一つも手元にないしその数も不明だし・・・」

だから俺は心の中にとどめておくだけにしておいた

これを集めるとなったら途方もない話になるからで、しかも国や貴族がそう易々と渡してくれるとも思えない

小説とか漫画とか、あんまり貴族って良いイメージが無いんだよなぁ

大抵傲慢で私利私欲に走るようなお金持ちのイメージが俺の中では

強かった

まぁ悪い人ばかりでは無いと思うんだけどなぁ・・・

所詮小説は想像であって事実ではない

「お話中失礼するよ」

と、突如木製の玄関の扉が開いた

外の光りと一緒に入ってきたのは一人の男であった

3人は一斉に扉の方を向いた

突然の来訪者にツキもおじいさんも驚いているようすだった

「すまない。本当は外で君を待っているつもりだったんだが」

そう言って男は俺を指さした

俺？

俺を待つと言うことは俺が誰かって事を知っている者の可能性が高い

そして帰ってきたばかりの俺の居場所を知っていること

それは俺たちを尾行したと言うことか？

俺にいったい何の用なのだろうか

「立ち聞きする気は無かったんだ。だが何というか聞こえるものは仕方ない。それになかなかおもしろそうな話をしていてね」

男はそう言って歩み寄ってきた

男は紅い髪をした男で身に纏ったボロボロの布きれを脱ぐと下からは高級そうな服があらわれた

それを見ただけでお金持ちなんだなぁと思ってしまう

「あの・・・いったいどちら様で・・・？」

ツキが紅髪の男に問いかける

男はおっとすまないと言って軽く会釈する

「私は三大貴族の一人息子、ただいま修行のみであるエフレル・トルロインと申します」

「トルロイン！？三大貴族だとぉ！？」

おじいさんはガタンと椅子を引き勢いよく立ち上がる

三大貴族？貴族のお偉いさんなのだろうかこの人？

「えぇ。だけど今は僕の身分なんてどうでもいい。おもしろい話をしていたね」

「宝玉の事か？」

「えぇ。面白い。実に面白い。最初の方から聞いていたつもりだけどなかなか楽しそうな異世界ライフを送っているようだねアヤキ君は」

楽しくてたまるか！とは言えないので俺は相手を薄目で睨み付ける

「ゴメンゴメン。少々調子に乗りすぎたよ」

「俺に用があるなら外で待ってれば良いでしょう」

「んー、そうするつもりだったんだけどね」

「お主の目的は大抵己の商い関係だろう？」

おじいさんがそう言って椅子に座った

紅い髪のエフレルという男は口笛をヒュゥと鳴らして手を叩いた

「ご名答！よく分かったねー・・・ってそりゃそうか。こんな家系だもんな。さて、何故僕が外で待たずに中に入ってまでこの会話に参加したかったかってことなんだけど・・・本題は其処だよ」

「どういう事ですか？」

「直球で言うよ。僕は宝玉を一つ持っている」

「！！」

全員の目が見開かれた

持っている？宝玉を！？

「そう。情報公開はしてあるけど誰も近づけないようにちゃんと保管はしてある。商業関係で手に入れた品なんだけど正直こんな話を聞いちゃったらあげたくなるんだよね。こっちには使い道無いし」

エフレルが言うには持っていても仕方がないから譲ってあげてもいいよという言葉だった

「ただこちらも高価な品を只で渡せないよね。ねぇ、ちょっと頼みがあるんだけどいいかな？」

「頼み事・・・ですか？」

俺に頼んで出来るようなことなんてほとんど無いとは思ったが男はどうも俺の腰のあたりを見ていた

俺もその目線を追ってみて腰に提げた短刀を視界に入れた

「その短刀。守り刀？ちょっと見せてくれないか？」

初対面の男にそう易々とソーレを渡せるわけがなかったが別に俺たちに危害を加える気はなさそうと見て俺は渋々鞘からソーレを抜き放つ

「ほぅ・・・なかなかの業物だ。いいね。実に良い」

受け取ったエフレルはそう言って数歩下がると右手でソーレを軽く振った

ヒュゥンといい音が響いた

男のその振り方からこの男もそれなりに剣を振るったことが在る人間だと確信した

「実に良い品物だ。一体どこで手に入れたのか・・・これなら軽く見積もっても銀貨、いや買い手にによれば金貨レベルまで引き上げて・・・・・・おっと、まないね。商いばかりやっているとどうもこう物を商品として見てしまうよ。あまりに上物だったのでね」

「い、いえ・・・」

エフレルはそう言って剣をいろいろな角度から眺める

「誰の作だろうか・・・。良い職人だよ全く。譲って欲しいくら――――」

「だめですよ」

「・・・・・・・・あぁもちろん分かってるよ。分かっているともさ。さて！」

エフレルは手をパンと叩いた

「近々僕の方から君に連絡を入れるよ。それまで楽しみに待っていると良い」

「何を・・・ですか？」

「それはそれまでのお楽しみ。まぁ何をするかだけはすぐに君に教えるつもりだよ。君は城に居るのかい？」

「え・・・っとたぶん居ると思いま・・・あ、でも確か家があるとか・・・でもすぐに入れるとは限らないかもしれないし・・・。とりあえず城で」

「わかった。それじゃぁ僕は忙しいからこれで。突然おじゃましてすいませんねルベルさん」

エフレルはそう言って会釈をすると再びボロボロの布を身に纏ってその豪華な服を隠した

「じゃぁアヤキ君。また近いうちに合おう」

「え、あ、はい」

とっさに返事をしてしまったがエフレルは首を縦に振って身を翻したドアを開けて外に出るともう一度お辞儀をしてドアを閉めた

「・・・・・なんだったの今の？」

「さぁ？」

結局彼は何をしたかったのだろう？

俺とツキとおじいさんは首をかしげて彼が出て行ったドアをしばらく眺めていた

「なかなかに良い業物だ。まるで心が宿っているかのように感じたよ。さて、船を出してくれ」

エフレルはそう言って船漕ぎの男に言った

家の前に止めてある船よりかはもう少し大きい自分専用船である

市民は普通に自分で船を漕ぐのだが、たまに貴族や王族がこれを使用する

金さえ在れば雇うことも出来るから便利で貴族達や王族には専属で一人や二人、船漕ぎと呼ばれる人がつくのである

「お家に帰られるので？」

「あぁ。頼む」

そう言ってエフレルは船に乗り込んだ

船が若干左右に揺れ、船漕ぎは止めてあったロープを杭からはずした
貴族達が乗る船は基本ダトルが引っ張る船である
ただダトルが通れるのは大きな水道だけであってこういった小さな
水路にまでは入ってこれない
そういう時に船漕ぎ達が役に立つのである
彼らはダトルを操ることも出来るため非常にエフレルは重宝していた
何せこの水の国の王都アクリスはほとんどが水路
大きな道路も含めて水路も商品等の運搬に使うためこういった人たちは多めに雇っている
ただ彼は移動の時専用の人だけれど
「いやいや、帰る途中で思わぬ人に出くわしちゃったよ」
「あの少年がどうかしたんですかい？」
船漕ぎの男が船を漕ぎながら聞いていた
両手でオールを操りながら船を進める
「そうだね。強いて言えば宝箱ってところかな？」

「おや、貴方がそういうことを言うということはかなり凄い男だったんですか？」

「あぁ。文字通り、彼の頭の中は金銀財宝がザックザック詰まってるのさ。今後が楽しみだ」

エフレルはそう言って振り返ることなくボロきれにくるまって船に揺られていた

そして日がちょうど頂点にさしかかる頃

俺はツキの家の前に立っていた

「ありがとうございました」

あの後あの人がどんな人だとかいう話を聞いたりしていた

実は三大貴族と呼ばれる大金持ちだったりとか商人をしている人だったりしたらしい

どうりでおじいさんが驚いていた訳だ

まさか家の中に突然貴族が入ってきたわけだしね
でもあの人はあんまり嫌われてるって感じでは無かったなぁ
所詮俺の思い描いていた貴族は想像上の偏見だったわけだし
そして俺は今から王都の中央へ向かうことにした

「短い間でしたけど楽しかったです」

「えぇ。こっちもよ」

出会いもあれば別れもある。あのおじいさんに薬を渡すためにツキはこのアクリスの家へと戻ってきた
そして俺も戻ろうと思う場所が合ったからこそ、ここに戻ってきた
別れは辛いけど、また出会うことも在るかも知れない
その時に笑って再会できる年の近い友人を作ることが出来たのは良かった

「それじゃぁ」

「じゃ。また合おう」

「うん。また」

俺は待たせてあった船に乗り込んだ

どうやらタクシーみたいな物らしい

ツキの姿が見えなくなるまで俺は手を振った

ふぅ・・・。別れか

なんだかピンと来ないなぁ

何でだろう。心のどこかでまた合えると思っているからだろうか

何にせよ、俺は俺の行くべき場所に行くだけ

しばらく合ってないから忘れられてないといいなぁ

俺はこの世界に来た当初の頃を思い出した

いろんな人にお世話になったよなぁ・・・

「お兄ちゃん、さっきのは彼女かい？」

「ぶっ！？ち、ちげぇよ！？」

突然船漕ぎのおじさんに聞かれて俺は裏声を出してしまった

おじさんはクックックと笑っている

うぅ、畜生

なんなんだよこの後味の悪さ・・・・

俺はゆらゆらと船の上で揺れていた

『暴走突然』

その剣に名は無かった

いや、名は過去にはあったのだろう

だが施されている文字が精霊文字では読むことも出来ない

精霊文字は精霊が作ったとされる文字であったが精霊はこちらの世界に長くいると体力などを多く消費してしまうためこういった文字の解読をすることはなかった

だがこの世界で人とは違い、文字を生み出し使うことが出来るのはだれだ?と問われたら迷わず精霊と皆が答えるだろう

人型でありながら人でないその生き物は人間と同じく知識をもち、言葉などを使って話もする

それだけで勝手に人々はこの文字は精霊文字と名付けられた

精霊が読めないのに、だ

とはいえ他に呼び名が無いため皆はこの文字を精霊文字と言う

読めないのなら、この剣に新しく名を付けたらどうだろう

そう言ったのが剣の持ち主であった英雄だ

英雄が生きていた時代はまだ、森は雪には覆われていない場所であ

ったという

最初英雄は樵をして森の手入れをしていた男だったという

その男はある時、空から落ちてくる人と魔獣をみたという

魔獣は大きな尾を持ち英雄と空中で何度も交差しながら戦い、そしてボロボロになった両者は同時に地面に叩きつけられた

魔獣は大地に叩きつけられ、男は木が僅かにクッションとなり命を取り留めたそうだ

落ちてきた男は最後の力を振り絞ってその魔獣の魔力が溜まった尾を切り飛ばし、その顔に剣を突き立てた

すると魔獣の体は徐々にひび割れ、最後に魔獣は巨大な石の塊へとなってしまった

男ははすぐさま落ちてきた男を介抱し、男はみるみるうちに回復していったという

そして男は助けてくれたお礼にと身につけていた二本の剣のうち一本を渡した

この剣はこの地に封印した魔獣を縛り付けるための剣

故に我は持ち歩けないと男は言った

剣を守り、この地をこれからも守り続け、この地に平和と安息を

男はそう言ってフラフラと血で真っ黒に染まった服を着てどこかへ
と消えてしまった

「は、入れない・・・と言うことですか？」

「当たり前だろう！」

俺は今、城の正面の水門のところにいた

目の前の石台に乗って左右に二人の騎士が居た

その騎士は俺の前で槍を二本交差させて通すまいと道をふさいでいる

「一般市民が城に入るときには許可状を提出して頂かないと」

・・・許可状？

っていうかせっかく戻ってきたのに入れないってどういうことよ？

その辺の手回しぐらいしててもいいじゃないか

城の領地は大通りの四方大水路と繋がっており、其処には巨大な金属の柵がしてあった

柵の間からは水がきちんと流れておりせき止められることはなさそうである

その柵の前で俺は悩んでいる

どうしたものかな・・・

門番に知られていないってことは俺を知っている人に入れてもらうしか方法は無いって事だよな

だけど俺を知っている人なんてほんの一握りのお偉いさん達だけ

城までは遠いし声も届かないだろう

かといってこんな場所に都合良く隊長や王族が出てくるとも思えない

「よく見ればお主、黒髪とは一体どこの出身だ?」

「うぇ!?・・・っと・・・遠いところです」

嘘はついてないよ。嘘は

だけど

「怪しい奴だ。許可状も無しに城へ押しかけるとは・・・」

「帰れ帰れ」

うぐ・・・なんか前にもこんな事合ったような無かったような

そんな記憶もまだ新しい

あの時は確か散々コケにされて引き返したんだっけか

そして何故か捕まって縛られてご入城したんだっけか・・・グルグル巻きにされて

まさかあんな方法で城に入ることになろうとは全く予想だにしていなかった

許可状・・・は・・・・無いもんな・・・

ん、そう言えば許可状は無いけど別の物が合ったはず

「ちょ、ちょっと待っててくださいね」

俺はすぐさま前にソーレを入れていた袋の中身を漁り始めた

あれからソーレを入れる必要が無くなったため、自分の持ち物を入れるバックにしていたのだ

「あったあった。これこれ」

俺は一枚の封書を取り出した

ぺったんと押された押印を目立つようにして二人の前に俺は突き出す

「なんだこれ？」

二人は小舟に乗る俺が持つ封書を確かめようと前のめりになる

俺は大通りに出た後大きなダトルの引っ張る船に乗り換えた

四方大水路は川上から流れてくる元々の川、そして左右の山脈から流れてくる二つの川、計３本の川が王都中心の城のところで交わり南へと流れていくようになっている

城の周囲はその川のおかげで濠のように囲まれている

俺とツキが入ってきたのは街道が繋がる南の大水路

故に川を通るにはほぼ逆流の中を昇っていくことになり、手こぎでわたれるのは小さな水路のみなのである

流れを遡るにはダトルが必要不可欠であり、俺もそれにのって城の近くまで来たはいいがおとなしくても大きな魔獣はあまり城に近づけることが出来ない決まりらしい

まぁ暴れたりしたら危ないしね

そんなわけで近くまで行くには少しばかり小舟で頑張るしかない

アンカーをおろして船を流されないようにして、その上で俺は今こうして交渉していた

俺が袋から出して突き出したのはアルフレアさんから預かった書状

其処にはグレアント王国が正式な書状や書類などに使うための真っ赤な押印がされている

とっさに自分が使者だと言うことにしておけばこの場は通れるんじゃないかなと思い俺はこれを突き出して自分を指さして

「俺使者。グレアントの」

とか言ってみるも男達は疑い深い目で俺を見てくる

ま、そりゃそうか

「本物ですよ」

男達はまだ俺を疑い深い目で見ている

さて、どうした物か

本物だとしてもそれを妙な奴が持っていたらそりゃぁ信じられないだろうなぁ

「あ、そうだ。これを一応ファルアナリアさんに渡してください。それで誰がって聞かれたらアヤキ・サクラって人が持ってきたって伝えてください。そしたらたぶん入れてくれると思うんで。我ながら天才！」

よく思いついたな俺！！

ん？そうでもないのかな

「ふむぅ・・・本当かどうかは我らでは判断しかねるな。本当ならば正規の使者が来るだろう」

男は悩んだ

これが正規の使者だとするならば中に入れておきたいところだが普通こういった使者の事は鳥の脚につけた手紙で事前に知らせなどが来るはずである

それが無く、またどこからどう見ても正規の使者とは思えない男が書状をもってきた

それにこの口調

下手に中に入れるのは良くない

だが本当に使者だった場合、男に対してあまり無礼な態度を取ったら後が恐い

とはいえ誰かも分からない輩が持ってきた書状を直接王妃に見せて良い物だろうか？

それ以前にこの書状は本物だろうか？

目の前の男が使者には全く見えないのでそれが本当に本物なのかどうか男としては判断材料に困るところである

信用できるもの根拠がほとんど無い

どうしたものか、と門番二人は顔を見合わせた

ちょうどそのとき、流れてくる水の中に、尖った木の枝が流れてきた

するりと城門の柵を通り抜け、彩輝の乗る船の真下を流れ抜け

そしてその木の枝は後ろで待機していたダトルのひれに突き刺さった

ダトルのひれは堅く、普通は木の枝などは刺さらないはずだった

だがひれの先の爪の裏

その僅かな隙間は唯一ひれで堅い皮膚には覆われていない場所であった

運悪くその隙間に刺さり、しかも爪にも引っかかって簡単には取れなくなってしまったのだ

「クォオオオン！！」

突如背後で上がった水しぶきとダトルの鳴き声に俺は振り向いた

船漕ぎのおじさんがオールを持ったまま空を飛んでいた

ぽかんと口を開けたまま何が起こったのかを理解する前に頭から川に落ちていった

「な、なんだぁっ！？」

「うぉっ！？」

「ひぃえっ！？」

高く昇った水柱の中心に居たのは彩輝が乗ってきたダトルがいた

門番二人も何事かと飛び上がりながら目の前で吹き上がった水柱に驚いていたが、すぐさま槍をダトルに構えた

「え・・・・え・・・・・！？」

衝撃の展開について行けない俺

そんな俺に向かって猛スピードで突っ込んでくるダトルの小さな目には理性が感じ取れなかった

な・・にが・・・・・！？

俺は我に返ってとっさに横っ飛びに船を飛んだ

船は岸近くまで寄せてあったので何とか陸地に飛び乗ることが出来た

次の瞬間には俺が一瞬前まで乗っていた木の船は木っ端微塵に吹き飛び、ダトルは柵に突っ込んだ

大きな音をたてて金属の柵は大きく変形して曲がっていた

その柵の一本一本の太さはおおよそ直径１０センチ以上はある太い物でそれが大きく凹んだ光景を目の当たりにして俺はゾッとした

門番の二人もその衝撃で尻餅をついていた

そんな俺もダトルが柵に門にぶつかった衝撃でバランスを崩してすぐにはたてずにいた

一瞬遅かったら骨折とかじゃすまなかった

冷や汗がじわじわと出てくる

一撃で門があそこまでひん曲がるぐらいだからな

「こ、これ以上暴れるようならば貴様へ攻撃する！！」

門番の一人が槍を構えてダトルに向かって叫んだ

ダトルはゆっくりとひしゃげた柵から頭を抜き、ゆっくりと後ろへと下がった

だが言葉が聞こえているというわけではなさそうでその目には未だ何も映ってはいない

「このまま暴れさせて水路を暴走させるわけには行かないんだよね・・・」

乗り気じゃない俺だったが真顔でつぶやく

他には誰もいないしこのまま水路へ逃がしたら被害が酷くなりそうだ

っと、その前に俺はおじさんの救出に回った方がいいかな

「少しばかり気を引いておいてください！！」

俺は二人の兵士に向かって叫んで上着を脱いだ

二人の門番は俺が何をしようとしているのかは分からないと言った顔をしていたが首を縦に振る

「よし！！」

そして水の中へと飛び込んだ

一気に周囲の喧騒が消え、代わりに水の流れる音を体が感じ取る

緩やかな流れとはいえ、油断したらダトルの攻撃の矛先が俺に向かってきてもおかしくはない

すぐにおじさんを助けて水の上に戻らなくては

水上から見る限りおじさんはどうやら気を失っているらしく、水にもまれながら流れていくのが見えた

すぐに下流に向かって泳ぐ

流れが緩やかだったおかげかすぐにおじさんに追いつき、俺はおじさんの手を引っ張って岸へと泳いだ

見物人の人に手を貸してもらって岸までおじさんを引っ張りあげると俺は城の方へと向き直る

此処から門のところまでは川の護岸の用になっていて走っていけるようであった

任せた以上は戻らないといけない

おじさんはすぐに口から飲んだ水をはき出した

とりあえず意識は在るようでふらつきながらもおじさんは壁に自力でもたれかかった

俺はすぐさま城の方へと向かって走っていく

そしてソーレを抜いた

さっきダトルを水面下からみたとき、後ろのひれの爪の隙間に木の枝が刺さっているのが見えた

恐らくあれが原因だ

チル・リーヴェルトは自室で書類に目を通していた

龍がこの王都を襲来して彼が連れ去られてからというもの、私にもいろいろと面倒くさい書類が大量に回ってきた

とはいえまだ文官達よりかは半分ほどの量ではある

あれから王都の修繕や警備体制の強化やらでいろいろと忙しかったのだが隣のグレアント王国で警備体制の解除とアヤキ・サクラの無事という吉報が同時に舞い込んだ

それからは通常勤務態勢に移し替えたのだがまだあの事件のことは城下では騒がれている

龍撃退の行賞として私と副隊長のアルレストは多額の褒賞金を受け取った

だがそんな物は街の修繕費に全額をあてた

一人の少年が龍に連れ去られたというのに、私たちにはそんな物をもらう資格はないと思ったからだ

とはいえ国の方からは何かしら形のある恩賞を与えなければ周りの信用度も落ちるというもの

何も褒賞金を寄付に回したのは私だけではなく、アルレストも同じようであった

最初は彼が真っ先に彼を追おうとしたのだが私とファルアナリアさんはそれを止めた

彼は龍の攻撃を喰らって追いかけなど無謀すぎる傷を負っていたからだ

方角、そして龍の種類の生息地からみて行き先はオラージュ山脈方面だろうということは容易に分かった

そこで特別に魔力が完全に回復していない水鏡を使ってグレアント王国へと連絡を取った

幸い彼はそこで保護されたと後々伝書鳥の報告で分かった

それを聞いて全員がホッとし、それと同じくらいに皆驚きを隠せなかった

龍なんかにさらわれて彼が生きている望みはかなり薄いと思っていたからだ

しかも無傷ときたものだから一体何をしたのだろうとすら思った

そして再び伝書鳥によって彼がグレアント王国を発ったという知らせが入った

そういえば王妃は迎えを祝うとか言っていたがちゃんと門番には彼のことを知らせたのだろうか？

まだ彼の事はほぼ城の重要な関係者と三大貴族ぐらいしか知らないだが門番だけには言っておかなければ追い返しをくらうかもしれない

彼は黒髪黒眼で周りからみてもちょっと怪しい人物ではある

そんな彼が城の水門の前で引き留められることは・・・・十分あるな

王妃が伝え忘れていなければそれで問題は無いのだが城門警備は確かアクアサンタ騎士団の管轄でもある

ありゃー・・・こりゃ失敗したなー。

もしかしたら言ってなかったのは不味かったかもしれない

とりあえず門番に言いに行ってみるか。書類も片づいたし。

早く到着してればもしかしたらすでに追い返されているかも知れない

そんな彼が城の他に行くところは他にない

龍襲来の日に溜まっていた最後の書類に判子を押して机の引き出しにしまって立てかけた蒼天駆を手に取った

城内帯剣帯杖は隊長、副隊長、そしてその下に位置する五師団の師団長のみの特権である

ただし王との謁見の場合だけははずさなければならないが

チルが脚をかけたのは窓

解錠したのは窓の鍵

窓を開け放ち、涼しい風が入ってくる

白く、真っ直ぐな髪が綺麗に太陽の光を反射する

窓枠に手をかけ、そして椅子にかけておいた隊長を意味するマントを片手に握りしめ

迷うことなく、それが当然といわんばかりにチルは自室から飛び降

りた

真っ逆さまに

城内と城の前との間にある水路基川は敵の侵入を拒むためとはいえ、周りを全て水で囲まれているこの城の長所でもあり欠点でもある

そんな濠を蒼天駆の力を使って空中に足場を作って城門である水門へと向かおうとしていたが透明な足場のすぐ下に小さな可愛い魚が泳いできた

濠、水路とはいえほとんど川と変わらないためこういった水生生物も多数居て彼らはきちんと生態系を作っている

「かわいいなぁお前等」

たまにチルは気分転換に足場を作って釣りをしたり魚や鳥に餌付けなどをしていたりするため勘違いした魚が寄ってきたのだろうか

「だけど今回は餌も何ももってないのよね。まぁ近いうちにまた来るよ」

そう言い残して前方に足場を作りその上を歩いていく

そのとき、突如大きな音と共に前方で巨大な水柱があがった

空中にいたため地面は揺れなかったものの、空気の振るえと水がざわめく様子を見てただごとではないと思ったチルは様子を確認するために一端上へと足場を作った

水面ギリギリの場所に足場を出していたためその水柱が水面に落ちると少し大きな波となってこちらに向かってきた

とはいえこの程度なら城へは届かないだろう

城事態は中州のような場所の丘の上にあり、そのうえ築いた石垣の上に建っているため被害はほとんど無いはずだ

それよりもこのままでは正面の様子がよく見えないし押し寄せてくる水は確実に自分を捕らえるだろう

上に足場を沢山作り、それに飛び移りながら上を目指す

すぐに押し寄せる波よりも高い場所についた

そこから見えるのは大きく曲がった城の水門

巨大な何かがぶつかった?

でなければあんな曲がりかたは・・・

「おいおい、何をどうしたらああなるんだよ・・・」

あの水しぶきは水門のところに何かがぶつかった時に吹き上がった
と考えるべきだろう

チルは足場を前方に作り走り出す

そしてすぐに水門のところまでたどり着く

柵は酷い有様で取り替えなければ使えそうもないぐらいに曲がっていた

そんな巨大な柵を曲げたのは恐らく目の前にいるあのダトルだろうか

船漕ぎの主は乗っていない

逃げ出した、あるいは暴走して船漕ぎ主を落としたか・・・

どちらにせよこのまま放っておくわけにもいかない

とはいえあんな巨大な生物をどうするか

流石に殺すわけにもいかないがかといって野放しには出来ない

柵の前には二人の門番が門を守ろうとダトルに向けて槍を構えているが肝心の対象は水の中

槍なんて全く届かない

巨大な生物を止めるのはこういった兵士よりも魔術師の方が向いている

眠らすことも出来れば周りを囲って動きを止めることも出来る
自分がダトルを足止めしている間に誰か魔術師を集めてこなければならない
と、そこへちょうど良いところに城内で警備をしていた兵士が二人城から出てきた

「おい！今すぐに魔術師団長を呼んでこい！」

大きな声でその二人に叫ぶと二人は同時に城内へと戻っていった

「よし、後は時間稼ぎだ」

チルは剣の柄に手を添えた
そこでチルは目の前に現れた少年を見つける
びしょびしょに濡れて上着を着てはいないもののあの黒髪と黒目を見間違えるはずは無かった
にやっと笑ってチルは折れ曲がった柵の上に着地した

「やぁ、少年。久しぶりだな」

そんな声をかけられて、俺は柵を見上げた

まだ水路のど真ん中で暴れているダトルすら気にならないほど、彼女の存在は大きかった

最初に合ったときとはまた違う雰囲気を俺は感じていた

白い髪が日光を浴びて輝く

その神々しい雰囲気で俺を見下ろしているもんだから俺はついそれに見とれてしまった

我に返ったときにはすでに彼女の視線は俺からダトルに向かっていた

門番の二人も国の騎士団の隊長であるチルさんが来たことでホッとしているようであった

「さぁて、何があったかは知らないけどちょっと大人しくしていて欲しいんだけど・・・」

ダトルは我を失って暴れている

チルさんの声も届かなければ意味も分かっていないだろう

チルさんはダトルが大人しくならないのをみて蒼天駆の柄に手をかけた

「おとなしくしてくれないんならちょっと強制的に黙らせるよ？」

アクアサンタ騎士団隊長チル・リーヴェルトは剣を鞘から抜きはなった

『隊長二人』

男が村を去ってからというもの、剣を預かったその若者はその剣に名前を付けることにした

これから自分の相棒として使われるであろうその剣、そして代々この地に受け継がれていくであろうこの剣にせめて名前を授けようと若者は一昼夜悩み抜いた末、その剣にシリトクルバという名前を付けた

かつて若者にはシリバと言う兄、そしてクルトという弟がいた

だがその二人はすでに事故で死んでいた

その二人の名前を剣に付け、いつまでも我と二人が愛したこの村を守って欲しいという願いを込めたのだった

そしていつの間にか、かつてこの森に落ちてきた男が魔獣を封じた場所には巨大な岩が出来ていた

その岩の前に一つの祠が建てられた

男はこの剣はこの地に封印した魔獣を縛り付けるための剣と言った

ならばこの地にこの剣を祀り、村の守り刀として崇めよう

そしてこの剣はこの村の守り刀となった

それから数ヶ月後、この村に猛暑と冷害が襲った

猛暑は大地を枯らし、冷気は全てを凍てつかせ、村の活気は徐々に減っていったという

そこで若者は祀られた剣を片手に、熱波と冷気が強く吹いてくる森の奥へと入っていった

森の木はカラカラにひからび、草木の葉は冷気によって霜が降りていた

その奥に居たのは2匹の魔獣であった

そして2匹の魔獣はかつて封じられた魔獣を封じた岩に向かって熱波と冷気を放っていた

岩ノ下から漏れ出す魔力に引きつけられたその2匹の魔獣に向かって若者は剣をかざす

かざしたシリトクルバは神々しい鈍色を宿し、2匹の魔獣はその若者とシリトクルバへ向かって熱波を、冷気を浴びせた

だが不思議なことに、その熱波と冷気は瞬く間に若者の持つシリトクルバへと吸い込まれていった

そして2匹の魔獣の首を若者は切り飛ばし、かつて空から振ってきた男と同じようにこの地に2匹の魔獣を封じ込めたのである

だが代償も大きかった

若者は2匹の魔獣と相打った
完全に殺しきることが出来なかった若者は仕方なくこの地に封じ込めたのである
それと同時に若者の命は尽き、小さな祠の前で息を引き取った
そう。男が旅立ったのはこの世界とは別の場所
その若者が英雄と呼ばれるようになったのはその頃からである

こうして彼女の姿を見るのは龍にさらわれたあの日以来である
全く変わっていない姿を見て、俺はなんだか居るべきところへ帰ってきたという感じにさせられた
だがそれはきっと幻想で、本当にそう思えるのは元の世界に帰ったときだろうと俺は思う
だけど目の前にいる人を見た瞬間に安堵感がわきあがってきたのもまた事実

「時間稼ぎだ」

「はい？」

「こいつは腕力で止められるような奴じゃないからな。傷つけるわけにも行かないし今魔術師を呼んだからそれまで逃げないように持ちこたえるぞ」

白髪の女性はそう言ってふわりと水面の上に着地した

恐らく其処には自分しか乗れない透明な足場があるのだろう

「さて、何故こうなったのか聞かせてもらおうか？」

チルはそう言って後ろにいる門番に聞いた

「わ、分かりません！」

「二人で其処の少年と会話をしていたら突然あのダトルが暴れ出して・・・」

「突然？妙だな」

俺はその近くまで出来るだけ駆け寄った

「あ、あの、さっき潜ったときにヒレに枝が刺さってるのが見えたんですけどそれじゃないでしょうか？」

俺は思い当たるふしを言ってみた

「あの堅い皮膚に枝？いや・・・・爪の裏は確か肉質が柔らかかったはず・・・。どうやらそれが原因らしいな」

だから濡れていたのか、とつぶやいてチルは目の前で暴れるダトルから目をそらさずに俺、そして門番二人に指示を出した

「いいか。今から私はあれの気を引く。アヤキ君は少し離れていてくれ。君に出来ることは今は何もないからな。お前達二人は至急この曲がった門を開けられるか試してくれ」

俺は仕方なくその指示に従った

あれに近づけば命の保証は出来ないし他に出来ることが無いと自分でも分かっていたからだ

門番二人はすぐさま指示されたとおり柵の開門に取りかかった

俺は離れてその様子を見守る

チルさんは足場を作りながら川の中で暴れるダトルの頭上にたどり着く

其処で懐から一枚の札を取り出すと、それを暴れるダトルめがけて投げた

「爆」

札がダトルに張り付くか否かという絶妙なところでチルさんは札を爆発させた

ボンッと音を立てて小さな爆発がダトルの頭上でおきた

そして少し後ろに下がって足場を消した

チルは水面に向かって脚から落ちていくが落ちる気はさらさら無いらしく水面の上に足場を作った

ダトルの目と鼻の先に着地すると再び札をダトルの眼前で爆発させる

それと同時にチルさんの後ろで門が鈍い音を立てながらゆっくりと左右に開いてゆく

「お、開いたか。上出来上出来！おら、こっち来いよデカブツ！」

そう言ってチルアさんは開いたばかりの門を抜けて城の敷地内へと走っていく

そしてダトルは先ほどまでチルさんが立っていた場所に向かって大きく頭からダイブしていたところだった

再び大きな水しぶきが上がり、上手くチルさんの挑発に乗ったダトルは猛スピードで、消えない苛立ちを目の前でちょこまかする小さな人間にぶつけようと城の敷地内に入った

「しめろーっ!!」

チルが二人の門番に向かって開いたその門を閉じるように命じた

ゆっくりと曲がった門は街と城とを分かち、ダトルが外へ出ないように誘き寄せたのだった

俺は門の近くによってその隙間から奥を覗いてみた

未だ我を忘れて暴れるダトルは口から水球を放つ

水とはいえ、圧縮して球形を保ったまま放たれるその速度をみて彩輝は驚いた

そのスピードはまるで昔みたプロ野球の選手が投げる物と大してかわりがなかったからだ

とはいえよく軌道をみれば避けられないわけではないらしく、チル

さんはその水弾を避けつつ、しかも城の方へとそれた水球を握る蒼
天駆で全て切り落としている

足場を作っては消して、リズム良く水球を切り飛ばすその姿はまだ
まだ余裕だとでも言いたそうな雰囲気を醸し出している

事実正面に向けて放たれた水球は全てチルさんに防がれている

体内に溜めた水が底をついたのかダトルは水球をはき出すのを止めた

代わりに暴れる力を体全身に込めて辺り構わず水中を走り始めた

その姿はまるで軍艦や魚雷のようで、もしぶつかればどうなるか分
かったものではない

ダトルは途中から水中に体を全て沈め、水面にはダトルが通った後
に水しぶきが帯を引く

そしてその進行方向の先にはチルさんが居た

水面ギリギリの場所に足場を作り立っている

だがチルさんは全く動く気配がなく、しかも剣を鞘に収めた

どんどんと近づいてくるダトルに怯えることも引くことも無く、た
だ真っ正面からダトルを見つめていた

そして水しぶきとダトルの影が同時に、チルさんへと突っ込んだ

それまで後ろからついてきていた水が全てチルさんの立っていた場

所にぶつかってその背後にはじけ飛んだ
さざ波が立ち、その空気の振動がびりびりと離れた俺たちの肌にも伝わってくる

「隊長！！」

門番の一人が叫んだ
だ、大丈夫なのか？
まさか自殺をするとは思えないし、自分から避けなかったと言うことはそれ以外の策があっての行動のはずだ
と、次の瞬間、俺の目の前では信じられないようなことが起こっていた

「と、止めたぁ！？」

水面から顔を出し、進路の邪魔をするチルさんに向かって噛みつこうとしたのかダトルはその口を大きく開いていた
見た目巨大亀のようなダトルの口に鋭い歯は無いものの、その口で噛みつかれようものならばそこらの木ならばへし折れそうな威力はありそうだ

しかもそれに加えてあのスピードで突っ込んだのである

前にアルレストさんはダトルは魔力で水を押していると言っていた

一度乗ったときに早いとは思っていたものの、降りて見てみればそれは恐ろしい早さだった

それを、スピードが乗った一撃を鞘に収めた剣で受け止めているのである

目を疑いたくなる光景とはこういうことか?

っていうかこの人達本当に人間なのか?

筋力的にあの細い腕じゃどうあがいても異常としか言いようがない

まぁ異世界自体異常なんだけどさ。魔法とかあるし

力は拮抗していた

大きく開けた口に、縦に押し込まれた剣は支え棒となって口の開閉を出来なくしていた

見えない足場をしっかりと踏みしめ、踏ん張るチルさんは先ほどの水しぶきでびちゃびちゃになっていた

「てんめ・・・着替えなきゃなんねーだろうが・・・・こんにゃろぅ・・・!!」

とはいえ流石にこれは余裕という訳にはいかなかったらしい

確かにあんな巨体を受け止めただけでなく、藻掻くダトルの動きすらその両手で押さえつけている

頭を固定されて後ろにも前にも行けなくなったダトルは大きく体を動かして何とか逃れようと必死になる

が、先が曲がった口、それもめいいっぱい大口を開け、そこに剣が引っかかって取ることも出来ないダトルは水を飲んで水球を作り出すことも出来なくなっていた

暴走を止め、水球を止め、被害の拡大を防いだチルさんは体全部を使ってダトルを動けなくしていた

いつまであれが持つのかは分からないが、早く何とかしないといけない

そう思った時、どこからか太い木の棒が飛んできた

チルさんはそれを片手でつかんだ

「離れて！吹き荒ぶ風よ、渦に絡ませ、舞い上がれ。イルレージトラビリオン」

そんな声がどこからか聞こえてきた

チルさんはとっさに気の棒をダトルの口に突っ込んだ

そして剣をゆるめて口から取り出すと一目散にその場から待避した

次の瞬間には巨大な風の渦がダトルを水ごと巻き込んで巨大な竜巻のようになる

その竜巻の力は離れた俺たちですら巻き込もうとするかの如く風で俺たちを吸い寄せるほどだった

ダトルの巨体はグルグルと竜巻の中で回り、やがて竜巻はゆっくりと空中で四散して消えていく

回っていたダトルは頭から水中に落ちていき、巨大な水しぶきをあげた

俺は城の入り口、高台の上にたつ女性を見つけた

前に少しだけ魔術の事を教えてもらったこの国の魔法師団隊長、シオン・ウェンヴァーであった

彼女は無表情で俺たちを見下ろしていた

杖をおろして前に見たときと同じ緑地のローブを被った彼女はそのまま二階に相当する場所から地面の上にふわりと飛び降りて着地した

よくあんな風に飛び降りできるよな

って雲より高いところから飛び降りた俺が言える台詞じゃぁ無いけどね

あれはよく分からないけどソーレのおかげで着地できたんじゃないかなぁと推測している

ほら、剣に翼とか生えてたし

「あんたねぇ・・・文字通り私まであれに巻き込む気？城の敷地内で上位魔法ぶっ放す奴が何処にいますか」

あきれた顔でチルさんがつぶやいた

ため息をつきながら剣を腰のベルトに差した

「被害はなかったから大丈夫。問題無い」

「そう言う問題じゃないでしょ・・・」

「五月蠅い執務を邪魔されたと思ったら敷地内で何で戦ってるのよ」

「うーん、まぁ成り行きなんだけどね。偶然出くわしちゃったというか何というか」

んー、とぽりぽり頬を掻きながら目をそらす

実際あの人は巻き込まれただけなんだなぁと思い出した

「あそこで伸びてる奴に？何したのよ」

シオンはそう言ってひっくり返って目を回すダトルを指さした

「だから巻き込まれただけだって今回は！あ、そうだ」

チルさんは何かを思い出したようにひっくり返ったダトルへと向かって歩き出す

そしてダトルのヒレを調べだした

ヒレには爪があり、その裏に刺さった木の破片を引き抜く

「これこれ。これが原因らしいよ」

「木の枝？」

「これが刺さって暴れてたんだろうね。それを今回私は見事被害無く押さえたのよ！凄くない？」

「別に。仕留めたのは私」

「いやいやいや、何いいとこ取りした上に手柄やらなきゃなんないのよ？いやまぁ呼んだのは私だけだけどさ」

確かにチルさんの正確な判断と実力のおかげで被害はほとんど出ずにすんだ

被害としては壊れた水門の柵とおぼれかけた船漕ぎのおじさんくらいだろうか

下手したら大惨事になっていたがそれを最小限に食い止めたのは紛れもなくチルさんの判断である

とりあえず言い争いがまだ続きそうなので俺は二人の門番に水門を開けてくれと頼んだ

つなぎ止めてあった小さなボートの一つに乗り込んで俺はまっすぐ城へ向かってオールを漕いだ

『いろいろと再会してみたり』

この城に入るのも何日ぶりだろうか

一ヶ月経つか立たないかというところだろう

そもそも日数なんて数えていないからあれからどれだけ立ったかなんて分からないのだが

俺はチルさんの後ろをついて歩いていく

シオンさんは先に自室に戻って中断していた執務をやることにしたらしく、あのあとはすぐに俺たちとは別れた

俺はとりあえずファルアナリアさんに渡す物を預かっていると言うことで王妃であるファルアナリアさんのところへ連れて行かれるらしい

しばらく城の待合室で待たされてようやく俺は謁見の間へと通された

「お久しぶりですアヤキさん。元気な顔を見られて何よりです」

「ど、どうも」

とりあえず俺も先に低頭したチルさんに習って膝をついて低頭した

「別に最初の方にも言ったと思いますけど其処まで畏まる必要はありませんよ。早速ですが預かっている物があるとか？」

「あ、はい」

そうは言われても流石にねぇ・・・

久しぶりにあって多少畏まった部分もあったけれど前がフレンドリーに接しすぎたような気もしなくはないのだが

俺は肩にかけていた袋をおろして中から白い紙筒を取り出す

綺麗なリボンでくくられて丸められたその書状を渡そうと思ったがどうやらそれは俺の役目では無いらしい

チルさんがスッと立ち上がり、その書状を渡すようにと無言で手を差し出した

俺はすぐにチルさんにその書状を渡した

チルさんはそれを受け取るとそのリボンを解いて紙をひろげた

それをファルアナリアさんのところまで行って手渡す

「おや、オリシアの娘からですか」

ファルアナリアさんはそうつぶやいて書状に目を通した

しばらく文字を眺めていたと思ったら次はチルさんに向かって話し始めた

「チル隊長、そうですね明日の正午より会議を行います。参加できる文官武官を会議室に集めてください」

「はっ。してその理由は何としましょう?」

「他国との、それも複数の国での会合が行われるのでまぁそれに関した内容といったところでしょうかね。これはアヤキさん。あなた達のための会議でもあります。明日は貴方も会議に出席するように」

「俺もっすか?」

アルフレアさんは手紙の内容は後々分かると言っていたがこれのことだったのか

会議

恐らく、精霊台を保持する国が集まって会議をするのだろう

あちらでアルフレアさんが他の国と手紙のやりとりをしていたのもこのため

一国は不参加という事だったが現状は五国の参加が決まっていることらしい

このために恐らくアルデリアとも事前に手紙が来ていて少しずつ話が進んでいたのだと思う

「明日の予定はあけておいてくださいね」

そうニッコリと言われて俺はうなずいた

「ところでチル隊長？」

「はっ！」

「どうやら先ほどまで城門付近で騒いでいたようですが」

耳が早いなぁこの人

まだそれほど時間も経っていないというのにすでに王妃の耳には城門での一件のことが・・・

「騒ぐのは自由ですが門まで壊すのは・・・」

「えっ・・・と・・・・・・・・へっ？」

チルさんは何が起こっているのか理解できずに素っ頓狂な声を出してしまう

「あらましは魔術師団長から全て聞きました。貴方が暴走したダトルを止めてくれたことには感謝しますがそれで門を壊したのであればきちんと門の修理費は貴方に出して頂かないと」

「いや、あの、何をお聞きになったのかは知りませんがそれは――」

「では、アヤキさん。そういうことで。詳しい話は追って伝えますので」

「あの、ちょっと、何。えっ？」

ファルアナリアさんの目はご退室お願いしますって目をしていた

俺はそんな彼女の瞳に見つめられ、後ずさるしかなかった

じりじりと気がつけば扉の前に立っていて、チルさんがせめて俺だけでも道連れにしようと襲いかかってきた

だがそんな彼女の襟首をガッとつかんだファルアナリアさんが俺の目の前に立っていた

俺まで後数センチというところでチルさんの指先はとまっている

「う・・・っぁ・・・」

「ひ、一人で逃げるなんて・・・証言に・・・っ」

彼女は俺に向かって手を伸ばすが首が絞まって進めないうえに声が出ない

「では、そういうことで」

気がつけば俺は部屋の外にいた

そして扉が閉まった

恐らくさっきの話から察するにはシオンさんが執務を邪魔されたことへの仕返しのつもりなのだろうと思われる発言がいくつか聞き取れた

「王妃には逆らえないしなぁ・・・」

数秒後には扉の内側から叫び声のようなものが聞こえてきたのだが、俺はとりあえず手を合わせてその場を後にした

ただそれはチルさんの安否を祈ることではなく、後でチルさんが俺に復讐に来ないことを祈るものであった

俺はとりあえず龍にさらわれる前まで自室として使っていた部屋を目指すことにした

他に行く当ても無く、俺が住む手はずになっている家の場所はまだ教えてもらっていない

ということでその部屋を目指しているのだが、途中ふと無意識にぽつりと言葉を漏らした

「静かなのっていいなぁ・・・」

これまで俺は何というか非常にあり得ない体験をしてきている

龍に魔獣に剣に魔法

さらわれ襲われ平穏とはしばらく遠ざかっている気がする

そんな時間を過ごしてきて、俺は静かな平穏を心のどこかで求めていたのかもしれない

望むなら、平穏の中で元の世界に帰る方法を見つけられればなぁと思っているのだろうか

そしてそんなぽつりと漏らした言葉を耳にした奴が俺の後ろにいた

「あーっ！」

「うぉ！？」

音もなく、突如背後から大声をあげられたらそりゃぁびっくりする

特に身構えていないときなどがそうだ

ゆっくりと振り返ると、そこには修練場で出会った少女が俺を見上げていた

年は十八

年上か・・・

信じられん

その一言に尽きるくらい小さい

敬語とか使った方が良いのだろうか？年上だし

「何処に行っていたんですか！？突然居なくなっちゃって不安だったんですよ」

聞いていないのか？

俺がこのミーナという年上の少女と関わり合いになっていることはチルさんとかが知っているはずである

それでも話していないのは何故だろうか
心配させたくなかったからか。それとも龍にさらわれたという事を広めたくなかったのか

「ちょっといろいろあってね」

「こっちもいろいろ合ったんですよ。あのとき分かれた後巨大な龍が王都を襲撃したんですけど大丈夫だったんですか。城下に行ったんですよね？」

「え、あ。うん。まぁなんとか」

知ってるよ
さらわれましたし

「そう言えばあのときが最後に合ったんですよね」

「そういやそうだな。あ、たしかお前こいつの名前のことしゃべってたよな」

彼女と話したとき、この刀に名前は無いのかと問われたことがあった
そのとき俺は無いと答えたはずだ

名前を付けるときは、恐らく何時か自然に訪れるだろうと思っていた
下手に変な名前を付けるよりもいろいろと旅をした中で決めていく方がしっくり来そうな名前に出会えると思ったからだ
そしてそれは見事的中して、今では腰に差した短剣には唯一無二の名前が付いた

「紹介するよ。ソーレだ」

すらりと抜いた刃は銀色をしていた
炎を纏った姿すら幻に思えるくらいにその白銀の刀身は光りを反射してミーナの顔を写し居ている

「ソーレ。うん。なんかそれっぽい剣だよね」

そう言ってミーナはソーレを彩輝に返した
ソーレを鞘に収め、俺はこんなところで何をしてるのかと問うた

「雑用。地位を向上するためには今のうちから媚びを売っておかないとと思ってね」

そう言って彼女は手に持っている書類を見せてクスリと笑った

「まだ見習いなのに大変なんだな」

「ま、本当はしなくても良いんだけどね。なかなか上手いこと申請の書類が通らないみたいでここ一年は停滞中なのよね・・・」

そういえばこっちでは17が成人とか言っていたはずだ

成人ならば普通はすでに職にありつけてもおかしくはないはず

書類が通らないからといって一年も騎士の見習いをやっているのか?

少しばかり疑問にも思ったがそれはそれで誰かの意図が絡んでいるのだろう

「そういう君はどうなのさ?」

「俺か?そうだなあ・・・前にいた部屋に戻るつもりだけど今後することは決まって――」

そこで思い出した

たしかツキの家に居たときに聞いた話がスッと脳内に響く

「ないんだけどさ。探ってみたいな、と思うことは在るかな。さっきのうちにファルアナリアさんにも聞いておけば良かったかな」

「王妃にですか？」

「宝玉の件について」

「宝玉？純色宝玉のこと？」

「うん。まぁいろいろあってね。ここの城の人がそれを欲しがって催促してたみたいなんだけどさ。それにしてはそんなことをするような人たちが出会った中の人では居ないような気がしてね」

「初耳です。それ。一般の人が持ってたんですか？」

「そうなるね」

ちょっと驚くそぶりを見せてミーナは考えを巡らせてみた

宝玉はそれこそ国レベルが欲しがる謎の魔道具であり、各国に散らばっているという品物である

そんな大それた物がこの国に合ったなんて初耳だ

ただそれは国の所有物としてではなく、個人一般としての所有物とするならばそれを隠し続けて所持していたことになる

もし一般の人が持っているなんてばれたらそれこそその家にはいろ

いろと災難が降りかかるだろう

盗んで売れば大金にもなる

奪う方法ならいくらでもある

そんな心配を抱え込んで隠していたくらいだ。その秘密はほとんど誰にも知られては居なかったのだろう

だからこそ今まで無事でいられた

だけど城から催促が来ているとはどういう事だろうか？

そんな厳重な秘密が、何故城に知られているのかがミーナには分からなかった

もし宝玉を所持する本人が城の人間にその秘密を喋るくらいなら、城からは催促なんかしないはずだ

重圧に耐えきれないというのなら分からなくもないが、城の人に渡していないと言うことはこれはそれとは違うという事になる

「妙な・・・話ですよね」

「だろ？」

「分かりました。父にも話していろいろと探らせてみます」

「父・・・ってあの？」

彩輝は自分を鬼のような形相で跳び蹴りしてきた男を思い出した
あの凄まじい形相と印象の強さは忘れようにも忘れられない衝撃であった

ファーストインパクトが強すぎてあのときは一瞬何が起こったのか分からなくなったくらいだ
俺を蹴り飛ばして昏倒させたミーナの父親
気がつけば俺はベッドの上であったうえ、当の本人は逃亡してそれ以来合っていない

「でも、大丈夫なのかそんな事して?下手したらクビとかになるんじゃないか?」

だがそれなりの地位は持っているにせよ、何をしても言いということにはならない
それ以前に俺の頼みを聞いてくれるのかも心配だったが彼女は父は自分にご執着というのでまぁ何とかなるんじゃない。とか言ったりした

「んー、まぁ確かに書類を盗み見たりとかは出来ないけどそれでも部隊長だしある程度の権限は持ってると思うけど」

「・・・部隊長？」

「うん。えっとね、仕組み的には騎士隊長、副隊長、そしてその下に１番隊～４番隊までの２０００人部隊があってその部隊長の一人なの」

んーっと・・・それってかなりのお偉いさんじゃないか

「驚いた・・・そうは見えなかったから」

「そう？」

ていうかあんな人が隊長で大丈夫なのかとすら思えてしまった

でも人を見かけとかで判断しちゃいけないと言うことは分かっているつもりだったのでとりあえずはそれぐらい凄い人なんだなぁとだけ思っておくことにした

「んでもたぶん仕事で忙しいと思うけど何か分かったら教えるね」

「わかった」

「それじゃぁこれ届けてこないといけないから」

「うん。でもあんまり他言はしないで欲しいかな」

「わかった。それじゃぁ」

彼女は軽くお辞儀をして小さな体でトテトテと廊下を俺とは反対方向に走っていった

ちっちゃいなぁ

それが見送った彼女について最後に俺が思ったことだった

次の瞬間には後ろにアルレストさんが立っていたのだから意識は自然とそっちにいってしまったのであろう

「無事だったか」

「お久しぶりです。アルレストさんこそ体はもう？」

アルレストさんとも久しぶりの再会を交わした俺は自分より身長の高いアルレストさんを見上げた

あの時、俺を真っ先に探そうとしてくれたことや龍に向かって果敢に立ち向かったあの後ろ姿が俺の瞼の後ろにはしつこく残っていた

そして怪我をしたことも知っている

先ほど移動中に聞いた話だと、左腕の骨はまっぷたつだったと言う

だがどうやら自然回復以外にも、この世界には治癒魔法という凄いものがあり、アルレストさんの強靱的な回復力で一週間すればほぼ腕は元に戻っていたらしい

凄いなぁ魔法って

そう思わされた

万能という訳にはいかないだろうけど、それでもその力に俺は魅力を感じられずには居られなかった

もしかしたら自分の腕も治るんじゃないかとちょっとばかり淡い期待も込めてみた

機械は確かに凄い

何でも作れて何でもこなす

だけどそれは人間が作り出した物であって、直接何でも作れて何でもこなしたわけではないのだ

それとは違い、水を生み出し、炎を生み出し、そんなことを『自分の力』で出来るという事に俺は惹かれていたのだと思う

俺とアルレストさんは立ち話も何だという事でアルレストさんの自室に向かった

どうやら休憩中だったらしく、俺が戻ってきたという報告を受けて探していた真っ最中だったという事らしい

扉は全開のように血塗られてはおらず普通の扉であったことに俺はホッとしていた

恐らくあれはチルさんのいたずらか何かだったんだなぁと察しがつくこの人にあんな事が出来るのはあの人ぐらいだなぁと思うからだ

「と、此処まではそんな感じでしたかねぇ」

俺はそう言ってこれまでの道のりを語った

龍の事、渡商人と出会ったこと、グレアントに滞在していたこととまぁいろいろ話した

「大変だったな。いろいろと」

「えぇ。まぁ。それより街の方は大丈夫だったんですか？」

龍襲来事件の事は今では近隣諸国にまで知られるようにまで広まったらしい

さらわれた俺のことは飛び去った方向のグレアントにしか伝えてなかったそうだ

それよりも俺が気になったのは街のことだ

あの後どうなったのだろう

龍が降りてきたのは今日通ってきた場所とは別の場所であり、その様子はどうなっているのかは全く分からなかった

「お前の話を聞く限りでは龍は悪い奴では無いらしいと言うのはわかった。それなりに知識もあるらしいしな。だが、被害が帳消しになるわけではない。被害関係の書類は文官の方に回っているから詳しくは分からんが現場なら今も瓦礫のままだ。もう少ししたら瓦礫の撤去が始まるらしいがな」

そうか。あの場所はまだそのままなのか

確かにすぐに戻せるような壊れ方では無いと俺は思う

住民が頑張っても出来ることも限られるだろう

「壊れた家に住んでいた人たちは無事だったんですか？」

「あぁ。けが人は無し。皆外出していたようだ。今は国が経営する騎士の借り宿舎を貸している」

「へぇ・・・」

やっぱり仮設住宅とかでは無いのか

確かにすぐ作れと言うのも無理があるだろうしそっちの方が楽なのだろう

「あ、それとお前の家、準備出来たぞ」

「本当ですか？」

良かった。これで迷惑をかけずにすむ・・・

これまで正直此処まで飯やら寝床やらを勝手に使っていて負い目は感じていた

そう言えばメイドっぽい、たしかそう、ティリアといったはずだ

その人も俺と一緒に住むとか言っていた気がするが・・・・

「あ・・・・忘れてた」

うん。その事と宝玉の件も含めてもう一度ファルアナリアさんに聞いてみよう

アルレストさんは何をだ？と聞いてきたが何でもないですと俺は手を振った

「ところでその短剣、研いだりしてるか？欠けたりとかしてないよな」

自分が渡したその短剣がきちんと手入れされているかを聞いてきたまぁ剣とか無い世界から来たからそう言った手入れのことで気になったらしい

「大丈夫ですよ。欠けてもないし、きちんと研いでます。むしろグレードアップしたぜ。みたいな？」

「ほう。それは頼もしいな。ソーレといったか」

「えぇ。本当に、頼りにしてます」

話を全部聞いていたアルレストさんは不思議な物を見る目で俺の腰に差した短剣を眺めた

こいつにこの声は聞こえているのだろうか

返事は聞こえないけど、なんだか耳の奥でまだソーレが鳴く声が聞こえてくるようで仕方がない

そう思うと無意識に引きずっているのか俺は？と思ってしまった

「頼りにしてます。何たって俺の守り刀ですからね」

ほのかに剣にに熱がこもった気がしたが、たぶん俺の膝にくっついていたからだろうと思い直した

『特訓の日々1』

会合の内容は今後行う精霊台所持国の会談のお話であった

場所がどうとか費用はどうとかいろいろと話題は合ったらしい

問題はそれを何処でやるか、ということらしい

場所の提案としてはアルデリア、エストレル、グレアントの三カ所から選ばれるらしいということがグレアント側からの書状に書かれていた

流石に精霊台の４つがこの周辺に位置していることからアルデリアとグレアントがあげられたらしい

そしてエストレルというのは中原、ほぼ大陸のど真ん中に位置する国であり、どの国からも集まりやすい場所ということになる

開催日程は決まってはいないものの、やるならばその三つの国から選ぶことになるらしい

その辺は各国から投票を取るという事らしい

まぁそれでもアルデリアは選ばれないだろうという事は予想済みである

北方から来る国もあるので山に挟まれ北には不毛の大地が広がっている

そこを抜けるというのは大変だ

ならば交通の便がよいグレアント、エストレルに表が集まるのは必死

ただ問題としては北から南、精霊台を所持する国どうしの距離がとてつもなく遠い事だ

場所として正式に決まるのならばエストレルだろうという事でこの件の中心となってくれているグレアントに書状を送ることになった

ただ一度、この周辺の４国で集まって会議をすることが必要だとファルアナリアさん、他数名は提唱した

俺たちの異世界訪問はどうやら予想以上に問題を起こすことになりそうだと彼女たちは言った

まずこの大陸には先の時代に侵攻してきた者達の存在があり、彼らもまた異世界人だという事があげられる

それだけで俺たちの地位はことごとく低いものとなってしまう

もし最悪帰ることが出来ないということになってしまった場合、そういった偏見でこの世界に住みづらくなるという事があった

考えたくはないが、この世界には黒髪黒眼の人種というのは存在していない

そして異世界人であること

後者は隠せても前者は隠すことが出来ない

まだ異世界人だと言うことが広まっていないから良いが、もし広まって暴動などになれば俺たちの居場所は何処にも無くなってしまうと考えられた

俺たちがどう思おうと、周囲の意見は変わらないだろう

一度暴動が起きれば止めるのは容易ではない事が想像できる

だから下手をすれば俺だけでなく、城の人たちにも迷惑が掛かってしまう恐れがある

俺が困るのは我慢できるが、自分のせいで他人に迷惑をかけることはしたくないと思った

その意志はきちんと彼らに伝えた

過去にたった一人の人間によって国が滅ぼされたという事例が残っている以上、一人だから、といった理由で見逃してくれるとは思わない

不満が在ればその不満が消えるまで周囲の人間は騒ぎ続けるはずだ

そしてその不満を消せる方法といえば、殺すほか無いのだという事も察しがつく

国外追放？そんな生優しいことを国民が望むはずもないだろう

国を滅ぼすほどの人間を野放しに出来るか？否。ならば殺してしまえ

民衆も悪い人たちでないことは重々承知しているつもりだ
ただ、それ故に自らの危機に対して過剰に恐怖するのだ
この会談の結果、まず周辺の４国で集まり会談をする
そして俺たち異邦者が元の世界に帰れるまで安心して過ごせるような体勢を作っていくこと
それも含めて、今後の事の意見もまとめておきたいとの事
場所は未定だが近いうちに各国で集まり、さぁ会談となっても、各々の通したい事柄を明確にしておくべきである
集まって出来ることといっても些細なことでしかない
だけどそのために皆が手伝ってくれているのだから、俺としては感謝の気持ちで一杯だった
なんというか難しすぎる話で終始頭がこんがらがっていたが俺が理解できたのはその程度であった
気がつけば皆は解散して部屋には俺とファルアナリアさんだけが残っていた
「うーん、なんか良くわかんなかった・・・」
「そうですか？まぁ指示はこちらで伝えるのでまぁそれほど気にしなくてもよろしいですよ」

それなら俺も気楽に過ごせる

適当に指示だけだしてそれに従っていれば良いのだから

よっぽどの事が無い限りそれを破る気は無い

「そう言えば家ってどうなったんですか？」

「あぁ、そうでしたね。もう入居は可能ですよ」

「えっと・・・ティリアさんも一緒なんでしたっけ？」

「そうですね。まだよく分からないことも多いと思いますしとりあえずしばらくはつけておきます」

それについては肯定も否定もするつもりはない

一人の方が気楽、というのもあるがそれでも話し相手とかぐらいは欲しい気もする

全部を全部一人でやるというのはまだ俺には不可能だし、今思えば不安なことも多い

一人でやっていける自信があるのかと聞かれればたぶん俺は自信なしと答えると思う

あのときは結構ノリで言っていた部分も多少合った気がするなぁ

「それと・・・気になることが在るんですけど」

「気になることですか？」

はっと思い出した俺は黒玉の一件を話した

始まりは龍にさらわれた後から始まり、終わりは黒龍、そして謎の男の話に終わる

最後まで静に聞いてくれたファルアナリアさんは顔をしかめていた

「それに関しては・・・・私は関与していないというのが事実です。ですがその黒玉という存在についても初耳です」

「やっぱりっすか・・・・。誰か独断で動いて居るんですかね？情報が入ってきていないってことは」

「かも知れません。これは少し裏を探る必要が在るかも知れませんね。あるいは私たちの名を騙った誰かの仕業、ということも考えられますね」

てことは。もしそういう奴らの犯行だった場合、宝玉が手に入ろうと無かろうと、どちらにしろ国の好感度はダウンってことに繋がる

恨みがある・・・？

「まぁその件はしばらく時間が必要かも知れませんね」

俺もそう思ってこの日は退室をした

だが思っても見ないことに、この件は近々とてつもない大事に繋がることとなるとはまだ二人は知るよしもなかった

そしてその翌日、突如トルロイン家が王都での武闘大会の開催を発表した事がその日一番の話題となっていた

「武闘大会・・・」

城の中でもすでに噂にはなっているらしい

何でも商品にはお金と共に、宝玉も出されていた

兵士達は参加不可能であるため宝玉を手に入れるには城に務める人たちはその武闘大会に出ることは出来ないらしい

年齢制限も出身国も気にせず、ただただ楽しくやろうということが配られたチラシに書いてあった

「近いうちに連絡を入れるってこういう事ですか・・・」

連絡というかもはや告知だ

今では王都中にこの知らせは行き届いているだろう

年齢、出身、武器魔法の使用自由という何ともフリーダムな内容ではある

武器はトルロイン家が提供する品を使うこと、魔法は上位魔法の使用禁止というルールだけはついていた

「武闘大会ねぇ・・・・」

また厄介なことになりそうだと彩輝は直感で悟った

恐らく俺たちが欲しがっているから商品に出したのだろう

どうしても欲しいものなら出場してくるとでも思ったのだろうか

いや、だが事実ここの人たちには頼めない

それに他人任せは良くないなぁと心のどこかで思うところもある

絶対に宝玉が必要という訳ではない

だが今後のことも考えておけば手にしておきたいのも事実

後から後悔したくは無い

宝玉自体なかなか手に入れる機会は無い上に、知らぬ誰かが優勝して持って行ってしまえば回収はかなり難しくなるだろう

こんな目の前に欲しい物が手に入るチャンスが転がっているのだ

多少は努力しても良いだろう。ならば自分が強くなるしか無いのだろうか

生き抜く力

武力という点で、俺はまだまだ未熟だ

人に対して攻撃することには抵抗がある

力をつける

それはきっと今後の自分にも生きてくる

無力な自分、足手纏いな自分、傍観するしかない自分

力不足なのは分かっている。これはそれを補ういい機会かも知れない

彩輝はとりあえずとある人のところに向かうことにした

自分の家にも行ってみたい気持ちは多少合ったが、それよりもまず聞いておきたいことがある

ティリアさんか誰かが見つけるだろうと俺はすぐ戻ります的な書き置きを残して城を出た

さて、申し出を受けてくれるか事を祈るか・・・

仕事の迷惑にはなりたくないからね

「いいわよ。別に」

「あ、ありがとう・・・」

その申し出はあっさり通った

俺は城を出て真っ先に第5地区へと向かった

そしてうろ覚えでツキの家を探り当てて修行をしてもらうことを決めてもらった

返答は了承

「どうせしばらくはゆっくりするつもりだったし」

そう言ってツキは見慣れた薙刀を手に取った

「って・・・本物使うんですか？」

「えぇ。これは訓練じゃない。殺しあいだと思わないと一ヶ月で上達なんか出来ないから」

猶予は一ヶ月

というのも武闘大会が行われるのが今日からちょうど一ヶ月後

その間に戦えるレベルまで持って行けるかどうか・・・

気がつけば俺は武闘大会に向けて戦う訓練をしていた

「ほら、早く獲物を抜いて」

俺はとっさにソーレに手を伸ばした

今にも彼女が斬りかかってきそうな様子を見たらとっさに手が動いたのだ

そして予想は的中

小さな広場に剣がぶつかり合う金属音が鳴り響く

住宅街の一部には円形の公園のような場所があって俺たちはそこを借りて訓練をしていた

いや、訓練ではない。訂正しよう

どちらかというと模擬戦のようなものだ

振り下ろされる軌道を読んで右に素早く交わす

完全に振り下ろされた時点で薙刀の持ち手をずらした

そして刃は平行にこちらへと向かってくる

この時点で俺は防御の態勢を取っている俺はしっかりとその動きを目で捕らえる

教訓その一。相手から目を離してはいけない

当たり前のようでなかなか難しい

真剣で鎧も何もつけていない俺には恐怖するには十分すぎる

だから、恐れない。立ち向かう。勝つ

澄んだ空気にキィンと金属音が響く

止めた

こちらは攻撃範囲が極端に狭いためにいろいろと頭を働かせて懐ま

で潜り込まないといけない

昔剣道をやっていた俺とはいっても武器も違えばこれは真剣でのやりとり

剣道という型にはまっていては相手を倒すことは出来ない

俺はそのまま一歩踏み込んですぐさま右手を伸ばす

そしてツキの薙刀をつかむ

止めた刃の反りは浅いのが至近距離から見えた

目のすぐ横には刃が在る

柄はどうやら木製の上に金属板を巻いたような物であった

思ったよりも軽い事に俺は驚いた

左手で刃を止め、右手で柄を握る

力では男の自分の方が多少は在るだろうと踏んで右手をしっかりと握って俺は刃からソーレを離す

右で止めていたその左手をそのまま振り下ろす

左手を右手の上から斜めに切り下ろす

だが感触は無かった

するりとツキは俺が薙刀を握っている力を利用してまるで滑り込むように反対側に移動していた

そしてそのまま柄を握ってひねる

右手で握っていたので捻られて薙刀の柄がこちらに向かって迫ってきた

とっさにソーレを縦にして峰を相手の方に向けた

ソーレをななめに剃らして勢いをそのまま上へと向ける

ぶつかった拍子に刃がこちらに向かって動いたがそれは何とか腕力で止める

上空にそれた薙刀の柄で合ったが捻られたその薙刀を俺は持っていられなくなった

これ以上持っていれば腕が捻られる

離した瞬間、まるで弧を描くように下から先ほどそらした柄が向かってきた

休む暇もない！

敵は待ってはくれないのだ

ちょうどその頃、それまで城でアヤキの部屋として使われていた部屋に一人の女性が入室した

ノックをしたのだが返事がないので在宅ではないのかと不審に思ってドアを開いた

そして侍女であるティリアは机の上に置かれた一枚の置き手紙を見つけた

その内容を一読した後、それを王妃の元へと持って行くことにした

「っせい！」

もはや知り合いに振り下ろす威力とは思えないほどの勢いで金属が打ち合う

その音で気がつけば周囲には何人かの観戦者がいた

だが当の本人達は全く気がつかないとでもいう風に何度も二つの影は交錯する

彩輝は歯ぎしりをたてた

一撃も有効打にならない

年も変わらぬ少女に自分が劣っている

当たり前といえば当たり前だ

帰宅部高校生とは違ってしっかり仕事をこなし、一時は騎士団に入っていたという少女の顔はいつものようにほぼ無表情に見える

余裕があるのか疲れが顔に出ていないだけなのか彩輝には判断しかねたが、相手は休む暇すら与えてくれない

なのにこちらはもう息が上がっていて、手加減するそぶりは微塵も感じられない

自分から頼み込んだこととはいえ、まずは自主トレで体力をつける方が先だったか、という考えが頭の中をよぎった

距離を詰めたいがきちんと相手も自らの攻撃の有効距離と相手の攻撃範囲の狭さを十分に分かった上で戦いを行っている

至近距離にさえ入れればこちらが有利なのだがどうも彼女には一撃も決まりそうな気がしないのは気のせいだろうか

気迫押しされているのか、それとも俺がつかれているだけなのか

とりあえず体力も限界に近かった

斬り合いを初めて一時間。休みを入れずに自分でも良くやったよと思える

一撃入れれば休憩をもらえるという約束だ

「はっ！！」

突き

まるで相手が避けるのが当たり前と言わんばかりの堂々の突きを俺は左に避けた

刺さったら本気で死ぬぞ

冷や汗が斬り合い当初から止まらない

相手が薙刀を突き出してくる

引っ込めて攻撃をするにも俺が踏み込む方が早い

横に振るうとしても俺のフリーの右手がそれを遮るだろう

「らぁっ！！」

ソーレを、短刀の峰でツキの胴を狙った

が、彼女はあろう事か両手を薙刀から手放したのだ

一瞬の出来事に動揺する俺の左手首を即座につかみ、捻る

ソーレが手から離れたのが分かったが、それ以上に一瞬の痛みでソーレを手放したことを後悔した

次の瞬間には、がら空きになった俺の胴をツキの掌底が捕らえた

下から突き上げるような感覚

次の瞬間には腕刀が俺の背後から襲いかかる

抗うすべもなく俺は大地に倒れ込む

掌底は綺麗に効いた

だが最後に放たれた腕刀の威力が押さえられていた事だけが唯一の救いだろう

強かった

少なくとも実力を見るつもりだけだったのだがこれはたぶん自分の手には負えない

教えられることは少ししかないだろう

まだ戦い慣れていないというのに此処までの反応速度とは思ってい

なかった

確かに彼はあの黒龍を目の前で打ち倒した

だけどそれは彼の本当の実力というわけではない

あんな膨大な魔力がぶつかれば、そりゃ龍ですら絶命するというものだ

彼自身の実力はまだまだ一般の兵と同等くらいでしかない

優れた点は反射神経

その反射したあと的確な行動をとっさに取れるかどうかはこういった模擬戦でこれから慣れていかないといけないが、これだけ動けるならばそれなりに大会でも善戦してくれるだろう

ただそれは常人が相手の場合であって、本当に強い人というのは自分とは比べることすら出来ないほどの高みにいる

もしもっと強くなりたいというのなら、もっと強い人に指導を当たってもらわないといけないかも知れないとツキは思った

わざわざ自分を訪ねてきてくれたのはうれしいが、自分では力不足だとツキは水を注いだコップに映る自分を見てつくづく思った

水が入ったコップを受け取った俺はその水でカラカラに乾ききった

喉を潤した

潤いは渇いた喉に染み渡る

横腹が痛いしもう今日一日は何もする気が起きないくらいに消耗していたのが実感できた

いつの間にか観戦していた人たちは消えていた

なんだろう。グエラーかなにかかと思って見に来たのだろうか

とりあえず全身が悲鳴を上げていた

俺は地面に横になった

地面には無数の足で削られたくぼみが出来ていた

その範囲は気がつけば広場一杯にまで広い

そんなに走り回ったのだろうか・・・

「生きてる?」

「何とか・・・」

死なないようにするので精一杯だよ。いやマジで

ていうか何で真剣使わなきゃなんねぇんだよ!?

一歩間違えりゃ大怪我じゃ済まないぞ

「さて、もう一回やりますか」

絶望を感じた

「ちょ、ちょっと待って！！」

とっさに俺は両手を突き出して止めてくれという意思表示をする

じょ、冗談じゃない

それこそ死ぬわ！

先ほどまでは緊張の糸を保っていたから良かったものの、もうすでに緊張が解けて俺はもう無理だ

「何？」

「いや、何じゃなくて・・・・きついんっすけど・・・」

素直に言ってみる

「頼んできたのにそれ？」

「ぐ・・・それを言われると・・・・」

俺は何も言い返せない

「だけど体力が限界なんですけど」

「・・・わかった。じゃぁ次は明々後日ね」

「え？あっ、わかった。何か用事でもあるの？」

明日や明後日では何故だめなのだろうと聞いてみる

ツキは地面に置いた薙刀を手にとってこちらを振り向いた

「明日になったら分かる」

そう言って家の中へと戻っていった

取り残された俺はすごすごと城へと戻ることにした

そして翌日になって理由が分かった

「なるほどね・・・・」

あれだけ派手な運動をしておいて、筋肉痛にならないはずが無かったのである

納得した彩輝は丸二日、ろくに動くことも出来なかったという

その時のチルさんが俺を笑う姿をきっと忘れないだろう

チルさんには忘れてもらいたいけどね

『特訓の日々2』

俺はたてなかった

大地に突っ伏し、膝を上げることも、腕を上げることも

立ち上がることも出来ない

ただただひれ伏していた

目の前に立つその女の前に

「くそっ・・・！！」

時は数刻前に遡る

筋肉痛が治りかけてきたその日は天気も良く、清々しい一日の始まりを迎えた俺は城を出て俺はツキのもとを訪ねた

ツキは家の中で一人の女性と会話をしていた

長い髪を紅く長いリボンで結んだその女性は俺の姿を見てお辞儀を

した

俺も慌ててお辞儀をした

そしてその人が誰なのかという事をツキに聞いてみた

「彼女はアーストレストゥルシア・ユディス」

「長いからユディスかレストル・・・・そうね、先生とかでもいいわよ」

名前がものすごく長かった

っていうか先生って？

「あ、あーすとれつぅっぁ？え？」

「アーストレストゥルシア・ユディス」

「あーすとれすとぅるあでぃす？」

「アーストレストゥルシア・ユディス。短くユディスで良いわよ。ツキはレストルって言うんだけどね」

「は、はい」

「じゃぁレストル。後は頼んだ」

「おっけー。任しときな」

そう言ってユディスは立ち上がる

凛とした目つきで俺を見ている

え、何？俺？

「初めまして。これから貴方の指導をするアーストレストゥルシアユディスよ。よろしく」

手が差し出される

え、指導？先生ってそう言うこと？

俺はとっさに手を差し出して握手をした

見た目は年上で背も高くて綺麗な人だ

「ッてことで今日からびしばし行くわよ」

「へ？」

そして突如連れ出されたと思ったら何故か俺は第四地区に連れて行

かれ、とある店に放り込まれる
なんなんだ一体・・・

「この奥は修練場になってるの。さて、じゃぁ始めますか」

「え、えっとあの・・・何を？」

店の奥は大きな道場のようになっていた
地面の土はカラカラに乾いている

「ん？ツキから聞いてないの？」

「えっと・・・何のことでしょうか？」

「ふむ・・・。じゃぁ質問タイムを上げよう。一分よ」

一分！？早いぞ！

「此処は？」

「私の店ね。おみやげ物屋みたいな物よ」

確かに一目見たときにおみやげ物屋っぽい雰囲気が感じられた、っていうかおみやげ物屋なんだけどさ

「えっと、修練って大会に向けての特訓って意味で良いんですよね」

「それ意外に何が？」

うん。何となく分かった

ツキがこの人に俺の訓練につきあってくれる人を紹介してくれたって事でいいのかな

そしてどうやらこの女性は俺の先生になるってことになるらしい

「じゃぁ何で隣で職務放棄した女性が楽しみそーに座って居るんですか？」

「それはね、面白そうだから」

何処で聞いてきたのか、何がどうなってこの人が俺の横にいるのだろう

俺の思い過ごしでなければたしかこの人はこの国の騎士隊長だったはずで仕事とかあるはずなんだけどなぁ

「チル。見学は自由だけど今回はあたしのおもちゃなんだからね。

邪魔するなよ」

「わーってるて！それを見に来たんだから」

呼び方からしてさほど上下関係という物が感じられない

二人は知り合いなのだろうか？

「えっと、お二人のご関係は？」

「あぁ、たんなる幼なじみよ」

幼なじみか

ナルホドどうりでフレンドリー

「チルさん仕事はどうしたんですか？」

一応聞いておいてやる

「部下に押しつけ」

「最悪だなおい」

この国本当に大丈夫かこんな人を隊長にして

そんな不安感を覚える彩輝はとりあえず突っ込むのをやめにした

「それでえっと・・・まずは何をすれば良いんですか？」

「ん？早速始めるか！意欲があるのは良いことだ！そうだな、時間も惜しいし始めるか。よし、まずは俯せになれ」

「俯せですか？」

「そうだ」

俺は言われるがままうつぶせになった

下はカラカラの土で多少床の土が服に付いたが、そのへんはあまり気にはならなかった

「それで？」

「ちょっとそのまま待っていろ」

「はぁ・・・」

そういってユディスは部屋の隅に置かれた杖を持ってきた

木で出来たその小さな杖を5本、俺の周囲の地面に突き刺した

「よし。では始める」

「よろしくお願いします」

と俺はうつぶせのまま言う

相変わらずチルさんはニヤニヤと笑っているしこれから一体何をするのだろうか・・・

「さて、この小さな杖には特殊な術式を刻んであってな。狭い範囲なら魔術を使わずとも十分な効力は得られる。さて問題だ。君は今から何をすればいいと思う?」

「え?」

何をすれば良いか?

そう問われてもこのうつぶせの状態で何をすればいいのだろうか

それにこの杖の効力って一体・・・

「う、腕立て伏せ・・・とかですか?」

「はずれ。それよりも簡単な事をしてもらうわ。時間が無いからそうね。立つ。それが今日の目安かしらね」

「立つ？立てばいいんですか？」

立つだけならばものすごく簡単な気がする

ただそんな簡単でないことは何となく予想は出来る

そして立つことが今日の目標だとするならば、この杖はもしかして・・・

予想通りなら・・・魔法が在る世界だから十分にあり得るな

「そう。たてれば十分ね。ただそう簡単にはいかないと思うけどね」

「なんとなーく予想はつくんですよね。もうやってみて良いですか？」

「えぇ。もう体の異変に気がついているでしょ？」

「ま、まぁ・・・」

気のせいかとも思っていたが俺の予想が外れていなければ当たり前かこれは案外きついかもな・・・

俺はこの後の苦労を想像しつつ、両手に力を入れた

「うっおおおおおっ！！！」

全力を出してみた

そして・・・

「無理だあああああっ！！！」

全力で否定した

全力で挑んで全力で否定。だって

「無理無理！！指の一本も動きやしねぇ！！」

体が全く動かないのだから

「まずは立つのが目標。じゃ、次合うときには体を浮かせるくらいまでは行っててよね」

そう言ってユディスは身を翻して部屋を退室した

次合うときっていつだ？一、二時間後くらいか？

それに体を浮かせるくらいまでは、ってことは最低限そのあたりまでは行かないと不味いって事だよな

「くそっ・・・！！」

「ちなみにあいつ、教え子には厳しいから本気でやらないと後悔するぞ」

ハハハハハーと笑いながら遠くを見つめるチルさん

なんだか遠い過去を見るような、そんな風に俺は見えた

過去に何が！？

「そんなに厳しいんですか？そうは見えませんでしたけど・・・」

確かにお淑やかとか大人しいとかそう言う雰囲気では無かったけれども、俺はチルさんがいう風な人には見えなかった

イメージ的には活発っぽい感じはしたけれども其処まで厳しいって風には感じられなかった

「いやね、私が・・・いや、よそう。これは話したくない。という訳で頑張って立つところまで持って行ってくれよ」

「は!?ちょっと、其処まで言っておいて!?気になるんですけど」

「まーねぇいいじゃない私の事なんか。ねぇ?。それにちょっと見てみたい気もするし」

「なんなんっすか・・・。他人の不幸ほど面白い物はないって事ですか?」

「お、上手いこと言うね!!なんか私にピッタリの言葉だわ!」

そーですか。よーござんしたね

俺もそんな気がしていましたよ。あなたはそんな人なんだって

仕方ない、ここは頑張るしかないか

俺は両腕に力を込めて思いっきり大地を押してみる

が、体はびくともしない

まるで全身を上から押さえつけられているようだ

「これ・・・重力ですか?」

「まぁそんなものね。その杖は重力変換するための術式が刻まれた杖だからそれぐらいの、大体半径2メートルか3メートルくらいまでなら囲えるかな」

この小さい杖が俺を地面に押しつけているのか

くやしいかな、全く刃が立たない

いや、体が立たないか

あれ?俺うまいこといった?

いやいやいや、そんなことはどうでもいいんだ

妙な考えを頭の中から振り払って俺は再度挑戦してみる

だが全く動かない

「これ・・・無理だろ」

「?無理ってわけじゃ無いぞ?私は一日で膝立ちまでいったから」

この人が一日で膝立ち!?

いや、女性だからか?だがしかしこの人で一日・・・

絶望と希望が入り交じった妙な感じが俺の心をぐーるぐる

俺に出来るのか？いや、でもやらなきゃ何をされるか・・・

「ふんぬおおおお！！」

俺はその瞬間、思いついた

足も使わないとだめだろう！

手と同時に足にも力を入れる

とりあえず膝が地面に立つくらいにまで動かせれば・・・

糞っ、どれだけ重力かかってるんだよこれ！？

その後も俺は努力をし続けた

そりゃもう全力で

そして、数時間後ユディスさんが戻ってきた

仕事の方をしていたのだろう

体にはエプロンのような物をつけていた

「どう？多少は進展合った？」

「あの・・・・トイレ行かせてくれませんか？」

「進展は？」

「えっと・・・・もう力尽きて無理なんですけど・・・」

「へぇ。で、ちょっとは体あがったのかしら？」

「えと・・・・ちょっとだけ・・・」

「1センチ弱だけどね～」

ひぃ・・・・そんな付け足しはいりませんって！！

なんて心の中で俺はチルさんに怒鳴ったが本人は知らぬ顔

っていうかもうその辺が限度。これ以上は無理です。無理

口笛なんて吹いていやがるものだからとっとばかり怒りマークが頭に浮かんだ

「んー・・・まぁちょっとは進展あったみたいだし努力もしてたみたいだから今日はここまで。流石に立つまでは行かなかったのは残念だけどね。時間が短いから出来れば明日か明後日までにはクリアしてもらわないと」

「無理」

「断言しない。ほら、もう立てるでしょ」

ユディスさんは杖の一本を地面から抜いた

それと同時に体の金縛りが解けたかのようにスッと体が軽くなる

「う、うおおお！！！立てる！立てるぞおおおっ！！」

「当たり前だっつーの」

そして俺は何故か立てることに超感動していた

身動き取れない状態で何時間もいたもんだから体を早く動かしたかった

大きく背伸びをして、その後俺は修練場を走り回った

やばい・・・動けるってこんなにも感動できるもんだったのか！！

「さ。終わったら店の手伝いしてね」

ぴたりと足が止まる

店？

お手伝い？

俺が？

「ほらさっさと来る！」

そう言って、近づいてきた俺にエプロンを投げつけた

そのエプロンを広げると其処にはこの世界の文字で何か書いてあったが読む気になれなかったので訳すのは後でにすることにした

それをかけて俺は店の方へと出た

店にはいろいろなお土産のような小物などが並べられてる

小さなストラップのような物から大きめの傘や置物なども置いて在るのが見える

「さて、じゃぁチルは其処に立ってて」

「私？」

意外そうな顔をして後ろからチルさんが修練場から出てきた

「どうせ暇なんだろ。店の前に立って宣伝でもしてろ」

「く・・・仕事をサボった罰かしら・・・」

チルさんは渋々店の前に立った

「さー見てって見てって～！！」

声を上げて周囲の客引きを始めた

この人本当に騎士隊長なのだろうか。なぜ土産物屋の客引きをやっているんだろうあの人

「高い！汚い！バッタ物！！ぼったくりの――――」

「ぶっ殺すぞテメェ！！」

あ、素が出た

流石隊長！！人目もばっちり引いてます

頭から煙を出すかの如く、地面に突っ伏す彼女はばっちり通りすがりの人たちの視線を我が物としていた

「いてーよーいてーよぉー」

「お前、心は子供のまま育ってんのな」

ぶん殴ったチルさんを見下ろしてユディスさんがつぶやいた

同感です。なんかものすごく同感出来る気がします

『月下の酒飲み達』

気が向くままに足を踏み入れた国

大地が少ないその王都の至る所で最近見かける張り紙

その内容を見て、俺はその張り紙をバックの中にしまい込んだ

この剣で・・・この剣に俺は・・・

「親父、今日も一杯頼む」

「あいよ。ここ数日通い詰めてますよねぇ？どうしたんですか？」

小さな船上屋台によった俺は小さな赤い暖簾をくぐって酒を頼む

月が綺麗な今日のような日には酒を飲んで寝るのが一番だ

それと滞在数日の間に、この国の酒が異常なくらいに美味いことも知った

水の綺麗な土地だからだろうか

これまでは作り方の行程や原料の種類の違いでしか酒の違いは感じなかったが、水でこれ程までに違うのかと驚きを隠せなかった

「ここの酒が美味いんだよ。まぁ此処だけじゃなくてこの国の酒って事だけどな。俺の国じゃ酒に此処まで水にこだわることがなかったからな」

自国の酒も不味いことは決してない

このはらわたに染みついたあの味はきっと忘れることが出来ないであろう

慣れ親しんだあの味は文字通り故郷の味でもある

あの地で取れた水と言えば森の湧き水くらいであまり水の品質というのは気にすることがなかったからこの地で出会った酒にはまさに驚かされる

「お褒め頂き光栄ですなぁ。仕入れ先の酒屋のじじぃにも聞かせてやりたいですね」

「お前も相当な歳だと思うが？」

すでに髪が抜け始め、皺も増えたその顔を見て俺は酒を飲み干した

慣れ親しんだ味も良いが、こういった酒を楽しむのもまた良い物だ

特にこの国の酒は他国と比べても群を抜いている

「ハッハッハ、そうでしたな！いや～私も歳ですかねぇ」

親父はそう言って自らのおでこをぺちんと叩いた

コップを台の上に置くと中の氷がからんと涼しい音を立てた

「まだそんな口をきけるだけマシだろう」

「ちげぇねぇなぁ！！ほれ、ミンクスの肉煮込みだよ」

「あぁ。そうだ親父。これについてどう思う？」

俺はごそごそと小さな日用品だけが入るバックから一枚の紙を取り出す

それはこの国で開かれる大きな武闘大会の知らせだった

国籍や年齢を問わないという事で十分自分にも参加資格はある

しかも賞金が出るのであれば自分も出たいと思っていたところであった

「あぁ、これかい」

親父さんは紙を受け取って内容を一読する

「近々そいつが開かれるらしいが・・・こういう事は珍しいのか？」

「どうかな。上のお偉い様が軍隊の徴兵の時にやったりするぐらいかねぇ・・・」

「ほぅ。そんな兵の徴集をするのかこの国は？」

俺は初めて聞いたと驚きを見せた

そんな方法を取る国は珍しいだろう

基本戦争事になれば、女子供、それと老人以外。まぁ行ってしまえば健全な成人男性のほとんどが徴兵で戦争行きが決まっているようなものだ

この国のように篩を掛けるという事は恐らく、より優秀な人材を選び兵の質を上げる事だろう。だがそれはすなわち、兵の数が他国に比べて圧倒的に少なくなるのではないだろうか

兵の質、兵の数

両者とも欠けてはならない大事な物である

質が悪ければ数の理を行かせず、兵の質が良くても、千ならまだしも万の単位でその差が出てしまえば苦戦は必死

本来戦は数で押し切る物だった

だが魔術が確立してからはそれが徐々にそうとは言えなくなってきている

たった一人の魔術師の放つ魔法が、何千もの人を死に追いやることも不可能ではないからだ

とはいえまだまだ数の力というものの力は絶大だ

国力としては数がある方が断然有利、という見方をされてしまうため兵が少なければ其処は弱小国と他国に見られる

他国から下手に見られれば、他国との交易や駆け引きに置いても侮られて良いように動けないだろう

上に立つ者は下に立つ者を見下し、自らの都合の良いことを押し通そうとするからだ

「振るうにしても徴兵する兵の数が少なければ戦では不利になるのではないか？戦だけの話ではないが」

「さぁてねぇ。私は只の飲み屋の主人だからねぇ。ただ一つ言えるのは、今回のこの大会は徴兵が目的ではないらしいんだよ」

「ほぅ？」

「ほらだって、募集が貴族さんだ。護衛を選ぶにしては事が大きすぎるだろうし賞金が出るってのもおかしな話だ」

「確かにな」

俺もその点には同感だ

賞金なんか出せば、むしろ質の悪い者が集まることを覚悟しなければならない

とはいえ賞金無しでは人が集まるわけもない

騎士になりたいという募集の元で行う大会ならともかく、そうでないならば一体何のために開いたのだろうか

そこまでの大金まで出して大会を開く意味が分からない

護衛が欲しいのならギルドにでも行って頼めばいいのだから

「それならば、この武闘大会は何のために行うのだ？」

「さぁて。飲み屋の主人でも分かることと分からないことが在りますからねぇ」

そう言って笑う親父を見て俺はもう一口お酒を飲む

はらわたに染みる良い味だ

「ただ近頃、周辺の国で集まって会合をするっていう噂があがってましてね。開催日がその会議の予定の日と重なるんですよ。もしかしたら余興か何かのつもりなんでしょうかねぇ・・・」

「余興、か」

国のお偉い様は何を考えているのやら

会議の席を設けてそんなものを見る時間があるなら国のために働けと言ってやりたい

とはいえ自分もその余興には参加するつもりでいるのだがな

「ま、あくまで噂ですけどね」

そう言って親父はもう一杯お酒を俺のコップについでくれた

解けきっていない氷がカランとまた音を立てた

そのコップには自分の顔が映っている

「そういえばお客さんは何処の出なんですかい？」

「俺か？前来たときに言わなかったか？」

「そうでしたっけぇ？」

「まぁいい。シーグリア王国だ」

それを聞いた親父さんは驚いたように目を丸くした

まぁそれもそうだろう。あんな大陸の北からこの南のアルデリアまで来る者はあまり居ない

自分はそんな珍しい人間の一人なんだという自覚はあまり無かったが、親父さんの反応で自分が本当に珍しい人間なんだなぁと実感した

「開いた口が塞がらんか？」

「あ・・・いえ。あまりに遠い場所からお越しなのだなぁと思いましてね」

「まぁ確かにな。確かに遠い地まで来たものだ。未だにそんな距離を移動してきた自分が嘘のように思える」

「最近はあまり北の方では言い噂は聞きませんよね」

「あぁ」

最近北方の地域ではいざこざが続いている

故郷がどうなったのかは分からないが、そう言った情報はこの南にまで流れてくる

どうやらそうとうもめているらしいな

「心配にはなりませんか？」

「え？」

「故郷ですよ」

驚いた。心でも読めるのかこの親父は？

心の中でつぶやいたことをグサリとついてきた

「故郷か・・・。久しく戻っていないし気にはなるな」

「そう言えばお客さんは憲兵か何かなのですかな？」

「・・・どうしてそう思う？」

「お腰に携えたご立派な剣が見えたものでして」

「なるほど。憲兵とは違うな。旅人と言うのが正しいだろうな。各地で金を稼いでは各地を股にかけている」

「ほう・・・それはそれは」

「主な仕事は指名手配犯を捕まえたり大会に出て賞金を稼いだりと

いったところか。だが最近は主に魔獣退治をやっている」

「魔獣退治ですか」

「あぁ。これは良い金になる。正規の商売人じゃない奴らの護衛をすることも在れば困った地方の農村に現れる魔獣を討ち取ったりな。討った魔獣の肉や毛皮も金になるしな」

「ほほぅ。でも一歩間違えたら危険ではないですかね？」

「まぁな。だがそうなる危険がある仕事は受けないようにはしている」

「大変ですなぁ」

「お互い様でしょう」

「私なんかは客に酒とつまみの提供を、代わりにお客様から愚痴とお金をもらうのが商売の男でさ。険なんか振ったことすら無いですよ。おっと」

親父さんはそう言って台の下からもう一本酒を取り出した

「そいつは？頼んだ覚えは無いが？」

「いえ、そろそろ常連様がご到着になる頃合いかと思いましてね」

「こんな店にも常連はいるのか」

「そりゃぁいますともいますとも。あなた様のような流れのお客様から毎日通い詰める方までそりゃぁ沢山」

この船の客が座る席はあと二つ

客は三人まで入れるということか

「ほう。ではこれから来るというそいつも毎日来るのか？」

「いえ、この方は毎週この曜日にいらっしゃるのですよ。お仕事の関係で他の日には来られないらしいのですが良い情報などを提供してくださいますよ。代わりに私はお酒とおつまみを提供するのですがね」

「面白い親父だな。流石俺が気に入った店だ。ここ何度か来るうちにちょっとした我が家のように感じられるよ」

「そいつはうれしいですが、近いうちにまた旅に出るのでしょう？」

「あぁ。だが、とりあえずは此奴に参加してからかな」

俺は武闘大会の紙を指で弾いた

軽い音を立ててその紙には小さな爪痕が残った

「言っただろう。金を集めてるってな」

「まぁ頑張ってくださいね」

「あぁ」

「やっほー親父ー！今日も来たぜー」

軽く止めてある屋台の船がぐらりと揺れる

俺は軽く後ろに体が傾くのを感じた

誰かが俺の後ろから船に乗ったのだ

その女の声がして俺は振り返ってみた

其処には一人の女性が立っていた

白く長い髪が月に照らされて輝いているかのような錯覚を見せられる

腰に帯剣をしているのだが服装は普通によく見る町民のようだ

「お待ちしておりましたよ」

「お、用意がいいねぇ！じゃぁ早速一杯もらおうか」

女性の顔は綺麗に整っている

美しい女性だ

その女性は俺の隣に腰掛けた

「今日は先客ありかい」

「えぇ。ここ数日通い詰めてらっしゃる旅人さんですよ」

「たびびと？此処であったのも何かの縁だ！一緒に飲まないか？」

俺は突然の申し出に頭が真っ白になっていた

突然見ず知らずの美女に酒に付き合えと言われても全く思考回路が追いつかなかった

「どうした？」

「・・・あ、あぁいや。突然のことで驚いてな。まさか貴方のような綺麗な女性がお酒を飲まないかと誘ってくるとは思っていなかったからな」

「綺麗な女性・・・そ、そうですわよオッホッホッホ。わたくしはとてもお淑やかで美しくお金持ちな淑女で名前は・・・」

「ぷっ・・・いや、止めといた方が良いですよ。慣れないことはするもんじゃない」

親父はそう言ってその女性を笑うのをこらえながら助言する
女性の方も取り繕うのをあきらめたのか歯ぎしりを立てながらお酒を一気に飲み干した

「やってられっか！笑われてまですることじゃなかったよ・・・・あー恥ずかしい恥ずかしい・・・・」

お酒のせいか恥ずかしかったせいか、女性の頬はうっすらと赤く染まっていた

顔を隠して突っ伏した女性を尻目に俺はその女性が帯剣している剣に興味を持った

一見何もないように見えるが柄をたどればちゃんと其処に真っ黒の鞘があることが分かる

一見綺麗な女性の素肌も、よくよく見ればしっかりとした筋肉が見える

「・・・何じろじろ見てんのよ？」

「いや、良く鍛えているなと思ってな。お前は憲兵か何かか？」

「いや、国の騎士だよ」

「なるほど。・・・・・・・・・勤務中に酒を飲んで良いのか？」

「今は勤務時間外。何しようと私の自由よ」

「そりゃそうか」

「こう見えてもこのお方、なかなか強いんですよ」

親父に言われるまでもない

此奴が強くなかったら俺なんてカス以下の評価しかもらえないよ

隣に座るこの女性の力量は、手合わせしなくとも分かる

男だ女だ言う以前の問題だ

核の差は歴然だ

「強いのか？」

「強いよ」

「そうか・・・・・どうでもいいが、今夜は月が綺麗だな」

女性は酒瓶を持ちながら体を後ろに倒して暖簾の外に顔を出す

「おお、本当だ」

「今夜は雲一つ無く綺麗な星空だ」

「でしょー！」

満天の星空の中心で一際大きく光り輝く月を三人は見上げた

「綺麗だな・・・」

「前から思っていたんですけこっちの世界にも月って在るんですね」

「こっちの世界？」

「あぁ・・・えっと・・・うん。何でもないです」

「そうか？まぁ月が綺麗に出る夜は酒が美味くなると言う。どうだ、試すか？」

ユディスは酒瓶を俺に向けてくる

店の二階のバルコニーで椅子と机を出してのんびりと夕食を取っていた俺は遠慮しますと首を振った

「未成年ですから」

「ん?だってお前はもう17だろう?立派な成人じゃないか」

「あ~・・・そうだったね。こっちじゃそうなんですけど俺の故郷は20歳からって決まってるんですよね」

「ふ、故郷がどうであれ、この国の法ならば全然問題はない」

とはいってもお酒にはなんというか、抵抗がある

昔親戚のおじさんに日本酒を飲まされた思い出がスッと脳裏をよぎった

あのときは確かお正月で実家に皆が戻っていたときのことだ

毎年お祖父ちゃんの家では正月に親戚一同が集まって唄って踊って大騒ぎするのが恒例となっていた

俺にとっては美味しいご飯が沢山出てくる日の一つで新年を祝うなんて事には全く興味はなかった

そんな時に親戚のおじさんが俺にいたずらで日本酒を飲ませたことがあった

その人も酔っ払っていたのか顔を真っ赤にしながら美味しいジュースだと嘘をついて俺はそのコップを受け取った

疑いもせずに一気に飲んだ俺は、その後の記憶がない

とはいえまだ小学生低学年頃の記憶が鮮明に残っているのはあのとき飲んだ日本酒の味を舌が覚えているからだろうか

あんなもの飲めるか！と言いたいが、今回俺に差し出されているのは日本酒ではない

何酒かは知らないが、飲める物で在ることを祈るよ

せめてチューハイぐらいの物を頼む！！

「そ、そうですね。じゃぁ一杯もらおう・・・かな」

「それでこそ男だ！」

グラスを手に取り、其処にユディスさんはお酒をついでいく

無色透明、臭かったりという強烈な臭いはないがそれでもこれがお酒だと分かるくらいに独特の香りが漂う

逆らえないし・・・ちょっと勇気がいるなこれは

落ち着けー俺。深呼吸深呼吸

数回深呼吸をする俺を見てユディスさんはにやっと笑う

「思いっきりいけ！思いっきり！」

「ど、努力します」

無色透明の液体にびびっている俺は引きつった笑顔で答える

こんな飲み物に恐れを抱くのはどうかとも思うが、正直嫌な物は嫌なのだ

しかも未成年の俺がまさかビールやチューハイならともかく、こんな酒を飲むことになるとは予想だにしていなかった

なんて言ったって俺は健全で法律を守る普通の高校生なのだから

「いきます・・・」

グラスに口をつけ、ゆっくりとお酒を喉に流し込んでいく

目をギュッと瞑って飲んでみる

そしてグラスに入った液体が全て喉を通り過ぎると俺はそのグラスを机の上に置いた

飲めないことは無く、予想以上に飲みやすかったというのが本音だ

しかし

「ゲフッ」

「プッ・・・・ッハハハ！！ゲフッってお前！！」

「うっ・・・・・」

とてもとても恥ずかしい・・・・

この後気がつけば朝になるまで俺とユディスさんはバルコニーでひっくり返っていた

あの後の記憶は、無いに等しい

記憶にあるのはあの後二人で酒を飲みまくったことのみ

ただ俺は二日酔いをせずに帰還し、対するユディスさんはしっかりと二日酔いで酔いつぶれていた

ユディスさんは相当苦しそうに店番をして、俺は杖の効力で地面に縛り付けられたまま約半日放置された

進展としては体が少し慣れたのか昨日よりも更に数センチあがったことだ

ただそれを喜んで良いのかどうかは分からなかったが、そのときの俺の頭は昨日あの後何があったのかという、誰にも分からない謎の事でいっぱいだった

酔いつぶれたユディスさんもその答えは知らなかった

『月下の酒飲み達』（後書き）

えー、恐らくですが２１日には検定があり、その後にはテストが続いたりしてちょっと勉強に割く時間が多くなるため、今後、今月の更新頻度はかなり落ちると予想されますのでご了承ください。これからも烈風のアヤキをよろしくお願いします

『特訓の日々3』

「むぅ・・・・時間が限られてるっていうのに、何でこうも重力に逆らえないのかしらね？」

「そんなあきられた顔されても知りませんよ。っていうかこんなもの普通の人が出来るはず無いでしょう」

二日酔いから復活したユディスさんは俺を見下ろしながらつぶやいた

俺を地面に縛り付ける杖はいっこうに立たせてくれずに、俺を縛り付けたまま

これまで頑張ってみたものの、結果はようやく腕立て伏せのような状態まで体を浮かせるところまで行ったくらいであり立つなんて以ての外な状態だった

こんなもの、本当に立てるものなのだろうか

「うーん・・・。これだけ続けてればたぶんいけるはずだと思うんだけどなぁ。これでどう？」

そういってユディスさんは杖の一本の刻まれた文字に小さく爪で傷を付けた

体がスッと軽くなるのが感じられたが、それだけだった

体は依然として重りのように重く、進展はない

「だめかぁ・・・。どれだけ筋力無いのよ」

「これ筋力とかの問題なんですか？」

「まぁね。魔術で身体能力を上げれば出来ないこともないけど魔術は使えないんでしょ？」

「え、えぇ」

「まぁ別にそんなことしなくてもたぶん君ならこれくらいいけるはずなんだけどなぁ」

「本当ですか？これどんな仕組みなんですか一体？体を重くするんですか？それともこの杖で囲まれた中だけ重力が変わってるんですか？」

「ん？これ？んー、重力変換には違いないんだけどね。囲った内部の魔力分の量を空間内で主さに変換するように作ってあるわ。聞いた話じゃあなた本人が魔力を持ってるって言うから特別に作ったんだけどね。本来なら魔石とか置いて代用するところだけどそんな高額で魔力の詰まった石なんてほとんど無いからちょうどいいと思ってね」

「ん、待ってください。それは別に魔力を消費するってわけじゃぁ無いですよね」

「そうよ。それならとっくに魔力が枯れて重力変換が終わっちゃうじゃない。変換と言うよりその魔力の量がそのまま重さになるって感じかしら。この術式は重力変換と魔力量の測定とを組み合わせた術式だからね」

「必要あるんですか？普通の重力変換で良いじゃないですか」

「そうすると重力設定するのが面倒なのよ。重力重くしたいけれどそんなに魔力詰めるの大変だし・・・・」

「もしかしてディアグノの木で出来てるんですかこの杖？」

「そうよ。よく分かったわね。媒体とするにはうってつけだからね」

・・・・・・

ふむ・・・・・

「えっとじゃぁ、ですよ。俺の魔力量どれだけあるかーなんって事は聞いたりしてます？」

彼女は少し考えて首を横に振った

「ツキから聞いたのは君が異世界人って事、それと魔力を体に溜める性質があるってこととかかな」

なるほど

よくもまぁ疑わずに信じてくれたよな事人もって、そんなことはどうでもいい

「たぶん、魔力量が半端じゃないんだと思います。魔力がどれくらいの量でどのくらいの重さになるか基準とかが俺には分からないんですけどね」

「うん」

「一応はかれるのかどうかは知りませんけど、恐らく生まれてからずっと全部の属性のマナとか魔力を吸収していたらたぶん凄い量になると思いません？」

「・・・・全部の属性？」

「えぇ。どれだけ魔力の器が大きいのかは知りませんけどとりあえずずっと吸収している体質ですから」

「ちょっと、全部の属性ってどういうこと？」

「たぶん、そのままの意味ですはい。そーいう体質らしいです」

しばし無言が続いた

俺はマナや魔力や、その辺のものを吸収してしまう体質なのだ

マナや魔力がほとんど無いあちらの世界でこれだけ溜まったのだから、両者が満ちあふれているこの世界に来てからどんどんと吸収しているだろうと思う

限界は、未だ自分でも分からない

というか俺はマナやら魔力やらを無意識に取り込んでいるらしいのだがあんまり自覚というものが無い

ユディスさんは部屋から出て行き、戻ってきたときには小さな石のかけらを手に持っていた

小さな欠片は指でつまめる程度のものでそこら辺に落ちていそうなものであったことから恐らく店から出て道ばたに落ちていた石のかけらを持ってきたのだろう

それを杖が囲む中に入れてみた

小石は俺の顔のすぐ横をものすごいスピードで落ちていき、地面に小さく深い穴を開けた

汗だらだら

今目の前を通り過ぎていった小石

いったいどれだけのスピードと威力が合ったのだろう

一メートルもない場所から落ちた小石は地面にまるで雪へと落ちたかのようにスッと消えていった

「あんた・・・・何者なの？」

俺はその問いにどう返せばいいのか分からなかった

結局、俺は考えた末に「異世界人です」と答えてみた

「さて、じゃぁ気を取り直して、魔力分の重力変換ならば本人の力量が分かると思ったんだけどちょっと計算違いだったわ。ってことで魔術と剣術から先に行きましょうか。どっちからやりたい？」

「んー・・・どっちの方が良いと思いますか先生は？」

俺はユディスさんの事を先生と呼ぶようになっていた

やっぱり師の事は先生と呼ぶのが学生の俺にはしっくり来る

「そうね。今回はまぁ実際に戦場で戦う訳じゃなくて単なる試合だからね。とりあえずは剣術の上達をオススメするよ」

「剣術ですか・・・。なんっていうか、魔法のない世界から来たからかも知れないですけど魔法の方が強そうなイメージがあるんですけど？」

まぁ普通に真剣も強いと思うけれどもやはり魔法の方が遠距離攻撃とか出来るし強いんじゃないかなぁと思ったりもする事があるけれども先生が進めたのは剣術であることにもやはり理由があるのだろう

「そんなことは無いわよ。確かに魔術が使える人と使えない人では魔術が使える人の方が有利ではあるわ。戦場に出る魔術師は大きく二つに分類できるんだけど分かる？」

「え？えーっと・・・攻撃か補助かの違いですか？」

俺にはそれぐらいしか思いつかなかった

でも何となく違うような気もした

「まぁそれもあるんだけどちょっと視点が違うわね。魔術特化型と魔剣士型の二つよ」

「あぁ、なるほど」

魔法が使えるからと言って必ず後衛というわけでも無いのか
でも魔法を使える人間はそれほど多くないはずだからどちらに割くにしても人数には限りが出てくるだろう
それにもちろん、後衛よりも前衛の方が危険度は高いだろう

「魔術師とやり合うならともかく、剣士に当たったら魔術じゃどうしようも無いのは分かるわよね？いくらマナを魔力に変換する事を短縮できる貴方でも、術を発動させるのには時間がかかるでしょうしね。まぁ其処が貴方の短所でもあり長所でもあるんだけどね」

「どういうことですか？」

「要するに、マナを魔力に変換しないでそのまま術の発動が出来ると言うことは、マナを取り込むロスとかが無いわけ。その分素早く術式を組み立てる時間にあてられるしもし本当に全属性の魔力を持っているなら相手は何が来るのか予想が出来ないわけでしょ」

「あぁ・・・なるほど・・・」

「とはいえマナを使わない貴方でも感じることは大事よ。マナを感じ、属性を見極め、対策を練る。相手がどのマナを集め、何を狙ってくるのかを考慮した上での戦闘になるわね。魔術を使う相手には頭を使わないといけないのよ。そうでないとすぐに戦場じゃぁ死に繋がるからね。今回は負けに繋がるわけだけど」

「死に繋がる・・・って言われてもなぁ・・・あんまり実感沸かな

いし本当の戦場に出るって訳でもないしなぁ」

「まぁ君はそれぐらいの覚悟で、相手を殺す覚悟くらいで挑むのがちょうど良いわね。良い意味で言えばあなたは優しそうだからね」

良い意味で・・・ねぇ

自分はそんなキャラだったか？と首をかしげるも実感は無い

まぁ日本人である以上平和を望むのは否定しないが

「じゃぁ何をすれば良いんですか俺は？」

「私に全力で挑んでみる。んで参ったと言わせてみる。まぁそれが出来ればもう恐いものは無しよ」

「いや、ひれ伏させるって・・・」

「あ、私強いから大丈夫。遠慮句無くどうぞ～。まずは様子を見させてもらうからどんどん斬りかかってきて大丈夫よ」

いや、そういうことじゃなくてだなぁ

俺は仕方なく放り投げられた木の棒を手に取る

それなりに強度はありそうな棒で握りやすいように削ってある

両手で振るうことは出来ないがとりあえずやってみよう

左手のみでこの棒を支えるのは難しいがとりあえず遠心力で振り回せば何とかなるだろうか

とりあえずこの人がどれだけ強いのか、実力が分からないとはいえ自分に稽古をつけてくれる以上自分より強いのは確定だろう

それなのに参ったを言わせるなんて

まずは俺の力を見るらしい

「俺、右手使えないんですけど」

「あー・・・、まぁいいわそのままでやりなさい。筋力アップだと思うのよ！」

おぉ、なるほど。技術の上達と同時に筋力アップを図るのか

今は両手で握る木の棒がずしりと重く感じている

これを自在に振り回せるくらいの筋力が在れば、まぁ在るに越したことはない

実際同じ大きさの木の棒を目の前の女性はクルクルともてあそぶようにして振り回している

木の棒は持ち手だけが握りやすいように削られているだけでその他

はそのまま小さな木の幹のような大きさだ
見たところ芯と棒が折れることはなさそうな強度なので存分に振り回せるだろう

「じゃぁ行きます！」

俺は大地を蹴った
両手で握りながら走るがそうスピードは出ない
射程に入ると俺は右から左へとその棒を薙ぎ払う
先生はクルクルと回していた棒を右手に持つと俺の放った一撃を難なく止めてしまう
遠心力を存分に使って、思いっきり振り切ったつもりだったが、弾かれたのは俺の方だった
相手の棒は勢いを受けきり、こちらの棒は衝撃で反対側に跳ね返る
女性、それも片手で受け止められたことに俺はこの人が自分で言った通り、本当にこの人は強いのだと思わされた

「くっ・・・・！！」

俺はとっさに跳ね返った反動を利用して左足に重心を寄せた

体を跳ね返った棒と同じ方向に回転させ、そして右足を振り上げて回し蹴りを放った

だがそこでもまた驚かされた

反対側から遅い来る踵を、バシンと手のひらだけで受けきったのだ

そしてそのままその手は俺の足をつかんでしまい身動きが取れなくなってしまう

「どうしたどうした？」

「ま、まだまだっ！！」

足を強引に引っ張り靴から足を抜いた

そして後ろに大きく振り上げた木の棒を振り子のようにして先生に向かって振り上げた

迫り来るその木の棒を、先生はスッと体をずらして避けてしまう

勢いを止めきれずに振り子の力で棒は上へ上へと振り上げられてしまう

がら空きになった左半身をカバーしようと右手を動かそうとしたが、今は自分だけが攻撃できる立場にあることを思い出し、その手を攻

撃に転じさせた

防御の態勢をとっていて右半身を先生に向けていた俺はすぐさま右手で先生めがけて伸ばすが距離が足りない

それどころか振り上げていた左手の棒が頂点まで登り切ったのか、今度は来た道を変えるように下へと落ちてくる

一端距離を取るべくその振り子の反動を利用して後ろへと後退する

そして着地してすぐさま足の違和感に気がついた

そうだ。靴を取られていたのだった

右足はしっかりと大地を踏みしめている

日頃靴を履かずに外へ出ない俺にとってはそんな些細な事で大きな変化を捕らえていた

左右のバランスがおかしく感じてしまったのだ

靴のある分だけ、左足が僅かに上に上がっているため体が傾いているように感じてしまうのだ

さらに右足にはしっかりと大地の感触が伝わるためその辺にも意識が行ってしまった

「・・・・靴・・・・・」

「ん？」

「靴返せっ！！」

「お、やる気出たみたいじゃないか！じゃぁ渡せないなぁ！！」

あの靴は、俺が高校生になったときに買ってもらった、大事な大事な靴なのだ

返してもらわないと困る

あの靴だけは・・・っ！

まぁ先生も靴をどうこうするわけでは無いと思うが履いていないとやはり、いやだ

「せやっ！！」

今度は遠心力ではなく、自らの筋力でたたき込む

振り下ろした棒は弾かれることなく、ぎしりと音を立てて二人の力が拮抗した

今更ながら気がついたが恐らく遠心力だけで振り回していただけだからあんなにも簡単に弾かれたのだろうか

とはいえこんな重たい棒をずっと振り回していられるとは思えないが

となれば短期決戦を挑むしかない

俺はもてる筋力をフル活用して先生に向かって棒をたたき込んでいった

全て止められているが、先ほどより断然に大降りでなくなったことと棒に力が入ることでコントロールがしやすくなっているのが分かった

「おおおおおっ！！」

ガッ　ガガガッ　ガンッ

木がぶつかり合う音とは思えないような響きがこの修練場を振るわせている

全ての攻撃は止められる

このままむやみやたらと棒を振り回し続けてもうまくいかないだろう

奇策を突くか？いや無理だろう

俺の攻撃全てが止められると言うことは、先生はきちんと俺の動きが見えているのだろう

ならばそんなことをしても無駄かもしれない

奇策をつけぬなら、正面突破あるのみ！

俺はしっかりと両手で棒をつかんだ

「右手は使えないんじゃ無かったっけ？」

「上に上がらないだけです」

「なるほど」

使えないと言った右手が棒に添えられた事で目を細めた先生で合ったがすぐに目をぱっちりとひらいて俺を見据える

何をする気だと言わんばかりに、先生が距離をとった

予想外だったがまぁいいや

先生が距離を取らなかったら俺が距離を取っていただろうしな

俺の心の中には剣道場が広がっていた

ゆっくりと先生の方へと歩み寄り、両者の距離を試合開始時の立ち位置へと持ってくる

二歩歩いて礼をした

また三歩歩いて蹲踞（そんきょ）する

面は無い

胴も垂れも籠手も無い

だけど手に持つ棒が、かつて握っていた竹刀と重なる

これは剣道じゃないから剣道の考えは全て捨てる

だけど気迫だけはあのころのままで

技なんかもう体も頭も忘れてしまった

だけど不思議と剣道をしていた、あの頃を思い出す

幼い頃だけとはいえ剣道やら柔道やらをさせられて、俺は気がつけばに武の道を進んでいたのだと思う

とりあえず剣術でだめなら接近して技をかけてみるか

ひれ伏させろとは言ったが剣以外を使うなとは言ってないしね

スッと音もなく立ち上がった俺を見て、先生は棒を構えた

これまで構えずにだらりと棒を握っていた先生だったがどうやら今の俺を見て気が変わったようだった

まぁそれはそれでうれしいかな

本当ならソーレの方がやりやすいんだけどなぁ

でもまぁいいや

全力で行こう

息を止め、そして吐く

神経を注ぎ込む

何に？

斬ることに

「は！？」

弾いた棒はまるで生きているかのように再び迫ってきた

何が起こったのか？

ほぼ反射的に弾いた

それはつまり、その一撃が黙視できなかった

クルリと手の甲で一回転させ、握り直した相手側の棒が突きを放ってきた

先ほどまで感じられていた私に攻撃する事へのためらいが、消えている

ほぅ、面白いじゃない

左上から振り下ろされた棒を避ける

何と、追撃までしてくるのか？

もちろん見切れない早さでは無かった

初撃だけはあまりの反応速度に驚いたが筋力がスピードを生み出す力はまだまだひよっこレベル

事実目が追いつかないわけではない

ただ初撃の、あの初撃のスピードが在るならばそこら辺の騎士を一撃で倒しているであろう

もちろん急所に入っていればの話だが

スピードはもう少し頑張れば良い感じになるだろう

右から来る棒を受け止める

最初の方の棒の重さに任せた振りはもうしてこないようだった

それで良い

少しでも学んでくれればそれだけでも価値がある

本来は私が彼の力を見るためだけに行っているいわば見極めのような試合

これ自体が訓練というわけでは無かったのだがそうやってやって良いことと悪いことを感じ、見定めなおしていくのは良いことだ

私は彼にそれなりに弟子としては魅力を感じていた

「いいねいいね」

そう言いながら私は不意に伸びてきた右足の蹴りを左腕で受け止める

やはり筋力に難が多少あるかな

本来ならば先に重力特訓で軽く感じるようになった体を使って教えていきたかったのだが、まぁ良いか

筋トレはそのうち適当にやらせておくかな

回し蹴りを棒で受け止める

手に伝わる感触で私は歓喜している

この子本当に右手が使えないのだろうかとすら思えるような動き

左を使った攻撃が主体かと思えば右も左もほぼ同じ数ずつ攻撃を放っているのがすぐに分かった

意図してやっているのかどうかは分からないが、正直私ならこんな動きを計算できない

この動きはまるで見たことがないのだ

しなやかな、それでいて強引な、なんとも言えない攻撃が続く

いいね

そら、次は左か？いや右だった！

いいねいいね

よし、そのまま回し蹴り、そうそれが今の正解だ！

いいねいいねいいね

おっと、棒の方を忘れていた。危うく無挙動の状態から放たれるその一撃を脳天に食らうところだった

フフフフ
棒が交差する
ガリガリと下方に突き出した二つの棒が擦れる感覚が手元まで伝わってくる
この楽しい時間が終わらなければいいのに
ちょっとだけそう思った
そしてその瞬間
棒が奇妙な動きをした
くるりと渦を巻くかのようにして
まるで巻き付けるかのようにして
手に収まっていたはずの私の棒は宙へと飛んでいった
全くの予想外の出来事に困惑する私に向かって、彼はのど元に棒を突き出していた
右手のひらで突き出していた棒を押しだし軌道をずらす
するりと軽い感触と共に棒は弾かれた
恐らく止める気満々だったのだろう

まぁ、のど元に突きなんて危ない真似をする以上止める気で合ったことは確かだが、もし彼が止めることを忘れていたら恐らく突き出していた棒は喉を掠めていただろう

この綺麗な白い肌に一滴の紅い血が流れていたであろう事は目に見えていた

やっぱり甘ちゃんだったわね

殺す気でやれと言ったのに

巻き上げられ、天高く飛ばされた棒が後ろの方へと落ちる音が聞こえた

「あ・・・・」

少し我を取り戻したであろう少年が私の目を見て眉をひそめた

不味いことをしてしまった！みたいな顔をした少年に向かって私は一言

「お見事」

突然持ちかけられた特訓の話で少々面倒くさいなぁと思っていたところもあったけどこれならば十分楽しめそうだ

サボる気満々だったが予定変更

私好みの武人に仕立て上げてみせるわ！！

あれだ。うん。言い訳させてください

俺としては・・・だ。これが訓練ということをちょっとばかり忘れていただけだったんだ

うん。そう。ちょっと、思考が働いていなかった

戦っている最中、自分は何を考えていたのだろう

体全てが全力で目の前の女性を殺そうとしていた事だけが分かった

それが分かった瞬間は俺が彼女の剣を巻き上げ、そして喉へと向かって突きを放っていた時だった

懇親の一撃を放っていた

放った瞬間までは最高の一撃だった

我に返った瞬間、もうこれが止められない攻撃だと知ってしまった

止まらないっ！！

この棒が、彼女の喉を捕らえる瞬間が脳裏を掠め、そして・・・・

一種の走馬燈に近いものだったのだろうか？

目の前に、血まみれで横たわる先生の姿が脳裏をよぎった

次の瞬間には込めた力だけが乗って飛んだ一撃が弾かれたところだった

我に返った俺はまずどうしよう！？と思ってしまい、次にやってしまったという言葉が思い浮かんだ

眉をしかめた俺に先生は「お見事」、そう言ってポンと頭に手を置いた

あ・・・・れ？

それにしても何だったのだろう

俺はあんなに動ける人間じゃないっていうのは自分でも分かっているつもりでいた

あんな人間離れしたような動き、俺が取れるはずがないのに

今思えば俺はどうしてしまったのだろうか

まるで自分が自分じゃなくなるような瞬間が前にも合った

あれは確かアルレストさんと手合わせしたとき

あのときのように俺はまた、自分じゃ考えられない動きをやってのけた

何なんだろう

この気持ち

不思議と悪い感じがしないのだ

それとは別に彼女に向かって本当に危ない一撃を放ってしまったことだけが未だに俺の心に残っている

「ごめんなさい」

「なにが？言ったじゃん。殺すつもりでやれって。まぁいいわ。ねぇ君、本当は右利きなの？」

「え？そうですけど一応両方使えますけど。一応右肩が上がらないってだけで日常生活には不自由ないですよ？」

俺は別に左利きというわけではない

そりゃ右手は上には上がらないけど今も昔も本来は右利き

ただ右手が多少不自由になり左手も使えるようになって今や両利き。

凄いだろ

でもそれがどうしたのだろうか？

「ふぅん・・・。いや、思った以上に攻撃するタイミングとかのパターンが妙に読みづらかったから」

タイミング、パターンっすか？

戦っている最中はあんまりそう言うのは意識していなかったつもりだったけど、先生が言うからそうなのだろうか？

「とりあえず大体の力量は分かったわ。これぱっかりはとりあえず実戦経験不足な君はとことん場数を踏まないとね。しばらくは戦闘しまくるのが特訓ね。じゃぁ午後からは魔術の方に言ってみましょうか」

午前中の特訓、これにて終了

俺はころんと床に転がった

『特訓の日々3』（後書き）

次の一週間からテストなのでそれが終わり次第修正をしていく予定です。とりあえずちまちま書いてた続きを上げておきます

『大会の幕開け』

「わ・・・やっぱり凄いですね」

俺と先生は大会会場の入り口にいた

ポンポンと空に小さな閃光があがっている

「そうね。まぁ喧嘩好きな性分のアクリスの人間が多く集まるのは予想できてたけれどもね」

喧嘩好きなんだ。ってか自覚在るんだ

人の多さや結構大規模な事に驚いている俺の背中をポンと先生が叩いた

振り返る俺に先生が言う

「やることはやったんだから。あと負けたら負けたでそのときは仕方ないって割り切りなさい。もちろん優勝を目指すんでしょ？」

こくりとうなずく俺に先生も答えるようにうなずいた

「なら頑張りなさい。金が欲しいのかは知らないけれど出場することに意味があるのよ。まぁ私がコーチをしたんだからそれなりには頑張ってもらわないとねぇ」

「うぁー、なんかプレッシャー」

「まぁそんなに気構える必要はないのよ。私の動きについてくる事が出来るだけでも十分誇れる事なんだから」

「実感沸かないなぁ・・・」

「大丈夫。5倍くらい強くなってるから」

「聞こえは良いですけど出発点が底辺ですからね」

「気にしなくて良いのよそんなことっ！まぁ頑張りなさいよ。私も見てるから」

「はい！ご指導ありがとうございました！」

俺は指導してくれた先生にありったけの感謝の念を込めてお辞儀した

昨日はたっぷり休んで今日のために備えた

今日は、大会当日

快晴の朝だった

出場者専用入り口に名前を書き込んで入場した

とりあえず受付とは別らしいのでまずは受付をするのが最初である

冷やかしで参加するのを防ぐためにきちんと参加料は取るらしい

ちなみにこの参加料だけは国の方からこっそり支給された

俺は受付をする場所を見つけて其処に行く

二人の受付嬢に言われるがまま、名前や年齢、それと使用武器の記入をされた

今大会中、武器や杖はすべて支給品を使うことになっている

武器の力による優劣をなくすためらしい

まぁ武器は統合されるとはいえ種類ぐらいは選ばせてくれるらしい

長剣、大剣、短剣、弓、槍等々、いろいろな種類が在る中で俺は短剣を選んだ

武器の数は自由で使えるならば大剣二つや剣と弓を組み合わせることも可能らしい

だが正直限られたエリア内で戦うわけだから武器は一種類で自由に使いこなせる量というのが制限されてくる

もし弓と剣を選んだとしても、二つも使い勝手の違う武器を持てば

動きが鈍くなるのは目に見えている

本来こういう大会では剣なら剣、魔法なら魔法と一点特化で挑むのがセオリーらしいのだが、今大会のルールでは魔法の使用が許可されている事、武器の使用数が二つまでと定められている

それはつまり魔剣士の出場が可能になってくるという事だ

魔術を使え、剣も使える

一点特化よりもそちらの方が戦いに置いて有利になれるその立場を生かした人が出てくる可能性がある

ただ魔術を使える人間が少なく、その殆どが国に務める騎士であることから参加人数は少なくなると予想されたがそうも行かなかった

この大会に参加できるのは国内の人間だけではないのだ

さらに言えば参加の禁止がされているのはアルデリアのみであり、他国の騎士は自由に参加可能らしい

ただそうなると非常に不利なため、アルデリア以外の国の人間で騎士の参加は3人までとなっている

まぁ騎士はちゃんと三人までしか出してこないだろうから定員オーバーということにはならないはずだ

とはいえそれでも十分脅威である

なんと言っても現在、グレアント、リーナ、ファンダーヌの三国の

騎士がこの国に集っているからである

本当に勝てるのだろうか俺？

でも勝たなければ宝玉はお預けとなってしまう

まぁそうなったとしても、宝玉を手に入れる可能性が高いのはこの三国の騎士ということになるので俺たち異邦人の存在を知っている彼らに事情を話せば十分な管理をしてくれるであろう

だが出来るところまでは頑張ってみようと思う

魔法を使えるのは何も敵だけというわけではないのだから

俺はこの世界の言葉で短剣と書かれた文字に〇をつけ、必要個数を2と書き記す

ここしばらくの特訓のおかげで俺は自分なりの戦い方というのを見つけた

その結果が二つの剣である

右手を自在に使えないのはかなり双剣使いにとって痛手では在るが、それでも十分戦えるくらいには動かせるはずである

書類を提出して俺は奥へと進もうとしたが受付嬢に呼び止められる

「お腰の武器をお預かり致します。城内へは持ち込み禁止となりますので」

「あぁ・・・」

俺は腰に提げたソーレを外した

「ちょっとだけ我慢してろよ」

そう言ってソーレを受付嬢に渡す

受付嬢からは刀に喋りかけている変な奴に見えたかも知れないが此奴には口がきけないとはいえ意思は残っているらしいからな

だからせめてしばしの別れだけは告げておかないとな

拗ねられても困る

「大事なものなんで、大切に保管してくださいね」

「承知致しました。傷一つつけずに厳重に保管させて頂きます。閉会後にお引き取りに伺ってください。また今日の予選後に引き取ることも可能です。明日の閉会後、もし終了して一日立ってもお引き取りにあがられない場合には預かりしている品は一時的に全て国の所持物となりますので二日目以降のお引き取りはアルデリア城の方で行えます。ご了承ください」

「わかりました」

「それと大会の日程をお伝えします。初日は予選を行い、二日目に本戦を行います。予選と本戦のトーナメント表は直結しておりませんので本戦の順番の抽選も二日目に行います」

「予選の抽選はいつやるんですか？」

「はい。予選の抽選はこの受付で行います。どうぞ、この中から好きなものを一本お引きください」

「なんかおみくじみたいだな」

丸い穴に棒が入った長方形の木箱を手渡された

残り物には福があるのかどうかは知らないが残った棒は１０本ほどとなっていた

棒を引く順番は先着順らしい

別にどれになっても良いんだけど最初だけは勘弁な

そんなことを思いながら目を瞑って棒を一本引く

「３・・・か」

「それでは予選の順番は三回戦ということになります」

同じ数字が入った二本の棒が入っているということか

そして同じ数字に当たった人と戦うことになり、棒に書かれた番号は何回戦かという事か

ま、三番をもう誰かが引いたのか、まだ残っているのかは知らないが俺は引き当てた棒を受付の女性に返した

受付の隣にあった扉を抜けるとそこはどうやら選手の借りの待機場所となっているらしく、選手と見受けられる屈強そうな体つきをした男の人たちが沢山いた

ムキムキマッチョばかりではないにしろ、その静かでピリピリとした雰囲気を感じて俺は此処にいる者達は本当に強い人間なのだと思った

まぁこんな大会には腕自慢達ぐらいしか参加する気は無いだろうしねとは言っても中でも本当に強いのはごく僅かな数人だけだとは思う

全く面倒くさいよ

勝てる気がしないね、うん

歴戦の戦士と、こんな付け焼き刃な特訓をした高校生なんてはなっから勝負になるはずがないのである

それでもまぁ、頑張っては見るけれどもね

自分にも、決して彼らに劣らないカードが在ると信じて

彩輝はそう思って部屋に置かれた椅子に座る
出来るだけ端の方のあいている席を探してそこに座った俺は小さく腕を回した

「やるぞっ」

小さく気合いを入れた

開会式が始まった

選手全員は会場へと移動させられた

大勢の観客の歓声が、選手達の入場と共に会場を包み込んだ

思わず耳を塞ごうかとすら思うくらいの大音量で俺は入場と共に遠くを見つめた

前方に視線を向け、そのずっと上を見上げると特等席とも呼べそうな場所があった

他の観客席とは隔離されており、大きく迫り出したその場所には５つの席が設けられていた

一つは赤く、一つは蒼く、一つは黄色を、そして並んだ二つの緑色の席が遠くからでもよく分かるほどの威圧感が醸し出されている

５つの席はどれも空席であるが、そこに座る者が誰なのかということは安易に予想できた

「やっべ、マジで異世界って感じだ」

先導されるがまま参加者が闘技場の中央へと集まる

人数にしておよそ４０ほどであるが、誰も彼もが強そうである

とりあえず端に並んだ俺は周囲を見渡した

ものすごい人の数だ

こんな数の人間に囲まれるなんて初めてである

絶対に自分は逆に囲む方の人間だと思っていたのだが・・・・

野球選手とかサッカー選手ってこんな気持ちなのかなぁ

なんて事を考えているうちに、どうやら開会式が始まるような雰囲気である

あーやべ、緊張する

「今宵、ここに集まりし騎士達に最高のショーを演じてもらいましょう！！」

歓声がワッと大きくなる

聞き覚えのある声が会場に響き渡る

「ここに集まった者達ならばもはや無粋な言葉はいらないでしょう！！勝利をつかむのは只一人！大会の主役の座をつかむのは誰なのか！？頂点に輝くのは誰なのか！？さぁ、今それをこの場で決めてもらいましょうじゃないですか！！」

魔法か何かで声を拡声しているのだろうか？

観衆達の声よりも大きく響くその声はトルロインさんの声だった

今回の大会の開催者であり、宝玉を持っている貴族

今回の大会は４国で先駆けて精霊台保持国での会議をするための意見交換の場として提供されたアルデリアで行われるついでに、余興として開かれたものである

こんな展開は滅多にないことで、さらに其処に各国の騎士も参加するとなればとてつもないほどの大事である

会場は超満員

入場料取ってるんだろうなぁきっと

ボロ儲けじゃないですかあの人。なんというか、ダシに使われただけな気がしてきたぞー俺

商売上手だなぁ。時期もきっと会議のために合わせてきたんだろうなぁ

もしかしたら国の方とつるんでたりするのか？各国のお偉い様のためにいい余興の場を提供したりとかいう話し合いとかもしてそうな気がするなあの人

流石、成り上がり貴族ってところか

それなりの力は持っているんだなぁと少なからず思う

ま、お家を成り上がらせたのは父君の方だとは思うけどね

でもあの人も結構頭は切れる人ではあると確信できる

此処までいろいろとセッティングしたのも広く通じる顔と実力あってのもの

こんな大事、金だけで動かせるようなものじゃないからな

この闘技場だって恐らく一個人の持ち物としては大きすぎるはずだ

「ノリいいなぁ此処の人たち」

ま、ＫＹな展開よりかはマシな展開だけどね

これでしーんとしてたらあの人恥ずかしいだろうなぁ、と俺は壇上に立つ主催者を眺める

たしかエフレル・トルロインと言っていただろうか

俺は以前彼がツキの家に乗り込んできたときに言い放った名前を思い出した

そして、気がつけば更に大きな、盛大な歓声が上がっていた

俺はすぐさま視線を先ほどの迫り出した、５つの椅子が置かれていた場所に目を向けた

視界の隅で、何かがそこで動いた気がしたのと同時に、何となくではあるが周囲の歓声がその一カ所に向かっている気がしたからだ

「では、今回大会の同時期に行われる会合のために余興としてご覧になられる方々をご紹介いたします。アルデリア王国の第一王女、セレシア・ルミレ・キルト・アルデリア様！！」

わーっと歓声が上がり、観客の殆どが立っているのが分かった

拍手と歓声の中心にいるセレシアさんは蒼い椅子の前で小さく手を振っていた

あー、なんだか久しぶりに見た気がする

「グレアント王国第一王女、アルフレア・シャレル・ヴィルラート・グレアント王女！ファンダーヌ王国第二王女、エリエル・シェルトール・ロフス・ファンダーヌ王女」

隣にいる赤い髪の女性は自分のものだと主張するかのように堂々と赤い宝石が散りばめられた椅子にどさりと座る

まぁ何ともまぁ、清廉より大胆といった雰囲気を醸し出すその女性は腕を組みながら自らに向けられる拍手と優越感に浸っているかのようだ

うーん・・・何というかまぁいつも通りって感じだね

なんだか自分の中ではアルフレアさんがああいうキャラなんだという位置づけが決まってきた感じがある

そして次に、アルフレアさんの後ろから出てきた女性はベージュ色のドレスを身に纏っていた

紹介通りならばあの人がファンダーヌという国の王女なのだろう

ここからでも女性にしては高く見えるその身長はおそらく１７０は普通に越えていそうな気がする

最後に残った二つの席の主はすぐに現れた

トルロインさんの紹介と共に扉を開けて入場してきた二人は手をしっかり握って入ってきた

緑色のドレスに身を包んだ二人はトトトと小走りをして椅子に座る

「リーナ聖王国第一王女リリア・ルミーレ・ルッズウェル・リーナ、並びに第二王女、ルア・サムブェル・ルッズウェル・リーナ王女様のご入場です」

歳は低く、まだ年齢的には小学校レベルである二人の顔は遠目で見てもそっくりである

俗に言う双子とかいう奴だろうか

周りの人たちの目線も彼女たち5人に向けられている

「では、役者が全員そろったところで開会の挨拶を始めたいと思います」

それからはトントン拍子で開会式が進み、十分ほどで開会式は終了した

今日は予選を行うだけで終了であるため、予選が終われば一日フリーになってしまう事になる

本戦は明日からなのでどちらにしろ大会は二日に分けて行われる事になる

ただ自分の試合が終わっても好き勝手出来るわけではない

明日のための情報収集もしなければならないため、フリーになった時間の殆どはそちらに割くつもりである

最も、予選すら抜けられないかも知れないけれどね

付け焼き刃な特訓で何処まで戦えるのか、自分ですら分からないがとりあえず勝つための準備は出来る限りしておくべきだ

勝って、宝玉を手にするために

俺の予選は3回戦目のために、序盤の二つの戦いは見ることが出来ないと思っていたのだがどうやら待機室からでも見えるようになっていたらしく、窓を開ければ其処はすでに会場が一望できるようになっていた

すぐに試合が在るために俺は待機室で待つ

静かな待機室の空気は、まるで会場とは別世界なのではないかと思わせてくれた

外の歓声は聞こえてくるが、それすらも押し返してくれるのではないかというくらい、発言すら出来ないほど張りつめた空気が漂っている

選手が全員此処にいる訳ではないのだが、試合が近い選手は俺も含めて皆沈黙を続けている

俺の心臓バックバックなんだけどさ

そんなとき、拡声されたアナウンスが聞こえてきた

この会場には二つに分けられており、一度に二つの試合が出来るようになっているらしい

おかげで三回戦目、とは言っても一回戦と二回戦が同時に行われているために実質出番は二番目だ

「一回戦終了です。次の試合を行いますので第三回戦に当たっている選手二名は入場門側の試合会場に集合してください」

あー、やべ、俺の番だ

急に外の歓声が強くなった気がした

そして同時に心拍数が上昇した気がした

『大会の幕開け』（後書き）

えー、遅くなってすいません。
本当なら先週から書こうと思っていたのですがなかなか時間が見つからず、頭にストーリーが思い浮かばず、気がつけば後回しー見たいな感じになってました。本当すいません。
夏休みにも入ったので出来るだけ一週間分の遅れはガリガリと取り戻していきたいと思います。それと本当は全部一気に修正してから最新話を上げるつもりだったのですが修正と同時進行にしていきたいと思っています。あくまで“思っています”なのでもしかしたら気分でどちらかに偏ることも在るかも知れませんがご了承ください

『予選・正体・だーれだ』

「どう思うよ？」

「んー、あっちの金髪の方が強そうだよね。見た目じゃあっちの方が体格良いから」

「体格が全てではないとはいえ、まぁどう見てもあちらの方が有利に見えるのは仕方がないか」

貴賓席に座るアルフレアとセレシアは眼下で行われている野蛮人達の戦いを見ていた

見知った顔がいくつか見受けられたセレシアも、まさかあの黒髪の異邦人が参加しているとは思わなかった

アヤキはセレシアに参加の意を伝えてはいなかったので最初に彼の姿を見つけたときには何故こんな大会に参加しているのかと不思議がったがすぐにそれが商品目当てで在ることは見当がついた

彼からの報告にもあった宝玉

それが出品されている事を思い出してセレシアは席に着いた

隣に座るアルフレアも彼が出ていることには少し驚いていたが、クスリと笑って席に着く

そして意外と順番が早かった彼の試合が始まろうとしていた

「思ったより早かったんだな」

「らしいですね」

セレシアは成り行きでこんな武闘会を見ることになってしまった事につまらなさを感じていた

とはいえそう言えるはずもなく、ましてや在る意味公務みたいなものため拒否することすら出来ない（拒否すること自体考えていない）

友人達と久しぶりに集うとと合って、此処まで来たが正直目当ては舞踏会の方ではなかった

が、彼が出ているとなると少し興味が沸いてきた

アルフレアはセレシアとは全く正反対で、元々こういった行事が大好きで最初からノリノリだったのだが見知った彼が出てきたことに顔のニヤニヤがなかなか戻らない状態になっていた

「あいつ、何処までやれるか見物だな」

「あいつって、サクラさんの事ですか？」

「あぁ。まぁ特に強いのかどうかは判断しかねる報告ではあったんだが、対人戦なら結構実力が出るからな。それにこの大会はハズレ

が少なそうだしな」

冷やかしで出る参加者が少ない中で、集った彼らの力量は恐らく全員が一般人の中の上以上なのは目に見えている

それなら彼の実力もはっきりするだろう

優勝は、まぁ無理だな。この大会には3つの国の騎士も出ている

それもグレアント側は本気で優勝商品と賞金を狙いに行くメンツで固めてある

他の国はどうだか知らないが、皆一騎当千の実力を持つ強者であるため負ける姿が想像できない

こういった機会も滅多にないことなので是非他国の強者との一騎打ちを見られる良い機会でもある

勝つにしろ負けるにしろ、大会に出した三人にも良い経験になるだろうと思っている

「にしても、そっちだけ騎士が出てないのってなんか不利じゃないか？少なくともこっちは全力で賞金とか賞品狙っていくのにそっちだけは個人参加みたいな感じでさ」

「んー。まぁそうなんですけどね。主催者は国とは別の貴族なんですが会場提供とか大会開催の後押しをしたのはこっちですから。主催側が参加するのは・・・ね」

「あー、まぁ・・・ね。ま、私はどっちでも良いんだけどね。これだけ大きなお祭りをみれればねー」

にひひと笑うアルフレアはそのまま頬杖をついて眼下を見下ろす

そんな彼女の視線の先にいるアヤキの姿を隣のセレシアも見下ろした

彼の戦いは見たことがない

是非この機会に彼の持つ力を見てみたいものだとセレシアは思った

彩輝の初戦の始まりの鐘が鳴り響く

「先に名前を聞くよ」

「・・・ポリシーか何かで？」

「いやいや、そんなたいそうなものじゃ無いんだけどね。黒髪っていうのが珍しいものだから君のことが気になってね」

「貴方が先に答えてくださいよ」

俺は左の切っ先を相手に向ける

「おっと失礼。俺はゼルーダ・アシミニオン。アルデリアの辺境の村の出身で今は王都で店を開いてる」

「店？」

「しがない飯屋だよ。良かったら来てくれると嬉しいなぁ」

「気が向いたらね。俺は彩輝桜。本当は桜彩輝なんですけど姓名が逆なんでそっちのほうがいいかなぁと」

「ほぅ。ということはこの辺の人間じゃ無いんだね」

「黒髪、見たこと無いんでしょ？」

「そうだな。ではおしゃべりもそろそろ終わりにして始めようか」

やっと戦いらしい雰囲気になってきた

突然自己紹介が始まったので話の流れに少し乗ってしまったが、どうやら開戦となるらしい

俺は両手に持つ短刀を力強く握りしめた

キッと相手を睨み付ける

相手も俺をにらみ返し、そして飛びかかってきた

相手は太刀のような巨大な木刀を振りかぶった

この大会では全ての武器が支給品で、それらはすべて木で出来ている

故に其処までの重傷を負うことは無いと思う

まぁ其処までしたら流石に不味いらしいので俺が狙うのは場外である

相手に勝つ方法は三つある

一つは不戦勝

二つ目は相手に降参を言わせること

三つ目は場外である

一つ目はまず無いだろう

二つ目、これは相手に実力で上回る事が条件である

確実に相手を戦闘不能状態に、反撃できない状況に立たせることが出来るならばこれが有効になる

そして今俺が狙う三つ目は相手を場外にして勝利する方法

これをするためには普通相手を放り投げるなどして、相手を無理矢理場外へ押し込む方法しかない

戦いに夢中になってひかれたラインを越える、なんて事は望めない

かといって自力で押し出すなんて、俺には無理である

だから、此処は相手の力を利用する

相手には俺が確実に攻めてくると思わせるように、しっかりと両手を握る様を見せつけた

ぶつかり合いなら負けないと思ったのか、俺の予想通りに相手は接近戦を持ち込んできた

俺は相手の太刀を両手の短刀で受けながら徐々に後退する

相手に、自分の方が力が上だと完全に思わせる

そして俺はひかれたライン際すれすれまで追い込まれたように、見せる（・・・）

「終わりだな・・・・」

相手がぽつりとつぶやいた

完全に勝ちを確信している目、そして態度であった

相手は受け流しているばかりの俺にたいし、突きを放ってきた

切っ先がどんどんと俺へと向かってくる

まだだ

あと少し、後少し・・・今だっ！！

キィン

どすっ

俺は突きを受け流し、そのまま相手の右側へと大きく飛び込む

そしてそのまま無理矢理体勢を入れ替え、相手の背中に膝蹴りを見舞わせた

ただこれだけでは決定力不足

無理矢理な体勢のため、威力はほぼ無い

だがこれが目的。俺が周りから飛び膝蹴りをしたと思わせることが目的であり、今後の布石でもある

相手とラインの位置まではまだ少し距離がある

だからもう一押し

相手が突きをするため前へと状態を移動させた状態で俺の回転飛び膝蹴りで体勢の立て直しを出来ないようにする

そして、放つ一撃は誰にも悟られないように・・・・

あいてはごろんと転がり、地面に引かれた白い線を越えていた
何が起こったのかときょとんとした目が俺を見上げる

「ありがとうございました」

俺は一礼して控え室へと戻った

これで俺の予選は終了したので後は他の選手の情報収集をしなければならない

そのため、俺は客席の方へと移動した

控え室にいても気まずいだけだし

試合が終わって俺は観客席の方へと行った

きちんと落ち合う場所を決めていたのですぐに彼女とは出会えた

「お、お疲れ」

「お疲れ様」

俺を観客席で出迎えたのは先生とツキであった

二人は妙な串焼きのようなものを片手に俺を出迎えた
小さな湯気がその串焼きからあがっており、焼きたてなんだと俺は推測してみた

「おい、上手いこと行ったじゃないか！！」

席に座るなり、隣の先生が俺の背中をバンバン叩いてきた

「誰も、この距離からはお前が魔法を使った事なんて見えなかっただろうな。あんな真似、私でもできない。あれこそお前の能力だよ」

俺もあれほどまでうまくいくとは思っていなかっただけに今、拍子抜けして腰が抜けそうだ
うまくいかなかったときのことは、考えない

「ま、あれが本当に強者だったらまぁどうなっていたかは分からんが、まぁこの予選で篩(ふる)いにかけたわけだから明日はこう上手くは行かないぞ」

「はい。だと思いますよ。正直実力で何処まで行けるのか心配ですけど」

「なに、このメンツで勝ち抜ける方がどうかしてる」

「そんなに絶望なんですか・・・？」

恐る恐る聞いてみると、先生はハハハと笑う。無表情で

えー・・・勝率零っすか

「今大会の優勝候補を上げるとしようか。グレアントの騎士団長であるシレンシス・ルーだ。此奴に勝つのは今のお前じゃ無理だ」

「えー、じゃぁなんで俺この大会に出てるんっすか・・・」

「しらん。成り行きだろそんなもの。まぁ私との特訓で君の実力は上がったわけだし良いじゃないか」

「言いくるめられているような気がしないでもないな」

「それともう一人、ラミア・シェークス。リーナの近衛隊長だ。ファンダーヌはたいした騎士を出していないらしいから其処まで警戒はしなくて良いと思う。どれも聞いたことの無い名だからな」

そういって先生は対戦表を鞄にしまう

眼下では第5試合が始まろうとしていた

ちょうどそのシレンシス・ルーの戦いがみられるらしく、先生はあれがグレアント最強の男だと指さした

みるからには普通の男に見える

紅髪で右手には支給品の木刀が握られている

以前グレアント王国でみた騎士服では無いようで、普通の地味な服を着ている

木刀は俺と戦った相手が持っていた太刀ほど長くはないが、それでも彼が持つことで十分な威圧感を感じた

「よく見ておくと良い。彼も魔剣士だ。参考に・・・ってここで魔法を使うかどうかは分からんがな」

その強いらしい男と対峙するのはこれまた大きな男であった

大男と言う言葉がまさにピッタリ来るような体格で身長2メートルは確実にあり、それでいて体格が良い

きんにくもりもりって奴だね

その男はそれこそ自身と同じような巨大な剣を、開始の鐘の音と共に振りかざす

シレンシス・ルーも同時に動いた

俺は次の瞬間言葉を失った

片手

彼は片手で迫り来る巨大な剣を止めたのである

あの剣に込められた力は一体どこへいってしまったのだと言わんばかりに軽々と剣を止めた男はスッとジャンプして受け止めた刃の上へと着地する

木であるため靴がきれたりという事はないが、あんなところになんで立てるんだ！？

次の瞬間、シレンシス・ルーは男の背後に回り込んでまるでラリアットのように相手を地面へと押し倒す

そしてのど元に剣を突きつける

男が剣を手放し両手を上げて降参を告げるまでに、１０秒とかからなかった

早い・・・

そして強い

絶望的だ。勝ち進むのは

「勝てないねこりゃ」

あんなのが居たのでは勝ち目がないじゃないか！

「こらこら、早々にあきらめてどうする」

「いや、先生も勝てないって言ってたし、もうこれ無理ゲーに等しいじゃん！！無理でしょ普通に考えて！！」

俺は眼下で勝利したそのシレンシス・ルーとかいうやつを指さした

あんな巨大な一振りを片手で止めるような奴とどう戦えというのだ！？

「ま、あんなもの見たらそうも思うか。ま、彼と当たらないことを祈るんだな」

「他人事みたいに・・・まぁ他人事ですけど。どちらにせよ勝ち進めたとしても彼と必ず当たりますよ」

「安心しろ。あんなレベルの奴らはあと何人か居るはずだからな。まぁあいつが一番強いだろうが」

いやいやいやいや、安心できねーって！あんなのがごろごろいてたまるか！

と、そこで俺の視界が真っ暗になる

誰かが俺の後ろから手で両目を隠しているのだ

「だーれだ？」

いやいやいや、なんか現実に在りそうでないような状況になってるんですけど俺

え、なにこれ？なにこの状況？

流石に漫画やアニメなどではこの状況に陥（おちい）ったとき、胸などが頭に当たる描写があるがそう言ったことは全くなかった

でもこれはこれでなんか新鮮である

そしてこの声にも聞き覚えがあり、その声の主が誰であるかも見当がつく

ここで間違えたら何を言われるか・・・

まぁ、皆アルデリアに集まっているのだから彼女がいる事に何の不思議もないのだが

俺は両手で俺の目を隠している人物の名を口にした

「えーと、一条さん？」

「ハズレだ」

「え！？」

パッと視界が明るくなった

急に目に光りが入って少しまぶしかったが、それ以上に俺は驚いて振り向いた

完全に一条さんだと思っていたのに、聞こえてきたのは先ほどと違う、これまた聞き覚えのある声

振り返った俺の後ろには、地味で茶色のローブを身に纏ったアルフレアさんがいた

そしてその後ろには黒髪のあの人も

「あ、アルフ――――」

「せっかくわざわざ正体を隠して来ているのだ。大声をだすな」

俺の口をとっさに塞いだアルフレアさんは俺の耳元でそう言った

え！？っていうかなんで此処にアルフレアさんが！？あっちの貴賓席に居たはずでは・・・

「それぐらい察しろ。まったく」

「いやいや、なんで此処に居るんですか!?」

俺は声を殺して問いかけた

アルフレアさんは俺の隣の開いていた席に座る

まぁ席というより長いベンチのようなものなのだが

「いや、何となく君と話がしたいと思ってな。と、隣に居るのは君の師匠か?親しげに話していたようだが」

「え、あ、まぁそんなところです」

「ふむ。お前が弟子をとるとはなぁ」

「げ!?」

「最初に『げ!?』は無いだろう『げ!?』は」

「いやいやいや、なんで、いや、そりゃ来てたのは知ってるけどなんで・・・ここに・・・まさかセレシアに言ったか?」

「いや、言ってない」

先生、慌ててるなぁ

そりゃぁ一国の王女だから分からなくはないけど。でもそれにしては驚き方がちょっと妙な気がするのは気のせいだろうか

もしかして知り合いだったりとか？

アルフレアはローブの下からにやりとした顔を覗かせた

「いやなに、こんなところに居たのかと思ってな」

「あのー・・・お二人って知り合いか何かなんですか？」

「ん？言ってないのか？お前の立場を」

アルフレアはきょとんとした顔で先生に聞いた

先生の方は、指で頭を掻いていた

なんというか、気まずそうな感じだ。聞かれたくないのか？

「え、あ、いや、ほらさ。私ってもう身を引いてるから言う必要は無いかなぁって」

「そんなことだろうと思ったよ。彼女はアルデリアの、先代国王の妹だ」

・・・わーお

『予選・正体・だーれだ』（後書き）

なんだか二章はさっさと終わらせたい気分

『予選後のお誘い』

「さぁて、決行は明日だ。皆準備は出来ているな?」

俺は同胞の四人に確認をとった

小さく薄暗い小屋の中で残りの三人は無言で頷き、それぞれが決意に満ちた瞳で俺を見返す

人数は少ないが、やろうとする事に置いてはかなり大胆で、なおかつ大きな事件になるだろう

我々は、同じ志を元にした同士

そして、憎むべき敵をこの手で始末する

「すみませーんがぁ・・・」

突如四人の後ろから声がした

誰だ!?

誰かがそう叫び、四人が一斉に振り返った

ここに集った四人の同士以外にここに居る者は居ないはず

「少々そーれに私も混ぜてはくれぇませんかねぇ？」

「誰だ貴様は！？」

一人が卓上に置かれた剣を手にして男に向ける

「おっとっとぉー。そんな物騒なもーのを向けないでくださいよぉー」

「貴様が誰かと、問うている！」

男はニヤニヤと笑いながら小屋に一つしかないドアの前に立っていた

「私ですか？わーたしはそうですね、イチとでも読んでください」

「・・・ではそのイチとやら。貴様は一体何が目的だ。そして何故この場所を？仲間にして欲しいというのはどういう事だ？」

「一つずつ答えるとぉー、目的は宝玉。この場所はそこの貴方をつけてきました」

指を差された男は一歩後ずさり、自分も含めて三人が彼を見る

仲間達からの視線が向けられ、その男は何も言えなかった

絶対にこの場所を悟られないように集まるように気をつけろと散々言っておいたというのに、そんなにあっさりと居場所がばれたのは痛い

もし仲間になりたいという彼で無ければ、我々はアクアサンタ騎士団によって一網打尽だっただろう

我々は騎士では無い

故に、直接戦うとなるとこちらの方が分が悪いのは明らかなのだからその点、この男は一人で現れた

構図だけで言えば四対一。こちらが有利

「そして仲間になる、と言うよりは手を貸して欲しいのです。もーちろんあなた方のために私も力を貸しましょう」

「待て。お前は何故私たちの目的を知っている？」

「まぁ当たり前のぎもーんですねぇ。えぇ知っていますとも。まぁ情報源は言えませんがね」

「情報源？誰かに聞いたのか？」

「詮索はしない方が身のためですよ。フフフ」

男はにやりと笑った

その不適で不気味な笑みに全員が悪寒を覚える

この瞬間この場に置いて、四人はこの男の支配下に置かれたのだ

「リーダーはいるのぉですか？」

「リーダーは居ない。居るとするならば我々四人全員がリーダだ」

「そうですか。まぁ良いでしょう。それで、私を迎えてくれるのですかぁ？あなた方の仲間に」

「・・・・お前が国の回し者の証拠でないことは？」

「そうですね。私がその回し者でないという証拠はあーりませんがぁ、しかしあなた方には何の興味もない。目当てはただ一つ、宝玉のみです」

「・・・・わかった」

「ちょ、ちょっとまてよ！」

「そうだ。もう少し話し合うべきだ」

もちろん俺が決断を下すことではないし、軽々しくＯＫを出すわけにも行かないと仲間達が止めに入る

「すこし、話あってもいいか？」

「えぇどうぞどうぞぉ。ご自由にどうぞぉ」

男はそう言って小屋の角に置かれた椅子に腰掛ける

そしてニンマリと笑って俺たちを見つめている

何なのだろう突如現れたあの男は

「どう思う？」

「国の回し者・・・というのは無いだろう。我々の事を知っている以上、国の回し者ならすでに俺たちはすでに捕まっている。なんせ四人だからな」

「だが・・・あの男、信用できるか？」

「信用できるかどうかはわからん。あいつの心を読める者が居るなら見てみたい。それより使えるかどうかだ」

「どうだろうな。仲間に入れて欲しいとは言ってきたが、それはあいつの目的のために俺たちが利用されるという事だろう？」

「逆に言えば、一人では出来ない。目的のためには俺たちが必要ということだ。金や商品に興味がない俺たちならば求めるものを取り荒そう事もないからな」

「その点で言えば、あいつと争う必要はない、ということか」

「そしてあいつも俺たちに協力すると言っている。どうせ利害は一致しているんだ。俺たちは仲間は一人でも多い方が良いからな」

「まぁ四人で全てに決着をつけるのはきつすぎると思っていたからな。この場所がばれている時点で、俺たちは捕まっていても不思議じゃない。どうせなら実行に移すべきだ」

「だな」

「ということで、いいなみんな?」

全員が頷き、男に向き直る

男は椅子に揺られていたが足でそれを止める

「結論は?」

「いいだろう。お前を俺たちの仲間に入れてやる」

男はクククと笑う

「懸命な判断ですよ。では、明日の予定を聞きましょうか?あ、そーうそう言い忘れておりましたが、現地では見方となる人物が一人

居ますので動揺しないよーうにぃ。予定の方は、私から伝えますので」

「・・・わかった」

四人は、明日の予定を男に話した

男はまたしてもクククと笑う

決行は明日

予定に変更無し

彩輝はフラフラと商業区域を歩いていた

会場で行われていた予選は滞りなく全て終了し、まだ日も明るいので俺は以前参加費プラス余った分をお小遣いとして使って良いと言われていた分を持って街へと繰り出した

特に欲しいものは無いのだが、どうせ元の世界に帰るまでつきあう世界だ

いろんな物を見ておきたいと思ったのがきっかけだ

と、何故かガイドにツキが付き合ってくれることになった

先生は仕事があるからと自らの店に戻っていった

俺のために半日店を閉めていてくれたようである。ありがたい

今日も街中は活気で溢れていて、中には他国の人と思われる人たちがいくらか見えた

この大会や会談に合わせて、大会観戦や騎士としてついてきた人たちが今国内に多くいる

俺とツキはいろいろな店を回りながら見知らぬいろいろな物を見て回った

「へぇ、ってことはあれってそんな事が出来るんだ」

「うん。だからいつも常備してる」

会話をしながら次は何処に行こうかと考えていたとき、俺の背後から二つの衝撃が襲ってきた

どすんどすんと連続して背中に何かがぶつかって来たのだ

「な、なんだ・・・!?」

「やほー！」

「どうも」

「なっ！？」

俺の背中には二人の少女がくっついていた

緑色の髪をした二人の姿はうりふたつでまるで双子のようだ

茶色のローブを纏った二人の少女が何故俺の背中にくっついているのか？

「え、えっと、どちらさんで？」

俺は首を後ろに向けて、背中にくっつく二人に聞いてみる

二人は首を上げて俺を見つめる

「私たちはね――――」

「こら、声を落とせ」

そんな二人の後ろからまたしても別の人が現れた

青年で年齢は目測二十ちょっとぐらいだろうか
腰に帯剣しており、男はなんだか面倒くさそうに二人の首を鷲掴みにする

「すみませんねお二方」

「あ、いえいえ」

男が謝り、俺は大丈夫ですと手を振ると、首元を捕まれた元気な方の少女が俺をビシッと指さした

「しっておるぞ！お主、先ほどまで戦って負った奴だろう！」

「え、あ、もしかして客席で見てたの？よく覚えてたね」

これは驚いた。さっきの俺の試合を見てたのか？
なんというか、少し恥ずかしくもあるが・・・

「まぁの。お主の髪の色でいっぱつでわかったわ！」

「あー、そういやそうか」

俺だけ髪の色が黒かったのだ。すぐにわかって当然か

それにしても初対面で背中に飛びつかれるとは流石に思っていなかったが

後ろの人はお父さんだろうか？にしては帯剣するなんて・・・もしかして騎士とか？

「なぁお主、昼はもう食べたのか？」

「え、昼飯か？そういや食ってなかったなぁ・・・いろいろあって忘れてたよ」

「わしはお主が気に入ったぞ！バドール、この者を食事会に招待してもよいじゃろう？」

「王女がそう仰るのなら。お二方、もし良ければ私たちと共に遅めの昼食はいかがでしょうか？」

俺とツキは顔を見合わせた

え、今なんつった？王女？もしかしてこの二人・・・・

俺の目の前で、首元を捕まれた二人が笑いながら俺たちを見ている

「え？王女？ってことは、もしかしてお二人がその、リーナの？」

「そのような・・・勿体ないお言葉です。私なんかお呼ばれする意味がありません」

ツキはそう言って身をかがめた

「まぁそう言うな女の方。以前からチラチラと男の方はきいておったが、意味はなくともそのご友人とあらば歓迎する理由には値する」

「と、いうかさ、ちょっと道のど真ん中で話することでも無いし、身を隠して来てるんなら場所を変えた方が良いんじゃないですか？」

「む、それもそうだな。では歩きながら行くとしよう。運べバドール」

「思し召しのままに」

そう言って男は二人をひょいと担ぐ

男の広い両肩に二人は座るがその重さなど感じさせないようだった

「じつはな、お主を探しておったのだよ」

「え、俺ですか？」

俺は少女を見上げる

歩きながら、何処に向かっているのかは知らないがとりあえずご飯が食べられるところだろうとは思う

そうして皆で歩いているとそんな風に少女が言ってきた

「なんで？」

「まぁのー、こちらの国にもお主のような黒髪の女児が現れて・・・と、お主は知っておったなたしか。アーマルジュンから聞いておるぞ」

ん？なんか聞き覚えがあるな。たしか水鏡で話したあの髭をリボンで巻いたぽっちゃり系の老人か

すると女児っていうのはまぁ、千尋ちゃんのことだよなぁと俺はあの女の子のことを思い出す

「まぁそれでだ、一応もう一人、ええとなんと言ったかな。あの髪の長い・・・」

「一条さんですか？」

「おぉ、そういう感じの名前だったはずだったと思うが彼女も今家来に探させておる」

みんな・・・・来てるのか

「今日は皆で楽しくお茶会と行こうではないか！」

そう言って少女は進行方向に指をびっと差した

『昼食時の来臨』

「おっすアーヤん！久しぶり～」

「ついさっき客席で合いましたよね」

「気のせいさ。寂しかったぞ」

「はいはい」

「ところで、だ」

「うん？」

「あそこに座っているのが彼女で間違い無いんだな？」

「・・・・あぁ」

彼女が指さした先を見て俺は頷く

此処はアルデリア城内のとあるお客様専用の食堂のような場所である

とはいっても俺が此処に滞在していたときには使ったことがない場所であった

ここは別格、それこそこの国に招かれたとってもお偉い様でないかぎり使えないような、超高級食堂なのである

そりゃまぁ前にグレアントで見た兵士用の食堂よりもとても豪華なものであった

超巨大な長テーブルにずらりと並んだ椅子

高級そうな壁と床、そして天井から煌びやかな装飾を施された明かりがいくつも吊されている

部屋に入った時はあまりの綺麗さにびっくりしたよ

まぁそれに見合うお客様を入れる場所だから当たり前なんだけど

まず案内人に連れられて最初に二人の小さな王女とお供らしきバドールが入っていった

そして奥に並べられた二つの椅子にそれぞれ座る

俺とツキは互いに顔を見合わせ、二人の近くに座った

実は俺たちよりも先客が居た

小さな女の子が、長いテーブルの真ん中あたりの位置に座っている

その女の子は俺たちが入ってきたのを見て顔を上げた

俯いていた少女の目が、きらきらと輝いていた

そんな彼女の目を見たのと同時に、一条さんも入ってきた

此処で冒頭に戻る

一条さんは俺の隣に座る

位置的には俺はツキと一条さんに挟まれて座っている状況

気まずいな・・・・なんか・・・こう・・・・

俺は両隣に女性が座るという緊張の中で、先ほどの少女を見た

俺たちとは反対側に座っていたのだが、一条さんが手招きをすると顔を輝かせてこちらへテーブルをくぐってやって来た

そしてすぐさま一条さんに抱きついた

落ち着くのかどうかは知らないが、隣から見ている俺でもこの少女が力一杯一条さんの服をつかんでいるのがわかった

一条さんは一条さんで自分に抱きついてきた少女の頭をなでている

「寂しかった、千尋ちゃん?」

「うんっ」

顔を一条さんの服に埋めて少女はそう言った

「ちゃんと合うのは初めてだね。私は一条唯。それでこっちが桜彩輝君。よろしくね」

「うん。おにーちゃんもよろしく」

「お、おぅ」

満面の笑みを浮かべて、彼女は俺を見上げて

俺はちょっと本気で元の世界に帰る方法を探そうと思った

「実はもう一人、ここに呼んでいるんだけど・・・・まだ来てないみたいね。先にはじめよっか」

そう言って強気の方のリーナの王女がグラスを手に取った

目の前には一応グラスが置かれており、中には赤い液体が注がれていた

なんだろうな、と思いつつもそのグラスを手に取った

隣で臭いを嗅いでいた一条さんは「お酒、って訳じゃぁなさそうね」とつぶやいていた

まぁ未成年ばっかりだしね、この部屋に居るのまぁ大人も居ないこともないけど

「おぉ、何とも言えないこの味！」

隣の成人した女性を見て自らのグラスを見た

乾杯、とかはしなくて大丈夫だったのだろうか？

「乾杯とかしなくていいんですか？」

「あ、それね、私もフレアちゃんに聞いたんだけどそういう習慣無いんだって。むしろ何故と聞かれて困ったよ」

「あー・・・まぁ俺も聞かれたら答えられないなぁ・・・」

そんな乾杯のルーツとかどうでもいいし

じゃぁ俺も、とグラスに入った液体を飲んでみた

・・・確かに表現しにくい味かも

「なんだろう、こう、摩訶不思議な味と表現するのが一番適しているような」

「なんだお主等、この味が分からんと言うのか？」

「え、あ、んー・・・なんていうか、味覚の違いでも在るのだろ

うか。ねぇ？」

「ちょ、振らないでよアーヤん。でもまぁそうかもね。住む世界が違えば食べ物にも差は出てくるだろうし、同時に味覚も変わってくるんじゃないかなぁ」

あー、かもしれないなぁ

でも基本は変わらないはずだ

甘い酸っぱい苦い辛いしょっぱい等々、根本的なことは変わらないはずだ

と思う

俺たちこっちの世界の住人じゃないから絶対理解は出来ないけどね

「んー、そういえばもう一人来るって言ってたよね？」

「ん、まぁな。呼んでは居るが、来るかどうかは分からぬな。あちらの都合もあるから無理には誘うなと言ってはあるのだが」

そこで俺はふと疑問に思った

そこで隣にいる一条さんに聞いてみた

「あの、一条さん、もう一人って・・・誰なんでしょうか？」

「ん？そーねー・・・だれかしら。ねぇ、えっと・・・そう言えば名前を聞いてなかったんだけど二人の名前聞いても良いかな？なんか今更だけど」

そう言うと二人のうち、元気な方の小さな王女はあきれたように言った

「お主等・・・今更それを聞くとは無礼じゃのー。それに一度は耳にしておるだろう。二人とも会場にいたのなら」

「あ」

俺はそれで思い出したのだが、そういえば会場でトルロインさんが王女の名前を読み上げていたような気がする

まぁどちらにせよ、あんな長い名前を一発で覚える自信はないというのが本音ではあるが

でも名前を覚えていなかったのは事実だし、それが無礼に当たるのも何となく分からないでもない

「もう一度、聞かせてくれない？」

一条さんがそう言うと、元気な方の王女が仕方ないなとつぶやきながら己の名前を告げた

「私はリリア・ルミーレ・ルッズウェル・リーナ。双子の姉だ。そしてこっちの大人しいのが双子の妹、ルア・サムブェル・ルッズウェル・リーナだ」

「やっぱりこっちの世界でも双子とかはいるんだね」

「らしいですね。でもなんか性格が真逆みたいな感じですよね。活発なのと大人しいのと」

「二卵性双生児なんじゃない？」

「あぁ、なるほど」

二人の王女は頭にハテナを浮かべていたがまぁ気にしない

「あ、それともう一人呼ぶ予定の私たちの世界の人ってどんな人なんですか？」

「俺の事か？」

「ぎゃぁ！？」

「んおっ！？」

俺と一条さんは二人して飛び上がってしまった

突如後ろから図太い声が聞こえてきたのだから、それも気配も足音も無く後ろから聞こえてきたらそりゃーねぇ、びびるわ

二人してびくっとなった後、同時に振り向くとそこには大柄な一人の男が立っていた

黒髪黒眼、そしてあのバスの中で一度だけ目にした姿

俺は大柄な男を見上げて自己紹介した

「どうも、桜彩輝っていいます」

「あ、私は一条唯。適当に呼んでくださって結構ですよ」

「湊千尋です」

「俺は佐竹幸男（さたけゆきお）。よろしく」

スッと差し出された手は大きく、ゴツゴツとしていた

だけど握ってみればまるでこの人の人柄が出ているかのような優しさに包み込まれる感じがした

一条さんも握手をしているところで俺は何故か無意識に口走っていた

「優しい人なんですね」

そんな無意識な独り言に気がついた俺は、むぐっと口を閉じて自分は一体何を言っているのだと思った

一条さんも不思議そうな顔で男を見ていたが、やがて握手を終えると佐竹さんが口を開いた

「どうしてそう思う？」

「え、あっ、うーん」

図太い声でそう聞かれた

俺はうーんと、何故か口走ってしまった事について考えてみる

上手い答えは浮かんでこなかったので「何となくそんな気がして」と答えた

佐竹さんは「そうか」とつぶやいて目を閉じる

「自分では優しいかどうかは分からないが、だがこの体格のせいで勘違いをされることはなんどかあるな」

「へぇ・・・」

まぁ無理も無いか

ぱっと見て熊かと思うくらいの体格だからな

「突然不良共の喧嘩に巻き込まれたり」

「ひっ・・・」

「結婚することを伝えに行った彼女の家で、ご両親に泥棒に間違えられて後ろから扇風機とフライパンで殴られたりとかあったな」

「ちょ、後者は別として前者は笑い事にすらならないわよ！」

一条さんがそう言うと、懐かしそうな顔をして「あれは大変だったなぁ」とつぶやいた

何が合ったんだろうね

「え、っていうか結婚してるんですか？」

と俺が聞いてみると男はこくりと頷いた

ふむ？だけどあのバスは主に帰省客ばかりが乗っていたはずだが、そうなるとあのバスには奥さんは居なかったということになるな

それを佐竹さんに聞いてみた

突っ込んで言い話題かどうかは分からなかったし、地雷踏んだらどうしようかとも思ったがなんとかそんな話題では無かったらしく佐竹さんは普通に話し始めた

「仕事の都合で一日早く彼女は帰省していた」

この人も不運だったろうに

「お主等、立ち話もなんだ。座って話をしたらどうだ?」

「それもそうだな」

「席とかは決まっているのか?」

「いや、適当で良いんじゃないですか?」

「そうか」

男はどさりと俺の隣に座った

それからちょっと遅めの昼食の時間となった

「ん？」

「どうしたアーヤん？」

「え、いや・・・気のせいです。何でもないです」

食事中、リリアが俺たちの居た世界のことをしつこく聞いてきたのでいろいろと教えていたら突然腰のあたりに違和感を感じた

ちょうどそこにはソーレがある場所だ

でもまぁ、気のせいだろうと思っていた

「それで、そのクルマとやらの餌はなんなのだ？」

今は車の話になっているのだが、リリアは何故か車を生き物と勘違いしているらしく、燃料のことを餌とか言っている

それを一条さんが生き物じゃないと訂正をしていた

その時、気のせいだろうと思っていた腰の違和感が俺の体にしっかりと伝わった

バッとソーレを見ると、カタカタと揺れているのが分かった

え・・・

何しろ初めての経験だからそれが何を意味しているかは俺が知っているはずもなく、ただ鞘から出してくれと言わんばかりに揺れているのが分かった

「どうした、アーヤん――――？」

「で、伝令です！！」

突如、食堂の巨大な扉が開いた

入ってきたのはアクアサンタ騎士団の衛兵だった

「アルデリア王国領土内にレッドテイルが進入との伝令が入りました。進行方向は西、こちらへ向かってくるとの情報がありました！」

食堂にいた者達は手と口を同時に止めてその伝令に耳を傾けていた

「紅龍・・・」

「レッドテイル・・・って、もしかしてアーヤんをさらったっていうあれ？」

俺はこくりと頷いた

西に進路を向けているということは、単純に考えればその紅龍は東の方角からやって来たということになる

その方向にあるのは、俺がさらわれた龍の巣窟のあったオラージュ山脈

まぁ、間違いないだろうね

となると目的は何だろう

あの黒龍みたいな特別な事例で無いかぎりはこちらに襲いかかってくることは無いだろうが・・・

一応龍にも意思や感情があり、自ら戦いを好まない龍が居るということはファルアナリアさんやセレシアさんにも伝えてある

これからは自己防衛以外で龍に勝手に攻撃を加えないように手配すると言ってくれたのでおそらく襲ってくることも無いと思う

一応こちらへ飛んでくるということで俺は到着予定時刻をその騎士に聞いてみた

「はっ。恐らく遅くとも数分後にはこの地点に到達すると聞いております」

だから慌てて入ってきたのか

まぁそうだろうなぁ

他国の王女も居るわけだし、安全確保が第一だもんな

「とりあえず俺ちょっと行ってきます。ちょっと気になることがあるので」

そういって、俺は部屋を飛び出していった

誰かが俺の名前を呼んだ気がしたが、俺は足を止めなかった

俺が向かうのは城の屋上近くの展望台

ただその場所に行くには王族に許可をもらう必要が在るのだが、以前俺は城の中を自由に歩き回れる許可をもらっていて、その情報は見張りの兵士にも届いている

俺は二人の兵士が守っている通路を無言で駆け抜けていくが、どちらも俺を止めない様子を見て少しホッとした

城内にも龍がこちらへ向かっているという情報は来ているはずなのだが周囲の兵士達はなんら変わらず業務をこなしている

とりあえず俺はその展望台に到着する

「東・・・東・・・・こっちか」

ぐるりと円をえがくバルコニーの東側へと俺は移動した

それと同時に大きく風を切り裂く音が聞こえる

目の前には、以前俺がオラージュ山脈で見たのと同じ種類の龍が羽ばたいていた

そして後ろから多くの足音が聞こえてきて、俺はすぐにみんなが俺を追いかけてきたことに気がついた

安全かどうかも分からないというのに二人の王女まで一緒とは思わなかったが

（龍の神子よ、久しいな）

「あなたは？」

（お主に我が子を授けた者だ）

あぁ、あの龍ね

ソーレの親父さんか

『俺が守りきれなかったもの』

目の前で佇む紅い鱗を身に纏う龍

城の頂上に佇むその龍は城下からでも十分に確認できた

ずっと翼を羽ばたかせているのに疲れないのだろうか、さして荒くもない吐息がすぐ近くで聞こえてくる

この姿を最後に見たのはどれくらいだろうか

一ヶ月・・・？やばい。もう来てからどれくらいの日数が立ったのか忘れた

それくらい密度が濃い毎日を送っているとも取れるが、正直そうじゃなくていいので平和に暮らしたい。うん

でもなんか・・・また何か厄介事をこの龍が持ってきているのではないかと彩輝センサーがビンビンに反応しているのだが

「何か・・・話でもあるんですか？」

（そうだな。話はいくつかあるのだが、そうだな。騒ぎになる前に場所を移したいのだが良い場所に心当たりはあるか？）

「それもそうですね」

良い場所、とはつまり彼の巨大な体が十分に収まり、尚かつ人目につかない場所の事だろう

たしかにまぁ、こんな国の中心にある城の真上で龍が飛んでいたら、そりゃ下から見てる人には大騒ぎだろう

まぁ若干手遅れな気がするが

ソーレが先ほど揺れていたのも、親の接近に興奮でもしていたのだろうか

「良い場所、ですか。この辺に在りますかねそんな場所？」

俺は後ろを向いて他の人たちに聞いてみる

とっさに聞かれても、俺にはすぐに思い浮かばなかった

「え、良い場所って、何が？」

あぁ、そう言えば龍の声は皆には聞こえていないんだっけ

なら俺が全部通訳することになるのか

「えっと、此処で話をしたらいろいろと騒がしくなるので場所を移動したいらしいんですよ。こちらの方が」

「お、おぬしは龍の声がわかるのか！？」

「そだよ。まぁ龍だけだけどね。なんか龍の神子とか言うのになっちゃったらしくて」

「あ、そういえばさ。私さ、馬の声聞こえるんだけど」

「なぬ！？」

一条さんがぽつりとつぶやくと、リリアが目を見開いて驚いていた

ていうか馬いるのこの世界？

この世界に来てそれなりにこの世界のことをちょっとは学んだつもりだったけど馬がいるなんて初耳だ

でもまぁリリアっていう小さな王女が驚くのも無理は無いだろうね

流石に俺も龍と会話したときにこればかりはかなり驚いたからね

今この場で俺が龍と話せる事について驚いていないのは、以前一緒に龍と出会っている一条さんとツキぐらいか

二人は一応俺が龍と会話できることを知っているから驚かない事に別に不自然さを感じては居ない

「で、良い場所在りますかね？」

「あ、そうだあそこは？ほら、今日やってた大会の会場」

一条さんは突然の龍の訪問にも動じることなく案を上げてくれた

「確か予定では今日の夕刻までは人が立ち入らないと聞いておるぞ」

付け加えるようにリリアもそう言って

あぁ、良いかも知れないととっさに思った

上空は開けているし龍がそこに降り立つための広さも十分

周囲の客席のおかげで周囲からは見えない用になっているので周りが騒ぐことも無いだろう

その後、龍が俺の心に語りかけてきた言葉を聞いて、ゆっくりと振り返った

「――――乗れって・・・」

「乗る？これが、これに？」

一条さんは俺たちを指さし、次に龍に向かって指を差す

まぁそうなるな

「俺たちが、あの龍の背中にって事でしょうね」

「うおー！」

一番最初に発狂したのはリリアだった

龍が俺たちに乗りやすいようにと背中を向けて、巨大な尾をバルコニーへと引っかけると、その上をリリアが両手を上げて走り抜けていく

怖さなど感じさせないようなはしゃぎようだ

次に妹の方も「よいしょ」と声を上げてバルコニーの手すりによじ登ると、同じように大きな尾の上をゆっくりと歩いていった

恐くないんかい！と突っ込みを入れながら一条さんがそれに続いた

「ぜ、全員乗れますか？これ？重量的な意味合いで」

（たやすい）

あ、そう・・・

どうやら此処にいる全員を乗せることは可能らしい。

百キロは余裕で超えているが、それでも龍にとっては軽いのだろう
まざまざとその巨大な生物の、人間との違いを見せつけられたようだ

（しっかり捕まっていろ）

「しっかり捕まってだって」

そして全員が龍の背中に乗り終わると龍の尾がバルコニーから離れるのを感じた

俺が通訳して全員がしっかりと深紅の鱗にしがみつく

その場に滞空するために羽ばたいていた翼が突如体を大きく揺らして上昇する風を捕らえた

ぐ・ぐ・ぐっと一瞬、世界がぶれ、周囲に映っていた景色が一瞬にして視界の外へとはじき飛ばされる

龍と共に空を飛ぶのは二度目だが、一度目は気がつけば遙か上空に居たためにさらわれた瞬間のことを覚えていない

優雅に空の旅をしていたあの時とは違って今度は龍は大きく羽ばたき大空へと飛翔する瞬間に立ち会った

まぁ元々空飛んでたじゃんという突っ込みは無しだ

強烈な、まるで引力に引っ張られるかのように体が引きはがされそ

うになるも全員がそれに耐える

バドールとかいう二人の側近も二人にはきついだろうと飛翔前に二人を片手で抱え、自らの体重もあわせて片手で龍の鱗にしがみついている

（場所は何処にするのだ？）

頑張って鱗にしがみつく俺の心に龍の声が響いてきた

あ、あの大きな円形の建物！と言おうにも口が開けない

まるでジェットコースターにジェットエンジンを取り付けてもこうはならないと絶対に思う

何でわざわざグルグル横回転しながら飛ぶんじゃー！と叫びたくなる状況で口が開けるはずもない

だが、龍の方も俺の心を読み取る事が出来るため、すぐに目的の場所を見つけると円形の形をした建物に向かって大きく体を傾けて急降下していく

全員の悲鳴が聞こえてきそうで、その声すら急降下の速度について行けないかのように感じられた

最も、全員が恐怖のあまりに口を開けなかったというのが本当なのだが

龍は一、二回翼を羽ばたかせて着陸する

隣を見ると一条さんの顔と髪が凄いことになっていたので目をそらした

ツキやバドールなどは初めて龍に乗ったにしてはなかなか健闘したようで、若干ふらつきながらもいつも通りの表情で自ら大地へと降り立った

そんなバドールの片手にしっかりとしがみついたまま気絶した主である二人の王女の無事を確認すると、どっさりと地面に腰を下ろした

そしてえっと、佐竹さん・・・だっけ？

あの人はゆっくりと龍から降りて、ふらついてこけた

俺もとりあえずここから降りることにする

鱗を伝って地面に足をつける

死ぬかと思った

ある意味安全が約束された絶叫マシーンよりも何倍も恐かった

命綱も安全ベルトも何も無い状況であんな体験をしたとは到底思えない

もっとゆっくりと飛んでくれれば良かったのに・・・

察してくれ龍よ・・・心を読めるんだから・・・

大地に足をつけた後も妙な浮遊感を感じて俺はとっさに大地に両手をついてふらつく体が倒れないように支えるが膝ががくりと折れて膝をつく

何度もグルグルと回転させられてまるでグルグルバットをやった後のような感じである

妙な感覚もすぐに治り、あたりを見回すとそこは今日俺が戦った場所に違いなかった

周りの客席や外周の壁が彼の巨大な体すら隠しているので何とかここを選んで正解だったという訳か

「そ、それでいったい何の用だったんですか？」

俺は竜を見上げて俺たちに何を伝えたいのだろうかと少し考えてみたが特に思いつかなかったので用件をすぱっと聞くことにしてみた

あぁ、あると言えば・・・あるなぁ・・・

目線を腰にやって再度深紅の龍を見上げた、俺は腰に携えたソーレを鞘の上に手を置いた

（まずは北の大地の話からだ）

「北？」

なんだか全く自分たちに関係の無いような話題の始まり方で少々戸惑ったというのが本音だ

地図で見る限り、ここはかなり大陸の南方に位置している国であって北の大地という事は恐らく大陸の本当に北の、北方の地域のことを指すのだろう

最低この国より北の方を指しているのは確実だが

だがそれと俺たちと何の関係が？

（大陸の北には我が主、虹龍様のご友人で在らせられる一角天馬殿が納める領地があるのだが、その一角天馬殿にいくつか伝言を頼まれている）

「一角天馬？」

（虹龍様と同じ神獣であり、旧友であると聞いている。さて、そちらの黒髪の女性の神子を側に）

「えっと・・・どちらの事ですか？」

俺は後ろを向いて、一体その黒髪の神子と言うのが誰のことを指しているのかと龍に聞いた

黒髪の女性の神子と呼ばれてもこの場に該当しそうなのは二人いる

俺が精霊台を通り、龍の神子になったというならば他の精霊台を通って来た俺たちの世界の人間は全員神子である可能性が高く、また女性は・・・・うん二人いる

でも女性というから恐らく一条さんの事だと思う

（すぐ後ろにいる人間だ）

あぁやっぱりね。と俺は一条さんを手招いた

右手でこっちへ来るようにと指示すると怖がる様子もなく歩いてきた

恐らく初めて間近で元の世界には居ない巨大な生物を見た佐竹さんなら多少は恐がりでもしたのだろうが

まぁあの人が怖がる様子なんて想像できないのだが、と俺は後ろの方で龍を見つめている佐竹さんから目をそらした

一条さんが隣までやって来て「何？」と聞いてきた

（一角天馬の神子、そして龍の神子よ。お主達二人には北の地へと向かってもらう）

「え、何よ唐突に？なんで？」

（一角天馬の神子にはお主がしたように力の解放を、そしてすでに神子の中で一番覚醒しているお主にも頼みたいことが在るのだそうだ）

「お、俺が？ってか覚醒ってなによ？」

「ね、ねぇ。何話してるのよ？私は関係ないの？」

「あ、ご、ゴメン。ちょっとまってて」

（覚醒・・・言葉で説明するのは少々難しいが、そうだな。もっと神子らしい力を発揮できているのがお主だということだ）

「よーわからん。何それ？」

（神子でない私に分かるはずがない。兎に角、覚醒が早い龍の神子には封印を施して欲しいらしい。何でも神子にしか出来ぬ封印だというのでな）

「・・・なんか話がややこしくなってきた。まって、封印？何を？ってかやり方とか知らないし」

（あまり詳しくは聞いておらぬが、なにやら大昔に封印された太古の魔獣だそうだ。封印が解けかかっているから早急に封印を頼むと伝言を言付かったらしい）

「へぇ・・・。大層な話じゃないですか・・・・」

なんだかまた面倒事に巻き込まれるフラグ、完全に立ってるな。うん

（そして・・・虹魚の神子にも話がある）

「虹魚？一体だれが神子なんですか？」

俺は龍、一条さんは一角天馬、一応この場に居るのは千尋ちゃんと佐竹さんだが

恐らく二人のうち一人がその虹魚とかいう神獣の神子なのだろう

（虹魚の神子はそこに隠れている小さき神子だ）

小さき神子、ってことは千尋ちゃんの事か

でも隠れてるって・・・そういえばさっき後ろを見たときに姿が見えなかったような・・・

そう思って後ろを向いてよく探すと一番大きな佐竹さんの後ろにちょこんと隠れていた

しっかりとジーパンをつかんで隠れているのを見ると・・・恐いのだろうか？

まぁ無理ないか。大人でも恐いものが、子供に恐くないはずがないからな

そんな事を考えた俺の心を読んだのか龍がブスンと大きな鼻息をならした

びくりと振るえた千尋ちゃんが視界の端に映る

（そんなに恐いか・・・？）

「あたりまえですよ」

もちろん即答だ。即答だとも

自分よりも遙かに巨大で見たこともない恐そうな化け物にでも見えているのだろう

とはいえ、俺が結構（自称）フレンドリーに接しているせいか害はない、とまでは認識したようであるが未だに警戒は解いていないように見える

「で、まぁそれってどの辺の事なんですか？北ってっことはかなり遠いんですか？」

（そうだな。人間の足ならば一ヶ月以上はかかるだろうな）

「げ・・・」

予想以上に遠い距離で俺は顔をしかめた

一ヶ月・・・かぁ

正直長いとは思った

戻ってくるのに往復二ヶ月ということは、かなりの期間を旅に充てないといけない

その分、元居た世界に変える方法を探す気でいたんだけどなぁ・・・

この大会が終わったら後で城の書庫に入る許可をもらったのでとりあえずそこで調べようかと思っていたのだが、どうやら落ち着いて調べものも出来そうにないな

っていうか太古の魔獣って何そのものすごくやばそうな封印

俺で何とか出来るものなのか？

とりあえず言いたいことはいろいろと在るのだが、一応今龍に聞いた事を通訳してみんなに教えることにした

それと同時に歩いて一ヶ月北へ進むと大陸のどの辺までいけるのかと聞くと、余裕で大陸の端の端、それこそ海まで出てしまうほどの距離だそうだ

「え、ってことは私とアーヤんはその北へ行くことになると？」

「まぁ簡単にはそうなりますね。目的は違いますけど」

「ふーん。でもさ、どうやってそんな遠いところに行くの?自力で歩けと?」

「さぁ?歩くか、乗り物使うかでしょ」

まぁ絶対此処に留まらないといけない理由は無いので恐らく行くことには問題ないと思うのだが

ただまぁ無断で行くわけにはいかないのでその辺はいろいろと調整も必要かなとは思う

乗り物を使えば一応歩くよりはもっと早くつけると予想は出来るが・・・どうなのだろうか

「そのへんの事は後々考えればいいでしょ」

と一条さん

「千尋ちゃんの事は今すぐって事ではないんですかね?」

(あぁ。一角天馬の神子の話も、封印ついでに呼んでもらえると助かるという話だったからな)

ついでかよ。一条さんの方は

っていうか俺が本命？俺を呼ぶほうがメインだったのか！？

マナの巡りは一年をかけて大陸を北上するらしいから実質まだ時間はあるんだろうなぁとは思ってたけどさ

でも逆に言えばそれだけ俺の方が重要ということだろうか

「じゃぁ今のところ伝えることはそれだけで？」

（そうだな）

「あ、それと。一つだけ言いたいことがあります」

（何だ？）

俺は膝をついた

大きかった深紅の龍が、さらに大きく感じられた

双眼が俺を見下ろしている

俺はゆっくりと両手を地面につけて頭を下げる

（なんのつもりだ？）

龍の声が心に響いてくる

ふぅ・・・・

これだけは言わないといけないと思っていた

「ごめんなさい」

そう言って俺はソーレを腰から外す

自分の前にそっと、周りから見れば差し出しているかのようにも見える

ちゃんと言い出せるか不安ではあったが、不思議と言葉はすんなりと出てきた

覚悟はしてきたつもりだった。この一言を言えるかどうかを

「俺は・・・守りきれませんでした」

(何を言っているのかね?)

龍の声は、本当に俺が何を言っているかわからないと思っているように聞こえる

いや実際そうなのだろう

俺がなぜ謝っているのか分からない。だけど、何となくの察しはついている

そんな風に、俺には見えた

細められる目が尚も俺に向けられている

そして再度俺は頭を下げた

「謝らないと、俺は貴方に謝らないといけません。ソーレの親である貴方に」

俺もどういえばいいか分からないが、謝ることしか思いつかなかった

告げないといけない。もうあの小さな龍の体がこの世に魂を宿して無いことを

ある意味では俺がソーレを殺したようなものだから

謝ってソーレの体が戻ってくるわけでもないし、それでも謝ることしか思いつかなかったのだ

謝らないと、俺の気が済まなかった

（顔をお上げください龍の神子よ）

俺は、顔をあげた

龍の瞳に映る俺が居た

（肉体を失っているのは分かる。だが、我が子がここにいるのも感じている）

分かっていたのか

そりゃそうか。先ほどこのソーレの親が近づいたことをソーレ自身が分かっていたのだ

子で分かるなら親でもここに我が子の魂が存在していることも分かるだろう

心に語りかけたり空を飛べたり、なんでもありな世界だからそういうのも分かったりするのだろうかとは思っていたが

「魂だけは・・・なんとかここに、この小さな刀に宿っています。でも本来の姿で合わせられなくて・・・・その・・・」

（魂さえ残っておれば、肉体無くとも心があれば、死んだとは思っておらん。神子の貴方が気にすることではない）

「・・・・ごめんなさい」

（謝るでない。そなたは今、それにこれからも我が子の魂と共に在るのだろう?あの子が神龍になれずとも、我が子が今お主と共に居ることを心から喜んでいるのだからそれでいいではないか）

喜んで・・・いるのだろうか。ソーレは

カタカタと、微かにソーレの鞘が音を立てて振るえた

それと同時にブフルッと鼻息をならした龍

ソーレ自身どう思っているかを読み取るすべは俺には無いが、彼がそういうのならいいのかもしれない

ごめんなソーレ

そう心の中でつぶやくと俺自身に抱えていた、もやもやとした、なんとなくそんな感じのものがスッと無くなった気がした

（さて、伝えることは伝えた。私はそうだな。暇なので明日までここで寝ていてはだめか?）

そう言って城の上を見上げる

まさか屋根の上で寝る気か!?無理だろ無理無理

「いやだめでしょ。後から人が一杯来ますもん。ってか若干シリアスだったのに急に話がおかしくなってません？」

（気にするな神子よ。そうか。だめなのか・・・。ならば街より少し離れた場所で寝ているとしよう）

「どっちにしろ寝るんですか」

（いや、ここに来る前にちょっと腹が減ってな。魔獣を一匹喰らったのだが、なかなかに腹がふくれてな）

「さいですか」

龍が飛び立ってしばらくした後、俺たちは城へと戻った

戻る最中に俺たちはそれぞれ何をしていたかを話し合った

そして日が傾き始めた頃、次に俺たちはファンダーヌから夕餉に誘われた

「やるなら・・・今日の夜か」

一人の民族衣装のようなものを着た男が、城へと向かう彼らの後ろ姿を眺めていた

『夕餉の時間帯』

「これまた・・・・」

「たまげるね」

「これなにー？」

「・・・・・」

「うまそうだな」

あちらの世界出身の四人とツキが横に並んで座っている

反対側には同じくファンダーヌからご一緒にと誘われたアルデリア、グレアント、リーナの王女４人とお誘いしたファンダーヌの王女がそろって座っている

これまた全員が美しいドレスを身に纏い、俺はこれ以上ないような素晴らしい光景を見ている

なんとまぁ全員が全員こうも綺麗で美しいのだろうかと聞きたいくらいだ

千尋ちゃんは目の前の小さな、謎の焼いた鳥の足のような物体を持っていろいろな方向から見ている

以前見た食事風景の倍はあるだろうか

巨大な机に余すところ無く食事が並んでいる

此処はお城の中なのだが、皆がそろって食事するというのも滅多にないことなので、ということで王女5人がそろって食事をとることになったのだ

まぁ俺たちはついでみたいなようなものらしい

別にいいけど

「さて、料理を前に静になることは無いですよ。楽しい食事会にしましょう」

ファンダーヌの王女、たしかエリエルと言っただろうか

エリエルさんはそう言って手を二度叩いた

俺もついこの間知ったのだが、食事の時に二度手を叩くのは元居た世界でいう頂きますのようなものらしい

まぁ意味は違うだろうが、食事の始まりを意味する合図のようなものだと知った

「いただきます」

ということで、まず真っ先に食べ物に手を伸ばしたのはグレアント王国王女、紅髪のアルフレアさんだった

ひょいと手を伸ばした肉塊をブスリと刺して口に放り込む

咀嚼風景を見ているとなんだかとても美味しそうなものに見えてきたので、俺も近くにあった同じ肉をフォークで刺してぱくりといただいた

あ、美味い

「今日はお疲れ様でした」

なんて思って肉を噛んでいるとアルデリア王国王女セレシアさんが俺に声をかけてきた

すぐにそれが俺にかけられた言葉だと理解すると俺はすぐに噛んでいた肉を飲み込んで水を一口飲む

「いやいや、別にそーでもないですよ」

「おぉ、そう言えばお主も出ておったな大会に」

あら、なんか話題が大会方面へ向かい始めたな

視界の隅で一条さんがサラダのようなものに手を伸ばすのが見えた

「え、まぁ、出てましたよ」

「予選突破おめでとう、と言いたいところだが実質あれはどうやったのだ？」

「え・・・っと何の事で？」

「お主、何か細工をしただろう？」

おっと、ばれた？ばれてた？

出来るだけ他の選手に手の内をあかしたくないので十分相手の勢いを利用したつもりだったのだが

「あっちゃ、ばれますかね？」

「どうだろうな。私はお主がどのようにして勝つかということをじっくり見ておったからな。それなのにあんな相手が自滅というあっけない結果で、それもあんなミスを相手が犯すのかと思ってな。ちょっとかまをかけてみたのだが、どうやら図星らしいな」

「うぁ、ひでぇ」

「どれ、種明かしを聞かせてもらいたいな」

んー・・・ここで話しても別に大会に支障が出るわけじゃぁ無いし・・・って、あ！

「ってかそっちの騎士団もこの大会に出てるじゃないですか！教えられませんねー」

秘密厳守。そう易々と手の内をあかせるものか！

「ぬぅ、こっそり聞き出してお主の秘密の対策をと思っていたのだが・・・」

「ひでー」

「まぁ良い。そんなことせずとも、我が紅炎騎士団がお主に負けるとも思えんがな」

「う・・・まぁ戦うのが本職の人に簡単に勝てるとは思いませんけどね」

その辺は本音である

騎士団、まぁ騎士なのだが。そのトップに居るような人達に勝てる気なんて殆どしない

なら何で大会に出ているのか、という事にもなってくるのだが大会に出るまでは修行で気がついた能力の一つを使えばそれなりに奮闘

出来るのでは無いかと舞い上がっていた部分も少なからずある

「でもまぁ、粉骨砕身で頑張ってみる所存であります」

「頑張れアーヤん。ほれあーん」

そういって一条さんが小さな肉を俺にズイッと差し出してきた

ほんのり頬が紅いが、それは恐らく右手に持ったワインもどきのせいだろう

さっきからものすごい勢いで飲んでいたからな

ていうか寄っているのだろうか？

「お、おー」

ぱくりと肉を頂き、手元の水をごくりと飲み干す

何となく視線を王女達の方へ向けると、私の国の騎士団の方が、いや私の国の方が・・・みたいなやりとりをしている

さっきのやりとりから自国の騎士団が勝利するだろうという論争を繰り広げているようだった

無闇にそこに突っ込む気も無いので静に俺は食事をとることにした

するとその論争が終わったのか、今度は先ほどの龍の話に移った
発言者はリリアだった
なんでも間近で龍を見てとっても興奮したとか空を飛んで恐かったとか、まぁいろいろと話していたのだがすぐに俺にも関係ある話になっていった

「え、北ですか？」

「あ、そうそう。なんか近々北の方に行くかもしれない」

「へぇ、それまたなんでですか？」

「まぁ、えとセレシアさんとアルフレアさんは知ってると思うけど俺龍の神子になったってのは覚えてますよね」

二人はこくりと頷いたが、他の三人の王女、そして千尋ちゃんと佐竹さんには良く分かっていない様子だった
とりあえず最後の二人には後々俺の冒険談とあわせて聞かせるとしよう

「それでなんだか龍とは別の神獣が俺をお呼び、ってな感じです。なんか封印がなんとかかんとかって」

「あ、それで私も同行するかも」

「お前もか」

アルフレアさんが声をあげた

背もたれに体を預けてぐいっとワインもどきを飲んでいた

「えっと、実はそこの神獣さんの神子がどうやら私っぽくて」

「なるほどな。それでこの前のアヤキと同じ立場に立っているということか」

「ん、そうなるねー」

すると、佐竹さんが俺の肩を叩いてきた

「話が全く見えないんだが」

「あー・・・後で説明します。たぶん貴方も神子だと思うし。えっとまぁ簡単に言うとこの世界に神獣っていう生き物がいて、それぞれがいろんな場所を治めてるらしいんですがそのために神子の力を借りてその治めている場所に、その魔法的な、マナっていうんですけどそれを行き渡らせるのを毎年やっているんです」

俺もそれやってきたんですけどねー、と付け加えた

「ていうか佐竹さん、このファンタジーな世界に慣れました？」

「・・・未だに信じたくは無いんだが、夢とかの類では無いのか？」

「じゃぁぶったたきましょうか？痛かったら現実ってことで」

俺は手を振りかぶってみる

「ジョーダンだ、ジョーダン。それで、ここは何処なんだ？」

あー、そっからかー

「別世界ですね。簡単に言うとお隣の世界的な感じ。帰る方法は今模索中。でもある程度この世界にも慣れた方が良いと思います。何時帰れるか分かったものじゃないですしね」

最も、移住するくらいにまで心を許すのはどうかと思いますけどねーなんて言っている自分はどうなのだろう

案外住み心地が悪いわけではないし、この世界なら自分にあった魔法を使う能力を使えるのだからある意味便利なんだけど・・・

結構この世界に馴染んできているのでは?と思わずにはいられない自分がいる

「そ、それで北ってどんなところなんですか?」

王女達の言い争いがぴたりと止まる

「そうだな。戦争一歩手前ってところだ。最も南のこっちは情報が遅いからすでに戦争していても不思議ではない。が、まだそういった情報は入ってきていないな」

「戦争一歩手前・・・・」

「やっぱりこっちの世界の人って魔法とかも使って戦争するんですか?」

と質問したのは隣にいた一条さん

驚いたことにまだ自分で質問するくらいの意識は保てているようだ

というかお酒置いてくださいよ。とりあえず

もう顔真っ赤じゃないですか。そのままメルトダウンするんじゃないかあの人?

ま、冗談だけど、酔いつぶれるのも時間の問題だろう

「戦争で魔法の効果は大きいぞ。やろうと思えば一気に相手の部隊を全滅、なんてのも可能だ」

「わー、すげー・・・ってか人の命をそれだけ一気に奪えるものなんですね」

「まぁそうさせないために身方の魔術師が頑張るんだがな」

そう言ってアルフレアさんもワインもどきをごくりと飲み干して、給仕の人にお代わりを注いでもらっている

「とはいえそんな大がかりな魔法を使えば大半の魔術師と周囲のマナが一気に消耗してしまうからやりませんけどね」

「だな。一発撃つためにそんな消費はしていられん。失敗すれば敵の魔法を防ぐ者も、魔術の源、マナすら無くなってしまうからな」

話を聞く限り、嘘でも大げさな話でも無いらしい

「北かぁ・・・」

日本人で平成生まれなものだから戦争なんてまるっきり経験も実感

もわかない

平和ボケだろうか、みんなで仲良くをモットーに育てられてるようなものだから、俺も争い事は基本的に好きじゃない

喧嘩なんてまっぴらゴメンだ

まぁ試合は別だけど

そんな戦争一歩手前な場所に行くのか俺たちは

戦争の火の粉が降りかからない程度の場所なら良いけど・・・

巻き添えなんてまっぴらゴメンだ

こんなところで命をかけていられるか

「お前達も戦争ぐらいは知っているだろう?」

「そうですね。昔はやってたみたいですけど俺たちの国はもう戦争していません」

「平和だな」

「まぁ・・・安全っちゃ安全ですかね。島国なんですけど昔戦争で多くの人が亡くなったものですからもう戦争しません宣言してるんで、おそらく戦争はもうしません」

「ということはもし敵国が攻めてきたらどうするんだ?防衛も反撃

も出来ないじゃないか」

「まぁいろいろとややこしい事になってるんですが、簡単に言うと俺たちの世界で恐らく一番強い国に守ってもらってる状況ですね。何処まで信用できるか分かりませんけど。基本こっちが何もしなければ攻撃されませんし」

「だが、外交上不利な部分もあるのでは？」

セレシアさん・・・

「まぁ、俺が外交してる訳じゃないから詳しくは知りませんよ。まぁただ、他国にはヘコヘコしてるイメージがありましたね」

「ほぅ」

「まぁ一国民としての意見ですから、あまりお気になさらず」

俺はそう言って肉を手に取った

夕餉の時間はまだまだ続いた

「さて、どう忍び込むものか・・・」

ここまで来ておいて計画すらろくにたてていなかったのは流石に不味かったか

周囲はゆったりと流れる川が濠となっているし、裏手に唯一道が通じている唯一の橋はこの時間は対岸まで掛かっていない

必然的に忍び込むならこの濠を抜けないといけないが、そんなことをすれば見張りの兵にあっさりと捕まるのは目に見えている

まぁ昨日の今日で立てた無理矢理な計画にそもそも無理があったのかもしれない

「飛び込むのはいやだしな」

仕方ないと男が腰の鞘から剣を抜く

流れるような仕草で剣を一振り、そして鞘に収める

そして男は水の上を歩いて、出来るだけ兵士に見つからないようにこっそりと城へとたどり着く

流石に道も部屋も分からない城内を進むのは得策ではないし、兵士も多くいていざこざが多くなるだろうと俺は上を見上げた

男が壁の凹凸に手をかけてよじ登っていく

とりあえず上に向かえば出会えるだろうと、これまた何となく適当な考えでの行動であった

『侵入失敗』

月と星が夜空に浮かび、浮かんでは雲に隠れ、その隙間からは月光が差している

風も、音もない静かな夜

そんな城下の闇から聞こえるのは酒場で寄った男達が騒ぐ声ぐらいである

鳥の鳴き声も羽ばたきも、虫たちの奏でる音色も今宵に限って無かった

別に何かあるわけでは無かったが、何故かそんな夜だった

石垣に手を、足を引っかけて城を登る男がいた

闇に紛れて登る男の姿は今や誰の目にも映ることはない

「にしても、高いな」

一気に魔力を使ってスピードを上げたいが、感づかれるのは避けないといけないために、俺は最小限の魔力を手足に集中させる

足も腕もまだまだいけると脳と体は告げているが焦ってはいけない

無理は出来ないが、まだ無理するほど辛い状況には陥っていないのが幸いだ

かなり高いところまで来ているため、ここで手を離して真っ逆さまに落ちていけば一発で即死である

少し手足を止めて呼吸を落ち着けると、再度俺は城を登り始める

今のところ、目標としては真上に見えるあのバルコニーみたいな場所から侵入しようと思っている

この高さまで来れば恐らくは居るだろうと踏んでいるのだが、なにせ情報が皆無のためにどこまでいけば良いのか全く分からない

在るのは只単に、目的という一言だけだ

「後少し・・・」

そう思って目的の場所に目を向ける

夜風にあたろうと思った

今日一日の職務を終え、突如舞い込んだ大量の書類をかたづけた私

ことチルは気分転換に外の空気を吸いたいと思った

立てかけた蒼天駆を腰に携え、一杯のお茶を入れた湯飲みを片手に自らの部屋を出る

廊下は真っ暗で、蝋燭の明かりがゆらゆらと揺れている

揺れる炎が絨毯や窓ガラスをほんのり赤色に染めている

人の気配はなく、不気味な空間を作り出している

チルは女であるが、そんな廊下に怖がる様子も無く、いつも通りといった顔で廊下を我が物顔で歩く

途中巡回していた兵とすれ違ったが異常はなかったらしい

平和一番

なんて思ってバルコニーに到着した

そのとき、微かに下の方から魔力の動きが感じられた

本当にわずかな量であるが何もないところに魔力が在るはずがない

前方斜め下から感じられる小さな４つの魔力の波動をチルは捕らえた

ごくりと湯飲みに入ったお茶を飲み干した

現在、城内では5人の王女とアヤキ達が食事会を開いている真っ最中である

気のせいかとも思ったが、やはり気になりはする
チルは音を立てないようにしてそっとバルコニーへと移動する
左手で蒼天駆を握り、そして右手をバルコニーの手すりにかけ、下をのぞき込んだ

途端、目があった
ば・れ・た？

「くっ・・・」

穏便に行きたかったが仕方がない
俺は瞬間的に大量の魔力を両手足に込め、そして一気に壁を蹴った
一気に上昇し、手すりに手が届く
そのまま手をつきながら体をバルコニーの中へといれる
暗くてよく分からないが、恐らく女性だ

白くて長い髪が夜風にたなびいている
そして腰には剣が見える
なんてこった。まさか見回りの兵に気がつかれるとは思っても居なかった

「何者だ」

女が訪ねてきた

声がもう、普段の彼女の声じゃないと思った
声色を変えて、しっかり仕事中の騎士なんだという風に思わせられた
何者か、と問われてもどう答えりゃいいのだか

「カイだ。見逃しては・・・くれないよねぇ」

「怪しい不法侵入者を易々と帰す阿呆が何処にいる」

素直に名前を証したのに見逃してはくれないのか。ケチめ

「ここにいないかなぁ～って」

俺はそう言って目の前の女性を見つめる

「馬鹿にしてんのかてめぇは？」

ギィンと音を立てて目の前の女性は剣を抜いた

「俺とやろうって？やめとけって・・・」

「誰に物を言っているんだ？これでも隊長職だぞ」

「嘘だぁ。そんな若いし、それに・・・女でしょ？」

「女だからという理由でなんでも通ると思うなよ？」

「面倒くさいなぁ・・・」

俺も剣を抜いた

軽く剣を弾くくらいで十分でしょ

腕力的にも、それ以外でもこんな相手に時間を稼がれてたまるか

「本当、見逃してよ。別に暗殺とかそう言うのじゃないんだから。
それにほら、女性相手に戦いたく無いし」

「い・や・よ。第一、まだ私に勝てると思ってるのが気にくわないわ」

あー・・・失言だったかなぁ

なんだか油に火を注いだような、そんな雰囲気になってきている

相当自分の腕が俺より上だと思っているのだろう

面倒くさい。さっさと終わらせよう

俺が踏み込もうとすると同時に、彼女も大きく一歩を踏み出してきた

あまり思いっきり斬りつけるのも気が引けるしこの剣ならそこまでする必要もないとふんだ俺は軽く剣を振るった

彼女の剣と、俺の剣がぶつかり、俺の脳内ビジョンでは彼女の剣がはじき飛ばされる、あるいは刀身が斬り飛ばされる様を想像していた

がキィンという金属音と共に、両者の剣がぶつかり、そしてはじき返される

彼女の剣もはじき返され、両者が剣を振るった腕が大きくのけぞった

「な・・・!?」

「なんだと!?」

驚いているのは俺だけでなく、彼女の方も驚きの表情と声を出していた

彼女は目を丸くして、目の前の状況を信じられないという表情をしている

恐らく俺も同じような表情をしていることだろう

大きく彼女が距離をとり、俺もまた後ろへと飛び退いて体勢を立て直す

にしても・・・何故弾かれたんだ?そして彼女の驚き様

俺は気がついた

「お前・・・」

「まさか貴様」

彼女も自分がはじき出した答えにたどり着いたのか、同時に声をあげ、また一歩確証に近づいた気がした

なにせ俺だってこの風王奏が弾かれるなんて出来事は初めての事だ

彼女もまた初めてだったのだろう

己の剣が弾かれた事に対して俺も驚きを隠せない
それほどの剣を相手が持っていたことに
軽く剣を斬り飛ばして体術で気絶させられればこっちのものだったのに・・・また面倒な事になってきた
それもとても厄介な相手だ

「どいてくれ。じゃないと本気にならざるを得ない」

「いやぁ、それは出来ないよ。で、その剣だけど」

「ご想像通りかな。聖天下十剣だよ」

「やはりか」

女はこめかみを押さえる
さりげなくこの月光に光る白くて美しい髪を俺はどこかで見ている気がするが・・・気のせいだろう

「名は？」

「風王奏。こっちが答えたんだ。そっちのは？」

「蒼天駆」

「なるほど。天駆けの剣か。実物は初見だよ」

「私も風王奏など初めて見たぞ。いずれの国も所持していないはずだったと記憶しているが。何の巡り合わせか・・・それ、盗品か？」

「んー・・・別に裏ルートとか、そっち関連の盗品じゃないけど・・・」

「おいおい、否定しないって本当に盗品かよ」

「あ、いや、なんというか無断拝借みたいな？」

「どこがどう違うんだ？」

どこがどうって・・・ねぇ？

「言葉の違い？」

「疑問系にして返すな。とりあえずお前は捕まえて縛り上げて、それから事情を聞く」

「いや、だから誰にも迷惑かけないからさ、どいてくれないか？」

「こーしょー決裂っ！」

白い髪がぶわっと舞い上がり、そして大きく俺に向かって剣を振るう

容赦ないその一撃が俺の目の前を掠める

だが距離が足りないためにそのまま剣は空振りして行く

と、下からの空気の流れが変わった

蹴りか

「縛り上げられてたまるかよっ」

俺は左足を前に突き出してガードすると両手で剣を持ち、斜めに振り下ろす

だがすぐに彼女は足を弾いてそのままクルリと回転する

迫る剣を、己が持つ蒼天駆を掲げて受け流す

足を弾かれて体勢を崩されていた俺がどれだけ両手で剣を振り下ろしていようと、さすがにこれは受け流されても仕方がない

流れるような動きで、再度激突

至近距離でお互いの顔を確認するほどに近づいた

そこで俺は相手の正体が誰なのかを知った

「お前・・・親父の店で一緒に酒を飲んだ・・・」

「ん・・・あぁっ！？」

二人で同時に後ろへと距離をとった

そう。目の前の人物は以前城下の屋台で偶然居合わせ、酒を飲み交わした女性であったのだ

お互いがそのことに気がつき一端距離をとったのだが、どうするべきだ？

「まさかあんたの剣が聖天下十剣だったとはね・・・」

「貴様の剣こそ」

「でも通せないのよね。事情だけなら聞いてあげなくもないわよ。無理なお願いじゃなかったら考えても良かったけどこうしてコソコソ忍び込むあたりそうでもないのかしら？」

う・・・痛いところを突かれる

でもこうでもしない限り、

「いや、俺としてはペンダントを探しているのだが」

「は？」

「いやだから、ペンダント」

「なんのペンダントよ？」

「詳しくは言えないが、こう、緑色の、透明な翠鋼石を磨いた奴で出来ている奴だ。見たこと無いか？」

「無いわね。ていうか、そのペンダントと城へ忍び込むことがどう繋がるのかしら？」

まぁそう思われるだろうな

俺は仕方なく持っていると思われる女性を見つけていると言った

そしてそれがこの城に今滞在しているということも

「俺も偶然ここにたどり着いた身だが、まさかこんなところでとは思ったさ」

だが、確実にあの女性から感じるのは・・・以前の俺だ

「・・・誰よ。言ってみなさい」

「名前は知らないが、黒い長髪の女だ」

「あのイチジョウとかいう人ね。でもま、もう少し詳しく理由を聞かないとこっちも不法侵入で捕まえないといけないんだけど」

男は迷った

これまで外部の人間には誰にも漏れないように続けてきた俺の家系の役割を、この女性に言っても大丈夫だろうか？

だが、言っても俺の実家まではばれないだろうし、他の同士を見つけるのもまた不可能だろう

そう踏んで、俺はこれまで門外不出の秘密を打ち明けた

「誰にも言わないと約束するならな。俺には神子という力が・・・」

「あぁ、なるほど」

「・・・え？」

「もしかしてお前が前の神子？」

「な・・・・・ど、どうして貴様、絶対秘密の神子の存在を知っているんだ！？」

ど、どういうことだ！？この辺ではもしかして知れ渡っていたりす

るのか！？

まてまてまて、な、ならば・・・・聞いてもいい・・・のか？

「な、ならさ・・・えっと、そいつがまさか今の神子の力を？」

「あぁ。持ってるらしいな」

「ならばそいつが俺のペンダントを持っていると見て間違いないな」

「・・・どうしてそう繋がるのか私には分からないが、そうだな、お前が手出しせずに大人しくしているなら呼んできてやる」

「本当か！？」

「ただし、何かあったら、その首、落とすわよ」

目が本気であった

この女性は、俺が思っていたより強いようだ

容赦なく突き刺さるその目からは、この女性が強い戦士だと感じさせられる

いや事実強いのだがな

隊長職というのもあながち嘘ではないらしい

「っと、その前に」

彼女はそう言って城内へと戻ろうとする足を止めた

そして懐から符を3枚取り出す

それをシュッと音を立ててそれぞれを俺の周囲に配置した

これは・・・

符には見たことのない紋様、いや文字なのだろうか？

見たことのない模様か文字が描かれた符が俺を中心にして三カ所に貼り付けられる

「気をつけてね。結界よ」

そう言って城内へと戻っていった

ふむ・・・結界・・・

俺は試しに持っている風王奏で空間をつついてみた

剣は見えない何かにぶつかって、キンと音を響かせた

符術の結界はさして珍しい物ではない
だがしかし、符を見たときに描かれている紋様が普通と違うのが気になる
彼女が描いたのか、そうで無いかは分からないが、下手に攻撃するのは不味いかもしれないと直感が告げていた
普通の結界なら風王奏の力があれば力ずくで破れないことも無いが・・・
俺はあえて結界から出ようとすることはしなかった
剣を収めて石の床に座る
夜のバルコニーの石の床は、服の下からでもひしひしとお尻に冷気が感じられた
見上げると綺麗な月が出ていた

どうしたものだろうか、とチルは思った
とりあえず、呼んでいたのはイチジョウというアヤキと同じ異世界人のようだったがペンダントとはどういうことだろうか
一通り神子の話は私も聞いているし信じることにしている

そうでなければアヤキが目の前で龍にさらわれていった理由が全く分からないからである

この話を知っているのは国王、王妃、そしてセレシア様と私とアルレスト、そして魔術師団長のシオンくらいのものである

そのうち近しい侍女達にも情報は行くと思うが、それはまた先の話だろう

夜の廊下を歩き続け、どうしたものかと自問する

相手の前に彼女を連れて行った時、本当に危害を加えないかどうかが不安なのである

まぁ攻撃くらいなら防げると思うが、もしもの事もある

先ほど以前つれてこいと言われている張本人から「お近づきの印にどうぞ～」なんて言われてもらった符で結界を張ったのだが、正直何処まで耐えきれる効力を持っているのか分からない

結界だという事ぐらいの説明は受けたのだが、とりあえず見たこともない紋様を書き記してあったので私が知る符の結界の強度とは違うと思う

脆いか堅いか、賭のような物だが張って牽制しておくにこしたことはないと思う

ちょっとしたはったり発言も含めているが、これで逃げられたら失態だな

それにあまり自分の力を過信しすぎないことだと自分を叱咤する

自惚れるなチル・リーヴェルト

相手も、予想外の聖天下十剣を持っていることでその能力は未だ未知数

自分が過信しないように言い聞かせ、とりあえずは神子の事について一番知っていそうな人物に当たるべきか

となる、名前を挙げるのは一人しかいない

「アヤキ・・・か」

うん。そうしよう。とりあえず彼に聞くとしよう

チルはそう考えつくと彩輝と王女達が食事をとっている部屋へと向かった

「失礼致します。アクアサンタ騎士団総指揮隊長、チル・リーヴェルトです」

「入ってください。どうかしましたか？」

チルが部屋に入るとその鼻にスッと美味しそうな臭いが入り込んできた

すぐに私は雑念を捨て、王女の前だという自覚を頭の中で言い聞かせる

セレシアだけならチルも職務外の時間のためここまで礼儀正しくする事もなかったが、他国の王女達も同席しているならそうもいかなかった

チルは片膝をつきながら顔をあげる

「少々アヤキ殿をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「俺？」

手羽先が口から飛び出た彩輝がきょとんとしているとチルがどんどんと彩輝に近づいていく

「よろしいですが、何故？」

「ちょっとばかり聞きたいことが・・・」

そう言って彩輝の手をつかんだ

隣に座っている一条はすでに酔いつぶれて机に突っ伏している

俺はあれよあれよという間に立たされ、そして何の理由も聞かされずに煌びやかな部屋を退室

涼しい廊下へと放り出され温く緩やかな空気から解放され、一気に目が覚めた

「な、何ですか？昼の事とかですか？」

「いや、少し聞きたい事がある。お前、神子だったよな？」

「え、あー・・・そうですけど、それが何か？」

「ちょっと来て欲しい。まぁ安全は確保するつもりだから」

「え、いや、あの」

「階段あがったすぐそこよ。バルコニーまで」

「安全って？え？何する気ですか？バルコニー？」

何処から話した物かとチルは悩んだが、とりあえずバルコニーであった事を話すことにした

チルさんが言うにはどうやら変な侵入者が居て、それが俺たちより前の神子だと名乗っているらしい

そう言えば俺たちが来る前にも神子が居たと聞いていたが、その力は俺たちに移っていると言っていたようないなかったような・・・

とりあえず俺はその人と会ってみることにした

でも気になるのは何故こんな時間に、それもバルコニーなんだろう？

ていうか、この高さでどうやって登ってきたのだろうか？

まさかよじ登ってきたとかね。んなわきゃねーか

暗い廊下を抜けて月光が差し込むドアを開けるとそこには一人の青年が座っていた

青年といってもまぁ２０は越えているだろう

顔にお面をつけており、青い髪に青い衣装と全体的に青っぽい印象が強かった

胡座(あぐら)で座るその男の衣装は民族衣装のようで、俺がこの世界に来てから初めて見る服装だった

そして暗いながらもその男の周囲には妙な符が見えた

目をこらして見てみると白い符のど真ん中に結と書かれている符が三枚、男の周囲の床に張り付いている

「だれだお前？」

男がうっすらと仮面の奥に見える目を開いた・・・ように思えた

心配ないといった風な顔でチルさんは腰の剣の柄にふれた

「お前がお探しの神子だ。まぁ別の神子だがな」

「別？」

男が仮面の下からボソリと声を漏らす

「私も多少は此奴の説明で神子の話は聞いている。お前が何の神子かは知らない。が、ちょっとお前がお呼びの本命は酒に酔いつぶれてな。悪いが此奴で我慢してくれ」

「此奴って・・・」

俺もこちらの神子とは初めて出会う

一条さんを訪ねてきたということは恐らく、一角天馬とかいう神獣の神子なのだろう

神子なら誰もでも良いと言うならば別に一条さんに固執する事もないからな

「お前も髪が黒いのか・・・。まぁいい。あいつとは仲が良いのか？」

「えっと、一条さんとですか？まぁそれなりに」

うん。まぁ仲は良いね。たぶん

「ならば単刀直入に聞くが、あいつがペンダントを持っているのを見たか？翠鋼石で出来たペンダントだ」

すいこうせきすいこうせき・・・と二回つぶやいてみるが俺には全く覚えがない

というより何だ翠鋼石って？

少なくとも俺は一条さんがそんなペンダントを持っているのを見た

ことはない

彼の目的はその翠鋼石とかいうもので出来たペンダントらしい

「えっと、少なくとも俺は見ていませんね。それって何なんですか？」

「言えない。というより詳しくは知らないと言った方が正しいな。昔から神子の証みたいな物として代々伝わってきた物だが、古すぎて何に使うのかは祖父も知らなかったらしい」

「へぇ・・・」

っていうか喋ってるじゃん！という突っ込みはしないことにした

でもそんなにペンダントが大事なのだろうか？

というより何故一条さんがそのペンダントを持っていることに繋がるのだろうか？

そこのところを聞いてみることにした

「あの、なんでそのペンダントを一条さんが持っていると？」

「俺は各地を旅してお金を稼いでいてな。そろそろ大陸の端まで来たから引き返そうと思っていたところで神子の力を失った、というより神子じゃなくなったんだ」

「どういう事ですか？」

「さぁな。ペンダントが突然起きたら無くなっていた。それと同時に俺の神子としての力が半分以上落ちているのが分かった」

「ははぁ、それでペンダントが神子の力を持っていて、それが無くなったから力が減少したと？」

チルさんが一歩前に出た

男は納得のいかないような態度ではあったが渋々首を縦に振った

「少なくとも俺はそう仮説を立てている」

まぁ仮説なのか

俺の時はそんな物持っていなくても適当にやったら終わってたしなあんまり関係は無いと思うんだけどどうなんだろ？別の神子はそういうの使ったりしてたりするのだろうか？

「ところで一つ聞きたい」

「はい？」

「お前、前から此処で神子をやっていた人間じゃないな」

「え、あぁ、そうですよ」

そういえばこの人はまだ俺が異世界からやって来たって事をしらないのである

そのとき神子になったという事も知らないはずだ

それに一条さんがこの人のペンダントを盗った、とは考えにくい

なんだがいろいろなところで食い違いが在りそうだと考えた彩輝は自分の今の現状と正体を明かすことにした

一応一条さんにも目配せしてみたが好きにすればという感じだった

特に問題は無いから自己責任でということだろうか?そこで俺は自分が異世界人だと言うことを男に明かすが、あまり驚く様子はうかがえなかった

だから黒髪なのかと小さくつぶやいた程度で、それ以上の詮索は無かった

「たぶん俺の知っている一条さんなら人の物は盗んだりしないと思います。それにそのペンダントっていうのが無くなったのは何処なんですか?」

「そうだな。此処より北西のイジャンという村の近くだ」

「イジャンってーと、フェーミリアス王国の？またずいぶんと遠くだな」

チルさんはどうやらその場所が分かるようだ

「えっと、どのへんですかそれ？」

「んーとそうだな。大陸の最西端近い場所だな。普通に移動すれば一ヶ月近くはかかるかな」

「遠いなぁ・・・・。最北端も最低一ヶ月はかかるって言ってたし・・・」

俺は今日聞いた話を思い出す

龍の話でも北まで大体一ヶ月以上はかかると言っていた

「でもその場所って西の方なんですよね？じゃぁ一条さんには無理ですよ」

「何故だ？」

「俺たちがこの世界に来てからはそんなに遠征も移動もしてないからです。良くて近隣諸国が限度ですよ。俺が行った・・・っていう言い方は微妙ですけど一応グレアントまでは行きました。そのくら

いが限度です。見知らぬ土地じゃ。一条さんが出た場所はその東のグレアント王国です。距離も反対ですしそんな芸当は出来ないですよ」

「本当か？」

「えぇ。そんな瞬間移動は生憎異世界人ですが出来ませんよ。でもえっと、貴方が一条さんと同じ神獣の神子だってことはですよ、つまりは俺と一条さんが呼ばれた北出身って事になりますよね？」

「ん、そうだ。俺の出身は最北端のフェリエス王国のシーグリシアという村だ」

「シーグリシア・・・ねぇ・・・またずいぶんと遠い場所から来たものねー」

「あ、北の方の出身なんですか？えっと・・・名前は」

あれ？そう言えば俺この人の名前聞いてないや

自己紹介もしてないし、相手も俺の名前を知らないだろう

「あぁ。カイだ。カイ・ウルクァ。お前は確かアヤキ・サクラと言ったか？」

「え、そうです・・・けど、なんで俺の名前を？」

「俺も大会に出ていたからな。ある程度の人物には目をつけている」

ってことは俺も注目されていたってことだろうか？

まぁ髪の色とか、相手の自滅なんて終わり方も俺だけだったしある意味目立ちはしているかもしれないなぁと思う

といってもあれは相手の自滅では無いのだけれどもね

「目つけられちゃったよ。目立つ気さらさらねーのに・・・」

「まぁ少しばかり気にとめていた程度だ。そこまで目立っては居なかったがやはり黒髪というのは目立つな」

「こっちからしたら黒髪が普通なんだけど・・・。ていうか貴方も出てたんですか大会に」

「まぁな」

目的は、お金だろう

さっきもお金を集めていると言っていたのでたぶん間違いは無いと思う

それにしても北の出身というのならばもしかしたら情報を得られるかもしれない

龍より聞かされた、太古の魔獣について

「カイさん。北の出身なんですよね。えっと、俺と一条さんももう少し、大会が終わって少ししたら北へ向かう予定なんです」

「ほぅ。それでそれが俺に何の関係があるんだ？」

「うん。もしかしたら北の方に大昔の魔獣の伝説が残ってないかと思いましてね」

それを告げた途端、ピクリとカイの首が動いた

「それがどうした？」

「いや、詳しくは知りませんが、封印が解けかかっているとかなんとかって・・・」

「なんだと！？」

カイが立ち上がった

突然の事にチルさんも腰の刀に手を伸ばしかけていた

俺も咄嗟に一歩後ずさりして左腕が腰のソーレへと向かおうとしていた

カイさんに敵意が無いと見ると俺もチルさんもすぐに手を下ろした

が、どうも彼の様子が今までと違う

これまでは話をしていてもどこか落ち着いた様子で対応していたというのに、この慌て様だ。何かあると思うのが普通だろう

「心当たりでも？」

チルがそう聞くとカイはゆっくりと一度だけ首を縦に振った

どうやら心当たりがあるらしい

それもあの慌てる様子からして、よっぽど恐ろしい魔獣が封じ込められているか、あるいは本当にその魔獣が封じ込められている場所の確信がある故の怯えか

どちらにせよもう少し聞き出してみるべきだと俺は踏んだ

「それって何処だか分かりますかね？」

「そこは森だ。シーグリシアという小さな町の外れにある森に大きな石塊がある。そこに勇者が魔獣を封印したと聞く」

「ふーん。良い機会じゃん。アヤキも連れて行ってもらえよ」

「え、まぁ道案内とかしてもらえると助かりますけど・・・」

「・・・お前しか出来ないのか？」

「え？」

「封印だよ」

「あぁ、えっと、たぶんそうかと。じゃなければこんな大陸の反対側に在るような場所まで俺を呼ぶ必要が無いじゃないですか」

男は考える素振りをしてそれっきり黙り込んでしまった

何を考えているのかは知らないが、この人と一緒だろうが一緒じゃなかろうが俺は北へ、シーグリアへ行く事は確定済みなのだ

もう異世界だからという一言で全てがあきらめられる

何故こうもフラグは勝手にやってくるのだろう。と俺は思う

今回の件にしろ、前回の龍の神子の件にしろ、俺は特に問題を起こした自覚はまったくもって無い

なのにどうして俺はいつも面倒事に巻き込まれるのだろう

そうだ。きっと神様がいたずらしてるんだな。うん

これぞまさしく運命のいたずら？ちげーな・・・えっと・・・まぁいいや

なんて考えている内に、男は顔を上げた

仮面をしているので表情は読み取れないので口調だけで相手の感情を読み取るのは難しいと先ほどは思った

「いいだろう。大会が終わったらすぐに俺は出立する。お前はどうする？」

んー、どうしようかと俺は悩んだ

かなりの距離の遠征ということになるためどうしてもある程度の準備は必要になることは分かりきっている

だが大会の終了後すぐに出発ということは明日、この王都から出て行くという事になる

準備も何もする暇が無いし、ある程度話は通しておかないと行方不明で騒がれるかも知れない

まぁ元の世界じゃもう行方不明とか騒がれてるだろうけどね

まぁチルさんが今こうして話を聞いているからそれは無いと思うが、話だけはしておかないといけないだろう

一条さんも一緒に来ると言っていたので彼女と、それとグレアントの方にも話を通しておく必要があるな

俺としてはゆっくり安全な旅をご所望だが、いつその魔獣とやらが復活するかは分からない以上急いだ方がいいであろう

善は急げである

早いに越したことはない。手遅れになるよりかは全然オッケーだ

でもま、流石にすぐ出発っていうのは無理だろうと思う

一応すぐには行けないと返事を返し、もし出来るようならば彼にも同行してもらうと嬉しい

流石にチルさん達が俺たちと一緒に遠くの地へと旅に出るのは無理がある

かといってギルドなどに頼むのもなんだか不安である

この人の実力は知らないが、大会に出ているくらいだ。冷やかしでは無い実力は持っているだろう

少なくとも、この人は賞金のために、３つの国からそれぞれ騎士が参加している事を知ったうえでの参加だろう

それだけ腕に自信があるのだろうか？

「流石に準備とかあるのですぐには無理だと思いますけど、出来るだけ早く行けるようにしようと思います」

「・・・そうか。お前も大会に出ていたようだが、怪我なんてしてくれるなよ。封印できるのはお前だけらしいからな」

「ま、死んだら代わりは出てくるでしょうけどね。ま、分かりまし

たよ。じゃ、そーいうことで。チルさん何か他に言うこととか意見とかあります？」

とりあえず年長さんに意見を聞いてみることにした

「そうだな。本音で言えば私には関係ないから私に聞くな、と言いたいところだな」

あれ？軽くのけ者にされてちょっと怒ってたりする？

チルさんの発言はちょっといつもよりピリピリしていたのに気がついて心の中で謝っておいた

「ま、私はどうせ明日はそっちの警備の指揮をとる事になっているから大会ぐらいは見に行ってやれる。今日の指揮はアルレストだったからな」

「って、それ観戦してたら仕事になりませんよね？サボりですか？」

「おう。サボるサボる。全然サボるよ私。応援するよーアヤキ君。がんばりたまえ」

マジですか

手を焼きますねほんとこの人

アルレストさんが上手く手綱を引いているときはいいが、この人一人にさせたら何しでかすか分かったものじゃない

前だって、アルレストさんや修練場で出会った、たしかミーナと言ったか。その三人で居たときも一人俺のソーレを勝手に持ち出して城から飛び降りていったからな

よく規律とか守らずそんなことをやろうとする人間が隊長になれたものだと毎回思う

「そーですか。どっちでもいいですけどね」

「つれないねーっと、そろそろ帰る？」

チルさんがハァとため息をつきながら前方に居るカイさんを見つめた

当然だと言わんばかりの態度で頷いたのを見てチルさんは指をパチンとならして「解除」と呟いた

すると床に張り付いていた三枚の符だが一瞬にして燃え上がり、真っ黒になった紙はバラバラになって夜風に運ばれていった

男はクルリと反転する

ぴたりと足を止め、何か言うのかとも思ったが、すぐにバルコニーの柵を乗り越えて暗闇へと消えていった

いやいや、此処何階だよ？

きっと此処はそこらのビルと同等かそれ以上の高さはあると思うのだが

ま、前もチルさんがやっていたし大丈夫な方法が在るのだろう

「あれどうやって着地するんですか？」

俺はそう言ってチルさんに聞きながらバルコニーの下をのぞき込んだ

そう言えば最初にチルさんとの邂逅も、落下であったと思い出す

城にぶつかった風が上昇気流となって下から髪の毛を持ち上げる。

それと同時にチルさんから返答

「気合い」

真っ暗闇な眼下へと消えていったカイさんは本当に生きているのだろうか？

『本戦、そして予感』

「ぐっ・・・」

「ほらほらっ！！」

剣と剣がぶつかり合う

木刀なので金属のような澄んだ金属音は聞こえてこないが、木と木がぶつかり合う音が二人の耳に入ってくる

だがその音が観客席まで届くことはない

かき消すようにしてとどいてくる歓声もまた、二人の耳に聞こえる

ステップを踏むように一人の女性が剣を振るう

流れるような動きと連続技で徐々に相手を後退させている

観客達の眼下で行われている大会本戦、第3試合

「くそっ！」

連続で襲い来る木刀を受け止め、そして力任せに俺ははじき返す

左手に持つ短剣を左上へと振り上げ、体を右に回転させながら左足で大地を蹴る

己の右足が空気を切り裂き相手を襲うが女性はそれを後退してあっさり避ける

そのまま回転の勢いを殺さないよう遠心力で体を前方へと持って行く

着地して体勢を立て直し、遠心力に身を任せて大地を再び蹴る

突き出した右手の剣が相手の体すれすれを通り過ぎる

相手の持つ自分よりも長い剣が正面の俺めがけて振り下ろされる

咄嗟に左手の剣でガードするが片手では両手で震われたその一撃を止めることは出来ないのは明白であった

それに相手は騎士

普段から重い剣を振るい鍛錬をしているであろうその女性の筋力は一学生であった俺よりも強かった

ただそれだけで俺の左腕は軋み、顔がゆがむ

突き出した右手も併せてガードに回すか、それとも相手へと攻撃を

繰り出して引かせるか
その一瞬の迷いさえも相手がつけいる隙を広げるだけだと分かっているのに

「ふんっ！」

女性の長い足が迫り来る
しまった！と思う瞬間にはすでに女の膝が俺の鳩尾を捕らえる
ただ入りが甘かったためか、たいした痛みは無かったが、意識がそちらへ行ってしまい、両手が疎かになってしまった

「あっ！」

女性は剣を巻き込むようにして俺の左の短剣を空中へとはじき飛ばした
確かこんな技が剣道でもあったなぁと俺は思い出す
たしか・・・巻き上げだっただろうか？
竹刀から手を離すのは反則

今ので俺は失格だなーとか思ってしまうあたり、俺はまだ試合に集中していないのだと思わされる

まぁ剣道じゃないし、俺の右手にはまだ獲物が残っている

それに、殴っても蹴ってもオッケーだからな。この大会

まだだ。まだ一本残ってる

隣で、闘技場から飛び出した短剣がぽちゃんと水の中へと沈んでいく

回収は・・・できないな

「まだ闘志があるか。その精神は認めよう。しかし・・・」

剣を構える

女性が大きな足で大きな一歩を踏み出した

「残念だが実力不足だ」

「うるせぇっ！」

年上で女性だけど敬語なんて使ってられねぇ。もーカチンときたもんね

全力だ

もう少しタイミングを考えていたがどうせいずれバレるのだ。初戦で手の内を明かすのは少し躊躇(ためら)われたが仕方がない

ここまでなめられて、切り札使わず自分が負けだと思わせられるか!!

グレアント王国、紅炎騎士団第三位セルディア・カルノン

それが俺の今日最初の対戦相手だった

「む・・・」

何か仕掛けてくると見たのだろうか、セルディアさんは剣を構える

一度この人とはグレアント王国で会っているが、そのときは魔術師だった

本業はそちらなのだろうが、剣の方でも俺が手に負えるレベルじゃないことは十分承知していた

第三位というからには国内三番目というふうに受け取っていいのだろう

そして今見せつけられたこの剣技から見ても魔法だけでなく、どちらをとってもトップレベルだと分かる

「種明かしは、しませんよ」

右手に持つ剣を左手に持ち替え、俺は集中する

体に溜まりに溜まった大量の魔力から小さな雫を一掬(すく)い

それを剣を持たない右手に集中させる

この試合で許される魔法はレベルの低い物だけと決まっているため
あまり大量の魔力は込めない

それでも十分すぎる威力はあるだろう

「でりゃあああっ！」

彼女も魔術師なら俺が左手に込めている事もばれているだろうが、
その辺は気にせずに俺は斬りかかる

左手の短剣を大きく振りかぶる

小さい剣に威力を持たせるには懇親の一撃で震うしかない

そうでもしなければあの大きな剣に軽々とはじき飛ばされ右の短剣
の二の舞になってしまう

俺が短剣を振り下ろすと、彼女はガードするまでもないといった表情で俺に向かって攻撃態勢をとった

俺がその一歩で大地を蹴り、飛びかかると同時に彼女もまた剣を大きく真横へと構えた

「此処でちょっとハンデだ。私の剣技は弾く剣技だ」

は？

くそっ、よく分からんことを！どちらにせよこの状態から元の体勢に戻るのは結構きつい

「一文字、横払い」

「っせい！！」

振り下ろす俺の短剣の真横から彼女の剣がぶつかる

軌道が大きくそれる

体ごと持って行かれる・・・っ！？

左手が大きく右に弾かれ、そして体の体勢を崩す

ちらりと視線をそらせば追撃してくるセルディアさんが見えた

こうなったら賭だ

一回も試したことは無いが、この魔力を込めた左手で地面を思いっきり押す

すると予想以上に飛びすぎて俺は慌てた

何せ思いっきり地面を押したとはいえ、まさか五メートルも上に飛ぶとは予想もしていなかったからだ

「うげ・・・」

手足をばたつかせるが、掴まる物も足場となるものも何もない

よって、バランスを崩して落ちる俺

ちょ、ちょっとまて！着地どうするんだあああああ！？

俺に五メートル上から落ちて着地するすべなんて無い

受け身をとっても只じゃぁすまないだろう

「ちぃっ！」

大きく右手を突き出し、地面に向ける

出ろ！出ろ！出ろ！出ろ！出ろっ！！

ここしばらくの修行で俺は強くなっている

人並みに簡単な魔力を使うことも出来るようになっている

手の先へ、そこから手のひらへ、手のひらで、まわれっ！

試したこともないような事だがこうなったら行き当たりばったりだ！

左手の短剣を腰のベルトにさして左手をつかむ

ぶれないように、恐らくすぐ右手に大きな力がかかるだろうその時のためにしっかりとつかむ

渦、渦、渦！

「まわれっ！」

手の先に集中して作り出した風の塊を思いっきり回す

それが大地につく

セルディアさんは余裕を持って俺の落下場所から距離をとっている

俺が何を仕掛けてくるか分からない以上、先ほどから警戒しているようだ

ま、どうでもいい

とりあえず着地しないと、俺の骨が折れる

「でいっ！！」

回転させた風の塊が大地を捕らえる

それをつかんでいた俺の体が大きくバランスを崩して倒れそうになる

「うわっ！？」

フラフラとした状態で高速回転する俺の体

「ふ、何をして・・・っ！？」

セルディアさんがそう呟くのが俺の耳に届く前に、俺の体が吹っ飛んだ

遠心力でそのまま吹き飛んだ俺の体はセルディアさんの方へと飛んでいく

「げっ！？」

飛んでいる俺の体は未だに回転を続けている
空と地面が高速で現れては消え、現れては消え、そんな意識すらぶっ飛ぶ早さで俺は飛んでいく
そしてぶつかる両者
俺の体に大きな衝撃が加わる
セルディアさんの剣が視界の端から消え失せる
そして俺の体が斜め上に吹き飛ぶ
逆にセルディアさんの体は俺の体とは逆に下方向へと吹き飛ばされる
俺の事を警戒して闘技場の端に寄っていたのが仇となったのか、反応できない早さで飛んで来るという予想外な事態に反応出来なかったのだろう
今回のこの本戦、予選と絶対的に違うことが一つある
それは大会会場の地形だ
一目で分かるのだが、今回大会の会場は水の上にある
さしずめ水上闘技場といったところか
水を水路から会場へと引いて水を溜めた会場に、四方をロープで壁

に貼り付けた大きな板の上で戦っているような状況である

そのため上で戦うと大きく足場が揺れる可能性がある場所になっている

この場合での場外は水の中をさしている

要するに水にさえ落ちなければ負けではないという事だ

そんな状況でまず真っ先に俺に突き飛ばされたセルディアさんが水面に突っ込んだ

大きな水飛沫と音を上げて水中へと消えていく

次に一度衝突によって宙へとはねとばされた俺も水中へと墜落する

水柱を上げて俺は水中へと沈む

息を吸い込む暇も無く、俺の口に大量の水が入り込むと同時に気泡が口からごぼっと音を立てて水面へと向かっていく

意識が遠のいた

遠くにセルディアさんが見えたが、次の瞬間には俺の瞼は閉じていた

気がついたとき、俺は白いベッドの上にいた

以前俺がミーナちゃんに魔力でぶっ飛ばされた時にも見た覚えがある天井だった

「つっ・・・」

体を持ち上げる

「お、起きたねアーヤん」

「い、一条さん」

俺の目の前には一条さんがいた

椅子に座って小さな本を読んでいた彼女は本をポケットにしまい込むと俺の方へと歩み寄ってきた

「本戦一回戦突破おめでとうアーヤん」

「え？」

今何といっていたのだろうか？

彼女の言葉を理解するまでに数秒かかった

そこで俺が吹き飛んでセルディアさんと水中へ沈んでいったのを思い出した

「ど、どうなって・・・」

「うん。あのときすぐに二人とも助けられて医務室に運ばれたんだけどたいした怪我は無いって。ただ水を少し飲んで意識を失ってたんだって言ってたよ。すぐ起きるから心配ないって」

「へぇ・・・」

「それまで私が付き添ってたんだけどね、まぁ大したこと無くて良かったねアーヤん」

「え、あ、そう・・・だな。セルディアさんは？」

「すぐに意識を取り戻して戻っていったわよ」

「そっか。で、俺が一回戦突破って・・・俺は水に落ちたから相打ちで両者失格なんじゃないんですか？」

「んー、なんか規定では両者が水中に落ちたら先に水中に落ちた方、あるいは攻撃側の攻撃で落とされた方が負けって事になるらしいよ。アーヤんのあれ、攻撃だったの？」

「いや、かなりの偶然。下手したら自分だけぼちゃんと自滅してたね」

にしても・・・・勝ったのか

なんだか信じられないな

「運が良かったねアーヤん」

「なのかねぇ・・・」

とりあえず次の試合も出ることになるらしい

次はもっと強い人になるんだろうなぁと思いつつ俺は病室の白いベッドに倒れ込む

第五回戦

二人の男が試合会場に登場する

一人は仮面を被った民族衣装を着た男

一人は純白の騎士服に身を包んだ男

「初めて見る顔だ。一般参加者かい？」

「そうだ。名前はカイ。お前はリーナ聖王国の騎士団長、ホーカー・セインだな？」

「俺の事を知っていると言うことはまんざら只の冷やかし客って訳でもないのか？」

「いやいや、俺の出身は北でね。こんな南方の国の騎士団長の名前なんぞ耳に届かないんだ。おかげで余計に資料を探して片っ端から選手の情報を集めていた。それだけだ」

カイはそう言って木で出来た長剣を構えた

対峙するリーナ聖王国の騎士団長も己の武器、木でできた槍と盾を構える

「そうか。ということは俺のあだ名も調べたのか？」

カイはこくりと頷く

この日の為に情報だけは大量に仕入れてある

なにせカイ自身はこんな南の国まで来る事が無く、また遠くの地の騎士団長の名前なんぞ聞いたことすら無かったからだ

あまりにもこれは不味いと思って選手名からそれぞれ職業やら実力やらを昨日の予選の時に観戦しながら資料を漁っていたのだ

資料だけで分からないところは偶然隣にいた博識な老人から話を聞いたり実際の予選を見て対策を考えていた

が、まさかその時は本戦の一番最初に騎士団長と戦うことになるとは思いもしなかった

今日会場へ来て本戦の抽選をしたときに、この5回戦と書かれたクジを引いた自分の右手をかつて無いほどに呪いたかった

が、優勝目指すならどちらにしろ対戦するのは確定しているわけだそれに強者と戦うのならば万全の、体力が多くあるうちに対戦しておくのも一つだと思う

相手の戦法スタイルからしても、この順番はある意味幸運だったかも知れない

後々自分は疲労した状態でこの男と戦うよりはマシでは無いかと思わないとやっていられない

どちらにせよ次の対戦でも強者と当たるのだからあまり関係ないのだが

「お前のあだ名か。知っている」

良く知っている

情報にもあり、昨日の予選でもそれが十分に認識できた

情報だけでなく実物を見られたのは良かった

「不動の大槍・・・だったか？」

「ちゃんと知ってるんだ。じゃぁ対策とか立ててきてるのかな？」

「対策を立ててきた奴ですらその二つ名の前に跪く。それぐらいの情報は持っている」

「なるほど」

瞬間、カイが動いた

ホーカーもそれを目で追う

ホーカーの防御力は異常である。流石だてに二つ名は付いていないあれを突破できた人間は数えるほどだと言われている

不動の大槍

なんとまぁ大層な二つ名だこと

俺の専門は風

便利な魔術では在るが、あの巨大な盾をどう突破したものか

魔術を使用すれば魔法陣が必ず現れ敵に魔法を使いますと宣言しているに等しい

まぁ剣術にも多少の自信は在るが、まぁ隊長を抜くことはできないだろう

ましてや風王奏も無しにそんな芸当ができるはずもない

昨夜、剣を会わせた彼女との戦闘でも隊長職は予想以上に一筋縄ではいかないことは学習している

勝機は少ない

ただ数少ない勝機を、どれだけ見つけ、どれだけそれを実行できるかが鍵だ

予選で見たとおりならば、あの大きな盾と槍を避けて後ろから攻撃するのが一番だとカイはある程度の予測を立てている

だがそんなのは誰が見ても思いつく対策なのである

一対一で戦うなら、あの大きな装備で小回りがきかないのは目に見えている

それでもなお不動の大槍なんて二つ名を付けられるくらいだからもちろんあいても背後をとられたときの対策はしているはずなのである

予選で見た時はそれこそ一発もその身に攻撃を当てさせることなく大きな槍を薙ぎ払って敵を場外へはじき飛ばしていた

殺傷能力は低く作られている今回の使用武器のせいもあり、先端が丸くなっている槍ではそれぐらいしか使い道は無いだろう

剣にしても刃は丸く削られている

普通に戦う程度の、武器としては成り立つが殺傷能力が低いため相手武器の破壊などは難しいだろう

となると、まずは背後の対策にどんなことをしてくるのか気になるな

一回試してみるか、とカイは剣を振りかぶった

上に振り上げた剣、そしてその真っ直ぐ降りる先に待ちかまえるようにして突き出される木製の盾

カンと木が振るえる

力を入れてないのでそんな物かと思ったが、びくともしない

まぁ陽動だから良いのだが

すぐさまカイは足を右へと向けた

誘いに乗ってくれよ

そう内心思いつつ、再度体を反転させ、ダッシュする

内角をえぐるようにして剣を左手に持つ

右手で体が飛んでいかないように地面を固定させる

左足が弧を描き床を滑る

あんな大きな盾を視界の前に置いてしまえば相手の動きが読めなくなるのは当たり前

相手の体で見える部分といえば盾の下からのぞける足ぐらいでそれ以外に俺の動きを読める要素はないはずだ

だから足の動きであいてには俺が最初に動いた方向から回り込んでくると思わせる。それが陽動

そう見せかけて反対側から即座に剣を振るう

「せいっ！！」

「ふんぬっ！！」

誘いには・・・乗った！

だが男はそのまま踵を軸に片足立ちになる

そしてそのまま一回転

立てて防ぐのかと思いきや、まさかの槍がこちらへ向かって振るわれる

ホーカーの槍が、俺の胴を捕らえようかと言うところで俺は後ろへ

と引く

元々攻撃する気は無かった。だからすぐに背後へと引いてホーカーの回転する槍を避けられたのだ

不動の大槍なんて言うから機動力が無い只の守りが堅い槍使いだと思っていたが・・・

背後を突けないということは結構厳しいな

予想通りの展開になって嬉しいやら悲しいやら

「なるほど・・・な」

「最初は様子見か」

「情報だけで勝てるとは思ってない物でね。一筋縄には行かないのも覚悟してましたし」

「ほぅ。ではどうやって俺の守りを抜くのか、期待しても良いのか？」

「お楽しみ、ってところです。何やっても抜けなかったら潔く降参しますけど」

「最後まで楽しもうや」

「生憎、俺は無理だと分かったらそれ以上続けるような人間じゃ無い。引き際を見定めるということもまた、己の力を知る故に、です。

最も、やる前から諦める、なんてことはするつもり、無いですよ」

「では、抜いてみよ。誰一人として抜かせぬという、この意思を！」

とは言ったもののしかし、かってぇな

予想以上に守りが堅い

持久戦にすればあいつの方が有利だ

大きな武器に大きな盾を持つ相手の消費も激しいが、それでもこちらが抜けなければ意味がない

ちまちま攻撃してもさっきみたいな攻撃に巻き込まれたら、それこそ一発で水の中へどぼんである

ということは短期決戦で一気にあの守りを捲るしか無いのだが・・・

さてどうしたものか

「ふむ、アヤキは大丈夫かね？」

「大丈夫でしょう。恐らく」

セレシアとアルフレアはそう言って眼下の試合を見つめている

現在第五試合が行われているが、意識的には二人ともさっきの試合で医務室へと運び込まれていったアヤキの事が気になっていたりするのである

「ま、龍にさらわれて生きていたんだ。あれぐらいじゃ死なないわよ」

「ですね。にしても」

セレシアはちらりと横を見る

そこには身を乗り出して自らの国の騎士隊長が出ているので応援しているミーナがいた

ちょっと先ほどから興奮気味だが、少々自分たちに比べて幼いからこういう事には教育上よろしくないのでは？と思う面も少なからずセレシアにはあった

「やっちまえホーっちぃ！！」

「ホーカーさんの鉄壁の守りを抜けるのかどうか、気になるところではありますね」

「あぁ。そーだな」

アルフレアはそう言ってファンダーヌ王国の王女であるエリエルに

返事を返す
そんなアルフレアは妙な感覚にとらわれていた
何だろうこの感じ

「なんなのかねぇ・・・」

そらを見上げるが、そこには青空しかなかった
何なのだろう。この感じ・・・
言葉で例えるなら「嫌な予感・・・」
ぽつりと呟く

「フレアも？」

隣のセレシアも口を開いた
やっぱり嫌な予感がした

一つの影が

幻影が
浮かび上がる
王都に
ユラリと
それは
ゆっくりと
羽ばたいて
誰にも見つかることなく
それは
近づく

「それにしても、リリアはどう思う？」

「え、そーだなぁ。ホーっちは一番強いから勝つと思うよー」

んー、そんなことを聞いたのでは無いのだが、とアルフレアは思う

あの仮面の男が堅いホーカーにどうやって一撃喰らわせることができるかを聞いたつもりだったが、言葉が足りなかったな

もし自分が彼と対戦することになったらどうやって抜くだろうか。

と考えてみる

後ろをとって攻撃、というのは先ほどの男の攻撃が止められた時点で無理だと思うのでその他の攻撃を考えなければならない

不動の大槍。その二つ名が示すのは、一対一の対戦において彼が殆ど動かないことを意味する

動かなくても、間合いに入る敵は全てその大槍が仕留め、相手の間合いの中にあればその巨大な盾が全ての攻撃を防いでしまう

攻守に優れた男では在るが、あの重い武器を使う故に機動性に優れているとは思えない

「私なら、あの盾ごと吹き飛ばして場外にするしか思い浮かばん」

最も、女である私の筋力があのホーカーという隊長に対抗できるほどあるとは到底思えなかったが

その辺は仕方がない

小さい頃から剣術は何度も習っているが、流石にあのレベルに到達するのは無理がある

そう思うと、彼ら実力者は一体どれほどの時間と努力を鍛錬へ積み込んだのか

「対する男は・・・カイ・ウルクァ・・・・聞いたことが無いな。一般参加者か」

そう言ってアルフレアは対戦表を開いた

「皆様、お茶はいかがですかな？」

「アーテス。そうね、頂こうかしら。みんなもどうぞ」

そんな時に5人の後ろの出入り口から男の声が聞こえてきた

間髪入れずにエリエルが返事を返した

アーテスはファンダーヌ王国のエリエル王女の側近で初老の男性だった

といっても中年太りしていたりはせず、ゴツゴツの筋肉質の体で身長はおよそ１８０ほどはある男だった

髪はやや白く染まりつつあり、男は若干皺の出てきた手で王女にカップを渡す

他の王女にもお茶を勧める

エリエルはアーテスの入れるお茶が昔から好きで幼少の頃よりずっとこれで育ってきたと言ってもいいくらいだ

それ故、彼が入れるお茶には絶対の自信を持っていた

「じゃぁ、もらおうかしら。喉も乾いてきたことですし。リリーとルアちゃんもいかが？」

「む、じゃぁいただくとするかのー」

「・・・どうも」

二人もカップを受け取る

中から香る良い臭いが鼻を刺激する

今すぐにでも飲んでしまいたいくらいにヨダレが出てきてしまいそうだ

だが此処は自粛した

「美味そうだが、私は遠慮しよう。トイレに行きたくなって試合を見逃したくないからな」

一人本気で試合を見ている女性だけはそれを断って試合を見続ける

「フレアらしいですね」

セレシアはクスリと笑ってカップを口につけた

ほほえましい光景を目の当たりにして、アーテスも目を細めてニッコリと笑った

「うおおおおっ！」

「むっ」

ガキンと音を立てて弾かれるそれはもはや木と木のぶつかる音とは思えないような音をしていた

切り上げ、弾かれる

そのまま右足で盾を蹴り飛ばす

男は片足を後退させるも、すぐにその大きな槍を俺に向かって振るってきた

だが恐らく攻撃してくるだろうと思っていたので深追いせずに盾を蹴った反動で距離をとる

「ほぅ、まんざら予選を勝ち抜いただけはある、ということか？」

「上から目線かよ。気にくわねぇな」

「そういうな。隊長なんてやっていると自分より強い奴がいない、頂点に立っているわけだからな」

はっ、自然とそういう風になるものなのかね

「どうでもいいんだよ」

俺の足下に緑色の魔法陣が浮かび上がる
相手もそれを見て警戒したのか、大きな盾と槍を構える
緑色の魔法陣が広がる
大きく腕を後ろにそらして意識を集中させる
「恵風(けいふう)よ、取り巻く旋風、その右腕に宿す。デメューレヴェント」
「ほほぅ、魔術も使えると」
「勉強不足なんじゃないか?ごっつい体とは裏腹に」
「言うじゃないか小僧。確かにお前のことは知らなかったが、生憎知らないというのならば名が知れ渡っていないということだろう。ならば所詮その力も大したことは無いのだろう」
「試してみるか?」
「試させてもらおう。その自信たっぷりな目、その意思で俺の盾を抜ける事ができるかな?」
仮面の奥にある俺の目を見られた
目があった

男の瞳は、それこそ自分の守りに絶対の自信を持っているようだった
ならばその幻想、打ち砕いてやる
右手にまとわりつく風が腕の周りをグルグルと回っているのを感じる

「できる。そう思わないとやってられねぇ」

シッ、と息を止め、大地を蹴ろうとした
その矢先、俺たち二人の姿を大きな影が太陽の光から覆い隠した
最初は雲かとも思ったが、違う
男も気がついたのか、二人で顔を見合わせた
影の形が・・・・
二人同時に空を見上げた
その様子を見ていた観客達も空を見上げた
王女達も、急に二人が空を見上げたのを見てその視線の先へと目を

向けた

そこには何も無かった

雲一つ無い空が永遠と続いていた

影ができているという事に気がつけた者も多少はいただろうが、それを理解するよりも先にそれは吠えた

「クオオオォォォォォォッ！！！！」

幻が揺らめき、姿を現した巨大な鳥が空を埋め尽くすかのような奇声を上げた

「な、なんだ！？」

「フェリー・・・だと？こんな場所で？」

「いや・・・この魔力は・・・この試合一端中止だ。観客避難させとけ！」

カイは試合は中止だと言わんばかりの勢いで闘技場の端へと駆けていく

そして一気に跳躍して魔法を行使する

「上昇の風よ、地駆ける我が足に、一筋の追い風を。レベタミェントプルーマ」

カイが空中で呪文を唱える

空中に魔法陣が浮かび上がる

広がった魔法陣は一気に縮まり、カイの右足に集まり光りを放つ

光りが消えるとカイの右足には小さな翼が二つ生まれていた

その翼は風の抵抗を受けて小さな羽をまき散らす

そして一度カイがその右足を大きく空中に向かって振り下ろす

すると小さな翼が一度だけ、一見弱々しく見える、だが強く、力強く羽ばたいた

カイの右足は空中で何かの足場へと降り立ったかのように固定され、そして翼の羽ばたきと共に一気に前方へと飛ぶ

観客席の落下防止の手すりに着地する

目の前にいた観客達も何が起こったのか、よく分かっていない様子であった

突如現れた巨大な鳥、そして試合をしていた男が突然目の前に現れる
一応水の中に落ちてはいないとはいえ、流石にこれは場外だろうと
思いつつもさっきの魔法を使った時点で俺の負けかと区切りをつけた

「姫様方、どうも危険な感じがします。控え室へ下がってください」

アーテスがそう言って護身用の短剣を取り出した
真剣な面持ちで言われれば仕方なく5人は控え室へと下がることにした

「妙だ・・・」

だがアルフレアはその途中で頭を悩ませていた
妙すぎる出来事に
まず最初は何もなかった空間から突如フェリーが現れた事
次に影が闘技場のフィールドを覆うまで誰も気がつかなかったこと
あの巨大な虹色の鳥が何の予兆もなく、それもあんな幻視の魔法を
使ってこんな王都までやってくるなんてこと、ありえるのか？

「フレア、考え事？」

「え、あ、うん。ちょっと気がかりがね」

フェリーはこのアルデリアとグレアントの中間に位置する山岳地帯の森に住む鳥であり、人目に触れることは滅多に無い

それが、なんでこんな・・・

それに幻視の魔法なんて高度な技を使えるなんて聞いたことが・・・

「まさか・・・」

そんな自らの予測を口に出そうとした

すると、避難の為に闘技場の控え室へと戻ろうとしていたアルフレアの後ろでどさりと物音がした

何かが倒れるような、そんな音だった

足を止め、振り返るとそこには地面へと倒れたセレシアがいた

「大丈夫！？」

「え、えぇ、ちょっとめまいが・・・」

「立てる？」

「え、えぇ・・・・・あ・・・れっ？」

アルフレアに手を借りて立ち上がろうとするセレシアだったが、どうしても足に力が入らない

それに加えセレシアの全身の力がゆっくりと抜け始め、眠気まで襲ってきた

「う・・・」

どさり、と今度は心配して駆け寄ってきたエリエルが倒れた

振り向くと倒れたエリエルがゆっくりと目を閉じていった

微かに声を出そうとしているのが分かったが全然耳に聞こえる大きさでは無かった

「な、何がどうなって・・・」

混乱する頭で状況を整理しようとしたがこんな状況は初めてである

そうこうしているうちに残った二人の王女もばたりばたりと倒れて

いく

なんだこれはっ！？

アルフレアの周りには倒れ込む四人の王女

「おーやおや、まだ一人起きていましたかぁー。少し来るのが早かったですかねぇ」

「誰だ、お前」

アルフレアはどう見ても身方とは受け取れないような男に向かって剣を抜きはなつ

装飾用としてつけていた剣だが、中身は実際に人が斬れる本物である

まさか本当の意味で剣を抜くことになるとは思っていなかったが

男は真っ黒なローブを被っていて顔まで見ることができない

パッと見、武器は持っていないように見えるがローブの下に隠していることもあり得る

「いやだなーぁ。そんなにギーラギラした目でみーないでくださいよー。かわいーお顔がだーいなしですよぉ。そんな、ちょっと回収に来ただけなんですからぁ」

「回・・・収？」

「えぇ。手はず通りなーら、今頃貴方も倒れている・・・・予定だったのですがねぇー。耐性があるのか、それとも・・・」

「何がどうなってるかは知らないけどね、あのフェリーもお前の差し金か？」

「そうですが、何か？」

「目的を言え」

「目的・・・ですか。そうですね。私が・・・・」

男が急に言葉を切った

男が俯き

「教えるとお思いで？」

「なっ！？」

アルフレアは突如襲いかかってきた男に大きく動揺し、後退った

何せ一瞬の間に、瞬き一つする間に目の前まで詰め寄られてそんなことを言われれば多少は動揺する

男はローブの下から短いナイフを一本取り出した
それを見たアルフレアはすぐさま剣を斬り上げる
男はそれをワンステップ踏んで体を横に反らして避けた
斬り上げた状態でアルフレアは失態を悟った

「な・・・」

まさかこんなにも容易く避けられるとは思っていなかった
いくら相手が強くてもこの間合いで、死角からの切り上げをあんな・・・
簡単に・・・・
それにこんな体勢からでは、抵抗ができない
剣を振り下ろすより先に、男の手がアルフレアの喉をつかんだ

「ぐっ・・・」

足が宙に浮き、男に剣を突き立てようとするが、息ができずに体が自然と藻掻いてしまった

ナイフを床に落として、男のもう片方の腕がアルフレアの顔の前で広げられる

「お休みなさい」

「う・・・」

急激に意識が遠のき、視界が真っ暗になる

カラン、と乾いた剣の落ちた音が廊下に響いた

「迎撃ではなく、捕獲の方向で行きましょうか」

「ですね。保護法があるので傷つけられませんから」

チルは異変を察知して闘技場へと着地する

すでに其処には試合をしていたホーカー、そしてグレアント王国の副騎士団長であるリリッド・アシェードがいた

「お久しぶりです。昇格おめでとうございます」

「えぇ久しぶり。で、結局捕まえるって事で良いの？」

「聞いてたんですか。えぇ。フェリーには保護法が在るので一応傷を付けられませんから」

「そうねー。でもどうするのよ?そっちの騎士団長はいないの?」

「えぇ。今日はお城でお留守番です」

そう言ってリリッドは剣を抜いた

今この三人で使える武器を持っているのはチルとリリッドだけである

試合に出場する選手は全員武器を預けているので他にも来ているであろう数人の隊長職の者も武器無しではきついものがあるはずだ

「そうだな。この下の水に落とすってのはどうです?傷つけずに飛べなくできますよ」

「翼を斬らないで良いからな。だがどうするんだ?」

「あ、じゃぁその辺は私が受け持つわ」

チルはそう言って蒼天駆をちらりと二人へ見せた

二人ともその剣が何であるかを知っているため無言でこくりと頷いた

自らがあの巨大な鳥を水中へと突き落とすと言っているのだ

「それで落とした後はどうするの？」

「そうだな。誰か実力のある魔術師がいれば催眠をかけるのも有効だが・・・」

「んー、拘束系の魔法も便利だけど、でもまぁとりあえずその辺は任せる。私はちょっと被害が出ないように引きつけるから」

「分かった」

「じゃぁ俺は魔術師を捜せるだけ探してくる。武器がこれじゃぁな。ろくに手伝いもできん」

「まぁ別に殺す訳じゃないから愛用の武器を使う必要は無いんだけど、まぁいいか。早く戻って来てくださいね」

「じゃないと死ぬよ。私」

「死ぬの！？」

突っ込んだのはリリッドだけかー、と思って少々がっかりするも、あの堅物ホーカーが突っ込みを返してくれるとは思えないし、仕方ないかとチルはため息をついた

「お前は一度死んだ方がいい。生まれ変わった方が絶対に良い」

挙げ句の果てに今のチルを否定するというおまけつきで

「ひでー。ホーカーに其処まで言われるのはちょっとむかつくなぁ・・・まぁいいか。んじゃたのんだわよ」

「承る」

チルはそう言って空中へと駆けていき、ホーカーは魔術師達と武器を集めに武器を置いて闘技場に唯一掛かっている橋を駆けていった

「さて、余った俺はどうしようかねぇ」

することも無いのでリリッドはその場で座り込んで周囲を見渡してみた

たいした混乱も無く、観客達を避難させている騎士団が見える

迅速、かつ安全に行われる避難作業に、この騎士団の日頃の行いがでているなぁと思う

そう言えばさっきホーカーと試合をしていた男は何処へ行ったのだろうと辺りを見回すが何処にもその姿は見えない

はて、どこへ行ったのやら?

「っと」

「ん？」

隣で聞こえた小さな声でリリッドは隣を見た

其処には二人の女性が立っていた

一人は頭にゴーグルをかけた少女

もう一人は長い髪を紅く細いリボンで結んだ女性

「お手伝いしましょうか？」

その年上っぽい方の女性が声をかけてきた

うん？とりあえず大会参加者では無いようだとリリッドは見抜く

普通の武器を持ち、わざわざこんな面倒事に参加しようという意思に乾杯

「あら、誰かと思ったらアシェード家のお坊ちゃんじゃない」

「・・・・・・げっ！？出た！？」

ピキっと彼女の額に血管が浮き出たのをリリッドの目が確認した瞬間、アーストレストゥルシア・ユディスの目にも留まらぬ俊足の蹴りがリリッドの脳天を直撃した

脳震盪を起こしたままリリッドは頭からズボンと水面へと突っ込んだ

ぷかーっと浮かびあがってきたリリッドを隣にいたツキが闘技場へと引き上げる

「初っ端から『げっ!?』は無いわよねー。一体私をなんだと思っているのかしら」

まぁ、こんな事されるぐらいだから無意識に『げっ!?』なんて言われても仕方ないんじゃないかなーと引き上げた青年を見て同情したツキであった

『まやかしの鳥』（後書き）

ふと、珍しく彩輝が出なかったなぁって思いました

『宝玉を狙う者』

「おぉ、これはこれは・・・」

ローブの男が会場に足を踏み入れる

会場には客席へと繋がる通路が何本もあり、それらは裏手でぐるりと会場を一周する長い廊下と繋がっている

観客のおよそ半分ほどがすでに会場から姿を消しており、もう半分の観客も出入り口の階段に殺到している状態であった

ローブの男が予想していたほどの混乱は起こっていないようだったが、まぁいいだろうと判断する

今なら会場に忍び込んでもそれほど目立ちはしないだろう

わざわざ封印を解いて幻視の魔法という面倒くさい事をする価値は少しはあったようだと男はローブの下の口元に笑みを浮かべた

「さぁて、ちょっとした彼の不手際も、まーぁ許してぇあげましょーう。計画にズレはありませんからねぇ」

そう呟いた男はゆっくりと客席の階段を下る
カツンカツンと響く足音が階段の壁に反射して響き渡る

男は今、誰もいない廊下で三人の仲間と別れた
昨夜仲間になったローブの男は手はず通り、五人の王女を眠らせた状態で誘拐してきた
一人でその五人を抱えてきたのかと思えば、現れた時男はその五人を魔法を使って宙に浮かせながら歩いてきたのを見たときは初期メンバーの男達は流石に驚いた
怪しげな男、大口を叩くからにはそれなりに力は持っているとは思っていたがまさか魔法を使えたとは誰一人聞いていなかった故に、驚いた
男はその後、「私は私の仕事をさせてもらうのでぇ、ここで手を切りましょーうかぁ」と言って会場の方へと戻っていった
しかしこうもあっさりと事が進めば誰しも多少の不安や戸惑いが見える同士も居た
「では、各自この王女達を隠して待機していろ。俺は要求を通しに会場へと向かう」

当初、あのローブの怪しい男が現れてから最初の予定とは別の行動をとっている

俺たちの狙いと男の目的は全く違うのだから最初に立てた案とは別の案を臨時で立てることになった

混乱はローブ男が起こしてその隙にローブの男は狙っている物を回収したいと言うのだ

ただ混乱を起こすだけならば当初の予定でも良かったのだがこの大会には幾人もの強者が集っている

それも他国の隊長格レベルが数人である

とてもじゃないが自分たちだけでは相手は無理で、さすがに余裕を思わせる態度をとっていた男もその点については一人では無理があると言っていた

故に王女の拉致という当初のメンバーの目的、そして男の任務遂行の為の案がこれである

まず男が何らかの方法で会場を混乱させるように仕向ける

その隙を狙って男が五人の王女を眠らせ、拉致しやすい状況を作る

目的である王女の拉致をそこで俺たちが引き継ぎ、男は混乱に乗じてその狙っている物とやらを回収するのだという

ただ、それだとそのローブの男が俺たちから何も助けていないということになるので俺たちはその男の手伝いのために一端拉致した王女達を隠してから先ほどまで五人の王女が居た来賓席まで戻ることになる

そこで男が動きやすいように王女を人質に隊長格の動きを制限するのが四人の仕事である

とはいえ何か不手際があって一網打尽になってはもともこうも無いので仕方なく自分一人が会場の来賓席へと戻ることに急遽決まった

残った三人は王女を隠し、眠りが覚めないように見張っているという配置になった

急いで事を進めねば、王女が起きたりあの得体の知れないローブの男が動きやすいように取りはからわないと、逆にこちらがあの男に何をされるか分かったものではない

俺個人ではもちろん、四人で襲いかかっても倒せるという気が全くしない

なんなのだろうかあの男は・・・

突如やって来て、仲間にしろと?

普通そんな訳の分からない男を仲間にする理由など無いのだが・・・

むしろ自分たちはあの男に使われているとしか思えない

王女を拉致したいという自分たちと、捜し物を回収したいというロ

ーブの男

一応利害は一致している・・・・が

だがあの男は俺たちを見限れる。逆に俺たちはあの男に逆らえない

これを共闘や協力と呼んでいいのだろうか？

だが、自分たちは王女の拉致にさえ成功すればそれでいいのだ

それだけで・・・願いは叶う

長年の恨みを晴らせるのだ

男は倒れた護衛二人を見下ろして思った

どうやら倒れている二人の護衛騎士はあのローブの男にやられたらしい

やはりあの男はただ者ではないとつくづく思う

こんな、護衛を任されるような騎士をあの軽々しい口調からは余裕で倒した口ぶりであった

そうでなければあんな振る舞いはできないはず

血は出ていないが、死んでいるのだろうか？

とりあえず考えるのは後にして、先へ進もうと男は来賓席への階段を駆け上がる

外に近づくにつれて少しずつ、観客達の小さな悲鳴が大きくなる
男が日の光を浴びてそこで目にした光景を見て、これを男が仕組んだのかと目を疑った
何せ目の前に居るのは七色に光る虹の巨鳥、フェリーだったのだから男もそれはそれは驚いた
フェリーは存在が知られているとはいえ、普段は人目につかないテルミアの森の奥深くに住んでいると聞いている
普通はこんな王都まで現れるはずもなく、そして大人しいはずのフェリーが自己防衛以外で人に襲いかかっているなんて信じられない
目の前で騎士達が少しずつ集まってきているのが見えたが、まだフェリーの方に目がいっているので男が来賓席に現れたことには気がついていない
全員がやられる、なんてことは無いと思うがこの状況で交渉するというのも無理がある
彼らがこの一見を片付けるのを待つとしよう

彩輝は会場の控え室にいた
自分の試合が終わり、救護室から控え室へと戻ってきたのである

一条さんはもう少し休んだら良いと言ってくれたのだが、特に体に異変を感じないので何かあれば戻ればいいと言って控え室へとやって来た

だが、選手が居ない

うむ？

自分が試合に行くまでは結構な人数がこの控え室に居たはずだ

控え室は二カ所ある

クジを引いたときに順番と一緒にくみ分けもされたのだ

控え室は試合の会場を挟んだ両側にあり、そこを出て階段を降りてそこから会場へと移動する

もしもの時の為の移動できる通路は一つしかなく、二人の選手は別に小さな船に乗ってリングへと登るようになっている

選手を二つに分けるため、機能より数は半分半分で多少減ったりはしたのだが、なぜ誰もいないのだろう？

流石におかしいと思った彩輝は腰に携えた木製の双剣のうち一本を抜いた

室内は静だが、外の方では何か物音がしている

先ほど一本は水中へと落ちていったため、もう一本を控え室の後ろにある予備の武器が無数に並べられた棚から一本を引き抜く

その一本を腰に差し、会場へと続く扉から外を覗く
途端、俺は外へと続く扉へと手を伸ばし、そして会場へと走り出していた
迷いや躊躇いは全くなかったのがちょっと不思議だった
飛び出してすぐ、頭上を見上げた
青い空に影一つ
巨大な鳥が空で旋回をしていた
「なんだ・・・・あいつ・・・・」
俺が出会っている龍より若干小さいが、かなりの大きさはある
これまで見てきた鳥とは比べ物にならないほどに大きいその鳥は、ゆっくりと大空で円を描いていた
その真下の舞台には多くの騎士や大会の参加者が見受けられる
中には観戦をしていた先生やツキなどの姿も見えた
皆いったいどうしたというのだろうか？

「何、これ？」

そんな声が少し後ろの方から聞こえてきた

見れば観客席の出入り口の一つから一条さんが巨大な鳥を見上げていた

その巨大な鳥は色だけで言えば綺麗だ

だが、何かが違う

その色鮮やかな虹色とは違う何かが、あの鳥にはあるような気がしてならないのだ

まぁそれが恐怖や戸惑いから来ているものの錯覚なのかもしれないが

「一体俺が居ない間に何が？」

「おんやぁ？人が居ないところを通ってきてみれば、なーるほどぉ。控え室に繋がっていたんですねぇ」

突如、後ろで聞こえた声に反応した俺は後ろを振り向いた

声からして聞き覚えがあった

反射的にもう一本の剣を抜いて構える

「アーヤん？」

一条さんが振り返った俺の動きを捕捉して俺を見つけた
上から声をかけてきたが、それに答える気は無い

何せ目の前に居るのは過去に俺たちの目の前から黒玉を奪っていった男だ

前は突然現れたと思ったら空を飛んでいた為あまり身近で顔を合わせることは無かった

あのときは顔をローブで隠したうえ、夜であったために顔は全く見えなかった

今回もローブで顔を隠しているが真っ昼間の登場に少々驚いてしまう
しかし何故こんなところに奴が・・・？

「ふむ、また君ですか」

「なんだ、あんな距離で、しかも夜だってーのに覚えてたかよ」

「えぇ。大事な黒玉を回収に来たときに会ってますよね？」

「あー、そうだよ。てか返せ」

「やだ」

「んー・・・返してください」

「や」

「・・・・・」

「・・・・・」

両者にらみ合いが続く

え、ていうか何このやりとり?

「あの、本当に無理ですか?どうしても欲しいんだけど」

「奇遇ですね。こちらもどうしても欲しいのですよ」

「・・・まぁそう簡単にはいそうですかーって返してくれるとは思ってないし・・・ね。かといって、はいそうですかーって諦められる代物でも無いし」

全く、なぜこうも欲しい物に手が届かないのだろう

帰る手がかりの一つとして集めたいのに

なんでこんな悪の秘密結社みたいな奴らも集めてるんだよ!?

取り合い必死じゃねーかちくしょーめ

「あーもーっ、なんでこんな事に巻き込まれなきゃなんないのかねぇ」

「聞かないでくださいよ。私たちの邪魔するからでしょう。ふむ、にしてもそちらも集めていらっしゃると?では、早い者勝ちですね」

「誰がやるか。あれが無いと困るんだよっ！」

そういって俺は問答無用！と言わんばかりの勢いでドアを閉めて横に置いてあった支え棒をはめる

踵を返して宝玉と賞金が置かれた来賓席の下にある台へと向かう

宝玉と賞金は大きく迫り出した来賓席の下にある大きな台に置かれている

観客席とその商品の台とは小さいながら柵で仕切られており、そこまでは結構距離がある

観客席を走る俺の後ろで大きな扉が吹き飛ぶのが見えた

飛んでいった扉が水の中へと吹き飛んで大きな音と水飛沫をあげた

それで何人かの騎士達が気がついたが、そんなことを気にすることもなく男は翼を広げて控え室から飛び出してきた

右手でローブが頭から外れないように押さえながら空中で急停止、方向転換して真っ直ぐ宝玉と賞金の方へと飛び始めた

確実に走っている俺より飛んでいる男の方が早いのが分かった

徐々に追いつかれている事に気がつきながらも、どうすることもできない

だが次の瞬間、男は急に進行方向を変えた

またもや直角に進路を逸れて観客席の方へと飛び込んで着地する

「クァアァアアッ！！」

空に巨大な魔法陣が浮かび上がった

すぐに大きな衝撃が襲いかかってきた

巨大なフェリーが空中を旋回しており、その旋回した円にそって魔法陣は空に浮かび上がっている

そして下の方にも同じような魔法陣が浮かび上がっていた

「っつぁ！？」

そんな声と共に、何処にいたのか突然チルさんがものすごいスピードで落ちてきたのが微かに見えた

あの人は自らの剣の力で空中を自在に駆ける事ができるはずだ

それなのに、あんな一方的に落下していくなんて、怪我を負ったかあるいは――

そして目の前で水中へと叩き込まれた

「チル・・・さん。くそ・・・なんだコレ・・・まるで先生と訓練をしていた時みたいに・・・」

――――――体が、動かない

あのとき、杖で地面へと縛り付けられていた時と同じだ

ものすごい重力で地面へと吸い寄せられているかのようだ

何とか倒れ込むのだけは防いだが、それでも片足が膝をついてしまっている

「ちっ、抜け出せるとはいえ巻き込まなくても良いじゃないですか。せっかく封印を解いてあげたというのに・・・恩知らずめ」

後ろで先ほどの男も地面への重力に抵抗していた

今が距離を開くチャンスであるのは分かっている。だが体が動かない
あれは恐らく重力系の魔法か何かだろう
そしてあの空中の巨鳥は男の手駒
つまりこの一連の騒動は仕組まれていたってことか。この男に
そう思って悔しがる素振りを見せるより早く、それは起こった
突如、急激な重力からの解放に戸惑う体
スッと軽くなった体で一体何が起こったのかと空中を見上げた
闘技場と水中の上にもう一つ新しい影が現れていた
空気を震わせるようなフェリーの甲高い鳴き声に対し、こちらの咆
吼は空や大地を震わせる力強さを感じさせられた

「ドラゴン・・・・」

頭上に現れたのは昨日まで一緒にいたあの龍であった
もはや何がどうなってこうなっているのかよく分からない
展開が早すぎてついて行けないのだ

ローブの男、宝玉、フェリーの襲来、そして龍

突如現れた龍は躊躇うことなくフェリーに向かって突っ込んだ

大きな口を開けると其処にはぎらりと並んだ巨大で鋭い歯がズラリと並んでいるのが遠くからでも見えた

チラチラと炎も牙の隙間から漏れているのが確認できる

かと思うとその巨大な口はフェリーの喉へと噛みついた

バランスを崩したフェリーと絡み合うようにして回転しながら龍とフェリーは地上めがけて落ちていく

その先には大勢の騎士達が居た

が、全員落ちてくる二匹を見て水中へと飛び込んでいった

そして水中に浮かべられている闘技場をたたき割り、二匹は水中へと飛び込んだ

一つ目に襲ってきたのは闘技場が割れる音

それに続くようにして巨大な水飛沫がたった音

割れた闘技場の破片が飛び散り、いくつかの破片がこの周辺にまで飛んできたことからその威力が伺える

「驚きましたね。予想外のお客様ですねこれは」

そう言って目の前に飛んできた大きな破片を片手ではじき飛ばす
男はゆっくりとこちらを向いた
何とか見える口元がゆっくりと笑みを浮かべる
畳んでいた漆黒の翼を広げ、再び空中へと男は飛び立った
重力から解放されたのはありがたいが、男の拘束が解けるということを考えても居なかった
どうする？
走っても追いつけない
かといってあんな空飛ぶ人間やめてる奴を足止めする方法も思いつかない
どうした物かと悩む間にも男はどんどんと進んでいき、距離は離されていく
そう思った瞬間、何かが飛んできた
ものすごいスピードで飛んできたそれは、空中を飛ぶロープの男めがけて一直線に飛んでいく
我が目を疑う光景だった

人が、飛んでいた

「あああああああああああ！？」

そんな悲鳴を上げて飛んでいく男の声が聞こえたのか、ローブの男も流石に振り向いた

まぁあの男が何を思ったかは知らないが、スッと男の軌道をあけた

男はバビュンと飛んでいきローブの男をスルーしてどんどんと飛んでいく

一体何があったのかと男が飛んできた方を振り返ると其処には見慣れた先生の姿があった

それも何かスッキリとした表情で物を投げた時の体勢でこちらを見つめていた

隣に立つ一回り小さなツキが目の上に手をかざして飛んでいった男の行方を見届ける

俺もその男が何処まで飛んでいくのかと思って飛んでいく先を見つめる

するとベチンと音を立てて壁に激突した

ちょうど其処は宝玉と賞金が置かれた台座の上であった

ずるずると落下した男はぐったりとして地面に倒れ伏して動く気配がない。ていうか死んでるんじゃないか？

やりすぎですよ先生

そんな場面ではないというのに、何故かため息をついている俺が居た

『幻想の終わりに陰る虹』

チルは蒼天駆を大きく振りかぶる

目の前で大きく羽ばたく巨大な虹色の鳥はこちらに注目していてその他の事には眼中にないように見える

それがまずチル・リーヴェルトの狙いだった

前回、龍が市街地へと襲いかかってきた――後に誤解だと分かったが、その時もまず考慮したのは周囲に被害が出ないようにするということだった

騎士として、これだけは最優先事項であると師である父からは何度も言われ続けていたためどうしてもそれが頭に叩き込まれているのだ

フェリーの注意を周囲に向けないためにもまずはこちらに注意を向けないといけない

「さーて、どうしたものかねぇ」

一応フェリーと同じ高度まで登ってきたのは良いんだけど、今フェリーが注目しているのは今自分が最も近くまで来たから興味を持っ

ているだけであり、何もしなければ注意はすぐに逸れてしまう

一応水中まで落とすと言ってしまったが、どうしたものかと考える

フェリーには保護法があり、危害を加えるわけにはいかないのが難点だ

それさえ無ければ力ずくで地上へたたき落とすことも不可能ではない・・・はず

それ以上に問題なのがフェリーがどれほどの魔術を使えるのかだ

これまでフェリーと戦った者など誰一人としていないのは当たり前であり、どういった魔術を使うのかすら分かっていない

分かると言えば先ほど見た幻視の魔術、という事だけだ

本当にあの幻視の魔術を自らがかけたのだとすれば、かなり魔術の力はあるはずである

チルは魔術を使えない

それ故に詳しいことは分からないが、聞いた話では幻視の魔術は今では殆どの人間が使えるような魔術では無いということらしい

思った以上に厄介かもしれないな

何をしてくるか分からない以上、あまり距離を詰めるのは控えた方が良いな

「ま、魔術に当たらないように距離をとって注意を引きつけるだけでいいんだし」

最低自分が水中までフェリーを落とせなくても、だれか魔術師が来るまで持ちこたえれば良いだけである

これ程大きな鳥で魔力も多く蓄えていそうなフェリーである

低級レベルの魔術では無理だろう

実力者が放つ上級の催眠や拘束の魔法を使える者が来るまで耐えれば・・・

「おら、ついてこいよ！」

急に空中で動き始めたチルをフェリーは顔で追った

が、それがフェリーの死角にまで行くとフェリーも大きな翼を器用に使って方向を変える

チルはできるだけ急激に方向を変えてあのフェリーにしっかりと狙いをつけられるのだけを避けながら移動する

予測不能な動きを見せるチルをフェリーは追い続けるが、やがて追うのを止める

追ってこない・・・？

チルがフェリーの視界から出てもフェリーが追ってこないので不審に思い動きを止めた

ゆっくりと、フェリーが上昇していく

追うべきか・・・？

フェリーは上昇しながら迷うチルを眼下に見つめ、そして高らかに鳴いた

その姿は神々しくも見える。がそれはその翼や尾羽の美しさからくるものである

本質はもっと禍々しく感じた

魔力の放出を感じたチルは流石に何か仕掛けてくると読んだ

一気に距離を詰めて発動を阻止するべきか、距離をとって様子を見るか

そう迷う間にも一瞬にして広がった巨大な魔法陣が空に描かれた

ゆっくりとその魔法陣の周囲を回り始めるフェリー

その魔法陣に魔力が注ぎ込まれていく

魔力が魔術という形になるにはその魔法陣を通して変換をしなければならない

力を魔術というものに変換するために

その魔法陣に徐々に周囲を回るフェリーから魔力が注ぎ込まれていくのを感じたチルはすぐさまそれを止めにかかる

空に向かって空を蹴り、剣を空へと突き立てる

魔力を使えば一時的に身体能力を上げることも不可能ではないが、魔力を持たないチルはその身に宿した筋力のみで上昇したフェリーの高度まで一気に詰め寄る

フェリーは回るのを止め、ゆっくりと魔法陣の中心へと移動する

「ちっ・・・」

届くだろうか

フェリーが魔法陣の中心にたどり着けば恐らくその魔術は行使されてしまう

だったらあの場所から遠ざければいいだけだ

それぐらいなら考えが浮かばないでもない

この蒼天駆の力は蒼天を駆ける力

あながち能力で言えば空を駆けるというところに目がいきそうだが

事実は違う

空中に己だけの足場を作り出す

一度実験をしたことがあった

己の剣の力がどの程度のものかと調べた時のことである

この剣の力は持つ者の足を空を駆けることができるようにする力かあるいは踏みたいと思った瞬間のみ足裏の空間に足場を作り出す力なのか

剣自体は良く斬れる、ということしか知らなかったため剣の能力を簡単に調べてみることにしたのだが面白いことが分かった

そのどちらでも無かったのである

つまり足の下に足場を作るわけでも、足の性質を変化させるものでも無かったのだ

聖天下十剣にはそれぞれ特殊な能力が宿っているという

どの剣にも解明されない未知の力が備わっていると言うが、これこそ未知の能力である

もし足の下に足場が在るのならば靴に水をつけても雫が空中に残るはずである

足を退けたときに空中の足場が消えるまではその水は靴とその空間

との間に残るはずだと思ったのである

僅かに滴る程度の水をつけ、空へと着地する

すると水は下へと落ちていく

これは足が物体の上に無いということでこの能力は空間の固定化では無いという事が分かった

今度は逆に足に注目した

足の性質が変化しているのならばどのようにして宙に浮いていられるのか

足が空を物体として捕らえていないのならば重力の反発によるものなのか？

いやそうでは無かった

それならば逆さまに立てるわけが無かったのだ

まさか自分でも空中に逆さまに立てるとは思っていなかったのである

結局自分では答えが見いだせなかった

ただそのおかげで一つだけ見つけた能力があった

この剣は足にしかその能力を発揮しないようである

手や頭で空中に留まろうと思っても、どうやらそれはできないらし

かった

その代わり、剣の方はイメージさえすれば空を物体として捉える事ができるらしい

まったくもって妙な剣である

そしてその剣は空間を物体として捉え、切り取り、その空間を物体として存在させることができるのである

最も使えるのは何も存在しない空間に限定される

つまり切り崩したものが岩や草、水などでは物体として切り取ることができないのだ

足は物体として認識していないのに、剣の方は何もない空間に限定されるが、空間を切り取ることができるのである

少なくともチルはそう考えている。この剣が空間を切り取っていると思い込んでいる

チルは手早く手首を翻して目の前の空間に正方形の立体を切り取った

聞こえてくるのは剣が空を斬る空しい音だけであり、チルの手にも物が斬れているという感触は伝わっていない

だが其処にはたしかに切り取られたものがあった

その場所めがけてチルは下から蹴り上げた

そして一端この魔法陣の範囲から出ようと真横に飛ぶ

後少し、というところで再びフェリーが叫んだ

それと同時に体にのし掛かるような重みがチルの体を下へ下へと突き落とす

突如足場が消えたかのように感じた

どれだけ踏ん張ろうとしても足の下に足場ができることは無かった

為す術なく落下していくチルはそのまま水中へと叩き込まれた

その次の瞬間にはバシィン！と大きな音を立てて大きくフェリーがのけぞった

チルが蹴り飛ばした切り取った場所がフェリーに直撃したのである

だがそれだけではたいしたダメージにはならない

元々傷つけてはならない存在なのでチルもスピードだけを乗せた一発だった

だが魔法の方は解除された

うっすらと宙へ霞んでいく魔法陣

そしてフェリーをも覆い隠す影が現れた

それに気がついたときにはフェリーは大きく後ろから羽を捕まれ、

そして鋭い牙がバチバチと音をたてて体に食い込むのを感じた

それと同時に感じた膨大な熱量が傷口から溢れるようにしてその身を焦がしていくのが分かった

二つの巨体はグルグルと回転をしながら真っ逆さまに落ちていく

そして激突

フェリーの背中がまず闘技場にぶつかる

大きな衝撃がフェリーの全身を駆けめぐり、体が闘技場より下へと沈み込んだのが分かった

今の一撃で闘技場がまっぷたつに割れたのである

落下した地点から大きな水飛沫と闘技場の欠片を撒き散らしながら巨影はユラリと水中へと消えていった

水中に落ちたチルが見たのはそんな光景であった

突如落ちた後、後を追うようにして水中へと姿を見せた幾つもの人の影。それに続くようにして落ちてきたフェリーの背後に巨大な影が見えた

龍だ！

そう理解するのは早かった

少し前に出会ったのと同じ種類である

ただ以前出会った龍は腕を切り飛ばされており、いくら生命力がある龍といわれても流石に腕までは生えてこないはずだ

つまりこれは自分が出会ったのとは別の龍という事になる

その龍はフェリーの羽をしっかりと押さえ込み、水中へと沈めようとしていた

対するフェリーは大きく翼を羽ばたかせて水上へと逃れようとしているがそれを龍が阻止している

そして水中だというのにもかかわらず龍は大きく口を開いて炎をはき出した

どばぁん!!と大きな音を立てて水上へと大きな水しぶきが上がったのが水中からでも分かった

「ふふ、此処なら誰にも見つかるまい・・・」

一方会場の裏手に一人の男が居た

若干小太りな中年であり、周りから見ればどう見ても一般人である

男は大きな音が会場から響いているのを耳にして計画は順調に進んでいると確信した

あとは分かれて会場へと戻った彼が王女を拉致したことを盾にして要求をのませるだけだ

もっとも、生かしてはおくつもりはないがな・・・

要求が通っても通らなくても、自分だけは絶対にこの二人を許すつもりはない

「はっ、何が王女だ。人を散々見下した罰だ」

小太りの男はそう吐き捨てて担いだ二人の小さな王女を武器庫へと放り投げた

どさりと音を立てて放り込まれたリリアとルアはぴくりとも動かない

男ですら寝息が聞こえていなければもう死んでいるのではないかと不安にはなる部分はある

この命を奪うのが己の使命なのだ

男がこの武器庫に二人の王女を拉致した場所に選んだのは会場の入り口から最も遠い場所だからである

混乱しているはずの市民は普通、こんな場所に現れるはずがないと踏んだのである

男はがら空きになった会場入り口から鍵を拝借して鍵が掛かっていた重い武器庫の鍵をあけて王女を放りこんだ後は彼の交渉終了の合

図を待つだけである

それまでは決して手出しをするなと言われているからだ

まぁそれも時間の問題だと男はニヤリと笑った

かたづけられていた古びた椅子を引っ張り出してきて武器庫のドアを閉めた

小さな燭台に火を灯し、綺麗なドレスを着た二人の王女を見下ろす

整った顔立ちで将来が楽しみではあると男はふと思った

が、それでも殺すのを躊躇う気は微塵も起こらなかった

それまでにこの小太りの男は二人を憎んでいた

理由は知らないが残りの三人も同じ事を思って集った仲間

其処までしようとするくらいだから国への恨みは半端な物ではないだろうと予想する

まぁ、あいつ等の復讐したい理由はしらんが、自分には関係の無いことだ

「お前等には悪いなぁ。その肉体に罪はないが、その名に罪がある」

「そうか。理由は聞くまでも無いな」

「な・・・にっ！？」

ガラリとと重い扉が開いた

小太りの男は咄嗟に腰に携えた剣を抜いた

抜いた剣は蝋燭の光りと太陽の光を同時に反射させた

「証人になってもらうぞ」

「だ、だれだっ！？」

急激に入ってきた光が男の目を眩ませた

その一瞬でその男は剣の鞘で男の首を薙ぎ払い、小太りの男も男の動きに反応して剣で防ごうとした

ただ目で見た情報が脳へと届き、体が反応するまでの僅かな間

その僅かな間に男は後頭部に強い衝撃を受け、地面へと倒れ込む

脳がぐらぐらと揺れている感じがしてうまく立てない

立とうとして男はふらつき、そして武器庫と外の地面との段差で躓（つまず）き、再度地面へと倒れ込んだ

「く・・・そっ・・・・・」

「ふん。そこで寝てろ」

男は再度鞘で男の頭を叩いた

男はがくりと意識を失った

「さて・・・どういうことだこれは・・・」

ホーカーは倒れ伏す二人の王女、リリアとルアを見て顔をしかめた

そこに倒れるのは紛れもなく本物のリーナ聖王国の王女二人

気を失って倒れる王女と謎の男

何故こんな場所に？

それに他の王女達は・・・？避難をしていたはずでは・・・

異変に気がついたホーカーが何故こんな武器庫まで来たかというと、

まず武器を取りに来たのである

つまり先ほどの男の誤算は此処に選手達の武器が保管されていた事

だった

此処へ来る途中、幾人かの名を知った魔術師が居た

だが彼らは自分と同じく大会に参加している選手であった
故に杖がない状態で魔法を使うのは相当な鍛錬が必要である
杖が無い状態で魔法を行使すれば、狙いが上手く定まらないのである
それ故に杖を探そうとしたのかも知れない
が、それが武器庫にあるなどとは一部の人物にしか知らされていなかった
もしもの為の時にと主催者のエフレル殿に聞いておいて良かった
預かられた各自の武器は全てここへ集められる
だがこれは一人では運べる量で無いのは見る前から分かっていた
とりあえず今会場へ集まっていた一部の人間の武器だけ持って行けばそれで良いと思っていたがどうやらそうもいかなそうだ
それよりもまず、この王女たちの事をどうにかしないと行けない
これはホーカーの予想であるが、絶対拉致である。と断言できた

「不味いな・・・」

今偶然二人の王女がいた場所に居合わせたから良かったものの、残

りの三人の王女の中には自国の王女も混じっている

そして男がわざわざこうして王女を拉致して隠していたということは・・・

恐らく他の三人も別の場所に拉致、監禁されていることだろう

早急に他の騎士達にも知らせないと行けない

とりあえずホーカーは己の愛用している槍は後回しにすることにしてあの場に居たリリッド、そして自分と対戦していた男が所持していた剣を見つけた

対戦の前に一度あの男を遠くから見ている

仮面をして会場へ現れたときは何者かと思ったが、その印象が強かったおかげであの男が持っていた武器も覚えていたのである

あの男も自らの剣が何処に保管されていたかは知らなかっただろう

あの男も何か考えがあって俺に観客の避難を命じたのだろう

俺が指示するまでもなく、騎士達は皆観客を避難させていたおかげでこうして武器を手に入れ王女を守ることができたのだが・・・

ここに男の剣があるということは剣を取りに行った訳では無いようである

そしてあの男がもしこの倒れている男と仲間だったとしたら・・・

合点がいく

フェリーの乱入と同時に姿を消した男
そして恐らくその避難中に拉致された王女達
自分に観客の避難を命じさせたのは、勝手に騎士達が会場内に動き回って欲しくないからか
なるほど全てつじつまが合う
だが・・・あの男の瞳はそんなものではなかったと思う
あの仮面の奥に見た瞳は、とても純粋に見えたのである
あれは俺たち騎士が宿すのと同じ瞳の色だ
それを疑いたくも無いという気持ちがホーカーには合った
もしあの男に武器を渡して、それで戦いになったら相手に手を貸したことになる
そうでなくても武器無しと武器有りの違いは大きい
あの男・・・信じていいのだろうか？
いや、それよりも先に王女だ
ホーカーは見つけた男の剣を小太りの男が座っていた椅子の上に置き、リリッドの剣だけを腰に差した

そして逃げられては不味いと自らの武器である槍を手に取り、男の服の袖に向けて地面ごと突き刺した

滅多なことでは取れない・・・はずだ

二人の王女を担ぎ、そして武器庫を後にした

　水飛沫は収まることを知らないかのように水上へと水柱が何本も吹き上がった

水中で龍が火球を飛ばしたのは一度だけだったが龍がフェリーの体を何度も底へと叩きつけるため大きな水柱があがっていたのである

周囲の水を沸騰させるかの如く零距離で放たれたそれは大きくフェリーの背を焼いた

時折水面から飛び出す尾が水面を叩く

その光景を見ていた彩輝はなんと凄まじい光景だろうと水中であったにもかかわらず目を閉じようと思うことは無かった

そんな矢先、心の中へと龍の声が聞こえてきた

（ここに居る者達は何故この魔獣に対して戦意を向けぬ？）

何故だろうか

確かにこの魔獣は綺麗ではあるが、会場を襲撃しようとしたのは目に見えている

この魔獣をたたきのめしたところで誰が文句を言うものか

ただ、もしかしたら保護の対象になっていたりするのだろうか？

もしかしたらそういう位置にある魔獣なのかもしれない

この状態で、手を出さない方がどうかしている。んらば手を出せない理由が何かしらあるのだろう

それが相手の能力に関係するのか、希少な存在で保護をされているからなのかは知らない

そんな俺の心の思考を読みとった龍が語りかけてきた

（そうか。ならば幻術を打ち破って見せよう）

幻術を打ち破る？なんの事だろうか？

龍はグッと顎に力を込め、そして翼を水中で大きく羽ばたかせた

水面がグッと盛り上がり、フェリーを捕まえた龍が空へと飛び出した

その瞬間、龍が噛みついている部分からフェリーの周囲に文字通り亀裂が入る

視覚でも捉えられるその亀裂はフェリーの周囲を覆うようにして広がっていく

そして龍が思いっきりその部分をかみ砕いた

ばきんと音を立てて顎が噛み合わさる

滴り落ちる水がキラキラと太陽の光を反射しており、風を受けて空へと散っていく

紅の翼が大きく羽ばたき、虹の翼に亀裂が走る

虹の幻がバラバラとこぼれ落ちる

そして亀裂がフェリーの周囲を覆い尽くす

水中へと逃げ込んだ騎士達も水面へとあがってきてその光景を目にした

七色の虹は空には無かった

虹が消え、代わりに現れたのは歪な翼であった

その眼下に、滴る水が反射させた虹が現れた

美しいはずの虹はその歪な翼が陰らせる

だが誰もその虹を美しむ目で見ることは無かった

『闘技場での戦い』

その鳥は水中から飛び出た後もゆっくりと羽ばたき続けた

小柄な顔に似合わない大きな瞳がぎょろりと動く

片方の翼が龍との接触時に折れたのだろうか、体を支えて飛ぶのが精一杯という風に見えた

それを一言で表すなら、鶴だ

真っ赤な鶴

そして翼には布がかけられており服のようになっている

布の片方には月を、片方には太陽を催したであろうマークが入っているのが見えた

普通の鶴には無い長い束になった二本の尾が風に揺れる

長い嘴が打ち合い、カンカンと音を響かせる

「紅い・・・鶴・・・！？」

そこには先ほどまで優雅に空を舞っていた虹は無く、代わりに深紅に染まった鶴のような巨大な鳥が現れた

翼を羽ばたかせる紅鶴だったが翼を羽ばたかせるたびに、その折れた翼から軋む音が聞こえてくる

何かが擦れ、かみ合わないような音が

「あらら、もうばれちゃいましたか」

彩輝はバッと上空の男を睨み付けた

男のローブの隙間から現れている翼が太陽の光を遮り、男の姿が光りの影で見づらい

「せっかく、不可視と幻術の二つをかけてあげたというのに、あまりにあっけなくばれすぎですよ。これじゃぁやられちゃってもしりませんよ」

そういって男は彩輝を無視してスッと動き出す

男は宝玉の方へと向かって飛んでいった

時間稼ぎはそれほどできないと踏んで無理矢理にでも奪取するつもりなのだろうか

ローブの男は先ほど目の前を飛んでいった騎士の人が立ちあがるのを見つめた

「面倒ですね。本当に、面倒ですよ」

とりあえず、自分一人じゃかなわないにしても足止めくらいは・・・

誰かこちらに気がついて手を回してくれるひとがいてくれればと淡い期待を込めて彩輝は二本の短い木刀を構えた

そして剣に風を纏わせる

今の彩輝は特訓で魔力を属性ごとに引き出し、それを簡単な動作だけならば扱うことができるようになっていた

そしてこれはその練習の時身につけた技の一つ

先生から教えられた、魔力の扱いを練習する時に教えられた技

魔力を自在にコントロールするための基礎練習として何度も様々な魔力を体から引き出して使えるようにした

「いくぞ」

二本の木でできた短刀の周囲に風が渦巻く

それを感じて彩輝は腰を落とす
動く男に狙いを定め、剣をしっかりと握りしめる
幸いまだ男はこちらの様子に気がついていない様子であり、狙い撃つならスピードが乗っていない今だろうと覚悟を決める

「さぁ・・・成功してくれよ・・・」

まだ練習途中の技であり、武闘大会で使うことはできない位の殺傷能力があることも知っていた
だからコントロールが完全でない状態で放つ技ではないのも承知の上だった
だが・・・

「ここでやらずにどこでやるっ！！」

そう言い放って彩輝は左の剣を先に振り、後に続くように右の剣を振るった
剣が纏っていた風が、剣を振るった斬撃に乗って風の刃となる
それは目に見えないがかなりのスピードがあるのを彩輝は知っていた

見えないものを避けるなんてことは少なくとも彩輝にはできないし、これをもし感知したとしても避ける動作に体が追いつくはずもないと思ったからだ

そして風が止んだ

一直線に飛んでいく二つの風刃の一つが男の翼の一部を切り裂いた

男が一瞬動揺したように見えた

が、次の瞬間クルリと反転して恐らくローブのしたから出したであろう剣が何もない空間を切り裂いた

男はそのまま空中で翼を羽ばたいて急停止しようと思ったのだろう

体勢を起こして翼を羽ばたかせたが、破れた翼が風を捉えきれなかったのだろう

大きくバランスを崩して落ちていく

追撃しようかとも思ったが、男が落ちていったのは先ほど龍と紅鶴が落ちてまっぷたつになった闘技場の上であった

その上には先ほど騎士を投げ飛ばした先生やチルさんがはい上がってきていたため、コントロールが難しい風刃は出すことができなかった

あれが善人に見えるはずもないだろうと判断を向こうに任せ彩輝はまず宝玉の方へと向かうことにした

そもそも声なんて届かない

あれを隠してさえしまえば男に勝ち目はない

前回、あの戦力差で逃げ帰った男が、それ以上の戦力に対抗できるとは思えない

闘技場に居る騎士達、それよりも伝えるべきなのは自分よりその目的の宝玉を目の前にしている騎士だと判断した

つまり先ほど先生に投げ飛ばされた騎士だ

あと数十メートルほどで声が十分とどきそうな位置に到達してふと後ろを振り返る

落ちていった男が割れた闘技場にぶつかろうか、と同時に何人かがその男の存在に気がついたようである

咄嗟に近くにいた騎士数人が武器を構えた

男はそれに気にとめる様子は微塵もなく、クルリと反転して足から着地、そしてそのまましゃがんで勢いを殺し、逆にその足をバネのように弾いて男は一直線に脚力のみで宝玉を目指すようだ

脚力だけで目指す、そう思わせたのはその威力とスピードだった

バンと蹴った闘技場からグングンと、まるで大砲のように飛んでいく

そしてすぐに自分と横一線に並んだ

その男の手には先ほど取りだした剣が握られていた
とりあえず、もうここから叫ばないと男の接近にあの人も対応できないだろうと彩輝は息を大きく吸い込んで叫んだ

「その人を止めてくださーーーい！！」

その声が届いたのかどうか、ふらりとしていた男が頭を押さえつつぴたりと足を止め、顔を上げた

リリッド・アシェードはふらりと立ちあがる

頭がズキズキする

壁に手をつきながらもう片方の手で頭を押さえる

すこし何とか思考ができるような状態になり、自分を投げ飛ばした張本人を心の中でバーカバーカと愚弄する

「ちきしょ・・・あのやろ・・・覚えてろ・・・」

全く何を思ってリリッドが投げられたのか当の本人は待ったくもって理解していなかった

それ故に、自分が何故こんなところにいるのかも理解が及ばなかった

投げられたと思えばここは商品である宝玉と賞金が置かれた場所じゃないだろうか

足下には大事そうに置かれている二つの物体を瞳に捉える

一つはずっしりと重そうな革袋

恐らく中身は金貨だろう

そしてもう一つはそれ専用に作られたとも言えそうな豪華な宝飾の台に飾られた深紅の宝玉

「そ・・ひと・とめて・・さ・・・」

ゆっくりと頭痛が引いてきたその矢先、どこか遠くから人の声が聞こえた気がした

まだ頭痛が完全に引いていなかったせいか、それとも距離があったせいか、その声は耳にはかすれて入ってきた

言葉の意味を理解するより先に、体が動いた

ふらついていた体がぴたりと止まり、その接近を感じ取る

戦場で培った勘、というかその殺気が自分の遙か前方から近づいてくるのが感じられた

すぐに腰の剣を鞘から抜く

剣と鞘がじゃりんと擦れ、一瞬後には金属と金属がぶつかる音、そして感触が手元へと伝わってきた

目の前にはローブを被った男が俺に剣を振り下ろしていた

その剣を咄嗟に止めた自分に驚きつつも、すぐさま体が動いた

相手の剣が一瞬離れたかと思うと剣を握る手にかかっていた力がフッと消えた

剣を引いた男は大きく一歩を踏み出して突きを放ってきた

何なんだ一体!?

体を反らして突きを避けるとリリッドはその剣をはじき返し、今度はこちらから剣を振るった

手加減無しで、殺す勢いで振るったつもりだった

この位置からならそれぐらいで斬る勢いをつけても剣は浅くまでしか入らないだろうという考えでの行動だった

殺す勢いでも、致命傷にならなければ相手の戦意を削ぐ位の役割は果たしてくれるだろう、と

だからこそ、それをかわされた事に驚き、目を見開いた

何が起こったのか、かわせるようなタイミングでは無かったと思った

今のを避けるのか！？

そう心の中で問いかけつつ剣を振るった。今度は斬るためではなく己の体を守るために

先ほどの勢いよく振るった攻撃の後、ずっと男のペースにリリッドは飲まれた

素早き剣の動きをリリッドは持ち前の反射神経で全て受けきる

早い・・・っ！

副隊長をやっているリリッドでさえ、此処までのスピードで剣を振るえる者を浮かべても数人しかでてきはしないだろう

ましてや自分に先読みをさせないと捌ききれないほどの連撃とはリリッドも驚くよりも戦慄を覚えた

男の連撃に割り込むようにして大きく剣を一振りした

攻撃を続けていた男だったがその一振りで流れを止められた男は一歩大地を蹴り飛ばし後退、着地して両足を床に着ける

「どーいてくれませんかねぇ？」

「できない相談だな。そもそもお前、何者だよ」

よく見れば男の背中から翼が広がっている

ローブから伸びた翼がまるで人間とは思えない

人の形をしながら、獣の翼を持っている

そんな生き物がいるとすれば、もう大昔に滅んだとされるあの種族のみ

だが、そんなことが・・・

「あら、察しはつうぅーいてると思ったんだけどなぁ。百年も表舞台に出てこないだけで忘れ去られてしまう存在・・・とは何と悲しい」

「ちっ、変なしゃべり方をするなお前。自覚してんのか？」

「これはまぁ、ね。ちょっとテンションの問題さ。意識していないと変な口調になっちゃうんだよね。なんて言うんだっけ？口癖・・・じゃないか？癖・・・かな」

「ふぅん。お前の正体にも何となく察しはついているが・・・そうか、生きているのかお前達は」

「うん。生きてるよ」

「そうか。それで、何を企んでいる」

ローブの男はやれやれといった感じでため息をついた

「みんなそれを聞いてくるんだよねぇ。さっきの少年にしろ君にしろ、そんなの答えるはずがないって分かり切ってるくせに」

「そりゃぁ聞きたいだろ。此処まで大がかりな事をセッティングしておいて、そうせざるを得ないほどにやらないといけないことがあるんだろう？」

何となく言ってみるが、どうやら図星のようで唯一表情が伺える男の口元がニヤリと笑う

「まぁ、自然とそうなりますよね」

「そしてお前が狙っているのはこの宝玉・・・だろう恐らく。金ならばわざわざこんな事をしてまで奪うような必要はないはずだ。大方あの大きな魔獣もお前の差し金だろう」

「おー、そこまで分かっちゃいますかー」

「アホでも多少の察しは付くさ」

「ま、これも二つ名にかけておくと言うことで」

「馬鹿言うな。関係ないよ」

そう、元はといえば全てあの忌々しい女のせい

俺を投げ飛ばした張本人のせいである

あの野郎がつけたあだ名がどれだけ自分にピッタリでもそれだけでムカムカしてくる

男はそんなこと無いと笑った

「ちゃんと私の連撃を全て受け止めることができるなんて、『読みのアシェード』とはよく言ったものです。両手があいているならば拍手をしてあげたいくらいですよ全く」

確かに男の連撃は凄まじかった

剣捌きだけでなく体捌きも並のレベルではないだろう

「さて・・・この騒動の元凶がお前なのだとしたら――――」

「だとしたら、どうするというのですかぁ？」

「そうだな。捕まえて拷問だな」

「あぁ、それは嫌ですね。想像したら鳥肌が立ってきました」

男はそう言って身震いした

本当にそう思っているのかどうかはともかく、自分ができる行動はただ一つ

男が剣を構え、俺も剣を構え、互いの利害が反したとき起こることは決まっている

二つの剣が擦れる

互いの顔が十センチほどに近づく

「これでも副隊長なんだぞ」

「なめてませんよ。えぇ、手加減もするつもりないのであしからず」

「めんどくせぇなぁ」

「楽しみましょうよ」

「だれがっ！！」

そういった男は楽しんでいるのだろうか、口元はずっとにやけたま

まだ

アシェードの剣が翻った

彩輝がその場に最も近い場所にたどり着いたときにはもはや人間とは思えない勝負をしていた

十メートル先で、自分が見たこともないような世界を見せつけられた

煌めく剣が右へ左へ、時には上や下からも重なりぶつかり合う

そのたびに剣が擦れ火花が散る

二人の立ち位置も重なっては半歩ズレ、また重なっては立ち位置が入れ替わり、兎に角口で言おうにも追いつかないほどのスピードの戦いが繰り広げられていた

自分なんかが入り込む余地がないと思う一方、その光景に心を奪われていた

アシェードさんは宝玉を守るようにして戦いつつも、男にそれを渡さないようにして尚かつ自分の動きにも無駄がないように動く

対する男も攻めを続けるが全てアシェードの剣が受け止めてしまい、決定打を打ち込めていないにしろそのスピードはほぼ互角であったためだろうか

先ほどのにやけた顔がどこかへ吹き飛んでしまったかのように口元はしっかり閉まっている

ローブの男もまた、本気で剣を振るっているのだろう
だからこそ唯一表情が読めるその口元に余裕は見えなかった

「さっきまでの余裕は何処へやら」

「そちらこそ、攻める気が無いのですかな？」

交錯する二人の動きが一瞬止まる

剣と剣がぶつかり、押し合うようにして顔を近づけて会話をする

その一瞬の膠着はアシェードのごり押しで男の剣を押し返すことでとける

男は再び攻めようとしたが、ちらりと背後を気にした

後ろの方では敗走を始めた紅鶴がいた

彩輝も一端そちらへ目をやった

紅鶴は方翼が折れていながら未だ空を飛んでおり、ふらつきながらゆっくりとこの会場を後にしようとしていたのが見えた

ぎしぎしがらがら羽から音が聞こえる

生命的なものではなく、もっと機械的な音である

追撃態勢に移っているチルさんが見えた
そんななか、俺の背後から突如腕が伸びてきた
その手は俺の肩をがしっとつかんだ
バッと振り返るとそこには真剣な顔をした一条さんがいた
「アーヤん、王女さんたちが攫われた」
その後、一条さんと分かれた俺は会場裏手をかけずり回っていた
王女五人が攫われ、リーナのリリアとルア王女だけは助け出されたという
その場をあの騎士に任せて二人は会場へと戻る
助け出したのはリーナの騎士団長という話だが、その彼の話によると武器庫に王女二人は拉致監禁されていたらしい
偶然武器を取りに行っていて鉢合わせたそうだ
とりあえず二人が無事だったと言うだけでも安心だ
だが残りの三人がまだどこかに連れ去られたままらしいのだ

会場の入り口等は騎士達が見張りをしているので観客に紛れて出ようなんて真似はできないはずである

とりあえず、彩輝はまずその武器庫に向かうことにした

場所の案内も兼ねてホーカーさんが同行してくれる事になった

あの場に残してきた騎士とこの事件が仕組まれた者であり、その元凶と先ほどの騎士が戦っている事もそのホーカーさんに伝えた

援護でもよこさせようとでもいうかと思ったが、彼は首を横に振ってその場は彼に任せようと言った

何でも実力だけは有るらしい

ホーカーも皆の武器を持って会場へと戻るらしいので今その後ろをついて走っているところである

ホーカーが誰かに知らせようと王女を背負って最初に出会ったのが一条唯であった

彩輝に少し遅れて医務室から会場の方へと向かっていた彼女とホーカーがちょうどばったり出くわし、そして彼女に他の騎士達にこの事実を伝えて捜索をして欲しいという

誰にも悟られないように、だ

相手はまだこの事実を知らないため、それを誰かに知られ犯人の耳にでも入れば王女達に危害を加える可能性が高まるとホーカーが判

断したためだ

相手を刺激せず、穏便に助け出すようにと一条に伝えてホーカーは医務室へと王女を連れて行くことにした

一条さんがその後、会場へ戻って騎士達に伝えようと客席に出たところでローブの男と対峙する俺を見つけたのである

その後、走り去った俺を追って来て俺に事態を伝えてくれた

会場に残っていても、なんだか足手纏いになりそうなくらいに混沌としていたので俺もその場から引いて王女達を探し始めたのである

そこで出会ったのが武器庫へ向かうホーカーさんだった

一条さんにも危ないから騎士に任せて探すのを自粛するようにとホーカーから言われたがそれを真っ向から反発して自分もお世話になった身で引くことはできないと探しに出たらしい

そして俺を連れてそのホーカーさんの場所へと戻ってきた

今俺と一条さんは別行動で一条さんは王女達を探しに駆け回っているはずだ

ホーカーさんは一条さんと分かれた後先ほどのローブの男と対峙している騎士に剣を渡したと言っていた

彼はあれでもグレアント王国の副騎士団長らしい

彼が向かうと言う武器庫、そこにきっと自分のソーレもあると彩輝

は確信した俺も同行させて欲しいとたのんだ
話はまず武器を取り返してからだ
武器無しで、覚え立ての魔法を使って誘拐犯と戦う気は毛頭無い

「ここだ」

会場の裏手に位置するその武器庫の扉を開け放つ
そこには服を床につなぎ止められた状態で気を失っている男が一人倒れていた
その向こう側には厳重に保管されている武器が棚にズラリと並んでいた
その中からソーレを見つけ出し、腰に差す

「じゃぁ俺、王女達を探してきます」

「分かった。気をつけろ。お前の実力は知らんが、それでも探してくれるだけでもありがたい」

「はい」

そう言って俺は武器庫を後にする

左右に道があるが、あえてそちらは通らない
人が簡単に通る場所に彼らが隠れているとは思いにくい
それより見つかりにくいと思える部屋を探したほうがいいと踏んだ
彩輝は投げ捨てられているゴミやパンフレットなどのなかから地図を見つけた
恐らく避難していく観客達が捨てていったものであろうと思われる
地下もあり、敷地内には離れた場所に物見台もあるようである
この闘技場の中で怪しいのはその二つだが、武器庫で見つけたという事もあるので会場近くの室内ということもあり得る
何処を探そうか、そう思ったとき、ふと目の前を見上げた
目の前には柵があり、それが闘技場の裏手の小さな庭園になっていた
そしてその奥、小さな小屋が見える
一応敷地内・・・だよな
彩輝はとりあえず、目の前の小屋から当たってみることにした

『闘技場での戦い』（後書き）

なんだか上手く書けてない気がする
主題が決まっていないせいだろうか

『紅蓮の王女』

アルフレアは小さな物置小屋のような場所に閉じこめられていた
気を失ってどれだけたっただろうか、彼女にもそれは分からない
目が覚めれば見知らぬ場所に閉じこめられていたのだから分かるはずもない
目を開いて思いつくのは、暗い、そして物置のような場所という事だけである
奥には埃を被ったような年代物の箒や壺がいくつも置かれているのが見えた

「目が覚めたか」

突如背後からした声にアルフレアは息を殺した
男が倒れたアルフレアの前方へと回り込んできた
視線を足下から上へと上げていく
暗い物置を照らすのは小さなランタン一つ

その壁に掛けられたランタンが男の顔をうっすらと照らし出す
両手両足を縄で縛られており、身動きは取れそうもない

「おはようお姫様」

「最悪の寝起きだ。お前、私にこんな真似をして只で済むと思うなよ」

照らし出された顔、それは恐らく自分を眠らせたローブの男では無いと判断する
理由でいえば最初に違和感を感じたのはその口元だ
男の表情を読み取れる唯一の場所だったからだろうか、ローブの男の口元の印象はしっかりと覚えていた
それにあのローブの男には髭は生えていなかったし、そもそも声も違う
身長も見上げているからだろうか、あの男より若干大きく感じられる
アルフレアはどうにかして縄を解こうと手足を動かしたが取れる気配は微塵もない

「つれないこと言うなよ。なぁ」

「何が目的だ。金か？宝玉か？」

王女を攫うほどの大がかりな計画、そもそもこんな簡単にいくはずがない

何故あんなにも簡単に忍び寄れた？それに自分以外の王女達は何故突然の睡魔に襲われたのか

「そんなものに興味があるのは一人だけ。まぁあいつもそれなりに恨みはあったようだが直接王女に仕返しをするつもりは無かっただけらしいがな」

ということは犯人は最低二人はいるわけだ

あのローブの男、そしてこの男

ただ二人以上居ると考えてまず間違いは無いだろう

二人でやるにしては男が他の四人を一人で連れて行けるはずがないとアルフレアは思った

実際には一人で五人を運んでいたのだが、二人ではないというところはあっていた

「他の王女は無事なのか？」

「まぁな。まだ・・・だけどな。さて、お前、俺が誰だか分かるか？分かるわけないよなぁ」

「知って居るとも。記憶力だけは多少自信はあるんだ。一年前、騎士の応募に来ていたオルドート・カルコだろう」

男がすんなり自分の名をあげた王女を見て目を丸くしていた

それもそうだろう

まさか一年前の騎士の応募に自分が混ざっていたことを覚えているはずが無いと思い切っていたからだ

普通ならばそうだっただろう

王女であるアルフレアが、騎士になってすらいない只の国民を覚えているはずが無い、と

「それで、私に恨みがあるのだろう？さっきの口振りから考えるに」

「・・・まぁな。でもまさかあんたに自分の名前を当てられるとは思っていなかったがな」

「私の記憶では、お前とは一言も話した覚えが無いのだが」

アルフレアはザッと記憶を遡ってみたが、この男と直に接した思い出は全くない

以前書類で見た事があるだけである

「そりゃぁそうだ。普通は王女が民の前に顔を出す事もないうえに干渉なんて以ての外だろうな」

「・・・何が言いたい」

「別にたいした意味を込めた訳じゃねぇよ」

男はそう言ってしゃがみ込む

アルフレアの顔のすぐ近くに男の顔が迫る

「俺は恨んでるんだよ。俺を採用しなかったお前等をな」

「あ？」

「ふん。どうせ何も考えちゃいないんだ。お偉い様は。何時何処で俺たちが苦しもうと、お前達はのんきに毎日お城で宴ときたもんだ。やってらんねぇよなぁ」

「偏見だな。それに逆恨みか？」

「ふん。俺だってそこらじゃ名の知れた憲兵だったつもりさ。そんな俺も足を払って隠居してたところに騎士になりませんかとお前等のところからお誘いがあったんだよ」

アルフレアも男の言っている意味は分かった

グレアントでは新規の騎士を採用したいとき、二つの方法がある

一つは男の言った通り、国内にいる実力があると思われる者に騎士にならないかと書類を送るものだ

強制では無いのでその力を国のために役に立てないか、ということだ

だがこれで採用される者は少ないと言って言い

これは何も国内全員に配る訳ではなく、ある程度の実力を持った人間にのみ送られる書類である

国に住むにも住民届けやら過去の犯罪歴やらといろいろと情報を得る手段がある

その中から、憲兵やギルドをやっているものなどからごく一部を選び、書類を送るというものだ

もう一つは志願者を募る方法

実力が無くとも騎士になれる素質は有るかも知れない

騎士になりたいと思って来る者はこの道を通る事になる

志願してきた中から募集定員分を選ぶ

もし人数が少なくても全員を合格とする訳にも行かないので一応基準ぐらいは設けてある

それをクリアした中から選ばれるのだ

男が憲兵をやっていたというなら男の元にもそんな勧誘の書類が行っていてもおかしくはないとアルフレアは思った

いや、この言い方はおかしかったか

アルフレア自身が彼を選んだので、あぁそうかと思い出して思ったのが本音であった

「ふん。それで試験に落とされて逆恨みか？確かに私はお前を選んでおきながら不採用にした」

「俺としては腹が立つんだよ！要するに俺の力を認めなかったお前等にな！！」

「バカらしい。落としておいて正解だったよ。確かに書類上はお前の実力はそれなりのものだった。だが、落とされた理由が分からないようではお前はいつまでもうちでは採用しない」

「なんだとぉ・・・」

「力バカだな。ちょっと力があるからと威張りおって。ほら、ちょっと言われてすぐ怒る。そこが駄目なんだ」

アルフレアが使える魔法は火の魔法

だがここにはその火のマナは無い

その場に火のマナが無くとも、それを補う事ができる物がある

魔石である

魔石はマナの結晶のような物で土のマナが多くそのマナを吸い取った時に凝縮して生み出される物である

土のマナは他の属性のマナを吸収する性質があるのだが、もし山火事や火山地帯なんかだとそこには火のマナが多く溢れるのである

空気中や地中に溜まった火のマナがある一定箇所へと集中して吸収された場合、そこにマナの結晶、魔石ができあがるのである

土のマナもそこら中の土にあるわけではなく、養分の溜まった場所によくできる傾向がある

落ち葉が溜まった土の周辺などがそうである

その魔石には他のマナが混ざっていないほどの純粋なマナの結晶であり、それを持っていればそこからマナの補充ができるのである

アルフレアはその火のマナの結晶である火の魔石を常時持ち歩いている

水のマナは水そのものに宿っているため水の魔法使いの多くは魔石では無く水の入った瓶を持ち歩くと聞いている

「まぁ今のところは殺す気はねぇから安心しな。お前は大事な取引道具だからな」

男はそういって椅子にドサリと座った

「取引道具・・・か」

「ん、なんだ?今ので怒ったか?」

「・・・いや、決心がついただけだ」

「決心?」

「あぁ。お前が私を人として見ていないのならば、もはや容赦はしまい」

ドレスの中に入っていた火の魔石からマナを取り込み体内で変換させる

小さな魔法陣が広がり、それと同時に手足のロープに小さな火をつける

火はロープを焦がし、ぼとりと地面に落ちる

「な・・・バカな!?火のマナなどこんな場所にあるはずが・・・

まさか魔石・・・」

「用心して持ち歩いていて助かった」

とはいっても持ち歩けるようなサイズの魔石では凝縮されたマナの量なんてたかがしれている

だが、小さな火をつけるぐらいなら問題は全然ない

それに加えてもう一発だけ普通の魔術を使うくらいなら問題ないくらいの量である

「あり得ない、とでも思っているのかその小さな脳みそは?」

「ちっ・・・」

男が腰に差した剣を抜いて襲いかかろうと前屈みになった

「遅いっ!!」

アルフレアは男が剣を抜くよりも早く魔術を行使した

魔法陣が再び広がり先ほどよりも大きな魔法陣の光が暗い倉庫を紅く染めた

「あふれ出す　灼熱纏う　竜の牙！ドラグラニスク！！」

「ぬ、おっ！？」

あふれ出す魔力の渦が魔法陣を通して魔術へと変換される

振りかぶった右腕から大きな牙のような物が一本突き出す

実際には腕からではなく、纏った炎から飛び出た炎の牙のように見えるそれは完全に室内を明るく照らし出す

男の驚愕する瞳めがけ、アルフレアはその右腕を振り下ろす

鎌のような炎の牙が、斬りかかってきた男の頭上から振り落とされた

彩輝が小屋に小走りで駆け寄っていく

そして、吹き飛ぶ小屋の屋根

「ぬぁーーーーー！？」

尻餅をついて吹き飛んだのが屋根、そして吹き飛ばしたのが炎の柱だということに脳が解釈するまでにたっぷり十数秒かかった

「な、なな、何事!?」

吹き飛んだ屋根は消し炭になって風に舞い、突如現れた炎の柱も一本の糸のようになって空気中へと消えていった

彩輝が王女を捜して手始めに目の前の小屋から探そうとしたらこれだ

心構えもしていない状態であんな爆音と誰も予想できないような光景を目の当たりにして尻餅をつかない奴がいるだろうか

立ち上った柱を視界でとらえた瞬間に周囲に恐ろしいほどの熱の波が襲いかかった

「ふぅ、久しぶりにすっきりしたが、この男死んではないだろうな？」

「ア・・・あああああアルフレアさん!?な、何がどうして・・・」

「お、おうアヤキ君。君とはよく会うね」

俺の前に現れたのは一部焦げた真っ赤なドレスを身に纏い、ずるずると男を引っ張ってきたグレアント王国王女アルフレアさんだった

普通初めてこの人の様子を見て王女だと思うような奴は居ないだろうというくらいに、顔には煤(スス)までついているほど汚れていた

「いやね、誘拐されたから返り討ちにしたんだよ」

「あの、いやそれは・・・知ってますけど・・・」

「ん、どうした？いつもの元気無いじゃないか」

「いや、だってねぇ、あれ、アルフレアさんがやったんですか？」

「ん、そうだ・・・が・・・」

アルフレアさんは俺が指さす小屋を振り向いて、言葉を発していた口がぴたりと止まった

そこには、屋根の吹き飛んだ小屋が一つ

窓は吹き飛び、至る所が焦げて黒ずんでいる

「・・・うん。費用は後でだそう。うん。私金持ちだから」

いいのかそれで！？

いや、まぁ金持ちだとは知っているけど

「そうだ、私以外の王女もどうやらさらわれているんだ！」

「あ、知ってます。それで探していたんですよ」

なんというか、普通こういう捕まったお姫様って閉じこめられたりしてて、それを守るようなボスがいたりしてっていうのが普通だったと思うんだけど・・・なぁ

だよね。普通。さらわれたお姫様が普通さらった男を倒して来るとか普通じゃ無いよね

「たたきのめす前に場所を聞き出しておけばよかったな」

「っていっても、それ人なんですか本当に？炭化してません？」

アルフレアが引きずっている男はもはや人の形をしてなければ人だと分からないくらいに真っ黒になっている

「多少かっとなりはしたが寸前で手加減した・・・はず」

「断言はしないんですね」

「ま、まぁ、そこは・・・ね。それより、あとのみんなは・・・」

「あ、リーナの二人は見つかったらしいです。他にも何人か探しに出てくれてる見たいですけど」

「そう。じゃぁ後は」

「セレシアさんとえっと、エリエルさんですね」

一瞬名前が出てこなかったが何とか思い出して恥ずかしい思いをしなくて済んだ

アルフレアもこくりと頷いてドレスから小さな石ころを取り出して後ろに放り投げた

「今のは？」

「あぁ。使い終わった魔石。マナ吸い取っちゃったからね」

どうやら魔石というものはマナを吸い取ると普通の石へと戻ってしまうらしい

「でも一体何があったんですか？」

あんな物騒な魔法を放つこともできるようなこの人があっさり誘拐されるとは思わない

というか誘拐した本人を倒せる実力がありながらなんで誘拐なんて

「さぁ、ね。避難していたら突然四人がばたりと倒れてね。私だけは何でか大丈夫だったけど、その後現れた男に眠らされたのよ」

拳をグッと握り締め、悔しさを露わにしている

「あのローブの男・・・次会ったら只じゃ――――」

「ローブの男？」

その先を、彩輝の声が遮った

「もう、あれ、つぶしていいんですよね？」

「あぁ、もちろん」

「何よ、じゃぁわざわざ捕まえる必要ないんじゃない・・・」

一方会場ではツキ、グレアント王国序列三位のセルディアが割れた闘技場の上に立っていた

各々、足下には大きな魔法陣が広がっている

「これじゃぁ仕事、なさそうですね」

「だな」

「あの二人で大丈夫よね」

その後ろでドッサリとびしょぬれで座っているのはグレアント序列一位、シレンシス・ルーとリーナの近衛隊長であるラミア・シェークスであった

そしてその後ろには這い上がってきたユディスとチルが居た

折れた翼を広げ、龍の攻撃によって痛手を受けた魔獣は敗走を始めていた

幻視でフェリーに見せていたがそれすら解けてしまい、もはや手加減は必要ないとの判断が集まった騎士や魔術師でされた

誰も見たことの無い魔獣であり、殺してしまうのは些か躊躇われたがここまでされておいて逃げるのを待つ気は誰の心の中にも無かった

「静かなる立花よ――――」

「万雷よ――――」

ツキ、そしてセルディアが魔術を行使しようとした

「静かに忍び――」

「幾万の槍となりて――」

ツキが大きく手に持った杖を振りかぶる

セルディアは右手を振りかぶる

杖にもまた魔法陣が浮かび上がり、セルディアの右手の先にもまた魔法陣が現れる

手の先にいくつもの槍が生まれる

「静に吹雪け」

「敵を貫け！」

二人が同時に杖と腕を振るった

「ユミリス！」

「イラディアント！」

杖の先の魔法陣からはあふれ出してくる粉雪

腕を振るって飛んでいく雷の槍

二つの魔術が逃げようとする魔獣めがけて飛んでいく

魔獣は飛んで逃げようとしているが、翼が折れているためスピードを出せていない

「逃がすかぁっ！」

セルディアが吠えた

後ろががら空きなうえ、逃げるスピードよりも魔術が魔獣へ到達するスピードの方が早い

誰もがそう思った

だが

パシュンッ！！

「な！？」

「え・・・」

二人の声が漏れる

襲いかかる吹雪と雷の槍は魔獣へと到達する寸前、見えない何かに弾かれたのだ

空気中へと四散する魔術

しかし魔獣が攻撃を防御する様子は全くない

「防がれた、か。物理的な攻撃しか受け付けないのか・・・？」

「あ、じゃぁ次私ね」

チルが蒼天駆を鞘から抜く

さっきの仕返しと言わんばかりにチルが空中へと飛び出していった

先ほどチルが放った攻撃が当たって重力の魔法が解けたのを思い出して誰もチルが飛び出していくのを止める者は居なかった

そこにホーカーが到着する

「皆・・・」

「ホーカー・・・さん？」

ラミア・シェークスとシレンシス・ルーが振り返るとそこにはいくつか武器を担いだホーカーが居た

「どうしたんですかそんな汗だくになって・・・それにその武器って」

「あぁ、お前等のだ。それよりも耳に通して欲しい大事な話がある」

そう言って総重量とてつもない武器の束を床へと降ろす

息を整える様子を見てどうやらかなり走ったらしい

顔を上げたホーカーの顔を見て、ラミアとシレンシスが顔を見合わせた

「くっ・・・」

事情を話し終えたホーカーの横を、指示もなく飛び出していったのはラミア・シェークスであった

疾風の如く、持ってきた武器の中から自らの愛用の武器を見つけて走りながらそれを腰に差した

「ラミア！」

「聞こえてねーなありゃ」

駆けだしていったリーナの近衛隊長は恐らく医務室に向かったのだろう

ホーカーがリリア王女とルア王女をそこで看病させていると言っていたから恐らくはそこだろう

「ま、彼女もそっちが本業だからね」

分からなくはないんだけどね、とユディスが呟く

「それで、聞いたところ、只の逆恨みの犯行に聞こえるけど」

「にしては手間が込んでいるな」

ホーカーはそう言って逃げ去ろうとしている紅鶴を見上げる

「あれが正体か」と呟きながら一緒に持ってきた自らの槍を手に取る

最低限の宝飾しかされては居ないが、その槍は飾りとして意外に十分機能する事をホーカーは知っている

「それには同感ね」

そう言ってユディスが手に持っていた剣をクルリと回して肩でトントンと叩く

鞘がついた状態だが、それを抜けないようにやるのはかなり難易度が高いように思えた

「それなんだけど、あれが一枚噛んでいると思うわ」

「あれ？」

ユディスは鞘に収まった剣を会場の反対側へと向ける
その剣の先が指し示すのは宝玉と賞金が置かれた台座であった

「あれだけ大事な宝玉と大金を野晒しにしておくなんてどうかしてるわよトルロイン家御当主様は。第一何処行ったのよ彼？」

「あそこに居るのはリリッドか？いつの間にあんなところに・・・」

ホーカーがそう言うと、ユディスはばつが悪そうにぽりぽりと頬をかいた

投げ飛ばしたとは良いづらいなぁと視線をそらす

ホーカーの視線の先にあったのはリリッド、そしてローブをつけた男が斬りあっている光景であった

二人とも休むことなく剣を振るい、一進一退の攻防を続けている

ただローブの男が一方的に押しており、リリッドはむしろ守りにまわっている

あの宝玉と賞金を男から守ろうというのだろうか

そんなことよりも、ここにいる誰もが気になっているのはそこではなかった

「何だ、あの翼は・・・？」

ローブの隙間から姿を現すその翼が全員の目を引いた

男は時折翼を使って上からも攻めようとするが、そのたびにリリッドが反撃をしてくるため上手く上昇する事ができずにいる

とはいえ

「リリッドが、押されている・・」

「何者なんだあいつ」

「全く、先読みというのは予想より厄介ですね。ここまで完封されるとは思いませんでした」

「そうかい・・・此処まで先読みを使わないと追いつめられるほど、お前は十分強いと思うぜ」

剣が男のローブを掠める

「あら、じゃぁもう一押しというところですか」

「ならやってみろよ」

「そーれじゃぁ、遠慮無くッ！！」

突如斬り合いの最中、ローブの男の左手が剣を離れる

天高く振り上げられた腕に魔法陣が開く

リリッドは展開したその魔法陣の色を見て我が目を疑った

「黒！？」

「ふふ、驚いてーるねぇ！そーれじゃぁもう一回驚いてぇーもらうかぁー！」

「何だと！？」

振り下ろされた腕、それと同時に腕の先の魔法陣から黒い槍が飛び出してきた

見たことも無い魔法陣の色、そして放たれた黒い槍の魔法

黒い槍は腕を振るう速度に連動しているかのようにものすごいスピードで魔法陣から現れた

迫り来る槍を避けようにも、それでは奴の思うつぼだ
この位置から避けに入れば、守り通した賞金と宝玉はあっさりと持って行かれるだろう
ここははじき返すか何かしてあの槍を止める方向で動く選択肢しかない

「無詠唱っ・・・ぐぅっ！？」

黒い槍は矛と言うより円錐系の槍に近かった
それ故先端が鋭くなっているのだが其処にリリッドは寸分の狂いも無く刃を突き立てた
だが予想以上に槍の出てくるスピードが速くリリッドの反応が遅れて力が入りきらなかった事
そして槍のその威力がリリッドの握力を上回った
その瞬間

「残念ここまでです」

突如真下から男の声が聞こえてきた

リリッドが驚き、男を視界に捉えた瞬間、男はしゃがんだ状態で右足を回してリリッドの両足を薙ぎ払った

リリッドの体が後ろに反れ、槍を止めていた剣がずれてリリッドに襲いかかる

それをずれた剣で少しだけ横にずらすと首の皮一枚で避ける

だが宙に浮いたリリッドの片足を男が掴んだ

それと同時に視界がぶれた

男の腕力はとてつもなく、軽々とリリッドを持ち上げた

斬り合いの最中でも感じていたことだったが、大人一人を片腕で軽々と振り回すなど普通は無理である

そんな面から見てもこの男は異常だった

最も、一番人としておかしいと思うのは背中の翼なのだが

男は半回転してリリッドを会場の方へと投げ飛ばす

リリッドは剣を持ったまま水中へと叩き込まれた

「全く、もう少し時間稼ぎしてくれたって・・・」

離れた場所から見ていた全員がリリッドの負けを予想していなかっただけに驚きを隠せずにいた

ユディスもそう呟いて仕方なく次は自分が行こうと走りだそうとしたその瞬間男の翼がピンと広がった

そして消える

「消えた！？」

セルディアが目を丸くしていた

「いや違う・・・」

セルディアは追い切れなかったようだったが、自分とそしてホーカーには見えていた

ツキと呼ばれた少女も周囲を見渡して男を捜している事から目で追い切れたのは二人だけのようであった

二人は同時に北の空を見上げた

二人の目線の進行方向は、逃げる魔獣の方向

「チルっ！！」

ホーカーが叫んだ

魔獣に向かって足場を作りながら飛んで上を目指すチルが其処にいた

チルも男の接近に気がついたのだろう

持っていた剣で急に襲いかかってきた男にカウンターを入れた

その瞬間、男は再び消えた

その場に残ったのは小さなロープの切れ端のみで男の姿は無い

チルがバッと振り返り、それと同時に剣を薙いだ

金属音が一瞬遅れて下に居た人達の耳に届いた

だがその次の瞬間、男が信じられないようなスピードでチルの背後をとった

一回転するかのようにチルの頭上を飛び越え、チルの背中に蹴りを入れた

チルが反り返りながらふらつくのを見て男はチルの頭上に飛んだ

次の瞬間には再び男の蹴りが決まっていた

チルも咄嗟にガードをとったように見えたが、男の動きと剣の動きが早すぎて目で追いきれないのでガードをとれたのかどうかは分か

らなかった

ただその蹴りで落ちてくるチルは、水柱を立てて水中へと消えていく

メイン会場から少し離れた場所にカイは居た

「ち・・・開きそうも無いな」

鉄製のドアを蹴飛ばすがびくともしない

カイは今、闘技場の外れに位置する監視塔の中に居た

愛用の剣さえ有ればこの扉など簡単に破れるというのに・・・

カイは一端落ち着いて外に出る方法を考えた

フェリーが乱入したと同時に姿を消したカイは武器庫を目指した

そこで不安を感じ取ったカイは真っ先に武器を手にして会場へ戻ろうとした

慣れない場所で少し戸惑いつつも武器庫の場所を壁に張られていた地図を見て知ったカイだったのだがその途中の事である

「あれは・・・」

カイが武器庫目指して走っていると、目の前には十字路があった

するとその十字路を横切っていく影が一つあった

「あれは・・・王女？」

ほんの一瞬だったが、見間違えるはずもない

走り去る人間の肩に担がれたもう一つの人影

観客達の避難は反対側の通路から行われているため、こちらに人が迷い込むという事は無いはずだ

となると、考えられる事はそう多くはない

「まさかな」

脳裏を過ぎった空想が事実でないことを祈りつつカイは十字路で足を止めた

武器庫はこのまま真っ直ぐであるが、その影はそことは別方向へと走っていった

本来なら武器庫へ行く予定だったが、ここはあの王女を追ってみることにしようとカイは進路を変更した

横切っていった影は恐らく男だったと思うが、ローブで顔や体つきを隠していたため確かではない

ただその影が肩に担いでいたのは紛れもなく王女のはずである

こんな場所で薄い青色のドレスに身を包んだ青髪の女性が果たしてセレシア王女以外に居ただろうか？

そもそも武闘大会にドレスで来る人間なんてあそこにいた王女達ぐらいだと改めてカイは今のが王女なのだと確信する

男が走っていった方向にカイもまた走っていく

そんなカイの前方にそびえ立っていたのはメイン会場と同じくらいの大きさを誇るであろう監視塔であった

石造りの監視塔の金属の扉は開け放たれている

そして入ると同時に、目の前に倒れている二つの人影を見つける

服装からして恐らくこの監視塔の人間だろう

いずれも目立った外傷がないので恐らく気絶しているだけだと思うがカイはとりあえず二人の意識が無い事を確認して脈をとる

血の流れがとくんとくんと指先に伝わってくる

死んではいないようだ

床には二つの剣が落ちている

二つとも持ち主の手を離れた場所に転がっていることから、あまり剣術に無知な者では無いと見えた

倒れた男をひっくり返して腹部を見ると其処には強烈な打撃の痕が残っていた

上を見上げる

監視塔は壁に螺旋状の階段があり、二人を倒した犯人はこの上を登っていったのだろう

カイも念のために持ってきていた木刀を抜く

少し心許ないが、無いよりかはマシだろうと上を見上げる

そして螺旋階段を走りながら登っていく

グルグルと壁を伝うように登り、最後の一段を登り切る

そこには

「つけられてたかな・・・」

男が一人いた
縄でセレシアが目を瞑ったままの状態で椅子に縛り付けられていた
その横に座っていた男がそう言葉を漏らしてスッと立ちあがる

「何者だ」

カイは木刀を抜いて構える
男に問うが、返答は返ってこなかった

「王女を、どうするつもりだ」

落ち着いた口調でカイが聞くが、男はまたしても答えはしなかった
男はゆっくりとそのローブのボタンをはずし、床に放る
男の全貌が明らかになるが、ぱっと見は普通の市民となんら変わりない

「答えろ！！」

「答える必要は、無い」

ちらりと男は縛り付けた王女を見るが、再びカイの方を向き直ると
腰に携えた剣を抜いた

ギラリと光りを反射する光はカイの木刀とは対照的に切れ味抜群な
のが分かる

カイは答えないのなら力ずくで聞き出すとでも言わんばかりの勢い
で斬りかかった

男も剣を構え、カイの攻撃にあわせて剣を振るった

カイの振るった木刀がまっぷたつに切れる

斬りかかったのはカイの方であったが、木刀ほどの太さがある木を
男は容易くその剣で切り飛ばす

右手を剣から離す

左手に持つ刀身半ばで折れた木刀を男めがけて振り上げる

男はそれを上体を反らして交わす

カイは再び振り上げた剣を男めがけて振り下ろす

だが、今度はその木刀を男めがけて投げた

至近距離から投げられたというのに、男は即座に反応して腕で木刀
をはじき飛ばす

が、振り切った腕の向こう側に、これから魔術を使うように見えたカイを目にした男は咄嗟その剣を振り上げた

マナを吸収し、それが魔力に変換され、そして魔術として打ち出される前に俺を斬るつもりか

なるほどそれも悪くない

だが生憎斬られる気は毛頭無い

「残念だったな」

飛びかかってきたカイの右腕からは冷気が漏れている

カイは魔術を行使する気は全く無かった

ただ、己が持つ氷の魔力を放出しただけであった

この国ならばそこら中に水のマナがある

水の魔術と同じように、水のマナで氷の魔力に変換できるカイは部屋に満ちあふれた水のマナを吸収する

そして変換した氷のマナを、その突き出した右手の先から一気に放出する

氷のマナは周囲の水蒸気を巻き込みながら一気に男を包み込む

カイが腕を降ろすと目の前には巨大な氷塊ができあがっていた

このまま放っておけばいずれ男も死ぬであろう

空気も吸えない酸欠状態で氷に密閉されているのだから当たり前、か

これで懲りただろう

力の差も示せた事だしカイは氷塊を溶かすことにした

カイがそれを念じると氷は一瞬で水へと戻った

解けた氷の水を少しずつ別の場所で凍らせる

氷が溶けると男はどさりとその場へ崩れ落ちた

・・・まだ死んでいないはず

カイは足と腕に氷の枷をする冷えすぎて凍傷にならないように少し大きめに作る

が、絶対に砕けないように作った枷をそのまま床に固定する

「さて・・と」

カイは氷のナイフを作り、それでセレシアを縛っていたロープを斬る

彼女も眠っているようだが外傷は見あたらないので恐らく大丈夫だ

ろう

しかし、王女が何故こんな場所に拉致されていたのだろうか

とりあえず此処を出てまずこの王女をどうにかしないとな

流石にセレシアを持ったまま移動をしたりするのはカイにも多少苦になる

そこでどこか安全な場所に連れて行きたいのだが、そのためにはまずここから出る必要がある

なのに

「何故閉まっている・・・・」

立ちつくすカイは知らなかった

男を捕まえるまでの僅かな間、二つの人影がこの監視塔入り口へと現れていた事に

二人が扉を開かないように外側から細工をしたことも、カイは知るはずも無く立ちつくす

来たときには開いていたはずであり、鍵も内側から開けられるはずなのに扉は何故か動かない

これは外側に何か細工をされたなとカイは思った

つまり少なくとも共犯者が居るのだろう

「誘拐犯は一人で無い、という事か」

その割には、仲間を助ける素振りすら見えなかった

むしろ俺を足止めするかのような扱いである

「仕方ない」

使いたくは無いが他に方法が無いと見てカイは歩き出す

窓もなく王女を担いだまま屋上から飛び降りるのも、一人ならまだしも二人では流石に無理があるためカイは最終手段に出ることにしたすなわち、一番手っ取り早く外に出る方法

カイは壁を調べ、基礎となりえる大きな石柱から外れた場所の前に立つ

カイの足下に魔法陣が広がった

『予想』

彩輝はソーレを抜いた状態で走っていた

誰も居ない静かな廊下をできるだけ早く走る彩輝の後ろをアルフレアが追走する

彼女は男から奪った剣を持っており、走りにくい！と言ってびりびりと高価そうな深紅のドレスの裾を剣で斬っていた

彩輝的には目線に困ったが、そのおかげでアルフレアは先ほどよりスピードに乗った走りをしているようにも見えた

「会場はこっちで間違いないんだな？」

後ろから聞こえてくる問いかけに無言で頷き返す俺

道はよく分からないが、方向で言えば間違い無いはずだ

俺もそうだが、アルフレアもここに来るのは初めてであり、しかも庶民が使う通路を通るのは初めてのため方向感覚が掴みにくいのだろう

来た道を引き返す事ぐらいなら自分にもできると彼女の前に出て来た道を戻っていく

人の気配はしないのに、会場の方からは嫌な空気が漂ってくるように感じる

と、そのとき目の前に一条さんが現れた

十字路でばったり出くわした一条さんは目を丸くして急停止

俺とアルフレアさんも足を止める

「助けたんだアーヤん！」

「いや、正確には助けてはいないというか、返り討ちにしてたというか」

「そんなことはどうでもいい。誰か見つけたか？」

それが他に助けられていない王女の事を差しているのは誰にでも分かる

「ううん。――今のところ・・・はぁ・・・は・・・まだ最初に助けられた二人しか・・・知らない。いろいろ探しているんだけど・・・見つからなくて」

彼女もずっと走り回っていたのだろう
息が上がっているのがよく分かる

「そうか。皆を捜したいのは山々だが、私はいったん会場へと戻るとしよう」

「え、なんでですか！？」

「今彼女たちの場所を知るものはいない。私も聞き出そうかとおもったのだが・・・」

そこでアルフレアは口をつぐんだ

あ、そうか。聞き出せる男は今真っ黒になって放置されているんだっけ

あれじゃぁ何も喋れないだろうなぁと彩輝は黒こげにされた男を想像した

この王女が無事だったのは良かったのだが、男を返り討ちにはしたがあそこまでしてしまった事に彼女も多少は反省しているのだろう

大事な情報源だったなと

「それで？」

「それで、だ。あの小屋で男が喋ったのだが犯人は一人ではない。まぁこれは予想できていたが、みんなの居場所は分からないが気になる発言をしていてな」

「男はなんて？」

「彼らのこの愚行の理由はどうやら私たち王女にあるらしい。だが一人だけ、金や宝玉に興味がある奴がいるらしい。そしてそれらを引き替えに手にするためにはどうするのが手っ取り早いと思う？」

「それはえっと・・・やっぱり・・・」

そこから導き出せる答えは一つ

これ以上ないほどの取引

つまり王女達の命と引き替えだ

「なるほど。王女と引き替えって事か」

「おそらくはそうだろう。だが私たちに恨みがあるのならば捕まえた男達はそれなりに復讐の手だてを考えていたはずだ。方法は知りたくもないが、それでもその一人の男のために己の復讐相手をそう易々と解放したりするだろうか？」

「その男を裏切るつもり・・・だったとか？全員がそれぞれ別々の王女をさらったのなら最低四人は居ると思うな」

俺の想像に、アルフレア王女もこくりと頷いた

それならばこうして集まった物同士とはいえ全く関係の他人を裏切ることに抵抗はあまり無いというのも分かる気がする

「そして、もしその取引をするならば、取引相手は誰だと思う？」

それはもちろん王女達を慕う者達

王族という地位に対してではなく、彼女たちを慕う本当の部下達

そういった心を持ち合わせる者の多くは、おそらく

「騎士達、ですね」

「騎士達相手に取引を持ちかける。ならばその男は必然的に会場へ向かうはずだ」

「なるほど。それで会場に」

一条さんがそう言って手を打った

ここまでくれば、俺にも何となく今後の展開が読めた

「その男を捕まえる訳ですね」

「そうだ。そして捕まった王女の位置を吐かせる。あと行方が分かっていな二人は他に捜している騎士に任せよう」

「大丈夫なんですか？」

一応あれでも俺たちと大して年の離れた女性というわけではない

一条さんはそう聞くと、アルフレアは腕を組んで首を横に振る

「殺そうと思うならすでに眠らされたときに殺されていても不思議じゃない。今は生かしておく、その理由があるはずだ。全員バラバラなら都合がいい。身方がやられても気がつくことは無いからな。それに」

「それに？」

「あの二人は私より恐ろしい」

え、マジ？

彩輝は一度あの巨大な火柱を見ているからだろうか、彼女が一番強いものだとばかり思っていた

そんな俺の心を読んだのか、アルフレアさんはこう付け足した

「私は一番好戦的ってだけなんだ」

そうしてたどり着く会場

「これは・・・」

地上のメンバーは皆そろって空を見上げる

そして北の空、皆の目線の先には逃げ去ろうとする魔獣が小さくなっていた

その魔獣と視線との間に小さな影が見える

黒い影

翼が見える

「なんで飛べてるんだよ・・・」

確実に翼を切り裂いたはずだと彩輝は再びあの光景を思い出す

風の刃を作り出し、男に向かって放ったこと

二つの斬撃のうち一つが男の翼を切り裂いたこと

「再生・・・？」

見る限り男の翼は正常に働いているようで羽ばたく翼に異常は無いように見える

再生したのか、それとも翼に細工をしたのか

ローブの男は今あの魔獣を逃がそうとしているようである

つまり、あの魔獣は男の手先だったということか

あの魔獣による被害はあまり無かったようにも思えるが・・・被害を出すことが目的でないとすれば

たとえばそう、陽動や混乱が目的ならば

「この場合、俺たちの負けは・・・宝玉を奪われる事」

「そうだな。レイル達の報告によれば君は一度彼と同じ種族に会っているらしいな」

アルフレアさんが言っているのは恐らくあの黒龍の時の事だろう

いろいろあって宝玉が関係していたあの事件

そしてまたもや現れた同じ男
共通するのはやはり、宝玉

「種族、というより全くの本人ですけどね」

「人の姿に・・・黒の翼か。絶滅した吸血者（ヴァンピラー）の形状にそっくりだ」

吸血者（ヴァンピラー）という言葉は初耳だが、何となく、吸血鬼という言葉に似ている気がした

というか血という字が抜けているだけなのだが

「吸血者（ヴァンピラー）・・・」

「なんだ。お前達も吸血者（ヴァンピラー）をしっているのか？君たちの世界にも彼らが？」

「いえ、・・・実際には居ませんけどそういう話は伝説って形で残ってる・・・と思います。吸血者（ヴァンピラー）って言うんだ、こっちじゃ。もしかしたら会場に戻った仲間ってのはそいつかもしれれないね」

「かもしれないし、そうじゃないかもしれないが、一応あのローブの男も彼らと仲間であったことは間違いないだろう。私はあの男に眠らされたのだからな」

アルフレアさんはそう言って奪い取った剣を鞘から抜く

一条さんもポーチから数枚の札を取り出す

どこかで買ったのだろうか。そのポーチは彼女がこれまでつけていたものとは少し違っていた

にしても、彼女も関わる気か

とはいえ俺がやめろといえる立場でもない

ただ、あの時交わした誓い。それだけは守ろうと彩輝はソーレに映った自らの瞳を見つめる

「守るって言っちゃったしね」

最優先事項は、彼女の安全だろう

自分が一条さんを守れるような力があるのかどうかは微妙な力量だ

中途半端な事をしてかえって大怪我するなんて事にはなりたくないが、最前を尽くそうと心の中で思った

そんな事をつぶやいた彩輝の隣で、一条がちらりと彩輝に視線を向けていたことには気がつかなかった

自分の瞳に男の姿を捉える

「大会の時、言いませんでしたね」

「ん？」

あのときは大会中でネタ晴らしをするわけにはいかなかった

だが今なら別にいいだろうと彩輝は語り出す

「言っていたでしょう。予選の時、何か細工をしたんじゃないかって」

あのとき、アルフレアさんは俺が敵の自滅という形で予選突破した事に対して何か細工をしたと読んでいた

あのとき俺は見事に鎌を掛けられたのだが、一応ネタは教えていない

俺は今そのネタ晴らしをする

「あぁ、そういえばそんなことを言ったかもな」

「種明かしをするとですね、俺、魔術を使うとき魔法陣が出ないんですよ」

「・・・・なんだと？」

「えっとですね、詳しくは分からないんですけど魔法陣が出るときってどういう時ですか？」

「そんなもの、マナを魔力に変換して魔術として行使する時だろう」

「ですよね。でも魔力の放出の時には出ませんよね、魔法陣」

「そうだが、当たり前だろう。魔術を使うときは絶対に魔法陣が出るんだから。魔術を使わなければ魔法陣は出ない」

「ってことはマナを吸収して魔力を魔術にする。その行程に魔法陣が含まれている。だけど俺には出ない。これが魔術かと言われたら、正直分かりませんが、魔力を『行為』として具現化する事が魔術だというのならば、俺のこれもまた魔術なんだと思う」

俺は話を続けながら魔力を剣へと溜める

俺が使うのは以前城で魔術について聞いたときにティリアさんに教えてもらった一番強いと言われる風の魔術

いや、これは魔術に似せただけの紛い物なのかもしれない

だけどそれを他に表現する方法がないから魔術と呼んでいる

「いえ、訂正します。魔術と表現しておきます。今のところ」

魔術とは別なのかと聞かれても答えられないが、今はとりあえず魔

術ということにしておこう

皆魔術師は詠唱を行うが、それをせずとも魔力を『行為』として打ち出すことができるこれは魔術では無いのかもしれないと俺は先ほどの発言を訂正した

「俺さ、大会の特訓の時できるようになったんだけどこれは奥の手だったんだよね」

「だから序盤では使わなかったの？」

一条さんに聞かれたが、俺は奴に狙いを定めながら首を振った

「いや、使いましたよ。悟られないように・・・ね」

アルフレアはそういわれて彼の初戦を思い出す

そう言われてみると、あの初戦で自滅した男に対して自分は違和感を持っていた

彼が何かしたというのは予想の範囲内だがあれはもしかしたら何か魔術を使っていたのかもしれない

「風か何かで押したのか？」

「ご名答。そう簡単に自滅する選手がわざわざお金を出してまで参加すると思いますか？こんな大会に」

「・・・・ないな」

「彼が出場したのはたぶん、宣伝でしょう。店をやってるって言ってたので」

さて、そろそろやるか

できる限り悟られないようにソーレを構える

本来ソーレに風の魔力を流し込むのは無理があった

元々只の短刀だった刀にソーレが宿り、炎の属性を宿しているだけなので風のマナとの相性は最悪では無いが、少々強引であることは確かである

が、そうも行かない

遠距離攻撃ということでゆっくりとした攻撃はすぐにばれてしまう

魔法陣が出ないといっても魔力を使って放つ技である以上、魔力の流れを感じ取られるより先に相手に到達させる必要がある

最もスピードが出せるのは雷だ

光の速度はいくらこの距離でも一瞬で相手との距離を詰め、穿つ事ができるであろう

ただ、この雷の魔術、思った以上に扱いが難しいのである

風や炎とは違い、その威力が高すぎて『行為』として放つことができてもそのコントロールができないのだ

相手はまだこちらに気がついていない

ならばスピードでは劣るものの、行為力でそれなりにスピードが出て視覚的にも気づかれにくいもので攻めるしかない

「今度は二つとも当ててやる」

至近距離にいたアルフレアと一条は彩輝の発した魔力に気がつき彼が魔術を使うのだと分かった

確かに、この僅かな魔力の流れでは、魔法陣が出ないとなかなか気がつけないだろうとアルフレアは彼の動きに注目した

男に狙いを定め、彩輝はソーレを大きく二度振るった

『雪化粧』

暗い・・・・寒い・・・・・ここは何処・・・？

白い吐息はまだマナの実りを迎えたこの地には早すぎた

見えない・・・・冷たい・・・・あなたはだれ・・・？

黒い闇に、黒い人影が瞳に映る

　エフレルは試しに扉を開けようとしてみるが、予想通り内側から鍵が掛けられていたようで重い扉はぴくりとも動かない

開く気配が無い扉から手を離したのはこの大会の主催者である三大貴族が一人、エフレル・トルロインであった

まさか自らが主催した大会がこんな事になるとは思いもしていなかったエフレルはせめて大会を観戦しに来ていた王女達だけでも無事に逃がそうとした

まず手当たり次第護衛の者達を王女の護衛に回したのである

安全を確保してもらうべくいったん城へと引き返してもらおうと無

礼を承知で馬を用意した

さすがに馬車を集めるのは無理がありスピードも出ないうえ、水路が張り巡らされているこの国では馬車を使える通路も限られてくる

五頭の馬、そして馬使いと呼ばれる者達に王女達を乗せて城まで運んでもらおう。そう思ったのはいいのだが、そんな風にも行かなかったのである

使いに出した護衛の者が戻ってこず、不審に思って会場へと向かうと使いに出した者、それに加え王女の身辺警備をしていたと思われる騎士が何人も通路に倒れているのである

一般の人たちはここまで入ってくる事が無いように警備はきちんとされているのをエフレルは確かに今朝その目で確かめている

そればかりか元々自らの護衛を警備に当てようと思っていたのだが、各国の王女達が集まるということになり、四国からそれぞれ騎士を出して警備に当たっていた

王女の警護は恐らく近衛の仕事であるため、雑な兵には当てられない仕事である

案の定王女達の姿も無く、これはまずいと思った矢先、目に入ったのがファンダーヌ王国第二王女、エリエル・シェルトール・ロフス・ファンダーヌ王女が身につけていた黄色の靴であった

綺麗な宝飾が施されたその靴が片方床に落ちていたのである

さらに、よりにもよってその靴が落ちていた場所が地下へと続く階

段の前に落ちていたのである

地下へと降りるには普通、厳重に管理された鍵が無ければ階段へと続く通路の扉を開くことはできない

だというのにその扉を試しに押して見ればいとも簡単に開くではないか

護衛だったはずの兵達は全員観客の避難などで出払っている

一人で行くのはどうも心細かったがここで引き返せば三大貴族の名が廃ると地下へと降りていこうとした

「どこいくんですか、エフレルさん」

そんなとき、突如背後から声をかけられ飛び上がりそうになってしまったエフレルだったが、ゆっくりと振り向けば其処には一人の男が立っていた

エフレルは直に会ったことが無いが顔だけは覚えている

相手側も自分が会場で舞台挨拶をしていたときに見ているはずであるとはいえ、一選手が名前まで覚えてもらっているとは思っていなかったが

「君は確か・・・」

「カイ・ウルクァです。先ほどまで大会の選手でした」

そう言って近寄ってくる彼の手には一本の剣が握られていた

カイはセレシアを寝かせられる場所である医務室へと運び込み、その後自らの愛剣風王奏をとりに武器庫へと向かった

向かった先ではすでにリーナ聖王国の王女二人が寝かされており、空いていたベッドにセレシアを寝かせてきたのである

医務室には一人の女性がおり、彼女は二人の近衛だと言う

彼女ならあの場を任せられるとセレシアを預けてきたのである

ついた先の武器庫の扉は開け放たれており、いくつかの武器がすでに持ち去られた痕跡があった

そんな武器庫の中で自らの武器はすぐに見つかった

まるで剣に呼ばれたかのように、武器に埋もれた風王奏を手にして会場へと向かおうとしていた最中であった

事情を聞いてカイはエフレルと共に階段を下った

王女が拉致されていた。そしてもう一人がここに居るかも知れないとの事だった

会場へ戻るより、こちらの王女を助ける方が優先だと判断してカイ

は少し寄り道をすることになった

階段を下りるとそこは入り口からの光りしか届かない暗闇の世界であった

ひんやりとした空気が肌に感じられる

「ここは食料の貯蔵庫にもなってるんだ」

そう言って彼は壁に掛けてあった燭台に火を灯す

それを持って闇の先を照らす

道が続いており、いくつかの扉が見えた

「ここからは静かに行こう。下手に悟られて厄介なことにならないように」

カイがそう言いながら先頭に立つ

エフレルがまず部屋の説明をした

手前二つの扉が簡単な携帯食料の貯蔵庫

一番奥の突き当たりの扉は今回の王女達のようなお客様用の為に保存されている高級肉等の冷凍庫となっているらしい

この地下通路自体鍵が掛かっている扉があるため、手前二つの扉に鍵は取り付けられていない

だが一番奥の冷凍庫のみは扉が開きっぱなしにならないように鍵を取り付けてあるのだという

とは言ってもこの通路の鍵が開いている時点でもしかしたら冷凍庫という事もあり得るかも知れない

それぞれの部屋は繋がっていないため、一つずつ確認していくしかないとカイはそっと扉に寄って耳を立てた

中から音は聞こえない

他の部屋に音が漏れないように静かに、しかし一気に扉を開いた

幸い扉が軋む音はせず、中をエフレルが明かりで照らすも変わった様子は無かった

同様に反対側の扉もなんら変わった様子はない

となると・・・

二人は同時に置くの扉に目をやった

うっすらと明かりで浮かび上がる大きな扉

冷気が漏れないように、また破損しないように頑丈に作られた巨大な鉄の扉

この扉は鍵が掛かっていないにしても開けてすぐさま飛び込むというのは少し無理があったかもしれない

「扉を押してみましょうか？」

エフレルは一応この場では戦闘できる人間ではないため、小声でカイに指示を仰いだ

「いや、止めた方が良い。この扉、中からも鍵はかけられるのか？」

「えぇ。一応中にも鍵はついていたはずですよ」

「構造に詳しいな。貴族様がこんなところによく来るとは思えないが」

とカイは疑問を口にした

こんな時にそんなことをとエフレルは言いたかったりもしたがカイの答えに回答する

「一応建設の時に一度回ってるんですよ。それに設計したのは僕と父でしたので。責任者としてこのぐらいは把握しているつもりです」

「なるほど。俺が中に入った途端に鍵をかけて扉を閉ざす、という

こともあり得たんでな。嘘をついて鍵が無かった、なんて事もあるかもしれん。保険として聞いただけだ」

確かに、この状況で自分が敵ではないという保証はない

もし私が敵なら自分を冷凍庫に閉じこめ鍵をかける、ということも彼には予想しておく未来の一つだったのだろう

「ま、どちらにせよ俺には出る手段があるし、寒さには慣れているからな。扉の厚さはどれほどだ？」

「２０センチほどですけど」

「なら余裕だな」

出る手段がある？余裕とはいったい？

どういう意味だろうとエフレルが思った瞬間、その答えを目の前でカイは見せてくれた

カイが持つ剣がスッと持ち上げられる

すると刀身に明かりが反射した

それと同時に剣を数回扉に向けて振るった

どう見ても空に向かって剣を振っているだけのように見えた

それと同時にあの至近距離から剣を振るえば確実に扉に当たって剣が止まるはずだと思った

それに加えて音も全くしなかった

だがそうならなかった理由はすぐに分かった

突入すると小声で語りかけ、彼の指示する通りに通路の脇へとどいて明かりを掲げる

カイは鉄の扉へと剣を軽く、向こう側まで抜けないように突き刺した

それはもう紙にでも刺しているかのようにスッと入っていく光景に我が目を疑ったエフレルの目の前でカイは風王奏へと意識を集中させる

柄の周りを空気が渦を巻く

そして剣を一気に引き抜く

すると重い鉄の扉はまるで剣と一体化したかのようにして巨大な四角形の穴を開けた

剣には抜けた四角形の鉄の扉がズズッと抜け出る

それは一瞬のうちに行われた

剣を振り切ると鉄の固まりは一気に剣からすっぽりと抜け、大きな音を立てて地面に転がった

それと同時にカイは自らがあけた扉の穴へと飛び込んでいった

「だ、誰だっ！？」

突如暗闇に慣れた目に差し込んできたエフレルの持つ明かりを直に見てしまった男は手で目を覆った

物音がして振り返った直後の出来事だった

男は予想外の乱入者に驚きながらも放すことの無かった剣を目をうっすらと開けながら構えた

その次の瞬間には剣の刀身は斬り飛ばされ、吊されていた冷凍肉に突き刺さった

カイは突入と同時に暗闇に浮かぶ人影を見つけた

エフレルの明かりで照らし出された影の中で唯一反射している物、つまり剣めがけて風王奏を振り上げた

そして相手の目が慣れるより先に男の体を蹴り飛ばす

男が尻餅をつく音が聞こえた

そして倒れていた王女の体を縛っているロープを鷲掴みにした

勢いよく持ち上げ、外へと出る

うまくいって良かったと安堵するのもつかの間、開いた穴から何かが飛び出してくる物にカイは反射的に風王奏の峰ではじき返した

カランカランと音を立てて床に散らばったのは氷の欠片であったのを見てカイはすぐさま風王奏を構えなおした

後ろにいる二人を庇うようにして立ちふさがったカイめがけて、穴とほぼ同じほどの氷塊が飛び出してきた

そしてそれが魔力を纏っていたことを感じ取るとすぐさまカイもその氷塊に対して風王奏を振るった

今度はただ振るだけでは無く、風王奏の力を解放してだ

突如地下に吹き荒れた突風は氷塊の一撃を僅かにそらし、奥の階段のところまで飛んでいった

地面に氷塊がたたきつけられ、ごとんと音を立てて動きを止めた

「多少はできるようだな。先に上に戻っていろ」

カイはそう言って次に飛び出してきた小さな氷の棘を風王奏の風ですべて受け止める

その間に、エフレルは縛り上げられた王女を担いで地下を後にした

男が追ってこない事を見ると恐らく自分に有利な場所から地下ごと、俺たち全員を吹っ飛ばそうという考えなのだろう

すぐに置くの扉から大きな魔力の流れを感じた

先に逃がしておいて良かった

そうでなければ、傷つけないという保証はできなかったやもしれない

「氷で俺に喧嘩売るとはいい度胸だ」

仮面の奥でカイはにやりと笑った

それと同時に穴から雪や氷を纏った強烈な冷風が吹き出てきた

「風王奏！」

カイもまた、氷の魔術を使う

広がった魔法陣が暗闇を青白く照らし出す

剣が纏った風がカイの周囲を吹雪から守る中、本人は呪文を唱える

「雪化粧、染める花びら風に舞い、染める天地を無の地へと――――

―」

カイは流れるように言葉を紡ぐ

これは世間一般に知られる魔導師による術ではない

通常、魔術は魔導師と呼ばれる人たちが教え伝えるものである

魔導師は力のある魔術師達を国の命で後世へと伝えていく仕事である

彼らは魔術が生まれてから開発されてきた魔術を書物や知識として管理し、一般にも有名な魔術はいくつもありそれらは全て彼らが世間へと書物などを通して関与できるようにしているからである

魔術一つ生み出すのに、半月ほどから魔導師の半生ほどをかけるようなものまである

魔導師は魔術のエキスパートであり、彼らでも魔術を生み出すのは難しいのにカイは彼らより遙かに短い生の中で独学でいくつも魔術を生み出している、いわば天才であった

カイに魔術を放っている男はそんなことを知るよしも無かったのだが、男も氷の魔術を使う人間である以上感じざるを得なかった

感じたことも無いような魔力の流れ。そしてその規模

自分が通路ごと敵を倒そうと放っている技の、軽く数倍以上はある魔力を感じ取っている

それだけ今自分が相手をしている人間の魔力の器が大きいのかが分かる

それに恐らく、自分が放っている技が効いていないだけでなく、むしろそれに上乗せ、利用されているような感じがするのである

危機を悟った男は急遽吹雪の魔術を止めた

この冷凍庫の中ならば水分が結晶化した氷もあり、尚かつ王都と言うことで水の豊富なこの場所でなら負ける事は無いと選んだ場所だった

故郷に比べれば大したことも無い寒さであると思い、その場所を選らんだ

男の故郷は此処よりも寒い場所にあった

北の地は何処も冬は寒い場所であり、男の生まれ育った場所はそんな北の大地でも一年を通して雪が積もっているような場所であった

廃れ行く町を捨てた家族と南の地に長い旅を経て移住した

だがその少し後に戦争が起こった

ファンダーヌ王国とエスタニア王国が一時衝突した時期があった

男はその国境近くのファンダーヌ側にある村に移住していた

北にはアルデリア王国、西にはエスタニア王国、南は海といった場

所であった

そしてこの両国がぶつかる場所は主にこの僅かにエスタニア王国と隣接しているこの地域と南の暖かな海洋であった

何度も男は目の前で重装備の兵士達の行軍を何度も幼きこの目に焼き付けた

村は戦場から近かった場所ともあって兵士達の休憩地点や、ある時は軍の拠点ともなっていた場所であった

そして事件は起こった

それまで合戦の主な舞台は海か村の近くにある小さな平原であった

平原はエスタニアとファンダーヌの両国に跨っている、とはいえ小さな平原であった

北はアルデリア王国の国境代わりの山々が連なっていたため、敵が攻められるなら正面しかないと小さな自分でも分かっていたつもりであったし、事実これまでも敵は平原側からしか襲ってくることは無かった

だが今回は違った

軍が平原へと集中している中で、海側から回り込んだエスタニアの兵士が攻め込んできたのである

挟撃する形となり、ファンダーヌ軍は苦戦を強いられた

何とか退路を守った事によって敗走が始まったファンダーヌ軍であったがいずれ援軍を合流した暁には反転し、もう少しファンダーヌへ入り込んだところで戦うことは目に見えていた

だがその為だけに、村は焼き払われた。見方であるファンダーヌにである

戦争に負けた場所は、相手国に全てを奪われる

そうなる前に、自国でそれを行ったのだ

敗走していく騎士達

そして火の手が上がる村を眺める小さな体がどれだけ空しく感じられたことだろう

父と母は自分を家事から守るために自らの家に焼かれ灰となった

男は生き残った

生き残った僅かな村人達と共に近くの村へと一時避難した

結果、ファンダーヌは自国の奥まで敵を引きつけ、挟撃してエスタニアを逆に敗走へと追い込んだ

男の心は日に日に復讐心が積もっていった

結果、同じような境遇にあった仲間達に出会い、復讐を企て、今回の騒ぎを引き起こしたのであった

例え王女に恨みが無くとも、そのファンダーヌの名を継ぎし者達、
そして自国を焼き払った騎士達
その全てに復讐しようと、ファンダーヌの王女を討とうとした
だが――――――

「凍てつく白雪よ、凍てつく茨よ、道を閉ざせ！ゾネシア――――」

「フリージア！！」

パキンッ・・・・・

吹雪が止む

通路を、真っ白な雪が、真っ白なトンネルへと作り替えてしまい、
色を持つ者は静かに剣を降ろした

『相打ち』

彩輝は大きく一歩を踏み出した

勢いよく振るったソーレから二つの刃が空を斬り、天を駆ける

「行けっ！」

「当たれっ！」

「とどけっ！」

三人が同時に叫んだ

男に三人の叫びは聞こえなかったが、妙な魔力を感じ取った男は視線を眼下の騎士達からそらした

そこには先ほどの少年、そして王女と黒髪の女性が一人ずつ立っていた

三人はこちらを見つめて微動だにしていない

何をしている・・・？

男が不審に思った瞬間、男はとっさに剣を振るった

すぐ近くに魔力を感じ、そこに何かがあるのだと直感が体を動かした

短い剣は、何もない空間を切り裂いたように見えたが振るった右手は確かに何かを切り裂いた感覚を体へと伝えた

それで確信が持てた

これか！

先ほどこの刃に自分はやられたのだと気がついた男はとっさに体を半歩空中でずらした

舞い上がったローブの切れ端がはらりと風に乗って落ちていく

紛れもなく、先ほど立っていた空間を何かが通り抜けたのだ

あの小僧が出した技であるのは分かっている

だが、それにしては妙な感じがする

魔力を纏っているが、少年の周囲に魔法陣は浮かび上がっていない

特殊な能力者かと考えたところで男は接近する気配に感づいた

「うおおおおおっ！！」

ものすごい勢いで水面がせり上がり、そこから飛び出してきたチル・リーヴェルトが剣を天へと構えて空を突き抜ける

どっぱぁん！と音がしたかと思うと目の前を何か人影が通り過ぎたのだと三人は理解するのに一瞬遅れる

水と共にチルが剣を引き、衰えそうになったスピードを再び上げるために足場を作り、近距離からまた加速した。だが

まるで槍のように鋭く、そして弾丸のように飛び出したチルはの攻撃はあっさりと男によけられた

「何なんだあの女は。我々とは違うくせに空を移動できるとは・・・」

飛び抜けていったチルを見上げた男は、とっさに己の失態を身をもって味わった

敵は一人ではないというのに、その敵から意識をそらしたのがまずかった

男の体を一本の雷の槍が直撃した

突き刺さった雷の槍は男へと一瞬吸い込まれたかのように見え、その一瞬後には背中から膨大な電気を空気中へと放出した

突き抜けた雷の槍は男のローブの一部を消し炭にして吹き飛ばす

遠くから見ていても男がその一撃に体を大きく震わせたのが見え、
しっかりとその攻撃が命中していることが分かった

「よっしゃ！」

ガッツポーズをとって見せたのはセルディア・カルノンであった
いかに早い雷の一撃もこれまで男の意識がこちらに向いているあいだは一発も当たらなかった
だが今度はうまくいった
そう思ったのだが、男は落ちてこない

「何故だ！？」

自分で放った一撃の威力は十分に分かっているつもりである
即死レベルにはしなかったものの、意識を失うには十分、いやそれ以上に力を込めて放った一発だった
だというのにセルディアにはその一撃が耐えられたことに驚きを隠せなかった

「おいおい、マジかよ」

後ろでホーカーがつぶやいた

ローブの男も内心余裕では無かった

普通の人間なら感電死ギリギリの威力の魔術は男にとっても大きなダメージを負わせていた

「ちっ・・・」

油断しすぎたと男は思いながら翼を動かす

手傷を負ったこの体では体を宙に浮かせているだけで精一杯であった

体を貫いた雷光の一撃の余韻が覚めぬ間に、背後から声が聞こえた

「こっちだ!!」

「な・・・・」

故にその男は気がつかなかった。このやりとりの中で、誰が最も自分に対して危険であった人物の接近を

故に、男の反応は遅れ、振るわれた聖天下十剣の一振りが己の体めがけて振り下ろされていた事に対処が遅れた事

そしてそれらが脳裏を過ぎるより先に、新手の影が接近していた事にも気づけなかった

取った！

もはやチルの中には手加減という言葉が浮かばないほどに焦りが蔓延していた

相手が何者で、どういった経緯でこの事件に関与しているのか

本来なら捕縛することが望ましかったが男が予想以上の手練れである事に、その余裕が無い事も無意識に分かっていたのかもしれない

この剣の切れ味で斬りつければ、敵の胴体は真っ二つだろう

分かっては、いた

それ故に理解できなかった

「なーにやってんのよ。あんまり遅いから見に来てみれば・・・」

「なん・・・っ！？」

蒼天駆は止められた

あっけなく、一人の女の指に挟まれて

チルが騎士であり、毎日鍛錬を欠かさず、それでいて本気で振るった一撃があっさりと男の二本の指が止めてしまったのである

全てを否定された気がした

「さて、と・・・。助けに来たはいいんだけど・・・・思いっきり敵地のど真ん中・・・・本当何やってんだか、お前も私も」

「うーるせぇ」

「はん。その変な喋り方鬱陶しいから止めろってんだろ！ったく。あーもー、これで私も終わりだよ、お・わ・り！！畜生。責任とれよな！第一あいつはどうしたんだよ？折角北の遺跡から起こしてきたんだろう？姿が見えないようだけど？」

女はそう言って男を睨み付ける

女の特徴は男と同じように生えた黒い翼と黒い服であり、男のように体を隠しているようには見えない

金属のネックレスをしており、先には小さなメダルのようなものがぶら下がっている

両手首には青鉄の腕輪をしており、真っ赤な靴が艶々としているのが見えた

共通しているのは男も女も、髪が白い事であった

「重傷を負ったんでな。逃がした。後で使えるかもしれないからな」

「はぁ・・・まぁ潰されなかっただけマシか。で、あれも相当に強いはずなんだけど一体何にやられたっていうの？魔法障壁は？」

「物理的にやられた。あそこにいるデカブツに」

「って、なんでこんな所に龍が居るのよ！？」

女はそう言って、男が指さした場所に龍が佇んでいたのを見つけたらしく驚きに眼を大きく開いた

龍はあの後深追いすることなく、力無く去る者をただ目を細めて見つめていた

というよりまず最初に気がつけとチルは内心思ったりもしたが、緊張の糸は未だに切れていないのが自分でも分かる

警戒を解かずに二人の様子をうかがう

「これ本当にやばいわね。見捨てて回れ右すればよかった。助けようなんて思うんじゃなかった」

「何を今更。助けてよ～」

「怪我でもしてる？」

「いや、してないけど肩を担いでくれれば心が助かるっていうか安らぐっていうか」

「馬鹿？殺されたいの？私に」

チルは内心、どうしたものかと頭を悩ませた

「春雷の轟、天の顎と刹那の残光――――」

そんな言い合いもぴたりと止まる

二人が同時にセルディアを見下ろす

足下から浮き上がる魔法陣の大きさからして、とても大きな一撃が放たれるということがその場にいた誰もが予想できた

チルは咄嗟にその場を離れ、十分に距離をとる

セルディアはチルが離れたのを見て詠唱を続ける

咄嗟に動けないようならこちらに意識を向けさせチルを逃がす算段であったが、どうやらそれぐらいの体力は残っていたらしい

ホーカーは男にたたき落とされた勢いからして、骨の一本や二本にヒビや骨折があったとしても不思議ではなかったと思ったのだがど

うやらそれは大丈夫のようであるとホッとした

この術が発動するにしろ、発動しないにしろ、チルが攻撃範囲内から出たのであればもう躊躇う必要もないとセルディアは詠唱を続けた

ローブの男と女に動きはなく、逃げる様子が無い

受けきれる・・・とでも思っているのだろうか？

「――――――鏤骨の咀嚼、汝を喰らおう！マスティカートボルト！！」

魔法陣が黄金に染まり、光りが溢れる

会場に居た全員が目を瞑るほどの強烈な光りが会場全体を覆う真っ直中、激震と爆音が会場を襲った

音で揺さぶられる会場に、水はさざ波をおこし、小石が小躍りする

強烈な光りが会場から消える

白い視界が徐々に開け、会場の様子が明らかとなった

「ど、どうなった・・・んだ？」

水中に沈んでいたリリッドが這い上がってきた

ずぶ濡れのリリッドの目の前には、依然と変わらぬ会場の光景があった

徐々に目を慣らしてきて目を開き始めた者も居れば目を押さえて膝をつく者も居た

水中からでも分かったが、会場を強烈な光りが襲ったのだろう

敵の技、あるいは身方の技か

どちらにせよ、この状況下では咄嗟に動ける者は少ないだろう

「ぐ・・・ぅっ・・・」

ドボンと背後で何かが水中へと落ちた音がした

這い上がったリリッドは後ろの水面を見つめた

広がる波紋の中心に、黒い影が揺れている

「くっ・・・・リリッドか？」

「え、あ、ホーカーさん！大丈夫ですか！？」

リリッドの背後から突如ホーカーが声をかけてきた

彼も先ほどの強烈な光りを浴びて完全に視界が回復していないようであった

目を閉じて手で押さえながら先ほどリリッドが呟いた方向へと声をかけたのだ

「まだ見えませんか？何があったんですか？」

リリッドが男に突き飛ばされ、一瞬気を失ったが溺れる前に気を取り戻したリリッドは咄嗟に携帯していた酸素石を取り出した

この石は地上では酸素を取り込み、水につけるとゆっくりと溜め込んだ酸素を放出する性質がある

口の中へと酸素石を放り込み、しばらく大人しく呼吸が整うのを待った

あがってきたときにはすでに謎の光りが終息した後であったため、何が会ったのかを聞き出そうとした

ホーカーはゆっくりと口を開いた

だが、彼はその事を説明するより先にある人物がどうなっているかを聞いてきた

「せ、セルディアはいるか？」

「セルディアさんですか？」

そう言われてリリッドは周囲を見渡した

だがセルディアの姿は無い

「い、居ません・・・けど」

「ちっ、では水中か・・・」

そうホーカーが呟いたところでリリッドはすぐさま上着を脱ぎ捨てた

愛剣のみを持って水中へと飛び込んだ

先ほど水中へ何かが落ちた音、あれはセルディアさんだったのだろうか？

もしそうだとすると急がなければいけない

あの閃光を浴びて水の中で自由に身動きが取れるとは到底思えない

そう思って飛び込んでみると、痛いように水の冷たさを感じる

目を開くと水のせいで視界がぼやけたが、透明性が高いこの国の水のおかげでハッキリと人影を捉えることができた

それも二つ

自分が気づかないうちに二人水中へと落ちていたらしい

一つはセルディアさん

もう一つは見たことのない女であった

先ほど波紋が広がった場所から丁度真下に居たのがその女であり、

遠くの方に沈んでいくのがセルディアだと分かると一気に泳ぎ始めた

だが、気になることが一つあった。その沈んでいく女にも、

すぐにセルディアの体を支えて水上へと浮上する

だが、セルディアは別に光りによって水面へとあがれなかった訳で

はないとすぐに分かった

目を閉じては居るが、意識が無い

「ぶはっ・・・はっ・・・」

水面へと顔を出し、息を大きく吸い込む

抱えたセルディアの体は、服が水を吸って重く感じる

「セルディアさんっ！」

リリッドはセルディアに呼びかけながら岸を目指した
緊急用のはしごがついており、意識のないセルディアを一端背負いなおし梯子を登る

セルディアは魔術を放とうとしていた
取り込んだ膨大なマナを雷のマナに変え、詠唱も終わった
懇親の一撃であった
マスティカートボルトはセルディアの知る中でもかなり上位の雷魔術である
相手を上下から挟み込むようにして出現する無数の雷槍はまるで神の顎
更に一本一本が敵を追尾するように術式が組まれている
追尾する魔術はマナを普段より大量に消費し、また数を増やせばマナの消費は格段に上昇する
周囲の水と風のマナをかなり消費した一撃は相手二人を巻き込むはずだった
だが、咄嗟に不味いと見た女が体勢を変え、翼を大きく羽ばたかせた

マナの大量の消費から、これから行使される魔術は追尾式と見たのだろう

面倒なのは御免だと言わんばかりの形相でセルディアめがけて飛んできたのである

チルの剣を止めるのを見ているため、かなりのスピードがあるというのは予想できていたが、これほどまでとは予想していなかった

女がこちらへ向かってくる。そう意識した瞬間に、セルディアは咄嗟に術を放った

それも超至近距離でだ

「散らば諸共！」

周囲の身方にぶつけないように、という余裕は無かった

彼らも実両者であり、セルディアなんかよりずっと力は上である

それよりも、こんな女を野晒しにしておくことはセルディアにはできなかったのである

チルの剣を止め、空を飛ぶということはかなり攻撃を当てるのが難しい相手である

チルを覗けば剣士は全て空を飛ぶ彼女に手も足も出ず、魔術師が放

つ技がそう容易く彼女を射止める事はできないだろう

少しでも手傷を、そう思い二人を上下から広範囲に広げていた雷槍を全てこちらへと向けた

そして行使した。その瞬間にセルディアの体は吹っ飛んだ

今日彩輝に突き飛ばされて、彼女は二度目の空を飛んだ

腹部に一瞬遅れた衝撃が来て、目の前に掌を突き出した女が見えた

意識は吹き飛びかけ、行使された魔術がキャンセルされそうになった

次々と雷光が弾け、膨大なエネルギーが光りとなって会場を埋め尽くす

だが、セルディアが途切れそうになる意識をつなぎ止め、まだキャンセルされなかった雷槍を女の背中へと後ろから突き刺した

女は雷槍を受け、気を失う

踏ん張る力もなく、だらりと水中へと落ちたのだった

「あっら・・らぁ・・・」

自分もあれをくらっては意識を保てる自信はないなぁと男は内心思いつつ水中へと消えた同胞を見下ろした

広がる波紋は徐々に静けさを取り戻し、浮かんでこないのを見ると
流石にやばいのではないかとも思ったりする

あの一瞬でよくあそこまで行動できたものだと拍手の一つもしてやりたかったが、今が好機とばかりに翼を羽ばたかせた

咄嗟に自身を両翼で遮ったおかげで男は目眩ましを起こさなかったとはいえ、今水中へと消えていった彼女があの女の術を止めてくれなければ今頃どうなっていたかは想像もしたくなかったが

やはりこれだけの数、いずれも相当強い猛者達だ

二人でも無理があったということか

力があっても、血肉を求める獣と違って厄介であると男は思った

一発であの威力だ。数発続けて直撃した彼女は生きていたにせよ、意識は保てて居ないだろうなぁなんて考えながら男は客席に着地した

彩輝達がいる場所と対岸にあり、この辺には誰もいない

男もセルディアの魔法に一発被弾しており、複数直撃した女性よりは軽くとも、それでも大きな痛手になっていた

翼がいつものようにスムーズに動かない

「ちっ・・・神経回路が麻痺ったか・・・」

普通の人間が受ければ死んでもおかしくない電流だったが、それを受けてなお男が意識を保てていたのは彼が生まれ持ったその耐久力のおかげだろう

一族からしてみれば比較的高い位置にはないが、それでも常人よりは強力な体力を持っている自分ですらこの様か

男は息を荒げながら手すりに寄りかかる

息を整えている最中、突如横の手すりが切断された

振動もなく、すぱっと斬れた手すりの切り口が見えた

数十センチずれていれば、手すりに置いていた右腕が吹き飛んでいただろうとそれが飛んできた方向を見つめた

「また彼・・・か」

視線の先には一人の、黒髪の少年が立っていた

短な剣を構えた――――いや、振り切った体勢で立っている

その表情は対岸にいる男の肉眼で確認できていた

外したのを悔やむ顔だ

「いいでしょう。宝玉を持って帰る前に、まず邪魔な動ける者を潰しましょう」

目を眩ませていない者の数を数える

もちろん只の剣士は外して、だ

自分の逃走に危害が加えられそうな者を数えると

「いーちぃ、にーぃ」

黒い髪の男

白い髪の女

まずその二人を指さしでカウントする

少年が放つ攻撃は見えない分たちが悪い

魔法陣も出ていないようで、意識を集中していないと不味いかも知れない

まぁまだまだ命中精度が悪いだけマシか

他人に構っていて背中からやられるのだけは避けたい

そしてあの白髪の女

どうやって飛んでいるかは知らないが、まぁ若干目は眩んでいるようではある

とはいえ、万全の状態でない今、その白髪の女に大きな邪魔をされるとは考えにくい

魔法を使っていないのを見るとただの剣士のようでもあるので遠隔攻撃は無いだろうと予想する

黒髪の横にいる紅髪の女、それと黒髪の女もまだ何もしてこないところを見ると大したことはないのだろう

ただ少し気になるのはあの紅髪の女だ

グレアント王国の王女であるのは知っているが、実力があるのかどうかは知らない

ただ、唯一眠って折らず自分に攻撃してきたのを覚えている

あのとき魔法を使わなかったのを見ると、彼女も少し剣術に心得がある程度の実力だろう

隣の黒髪の女の実力も分からないが何もしてきていないので今は除外した

まぁ強いて言えば黒髪という所に興味がそそられる程度か

見たことのない黒髪の少年が不思議な魔術を使ったので少し気がかりではあった

他に動ける騎士は数人いたが、一人はセルディアを介抱しており、
もう一人は槍を持っているが目を眩ませていないが魔術は使えなさそうだ
後ろに居る髪の長い女性はどうも完全に目を眩ませているようである
ふらふらっと歩き、割れた会場の欠片に躓いて水の中へと落ちていった
ただ気になるのは会場のそとで動いた大きな二つの魔力
間違っていなければ、炎と氷
会場にその使い手が戻ってきている可能性も考えなければならないなぜならその二つの魔力を操る魔術師を未だこの目で見ていないからだ
もしかしたら今除外した中にも魔術師がいる可能性がある
だが、遠距離魔法なら避けられる
遠隔でも何とかして振り切ろう
命よりも、今はこの傷の復讐だけを考えていたい
「まずは黒髪」

キッと彩輝を見つめ、彩輝も男を睨み付ける
視線が重なり、開戦の火蓋が落とされた
先ほどより軽くなった翼を動かしローブの中から剣をとりだした
何の装飾もない、ただ人を殺すための剣だ
彩輝が剣を振るう
男はその軌道から体を反らす
何かが通り過ぎたかもしれないが、見えないので分からない
不思議な斬撃だ

「面白いな。だけど、あたらない」

「捕まえろ！」

「うおおっ！」

がんっ！と鈍く響く金属音
手元に伝わる衝撃で地面に立つ足が踏ん張っているがずるずると後退した

「轟炎よ、敵を穿ち、針を焦がし通す。ブラスエギーユっ！」

早口で短な詠唱を唱えるアルフレア

素早い詠唱で魔術そのものの威力は低いが、男を貫くには十分だ

それに近くに二人の人間が居るため巻き添えにしたくないのもあったが、手持ちの魔石が小さかった事もありあまり大きな魔術はうてない

彩輝は男のローブを掴み、逃がさないように引きつける

男も咄嗟に逃げようとしたが、それは叶わなかった

「ぬおおおお！」

男が叫びながら無詠唱の魔術を発動させた

至近距離から放たれようとした炎の針が黒い靄を明るく照らす

いきなり立ちこめた黒い靄が、男を包み、そしてはじけ飛んだ

黒い輪が男を中心に波紋のように広がる

吹っ飛ぶ彩輝がゴロゴロと地面を転がる

余波を受けた一条も手で体をかばうようにしたが、やはり威力が強すぎたために大きく尻餅をつく形で一瞬宙に浮く

軽く悲鳴を漏らした一条の隣で魔力を失ったちいさな魔石が転がった

アルフレアも一条のようにそれが物理的な波動であるのを見極めて体を後ろへと後退させながら腕を交差させて黒の輪を受け流そうとした

だが力不足か彼女も一条のように少し距離をとって尻餅をついた

「っはぁ・・っ。焦らせるなよ・・・」

男はゆっくりと着地する

その瞬間、これまで動くことの無かった一条が口を開いた

男も全く予期せぬ出来事に一条を振り返った

倒れたまま一条は男めがけて声を発した

「――――囲め！！」

ぱしぃんっ！と男の周囲で音が鳴り響く

「なんだ・・・？」

男はそう呟き、足下の四隅に白い紙が地面に貼り付けられているのを見つけた

見慣れぬ文字であったが、これが何なのかはすぐに分かった

「符術かっ！？こーれしきぃのぉ符術でぇー止められるとおもうなあよぉ！！」

男はすぐさま符術の結界を破ろうと黒の魔術を発動させた

男の頭上に巨大な黒塊が形成される

靄が集ったその黒塊は見るからに堅そうで艶やかだ

漆黒が、次の瞬間見えない壁に阻まれる

普通の符術の結界は其処まで強度が有るわけではない

符術に込めた術の強さはすなわち魔力の量でもある

この程度の符術を破れぬ訳がないのだ

その常識が通用しなかった男は立ちすくむしか無かった

巨大な黒塊は壁にぶつかった瞬間、強制的に黒の靄へと逆転し、空

気中へと霧散していった

「なん・・・・・」

「成功・・・だね」

よろりと立ちあがった一条が痛めた腕をかばいながら立ちあがる

足も少し捻ったようですぐに会場の手すりにもたれかかった

「貴様・・・なんだこれは」

「予備で結界張ってたんだよ。結界っていってもこの世界のとは違うみたいね・・・。貴方の顔からしてみると。それとも私だけの特殊能力とかだったり・・・ってそんなわけないか」

はじき返すのではなく魔術を無効化したのは予想外だったが、どうやら男の行動を制限できたようで一応これで良いかと苦笑いを浮かべた

そのとき、一つの影が会場へと戻ってきた

青い髪と白の仮面をつけたカイであった

そしてもう一人、それはゆっくりと手を伸ばす

守る者など誰もいない、深紅の宝玉へと

『聞いてません』

「奴は・・・」

カイが会場へと戻って真っ先に探したのはあの巨大怪鳥の姿であった

あの見かけからは想像もつかないが、確かに故郷の匂いがしたような気がしたのだ

もちろん故郷の北の地にあのような鳥は存在していないし、自分の思い違いかもしれないとも思った

「逃げた・・・？」

会場は突然現れたフェリーを保護したという雰囲気では無かった

それよりも奇妙な光景である

遠くに見えるグレアントの王女、そして黒髪の少年と女性

あの少年はこの地の新たな神子であるというのは聞いた

この地は龍の統べる地

故郷は一角天馬の統べる地であり、彼とは直接関係は無いが今その神子が奇妙な事に赤の他人になっている事が問題である

自らが一角天馬の神子だっただけに、すぐに一目見て分かった

あの女だと

自らの持つ力が奪われ、それが今あの少年の隣に立つ女性の中に宿っているのをカイは知っている

いや、感じている

カイは旅の途中で力を失い、次のマナの実りの季節までに何とかしないととは思っていたが、これも運命だろうかと仮面越しに女性を見つめた

大陸の反対側に位置するこのアルデリア王国でまさかそんなことになろうとは思っていなかった

だが、そんなことを今論じている場合ではない事も分かっていた

明らかに会場の様子がおかしいのである

自分が会場を出てから度々轟音が離れた場所まで届いてきた

カイが最後に会場を見たときから、戻ってくるまでに何が合ったのかは分からない

ただ、中央のメイン闘技場は二つに砕けその上には何人か人の姿が

見受けられる
そしてずっと右に見えるのは横たわった女性とそれを介抱している男性
どちらも濡れている事から恐らく水中からあがってきたのだろうとカイは予想する
対岸にいる三人の目の前には何故か結界に閉じこめられた男が居たあれが誰なのかは分からないが、もしかすると今回の騒動の原因かもしれない
遠くからでも男の異様な姿がよく見える
「翼・・・白の髪・・・まさかな・・・」
カイはそう呟いて風王奏を鞘から抜き放つ
彼が今しようとしているのは、会場を襲った犯人を探すことでも、殺すことでも無い
トルロインの貴族に言われた事を為し遂げる事だ
まずそれらを回収しなければならない
カイは会場をぐるりと見渡した

そして見つけた
宝玉のあった場所
そして人影

「あれを渡してはならない・・・か」

エフレルには事前にアルデリアとグレアントの両国から宝玉だけは絶対に厳重な警備の元に配置して欲しいと言われていた

というのも少し前、グレアント王国の方で宝玉の件でいろいろとあったらしいからだ

グレアント王国が所持するものでは無かったにせよ、宝玉が何者かの手によって実験、悪用されている可能性があるという事だったからである

その関係者だという少女との会談、わざわざその場に立ち会ったアルフレア王女の忠告もあって決して人の手では届かない場所に、また魔術防壁を符術で張った事で魔術による接近もできないようにしただがそれを乗り越え、男は宝玉を手にした

「これが紅蓮の宝玉、紅玉・・・。フフフ、案外あっけない物だな」

自らの手に収まる深紅の宝玉を見つめて男の口元が僅かににやけた

その紅は、映るものすべてを紅蓮に染め上げ、球の中央に炎のように燃えたぎるマナの力が渦を巻き、それはまさしく心臓の鼓動のようなものを感じさせられた

「その宝玉、どうするつもりだ？」

カイはその男に向かって質問を投げかける

カイは今、水面から伸びた氷の柱に乗っている

男の立つ台座から数メートル離れており、そこが結界の最端であった場所からカイは男を見下ろしている

幾つか氷の柱が水面から伸びており、その上を飛んでここまで渡って来たのだと男は振り返りながら確信する

「できるかぎりこっそり来たつもりだったが・・・些か見つかるのが早かったかもしれん」

「もう少し早めに行動を起こしていれば、容易く手に入っただろうな」

会場の様子からして、少し前まで何かいろいろ起こっていたのは分

かる

が、そのときに宝玉を奪わなかったことにカイは疑問を持った

「何、別の者の役目だったのだが、どうやらそうも言ってられない状況なんでな。あんなところで掴まるとは、予想外にも程があると思わないか？」

そう言って男はふっと微笑を浮かべる

「試合でも見た顔だが、君に止められるかな？」

男は手に持った宝玉をゆっくりと服の中へと隠す

内ポケットにでも入れたのだろう

とりあえず、彼らの仲間で宝玉を奪おうとしている以上、この男を止めないと行けない

「素直に見逃してはくれないのだ。言葉はいらない。剣を抜け」

「話は分からなくは無いが、お前、歳を考えろ歳を。いくら腕が立つ剣士でも老いには勝てないと思うけど？」

「若造がよく吠えるわ。そうとう自信があるか、この老いぼれ始め

た奴の実力が分からないのか、どちらにせよ、哀れ」

「哀れ？」

「ああ。哀れ、哀れ、哀れ、哀れ、哀れ！歳とは経験、この体が朽ちる代償にこの頭脳が代わりを果たす。哀れ――――あぁ、哀れ」

「何がだよ、変な奴だなお前。気味が悪い」

「仮面に隠れて何を言おうとも何とも感じぬ。さぁ、剣を抜け。さもなくば斬るぞ」

「斬れないよ。俺の剣は。何があろうと、ね」

カイはこれ以上喋っても無駄だと判断して剣を抜く

日本刀のような風王奏を鞘から抜きは放ち、男もまた剣を抜く

両手でずっしりと構えた剣

老い始めたように見えるその体からも素早く動けるようには見えない

男の言動から見ても元騎士、あるいはその類の職に就いていただろうと推測できる

カイはゆっくりと足を滑らせる

経験だけは確かにあるだろう

こういった場合、相手は無闇に動かないであろう

早さで負け、体力でも劣る体で動き回るのは愚行であるのは分かり切っているだろう

俺の会場での試合を見ていた、という事はこちらの実力を見た上で勝算有りと男が確信したからにすぎない

そうでなければわざわざ剣をあわせるような事をするとは思えない

ということは培った力を瞬発的に出し、斬るつもりだろう

となれば・・・・カウンターか

カイはカウンターに注意をしながら大地を蹴った

飛び出したカイは剣をしたから振り上げる形で斬りかかった

男はそのカイの動きをよく見ているようで一瞬で詰め寄った間合いから半歩ずらして剣を避ける

カイの横をとった男はすぐさま斬りかかろうとした。が

すぐに剣を止めて後ろへ引く

いつの間にかカイが左手を右の脇下へと滑らせており、冷気が吹き出た

とはいえ凍らせる対象が無い以上、冷気はそのまま周囲の温度をグンと下げただけで終わった

カイはこれを見て予想以上の手練れだと思った

あの一瞬でカイに斬りかかっていれば、男は全身雪まみれで凍っていただろう

それだけでなく、完全にその射程距離からも出ている

ただこちらが詠唱すればその隙に踏み込んでこられるだけの絶妙な位置に男は立っていた

「よく見ている」

「お前は見えていない」

「何・・・？」

「言っただろう。哀れだと」

「・・・・・」

完全に二人は動きを止めて見つめ合う

「何が哀れかと貴様は問うた。答えは――――無い。だが、あるとすれば、全てだ」

「全てが・・・・哀れ？」

「あぁそうだ！！」

男は突如口調を荒げて叫んだ

「老い逝く肉体、記憶が消えてゆく。そんな己が哀れだ。そしてこの哀れな世界にも私は絶望している。貴様の体が哀れだ。経験の無さも哀れ。あぁ哀れ哀れ哀れ」

「・・・なんなんだお前」

「私か？まぁいいか。私はアークス・ガランドーラ。ファンダーヌ王国第二王女、エリエル・シェルトール・ロフス・ファンダーヌが側近アークス・ガランドーラ！！つい先ほどをもって勝手に止めたので元がつくがな」

「・・・なるほどね。誰かは分かった。恐らく裏切ったんだというのも分かった」

あの男達側に居るということは、もはや国の為に奉仕する人間では無いとカイは判断した

通りで身嗜み的に庶民じゃ無かった訳か

なるほど。先ほどまでは、ということはつまりそれまで王女達の側に居た訳か。内部に協力者が居たんだ。そりゃ簡単に王女達をさらえた訳だ

「一応その身柄は拘束させてもらうぞ」

カイはそう言ってファンダーヌ王国の裏切り者へと剣を構え直した

「ちっ・・・何だよこりゃーよ！！」

爆音が響く

ビリビリと空気が振るえ、振動が足へと伝わってくる

「たぶん一応私の最高強度です。意志の強さがそのまま繁栄されているので脆いかもしれない。だけど、そんなものじゃぁびくともしませんよ」

そう自信たっぷりに男に言い放つのは一条唯

「一条さん、これを狙って・・・？」

彩輝はここにたどり着いたとき、周囲の四隅の地面に札を貼り付け

ていた

まさか結界用だったとは思わなかったが

「いや、本当の所は護身用の結界にするつもりだったんだよ。でもはじき飛ばされちゃってね」

そうこっそりと一条さんは俺に耳打ちした

なるほど。あの強度の符術なら確かに身を守る事はできるだろう

「っていうか勝手に戦闘態勢に入らないでよ～。結界発動させるかどうか迷ったんだから。フレアちゃんも捕まえろって、アーヤんにそんなのできる訳無いじゃないですか。無謀すぎますよ」

「む、すまぬ。が、まぁ捕まえたじゃないか」

「そうですけど・・・」

そこで彩輝は気になって一条に聞いた

「あの、これってどれぐらい持つんですか？」

「ん、この結界の強度？えーっとね、フレアちゃんの本気をギリギリ防げない程度かなぁ」

「わかんねぇ・・・」

まぁあの火柱が本気では無いのかも知れないけど、あの程度は耐えるだろうという本人の付け足しがあった

「とはいえ、一発だけならって事なんだよね。耐久力だと」

「あぁ、連続でやられるとまずいっていう・・・」

「え？」

三人同時に男を見た

男はすでに次弾装填が完了していた

「うおおおおっ！！！」

再び巨大な黒塊が結界へと衝突する

三発目をギリギリで耐えた結界だったが、これ以上は流石に無理そうであると誰が見ても分かった

アルフレアはもう魔石の予備は無く、一条さんも白紙の札と使えそうもない試作品の札ばかりを持っている

だが一条さんは任せなさいと言った顔で胸を叩いた
微かに胸が揺れたようにも見えたが気にしない気にしない

「無いなら書けばいいのよ」

「あぁ、って、そんな簡単なものなんですか？」

「ふっふっふ、美大生ともなると常時ペンと紙は持っているものだよ」

「ぜってー嘘だろそれ！普通持ち歩かないって！」

「じゃーん！かーみーとーぺーんー！」

「いや、そんな某未来型ロボット風に言わなくても良いんですって！」

この人本当に緊張感が無いのかと思えるような口調で何処からか紙とペンを取り出した

「ふふふ、見よアーヤん！」

「おおっ・・・！」

一条さんはそう言ってささっと書き上げた札を見せてくる

「・・・・あの、本当にそれ効果あるんですか？」

彩輝は期待を持って見てしまったせいか、ある種の幻滅感を抱いた

自信満々に見せてきたその札には『めっちゃ強い結界！』と書かれていた

え、っていうかこんなので大丈夫なのだろうか？

「大丈夫よ。さっきのあの結界だって、かったーい防壁って書いたんだから」

「マジでか！？そんなんであの攻撃防げるのか！？」

「ようは言葉と魔力を込める札に書かれた文の意味が同じなら効果得られるみたいでね。まぁ本気で書かないと見合った効果は出ないと思うけど」

「なんか手抜き感が漂う仕上がりのようですが自信のほどは？」

「べりーぐっどよ！完璧パーペキ見てなさい！

えぇ～と脱力しかかった俺の肩をポンとアルフレアさんが叩いた

「大丈夫よ。なんて書かれているかは分からないけど、あの結界は私が見た符術の結界でも一番よ」

そういわれても・・・ねぇ

書かれている言葉に真面目さが全然感じられないんだもんなぁ

まぁ、信じるしかないか

「囲んで止めて！」

一条さんが自信を込めて言葉を発する

すると手に持っていた四枚の札がするりと手から離れ、風に乗るように綺麗に最初の四枚の上に重なる

その瞬間、男が結界を破った

ガラスが割れるような音と共に、割れた結界が光りに煌めく

「私なんでか結界のイメージがガラスに寄っちゃうんだよねぇ。先入観というかなんというか。ほら、透明で強度があるのものっていったらガラスが浮かんでこない？」

「んー、そうですねぇ。透明度は高いからプラスチックよりはイメ

ージしやすいと思いますけど。っていうかそういうのでこれ決まるんですか？」

「そういうイメージをもって書いたからね。やっぱり透明なバリアってイメージがあるからね。そうしたらガラスみたいになっちゃって」

まぁ確かに、先ほどの札にはガラスとは書かれておらず、結界と書かれていた

ということは、恐らく本人のイメージ、想像、そういったものがあの結界を構成する元になっているのだろう

でも意識すれば変えられるという訳でもなさそうだと一条さんは呟いた

なんでもグレアント王国の方で試しては見たらしいのだが、強度的にも視覚的にも微妙なものができてしまったらしい

とはいえ便利だなぁと彩輝は思っているのだが

「無意識に、本人がイメージするものに近づく程度でしょうね。たぶん。強度は変わると思うけどね。普通のガラスはあんなの耐えられないから」

そう言って新しく札を書き始めた

「く、破っても破っても次から次へと書き足してくるか・・・。妙だお前。マナを取り込まずどうやって術式を刻み込んでいる？」

「答えると、思う？」

「ない・・よなぁー。ちなみになんて書いてるんだよそれ」

男は結界を破るのを止めて一条さんと話し始めた

話の中でいろいろとこの術を抜けるヒントを探すつもりだろうか

とはいえ、それでも遅いのだが

俺は隣で術式を刻み込んだ札を見つめる

「これ？これはね、眠って気絶って書いてあるんだけど」

「・・・・いくら符術にも限度があるだろう」

「魔術に限度なんて無いでしょう。なんともいろいろと理不尽なものばっかり。これがそうじゃないと言い切れる自信は貴方にあるかしら？」

「そんなもの効くはずがない」

「じゃぁ試してみましょうか。二人目の実験台としてね。気絶しちゃってぽっかーん！！」

「う・・・ぐぅっ・・・・・」

「なんかもういろいろと台無しだよ！！！」

四枚の札がカッと光ったかと思うと、不思議な光りが男を包み込む

途端に男は膝をつきこちらを睨み付ける

そしてばたりと横へと倒れる

思わず叫んだ彩輝としてはもうキーワードがあまりにも酷い気がしたが、もう突っ込む気力も無いと首を振った

「ちなみに実験台第一号は私だ」

聞いてません

完全に緊張の糸が切れた彩輝は小さくため息をついた

『裏切り者』

「ちっ・・・」

カイが風王奏を振るう

風を切る音が聞こえる

「当たりま・・・せんねぇ。どうしましょう？」

「くっ・・・積雪よ、軋む大地の霜柱、御旗を地へと縫い止め・・・っ！」

「む」

男は咄嗟に踵を返して客席の方へと走っていく

この台座は客席から離れた場所にあり、壁から突き出したような場所になっている

来賓席の真下にあるその台座から男は迷わず飛び出していた

カイの足下から広がった魔法陣が男を捉え損ねる

カイは舌打ちして魔術の行使を止めると男を追って自らも台座から飛んだ

「競り立つ氷柱、突き出し我の、足となれ。コルディアットホルド！」

カイは結界の外に氷の氷柱を立てた

パキパキと音を立てて水がゆっくりと渦を巻き始める

だがその渦は竜巻のように天へと昇りはじめ、それがいくつも会場の来賓席の近くに出現する

そしてその渦の柱はカイの魔力によって一瞬で凍り付く

周囲の温度が一気に冷やされ、冷やされた水蒸気がキラキラと凍り付く

先ほどまで水中から伸びていた柱と同じものがいくつもでき、周囲は氷の林となる

その柱にを次々に蹴って、逃げた男の背を追う

男が会場に着地してもなお更に距離をとろうと走っていくのを見てカイは氷の柱を大きく蹴って客席の方へと飛んだ

一度手すりに足を置いて足のバネを利用して大地へと足をつける

カイは男を追おうとして、だがすぐに足を止めた

仮面の奥に、男の背中が見える
そしてさらにその奥、男の行方を塞ぐようにして一人の少女が手を広げていた

「おや、これはこれはお早い起床ですな」

「アークス・・・その宝玉をどうするおつもりですか?」

「はて、何の事でしょうか?」

アークスと呼ばれたファンダーヌ王国の第二王女の側近は何の事を言っているのだと白を切る
通路をその手で塞ぐその第二王女、エリエルの真剣な眼差しがアークスへと突き刺さる

「全て、見ておりました。もう一度聞きます。それをどうする気ですか、ドーラ爺・・・」

「フン・・・もう少し、眠っていればよかったものを・・・」

「どうしてですかっ!!」

普段はお淑やかなエリエルの口から、こんな叫びが出たのは何時ぶりだろうとアークス・ガランドーラは考えた

少なくともここ数年間は聞いた覚えがないなぁと記憶が告げる

昔から問題を起こすこともなく、自分だけでなく父である国王や王妃、給仕の侍女達にもいつも微笑んでいた彼女を思い出すアークス

「どうして・・・？」

「そうですっ！！何故貴方のような・・・貴方のような方が・・・・」

「人とは、他人に見せぬ面の一つや二つは持っているものです。私は生憎貴方に見せた覚えは無かったのですがね。だが聡い貴方はどこかで感づいておられたはず。違いますかな、元主よ」

「質問の答えになって無い気もするけど」

そう言ってカイはアークスの首裏に剣を突きつける

アークスもカイの接近には気がついており、その事にもカイは気がついている

だが逃げる様子は微塵も無く、むしろ話の方が大事だと言う雰囲気だ

「ふむ、強いて言うなら私は先ほど貴方には伝えたと思っているんだがね。まぁいいか。所詮お前達には理解できんだろうしな」

「ドーラ爺・・・」

「まだその名で私を呼ぶのですかな元主。私はとっくに貴方の名を捨てたと言うのに」

「・・・・・宝玉を」

「ん？」

「宝玉を返してください」

アークスはそっと懐に左手を入れた

未だにアークスの右手には剣が握られており、その刃には刃こぼれ一つ無い

左手を懐から抜くと其処には真っ赤な宝玉が握られていた

握り拳より少し大きいくらいの深紅をアークスは見つめる

「宝玉・・・なんと美しいものだろう。こんなにも美しいものだったとは正直思っていなかった。幾年もの月日が過ぎてまだなおこの美しさを保ち続けるこの美しさ。この老体も流石に強い感銘を受けた」

「その宝玉を盗むことはつまり・・・貴方は・・・」

「私が実行に移した時点で最早懐柔されると思うてか？この決意は

止められぬ。どれほどの意思を持っても、どれほどの時間が掛かっても、この決意は止められぬ」

アークスが静かに言い放ったその言葉には決意というものが込められていた

もう、この男は本当に国を抜けたのだろう

そしてあの王女を裏切った

恐らくその意思はもう誰にも曲げられないのだろう

「主を裏切ってまで手にする程の価値がその玉にあるのか？」

「あぁ、あるとも。いや、それ以上の価値があると言ってもいいな」

「俺には分からんが、そろそろお別れの挨拶は済んだのか？」

「別れなどいらない。だが、もしこれが別れの最後の機会だと言うのならまぁ・・・」

アークスは彼女を見てゆっくりと口を開いた

「言ってやらぬ事もない。さらばだ元主、エリエル・シェルトール・ロフス・ファンダーヌ。最早これまでの私と会うことは無いだろう」

エリエルの目元にうっすらとした涙が浮かんだのがカイにも分かった

その小さな粒が頬を伝う

ゆっくりと、時の流れと共に地面へと落ちていく

「シッ！」

「むぅっ！？」

「きゃっ！」

ガンッと音が鳴り、両者の体が交差する

思わずエリエルは口元を押さえてこちらを見ていた

涙が地面に落ちた瞬間、カイは向けていた剣をそのまま突き出した

大きく一歩を踏み込んで放ったその一撃が、信じられないスピードで反応した初老の男の剣と重なり合った

振り向き様に剣で体を反らした男と俺の剣がぶつかる

だが普通なら斬れるはずだった相手の剣は風王奏の刃では無く、峰を捉えた

跳ね上げられた剣でがら空きになった胴にアークスは蹴りを入れる

だがそれと同時にこちらも左手を男へと向けた
蹴り飛ばされながらカイは左手の先から冷気の突風を放出した
風は塊となり男を客席の方へと吹き飛ばした

「がっ・・・」

が、蹴り飛ばされたカイは会場と客席の境の柵に背を打つ

「大丈夫ですかっ!?」

「あ、あぁ・・・」

駆け寄ってきたエリエルの手を借りてゆっくりと立ちあがる
視線を吹き飛ばしたアークスへと向けると彼もまたゆっくりと立ちあがる所であった
硬い床に頭を打ったのか、白い髪に紅色がジンワリと滲んでいるのが見えた

「ふ・・・ふ。やはりこの体は辛い。ここは早めに撤退とするか」

「させると、思うのか？」

よろめきながら立ちあがるアークスに向かって風王奏を構え直したカイが言い放つ

アークスは静かに笑いながらゆっくりと宝玉を天へと突き上げた

「しまっ・・・っせやっ！！」

カイが焦って風王奏を大きく横に振り切った

風が刃となって男へと向かう

その風の刃が生まれる瞬間には男が小さく呟いていた

紅玉のキースイッチを

「赤翼の堕天使の炎禍（エンカ）」

「む・・・おっ・・・・！！」

「きゃっ！！」

突如周囲のマナが根こそぎその宝玉の中へと吸い込まれていったのを二人は感じた

より一層その深紅の輝きを増したその宝玉はずぶりと溶けるようにアークスの手へと飲み込まれた

「お・・・おおおおおおっ!!!す、素晴らしい・・・これが一体化・・・・クハハハハハ!!」

「ちっ・・・なんだ、どうなったんだ?」

「宝玉を・・・取り込んだ・・・!?」

男の手の中にその紅玉が吸い込まれた瞬間、男を中心に炎の渦が現れた

瞬く間に炎の渦は男の姿を覆い隠し、一瞬遅れてその炎の渦にカイが放った風刃がぶつかった

風の刃は渦に揉まれて一瞬で消え去った

大きな熱波が二人を襲う

周囲の空気がその炎に取り込まれて風を起こす

その取り込んだ酸素と合わさり炎の渦はより一層巨大な炎の渦を作り出した

その様子は遠くからでも確認できた

対岸に居た彩輝達からでもよく分かるほどその炎の渦は大きく成長を遂げる

「火柱・・・」

「火災旋風って奴だっけ。たしかそんな名前じゃ無かったかなぁ？」

一条さんがそう呟く

そういえばテレビか何かで何度か聞いた事がある

竜巻の炎バージョンの奴

たしかにテレビか何かでは火災旋風なんて言葉を使っていた気がする

「不味いな。炎の魔術師だから感じるのかもしれないが、なんだか嫌な感じだ。早めにこの男を連れて引き下がった方がいいかもしれん」

「こんな離れている場所をわざわざ襲ってくると？」

アルフレアさんはそう言って倒れた男に視線を戻す

「わからん。が、あいつが仲間を見捨てる気が有るにしろ無いにしろこの貴重な情報源を奪われる訳にも逃がす訳にもいかない。気を失っている今の内に四肢を拘束して魔術を使えないように封印しておく必要がある」

「んー、詳しいことは分からないけど、とりあえず此処を離れたほうが言い訳ね」

「でも、あそこにカイさんとエリエルさんが居ますけど良いんですか？」

「人の身よりまずは我が身だよアーヤん。私たちにはあれをどうにかできる力も知識も無いんだから、専門の人達に任せた方がいいよ」

いつも以上に一条さんは真面目な顔で俺にそう言ってくる

一応俺の身の安全も考えてくれての発言だろう

それに、たしかに自分では何もできないかも知れない

魔術なんて、まだ自分たちには分からない事が多いうえ、もとの世界の知識が通用するとも限らない

それで失敗したら何もかもが終わってしまう

「引こうアーヤん」

「・・・そうですね」

俺は前以上に無理はできない

前なら後悔したくない、その一心で動いていたと思う

だけど・・・誓いによってそれはできない

今は、そちらの方が優先なのだ

「じゃぁこの男は俺が運ぶ。一応これでも男だし。結界解け――――」

俺は一条さんに向かって男を運ぶために結界を解いて欲しいと言おうとした

だがその声は氷の柱が崩れ落ちる音に掻き消された

カイは咄嗟にエリエルに逃げるように指示を出して剣を構えた

エリエルは多少心残りがあるようだが素直に従ってカイから離れていく

「ふぅ・・・熱い」

額に浮かび始めた汗の粒を腕で拭う

キラリと光った汗がその熱によって蒸発していく

空気中の水分が全て乾ききってしまったかのように感じつつもカイは目の前でグネグネと蠢く炎渦を見上げた

燃える炎の轟音に混じり、中からアークスの声が聞こえる

笑っている

「ちっ、風王奏！！」

カイは風王奏の力で風を巻きあがる流れとは逆方向に回そうとしただが、機能しない

あまりに炎が空気を巻き込む力が強すぎるために風のコントロールができないのである

「駄目か・・・。冷気でも恐らく止められない。氷塊も無理・・・か。なら打撃で行くか」

カイは自らの右腕を冷気で凍らせる

僅かな水のマナを吸い取って氷で腕を覆った
だが早くしないと凍傷になりかねないので急いで次の行程へと移る
カイはできるだけ足音を立てないように素早く渦の裏手に回り込む
そしてすぐさま氷の周りに風の膜を作り出す
風を拘束で氷の周りを回転させる
そして再び水のマナを吸い、次は氷の壁を炎の渦の前に張った
それと同時にカイは渦へと向かって走り出す
炎の渦は振れていないにも関わらず、一瞬で氷の壁を蒸発させてしまった

「でやあああああ！！」

カイは懇親の一撃を炎渦へと叩き込む
風と炎が反発して右腕がグンと重くなる
だが風はすぐに吹き飛び、右腕を覆った氷も一瞬で消える
そこにすかさずに持ち直した風王奏と纏わせた風が炎の渦へと突き刺さる

腕が開けた小さな穴に風王奏が突き刺さる
だが長さ的に男まで到達はしない
もはやこの炎の勢いを止める方法をカイは一つしか思い浮かばなかった
ので、そうすることにした
風王奏の先から思いっきり風の塊を打ち出す
この方法で男だけが吹き飛ぶのか、それとも炎の渦ごと吹き飛ぶのかは分からなかった
故に失敗すればそのまま炎に巻き込まれて焼死していたかもしれない
現に服には至る所に焦げ目が付いている
未だに燃えていないのが不思議なぐらいに接近していたのである

「ふっとべえええええええ！！」

「何ッ！？」

あまりの興奮に、カイの攻撃に気がつかなかったアークスは風の塊を体にもろに受けた
吹き飛ぶ体と炎の渦は同時に動き、アークスの体は宙へと浮いた

風の勢いでアークスは氷の柱が立ち並ぶ水上へと吹き飛ばされた
炎の渦は氷の柱を溶かし、巻き込み、折りながら水中へと落ちた

崩れ落ちる氷柱と不安定に揺れる炎の竜巻は倒れながら燃え続ける
折れた氷の柱が水中へと落ちていき、炎の渦もまた同じように水中
へと落ちていく
完全に口を開けたまま彩輝は固まっていた

「これで心残りもないだろう。あれは終わった。さて、引くぞ」

アルフレアさんに言われて我に返った俺は一条さんに結界を解いて
欲しいと頼んだ

「わかった」

そう言って一条さんは口を開こうとした
恐らく結界を解くキースイッチを言おうとしたのだろう
だがそれをまたしても遮るものがあった

「うおおおおおおおおおおおお！！」

「何だと！？」

信じられないものを見たかのようにしてアルフレアは叫び、俺と一条さんもアルフレアさんと同じ方向を向いた

倒れ逝く炎の渦が見える

折れた氷柱がドボンと水柱を立てる中、その炎の渦は水の上で尚もその勢いを衰えることなく燃えている

そしてゆっくりと炎の渦は形を変える

渦はゆっくりと中心へと縮んでいき、やがてまるい球体へと変化した

まるで太陽の用に燃える炎の球体が宙に浮いているのである

その球体はまるで意思によって動いているかのような動きでこちらに迫ってきた

そしてそのまま炎の球体は結界へと衝突した

結界は大きな音を立てて崩れ落ち、炎はそれと同時に四散した

そこからゆっくりとアークスが降りてくる

「ふん。所詮吸血者といえどもこの程度とは少しがっかりだな」

アークスはそう言いながらゆっくりと男に手を伸ばした

彩輝は咄嗟にソーレを振りかざした

「む?」

「触るな!斬るぞ!」

彩輝は気がつけばそう叫んでいた

隣にいる二人も少し驚いたようにこちらを見ている

「お前が?この私を?笑止、小僧如きがよく吠えるわ」

男は彩輝の制止に答える気すら無いようでそのまま倒れた男を担ぎ上げた

「忠告したぞ」

そう静かに口を動かし、次の瞬間にはソーレが風を切り裂く
風の刃が男へと飛んでいく
が、その風の刃は予備動作も無しに生まれた炎の壁によって防がれてしまう

「威力不足だな。だが助かった」

彩輝の攻撃が防がれたにもかかわらず彩輝にお礼を言った
アルフレアは右手を突き出し、左手で自らの腕の関節の節目である肘を掴む
男が取り込んだマナを使って炎の盾を出した瞬間、炎のマナが周囲に溢れたのである
そのマナがアルフレアに殺到し、アークスもそれに気がつく
アルフレアの足下に真っ赤な魔法陣が浮かび上がる
砲台の用に魔法陣が腕にも展開する
アルフレアの顔がうっすらと魔法陣の赤い光りに照らされる

「熾る炎戈――――――――」

『炎幻の光』

アルフレアは一気に紡いだ

「熾(おこ)る炎戈、照る天熱(あまいき)り――――」

「なん・・・その魔術は――――」

「狂い踊る!!ブライアベイロン!!」

途中何かを口走ったアークスの声ごとアルフレアの魔術は飲み込んだ

まるで火を噴くドラゴンの口ように、腕の砲台から吹き出した炎が

至近距離から男を飲み込んだように見える

炎はまるで槍を突くようにして魔法陣から放たれた

彩輝も近くから感じるその炎の熱波で皮膚が焼けているように感じた

対して技を放っているアルフレア本人にもその熱は届いているようで、熱に耐えながら魔術を行使しているようだ

放たれた一撃は一瞬で、呆気なく終わりを告げた

腕に広がった魔法陣が順にはじけ飛び、肩に展開していた最後の魔

法陣が消えるとアルフレアはがくっと膝をつく
彩輝でも一瞬で分かるほどに、周囲の火のマナは枯渇していた
その一撃は一瞬で周囲のマナを吸い取るほどの威力だったのだろう
それにしては先ほど見た炎の柱よりかは全然威力が無かったようにも見えるが・・・

「くそ・・・補助も無しでこれは割にあわん・・・」

そう言い放ってアルフレアは荒げた吐息と共に両手も地面へとついた
術者に負担が掛かる技なのだろうか。それとも只単に疲れるだけなのだろうか
どちらにせよアルフレアさんは疲労以前に、周囲に炎のマナが無いのでもう魔術は行使できない

「それに手応えも・・・・薄かった」

たしかに、腕で顔を覆って熱を避けていた自分だったが、そうは見えなかった
あの一瞬では男も逃げ切れなかったように見えた

だがアルフレアさんの言葉は正しかったようである

「危ない危ない。反射的にガードしていたら今頃消し炭でしたな。あの魔術を使うとなると、もはや手詰まりなのかな、アルフレア王女？噂には聞いていましたが、初めて見ましたね。これがかの有名な防御破り」

「・・・・どうやって防いだ？いや――――」

だが男は現れた。

グレアントの王族には代々受け継がれる魔力の属性がある

代々受け継がれる魔力は『破壊』の属性をもち、このブライアベイロンは最もその『破壊』の効果が出る魔術である

知っている人間は少ないが、このブライアベイロンはその属性の強さ故に、『破壊』に相反する『防御』の属性のみ（・・）を打ち崩すという特性を持っている

その『破壊』に使われるエネルギーが相手を襲うのだが、防御を取らねばその炎は何も焼くことは無い

故に

「防いでなどおりませんよ。ただ単に大事を取って避けただけですので。こういった所では勘が役に立ったと思えますね」

本当に避けたのかと彩輝は疑いたくなった

この技の特性を知らなかった彩輝であったが、それ以前にあの至近距離からあのスピードと幅のある一撃を、そう容易くあの老体が避けられるとは考えられなかった

だが実際男は完全に先ほどの魔術の射程から離れた場所に立っている

炎のせいで男の回避行動が見えなかったので、どのようにして距離を取ったのか知りたいところだが聞いたところで教えてはもらえないだろう

「まぁこちとらそこまで話す余裕も無いのでね。さっさと帰ることにしましょう。ヨン、ロク、行きますよ。回収は済みましたか？」

男はそう言って会場の方へと視線を戻す

「おっけーおっけー！回収したよー」

「いつでもいいよー」

二つの子供の声が聞こえた

会場に居た誰もがその二人に気がつけなかった

声がした場所はちょうど割れた闘技場に立っていた数名の騎士の後ろである

その全員が初めてそこに人の姿があることに気がつき、また同時に驚いた

声からして予想はついたのだが、その姿は全くと言って良いほどの子供なのである

背丈からしても１０歳前後といったところだろう

そしてその二人の背中にもあの男と女と同じ翼が生えているのだ

水に濡れた服や翼、それに持っているものがが重いのか翼の羽ばたき方に力が感じられる

二人の容姿は殆ど同じでそれが彼らが双子だというのが分かる

そして二人が重そうに持っている大きな固まり、それはセルディアと相打ちになった女であった

意識が無いのか黒い翼はだらりと垂れ、服はセルディアの放った雷によって至る所が焦げてその肌を露わにしている

その二人がゆっくりと上昇を始める

「っ・・・逃がしてなるものかっ・・・」

「チル・・・」

ユディスアルデリア王国の騎士隊長、チル・リーヴェルトを見つめた

ゆっくりと白けた視界が戻ってこちらの割れた闘技場へと戻ってきたらしい

先ほど雷光がはじけた時に目をくらませてしまったチルの視界も回復したようでしっかりと上昇し始める子供の二人組を見上げる

「できんの？」

「あんたも少しぐらい加勢・・・って出来ないのか。私が子供二人逃がすように見える？」

「違うわよ。体の事よ。あの男の一撃、響いてるんでしょ？動ける敵は三人。うち一人はなんでか宝玉のキースイッチを知っていて行使までできる。子供二人の力はまだわからない。魔術行使できるセルディアは相打ちで倒れてアシェードの坊ちゃんも介抱でいなくなってる。ホーカーは魔術使えないしあんたの体もボロボロ。私は言うまでもなく、戻ってきた王女がお一人居るみたいだけどもう打つ手はなさそう。動けるのは異世界人二人と仮面君ぐらいかな」

チルはゆっくりと鞘から蒼天駆を抜くが、剣をだらりと下げていて

あまり俊敏に動き回れるようには見えない
そしてユディスは両手をあげて降参とでも言いたげな顔をしている

「あんたはここまでやられっぱなしで良いわけ？」

「いやいや。王女が攫われかけてここまで各国の騎士達に痛手を負わせられて、ただ黙ってみていられる方がどうかしているわ」

「あんたはどうなのよ」

「つまり、私もどうかしているわけね。まぁ国際問題に発展するのは間違いないかなぁとは読んでるわよ？その点では他人事では無いのだけど。けど、人数では五分でもこれはさすがに不利でしょう。こちらには決定打が無いもの。援軍でも来ない限りね」

チルは小さくため息をついた
しばらく会っていなかったので忘れかけていたが、そういえばこの人はこういう人だったなぁと思い出す
自分に出来ない事に関しては、ことごとく他人任せであるのだと
逆に自分に出来ることに関してはこれ以上ないほどの熱血っぷりを見せるのだが

「私は何も出来ないけど、あんたはどうなの？もう一回聞くけど、

できんの？」

「・・・出来る」

「あっそ。じゃぁやればいいんじゃない？やるからにはがんばってね～」

チルは空を駆けた

それだけでも蹴られた部分のヒビか骨折かは確実だろうし、あれでそれなりに痛みもしているのだろう

それを下から見届けたユディスは一呼吸置いて上空で昔からの友誼が敵に挑む様を見つめる

「おおおお！！」

チルは最後の一撃のつもりで天を駆け上る

次々に現れる空中の足場を縦に現れる階段をのぼるようにして彼らに一気に距離を詰めた

体の状態からして何度も打ち合う体力は残っていないのはチル本人でも分かっていた

だからこそ、決めねばならなかった

目的はあくまであの宝玉を取り返す事

アークスを殺すつもりは無かったが、それぐらいの勢いが無いとあの男には手も足も出ないだろう

少なくとも、ファンダーヌを裏切ったとはいえ、チルはその実力と経験は認めている

あの男も最盛期にはファンダーヌの騎士隊長だった時期があるのをチルは知っている

だからこそ、手負いの体でも本気でぶつかる必要があるのだ

このままやられっぱなしでは立つ瀬が無い

その一心で剣を振るった

「遅い。その剣が聖天下十剣だということも、その切れ味も知っている。だがその程度の実力で私の体に触れることができるとおもうてか？」

「否――――！！！」

そんなことは分かり切っている

アークスはチルの放った突きを交わし、逆にその剣を掴んだ

聖天下十剣は両刃の剣ではなく刀の形をしている
刃が男に触れる前に、その側面を掴まれているせいで動かすことが出来ない

「痛む体でよくやったとは思うがな。さて、邪魔もそこまでだチル・リーヴェルト。貴公が私に剣を向けるのは少し、早くもあり遅くもあった」

剣の早さか、それとも経験の浅さか、それとも実力の差か
チルは目を細めて皺の増えてきた老体の顔を睨み返す
そのアークスが再び宝玉を取り出した
チルが懐に隠していた短剣を取り出しアークスへと斬りかかる
接近した状態でその一撃を放った
短剣の煌めきを、その軌道をアークスは見定める

「アグニージュ」

が、一呼吸遅かった

その一言で、玉から発せられた赤の光りがチルを飲み込み、会場を
包み込む
光りと共に、意識が途切れ、落ちていく
「いい夢を――――――皆さん」
燃えている
視界全てが真っ赤に染まる
燃えているのは世界？それとも自分の瞳？
揺れ歪んでいるのは人？それとも自分の影？

此処は何処だろう？

遠くに揺らめく一つの人影

・・・あそこに見えるのは・・・俺・・・？

そうだ。あれは・・・自分だ

あのときの・・・今でも後悔し続ける、自分の姿だ

『炎幻の光』（後書き）

今回のお話、普段に比べるとかなり短いです。ごめんなさいｏｒｚ

『撃退、撤退という結果』

蝉の声が聞こえる
風に揺れる木々の音
その夏の匂いはとても懐かしい

「ねぇ！」

懐かしい声が聞こえた

「んー？なにー美也ちゃん？」

「あした、いっしょに夏祭りにいかない？」

懐かしい建物が見えた

「それって、しょうてんがいの？」

「そうっ！ね、いこっ！」

その誘いに、少年は手を取った

「あ・・・・・あぁ・・・」

虚ろな目をした彩輝は地面に倒れたまま、彼のそれからの人生を大きく変えたその出来事を見ていた

「これはこれは、凄い効果だな。打ち破る者が出たとしても逃走の時間稼ぎの時間ぐらいは稼げそうだ」

アークスはそう言って眼下に倒れた者達を見ていた

すると隣に二人の子供が現れた

二人は重そうに気を失っている女を持っている

まだ目覚めてはいないようであり、それはアークスが背負う男も同じようだ

「今のって記述にあった炎幻の光？」

少年の方が上を見上げて聞いてきた

以前イチと呼ばれるこの男から読んだ文献に書かれていたので試してみる価値は有るだろうと踏んだのだ

キースイッチとは別にある呪文

キースイッチはただ起動させる言葉であり、この呪文は宝玉に秘められた力を引き出すらしいのだ

まだまだ試していない言葉はいくつもあるが、ここであまり手数をばらす必要は無い

お荷物が二つある事だしと、アークスは帰還するのを優先した

彼らのアジトに行った事はないが、この少年二人が案内人になってくれると言ってくれたので飛翔する彼らの後を追う

「にしても凄かったね。全員光りを浴びただけで倒れちゃったよ」

「なんで私たちには効かなかったの？」

それはアークスにも分からない

実際これまで生きてきて宝玉に触れたことがこれが初めてなのだし分からなくても不思議ではない

宝玉自体残っている文献が少ないので、この世界に宝玉のことを詳しく知っている人間がどれだけいることだろうか

「さぁな。ただ、恐らく持ち主の意識に無意識に反応しているのではないか？お前達が身方だという無意識に認識していたせいかもな」

「へぇ、凄いや。やっぱり興味が湧いてくるねロク」

「そうねヨン。帰ってまた研究しようか」

「そうだね。にしても興味深いね宝玉の構造とかシステムとか。それが本当なら人の『心』とか『意思』っていう部分にもつながりがあると思うんだよね。脳への干渉も調べてみたいし」

「・・・そういえばお前達二人は技術系担当だったな」

「そうだよー。ついでにその履き心地はどう？」

アークスが思い出したように二人の自己紹介を思い出した

二人は確か組織の中でも自己紹介の時に主に物を作ることが専門なのだと言っていた

「あ、そうそう。じゃぁこれも試してみて」と渡されたのが今足に

履いている靴である

靴には風の魔術が刻まれており、空を飛べる靴なのだと言って渡されたものである

実際に履いてみると多少コツは必要だが、慣れれば便利な移動手段となりそうな物である

「いやー、苦労したんだよー。なかなか足の動きで操作させる所ところとかの術式がまた面倒くさくてさ」

「もうあんなチマチマした作業こりごーーーーー」

「あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　っ　！！」

「む？」

突如聞こえた叫び声に、視線を二人から眼下へと向けた

「チルか」

なんとも驚きである

体感したことは無いが、彼女も相当強い幻術をかけられていたはずだ

その宝玉のかけた幻術が解かれてしまったらしい
自力で幻術を破るとは恐ろしいほどの意思だ

「これは早く退散したほうが良いな」

「ですねー」

アークスはゆっくりと手に持っていた宝玉を懐へと仕舞い込もうとした
その瞬間、風が唸りを上げて頬を撫でる
いや、撫でると言うより撫でたのかと錯覚させる程の勢いがあったのだ
勢いが有りすぎてアークスですら一瞬何が起こったのか理解するのに数秒かかった
アークスは腕を見た
風が頬を撫でた左側の腕、その自らの左腕から吹き出す鮮血が勢いよく空を染める
アークスの鮮血と共に、主を失った左腕と赤の宝玉が落ちていく
血は赤の玉となって宝玉と交わりながら水中へと落ち、一、二秒遅れてアークスの左腕が落ちた

己の肘から先が無くなった腕を見つめていたアークスは次に視線をその風の刃を飛ばした少年へと向けた

「取ったと・・・思ったときが・・・最大の・・・隙だ・・・。はぁっ・・・はっ・・・じーさんの受け売りだけど・・・っ、覚えとけっ・・・」

其処には会場の手すりに掴まりながらも、ソーレを振り切った状態の彩輝が立っていた

顔には僅かに笑みが浮かんでいるが、端から見れば苦しみながら笑っているようにしか見えない彩輝の顔は汗まみれであった

粒汗がいくつも頬を伝っている

「・・・嫌な物見せやがって・・・っ・・・・・」

「貴様・・・」

両者の声はどちらも小さく、離れた互いの耳には入らない

「それ相応の覚悟はしてろよ・・・・」

「哀れな目をしている。悲しみか、いや、それとも憎しみか」

それでも両者は言葉を続ける
彩輝の目には後悔が、アークスの目には哀れみが映る

「今度は・・・はぁ・・・体を狙うぞ・・・はっ・・・」

彩輝は手すりに体重を預けてソーレを握る左手に力を込め、また同様に手すりを掴む右手にも力を入れた

「そのどちらでも無いか。哀れな目だ。にしても体は衰え、四肢すら満足に存在すらしてくれぬのか。神が居るとすれば私を見て嘲笑っているのだろうな。抵抗すら許さぬと言っているようだ」

鮮血は衰えることなく下の水面へと落ちていき、薄れながらも水を濁していく

「ねぇ、美味しそ・・・っと。痛そうなんだけど大丈夫？その体でその出血量はもう致死に相当すると思うんだけど。ねぇロク」

「そうねっ。とっても痛そうだし美味しそう。でも死んじゃうとこっちが怒られるんだ。先に治療しないとね。手短な施設ってあったっけ？」

「んー、近くに医療施設があったような無かったような・・・。輸血しないとやっぱり負担は大きいし、なんで大人二人とも寝てるんだよぉ。ほんとー使えないなぁ。いつも威張ってるくせに」

「だよねぇ。あ、そういえば本題の宝玉・・・落ちていったよね？あーぁ、どっちにしろ怒られるじゃん・・・。あんな所に取りに行けるわけ無いよぉ」

少年と少女はそう言ってアークスの腕の止血を始める

黒い魔法陣が現れ、腕の断面がみるみるうちに塞がっていく

「ほら、さっさと引き上げよう。意識があるうちにここを出ないと子供二人じゃ大人三人も運べないからね」

「む、それはごもっともだな。にしても、治癒担当でも無いのによくもまぁ此処まで綺麗に塞げるものだ。礼を言うぞ、ヨンとロク」

腕の傷が完全に塞がるもまだまだ油断はできないと早急にヨンは外へ出ることを進めた

腕を切られて相当痛みが酷いはずなのによくもまぁしれっとした顔で言える物だなぁと少年は感心もしたし少しばかり恐れも抱いた

もしかしてこの人体を真っ二つにされても意識を保てるんじゃないかとすら思ったほどである

涼しい顔をしてアークスもその意見に賛成した

二人が女を持ったまま先行して闘技場の外へ出るために漆黒の翼を羽ばたかせ上昇を始める

それを追うようにしてアークスもまだ慣れきっていない足の魔具を使って二人の後ろを上昇しはじめた

その後ろ姿を狙うようにして彩輝はソーレを振りかぶる

体内の魔力はまだまだ残っているのでこの程度で弾切れという訳にはいかないが、強力な宝玉の魔力によって幻術をかけられたせいで体力も意識もギリギリというところであった

先ほどの一撃もほぼ気力だけで放ったものであり、そう何度も連続して、それも集中して狙いを定めるのも難しくなっている

それでも当てきれるという自信が何故か彩輝の中にはあった

現に先ほどの風の刃も、霞む視界にうつる男めがけて放ったのだがまさか命中するとは予想以上の結果であった

闇雲に撃ったところで当たる確証もなく、逆に悟られればわざわざ撤退しようとしている相手を引き留める事になり、幻術から目覚めていない大勢の人達を巻き込んでいたかもしれない

だが彩輝はそんな考えにたどり着くことすらなく、ただ歪んだ心のままにソーレを振るった

まるで悲しみと苦しみと、自責の念に苦しむ心に体を乗っ取られた

かのように

結果、アークスの左腕が吹き飛んだ

宝玉と共にその腕は水中へと沈んでいった

ソーレの剣が鈍く太陽の光を反射する

「だ・・・めっ・・・・・」

彩輝は右足に何かが触れたのが分かった

ジーパンに触れているのが小さな人の手だと分かると振り上げたソーレをゆっくりと降ろす

振り返ってみれば一条さんが地面に倒れながら、必死に俺の足へと手を伸ばしている姿があった

それを見ると同時に、体を操る全ての感情が吹き飛んだ

「だめ・・・だよ、アーヤん・・・っ・・・・・だめだ・・・よ」

「一条さん・・・・・」

彼女もまた自力で幻術を破ってきたのだろうか

額に浮かぶ汗は彩輝と同じぐらいに酷いもので床にじんわりとその汗が染みこんだ跡が見えた

恐らく目に見える額だけでなく、体中汗でびしょ濡れなのだろう

彼女の吐息も目覚めたばかりの彩輝のように乱れている

それだというのに・・・

「人を・・・殺しちゃ・・・・傷つけんの・・・だめや・・・がいね・・・」

「・・・・ほーやね」

止められなければ、たぶん躊躇いもなく剣を振っていただろう

俺は少し勘違いをしていたかも知れない

意識が回復して、幻術の性で少し心がどうかしていたようだ

向こうが例え悪だとしても、人が人の命をこんな簡単に奪って良い訳がないし、そもそも異世界の住民である自分にそんな権利も権限も無い

つい久しぶりに故郷の訛りを聞いて、自然と年上である彼女に対して普段の返答をしてしまった

が、別に違和感は湧かない

たぶん意識し始めればまた口調は戻るだろう
年齢だけでいえばこちらは見上げる側の人間なのだから
たとえそれが悪だとしても、殺すことは正当化されることは無い
すくなくとも、自分の中でも、自分たちが住んでいた世界でもそれは変わらない

「・・・逃がした・・・・？」
「見逃して・・・あげるげん」
「大丈夫ですか？」
「うん・・・まぁ、なんとか――――っ」
「っと、大丈夫ですか？」
「うん、ありがと。こっちが負けた側に立つ必要は無いげんアーヤん」
「そう・・・ですね」

そう言い返した一条さんだったが立つのもままならない様子でふらりと体勢を崩した

足に力が入らなかったのか、膝がガクリとまがる

咄嗟に俺はその体を抱き留める

その隣に紅く乱れた長い髪と破れたドレスが見えた

アルフレアも幻術にかけられているためか息を荒げて苦しそうにしている

自分の体験といい、これは人の過去を見せているのかもしれない

それも最も辛い過去を

覚えているだけで本人を苦しませる過去は一つや二つあっても不思議ではない

自分もそうだったが故に――――

だから辛かった

その記憶を乗り越えるのはとても

あの頃に全てもう乗り越えたものとばかり思い込んでいた

それでも実感させられる

この記憶が自身にとって今までで最も苦痛となるべき記憶なことに

自分は情けないと思う

「あいつら・・・・宝玉を取り返す気はなさそう」

「ですね。なんとか撃退できたん・・・ですかね？」

それに答えたのは一条さんではなく、その横から聞こえてきた

「これを撃退と呼ぶか、相手がわざわざ撤退してくれたと呼ぶか」

「アルフレアさん」

「悪いな。幻術からは解けていたんだが気持ちの整理が落ち着かなくてな」

そう言って赤髪の王女はゆっくりと立ちあがった

「なんともまぁ酷い魔術だ。二度と味わいたくないものをまた味わうとは思っていなかったよ。苦痛の再現とでも言うべきか・・・。まぁ相手に余裕が無かったのもまた事実だろう。あちらも怪我人や意識不明がいたから無理に戦おうとはしないと思うが、まぁ宝玉が奪われず、死人も出ていないはずだ。よしとしよう」

「それがせめてもの救いですね」

ということは、アルフレアさんは俺が剣を振るったときにはすでに

起きていたのだろう
ただこちらにも大きな損害が出たことは確かである
彩輝にはもう、剣を振るう気は微塵も無い

戦いが終わりを告げようとしている頃合いになり、上昇を続ける
少年がふと何かを思い出したような顔をした

「あ、そうそう。そこの賢い龍さん」

少年は翼を羽ばたかせてその場に滞空しながら彩輝達とは対岸に佇む一体の紅龍へと声をかけた

「別の種とはいえ同族を実験台にしちゃったのは謝るよ。ごめんね・・・って、意味通じてるといいんだけど」

そこでアークスはふと疑問が出てきた
なぜ龍はあれ程までに大人しいのだろうか？
こちらの身方ではもちろん無い
あのタイミングで乱入してきた事を考えるとあちら側の手駒なのだ

ろう

それなのにこちらの争いには首を突っ込まなかったのが不可解である

「何で、って顔してるわね。アークスさん」

「いやね、もし刃向かってくるようなら遠慮無く魔龍にしてあげるんだけど、別にこっちも龍族と敵対関係になりたい訳じゃないからね。そっちもそうなんでしょ？・・・・返事無しかぁ。一度くらい心話ってやつをしてみたかったんだけどまぁいいか」

「魔龍？」

「そ。魔龍、意思すら失った狂った龍さ。翼を持つ古き友、まぁ昔からの付き合いがあるんだよ、僕達はね。別に仲間って訳じゃないけれど、それでも古い約束をあちらは律儀に守ってくれてるんだよね。だから手出しされない限りこちらも手は出さないようにしてるんだ。こっちも全盛期に比べて数は殆ど居ないんだ。うっかり返り討ちにあって全滅なんてやだもん」

「とはいっても恨まないでね、紅の龍さん。あの黒の龍はあちらから仕掛けてきたんだもの。今回くらいは見逃してね。君たちの王を襲ったのもまぐれだよ。信じるかどうかは関係ないよ。だって証拠がないんだもの」

「あーあ、結界を破るときにカメラが壊れなければなぁ。面白い映像が撮れてたと思うんだけどなぁ。あのあとヘルダ平原まで行ってカメラの残骸を見つけたんだけどやっぱり修復は無理だったよ。ざーんねん。ま、今回いろいろと面白い物が見れたし気分は上々なん

だよね、僕。此奴の出番が無かったのは残念だけどっ」

少年は懐からアークスだけに見えるように黒い球体を見せた

その艶やかな玉に男は見とれた

龍は何も喋らない

ただ鼻息が聞こえるだけで身動ぎ一つしない

なるほどな

先日起きたグレアント郊外、ヘルダ平原で確認された謎の黒煙と虹の雷光

かなりの距離がありながら、ファンダーヌからでも確認できる程の輝きだったという

夜の空に穴を開けるほどの巨大な黒煙が立ち上ったと聞く

二体の龍が争い、片方の亡骸が燃える時の黒煙だったとか

その事件の裏にも彼らがいたらしい

これは初耳である

後々彼らに聞く時間は山ほどある

その時にでも聞けばいいだろう

「それじゃ、バイバ――――」

「風王奏！」

少年が片手を女性から離して手を振ろうとした瞬間その腕をひょいと引っ込める

真顔で今度は青い髪の仮面剣士を見下ろした

「飛べるのが白髪だけだと思うなよ！！」

カイが手すりを蹴って聖天下十剣を振りかざした

その白髪というのはチルの事も入っているのだろう

グンとスピードを増すのかと思いきやすぐに勢いが落ちる

そしてそのまま水面へと落下した

ドボンと空しい音が会場に響いた

『撃退、撤退という結果』（後書き）

若干作者の地元の方言が入っていたりします。
もしかしたら気がつかないうちに入っていたりすることもあるかもｗｗ
聞き覚えのある人は作者と同じ県にいるかもですね～

『大会の幕切れ』

何故だ・・・・

何故だ・・・・

何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ

何故答えてくれない風王奏・・・・

また俺に、あの時のように苦しめというのか？

答えてくれ風王奏

何故、風を奏でてくれない

ゆっくりと沈んでいく体を立て直し、カイは水を蹴って浮上する

見上げれば不思議そうな顔でこちらを見ている男と翼の生えた少年と少女がいる

上昇を止め、こちらを見ている

だが何も起こらないのを見てか、三人は再び上昇して会場を離れていく

風を・・・・風を・・・・・

「くそおっ！」

カイは水を力一杯叩いた

正体も分からず、刃も立たない程の実力

片腕になったことで向こうはすでに深追いして居残ってくることも無いだろう

撤退の頃合いだけは分かっているようである

今此処で氷の魔術を放ったとしてもあの高さまで昇られてしまっては冷気も届かない

もし届いたとしても威力は格段に落ちている

逃げられたのだ

そう思うとカイは気持ちをゆっくりと落ち着けた

そんな時、水面下に何かが光った気がした

水面が太陽の光で反射したのかとも思ったがそうではないらしく、

確かに水中に何かがあるのだ

それがうっすらと赤い輝きを放ったのを見てカイは先ほど黒髪の少年、アヤキ・サクラが男の腕ごと宝玉を取り戻したのを思い出した

いずれ誰かが取りに行かなければならないのでどうせならすでに水中に落ちて濡れている自分がとカイはゆっくりと息をすって綺麗な水を両手で掻いた

お前達だけが飛べると思うな

その言葉からしてチルもあの仮面の男カイにも空を飛ぶ、あるいはそれに似た能力が使えたのだろうと推測した

彼自身の能力か、それともあの手に持っている聖天下十剣の力か

いや、恐らく後者だろう

風王奏、その名から察するに風を操る剣なのだと思われる

だが風を操って飛翔するする事なんて本当にできるのだろうか？

そう思ってチルは実際に自分は剣の力で空を駆ける事ができているのを思い出した

「ユディス・・・だいじょーぶ？」

「不快。不快不快不愉快っ。なんでまたあんな嫌な過去を穿り返してくれるのか・・・」

ユディスは無表情にそう言った

チルはそう言われて思い出す

前国王の妹であるユディスの過去から考えれば彼女が不快になるのも無理はない

自分もある意味関係している過去だ

「宝玉(アレ)のせいで一気に気分ガタ落ちよ」

「その割には・・・幻術から解かれても辛そうに見えないんだけど？」

そういうと何の表情も浮かべなかったユディスの顔に初めて初めて僅かに崩れた

その過去ではなく、まるで辛そうに見えなかった事に反応したようにも思える

「・・・所詮昔の事よ。別に、悲しかったけど、今でも引きずるほど辛くなかったってだけ。薄情かな私？」

チルはワンテンポ置いて首を横に振った

「そんなことは無いんじゃないかな」

「・・・そう」

「ぐ・・・う」

二人は咄嗟に後ろを振り向いた

どうやらホーカーもかけられていた幻術が解けたらしい

ユディスが歩み寄って手を握った

「大丈夫?」

「あ・・・あ。なんとかな」

そうは言ったものの、ホーカーを握った手が汗でじっとりしているのをユディスは感じ取る

別にそれを汚いなどと思うことはなく、むしろ彼も辛い思いをしてきたのだと思って手をしっかりと握り締めた

「術者が宝玉から離れると効果が薄まるのかね？」

「かもですね。みんなも徐々に起き始めている事ですしね」

効果が弱まるという確信はないが、術をかけていた男の手から宝玉が離れたことでゆっくりと術は停止の方向へと進んでいる

向こうが一人も欠けずにこの技を使われていたら、恐らくすぐに全滅していただろうという危惧はチルにはあった

そして宝玉も奪われていた

予想通り宝玉を奪いに来たわけだ

「来ると予想できていたうえに、これだけの手勢であんな数人の賊を取り逃がすとはね。失態も良いところよ。警備は十分に当てていたと思ったのだけど」

「いや、責任が有るとすればこちらにもあるな」

そう言って歩み寄ってきたのはアルフレアだった

いつの間にか割れた会場へと渡ってきており、その紅い髪が風に揺れる

凛とした顔でこちらを見ているが、彼女も幻術にかけられていたのが一目で分かった

多少拭った跡が分かるがそれでも髪や肌が汗で濡れている

大会が始まった当初はアルフレアを煌びやかにお嬢様のように見せていた深紅のドレスだったが、今となってはまるで戦場を駆けてきた戦女神なのではと思わせるような見せ方をしてくれていた

そんなアルフレアの前にチル、ユディス、そしてホーカーが膝をついて低頭する

「此度の失態、申し訳ない。我らが水の国アルデリア王国の地でこのような事に巻き込んでしまい大変遺憾であります。罰を言い渡したいのであれば責任を取って私に何なりと・・・」

「いえ、お気になさらずともよいです。顔をあげてください。そちらの戦力も、その個々の実力も決して他国に劣るものではありません。それならば我が国からもいくらかの戦力は連れてきています。各国の頑張りを私はこの目でしかと見ました。それでも危うく敵に軍配が上がるところでした。相手に引かせたのは皆の引かぬ志気と闘志を見せつけたことだと思っています。ですから決してあなた方のせいでは無いと思っていてください。少なくともこれはグレアント王国の王女である私だけの考えですけれど」

「・・・ありがとうございます」

顔を上げたチルだったがすぐにお礼を言いながら頭を下げた

「傷ついた体でよくやってくれました。警備体制に問題はなかった。ただ、良くなかった点をあげるとするならば、それは騎士達の、私たちの実力不足だったという事ですかね」

「返す言葉もありません」

「責めているわけではありませんが、まだあなた方にはもっと高みにのぼる力がその体に宿っていると思います。・・・・さて、ここでこんな話をしていても仕方がありません。警備にあたっていた者達や怪我人の治療を最優先に事態の収拾を。ここはアルデリアである事を承知ですが少しばかり私に事態の収拾の指揮を執らせて頂いても構いませんか？アルデリア王国、聖水騎士団隊長チル・リーヴェルト、並びにリーナ聖王国、翡翠騎士団隊長、よろしいでしょうか？」

「「はっ！」」

「自国の王女が出てきたら指揮権を渡してもいいのですが、さすがにまだエリエルにさせるのは辛いか。ファンダーヌの指揮権も一時私が預かろう。全員を纏める主な隊長職がいないからな。すまない、観客避難の為の指揮を執ってもらっていたシレンシス隊長を呼び戻してくれるかユディス」

「ん、あいよ」

すっと立ちあがって王女に対して普段通りの口調で話しかけながら自主的に真っ先に観客避難の指揮をとって居なくなっていたグレアントの騎士隊長を呼び戻すため、ユディスは会場を後にした

その場に残ったチルやホーカーは気がつけば紅炎騎士団隊長のシレンシス・ルーが場に居ないのに気がついた

シレンシスはアルフレアが会場へと戻ってきてすぐさま駆け寄ってきたのだがアルフレアに人員を纏める指揮権を授けて避難した観客達を誘導している騎士達の所へ走っていったのである

それに近くにいた彩輝や一条が気がつかなかったのは只単に、彼が気配を殺していたというだけのこととである

気がつけなかったのはチルやホーカーも同じであった

「それと、ラミア・シェークスの姿が見えないが？」

アルフレアがきょろきょろと周囲を見渡しているが、会場に戻ってきたときからその姿がないことに今更ながら気がついた

「彼女ならリーナの王女が心配だと医務室へ向かいました」

「あぁ、なるほど。本職ですしね。近衛ともなれば気にもなるでしょうが、重傷という訳でもなければ呼び戻して頂くとありがたい。何しろ人手が足りないしな。もう襲われる心配もないでしょうから。まぁ念のため医務室の護衛は紅炎騎士団の者を使いに出そう」

「はっ、すぐに迎えの者を送ります」

ホーカーがそう言ってお辞儀をした

「あぁ、そうだ。それが終わったらアルデリア城へと使者を送って欲しいのだが、その手配だけ頼む。書状はこちらで用意するので暫し入り口で待っていて欲しいと伝えてくれ」

すぐに少し手が空いている騎士を見つけ、その騎士にラミアを連れ戻すようにと言い渡す

ホーカーが去り、残ったチルへと向かってアルフレアは厳しい顔で言う

「聖水騎士団隊長(アクアサンタ)チル・リーヴェルト、傷が痛むか？」

「・・・大丈夫です」

「・・・・ふん」

「ぎぇっ・・・・・」

アルフレアが突如低頭していたチルの体を後ろへと蹴り飛ばした

もちろん軽く押すようにして蹴ったのだが、それでもチルの手負いの体には響いたらしくチルも変な悲鳴を響かせてこてんと尻餅をついた

その軽い衝撃でまた痛みが走ったのか「ひぎ・・・！」と、今度は悲鳴を堪えたようだがそれでも痛そうな声を漏らした

「フフ、その体でよく言えるものだ。その体で痛みを見せずに先ほどまで動いていたのが不思議なぐらいだ」

アルフレアはその顔に笑みを浮かべた

眠れるサドっ気が出たのかどうかは不明だが、楽しそうにアルフレアは倒れたチルを見つめる

よく見ればチルの服もかなり汚れており、男に水中へと叩き込まれたせいで水を吸って重く冷たくなった服がずっしりとチルの負担を増している

それが分からないアルフレアでもない

「医務室へ行って治療を受けてこい。シェルディという我が国の優秀な医師が居るはずだ」

今回アルフレアは彩輝達と一緒にゼルタール火山を登り、雲の上までお供し、無名の剣に魂を入れた張本人を同行させていた

理由はいろいろだが、本人の意思もあっての事だった

本人曰く、「彼の腕を見てみたい」と言い出した

その不自由な右腕を治したいと彩輝達が帰った後にアルフレアに言いに来ていたのだった

もし次の機会があるならば、との事だったが予想より早い再会になるだろうと思いながらも彼女の同行をアルフレアは許可した

そしてこちらに来てからはシェルディは力を存分に振るって大会負傷者の手当を手伝う補佐へと回っていた

医務室を任されていたのはアルデリアの、シェルディと同じような治癒の魔術が使える人であった

主だって動いていたのはそのメルベールという男であったが、シェルディも負けず劣らず、国をバカにされないほどの働きを見せメルベールを驚かせていたりもした

「あ、ありがとうございます」

普段は身分など関係ないかのように振る舞う両者も、今回ばかりは丁寧な口調でその会話を終えた

「終わった・・・の？」

「たぶん・・・」

突如として現れた黒い翼の一団と裏切り者は空の彼方へと消えていった

その後は妙な虚しさが残った

ボロボロになった会場に、その元凶はいない

なんだか世界が空回りしたかのように感じる

「アーヤん・・・手・・・振るえてる」

「・・・・」

彩輝は自らの左手を見つめた

左手に持つ小さな刀が自らの瞳を映し、その自分の瞳が揺れている

否、刀が振るえている

否、俺が振るえている

刀を振るっただけ

ただ、それだけ

それなのに、ぬるりと感じたあれは何だったのだろう

まるで本当にその刀身であの男の腕を切り落とした感触が左手に余韻を残す

触れてすらいないのに

残響しているかのように、震えが止まらない

咄嗟に右手で左手を押さえ込んだ

あそこで一条さんが俺を止めていなければ俺はどうなっていただろうか

男を殺していたのだろうか？

人を、殺していたのだろうか？

その仮定の未来という道を歩かなかった

選ばなかった

選んだ先のことは、永遠に分からない

ただ、この先この世界で生きていくことになる自分にその選択肢が再び現れないという保証はない

その時自分はどんな道を選ぶのか

迷わず答えを出せるようにしておかないといけない

そんな時はきっと、今回のようなとき

そんな時に迷うようでは、何も守れやしない

他人の命どころか自分の命でさえも・・・

分かってはいる

間違ったことはしていないはずだ

そう自分に言い聞かせる

なのに、なんでこんなに手が震えるんだ

答えは――――分からない

その謎は誰も答えてくれず

自分でも答えを出せないまま

アルデリア王国王都で開かれたアクリス武闘大会は誰にも予期せぬ形で幕を下ろした

「へぇ、そんな事が」

「あぁ、何でもその大会の後、西のセントノーラとエスタニアの動きが少し気になるところだが今のところ目立つことは何もしてきてはいないらしい」

「まぁ様子見、といった所だろう。あちらも下手に攻めてはシルカスやイリーユに狙ってくださいと言っているようなものだからな」

「だな。逆にこちらの動向を国を挟んだ遠くの二国も気にしているのは目に見えているから、まぁ動くのは難しいな。むしろ、内輪揉めになっても可笑しくはない」

「向けるべき目は内側か。同盟といってもどこまで通用するかな」

「まぁまさか下手に同盟が崩れることは無いと思うが、むしろ臣下の重臣達の方が反発というのもあり得るな」

「確かに。これを好機と見て反逆の旗を掲げられてはたまったものではありませんからな」

・・・・・・・・・・・・・・・

「本当に聞こえるのアーヤん？」

「ん、ばっちり聞こえる」

今、彩輝は壁に耳をくっつけて壁の向こうの会話を盗み聞きしていた

俺の返事に一条さんが苦笑いしていた

恐らく重臣達の誰かであろうが、廊下でこんな話をしていて良い物なのだろうかと少し警備を疑ってみたりする

部屋の外から聞こえる声に聞き耳を立てたところ、ものすごく綺麗に聞こえる

大丈夫かこの部屋？

この二人の声はやや歳をとった老人の声は彩輝の耳にしっかりと聴こえる

壁越しとはいえ、ここまでしっかりと会話が聴き取れてしまっていいものか・・・

聴いている自分が言うのもあれなのだが

すると会話が終わりの方向を見せ、足音がこちらへと近づいてきた

「やべっ！」

小声で叫んで足音を立てないように椅子へと急いで戻る

それと同時にドアが二度ノックされる

「そろそろ準備はよろしいですかな？」

先ほど聞こえていた片方の老人の声である

「あ、はい」

一条さんはそう言ってスッと立ちあがった

俺も釣られて立ちあがる

ドアが開かれ、二人の重臣が室内へと入ってきた

小さな客室だったが、それでも置かれているものはどれも素晴らしく綺麗なもので溢れかえっていた

「準備は整いましたかな？」

「あぁ、はい。お待たせしてしまって申し訳ありません」

「それでは行きましょうか」

部屋に入ったときは椅子や棚の彫刻に目を光らせてはしゃいでいた
一条さんだったが、今はそんな雰囲気は欠片ほども見せず、一人の
女性なのだと意識させられた

その身につけているドレスのせいか、それとも素の美しさが真っ白
なドレスによって強調されているのか

俺の目にはお淑やかな、まるで貴族の女性のように見えた

「ほら、行くよアーヤん」

「え、あ、はい」

つい見とれていた黒いスーツのような服を着た彩輝はそう言われて
席を立った

正直まだ子供の自分は身につけている凄い綺麗な服は似合わないと
思っていたが、一条さんは格好いいと言ってくれた

俺と一条さんが向かうのは5人の王女とファルアナリアの控える部屋

この二人はその使者というわけらしい

その部屋が何処なのかは二人は知らないが、とりあえず二人につい
ていけばいいだろうと歩き始めた

その途中、ドレスに慣れない一条さんは足下のドレスのひらひらに

引っかかって転んだとさ

「おい、ゴ。これでいいのか？」

「・・・・」

「はぁ、ったく、どうやってこの無言の奴に意見を聞けってんだよヨンの奴」

「・・・・」

丁度その頃、大陸の西方、３つの大国であるイリーユ、シルカス、フェーミリアスに囲まれた巨大な湖の畔

「あーあ、こんな事なら俺も混ぜて欲しかったなぁ、王都襲撃。あっちの方がこんな作業より楽しいに決まってんのによ」

「・・・・」

一人は長身の男

もう一人は小柄な少年

少年の方は大きな図が描かれた紙を広げ、長身の方の男は妙な機械を湖の岬の一つにドスンと置いた

妙なコードや銀色のパーツが飛び出したその機械の周りを落ちていた石で円を描く

その円で囲まれた機械に意識を向けてパチンと指を鳴らすと円の内側はゆっくりと黒に染まり、黒い闇の中に機械はゆっくり沈んでいく

それを二人は見守り、機械が全て闇へと沈んだあと男はもう一度指をパチンと鳴らす

すると闇は消え、後に残ったのは円の中に盛られたちょっとした土の山だけである

それを二人で湖へと落とした後、手を湖の水で洗い、引き上げるべく踵を返した

その姿を遠くで見つめる少年一人

二人は気づかず姿を消した

『吸鬼という存在』

「ふむ、失敗したか」

「申し訳ございません、ゼロ様」

「気にするな。所詮は陽動。手に入れられれば儲けと思ったくらいに過ぎぬ」

四人の吸鬼は低く頭を下げている

一人は男

一人は女

二人は子供の少年と少女

四人が頭を下げている相手は堂々と漆黒の宝石が散りばめられた玉座に座っている年老いた男

その男は他の吸鬼と同じように白髪であるが、その外見からしてみれば老衰によって自然に白髪になった老人のようにも見える

ただその玉座に座るゼロと呼ばれた老人の威風堂々たる存在感がそう思わせてはくれない

両手で杖を持ち、黒い服の上には同じように漆黒のマントを纏っている

顔の皺と見間違えそうなくらいに細められた目でジッと目の前の四人を見つめる

「後少しだったのですが・・・」

「別に良いと言っておるだろう。一つ取りこぼしたぐらいでもうチャンスがないというわけでもないのだからな。其処まで急ぐ事でもない。ここ数百年間は一つの宝玉の所在すら掴めなんだのだからな。ここに来て一度に五カ所もの宝玉の在処が掴めたのは大きい。焦らずとも宝玉は逃げぬ。むしろ守りに入り、逃げようという気も起きぬだろう」

「それでは次の場所を?」

「次か・・・。そうだな。黒の玉は手に入れた。紅を取りこぼしたがまだ猶予はある。分かったうちの他の三つを先に集める駒はすでに配置済み。イチの言うとおりならばもう南方の方は守りを固めている頃だろう。ならば少し距離を取って西を探して貰おうか」

カツンと持っていた杖で床を軽く叩く

すると床に魔法陣が広がり、術式が刻まれた魔法陣の円の中にこの大陸の巨大な地図が浮かび上がった

四人は立ちあがってその魔法陣を見下ろした

杖がスッと動き、地図の西側にある湖をコンと指した

「イレータ湖・・・ですか」

「この湖には神獣、虹魚が住んでいる。宝玉コレクションが一つ、翠玉は虹魚が守っている」

「神獣が守っていると？ですが神獣に我々がかなうとは思えないのですが」

男が不安を口にした

その事は此処にいた四人全員が思っていたことだ

神獣という神が我々人界の生物に手も足も出ないほどの力を持っているのは誰でも知っている

その中でも男は一度その光景を目の当たりにしている

同族とはいえ、レベルが違いすぎるのは分かっていたが、仮にもヨン、ゴ、ロクの宝玉の実験で強化された龍族である

それでも神獣、虹の不死龍を倒すまでには至らなかったのを男は見ている

なかなかに交戦してはいたが、溜めた魔力をできるだけ押さえよう

としていたのは目に見えて分かった

恐らくマナを人界に放出するために温存していたのだろう

あのまま少年が乱入してとどめをささずとも、虹の不死龍の実力ならば倒す事に問題は無かったはずだ

「確かに神獣の力がどれほどのものかは儂とて心得ている。だが、それはあくまで万全の状態の時だ。疲れ果てたときを狙えば可能性はゼロではない。この作戦が上手く作動すれば、宝玉が奪えずとも魔力を消費させることはできる。そうなれば結果として宝玉奪取の布石にもなりえる」

「作戦・・・？」

「そうか。まだ話はしていなかったな。今ゴとテンにその湖に仕掛けを施している。兎に角、周りの目を南へと向けさせる事でこの湖の異変に気がつく者も減ろう」

南、というのは自分たちの事を差しているのだと男は察した

なるほど。人が管理する宝玉より神獣が持つ宝玉の守りを崩すためにまずすべき事が目線をずらさせる事だったのだろう

あれほどの事件が起きれば周辺国家は嫌でもそちらの動向を気にするだろう

下手をすれば戦争という事も十分ありえるのだから当たり前といえ

ば当たり前である
その隙に湖に細工を施す

「ですが湖に細工を施すだけならば目線を南へと向けさせる意味が無いと思うのですが」

だが南へ向けさせることが本当に必要なのだろうかと男は疑問を持った

「神獣と一戦交えるのだ。それなりの舞台は整えねばならぬ。場所は必然的に虹魚の領地となる。それは我らにとっては大きすぎる問題だ。だが同時に見落としがちになるささやかな問題だ。それでも五分の戦いを挑むというのであれば、必然的に必要な事なのだ」

「一体何を・・・・何をする気なんですか?そこまで大がかりな事なのですか?国の目をそらす程の・・・」

「・・・話は追って伝える。今この場で話す事はこれ以上は無い。納得はいかぬだろうが四人とも下がれ」

「・・・・・・はい」

返事をしたのはイチと呼ばれる吸鬼のみで、残りの三人は大きく頭を下げて部屋を退室した

施設の廊下に重い扉が閉まる音が響き渡る
そして四つの足音が並んで反響する

「あんた・・・ゼロ様の前であんな自由な発言権は無いっての分かんないの？」

「黙れサン。悔しくねぇのかよおめぇは・・・」

静かに言い放つ男の言葉の中に、残りの三人は怒りが混じっているのを感じ取っていた

三つの足音の中で、一つだけ不揃いに急ぐ足音があるのも分かっていた

苛立っている男は暗闇の通路を進んでいく

施設の発電装置は全て止まっており、明かりは一つとしていない

だが生まれ持ったその目のおかげで明かりのない闇の中でも十分に見えるため不自由はない

「悔しい？あぁ、そうだね。結局は駒なんだよ私らは。それでも感情くらいは持ってるつもりさ。悔しいね。あぁ、悔しいさ。ゼロにしたら結局はどっちでもよかったのさ。こんな奇襲する訳はテンに任せておけば一人で全部やってくれたんだ。わざわざ私たちを使う必要はなかったんだ。本当に宝玉を手に入れたいと思うならば、ね。

本当に奪わせる気なら戦闘員二人、技術者二人なんてのはおかしな話しだと思ったよ。最初にね。だから其処までの苛立ちは無い。怒りはあるけどね」

「っていってもさー、結局はあの人は僕たちの恩人なんだしさー」

そこに少年が割り込んできた

そう。ゼロは恩人なのだ

行き場のないみんなを纏めてくれた

行き場のない者を救ってくれた

だから反抗できない

皆、心のどこかで彼には感謝をしているのだ

苛立ち、怒っている男にもそれは分かっているはずだ

だからこそ、助けて貰った自分たちの命を駒として使ったことに苛立っている

「僕とロクは感謝してるよ」

分かっていても、それでも感謝する者が居る

「だから駒でもついていく。其処に、怒りも悲しみも、同情も哀れみもいらない。ただついていく、使われる。全然構わないね、僕は」

「同じく」

ロクが小さな声で少年の言葉に同意した

「・・・・チッ」

男は舌打ちをして暗闇に浮かんだドアを開いてその中へと消えていった

バンと勢いよく閉められたドアにヨンやロクが驚いてびくっと肩を振るわせた

「いいんですか?イチさん放っておいて?」

「いいのよ。一日たてば忘れてるわよ」

力無く答えたサンはイチとは対照的に、静かにドアを開く

「それじゃ」

「あぁ、はい。お休みなさい」

「お休みなさい」

ギギィと扉が軋む

錆び付いた蝶番の錆がパラパラと床に落ちた

この四人には、まだゼロの考えるシナリオに気がつくはずもなかった

今回の事件で不信感を感じ始めた二つの因子

その因子にはゼロもまた、気がつかなかった

「・・・・ぅえぇ？」

開口一番、変な声が隣から漏れた

二人の重臣達に連れられ、謁見の間へと踏み入れた足が二人同時にぴたりと止まる

俺もまた、間抜けな声を出してしまいそうになるのをこらえる

それほどに予想もしていなかった光景が目の前にあった

まず其処には馬がいた

馬・・・・・馬!?

次に煌びやかなドレスを身につけた五人の王女とファルアナリアが
目に入る

だがやはり二人とも目線はその馬に釘付けとなっている

そしてその姿は純白の毛が美しく光りを反射して白にも銀にも見える

背中には純白の翼を

額には天を貫く鋭い一角

その時気がついた

これは、いやこの獣は

神獣・・・・!

度々話には出ていた一角天馬

「え・・・え!?」

一条さんもあっけにとられており、疑問の声が漏れている

対する俺は予想外すぎて開いた口が塞がらない

一体だれが予想できるだろうか

お城の扉を開けたら向こう側には神獣がいたなんて

「二人とも、こちらへ」

ファルアナリアはそう言って近くの机へ座るようにと目配せした

二人が我に返ると、やっとその場にはあと二人の人物が居る事に気がついた

湊千尋と佐竹幸男だ

二人もしっかりとした服装に着替えており、どこか現実世界ではないように感じさせられるオーラを発しているようにも見えた

だが黒髪黒眼が自分と同じ故郷の出身である証を見てなんだか安心している自分がいる事に気がつく

「どうも」

そう言って目上の佐竹さんの横に軽く会釈して席に座った

佐竹さんは伸び始めた髭をいじりながら「おう」とか言ってきた

一条さんは向かいの千尋ちゃんの横に座った

一条さんに千尋ちゃんが抱きつく
その艶やかな少女の髪を梳かすようにして撫でる

「さて、それでは全員揃いましたね。では、始めましょうか」

四人の王女もそれぞれ自分の席へと着席をする
一つの長い机は前回この場には無かったものであるが、この机はどこかで見たような気がする
そう、この長い机はたしか・・・
思い出そうとして止めた
匂いを嗅いだら良い匂いがしそうな気がした

「皆さんには今回は吸鬼に関する件、まぁこの間の騒動の事で集まって貰いました。数日はいろいろとあって皆さん集まる時間ができなかったので少し遅れてしまった感じは有りますが、とりあえずまぁ始めましょうか」

今回の招集は吸鬼と呼ばれる謎の集団の事についてであった
先日、会場を襲ったその少人数グループは四国の主要人物に対して危害を加え、どの国もそれぞれ痛手を負った

その程度でぐらつく国でないのは各々分かってはいるが、もし王女が一人でも欠けていればどうなっていたかは予想もできない

「そういえばウェルナンディア国王は居ないんですね」

彩輝は会議が始まる前にふとした疑問を投げかけた

こういう大事な話に国王が参加しなくて良いのだろうかと思っての質問だった

直接話したことは一度か二度しか無く、国王ではあるがあまり表に出てくるような人ではないようだというのは薄々感じている

「国王は現在破壊された会場の視察で不在です」

「そうですか」

「それではまず、そうですね。この四人に吸鬼とは何なのかを語る必要がありますね」

ファルアナリアはそう言ってクルリと背を向けた

一人立ったままのファルアナリアさんはふぅと一呼吸おいて話し始めた

「吸鬼、彼らは昔、この国をアグレシオン達が侵略を始めた頃からその姿を消していった種族です。かつては北方と南方の地を中心に繁栄していた種族でその共通の特徴は白銀の髪、そして漆黒の翼を持つ点です」

彩輝達はそれを聞いて会場を襲撃した男達の姿を思い出す

男はローブで姿を隠していたが、隙間から覗いた髪は白く、黒の翼を使って高速で飛び回るその姿は未だその脳裏に強烈に残っている

人間とはかけ離れている存在でありながら、その姿形はどう見ても人なのである

「最早噂すら聞かないほどに数を減らして絶滅したという噂の方が広がっている状況です。大体十人から二十人程の集団をつくって生活していたようですが、その膨大な寿命のせいですかね。繁殖能力は非常に低かったという文献が残っています。それに加えて絶滅を早めたとされるのがアグレシオン達との戦闘において大幅に数を減らしたからです。一時期は龍族や私たち人間とも手を組んで戦闘の場に出てきていたようです」

「それはどうしてですかね？」

一条さんが手を挙げて質問した

その質問にはアルフレアが答えた

「吸鬼達はアグレシオン達の行う侵略という行為が気に入らなかったらしい。アグレシオンと吸鬼の代表でも話し合いの場が持たれたらしいがそこでも両者は決裂しているそうだ。彼らはプライドや誇り、契りや約束事などをとても大事にする種族であった。それ故に突如現れたアグレシオン達が領地を無条件で渡せと言い寄ってくれば、そりゃ怒るのも分からなくはない。当時は小さいながらも吸鬼のグループの縄張りをそれぞれ国として扱っていたと聞く」

へー、と一条さんと佐竹さんが揃って声を発した

そのアルフレアの解説の続きを今度はセレシアが続けた

「吸鬼は一人一人の能力が高かったそうですが、それでもアグレシオン達にはなかなか苦戦したそうです。そこで人と魔獣と契約を結び、アグレシオンを迎え撃ったそうです。ですがその能力の高さからか、やはり前線に立たされる事が多かったそうです。見殺しや犠牲となった吸鬼の数は少なくなかったらしくて、それ以来吸鬼の方から人間への干渉が減ったそうです。北も南も」

「それって使い捨てって事か？」

佐竹さんが聞いた

今回の騒動に佐竹さんはあまり関わっていない

それでも何故この会議に積極的に参加しているのか

普通なら話しについて行けないはずだと思いながら彩輝はその佐竹さんへの回答が誰の口から出るのかと当たりを見渡した

「そうだな。そういう事になるな。うん。人は吸鬼、そして魔獣を使って（・・・）戦争をしていたようなものだ。それでも、大陸の多くが制圧された。人間もまた多くの犠牲を出した。吸鬼は魔獣との簡単な意思疎通ができたらしい。人間は吸鬼の誇り、そしてその能力を使って上手く吸鬼達や魔獣を操っていた卑怯者かもしれない。それでもこれほどの被害をうけた事からそうとう凄まじい戦争だったのだろう」

「かわいそう・・・」

アルフレアさんがそう言って腕を組み、ピンと伸ばしていた背を椅子へと凭れた

千尋ちゃんがそう呟き、アルフレアは「少し突っ込みすぎたか。すまん」と千尋ちゃんに謝った

千尋ちゃん自身は何故謝られたのか理解できているのか理解できていないのかは定かではないが、隣に座る一条さんの裾をしっかりと握っているように見えた

周囲が一瞬、静まりかえった

「さて、そろそろ簡単な説明は終わりましたし本題へと移りましょうか」

妙な空気になってしまったが、ファルアナリアさんがそれを上手く立て直す

それと同時に一人、遂に来たるべき時が来たと肩に力を入れる者がいた

王女達を色で表すなら、彼女は黄色だ

だがその彼女の色さえくすんで見える気がする

その周囲にまるでトーンがかかっているかのように重苦しい雰囲気が見て取れる

「あの、本題に入るのはいいんだけど、その、なんだ。あちらの白馬がとっても気になるんだよね。うん」

俺も同じく気になる！という顔でコクコク頷く

やはりあれは気になる。というかそっちの説明もしてもらわないと話に集中できない

神獣っぽいってのいうのは何となく分かるのだが、やっぱりそれでも何故ここに居るのかの説明とかしてもらいたい

「そうですね。それも先に話しておきましょうか。こちらは北方の地を守護している神獣の一体、一角天馬であり、吸鬼とは別件ですが、これまた耳に入れて欲しいことがあるとわざわざ遠方からおいでくださいました。この話は後ほど、吸鬼の件の報告の後に」

「あぁ、はい。おっけー。了解」

一条さんはとりあえず保留ということで納得して視線を白馬から卓上へと戻した

俺もあまり気にしていては会議にならないと意識を切り替える

それからの会議で吸鬼の件についての被害報告やお金の遣り取りがあった

吸鬼の襲撃の責任はどの国にも無いのは分かり切っていることであり、これが誰かの手引きによって引き起こされたことではないというのも全員が承知しており、また信頼している

ただそれでも四つの国の王女が誘拐され、生命の危機が迫ったことはもはや口止めできない事も確かである

すでにこの大会で何が起こったのか、大まかな事柄は各国の騎士達も知っていることであり、噂の一人歩きも僅かながらに聞いたりする

それはこの王女達だけの中でごめんなさい。許しましょうなんて言葉で済まされる事では無いのも当人達はよく分かっているのだ

話の詳しい内容はよく分からなかったが、それでも分かったことがいくつかある

まずアルデリアが三国に賠償金を支払った

アルデリアがこの事件を引き起こした訳ではないが、警備体制が不十分であったことなどを理由に自ら支払った

国王と財務関係の文官には事前に話が通してあったため、この支払いは国内でも了承されているので勝手に決めたりというのでは無いらしい

次にファンダーヌからも賠償金が三国に支払われた

こちらは事件に巻き込まれた側ではあるが、裏切り者を出してしまい、被害を拡大させてしまった事に対する賠償金である

この賠償金は負傷した人員の数や警備や戦闘で奮闘した者達を考慮して計算されたものらしい

結果としてリーナとグレアントは得をしたと言えなくもないが、優秀な部下が怪我などをして医療費や実務における損害が出てしまうそれを引いても余るほどのお金の遣り取りがあったわけだが、グレアント、リーナと両者とも喜ぶような事ではないために真面目に公務を果たしているようにみえた

王女とはいえ、２０歳を越えている者は一人としていない

最年長は１９歳のエリエルで、最年少でいえば双子の姉妹リリアと

ルアの１０歳である。流石に千尋ちゃんよりは歳が上であった

とはいえ小学四、五年生というレベルでよくこんな国同士の遣り取りに参加できるものだと彩輝は感心しながらその会議を聞いていた

ちなみに途中から、というか最初から話しについて行けない千尋ちゃんは一条さんに膝枕をしてもらって寝ている

会議の会話が子守歌にでもなったのだろうか

まぁ分からなくもない。高校でもつまらない授業では先生の声で眠る生徒が多々いたからな。俺もまた同じく・・・・

そんな感じで会議が終わる

そして会議の終わりと同時に聞き慣れない足音がゆっくりと近づく

「初めまして、だね」

虹龍とは違い、一角天馬は口を開いて話しかけてきた

口と声の動きが連動していることに俺は疑問と感動を覚えた

『吸鬼という存在』（後書き）

なかなか学校の方が忙しくて執筆時間がなかなか取れなくて少し遅れてしまいました。
まぁいろいろと左右されるところも有りますが、更新できたりできなかったり、ここしばらくはかなり不定期な更新になるかもしれないのでご了承ください。
第二部も後恐らく一話の予定。あくまで予定

『9人の囚人』

「おら、早く外せ！」

「はっ、はい！！」

ガチャリと外れた手錠が床へと落ちる

同時に足枷の鍵も外され、それも同時に床へと落ちた

そんな音が周囲でいくつも聞こえてくる

「ククッ、錠無しってのも懐かしいようで不思議な気分だ」

男がそう笑うとズラリと並んだ鋭い歯がむき出しになる

これまでこの牢獄に入れられてからは一度も外されることの無かった手枷が外されるその開感じはこれまでに男が味わったことの無いような開放感であった

その開放感と高揚感を男はゆっくりと噛みしめる

「はっははは！自由だ！！自由だ！！」

「大人しくしろ、ガイ」

「何だよ、うれしくねーのかよおっさん？俺は最高にハッピーだ！！」

そしてガイと呼ばれた男がクルクルと回り、その喜びを体全体で表現している

ガイ・キリクの周りでは続々と他の囚人の手錠、足枷が外されていく

端から見れば、ここが本当に刑務所なのかと目を疑うような光景だ

それも檻の外でだ

普通ならあり得ないことだ

「全く、世の中何が起こるか分からんものだな」

そんな光景を見て囚人の一人、レクティアス・アートが呟いた

若い青年で、囚人服があまり汚れていないことから刑務所暮らしがまだそんなに長くないことを表している

そしてガイにおっさんと呼ばれた中年の男は僅かに伸びた無精髭をゾリゾリと触っている

この男の囚人服は一番汚れており、男の体臭を吸った囚人服が僅かに異臭を放ち始めている

「自由、か。俺は自由を奪う人間だったからな。自由を奪う人間が自由にしようっていう此奴等の目的がこれまた異界の自由を奪う事・・・か」

「ジンよ、気を落とすな。それがお前の定めだ。誰にも変えられない、お前だけの運命だ。素直に受け止めることだ」

己の運命に僅かに暗い表情をみせたジン・バグラムントであったが突如横から声をかけられた

今この場に集められた囚人の中でも最も異彩を放つ男がいた

その顔には仮面がつけられ、半分は笑いを、半分は怒りの表情をした面であった

白と黒だけでつくられた面はピッタリと男の肌にくっついており、これまで誰もその仮面の下の素顔を見たことが無いという

此処にいる監守や囚人達も一度としてその素顔を見たことがないという不思議な男、それがクロノス・ルーベであった

「これより皆様武具、衣類をご返却致します。ですがもしこの部屋から脱獄しようとしても不可能ですのでご了承を」

監守の一人がそう言って他の看守達が持つ衣類や衣服を一人一人渡していく

「やっと帰ってきた・・・」

真っ先にそれ受け取ったゲッカは手渡された大鎌をぎゅっと抱きしめる

それぞれ捕縛された時に身につけていたものであり、通常ならば釈放された時に返されるものである

ただでさえ凶悪な囚人にわざわざ武器なんて持たせれば、脱獄なんて5分もあれば十分すぎる程だろう

それぞれが部屋に備え付けられていた個室で着替えを済ませ外へと出てくる

「やっぱりこの部屋は能力使えなくなっているらしい」

一人の女がつくった握り拳をジッと見つめている

「へぇ、“聖炎”ですらこの部屋じゃ無力化されるのか。これは面白い結果だ。術牢石がこれ程集まれば触れていなくても効果は増幅するのか。確かに僕の“分析”も使えないみたいだな」

クーフォロンドはクスクスと笑いながら部屋の構造に興味を持っていた

術牢石は全ての人間が持つ全ての特異能力を封じる力がある石である

この術牢石は囚人達の手枷や檻となりその能力を封じている

とはいえ希少なものであるため、石が本当に必要になるこの監獄に殆ど集められている

それでも建物全てを覆うほどの石は無いため、こういった限定的な拘束道具や一部の部屋などに使われている

「お前がそう呑気に研究しているのを見ていると、どうも研究のために牢獄（ここ）に入ったように思えてくるよ」

“聖炎”、ベス・ルチルテシアスはそう呟いて隣で目を輝かせている男を見て呆れた物言いをするのを聞いてクーフォロンド・アルトカードは下がりかけた眼鏡をくいっとあげる

「そんな訳無いじゃないか。刑務所に入っちゃったら実験なんて殆ど出来ないだろう。まぁ、おかげで長時間の構想期間が出来た訳だ。

これでは短い時間でしか発想しなかったからかな。いろいろなアイディアが泉のごとく湧き上がってきたよ。まるで脳が破裂してしまいそうだ。早く実験をしたいものだよ」

「あー、そうだな。・・・・・こいつ釈放したらマジでやばいんじゃねぇの？」

ベスは面倒くさそうに相づちを打ちながら、隣にいたレクティアスにこっそりと話しかける

この男の探求心は後にこの世のすべてを解析してしまいそうで怖いとレクティアスは答えた

そう答えたレクティアスの後ろにはジン・バグラムントがいた

ジンは囚人の一人、最年少である少女に話しかけていた

その少女の歳はまだ6歳か7歳か

どちらにせよ場違いな歳である

手に返された、獣をかわいくした人形を持っている

所々継ぎ接ぎでクーフォロンドの肌を思い出させた

それでも一部から綿が飛び出しており、その生地もかなり汚れている

その少女はジンが身につけたマントの中にするりとはいると足にぴったりとくっついた

足の後ろに隠れ、顔だけをこちらへとのぞかせている

名は確かレム・チェルツだったか

ここに居るのはすべて第一級犯罪を起こした囚人である

自分の後にこの牢獄に入ってきた囚人で口数もほとんど無い少女である

何をしたのかは知らないが、よっぽどの事をしでかしたのだろう

子供だからといって許される範囲を超えた何かを

それを自分が詮索するのは何か違う気がする

まぁ何故こうも自分以外の同姓の囚人がここまで無口なのかとベスは思った

ゲッカ、レムは殆ど口を開くことがない

開いたとしてもほぼ単語や短文であり、まともな会話なんてしたことも無い

「ところでよぉ、ずっと気になってたんだけどさ、あいつ、何？」

突如ガイが口を開いた

その声は静かに部屋に響いた

皆口を閉ざしてガイの指さす先に立つ人物を見る

骨格からして男、だろうと思う

だが見たことも無い顔だ

前回集まったときには居なかったはずだ

それは全身を真っ黒な布で覆っている

布の隙間から覗く双眸は真っ赤に充血しているように見えるほどの深紅だ

その黒い布を凝視してベスは気がつく

――違う、布が黒いんじゃない！

よくよく見ればその布は至る所が滲んでいる

血だ

あれは布に染みこんで変色した血だ

「あぁ、そうか。皆にはまだ説明していなかったね」

一人の男が部屋へと入ってきた

その男は前回八人の囚人を集めた張本人であり、この監獄のボス
男はポケットに両手を突っ込んだまま、猫背なのか僅かに背を丸めて話し始めた

「彼は“千里眼”だよ」

「“千里眼”だと!?」

レクティアス・アートが咄嗟に受け取った剣を鞘から抜こうとしただがそれをグッと堪えると、鞘から半分ほど出ていた刀身を戻した

“千里眼”の事なら誰もが知っているであろう

だが誰も見たことがない謎の人物

すべてを謎に包んだ存在であり、名前も性別も年齢も、何もかもが分からない中で唯一分かっていることがその能力

“千里眼”

すべてを見通し、すべてを奪う魔眼

「まさか本当に居るとはな。それに投獄されてたとは驚きだな」

徐々に張りつめた空気が解けていく中、ジンが最初に口を開いた

確かにこの“千里眼”が投獄されていることを知っている囚人は居なかった

殆ど伝説のようなものだ

“千里眼”という能力の事だけを皆は知っている

だがその能力者本当に居るのか、どのような能力なのか。それすら分からない程謎な存在なのだ

能力者は現代に生きていて、さらには投獄されていたなどと知るものが果たしてどれほど居ただろうか

その“千里眼”はぴくりとも動かず、ただただ虚空を見つめている

その目に何かが見えているのか

ただただ不気味を感じさせる

「何故生きている・・・・“千里眼”・・・・。貴様は・・・・」

レクティアスは刀身を鞘に戻したがまだ警戒を解いていないようで、剣の柄をしっかりと握っていた

何かを知っているのだろうか？

「レクティアス・アート。少し黙れ」

レクティアスはキッとクーフォロンドを睨みつけた

目線をずらし、クーフォロンドを睨みつけるレクティアスであったがその上から目線な発言にも多少苛立ったかもしれない

何しろこんな牢獄にいれば精神を保つだけで精一杯な場所だ

ここでは刑期を終えて出る者より、狂った人間の数が多い

それですら第一級犯罪者はどいつもこいつも精神崩壊していないだけでその異常さが伺える

クーフォロンドはそんなことはどうでもいいという顔でここのボス、ゴーン・ゴゴーンの方へと向き直る

きらりと眼鏡に光が反射して彼が今どのような顔をしているのかベスからは見分けがつかなかった

「この“千里眼”、同行させろというおつもりですかなゴゴーン殿？」

そうだ、この場に居るということはつまりそういうことになる

「その通り。彼の同行も頼むよ。もっとも彼は減刑のために行く訳じゃ無いがね」

「・・・ここにいる囚人は少なくとも人としてまともだ。人として扱うことが出来る。だが、こいつは違う。そうだろう」

「というと？」

「人でも、獣でも、魔物でも、悪魔でも無い存在だ。そうだろう。確かに人という体をしている。この世に生を受けている。だが、この世界には無い存在だ。そうだろう？たとえる言葉すらこの世には無い。そんな存在だ。強いて言うなら――――神」

「ふふん。面白いな科学者クーフォロンド。君の推理は半分ほど当たっているかもしれないな」

「理を超えている。こんな存在に名前をつけることが間違っている。そうだろう？だがこれまた強いて言うなら――――無とでも読んでおこうか？」

「面白い見解だ。まぁあながち外れてはないんだがな。こいつは少々、いやかなり特殊な存在であるのは確かだ。見ての通り彼は人の形をかたどっている。だがそれはこの布のせいだ。布の中身がどうなっているのかは知りたくもないが、そこには確かに何かがある。心、精神、魂、意思。まぁそれが彼を人の形に留めている。それを無とするか無としないかは解釈の仕方によるな。物体であるかどうかはこの際関係ないんだが・・・」

「なるほど。他にもいろいろ聞きたいが、ともかくその核はどこか

ら持ってきた。ゴゴーン」

「ふむ。確かに君は理解が早くて助かる。だが別に私が持ってきたわけじゃぁ無いからね。これが言うには彼は外れた存在らしい。全てから外れ、グチャグチャに混ざり合った・・・とね。まぁ詳しいことは私も知らないんだが、ここに投獄されているのは只単に危険だったからだ」

「危険、とは？」

「さぁね。説明を聞いてもさっぱりだと思うんだが、この世の全ての生物との干渉をできる限り控えないと不味いらしい。どうもこれの核は一つではないらしく、いや、一つだけどそれは複数の核の融合体・・・だったかな。私に意思を読み取ったカーン君もどう説明して良いか分からないらしくてな。ただ、できるだけ他人との接触は控えて欲しいとだけ言われている」

「ここのメンバーに関わらせていいのかよ？」

クーフォロンドとゴゴーンとの理解不能な会話にガイが割り込むようにして話しかけた

「まぁ、ね。その変のことは気にしなくていいんだよ君たちは。さて、続きで聞きたいことは？クーフォロンド君」

「・・・・・無い」

「そうか。他に何か聞きたいことがある者は？」

ゴゴーンがそう聞いて周囲を見渡す
無言でジン・バグラムントが手を挙げた

「どうやって帰ればいい」

「あぁ、それを言い忘れていたね。一ヶ月だ。一ヶ月後に再び扉を開かせよう。さて、あ、もう一つ言い忘れていたけど気づいているよね。今回レテスタにはチームから外れてもらっている。まぁどうでもいいんだけど」

「そういやいねぇな」

「ほっとけほっとけ」

「んじゃぁそろそろ扉を開いて貰うとしようか」

「まぁまて、有名所が揃っているとはいえ、とりあえず自己紹介ぐらいはしておいた方がいいんじゃないか？」

「・・・それもそうか。では私から。“分析”、クーフォロンド・アルトカードだ。よろしく頼むよ」

「“聖炎”ベス・ルチルテシアス」

「レクティアス・アート。能力は“勇者”」

「想像つかないねぇ“勇者”なんて能力。肩書きの間違いじゃねーのか？ちなみに俺は“懐柔”ジン・バグラムントだ。暫しよろしくだな」

「レム・チェルツ・・・・“夢幻”」

「ゲッカ・シルクロード。“月殺”」

「綺麗所がつれない挨拶だねぇ・・・。おっと、俺はガイ・キリク。“鬼化”だ」

「クロノス・ルーベ。“時操”」

「最後が彼、とりあえず――――――」

最後にゴゴーンが“千里眼”の名を告げた

「っはぁ・・・っはぁ、親方ー、この火薬は此処でいいんですか？」

「おう、それが運び終わったら休んで良いぞリク」

「うっす」

およそ１５、６前後だろうか

一人の少年が大きな木箱を倉庫のような場所へと運んでいる

倉庫と言っても木組みの簡単な家のようなもので雨風をしのぐくらいにしかならないような場所だ

木箱を倉庫の奥へと置き、うっすらと額に浮かんださわやかな汗を腕で拭うというより振り払う

「っはー、休憩休憩」

少年は倉庫の外にどっしりとある平らな石に腰を下ろす

両肩から先の服は破れており、筋肉質な腕が見える

少年は石の裏に置かれていた自分で調合した火薬を入れた袋を慎重に持つ

そしてそれを石の上に置いた

もう一つ、、今度は服の中から布きれを取り出す

火薬を丁寧に布の上に振り掛ける

「まったお前はそんな遊びをしてんのか？」

「あ、親方。だから違うって言ってるじゃないですか。俺は新たな火薬の使い方を研究して――――」

「ふーん、まぁこの辺でそれをぶっ放すのだけは止めろよ。倉庫の火薬に引火したらこの辺全部吹っ飛ぶぞ。あ、そうそう、お国の魔術師は数日後に到着だそうだ。変な真似すんじゃねーぞ」

「あ、はい。もちろんです親方！確か倉庫に耐火と防水の魔術をかけてくださるとかでしたよね？」

「あぁ。去年は成り立ての小僧が来たせいで一年しか保たなんだ。今年はもう少しまともなのをよこしてくれるそうだ」

「良かったですね親方」

「・・・そのはずなんだけどな――――」

なんだか妙な胸騒ぎがすんでぇ

親方はその言葉を飲み込んで目の前に広がる巨大な湖を見つめた

水面は風によって騒ぎ出す

「リク、その火薬のお遊びが終わったら戻ってきて調合手伝えよ」

「うっす親方！」

親方はゆっくりと倉庫の方へと戻っていった

危険な火薬を扱う火薬師の勘は遠からず当たってしまうのである

『9人の囚人』（後書き）

『氷溶けて頬伝う』（前書き）

3／17　最後に一部を追記

『氷溶けて頬伝う』

会議が終わったのは丁度昼過ぎであった

異世界人である俺たちとこの世界の王女5人、そしてファルアナリア王妃との食事会が始まった

食事中の会話では俺たちの世界の事で盛り上がった

科学が発達していることや魔法が無いこと

乗り物の事や食べ物の事

大陸のことや世界の事など、話題は止まることなく溢れ出てきた

そんな楽しい食事会の最中、気がつけば顔が紅潮している事に気がついた

いつの間にか体の中に熱が溜まっていたようである

冷たい手で頬を触れると、指先へと熱がじんじん伝わってくる

少し夜風を浴びたいと、まだ残っているメンバーに告げて部屋を出た

部屋に残っているのは大抵が酒飲み達であり、千尋ちゃんは就寝、リーナの王女二人も部屋へと戻った

一条さんと佐竹さんはよく分からないことで意気投合、アルフレアさんとセレシアさんを巻き込んで酒飲み大会へと発展した

部屋の中はものすごいお酒の匂いで充満していたのもあったので年少組は早々に退却してしまったのだ

大人なファルアナリア王妃とエリエル王女も二人で何か会話をしているようだったがよく分からない話だったのであえて割って入り込む事はしなかった

「ふぅ、涼しいなぁ」

城内ではあるが、およそ中央にその中庭はある

四方に外と繋がっている場所があり、そこから風が通り道としてここを流れている

中庭には草木が生えているが、見せ稽古などに使われるのか一部砂しかない場所があった

「確かアヤキと言ったな」

「え、・・・あ、カイさん。こんばんは」

そうして中庭を見下ろして夜風に当たっていると、突如後ろから声をかけられ振り返った

先ほどの場には居なかったが、カイ達や騎士達は別の場所で食事会を開いていたらしい

大会の参加者で一番目立って走り回っていたのはカイだけのように見えたがどうやらそうでは無いらしいと後から話を聞いている

大会参加者の多くは避難する客の護衛や誘導を騎士達と行っていたらしい

まぁ要するに裏方のお仕事だ

それというのも避難と同時に待機していた一般参加者にも避難するようにと命令が出ていたからである

まぁ参加者の安全も考えてと表沙汰に言っているが、それだけじゃないというのは何となく分かるつもりだ

それを言わないのは参加者の反感を買わないようにするためだろう

その時のカイその指示を聞くより先にどこかへと消えてしまっていたため伝えられず、そのまま戦闘に参加してしまったそうだ

「冷えるなぁ。まぁ火照った体を冷やすには丁度いい。頭がスッキリしてきた」

お酒でも飲んでいたのだろうか、彼の顔は真っ赤っかだった

僅かに先ほどの宴会場と化した部屋の匂いを思い出す
カイの周囲からも同じような匂いを嗅ぎ取ったからだ
城内という事で武器等は一時預かられているそうで今のカイは無防備であった

「なぁ、一度試合してみないか？」

「え？」

だからこの提案というのはとても予想外の事だった
え、何で？徒手空拳？柔道？やるか？

「お前の力が見てみたい」

「・・・・」

俺は返答に困っていた
酔っ払っているし、とはいえ断る理由も無い
暇ではあるのだが、酔った状態であの人が俺と戦いたいと言ってくる理由が分からなかった

「何故？」

「理由か。そうだな。何となく、では駄目か？」

理由無し？んなわきゃねーだろとか思いつつも了承する自分はつまり退屈だったのだろう

「・・・良いですよ。別に。でも獲物は？もしかして素手で？」

「フフ、そこの所は心配ない。風王奏」

カイがそう静かに呟くと、スッと剣がカイの腰に現れた

「え、どうやって・・・」

「なぁに、此奴の能力を少し使ったまでだ。気にするな。試合に風王奏の能力は使うつもりはないから安心しろ。あと魔術の方も使わない。己の力で勝負しよう」

「酔った状態でですか？酒臭いですよ」

「歳のハンデだと思え。ハンデだと・・・よっ」

カイはそう言って目の前の壁を乗り越えて中庭へと飛び降りた

流石に彩輝は飛び降りる自信が無いので歩いて階段から中庭へとおりる

酔っているとはい、二階から飛び降りる身体能力と意識はハッキリしているのだ

「これはちょっと勝てる自信ないなぁ・・・」

そう呟きながらゆっくりと息を吐く

彩輝は例外として城内でも帯刀を許されている

己を守るという騎士達とは別の理由での帯刀だったが、この手合わせで抜いて良いものかと少し迷いを見せつつ剣を抜く

この帯刀が許されているのは信頼の証であり、あちらがこちらを疑っていないからという意思も含まれているだろう

良くないと思う輩は大勢いるであろうが、それでも許可されているのはセレシアさんとファルアナリアさんのおかげだと思っている

まぁ城内で抜くことは無いと思っていたのだがまさか自己防衛でない理由で剣を振るう事になるとは思っていなかった

木刀ではなく、真剣を使うことに多少の抵抗はある

それに向こうは酔っている

「恐いなぁ・・・」

「フフフ、俺にはお前が3人ぐらい居るように見えているが大丈夫だ問題ない。酔っていない」

「酔ってるだろ!!」

「命奪わぬ程度の意識を保てているぐらいの酔いだ。大丈夫、酔っていない」

「酔ってますって・・・」

ある意味本当に自己防衛の為になりそうな気がしてきた・・・

「まぁいいや。始めよう」

「・・・いいですよ。ソーレ、下手したらごめんな」

自分が下手に扱えば痛みを伴うのもソーレだ

剣に宿して欲しいと頼んだ以上、最低限この短刀に対して無理はさせられない

「おや、君の剣にも名前があるのか。それもまるで本当に生きてい

るかのように話しかけるんだな」

「生きてるんですよ。ソーレは・・・っ！」

大地を蹴った

カイも剣を構える

避ける気は無いのかどっしりと腰を落として剣を受けるつもりらしい

カイの身長はおよそ１７５～１８０程だと思われる

試合中にはあの鉄壁の守りを誇ったホーカー・セインを相手になかなかの立ち回りをして見せていたらしい

そのとき俺は医務室に運ばれていて見ることはできなかったが凄い試合だったらしい

ただ結局その守りを抜けなかったというのも聞いている

小手先でも、力でも負ける

そんな相手に勝てるとすれば、恐らく意思

引かぬ負けぬ臆せぬその不屈の闘志

「酔っぱらいに負けてられるかっ！！」

切っ先が風を唸らせる

ヒュンッ

「むっ」

振り上げたソーレが風王奏に弾かれる

「やはり切れぬか」

「だぁっ！！」

突進の勢いを殺さぬまま一太刀入れ、そのまま再度大地を蹴った

だが今度は前にではなく上に向かって土を蹴り飛ばす

グルンと回転した体にカイは咄嗟に次の攻撃を察知して防御の態勢をとった

一瞬遅れて俺の右足が物体を捉えた

だがどっしり構えた巨体を数センチ動かせたかどうか

反対に自分の体は反動で大きく後ろへと飛ばされた

「この程度か？」

着地と同時に地面の土を靴でえぐり取った

先ほどから地面の感触を確かめていたが、予想通りあまりに固まった地面ではなかった

抉られた土礫はカイの仮面めがけて飛んでいく

防御の姿勢を解いたカイの仮面に土が砂埃をつける

「土・・・？」

仮面に張り付いたものを確認するようにして手を触れるカイはすぐさま剣へと手を戻した

――――――いない？いや・・・

カイは咄嗟に周囲を見渡した

彩輝の姿を見失ったカイはすぐさま周囲の魔力の流れを感じ取る

先ほどから彩輝が立っていた場所から上空へと風のマナの残滓が僅かに感じられた

「上かっ！？」

カイが上空へと視線を向ける

が、そこには空しく天井しか広がっていない

「もらったぁ！」

突如目の前の空間が裂けた・・・ように見えたカイは仮面の下の表情を歪ませた

一体どんな魔術を使った？

幻視の魔術か？いや、そんな素振りは無かったはずだ

咄嗟にガードを取ろうとするが振るわれた短刀はすでに射程距離に入っている

近い・・・っ！！

彩輝も最初はこの魔術を使う気は無かった

確かに制限はされなかったし、魔術も含めて実力を見たいという意味も含めていっていたのかもしれない

大会が終わり、一人で編み出した新技をこの場で試すのはどうかと思った

最初は使おうかと迷っていた

でもやはり卑怯だと思う思いがあった

相手が使わない以上、自分が使うのはフェアではないという思いがあった

だけど彩輝は早くこの試合を終わらせたかった。いや、終わらせたくなった

こんなもの試合じゃない、と

それでも通用するかどうかも分からなかったが、心急く気持ちが彩輝に技を使わせた

彩輝はこの技に名を付けている

神隠し・【襖】と

自分で編み出したかといえばそうでは無いが、ソーレという炎の短刀が斬りつける際空間が開かれるような現象が起きる事に気がついたのである

まぁ全くの偶然の産物ではあるのだがその効果は異常であった

僅かな隙間ではあるが、そこに入ってしまえばこの世界とは僅かに隔絶された空間に入り込むことができるのである

もちろん相手からは見えない

蒼天駆という剣が空間を切り取っていたことを思い出す

この原理や条件などはまだよく分かっていない

編み出したとき相談したチルさんにも、師匠であるユディスにも多用しないことを進められた

それは何となく直感的に自分でも感じていたことだ

だから技の発明に自分は惑溺して舞い上がることはなかった

むしろ恐怖を感じたくらいである

だから抵抗はあった

だが迷い無く使った

そこに後悔は無い

ただ、終わらせたいと思っただけである

ソーレの峰がそのままカイの横を飛び抜けた自分と一緒に彼の腹部を強く強打した

ふわりと一瞬カイの体が浮いた気もしたが、両者ピクリとも動かずにその場に制止する

だが彩輝がソーレをカイから離して鞘へと収めるとカイは両膝をついた

手から滑り落ちるようにして風王奏が地面へと落ちた

柄がこちらを向いおり、落ちた剣は軽く自身の重みだけで地面へと突き刺さった

「俺は・・・なぁ・・・」

カイアが膝立ちのまま喋り始めた

彩輝はカイの斜め後ろでそれを聞く

「この剣の為に・・・自分の村を殺した」

「昔から俺は村では子供で一番と言われるぐらいに剣が上手かったんだ」

「ある時村にな、山賊が押し入った。曇り一つ無い良い天気だった」

「だからだろうな、村の半分以上の男は街や森へと出かけていた」

「そりゃぁ酷い殺戮だった」

「村の守り刀、此奴を使えば・・・と思った」

「村を助けるために、みんなを助けるために・・・と思った」

「だけど、駄目だった」

「俺は生き残って、家族は死んだ。母も、妹も、戻ってきた父も。全部死んだ」

「みんな俺を怨んでいるだろぉな」

「それから猛吹雪が吹き荒れて、いつまでたっても収まらなかった」

「なんとかしたくて出稼ぎに出た。金が必要だった。それでも人はみんな村を捨てていった。まぁ当たり前か」

「雪と森しかねぇこの村に残ろうなんて思う奴は徐々に居なくなっていくのは当然か」

「人なんて殆ど住んでいないくらい酷い土地になってしまった」

「俺のせいかもしれない」

「封印の剣を、此奴を持ち出したからかもしれない」

「全部俺のせいだ」

「罪滅ぼしの気持ちで村を再建したいと考える俺はバカだろう？」

「バカだから俺はいろんな国を回って金を集めた。子供の頃から唯一自信のあった剣術で大会に何度も出るようになった」

「その頃からだったかな、魔術に目覚めたのは」

「英雄気取って村を再建しようとして、英雄気取って守り刀を持ち、英雄気取ってグリシェの仮面を付けて、英雄気取って、何がしたかったんだろうなぁ、俺」

「村を、守りたかったんじゃ無いんですか？」

不思議と口が動いていた

「ふ、ふふ・・・村は、もう、無い。雪に、全部雪に飲まれたのさ。俺の故郷は。何もかも！！ある時金を貯めて戻ったら、すべて雪の下さ」

「あなたはまだその村を再建したいんですか？」

「雪の降るあの村が好きだった。寒くても、みんな熱い心を持っていた。祭りも、母の作った食事も、みんなの顔が・・・・懐かし・・・いっ」

そこで何となく彩輝は喋りたくなった

「俺には別にあなたが虚無の感情に支配されているとは思わない。あなたが目指すものがまだそこにあるんじゃないですか？だからこうして旅をしている。無くしたっていう何とかのペンダント？あれを探していたんじゃないんですか？」

「ペンダントか・・・・神子でなくなった以上、俺があのペンダントに縛られる理由もない」

「それは・・・・自由って事なんじゃないですか？」

「自由？」

「自分を縛るものが無いのは自由って呼びません？あなたにはその各地で回って貯めたお金があるし、そのよく切れる剣も、自分の才能も持っている。村が無くなったのは残念だけど、あなたはまだ指針があるから旅をしているんじゃないんですか？。それに自由ってことは何でもできるって事ですよ。良いじゃないですか、自由。フリーダムです」

「指針・・・・」

意識したことも無かった

俺にも在るのだろうか、そんなものが

男は仮面の下で瞳を閉じる

ただ――ただただあのときの一瞬にこの一振りを求めて全てを失った俺にもそんなものが

まだ――――間に合うのだろうか？

男は自らに問いつめる

全てを犠牲にしたその後でも

今の俺には見えていなかったものが、こいつには見えている

その瞳は、俺が何時か目指した眼差しで

その意志は、俺が失った何時かの自分にそっくりで

迷いのない彼の存在は、俺が思い描いた理想の自分で

そいつは、俺の目指した全てを持っているように見えた

そしてそれを目指した俺は、目指したもの全てを失っていた

家庭も、村も、友も、神子という力も、そして受け継がれたペンダントも

男は目の前に立つ、若き頃に目指した存在を見つめた

「大事なのは過去を引きずる事じゃない。心を入れ替えたならばそれはもう、あなたを問いつめる者は何処にもいないと言うことです」

心を締め付け、問いつめていたのは誰だったのだろう？

あぁ、そうか――――――自分だったのか・・・・

狂った自分は城を突き抜けどこまでも、空へ空へと大きな笑いを響

かせ、そして消えていった

「え・・・えぇ？」

何か変なことを言っただろうかと、突然笑い出したカイを見つめて張りつめていた空気がほどけた

大まかに自らの過去を話してくれたけれども、確信にはあまり触れていなかったと思う

自分の率直な意見を言ったのだが、何かまずかったのだろうかと狼狽える彩輝にカイは仮面を外した

気がつけば仮面の内側に水滴がついていた

涙をぬぐったカイの素顔を初めて見た

「・・・・ワーォ」

イケメンだった

ちくしょー！！

もっと人に見せられないような傷があったりとか、コンプレックスを感じているとかの理由しか思いつかなかった自分が恥ずかしい

「いや、なんだ。お礼を言わせてくれ。なんだか少し吹っ切れた」

「え、あ、あぁ、はい。どういたしまして？」

「疑問系でどうするんだ疑問系で。俺はお前に感謝している。ありがとう」

そういってまるで地面につけるかのような勢いで頭を下げたカイを見てプッと吹き出してしまう

あわてて口を押さえる自分にカイが目を細めてた

「何故笑う。何故」

「あ、いや、なんか、顔に似合わないことするもんでつい・・・」

「ついってなんだついって。そんなにおかしいか・・・？」

そう言ってまじめに自分の顔をぺたぺた触るカイの顔を見た

仮面に隠されていた部分が日焼けで真っ白だ

「カイさん。もう少し顔に光を当てた方がよいのでは？そうすればもっと格好良くなりますよ？」

「む、そうか？ここ暫く人前では取ってなかったからな。そうか、そんなに白いか」

「えぇ。パンダみたい」

「なんだそれは？」

「あー、動物です。もちろん魔力は持ってませんよ」

と教えてもパンダなんてカイは一生会わないだろうから詳しい説明は抜きにした

「そういえば、カイさんも行くんですよね？」

彩輝はふと思い出したことを話題にした

一応話はしてあるそうだが自分でも聞いてみたくなった

「あぁ。行くよ。何せ故郷のことだ。俺が行かずに誰が行く」

「どこかで聞いたような・・・まぁいいや。ですよね。まぁ少し寄り道はするらしいですけど」

「えぇと、たしかイレータ湖を経由するらしいな。遠回りだが、まぁ神子の用事なら仕方がない。なんといったかな、チヒラ・ミマトだったか？」

「違いますよ。千尋・湊ですよ。えっと・・・たしか虹魚の神子だったかな？」

「チヒロ・ミナトか。覚えておこう。それと、・・・・だ」

カイはゆっくりと視線を俺から風王奏へと向けた

「この風王奏、貰ってくれ」

・・・・ワーォ

その光景を静かに柱の影から見下ろす者が居た

「大会が終わった。宝玉も持ち主の元へと戻った。敵も破れ去った。だが、なんだこの棘が刺さって抜けない感じは」

心残りは無いはずだ

いや、一つだけある

会場へ戻ってきたと思われる交渉の男が見つからなかった事だ
王女は全員助けられ交渉の材料はそもそも無かったのだが
王女を攫ったそのグループにもう一人男が居たのかどうかすらも分からない
だが、なんなんだこの後味の悪さは・・・
一人、誰とも遭遇していない男が居たことを知るものは居ない
予想を立てていた者も居たが、残りの男達が死んだ今それを知るすべは無い
紅の王女は身を翻し、後味の悪い終わりを酒で紛らわそうと酒宴場へと戻った

少年は道を進む
ゆっくりとではあるが確実に
そして欠片（ピース）は集まり繋がってゆく

次なる欠片は何処にある？

さぁさ行ってみようかお次のお話

欠片を守り、欠片を探し、欠片を繋げる

物語はまだまだ続く

まだここは歩み始めた一歩にすぎない

あれあれ歯車はまだ全部廻っていないよ欠片達

第2章　アクリス武闘大会　これにて閉幕

『氷溶けて頬伝う』（後書き）

第2章アクリス武闘大会編、これにて終了です。いやぁ、長い・・・。当初はこんな長くなる予定ではなかった。ぐだぐだと予定無く書いていた自分のせいなんですけどねぇｏｒｚ。この話はささっと切り上げて本来なら3章に移りたかったんですがやっぱり話って言うのは流れに任せると止まらなくなってしまいますね。自分の書き方は簡単なプロットを立てて後は自由気まま、その時々の流れで書くという無駄な部分が沢山あるわけですねはい。自分の良いところなのか悪いところなのかは分かりませんが、今年から受験生、大学目指して頑張らないといけないので親の目が痛い。痛すぎる。そんな目で俺を見ないでくれ！ってな感じで執筆時間がググンと落ちているのが分かるんだ。分かっているけどどうしようもないんだ。まぁもう矛盾とかありまくりな気がする。やばい、恐い。前にもこんな事書いたって突っ込まれそう。恐い。裏話的な事になりますが本来なら次に書く第三章、これは元々予定に無かった章です。一部3章編成で書こうと考えていたんですがいろいろと補えなさすぎる事にやっとこさ気がついた。でも早く完結させたい気持ちがあるんですねぇ。高校生活の中では終わるわけ無いのにね。予定では6章か7章まで続いてしまうというアホな予定しか立っていない。あぁ、物語の終点だけを思いついてしまうのは何故だ。どうして中間地点を思いつけない。と、日々苦悩してカタカタ文字を打っております。ということで第一部は4章までということになるかなーと。

一章は魔獣、龍。二章は武闘大会ということで人との戦いを主に書きました。ただ人を書くのは苦手です。人のことをよく知らないもので・・・。あぁ、後書きが気がつけば長くなっている。愚痴しかこぼしていないあぁぁあぁごめんなさいごめんなさい。そんなわけでこんな駄文まで読んでくださった方、そうでない方も含めてありがとうございます。烈風のアヤキを書く力は皆様から頂いておりま

す。どうかその思いを還元できるような小説を書けたらなぁと思います。それでは第三章、『虹の波紋』でもよろしくお願いします！

『まずは西へ』

この湖には神が住んでいる
虹の鱗を纏い、天女のように美しいその姿は人間は神と崇めた
その神と呼ばれた生き物は羽衣を水に靡かせる
その息はあらゆる生物に活気を与え、泳いだ後には浄化された水が
道のように水面に浮き上がるという

その生き物は虹魚と呼ばれ、この世界に存在する9つの神獣の一つ
となる

あぁ、暗い
暗い
暗い
暗い
出られない

時間が無い
閉じこめられた
気泡がユラユラと真っ暗な空間に現れては消える
ゴボゴボと音を立てる
まるで焦るかのようにその気泡が現れては消える
神は囚われた

第三章　虹の波紋

「ほぉ、それでその剣をお前が持っていると・・・」
「えぇ、まぁそんな感じの成り行きで。まぁ片手でも扱えるくらい軽いってのには驚きましたけどね。流石風の剣」
「にしても、剣が人を選ぶか・・・。聞いたこと無いな。私の蒼天駆でさえそんなことは起こらなかったからな」

俺は職務の休憩時間に休憩していたチルを偶然見かけた
城の庭に生えている木に凭れて昼寝を取っていたチルに声をかけられ、そのまま返事をすると昼寝よりも暇つぶしになりそうだと寝起きの彼女は言って来た
そこで俺が携えていた剣に気がついたらしい
「そして不適切な人間が振るえば振るった者を傷つける・・・恐ろしいな。私もこの剣に見放されないように日々精進せねばな」
そう言いながら剣の鞘に手を触れた
愛剣に裏切られるのは辛いだろう。とてつもなく
これまで共に戦ってきた自分の体のような物だ。そう簡単に手放すことを決断できるはずも無い
そんな事を考えながら蒼天駆に並べるようにして俺は風王奏を置く
聖天下十剣、この世に１０本だけの異常なる名剣が二つ此処にある
その異常さはこれまで何度か見た
同じ剣という類の物を一方的に切り裂く鋭き刃
剣ごとに備わる異質な能力

ある剣は空を飛べるようになった

ある剣は風を操れるようになった

残りの８本の剣と今後出会うことがあるのかどうかは分からないが、その能力とやらは見てみたいものだ。そう思うことはやはり普通の感情なのだろうか

男故にこういった物に興味が湧くのは仕方ない

小さい頃、人形で遊ぶような年代の頃にはロボットと人間の人形にいろんな力や設定を与えて楽しんでいたあの空間が今現実にある

流石にロボットは居ないけれど、魔法という空想上の物が存在する時点で小さな子供を思い浮かべてしまう事がある

「そっちの剣の調子はどうだ？」

「ソーレの方ですか？一応数日に一回、簡単な手入れはしていますよ」

日本と違い、こちらの世界では観賞用の日本刀を丁寧に扱うような人間は殆ど居ないに等しい

居るとすれば剣のコレクターぐらいだろうか

それに専用の道具も何一つ無いこの世界で剣に手入れといえば剣を

研ぐぐらいである

日本刀は鉄でできているため雑に扱っていれば錆びてしまう

だがこの剣には錆止めの魔法がかけられているらしい

現代の魔法でも解読できないくらいに複雑で難解な術式なのだとチルが話していた

とはいえ何もしない訳にもいかない

あまり複雑なことをして傷つけてしまったりなんてしたくない

それがソーレなら尚更である

「見せてみろ」

腰に携えた短刀の下緒を外してチルに手渡す

それを受け取り、ゆっくりと鞘を抜く

普通の日本刀に比べて短いその短刀の刀身を様々な角度から見るチルはくるっと逆手に持って目の前で何度か振るう

ヒュンヒュンと音をたてたかと思うと次の瞬間には剣が水を纏ったこれまでは炎を纏うことと風の刃を生み出すことにしかできなかったために少し驚いた

見たこともない自分の剣の形態が其処にあった

水はピッタリと刀身に張り付いているようで刃の形を形成している

「私は魔術は使えないが、それでもこうしてこの剣に水を纏わせられるということは恐らく魔剣に似ているんだろうな。ただ魔剣は術式が刻まれているがこの剣にはそれがない。魔剣なら刻まれた種類の魔術しか使えないが、これはどうやら違うらしい」

「え？どう違うんですか？」

「いいか、魔剣は見たことがあるか？」

そう言われて真っ先に思い出したのは二つの魔剣

まずレイル・ルニセンダが使っていた魔剣。あれは確か火を纏っていた

そしてアルレスト・ビロディンの持つ水と炎の魔剣。二本の魔剣はそれぞれ火と水を纏っていた

剣ごとに扱える属性が決まっているというのは聞いたが自分の剣はそうではない、ということだろうか？

龍の魂がこの剣に宿り、魔剣のような短刀になった

それ以前から魔剣だったという話は聞いていないので恐らく普通の

短刀だったのだろう

「魔剣は魔力を持たない人間でも使える剣。なぜなら剣が周囲のマナを吸い取って魔術を発動させるから」

あくまで剣がマナを吸い取るのであって、剣の持ち主はただキースイッチを叫んで振るえば良いだけである

大抵キースイッチには技の名前が使われるらしいので技の数だけキースイッチがある

「同じようにこの短刀は魔力を持たない人間でも使える。だが術式によって発動しているわけでは無いので魔術を自由に行使できる。属性の縛りも無い自由な剣だ。それに加え、ちょっと持て」

チルから短刀を渡される

「剣に炎を纏わせられるか？」

「できるかソーレ？」

そう訪ねると剣は紅蓮に包まれる

いつものように熱は感じない

真っ赤な刀身が炎の揺らめきを映している

「こんな風にこの場には炎のマナなんて物は全く無いが、こうしてこの短刀は炎を纏っている。そのマナは何処から来たのかと言われてお前は答えられるか？」

「え・・・何処って・・・もしかして俺の？」

周りに無いとすれば剣に元々魔力が詰め込まれているか、俺自身が火の魔力を蓄えているかのどちらかだ

前者は魔剣であるが、この剣に宿っているのは炎の魔力では無く、ただの龍の魂

魂だけでは炎を具現する事はできない

もしかしたら龍の炎という性質を持った火になっているかもしれないな

「あぁ。恐らくそうだろう。あるいはこの剣に元々炎の魔力が詰まっているかのどちらかだが・・・」

「あー、どうでしょうね。ソーレの・・・龍の魂が入っているとはいえ魔力も一緒に移し替えた訳でゃ無いと思うんですけど」

「うーむ、前にその話しも聞いたし分からなくは無いが、それにし

ては変な感じがする。龍、ドラゴンは昔から風と力の象徴と呼ばれているんだ」

「え、そうなんですか？炎とか吐くしてっきり火の象徴とか思ってた・・・」

「火の象徴は不死鳥。そうだな。ほら、紅炎騎士団やグレアントの王家の紋章にも使われている」

あー、そういえばそうだったような気がするようなしないような

確かに紅っぽいイメージとかは感じたなぁ

「まてーっ！」

「――――ぇへへーっ！やっほーお兄ちゃ――――」

ビュンッ

え、何今の？

今視界に何かがうつったような・・・・

何かが右から左へと・・・

それに何か言われたような気がしたが最後まで聞こえなかった

その何かは角を曲がって城に隠れてしまって見えなくなった

「ま、まてぇぇ・・・」

「一条さん。どうしたんですかそんなに息を荒げて？」

遠くから黒髪を靡かせて駆け寄ってきたのは一条唯であった

俺とチルさんの前で足を止めて息を荒げる一条さんに声をかけた

まぁさっき目の前を通り過ぎた謎の物体に関係しているのだろう

そして彼女はそれを追っていたと

「え・・・あぁ・・・うん。あれ・・・千尋ちゃんなの」

「・・・はい？ごめん、理解が追いつかないんだけど？」

今の高速の物体が千尋ちゃん？

そういえば俺の事をお兄ちゃんと呼んでいたような気が・・・いや気のせいか？風の音で全然聞こえなかった

「えっと、ね。ちょっと目を離した隙に遊びで作った加速の符を発

動させちゃって」

「加速の符？」

「うん。結構この能力っていうのかな？いろいろできるんだよ。それでね、いろいろ試しに作ってた符を千尋ちゃんが使っちゃって・・・。しかも鬼ごっこのつもりなのか私のポーチまで取られちゃって」

「ははぁ、それで追いかけていたと。便利なのか不便なのか分かんない能力ですね」

「うん。紙とペンは全部あのポーチの中だし・・・ちょっと割れ物も入ってるから・・・ね」

なるほど。それで早く取り返したいわけだ

にしても、初めて使うにしては妙に慣れているような気がするな

「以前その加速の符って使ったことあるんですか？」

「え、私？」

「あ、いやいや、千尋ちゃんがです。なんだか妙に慣れたように見えたものですから」

実際には視覚で捉えたのは一瞬だが、あのスピードで急カーブを曲がっていけるのはちょっと異常性を感じた

「こっそり抜いて使っていなければたぶん初めてなんじゃないかなぁ。コツ掴むの早すぎるよ。しかもあそこまで速度が出るとは思ってなかったわ。誤算だったー」

「ふむ。捕まえればいいんだな？」

「え？できるんですか！？」

一条さんが千尋ちゃんを捕まえようかという申し出を快く了承していた

正直俺には正気とは思えないな

だってあの速度だぞ？

普通に車ぐらいにスピードが出ていて、市道で走るようなスピードじゃないことから恐らく５０から７０は軽く出ている気がする

よくそんなスピードで飛び回れるものだ

「あれ、そう言えば浮いてませんでした？」

「・・・・え？」

後から考えれば浮いていたような気がする

飛んでいたのかあれ!?

聞いてみるとキョトンとした顔で一条さんが俺の瞳をのぞき込んだ

「いや、だから飛んでませんでした千尋ちゃん?」

「え、あ、いや、私は突然部屋を飛び出していった千尋ちゃんを追いかけたけど視界では一回も捉えていないんだ」

逃走する千尋ちゃんの姿を一条さんは見ていない・・・と

「お、来たぞ」

チルさんがそう言って立ちあがる

そして見た

まるでミサイルのように真っ直ぐ飛んでくる少女が一人

「って、何してるんですかチルさん?」

「うけとめんだよ。おいでーチヒロちゃん~」

「いや、正気ですか?」

そう聞いている瞬間にはもう、少女の頭がチルさんの体にめり込んでいた

がっしりと腹部を掴み、その衝撃を受け止めようとするが流石に衝撃が強すぎる

というより千尋ちゃんの首の方が耐えられるといいのだが

「チルさん！」

「うぐ！」

土が二つの溝を作り、それが数メートル続いてようやく止まった

そっと千尋ちゃんの足が地面におろされ、ピッと手に持っていた符を取り上げられた

「こ、これは預かるね。彼女がもっと面白い符を作ってくれるからって。それとこいつも」

そう言って腰に巻いたポーチもするりとはがされる

千尋ちゃんの方はよっぽど楽しかったのか、また貸してねなんて言っている

こんな物騒なもの流石にもう貸さないだろうとは思いつつも「また今度ね」と冷や汗を流しながらチルさんにポーチを受け取る一条さん

ポーチの中身を見てホッとしていたようである

そういえば割れ物があるとか言っていたなぁ

「にしても、短刀に加えてそれも普通の符術じゃないわね。うん」

そういって取り上げた符を太陽に透かして見ている

そんなことをして何が分かるんだと思いつつも符を見つめるチルさんの目はマジだ

そういえばこの人も本業じゃ無いけれど符を使う事もあるんだっけ

「なんと複雑怪奇。この文字はあなた達の世界の？」

「え、あー、そうですよ」

符を見ているチルさんに近づき俺も符に顔を近づけた

其処には――――めっちゃ早くなる！――――と書かれていた

なんとも曖昧な表現だ！！

「ちなみにこの世界の符ってどんな物なんですか？」

「ん、そうだな。こんな感じだ」

チルさんは持ち歩いているであろう符を懐から取り出した

おお、これぞ符術って感じだ！！

この世界の文字で書かれているが如何にもという雰囲気が感じられる

対してなんだこれ！？いいのかこんな適当なので！？

それであのスピードが出るのかと思うと正直驚きと呆れが同時に襲ってきた

「ちなみにこれ、どのくらい早くなったままなんですか？」

「たぶん自分で止める以外なら符に込めた魔力が切れるまでじゃないかなぁ・・・。試したこと無いから予想つかないけど」

本人にも加減が分からない能力なんだ

まぁその辺は手探りで地道に探っていくしか無いんだろうけど

そりゃ確かに元の世界での能力とは全く違う異形の能力である

絵が得意、勉強が得意、スポーツが得意

そんなのとは全く関係ない未知の才能がこの世界で目覚めているのだ、無理もないか

俺だって魔法がまだ上手く使えるという訳でもないのだから彼女の力に対しては何も言えない

「にしても早々どこか行ってしまうんだな」

チルさんが呟いた

確かにそうだなぁ

今度の目的地は北のシーグリシアという場所である

カイさんの故郷であり、また以前耳にした太古の魔獣の封印とやらをするのが俺の仕事らしい

だがその道中、遠回りであるが西のイレータ湖を目指すらしい

何も連絡が来ていないが、そろそろ虹水の月

ということはもう虹魚の管理する地域はそろそろマナの実りの時期なのである

そう教えてくれた一角天馬は自分の領地を飛び出してまで大陸の端

の方まで来てくれたというのに、そちらを優先してくれて構わないと言うのだからまぁありがたい

本来なら龍に伝言を頼んで俺を呼ぶぐらいなのだ

切羽詰まっているのかもしれない

「なんだか嫌な予感がしたんでね」

一角天馬はそう言っていたがどうなのだろうか

次に向かうのは大陸西方に位置する三大霊湖と呼ばれる湖の一つ、イレータ湖

北のコルノ湖、東のギレストリア湖、西のイレータ湖と呼ばれる三大霊湖のうち、３つの国に属するほどの大きさであるイレータ湖は３つの湖の中で最も美しく巨大な湖であるそうだ

同行するのはシーグリシアが故郷であるというカイ

一角天馬の神子、一条さん

虹魚の神子である千尋ちゃん

そして太古の魔獣の封印を頼まれた俺、龍の神子である桜彩輝

「まぁ彼女の方は完全に僕のお節介なんだけどね。まぁ旧友だしね」

そう言って一角天馬は虹魚の神子の事を言った

千尋ちゃんの方は本来シーグリシアへ向かう為の目的とは何の関係も無いのだが、それぐらいの時間ならあるだろうと一角天馬が提案したものだった

「ほら、僕って大事なこととか先延ばしにしちゃう癖があるんだよね。夏休みの宿題とかそんなかんじだよ」

「あー、わかるわかるー」

この世界の人達はそれを聞いて首を傾げていたが俺たちにはバッチリ伝わった

ていうか何でそんな事を知っているんだと聞きたくなった

そして一条さん、あなたも同士か!?

「ま、そんな訳で一つ頼むよ。一応僕もついては行くんだけど大きな力は使えないんだ。他の領土では違反だからね」

なんて会話は会議のあった日の事

そう言って会議の次の日、カイさんと神獣と元神子の水入らずの楽

しい会話となったらしい

そこには一条さんも同席したそうな

そしてあと付け足すことがあるとすれば会議の日、カイさんから貰ったあの大層な剣の事だろうか

何故剣を俺が受け取ったのか

それはあの剣がカイさんを正当なる持ち主でないと判断したからである

その理由はどうも俺にあるらしい

簡単に言えば俺の事を剣が持ち主だと認めてしまったからだというその原因があの剣の前で魔術を行使した事にあるそうだ

ソーレと違って剣に意思があるとは思えないが確かに剣は俺を選んだらしく、今では元の持ち主であったカイさんが剣を振るおうとすると腕に痛みが走るようになっているらしい

それも振るえば振るうほど痛みは増していくと言っていた

「いいんだ。これで。俺には持つ資格なんてなかったんだ。気にする事はない」

なんだかその言葉の中に俺はカイさんの心にある何かが関係してい

るような気がした

あの夜、簡単に聞かせてくれた事の他にも、いやあるいは俺が思っている以上にその内容は彼を苦しめていたのかもしれない

受け取った風王奏の簡単な使用方法だけを聞いてその日は分かれたが本当に良かったのかと今でも思う

その答えはいずれ分かるだろう

そう、いずれきっと

「こうして君を送り出すのは二度目だな」

早朝

太陽が朝を告げる頃合い

紅の女王はニッコリと逆光の中笑っていた

その笑みに俺もまた笑みを返す

「ですね」

「私の時はいつの間にやら居なくなっていましたしね」

「あー、攫われたもんな。俺」

セレシアさんがそう言うと俺はあのときの事を思い出す

別れを言う間も無く、気がつけば龍に隣の国の山奥に拉致されていたのだ

一緒にいたアルレストさんにも挨拶を言えなかったのは悔やまれたが今度はしっかりと言えそうだ

「まずは西だったかな？」

「えぇ。西のイレータ湖を目指す予定です。順調に行けば到着は１０日もあれば大丈夫かと」

カイはエリエルさんと会話をしているのが見えた

カイの顔には再びお面がつけられていた

あの後ずっと外したままでいくのかとも思ったがどうやらこれからもあのお面は健在らしい

「あぁ、なんだか人目を引きそうな気がする」

「お前の黒髪も十分気を引くぞ」

あぁ、そうでしたね

どちらにせよ注目は浴びちゃう訳か

まぁ帽子でも被れば大丈夫だろうけどさ

「俺は留守番か・・・」

そんな中で佐竹さんは一人王女達側のグループ内に立っている

今回佐竹さんは留守番なのである

「仕方有りませんよ。貴方には無理して遠出する必要はありません。無理に危険事に関わる必要性がありませんでしょう?それに貴方にもいろいろと聞きたいことなども有りますしね」

そうファルアナリアさんは言った

今回佐竹さんが残るのは同行する必要性が無く、それと王女達が行うという精霊台保持国会議に参加してほしいとの事であった

恐らく其処には俺たち以外の異世界組のメンバーも集まってくるだ

ろう

不参加の国もあるらしいが、一応その会議の中心ともなる俺たちにはできるだけ参加してほしいとの事だった

が、魔獣の封印や神子の件で俺と一条さん、千尋ちゃんは不参加となりそうだ

というわけでとりあえず四人の代表として唯一暇そうな佐竹さんに出て貰う事になったわけだ。感謝感謝

「とりあえずはこれでしばらくお別れとなるわけですが、何か言い残した事などはありますか？」

セレシアがそう俺たちと王女達に聞く

今話しておかないとしばらく会えないからね

後腐れ無くスッキリした気持ちで行きたい物だから忘れ物はしたくない

「俺は無い・・・かな」

「私も大丈夫」

「ちーも無い」

「俺も無い」

出発組に心残りは無い

「私も特には」

「私たちも無い」

アルフレアと双子の王女はそう言った

そしてセレシアとエリエルに視線が移る

「私はあります」

「私もあります」

二人はそう力強く言った

はて、何だろう?と思っていると二人がこちらへと向かって歩いてきた

その視線は共にカイさんに向けられている

お?お?

「カイ・ウルクァさん」

「む？」

自分に用件があるとは思いもしていなかったカイは必死にこの二人の王女に見つめられている訳を考える

そしてカイは記憶の片隅にあった事を思いだす

「・・・・あぁ」

カイの納得している様子を見ると恐らく心当たりがあるのだろうと隣で見ていた彩輝は思った

二人は同時に頭を下げた

「此度は私たちの事をお助けくださりありがとうございました」

「同じく礼を言います。ありがとうございます」

二人の王女は同時に頭を下げる

カイも王女二人に頭を下げられるとは思っていなかったのか多少は狼狽える様子を見せたがそれを見極められた人物は少なかっただろう

それほどに僅かな同様だった

傍目には分からないだろう

女性慣れしていないのだろうかね？

というかあー、助けて貰ったお礼って事か。そういえばあの二人はカイさんに助けて貰っていたって聞いたなぁ

「僅かばかりですが受け取ってください」

「私からもこれを」

カイは突如差し出された二つの袋を受け取った

その際に中にあるものが擦れあい、ジャラリという音が重量感のある重みとともに手と耳に伝わってきた

それだけでもう中身が何なのかだいたいの想像がついてしまった

手持ちで運べるだけの僅かな量ではあるが、中身を見たカイはそれが金色なのを見てその中から一枚を抜き取った

同様にもう一つの袋からも一枚の金貨を抜き取る

「失礼ですが、こんなに沢山は受け取れません・・・俺が貰うに値

する事をした人間であっても、この量はさすがに」

とはいえ全部が全部金貨という訳でもないだろうと彩輝は思う

恐らく銀貨も混じってあの量なのだろう

そう言って袋を二つ二人の前へと戻した

「王女からの報償を返すとは、身の程知らずよねぇ」

誰にも聞こえない声でにやにや笑いながら遠くで様子を見ていたユディスが呟く

ていうか師匠も見送りするならもう少し近くでも良いと思うんだけどなぁと思いながらその姿を眺める

ユディスは今上の城のバルコニーの柵に座っている

今皆が立っている場所は城と城下を分けるための外壁の入り口である巨大な水堀を兼ね備えた水路の外側にある唯一の陸路の門の前でこの見送りは行われていた

水路の音が止まることなく聞こえてきて、ここへ戻ってきたときの事を思い出す

戻ってきた時はダトルとぶつかり合ったまさかのチルさんの力を見

せつけられた場所も、ここから見える
水路の門は閉じられているが水はその格子の間から絶えず流れ続け、
流れが止まることは無い

「そう言わず、受け取ってください」

「いえ、お返しします。こんなに受け取れません」

頑なに拒否しようとするカイさんも引かず、またセレシアも珍しく
引かない
控えめな正確なので思ったより積極的だなぁと思ったのは否定しな
いが

するとそっと彼女はカイの耳元で何かを囁いた

ここからでは聞こえないし、カイさんの表情は仮面のせいで読み取
れない

それでもピタリと動きを止めたカイさん

「ですから、ね」

「・・・・いいのか？こんな奴にこんな大金・・・」

「良いも何も、貴方が私を助けてくれたお礼としてこの金額が妥当

だと判断したまでです。ただそれだけですよ。えぇ」

ニッコリと笑ったセレシアさんを見てカイは自らが押し返そうとしていた袋二つを見下ろした

「・・・・感謝します、セレシア王女、エリエル王女」

深々と膝をつきお辞儀するカイにお礼を渡せた二人は満足して後ろへと下がった

「さぁて、これで大体やることは終わったかな？アーヤんとかもう無い？」

「かなー」

「それではそろそろ出発？」

「あぁ。今回はそれなりに急ぐ旅だからな」

「一角天馬の同行ってのがなんだか心強い！」

「実質大した能力使えないんだけどね、僕。あんまり頼りにされても困るよー」

「発言からして頼りなさそう！」

「自分で言っておいて何だけど、へこむよ?仮にも神獣なんだからさ、もう少し敬ってほしいな～」

「態度からして敬えない。心から敬えないよ」

「そんなに僕威厳とか無い？」

「無い」

「無い」

「無いですね」

「そんなきっぱり言わなくても～・・・」

「ははは、まぁんな感じで、行くとするか」

「オッケー、ではそろそろ出たいと思います」

「あぁ、気をつけろよ」

「お気をつけて」

「お土産よろしく～」

「姉に同じく」

「お怪我をせぬように」

「ご心配ありがとうございます」

「お土産・・・？お土産って・・・え、お土産？」

「佐竹さんもしばしの別れですがお元気で！体調を崩さぬように～！」

「お前等も無事に帰ってこいよ！数減ってたら起こるぞ！」

「そりゃ恐い！気をつけねば」

「それじゃぁお元気で！」

彩輝は小さくなっていく人影に向かい、右腕を大きく振った

一行は西を目指し、夜明けの王都を歩き出す

それと太陽は北から昇っているのは気のせいか？流石異世界！

『まずは西へ』（後書き）

とりあえず三章スタート。先は長い・・・

『雨宿り』

「ねぇ、何この書簡？」

一人の少女が手渡された小さな紙をピラピラと揺らして男に聞く

男は祭壇に座っている少女の前で静かに立っている

正装で黒いスーツのようにも見える服を着ているその男は主である

少女に今朝届いた手紙だと伝える

「今朝ねぇ・・・あれも暇なのかしらねぇ。話し合いがしたいなんて・・・年老いたらやっぱり人と話がしたくなったりするのかしら？」

「どうでしょう？そうかもしれませんね」

そんな事を聞かれても自分は別に年寄りでは無いので分かるはずもないが、主には無難に返しておく

主は足を組んでその手紙を床へと放る

「全く、あれも最年長だからって調子に乗ってるわね。経験は豊富でも、逆に言えばそれだけだものね。そのうち私たちを傘下に加えて自分の手駒にしようとしているのかもしれないわね」

確かに最近のあの方の動きが活発になっていると聞いている

なんでも宝玉を集めているのだとか

理由は分からないが、今更我々を集めて何をしようというのか？

「全く、老いすぎてご自慢の知識も忘れていってるんじゃないかしら。反吐が出るわ。下手に出てればどうなるか教えてあげようかしら？ねぇアクリア？」

そう言ってグラスに注がれたワインを飲む

真っ赤なワインは徐々にその小さな口へと吸い込まれていく

「失礼ですが我が主、どのようなご返答をするのかお聞かせして頂いてもよろしいでしょうか？」

「ぷは・・・やはり格別だなぁこの味は。返答か。そうだな、あえて誘いに乗ってみるか。偶には外へ出て羽を伸ばさねばな」

主はそう言って立ちあがる
恐らく返事を書くのだろう

「自慢の羽も衰えよう」

黒い翼が大きく二度羽ばたいた

「ん、何か用?」

部屋の奥に籠もっている一人の男が居た
それに近づき、使いから受け取った書簡を渡す

「ん、何?これ?」

「手紙です」

「いや、それは分かるよ。差出人は?」

「ゼロ・・・だそうです」

「あー、あの老いぼれ爺か」

彼は興味が出たのかクルリと椅子を回転させてこちらへとその笑みを向ける

目を細めてニッコリと笑った彼は手紙を受け取る

奥の机の上にはなにやら不気味な装置がいつものように乱雑に置かれており、蒸気の音やカタカタと歯車が廻る音が聞こえてくる

この人が発明を中断してまで話を聞いてくれるとは思わなかった

いつもなら研究に没頭して話なんて全く聞いてくれないって言うのに

「へーぇ、珍しい事すると思ったら、そういう事」

主が不敵な笑みを浮かべながら書簡を読み進める

何が書いてあるのだろうか？

「あぁ、いや、なんだかあの老いぼれが会議をしたいっていうんだよ」

「会議、ですか？」

「そう。会議という名の下の吸鬼の王宣言でもする気なんだろうね」

「我々の王？」

「馬鹿馬鹿しいよねぇ、老いぼれのくせに何考えてるんだか」

そう言って書簡を手渡された

その内容を読んでみる事にした

「人間への宣戦布告？なんですかこの内容？」

「ね、馬鹿馬鹿しいでしょ？」

なんて事を書いてあるんだこれ・・・

仮にこんな事をしたとしても・・・

「馬鹿馬鹿しいですね」

「大凡そのために吸鬼を集めて軍隊でも作る気なんだよ。あの老いぼれは。んで自分がリーダーにでもなろうって魂胆なんだよ。今更こんな事して何になるってんだか。こっちは静かに過ごしてるって時に。場所を教えたのが不味かったなぁ。引っ越ししようかな。・・・何その意外そうな顔？」

自分はそんな顔をしていただろうか
いや、まぁ確かに意外ではあったのだが

「あ、いえ。主なら実験材料が増える事ですし実戦で使ってみたいとか言うかと思いまして」

「あー、まぁ確かにそういう利点はあるのか。んでもさ、仲間を犠牲にしてまで戦争しようとは思わないんだよねぇ」

「ありがとうございます」

咄嗟にそう言ってお辞儀をする
やはり我らの主は只一人、あなた様だけである

「やだねー、当たり前じゃないかー。まぁ個人的にこの会議には参加してみようとは思うんだ。もちろん戦争には反対だよ？一応不参加の意とかは実際にあって伝えようと思うし、偶には息抜きで普段会わない彼らと話をしてみたいっていうのは有るんだよ。僕にこの書簡が届いているってことは恐らく十中八九レミニアにも届いてると思うしね」

「レミニア様ですか」

今では数を減らした吸鬼は人から身を隠して日々を過ごしている

大戦後に残った吸鬼は3つのグループに分かれ、それぞれ別の場所で生きている

その内の一つが此処であり、もう二つの長の一人がこの書簡を送ってきたゼロである

そして最後のグループの長がレミニアである

最年少ながら、吸鬼の中でもかなりの実力を持つ天才だという話を耳にしている

実際の実力を見たことは無いが、火のないところに噂はたたない

子供だろう、とゼロ様も大して警戒している様子がなく、先代の長の子であり、それを形だけで継いでいるだけでそんな実力は無いと思っているようである

そんなのは力関係のバランスで調和を保つだけのただの噂だと主張しているのだと言っているが本当の所はどうんおだろうか

「レミニアにも一度会ってみたいと思ってたんだ。ルシェナールの娘がどんな子か見てみたいっていうのもあるからね」

「日取りは・・・そう遠く無いですね」

「そうそう。楽しみだなぁ。やっぱりそっくりなのかなぁルシェナールに」

主はそう言ってクルリと椅子を回転させて机へと向き直る

背中から生えた黒い翼が嬉しそうにパタパタと羽ばたいているのを見て今日の主の機嫌はそれなりに良さそうだなと判断して部屋を出た

「あーあ、こんなところで足止めか」

「雨とはついていない」

現在俺たちは小さな洞窟で雨宿りをしている

というのも出発から3日目、アルデリアの国境を越え現在地は巨大なルーア平原と呼ばれる巨大な平原の大きな丘にできた崖伝いの道を進んでいる

平原に何故崖が存在するのか少々分かりかねるが平原という名ではあるが大小の丘がそこかしこにあり、その割れ目や崩れた場所などが平原での道の代わりになっている

それって平原っていうのだろうか？

ただその方が方向感覚を失わずに進めるのである

その中でもいくつか有名でよく使われる場所の一つを通っている

するとあれよあれよという間に雲行きが怪しくなったということで

偶然見つけた小さな横穴に入って雨宿りをすることにしたのである

横穴には全員が入る余裕があり、そこにまだ荷馬車なども入るほど

大きなものであった

恐らく誰かが作った雨避けの横穴だというのがカイさんの見解である

自分たちのような旅人や商業者が通りかかったときに休めるスペースとして誰かが作ったのだろうと言っていた

確かに納得できるほどのスペースがあり、誰かが使った焚き火の後などが残っていることからそう遠くないうちに誰かが使ったのだと思った

「っちゃー、本降りになってきたねー」

大粒の雨が大きな音を立てて落ちる様を眺める一条さんは胡座をかいて地面に座っている

汚れるのを気にしない堂々とした座りっぷりだ

「もうしばらくはここに厄介になりそうですね～」

そう言って荷物を降ろす俺の横でカイさんは横穴の奥から少しばかり薪を拾ってきていた

「誰かの置きみやげだ。ありがたく使わせて貰おう」

なんでこんな所に薪が置いてあるのかとも思ったが、どうやら前に使った人達が残していってくれたようだ

カイさん曰く、こういう時は新しいものをこうしておいていくのが一種のマナーのようなものらしい

次に使う人の事も考えての事だろう

「とはいえ俺たちが新しく此処に足すことはできんだろうな。穴の外のは全部雨で湿気ってるからな。まぁそう長居することも無いだろうし奥にはまだまだ沢山ある。少しだけ使わせて貰うとしよう」

そう言って薪を並べ始めたカイさん

でも火はどうするんだろう？マッチとか無いよなぁこの世界

なんて思っているとカイさんが俺を手招きした

「火、つけてくれ」

あ、なるほどね

火のマナが無くとも此処には立派に魔力のタンクが居ました

といってもどうやってつけようか

火の玉とか出してみようか

「せいっ！うおぁ！？」

手のひらに炎を浮かべるようなイメージを浮かべた

グッとあふれ出した炎が天まで届こうかという火柱を作り出す

「バカ！火力を押さえろ！」

「あ、あぶねー・・・」

危うく髪を焦がすところだった。危ない危ない

火柱はすぐに小さくなり、小さな火の渦を作った

手の上で渦を作るその火にカイさんが薪を近づけ火をつける
ボッと火を消して冷や汗を拭き取る

「よし、これでしばらくは大丈夫か。ついでにそろそろ昼時だ。飯にでもするか」

「あ、賛成ー！」

「・・・いつの間に俺の後ろに立ってたんですか？」

突如現れた一条さんに驚きつつもカイは苦笑いをしながら鞄からいくつかの袋を取り出す

「あ、これってこの前の？」

「あぁ。ラルーの肉だ」

蔦の紐を解き、包んでいる大きな葉を広げると其処には乾燥しかけている肉が出てきた

これは旅に出た日の午後、小さな森でカイさんが仕留めた獲物である

お腹が一杯になることは無いが空腹はしのげる

思いの外肉が軟らかく美味であったのは意外であった

ラルーは小さな兎のような生き物であったのを覚えている
一条さんがウルウルとした目で解体していたのも覚えている
そのラルーの肉を割った薪の棒に刺して地面に突き刺し火で焼き始めるカイさん
その手際には熟練されたものを感じ、いつもこうやって毎日旅をしていたのだと思わされる

「うひゃぁー！」

その一言に全員が洞穴の入り口を見つめた
そこには一人の男が立っていた
と思うとその後から数人の男達と一台の荷馬車が入ってきた

「お・・っと、先着様か」

どうやら行商人のようで数人武装しているようにも見える
おそらく彼らはギルドなのだなぁと思う
真っ先にギルド『赤銅の剣』を思い出した

その後すぐに今回一緒に同行しなかったツキの顔を思い浮かべた

そういえばあのときに出会ったんだっけ、俺とツキ

今回はしばらく行商を中断して祖父と過ごすのだということでアルデリアに留まるらしかった

「悪いが俺等も雨宿りさせてくれ」

「あぁ。別に構わない。別に俺たちの横穴という訳でもないからな」

カイさんは行商人らしき人達のリーダーと何か話をしていた

「お、良い臭いするじゃねぇか」

「やらねーよ」

一条さんは自分の肉を男達から守るように遠ざけていた

っていうか初対面で年上に向かってその口調はいいのか？

「はっはっは、嬢ちゃん別に心配いらねーよ。俺たちは自分のがあるからさ」

「カビにくくて硬いだけのパンだけどなー」

そう良いながら男達も荷馬車から食料を積み出し始めた

「何処からだ？」

「あぁ、イリーユからファンダーヌへ向かう途中でね。いやはや雨宿りできて助かったよ。丁度昼時だしね」

「この先魔獣のほうはどうだった？」

「あぁ、聞いてたほどでは無いが、チラチラとワイバーンの痕跡があったのが気になった程度だ」

「そうか・・・では普段通りということか。まぁマナの実りもあった事だしその点ではピリピリしているわけではないのか」

カイさんはこの先の状況などを聞いているようで熱心だなぁと思うまぁこの中ではリーダー的な存在でみんなの安否も彼にかかっているようなものだ

なにせこれまではまともな旅をしたことが無かったからな

大抵俺は荷馬車に乗ってたし・・・

と、そろそろ良い感じに火が通ったかな？

ラルーの肉が良い匂いを横穴一杯に充満させ始めた頃になるとカイさんも焚き火の近くへと戻ってきた

カイさんは肉を取って俺に耳打ちした

「気をつけておけ。刀をいつでも抜ける程度にな」

「――――!?」

「シッ、静かにしていろ。残りの二人には今から知らせる。もしもの時は二人を連れてここから離れろ」

え・・・、なに?どういうこと?

気をつけろって、この人達が怪しいということ?それとも魔獣に警戒しろってこと?

いや、それなら俺たちだけにこんな事を囁くはずがない

カイさんは一条さんにそれを伝える

千尋ちゃんへは一条さんが何とか誤魔化しつつ説明するつもりらしくカイさんは一条さんに説明すると立ちあがって肉を頬張った

俺も何かあってからでは遅いといつもより早く肉を飲み込んだ

だがしばらく警戒するも何事も起こらず食事をして眠くなったのか、

千尋ちゃんは雨音を子守歌に眠りについてしまった

少し雨は収まってきたがもう少しは降り続きそうな気がした

そんな事を思った時だった

「さて、そろそろ芝居は止めるか」

「だな。ガキばっかりだし、もういいだろう」

カイさんの読み通り・・・と言ったところか

まさかとは思っていたが、本当にこの人達がと思うと信じられないという気になっていただろう

カイさんに忠告されるまでは、だが

「できそうな男が一人いるがまぁ問題無いだろう。魔術も使えないらしいし」

「もー我慢できねー」

一人が荷馬車から一本の剣を引き抜いた

最初に入ってきた男だ

残りの何人かは武装しており、ギルドだと思っていたのだがそれはどうやら違うようである

ギルドと思わせる。行商人だと思わせるためのカモフラージュでもあり、武器の帯刀をしていても不自然だと思われない為でもあったのだろう

なるほど。わざわざ隠す必要も無いと

「やっぱり、な」

「へぇ、気がついていたんだ仮面のお兄さん」

やはり最初に入ってきた男がリーダー格なのか、話を進めるのは彼の役目のようだ

剣を鞘から抜きながら男がニヤリと笑った

「何処から気がついていた？」

「不自然では無かった・・・が、人が立ち寄る場所というのは固定しづらいが固定されている場所ならばそこは格好の狩り場になる。そしてその獲物が罠に掛かったことを知らせるための、焚き火の煙」

「まさかそれだけで？」

「警戒するには十分と判断、がこの雨では休まざるを得ない。其処

にお前達が通りかかった。珍しい事ではないが、警戒は必要だ。もう少し判断材料としてあげるとすればお前達の防具、あまりに綺麗すぎる。とてもイリーユから来たとは思えないほど綺麗すぎた」

「へー、凄い凄い、たったそれだけの情報でずっと警戒してたの？計画早めてもよかったなぁこりゃ。無駄な時間を過ごしちゃったよ」

男とカイが話を続ける間、俺は千尋ちゃんを抱える一条さんと男達との間に割ってはいる

目の前に立つカイさんは腰の剣に手を伸ばすがそれは今は只の剣

絶対なる切れ味を誇る聖天下十剣ではない

それを除いたとしてもかなりの実力者であることは分かっているのだが、人数があまりに違いすぎる

カイさん一人で十人もの賊を相手にできるのだろうか？

「ってーことで、悪いけど死んじゃって」

「悪いがそうもいかない」

「へぇ、一人で守ろうってーの？人数差と戦力差は見ての通りだよ？何処からその根拠が出るわけ？」

「なぜなら」

「なぜなら？」

「俺たちがお前達よりも強いからだ」

「は？っぐぁ！？」

男の脳天にカイさんの蹴りが決まっていた

リーダー格と思わしき男は一人だけ防具を身につけていない

雨のカーテンを抜けて男は泥の地面を転がっていった

あっけにとられていた男達が一斉に襲いかかってきた

とりあえずカイさん強いし俺は後ろの二人を守ることに集中しよう

とか思っている間に武装した男たち二人が壁にめり込んだ

すげぇカイさん

「こんなものか？」

そう良いながら振り下ろされた剣を右手で掴んだ

あんなに早いのを避けるでもなく、素手で受け止めるとは

その異常な行動に斬りかかってきた男が驚いて動きを止めた

カイは腕から冷気を放出して剣と手を氷で固めると思いっきり引っ張って男から剣を奪い取る

そして氷を腕力で砕くと落ちる剣を左手で掴んだと思うとクルリと逆手に持ち替え男の脳に強烈な打撃を与える

崩れ落ちた男は泡を吹いて倒れた

これでおよそ半分ほどが戦闘不能になった

「なかなかやる旅人じゃないか。これ程の相手には滅多にお目にかかれないぞ弟よ」

「そうだな兄よ。ここは我々のコンビネーションを見せてやろうではないか」

二人の男が剣を構える

どうやら兄弟のようで顔も両者どこか同じ面構えをしている

二対一だけどカイさんは大丈夫だろうか

「数は実力の次に優先されるものだ」

一筋の閃光が煌めいた

なんなんだ

なんなんだこいつは!?

たった、たった一人で俺達を全員倒しただと!?

あり得ないあり得ないあり得ない!!

これまでこんなに上手くいっていたんだ!!

今日も何も変わらないはずだったのに

いつものように旅人を襲い、金品や食料を略奪するだけだったのに

ジータ兄弟もやられた

みんなやられた

なんでこんな事に・・・っ!!

「うあああああ!!」

「相手に恐怖を与えぬ雄叫びなど意味がない。自身を奮い立たせる

にしては少し俺への恐れが強いな。だからこうして単調に正面から突っ込んでくる」

剣を振り上げた

剣を振り下ろした

「恐れを抱く相手に勝てるものか」

一条さんがギュッと千尋ちゃんを抱きしめた

「さてと、この丘を越えれば見えるはずだ」

そんな道中のハプニングがあったのも忘れるような光景が広がった

雨はあがり、今一行は西の霊湖イレータ湖へと到着しようとしていた

「おー、すごっ！まぁ琵琶湖ほどは無いけど、でかいわー」

「海？」

「ちがうよ千尋ちゃん。これは湖。まぁおっきな水たまりだよ」

丘の上から見下ろすそこには巨大な湖が広がっていた

一つの巨大な湖の周囲にはいくつかの町が点在してる

「ここがとりあえず最初の目的地、イレータ湖だ」

そう言ってカイさんも丘の上からその巨大な湖を見下ろした

ここで成すべき事はマナを溜めた神獣に会い、マナの実りを起こす事

その為にはまず神獣に会わないと行けない

それが終われば本来の目的地、北のシーグリシアへと向かわなければならい

「にしても疲れたー。足パンパンだよー」

「それもそうだな。慣れてない者には少し辛かったかもしれんな。下へ降りて少し町で休憩するか」

「賛成～」

トボトボと疲れたアピールをしながら一条さんは丘を下る

その後ろに千尋ちゃんがついていく
ちなみに千尋ちゃんはしばらく俺が背負って歩いていたためまだまだ元気である
その分俺の疲労はピークに達していたが

「カイさん、水取ってくれます？」

「ん？あぁ」

ぶっ倒れた俺の頭にカイさんは水袋を投げた
獣の皮で作られた袋に入った水をゴクゴクと飲む俺

「ついでに食料の調達とかもしないとな」

「あー、ですね」

食料もほぼ尽きかけている

というのも雨やら丘の崖崩れなどで迂回路を通った為に余分な時間と食料を使ってしまったせいである
余分に持ってきていなければここまでたどり着けなかったかも知れ

ない

「ほら、もうひと踏ん張りだ。立て」

「へーい。っと、そういえば先に来てるんですよね、一角天馬は？」

「様をつけろ様を」

「・・・一角天馬様はもう来ているんですよね？」

カイさんは以前の一角天馬の神子だったせいもあってか様付けを強要してくる

というか神様みたいな存在で崇められているんだからまぁそれが当たり前なのかも知れないんだけどどうもそういう実感が湧かないな

見るからに普通の動物じゃないんだけれども目上の存在として動物を見れないんだろうか俺は？

元々飼っている動物をペットや家族といった表現をするのが元の世界だったが、其処までしか動物の地位は上がらなかった

すくなくとも日本ではだが

保護する動物だったとしても崇めるまでのことはしなかった

だからだろう。目上の存在として様付けをするのに若干の抵抗があるのは

「そのはずだが。先に虹魚に会いに行くと言ったっきりだからな」

ただその様付けも自分の神獣のみに適用されるようで虹魚の事は完全に呼び捨てである

まだ時間はあったと思うがどうも一角天馬が嫌な予感がすると言ってきたのである

神獣は別の神獣が納める地では能力の行使が十分に出来ないために何かあったときのために同じ神子である俺たちを呼んだそうな

カイさんは確かに元神子で十分強いけど俺たちはそうでも無いとおもうんだけどなぁと呟くと

「そろそろ自覚したほうが良いよ」なんて言われてしまった

そんな一角天馬は心配だからと俺たちよりも先にイレータ湖へと向かったのであるが

嫌な予感がすると言っていたがどうなんだろうか？

全然そんな予感は俺はしないんだが

「そのうち合流できるだろ」

「楽観的ですねぇ」

「それ以外にどうしろと？」

「まぁそうなんですけどさー」

とりあえず神獣すらどうやって見つけるかだよなぁ

「遅いぞ二人ともー」

遠くの方から一条さんの声が聞こえる

気がつけば遙か下方で手を振る一条さんと千尋ちゃんがいた

「今行きますよー」

そよ風が一条さんと千尋ちゃんの髪を撫でているように見える

とりあえず俺も腹が減って早く休みたいので二人に向かって走り出す

丘を駆け下りる俺をよそに、カイさんはゆっくりと後ろを歩いて下る

仮面の下の表情は曇っていた

「マナが・・・感じられない・・・」

カイがそう呟き丘を下る
俺も嫌な予感がしてきた

　イレータ湖をめぐって三つの国は最近まで争っていたようだが結果として三つの国に平等な国境がひかれた
これだけ巨大な湖は珍しく、内陸であるにも関わらず大がかりな漁業が出来るというためもあり町の様子は殆ど港町のような感じであるただ磯の香りを感じないのはそれが海じゃないせいだろう
大通りには様々な店があり、市場のようになっていた
湖でとれた魚や貝が所狭しと並んでいる

「これがイレータ湖・・・」

少し道を外れ、裏通りに入るとすぐに湖へと出た
上から見るときよりも広く感じる
湖にはいくつもの船が出ており、その上で働く漁師さんの姿も遠目

に見える

「・・・・・」

「どうかしたんですかカイさん？」

ふと横を見ると湖を眺めるカイさんがいた

眺めているだけでは別段不思議なことではないのだが、身じろぎ一つせずじっと一点を眺めているカイさんにどうしたのだろうと声をかけた

「いや・・・後で話す」

「はぁ・・・」

何だったのだろうと思うが具体的な返答は帰ってこなかった

後でとは恐らく一条さんたちと合流したらだろう

一条さんと千尋ちゃんは少し観光してから宿で合流すると言って別行動をしている

確かにここには魚介類だけではなく、いろいろなお土産などの店も沢山あった

おそらくアクセサリーとかそのへんのものを見て回っているんだろう

今日はとりあえず疲れたので宿で一休みし、次の日から湖の調査基神獣探しをする予定である

というわけで俺も適当に食べ物屋で簡単に魚巻きなる謎の料理と魚介類焼き飯を買って宿へと戻る

とりあえず夕食までの腹の足しにするつもりだったが結構美味しかったので魚巻きをもう一度買いに行った

見た目は魚に謎の肉を巻いて焼いてあるだけなのになんだこの旨さは！？と少し前まで感動していたのである

帽子と財布を片手に宿を飛び出した

「またお前さんか」

「あはは、予想以上に美味しかったんでおかわりをもらいに・・・」

店の店主はつるっとした頭にこれまたありがちな捻り鉢巻きをしており、網の上で焼く魚焼きをひっくり返した

名前だけならただの焼き魚なのに肉は何処に行ったのかと言いたくなる料理だ

焼き上がったものをいくつか手にとって店主はタレの入った壺にそれを入れる

あぁ、美味そう・・・

「あ、魚焼き四つお願いします」

「あいよ。四つな。持てるか兄ちゃん?」

「あー・・・うん、たぶん」

たぶん片手に二つ持てば持てるはずだ。たぶん

どうやって持とうか考えている間に魚焼きが二つできたようだった

それを網の横にずらし、残りの二つを仕上げに入る店主

「兄ちゃんも今度の試作火花大輪を見に来たのか?」

「へ?試作火花大輪?何ですかそれ?」

突如店主に話しかけられて目を丸くする

なんだそれは?試作火花大輪?

「知らねーのか。この町に火薬師が居るんだがそこの弟子がなんか面白いもんを作ったみたいでな。まだ未完成らしいんだがその実験

を時々湖で行ってるんだ」

「へぇ。火薬師・・・ねぇ」

おっと、先にお金を出しておかないと両手が塞がってしまう

俺は慌てて財布を取り出し銅貨を探す

「それが何というかこれまた奇妙な実験でな。湖の上で何度も火薬を爆発させてんだよ」

「火薬を爆発？湖で？何でそんなことを？」

「さぁな。とりあえず完成したら絶対に名物になるってんで言うもんだから町長もそれを許可してな。十日に一度くらいの割合で実験を見られるんだが、最近その実験目当てに集まる奴らもいてな。兄ちゃんもそのくちかと思ってな」

「ははぁ。目的は違うんですけど、何しているのかは気になりますね」

「だろ？っと、ほら、できたぜ」

「あ、ありがとうございます。ちょっと旅の仲間にお土産をと思いましてね」

「だと思ったよ。美味かったと言っても一人で食うには多いと思ったぜ」

代金を渡し、その空いた手で受け取る

香ばしい匂いとタレの匂いが昼食を済ませたばかりの胃袋に隙間を作ろうとしているのがわかる

「ま、旅人さんにはよく分からないかもしれないが、興味があったら夜に湖を眺めている事を進めるぜ。予想じゃ今日か明日の夜だな」

「ありがとうございます。あ、とっても美味しかったですよこれ！」

「毎度あり、今後も御贔屓に～」

火薬師と夜の湖

火薬を爆発させる

それらをつなぎ合わせれば自然と一つの事を思い浮かべる

そして試作火花大輪という名前からして恐らくそれはあれだろう

花火だ

だが残念ながらその夜はその花火と思われる実験は行われなかった

そして翌日、四人は宿を出て湖へと向かった

湖は相変わらず穏やかでこれなら調査もやりやすいとカイが呟いていた

そういえばなんだかこの湖を見たときからなんだか違和感がある

明らかに周りと違うような雰囲気を感じるのだがそれが何なのかはまだ分からない

「にしても綺麗な湖」

「それに大きいし」

「辺にはいくつも貴族の別荘が建ってる。私有地に入らないように気をつけろよ」

そう言われて湖を見渡してみた

所々別荘のような建物がいくつか見えた

「気をつけときますね」

「了解でっす！」

隣でカイさんの注意事項を聞く一条さんは何故か敬礼している

「テンション高くないですか？」

「そうー？」

「そうですよ」

間違いなくテンション高い

「まぁ気にしない気にしない！いつもの事だしね～。ほら、虹魚とやらを探そうかー」

気にしますって

特に自分が何かをしたわけでもないし、された訳でも無いんだけれども・・・

彩輝は前方を行く一条のテンションの高さにも疑問を抱いた

「・・・・・」

いや、確かにいつもテンションは高いけれどもこれ程目に見えるわざとらしいテンションの上げ方に不信感を抱く

心当たりは無い

いや、一つあるか。普段と違う事が少し前に・・・

「一条さん・・・」

俺もあまり思い出したいものじゃ無いが

頭に浮かんだそれを必死に掻き消すとすぐ横に広がる広大な湖を見つめた

ここにいる神獣は何処にいるんだろうか

それに一角天馬の言っていた嫌な予感というのも引っかかる

千尋ちゃんも何も感じていないようだし、気のせいだろうか

「む？」

ピタリと立ち止まったカイ

同じように残りの三人の足も止まる

カイは湖の上空を眺めていた

同じように残りの三人の目もそちらを向く

「あ、一角天馬だ」

彼らとは対岸にて

「おぉ、来たぞ来たぞ。やっと姿を見せた」

「・・・反応は昨日もあった」

「おいコラ、分かってたなら言えってんだよ！。にしても本当に来たな・・・外れてくれた方が嬉しかったんだけどなぁ」

暗いなと思いつつも僅かな隙間から外を覗いていると警告通り別の神獣、一角天馬が現れた

一角天馬の守護する地では無いために力の殆どは制限されるがそれでも神獣を相手にするのは厳しいだろうと思っている

ゼロは少し前に南を攻めさせたようだったがその襲撃は失敗だったようだ

だが話しによればそれは後回しにするそうでこちらが本命なんだとか

「失敗したら怒るだろうなぁゼロの奴。別にそれはそれで面白そうだけど、まぁこっちも面白そうだしな」

「・・・降りる」

「ん、本当だ」

謎の機械を眺めるゴをよそに、自分の目でしっかりと一角天馬の降下を眺める

全てが純白に包まれている一角天馬の翼もまた白

ゆっくりと降下する一角天馬はそっと水面に降り立った

「水の上に立ってるのか？」

翼は使っていないように見える

どうやって水面に立っているのだろうかとテンが考えているとゴが手に持っていた機械を操作している音が聞こえてくる

「何やってんだお前？」

「・・・・・」

「チッ、お前のことはよくわかんねぇよ俺は」

髪をボサボサと掻きながらテンは一角天馬に向き直る

訳の分からない奴は無視だ

使いからは一角天馬が現れたら去るまで手出しを禁じられている

元々こちらからの手出しはしていないため攻撃は（・・・）できない

逆に言えば手を出してしまった相手が反撃できない状態にあればいいだけである

仲間にも気がつかれず衰弱していく様を想像するとテンは不思議と自然に笑みがこぼれた

「どうするよ？お前じゃこの結界を壊せねぇぜ」

「んむむむ、応答無し返答無し・・・。益々怪しいなぁ。それに周囲のマナがこの湖に集まっているのも気になるんだよなぁ。一日たっても変化無しだし、これはどうしたものかな」

途方に暮れる一角天馬はため息をついて再び上昇した

何やってんのさ虹魚。このままじゃこの地が持たないよ。君の守護

する場所だろう
湖は穏やかに一角天馬の影をうつしている

「久しぶりに会いに来たっていうのにさ」

スウッとその姿は空へと消えた

『統合』

「どうぞこちらへ」

蝋燭がユラユラと揺れている

薄暗い通路を案内され、二つの人影が巨大な扉を抜ける

ぐるりと壁を一周するようにして並べられた蝋燭と絵画がこちらを見つめているようだ

円形の部屋で床には真っ赤な絨毯、天井には巨大なシャンデリア状の燭台があり、無数の蝋燭の炎がこの部屋を照らしている

「や、お久しぶり。へぇぇ、凄いね。君の趣味かいゼロ？なんともまぁ古臭い好みだこと。流石古株。最古参は伊達じゃないね」

「口を慎めニール。三族長の一人とはいえその発言には気をつけねばならぬ」

闇の奥に椅子に座った人影が見えた

ユラユラと蝋燭の炎に光りと影が揺らめいている

「や、そんな怒らないでよ」

蝋燭の炎の光りがゼロの皺の一つ一つを克明にする

その一つ一つに年期を感じる

「最後に会ったのは何時だっけ？」

「・・・侵略者どもと戦ったときでは無かったか？」

「あぁ、そういやあの時会ったっけ。まだ僕も小さかった頃だね」

アグレシオンという侵略者が異界より侵攻してきた際、人と手を組み戦った時たしかに彼と出会っていたことを思い出す

戦闘狂として前線に立っていた頃の全盛期の自分だ

とはいえそんな大昔の話はあんまり覚えていないんだけど

そう思うと彼は一体何時の頃まで覚えて居るんだろうか？自分でさえ忘れたことの方が多いというのに

「そういう意味では尊敬するんだけどねぇ・・・」

「何か言ったか？」

「別にぃ～」

どさりと椅子に座って次なる到着者を待つことにする

大きな時計の振り子がカチリカチリと静かな部屋に響き渡る

「そういえば僕を呼んでいるってことはレミニアも呼んでるんでしょう？会ったことはあるの？」

「無い。ニールはあるのか？」

「いやいや、あれから一度も他族とは関わってないんでね。ルシェナールが死んで娘が次期継承者になったって事ぐらいしかしらないな。完全に研究のために引きこもっていたものでしてね。今回の遠出も久しぶりの外出なんですよ。あ、でも可愛いといいなぁ」

「フン・・・」

ごくりとワインを飲み干すゼロから視線を外してまだ見ぬルシェナールの娘の想像にふける

ルシェナールが人界より広がった病気で死んでから早何年経ったことか

娘を産んでから百年近くはたっているので少女もそれなりの年齢ではあるはずだがまだまだひよっこだとゼロは踏んでいるだろう

「おや、来たかな？」

ゼロが眉をピクリと動かし、僕は先ほど入ってきた入り口を見つめた

その瞬間、ドアは吹き飛び僕の頭を強打した

変形したドアはそのまま壁に当たって落ち、扉諸共吹き飛ばされた壁の破片や煙が周囲に散らばった

「おーおー派手な登場だこと」

強打した頭を振って髪についた誇りや砂を落とす

こんなことならもう少し奥に座っておけば良かったかなぁ・・・

なんて考えていると砂煙の中から一人の少女が出てきた

真っ赤な双眸で部屋をぐるりと見渡す

「・・・なぁ、みんなこんなに弱いのか？」

開口一番それかよぉとか思いつつもその彼女の右手には案内役であったろう吸鬼の男の首があった

有らぬ方向に曲がった顔と体の吸鬼を片手に登場とはこれまた予想を裏切る展開だこと

現れた少女は人で例えるなら１５、６歳前後の見た目をしている

「人の領地であまり派手に暴れるな。只でさえ同胞が少ないのだ。派手な行いは謹んで貰おう」

「あら、ごめんなさいね。にしても、脆いわねぇ貴方の同胞とやら」

「まぁその好戦的なのは若年期だけだっていうしね。僕もそうだったし」

あの年代は難しい

思春期とでも言おうか

「貴方がニールとやら？」

「うん。よろしくレミニア」

「えぇこちらこそ。そして貴方がゼロとやら？ふーん、確かにかなりの年数生きてるみたいね」

ツインテールの少女は右手に掴んだ吸鬼を後ろの廊下へと投げ飛ばす
おお恐い恐い。あんまり挑発しないようにしないとなぁ

そんな光景を扉の奥から覗く影があった

「うぁ、恐っ!!なにあれ!?あれが新しい族長!?」

「みたいだね。あーぁ、呆気なくイチも死んじゃったね」

振り返ってみると其処には最早原型を留めていないイチの姿があった
哀れなイチ。あんなところで族長を口説いたりするから・・・

「テンと良い勝負するんじゃないかなぁ」

「かもねー。今テンが居なくて良かったよー。下手したら此処吹き飛ぶよ全部」

「だね」

ヨンとロクはそんな最悪な光景を想像しながら前方で恐らく開かれるであろう会議の行方に聞き耳をたてた

「何をコソコソしている？」

「わぎゃ！？」

ヨンは目の前の光景に集中しすぎたせいで後ろからの接近者に気がつかなかった

飛び上がって後ろを見ると其処には新入りである男が立っていた

先日共に南のアルデリアを襲撃した元ファンダーヌの王族側近アークス・ガランドーラである

すでに老い始めを感じさせる白髪とその肌がスウッと闇へと浮かんだ

「び、びっくりしたぁ～」

声をかけてきたのがアークスだと知ってほっと胸をなで下ろすヨンは奥の部屋に立っている少女の事を説明した

それを聞くとアークスは腕を組む

「一度戦ってみたい気はするがな」

「・・・自殺志願者？」

「失敬な」

「んで、わざわざ私ら呼んで何したい訳？」

分かっているくせに聞くなんてと言ってやりたかったがとりあえずは静観していようとニールは決めていた

あまりこういう事に積極的になるのは性分じゃない

何事も成り行きに任せるのが一番だ

「私は人間に恨みを持っている。領地を奪われたのも、先の大戦で駒として使われたことにも」

「ふん、それで人間に復讐したいって私たちを集めたの？」

「無理に参加しろとは言わぬが、その口からやるか否かを聞きたい。お主の母も美しい女だった。それなのに人に貰った流行病で呆気なく死んでしまった。怨んで居ないのか？」

「別に。人間から貰った流行病だとしても、直接殺したくて殺した訳じゃないし、私は別に気にしてない。・・・あのさぁ、もうこういうの止めるわ。で、何したい訳？人間への復讐・・・だけじゃないんでしょ？」

「そこんところ、僕にも詳しく聞かせて欲しいなぁ。あっちこっちで動き回ってるって聞いてるけど別に同胞捜しって訳じゃぁ無いよね？」

そこにニールが入ってくる

ピクリと眉を動かし、ワインの入ったボトルへと手を伸ばす。が、その手が届く前にワインのボトルは粉々に吹き飛んだ

赤い液体と砕けたガラスが机上へと広がる

「この儂の力を知っているか？」

「へぇ、ぜひその口から聞きたいわね」

面白そうな展開じゃないかとニールは思った

吸鬼にはそれぞれヨンやロクのような児童期の当たりからレミニア

のような若年期になる頃、それぞれ特殊な能力を使えるようになる

誰に習うわけでもなく自らの内に潜む力、ただその力を知るのだ

ゼロの能力はある意味戦闘向きの能力であるために若年期を過ぎてなお前線に立つ珍しい吸鬼であった

“ただ有って死を司る能力”

先の大戦ではこの能力のおかげで彼は死ななかったと言っても過言ではない

相手の死を操り、自らの死を操る

ただその能力にも僅かばかり制限はある

操る相手に可能な限り近づくほど効果が上がる。操る相手は一度に一人。死して時が経った者は蘇らない。

大戦で彼が救えた仲間はごく一部

大陸全土で起こった大戦に彼が全ての同胞を救えるはずもなかった

逆に言えばその経験こそが彼を今族長の位置に立たせている

「“ただ有って死を司る能力”これが儂の能力。そしてその力を持ってして人間を滅ぼす。過去の恨みを果たす。それだけが望み」

いやいや、そんなはず無いでしょうと口が勝手に言いかけたがそこはグッと堪える

ここは口を挟むより見ていた方が面白い展開なのだ

そんなはずは無いだろうゼロ氏

「ふーん、しらばっくれるの。宝玉集めに勤しむのはこれの為かしら？」

レミニアは突如服から一つの巻物を取り出した

ゼロの目つきが変わり、ニールも興味深そうにその巻物を見つめている

相当に古いものだと思われる巻物でニールは恐らく大戦前の物だと推測した

魔術が確立していない時代の物にしては保存状態がいい

恐らくいつかどこかで紙が朽ちないようにするための魔術をかけたのだろう

あの汚れはそれまでについたものということか

「なんだそれは？」

「しらばっくれているのか本当に知らないのか、まぁどっちでもいいわ。これは母さんから受け継いだ物の一つでね、宝玉集めてるって聞いたからもしかしてと思って持ってきたんだけど」

巻物を紐解き、それを縦に開いた

「面白いでしょ。九つの玉が描かれてる。そして十の剣」

ニールもその巻物の絵を眺めた

筆で描かれたものだろうか

色は多少落ちているが、確かに九つの玉が円を描き、十の剣がそれぞれ玉を貫いている

そしてその円の中心には黒く塗りつぶされた闇

円の外には九人の人が描かれており、九つの剣が玉を貫いているが余った一本は塗りつぶされた闇の中心にある

所々に読めない文字がある

恐らく精霊語だろう

「そ・・・れは・・・」

「ね、面白いでしょう?精霊語が解読できればまだいろいろ分かると思うんだけど、これだけじゃ何の事か分からないわよね?私が思うに他にも似たような物があると思うの。ゼロ、何か知らない?」

「・・・そうか。ルシェナールが持っていたのか・・・」

「それじゃぁもう一度聞くけど、何がしたいの?」

ゼロは少しばかり沈黙を続けた

机上に零れたワインがぽたぽたと静かに床に落ちる

そしてゆっくりと立ちあがった

「お前は知りすぎた」

杖でトンと床を叩く

その瞬間、何かがレミニアの立っていた場所で弾けた

それを見た瞬間、己の能力がそれを見た

“ただ有って見抜く力”がその瞬間を見抜いた

ゼロの能力が発動したようである

ただもう一つのものを自分の目は見抜いていた

実際に目に見えて弾けていたのはゼロの能力による効果であり、だがその場所からは確かにレミニアの能力も感じていた

その瞬間、これまで見たことも聞いたこともなかったもう一人の族長の能力を知る

「これは・・・」

“ただ有って先を知る能力”それが彼女の能力である

ただゼロと違って能力がそのまま相手に干渉するものではなく、能力はあくまで補助なのである

つまり実際に戦うのは彼女の身一つということだ

まぁ魔術も使えるとは思うんだけど

“ただ有って死を司る能力”と“ただ有って先を知る能力”

やっぱり見ていた方が面白いね。うん

「む」

ゼロが突如姿を消したレミニアを目で追った

瞬間、再び閃光が弾けた

今度も外れたようでそこにも彼女の姿はない

この室内くらいであればゼロの能力は十分に効力を発揮する

とはいえ、レミニアも能力を発動させたまま移動を続けているようでゼロの能力が当たるかどうかは分からない

「早いねぇ」

残像が消えては現れ、消えては現れ、ゼロの能力は全てその残像へと直撃している

方向転換する際僅かに落ちるスピードで残像が見えているのだとすれば恐らくゼロはその動きを追えているのだろう

次の瞬間、ゼロは杖を振り上げた

おっと、これはまずいか？

カンと音を立てて何かが地面を滑っていった

ナイフか？

とりあえず、自分の見抜く力が今ゼロがやろうとしていることを知って全力で回避しろと警鐘を鳴らしている

本気で殺す気なのかいゼロ？
自身の出せる最速のスピードで部屋の入り口から外へと出る
「うぁっ！？」
「ん？」
見下ろすと小さな少年がいた
ちょっと今の早さはびびらせてしまったかな？
うっすらと笑みを浮かべて振り返るとそこにではゼロが能力を発動させていた
「部屋ごと殺すなんて」
机、椅子、蝋燭、燭台、全てが同時に粉々に吹き飛んだ
「君も殺す気満々じゃ無いか」
「仕掛けてきたのは向こうよ？何か問題でも？」

突如目の前に現れたレミニアはそのまま部屋へと戻っていった
別に。そう小さく呟いたが聞こえたかどうか。まぁどちらでも良いのだが
次の瞬間、ゼロの目の前で閃光が炸裂した
が、それと同時にゼロの首がごとりと落ちる様子を見ていた
死を操るとはいえ流石に死んだんじゃないかなこれは？
ゼロの体もゆっくりと倒れ、その後ろから小柄な少女がナイフを持って立っているのが見えた
「案外あっさりと死んだけど気分はどう、ゼロ？」
「不快だ」
「・・・首だけになってもしゃべれるってどうなんだい？」
「お前の能力で見抜いてみればいいだろう」
「見抜いてどうするのさ？」
しゃがみ込んでゼロのしわくちゃの顔を見下ろす
首が取れているのによく喋ること

こっそりと能力で見抜いてみると己の死を認めていないようだ
まぁ死を司る能力をもっているのだから自らの生き死にぐらいは操れるのも頷ける

「そろそろ遺言は終わり？」

ニールの後ろに少女が立つ

「フフ、ルシェナールの娘がこんなお転婆だとは思わなかったな」

床に転がった首が笑みを浮かべた

お転婆じゃすまないだろぉとニールが思っているとレミニアは無表情にその顔を上から踏みつぶした

ゴリッと音を立てて骨が砕けた

頭蓋骨か、鼻の骨かそれとも顎か、鈍い音を立ててゼロの首は床へとめり込んだ

それなりにパワーもあるようである

「さようなら“ただ有って死を司る能力”名前の通り無に帰りなさい」

音もなく、首はレミニアの魔力に包まれ黒い霧となった
霧が晴れればそこにはもはやゼロの首はなく、残った体はピクリとも動かない
今度こそ死んだな。とニールは確信する
「これで大戦前から生きてる吸鬼は僕だけか」
「あなたも私と殺し合う？」
「遠慮するよ。そんな気は欠片も無いし、たぶん十中八九君が勝つから」
「そう。残念」
振り返り、自分が吹き飛ばした部屋の入り口を見つめるレミニア
「さて、そこに居るあなた達、出てきなさい」
レミニアは入り口にいたゼロの配下の吸鬼に出てこいと命じた
ゆっくりと出てくる子供の吸鬼が二人、そして人間

まぁ恐いよねぇ。うん

「ここは今から私が、吸鬼の王族の直系であるこの私レミニアが支配するわ」

「え、マジで？」

「何よ、殺されたいの？」

「ナンデモアリマセン」

「よろしい。文句がある者はいつでも私を殺せばいいわ。その時は私も全力で殺すから。実力は今見た通りよ。どうする？」

子供の吸鬼二人が顔を見合わせる

人間も腕を組んで考えている

っていうか人間なのに吸鬼側につくなんて珍しい人間だろう

後でちょっと話を聞きたいかも

そうこう考えているとその人間の男がそのレミニアの要求を許諾した

「弱い者が強い者に従うのは世の摂理」

「そちらの子供はどうする？」

「んー・・・どうするロク？」

「私は研究ができればそれでいい。研究させてくれる？」

「何の、とは聞かないけど、それぐらいなら別にいいわよ」

「そう。じゃぁ貴方に従う。他にも何人か居るから呼んできましょうか？」

「えぇ、そうしてちょうだい」

程なくしてゼロの戦力はこの場に居ないテン、ゴ、ハチを除いてそのすべてがレミニアの傘下となった

ニールとレミニアは同盟を結び、三つに分かれていた吸鬼は一つのグループとなった

レミニアはゼロとは違う理由で戦力を欲していた

その能力はすでに先を見据えていた

とある異邦者がそう遠くないうちにこの地を訪れることに、一番最初に気がついた者は静かに呟く

戦いは近い・・・と

『統合』（後書き）

執筆速度が戻ればいいなぁと思う

『見習い火薬師』

「結局何も無かったな」

湖の探索を初めて一日目

日が暮れかけてきたためこの日の探索は終了

この日の探索で湖の外周をおよそ半分まわった事になる

異変は感じなかったが、湖の上空に一角天馬を見つけた

しかし一角天馬はそのままスウッと空へと消えてしまい、手がかりは何一つとして得られなかった

ただ何ら目に見えるような異常は無かったがやはりまだ違和感があるように思う

気のせいかと思いその事をカイさんに話すと

「宿題だ。自分で考えてみろ」なんて言うのだから恐らくカイさんはこの違和感の正体に気がついているのだろう

とはいえ答えが全く分からない

ヒントを訪ねると「目には見えないが違和感を感じているんだろう？ならば違和感の正体は目に見えないものだ」というヒントがもらえた

目に見えないものってなんだろう、と考えながら町へと向かう

当たりが暗くなり始め、町の灯りがチラチラとつき始める

と、空が光ったような気がした

そして小さな破裂音が聞こえた

一同足を止めて湖の上を見る

すると小さな煙が月明かりを跳ね返していた

「およ？何だ何だ？」

一条さんが湖の方へと駆け寄る

千尋ちゃんを任された俺は一人、あぁこれか。なんて思っていた

おじさんに聞いた試作火花大輪なるものの存在を思い出しながらその煙を眺めていると、また軽い破裂音と小さな光りが夜闇に閃光を映し出し、湖もそれをうつす

「あ、ちょっとお店の人に聞いたんですけどなんか試作火花大輪なるものが・・・」

一行に店のおじさんに聞いたことを話す

と、千尋ちゃんも一条さんもその言葉に引っかかるものがあったようだ

「ねぇ、それって」

「うん、たぶん」

「花火？」

千尋ちゃんが手を繋いだままこちらを見上げて話しかけてきた

「でもまぁ、試作段階っぽいよね。見たところ只の爆弾じゃない？」

「ですね。まだ花火を作る技術が確立していないんでしょうね」

そんな会話をしていると

「俺だけ仲間はずれか・・・？」

そのカイさんの言葉に俺は苦笑いをし、元の世界の花火の事を説明した

カイさんは興味深そうにその話を聞いてくれた

やはりこの世界ではまだ花火は作られていないらしく、存在すらも知らなかったようだ

「ね、なんかちょっと行ってみたくない？」

一条さんがそんなことを言い出した

てか俺に聞くなよ。リーダー俺じゃ無いし・・・

一条さんが俺を見て、俺がカイさんを見る

千尋ちゃんもカイさんを見上げている

二人とも目がキラキラしている気がする。いや、している。断言しよう

興味津々早く行きたいオーラが出ている

いやまぁ確かにその花火らしきものが発射された場所はそう遠くないように思うが・・・

カイさんも押されているようで仮面の下は恐らく苦笑いだろうと思

っているとカイさんが渋々承諾した
実は俺も興味が湧いていた、なんて後からこっそり聞かされるわけなんだが
ていうか何であの女子二人は疲れを感じていない
ここしばらく歩きっぱなしで俺は疲れた。疲れたぜジョー。
真っ白になって湖の畔を歩くこと十数分

「ここかな？」

「だろうね」

小さな小屋がいくつか点在する場所に出る
木々が切り倒されたその広場には薪や木箱が沢山置かれていた
湖には小さな桟橋があり、その小屋の窓やドアの隙間からは光りが漏れている
煙突からは煙が立ち上り闇へと消えていく

「あー。あれー」

千尋ちゃんが指さす先を俺と一条さん、そしてカイさんが見つめる
桟橋の上を指す千尋ちゃん
その桟橋の上には一人の青年が立っていた
一人桟橋に佇む少年はゆっくりとこちらへ振り返る
「こんばんは～」
一条さんが真っ先に挨拶をした
相手の方もお辞儀をしてこちらへと向かって歩いてくる
「こんばんは。何か用ですか？」
少年はそう挨拶を返して何か用かと訪ねてきた
身長は１７０前後で紅い髪に白い鉢巻きをしている
上着の袖を肩まで捲り上げ、その下に白いシャツを着ている
「いや、さっきの爆発は君がやったのかなーって思って」
「え、そうっすけど。旅人・・・ですか？」

「まぁね。ちょっと南の方からやって来た旅人ってところ」

俺と一条さんは帽子を被っているため黒髪はばれておらず、妙な服装をしている旅人だな位にしか思われていないだろう

ただちょっと旅人にしてはおかしなメンツではあるが

それも含めればかなり旅人だなと思われているだろうがまぁ気にしないで話を進める一条さん

「私は一条唯。君は？」

「え、あっと、リク・ヒノトです。あ、さっきのやつ気になります？」

さっきのやつとは恐らく先ほど湖上で炸裂した物の事だろう

俺たちは恐らく花火ではないかと想像しているのだがその答えも聞いておきたい

「気になる気になる。それでわざわざここに来たんだから」

「あ、そうっすか。えーっと、じゃぁどうしようかな・・・。旅人なんですよね。今日の宿はもう？」

「いや、まだ宿は決めていない」

後ろで話を聞いていたカイさんが答えるとリクはニヤリと笑って鉢巻きを解いた

「ならうちに泊まっていきませんか？」

「ばっかやろおおお！！」

家の中でドカーンと何かが爆発したような気がした。いや、実際に火山が噴火したような勢いだった

家長に叱られる長女とか長男の最後にじゃんけんするアニメとかってああいう感じなんだな

そりゃあの兄姉も恐れるわけだ

恐らく今リクはこっぴどく叱られているのだろう

そりゃまぁ通りがかった旅人を突然泊めるなんて普通あり得ないだろ

内心はそう思いつつ、リクはその小屋の主に許可を取りに行ってもの十数秒でその怒鳴り声が聞こえてきて「やっぱりなぁ～」なん

て小声で呟いたりした
しばらくすると小屋のドアが開き、リクが出てきた

「だ、大丈夫だった？なんか今凄い怒鳴り声が聞こえたんだけど？」

「え、あ、何とか許可とってきました。うちの親方、あ、ゼンさんっていうんですけど親方もたぶん泊まって欲しいと思ってるんであんまり気遣いとかは無用ですよ」

先ほどリクを叱っていたのは親方だったらしい
そういえば店の店主も火薬師とか言っていたな

その見習いが試作火花大輪とやらをやっていると言っていたので恐らくリクはその火薬師見習いといったところなのだろう

光りが漏れるドアをくぐり中へと入る
それと同時に良い匂いがしてきた

「おう、入ってくれや」

「おじゃましまーす」

「お、おじゃまします」

全員が入り終わったところでリクがドアを閉めた

「初めましてだな。うちの弟子がなにやら妙な提案をしたようで申し訳ない」

親方はまず謝った

ごつい体型で筋肉がとてもたくましく見える人だった

大きな机の上には二人分の料理が置かれている

その奥のキッチンでは大きな鍋が火にかけられており、中身も沢山余っているようであった

「いえ、お気になさらず。我々も疲れていたのでとても嬉しいお誘いでしたものですから」

「そう言ってもらえるとありがたい。まぁこんな所に来客というのも珍しいもんでな。とりあえず話は飯を食べながらにしましょう」

カイと親方とが会話をしている間、もう一度部屋をぐるりと見渡したロッジのようなイメージのその小屋には料理の匂いが立ちこめているきちんと手入れもされているようで虫食いや蜘蛛の巣などは見あた

らなかった。というか蜘蛛ってこの世界にいるのか？

「おい、リク。旅人さんの料理もだしてやれ」

「うっす親方」

リクは親方に命令されて飛ぶように食器を棚から取り出し始めた

ん、と思ったときには俺も足を動かしていた

「手伝わせて」

「あ、悪いっすよ、客人にそんな」

俺はそういうリクを無視して器を一緒に取り出す

木でできた器をいくつか取り出し、大釜でぐつぐつと火にかけられているシチューのような物を同じく木でできたおたまで掬う

借りを作りたいという訳ではないが、なんだか率先してやりたくなったから手伝ったまで

やろうと思ってやらない事にはしたくない主義なのだ

つまり後悔したくないわけである

今ではこういう事にさえ後悔の幅を広げてしまったために何かと不自由もあるかと思うこともあるが、さりげなく今の自分にはこれでいいような気がするのだ

全員分の食事を配り終え、急遽小屋の奥から椅子を人数分持ってくるそれももちろんリクの仕事だったらしいが俺も同じく手伝った

皆椅子に座りいざ食事会が開かれた

「俺はゼン・クリードっつうしがない火薬師だ。んでこっちが弟子のリク・ヒノト」

自己紹介が大体終わり、全員の手が食事へと伸び始める

「カイさんは魔術師なんですか？」

「ん、そうだが、よく分かったな」

カイがスプーンを口にくわえたままリクの問いに正解だと答える

「いや、水の入った瓶つけてましたから」

「あぁ、そういえばそうか。それでか」

俺もそういえばとカイの腰に目をやる

カイの腰には瓶がいくつかロープでくくりつけられており、その中には透明な水が揺れている

確か出会った当初のツキも持っていたような気がする

水や氷の魔術師はもしもの時に備えて常備していると聞いたことがあるがそういえばカイさんも氷の魔術師だったなぁと思い出す

「それなりにできるのか？」

そこにリクの師匠であるゼンさんが声をかけてきた

魔術師としてのカイさんの実力を聞いているのだろうか？

そういえばカイさんの強さってどんなものなんだろう？

っていうか、この世界での魔術ってどのくらいが普通のレベルなんだ？基準が分からないからカイさんの事をどう判断すればいいか分からない

そう思うと俺も気になってくる

「上位級ならそれなりに。あとは実際に登録されてない魔術で自分で作った奴ならいくつかありますかね」

「・・・・」

「・・・・・」

リクとゼンが顔を見合わせる

両者とも食事中だというのに口をぽかーんと閉め忘れている

そうして両者同時にカイへと向き直り、真っ先に叫んだのはリクだった

「す、すごいっす!!」

「あぁ・・・ちと驚いたなこりゃ。これまたどえらい旅人さんじゃて」

「皆さんも魔術師なんですか?」

ここであんまり目立って印象づけるのはあまり得策ではないだろうと首を横に振った

同じように一条さんも違うと身振り手振りで意思表示する

「あはは、そんなわけないじゃん。だからこの人は護衛も兼ねてるのさ」

そう言って一条さんはカイを指さす

二人の驚き方を見て俺は少し考えてみる

あれ、もしかしてカイさんって結構凄い人？

そういえば大会の時にもどこかの隊長さんと互角に戦ってたって聞くし・・・

いやまぁ前から凄い人だとは思ってたけど、予想以上なのか？

ゼンさんは背もたれに体重をかけてふうと息をつく

「何処の出身だ？」

「北です。フェリエス王国のシーグリシアの生まれです。一応このメンバーでそこに向かっている途中です」

「・・・遠いな。北方小国群じゃねぇか」

「えぇ。長旅ですがゆっくりしている暇がありませんでして。此処へは遠回りになるんですがちょっと用事があってよったんです」

「そうかい。大陸を斜めに突っ切るふうに行くのか？」

「今のところその予定です」

「ってぇとファルトの大脈を行くのか？」

「はい。その方が早いと思って」

「なるほどな」

カイさんとゼンさんの会話に聞き慣れない言葉が出てきた

ファルトの大脈ってなんだ？

とはいえそれをここで聞くのは少しまずいかもしれないと俺は予想する

この世界に来てから多少のことは知ったつもりだ

だが知らないことも少なくはない。むしろ知っていることの方が少ないくらいだ

生活上での常識は多少知っているが、歴史や地名などはあまり知らないためにあまり人前でそういう事を聞かない方がいいと出発前に王女達から警告はされている

俺たちが異世界人であるということは未だに極秘情報であるためにそういった不審に思われるようなことは控えなければならない

黒髪であることを隠すこの帽子もそのためだ

だから後で二人がいない場所で聞こうと思ったのだが

「ファートのたいまくって？」

千尋ちゃん！？

い、いや、これはチャンスだ！

少し慌てそうになったが少し考えて千尋ちゃんの年齢で言えばべつに怪しまれないということに気がつく俺は心の中で少しガッツポーズを取っていた

そうかその手があったか！

「あぁ、嬢ちゃんはまだしらないか。まぁ知らない方が普通か。フアルトの大脈な。ファルト。あとたいまくじゃなくて大脈だ。まぁおっきな道だと思ってくれりゃぁいいよ」

「おっきな道？道路？」

まぁ会話の内容から恐らくそういった道の名称みたいなものだろうとは予想していたがどうやらその通りのようだ

「そう。道のことだよ嬢ちゃん。覚えときな」

「あ、そう言えばさっきの――――」

そこで俺は先ほどの湖の上でみた爆発の事を話題に出した

あまりこの辺の事で詳しいこと話されても分からないこととか多そうだし話題をずらしたかったのもあるが、そのせいでボロが出て怪しまれるのはまずいと思ったためだ

その話題を出すと、やっと来たかというリクの目がキラキラし始めた

そりゃもう目に見えてカッと見開いた目に希望やうれしさみたいなものがものすごく伝わってくる

そんなに振って欲しかったのか

にしては親方さんの顔色が優れないような気がするが

「お前等さっきのリクの遊びを見てたのか？」

「遊びじゃ無いです親方！あれはこの町の事を思ってのことなんです親方！」

「はぁ・・・そうかい。じゃぁ旅人さんに好きな風に説明しろ」

リクは待ってましたと言わんばかりの顔で説明を始めた

『天より授かりし才』（前書き）

こんなに遅れるとは思ってなかったです。すいません。とはいえもう高三なんでと言い訳させてください。そして察してください。そして最近謝ってばかりな気がする・・・。今後も遅れることがあると思います。高三なんでと言い訳します。察してくださいｏｒｚてな訳で７７話目『天より授かりし才』です。どうぞ～

『天より授かりし才』

牙を研げ
爪を研げ
肉を食い千切れ
肉を切り裂け
本能のままに息を潜めよ

「ふむ、なるほどね。その試作火花大輪が完成すればこの辺一体の観光が増えてイレータ湖の新しい名物になると」

「あぁ！その為に今試行錯誤して作ってるんっすよ！」

バンと机を思いっきり叩いて勢いよく立ちあがるリク

卓上のお椀がぐらりと揺れる

「うるせぇぞリク。もう少し静かに食え」

「あ、すいません親方」

親方に一礼して静かに座るリク

言い分としては最近イレータ湖を訪れる観光客が少なく、新しくこの火薬で何かができないかと模索していたのだという

その中でこの火薬を空で爆発させ、その迫力ある光景を名物にできないかと試行錯誤をしているそうだが未だに完成はしていないらしい

「あのさぁ、それ、ちょっと心当たりあるんだよねアーヤん」

「え、あ、うん。ある」

「こ、心当たり？」

不思議そうな顔をするリク

まぁ確かにこの大陸に花火は無いらしいし心当たりと言われても少し違和感があるだろう

なんで無い物に心当たりがあるのだと
その事について軽く補足を入れる

「あー、ちょっと俺と一条さん、あと千尋ちゃんはちょっと遠くから来てまして、そこに似たような物があるんだわ。花火っつーんだけど」

「ハナ・・・ビ？」

「んー、まぁこう球体の玉に火薬を詰めて空に打ち上げて、バーンってやつ」

「その説明じゃ分かんないと思いますけど一条さん・・・」

身振り手振りで説明しようとする一条さんだったがあまり上手く伝わってないようだ
代わりになけなしの知識を集めて俺が説明することにした
まぁ俺も似たような説明しかできないんだけど・・・

「そうだなぁ。俺も作り方とかはあんまり詳しく知らないんだけど火薬と一緒に金属の粉末を混ぜるんだけどそれで綺麗な色を出せる・・・はずだった気がする」

「色・・・でも火薬を詰めただけってことは色つきの爆発って事で

いいんですかその花火って」

「うむぅ、ただの爆発じゃなくて、もっと綺麗な爆発・・・って言葉じゃ説明しづらいな。紙とかってある？」

リクは立ちあがって後ろの棚から紙とペンを持ってきた

そのペンを受け取った俺はふと視線を感じて横を向いた

すぐ目の前に身を乗り出した一条さんが居た

「・・・すっげぇ目がキラキラしてませんか一条さん？」

「そう！？」

「・・・描きたいんですか？」

「いいの！？」

なんで俺に聞いているのに返事も待たずペンを持っていくんですか一条さん？

ふんと鼻息を荒げて紙とペンを手にした一条さん

さりげなく久しぶりに絵を描きたかったのかもしれない。俺には分からん感情だが

芸術関係の大学行ってるって言っていた気もするしなぁ

そんなことを考えている間にいつの間にやら一条さんは紙に花火を描き上げた。ってか早いな

紙には綺麗な花火が白黒で描かれていた

簡単で最低限の線のように見えるがそれでもしっかりと花火だと分かる絵だった

素人目にも凄いと思う

花火の発光まで紙には描かれており、花火を知らない人でもそれが中心の爆発によって生まれた星の飛散だと分かる

「おぉ、上手ぇ一条さん」

「あぁ、絵を描いたのいつぶりだろう・・・君の絵を描いたとき以来だよぉ・・・」

なんか一人悦に浸っていたが気にしない

「へぇ、これがハナビですか」

そのイラストを見てリクが今この瞬間に全てが結びついたような顔をする

それを表現するならば、目を見開きその目の焦点は部屋の何処にも合っておらず、口を僅かに開けて閉めることを忘れ、スッと立ちあがったのである

「リク、火薬はお前に渡した分だけを使えよ」

その親方の言葉に、これまで無視することの無かったリクが無言で外へと出て行った

静かに閉められたドアを部屋の中にいた全員が唖然、いや呆然と見つめる

どうしたのだろうか？様子がおかしかったようにも見えるが、それにしても何も言わずに退室するのはすこし妙だ。っていうか妙だろ

「あいつはな――――」

まるで補足をするかのように唐突に親方が口を開いた

いや、実際あの様子の訳を教えてくれるのだろう

「ある意味天才なんだよ。そこの仮面の旅人のようにな」

それはカイさんをさして言っているのだろう

今現在、カイさんは面を取って食事をしている

その顔にはご飯粒がついていた

「俺は天才じゃない」

「いいや、天才以外にお前さんを何と呼べばいい。高位の魔術を使えて自分で式を作れるんだろう？そのレベルに達するにゃちとお前さんは若い。若すぎる。まぁいいか。旅人さんに話すような事じゃぁねぇかもしれないが、まぁ飯のおかずとでも思って聞いてくれ」

ニヤリと笑った親方の真意は分からないが、どうやらリクの事についていくつか教えてもらえる、そう解釈すればいいのだろう

突然やって来た旅人に聞かせるような大層な話ではないのかも知れないし別に今後必要になることもない無駄な世間話のようなものだ

それでも話してくれる内容に興味はあった

天才

その言葉に、俺は引かれた

何故かな

「あいつは火薬を扱うことにかけてはこの俺以上の素質がある。どのくらいの量でどの程度の爆発をするのか。それぐらいならしばらく火薬を扱ってりゃ誰でも習得できるだろう。だがな、あいつはそれに加えて発想、そして爆発の僅かな加減なんかを自由に操る。何処で覚えたのかはしらねぇが、俺とあいつが出会った時、まぁずいぶん前になるな。あいつが6歳の時だったか。ある日仕事をしていた俺に近付いてきて言ったんだ。弟子にしてくださいってな」

・・・弟子にしてくださいって・・・6歳だろ!?

「六歳って・・・若すぎるじゃん・・・」

一条さんもボソリと呟いたが、若すぎるって!

普通の人間でも火薬を扱うなんて事はしない

何故かと問われれば、それは危険だからとしか言いようがない

普通6歳の子供が火薬を扱うなんてことはあり得ない

普通の人間が扱えない代物を6歳の子供が扱えるはずがないのだ

「まぁ俺も何処のガキがこんな馬鹿げたことをと思ったさ。最初は悪戯か何かだとさえ思ったさ。だがよ、その目が・・・」

そこでぷつりと話を切ってしまった親方の瞳を俺も見つめた

思い出しているのだろうか?その時の情景を

その時に見た彼の目を

きっと其処にあったのは・・・

「その目が――――その目に――――炎が灯っていた・・・。笑いたければ笑えばいい。俺はあの時、初めて実力以外の、経験以外の、これまで見てきた物とは確実に違うそれを見た気がした。そえを言葉で表すなら“天才”という言葉が相応しいと思った。そして試してみたくなった」

「試す?」

一条さんが聞き返す

このリクの親方がその時目に灯った才能の光というものを試してみたくなったのだろう

本当の“天才”というものがどれほどの物なのか

実際に見たことがない。経験したこともない。それでも確かにそのとき彼の才能が灯ったのだろう

彼の目に届く程に輝いた光を放っていたに違いない

「こんな小さいガキがこれまでに火薬を扱った事は無いだろう。それは恐らく間違いない。だからリクに見たその“天才”を試してみたくなったのさ。六歳だからこそ、その才能だけ（・・）を試せると思ってな」

この人がリクに引かれ、その才能というものがどれほどの物なのかを試したくなったというのも無理はない

努力に勝る才能は無いと言うが、物事には要領が良い人と悪い人という二つの人間が居る

同じ努力によって得られる経験値が同じで、レベルの上がり方が違うなんてそんなのレベルが上がらない人間にとってはそんなの不公平にしか思えない

だが頭が良い、要領が良い。そんな程度に与えられる言葉では無い。天才という言葉は

天才レベルの人間はそんな頭が良く要領の良い人間で、そこに努力家という性格がプラスされたとしても、それすら楽々と越えてしまう者に与えるべき言葉なのだ

「俺は不思議とその時リクに問題を出した。正解すれば弟子にしてやるなんざ・・・今思うと六歳のガキに何言ってんだって話しだがな・・・」

そう言って親方はよっこらせと立ちあがる

そしてゆっくりと後ろの棚を開き、中身を漁り始める

ずいぶんと奥の方まで手を突っ込み、それを取り出した

親方がそれを机の上に置く

小さな鉄の塊を取り出した

「耐火石・・・ですか？」

「おうよ」

カイさんはその石ををズバリ言い当てたようであるが、全然分からない・・・なんだそれ？

耐火石？燃えない石・・・って訳じゃないよな。普通石は燃えないし・・・まぁ燃えるやつもあるけど

ってことは燃えないのではなく熱を通さないとか？

「あの、それってどういう石なんですか？普通の石と違うんですか？」

「まぁ専門的な物だからしらねぇのも無理ないか。此奴は結構貴重な石で火のマナ、火の魔力を弾くんだ。だから此奴を熱する事はで

きない。溶かすこともできなきゃ加工も難しい上に硬い。普通の石とそっくりだがそこらの石は火のマナを通過させる。だから火によって熱がまわる。だがこの石は完全に火のマナだけを遮断する。別名断熱石とも呼ばれる」

そう言われても普通の石とどう違うのか全く分からん・・・

一条さんも手にとって部屋の明かりに透かしているが眉をしかめている

「その小さな一欠片でも時にはベル銀貨数枚は必要なくらいの価値がある」

カイさんがそう呟く

ベル銀貨数枚って・・・結構な大金じゃん

この石っころがそんなにするのか・・・俄には信じがたい事実を聞かされ俺は顔が引きつる

そんなに価値が高いという事はよっぽど需要に対して供給が少ないのだろう

ということはこの小さな一欠片すらなかなか手にすることは難しいのだろう

この握り拳一つ分も無い小さな石の値段に驚いているとゼン親方が

話を続けた

「まぁ俺も直接買った訳じゃなくて譲って貰ったんだがな。まぁんなこたぁどうでもいいんだ。兎に角そいつは炎の熱を弾く性質があるんだ」

「つまりその石と火薬を使って何かをつくってみろとか？」

「ん、聡いな嬢ちゃん。どこで分かった？」

ニッと笑った一条さん

「んー、まぁ半分くらいは勘なんですけどね。加工が難しい。火薬を使う。天才の能力を確かめる。その三つかな。話しに出てましたけど、普通の人ができない、考えつかない事ができるような事を天才と言うならそれをどうさせるか、って考えたときにやっぱりその二つを組み合わせて何かをさせるって事になりますよね？なら考えられるのはその火薬で石と組み合わせて物を作らせるか石を壊すかのどちらかだと思ったわけよ。でも石は硬いし熱を通さないし、尚かつそんな貴重な物はこんな事の為に消費させるのは違うと思う。二つを使って作る以外の事をさせるっていう考えも合ったけど私はその作らせる以外の何かを私は知らないし思いつかなかった。ま、結局は勘で言ったようなものよ」

「・・・じゃぁ嬢ちゃんは勘が良いんだな。あいつはその場で此奴を作りやがった」

「え？」

そう言いはしたが、親方は座ったまま何も取り出そうとしない

てっきりそのリクが作った物を見せてもらえると思っていたので不意をつかれて小さく声を漏らしてしまった

いや、何も出す必要がないという事はすでにその場にそれが出ているということ

「・・・・これですか？」

机の上には先ほど取り出された耐火石

え、でもこれって普通の状態なんだろう？

・・・いや、先入観をもって見たら駄目だと自分に言い聞かせる

すると先ほどとは違ったようにその石が見えてくる

高価な物であり、これが全く手を加えられていない物とは言っていない

少し考えたらそんな高価な物がいくつも有るわけがない

火薬と合わせて作ったと言うから何か別の物を作ったのかと思ってしまったがそれは間違い

実際には最初から加工済みの石を出されていたのだ

「で、普通の耐火石とどう違うんですかこれ？」

とはいえ、どこに手が加えられているのかが分かるわけでもなく俺にはそれがただの石にしか見えない

元の状態を知らないから・・・という訳では無いだろう

見たところ加工された痕跡はない

じゃぁどう手を加え、何を作ったのか？

「仮面の旅人は気がついているのかい？」

「・・・そうですね。恐らく石の半分ほどに術式がかけられているんじゃないですか？微弱でわかりにくいけど・・・たぶん反発・・・。マナを反発させる術式・・・かな？いや、火のマナだけを反発させる術式だ。火のマナを通さない元々の特性を上書きしているのか？」

「流石だなぁ。それを調べるだけに俺は半年もかかったんだぞ。全く術をかけた本人も何をしたのか分かってないようでな。何が変わったのかを調べるだけでも相当苦労した」

「・・・どう違うんだ・・・」

少し考え、訳分からんと頭を抱えてゴンと机に打ち付ける一条さん

まぁ確かにどう変わったのか分かりづらい

火を通さないのと弾くのは違うのか？

通さないから弾いていると思っていたんだが

「そうだな・・・。普通の状態は火のマナを通さない。通さないがこれは弾いている訳ではなく、ただ通さないだけなんだ。逆に火のマナ、魔力を弾くという事は完全に寄せ付けないという事になる。言い換えるなら無力化だ」

「そういうことだ。そこの小さい嬢ちゃんの為にも簡単に説明してやる」

お願いします。なんか高校生の俺でもさっぱり理解できません

親方は立ち上がり、シチューもどきを暖めていた竈へと近づく

手には先ほどの耐火石が握られており、火がパチパチと薪を燃やしている音が聞こえる

「普通の石をこの中に入れてもその石は熱くならない。耐火石というのはそういう物だ。だがこのリクが術式を組み込んだ耐火石。こ

いつは火のマナ、炎その物を弾く。マナの結びつきすらバラバラにして・・・・つまり――――」

鍋をずらし、ゆっくりと耐火石が握られている手をユラユラと揺らめきが増したように見える炎の上に差し出す

そしてその手が開かれ、クルリと反転する

重力に従いその石は炎の中へと消え、そして炎が消し飛んだ

文字通り、炎はそこから一瞬で消え去ったのだ

それと同時に顔や手のひらに暖かい空気が流れてきたのを感じた

「つまりは、こういう事だ」

竈には妙な魔術がかけられているようで、熱風と同時に舞い上がろうとした灰は竈の周囲に漂って部屋に飛び散るのを防いでいる

その事よりも一瞬で火が消えてしまったことの方に関心は行ってしまう

一条さんもカイさんも、千尋ちゃんでさえその光景から目を離すことは無かった

「ま、これが俺がリクに出した問いの結果だ。あいつは火薬を使っ

てこの耐火石を世界でたった一つの石をつくりだした。名付けるなら炎滅石。炎を弾き、マナの結びつきによって成り立っている炎をマナごと石とマナとの反発で吹き飛ばす。そんな石にしちまったわけよ」

灰に埋もれた炎滅石を親方の分厚い大きな手が拾い上げる

「予想したとおり、あいつは天才だったわけだ」

天才・・・

その言葉が俺の心の中で揺れる

『朝霧』

赤と呼ぶには薄すぎて、黄色と呼ぶには鮮やかすぎる
そんな翼が雲の切れ間を行く
肌で感じるその風を切ってその少女と獣は現れた

「お前がこの異変の原因か！？」

少年はその姿を見上げる

その少し前

ゼンさんの家で一夜を明かすが、あの後とうとうリクは戻ってこなかった

代わりに朝まで近くの工房の小屋で物音が聞こえていた

その音を目覚ましにして俺は早朝、靄の立ちこめる湖の畔へと出た

まだカイさん以外は寝ていた為静かにドアを閉めて外へ出ると肌寒い朝の外気が睡眠中に蓄えられた熱をひんやりと冷やしてくれる

おかげですっかり目が覚めてしまう

カイさんは何故か部屋の片隅で座ったまま微動だにしていなかったが恐らく寝ている雰囲気ではなかった

おはようございますと挨拶をしてみると意外にも目を閉じたままカイさんが頷いてそれに答える

だがそれっきり一言も喋ることは無かった

「んーっ、気持ちいい」

大きく腕を天高く伸ばして深呼吸をする

この朝の気持ちよさは格別である

昔から夜更かしをする人間ではなく、早寝早起きを心がけていたせいもあってか朝には強い方だった

自然と意識はハッキリしている

目の前の静かな湖が神秘的な雰囲気を醸しだし、小鳥のさえずりが

朝を告げている

太陽が昇る僅かに前のようでうっすらと空はゆっくりと薄く、鮮やかになりつつあるが太陽の姿はまだ見えない

「・・・・いいな」

凛と張りつめた空気を肺一杯に吸い込む

この平穏な風景がこれまでの旅路で乱れていた心を落ち着かせてくれるのを俺は感じていた

旅に出て、慣れない保存食や野宿の生活など、いろいろな物を一気に体験したような気がする

キャンプなんかよりよっぽどハードだ

そして忘れられないあの横穴での出来事

「・・・血・・・か」

二人の人間から飛び散る鮮血の映像が未だに瞼の裏にこびり付いてとれやしない

最後にあの洞穴で襲いかかってきた二人組の兄弟だろうか

その二人の防具の隙間へ剣を通し、片方ずつ腕を切り裂いた光景を
俺はまだ忘れてはいない

その技量、見事

僅かな防具の隙間へ的確に剣を通し、また威力を落とすことなく関
節を断ち切って腕を跳ね飛ばす実力

俺の目にも強烈に残っている光景

だが、俺はまだ良い

それよりも、一条さんだ

その光景を未だに引きずっているのは俺ではなく一条さんだろう

ここ数日の態とらしいテンションの上げ方

本人は気づいているのか気づいていないのか、どちらにせよ俺には
無理をしているようにしか見えない

とはいえ恐らく僅かでも一緒にいたとはいえ、それを見極めるのは
恐らく見ず知らずの他人にはできなかっただろう

だからといって、そのまま仮面を被り続けてもいずれはガタが来る

忘れられるのならそれでもいいが、できるだけ早く立ち直って貰い
たい

俺が支えになるとは言ったものの、彼女の堤防は未だに結界寸前な

のだ

異世界に来て、これまでに僅かながら元の世界ではあり得ないような事件が起こったのだ

闘技場の事も、旅の事も

そのうちどこかで野垂れ死にした人間、あるいは誰かが殺される瞬間というのを見る可能性もある

普通にしていればそんなことは無い

だが俺たちはいつも渦の中心にいる。そんな気がしてならない

吸血鬼みたいな奴らが狙ってきて、町の外には盗賊がいて、人を喰らう獣も沢山いる

普通なら引きこもっているのが普通だろう

それでも、自分に関係が無いのに遠方の地のマナを解放しに行くと言うのだからまぁいい人なんだろう

とはいえそんな彼女をつなぎ止めているのは恐らく俺と千尋ちゃんなんだろうなぁと思っている

俺が守ると言って彼女が頼る存在であれれば俺はそれでいい

彼女が守ろうと思っている存在が千尋ちゃん

頼る存在と守る存在があるからまだ大丈夫なんだ

それが最後の一線となる部分だ

旅には危険が付きまとう

その中で、俺や千尋ちゃんが死んでしまったら

頼っていた部分の重みと知人を失う苦しみがのし掛かり、守ることができなかったという自責の念に押しつぶされてしまうだろう

彼女は基本的に強くも脆い存在だ

前向きで明るい

それが本来の自分である為に、それを演じているのは負担になっているはずなのだ

「頼ってくれれば良いのに・・・」

今その一言を俺が言うのは違うと思う

もうその言葉はすでに言ったのだ。あの時にぶちまけた、言葉としては歪で統率の無い感情をそのままに口走った時に

もう手は差し伸べたんだ

一度は掴んでくれた

お願いだから自分から離さないでくれ

許すと言ってくれた

だから、そのまま信じて握り続けていてくれ！

もうこの手から離れていくのは嫌なんだ！

そう思っている自分が居る

でも彼女は今俺の手を握ろうとはしていない

自らの足で立ちあがろうとしている

乗り切ろうとしている

そう感じた

乗り越えられるのならそれに越したことはない

今後何が起こるか分からないような異世界で、人の腕が斬られる。

それだけの事で重い心を引きずって欲しくないのだ

ははっ、そんな俺も人の腕が切られる事をそれだけの事と言える事自体可笑しい

自分はどうしてしまったのか

異世界に来て、夢物語のように勇者みたいになって、活躍して、お姫様を守った気になっているのか？

人を傷つける事に抵抗を感じなくなってきている自分に嫌気が差した
あの大会の騒動の時にも迷わず前線で戦おうとした
そして敵とはいえ、傷つけようとした
俺はそんな事の為に力をつけたかったのか？守るためじゃ無かったのか？
相手を傷つける事だけが守る為なのか？
否、違うはずだと自分に言い聞かせる

「ソーレ、どう思うよ」

静かな湖にそう呟く
剣が僅かに熱を帯びた
朝早くからこんな愚痴に付き合ってくれるとは、なんと良い相棒だろうか

「さて、リク・・・だっけ？盗み聞きは関心しないなぁ」

振り返りながらそう後ろの小屋に向かって呟く

リクには聞こえなかったのだろうか、それともばれていないと貫き通す気なのか青年は出てこない

「まぁ聞かれて理解できるような事は喋って無いけどね」

もし聞かれていたとしても二言三言しか喋らず、俺が誰に頼って欲しいのかも、誰に問いかけていたのかも彼には分からなかっただろうただ何となく其処にその青年が居た気がしたからそう呟いた

勘は当てにするものではないが、バカにしたものでも無い

「・・・なんでバレたっすか？」

俺たちが泊まった小屋の隣に立つ工房の横の茂みからリクが現れた目を擦りながら眠たそうに歩いてきた

「そんな気がしたんだよ」

「うわ、出てこなけりゃ良かった」

「いいよ別に。聞かれて困ることでも怒ることでも無いし。俺寛大だから」

「そうっすか。寛大なんですか」

「気分によってはね。そういや昨日は何で夕食の後戻ってこなかったんだ？」

そう言うと昨日のようにまたその言葉を待っていましたと言わんばかりに目を輝かせ始めたリクを見て俺は正直、「しまった！」と声に出して叫びたかった

こういう人間は語り出したら止まらないような気がするのだものすごく

目をキラキラさせたままリクは手招きをして小屋へと向かった

駆け出すリクの後ろを小石を蹴飛ばしながら歩く俺

「あんまり工房に人を入れるなって言われてるんっすけど持ち出すのはちょっと恐いんで」

そう言って持ち出したのは黒い球体

直系三十センチほどの球体だ

え、まさか花火つくっちまったのか？

「遅いよ二人とも」

獣は地面すれすれを滑空するようにして飛んでいる

この丘を越えればすぐに見えるはずである目的地目指して獣は大きく翼を広げた

それと同時に翼が丘へと吹き上げる上昇気流を捉え、グンと高度を上げた

少女は眼下の湖を眺めた

「ここがイレータ湖かぁ」

決して綺麗な服とは言えないが、その服装は庶民が着るには少し鮮やかな気もする

「うん。やっぱりここだね。異変の原因は」

そう呟いて少女はイレータ湖を獣の上から見下ろす

フサフサとした毛並みをしっかりと掴んでその獣に降下するように合図を出す

すぐに主の命令を受けた獣は高度を下げる

そこに後ろから追いかけてきた二人が追いついた

「お嬢様、ハァ・・・もう少しスピードを落としてください。私はともかくハァ、ルオがハァ、厳しいですよ」

「あぁ、悪い悪い。気持ちよくてついね。ちょっと気走っちゃったね。ごめんねルオ」

少女は獣の上から最初に駆け寄ってきた従者の後ろについてきたもう一人の従者へ声をかけた

遅い方の従者の体型は少しふくよかにも見える

「い、いえ・・・お嬢様が、謝ることは、ありません・・・」

「そう言いながらもお前は遠慮無くぶっ倒れるわけな」

ふくよかな従者は草原にばたりと倒れ、息を荒げる

最初に追いついた方の従者はほっそりはしているがその腕や足に見える筋肉がしっかりしているためほっそりというイメージは無い
余分な肉は無いが、余分な筋肉もない為僅かな筋肉が盛り上がって見えるのだ

「さて、ついたね。イレータ湖」

「ですね。恐らくここに原因があるのでしょうね。どうします、少し休みますか？」

「んー、私はずっとミャーに乗ってたから大丈夫だけど・・・ルオはきついよね。とりあえずシャンはルオと先に宿でも見つけておいて。私は先に湖の方に向かいたいから」

その言葉にルオは僅かに反応しかけた。が、その口からは荒い呼吸の音しか聞こえない

シャンと呼ばれた細身の女はルオを振り返り、再び獣の上で胡座をかく少女へと向き直り口を開く

「お嬢様を一人にするのは少々抵抗がありますが、ですがまぁルオがこの調子ですしグリフォンを連れて街中へ行くのも一旅人としては少々目立つでしょうね」

「グリフォンじゃなくてミャーって呼んでって言ってるじゃん」

ミャーと呼ばれた獣も嘴をカンと鳴らしてシャンを睨み付けた、ようにも見える

そんなシャンの背中には漆黒の大鎌が見える

鎌には皮のカバーがかけてある

翼を一度大きく開いてばさりと羽ばたきグリフォンはそのまま四肢をおってその場へ座り込む

「いえ、その・・・どうもやはり良い思い出が無いものですから」

目をそらすシャンに少女も心当たりがあるようでバツが悪そうに少女もまた視線をそらす

「むぅ・・・まぁいいや。とりあえず私は先に湖に向かうね」

「では私は宿を見つけてすぐに湖へ向かいましょう。いくら湖が広くてもグリフォンの耳ならば私の場所も分かるでしょう」

「・・・分かった。じゃぁルオを置いてきたらこれ吹いて」

そう言って少女は小さな笛をシャンめがけて投げる

シャンはその笛を受け取り、それを服へとしまうとルオを抱え起こす

傍目には結構重そうだがあまりその表情には苦はなさそうにも見える

「吹いたらそっちに向かうから。もし何かあったら私の方も同じのを吹くよ。それじゃぁまた後でね」

「はい。危険はないと思いますがお嬢様も気をつけて。くれぐれも面倒事を起こさないでくださいね。後が大変ですから」

「分かってる分かってる」

そう言って上昇の合図を出す少女

グリフォンのミャーはゆっくりと立ちあがり、翼を広げる

そして勢いをつけて真っ直ぐ上に上昇を始める

「ではまた後で」

そう言ったときにはすでに少女とグリフォンは湖へ向けて飛び去っていた

「まったく・・・いつも僕ってお荷物扱いだよね」

「・・・・・そんなことは無いさ」

「その間、傷つくなぁ・・・」

細身の女とふくよかな男もまた、湖の村へと向かって歩き出した

「・・・設計図とか説明とか殆どした覚えがないんだけど」

俺は驚いて何を言えばいいのかよく分からなかった

作り方も知らない

原理も俺たちが理解している訳ではない

だが彼は作り上げたらしい

「イメージは合ったんだけどどうも何かが足りないと思ってたんだけど、あのイラストを見て完全に完成イメージが浮かんだっす！」

あのイラスト一枚で彼は目の前に持ち出した一発の玉を作りあげたのだ

これが本当に自分が知るあの綺麗な花火になるのかと思うと若干気にはなるのだが、早朝からこんな物を打ち上げてもよく分からない

だろう

彼自身試しては見たいのだろう

早く夜が来ないかと待ち遠しいような雰囲気を彼から感じる

「あー・・・でも眠くなってきた・・・。徹夜で作ったからっすかねー？仕事までちょっと仮眠とってきます」

「あ、あぁ、そう」

そう言い残して彼は花火を仕舞い、工房を出て行った

取り残された俺もとりあえず外へ出る

するとようやく太陽が顔を見せていた

靄が差し込む光を反射する

「ん？」

そこで俺は気がついた

靄の光で見えなかった部分、ちょうど湖の中央に小島があることに

だが昨日散策したときにはそんな島は無かった

文字通り無かったはずなのだ
湖に島なんてあったら一目で分かるはずなのだが、それに今気がつくとういう事はあり得ないのだ

「あれは・・・」

だがその靄に浮かんだ影はすぐに消えてしまった
見間違いだったのか、それとも蜃気楼とかだったのかとも考えるが、確かにあそこに島が見えた気がしたのだ
とはいっても未だに靄が深く、対岸まで見渡すことはできないため確認すらできない

もしかしたら靄の隙間から対岸が見えただけかも知れないしまだ寝起きなので寝ぼけていただけなのかも知れない
目の前の湖で魚が跳ねた音がした
湖に近寄る

とりあえず顔でも洗おうとかと湖へと近寄る
清流のように透き通った水へと顔を近づけると自分の顔が水面に揺れていた

その瞬間、水に浮かんだ靄が乱れた

顔を上げて湖から立ちこめる白い朝靄を見つめると明らかに不自然な揺れ方をしている

何かが動いた！

咄嗟に目が視界の隅で動いた何かを追った

「お前がこの異変の原因か！？」

靄が吹き飛ぶ

大きな翼が靄を吹き飛ばし、その乱れた空気の流れが視覚化する

女の声だ

それも恐らく成人女性ではなく、もっとずっと若い子供の声

だがその姿は霞んでよく見えない

「誰だ・・・？」

静かに呟く

「ミャー、距離をとって！」

「クオッ！」

シルエットで浮かび上がったその巨大な影は一瞬にして後退して靄の奥へと消えていく

何だ！？

明らかにこちらを警戒した行動を取る相手に咄嗟にソーレを抜いた

短刀に魔力を流し込む

カイさんから譲り受けた風王奏は今は小屋の中である

「君は誰だ！？」

そう問いかける

突然の事に戸惑っていたのは確かだった

もし自分が武器を抜いていなければ

もし自分が帽子をつけてきていれば

もし相手が勘違いをしていなければ

その問いに帰ってきたのは巨大な影の突進だった

攻撃！？

「っあっ！」

咄嗟に横へ飛んでその突進を避ける

その影の正体を見ようと地面にはいつくばったまま影の方を見るが

その影はすぐに反転して靄の中へと消えてしまう

朝っぱらからなんなんだ！？

とりあえずみんなを起こそう！

そう思ったとき、すでにカイさんが俺の後ろで立っていた

「魔力の流れを感じて来てみれば・・・ふむ・・・でかいな」

カイさんが腕を組みながら影の消えていった湖の靄を見つめる

そう言えばカイさんはすでに起きていたんだっけか

それにしても先ほどの影が何なのか見ていたのだろうか？

黄土色の体色に巨大な翼からそれは獣を感じさせられた

だがそこからしたのは少女の声

一体どういう事なのか？そして俺は何故こうも唐突に攻撃されているのか？俺にはそれが全く分からなかった

そんなこんなでいろいろな思考を巡らせていると、靄の中から甲高い笛の音が聞こえてきた

『旅人と旅人』

アリス・メルストンは風の民と呼ばれていた部族の一人であった
少女は風の民の証でもある水色の髪と不思議な紋様の描かれたローブを纏っていた

風の民の集落は大陸南部、アルデリア王国の最南端に位置する海沿いの崖の近くにあり、海の前に横たわるようにして西東へ伸びる小さな山岳にそのぶぞくの集落はあるとアリスは聞かされている

海が近く、海から吹く風が山へとぶつかり上昇気流を生み出す
その為風が強い場所としても知られる

そんな場所でも風の民は昔から風と共に今日まで過ごしてきたと聞く
少女はそんな集落の長であるメルストン家の長女として生まれたらしい

らしい、というのも自分ではその風の民として生活していた頃の記憶が無いのである
記憶喪失という訳では無い

ただ単に、自我を持つより前に彼女は集落を離れて遙か北方の方で

生活をしていたからである

グリフォンのミャーとはそこで出会った

自分の身の回りの世話や教育は全てシャン・アルティとルオ・カリオンがしてくれていた

男と女だが、少女はその二人が自分の父親でも母親でも無い事が分かっていた

親の名字はバラバラであり、また自分の名前もアルティでもカリオンでも無いメルストンという名である

分かっていながら、その事を二人に問おうとはしなかった

二人の姿を見ていると、とてもではないが聞く気になどなれなかった

そんな雰囲気を肌で感じていた

気にはなっていた。だが二人が生みの親で無い以上、一体誰なのかという疑問は日に日に大きくなっていく

12歳の誕生日

その頃になってようやく二人はいろいろな事を話してくれた

自分が風の民の長であるメルストン家の長女である事

二人はそのメルストン家の側近であった人間で訳あってそこから逃げてきたこと

決して人さらいなどでは無く両親の決断によるものであること

そして１２歳の誕生日、打ち明けて欲しいと頼まれていたこと

いろいろな事を聞いたが、結局何故風の民の集落を抜けて北方の地へと逃げてきたのかを聞くことはできなかった

１２歳というのはある程度物事を正しく理解し自分で判断をできる年頃ということらしく、それまではできる限りの事を秘密にしておいて欲しいと頼まれていたらしい

まぁ別に何があって生まれの地から逃げ出さなければならなかったのか

そんな事にあまり興味は無かった

これからもずっとこの三人で此処で過ごすものだと思っていた

だが事態は急変、突如使者が訪れ風の民の集落へと戻るように命ぜられる

実の父からの伝言だという

北の森にあった家を出て、ずいぶんと南へと来たものだと思う

育ちの故郷を出るのにはたしかに戸惑いや不安があった

だがそれよりも家族に、本当の家族に会ってみたいという思いもどこかにあったのだろう

決断を迫られた私はその地を離れることに決め、二人の従者と共にこれまで旅を続けてきた

とはいえ移動の大半をミャーに乗っていたため其処まで辛くはなかった

ルオが時折乗りたそうな眼差しでこちらを見つめてくるが、何分重いのかミャーがルオを背に乗せて飛ぶのを頑なに拒むのでしかたない

そしてその道中で立ち寄ったのがこのイレータ湖

どうせ向かうなら各地の観光名所を巡るのも良いと、こうしてしばしば観光地へと足を運んだりもしてきた

これまでには旧大陸王朝時代の旧王都の古城やアストーン王国の大地の目と呼ばれる巨大な地面の裂け目などを見てきたりもした

だが今回訪れたイレータ湖

まずシャンがその異変に気がつく

湖の周囲のマナが薄く、逆に湖に溜まる膨大なマナとのバランスがとれていない

マナの実りが巡ってくる前だとしてもこれはおかしすぎる

もしかしてこの土地では当たり前だったりするのかと思ったが、湖に近づけば近づくほどそのマナは減少しているような感じである

育ちは北の森であるため、アリスは小さな頃からそういった自然環境に良くないことはすぐさま察する人間だったのである

またその異変について調べてみようと言い出したのもまたアリスでありシャンは頭を抱えた

急ぐ旅ではないので立ち寄ってはみたものの、恐らくこの妙な異変を自分で納得できる形で解決させないと梃子でも動かないといった雰囲気のアリスを見てシャンは少しばかり長居になるかもしれないなと思った

あのお嬢様は良くも悪くも強情な性格でもあるのである

ルオは私たちが戻ってくるまでに切れかけていた携帯食や道具の買い換えなどを行っておくと言っていた

早朝ということでなかなか宿を見つけるのが大変だったが何とか町の外れの宿を見つけて其処にチェックイン

とりあえずはお嬢様に合流だとルオを宿に残して湖へと向かおうとした

ピィィィィィィィィ

「この音は・・・」

ポケットの中からお嬢様に渡された笛を取り出す

これが吹かれる時は、私が用事を済ませてお嬢様と合流するため

そしてもう一つ、お嬢様に何かがあったとき

別れ際の言葉を思い出し眉をひそめる

グリフォンと同行しているため滅多なことでは魔獣に襲われたりすることは無いだろう

となると何かを見つけたか、それとも・・・

何にせよ、何かあったから笛を吹いたのだ

ならば従者である私が遅れてはお嬢様の機嫌を損ねてしまう

従者としてできればそれは控えたい

まぁ気分を損ねたとしても半日もあれば異国の食べ物や名所に釣られて忘れているだろうが

町の静かな路地を女性は静かに駆けだした

「悪人め！しらばっくれたってそうはいかないわ！」

空から声が聞こえてくる

あの獣に乗った少女の声が

「悪人って・・・お前何かしたのか？」

疑惑の目を向けないでくださいよ！仮面で見えませんけどそんな目をしている気がする

「してませんよ！ただここで良い景色だなーって思ってただけです！」

そんなカイさんに反論する

まぁカイさんなら俺の無実を信じてくれてもおかしくは無いと思うが、あちらの少女はどんな勘違いをしたのだろう？

人を襲うなんて勘違いをさせたような事はしたつもりは全くない

相手の少女は何かの魔獣に乗っているようである。その魔獣は大きな翼を持っていた

その魔獣は逞しい四肢を持っていた

「な、何なんですかあれ！？」

「グリフォン。Ａ＋ランクの魔獣だ。滅多にお目にかかれないぞありゃ。お前達の世界には居なかったのか？」

「居るわけ無いでしょぁんな生物！」

そういって指を朝靄の中へと向ける

そこには白い靄のおかげで相手の姿は全く見えない

てゆーかグリフォン！？でかくね！？

子供とはいえ人を乗せて楽々飛ぶなんてどんな筋力をしてるんだあの翼！？

「兎に角、あちらの誤解を解かないとな。湖とは丁度良いな。魔術が使い放題だ」

カイさんがそう言うとその足下に巨大な魔法陣が浮かび上がる

しかし一体何をしようというのか彩輝には全然分からなかった

相手の姿が見えず、大きいとはいえ空を飛んでいる魔獣をどうするつもりなのか？

「ミャー、上昇！」

朝靄の中から声が聞こえてきた

「む、悟られたか。どうやらマナの流れを読むくらいはできるらしいな」

どうやらカイさんが発動させようとした魔術のために湖のマナを魔力に変換していたのがばれたらしく、警戒して更に距離を取ったらしい

こちらからは相手が見えないがそれはあちらも同じであり、むしろ靄の中で視界が悪く不利なのは相手側の方である

靄の天蓋を破って雲の尾を引きながら一匹の獣が上空を目指す姿を俺は捉えた

「あれがグリフォン・・・」

朝日を浴びて霞んでいた影が一気に色を濃くする

靄を振り払うようにして上空に待機したグリフォンの上には人影が見える

嘴を持ち、黄土色の毛並みに二枚の逞しい翼
四つの四肢の途中からはその黄土色の毛が消えて鳥のような手足をしている

「その短刀は仕舞っておけ」

「・・・はい」

まずはこちらに戦意が無いことを示さないといけない

ふむ、なるほど

納得してそっとソーレを鞘へと戻す

昔から自分は目が良いと少女は自負している
だからあいての一挙一動を離れた上空からでもしっかりと見る自信があった
小さい方の男が手にしていた武器を鞘へと仕舞う

「距離を取ったから魔法を使う気？」

当の本人とは全く逆の解釈をして警戒を強める少女

それも先ほどのマナの収束に気がついていたからこそ、相手が魔術師で警戒する必要があると判断して距離を取ったのだ

少年は予想通り武器を鞘に収めていた

恐らく魔術を発動させてくるだろう

水か氷か雷か

いずれにせよこの間合いが有ればいくらでも回避はできる

「早く来てくれシャン・・・ッ」

少女は従者の名前を呼ぶ

「どうします？」

「知らん。というかあれは何者だ？グリフォンを操っているように見えるがおサクラより若く見えたぞ。気性が荒いグリフォンをあそこまで完璧に手なずけるとはな・・・信じられん」

その少女は空中で制止して攻撃を仕掛ける様子も逃げる様子も見せ

ない
ただただその場から見下ろしているだけだ
辺りにはグリフォンの羽音と静かな水音しか聞こえない
最初にしびれを切らして動いたのは少女の方だった
膠着状態の静けさを無理矢理終わらせるかのように少女はグリフォンに向かって命令を飛ばす

「ミャー、一気に降下！」

グリフォンはふわりと一度浮き上がり、その後羽を畳むようにして一直線に立ち込める真っ白な靄へと突っ込んだ
靄を切り裂き、正面から少女が現れた
その間僅か3秒
呪文を唱える暇も与えず少女は二人の目の前に現れた
それでも手の届かない位置でグリフォンを停止させている
なんだか彩輝はジッとこちらを見つめる少女の瞳はなんだか年相応ではない不釣り合いな気がした

「君は誰だ?」

カイさんが口を開いて少女に問う

「お前達こそ何者だ」

カイさんの質問には答えず、少女は逆にこちらが何者かと聞いてきた

「旅人だ」

間髪入れずにカイさんはそう答えた

間違ったことは言っていない

少女は瞳を僅かに細めたが次の質問に移った

「この湖で何をしていた?」

「何をって・・・立ち寄っただけだが?」

とりあえず本来の目的は誤魔化したカイさん

世間一般には神獣の事や神子の事は秘密だからしい

「こんな朝早くから旅人が湖の畔に立ち寄るのか？魔術が使えてこの異変に関係しているお前達を見逃すほどこの私は甘くないぞっ！」

「そうは言うがなんで俺たちがこの妙な異変に関係していると思うんだ？見ず知らずの旅人を襲うぐらいだから何かしらの根拠は有るんだろう？」

カイさんはそれを聞く

俺も正直襲われた理由ぐらい聞かないと納得いかない

「そんなのそこのお前がコソコソと異変の起こっている湖で何かしてたんだ。お前意外に怪しい奴が何処にいる！」

自信たっぷりに少女に指をさされ

「納得いくか！！」

思わず俺は叫んだ

「問答無用！言い訳なんて聞かないよ！ミャー、二人を捕まえて！」

「話し聞けー！！」

「クカァァッ！！」

巨大なグリフォンが後ろ足で立ち上がり大きく翼を広げて叫んだ

明らかに攻撃態勢に入っている少女とグリフォンの目を見てこれは

身を守る方が先決だと短刀を抜こうとしたそのときだった

「ぎゃんっ！？」

少女が悲鳴を上げ

黒い風が彩輝の首元を駆ける

刀身を半分ほど抜きかけたところでその腕はピタリと止まる

一瞬にして血の気が引いた

「双方剣を引け」

喉元には巨大な鎌があった

漆黒の鎌が俺の瞳を映している

ごくりと唾を飲もうものなら反射でこの首が霧飛ばされてしまうような殺気を当てられる

女だ

若い女性が俺の喉元に巨大な鎌を向けている

細めた冷たい視線が俺を見つめる

「剣を、引け」

ゆっくりと抜きかけたソーレを鞘へと戻す

チンと小さな音を立てて剣を収めた俺は視線で少女の行方を追う

少女はいつの間にかグリフォンの背から女性の持つ鎌の棒の部分に引っかかってぶら下がっていた

「そこのお前もだ」

背後にいるカイさんもどうやら剣を抜いていたらしい

が、背中に目がない俺はそれを確認することはできない

カイさんでも反応できなかったのだろうか？

静かに剣が鞘に収まる音が聞こえた

「それでいい」

女性がそう言って彩輝を再び見つめた

綺麗な女性だったがその視線は冷たく冷静だった

なんだってんだよ全く!?俺が何をした!?

「さて、二、三質問させて貰おうか」

湖の対岸にて

早朝、静かな朝靄を眺めていた男はゆっくりと腰を上げた

情報によれば今日は絶好の日であるだろうと男は判断していた

だから作戦の決行は今日にしようと決めた

「起きろ、ゴ、ハチ」

男が後ろの木の上で眠る同胞に声をかける

が、起きてくる気配は全くない

苛っと来た男はその木を思いっきり蹴る

結構大きな木だったが、その男の一蹴りで木は大きく揺れた

数枚の葉と共に二つの影が折り重なるように落ちてくる

「ぎゃっ！？」

そして先に落ちた方は地面に落ちた衝撃と上から落ちてきたもう一人の仲間に押しつぶされて悲鳴をあげた

そして後から落ちてきた方は下がクッションになった為、何もなかったようにゆっくりと起床した

「どけよーゴー！」

「おら、さっさとそこの湖で顔洗え」

二人纏めて男は片足で蹴り飛ばす

ドボンと音をたてて二人は湖へと頭からダイブした

「目が覚めたか」

「寝起きの時点で覚めてたよテン・・・。うぇーびちょびちょだよ」

水を滴らせながらゴとハチは上陸する

「さっさと起きない奴が悪い。おら、今日やるぞ」

「え？あー、ほんとだ。朝靄で真っ白だねぇ。雲の中に居るみたい」

ハチは辺りをキョロキョロと見渡す

「雲もない。うん、条件としてはピッタリだね。後は朝日なんだけど、夜明けまであとどれくらい？」

「数分だ。そろそろ湖上に展開しておいた方がいいだろう」

男がそう言うとするりとハチが翼を広げた

黒く艶のある翼が大きく羽ばたくとハチの体が宙に浮く

若い少年であるハチに続くように子供のゴも後を追って翼を広げて

飛び立った

ハチは南へ向かい、ゴは北へと向かった

最後にテンがふわりと空へと飛び立つ

靄の中へと消えていく二人を見送って湖靄へと消える

そして夜が明ける

朝の日差しと共に、その社は湖上に現れるらしい

虹魚の月に近づくとその社の目撃情報は増えるらしく、その時期にのみこの湖では湖一帯に靄が立ち込めるそうな

まるで誰かからその社を隠そうとしているように

言い伝えによるとその社は虹色の膜を纏っており、ある一定の条件が満たされた時にのみその姿を視覚で確認することができるのだそうだ

その社には宝玉と宝剣が収められ、湖の主を祭っているのだそうな

朝靄に　隠れる　社は　虹纏い　夜明けと　共に　目を　覚ます

湖の畔に、誰が立てたか小さな石碑がたっていた

そして湖の中央

水に浮かぶ小さく真っ赤な鳥居の向こうに小さな社があった

「見つけたぜ・・・虹魚の社・・・」

『湖の異変』

ふわりと鳥居の上に降り立つ
ここまで来てしまえばもう見失うこともないだろうとゆっくりとその社を鳥居の上から眺める
真っ黒な翼をたたんでテンは社の状態を確認する
噂には聞いていたが此処まで近寄れたのは初めてなのである
所々痛んではいるようだがまるっきり放置されているという状態ではなさそうだ
湖から伸びる何本かの柱の上に社は建てられており、人の気配はないが人が使った形跡は残っている
夜明けの一瞬にしか姿を現さないこの場所に入り込んでしまえばもはや気にすることは何もない
湖から社へとのぼるための小さな階段の中央が凹んでいたり一部木を足したりした跡が残っている

「さってと、じゃぁ行きますか」

吸鬼のテンはそのまま後ろに倒れる

鳥居の前に落ちるテンはクルリと一回転して翼を広げ、そのまま鳥居をくぐって社へと着地した

「しっかし、遠くの方でなんか感じるなぁ。まぁいいか。さしたる問題は、無いッ！」

社の扉を強引に開ける

鍵が掛かった扉に腕で殴って穴を開ける

そのまま周りの留め具ごと扉を湖へと放り投げる

開けると言うより破壊に近い行為である

「なんでぇ、結界も何も無しかよ。つまんねぇなぁ」

そう良いながらテンは社の中へと足を踏み入れる

小さな社のため、中も狭い

其処にあったものを見てテンはニヤリと笑みを浮かべて近寄る

目の前にはずっと探していた探し物があるのだ

それも二つも

「水玉、生流水。ま、こんな隠れた場所に置いてあるなら誰にもばれない訳だよ」

男は二つの宝具を前に一人呟く

静かな空間に男の声だけがこだまする

一つは宝玉

一つは剣

「まずは此奴」

そう言って小さな水色の玉を手に取る

透き通った水色の中に男の姿が映る

その玉を懐にしまい、そして視線を聖天下十剣の一つ。生流水へと向ける

「この場所で二カ所目か。長い間封印されていた割には呆気ない気もするが、まぁこれも奴を押さえ込んでるからか。抜け出される前にさっさと帰るか。そろそろゴも作業に取りかかってるだろうしな」

テンは静かに腕を剣へと伸ばす

剣は社の内部にある大きな意思の土台に突き刺さっており、そう簡単には抜けそうにない

手入れをされているのかされていないのかは分からないがその剣には刃こぼれや錆などは全く無い

しゃがみ込んでその冷たい刀身に指先が触れる

「・・・・強い結界だな。並の人間には抜けないんだろうな」

テンはスッと立ちあがりその剣を見下ろした

そのテンの周囲からゆっくりと闇があふれ出す

ユラユラと揺れていた闇は男の目の前の石に深々と刺さるその剣へと殺到する

そしてテンは腕を横にスッと動かす

バシンと乾いた音が社に響く

「でもま、関係無いけどさ」

石の台座には大きな亀裂が走っていた
男は石に擦れて傷がつかないようそっと剣を引き抜く

「水獣解放・・・！」

「お？」

首を傾げるハチは湖上で羽ばたきながら水面下をのぞき込む
自分の姿がユラユラとうつるが、その奥
巨大な気泡と共に巨大な影が湖を黒く染めた

「げ、もう結界きれたの！？いや――――」

最悪の事態を想定したが、それとは違う気質を湖の底より感じ取る
これは違う。警戒していた奴では無い
となるとこれはテンかゴが解放したものだという結論にたどり着いたハチは大きく翼を羽ばたかせた

それはつまり――

「あはははっ！いいねいいねぇ！楽しくなってきたよー！」

もう自分は社を探す必要は無くなった

それはつまり三つの目的のうち一つは終わったという事だ

一つはこの獣を解放すること

そして三つのうちの一つは僕の手にかかっている

最後の一つはゴの担当なので自分の仕事をさっさと終わらせようと

一度その影の全体像を見る

うん。やっぱりでかい

「やり甲斐があるねぇこりゃ」

少年はゆっくりと水面に映る影に接近する

ゴボリと音を立てて巨大な気泡がいくつか浮き上がってきた

「ん？」

影も同時に大きくなってきた

「ここで浮上!?ヤベッ・・・!!」

翼を広げて急停止するとハチは距離を取ろうとする

それと同時に巨大な影の咆吼が水の中から聞こえてきた

「なるほど・・・な。どうやらこちらが全面的に悪そうだな」

眉をひそめて長い髪の毛を掻く女性はそう言って気を失っている少女を見た

少女は今グリフォンの上で横になっており、気を失わせたのはこの女性である

グリフォンはキッとこの女性に睨み付けられて端で大人しくしている

あの一瞬でこの少女を無傷で気絶させて俺に鎌を向けるとはかなり

の実力を持っているのだろう

あの鎌もかなり重たそうに見えるが華奢な女性であの鎌を自在に振り回せるとは到底思えないが事実あのときの俺は完全に詰んでいた

予想していなかったとはいえ、彼女が俺を殺す気でいたならば一瞬にして俺の命はあの漆黒の鎌に刈り取られていただろう

とはいえ向こうにも俺を殺す気は無く、ただ争っていた俺とこの少女、アリス・メルストンを見つけて止めなければと思っただけらしい

気がつかずに俺がもう一、二歩歩いていれば確実に俺の首は飛んでいた程度の事であって殺す気は無かったそうだ

そう思うとゾッとして俺は再び冷や汗をかいた

シャンは頭を下げると主の非礼を詫びる

「すまなかった。私はシャン・アルティ。こちらは私の主アリス・メルストン。このグリフォンと、あとこの場には居ないがもう一人いるんだがそのメンバーで旅をしている。どうやら主が勘違いをして襲いかかったようで申し訳ない」

「あぁ、えっと、はい」

その後俺とカイさんも自己紹介をする

「ところで、この異変には気がついて？」

自己紹介を終えるとシャンさんがそんな事を聞いてくる

異変？

もしかしてここに来てから感じていた違和感の事だろうか？

「えぇ。まぁ」

カイさんがそう答える

カイさんもその違和感のことは気がついていて聞いてみたら自分で考えろと言われたあれの事かと思い出す

「アリスはその犯人と間違えたんでしょうね恐らく。このマナの異変について調べると言って先に湖に向かってましたから」

「そうだったのか」

マナの異変

それが違和感の正体だと俺は確信した

この湖に来てからずっと感じていたのはこのせいだったのだと一人納得する

思えば湖に溜まっているマナを異常なまでに感じる

同じ水辺でもアルデリア王国とはまた違ったマナの質だ

あれが澄みきった水のマナだとするならば、こちらはいろいろなマナが混ざり澱んだ水のマナだ

何故気づけなかったのだと奥歯を噛みしめる

簡単な事だったと思うが、それに気がつけなかったのはやはり慣れ、だろうか？

まだマナや魔術を感じ取るのに慣れていないせいもあるだろうが、この世界に居る以上はある程度身につけてはおきたいと思ってはいる

「ん？」

「む？」

突如隣にいたカイさんとシャンさんが視線を湖の方へと向けた

「どうしたんですか？」

「クオッ！」

二人にそれを聞くが、その答えが発せられるより先にグリフォンも鳴き声をあげた

アリスを乗せたまま立ちあがったグリフォンはやはり二人と同じように湖を凝視してその翼を広げた

何か起こるのだろうかと俺も同じように湖を眺めた

静かな湖に異変が起こる

ドバアアアアン！！！

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォン！！！！

うぎゃぁぁ！！

水面が爆発した

巨大な水柱と共に巨大な何かが現れた

あとなんか叫び声が聞こえたような？

「なん――――――――！？」

大きすぎてゆっくりと飛び出しているように見えた

あまりに唐突で予想できなかった現象に、俺は言葉にならないほどの衝撃をうけた

その巨体は一瞬波間に姿を現したかと思うとすぐに水面へと落ちて再度巨大な水しぶきを上げた

先ほどよりは靄が微かに薄れていたのもあっただろうが、遠くであがった巨大な水柱もこの場にいた全員が視認できたほどに巨大であった

かき乱された空気の流れで靄がまた僅かに晴れた

「む？」

「・・・・気がつきましたか？」

「あぁ」

そんな時、カイさんとシャンさんはまた別の方向へと顔を向けている

湖の北の方向

ジッと自分も何かを感じれないかと意識を向けてみると、なにやらまた違和感を感じる

マナ・・・だろうか？

「どうなってるんですかこれ？」

「一点に湖のマナが収束しようとしている。おそらくは人為的なものだろう」

マナが収束している？

良くない事なのだろうか？

まぁどちらにせよ異様な事態であることには間違い無いだろう

湖の周囲のマナが湖に集まり、その湖のマナも一点へと集中していく

そしてさっきの巨大な化け物も何か関係しているのだろうか？

まさかあれが神獣だったりとか？

一体何が起こるというのだろうか、この湖で・・・

足下に先ほどの巨大な影の作り出した波が打ち寄せ始めた

カイさんが口を開いたのはそんな時だった

「少し、外させてくれるか？」

「え？」

誰もそれに答えることなく、カイさんは走ってどこかへと行ってしまった

・・・俺どうすりゃいいんだこの後！？

トイレなら早めに戻ってきてーカイさーん

知り合ったとはいえ、出会った人達の中に取り残されるのは正直心細かった彩輝の心の叫びはカイには届かない

聞こえてないのに届くはずもないのだが

大岩の裏手に一艘の木の船が浮かんでいた

大岩にくくりつけられたロープを外して船に乗り込もうとしたその瞬間

「よぉ。一人静かにお出かけか？」

背後からの突然の声に動きを止めてしまう

「・・・」

「俺の勝手な予想で悪いんだが、お前、神子だろう？」

一体何時ばれたのか

いや、そのことよりもなぜこの男が神子の存在を知っているのだろう？

男はゆっくりと大岩の上に立つカイを見上げた

「何者なんですか？」

一体お前は誰なのだと

その仮面に隠れた素顔のように、この男も何かを隠していると思った

「俺も、神子だ」

ゆっくりと、リク・ヒノトの前でカイが仮面を外した

『邪魔者』

「これいいですね」

「だろ？」

今、湖の上には水面を滑る二人が居た

一本の氷の道の上をカイが慣れた足捌きでリクを背負ったまま滑っていく

氷の道を造りながらカイはそのまま湖の中心部となる場所へとリクの指示で向かっている

成人男性とほぼ変わらぬ体重のリクを乗せたまま滑るカイは足にも氷の板をつくってまるでスキーのように滑っていく

「このまま真っ直ぐか？」

「はい。間違い有りません」

リクの中にはやはり戸惑いがあった

これまで神子という存在を隠して生きてきた先代や自分だったのに、
呆気なく神子だと言うことがばれてしまうなんて事は初めてだった

それを見破ったのがこれまた自分も神子だという謎の仮面の旅人

自分が呼び止めて泊まらせた旅人というのがまた奇妙な巡り合わせだ

旅人を小屋へ泊めた事なんてこれまで一度もなかった

あのときはこんな事になるなんて予想もしていなかった

よもや泊めた旅人が自分と同じ神子だなんていったいどれほどの偶然と確率なのだろうか

ただ、何となく悪い人では無い気がした

妙な仮面を付けているが、その下の瞳を見つめたとき分かった

信用できる、と

神子であったときの力は失ったが、生まれ持ったこの自分自身の力は失われなかった

神子として生まれた者には悪しき者とそうでない者を見分ける瞳が宿るというが、神子の力を失った今でもこの瞳は健在である

ということはこれは神子の力では無いのだということになるのかもしれないが、正直今はそんなことはどうでもよかった

「結界が張ってあるなんて全然気がつかなかった。湖の中央に社があるなんてな」

「そりゃまぁたぶん知っているのは俺ぐらいしか居ませんからね。先代の母は死んでしまいましたから」

「そうか。でもまぁこれで二人になった訳だな。どちらかが死んでも秘密は受け継がれるわけだ。二人とも死ななければの話だが」

「またまたそんな！演技でも無いことを言うものじゃないっすよー。あ、あと少しです」

「・・・・見えるのか？」

「勘っすね」

「・・・・そうか。一応信じておくとしよう」

カイは僅かにスピードを上げた

今こうして二人が湖の中央にあるという社に向かっているのもリクが感じた異変からだった

何者かがリクが張った結界を抜けた事を感じ取ったリクは一人湖の中央に隠された社へと向かおうとしていたのだった

そこにカイが合流、同じく神子だというカイと共にその社へと向かっているのであった

先ほど見た巨大な水柱と影の巨大な影の事も気に掛かるためカイは湖の水を直線上に凍らせて移動する事にした

足に氷の板を付けて滑るのだが、やはり足が冷たくなってきたためにカイは仮面の下に冷たさに耐える表情を隠してリクを背負って湖上を滑る

「ここです」

「んっ・・・ここか」

冷気を一気に放出して湖上に円形の氷の台座を浮かべる

一応陸から作った一本道と円形の台座は繋がっているが、風に揺れる水面に台座は揺れる

不安定な足場の上から二人の青年は周囲を見渡す

まだ靄がうっすら掛かっているが、それでも先ほど少女が少年に戦闘を吹っ掛けてきた時に比べればかなり晴れたと言っても言い

「本当に此処に社があるのか？何も無いように見えるのは俺の気のせいか？」

「いえ、間違い無いっすよ」

自信満々にリクが言うのを見てカイは冷気の放出を止めて台座を広げるのを止める

直系十メートルくらいの氷の台座の上でカイは腕を組んで隣のリクを見る

「其処までの自信があるってことは何かしらの根拠が――――」

「んっ！！」

一瞬、リクが力んだかと思うと突如目の前の空間が歪んだ

立ち込めていた靄ごとまるで空間が入れ替わるような

カイはゆっくりと浮かび上がる目の前の光景にただ驚愕してた

「一応その剣、抜いておいてくださいね」

「！！」

そうである、この結界を抜けた奴がまだ中にいる可能性もあるのだ

カイはスッと剣を鞘から抜き放つ

風王奏をアヤキに譲ってからというもの、腰に提げた剣は確かに重くなっているというのに、どうしてこうも軽く感じてしまうのだろうか？

譲ったその時にも後悔や心残りは無かった

何だろうなこの感覚は

カイはゆっくりと目の前に現れた社へと足場を作る

「扉がっ・・・・」

隣でリクが息を呑むのを感じた

無惨に壊された扉の破片を踏み越えて中が丸見えになったその社の中へと駆け寄るリク

その後ろをカイが追う

気をつけろと警告したのはリクの方なのにリクの方が逆に落ち着きを失っている

「そんな・・・」

膝をついて崩れ落ちるリク

内部には荒らされた痕跡が無い

だがリクの様子からして何かしらの変化があったのだろう

恐らく此処に捧げられていたものが奪われたりでもしたのだろう

とはいえそんなに時間は経っていない

どうやって逃げた・・・

そこでカイは大事な事に気がつく

もし手こぎ船で来ているとしたらここに来るまでに確実に視界に捉えていたはずだ

うっすらと靄がかかっていたとはいえ、かなりの視界は確保できていた

そしてもし水の魔術を使って船を高速で動かしているのならばマナや魔力の動きで察知ができたはずだ

それが無かったと言うことはまだ近くに居る可能性もあるが、それなら犯人は何処に居ると言うのだ？

「君たちは、一体誰を捜しているんだい？」

「！！」

「！？」

突如背後から聞こえてきた声に二人は同時に振り向いた

「これだけじゃぁ退屈だと思ってたんだよ正直ね」

クルリと剣を逆手に持ち替え、もう片方の手で水色の玉をお手玉のように操る

黒い翼が印象的なその男は満面の笑みを浮かべていた

「嬉しいなぁ。強者の臭いがするねぇ」

これは本当に厄介なことになったとカイは心底思った

こんな短期間にまさかまたこの種族と出会うことになろうとは

カイは静かに仮面の奥から男を見つめ、ぎゅっと剣を握る力を強めた

「どうします？」

「そうだな・・・。とりあえずいろいろと聞きたいこととかはあるんだが、その髪・・・何処の出身だ？」

んー、やっぱりそうくるかー

旅人と説明しても流石にこの黒髪は異様に感じるのだろう

黒って善か悪かと聞かれると悪って答えちゃいそうな色だしね。まぁ関係ないんだけど

恐らくただ単に同行する見ず知らずの人間の身元ぐらいは割っておきたいのだろう

とはいえ別世界から来たことは伏せておいた方がいいのだろう

ってどういえば良いんだ？

「遠くです。えっと海の向こう？」

「何故に疑問系なんだ。まぁ、そうか。海の向こうか・・・」

この大陸はある意味一つの島と言って言い。まぁ島という大きさでは無いので恐らく大陸となっているのだろう

この世界の人達はこの海よりも向こうに別の大陸があるのかどうかすら知らない

誰も大陸の外の世界を知らないのである
それ故に俺たちも他に大陸があって人が住んでいるのかどうかは知らない
ある意味都合が良かったのだろう
海の向こうから来たと言えばそれはそれで彼らは確かめようがないから俺が海の向こうからやって来たと信じるしかないのだ
事実この大陸には黒髪の人間など俺たち以外に居ないのだから
「海の外の世界か。いろいろと気になる事もあるし確かめようは無いが・・・信じるほか有るまい」
案の定シャンさんはある意味はぐらかされたような気もしているのだろう。まぁはぐらかした訳だが
とりあえずそれで納得して貰っていても今は別に問題は無い
どうせ今回のこと以外では殆ど関わらないだろうからと俺は考えていたからだ
「私としてはこの異変を解決するまでお嬢様の機嫌は良くならない

であろうから、早く解決して旅を続けたいところなんだが・・・」

そのお嬢様はまだぐっすりと寝ている

先ほどの巨大な水しぶきの音で起きてきそうになったが、瞼を擦って再び眠りに落ちていった

それよりも湖から何人か先ほどの音を聞きつけて見物人が集まりつつあった

目立つ行為は避けたいというのに

「原因が分からないのではどうしようもない。数日間は滞在する予定だが・・・果たして手がかりが掴めれば良いのですが」

関係があるのかどうかは分からないが俺たちの旅の目的は神獣である

もしかしたら神獣関係なのか？

とはいえそれは人に言えるような事じゃないしなぁ

なんて考えているとスッとシャンさんが立ちあがって湖に向き直る

どうしたのかと思って俺も湖の方向を眺めた

「どうしたんですか？」

「いや・・・何か湖の中央で魔力を感じたんだが・・・。小さなマナの動きが湖の中央まで続いていって・・・」

シャンはカイの放っていた氷の魔術の魔力を感じ取っていた

ただそれがカイの放っているものだとは知るはずもない

「遠すぎてよく見えないが、人がいるようには見えないな。魔獣か？」

試しに俺も魔力を感じてみようと瞳を閉じると、遠くの方からよく知った魔力の動きを感じた

「あ、俺も感じた。カイさんじゃないかな？」

「先ほどの仮面男か？湖の上だぞ。どうやって移動しているんだ？」

「氷の魔術で凍らせてるんですかね？」

「氷の魔術師かなるほど。腕が立ちそうだ」

何を考えているのかよく分からないが、とりあえず俺はカイさんの魔力に集中する

先ほど席を外してから何処に行ったのかと思っていたが、まさか湖の真上に居るとは思わなかった

何をしているのだろうか？

「クアッ！」

「ん、どうしたグリフォン？」

ちゃんとグリフォンには名前が付いているらしかったのにこの人は種族名で呼ぶのかと違和感を感じた

グリフォンは主である少女を乗せたまま湖を背にして町の方向を見つめた

まだ朝が早いとはいえ、すでに日が昇り始めたので人々が活動し始めているのだろう

昨日は露店なども多かったが、あれは朝は市場として機能するらしい

朝は市場、昼から夜は屋台という何とも不思議な仕組みだ

とはいえどうしたんだろう？

グリフォンはジッと身動ぎ一つせずに町の方向を眺めている

町とこの湖との間には海にあるような小さな防風林のようなもので区切られている

区切られているといってもその木々の隙間からは向こう側にある町は丸見えであるのだが

「ふむ・・・僅かに毛が逆立っているな。警戒や警告をしめしているんだよこれは」

「へ、へー。でも一体何に警戒しているんですか？湖の方に向かって警戒するならまだしも町に警戒するものなんてあるんですか？」

言われてみればその黄土色の毛がちょっとピンと立っているように見えなくもない

「んっ、んー？おはようシャン・・・」

「え、あはい。おはようございますお嬢様」

「なんかミャーがつんつんするぅ・・・シャンが二人いるぅ・・・」

そう言って寝ぼけて起き出す少女

目を擦りながら意識を覚醒させていくがそのなかでゆっくりと意識が途切れる前の出来事を思い出す

俺の顔を見てピタリと動きを止めた。目を擦っていた手も止まってジッと俺を見つめている

思考を整理しているのか、ラグっているのか

俺が咄嗟に思ったのは、あー説明してないなー。という事だった

「お、お前えぇぇぇ～！！」

「人を指さすなコラ」

目をぱちくりと見開いて俺を指さす少女

「ミャッ、ミャー！あいつ！あいつだ！こ、こら・・・！なんで言うことをきかん！？ほら、あーいーつー！！」

バンバンと少女は乗っているグリフォンの背をバンバンと叩くがグリフォンは依然として町の方向を見つめている

丁度その頃、湖の上からその一行を眺めるハチがいた

翼を羽ばたかせるハチは顎に手を添えて首を傾げる

「やっぱり殺気の音で寄って来ちゃったかぁ。こっそりやりたかったのに・・・」

ぽたぽたと滴る水が湖に小さな波紋を作る

全身ずぶ濡れの吸鬼は翼についた水滴を振り払う

「でも、興味深い人間がいるね。どっかでみたぞー？」

どこかで見た。そんな気がした

霧が晴れて湖の様子を見に来た人間の中になんだか違和感を感じた

ハチはそう呟きながら懐をがさごそとまさぐる

数枚の用紙を取り出す

「どこで見たんだっけなー・・・」

これも違う。これも違うとその用紙に目を通していく

そしてピタリと手を止める

そして用紙と陸地に立つその一人の少年の姿を見比べる

「・・・ぁおー、ビンゴビンゴ！嵩張るし置いてこようと思ったけど間違いだったね。あーテンの言うこと聞いておいてよかったー」

ハチの手元にあるその用紙には一つの似顔絵が描かれていた

以前グレアント王国に寄ったイチが持って帰ってきたものであった

彼曰く、張り出されていたであろう張り紙はお尋ね者の部類に入るらしく、見つけた者には賞金が出ると書かれている

まぁ恐らく張られていたものではなく、落ちていたものを拾ってきたのだろう

よれよれになり、皺が沢山ついたその張り紙には大きな足跡が付いている

まぁ書かれていた賞金の方には興味はなかったのだが、彼が以前黒龍の実験の時に邪魔をされたうちの一人にとてもよく似ているのだそうで一応持ち帰ってきたらしい

邪魔者はもちろん排除の対象だが、こいつはその対象だと前回のアルデリア奇襲の後で言っていた

その時にもこの似顔絵の人物が居たらしい

テンが何故この用紙を持って行けと言ったかと聞かれれば、ただ単に彼は戦いたいだけなのだ

あの年頃は誰にでも有るらしいが、とにかく戦いたい衝動にかられるらしい

イチなどはもう過ぎたらしいが、やっぱりああはなりたくないものだとハチは常々思う

何故そんなに自ら厄介事に首を突っ込むような体質になってしまうか

吸鬼という種族であるせいでできる限り世間にその存在を悟られてはいけないのだが、彼を単なる殺戮者に堕ちていないのはそのせいだ

その枷が外れてしまえば彼はただ殺しを楽しむだけの獣となるだろう

やっぱりいくらなんでも其処までなりたくないと彼を見て思ってしまうのだ

その枷を唯一外せる方法がこの紙なのだ

外出時には彼はいつもこれを持ち歩く

つまり、ゼロの命じた“邪魔者は消せ”という命令がその枷を一時的に外せる効果があるのだ

その命令に従う事はつまり、戦って殺せという事に繋がるからだ

戦いを生き甲斐とするような彼はつまり、このお尋ね者や邪魔者のリストを常に持ち歩いているのだ

戦いを探しているといってもいいだろう

とまぁ少し話はずれたが、それにしても偶然にしてはできすぎているんじゃないか？

「邪魔者は消せ・・・ねぇ・・・」

その少年がこの湖に居る

もう少し彼の魔術や実力の事を聞いておいてもよかったかもしれないなぁ・・・。

そう思いながらハチは用紙を懐にしまう

「テンを呼んでも良いんだけど・・・」

ちらりと湖の中央を向ける

テンの姿は見えないが、水獣を解放したという事はもう隠された社へはたどり着いているはずだ

その場所に結界でも張ってあるのだろう。ここからでは見ることができない

つまり教えられない

「まぁ教えて騒ぎにするのはまずいし・・・。でもなぁ」

黒龍の実験とアルデリア王国の襲撃。その両方に関与した吸鬼とあの少年

そして今回のこのイレータ湖でまたしてもその少年と吸鬼が居合わせている

まさか事前に自分たちの行く先がばれているとも思えない

未来でも見ているのかと疑いたくもなるが、見た目からしてまだそう年を取っているようには見えない

周囲に何人か人の姿もあるが、実力が分からない以上ここで攻めていいものかどうか迷うところだ

一般人ぐらいなら問題ないのだが、一度目は神獣や龍族を身方に、二度目は各国の優秀な騎士が居合わせていた場であった

実験に使った黒龍は息絶え、こちらの実験を成功させるための揺動とはいえ、宝玉奪取の為に念を入れて若年混じりとはいえ吸鬼が４人とこちらの味方についた男も会わせれば五人、それに加えて復活させた魔獣も送り込んだというのに、それでも失敗しているのだ

アルデリアの襲撃には裏でハチも動いていた

あの巨大な魔獣を後ろで操っていたのはハチなのである

操ったと言ってもそう指示しただけなのだが、それでもまさかあんなにボロボロになって戻ってくるとは思っていなかった

それにまさかのイチとサンという成人の吸鬼が二人もやられて来るとは完全に予想外だった

とはいえ揺動は成功。実質各国から出された使者やらが吸鬼の復活を南方で耳にしてアルデリア等に向かっている頃合いであろう

黒龍の時の事もイチが目撃されていることから吸鬼が大陸南方で活動している事を予想しているだろう

せいぜい油断しているが良い

本当の目的は北だ

目的は宝玉と実験

実験はゴが行っているが正直あれだけ無口だとちゃんと理解しているかどうかが不明だ

まぁちゃんとマナの動きは感じているので恐らく現在進行形でその実験を行っているのだろうが

おしゃべりな僕と無口なゴに挟まれてテンも大変だなぁと今更ながら思った

さて、あの少年、どうしたものかな

南を攻め、次は西と来たわけだが、イチが南で出会っているその少年がなぜ此処にいるのか

まぁ正直どうでもいいが、これより北に向かってもらうのは困るのだ
ただよりにもよってこの作戦当日に吸鬼と出会すほどなのだ
どちらの運が良いのか悪いのか
テンは何処にも居ないし、せっかくの相手を僕なんかに消されたらそりゃぁ激怒して僕が微塵に消し飛ばされる可能性もあるんだけど・・・さ

「・・・うん。ばれなきゃおーけーでしょー。厄介の種は早めに詰んでおこう。芽を紡ぐのは簡単だけど、大木になって貰っちゃ切り倒すのも大変だからね」

ハチはゆっくりと翼を広げた
やることはやったし、一応水獣にも命じてあるからこれ以上面倒にはならないでしょう
少なくともあのメンツが増えることはない。上手くいけば減ってくれるね
後少し、後少し待とう

「待ってる間にテンが戻ってきたら・・・あ、どうしよう。僕死ぬ？あっ、譲ればいいのか。うん、そうだよね。別に僕がわざわざ戦わなくても良いんだし」

真っ黒な翼を羽ばたかせ、とりあえず見つからない位置までハチは
上昇する
そして眼下を見下ろす

湖、そしてゆっくりと潜ってぼやける影、小さな緑の向こうに見え
る町、その裏手に広がる標高は低いが木々が生い茂る山々

湖の方へとマナが搾り取られたその木々はやや緑が鈍っている

声が聞こえた

牙を研げ

爪を研げ

肉を食い千切れ

肉を切り裂け

本能のままに息を潜めよ

囲み、追いつめ、狙った獲物は逃さない

それが　お前達だ

カサカサカサッ

町の裏手に広がる小さな山から、幾つもの影が下りてくる

「なんだ・・・・お前・・・・・・！？」

リクは一人の男を視界に捉えた

本来ならばこの場にいるのはリクとカイだけであるはずだ

なぜなら結界に守られているこの社を見つけることができないはずだから

ならなぜこの男はここに居る？

そしてそれ以上に、あの翼はなんだ・・・？

黒の翼は室内への光を大きく遮断する

人・・・では無いのか？

「何だって・・・見ての通りさ」

男は社の柵に腰を下ろす

ニヤリと笑う男のローブが風に揺れている

右目を隠すようにして伸びた髪、そして左目に入った一本の縦の傷跡

片手には一本の剣が握られている

「俺を捜してたんだろ？剣と宝玉を奪った俺をさ」

「・・・あぁそうなるな」

驚きを落ち着かせ、崩れ落ちていたリクはスッと立ちあがる

その冷静になった脳で考える

今朝は靄が出ていた

社の結界が破られるのはその靄が出た日の出の光が差し込むという

一瞬のみ

恐らくその瞬間を狙ったのだろう

湖にはいくつかそういった伝承が書かれた石碑が建っていたりもする

それにしても靄で視界が悪かったというのによく社の場所が分かったものだ

驚くべき事は侵入方法よりも・・・

「よくこの台座から引き抜けたね。俺でも抜けなかったのに」

聞いた話ではこの台座には不思議な魔術がかけられており、突き刺さった刀が抜けるのは刀に選ばれた人間だけ・・・という話しだったのだが

もちろん俺も何度か試してみたことがあったが何度やっても抜けず、抜くときに傷が付きそうだったので最近では簡単に手入れするくらいしか触っていない

強固な岩でできた台座は無惨にも大きな亀裂が走り、そこに幾年ものあいだ抜けることの無かったその剣は今は無い

「あぁ、俺にとっちゃ大したこと無いんだよ。この程度ならな。さて、話は変わるが俺はとてもこの空間を気に入っている。一つはこの場所が周囲から隔絶された、誰にも見られない場所であること。そしてもう一つはお前達二人が居る事」

「・・・どういう事だ」

「鈍いなぁ。俺は吸鬼だ。そしてこうして今お前達に正体をばらしたところでそれを世間に広められることは無い」

「吸鬼・・・、絶滅していなかったのか・・・!!」

「そんなデマ、一体どこから流れたのやら。まぁずっと隠れてたからそう思われても仕方ないか。別にそれについては反論したいと思ってる訳でもないし。南であいつらが人前に姿を出してるんだから俺もやっと心おきなく外で戦いを楽しめると思ったのによぉ、まわってきたのはこんな仕事だ。外れクジを引いたかと思ったが・・・案外そうでも無いらしい」

男はそっともてあそんでいた宝玉を懐へとしまって剣をスッと頭上へ持ち上げた

「不思議な剣だな。聞いては居たが、実際に手にするのは初めてだ。水の流れと共に生きる剣・・・か。まぁたぶん水を操れるんだろうな」

リクはじっと男を観察する

正体を呆気なくばらした吸鬼だったが、それでもその異様な雰囲気や男の言動から此奴はやばいと本能が告げているのが分かる

この瞳も、あの目は危険だと言っている

とはいえこんな湖上のど真ん中からどうやって逃げるというのだ?

氷の道を戻るにしても距離が有りすぎるうえ、翼が有ることから飛べることは簡単に予想できる

そんな相手からどうやって逃げるというのだ?

それに、元神子として、この地の守護するという気持ちの方が、今は高かった

男は恐らく飛べる

そして恐らく入念な下調べをしている

だからこの社の事も、そしてここにあった剣や宝玉の事を知っている

相手にとって予想外であったのは此処に俺とカイさんという元神子が二人いることだ

ただ相手の会話の内容からそれはむしろこちらにとっては良くない方向に働いているようだ

とはいえ、カイさんはともかく俺の実力は殆ど無いに等しい一般人レベル

神子の力も無くなった今、この敵に対抗する手段は俺には無い

出入り口をふさがれている以上、外に出ることもできない

「さて、考え事は済んだかなお二人さん？こんなにワクワクするのは久しぶりだぜ」

男はふわりと空へと飛び上がる

剣を持った手をユラユラと揺らしてこちらを見下ろしている

社を出て俺とカイさんは二人を見上げる

何をしていたかは知らないが、此奴をここから出すわけにはいかないえないだろう？」

「此処は、俺が行こう。お前は一度岸まで戻ってくれ。あいつの言い方からして、あいつは強い奴をご所望らしい。お前、其処まで戦

カイが隣で男を見上げながらそう言ってきた

やはり自分が戦えないことはお見通しか

神子であることを見破られ、戦力としては不十分だと見破られ

それでもそんなに悪い気はしていない

それは当たり前の事であるし、否定はしていない

「えぇ、はい。俺っちは自分がそんなに強いとは思っていません。一応此処の神子は俺っちでしたけど此処は素直に従いますよ」

「そうか。あいつとは違うが、俺は一度吸鬼と戦っている。正直に言って、かなり強い。お前を守りながらというのも厳しいものでな」

「・・・ご無事で」

「滑って転ぶなよ」

リクは社の階段を駆け下りて氷の台座へと飛び乗る

吸鬼の方は動きを見せたリクの方を向く

「お、お前からやるのか・・・っておーい、何処行くんだ?逃げるのかー?」

「――――お前の相手はこっちだっ!!」

「っと・・・」

右手一つで大振りに斬りかかったカイの一撃を、テンは半身ずらして避ける

翼を大きく後ろへ引いて避けたその場所を切っ先が通り過ぎる

両者の体がすれ違うその一瞬に、カイは剣を手放し左手に持ち直す

驚く吸鬼めがけて今度は体ごと剣を切り上げた

「おぉ!?」

「っらぁ！！」

これはまずいと見た吸鬼は咄嗟に持っていた生流水でガードしようとする

が、カイの剣はその生流水をスッと分断してしまった

予想していない結果に両者は驚きと戸惑いを同時に感じ取った

通常であれば聖天下十剣はどんな物質であろうと一刀両断できるほどの鋭さを持っているのが特徴である

以前カイが手にしていた風王奏も、これまでに剣どうしの打ち合いではあのアルデリア王国の騎士隊長であるチル・リーヴェルトが所持していた蒼天駆以外止められたことは無い

だがこれは一体どういう事だ？

同じ聖天下十剣である風王奏で斬りかかっているならまだ分からなくもない

だが、こんな何処にでも有るような剣であの聖天下十剣の一つ、生流水を真っ二つにしてしまうとは予想すらしていなかった

むしろ相手があの剣を使うことを考慮して空いた右手に魔力を集中させようとしていた程だった

この世界で流通しているのは両刃の剣が主だがこれまでの癖もあるため、旅に出る前に刀の形の剣を鍛えて貰ったのだ

とはいえ聖天下十剣と比べるほどの剣ではない

一瞬何が起こったのか分からなかった

手に持った剣で防御を試みたのだが、その剣が突如真っ二つになってしまったのだ

あっけにとられ、そのあとすぐ吹き飛んだ意識を戦闘の方へと戻す

相手の表情は仮面のせいで分からないが、相手の剣が僅かにぶれて勢いが落ちた

その隙を見逃さず、テンは一気に後方へ距離をとる

剣を振り上げた状態のままの仮面男は落下を始めた

そのまま湖に落ちるかとも思ったが、あの氷の魔術で此処までたどり着いた様子を見ていた為に恐らく足場を氷で作るのだろうなと予想した

案の定仮面の男は足下に氷の足場を作り着地する

「・・・あれ？」

テンは真っ二つになってしまった剣を見る

折角手に入れた聖天下十剣だったというのに、もしかしてものすごく脆かったりするのだろうか？

存在までは知っていたが、そんな効果があるとは全く知らない

何せこれまで聖天下十剣の中でも最も人の目につくことの無かった剣であるからだ

一体何人もの剣豪がこの剣を探し、そして諦めていったのだろうか

伝承すらろくなものが残っていないのにこんなに脆いなんて聞いていない

そう思ったのだが

剣はまた綺麗にくっついているのだ

それも斬られた場所が分からないほど、いや、それ以上に全くのそのままなのだ

くっつけたというよりまるで新品になって戻ってきたかのようだ

「なんだその剣？」

「んー・・・聖天下十剣であることは確かだぜ？っつっても俺も全部が全部、能力を知ってるわけじゃねぇからな。下手したら今ので死んでたかもしれねぇし・・・。無知って恐いねぇ」

「やはり聖天下十剣か・・・」

先ほど男が言った水の流れと共に生きる剣というのから聖天下十剣だと予想しての立ち回りをしてみたが、どうしたものかとカイは考えた

男の剣が持つ能力が分からない以上、あまり不用意なことはできないと思っていたが、男がまだあの剣を手に入れて使い方を分かっていないのだとすればこれ程の勝機は無いだろう

ただ恐いのが、男が無意識に技を発動させること

遠距離系、近接系、あるいは幻術系や能力上昇系か

どんな能力が宿っているかは分からないが、水関係であることは間違いないだろう

そしてあの初撃を避けた反射神経

完全に目線はリクという青年を追っており、背後からの攻撃を察知し、またそれを避けるその実力もあるというのがとても恐ろしい

あの大会中に出会った吸鬼より実力があるのか無いのかは定かではないが少なくともあの吸鬼もかなりの実力者であった

そしてこの男からはそれ以上に嫌な雰囲気が漂ってくるのを感じる

リクを逃がして正解だった

とりあえず吸鬼が居ることを彼らに知らせれば、少なくとも今この湖で起こっている異変が吸鬼によるものだと理解はするだろう

「んー・・・逃がしちまったなぁ・・・。まぁいいか。どうせもう南じゃばれてるんだろうし。そういやお前、あんまり驚かねぇんだな？」

「その南で起こった騒動に俺も少し関わったからな」

「へぇ！！そいつは予想外だ！ってことはイチとサンを撃退させたのはもしかしてお前か！？」

声を荒げて興奮しているが、これは怒りや恨みによる興奮ではないことにカイは気がつく

男の表情を見てそれが喜びなのだと確信した

ニヤリと笑って男はこちらを見下ろし続けている

羽ばたきを続ける黒い翼の影がカイの影と何度も交わる

「残念だが吸鬼とは手合わせしていない。厄介な男とは戦ったがな」

「ふーん。あ、あの味方にしたってー人間の事か。俺はニーの報告で聞いただけで見たこと無いんだけどね。まぁでも、なかなか楽しめそうで安心したよ」

「楽しむ？戦いを楽しめるほどの余裕があれば、だろう？」

「言うねぇ。じゃぁお手並み拝見と行きますか。ついでにその仮面の下も興味があるんでね」

両者剣を構える

二人しかいない空間の中で、黒と氷がぶつかり合う

湖の畔の小さな小屋

二つの影が寄り添いあう

一つは成人してまだ間もない女性の影

もう一つはまだ子供の姿をした女の子の影

「うん。だからね、今日はしばらく外に出ちゃだめなんだよ」

「んー、分かった！」

「偉いね。じゃぁ朝ご飯作るからちょっとだけ待っててね」

「うん」

少女はちょこんと椅子に座って部屋に置かれていた小さな絵本を読み出した

字は読めないが、それでも絵を見て楽しむ様子を見て一条唯はスッと立ちあがって台所に着く

今この場に親方と呼ばれていたゼン・クリードというごつい男の姿は無い

それは別にいい。分かっていたことだ

そしてこれから起こることも

「はぁ・・・」

なんだか朝からストレス溜まってる気がするなぁ・・・

食器を準備しながらそう思った

この力・・・

私は水に濡れた自分の手をジッとのぞき込む

本当にこれで・・・いいんだよね？

そう疑念を抱きながら彼女は少し前の出来事を思い出した

あれはそう。ちょうどあのアルデリア王国の大会が終わって少しした頃の事だ

旅に出る少し前の出来事を脳裏に浮かべた

「お前、もう神子の力は発現しているのか？」

「はい？」

突如、城の廊下で外を眺めていると、あまり接点の無かったカイという仮面を付けた男に話しかけられる

確か先の戦いの中でも見かけたがなんだかんだと活躍していた旅の人らしい

城の廊下で立ち話もなんだと私は自分の為に宛われた部屋へと彼を招き入れる

客間のゆったりとしたソファに掛けさせてお茶を入れて彼に出す

仮面の下を見ることができるかと少し期待もしたのだが、カイは仮面を上に半分だけずらして茶を飲んだために肝心な素顔は見ることができなかった

んー残念。見たかった

「一度お前とは話しをしておきたかった。今お前の中にある神子の力は以前俺の体に宿っていたものだからな」

そうは言われても、と私は思う

あの龍に告げられてからというもの、この神子というものがどういう存在なのかとずっと考え続けてきた

神獣の溜め込んだマナを解放させ、大地にマナを充満させるという仕事があるらしいのだがなんで受け持った地域がここから凄く離れているんだろうか

どうせならその近くに出ていた方が楽だったのに

あ、でもそうするとアーやんとかに会えなかったのか

そう思うと少しではあるが良いことがあったかもと思えた

「はぁ。でも、なんか神子って言われても実感湧きません。特に変わったことは無いような気がするし・・・」

「見た目はな。見た目で分かるようになるのは覚醒した時だけだ。とりあえずそれより先に忠告をしておこうと思ってな」

「忠告？神子の力の代償とかで何かデメリットがあるとか？頭禿げ

るとかやだよ私」

なんで私は抗癌剤治療を思い出したのやら

私は元の世界に置いてきた友人を思い出す

まだ癌と闘っているであろう友人は今どうしているだろうか

あちらも連絡が取れなくなった私のことを心配しているだろう

未だにどうやって元の世界に帰ればいいのか分からず、成り行きに身を任せている。

こんなのでいいのだろうか

「は、禿げはしないと思う。それなら俺もとっくに禿げている」

「あ、そっか。そういやそうだね～」

「能力の副作用というより、能力そのものに注意して欲しいのだ」

仮面をしているというのに、その口調だけで彼がかなり真面目な話をしているのが分かる

私もちょっとは真面目に聞くか。自分の事でもあるしね

「えっと、まず質問なんだけどその能力って何？神子だけが使えるとかそういうの？」

「あー、そうだな。神子はそれぞれ別々の能力というものをその身に宿している。これは神獣の力の象徴と同じ系統の能力なんだ」

「神獣？あ、あのでっかい虹色の龍とかの事ね。うん。神獣は分かるんだけど、象徴の能力ってつまり神子が使える能力は神獣と似たようなものになるってこと？」

「その解釈であっている」

こくりと頷いてカイはもう一口お茶を飲む

また仮面を半分ずらして呑んでいる

隙間から見えないものかと机に身を乗り出して下からのぞき込んでみるがぷいっとカイはそっぽを向いて茶を飲み干した

お代わりを私は注ぎ、話の続きを聞く

「そうだな。他の神子の事は知らぬが、俺も神子としてその能力を使えていた。お前達が来るまではな。正直普通の人間に戻れた気がして嬉しい。お前達異国の民に押しつけておいてなんだがな」

ふーん。やっぱりその能力とか神子っていう肩書きでストレスが溜まったり周りと違う風に感じたりもするのだろうか？

人は誰しも、こう生まれていれば良かったと思うものだ
私もお小遣いを沢山貰っていた友人や大きな一人部屋を持っている友人を羨ましく思い、私もその家に生まれていればと思ったことはある
まぁ今の生活も好きではあるのだけれども、そう思ったことがあるのはきっと私だけではないはずだ

「あー、いいですよ。何となく分かりますもんそういう気持ち。それで、何が危ないんですかその能力？」

「その前に一つ聞くが、最近夢が現実になったことってあるか？」

「なんですか唐突に・・・んー」

私は顎に手を添えて天井を見つめる

白い天井だ

そう思いながら過去を遡ってみる

「んにゃ、こことしばらく夢は見てませんねー。うん」

「そうか。今お前の中にある神子の能力、それは一角天馬の持つ能力の派生、いや劣化か？どちらにせよその系統の能力で、名を『未

来予知』という」

「未来・・・予知・・・？」

未来予知と聞いてまず思い浮かべたのは地震だった

やっぱり地震を予知できればいいよなぁと私は常日頃から思っている

最近ではテレビに地震発生何秒前ーみたいなのが出るらしいが、機械にはそこまで詳しくないのでニュースを見てへーと思ったくらいだ

「未来を『見る』そして『変える』事が可能になる能力だ」

「・・・なんか凄すぎて想像つかないんだけど具体的にどういう事？」

へんな想像とかしか思い浮かばなかった私はカイさんにそう聞いてみる

夜やっている透視やら超能力やらの特番を思い出してしまった私はとりあえず能力の事を具体的に知りたかった

そんな大層な能力が私の中に眠っているなどついぞ知らなかった

「つまりその能力は未来を変える事ができる能力なんだ。まだ覚醒していないのなら恐らく予知夢あたりが無意識に発現していてもお

かしくはないと思ったんだが、どうやらまだ能力の芽すら出ていないようだな」

「それは良いことなんですか？それとも悪いことなんですか？」

「どちらとも言えない。この能力は危険なんだ。自分の意思で定まっている未来を変えることができる。つまり何でも自分の思い通りになる」

「なんか凄すぎる能力ですね」

「あぁ。だが肝に銘じておけ。もしこの能力を使えるようになったとしても未来だけは変えるな。いや、大事なのは変えることよりも変えた未来の大きさが問題だ」

「変えた未来の大きさ？どれだけ未来に干渉を与えたかって事？」

「そうだ。察しが良くて助かる。それが一番大事な所なんだ」

するとカイは突如、空になったコップを持って立ちあがる

それを見上げる私

「ここにある一つのコップ。手を離せばもちろん落ちて砕けてしまう。ここで未来を変えるとしよう。落ちて砕けるはずのコップをユイ・イチジョウがキャッチするという未来に。ではここで未来を変えなかった場合、砕けたコップをどうする？」

「どうするって・・・壊れたコップは・・・欠片を集めてゴミに捨てる」

「そう。もしコップが壊れていれば、それを集めて捨てるという時間が生じる。もしコップが壊れていない未来を作ればそれをしなくてすむ時間の短縮が起こる。この“時間のずれ”が問題なのだ」

そう言ってカイはクリーム色のソファに腰掛けてコップを机に戻す

「時間のずれ?短くなっても長くなっても?」

「そうだ。それと同時に変わった未来がどれだけ最初の未来に戻れるかだ」

「・・・?よく分からない」

「分からないか。そうだな。では今俺たちがこうして会話をしている。これから一時間会話を続けるとしよう。今からその一時間後までを真っ直ぐな一本の道と考える。すると今立っている場所はこの道のスタート地点に近い場所にいる事になる。ここまではいいな?この一時間の間に起きることは誰であろうと予測することはできない。なぜなら確認する方法が無いからだ。だから何が起こるか、自分の未来の意思すら定まっている事にだれも気がつけない。だがその先を知ることができる能力。それが“未来予知”」

「んー・・・なんとなーく分かった」

とはえまだ私の頭の中はぐちゃぐちゃしている

せめて図とか絵とかで表してくれた方が楽だったのにと思いながらふと思う

あ、そうか想像して考えればいいのか

「そうか。すこし難しいが何となく理解してくれ。そしてこの“未来予知”をするとしよう。するとこの先に起こることが分かる。つまり意図してそうならない未来を作り出すことができる。定まった一本の道にその瞬間、脇道ができあがると考えてほしい。その脇道にもまた未来が想像され、また最初の一本の道に繋がるようになっている」

「ん？えっとごめん。今のところよく分からなかった」

「新しく作り出した道があるとする。その先はずっと先の未来と繋がる。たとえば先ほどのコップの話しだ。コップが割れるという未来が起こる前の道にコップが割れないという脇道ができる。そのコップが割れないという未来を歩む最中、その時間に使われるはずだったコップが割れる未来ではコップをかたづけるという作業が進行する。そしてコップが割れた後の未来と割れなかった未来がくっつくのだ。未来は一つでなければならない」

私は懸命に指で道をつくってカイさんの言葉通りに動かしてみる

左手の指で元の道。右手の指で変えた未来の脇道を想像して指を机の上で進める

左と右の指は同時に前に動き、そして左の道へと右の指がくっつく

「おぉ、なるほど」

「ついてこれてるか？」

「ぎ、ギリギリ大丈夫でッサー」

ビッと私は敬礼する

「・・・続けるぞ。新たに作られた道はいずれどこかで元の道に戻る。そういう力が働く。だがそれに大きな時間のズレが生じると、元の道に戻るまでにちょっとややこしいことになるんだ」

「大きなズレっていうと、たとえばどんな？」

「さっきのコップなんかならまだ数分のズレだ。その程度ならまだ修正の力の方が強いから同じ時間軸の未来へと戻ることができる。ただもしこの未来操作で、そうだな、たとえば死ぬはずだった人間を生かしたままにしてしまう。その逆もまた一番やっては行けない事だ。元の道では死んでいるはずなのにもう一つの道では生きている。ここで完全な矛盾に遭遇する。そしてその生かしてしまった人間が本来の道ではまったくあり得なかった未来を作ってしまうとする。たとえば戦争。たとえば大発明。一人の人間がその他大勢の人間の未来へも影響を与える。そうなると完全に元の道に戻るには万や億では足りないぐらいの年月がかかってしまう。そうは思わない

か？」

「え、えぇ。そうですね。でもそれってどうするんですか？一度ずれちゃったらずっとずれていきますよね？――――――っ！！」

その疑問こそが一番の問題であったことに私は気がついた

元の道が絶対で、そして脇道は元の道に戻ろうとする

もし修正がきかないほどのズレが起きてしまったら、どうなる？

未来は一つでなければならないというカイの声が一条唯の脳内に響く

一つでなければならない

どうやったら一つに修正できるのか

そんなの簡単だ

ズレを生み出す存在全て、つまり両方の道のずれた人間を消す

あるいは生み出された“もし”“だったら”の世界を切り捨てる

「そうすれば道は繋がる。ずれた人間は一人もいなくなる。そんな世界の意思。未来の意思。誰の意思かは知らないが、そんな力が働いてしまう。そう俺は教えられた」

「でも・・・いいの？これで・・・本当に」

私は夢を見た

ほんの３０秒も無いような夢だった

それでも鮮明に覚えている

一人の少女

その少女は暗闇で眠っている

ちいさなポニーテールと水玉のワンピース

手にはリュックが握られている

小さく名前が書いてある

湊夕姫

そう書かれていた

あなたはだれ？

湊千尋と名乗るあなたは誰？

湊夕姫という少女は一体誰？

これは未来なの？それとも今なの？

分からない分からない

どれだけ考えても結論がでない

同じ姿形に同じ服装に同じ髪型

そして私は見た

もう一つ、恐らく今日起こるであろう出来事を

未来を見た私は関与して良いの？

未来を変えてしまう恐怖が私の心を締め付ける

苦しい

これが・・・神子の力

『駆ける翔る魔獣に向かって』

ちょうど湖で異変が起こり始めた頃
湖を見下ろす崖の上に二つの影があった
この場所は町の裏手にある小さな山である
小さいとはいえ、周囲と比べて小さいという意味である
小山には厳重に防壁を張った火薬倉庫がある
火薬を保管する場所は人里から離れた場所でならないといけないのでもっぱら作業はこの山奥で行うことが多い
湖の近くにある小屋は生活するうえでは町に近い方が何かと便利なのでそこを使っている
そちらには使えなくなった火薬や備品の倉庫などの物置状態になっている
そしてリクはそこで見張りの役目も兼ねて物置横の小屋に住んでもらっている
仕事のため、ご飯と睡眠の為に使っている下の小屋を出て小山にある作業場を目指した

「今日は良い天気ね」

作業場の前に一人女性が立っていた

小さなパラソルを片手に若い女性は声をかけてくる

「そうかぁ？いつも通りだろ」

「あら、つれないわね。照れ隠しかしら？」

「バカか。お前さん相手に誰がそんなことを――すまん。俺が悪かった」

ギロリと睨みをきかせる彼女に俺は躊躇うことなく土下座する

いつまで経ってもこの癖は直らない

癖というより防衛本能だろうか

「わかればいいのよ。わかれば。物わかりのいい人は嫌いじゃないわよ」

「お前に好かれても――何でも無い」

睨むな睨むな

いつも思うが此奴の眼孔はやばい

こいつが人を睨み殺せるのではないかと思うのは俺だけではないはずだ

此奴は小さい頃からサドっけが強かったからな

「それで、朝っぱらから四天王のお一人が山奥に何の用だ？」

あいにく俺には全くこの女が俺を訪ねてくる理由が分からない

いや、一つだけ心当たりがあるといえばあるか

大方ここ最近の湖の異変の事だろう

「貴方に話があってきてるって分かってるくせに」

パラソルを開きながら若い女はニッコリ笑う

その笑みに俺の顔はきっと引きつっていること間違い無しだ

女はその笑みを浮かべたままゆっくりと歩き始め、今俺が登ってきた山道を下りていこうとする

「歩きながら話すわ」

ピタリと足を止めたのは俺を待っているからなのか

「・・・俺今登ってきたばっか――――あぁ、俺に選択権はないんだっけか」

「そうよ。今頃気がついたの？」

「気がつきたくなかったね。俺も仕事があるんだ。早めに頼むぞ」

「そんなに火薬弄ってて楽しいの？綺麗な女の人と一緒に歩けるなんて火薬弄りよりも素敵なことだと思わない」

あぁ、確かにそうかもしれんな

ただそれはお前以外の女性に限る

お前と並んで歩いて何が楽しい

そうは思うが、足は自然と彼女の歩幅にあわせて動く

「まぁ私のこれも仕事なのよ」

「その割にはつまらなそうな顔をしているな。お前ほどの立場なら

仕事も選べるだろうに」

四天王とはこの大陸にいる４人の実力者の事である

この大陸にはそれぞれの国から代表を決めて作られた天平評議会、そしてその天平評議会が選出した大陸でも最強の部類に入る力を持つ四人をそれぞれ大陸の東西南北から選出し、それぞれの地域の守護に当たらせている

天平評議会のお膝元として各地域の守護を任された四人にはそれぞれ『北の双刀』『東の六天』『南の砦』、そして俺の目の前にいる『西の頂』という四つの位階がそれぞれ授けられている

守護という名目で大陸の四カ所をそれぞれ見張っている彼らだが、主に行っていることはギルドに廻ってくる仕事である

とはいえ通常のギルドでは受けることのできないほどの高位の依頼を専門としている

それぞれに数人から十数人程度の部下を評議会から選出して貰い、それぞれ部下としてギルドの活動を行って周辺地域の守護をしている

もちろんそのまわってきた依頼を全て四天王がこなさなければいけないわけでは無いので部下に任せっきりにしても誰も文句は言わないし、言えない

「今回は・・・ね。ただの勘よ。部下には任せられないのよ」

「む、お前にしては珍しい事もあるもんだなぁ」

いつもは面倒くさくてッ仕事を部下に押しつけて日々いろんな所をフラフラ歩いているような女だというのに

そんな事をふと真っ先に思う俺は一体此奴のことをそんな風に見ていたのかと改めて実感した

「へぇ、日頃どう思っているかしらねぇ私のこと？」

心でも読まれたのか、ニッコリ笑うその笑顔は俺に恐怖を与えてくる

笑顔が恐怖を与える者だと知ったのは何時の頃からだったか・・・

あ、此奴と出会ってからか

「さぁてね」

「あら、熱そうね。汗が滝のようよ。ちなみにさっきのは半分嘘よ。勘じゃなくて評議会から直接命令が来たのよ」

「・・・評議会から直接だと？そりゃまた珍しい。いつの間に会議してたんだよ。全然そう言う話は聞かなかったが」

「そりゃね。今回の件はあまり公に広めないように上も注意しているみたいだったしね。少し前の吸鬼がアルデリアで開かれた武闘大会に乱入して大暴れしたっていうのは知っているでしょ？」

その話は少し前から南から訪れた旅人によってこの湖周辺の町にも伝えられているので俺も知っていた

なんでも吸鬼が突然巨大な魔獣を引き連れて大会を襲撃したのだとか

吸鬼自体もはや伝説とも等しいほどに大昔の生き物だと人々は思い始めているが、まだ彼らが姿を見せなくなってから１０００年もたっていないが、吸鬼は人の何十倍もの時間を生きるという言い伝えがある以上絶滅したと誰が証明できるだろうか

少なくとも姿を隠しているだけかもしれないと警鐘を鳴らす者が一人や二人いてもおかしくないとは思ったことはあるが

「それぐらいは聞いたことがあるな。それにお前や議会が動いてる理由に関係するのか？」

「むしろそれが理由。貴方には一応今後の布石として話しておくのだけれども、議会はアルデリア襲撃に関与している吸鬼を危険対象として見て殲滅を考えているようなの」

「そりゃまた・・・吸鬼に関してまだ分かってる事なんてほとんど無いんだろう？決断が早い事は結構だが、そんなあっさりと・・・」

言い伝えによれば昔は人間と吸鬼が手を取り合っていた時期もあったらしい

その最たるものを上げるとすればアグレシオン達との戦闘における大戦における共闘ぐらいだろうか

あれを共闘と呼べるのならばそれも入るが

「一方的と思うかも知れないけれど、共通の敵というのは各国の結束力を高めるものよ。北に置いてもそれは同じ」

「北・・・か。まだいざこざが続いているらしいが、大陸南部の吸鬼騒動にそう関係してくるのか？」

「さぁね。ただ、そっちの方にも評議会はそろそろ首を突っ込むと思うわ。しばらくは静観していたようだけれど、ね」

「ふぅむ・・・それで、今回お前が此処に一人で来ている理由、俺に会いに来た理由、そろそろ教えて貰おうか？」

俺はそう四天王が一角『西の頂』シェリア・ノートラックに問いつめる

理由もなく会いに来るはずが無い

一人で来る理由、吸鬼の事を話した理由、俺に会いに来た理由

それらをどう結びつければいいのか、それは俺が勝手に予想して決めつけるものではないが、多少なりとも歩きながら俺はそれを考えていた

「一人で来たのはそういうお達しだったから。もう世間に吸鬼の復活という噂を封じ込めるのは無理と判断してるらしいわ。観客に何人か目撃者がいて噂は今も広がり中。まぁ噂の出なんて何処からでも漏れるんだからどうでもいいのよ。だからこれからこちらがとる行動を悟られないようにする方を徹底するらしいわ。故に本当に一部の人間にしか伝えられてないのよ。部下にも教えるなってきつく上に言われてるからね。恐らくどの国の王も知らないのではなくて？今動いているのは実質私のような四天王、それと評議会メンバーくらいかしら」

「少ないな。だからお前一人でその命令とやらで此処に来ているのか」

「・・・正確にはここに来て何かをしろという命令ではないわ。半分嘘と言ったでしょう？勘よ。私が神子のことや宝玉のことを知らないと思って？」

なるほどそういう事か

だから此奴は俺の所に来たのか

「・・・・リクか」

俺は静かに弟子の顔を思い浮かべる

隣に並んで歩くシェリアがニッコリと笑ってパラソルをクルクルと

回す

「ご明察。吸鬼はどうやら宝玉を集めているという情報があるの。だから商品に出された宝玉を狙って大会を襲撃したらしいし、その少し前にあったアルデリア郊外で起こった、『魔龍事件』って上はつけたらしいけど、それにも吸鬼と宝玉が関わっていたらしいわ」

「それは初耳だな。やっと事件の正式名称を決めたのか」

「ただ暴れてただけじゃなくて吸鬼が関わってたらしいからね」

「それで、リクをどうするんだ？」

「それが本題ね。少し彼に湖の社を開けて欲しいと思ってね。吸鬼の情報収集力がどの程度なのか分からないけど、大々的に広告された紅玉はまだしも確認されていなかった黒の宝玉を持っているらしいからね。その辺は少しややこしかったから忘れてしまったわ。旅人が持っていたのをギルドを装って盗賊が奪ったのを奪ったとか・・・よく覚えてないわ。まぁとりあえず、私の管轄だからとりあえずもう奪われてないかの確認よ。別に場所を移して隠したりするつもりは無いわ。只の確認。いつから動いているのかは分からないけれど、人目につかない場所なら尚更確認の必要があると思ってね」

「なるほど・・・な。で、なぜそんなことをお前が知っている？」

「あぁ、神子制度の事？それとも宝玉の事かしら？どちらも先代から聞いていたからね」

「・・・奴の事か」

俺は少し前に死んだ前の神子の事を思い出す

「奴・・・ねぇ」

シェリアは視線を落として呟いた

「何だよ」

「別に。もちろん彼が今神子の力を失っているって事も聞いているわ」

「・・・・何？」

なんだそれは？

神子の力を失った？

「あら、失言だったかしら？」

「おい、そりゃどういう――――」

「まぁいいわ。今この国にいる神子は全員その力を異世界から来た異邦人に奪われてる状態で神子の力はほぼ使えなくなってるらしい

わ。能力はどうかは知らないけど、少なくともその権限で神獣との接触ができないようになってるらしいわ」

「おい、俺の話を――――」

しつこく言い寄る俺にシェリアは顔を上げて俺を見つめた

歩みを止め、俺をジッと見つめるシェリアの表情は真剣そのもので普段浮かべている自然な笑みは何処にもない

「全てを答える義理は私には無い。それにそんなことを聞かれても神子でもない私がどうしてその理由を知っていると思う？ちょっとは頭を使いなさいな。私が知っているのは結果であって過程では無いわ」

「そりゃそうか。俺も頭が回ってなかったかもな。スマン」

俺は一度深呼吸して再び俺は歩き始めた

当たり前の事なのに何でも此奴が知っていると思うなんて俺はバカだと改めて思う

「そういう訳で、リクは何処？一応貴方に断りぐらいは入れておかないとと思って来たんだけど、ついでに場所を教えて貰わないと何処にいるか分からないんだけど」

「・・・湖の側の小屋だ。そろそろ起きてきていると思うが」

あいつはいつも俺より３０分ほど遅れて起きてくるはずだったと思いだし、それを伝える

「ふぅん、じゃぁ山を下りればもう起きてるわね」

「あぁ。・・・ん？」

そこで俺はふと異変に気がつく

足を止め、自分が踏みしめている山道の土を見下ろした

違和感を理解するより先に、感じ取った俺は足を止めた

「あら、どうかしたのかしら？」

「いや・・・」

俺はしゃがみ込んで土へと触れた

冷たい土と落ち葉に触れ、そしてその異変に気がついた

「いつもより落ち葉が少ないんだ」

「風で飛んだのではなくて？」

「いや・・・ここ数日強い風は吹いていないと記憶している。この道は元々獣道を多少ならして使っていたんだが、常日頃から掃除をしている訳ではない」

「ここを通った魔獣ではないの？でもそれがどうかしたのかしら？私としては早く下山したいのに木偶が足を止めるんだもの。早く行きましょう」

木偶って俺かよという突っ込みはしなかった

俺はちょっとした焦りを覚える

確認したいことができ、俺はシェリアに訪ねる

「お前、この道を通ってきたんだよな。ならその時道はこうなっていたのか？」

確かシェリアは俺に会いに来たときにはこの道を登ってきていたはずだ

そして俺もこの道を使ってここまで来たのだ

だから俺が登ってきたときにはこんなに綺麗ではなかった

「・・・いいえ。落ち葉が鬱陶しい道だと思って登ってきたもの」

もしかするとまずいかも知れない

だが、そんな事は無いはずだ

魔獣が人里へ下りるなどと

それもこの落ち葉のズレ具合からしてかなりの数、恐らく一つか二つの群れが同時に通ったと思われる

よくよく見てみれば獣道から逸れた場所に落ち葉が雑に落ちているのが分かるし、地面にはそのかぎ爪が抉ったであろう土も分かった

飛ばされた落ち葉はいくつかひっくり返っており、まだ葉の裏に土の湿り気が残っている

そんなに大群で村里へ下りるなど、普通は考えられないが

今年は木の実も例年に比べて少ないと言うほどではないというのに

「なら何故・・・？」

「あれじゃないかしら？ほら、湖の」

「！！」

俺は失念していた

この山の管理もある程度は任されるようにはなっていたが、そんなことでまさか魔獣が村へと下りていくとは思わなかったのだ

だから俺はハッと顔を上げ、そして歯ぎしりをした

魔獣が食すものは何も木の実や動物だけではない

その魔力も食料の内に入るのだ

「マナか・・・」

正確には目的地は村ではなく、おそらくはその先の湖なのだ

マナ不足なんて俺は全く気にしていなかった

そういえばそろそろマナの実りが巡ってきてきていてもおかしくない時期である

いや、むしろ遅いくらいだ

「くそっ・・・」

「別に全て貴方が悪い訳じゃないわ」

ドンと地面を叩いて俺はすぐに立ちあがってどうしようかと頭を働かせた

今から小屋へと戻って武器を取ってくるか？いやそれでは間に合わない

とはいえ素手で魔獣とやり合うなんて正直無理に近いと俺は心のどこかで思っている

「・・・仕方ないわね。先に行くわ」

呆れたようなシェリアの言葉のあとにザッと音を立ててその姿は消えてしまった

俺はどうする？

村に向かうか？間に合うのか？武器もなく行っても意味が無いのではないか？

いや

「俺にはまだこの肉体がある」

男は自分の最大の武器を思い出し、シェリアと魔中を追って俺は駆ける

「何だっていうの・・・これ・・・」

一匹のグリフォンが町の上を旋回している

あまり風はないが、それでも上空はまだ風が吹いているらしく、体に浴びる風のせいで一気に気温が下がったかのように思う

そんな雲一つ無い空から少女は町を見下ろす

そこかしこで戦闘が行われているのが遠目からでも分かる

煙やあわただしく動く人や黒い影が小さな町を埋め尽くしている

まだ町の異変が起こる前、異変を察知したグリフォンはまず主である少女を乗せて上空高く舞い上がった

それと同時に町の物見櫓から警鐘が鳴り響いた

そのせいで先ほど敵視していた少年のことをすっかり忘れて少女は眼下の町を見下ろし始めた

近くの小屋や警備をしていた町の自警団らしき人物達が町の裏手、

山の方向へと向かっていくのが見えた

こういう森や山など、魔獣が多く済むような場所に近い村や町には魔術師がかけたセンサーのような魔法がいくつか森の裏手に仕掛けられている

ある一定数の魔獣が一度にこちらに向かってくる場合にそれは作動し、町の魔術師はそれを感じ取ることができるようになっているのだ

群れで移動していて偶にセンサーに引っかかるくらいの事はよくあるり、見逃すことも多いが今回はどうやらそうではないらしい

魔術師が優秀だったのか、いつもと違う異変に察知していたのだろう

そしてここ最近の湖の異変などの事も会わせると十分に危険があることは魔術師ならば予想できていたはずだ

村人にも気をつけるようにと伝令は来ていたのだろう

普段ならセンサーに掛かったくらいで警鐘をならすことは珍しいが、今回はまだ村に異変が無いのを見ると一応早めに行動できていたとすくなくとも私は思った

一分ほどたっただろうか

町の人々が荷物や武器を構えているのが見えた

だが、そのあとアリス・メルストンはそこで予想外の光景を目にしたある一カ所に自警団が集まっていくのが見える

一応攻めて来るであろう大まかな場所は魔術師によって予測できるのだろう

だがそれは突如起こった

自警団が森の方を見て動きを硬くするのが遠目でも分かった

その緊張が解けるより先に、森から飛び出してきた幾つもの黒い影が町めがけて飛び込んできた

多い！！

その黒い影は一点突破、自警団の中央に突っ込み、瓦解したその隙間を塗って町へと侵入し始めた

しかも最初に飛び込んできた影がとても大きい

恐らく群れを統率するリーダーだろう

あの程度の人数ではまともに時間を稼ぐのも難しいだろう

こうして魔獣が人を襲う理由を、以前シャンに教えて貰ったことがあった事をアリスは思い出してみた

『いいですか?まず一つは食料が無くなったとき。森の木の実が少

なくなったとき、稀に腹を空かせた魔獣は人里へと下りてくることがあります。ですがそのときはさほどの脅威にはなりません。腹が減って人相手にも見境無く襲ってくるでしょうが、基本魔獣は人里に下りてきません。それは人間が圧倒的な恐怖の対象だからです。人間にとって魔獣は脅威ですが、魔獣にとってもまた人間は脅威なのです。理由は分かりますか？』

『んーん。つよいから？』

『惜しいですね。強さにもいろいろありますが、今回の強さは団結と知恵の力です。人一人ではできることは限られますが、多くの人間がいればいろいろな事ができます。たとえば一人ではずっと狙われていても、二人ならどちらを狙うか迷いが生じ、片方を狙えばもう片方が、もう片方を狙えばもう一人が。力の差を人は数と知恵で埋める事ができます。人は賢いことを魔獣は分かっているのです。ですので例え餌だとしてもそれに釣られて襲ってくることは滅多にありません』

『へぇー。じゃぁそれがわかる魔獣さんも賢いんだね』

『その通り。だからといって人間が魔獣を侮る事は決してしてはいけないのです。勝つ事ができるのはその知恵と数、そして武器と魔法があるからです。武器を持たず、魔法が使えず、たった一人の人間がどうやって魔獣に勝てましょう。さて、実はもう一つ魔獣が人里へ来る理由があります。それはなんでしょうか？』

『んんーとねー、人と遊びたいから？』

『フフ、面白い答えですね。それなら仲良くできて楽しそうですね。それができる人も世の中には少なからずいます。そういう人は命の

重さを知っているとても良い人間です。人を見分けるのに使えるかも知れませんが、魔獣と友達になるのと、魔獣を道具として使う人間、それを見誤らないようにしてくださいね。さて、正解を言うと人間を憎んで里へと下りてくることが有ります。これは非常に厄介です』

『なんで？』

『生き物が群れで行動するのは天敵に襲われないため、食べ物をとるときに協力したりすることができたりするから、とまぁいろいろ理由はあるのですが、ある程度の意思疎通能力があるようなんですね。人間なら言葉で会話をするように、魔獣も鳴いたり、あるいは人に聞こえない方法で意思を疎通しているといいます。それ故に、一度人間に恨みを持てばその恨みを共有した魔獣が群れを成して襲ってくる』

『なんで人間をうらむの？』

『理由は様々です。住処を奪われた。食べ物を盗られた。仲間を殺されたなど様々です。ですが決して魔獣が悪いのではありません。人間にたいして恨みを持つのは心を持つからです。心があるから、人も喜び楽しみ、魔中も怒り怨み、悲しむ。人と魔獣は姿は違っても心は同じです。そのことを、お忘れ無きよう』

少女は町へと入ってきた魔獣を見下ろす

まず最初に飛び込んできた大きな魔獣を見つけ、グリフォンの背を撫でた

今頃シャンとあの男の人も町へと向かっているのだろう

「行くよミャー！あの子を止めるよ！！」

「くみゃっ！！」

「いけっ！！」

足で思いっきりグリフォンの横腹を叩いた

だけどぼふっとふかふかな羽毛に跳ね返された

それでも命令を受け取ったグリフォンは一気に急降下した

急降下、視線の先に居る存在を目指して少女とグリフォンは天を翔る

『見誤りの交渉』

「おー、でっかいグリフォン。面白いじゃん」

少年は漆黒の翼を羽ばたかせて遠くの様子をうかがう

湖の上から眺めるその光景はとても面白い事になっている

笑顔を浮かべる少年は背後の朝日を体に浴びてその温かさと湖の冷気と匂いを感じていた

マナが異常なまでに豊富なこの湖でなら何時まで戦っていても良いと思うくらいだ

まぁすぐにこのマナも無くなると思うとそんなことはどうでも良いかと思い直す

要注意人物を発見したり、何故か普段は人になつかないグリフォンが女の子と行動を共にしていたりと興味をそそられる

が、その興味を押さえつけ、少年は一人湖の上で情勢をはかる

「テン、行方不明。ゴ、順調。まだしばらくかかると思われる。件

の少年、グリフォンと少女は町に向かった。起きた彼は潜っちゃって浮いてこない。んー・・・どうしよっかなぁ・・・お？」

ハチは遠くを眺めながら僅かばかりに高度を上げる

視線の先には先ほどの少年が湖の方へと引き返してくる姿があった

別にこちらを見つけた様子ではないが、それにしても一人で戻ってくると言うことは一緒にいた女性はそのまま町へと向かったのだろう

一人・・・一人？

ここでやっとハチはこれが好機なのだと手を打った

ニッと口元を上げて背中の翼を二度三度羽ばたかせる

湖に波紋が浮かび上がり、ハチの体が高度を僅かに上げた

「テンにどやされなきゃいいんだけどっ」

そのまま白髪の少年は湖の岸の小屋めがけて一直線に飛んでいった

少年は小屋で両腰に剣を携えた

一本は短く、もう一本は長く、それでも大した重さは感じない

元々軽い二本の刀だが、これまでの旅でずっと持ち歩いていたのだからその重さにも慣れてきた

彩輝とシャンが町の目前までたどり着くと、そこで二人は魔獣に襲われる村を見た

それを見て俺は一度この小屋に引き返した

様子を見に行っただけだったが、俺は風王奏を帯刀していなかったかろうじてソーレだけは所持してのだが、流石に短刀でやり合うには少々無理があると流石に俺は思った

魔獣相手に接近戦を持ち込めるほどの自信と余裕は俺には無い

そりゃ確かに魔獣と戦ったこともあるし、人外の吸鬼という存在とも戦った

だが、今思えばあのときに俺の命が消えていてもおかしくなかった

こんな小刀、そう言ってはソーレに悪いのだが、それを完全に使いこなせるほど俺は強くないと分かってはいるつもりでいる

かといって魔術を自在に使えるかと言われればそうでもないのだ

結局俺はただの高二の学生なのだ

だからこんな事に首を突っ込むものではないと思うのだ

だけど・・・・

「本当に行くの？アーヤん・・・」

「行きます。後悔はしたくないので」

「またそれ・・・」

結局、俺を動かしているのはその後悔したくないという思いだ

呆れ、悲しい顔をする一条さんの顔を見ていて、これは間違いなのではないかと一瞬俺は思ってしまう

本当は一条さんと千尋ちゃんとここで大人しくしているほうが良いのだとは分かっている

「だけど、これが俺なんです。大丈夫です。たぶん。右腕も戻ったんです」

嘘をついた

確かに腕の傷は癒えた

自由に動かせるようになった右腕
だが、内側はまだ完全に癒えたとは言い切れない
何故だろう
感じるのだ。この右肩に渦を巻く何かを

「でも・・・」

「一条さん。心配はいりません。ただ、ただ俺が戻ってくることを祈っていてくれれば俺はとっても嬉しいです」

「・・・うん」

「戻ってきますよ。死ぬために行くんじゃないんです。助けるために行くんです。今の俺に後悔はありません」

だから、躊躇う理由は何もない
俺は勢いよく扉を開けて飛び出した
キラリと朝日が小屋へと差し込んできて俺は朝の太陽を腕で遮る
すぐさま湖に背を向け町へと向かって走り出そうとした俺はその足をピタリと止めた

俺は前屈みになったまま、ジッと地面を見つめている

「やぁ、初めましてだね」

吸鬼の影が俺の影を覆い隠している

スッと高度を降ろして着地した吸鬼は翼を折りたたみパンパンとローブの埃を払いのける

小さな林の手前で止まった俺はゆっくりと真っ直ぐに立ち、振り返る

そこには一人の少年がいた

見かけで言えば自分より僅かに小さい、ちょうど中学生ぐらいにあたる容姿をした少年が立っていた

ローブを身に纏い、やはり髪は白くニッコリと笑って少年は近づいてくる

「僕はハチ。よろしくアヤキ君」

「!?どうして俺の名前を・・・」

驚きのあまり、咄嗟に俺はそう口走っていた

自分が本人であることを確定させてしまう発言だったことに気がつ

くが、そのことに気がつくには遅すぎた

「いやぁ、ちょっと調べさせて貰ったんだよ。君は要注意人物のようだからね」

「よ、要注意人物？」

そう言われて俺は少し考えてみる

吸鬼とは二度関与している

そのどちらともに居たのは俺と一条さんだけだ

ということはもしかすると彼女の方も・・・

「そ。イチの報告では二回も実験を邪魔してくれたらしいじゃないか。いやまぁそれは終わったことだしいいんだよ。それでね、一つ聞きたいんだけどいいかな？」

「俺は別に注意されるような人間じゃないんだけどなぁ。まぁ関与はしたし、そうとられても不思議ではないのか」

「そうそう。まぁ危険かどうかを決めるのは僕じゃないからね。じゃぁ率直に聞くけど、君は僕たちの敵なの？」

思い切った真っ直ぐな質問だなぁと思った

言い回しも何も無かった

吸鬼はそう聞いてきたが、当たり前だ！と自信を持って返せるわけじゃぁなかった

俺個人には別世界の吸鬼に恨みがあるわけではないし勝手に俺が敵対宣言をしてしまうのもまずいと思って口をつぐんだ

今思えばこの吸鬼には恨みは無いが、利害が完全に一致していない事がこの対立の原因だろう

その主たるものは宝玉であると俺は踏んでいる

宝玉の取り合いで今俺たちはもめている

っていうか理由とかぐらい聞かせてくれれば各国のお偉いさんも多少は話を聞いてくれると思うのは俺だけか？

「・・・少なくとも、俺は人種で人を差別している訳じゃない。何をしているかで区別する。だって俺にはこの世界の人種なんて関係ないんだからな」

一瞬、吸鬼が目を丸くしたようにもみえたが、気のせいだったのかすぐに吸鬼は返答を返してくる

「ふんふん。なるほど。別に僕たちには恨みはないけど、やろうとしている事は許せないと」

「そうだ。今回の湖の異変もお前達のせいなのか？」

「そだよ。まぁ邪魔はしないで欲しいっていう希望なんだけど・・・黙って見ていてくれないかなぁ？別に君たちに対して害がある訳じゃないし加えるつもりもないんだけど」

「・・・まずお前達の事を信用できないのにその要求をどうやって信じろと？」

「まぁごもっともか。そりゃぁそうだよね。じゃぁ条件を付けよう」

「条件？」

頷いた少年はニッと笑って指を三本彩輝に向ける

「足止め料相当分の情報の開示。どうしてもっていうの以外なら３つまで聞いて良いよ。それでどうかな？」

俺は悩んだ

そりゃもちろん町を助けに行くべきなのだと分かっている

カイさんがどこかへ行ってしまっている以上、できる限りの戦力を町の防衛に当てた方が良いとは思っている

それが例え俺みたいな弱者でも力になることができればと思って町

へと行こうと考えていた

が、それと同時にもしここで情報を引き出せれば今後の展開が楽になると思ったのも確かだ

こう短い期間に三回も吸鬼に関する事件に巻き込まれている俺としてはこの先、彼らの目的ルートからはそれて行動すれば旅はなお安全なものとなる

確かになにか良くないことをしようとするならばもしかしたらいずれ刃を交えることもありえるだろうとは思う

だが俺がまず第一に優先すべきものは一条さんと千尋ちゃんの命だ

保護者ぶってる訳じゃないが、一条さんにああ言った手前、というか言って無くても俺はあの二人を守らないと行けない

それにここで情報を引き出して本当にこの事件に対処できる組織に渡せば結果的にも状況はよくなるだろう

だが、目の前の人達の事を見過ごしてもいいのか？

こうしている間にも、一人、また一人と魔獣に襲われ命を失っているのかもしれない

「町へ行くのも駄目なのか？」

「・・・本音としてはどっちでもいいかな。確かに魔獣を町に差し向けたのは僕だよ」

「！！」

風を切る

「っ・・・さっすがぁ、間合いの詰めが上手いね。いつの間に踏み込んだんだい？」

今、ハチの喉元に突きつけられた風王奏の刃が皮膚に触れるか触れないかの部分で止まっている

逃げる様子もなく、寸止めしようと考えていなければこの男を殺せたかもしれない

だが俺は今この刃を振り、殺しても良かったのか？

人殺し

左手をソーレに添え、右手に握る風王奏の刃が朝日を反射する

キラリと光ったその刃を見て流石に吸鬼の男も苦笑いをしている

「おーおー、恐い恐い。優しそうな顔してなかなかに強いじゃないかぁ」

ハチはその刃の冷たさを感じて一滴の汗が喉を伝ったのを感じた
さーて、次はどうしようか。そう考えていたハチは少年を見返して考える
（足止めの為に町に魔獣を放ったけど、結局は僕が足止めしているみたいじゃないか）
（でも本当にどうしよう。僕でも多少は戦えるけど、数分持てば良い方かな。流石にあの初速は早いよ）
できれば、この少年と一対一の戦闘には持ち込みたくなかった
戦闘は専門外なのだから
とはいえ――
「それで、いきなり斬りかかってくるってことはそれが返答だと考えていいのかなアヤキ君？」
「お前的にはいったいどちらがいいんだ？」
ふぅむとのど元に剣を突き立てられたままハチは考え込む
「そうだね。僕はそこまで強くないから君を倒すってことは難しい。でも君を止めるっていう足止めをしなくちゃいけない。もし僕たちの任務遂行中にそれを邪魔する者が現れないように目を町の方へと

向けたかったから魔獣を向かわせたんだ。とりあえず邪魔をしないでほしいっていうのが一番だね」

そうはいうが、彩輝はまだ判断しかねていた

殺す気は無かったが、それでも男の翼や足を奪うぐらいはしても良かったのではないかとも思う

人の五体を奪う事などしたことは無いが、今ならそれが出来てしまいそうな気がする

そんな俺はどうかしてしまっているのだろう

結局、こいつ等のしていることは俺には分からない

善なのか、悪なのか

そもそもこいつらが悪だと誰が決めた？

俺か？

俺だろう

なんだ、そういう事だったのか

自問自答して俺は剣をおろした

そんな俺の様子を見て不審に思った吸鬼はゆっくりと警戒しながら俺から距離をとる

「それが、返答なのかい？」

「・・・俺はどうもお前達を勝手に悪だと決めつけていたらしい。根拠もないのに・・・さ。すまない。でも、それとこれとは別だ。だってお前は関係のない人を巻き込んだ」

ちらりと俺は後ろの町を見つめた

町からは未だに火の手があがり、人々の叫び声が聞こえる

そこでその姿を見たハチはしまったと感じた

「・・・失策だったかな」

「理由も聞かずに斬りかかったことは詫びる。だが、もうそれは関係ない。俺は後悔しない道を進むだけだ」

もう一つの剣を鞘から抜き放つ

紅みを帯びた刀身が男の姿を映した

俺は踵を返して小さな林へと飛び込み町へと急いで駆けだした

そんな彩輝の後ろ姿を見つめながらハチは白髪を左手でわしゃわしゃと引っかき回した

「こりゃ見誤ってたね。案外話し合う気はあったらしい。敵対関係・・・にしちゃったのかね」

そのことだけが気がかりだった

彼自身こちらに恨みは無いと言っていたじゃないか

差別もしないと言っていたじゃないか

結果的に任務は遂行できたわけだが、これで良かったのかと何故かハチは悩む

どうも僅かにしこりが出来ているような

些細に感じた程度だが、これで彼は敵となってしまったのだ

先ほどまでは違っていたのに、邪魔をしてきたことや斬りかかってきた事からそう軽率な判断をしてしまったことが悔やまれる

上手くいけばこちらの身方に引き込めた可能性も無かったわけでもないというのに

「でも、一つだけ面白い事を言ったね君。俺にはこの世界の人種には関係ない・・・か」

とりあえず、ハチはもう一つの仕事をするためによみがえらせた魔獣を探すことにした

「ってかいつまで潜ってるんだよ！」

湖に向かって叫んだ

返事なんて帰ってこなかった

「こ、これは・・・！？」

湖上より氷の足場を伝って戻ってきたリクはまず小屋へと向かおうとした

言われた通り、吸鬼のことを伝えようとした

だが、それよりも先に気になることがあった

戻ってくる最中、小屋の奥の町から登る黒い煙

「リーチェの町が・・・」

火の手の上がる町

人々の逃げまどう声が四方八方から聞こえ、足がピタリと林の中で止まる

その原因は目の前にあった

魔獣グレイ

人々を襲うその姿を目にした時、リクの頭には吸鬼の事などすっかり消え失せていた

小さな頃から育ってきた町だ

知り合いだって沢山居る

それなのに、なんなんだこれは？

自分が居なかった僅かな内にここまで町が酷いことになっているなんて

何かが起こっている、いや起こされたのだ

魔獣が町を襲ったところで此処までの被害にはならないはずである

魔獣とはいえグレイごときにひけをとるような自警団の人達ではない

吸鬼！！

湖を振り返りたかった

だが、目の前に突如躍り出てきたグレイのせいでそれができなかった。一歩、いつの間にか自分は後ずさりしていた

グレイ程度、これまで仕事中に何度も山の中で見かけてきた。時にはにらみ合い、襲ってきた時には戦いにもなった

魔術を使えず、武器も持たず、そんな小僧一人が皮膚を切り裂く爪と喉をかみ切る牙を持つ相手にどう戦えというのだ

無力さを思い知った

逃げ出したい衝動にかられる

せめて武器を

そう思ったのは確かだ

だが背を見せた瞬間リクの負けは確定してしまう

理由は分からないが、普段山で見るグレイよりも気が立っているように見えるのは気のせいだろうか？

牙をむき出しにして唸るグレイの口からヨダレがぼたぼたと落ちるのが見える

一歩、また一歩と近づいてくるグレイの姿

「ふっ！！」

ぎゃんっ！

「・・・え？」

突如悲鳴と共にリクの正面から消え失せたグレイの姿

一瞬その体が右へとぶれたようにして、そのあとすぐに視界から消えてしまったグレイを追って右へと視線を向けた

木に打ち付けられたグレイ

そのグレイの腹に吸い込まれた拳

「しぇ、シェリアさん！？」

「あら？」

そこには右拳をグレイの腹へと殴り込んだ西の頂、シェリア・ノートラックが意外そうな顔をして立っていた

「久しぶりね、元虹魚の神子さん」

ごりっ

にこりと笑ったシェリアはもう片方の手で気絶したグレイの首を折った

「っはぁ・・・っはぁ・・・」

再度、湖上

ゆっくりと翼を上下させる吸鬼が余裕の表情で腕を組んで浮遊している

その眼下の湖にはまるで大地と呼べそうなくらいにまでに展開された氷の足場が広がっていていた

冷気が立ちこめる中、氷の柱が乱雑するその湖上の氷はゆっくりと日光によって溶けていく

「そろそろ潮時だと思うぜ」

そう氷の上で膝をつく男に声を投げかける

荒い息をあげているその男は折れた剣を湖へと捨てる

刀身の方はすでにまっぷたつに蹴り飛ばされているためもはや剣としての機能は殆ど失われたと言っても過言ではなかっただろう

だが、仮面の奥の瞳にあきらめはの色は無い

所々に怪我を負っているようにも見えるその男が立ち上がるその姿を見て吸鬼はため息をついた

もう飽きた。そんな顔をして男に言い放つ

「諦めなぁ。お前じゃ俺には勝てない。分かってんだろ?俺も今お前を殺そうとは思ってねぇんだよったく。本音はもっと強くなって欲しいと思ってるんだぜ?せっかく見つけた玩具(おもちゃ)なんだからよ」

グッと一気に急降下して吸鬼はカイの顔に強烈な蹴りを入れる

それを避けきれずにカイは氷の上を二度三度とバウンドして転がっていく

その度に氷で切れた傷からにじみ出した血で氷が血に染まっていく

「が・・っ・・・はぁっ・・・待ち・・・やが・・・っく・・・」

とどかなかった

俺の剣が、届かなかった

俺の力が、届かなかった

「だからさ、諦めな」

もう少しでとどくんだ

俺の場所へと届くまで

俺の力へとたどり着くその時まで

「待っていろ！」

「待ってやる！」

吸鬼はそのままスッと上昇する
徐々に小さくなるテンを見上げ
徐々に小さくなるカイを見下ろし
互いに思うは喜びと悔しさ

「次こそ・・・倒す・・・絶対・・・にぃ・・・」
「次の機会を楽しみに待ってるぜ。精々強くなっていてくれよ」

互いの相反する思いを乗せて

「っあああああああああああああああああああ！！」
「っハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

二つの叫びは湖上の空へと消えていく

この日カイは一度もテンに決定打を入れることが出来ず、完敗を喫した

その氷の下を、ゆっくりと巨大な影が動き出す

町へと向かって動き出す

『巨影の上陸』

オオオオオン

肉だ

血だ

あぁ、あぁ、潤う

潤う潤う！だが、まだだ

あの先にあるもので、俺たちは真の意味で潤う

そしてたどり着けさえすれば俺の力はまだまだ増えよう

あの満ち足りたマナを取り込めば

人間どもに奪われた大地のマナを奪い返すのだ！！

オオオオオオオン

そこは戦場だった

前回グレイと街道で戦ったときとはまた別の空気がこの町には流れていた

死と血の匂い

そう、それはきっとそういう匂いなのだろう

嫌いな匂いじゃない

でも、悲しいニオイだと私は思う

手下を従えたボスグレイが町の中央で雄叫びをあげた

「ミャー、大丈夫?」

「クァーッ」

「そう・・・じゃぁ、あの大きな肉、食べて良いよ。行くよ!!」

少女はグリフォンの腹を足で蹴った

やっぱりふかふかの体毛に跳ね返された

合図を受け取り、螺旋を描くようにしてグリフォンは僅かに上昇を始める

町が僅かに小さくなったところでグリフォンは空中で旋回をして狙いを定める

「町の真ん中・・・ボスグレイがいる。周りの小物は無視して一気に行こうかな」

「クァッ！」

ぐるりと宙返りして一直線に町の中央へと向かってグリフォンは急降下をする

振り落とされないようにしっかりとその羽毛にしがみついたアリスはその冷たい風を我慢してうっすらと目を開ける

どんどんと近くなる町の中央、の大通りに見える幾つかの黒い影を見つけた

そしてその中心にいるひときわ大きな影

・・・気づかれた！いやでも大丈夫！！このままっ

ボスグレイがフッとこちらを見上げたのが見えた

だがそれを気にしない程の勢いでグリフォンはボスグレイにかぎ爪を向けて突っ込んだ

瞬間、ドンッという反動と同時にグッと足のかぎ爪がボスグレイの

腹へと突き立てた

ドンと倒れるボスグレイの体に乗りかかったグリフォンはギロリと周囲に群がるグレイに睨みをきかせた

獣として上位に立つグリフォンにグレイ達は怯んで後ずさる

統率のとれなくなったグレイの一匹が、突如として空中へと跳ね上げられる

それをグリフォンの上から見ていたアリスは叫ぶ

「ルオ！」

従者の一人が大きな槍を天へと突き上げている

「朝嗅ぐ匂いは朝食の方がうれしかったな」

そう呟いてくるりと槍を持ち直す

矛にべっとりと付いた血糊を振り払って次の標的を見定める

今やグリフォンにのしかかられているボスグレイに率いられていた統率がとれたグレイの群れは一匹たりとも獣の猛りを失っていた

グリフォンは再度しっかりとボスグレイの体を鷲掴みにして暴れる

巨体を押さえつける

「ッガァッア！」

逃れようと暴れるボスグレイだったがグリフォンのあまりの脚力に体を浮かせることが出来ず、その度に体に食い込んだ爪が深々と刺さり血があふれ出る

グリフォンは翼を大きく広げてボスグレイを覆い隠すようにして押さえつける

喉元へと何度も嘴を向け、肉を引きちぎる

次第に弱るボスグレイの体がついに動かなくなったとき、二本足で立ち上がったグリフォンは大きく翼を広げて勝利の咆哮をあげた

が、その瞬間、湖の方から巨大な音が聞こえてきた

それにアリス、グリフォン、そして周囲のグレイを退治していたルオが気を引かれて湖の方向へと視線を向けたその瞬間

グリフォンの背後から巨大な影が飛びかかってきた

もう一匹！？

そう思った瞬間、アリスの耳に獣の唸る声とルオの叫び声が同時に響いた

「アリスッ！！」

「二歩切り一閃っ！！」

俺は思いっきり叫んで突っ込んだ

そうでもしないと気持ちで負けて途中で尻込みしてしまいそうな気がしたからだ

最初の一歩を踏み出したその瞬間、大地を蹴るのと同時に一気に魔術で風を操り体を押す

そしてそのまま勢いに乗り、二歩目でさらに勢いをつけて相手へと接近して斬りつけるというのがこの技だった

案外この技はバランスを取るのが難しい

風に上手く乗れなければ上体が反ってしまったり、バランスを崩して頭から地面にキスをする事にもなってしまうのだ

本当はアルデリアの武闘大会の時に使う予定で魔術とは別にもう一つの秘策として用意していたものだった

当の大会は途中で中止となってしまい、使う機会は無かったので実戦で使うのはこれが始めてとなる

ユディス先生に教わった数少ない技の一つであり、魔術とは別に唯一自分が自信を持って習得したと思える技だった

まぁこればっかり練習していたのでもう体がバッチリ技についてきてくれている

早さこそが強さだと俺は昔から思っている

力、技術、素早さ

どれか一つを選べと言われたら俺は恐らく素早さを取るだろう

理由は何とでもあるが、一番の理由は自分に合っているからというのがある

そこに理由なんて無い

煌めいた風王奏の刃は一瞬にしてボスグレイの胴を切り裂いた

あまりの切れ味にゾッとした

吹き出す返り血を僅かに浴びてすぐさまもう片方に持っていたソーレに魔力を込める

炎を纏うイメージで

すると剣に赤みが増し、紅を映す剣はボスグレイの顔に突き立てた

走ってくるボスグレイに対して横からぶつかる形で初撃を決めた俺はそのまま間髪入れずに二撃目を決めた

体ごとぶつけて、痛みと突然の乱入者にバランスを崩したボスグレイは彩輝諸共市場の屋台に突っ込んだ

「この辺にはもうグレイも殆ど残ってないようね」

町の騒ぎは徐々に収まっていった

シェリアを中心にまるで死が訪れたかのように、多くのグレイ達が倒れている

ぐるりと周囲を見渡したシェリアは血に濡れた拳を倒れていたグレイの毛皮で軽く拭き取る

とはいえべっとりと付いた赤い血は取れていないため後で洗おうとシェリアは決めた

今現在その後ろでびくついているリクは、シェリアから預かってい

るパラソルを片手にそろそろとシェリアの後ろをついて行く
いつの間にか村の中までグレイ討伐のために移動していたらしい

「あ、あの、シェリアさん？」

「何かしら？」

首だけ振り向いたシェリアはにっこりと聞く

「さっきの話の事なんですが、すごい心当たりがあるんですよ」

「へぇ、どっちに？」

シェリアは今現在の状況と自分がここに来ている理由を伝えた
そして二つの質問を投げかけたのだ

「黒髪の人間、この湖の宝玉、どちらとも・・・っす」

ぴくりと眉を動かしたシェリアは体もリクの方へと向ける

一つ目の質問はこれまでに黒髪の人間に出会ったことは無いかというものだった

そしてもう一つはこの湖にある宝玉の安否の事を聞かれたのだ

黒髪の人間は確かに昨日一夜を共にし、宝玉の方は衝撃の展開すぎて今でも嘘なのだと信じたい位だ

これまでの事をリクはシェリアに説明すると、シェリアは意外にもフフフと笑みを浮かべていた

「そう。吸鬼が・・・ね。匂いがしていたのよ。私と同じ匂いが。それに宝玉と聖天下十剣も持ってるのね？」

「え、えぇ。でもなんでそんなにニコニコしているんっすか？」

「そうね。きっと嬉しいのよ私は」

「嬉しい？」

理解できないといった顔でリクは首をかしげるがそれを無視してシェリアは湖の方向へと歩き出す

「えぇ、だって強い者と戦うのが私の生き甲斐と言っても過言では無いもの。それに絶滅したと思っていた種族と手合わせ出来る機会なんてそう無いわ」

フフッと笑い、笑みを浮かべたまま湖へ向かうシェリアを見てリク

は次元が違うと思った

自分とは生きている世界も、感じているものも違うと思った

だから、止めても無駄なのだろうし（止める気はさらさら無いが）

それにあわせる気も起きなかった

西の頂、四天王が一角のシェリア・ノートラックと知り合ったのは

まだリクが神子に成り立ての頃だった

その当時は何故か自分の事を神子として訪ねてきた彼女にとても驚

いたものだった

何しろそれまで自分が神子であることを誰にも教えた事も無かった

のに、彼女はそれを知っており、さらには親方にまでばらしたのだ

からあのときほど強烈な出会いは忘れないだろう

まぁとりあえず、吸鬼がここ最近の異変などの黒幕だった事を伝え

たのでひとまずは安心だ

あとはもっとこのことをあの黒髪の旅人や町の人に知らせて避難を

させようかと考えていたその時だった

町中に巨大な叫び声が響き渡る

そして僅かに遅れるようにして巨大な轟音が聞こえてきた

森や山から無数の鳥たちが空へと飛び立つ

これまでずっとこの地で暮らしてきたリクですら、それは初めて聞く鳴き声だった

カイは見上げる

その巨体は湖の上からでは木々と同じほどの高さがあるようにも見えた

「化け物じゃねぇか・・・・」

その背に見えたのは太陽を象った紋様

俺はどこかでこの模様を見たような気がする

あれは・・・どこだったか

そう遠くない、そう、あれはアルデリア王国の大会の時だ

翼を広げた真っ赤な鳥の羽織られた布に刻まれていた紋様と同じなのだ！

一体、どういう事だ・・・

開いたドアから外へ出てみればそこには巨大なものがいた
足は無いようにも見える
羽織った布の下から覗くのは尾だろうか？
それも浮いている
その影に太陽が隠れた

「何・・・・これ・・・・・？あ・・・・っ・・・・・」

一条唯は腰が抜けた
その姿はまるで一昔前に流行っていた怪獣映画を彷彿させた
後ろからひょっこりと湊千尋が顔を覗かせた

「・・・でっかい亀さんだー」

「が・・・・が・・・・・」

急いで下山する親方は足を止め

グリフォンは押さえつけたボスグレイをついばもうとした状態で、
アリスと共に固まった

ルオは一歩後ずさり苦笑いする

グレイ退治をしていたシャンも鎌を止めた

そして崩れた屋台からはい出してきた彩輝はピタリと動きを止めた

「・・・・・・・・亀？」

どこか遠くからガメラじゃん！とかいう叫び声が聞こえた気がした

いやまぁ全然ガメラには似てない気もするけどね

そして丁度その頃

湖の北で作業を続けるゴはふとその異変に気がつく

マナが動いている

それも湖の周囲の何カ所かで

その位置に何があったかを思い出したゴはこれまで貫いていた無表情を僅かに崩す

「まずい・・・」

ぽつりと呟くが、彼はその異変に何らかの手を打つことはしなかった

というより最早諦めに近かったのかもしれない

ゴは黙々と自らの作業を続ける

少しばかりペースを上げるゴは目に見えて焦り始めた

そろそろ結界が破られるのが近いかもしれない

湖に不穏な空気が渦巻き始めた

『湖の畔にて』

「やっと出てきたか」

一度湖の上に戻って辺りを見渡していたハチは、やっと姿を現し上陸した魔獣を見てそろそろ動こうかと考えていた

結局自分の今の役目は魔獣が出てくるまで邪魔者の足止めなのだ

そのため湖の上にいた方が視界も良く、都合がいいのだ

「お前、まだ仕事終わってなかったのかよ」

突如後ろから声をかけられ、ハチが振り向くと其処にはゆっくりと近づくテンがいた

自分の仕事を終わらせたようでこちらに合流したのだろう

「あぁ、うん。解放ご苦労様。あれ?どうしてその服切れてるわけ?」

「ん?」

ハチに指摘され、テンは服の裾を見る
すると指さされた其処には小さな斬り跡が残っていた
もしかして誰かと戦っていたのだろうかとハチは予想する

「何その意外そうな顔。あ、もしかして斬られたことに気がついてなかったの？」

「・・・どうやらそうらしい。やってくれるなあの仮面野郎・・・」

「はいはい。さってと、やっと湖から出てきてくれた事ですしさっさと連れて帰りますか」

ハチはゆっくりと上陸した魔獣へと近づく
こうしてみるとやはり大きく感じる
急がないと行けない
できる限り介入されないうちに
ハチにはそれだけが気がかりだった
だが、ハチもその異変に気がつく

「何だろう・・・マナの収縮が各地で起こってる。ゴの所だけじゃないねこれは」

「ん？どういう事だ？」

「分からない・・・けど、もしかしたらそう予想外のことでも無いのかもしれない」

マナの収縮は５カ所

一カ所はゴの所だからそれは問題ない

ただ残りの４つが問題だ

どれもこれも結界を埋め込んだ場所なのだ

結界と言っても何かを防ぐものではなく、むしろ出てこないように押さえつける蓋のようなものだ

通常人が使うような符術や魔術師による結界ではなく、ヨン、ゴ、ロクの技術メンバーが作り出した対神獣用の結界だ

とはいえまさか神獣で実験するわけにも行かないのでぶっつけ本番だったわけなのでどのようなことになるかは予想がつかなかったのは確かだ

一瞬にして破られる可能性も、神獣が一生出てこられなくなる可能性もあったわけだ

神獣を押さえ込むなんて普通出来ることではないのだから、そう考えるとこれまで持ちこたえてくれたことの方が奇跡に近いのかもしれない

過信はするなと言いつけられていたのであまり期待はしていなかったが、これはこれで十分役目は果たした

少なくとも魔獣を解放して宝玉を手に入れた様子のテンは仕事を終えている

それに加えて聖天下十剣のような剣も持っている

後は自分の最後の仕事、あの魔獣を連れて帰る事とゴの仕事だけだ

結界が破られるより先に、できれば終わらせたかったがそれでも十分楽にはなった

後でお礼にヨンとロクにもお土産に何か買っていこうかと考えるハチはとりあえずあの魔獣を止めることにした

一応は足止めされてくれた少年にも言ったように、礼儀ぐらいは返しておきたい

自分で言ったように、情報の開示だ

この際別に言わなくても良いのだろうが、自分の中ではなんというか言っておきたい。そういう気分なのだ

「こんなのだからいっつもみんなに異端だって言われるんだよなぁ・・・」

「何か言ったか？」

「いやぁ、なんでもないよ」

スッと翼を羽ばたかせてテンから離れる

キッと自分は周りから見たら裏切り者のように見えるんだろうな

そう思いながら翼を再度羽ばたかせる

それに正直、湖の上に居てはよくなさそうな雰囲気がする

まぁ勘なのだが

動きは無かった

魔獣の容姿はまるで亀のようだった

だが硬そうな、暗い青を地とした民族的な服を羽織っている

腕を前で合わせており、片目にはモノクルをかけている

体からはごうんごうんと決して近くからでは小さくない音が聞こえてくる

「無事でしたか!?」

その巨体を見上げていた時、リクが戻ってきた

後ろには何故かパラソルを差した女性も一緒だ

「あっ、リク君!うん・・・でも何これ?分かる?」

「いえ・・・魔獣の類と見てもいいんっすかね?シェリアさんはどう思います?」

シェリアと呼ばれた女性はおおよそ一条よりも僅かに大人びて見えたが、それでも若さをも感じさせる女性だった

ふわりとした短い髪がパラソルの影に隠れて彩度が落ちているが、綺麗な白髪である

「そうね・・・。壊しても良いのかしら?」

一歩、パラソルを折りたたんで片足を前に出した瞬間

「あっと、それはご勘弁願いたく思いますね」

地面に新たな影が増えた

どこから来たのか、そこには翼を生やした人間がいた

あの大会の時にもいた吸鬼という人種なのだろうという答えに一条は行き着く

「あなたが噂の吸鬼？」

「そうだよ。なんだばれてるのか。なら話が早いね」

スッと降りてきた吸鬼の少年はニコニコと笑いながらこちらへと歩いてくる

警戒を強めるリクを、シェリアは片手で制する

同様に、シェリアの表情も笑みを浮かべている

「こいつは回収させて貰うので壊しては欲しくないですね」

「あら、私は壊したくてウズウズしているのだけれど、あなたが代わりに壊されたいのかしら？」

「あはは、ご冗談を～」

「マジよ」

目が笑っている

吸鬼の笑みが苦笑いに変わった気がした一条とリクは互いに顔を見合わせた

「・・・えっとですね――――」

「ははははは!!見つけたぜーーー!!」

さらに一人増えた

今度は少年とは違い、成人男性ほどの背丈に前髪が長い吸鬼が湖上より飛来した

剣を片手に急停止した吸鬼はハチの目の前に落ちるような勢いで着地する

「ちょっとテン!まだ話の最中なんだけど笑いながら割り込んでこないで欲しいな」

呆れた顔で突っ込むハチを睨みつけた

「うるせぇ！これが喜ばずに居られるか！おい女！名前を聞いても良いか！」

ビクッと一歩後ずさったハチから視線を戻して、シェリアの顔を嬉しそうにマジマジと見つめる

明らかに面倒くさそうな顔をしているシェリアもテンの瞳を見つめる

「五月蠅いハエが増えたわね。私はシェリア・ノートラック。同じ匂いのするあなたのお名前は？」

「やっぱり匂うか！俺はテン・ティニート！さぁ、勝負だシェリア・ノートラック！！」

「ちょ、シェリア・ノートラックって『西の頂』じゃん！四天王の一角だよテン！本気！？」

「あら、私の名前も吸鬼さんには知れてる程度には有名なのね」

「四天王の一角と殺りあえるなんざぁ、こんな幸せは二度とねぇ！！」

大きく翼を広げ、テンは高らかに笑い声を響かせる

端から見れば狂っているようにも見える

「その勝負。喜んでお受けいたしましょう」

長いスカートの裾を持ってお辞儀をするシェリア

「よし、なら湖の中央に氷の足場が出来てる。そこなら誰の邪魔もはいらねぇぜ」

「いいでしょう」

「って、シェリアさん!?待ってくださいよ!」

そんな狂った奴の言うことをきこうとするシェリアにリクは待ったをかける

弱いリクからしてみれば実力者であるシェリアをこの場から遠ざけようとしている風に思えたのだ

不安に思うのも無理はないと一条は思った

実際自分も不安である

どうやら彼女は相当の実力者なのだと直感で一条は感じていたし、一般人二人が吸鬼と巨大な謎の魔獣の目の前に置いて行かれると思

うと不安は増すばかりである

すると、そのシェリアが一条の方へと歩いてきた

耳に顔を近づけられ

「安心していいわ。あの吸鬼はそれほど強くないわ。まぁ成人男性ぐらいの力はあるけど、所詮はその程度よ」

と、こっそりと耳打ちをした

「あなたの力なら、問題ないはずよ。自信を持ちなさい」

「それって・・・」

「あと、もし何か合ったらこれを使うと良いわ。閃光符、まぁ目眩まし程度には使えるでしょう」

一条は戸惑い、どういう事なのかと聞こうとしたがその時にはシェリアはすでに踵を返して後から乱入してきた吸鬼の方へと歩いていく

一体貴方は何処まで見抜いているのか

自分が符術の使い方を知っているからこれを置いていったのだろうか？

一条はいつの間にか握らされていた三枚のお札を見る

なんかどこかでこんな昔話が合ったような無かったような・・・

でも、あの大きいのはどうすれば・・・

気がつけば、シェリアと呼ばれた女性とテンと呼ばれた吸鬼は消えていた

シェリアは確かに一条の実力を見抜いていた

そしてその実力があれば問題なくあの吸鬼を倒せると判断した

それにあの場にはリクも居た

神子の力を失っているとはいえ、あれも天才だとシェリアは二人にあの場の足止めを任せた

何となく、まだ実力者が何人かこの場に居るような気がした

大きいデカブツを見て場所は分かるはずなので、少なくともその実力者が来るまでの足止めはできるだろうと踏んだのであった

だがシェリアは知らなかった

吸鬼はそれぞれ戦闘能力とは別に、特殊な能力を持っているという事を知らなかったのだ

「っ！！」

見上げれば、そこには巨大な亀のような魔獣の顔が見えた

建物の影になって全体は見えないが、それでもかなりの大きさがあることは一目瞭然だった

咄嗟に瓦礫を押しのけ、飛び出す俺

町は静けさを取り戻し、殆どパニックを起こした人の声は聞こえなくなっていた

グリフォンは倒れたボスグレイの片割れの肉を啄んでいる

奥の方では最後に残ったグレイを槍で仕留めていた

村の静けさからして恐らくこのグレイが最後の一匹だったのだろうと予想した俺は剣を鞘に収めて湖の方向へと走り出した

「落ち着け」

「っ！離してくださいシャンさん！」

だが勢いつく前に、俺の肩に手を置いて止めるシャンは落ち着いた目で俺の瞳を見つめていた

とはいえ、俺も落ち着いていられる状況じゃない
あの方向はちょうど小屋のあった場所
あそこにはまだ一条さんと千尋ちゃんが居るのだ

「察するところにお前の連れが心配なんだろう。
「それが分かっているなら離してください！」
「出来ない。離せばお前は一人で行くだろう。策もなく突っ込んだところで、どうやってあれを倒す？」

分からない。そんなことを考える余裕すら無く、俺は咄嗟に飛び出していた
だが、どうだっていい
今大事なのはあの巨大な生物を倒すより先に、あの二人の安全を確かめる事の方が俺にとっては大事なのだ

「倒さなくてもいい。ただ安全が知りたいだけだ！」
「だとしても、何故一人で行こうとする？」
「え・・・」

鎌を構えた女性はコクリと頷く

つまり、自分も連れて行けというのだ

「お前一人で勝手に動いて迷惑なことをしてもらっても困るからな。アリス、ルオ！」

シャンはアリスとルオにも声をかける

その呼び声に答えて二人もこちらへと走ってくる

ルオと呼ばれたその男は長い槍を持っていた

その槍はグレイの血を浴び、俺もそうだが服には返り血を浴びている

「なんだってんだよあのでけーのは」

どすどすと音をたてるようにしてやってきたルオは身動き一つ取らない巨大な魔獣を見上げた

「しらん」

シャンがそう返すと今度はアリスが

「それで、どうするの？」

「一応、あの下にある小屋まで行ってこいつの連れの安全を確かめるのが大事かと」

「うん。そうだね。私が囮になろうか？」

「っそれは・・・」

不安げな顔をしたシャンだったが、そうか確かシャンはこのアリスという少女の従者なんだったけか

大事な人なのだろう

それが進んで囮をやるなんて言い出したらそりゃ困るかと彩輝もアリスという少女を見下ろす

だが当の本人は全く気にする事無く、大きく胸を張って握り拳を胸で叩く

「大丈夫だよっ。ミャーに任せておけばさ」

「・・・確かにグリフォンの飛行速度はドラゴンに継ぐ早さと言いますし小回りもききますが・・・」

「もうっ、心配しなくてもいいって。いくよミャー」

するといつの間にか近くまで寄ってきていたグリフォンの背中に飛び乗るアリス

嘴がボスグレイの血肉を啄んだおかげで紅く染まっている

主を乗せたグリフォンは後ろ足二本で立ち上がり、大きく翼を広げると高らかに雄叫びをあげた

そして大きく羽ばたいてその巨体は宙へと舞う

「出来るだけの事はやってみる」

「・・・分かりました。危険だと思ったらすぐに後ろに下がるように。良いですね？」

「りょーかいっ！！」

グリフォンは高度をどんどんと上げ始めた

「では私たちも行こうか。何かあったら私とルオが盾になろう」

「なんだよそれ。なんで俺の許可無くしらん奴の盾にされなきゃならんのだ。っていうか何だよこの黒髪のガキ」

ため息をつきつつも「はいはい分かりましたよ」と、シャンさんに睨まれて渋々了解を承諾するルオ

「とりあえず私が前衛、次に君。その後ろをルオが守ってくれ」

「了解。調子乗って出しゃばるなよガキ」

「分かりました。ガキですから」

三人は顔を見合わせ、頷く

まだあの巨大な魔獣に動きは無い

誰の目にも、動きは無かったように見えた

『足止めする者達』

にらみ合う二人

片眼を長めの前髪で隠し、もう片方の目には額から頬にかけて縦の傷跡が残る男の吸鬼テン・ティニート

そして吸鬼と同じ白髪に、パラソルを持って微笑む四天王の一人、西の頂シェリア・ノートラック

シェリアは湖上に広がる氷の上から空を見上げる

翼を広げ、高みより見下ろす吸鬼を視界に捉える

「あなた、早く逃げないと死ぬわよ？」

「その声・・・まさか、女の口からその言葉を聞くことになるとは思わなかったな」

仮面の男はゆっくりと膝を立てる

冷気に耐性が出来るのか、それとも別の何かをしていたのかは分か

らないが倒れていた仮面の男に凍傷の気配はなさそうである
とはいえ深いダメージを負っていることは見れば明らかである
この場をあの吸血鬼が知っていたという事は、あの吸血鬼とやり合ったのだろう
さて、この氷の台座を作ったのはどちらなのか
どちらにせよなかなか強力な魔術によって作られたのは確かなようである
もしこれをこの仮面の男が作ったのならば、あの吸血鬼はかなりの手練れということにも取れる

「寒いわ。逃げるなら早くして欲しいわね。巻き添えにしない自信は無いわよ？」

「その声・・・もしや、シェリア・ノートラックか？」

「あら、今更気がついたの？それともこの場合は私を知っていることをほめるべきなのかしら？まぁどちらでも良いわね」

くるくるとパラソルを回して吸血鬼を見上げているシェリア
その後ろで、ふらふらになりながら立ち上がるカイはゆっくりと仮面を外す

「俺を覚えていますか？」

「あら・・・久しいわねカイ。大きくなったわね。ということはこの氷の台座はあなたが？ずいぶんと成長しているみたいね」

回っていたパラソルがぴたりと止まる

ちらりと振り返ったシェリアの言葉には僅かに懐かしみを感じさせられた

「お陰様で。あなたのおかげで今でも何とか生きてますよ」

「それは何より。それで、負けたの？」

その言葉に、カイは視線を落として沈黙する

思い出すだけで悔しさがこみ上げてくる

握った拳に入る力さえ、今では心許ないくらいに弱々しい

「そう」

その上にいる吸鬼はというと、苛立っていた

イライラと吸鬼は眼下の様子を窺う

なんだかよく分からないが、あの二人はどうやら知り合いらしい

「まだかよ!?おっせぇなぁ!!」

だが、その会話が終わるまで待つ気にはならない

二人に聞こえるような苛立ちのつぶやきを聞かせる

その声に反応したシェリアは再びパラソルを回し始めた

「なら、負けたあなたは早く帰りなさい」

「っ・・・でも――」

「聞こえないのかしら?早く岸へと戻りなさいと言っているの」

「!・・・分かりましたよ」

吸鬼の方からは、渋々戻っていくカイの姿を見てやっと邪魔者が居なくなったと口元をほころばせた

にやりと笑った吸鬼は腕を組んで早く戦いたそうにウズウズしているのが目に見えて分かった

カイの方はというと、最初の言葉は邪魔だから戻れと言われたように感じた

普段なら察せたことにも気がつけなかった

いくら何でも、あの吸鬼は強すぎるので出来ることなら加勢をとも考えていた

だが、あの吸鬼に負けたという事に少々心を乱されていたのだろう

二言目に言葉の意味を知った

岸には何がある？

俺の剣が守るものが！！

怪我の痛みなど吹き飛んだ

「さて、邪魔になりそうな雑魚も居なくなった事だし、始めるとしますか！」

開始の合図は無かったが、そう言い終えるとすぐに吸鬼は急降下してシェリア目掛けて突っ込んだ

腕を大きく曲げ、そして殴るようにして突き出す

その拳をスッと避けたシェリアはその吸鬼の勢いを利用して氷の上

でダンスをするかのようにクルリと一回転

吸鬼の腕を片手でつかみ、そのまま振り回す

振り回され、投げ飛ばされた吸鬼は先ほどのカイとの対戦時に出来た巨大な氷柱へとぶつかった

砕ける氷と冷気に飲まれてその姿はシェリアの視界から消えてしまう

折れた氷柱は大きな音を立てて氷の台座を割って巨大な水飛沫を上げた

同時に揺れる台座に足を取られるシェリア

目を細め、そして大きく右足をあげ、足下の氷へと踏み落とす

「ッはがっぼ!?」

瞬間、その足下の氷を割ってから飛び出してきた吸鬼が再び水の中へと押し戻された

「女性の足下から襲いかかるなんて、吸鬼とはいえあなたも男でしょう?少しは礼儀を知りなさい」

頭にシェリアの足蹴りが直撃した吸鬼は水の中でもがくが水上へと出れないのを悟ったのか、一度水中へと沈み込んだ

その隙に脆くなった足場から離れる

すると再度勢いをつけた吸鬼が先ほど出来た穴から飛び出してきた

ぐるりと回転して翼を広げた吸鬼の服は水を含んで重そうにしているのが分かる

「て、てんめぇ・・・溺れるかと思ったじゃねぇか・・・」

「あら、スカートを覗こうとしたあなたが悪いのでは無くて？」

「誰がするか。お前のなんか覗いたところで俺が興奮する訳ないだ――――！！」

「あら、あたしには色気が無いとどの口がほざくのかしら？」

シェリアは飛んできた

文字通り、地面を蹴って吸鬼の居た地上から5、6メートルの距離を飛んできたのだ

「嘘だろ・・・」

「この口ね」

一瞬にして距離を詰めたシェリアに、呆気にとられたテンは反応することも出来ずに強烈な蹴りを顔面に食らう

我に返ったテンだったが、次の瞬間には再び台座の氷を割って水中へと沈んでいた

すぐに湖から飛び出るが、見渡しても何処にもシェリアの姿がない事に気がつく

「何処を見ているのかしら？」

真上！？

声を追ってテンが顔を上げた瞬間、その眼前に広がったパラソルが映る

視界の殆どがそのパラソルで覆われ、周囲の様子が分からない

咄嗟にそのパラソルを右手ではじき飛ばすがそこには真っ青な空が広がっていた

ぐっ、パラソルの影だとっ！？

シェリアははじかれたパラソルの影に隠れ、着地した後パラソルを閉じてテンの脇腹にその先端で突き飛ばす

またしても意表をつかれたテンの体は気がつけば二、三度氷の上をバウンドして氷の台座から離れた水面へと落ちた

「思ったより遅いわね。服が重くて動けないのかしら？」

余裕をみせるシェリアは再びパラソルを開いて太陽の光を遮る

離れた場所から飛び出してきた吸鬼は僅かに荒い息をたてているのが遠目でも分かった

「っはぁ・・・っはぁ・・・さすが四天王の一人。その名は飾りじゃ無いって事か。少し舐めてたぞ」

「ほめられてるのかしら？」

「あぁ、予想以上だ。これなら・・・」

「？」

吸鬼はゆっくりと水を吸ったローブを湖へと投げ捨てた

「本当は使いたくないんだよ。だが、一方的にボコボコにされることを快感としているわけじゃ無いからな。ここからは、俺も全力だ。死ぬなよ？」

「あら、やっぱり全力じゃ無かったの。少し歯ごたえがなさすぎると思っていたのよ」

「その減らず口、ここらで噤ませてやるぜ」

「やってみなさい。四天王の名はそう安いものじゃ無い事、肌で感じなさい。あなたこそ、簡単に死なないでよ」

その笑みを見て、つられて笑う吸鬼は翼を広げる

「ハッハハハハ！！上等！！」

「さて、邪魔な二人はいなくなったし、回収して帰るとしますか」

もう一人の吸鬼、ハチは湖の方へと移動した二人を見送った後、すぐにその巨大な魔獣を見上げて呟いた

そして魔獣に触れて能力を行使しようとした

「吹っ飛べ！」

「っ！？」

その瞬間、ハチの体は突然大地からはじき飛ばされ、湖の上まで吹き飛ばされた

回転する体を翼でバランスを取り直す

「今・・・何をした？」

女の声が聞こえ、それと同時に自分の体が何かによって吹き飛ばされた

その現象に、理解が及ばない

訳が、分からない

自分は一体何をされたのだ？

恐らく、その何かをしたのはあの黒髪の女

だが自分との距離から考えても物理的に何かをしたという訳ではないのだろう

むしろ考えられるのは魔術などの類

だがマナの動きを感じなかった事をハチは不可解に思う

「カウントダウン開始っ！」

「！！」

再び女が叫んだ

何かが起こるのかと身構えるが、数秒たっても何も起こらない事に戸惑う

その間にも女は動きを止めなかった

振り向き、森の方へと走りながら腰のポーチから何かを取り出しているのが見える

あれは符術に使う札

それを理解した時、陸で巨大な爆発が起こった

砂煙が辺り一帯に広がり、魔獣の姿も半分ほど隠れてしまうほどの威力だった

「な、なんだってんだよ！？」

そういえば、とハチは懐に手を入れて紙の束を取り出す

そしてバラバラとめくり、その顔を見て目を細めた

「こいつもか・・・」

あの少年と同じように、この女も二度吸鬼の前に現れている

報告書には不可思議な符術を使うと書かれている

追記で要注意人物とも書かれている

「っていうかもう少し具体的に書いてくれないと困るんだけどイチ・・・」

とはいえ、イチに要注意とまで言わせる人間なのだから侮ってはだめだ

とにかくここにもう長居する必要は無い

自分はもう役目を終えている

あの少年には少し悪いことをしてしまった気もしたが、まぁ別に今無理にあう必要も無いかと判断してハチは逃走の準備にかかる

再度巨大な魔獣に近寄ってその羽織った服に触れようとした瞬間、またしても横やりが入った

間に割って入ってきたのは巨大なグリフォンと、そのグリフォンに乗った少女

「あんた何者!?」

「・・・あーもーめんどくさいっ!」

髪の毛をわしゃわしゃと引っかき回して空中でしゃがみ込むハチの姿を見て、グリフォンに乗った少女は僅かに油断する

何・・・こいつ?

背中から翼を生やした白い髪の男を見てアリスは首をかしげる

どうやらこの魔獣や湖の異変とも関係ありそうな人物にも見えるが

最初はこの背後にいる巨大な魔獣の意識を引く為に来たのだが、全然動く気配がない魔獣に不気味な気配を感じる

体からはゴウンゴウンという重い音が聞こえている

そんなとき、突如起こった湖の畔の爆発

そして現れた謎の男の背には翼が生えていた

「えぇいっ、もういい!強行突破!!」

なんでこんなに邪魔が入って足止めばかりされるのだとハチは目の前のグリフォンを睨みつけた

足止め係の自分が何故足止めされているのだと思いながらこうなったら無理矢理にでも今すぐこの魔獣を連れて帰る事を決意した

待っていてはなんだかまだまだ増えそうな気がしてきたのだ

「ちょっとごめんよ」

「ミャー！！やって良いよ！」

突っ込んできた吸鬼に対し、迎撃する構えを見せるグリフォン

その様子を見てハチは手を一度パンと叩く。すると、突如バランスを崩したグリフォンに慌てる少女

「クァ！？」

「きゃんっ！？」

「邪魔だッ！！」

体勢を崩したグリフォンの頭に着地し、そのまま頭を蹴って一気に魔獣に近づく

一方バランスを崩したグリフォンだったが、すぐに体勢を立て直して魔獣の方向へと振り返る

アリスも何とか振り落とされずにしがみついており、その目で吸鬼を捉える

「な、何をしたの・・・？」

クァーと首をかしげながらも、吸鬼を威嚇するグリフォンはアリスの指示を待つ

そのグリフォンを見てハッと気がつく

「・・・！追わなきゃっ！！」

最初にシャンに言われたことや目的をすっかり忘れたまま、アリスは吸鬼を追うように指示を出した

波が揺らめく

ざわめく木々の葉

湖の中央にある祠が姿をユラリと現す

湖の東西南北の畔に埋められた結界を張っている機械全てに、亀裂が走る

亀裂は徐々に広がり、ネジや部品が弾けていく

光を目指し、水を掻き、上を、上を、上を上を上を目指す

そして光が体を包み込んだ

水面に亀裂が走った

「――――ハハハハ！！上等！！そうだ、一つ教えておいてやろう！」

「何かしら？」

無理矢理笑いを止めてテンは眼下より見上げる白髪のパラソルを持った女性に向けて言う

「俺は別にお前を殺したいわけでも、驚かせてやろうっていう気はさらさら無い。だから今お前に、俺の能力を教えておいてやろう」

「あら太っ腹。でも、良いのかしら？更にハンデが広がるのじゃないかしら？まぁ吸鬼なんて存在は私も初めて見るわけだし、教えてもらえるのならばそれに越したことは無いのだけれども」

ニコニコと笑ってシェリアは言うが、割と冗談では無かった

先ほど手合わせしたときに感じたのは力量試しとはいえ相手も其処まで手加減していた訳ではないと感じていたからだ

筋肉の動き、視線の動き、即座に状況判断する速さ

どれをとってもあの吸鬼には並の人間ではかなわないであろうが、
それでも軽く相手をしてみて分かった

手加減をしていたと仮定して更に素早く、力強くなったとしても、
相手は私より格下の存在であると

確かに相手の力量にはシェリアも驚くところがある

だが、初撃でスピードを見切り、二撃目で相手の行動心理を読み、
三撃目では相手の反応速度でもうわまった

単純な力比べではまだ予想はつかないが、女であるシェリアよりも
あの男の方が筋力の面では上回るだろうが、それを考慮したうえで
も恐らく勝機は自身にあると確信はできる

それ故の発言だったが、どうやら吸鬼の方はそうは思っていないら
しい

よほど自分の腕に自信があるか、能力に自信があるのか

前者ならばただの馬鹿である

後者ならば・・・予想はつかない

魔術に関係する事ならば多少の手は打てないことも無いのだが

「あぁ、俺としてはそれで互角、あるいはそれ以上の対策を練って
もらえれば俺が嬉しいってだけだからよ。何せ俺はこれまで全力で

戦ったことがないからな」

「あら、そうなの？自分の力も分からないのに、よく私に挑む気なんて起きたわね」

「逆さ。自分の全力が知りたいからお前に戦いを挑んだんだ。西方最強の強者と戦えるなら、その目安もわかりやすくて助かるってもんだ」

シェリアとしては自分が物差し代わりに使われているような気がして、あの吸鬼の特徴として相手を見る目がないという項目を付け加えようかと検討した

確かに強いが、それだけだ

己の力が絶対だと言わんばかりに信じている

それほどまでに思わせてしまう彼の能力とやらに少し興味が湧いてきたシェリアはとりあえずその能力とやらを聞き出すことにしてみた

世界広しといえども、魔術以外の能力に何かあるのかと問われれば精霊の力を借りたりする人間やごく一部の系統外の魔術を使う人間、それと本当に異質な人間かぐらいだろう

最初に上げた者の数は本当に僅かだ

精霊台の保有する国でも一人二人いるか居ないか

系統外の魔術、つまり基礎となる六天、火、水、氷、雷、地、風以

外の属性の魔術を使う人間の事だ

これは白銀魔法と呼ばれる回復系の魔術師などの事だ。他には幻術系の魔術師などもこの系統外の魔術に入る

ただこの幻術系の魔術にもいろいろと種類があり、炎の熱などで見せる幻とは違い（こちらは火の魔術に入る）は相手の精神に干渉して見せる方の魔術の方がこれにあたる

これらの系統外の魔術師もかなり少ない

この系統外の魔術師というのはほぼ血筋によって決まるため、人々に教える事ができないのである

まぁ魔術もそもそも血筋で決まってくるのだが、それでも現代では魔術師を輩出していない家系からでも意外と出てきたりするものだったりするのでそれなりの数は居るのである

そして本当に異質な人間だが、これに当てはまるのは恐らく自分なのだろうとシェリアは思う

異質な人間、人にして人に有らざる者と言ってもなんら問題ないのかも知れない

故に差別されやすい種類の人間であり、また畏怖や尊敬の対象になりやすい人間でもある

魔術でも無く、人間に備わっていない能力を持つ者のことをさすことが多い

まぁ多いと言うほど異質な人間は居ないものである
知られている人間でも十人いるか居ないか
他にいたとしても恐らくその能力を隠している人間が殆どだろう
周りから差別されることが恐ろしかったり、いやその能力で他人を傷つける事が恐ろしかったりという重いがどこかしらにあるものなのである
シェリアは自分は少し特殊だったと思っている
能力を発現した時、やはり周りの者は自分を恐れた
中には災いを招くとか災厄の化身だとかいう村の人間も居た
そんなとき、自分の支えになってくれる人間が居た
だから自分は今この場で吸鬼と戦う事になっているのだろう
自分が、四天王となったきっかけを少し思い出しかけ、すぐに脳内から消し去った
そんなことはどうでもいいのである
この吸鬼の能力というものがどれに入るかなんて分かり切っている
そもそも吸鬼自体が人間ではないのだからこの三つには当てはまらないのかも知れないが、あえて選ぶとするならば異質な人間という風に見た方がいいのかもしれない

そんな考えを消し去るかのように吸鬼は己の力を言い放つ

「それで、その能力ってなんなのよ？」

「俺の能力、俺の能力は“ただ有って奪う能力”だ」

「ただ有って奪う能力？」

「さぁ、教える事は教えたぜ。あとはどう対処するのか楽しみにしてるぜ。いや、対処できるならの話だがな。あんたが強いからわざわざ教えてやったんだ。呆気なく終わるんじゃねぇぞ？」

“ただ有って奪う能力？”

なんだそれはとシェリアは問おうとしたが、それを聞いたところで男は答えてくれないだろう

吸鬼自身が言っていたとおり、わざわざ必要もないのに能力を教えてくれたということは彼自身がこの戦いを楽しみたいからだ

ここで嘘をつくメリットなど、自分の意表をつくぐらいしか思い浮かばないが、それは吸鬼自身の行動や発現が否定している

楽しみたい一心で教えた

そしてその能力を防ぐ、つまりどう攻略していくかも楽しみにしていると言っていた

つまり何かしらの攻略法はあるのだろう

男もそれに気がついてはいるはずだ。だからあんな言い方をしているのだろう

いや、違うのか？

むしろ自分ですら攻略されないと思っている程に狂った能力なのかもしれない

だからそれを見てみたいという好奇心から発せられた言葉なのかもしれない

どちらにせよ、本人ですら全力を出したことが無いというのだから何が起こるか分からない

用心に越したことは無いが、奥手になりすぎて接近に臆病になるわけにもいくまい

「そうだな。一つ能力に関する情報を教えてやろう。それぐらいが丁度良いハンデだ。この俺の“ただ有って奪う能力”だが、奪うというのはなにもお前の持っているものを俺が奪うことができるという意味だ」

「私の持っているものを奪う？」

「あぁ。物理的なものも、そうじゃないものも、俺はお前から奪うことができる。さて、助言は此処までにしておいて始めるとするか。

行くぜ」

テンは体を傾け、シェリアに向かって行く

その様子を見て、先ほどとあまりスピードは変わっていないと判断するシェリア

だが、先ほどまでのあの自信は一体何処から来るのだろうか？

その点だけが不安だった

「ほぅら、すでに俺はもうお前から一つ奪っている。いや二つか」

「――――――！！」

シェリアの体に吸い込まれるようにしテンの足が突き刺さる

「消えた・・・？」

アリスとグリフォンはあまりの出来事に、身動きが取れなくなった

目の前で起きた光景があまりに信じられないものだったからだ

吸鬼に抜かれ、その吸鬼があの巨大な魔獣に触れた瞬間、その巨体が跡形もなく消えてしまったのだ

縮んだりするのではなく、一瞬で消えたためにアリスは思わず周囲を見渡してその姿を探してしまう

が、その姿は湖の何処にもない

「その表現の仕方は少し間違っているよ。消えてはいないんだお嬢ちゃん。ほら、ちゃんとここにいるよ」

そう言って振り返った吸鬼は手のひらを差し出す

よく見ると、その手のひらの上に小さな塊があるように見えた

少し距離があるためただの小さな点にしか見えない

「これがさっきの魔獣さ」

「それが・・・？」

小さな点をさして吸鬼は言う

「そう、だからもう君たちは此奴に関しては気にすることは何もない。悪いけど僕は一足先に帰るとするよ。足止めの役目はもう意味がないと思うし・・・ね」

吸鬼はちらりとグリフォンと少女の奥に広がる湖を眺める

「もう少し見ていきたかったんだけどこれ以上面倒くさいのは御免だよ。まぁもう僕は帰るんだけど、そうだ、君あの黒髪の少年と知り合いかい？」

「・・・それが何よ」

「やっぱり面白いつながりがあるねアヤキ君は。じゃぁ黒髪の少年にもよろしく言っておいてくれ」

ハチは予感していた

恐らく近々あの少年と再開するだろうと

あの女も含めて大陸には居ない黒い髪の人間

一体彼らはなんなんだろうとハチは思う

自分たちの邪魔をする割には、積極的に戦おうとはしていないようにも思えた

彼も言っていたように僕たちを差別しているようにも見えなかった

むしろ周りの人間への態度というか行動に対して彼は思うところが強いようにも感じた

自己犠牲精神が強いのかもしれないなとハチは考えながら3度目の能力を発動させる

「じゃぁねー」

「えっ!?」

アリスは真上から声をかけられたことに驚きバッと上を見る

あまりに小さすぎる声にアリスは戸惑いを覚えたが、その戸惑いは驚きによって上書きされたかのように消えてしまう

目の前にいた少年の姿をしていた吸鬼は一瞬のうちに遙か５００メートル近い距離をとって（・・・）いた

「え・・・そんな・・・」

いくら何でも早すぎる上昇速度にアリスは見上げたまま固まっていた

グリフォンですらあんなスピードは出ない

というよりも、吸鬼が移動したことが全く知覚できなかった事に我

が目を疑った

「おぉ、恐い恐い。小声で言ったつもりなのに聞こえちゃうんだ。さて・・・」

グリフォンと少女から距離をとったハチは天高くから目的の方向へ向けて移動を始める

翼を羽ばたかせつつ、左手を懐に入れる

取り出したのは水色の玉

右手に剣、左手に水玉

透き通るような深い水玉を眺める

「綺麗だねぇ」

光に透かしてみると更に美しさが深まるような気がして天高くに持ち上げてみる

小さいながらもしっかりとしたその重さに危うく落としてしまいそうにもなったが何とかそれを堪える

「いやぁ、盗ってみるものだね。逆に奪われちゃうと思ったけど・・・」

チラリと湖を見下ろす

氷の台座がある辺りからテンの魔力を僅かに感じたハチはニヤリと笑みを浮かべる

先ほどはあそこまで氷の台座は壊れていなかったのだが、今や半壊以上しているようだ

巨大な氷の塊が吹き飛ぶのを見て、未だ激しい戦いが続いている事を思わせる

四天王相手に勝負を挑むなんて無茶かと思ったが、それでもまだ生きてはいるようである

それにテンを止めなんてしたらこちらの方が先に殺されてしまうだろう

「・・・あの女の子には嘘をついちゃったな・・・」

ぽつりと呟いてグリフォン乗っていた少女を思い出す

あんな子供なのに滅多に人に懐くことがないグリフォンをあそこま

で手懐ける事ができる人間がこの大陸にどれほどいるであろうか

今日はいろいろとハプニングも起こったが、それでも面白いものが沢山見れて個人的には満足しているのだ

ただあの少年に情報の一つでもあげなかった事、それとあの少女に嘘をついてしまったことだけが少し後悔している

普通は後悔するような場面ではないのだが、それが自分だと分かっているつもりだ

自分はおかしいのだと分かっているつもりなのだ

「仕事はまだ継続中なんだよねぇ・・・」

ハチは目標を見つけて一気に降下する

視線の先には湖の上で一人黙々と作業を続けるゴがいた

翼を広げ、急停止したハチを見つけたゴは顔だけをこちらへ向ける

「どう？順調？」

そのハチの問いに、こくりと頷くゴは両手を前に突き出してその場で滞空している

その両手の先には小さな欠片が浮かんでいるのがハチにも見えた

あれが結晶か

実際、本来ならば足止めとして活躍するのはテンのはずだった

ゴと僕、そしてテンがこの西の湖イレータ湖に来ることになった理由にそれぞれの役割というものがある

選抜方法としてそれぞれの持つ能力がある

たとえばテンならば“ただ有って奪う能力”だ

戦闘を好む年代であり、尚かつ今のあのメンバーの中ではトップともいえる程の実力者だ

彼に本来任されていたのは虹魚が結界を破った時の為の足止め係

ただ今回は忍び込む予定の社が何処にあるか分からなかったために三人同時に探すことになっており、もし自分かゴが見つければテンはそのまま足止めの役目を果たしていただろう

しかし実際に見つけたのはテンであり、テンが社へ忍び込んだ場合は僕が足止めを任される事になっていた

というのもまぁ自分の能力から選ばれた訳であるが、戦闘能力はほぼ無いに等しい

そのために山の魔獣を嗾けさせて町を襲わせたのだ

もし予定より早く虹魚が出たとしても、自身の領地で暴れる魔獣を押さえるために一時でもそちらへ力を向けてくれれば逃走する時間くらいはあると踏んだのだ

ゴが見つけていれば、元々彼に割り振られていた仕事も併せて行う事になるし、足止め戦力は僕とテンになるのだから何とかなるだろうとは思っていた

元々割り当てられていた仕事として、テンはもしもの場合の戦闘要因。その能力も水玉の奪取時に役立つだろうという事で湖へ来た

そして自分に割り当てられていた仕事は復活させた魔獣の捕獲

それはもう終わっており、目的の一つである水玉も一応自分が持っている

これで二つは達成された

三つの目的のうち、最後の一つ

ゴのマナの結晶化実験だ

マナは元々物体として存在していない

どちらかといえば空気や精神など、見えないものに属しているだろう

そのため純粋な（・・・）マナや魔力の固体は存在していない

魔石などは石にマナが溜まっている状態であるため純粋な固体という存在では無い

マナそのものの結晶を作り出すというのが今回ゴに割り当てられている仕事なのだ

「そう。それで、溜まってたうちどれくらい結晶化できた？」

「四分の一」

「・・・それでこの大きさか。いや、むしろ固体にするほど集めたっていうのが凄いんだけどさ。もっと大きくなるかとも思ったんだけどそうでもなかったようだね」

湖に溜まっていたマナの四分の一

そのマナの結晶がこのゴの両手の前に浮かんでいる一センチほどの欠片なのだ

色は小さくて分かりづらいが、綺麗な透き通った石のように見える

「・・・でも、もうこれ以上は無理そう」

「・・・量として限界なの？」

十分あり得ることではある

元々マナの結晶自体これまで存在しなかった物質であり、結晶化で

きること自体ゴが居なければこれからの何百年かはできなかったかも知れない事なのだ

ならばある程度の限界というものがあるのかもしれない

だがゴは首を振った

「時間の限界」

「あー・・・そっちか」

振り返るハチ

テンを置いてきて正解だったかも知れない

ならできるだけ早くあの神獣の能力が及ぶ範囲外に出ないと行けない

湖の上なんて以ての外だ

「虹魚・・・神獣か。羽衣を纏うその虹色の鱗、一度お目に掛かりたいものだったけど此処は引くべきだよね。今すぐ撤退できそう？」

またしても無言でこくりと頷くゴは両手で包み込むようにして結晶化したマナを手にする

「よし、じゃぁ帰ろう」

不幸な役目だけど、戦って死ねるなら彼も本望かもね

ハチはそんなことを思いながら翼を羽ばたかせて上昇する

そしてこの瞬間、二人の吸鬼はこの場を去った

それと同時に、湖の中央に光が迸る

虹色の閃光と共にマナが渦を巻く

『奪う者と奪われた者』

膝をついた

何年ぶりだろうか

シェリアは右手で体が倒れないように氷に手をついた

ひんやりというよりかは冷たさにすぐ手を離してしまったが、それよりも腹部の痛みの方が強い

ゆっくりと過去を思い出す

最後に膝をついたのはいつだったか

そう、あれは北の双刀に負けた時だ

あれは屈辱的だった

あのとき我を忘れて暴れまわったのも今にして思えばいい思い出だ

今戦えば勝てるかしら?

あのときは己の未熟さに怒りを覚えた

だけど、今回は違う

何故かは分からなかったが突如体が全く動かなくなったのだ

反応できない早さでは無かった

なのに、動けなかった

何かをされた？

あの男はなんと言っていた？

奪った？

何を・・・？そうか、あの瞬間私は奪われたのだ

体の自由を

なるほどそれならあの男が自信ありげに自分に勝負を挑むのも分かる

それと同時に、どうすれば良いのかと考える

おそらく彼の言う奪う（・・）という行為は相手から物体、そして目に見えないものを奪うことが出来る能力だと推測する

それはあの男も言っていたし、現に自分の体の自由を奪われたのだから間違いは無いはず

だが、何かが引っかかる

そう・・・それは

「何時までも止まってんじゃねえよおっ！！」

「ぐ・・・！」

咄嗟に目の前に走り込んできた吸鬼の蹴りを右手ではじく

苦痛にゆがんだ顔があの吸鬼にも見えているだろう

シェリアはそのまま左手で腹部を押さえたまま後方に飛んで距離を取る

それだけの行為にもずきりと痛むお腹

「っ・・・」

着地の衝撃で再び痛む

だが視線は正面を向けたまま、視線を男に向ける

何か策があるはずだ

『この世に万能などありはしない』

それはシェリアが北の双刀から言われた言葉であった

あるのは表と裏だけ

誕生があり終焉がある

天空があり大地がある

壊れぬものなどありはしない

消えぬものなどありはしない

すべての事象事柄に、綻びのない完全なものなどありはしない。絶対という言葉は存在しないのだ

ならば対策法ぐらいどこかにあるはずだとシェリアは考える

そう思わなければやっていけないものであるとシェリアは常々思うようになってきた

まず発動条件だが、これはまだ分からない

事前に奪う能力を発動させることが分かっていれば避けることもできるかも知れないが、そのためには相手の能力が何度か発動してみないとどうともいえない

頭で思うだけで発動するならこれ程厄介なものはないのだが、呪文や道具によるものではないのは先ほど見たとおりだ

そのリスクを冒すぐらいなら先に相手を倒してしまった方が楽だろう

恐らく身体的な能力で言えば自分の方が秀でているとは思う

女の身ということもあり耐久面は多少弱いところもあるがそれは攻撃を受けなければいいはなしである

そのために体の自由を奪われたくないというのが一番にある

・・・・試してみようかしら

もしかすると・・・と思うところが一つあり、シェリアは男に悟られないように自然に視線を伏せた

「おら、まさかこんな程度じゃねぇよなぁ？」

期待はずれと言っているような物だ

挑発か、それとも本音か

直接見ずとも相手が接近してくるのが気配で分かる

そして、十分に引きつけたうえで後方に飛んで一気に距離をとる

だが今度は自らの動きを制限された感じはしなかった

いつも通りに動く自分の体を見て、予測の内の一つに僅かだが可能性を感じ取った

先ほどと今回の自分の行動の変化は相手を見ていたかどうかだった

元々魔術でない異能だということを前提にすれば、その能力を発動をするための条件は自然とその直前の行動に隠されているものだと予想したシェリアは予測の一つに目を合わせるということがあったいくつか他にも予想を立てたが、その中でも一番あり得そうなものを試してみたのだが予測的中かもしれない

その理由の一つに相手の能力と効果が関係してくる

恐らく、ではあるが相手の能力“ただ有って奪う能力”は相手から物体非物体問わず奪える能力だろう

単純に考えればとても厄介な能力だ

動きを止めればどんな強い相手でも簡単に無力化できる

先ほどこちらへ強烈な蹴りを叩き込んだ吸鬼だったが、蹴りといよりは足を突き出して真っ直ぐ突っ込んできたような攻撃だった

確かに威力も高いし動きが捕れない相手に対しては容易に当てることが可能だ

しかし其処が僅かに引っかかる

全ての行動に意味がある。そう思って行動すれば相手の何気ない一つ一つの動作がどれも怪しく見えてくるものである

そこでシェリアは、奪うということは相手から奪ったものを手に入れてしまうということだ

ならば、奪われた体の自由は何処に行った？

あの吸鬼に奪われた私の体の自由はあの吸鬼のものになってしまったのではないか？

ならば、あの吸鬼が私の体の自由を奪っているならば、あの吸鬼はどうやって自分の体を自由に動かしているのか？

いや、あの吸鬼が奪ったのは体を動かそうとする意思を奪ったのだ

そう考えるとつじつまが合う

だから自分の意思で体が動かなかった

動かそうとしても、その情報が体に伝わっていないのだから動かないのは当たり前だ

そしてシェリアの意思を奪うということを継続するならば、あの吸鬼は自分の体を動かす意識ができないのではないか

なぜなら今吸鬼の意思はシェリアの意思を奪うという行為を行っているから

相手の意思を奪うと同時に、自分の体の動きを封じられているのだ

それ故にあの蹴り

そして何処でその意思を奪われたのか。目を合わせた瞬間以外に思い浮かぶことは無い

それ以外の状態で奪われているのならば自分に勝ち目は無いだろうとは思っていた

が、どうやらその仮説は正しかったようだとシェリアは口元に笑みを浮かべる

気づかれたか？いや、だがそんなはずは無いテンはテンであっさりと自分の能力がかわされた事に気がついていた

目を合わせずに回避された瞬間はまさか能力の効果が分かっていないとできない回避方法だ

なぜなら相手の動きを見ずにかわすなんて事を殺し合いの中でやる必要は何処にも無いからだ

事実、これまで自分の能力を世間で試す機会は少なかったとはいえ、そう簡単にカラクリがばれるような代物だとは思ったことはなかった

一体誰が目を合わせるだけで能力が発動するなどと思うのだろうか

だからこそ驚いた

視界を防いで尚かつこちらの攻撃も避けるほどの実力の差があるとは思わなかったからだ

見なくても勝てる・・・？

シェリアはクスリと笑ってこちらを見た

目をつぶってこちらを見た

余裕だと、そう言われている気がした

「ふざけんなぁ！！」

後悔させてやる！そう心の中で付け足してシェリアを睨みつける

一気にマナを取り込む

目には見えないが、シェリアもじわじわと漏れるその黒い魔力を肌で感じる

「お前も、お前もその目を・・・その目をっ！！ヒロツネと同じ目をするのかっ！！」

「ヒロツネ・・・？」

「いいぜ、お前もあいつと同じように殺してやる。目を塞いだくらいで勝てると思うなよ。ルビッシュナイトォ！！」

まるでテンを中心に広がる魔力の波を感じ取り、シェリアは出来る限り後退をする

カイの広げた氷の台座がこのときばかりは小さく感じられた

何か来る、とは予想できた

詠唱は無かったが恐らくは魔術の類だろう

それもかなり高位の

意識を研ぎ澄ませれば魔力が束になって押し寄せてくるのが分かる

それを感じ取って意識を避けることに集中させる

視認できないいじょう、自分の感覚のみが頼りなのである

斜め上方から幾つもの魔力の束がこちらへ向かってくる

形状は先の尖った触手のような感じであると感じ取ったシェリアは最初の一発を横へと飛び退いて避ける

後ろはすでに湖のために動けないということで移動は左右、あるいは前に限られてくる

その分相手の方が僅かに優位に立っている

動きを制限された相手を追いつめる事ほど簡単な事はない

氷の砕ける音がした

立て続けに氷が砕ける音が聞こえ、それは徐々にこちらに近づいてくる

逃げるように走るシェリアは途中で放り出したパラソルを拾い上げ、それを投擲する

「ぐっ！？」

投げてからの速度は一瞬だった

弾こうと思った瞬間にはすでに、手を離れてから一秒とたたないうちに投擲されたパラソルの先がテンの右肩に直撃した

元々氷上ということもありバランスを崩したテンはそのまま足を滑らせ転倒する

クッと向きを変えてシェリアはテンの位置へと走り寄る

「ばかめ」

「！！」

シェリアは咄嗟に方向を変えて距離をとった

瞬間、氷が抉れた

テンの周囲に巨大な黒い渦が発生したのだ
氷を剔りながら回転するその黒い渦は天高くへと削り取った氷を巻き上げ、そしてゆっくりと消えていく
パラパラと氷の礫が降ってくる

「けっ、避けるのか。なんつー反射神経と即断力だ。四天王っていうだけはあるな。こりゃ目を開けられてちゃ互角とは行かなかったかもな」

「自信過剰すぎよ。目を瞑って互角？笑わせるわね。私の二つ名はそこまで安くはないわよ」

「笑ってねぇ女にそんなこと言われてもなぁ・・・っ」

テンはパラソルを右肩から引き抜き放り投げる
苦痛に歪んだ顔はシェリアには見えない

「まぁいいか。あんたはつえぇよ。俺が思った以上に」

「あら、それは光栄ね。あなたもなかなかのものよ」

テンはそろそろ引き上げ時かと思い始めた

一応自分から望んだと事とはいえ、四天王ともっと戦いたいと思う
一方でそろそろ限界が近いと感じているのも確かだった

目を瞑った状況でまさかあそこまで術をかわされたあげく、投擲されたパラソルは自分の体に直撃している

遠距離から狙い打てなかった相手に攻撃され、これ以上右腕をあまり酷使したくはない

とはいえ、自分の最速の術をああも簡単に避けられるのならばもはやあの人影に技を当てるのはかなり至難の業だ

思いつくこととしては超巨大な一発を叩き込むことぐらいだが、そんな事をしては自分の体も持たないうえに逃げられない自分も巻き添えを食らってしまうので当然却下だ

自分から望んだ割には呆気なくやられてるなと自嘲気味に笑う

「あーぁ・・・しょうがねぇ・・・なぁ・・・」

■

俺は一人だ

ただ一人、彷徨っている

親の顔なんて白骨でしか見たことがない

なぜなら俺は親の全てを奪って生まれてきたのだから

生まれた瞬間からすでに自我はあった

その瞬間にはすでに自分の能力を知っていた

親の姿を見た瞬間、心の奥深くから湧き上がってきた言葉を紡ごうとした

幼児の自分は言葉なんて紡げるはずもないのに

あー、あーと天に向かって手を伸ばす

その手を握ってくれるものは誰もいない

だって奪ってしまったのだから

“ただ有って奪う能力”という言葉が恨めしかった

何も教えて貰っていないのに、全て知っている

俺は親の命と同時にその記憶も奪ってしまっていたのだ

倒れる親の姿を見ても何も感じない

親という存在に、涙を流すほどの暖かさを貰っていないのだから

でもその知識でその感情を言葉にするならそれはきっと　残念　と言うのだろう

自分にとっての親なんてそんな他人のような存在なのだ

結局何もかもを奪ってしまったせいで、俺は欲したかったものを失ったのだ

その機会を逃してしまったことが残念なのだ

そして生まれてきた俺を最初に抱いたのは年を取った男だった

白い髪にずっしりしっかりとした体格の男は俺の体を持ち上げた

「君に名前はあるのかい？」

「あー、あぅー？」

名前なんて考えたこともなかった

確かに自分の名前を俺は知らない

親の記憶にも無いということは、俺は名付けられる前に生まれてきたのだろうなと思った

「フフ、言葉もしゃべれない赤子に私は何を言っているのだろうな。

そこに転がっているのは君の親かい？」

転がった二つの白骨体を見下ろし、その男は目を細めて言った

「私の能力でも、死者を蘇らせる事はできない。私が操ることができるのは人の生。この“ただ有って死を司る能力”というのは些か名前と能力が一致していない気がしないでもないのだが・・・」

その能力には記憶がある

どちらの親の記憶かは知らないが、その能力を俺は知っている

だがそんなことはどうだっていい

結局お前は俺をどうする気なのだ？

そして気がつけば俺はあのゼロとかいう男の仲間にさせられていた

まぁ別にそんなことはどうでも良かった

あのゼロという男ははぐれものの吸鬼を集めてグループを作っているようだった

そして加わった順に番号で名前を付けられた

１０番目の仲間、テン・ティニートという名前はその時生まれた

まぁ確かに自分もはぐれものではあるのでその辺についてはこれまたどうでもよかった

それよりも気になることがあったのだ。自分は成長すると同時に、体の異変に気がついた

他の吸鬼よりも成長速度が早かったのだ

速度で言えば他の吸鬼のおよそ三倍ほどだろう

だがこれも恐らく親から奪ってしまったものだろうと考えている

親の成長速度まで奪っていたとは思いもしなかったのでこれには多少驚いた

そしてその過程でもう一つ気がついていることがあった

“ただ有って奪う能力”が奪ったものは何も親の命や知識や腕力だけでは無いことに

本当は最初に気がついていても良かったことで、自分でも今更だと思ったが実際に使えるのを試してみて確信に変わった

自分は親の能力を奪っている・・・と

能力は一つだけという固定観念に囚われすぎていてこれまで考えたことは無かった

気がついたのはほぼ幼年期を終えたあたりで自分の能力の把握ができてきた頃だ

本来なら能力を手に入れるのはも時期的にそろそろなのかもしれないが、自分は生まれた瞬間からその能力が備わっていた

というより能力があったから自分は親の命を奪って生まれた

能力があったから自分で親の命を奪ったことを知ることができた

そして、記憶の中には親の能力の記憶もあった

名前や、扱い方、その効果など

俺は一人にして三人の吸鬼だった

だけど・・・俺は一人だ

本当に知りたかったことは知ることができない

だから俺はこの能力が嫌いだった

自分が嫌いだった

欲しかったものは全部自分に奪われてしまったから

生きている実感、いや、本当に自分が自分だと確かめたかった

それを確かめる事として始めたのが戦う事だった

■

「此奴は出さない予定だったんだ。次使ったら最後、俺はこの能力を一生怨んでしまう気がしたから・・・。だが、それで俺が俺だと確かめられるのならもう出し惜しみはしない」

「・・・貴方に何があったのかは知らないし知る気も無いわ。でも、面倒くさいのは御免ね」

「目、開けていいぜ。もうお前からは何も奪わねぇ」

「信じると思うのかしら？」

「まぁ、それでもいいけどよ。俺は今から本気の全力で行く」

「先ほどのは全力では無かったのかしら？」

「いや、あれは俺一人の全力だ。俺一人のな。だが、今度は家族だ。俺は一人で家族だ。今度は三人の全力だ。最も俺の能力は使わないから安心しな。あぁ・・・これで俺は本当の俺を・・・」

シェリアはゆっくりと目をあけた

何となく、大丈夫そうな気がしたのだ

あの吸鬼が何を思っているのかはシェリアの知るところではない

訳の分からないことを口走っているが、まぁ元々人ではないのだから気にするほどのことではないのだが

それでも何かを覚悟したというのは感じ取れた

シェリアはテンが放り投げたパラソルを拾い上げる

酷使した割には未だにパラソルとしての機能は果たしそうだった

ぱさりと開いてシェリアはテンを見上げる

いつの間にか飛んでいたテンは血の流れる右肩を押さえながら、空を飛ぶ

「タイムリミットはそう遠くなさそうだな・・・」

黒い翼が大きく広がった

『湖の主』

湖上で戦闘が続く中、その様子を畔から見守る影があった

一人は黒髪の女性

一人は黒髪の女性と手をつなぐ少女

一人はグリフォンにのった水色の髪の少女

そして仮面を付けた男だった

カイが戻ってきたときにはすでに吸鬼は魔獣をつれて引き返した後であり、そこにはただ呆然とたたずむ3人と一匹の姿があっただけであった

すると残るはあそこにいる一体の吸鬼だけかとカイは振り返る

今や自分が吸鬼との戦闘で作り出した巨大な氷の台座は至る所が砕け、巨大な氷の固まりがいくつも浮かんでいるような状況になっていた

一体何をどうしたらあんな状況になるのか分からなかった

そう思っていると今度は大きな氷の台座が真っ二つに折れた

その揺れが波となって湖の岸へと向かってくるが、人を飲み込むほどの高さは無いため特に手を打つ必要は無いと判断した

「うぁぁ、あれ本当に人間？」

一条としては自分は常識人だと思っているため、目の前で起きている光景にはやはり驚きを覚える

少々のファンタジックなことぐらいなら驚きはするが受け入れることには苦労しなかった

やはり現実の世界でも作り物とはいえ、こういうファンタジーの世界の小説やイラスト、映画やアニメなどが沢山あったからだ

一条自身が美術系の大学に進んでいることもあってか自分でもそういうアニメや漫画などを見る機会はもちろんあったし、周囲の人間でそういうのが趣味な人間も今時そう少なくないものである

だが、やはり想像したり作り物を見るのと現物を見るのとでは大違いなのだなぁと思い知らされたように一条は感じていた

魔法やグリフォンなどならまだあり得るとは思っていたが、さすがにあれは人間をやめてないか？と思うような動きをしている

漫画やアニメでよくやるような消えるような素早さではないが、それでも目で追うのが精一杯というような走りをあの女性はしていた

ファンタジーとは違う、もっと人としての限界を超えているかのようでいて彼女は歴とした人間なんだという事を聞いてやはり自分は驚き、そして恐れを感じた

ファンタジーではなく、現実という物を見せられたような気がしたのである

「四天王とはいえ・・・苦戦はしているようだね」

「あぁ。あいつは強かった」

それだけを言ってカイは黙ってしまった

助けに行けるなら行きたい所だが、足手まといになってしまうと分かっているのだろう

カイですら手も足も出なかったのだから、本人も何も言えずに静かに近くて遠い戦場を眺めていた

「おいっ！大丈夫だったか！？」

するとその後ろの小さな林から数人の集団が現れた

それぞれが知っている人間に駆け寄った

「アーヤん！」

「お兄ちゃん！」

「ルオ・・・チッ」

「オイ待てアリス！てめぇなんで俺の名前出して舌打ちした！？」

駆け寄ってくる二人の姿を見て彩輝は少しホッとする

自分も同じように駆け寄った

「怪我とかは？」

「ううん。大丈夫」

「だいじょうぶだよー」

彩輝は二人の体に目を落とすが目立った外傷が無いのを見て今度は心からホッとする

そこで彩輝は先ほどから会ったら聞こう聞こうと思っていた事を聞く

「あの、さっきのでかいのは・・・？」

彩輝達が林に入った頃合いから何故か一瞬にして消えてしまったあの巨大な魔獣が何処へ行ったのかと聞いてみる

「えっと・・・なんか消えちゃった」

「へ？」

「それは私から説明しよう」

女の子らしい口調じゃないなぁと今更ながら思った彩輝は手を挙げて発言したアリスの方へと向き直る

グリフォンから降りているアリスは最後の男との会話の内容を伝えた

謎の力を使い魔獣を小さくしたという吸鬼

そしてこれまた一瞬にして移動するという能力を伝える

信じられないような話ではあったが、彩輝はまぁ異世界だし自分の知らない事もあるかと受け止める

逆に頭を抱えたのはシャンとルオだった

訳が分からない、何がどうなっているのだと二人で話し合ってみるが吸鬼が首謀となった異変ということぐらいしか結論が出ない

なぜならずっと戦っていた自分たちが得ている情報は少ない

町を襲わせ、マナを湖に集め、巨大な魔獣が現れてまで、一体何をしに来たのだと思う

その真意が分からずも、それぞれ何かしらの理由はあるのだろうとは思うがその理由が分からない

カイがいろいろと説明しようかと言葉を選んでいた時だった

「いったいなんだってんだよ！？」

「その事で少しお話が・・・」

またもや背後から現れたのは彩輝達が一晩お世話になったリク・ヒノトだった

その後ろで腕を組んだごつい体格の親方ことゼン・クリードがまるでいつもの仕事をしている時のような厳つい目を細めて湖の方を凝視していた

そうして一同が集まり始めた頃、未だに氷上の戦いは続いていた

「だらぁっ！！」

「っはぁ！！」

ガキンと音を立てて重なったのは傘の先端と男の拳

まるで金属と金属がぶつかったかのような音を響かせると同時に、

シェリアは足下の氷の感触の変化を感じ取る

ヒビが走り、今にも砕けそうな音を立てる氷の台座

今ではそこら中に穴や割れ目が走っており、安全な場所などほとんど無い事から普通に考えてこちらが不利である

こうしてまた貴重な足場が一つ砕け散った

その頃には離れたシェリアが新たな足場へと飛び移った所だった

目に見えて足場が減っており、シェリアは早々にケリをつけたい所

が、男が新たに二つの能力を使ってくることからそういうわけにも行かなくなってしまったのである

おそらく新たな能力の一つは肉体変化の能力だと読んでいる

先ほどから拳をパラソルの金属部分で受けるのだが、どう考えても生身の人間の感触ではない

何も変わらないように見えるのに、その手に伝わってくるのは紛れもなく同じく堅い金属のような感触に最初はシェリアも戸惑いを覚えたが、相手は普通とは違う何らかの異能を使うと分かっているのですぐに気持ちを切り替えて反撃に出ようとする

その度に遠距離の見たことのない魔法を使って牽制して距離を取ってくる

相手も接近戦が主のようだが、ペースとしてはやや相手に取られている風に感じる

シェリアはもどかしくも、じっくりと耐えて相手の隙を窺うが何度か攻防を続けても隙が出来る様子はない

こちらのカードはまだ一枚だけばれていない

この一枚を何処まで隠し通して追いつめるかが勝負の分かれ目だとシェリアは考えている

まぁ相手も自分が魔法を使えることは知っているだろうとシェリアはパラソルを空中の吸鬼へと向けた

距離を取ったところで、こちらも遠距離攻撃が出来ないわけではない

「そんなに距離を取りたいならどうぞご自由に」

「風の魔術かっ！！」

吸鬼は翼を折りたたむようにして急降下してくる

マナを取り込み、風の魔力へと変換する

その魔力は杖の代わりとなるパラソルを伝い、その先端に二つの魔法陣を浮かばせた

発光するその魔法陣の周囲に文字が浮かび上がる

「番の翼よ、追い風を此方に、向かい風を彼方に。フシュールステホーン！」

術を唱えている間にも吸鬼は接近を続ける

これだから魔術は、そう思いながらシェリアは瞳をしっかりと相手に向ける

今度は相手も此方の体の自由を奪うことは出来ない

もし奪ったとしてもそのまま此方の自由を奪いつつ自分の体自由を捨てる訳は無いはずだからだ

一瞬、カッと魔法陣が光ったかと思うと光と魔法陣は空へと消えるそれと同時にバンッと何かがパラソルの先端からはじけ飛ぶ

反動でパラソルを振り上げる形になったが、風の魔術はほぼ相手に視認されることは無いので至近距離から打たれる事を想定して突っ込んでくるならば相手は打つ直前に避けるはずだ

便利でありながら、風や雷の魔術を操るというのはかなり高度な魔術であり、自由に掌握して動かせる程の人間は数少ない

その数少ないうちの一人がシェリアである

打ち出した風を手の動きで操るぐらい、今のシェリアに取っては大

して難しい事ではない
が、普通の魔術師がこれをしようとすればその魔術師人生の半分近くを消費するであろう難易度なのだ

「それ」

「効く・・・かっ！！」

「あら？」

予想外にも、打ち出した風は吸鬼に当たる直前ではじき消された
霧散した風を突っ切り、テンが拳を振り上げた
何が起こったのかよく分からないうちに突っ込んできたテンの攻撃を防ぐシェリア
避けるそぶりも、何か魔術を使ったというそぶりもなかった
ということはこれが三つ目の能力かとシェリアは判断する
振りかぶった右腕を左腕で受け止める

「ちっ！」

今度はテンが左足を振り上げた

直撃コースだったが、それをシェリアは右腕で足首をつかんで止めた

手放した傘がカランと氷上に落ちる

おかしな体勢になったテンは翼でバランスを取っている

が、今度はあいていた右足でシェリアの顔面を蹴り上げようとした

しかしバシッと音を立てて右足はシェリアの左足に受け止められた

膠着状態だったが、シェリアはにこりと笑って吸鬼を見つめる

シェリアが発動した魔術はまだ終わっていないのである

この魔法は前方に向かって強力な風を吹かせる魔法である

だが、実際にはあまりに強力すぎる風が一瞬にして相手を吹き飛ばすため、空気の固まりが飛んできたかのようにぶつけられた相手は錯覚する

そしてそれと同時に自分の後ろから前に向かって強力な風の流れが生まれる

これは二つあったうちのもう片方の魔法陣によって発動したものである

この風の流れによって押し出される前方の風の固まりの威力が増す

と同時に、自分への追い風となるのだ

だが風の固まりは何故か四散してしまった

少しぐらいはスピードが落ちるかと思ったのだが、はじかれるというのは予想外だった

とはいえシェリアは咄嗟に反応して吸鬼の攻撃を受け止める

だが、再び足下の氷にヒビが入る感触が伝わってきた

無理に押し返そうと力を込めれば恐らく足下の氷は割れて水中へと落ちてしまうだろう

こんなところでカードを使いたくはない

まだ、その時では無い気がする

シェリアはだが、ここで一つ相手をはじき返す案を思い浮かべた

未だに自分への追い風は止んでいない

好機っ！！

氷が割れるのを覚悟で氷に対して力を込める

そして一気に跳躍

追い風に乗って自分は吸鬼を押し返す事に成功する

テンの方も翼を広げて何とか押し留まろうと翼を広げるが、乱れた空気の流れに寄って翼は空気を上手く捉えられない

そのままシェリアがテンを押し倒そうとするが、叩きつけた方の氷の台座に巨大なヒビが入った

咄嗟に上になっていたシェリアは吸鬼を地面へと蹴り飛ばす

が、やはりその体は硬い

が、固体を蹴ったようなしっかりとした威力が手に入り一気に距離を取った

その蹴りの威力によってヒビが完全なる裂けとなり、氷の台座はまたもや真っ二つに折れてテンを巻き込んで巨大な水の柱をたてた

その水柱を突き破って出てきたテンは上昇しながら回転し、水を振り払う

「・・・・・・！！」

そしてピタリとその動きが止まる

下から見上げたシェリアもテンのそのおかしな様子に振り返ることにした

そして、落ちていたパラソルを拾い上げる

どうやら自分の出番は此処までのようらしい

湖の一同も、その視線の全てが湖へと向けられていた

カイとリクの吸鬼が宝玉や聖天下十剣を奪っていった事を伝える

その最中、それは起こった

ガキリと音を立てて虹色の閃光が湖上に浮かび上がった

何かの隙間から漏れるような光は徐々にその数を増やしていった

気がつけば、その光は湖全体を包んでいた

そしてその光は湖に走った亀裂から漏れているのだという事を

ガリガリガリッ

亀裂は徐々に広がっていき、漏れる光が強くなっていく

「あ・・・あぁ・・・」

ただ一人、リクだけがそう言葉を喉から漏らしていた

全員がその虹色の光に見とれていた
その瞬間、湖の四カ所で同時に小規模の爆発が地中内で起こった

カァァァァン！

そして、まるでガラスを割ったかのように透明な薄い膜が割れた
無数のガラス片のようなものは虹色の光をそこかしこに跳ね返しながら宙を舞った
その幻想的な空間の中心に影が見えた
魚影だ
彩輝にはそれが魚のような影に見えた

ゆらりと揺らめいたそれは次の瞬間、水から飛び出していた
その姿はまるで虹色の水を纏っているような美しさをしていた
まるで解放を喜ぶかのような姿に見えたそれは全身のヒレを広げ、
一瞬だけだが空を飛んでいるようにも見えた
揺らめいた羽衣も、広げたヒレも、身を包む鱗も全てが虹色に見えた
それは大きな水しぶきを上げて水中へと落ちた

その場にいた全員があっけにとられていた
巨大な波が氷の台座を飲み込むかのようにしてシェリアを襲う
シェリアは波に揺られて浮き沈みする氷の台座をつたってその場に留まる
吸鬼なんかはもう身動きが取れず空中で制止しながらその巨影が生み出した水しぶきの雨を受けている
「神獣・・・虹魚」
ようやく紡いだ言葉は考えるより先に自然に口から漏れた
だからようやくこれが神獣なのだと理解した
「虹魚様・・・」
リクがそう呟いた
あぁ、あれが前から聞いていた虹魚という神獣かと彩輝は思った
確かに凄かった
全長何メートルあっただろうか？

5、6メートル？いや、10メートル近くあったかもしれない
遠くからでもそれほど大きいと感じられるほどにその存在感は凄まじかった
全身虹色に包まれており、背には羽衣をしていた
二度神獣を見ている彩輝にとって、この虹魚を神獣だと確信するのは早かった
そして一体どこからその威圧感が出てくるのかと思った
先ほどまでは全く感じ取れなかったのに、その姿を現してから感じるこの感覚は確かに虹の不死龍が姿を現したときに感じていたものと同じであると彩輝は感じた
そういえば前に不死龍は隔絶された結界のような空間にいたと言っていた
今回も虹魚はそこに居たのだろうか？
にしては、異変を察知して出てくるのが遅かったような気もする
いや、人前に姿を現せない仕来りでもあるのか？とも思ったが、思いっきりあの一角天馬は人前に姿を現していたのでそれは無い・・・と思う
竜なら人前に出られないというのは仕方ないが、巨大であるとはいえ神獣である虹魚が人前に出られない理由はそう無いと思う

崇められる存在だとしても、畏怖の対象にはならないと彩輝は思った。少なくとも過去に恐怖政治とかしてなければだけど

ならば何故姿を現さなかったのか

水玉や聖天下十剣がその祠という場所から奪われたのであれば尚更に

出てこなかったのではなく、出てこれなかった？

彩輝がいろいろと考えていると、今度は空に異変が現れた

浮かんでいた雲の一つが突如大きな穴を開けたのである

まるで何かが通るために退いたかのような

その中心に彩輝は見た

白い翼を広げ、美しい毛並みと逞しい四肢を持ち、立派に天を貫く

白き角を

一角天馬が翼を羽ばたかせ優雅に降下してきた

水の中から虹魚がぷかりと顔を浮かばせた

西の霊湖イレータ湖にて神獣の二柱が見つめ合った歴史的瞬間を、

多くの町人や商人の多くが目撃したのである

1939

『呼び、答え、現る』

「西の湖の神獣、虹魚。北の森の神獣、一角天馬」

テンは静かにその姿を見つめる

滞空している一角天馬、そして湖から顔を覗かせている虹魚

「壮観・・・ね」

パラソルを持つシェリアがそう呟いた

シェリアは浮かんだ巨大な氷の破片に乗ってその2体の神獣の姿を眺める

さすがに四天王とはいえ、神獣を見るのは初めてであるためか暫し見とれてしまい

思わず心の中で美しいなと思ってしまう

「やぁ虹魚。久しぶりだね」

「えぇ久しぶり。なんだか嫌みに聞こえるわ」

「ははは、そんなことは無いよ」

神獣と神獣は心の中で会話をする

その会話は他の誰にも聞こえておらず、周りに聞こえているのは湖の波音と一角天馬の羽ばたきくらいのものだった

しかし周りの人間達にはその音すらも両者の存在感に掻き消されるかのように感じていた

「それで、ずいぶんと弱っているご様子ですけど大丈夫？土地のマナもかなり持っていかれてるみたいだけど」

「そうね・・・少し閉じこめられて焦っていたのよ」

「まぁ解放するだけのマナはもう溜まっているんだろう？」

マナを一年に一度解放する。そのためのマナを貯めていた虹魚はその一部を使ってしまったという

その地のマナは魔法に使われたり魔獣の生活の糧となったり、あるいは他の地へと流れていくこともあり減っていく一方である

その補充として神獣は体内でマナを生成し、それを解放する役目を担っている

「えぇ。ただ少し結界の破壊とか脱出しようとしたときに使ってしまったから今年は多少不作の土地になるでしょうね。申し訳ないけど」

だが今年はそうも行かないというのは両者分かっていたことだ

そもそも大地のマナがここまで減る事がこれまでにないことだ

戦争でもすればかなりのマナを消費したりするだろうが、それ以上にこのマナの消滅率は多かった

吸鬼がマナを湖に集め、それをまとめて奪っていったためだ

それに加え吸鬼の妨害により、自身の作り出した空間から出ることが出来なくなってしまったのが痛かった

マナを解放するためには一度外の世界に出るか自身の空間の結界を消す必要がある

しかし出ることが出来なくなった虹魚は焦った

自分の領地のマナに異変が起きているのは感じていた
そしてそれが徐々に消えていくのも
外へと出るためにこれまで躊躇っていた貯めたマナを使用することを決意したのだ

「まぁ不毛の土地にならないだけまだマシだろ?それこそ君への信仰心は消えてしまうだろうね」

「そこまで柔な信仰だと信じたくはないけれども・・・。千年ぶりくらいに姿も見せたし大丈夫でしょう。それよりも私としてはマナ解放の前に貴方が何故私の地に土足で踏み入っているのかが不思議なのだけれども」

「あぁ、ちょっとこっちにも色々あるのさ。これもまた運命」

失念していた、とそう付け加える

その言葉だけで虹魚は何かしら納得していたようではあったが、やはりまだ虹魚の不満は消えていないと一角天馬は感じ取る

まぁ確かに自分でも他の神獣が自分の土地に入ってきていれば怒っていただろうなと思うので,
あまり余計な言い訳はしないでおこうと内心決める

そもそも口で勝てるとは思っていないのだ

「貴方が運命に干渉するなんて珍しいわね」

「フフ、そうだろうそうだろう？自分でもびっくりだけど、それが運命だという掲示を受けているからね」

「そう。それで、今度は何が起こるのかしら？」

「さぁ・・・ね。僕に未来予知の能力はないよ。出来るのは運命を知る事だけさ」

神獣にはそれぞれが司るものがある

それはそれぞれの姿や本質を具現化した能力である

たとえば不死龍が司るものは速さと風

たとえば一角天馬が司るのは運命と光

たとえば虹魚が司るのは浄化と水

それぞれがそれぞれの能力を持ち、その一端を神子も操ることが出来る

「先が分かるなんてつまらないものさ。まぁ全てが見える訳じゃないから別に良いんだけど」

先が決まっているなんてつまらないじゃないか
そう付け足してふわりと一角天馬は上昇した

「さて、君はこの後どうするんだい？君を閉じこめたあそこの吸鬼にでも仕返しするのかい？」

そう言うと一角天馬はその瞳で吸鬼を睨み付ける

「いや、それよりもマナの解放をしてしまいたいわ。そして新たな神子の精神を元に戻す仕事もある」

「あぁ、そうだったね。確かにそっちも大事だね」

すっかり忘れていたという顔をして一角天馬はもう一度翼を羽ばたかせて上昇する

「マナ、足りる？」

「あなたに借りをつくる気はないわ。肉体は前世の物。精神は今は私が預かっている。今戻せばどちらかが陰ってしまうか両方の消滅、あるいは新たな人格への融合。どれになるにしろ、今彼女の肉体が保てているのは前世の彼女のおかげであるわけで、もとの人格が体に耐えられるかどうかはまだ怪しいわ・・・」

「ふぅむ、難しいね。かといって今を逃せば次にマナが溜まるのは何時になるか・・・。元の彼女の精神はどうしているんだい？」

「結界で閉じこめて寝かせているわ。もう少し精神面を強化できれば良かったのだけれども、もうマナの解放までの余裕は無い。それで力を使い果たしたら彼女を押さえられなくなるわ。それに私が閉じこめられていて管理下を離れてしまったから」

彼女を囲む結界と、自分を囲んでいた結界とが別々になってしまったために彼女を押さえ込む方の結界に力が廻っていなかった

それが虹魚にとっての気がかりだった

湊夕日に自身の持つ力に耐えるだけの精神力が備わっていなかった場合、とても面倒くさいことになるのだ

「・・・！やっぱり・・・」

虹魚がゆっくりと後ろへと向きを変えた

一角天馬にももちろん見えていた

水面がゆっくりと持ち上がるようにして、ざばんっと音をたてて何かが湖から飛び出した

「遅かったようだね。さっさと押さえ込みな」

「・・・私にそんな力が残ってると思う?」

これはつまりあれだ

俺にやれと言っているのだろう

「・・・わかったよ。湊夕日の精神ねぇ・・・」

目の前には、眠った少女の魂が浮いている

それを見た一角天馬は咄嗟に湖に浮かぶ氷の欠片が浮かぶ方を見た

最早其処は台座でも足場でもなく、ただ氷の塊が浮かんでいるだけの場所である

人影が見えた

その瞬間、湖に幾つもの魔法陣が出現した

シェリア・ノートラックは読み違えていた

吸鬼、テン・ティニートが持つ能力は三つ

一つは“奪う”能力

そして二つ目はその能力で父親から奪った“弾(はじ)く”能力

この能力が彼女に誤解をさせた

この能力は発動させればありとあらゆるものを自分にかけた力で弾くことが出来る能力である

自分の体に能力をかければ体は何物にも犯すことの出来ない強固な存在となる

逆に自分の周囲にかければそこには透明なバリアーのような物が形成される

とはいえ、自分へと向けられたエネルギーを逃がすことは出来ない

例えるならば自分の体に巨大な鉄球がぶつけられたとしよう

すると鉄球のエネルギーは自分の体を押そうとしてくる

が、何もしなければもちろんそのエネルギーは自分の体を突き飛ばしてしまう

弾くことは出来ても、威力そのものを受け止め切れていないということだ

これは自分の周りにバリアーを張った状態でも同じ事が起こる
ただしこれは何もしなかった場合のみに起こる事である
弾く能力が発動するのは自分がそのエネルギーを弾こうとする行為をとった瞬間のみに発動するのだ

つまりこの能力とは、自分に向けられたエネルギーと自分自身が出したエネルギーとがぶつかり合った瞬間、自分自身のエネルギーがぶつかり合うエネルギーを超えるという事になる
先ほどの鉄球の話で例えるならば、飛んできた鉄球を自分の腕で反らすようにして殴るとしよう
すると鉄球のエネルギーよりも腕を振るエネルギーの方が勝り、鉄球はそれてしまう

これを逆に押し返そうとすれば鉄球が二つのエネルギーに挟まれ砕けるかも知れないが、やったことがないのでテンにもどうなるかは分からない。もしかしたら跳ね返るかも知れない
ただどちらも意識して使わなければ発動しないので、常に体を固体にしたりバリアーを纏っている状態ではないため不意打ちなどをされてしまえば使えない能力であった

そして三つ目の能力

母親から奪った“ただ有って呼び寄せる能力”をテンは発動させようとしていた

これは自分からの呼びかけに答えた者を自分の居る周囲へと移動させる能力

呼びかけに答えなければ来ることは無いし、一度直接会っていることが条件となる能力だ

ただ、テンは気がついていた

この能力は自分だけでなく、己の母親が出会っている相手にも効果があることに気がついていた

「面白いもんが見れるぜ。来いよ」

その呼びかけが心の中で静かに揺れる

波紋のように広がる言葉に触れた何かが、ぽつり、ぽつりとまるで灯がともったようにして現れる

答えた。そう感じた

ぶわりと風が自分を中心に吹いた気がした

要するにこの能力は召喚の呪文なのだ

まるで見えない輪が自分を中心に湖へと広がったように感じた

その輪が通り過ぎた後には漆黒の光を放つ大小様々な魔法陣が展開

していた

「開け」

その扉が開かれた

黒く光る魔法陣を通り抜けるようにして現れるような姿もあれば、魔法陣を砕くかのようにして現れる影もある

魔法陣を通り抜けた段階でその姿は現実の物となっている

１００近い数の魔獣が同時に魔法陣から飛び出てきたのである

シェリアはその禍々しい、色で例えるならば黒い魔力を感じてその発生源を睨みつけた

振り返るとそこには目を瞑った吸鬼がいる

そこから波のようにして湖広がった魔術がそこかしこに魔法陣を生み出していた

止めなければ行けないと直感的に感じ取った

だが、そう思ったときにはすべて遅かった

生まれた魔法陣のすべてから無数の魔獣が飛び出してきたのである

まるで魔法陣を突き破るかのようにして空へと舞い上がったあれは

ワイバーンでは無いだろうか？

魔法陣を砕いて上半身を出し、翼を広げたのはグリフォンでは無い

だろうか？

湖に氷の地面を作り出して着地したのは寒冷地に住む魔獣、フェン

リルでは無いだろうか？

まるで地獄のようであったと後の者は語り継ぐほどの光景だった

言葉を失ったシェリアが危うくそのパラソルを落としてしまいそう

になる

「何よ・・・これ・・・」

獣は我が物顔で咆哮する

喜びの咆哮のようにもシェリアは聞こえた

それこそ、自分にとってはまるで悪魔の笑い声かのように思えるほ

どに高らかに湖に響き渡る

こんな光景を見せられて正気でいられる人間が居るはずが無い

しかも自分は逃げ場のない湖のど真ん中、術者の目の前にいるのだ

一体何が起こったのかと脳内で考え、ぐるぐると一週してしまったかのようにして答えにたどり着く

あの男だ

「貴様・・・何をしたか分かっているのか？」

「俺は呼んだだけだ。もっとも、どれほどが答えてくれたのかはわからねぇがな。何せ俺も会ったことがない奴が殆どだし、制限なしで呼んだのは初めてだから手がつけられねぇようなのが来ると思うと正直博打だったかもな」

内心テンもここまでの数が呼びかけに答えてくれるとは思っていなかった

あまりに多すぎるため、やはり手がつけられないのだがこれはこれで良かったかも知れない

テンは神獣の力を狙っていた

これは完全に自分の勝手な行動であるが、できるという確証はあった

その強大な存在を見せられ、テンは気がつけば欲しいと呟いていた

自分でも驚きだが、どうやら自分はあの神獣の力が欲しいようであ

ると感じていた

確かに力は欲しい

だが相手から奪い取った力が欲しいと思う事でやはり自分は奪う者、略奪者なのだと思い知った

思い知った上で、納得した。あぁ、これが自分なのだと

欲しい

欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい

「・・・・奪う。奪うぜ・・・すべて」

「何を呟いている」

「ククッ、なんでもねぇさ」

「そんな訳はないだろう。こんな地獄のような光景を私を殺すと言うだけで作り出す必要は無い」

その点にはシェリアは自身があった

たとえ何があろうと、自分の力だけで戦おうとしてきた男の言動を見てそう確信していた

自分の能力を嫌っていた

だから奪うという行為そのものを使おうとしていなかった

だが、様子が変わった

先ほどまでとは目の色が違うように感じていた

そしてその呟きから嫌なものを感じる

まるで開き直ったかのような・・・っ！！

突如、背後の殺気に気がついて氷の足場を蹴る

不安定な体勢から襲ってきたその姿を見る

大きな翼の割には小柄な体をしている

しかしその尾はとても長い

ワイバーン

龍族の最下級とはいえランクはＢからＡほどである

通常ならば腕の立つ人間が１０人ほどで戦うような相手である

とはいえワイバーン自体龍族の下級に位置する存在だからか主に群れで行動することが多いため、討伐対を編成するとなるとかなりの人数と精鋭を揃えることになるだろう

ドラゴンのようにブレスこそ吐かないが、彼らのその鋭い爪や牙は人間の命を容易く奪っていく

目の前の人間が突如姿を消して戸惑うワイバーンは突如強力な打撃を頭部に受けて氷の欠片が散らばる湖へと叩きつけられた

「美が無いわね」

「獣に美を求めるなよ」

「それもそうね」

ドラゴンほどの知能が無いワイバーンに美や優雅さを語っても仕方がないというもの

シェリアはパラソルをクルリと回して水面で藻掻くワイバーンに風の塊をぶつけて水中へと押し込む

やがて溺れて抵抗しなくなったワイバーンが浮いてくるがシェリアは無視してテンを睨み付ける

「貴方、何がしたいの？」

「そうだなぁ。一言で言うなら強い奴と戦いたい。その為に強い力を手に入れる」

「そんなことをすればいずれ貴方は一番になるわよ？」

「それは困るな。だが今この衝動を抑えつける自信はない。そしてこの瞬間を逃すつもりもない」

「つまり、貴方は神獣の力が欲しいということ？」

「そうだ。そして俺はもっと高みを目指す」

「高みを目指して、その先に何があるの？」

「ゴールなんて有りはしない。あるのは今だけだ」

なるほど、とシェリアは思った

彼には具体的に目指す物がない

衝動的な強くなるという目的だけがあり、目的の理由が無いのだ

この吸鬼は頭で動くと言うより己の感覚だけで動いているのだと思った

理屈なんて入らない。意味なんて入らない。そうしたいからそうしているのだ

私は少し前、この吸鬼からは自分と同じ匂いがすると言ったがどうやらあれは半分あたりで半分間違っていたらしい

ある一面では自分そっくりで、ある一面では自分とは正反対

同じものを目的とし、まったく違う理由で動いているのだ
シェリアは確信する

「ここからはどうも仕事になりそうね」

私事の戦いは此処までだなと

「こりゃすごいねぇ」

一角天馬は周囲を見渡し、そう心の中で虹魚と会話する
虹魚も同意見のようで静かに周囲の様子をうかがっている
突如現れた無数の魔獣
その原因は自分を閉じこめた吸鬼
この数の魔獣を一度に呼び出すとは凄いとは思ったのは確かである
並の存在では出来ない事であるし、それを行うことが出来る実力者

を見ることが出来ただけでも結界の外に出てきたかいは合ったかも知れない

まぁ許しはしないけど。それに

「まさかこの程度でどうにか出来るとはあの吸鬼も思ってないでしょうね？」

「さて、どうかな？君の力はずいぶんと弱っていると思うけど？やっぱり手伝おうか？」

「見くびらないで欲しいわね。私の土地よ？」

「はいはい。じゃぁ僕は後ろで観戦しているよ」

「そうしなさい」

一角天馬は翼を二、三度羽ばたかせて上昇する

途中ちょっかいをだしてきたグリフォンとワイバーンを蹴り落として再度上昇

「あーあ、折角遊べると思ったのに・・・」

残念そうに眼下を見下ろす

「！！」

「感じた？アーヤんも？」

俺はこくりと頷く

この感じは・・・確かに・・・

俺は振り返る

一条さんも不安げな顔をして自分が手を繋いでいる存在を見た

千尋ちゃんが一条さんを見上げた

だが、俺は感じる。違う・・・と

これまでと同じだったが、何か違うと

これまでの千尋ちゃんと違うのではない

感覚的に、元の世界の千尋ちゃんと今の千尋ちゃんが違うのだ

言葉では言い表せないこの懐かしい感じは今湖の中央、二体の神獣

が向かい合う場所から感じられる

千尋ちゃんと元の世界で話したことは一度もないし接点もバスで見かけたというぐらいしか無い

だが、その妙な感じを一条さんも感じたらしい

何か、心揺さぶられるような感じが

しかし、それを掻き消すかのように湖を黒い魔力が駆け抜けた

魔法陣が浮かび上がる

そして現れる魔獣の影

「あのさ・・・行ってこようと思う」

俺はそう口を小さく動かし、だけど迷い無く風王奏を抜き放つ

そんな俺の手首を掴み、一条さんが言う

「私も行く」

俺は一瞬迷った

が、結局は一緒に行くことにした

決意を決めた人間を説得するなんて事は俺には出来なかったし、正直そんな気すら起きなかった

危険だから?こんなの何処も一緒だ

空も、地上も、湖も、全てがまるで魔獣の巣穴のような状況で安全な場所なんて無い気がしたからだ

俺自身、他人を守るどころか自分を守るので精一杯だとは思っているだが保身なんて今はどうでも良かった

「確かめよう」

だってその気持ちで一杯だったから

二人とも胸中、グチャグチャだったのだ

「でもその前にまず聞こうか。君は一体誰なんだ?」

「うん。あなたは誰?」

小さな少女はニッコリ笑ってこういった

小さなポニーテールが小さく揺れる

「あーあ、ばれちゃった」

満面の笑みを振りまきながら少女はてへと頭を小突いた

『自らの成すべき事』

少女は黒髪のポニーテールをほどく
艶やかな漆黒がサラリと風になびき、少女はにっこりとこちらに微笑みかけると口を開いた

「さて、何から聞きたい？って聞いてる暇は君たちにあるの？」

今や、突如として現れた無数の魔法陣から魔獣が現れてきている
空を舞う者
地を駆ける者
水を泳ぐ者

所狭しと地獄を再現した吸鬼の姿は、何も無かった湖の時に比べて今や何処にいるのかすら分からない

「一つだけ。君は湊千尋ちゃん本人なのか？」

彩輝はどうしても聞きたいことを一つだけ質問することにした

確かに彼女の姿は元の世界に居た時、つまりバスで見かけた時と全く同じ姿をしている

声も――――たぶん一緒だ

なのに心の奥底から感じる感情、言葉で言い表し辛いのだが、彼女はその時と違う気がするのだ

その感情が湧き上がってきたのは少し前、湖の中央から黒の魔力の波動を感じる一瞬前だった

その感じは黒の魔力に掻き消されてしまったが、それは確かにあったそれが誰のものであるかも

「極端な話、私は湊千尋では無いよ。そもそも湊千尋という存在は何処にも存在していないんだ」

「それってどういう・・・」

一条さんが口を挟む

理解出来ないという顔だ

たしかに俺も理解が出来ない

湊千尋本人から湊千尋は存在しないと言われても理解できる訳無い

矛盾も良いところだ

その顔を見てクスリと笑った千尋ちゃん？（現状は湊千尋と記す）は補足を付け加えた

「確かにここには少女の肉体は存在しているし、私本人は湊千尋と名乗っていた訳だから分からなくなるのは当たり前だよね。一条唯と桜彩輝」

背後で魔獣が斬りつけられる音が聞こえた

絶命した魔獣が地面に横たわり、突き飛ばされた魔獣の体は湖へ落ち、また斬りつけられた別の魔獣が叫び声を上げる

どうやらこの周辺の警護をしてくれているようだ

時折グリフォンの鳴き声も聞こえるが、魔法陣から出てきたグリフォンの鳴き声なのか、アリスが操っていたグリフォンなのか彩輝には判断出来なかった

が、なにやらもめている様子の俺たちの周囲を守ってくれているようだった

カイさんの仮面と、ゼンさんの背中と、シャンさんの黒鎌と、ルオさんの大槍と、グリフォンの羽が視界の隅で見え隠れする

彼らのためにも、早めにこの質問の意味だけを聞き行動を起こさなければならない

これからどうするかなんてここに居る誰もが指示を受けている訳ではない

ただ身を守るために戦っているだけなのだ

そして俺たち三人の後ろで静かに物事を見定めようとしているのは一人の青年

何を考えているかは分からないが、静かに周囲の様子と俺たちの様子を窺っている

ただの青年ではない、とはリクの師匠のゼンさんも言っていた

天才

俺は後ろは気にせずに、ただただ目の前の事実にだけ向き直る

「つまり、あなたは誰なの？湊千尋と名乗っていた千尋ちゃんじゃないあなたは！？」

声を張り上げ一条さんが少女に詰め寄る

切羽詰まった険しい顔だと思った

どう考えても、小学一年生に向ける声や表情では無い

そもそも彼女は小学一年生ではないと思う

だからだろう。一条さんが此処まで強く言うのはこれまであまり見たことがなかった

「そうだね。まぁこれ以上隠す意味も無いから簡単に説明しよう。私は平の名を冠すとある娘。上総氏とも呼ばれていた頃もあったけど、あんまり昔の事は忘れちゃった」

「平？上総氏？名前からして日本の人間の名前だよね？」

俺はその二つの名前に今ピンと来る人名は浮かばない

ただ平というのはこれまでずっと、平氏と源氏とか平清盛とかの歴史の授業でやって来ていたためにぱっと浮かんだが、上総氏というのは聞いたことが無かった

ただ彼女が昔、というので恐らくそれほど近い時代の人間では無いのだろう

「あぁ、あんまり名前は気にしなくて良いよ。名前とか家柄とか、それくらいに古い事は大して関係ないからね。さて、私は君たちとは違う時代から此処に来ている訳なんだけど、色々あって今はこの湊夕日の体を使わせて貰っているよ」

「その理由は後々ゆっくりと聞かせて貰うとして、当の本人、その夕日とか言うのがその体の本当の名前であり、その体の本当の人格なんだな？」

「うん。そうだよ。まぁちょっとは記憶も共有してるよ。現代って便利になってるね。時代に取り残された気分。まぁいいや。それでその湊夕日の精神は今この湖の中央に居るんだけど」

一条さんはバッと振り返って湖へと振り返るが、俺はそのままその少女の瞳を見つめこれまでずいぶんと演技が上手かったなと思ったジッと見つめ返して目をそらさない少女はまたもやにこりと笑った

「そろそろ迎えに行ってきたら?待ってるよ、夕日ちゃん」

「・・・・・もう一つ聞いて良いか?」

「何?」

「いつから・・・一体いつからその体に君は居るんだ?」

俺が湊千尋という名前を最初に聞直いたのは水鏡を通して会話をしたあの時だ

あの時は突如異世界に飛ばされた前なのである

その夕日ちゃん本人の精神が、何故こんな遠く離れた地の湖にあるのだという疑問がわき上がってきた

その質問に少女は広がった黒髪を揺らして答える

「最初から。精霊台を通ったその瞬間にはもう、この体には私が宿っていたよ」

そうか

声には出さなかったが、口はそう動いていたような気がして俺は少女から目を反らした

何でだろう

今は無性に、その湊夕日という存在を迎えに行きたくなっているのだ

「後悔する前に、行った方が良いんじゃない？」

「！！・・・それも、そうか」

遅いより、早いほうが良い

いつの間にか彼女にも、俺が後悔したくないという思いが異常に強い人間なのだと知られていたらしい

まぁ正直そんなことはどうでもよかった

剣を握る手の感触が、しっかりと伝わってくる

一条さんが手を差し出してくる

頷く年上の女性の顔を見て、覚悟なんて聞く必要もないと俺は頷いた

細い手を掴みしっかりと目的の場所を見据えた

カイさんに教えて貰ったとおり、俺はその日本刀を振った

そして大地を蹴る

風が体を後押しする

追い風が心地よかった

背中を押されている気がして

目の前の障害なんて、関係ない

「其処をどけえええええええええええ！！」

目の前に迫る幾つもの影がどんどんと近づいてくる

それの一匹がこちらを見つける

瞬間、ワイバーンの意識は漆黒へと落ちていった

俺はそのワイバーンの首を刎ねると、その巨体はぐらりと体勢を崩して湖へと落ちていった

その様子を確認するまでもなく、俺は風に乗って空を駆けた

まるで背中に翼があるように感じていた

きっとその翼は――――――紅色だ

緋色の短剣が鞘の中で静かに見守っている気がした

俺とワイバーンの叫び声で気がついた周囲の魔獣の視線を一身に受けてなお、体は竦むことなく自信に満ちあふれていた

繋ぐ手からは心の温もりが流れてきていた

「援護するよアーヤん！私だって多少は戦えるからね」

「左側は任せました！」

「了解っ！！」

刀を右手に持つ為、どうしても左手を繋いでいると左には攻撃が届かなくなる

まぁいざというときには体を入れ替えて攻撃を受けることはできるのだが

こういうときに自分一人で切り抜けられる実力があればなぁと思う

でもこれはこれで良い物だなと思ったのも確かだった

「煌めけ！スターシューターッ！！」

すると彩輝の左側から狙ったように二匹のワイバーンが飛び込んできた

その二体目がけて札を取り出し、投げつける

一条が叫ぶと、札からは星を撒き散らしながら二つのレーザーが発射された

ワイバーンの硬い鱗をいとも簡単に突き破り、背後で飛び回る数体の魔獣にも命中したのを一条は確かに確認した

叫びながら落ちていく二つの影を見送り、湖の中央へと視線を戻した

湊・・・夕日・・・

本当のあの子に会いたかった

「邪魔だっ！！」

正面の敵はまるで紙で出来ているかのような手応えしかない

真っ二つになったグリフォンの体を飛び越え、猛スピードで湖の中央へと向かう彩輝

もういくつの敵を倒しただろうか。もはや数なんて数えていない

カイに教えて貰った風王奏を使った飛行術をこんなところで使うことになるとはあのときは全然思わなかった

心の中でカイに感謝した彩輝はもう少しだ、そう思った

湖の中央、虹色の神獣の元に、湊夕日の精神の元へと

「ッガアアアアァァァ！！」

「っ！？」

「きゃっ！」

俺は突如視界に現れた巨大な頭を見て急上昇した

何が起こったのか分からなかった一条さんは目を回して悲鳴を上げている

「っく・・・なんだあのでけーの・・・」

急停止、勢いを削がれた彩輝は後ろに距離をとって突如現れた見た

ことの無い魔獣の全体像を眺める
それは巨大な甲羅が亀を連想させるがその水中から伸びる長い首は
まるでクビナガリュウのようだ
その長い首をグッと後ろへと曲げる

「何をする気だ?」

魔獣は曲げていた首を一気にこちらへ伸ばし、そして口を開いた
咄嗟に回避をしようと距離をとる
すると魔獣の口からはあり得ないような量の水が出てきた
まるで意思を持つ蛇のような動きをするその水の渦は鞭のように撓
り、辺りをなで回す
よくよく見ると水の鞭は渦を巻いており、触れれば恐らく巻き込ま
れてしまうであろうことは簡単に予想出来た
だが、あれ程長い首は狙いやすい
彩輝は風王奏を大きく振りかぶり、横に一閃振り切った
風の刃が瞬間にして水の渦へと直撃、水がはじけ飛んだ
其処に左斜めに剣を振り上げた

もう一筋の風がその長い首目がけて飛んでいく

――――当たった！

そう錯覚してしまった

巨大な首がまるでポンプのように何かをくみ上げる

そして吐き出されたのは先ほどとは違い、超大量の水を一度に吐き出したのだ

まるでそれは津波の弾丸とでもいうような物だった

打ち出した首も反動で大きく反り返ってしまっているが、それだけの威力はあるだろうと思った

風の刃は水を切り裂くと思ったが、その風の刃を飲み込んでなお勢いは衰えない

「くっそ！！」

まだ風王奏の力を使いこなせない俺に、力押しであの水の弾丸を止める自信は無かった

ならばと俺は一度風王奏を鞘に仕舞い、すぐさま紅の短剣を取り出すなれたこれなら力押しできる

体内の火の魔力を集め、そして剣に纏わせる
だがそれだけでは駄目だ
それを起点にして俺は前方に向かって大量の火の魔力を放出する
そして

「どりゃぁぁあ！」

水の弾丸が目前まで迫った瞬間、その水に取り込まれた魔力に俺は剣の炎を注ぎ込む
すると、一瞬にして視界に光が炸裂し、そして次の瞬間には水は爆発と同時に四散、蒸発した

「あー、上手くいってよかった」

その呟きを聞いていたのか、焦った顔で一条さんがこちらを向いて声を張り上げた

「あっアーヤん！？それって確証あってやったんじゃないの？」

「いえ？思いつきですけど何か？」

もちろんぶっつけ本番だと伝える

「・・・・ううん。なんでもない」

もういいやーという顔で一条さんは明後日の方向を眺めた

だが、まだ俺は気を抜けない

戦闘は終わっていないのだ

風王奏に持ち変えるのも面倒だと俺はそのまま火で挑むことにする

一度だけ見たあの技を使ってみることにしよう

イメージはきっとソーレにも届いているはずだ

「行くぞ、炎月刃!!」

炎が剣から解き放たれ、三日月の刃となって長い首に直撃して炎は霧散しながらも小さな爆発を起こした

「ッオオオオ!!」

大きく首を反らすその魔獣の首には尋常ではないほどのやけど跡が残っていた

それを見て俺は火には弱そうだなと思った

こういう勘は結構あたったりするものだ

一気に加速、接近、そして傷跡目がけて炎の短刀でその魔獣の首を跳ねた

呆気なく跳ね飛ばされた首からは水と血がぼたぼたと溢れ出る

その亡骸を無視し、俺は一条さんと共に湖の中央を目指す

どうやら慣れてしまえば風王奏を鞘に戻した状態でも飛べるようだ

「加速するよアーヤん！ロケットぶーすたあああ！！」

「ちょ、え！？」

突然叫びだした一条さんが何か札を取り出した

札に何が書かれているかは分からないが、なんだか嫌な予感がした

カイさん曰く、一条さんが使う符術は術式を根底から覆した符術らしい

なんでもむちゃくちゃな式で読み取ることすら難しく、また読み取ったとしてもそこからどんな効果が発動するのか全く分からないのだという

数式に例えるなら、答えと式と符号がグチャグチャに混ざり合っているようなものらしい

そんなむちゃくちゃな式がいくつも重なり合い、これまでならあり得なかったような効果を発動するような符術を使いこなす一条さんだったが本人はそんなに意識はしていないらしい

最早呆れて何も言えないカイさんだったが、俺も正直これまで彼女が使ってきた符術の事を考えると何でも有りじゃないかと思ってしまうのもまた確かで

今回もどうせ何が起こるのかは分からないのだろうが、彼女の言葉から予想するにどうやら今から俺は吹っ飛んでいくらしかった

ブースターとか今そんなことをされたら・・・

「うおああ！？」

どうせ勢いの調整なんて出来るなんて期待はしていなかったさ

一条さんは俺の背中にその札を貼り付けた

瞬間、キラリと背中が光った気がして、俺はグンとエビ反りになって高速で飛んでいく

確かに魔獣の密集地帯は抜けたけどっ！

い、息ができねっ・・・！！

そしてそんな体勢が何時までも持つはずもなく、数秒とたたないうちに空気の抵抗と加速の勢いに負けた俺の体はグルグルとバランスを崩し水面へと叩きつけられた

その一瞬前に俺の手からはじき飛ばされた一条さんもまた水面へと落ちた

何となく、また水に落ちたなぁなんて思いながら俺は水を吸って重くなった服を着たまま水面へと顔を出す

「せめて俺の許可ぐらい取ってからやって欲しかったぜ・・・」

「ぶはっ・・・たはは・・・思ったより早かったわ・・ごほっ」

一条さんも浮かび上がってきたところで俺は後ろを向いた

其処には虹色の鱗を纏った神獣が鎮座していた

大きく、されど静かに佇むその神獣の名は虹魚

西の湖の主である

そしてそれが見つめるのは異形の存在だった

「お前の力、貰うぜ」

「さぁて、そう上手くいくと思っているのですか？」

「いや、だが自分の力を使い切ってお前の力を奪うことが出来れば、逃げる分にはそれだけでおつりが十分に来るってもんだ」

テンは目の前に佇む神獣を見下ろす

呼ぶ能力を使い、無数の魔獣をこの湖へと呼び寄せた

非力ではあるが、数で押し切れない相手だとは思わなかった。少なくとも今は、だ

見るからに虹魚の力は減少している

もし一角天馬が参戦してくるようならば正直引く可能性を考慮していた

それだけ精神的には落ち着いていたと自分では思っている

当初、このイベントを行うに当たって最も警戒すべきは一角天馬であった

運命を知ることが出来る一角天馬がもし、虹魚の危機を読み取って

こちらへ向かってきていた場合の事を考えていなかったわけではなかった

事実、予想通りに一角天馬は湖に現れた

しかし予定通りには行かない物である

次から次に邪魔者が現れたため、ハチとゴの二人は自分の仕事を終わらせてさっさと帰ってしまった

三人いれば何とかなったかもしれないが、そもそも虹魚の力を奪うという予定は無かったために当たり前かも知れない

むしろ自分がこうして虹魚と相対している状況こそが当初の予定と狂っている

もし虹魚が結界を破った場合、魔獣の復活とマナの結晶化という二人の邪魔を阻止する人材として俺にその足止めの仕事が割り振られていた

だが二人の仕事は終わっている。なら何故俺は此処に一人残って虹魚とにらみ合っているのか

弱っているとはいえ神獣は侮れない

一対一では正直分が悪いのは分かり切っている

自分がある程度強いことを考慮しても五分五分に持って行ければ良い方だとここに来るまでには考えていた

だがこうして俺は自分の為に此処に居る

自分が此処まで力を欲していたとは思ってもいなかった

自分で自分を制御出来ないのを感じていた

というより制御する必要が無いと感じている

なぜなら本望だからだ

望んでいた物が目の前にあるのだ

欲して何が悪い

「奪う。俺は奪う者。俺はお前の力を奪いたい。それが俺、テン・ティニート・・・そう・・・俺は・・・奪う者・・・」

それが俺の本質

それは誰にも否定させない

自分が欲しかった物はすべて自分で奪ってしまった

だからこの奪う能力が嫌いだった

だけど、分かってしまった

奪うことこそ自分に最も相応しい事なのだと

奪うことこそ自分の本質なのだと
奪うことこそ自らの欲望の全てなのだと
認めたのだ
その瞬間、奪いたいという欲望が吸鬼の体を内側から包み込んだ
深紅の瞳が虹色を映す

「奪う・・・奪う・・・ヨコセ・・・ヨコセヨコセ・・・・ウバウ・・・ウ・・ウバ・・・アアアアアアアアアアアア！！！」

広げた翼が軋む
喉が枯れる
深紅の瞳が白目をも浸食する
白い髪がぐんと急速に伸び、犬歯が僅かに鋭く伸びる
指は全て獲物を捕らえる獣のように

「理性が歪んでしまいましたね。歪がどれだけ正を真似たところで、所詮歪は歪。貴方は欲望に負け、獣となってしまった」

コフー
コフー

「可哀想に。自我を失い、理性を失い、心を失い、あるのは欲望だけ。なんと空しき存在か」

そっと瞳を閉じ、虹魚は一人言葉を紡ぐ
その言葉はきっと吸鬼の心には届いていないけれど

「ですが、私の湖で良かったですね。せめて貴方の歪、私が取り除きましょう」

それでも虹魚は言葉を紡ぐ
それがきっと救いになる一筋の光となることを願い

「西の湖が浄化の神獣虹魚は、貴方の歪を正しましょう」

その時、どこからともなく二つの光が叫び声と共に降ってきた

その頃、二つの人影が山道を駆け上っていた

日頃の力仕事のおかげか、息はまだ持ちそうだ

自分のやるべき事が、何となく分かったのだ

あれだけの魔獣が湖に集まっている

だがそれにしては妙だと思った

何故湖の外へと出て行かないのか

呼び出された魔獣が何かしらの契約で魔法陣より遠くに行けないのか、それとも自分の意思でその場へ留まっているのかは分からなかった

だがその行動範囲はかなり広い

湖の中央から近隣の町を巻き込むだけの範囲に魔獣は行動範囲を広げているらしい

恐らくここだけでなく様々な町で魔獣が暴れているのだろう

いくつかの町からは煙も上がっているのが湖からでも見えた

出来る限り止めなければ行けない

だが力のない自分が一体何を出来るかと考えたとき、一つのアイディアが思い浮かんだのだ

火薬師として受け継いできた仕事と共に、この仕事の頭領には代々受け継がれてきた物があるのだ

現代では作り出すことの出来ない、太古の技術で作られた謎のアイテム

あれを使えば・・・そう思ったリクはそれを親方に進言した

「しかし・・・」

それを今使って良いのかどうかゼンは迷っていた

確かに使い方は受け継がれているが、効果が具体的に分からないうえに一つしかないそれを今代で使ってしまって良いのかと悩んだのだ

もしかすれば後々本当にこれを使う機会があるのかもしれないと思うとやはり使用を躊躇われた

その自分の背中を押したのが弟子のリクだった

「後の機会？そんなものそのときに考えればいいんです！もしかしたらこれが使う最後の機会なのかも知れないじゃないですか！沢山の人が苦しんでる！みんな戦ってる！こんな時の為に作られた物を今使わずに何時使うんですか！！」

「・・・そう・・・だな。俺はどうかしていたようだ。おい、俺

たちは今からあの魔獣を止めるために一度あの山に向かってくる！
それまでに湖の周辺にいる奴らを避難させてくれ」

ゼンはそこで戦っている知り合ったばかりの何人かに伝える

すると仮面の騎士がこちらへ駆け寄ってきた

「考えがあるのか？」

「あぁ。一つだけな。正直どうなるかは分からんが、これ以上時間をかけて被害を拡大させるのはまずいと思ってな」

「・・・そうか。この湖はお前達の場所だ。よそ者の俺が口出しする事ではないからな。俺はそれに従おう。では準備が整い次第何らかの手段で合図を送ろう。山の上からでも分かるような合図をな」

「分かった。それと、出来る限り魔獣を湖へと押し戻してくれた方が助かるかも知れない」

「・・・厳しいがやってみよう。あそこに居る何人かで手分けして周囲の町の援護に向かい、ある程度魔獣が湖へと集まった状態で合図を出そう」

「よし、では行ってくる」

「あぁ。こちらの方は任せておけ」

そう仮面の騎士に言い残してゼンとリクは山を駆け上る
目指すのは工房
そこに厳重に収められた“虹の宝玉”を使う時が遂に来たのだ
しばらくして工房へとたどり着き、二人は息を落ち着かせ、そこで
二手に分かれた
リクはゼンに大筒の準備をしてくれと頼まれ、倉庫へ向かって駆け
ていった
虹の宝玉と同時にその大筒も代々受け継がれてきた物である
ゼンは虹の宝玉を取り出すため、厳重にかけられた幾つもの鍵を取
り外していく
錠前ががらんがらんと床に落ちる
それを足で蹴飛ばし、扉を開ける
暗い部屋に明かりを灯し、その部屋の一番奥にこれまた四方に四つ
の鍵をつけられた箱を見つける
それを慎重に引っ張り出し、全ての鍵を開ける
これを見るのは初めてだ
人の手によって作られた宝玉と聞いていたそれを使い方から予想す
れば大砲のようなものかと連想させられたが普通の大砲じゃない様

子に内心ホッとしていた

その宝玉には浄化の力が宿り、悪意や邪悪、魔を払うと言い伝えられている

一体何時、誰が、何のために作ったのかは定かでないがそれは確かに球体をしていおり、宝玉と言い伝えられるだけはあるなと思った

しかしそれは宝玉という割には宝石ではないらしい

「此奴が“虹の宝玉”・・・」

たった一度しか使えない大切な物だと先代頭領からきつく言い聞かされていた

俺もまたリクにそう伝え、火薬師の職を下りるものだと勝手に思っていた

まさか俺がこれを使う日がくるとは思っていなかった

宝玉の大きさはおよそ一メートルほどであり、宝玉には隙間がない程の札が貼られている

名前のように虹色に光り輝く玉を想像していた為、そのへんは少し予想外だった

そこへ大筒を出し終えたリクが戻ってきた

リクと二人で箱ごと台車に乗せて外へと運ぶ

大筒にも滑車がついており、思いとはいえ一人で動かすことは可能だったらしい

確かに大筒の口は湖の方を向いている

そして大筒に宝玉を詰め込んだ

あとは合図を待つだけだと二人は湖を眺めた

湖には遠くからでも分かるほどに魔獣に埋め尽くされていた

「・・・元に戻るといいっすね」

「そうだな。そして此奴が本当に役に立つことを祈ろう」

「そのまま湖にぽちゃんなんて想像はしたくないっすねー」

「演技でもないことを言うな。あいつ等は見知らぬ俺たちを信じてくれているんだ」

「大丈夫ですよ。親方は仕事をミスした事なんて無いじゃないッっすか」

「・・・それもそうか。なら俺たちも信じようか。こいつが、代々受け継がれるだけの代物であることを」

1993

『頂と獣と神獣と』

「ル・・・オオオオオオオオオッ！！！」

その雄叫びは最早人の出す声では無かったようにシェリアは感じた

雄叫びは空気を震わせ、波がざわめく

あれはもう人や吸鬼として見ない方が良いだろうとシェリアは判断した

理性を失った獣を人間扱いするなど、あり得ない

「手を、出しますよ？」

『許可しましょう。元気なままでは疲れるのでね。まだ仕事があるので頑張ってくださいね』

虹魚と心の中で、その一言だけの対話をした

初めての経験だったが違和感や驚きなどは無かった

ざりっ

一瞬にして氷の欠片の上に落ちた獣はその変形した四肢を氷にしっかりと突き立てた

姿勢を落とし、まるで獲物を狙う獣のような視線をこちらへと向ける

紅い瞳が帯を引く

黒の両翼がバッと開いたかと思うとその獣は一気にこちらへと飛びかかってきた

まるで水面を滑るかのように接近してくるその獣にシェリアは閉じたパラソルを突き出して迎え撃つ

接近する獣の翼が視界一杯に広がるほど接近した頃、一度そのつばさが大きく羽ばたいた

スッと上昇した獣は視線を上げたシェリアの顔目がけて急降下して腕を振り上げた

「獣ならば、いいわよね」

これまでは大事な一瞬のために出し惜しみしていた能力を、シェリ

アは使うことに決めた

先ほどの戦闘でもほんの一瞬使ったが、それをただ単にテンはシェリアが持つ脚力によるものだと勘違いしていた

一度見せれば対策はされよう。それほどにシェリアがもつ能力は単純だった

人としては凄いことかも知れないが、見られてしまえば吸鬼にしてはそれで対等だと思われる程度のものなのだ

だから意表を突ける一瞬を待っていた

確実に仕留めることが出来るその一瞬を

だが来なかった

それよりも先にこの吸鬼は獣へと成り下がったのだ

だが目の前にいるこれが獣だというのならばそれはそれで使うことに躊躇う事は無い

「私が何故“西の頂”と呼ばれているのか分かるかしら?」

パラソルがパンッと乾いた音を立てて広がった

そのパラソルは獣の視界を覆い隠す

が、振り上げた腕はそのまま振り下ろされ、変形した黒く鋭い爪がパラソルを引き裂いた

「確かにこの大陸の西には私以上の実力者が居ないから、という意味もあるのだけれどもう一つ――――」

そこにシェリアの姿は無かった

一瞬獲物を見失い、動きを止めた獣の上から声が聞こえてきた

「誰もが私を見下ろすことが出来ないからよ。戦いにも、物理的にも、私は貴方の上に居るのだから」

空を飛んだ（・・・・・）シェリアの強烈な蹴りが、足場の氷を砕く程の勢いで獣の後頭部に直撃した

巨大な水しぶきがあがり、砕けた氷の破片がその水しぶきと共に宙へと巻き上げられ、そして落ちてゆく

ふわりと空中に立ち、水と一緒に飛んできたパラソルを掴むシェリアはあーあとため息を漏らす

「気に入っていたのだけれど・・・ね」

パラソルは見るも無惨に引き裂かれており、本来の役目としては機能しそうに無かった

かろうじて形は残っているが、これでは叩くぐらいにしか使えそうもない

とはいえ、特注で作ってもらったこのパラソルは十分武器として使える強度を持っているため一応まだ持っておくことにした

「まぁいいわ。さぁ、私に跪きなさい」

頂よりシェリア・ノートラックは湖を見下ろした

「あら」

シュッと静かな音を立てて長い触手のような物が水面から飛び出してきた

随分と早かったが、空中に居るシェリアのもとへ届くまでには少し距離が有りすぎた

見切ったシェリアはそお触手を目の前で掴む

真っ黒な、鞭のようなその先は鋭くなっており突き刺さったならば致命傷を負っていたであろうそれを思いっきり引っ張る

ずいぶんと水の抵抗もあったが、無視するかのような腕力でそれを水面へと引きずり出した

「あら、尻尾が生えたの？」

それはどうやら尾のようであった

どうも繋がっている先は男の尻に近い部分であるためシェリアはそれが尾のようであると思ってしまった

引きずり出された獣はサッと体勢を立て直して尾を掴んだままのシェリアを振り回そうとするがどうも動きそうもないと判断すると今度は翼を広げて接近してきた

「結構強めに蹴り飛ばしたつもりなんだけど・・・ねぇっ！！」

手刀で尾を斬り飛ばす

一瞬怯んだ獣だったが、再度加速して突っ込んでくる

痛みすらも感じないのかと思ったがそれを見て僅かばかりの安堵を覚え握ったままの尾の先を湖へと捨てる

効いていないわけでは無さそうだとシェリアはパラソルを振りかぶる

そして突っ込んでくる獣目がけて真横に一閃した

ぶぅんと風をきったその一撃は空を斬っただけに終わる
直前で上昇しようとした獣だったが、ピタリと動きが止まった

「そう簡単に私（頂）の上をとれると思わない事ね」

にっこりと笑って尾を右手で掴み、見上げるシェリアはその尾を思いっきり引っ張った
同時に左手のパラソルを突き上げる
今度は確かにその手に肉を貫く感触が伝わってきた

「・・・心臓を狙ったつもりだったのだけれど」

ぽたりとパラソルを伝ってきた血がシェリアの白い肌に落ちる
パラソルは黒い服を貫き、脇腹へと突き刺さっていた
勢いは止まったが僅かに体重で深くパラソルが突き刺さる
そこでシェリアは気がついた

ソラリと風が吹いてきた
風は後ろからシェリアの短な白い髪を撫でる
虹色の風が二つの人影を包み込んだ
戦闘中だというのに心安らかな気持ちになったシェリアはゆっくり
と瞳を閉じる

「ルグ・・・ウウウウ」

そっと囁きかけるように、それは黒を虹色で染めていく
虹色の羽衣が優しく揺れた

「グ・・ぐぁ・・・」

途端、体を大きく後ろに反らした吸鬼の体から何かが抜けていくの
がシェリアにも見えた
苦しそうに堪える吸鬼の体が湖へと落ちていく
ドボンと音を立てたが、誰一人としてその行方を見ている者は居ない
黒い靄がゆっくりと上昇していく

『フフ、あれが彼の魔力ですか。魔力が意思を持つとは面白いですね』

「意思を持つ魔力？」

『彼らが吸鬼として生まれたときから存在する能力の核よ。ただ何をしたのか、彼のには後二つの核が残っているようね』

黒い靄は虹色の光に包まれる

が、あの吸鬼の中にはまだその異能の核が残っているらしい

ならばもう動けない程までに痛めつけておくべきだろう

最後の足掻きで面倒くさいことにはなりたくないシェリアは静かに吸鬼へと氷の欠片を飛び移って近づく

意識はあるようだがそう容易く動くことも出来ないほどに弱っているように見える

「ここまでのようね」

見下ろすシェリア

「どう・・・かな？」

「余裕があるようには見えないわよ？」

「まぁ・・・なぁ・・・・・」

氷に掴まる腕も振るえている

声も掠れている

服なんてもうボロ切れだ

これ以上威勢をはる意味が分からない

「だが・・・」

『！？』

虹色の光がはじけ飛ぶ

その閃光を受けてシェリアは視線をそらしてしまった

頭上の黒い靄は随分と小さくなっていたが、一瞬にして最初の量まで戻ってしまう

その黒い靄はまるで狙ったように吸鬼の体へと吸い込まれた

「お帰り・・・・俺」

フッと笑った吸鬼の顔を見て、シェリアは先ほどの現象の理解にたどり着く

残り二つの能力

一つは分からないが、恐らくあの魔獣を呼び寄せた術と関係があるのではと踏んでいる

そしてもう一つ。あの虹を、弾いた

シェリアの攻撃を、魔術を弾いたあの力が彼の力なのだ

“ただ有って弾く能力”

弾く力か。なるほどな・・・

「さぁ、奪うぜ神獣さんよ。その力を、魔力ごと、俺に寄こせぇ！！」

水中で翼が開いた

叫んだ吸鬼は水中より飛び出した

まだ戦えるというのか！？

随分と本気で攻撃を叩き込んでいるというのにまだ倒れないのか・・・！！

シェリアはボロボロのパラソルを吸鬼に向けて構える

今相手の意識は神獣に向いている

相手が奪う力を持っており、それで虹魚の能力を、魔力を奪おうとしている

あのとき体の自由を奪われたのは僅かな時間だったが、こんどは違うとシェリアは分かったのだ

だが、その奪うためには相手と目を合わせなければいけない事を私は知っている

恐らくの仮説だがあっているとは思う

だが、それをどう伝えれば

『目を合わせなければ良いのですね？』

「・・・そうだったわね」

神獣は心に向かって語りかける事が出来ていた

ならば相手の心の中を読むことも当然出来るのだろう

私の意思を読み取った虹魚はユラリと水中へと潜ろうとする
だがそれよりも早く吸鬼が虹魚の背中へと触れた

「悪いな。触るだけでも効果はあるんだよ」

瞬間、私は飛びだした
仮説はあっていたのだろう
ただ別の方法など知らなかっただけで
パラソルの先端が一瞬にして吸鬼の腹部を捉える
だがその感触は硬い
貫くことは出来なかったがその勢いで吸鬼は再び突き飛ばされ水中へと叩き込まれた
しかし湖に起きた異変にシェリアはすぐに気がついた
視線の先にある社。その頭上に巨大な1メートルほどの光球が出現した

2006

そろそろ頃合いかしらね

そう呟いた少女は麦わら帽子を深くかぶり眼下を見下ろす

神獣が能力を発動させた時点でこの勝負は決まっているようなものである

レミニア・アレスティアはすでに決着のついた勝負から視線をそらした

反らした先には白い翼の生えた白馬が居る

レミニアは数人の吸鬼がここイレータ湖に居ると聞いて様子を見に来たのだが、どうやら二人とは入れ違いになってしまったのかその影は一つしかない

最初は白い髪をした女性がいたのでそれも吸鬼かと思ったのだが翼がないのでどうやら違うようだとレミニアは判断する

罪を犯した吸鬼の翼をもぐという行為は古くにはあったらしいのだが、近代にはその伝統は残っていない

ならば見るからに吸鬼の男と戦っていたあの女性は吸鬼では無いのだろう

レミニアが持つ“ただ有って先を知る能力”はこの吸鬼がもうすでに彼らと戦う意思が残っていないと判断した

ならばこれ以上の戦闘は無いのだろうと少女は一息つく

レミリアの能力はこれからの出来事を知る能力である

例えるならば賭け事

儲けるという結果。破産するという結果。その結果を知る事は出来ないが賭け事をするという事だけが分かる

これから絶対に起こる“出来事”や出来事を起こす“意思”を知ることができるだけであり、起こる出来事の“結果”を知ることは出来ない。それがレミリアの持つ先を知る能力なのだ

それは覆すことの出来ないこれから絶対に起こる出来事を前もって知ることが出来るだけという能力でなのである

たとえば目の前に男が居るとする

何もしていないがその男は自分を殴るのだという事が分かってしまう。だがその殴るという行為の先にある未来を読み取ることは出来ない

避けるのも自分の自由だし、何もせずに殴られるというのも自分の自由だ

避けた先にある未来は分からないし、殴られた先の未来は分からない

レミニアは自分の能力を“確実に定まった出来事を知る”能力だと思っており、結果を知る能力では無いと解釈している

あくまで自分の解釈なので正確には別の判断基準があるのかも知れないが、無意識のうちに線引きしている自分はそれを上手く言葉で表す事が出来ない

たとえば“殴る”という行為は“殴った”という結果では無く、これから殴るという“出来事”なのである

もしかすると殴るという“意思”、その意思によって定まった拳の軌道を読み取っているだけなのかもしれないが

その変が僅かに曖昧なのはまだ自分の能力の扱いが未熟なせいなのだろう

まだまだ自分の能力は未知数で、もっと知らないと行けないことが多いなと思いながらもレミニアは見下ろす

あの吸鬼には今戦意は残っていなかった

戦うという未来は無い

それより先、彼がどうなるのかは自分の能力でも分からないし興味もない

ならばこれ以上ここに残るのも意味が無いことだろう

最初は突然“欲望の解放”を行った吸鬼を見て意外だなと思った

戦うという行為を知ることは出来たがまさか欲望の解放を行うとは思っていなかった

欲望の解放とは吸鬼の理性が己の欲望に負けたときに起こる現象である

欲望を満たすために要らないもの、つまり自分の吸鬼としての意識を取り除く行為である

滅多に起こるものではなく、たいていの吸鬼は一生欲望の解放を行わないことが多い

だから欲望の解放というものを見たのはレミニアも初めてであった

話には聞いていたが、自分はああはなりたくないなと素直に思った

あれはただの退化だ

欲望に負けた吸鬼が獣へと成り下がる、退化なのだ

そんなどうでも良いことを考えていた矢先の邂逅だった

「どうも、吸鬼のプリンセス」

「・・・貴方はもしかして一角天馬殿かしら?」

「そうだよ。いやぁ、吸鬼を束ねる長に会えて僕は嬉しいよ」

一角天馬は馬の顔をしているが、レミニアはその空飛ぶ馬がニッコリと笑うのを見て少々顔が引きつる

神獣とはいえ、普通馬は笑わない
だから不気味だった
だがそれを堪えてレミニアも口を開く

「え、えぇ、こちらこそ神獣に、それも同じ能力を持つ先達に会えるとは思っていなかったわ」

「あぁ、そういえば君は僕と似たような能力を持っていたね。同じじゃないけどかなり近い系統ではあるけどね」

一角天馬は未来を知る事が出来るという伝承が古くから残っている
その能力のおかげで、極寒の北の大地は人が住める程度まで開拓が進んだとも言われている程である
確認の意味を込めた発言だったが、どうやら伝承は本当だったらしい
それぼかりか自分の能力まで知られているとは思わなかった

「それで、その神獣様が一体私に何の用事かしら?」

「興味が湧いてね」

「・・・そう」

全く想像がつかなかったし、その真意を読み取れなかったレミニアは難しい顔をして考え込む

心当たりなど一つもないし、自分も一角天馬を今現在関わる必要が有るかと問われれば無いのである

一体何の用事があって一吸鬼の私に神獣が話しかけてくるのか

一角天馬は今度は口を動かさず念話で話しかけてきた

『君はまだ消えるべきでは無い。だから今すぐこの湖から離れた方が良い』

「そう・・・ね。その口調だと何か起こるようね。残念ながら私には見えないわ。阻止することが出来るという事はつまり、確定した未来では無い。だけれども、教えてくれる訳ないのでしょうね」

『もちのろんだよ』

「では、貴方は私が今から何をするかは見えるのかしら？」

『おっと、そこまでは見てこなかったな。虹魚の土地で力を押さえれている僕はこの土地では未来を見ることが出来ない。ならばどうして君の考えが読めようか。ただ、何かをするつもりなら急ぐといい。君には此処で消えて貰ったらまずいんだよ』

「・・・その保険は確かに聞き届けたわ。其処まで言うのなら私にはさぞかし重要な役割があるようね。何とは聞かないけれども」

レミニアは話はおしまいと翼を広げ片手を軽く上げて一角天馬に別れを告げる

目指した先は湖の社。光球が照らし出す社へ

「いいものみーつけた」

2013

『巣くう者に気がつかず』

これは良い物を見つけた
全く持って予想外だったが、わざわざ様子を見に来た甲斐があったというものだとレミニアは微笑む
ここへ来た目的とは全然関係は無かったのだが予想外の展開にレミニアは心底ワクワクしていた
あの光の球体は虹魚の張った結界である事はすぐに分かった
そしてその中にあるものを見てレミニアの心はさらに浮つく
あそこにあるのはここからでもかなりの上玉の魂であることは恐らく間違いは無いだろう
あれならばあれ（・・）の器に最適そうだ
当初は誰か別の受け皿を用意しようと思っていたが、吸鬼以外でこの受け皿を見つけることが出来るとは思っていなかった

「その魂、いただくよ」

鋭い犬歯をむき出しにした少女は黒の翼で風を切って急降下する

「これは少し失態ね」

ゆっくりと体勢を崩す巨体が、ゆっくりと湖に倒れていく様を彩輝と一条は間近で見ていた

そしてテンをはじき飛ばしたシェリアはそう呟いてため息をついた

彩輝は一体何が起こったのか、目で追うことは出来たが、それを頭の中で整理するのに少々時間がかかってしまった

あの吸鬼が虹魚に触れた途端、突如神速のスピードで攻撃に転じた女性が視界に現れ吸鬼を突き飛ばしてしまった

そのパラソルには生々しい、まだ暖かい血がべっとりと付着している

一滴、また一滴と湖に落ちては薄まって消えていくその血の行方よりも、今は沈み始めた虹魚、そして突如社の上空に現れた光球に彩輝と一条は意識をとられていた

「・・・夕日・・・か。彼女、あそこに居る」

「うん。私にも分かる。あの光の中に・・・夕日ちゃんが居る」

俺も、一条さんもそう口にして互いに頷き会う
理屈では無い。感覚がそう告げている

「あれが何か分かるのかしら？」

ふわり、空中に降り立ったのは白髪の女性、シェリア・ノートラックだった

「たぶん。あそこに、行かないと」

俺は風王奏の力を使ってゆっくりと移動し始める

シェリアは「なら任せるわ」と言って突き飛ばした男の方へと向き直る

「こっちは私が押さえておくから」

「あぁ、ありがとうございます。大丈夫ですか？」

「えぇ、これでも私、この大陸で二番目に強い人間だから」

嘘か本当か、そう言って女性は再び宙に舞った

その無駄のない後ろ姿から視線をそらして、彩輝はスッと腰の剣に意識を向けた

ゆっくりと浮き上がるその不思議な感覚にも慣れてきたなと内心考えながら彩輝は視線をあの光球へと向ける

一体あれが何なのかは分からないが、あそこに彼女が居る

俺が行かなくて、誰が行くんだ

社までそれほど距離は遠くない

「私は、待つよ」

「一条さん？」

突然、後ろから一条さんに声をかけられて俺は振り向く

待つ？

一緒に行く気になっていた俺は少々意表をつかれて開けた口を塞ぐのを忘れてた程だ

塗れた黒髪をジッと見つめる彩輝に、一条はさらに口を開く

「行ってアーヤん。私じゃ、足手纏いになりそう・・・」

そこまで言われて俺はあることに気がついた

此処に来る最中、一条さんにつけられた札のせいでいち早く此処に到着できた

まだ飛ぶことに関してスピードを出すのはそこまで得意じゃない俺にとっては凄く早くついたと思っている

だが自分が下手で制御できなかったせいで俺達二人は水に落ちている

だから今の彼女には戦う術がないのだ

符術を専門に護身していた彼女には今、札は全て水に濡れて駄目になってしまっている

「それに、早く、あれ・・・」

何とか氷にしがみついている一条さんをとりあえず大きめの氷の上に引き上げると、一条さんは俺の後ろ指さした

何を指さしているのだと振り返ると、そこには小さな影が下りてくるのが見える

社の遙か頭上から下りてくるその影は明らかに光球を目指している

人型なのは小さくても分かった

そこから導きだせる結果は一つだけ
魔法のある世界だからといって、人が空を飛ぶことは容易ではない
ことはこれまでの生活の中で感じ取ってはいた

先ほどの女性は飛んでいたが、まぁたぶん敵じゃないしそんなこと
はどうでもいいかと思った

どう考えても、あれは吸鬼だ

まだ居たのか、という内心の呟きの中で俺は時間がない事に気がつく

何をする気かは知らないが、あの子に手出しされては困るのだ

だって、守らないといけないから

そうで無いと、俺は自分が自分で居られなくなる気がする

俺はそれ以上何も語らず、ただただ光の光球を目指して空を駆けた

「待ってろ」

帰りを待つ彼女（ひと）と迎えを待つ少女（ひと）にそう言い残して

一筋の光は、一瞬にして風となる

そして黒と赤の影が光球の頭上で交わった

2019

ッキィン

赤の短刀と銀の短刀が火花を散らす

「あら、あなたは一体だぁれ？黒髪なんて珍しい」

「お前こそ、何企んでやがるっ！？」

黒い翼に白い髪はまさしくこれまで出会った吸鬼と同じ容姿をしているのを確認して彩輝は二本目の刀を抜き放つ

右手が僅かにミシリ、と

白銀の刀身がレミニアへと迫る

その一撃で相手を戦闘不能にするつもりだった彩輝は一瞬あっけにとられてしまった

その風王奏の一振りを、己の用いる全力の速さで持って振り抜いたつもりだった

だからこそ、呆気なく止められてしまったことに驚きを隠せなかった

こんな小さな女の子に・・・

右肘がギシリ、と

まだ自分の慎重の半分ほどの背丈しかない少女に、まさかこの一撃を簡単に受け止められてしまったという事を認識した瞬間にはすでに彼女の顔が目前まで迫っていた

「残念。」

右肩をがっしりと掴まれ、其処に巨大な魔法陣が浮かび上がる

漆黒の光を放つその小さな魔法陣を視界に捉えた瞬間、右肩に重い衝撃が走った

何か、鈍器で貫かれるかのような重い衝撃波と共に彩輝の体はグルグルと回転しながら湖へと落ちていく

この時点で彩輝の意識は無く、ただただ重力に従って落ちていき、ついには水飛沫をあげて湖へと落ちた

「なぁんだ。思ったより大した事ないじゃないの。さって」

クルリとターンして見下ろす

レミニアは降下を始め、社の上に着地すると広げていた漆黒の翼を折りたたむとその光球を見上げる

「あぁ、近くで感じると更に・・・・・・いいわぁ・・・」

うっとりと見惚れたかのような仕草で頬に手を当てるレミニア
その光球はしっかりと結界に守られているが、よくよく見ると結界が二重式になっているのが分かる

一つ目の結界は人目につかないようにするための、覆うものの存在を隠すための結界だがこれは効力を失いほぼ消えてしまっている
その中にもう一つ、これは物理的なものや魔力を反発させる結界
だが、かなり消耗しているようで時折その光が弱まったりして明滅しているのが分かる
これならば力押しでこじ開けられないこともないと判断したレミニアは両腕に魔力を溜める
腕の先に漆黒の魔法陣が5つ連なって出現する

「ふふ、それでも全力に近いほどの力を出さないと壊れそうもないわ。やっぱり神獣は恐ろしいわね」

レミニアは目を閉じて静かに笑う
そして呪文を紡ぐ

これだけの至近距離なら技を其処まで制御せずに済みそうね

―黒の獣、その息黒く―

一つ目の魔法陣は光る

―黒の息、その音色は重く―

二つ目の魔法陣は光る

―夕闇を告げる音色となり、夜明けを閉ざす音色となり―

三つ目の魔法陣は光る

―闇夜の覇者よ空を染めよう、永久の永久の漆黒に―

四つ目の魔法陣は光る

―黒后福音！（クロキサキノフクイン）―

五つ目の魔法陣が光る

ぎゅんっと腕の先に魔力が集中し、そしてそれは五つの魔法陣を通り、拡大する

それは背後の社を全て吹き飛ばすほどの威力だった

バラバラに砕けた社の破片が周囲に飛び散り、黒の太い光が白い光の球体を包み込む

まるで昼間に光り輝く太陽を埋め尽くしたかのように、空へと斜めの光の柱が生まれた

衝撃を押さえようとレミニアも翼を広げるが、それでもその魔術の威力は小さい体を徐々に水面へと近づける

だがその小さな体が湖まで押し返されるよりも早く、レミニアはその手応えを感じ取った

はがれた！！

魔力の放出を徐々に押さえると、そこには小さな少女の姿があった

小さく体を折りたたんでおり、空中で目を閉じて浮かぶその少女の姿をレミニアはしっかりと目に焼き付けた

「フフ、なかなか、どうして・・・・いいわ。予想以上。魔力も申し分ないわ」

その瞬間、背後に蠢いた影に気がついてレミニアはため息をつきながらゆっくりと振り返る

あぁ、冷たいな

水の感触が新鮮に感じられた

とっくに塗れていたというのに、また湖に入れば冷たさを感じてしまう

服が重い

体が重い

どうなったのだろうあの後？

彩輝は自らが撃墜されたことを悟った

そうか、たしか俺は右肩を・・・折角治して貰ったのにな・・・

・・・・・・嫌だ

嫌だ。こんなところで終わるのは、嫌だ！

まだ、終わってないのに、俺だけ終わるというのか！？

ふと、脳裏に彼女の顔が浮かんだ

動け動け動けっ！

どうして、どうして体が動かない

どうして水がこんなに重い

さっきの魔法がそんなに強い魔法だったのか

彩輝は水の中で思った

ズキリと肩に痛みが走る

何だ、これ？

――――チカラガホシイ？――――

右肩の異変に気がついた俺は水中だというのに迷うことなく目を見開いた

――――ナラソノミギウデハワタシノモノネ――――

だれだ！？誰だ誰だ誰だ！？お前は、誰だ！？

脳裏に響いたその言葉は確かに自分の中から響いてきた

俺は左手で右肩を押さえるが、右肩は自分の意思を無視して勝手に動き始めた

戸惑うよりも先に、俺はその右腕を押さえつけようとする

なんだ・・・これは！？

右肩がズキリ、と

だが水中でそう長く息が持つわけもなく、いつの間にか彩輝は気を失ってしまった

2027

『彼は闇へと飲み込まれ』

それを見て私は小さくあぁっと呟きを漏らした

風のごとく光の元へと飛んでいった彼の姿が、上空から近づいてきた一点と交わった瞬間、その黒点が人の姿をしていることを確認した

一瞬の鍔迫り合い、だがその一瞬後にはあっけなく大きかった方の人影が押し負けて水中へと叩き込まれた

たぶん水に落とされただけだから死んではいないはずだ

だけど私はあんなにも簡単に負けてしまう姿を、先ほどの彼と重ね合わせることなど出来なかった

次元が違うのだと感じさせられた

いや、まぁ人じゃないんだけれども

黒い翼に白い髪の少女が、勝者としてそこに佇んでいた

そして、目で追った先に何か黒いものを視界に捉えた瞬間、一条唯の意識は静かに沈んでいった

「どうしたのかしら？」

がすっという鈍い音の後に、氷の上に力尽きている唯の後ろからシェリアが声を掛けてきたが、唯の耳には届かない

大きく足を振り上げた状態で空中に浮かんでいるシェリア・ノートラックの姿があった

仮にも長めのスカートとはいえ、そこまであげてしまうと中が見えてしまうような気がしなくもない

対して蹴り飛ばされたであろう男は空中をぐるぐると回転しながら吹き飛んでいた

黒い翼がバッと開くが、上手く風を捉えられないのか制止するまでに数秒かかった

素人目で見てもその吸鬼の男がかなり披露しているのはすぐに分かる程だ

呼吸を荒げ、胸を上下させてシェリアをじっと睨んでいる男の至る所に痣や滲んだ血が全身に広がっている

「くそがッ！」

パンと手を合わせ、そしてその両手の平をシェリアに向ける

その瞳は怒りに燃えている

「黒き馬蹄の重さを知れ。黒き嘶(いなな)きの鋭さを知れ。黒き鬣の流れを知れ。その四肢の逞しきを知れ。黒き一矢よ嘶け・・・ボウドネイッ！！」

シェリアが腕を目の前で一降りする

すると男の突き出したボロボロの両腕に繋がる一本の横傷が生まれ、鮮血が湖へと落ちていく

だが表情を変えず吸鬼は術を行使する

生まれた魔法陣は漆黒

集まる黒い光が一本の矢を生み出し、その矢がシェリア目掛けて放たれる

黒い尾を引きその矢は一直線にシェリアへと向かっていく

正直に唯はその矢の早さに体が追いつかなかった

だがシェリアには見えているのだろう。右腕に魔力を纏わせて思いっきり矢を弾く

バシィッと音を立てて砕けた矢は黒い因子となって宙に消えていく

だが、何か腑に落ちないような顔でシェリアはその弾いた右腕を見つめた

だが次の瞬間バッとシェリアは顔を上げた

上空を見たかと思うと、その異変に唯も気がつく

一瞬空間が歪んだかと思うとシェリアはそこから全力で横へと飛んだ

すると数秒遅れて先ほどまでシェリアが立っていた場所の水面が大きく凹み、そして巨大な轟音と共に数メートルの水柱を立てた

だがシェリアは止まらない

水面から突如見えない何かが飛び出してきてシェリアの体は大きく吹き飛ばされた

そこに追い打ちをかけるかのように黒い靄のようなものが風に乗って何処からか現れ、そのシェリアの体を切り裂いた

そして空中に四つの柱が出現した

漆黒の柱には様々な紋様が書かれており読み取ることは唯には出来なかった

が、何か起こりそうな気がしていた

あの黒い魔術を、あの女性は何とか出来るのだろうか？

「フフ、この程度か」

そう空中で今にも倒れそうなシェリアが呟いた

一条には聞こえていなかったが、その呟きは吸鬼の元まで届いていた

「そのお前はこの程度の魔術で敗れるのだ。いや、正確には閉じこめる・・・だが」

シェリアはようやくあの自分の上空に浮かぶ黒い柱が何であるかを悟った

結界・・・か

確かに強力そうだ

「さて、俺は早く帰りたいからな。さっさと止まってしまえ。そして俺もお前も全快したらまた戦おうぜぇ・・・」

男がそう言ってボロボロの顔でニヤリと笑うと、ドドドドッと黒い柱が自分の周囲へと下りてくる

「押さえておくと言った手前、これ以上戦うのも面倒なのも御免だけれども、ここまでくればやっぱり私も仕事な訳だしね」

あの吸鬼はこれ以上の戦闘は難しいと考えているはずだ

どういう訳か湖の四方に残る戦力が移動している

彼らを相手にするのは流石にあの傷ではきついだろう。だから恐らく吸鬼はこの場を離れて撤退するはずだ

あれだけ私の拳をくらってまだ原型を留めているのが不思議なくらいだ

この機会を逃してなるものか

あいつが虹魚の力を僅かながら奪い取り、生まれたその隙を

ここまでされておいて、取り逃がしなんて事になったら私の四天王としてのプライドが許さないだろう

確かに強い、が、頂の私に勝てるなんて思われてたまるものかとシェリアは上空の吸鬼に向かって静かな微笑みを浮かべた

「け・・・何が可笑しい・・・」

吸鬼はそのまま振り返って逃走を図る

「この程度の結界で、私を止められると思わない事ね」

シェリアは魔術を発動させる

小さく右手をうえにあげ、人差し指を立ててゆっくりと頭上で回し始める

「旋風よ、見えぬ衣を身に纏い、舞踏の相手を探そうか、ならば我は貴方の手を引こう。インビテッドダンス」

円を描いていた指先に魔法陣が浮かび上がる

その魔法陣を中心に徐々に風が渦を巻き始める

それは周囲のあらゆるものを巻き込んだ

例えばそれは湖の水や浮かんだ氷であり、例えばそれはこちらへと下りてくる四本の柱であった

「位置がずらせればこれに結界の効力は無いわ。初めて見る魔術だけれど、結界の術式の構成からして大抵の結界は発動する前に術式を乱してやれば効果は無くなるのよね」

シェリアは吸鬼が放った魔術が結界であることをすぐさま見破り、またその術式を読み取って四本の柱の位置関係が術に大きく関わっていると見てその柱の位置をずらそうと竜巻を起こす

柱はシェリアを取り囲むより先にその竜巻に巻き込まれ、大きく回

転を始めた

まるで凶器のようにグルンぐるんと振り回されるその柱を巻き込んだ竜巻は徐々に大きくなってゆく

そこでようやくその魔力の動きに気がついたテンは振り返り、目を見開いた

「なっ・・・!?」

目の前に飛んできた巨大な黒い柱をはじき飛ばすが、徐々に自分も目の前の竜巻に巻き込まれつつあることに気がついた

急いで離れようとするが、全力で飛んでいるにもかかわらず、その竜巻は周囲の空気を巻き込むために翼が風をとらえられるはずも無かった

魔術を行使しようにも詠唱するほど余裕があるわけでもなく、詠唱無しの威力では到底この巨大な竜巻を消し飛ばせる訳がない

そもそも一瞬虹魚に触れ、その魔力を奪ったはいいのだが思った以上にこの魔力量少なかったのである

だがその理由をテンが知るはずもなかった

虹魚は一年で溜めていた魔力を結界を突破するのに大量に消費し、また結界の元である機械を破壊するのにも使い、さらにはテンを浄化し、今回湊夕日の魂の魔力を押さえ込むためにも魔力を大量に消

費していたのだ

そのために社に不可視の結界を張っていたのだが、テンがその残り僅かな魔力を奪ってしまった為に虹魚は結界を維持できず、その結果湊夕日の魂が結界から解放されてしまったのだ

イレータ湖に故意に溜められていた魔力は今もどんどんと周囲の魔獣や魔法を発動させるために消費されていき量を減らしている

とはいえまだかなりの魔力がまだ湖に眠っているのでいつ虹魚が復活してもおかしくはない状況だ

「あなたがテン・ティニート？」

突如、竜巻が霧散した

竜巻が巻き込んでいた水やら氷やら柱やらがその勢いのまま周囲に飛び散って湖へと落ちていった

一体何が起こったのか？

そこで目の前に一つの人影が浮かんでいることに気がついた

そしてそれが一瞬で吸鬼なのだと分かった

白髪に翼を生やした少女だ

その静かな目が俺の瞳を貫くような鋭さで向けられる

腕を組んでおり、袖の中から小さな光が漏れている

「だ、誰だてめぇ・・・」

「私はレミニア・アレスティア。三部族をまとめた者よ」

益々訳がわからない

三部族というのは恐らく吸鬼の三つのグループの事だろう

だがそれぞれは独立して、それぞれがひっそりと暮らしていると聞いていたし、少なくともそれらがまとまるなんてことは予想だにしていなかった事である

そんな話はここ最近一度も話題に上った覚えがテンには無かった

「あ?三部族をまとめた?どういうこった?」

「私が、三部族の長になったということよ」

「ゼロはどうした?」

自分を育ててくれたとはいえ、尊敬はしていないしましてや父親だなんて思ったことは一度もない老いた吸鬼の姿を思い浮かべる

ただあのゼロがこんな小娘に自分の部族を簡単に明け渡したりするものだろうか？いやそれはない

寧ろ自分が長になろうとするほうが簡単に想像できる

「死んだ、いえ、殺したわ」

「へぇ・・・」

正直、あいつって死ぬのかとテンは思った

死を操る吸鬼だったが、本当に死ぬのか

というよりこんな餓鬼に殺されたのか

「まぁ嘘でも本当でもどっちでいいさ。それで、俺に何か用か？」

「いえ、大したことでは無いのだけれど、貴方に私たちのグループに入って貰いたいと思ってね」

「・・・他の奴らは？」

「全員快く合併に協力してくれたわ。あとは貴方と、それと行き違いになった二人だけよ」

それはハチとゴの事だろうとすぐにテンは気づく

ということは恐らく自分だけでなく彼らにも聞くつもりなのだろう

確かに面白い誘いだとテンは感じた

これまでの退屈な日々がゆっくりと終わりを告げようとしていたのはゼロの様子を見ていて分かった

今回のこのイレータ湖の襲撃の命令に大人しく従ったのも、神獣という面白そうなキーワードがあったからだ

結果として四天王と手合わせすることが出来て満足はいっている

「何を、企む？」

俺を取り込んで何の意味がある？

「戦いの準備を。貴方程度でも戦力として」

戦い・・・か

こちらとしては戦いという言葉に弱いと分かってはいるつもりだ

だから即答で了承を出そうとするのを一瞬躊躇う

「戦い・・・か。何と戦う?人か?」

「人。ただし、この世界の外より侵略しに来る者」

「強いのか?」

「強いわ。恐らく今の貴方よりは」

「そうか・・・。そりゃ・・・楽しみだなぁ」

もし此奴が俺が戦闘好きの狂った吸鬼だと知っていてこんな事を言っているのだとしても、その言葉に嘘偽りは無さそうだ

ならば俺が返す返事など了承以外にあり得ない

此奴が俺をどう利用しようと構わない

俺はただ戦うことさえできればそれでいいという人種なのだから

「なら決まりね。貴方が距離を取るまではここにいる全員を足止めしておいてあげるから、貴方はさっさと逃げなさい」

「言い方が気に食わねぇ・・・が、しかたねぇか・・・」

意識してみると、やはり痛みは鋭くなってきている

恐らく所々の骨にヒビが入っているのだろう

軋む体に鞭を打ち、もはや逃げるのがやっとである
それなのに先ほどからしつこく付きまとってくる四天王が邪魔で邪魔で仕方がなかったのだ
接近戦に持ち込まれればヒビでは済まないだろう
かといって魔術で足止めしようとしたが、今の竜巻のように相手も遠距離の標的に対する攻撃を持っているためいい手がないか考えていたところだったのだ
だからこの提案を呑まない理由は無い
寧ろ嬉しいくらいだ
「ってわけで決まりだな。俺は帰らせて貰うぜ」
「えぇ、後は」
ダンッ！！
突如、レミニアの姿がテンの目の前から消え失せた
代わりに視界に入ってきたのは真っ黒な、長い、触手
振り向くとそこには一つの人影があった

この世界には異質な黒髪をした異風な服装をした少年が一人、宙に浮いてこちらを見ている

その真っ黒に染まった右肩から伸びた触手が２０も３０メートルも伸びて、レミニアの体を捕まえていた

その黒い腕の先はまるで手のようになっており、捕まえられたレミニアは驚きに目を見開いていた

「見えなかった・・・？どういう・・・」

レミニアはこの彩輝の一撃を見切ることが出来なかった

未来を僅かながら予測できるレミニアだったがこの展開は完全に予想外だった

その未来を見ることが出来なかった

こんな事は今まで無かったのに

対して彩輝の方は意識を失っているようである

だらりと両手を垂らし猫背に近い状態で宙に浮いており、見る者を怖じけずかせるかのような異様な雰囲気を放ってる

右肩から伸びる黒い触手のような腕が不気味にレミニアを捉えたまま制止しているが、レミニアの方は何も無抵抗というわけではない

必死に抜け出そうと身をよじるが黒い触手はピクリとも動かない

「く・・・。これは・・・まずいわね・・・」

レミニアは少なからず自身の力に自信を持っている

とはいえレミニアが持ち味としているのはその小柄な体躯を生かした瞬発力と親譲りの膨大な魔力量である

その二つがレミニアの未来予測の力と合わさることで成人の吸鬼にも負けない程の実力を発揮するのである

そのため筋力としての力はそこまで高いとはいえないので

未来予測が効かず、筋力でも押し勝てず、魔力すら何故か発動しないこの状況にレミニアは僅かながら焦りを感じていた

持ち味としているスピードは捉えられている以上使い物にならないので何とかして脱出をしたいところだが

――――ズッ

そんなことを考えて抵抗を続けていると、突如その拘束が緩んだのを感じたレミニアは黒の触手をふりほどく

するとそのふりほどいた黒い腕のような触手が湖へと落ちていくが、水音は聞こえず、触手は空中で無数の黒い玉のような物体へと

代わり消えていった

「大丈夫か？一応お前に向いていた腕の支配力を奪ったわけだが・・・」

テンがするりとレミニアの横についてそんなことを呟いた

テンはレミニアを拘束している触手に触れ、その束縛を奪った

奪うという事は自分の物にするということ

その黒い腕の支配権を黒髪の少年から自分の元へと移し、その後にテンの意思によってその黒い腕を切り落としたのだ

だがその瞬間、不思議な声が聞こえてきたのだ

――――私を返せ――――と

「どういう意味だ？」

テンが聞く

レミニアはまさかね、とは思いつつも一つの心当たりを胸の内に見つけ、目を細めて目の前の少年を見つめる

そしてその魔力の本質を体全体で感じ取り、確信する

これは確かにアレの――――

しかし何故あの少年が？

「分体を宿してる・・・？これは本当に驚いたわね」

「あ？分体？それってあれか？生前に魂を分けるってやつのことか？」

「まぁその認識で間違いは無いのだけれど・・・」

全く持って運命とは面白い物だ

クスリと小さな笑いを浮かべ、レミニアはどこからか小さな欠片を取り出した

人差し指と親指でその銀の紐を絡め、その銀の先には美しい翠色の宝石がはめ込まれたペンダントがぶら下がっている

テンはすぐにそのペンダントが翠鋼石と呼ばれる宝石で出来ていると気がついた

僅かに、翠色が鮮やかに光る

「！！カエ・・・セッ！！」

「やーよ」

するとアヤキは俯せていた顔を上げて叫ぶ

右肩の触手が再生しながらどんどんと伸びて近づいてくる

黙視していれば十分に避けられると判断したレミニアはフワリと飛んで距離を取る

余裕を見せた表情で彩輝を見下ろす

くるっとペンダントを指先で回してそのまま裾へと落とす

「やっぱり。あなた、分体ね。道理で真っ先に私を狙ったわけね。あなたこれが欲しいんでしょ？」

「ワタシダ・・・ワタシダッ！！」

「ふふ、欲しければ自力で取ってみなさい。ほらほら」

両手を広げていつでも受け入れるかのようなポーズをとるレミニアだがそんな気は全くないのはテンでも分かる

口調が変わった少年を見てテンは理解が追いつかないと考えるのを止めた

どうやらこの現象には彼女は心当たりがあるようであるので任せるとしよう

さて、なら自らがすべき事とは何なのか？

それはもちろん撤退することである

随分と長居してしまったと思いながら上昇をする

途中襲いかかってきたグリフォンやワイバーンを避けながら血の混じった唾液を吐く

「ったく、召喚主まで襲ってくるなんて聞いてねーぞ」

もしこれが両親なら、彼らを手懐けた手前襲いかかってくることはないのだろうが魔獣にとっては彼はただの獲物にしか見えないのである

僅かにその体内に混じる血の臭いに懐かしさを感じる者があったとしても、気のせいだと思う魔獣が殆どであった

「あぁ、まだ、まだ、行ける・・・かもな」

それでも襲いかかってくる魔獣をひょいひょいと避ける辺り余裕が有るように見えたが、ここまでの傷を負ったのはテンには初めてであり、自らがどこまで戦えるのか分からずにいたために体中ボロボ

ロになってしまっていた

だがこの戦いに置いて自らの力を再確認したテンはそう呟いた

こうしてまた一人、この湖を舞台とした戦いから一人が舞台裏へと消えていった

そして湖の中央にて、黒髪の女性が人知れず虹色の光に包まれた事に、本人すら気がつかず

物語は終盤へと近づく

『心の奥で君を想う』

美也・・・

その伸びた、小さな、白い右手が、俺の左手の先に触れ、そして・・・

それはとある暑い夏の出来事だった

朝から蝉が五月蠅く鳴く暑い夏の一日がまた始まった

ただ、今日だけは少し特別だった

いつもは寝起きが悪いが、今日に限ってはすぐに目が覚めた

「おはよう、彩輝」

「おはようっ！」

朝、朝食を作る母に廊下からそう返して洗面所へと向かう

顔を洗い歯を磨き、よしっと少年は鏡の前で頷いた

今日の午前中は剣道の練習試合、そして午後からは待ちに待った商店街の夏祭り！

昨日はドキドキとわくわくで胸がいっぱいになりそうだった

もちろん楽しみにしているのは後者の方である

いつもならそんなことも無いのだが、今回に限ってはそうでも無かった

朝食を掻き込んで、父があくびをしながらリビングへ降りてきたのとすれ違いながら彩輝はリビングを飛び出した

「おはようっ！」

父はふぁ？と寝ぼけたまま振り返る

が、そんなことは気にせず少年は竹刀片手に玄関を飛び出していった

剣道をしていた父に勧められて、地元の剣道教室に通い始めて早３年

そこの先生をしていた祖父からも筋が良いと褒められて、あれよあれよというまにその学年の強豪選手に選ばれるまでに成長していた

自分でもそれが気持ちよかったし、何より剣道がとても好きだったというのもあるのだろう

確かに練習は厳しかったが、それを嫌だと思うことは無かった

それに・・・

「やっほ！きたよー」

「あっ、美也ちゃん！」

剣道場の前に立っていた手を振っている同じクラスの女の子を見て彩輝は目を輝かせた

竹刀を持っていない方の手で手を振り替えすと、少女はそれに答えるかのようににっこりととびっきりの笑顔を見せてくれた

陸乃宮美也（りくのみやみや）という少女だった

「今日ってなにかあるの？」

駆け寄ってきた少年にそう聞く少女は辺りを見回す

二人の周囲にはいつも居ない選手が何人か見受けられた

それに少女はよくここに通っているため、知らない選手が沢山居る

ことに少し戸惑っているようだった

「うん。今日は練習試合なんだ」

「そうなんだ！しあいなんだ！」

「うん」

「えっとね、じゃぁじゃぁさ。あやき君はどれぐらい強いの？」

「んー、わかんない。でもうちの道場じゃ僕の同い年では一番強いんだ！」

「だよねっ！いつもあんまり負けないもんね！」

確かに、今思えば最初の頃は前からやっていた同年代の彼らにも負けていたが、いつの間にか一番になっていた

その頃からか、負けることが少なくなり、悔しいと感じることが少なくなったのは

「あれ？美也？なにしてんだよこんなところで」

「あれ、お兄ちゃん？」

突如、少女の後ろから現れたのは、彩輝と同年代ほどの歳の少年だ

った

彼も防具と竹刀を持っているところを見るとどうやら同じ剣道の道を志す人間らしい

そして、彼がお兄ちゃんと呼ぶ彼は・・・

「はじめまして。僕陸乃宮総也って言います。美也のお兄ちゃんです。よろしく」

そう言われると、目つきや顔の骨格が何となく美也にている気がしてきた

彼が美也ちゃんのお兄ちゃんなんだ

「・・・はじめまして。桜彩輝です」

「ねぇ、君って美也の友達？」

「うん、そーだよっ」

少女はそう言ってにっこりと笑い、彩輝の手を握った

ちょっとその事にドキドキしつつ、触れた彼女の手の柔らかさを知る

僅かに頬が紅くなったのはばれなかっただろうか、なんて思いなが

らドキドキは止まらない
きょとんとした顔でそれを見つめる少年

「まぁいいや。君、何年生？」

「三年生」

「あ、そうなんだ。僕も三年生。って、美也と双子だから当たり前だよね」

「双子なのに学校が違うの？」

「うん。いろいろあったんだ。あ、先生が呼んでるから、僕はもういくね。じゃぁまたね」

そう言って建物の中へと入っていく彼を二人で見送って、今度は僕が美也ちゃんに見送られて建物に入っていった

着替えをすませて僕は道場へと向かう

すぐに集合が掛けられた

今日は幾つかの剣道教室が集まって合同練習、基、練習試合をする事になっている事を思い出す

七時から始まり、十二時までの間で行うと前に出て説明していた別の教室の先生が話している

確かにみんな強そうだ

だけど、僕だって負けてはいないはずだ

そんな自身で自分を奮い立たせて、気がつけば合同練習が終わり、練習試合が始まっていた

結果は五分五分

勝ちもしたし負けもした

トーナメント方式で行われたため、結果は準優勝ほどであったがそれでも悔しいとは思った

優勝は、なんと美也の双子のお兄ちゃんであるという総也くんが綺麗にすべて一本勝ちで勝ち抜いたらしい

だが予想以上に早く終わったという事で、先生達が話し合いをした結果、各教室から一年生、三年生、六年生から一人ずつ選手を出して団体戦をしようという事になったのだった

そしてもちろん三年生の代表として少年の教室から選ばれたのは僕だった

そのことに、少しわくわくした

なぜなら個人戦トーナメントの時にはあの総也という選手と当たることが出来なかったからだ

一度、戦ってみたかった

そして、なんと初戦からその対決が実現した

結果を言うと何とか一本取ることが出来たが、その後は立て続けに綺麗な面と小手を決められあっけなく負けてしまった

彼女が見ている中、負けたのは残念だったけれども自分の中ではいい経験になったと思った

戻ってきた俺に、先生である祖父がこう言った

「二回とも、お前は心で負けたのだ。取ったと思った瞬間、逆に取られていただろう。人はそれを隙という。取ったと思った瞬間こそ最大の隙なのだと心しておけ」

そしてこう言った

「あの少年はまだまだ強くなるだろう。向こうの先生に聞いたら、彼は何故か二刀にこだわって一人練習いるらしい。かっこいいからとかいう理由ではなく、ただ単にそれが彼の本質なのだろうと。あの若さで自分に気がつけるとは凄いものだ」

二刀流は禁止されている

何年生から使えるのかは知らないが、小学校のうちは使えないとい

う事だけは確実だったはずだ

そんな事を練習する暇があったら、もっとやるべき事に時間を使えるはずだ

そしてそんな時間の無駄をあのの先生も分かっていて、それでもあえてやらせているのだろう

「お前も、いつか自分を見つけろ。それがお前という人間であり、その意思を貫き通せるだけの心を鍛えるんだ」

難しくて意味わからなかった

目の前で、すぱぁんと彼の綺麗な面が決まっていた

ただ単純に、あの竹刀が二つに増えたら自分は絶対に勝てないだろうなぁと思ったのだった

「これは・・・」

『これはあの少年心と記憶の中』

一条唯は困惑していた

一体いつの間に私はここにいたのだろうと

そして一体ここはどこなのだろうと

その無言の問いつめに答えたのは綺麗な済みきった声だった

歪んだ空間に一人立つ一条唯はそこでようやく目の前の小さな少年が彼と瓜二つな事に気がつく

髪型も、その顔つきも、その声も、どこか桜彩輝の面影を感じさせる少年だった

いや、彼は桜彩輝本人なのだろう

『貴方に、鍵を渡しましょう』

「鍵？」

『今、あの少年を救えるのは貴方だけだと思い、私はこの心象世界に貴方を呼びました。私は虹魚。この湖の主をしております神獣です』

すぐに唯はその声の主があの美しい巨大な魚なのだと悟った

しかし一体どこから声をかけられているのかは分からない
それ以上に、今一条唯が立つ場所が異様なせいだった
一条唯の目の前には扉があった
木で出来た綺麗な扉
鈍った金色のドアノブには使い古された感があり、他には小さな鍵穴がついているだけだった
そして一条唯は振り返った
「！！」

扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉
扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉
扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉
扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉扉

無数の扉が其処にはあった

宙に漂う無数の扉

息をのみ、一歩後退る

そこで唯は下を見る

そんな自分もまた、扉の上に立っていた

「なん・・・なの、ここ・・・・」

『先ほど申しました通り、ここはサクラアヤキの心象世界。わかりやすく言うならば、彼の心と記憶の中、ということになります』

漂う扉はぶつかり合うことなく、ただ空中を漂っている

その扉の先は恐らく、先ほど見たような記憶に繋がっているのだろうと一条唯は目の前の扉を見つめ返した。

『さぁ、私は貴方をここに連れてくることしか出来ませんが、貴方には彼を救う事が出来ます。もし、貴方が彼を、龍の神子を助けたいと思うのならば、私は貴方に力を貸しましょう』

「やるさ。なんだってやるわよ！だって私が救われたんだ！」

あの、夜。彼が私に手を差し伸べてくれたから、ここまで頑張ってこれたのだと、力一杯私は叫んだ

彼が手を伸ばして助けて欲しいというならば、今度は私がその手を掴むまでよ！

『では、説明しましょう。彼は今、とある魔獣の分体に体と意識を乗っ取られています。ですので常に開かれているこの無数の扉も、自己防衛のつもりですべて閉じきっています。アレに過去まで奪われてしまわないように』

アレ、というからには何処かを指して言っているのだろうがあいにくそこに虹魚は居ない

だが周囲を見渡せばすぐにそれの存在に気がつく

始めてくる場所だというのに、そこにそれがあることが不自然に感じるのだ

「アレ・・・ね」

一条の目線の先にはぽつんと真っ黒な炎が浮かんでいた

ユラユラと炎は揺れ、漂っている

どれだけの距離が離れているのか認識し辛いが、恐らく１００メートル近く離れているだろうか

「それで、何をすればアーヤんを助けられるの？」

何処かで聞いている虹魚に向かって話しかける

『今、彼はあの分体に乗っ取られ、右肩から大きな黒い腕型の触手を出しています。それは彼のマイナスのエネルギーがそこに溜まっているからです。そしてその腕型というのも彼のそのマイナスのエネルギーの象徴が腕や手という事に何かしらの劣等感、もしくは恨み、苦しみ、後悔という彼の意識が生み出したものなのです』

彼を縛っているのは――――後悔

そして今は治っているが、それまでは肩より上に上がらなかったというその右腕

その右腕に宿る彼の負の意識

何かが、繋がりかけていた

『さぁ、受け取ってください。先ほども言いましたが、この閉じた扉は貴方だけの力では開くことは有りませんのでこれを・・・』

目の前に小さな光の球体が生まれ、その中に僅かに光輝く鍵が生まれた

『急いでください。彼の抵抗が今あの分体を押しとどめていますが、彼が力尽き、諦めてしまえば彼は香過去を盗られ、自分を失うばかりか、その鍵が使えないように鍵穴を自らのものへと変えてしまう。そうなれば貴方もここから出ることは叶わなくなります。今なら貴方だけでも引き返せますが――』

「その先は言わないで。私には関係ないことだから」

一条唯はそう虹魚の言葉を遮り、浮かんでいた鍵を引ったくるように握る

そんな選択肢は、私には無い

確かに、彼とは偶然バスに乗り合わせただけの他人・・・

それでも、もしこの出会いに意味があるのだとしたら

いや、違う。出会ったことに意味があるのだからもう彼は赤の他人

なんかじゃないんだ
人は一人では生きていけない
支えてくれる誰かがいたから、見守ってくれる誰かがいたから、助けてくれる誰かがいたから
私は今、ここにいるのだ
彼が私を、支え、助け、手を差し伸べてくれた彼が居たからこそ――
――
「私は、今ここにいるんだ！！」
嬉しかったんだ
繋ぐ手には温もりがあると
私は一人――――否、独りじゃ無いと

『龍の子ともう一人の彼』

唯は思い切り、扉の上を飛んだ

無数に浮いている扉にはそれぞれ足場がついているため、そこに着地する

そして息つく暇もなく、手短な扉に向かって飛ぶ

――――あなたがすべき事は、その彼が持つ後悔や自責の念を取り払う事。それが分体に力を注いでいる源――――

そう言った虹魚の話が本当ならば、私が目指すべき扉は一つしかない

今、遠くに浮かんで見える火の玉はユラユラと一つの扉の前で漂っている

いや、漂っているというよりかは扉の中と炎の触手で繋がっている状態にある

火の玉から伸びるそれは触手というよりも、尾と呼んだ方がしっくり来るような形状をしている

その扉は他の扉と違い、扉に沢山の錠前がついているのが遠目でも

分かるほどである

しかしその扉に空いた巨大な穴を通して火の玉と扉の中は繋がっている

切り取ったというよりかは、壊したという表現が合いそうな壊れ方をしている

魔獣の分体とは何かなんて聞く暇は無かったが、それはアーヤんの後悔を源として活動しているらしい

ならばそのエネルギー源となる場所はあの扉の奥しか無いと確信した

そしてその扉こそ、私が向かうべき場所だと

彼の後悔や自責の念を取り払えと言われたが、具体的にどうすればいいかは分からない

ただ、手渡されたその鍵を手に、一心不乱に扉から扉へと飛び移る

アーヤんっ！！

距離が縮まる

と、突如飛び移ったとある扉の前で唯は立ち止まる

無数に浮かぶ扉はどれも同じ風貌、という様子ではない

扉はいずれも同じ形をしているが綺麗な扉から古びた扉まで様々である

今真横にある扉はその古ぼけた扉のなかでも、割と古い方の扉である
その台座の上で次の扉へ飛び移ろうと数歩下がって助走をつけよう
とした瞬間だった

――――こっち！！――――

「え？」

どこからか、声が聞こえた

バタンと扉が開きその扉が唯の顔面に直撃する

「ぶぇ　ぅっ！？」

完全に意表をつかれ、うら若き女子大生とは思えない声を出して私
はうずくまる

鼻や額がジンジンと痛い

顔を押さえてうずくまる私の上の方から、声が聞こえた

今度は先ほどよりもしっかりした声で

「あれ?居ない・・・あ」

恐らく扉の裏にいる私をのぞき込んで見つけたのだろう

その声は少女の声だったが、なんというか少年っぽい低さの声だった

え?え?何?

未だに理解できていない私は顔を押さえながら見上げた

そこには一人の少女が立っていた

紅い服、紅い髪、紅い瞳、背中には紅い翼が生えているという全身真っ赤な少女が私を見下ろしていた

私は未だに理解出来ずに、彼女が魔獣か!?なんて軽い脳内パニックを起こした

が、何となく私は彼女を知っているような気がした

どこかで会っているような、そんな雰囲気を感じて私は再び頭を抱える

誰よこの子!?

まぁもちろんこんな背中に紅い翼が生えてる少女なんかとは記憶の中には有るわけがなかった

「あぁ、御免御免。まさか扉の前に居ると思わなくって。とりあえず、こっちに入って。ささ」

顔を押さえていた片手が少女の手に引っ張られる

その肌は確かに少女のような柔らかな肌触りだったが、一つだけ違うのはその指先の爪だけが人間のような薄っぺらいものではなく獣のような逞しいものだった事だ

と、突如ぐんっと凄い力で引っ張られ私は顔の痛みを忘れた

振り回されるような形で私は扉の中へと引き込まれた

「いやぁ、無事合流できてよかったよかった～」

少女はそう言いながら鋭い爪で頭をぽりぽりと掻いた

私はそっと押さえていた手をどかし、周囲を見渡した

!?

アスファルトの大地

並ぶのは木々ではなく電柱

聞こえるのは動物の声では無く、車の走行音

そう、そこは紛れもなく私の居た世界の・・・

「どっ、どういう・・・」

「だから虹魚から聞いたんじゃないの？っていうか一度彼の記憶は見てるんでだよね？ここは彼の記憶の中だよ」

あっ、と、よく考えればそうである

私は先ほど彼がまだ幼い頃の記憶を見ていたはずだ

ならば恐らくここも、彼の記憶の中の一つという事になるのだろう

「でも・・・」

そこに通行人の姿はない

今私が居るのは住宅街の十字路の中心であり、路地を抜けた先はどうやらもう少し大きな道路になっているようなのだが、それもおかしい

車の音は聞こえるのに、肝心の車がぼやけている

確かにそこに車は走っているのだが、一台一台をよく見ようとすると、急にその車の認識が消えてしまうのだ

「ここが彼と君の住んでいた世界なんですね。私が見てきた世界とはずいぶん違うんですねー。この平らな地面も、岩とはなんだか違うみたいだし、全く同じ形をしたあの石柱ってまじないか何か？って訳でもなさそうだね。まぁいいや」

少女はぴょんっと石垣の民家の石垣の上に飛び乗る

翼は使わず、脚力だけでは恐らく同じマネは一条には出来なかっただろう

少女は振り向いて私に手を伸ばす

差し出された手にぼけっとした私に少女はにこっと笑う

「彼を助けるんでしょ？一緒にいこう」

私は迷わずその手を取った

私の体は、一気に地面を離れた

見上げると彼女の背中の大きな真っ赤な翼が広がっていた

ぐんぐんと高度が上がり、先ほどまで立っていた地上が遠くなっていく

「ね、ねぇ、どこに向かってるの！？」

私は手の先に居る少女に向かって聞いた

彼女は振り返ることなく、飛びながらそれに答える

「扉って言うのは思い出す切っ掛けになる場所の入り口なんだ」

「それは何となく分かるけど・・・」

確かに何か記憶を思い出そうとするとき、ある地点から切っ掛けに、徐々に思い出していく

それは思い入れの強い事柄で有ったり、衝撃的な瞬間だったり、時にはどうでもいい事だったり

そういう場所があの扉なのだ

記憶に入るための入り口

「そして記憶と記憶は中でも繋がる。この記憶は彼がもっとも閉ざしたくも閉ざせない、あの扉の記憶に繋がってる僅かな記憶の一つ。だから君がこの扉の前を通りかかったのはとても運が良かった」

「そう。・・・一つ確認して良い？」

「ん？なんだい？」

「君は、ソーレだよね？」

「――――そうだよ。僕は彼の使い魔であり、剣であり、そして龍だった存在さ。生まれてずっと、彼が僕の主であり、育ての親さ。ずっと見てきた。だから、君は信用できる」

一度、翼を大きく羽ばたかせる

ぐんと、再度上昇するスピードが上がった

「いいかい？僕は手助けしか出来ない。君がやらなければだめなんだ。鍵は僕じゃなく、君が持ってるから」

私はぎゅっと、もう片方の手に持つ鍵を握りしめた

「すうっ・・・・はぁっ！！」

そう強い意志を込めた声と共に、彼女が巨大な火の玉を生み出した

此方もかなりの速度で上昇を続けるが、上方に向かって打ち出されたその火球は二人の遙か頭上目掛けて飛んでいく

それは突如、見えない壁に当たって砕け散った

火の粉が降り注ぐ中、ソーレはさらに加速していく
火の粉と煙がはれると、先ほどまでは無かった扉がそこにはあった

「他の場所から入れないように扉の位置を変えられた上に見えないように細工するなんて、用心も良いところだよあいつ。だけど、あいつよりずっと先に私はここに居たからね。だから、分かった。さぁ、君の出番だ」

扉の前でその大きな翼で風を受け、急停止する
私はしっかりと彼女の手を握ってもう片方の手に握る鍵を扉に向かってのばした
不思議とこんなに高い場所でぶら下がっている状態なのに、不安や恐れは無かった
私はその金色の鍵を鍵穴に差し込んだ

「開け！」

ソーレが叫んだ
私は鍵穴をめいいっぱい回した

ガチャリ、と音を立てて鍵が開いた

「さぁ、あいつも扉を開いて気がついたはずだ。急ぐよ！」

私は鍵を手放しドアノブに手を掛ける

鍵がついたままのドアを開こうとドアノブを回してドアを引く

蝶番の擦れる音がし、そして中を覗く

と同時に一気にソーレが加速した

　扉の中の空は、真っ暗だった

まるで色が反転したかのようになった世界を二人は紅い線を引きながら飛んだ

空は暗い。夜なのだろうか？

そして下に見える無数の小さな明かりの集まりは町であろう

ぼんやりと月と街頭に照らされた無機質な町並みが浮かび上がる
そこから少し離れた場所に、帯のように連なる小さな明かりが続いている

「あそこだね。しっかり捕まっててよ！」

その灯火の帯に向かってソーレは呟いた
翼をたたみ、一気に急降下する
明かりに近づくにつれ、それが何の光なのかが私は分かった
祭りだ！
その光は人里から少し離れた小さな林の中、帯のように連なっていたのは屋台の光だったのだ
どうやらお祭りをしているようで獅子舞や和風な音色が小さな山に木霊し、人々の小さな喧噪が近づくにつれて大きくなっていく
ちょうど１０メートルほどまで近づいたところで翼を開いてソーレは急停止する
現在浮いている場所はちょうど光の帯の真ん中あたりである

「随分と、賑わっているね。こりゃ彼を捜すのは大変そうだ。僕は

ここから上を探してみるから、下の方は頼んだよ」

つまり、手分けしようというのだ

その方が効率は良さそうだと判断して私は近くの茂みに降ろして貰う

「見つけたら魔力を放出するから、追ってきて。君の魔力は覚えているけど魔力は扱える・・・よね？」

「うん。大丈夫。ありがと。じゃ」

「おっけー」

すいっと木々を掻き分け上空へと戻っていったソーレを見送り、私は屋台のあった方向に向かって駆けだした

「はぁ、はぁっ、えっと、後ろの方だから・・・こっちか！」

一つ問題があるとすればこの時代の彼が一体今何歳なのか分からない容姿が分からないのだ

現代の彼の容姿に近ければ分からなくもないかも知れないが、先ほどまで若くなってしまうとさすがにこの人混みで見分けるのは難しい

「ん？」

私はふと彼を捜していた視線を、落ちて転がっている新聞に目を向ける

新聞紙・・・・・新聞の日付欄！！

私はゴミになりそうなほどグチャグチャな新聞紙の日付を見る

「２０××年・・・・えーっと・・・・若っ！ってかさっきと同じくらいの歳じゃないか！。いいなぁ、私も若返りたい・・・い、いかんいかん」

じゃなくてじゃなくて

私は頭を振って邪念を振り払い、彼を捜す

人混みを掻き分け、少年の姿を探すが、全く分からない！

その時だった

ガシャァンと大きな音が近くから聞こえてきた

まるで何か硬いものと硬いものがぶつかりあうような、そんな音が夜の祭りに響き渡る

なんだなんだと人混みができはじめるのを見て、一条も何事だとそ

の場に駆け寄る

「あっ！」

人混みのさらに奥、まるで人混みから煙が立ち上る

そして人混みを掻き分けると、そこには巨大なトラックが屋台を巻き添えに木に突っ込んでいるという一条がこれまで見たことが無かった光景だ

いや、見たことがある

これは、新聞や、テレビで見た事がある事件だ

どこか記憶に引っかかるその出来事が今、目の前で起こっている

確か、居眠り運転した屋台を詰んだトラックが、小学生を2人を巻き込んで――――

「アーヤん？」

トラックから少し離れた場所に倒れている少年が居た

意識はあるようだが自力で立つことは

しかし、間違いなくそれは彼だった

目立った外傷は無さそうだが、もう片方は酷かった

どうやら彼とは別に、誰かがこの衝突に巻き込まれているらしい

「・・・!!」

女の子だ

先ほど見た記憶の中に居た、あの女の子だ!

酷い・・・っ!!

私はそれ以上直視することが出来ず、視線を反らした

これなの?彼の枷って?

だとしたら・・・こんなのって・・・・

「そう。これが俺だ」

「!!アーヤん!?」

振り向くと、其処には彼が立っていた

桜彩輝が立っていた

だけど――

「え？」

私は戸惑った

何かが違うと

「本当に、君はアーヤんなの？」

こんな彼の心の奥底まで来て、目の前に現れた彼に対して私は一体何を言っているのだろうか

彼が彼以外であるなんてあり得ないのに

だけど彼は目を丸くして嬉しそうに言う

「へぇ、わかるのかい？俺はあいつで、あいつは俺。でもあえて言うなら俺はあいつの裏にあたる存在って所かね。もちろん、あいつと記憶は共有してるよ。だって俺は桜彩輝だから」

彼はどうやら桜彩輝ではあるようだが私がいつも話す彼とは違うようである

確かに口調も違うし、何となく違うように感じられる

あえて表すなら、別人格、という解釈が正しいのだろうか

「じゃぁ、アーヤんはどこなの？」

「アーヤんと呼んでる表の俺は今は眠ってるさ。ここには居ない」

「じゃぁどこに居るの？」

「どこでもないさ。ここでもあり、ここじゃない。というか、俺がわざわざ言う訳無いじゃん」

「どうして？貴方は桜彩輝なんでしょ？」

「理解できないって顔するなよ。簡単な事さ。たしかに俺は桜彩輝である。と同時に、あいつの敵でもある。俺は裏であいつは表。だから敵だ。もっとも俺はあいつを知っているが、あいつは俺の事を認識できないんだけどな」

そう言って自らを裏という桜彩輝は両手を広げて天を仰ぐ

「やっと手に入れた自由だ。表が居なくなってやっと俺は自由になれた。なのに、わざわざ教える訳ないじゃん」

どうやら私の知っている彼とはずいぶん違うようである

記憶は共有しているらしいが、その価値観については全くの別なの

だろう

さて、私は一体この屋台の前でどうすればいいのかな？

「見ろよ。表の奴はずいぶんとこの記憶を引きずってるようだが、俺にしちゃ何ともねぇただの記憶だ。ガキ一人死んだところでずるずると引きずりやがってよ」

うん。彼は私の知る桜彩輝とは別物だ

口調だけじゃない。彼ならそんなこと、言わない

「あぁ、あいつ言っていたな。お前を守るって。重ね合わせてんだよ。あいつはお前とあそこで死んでるガキとをな」

「・・・え？」

「あー、鈍いなぁお前。だーからぁ、あいつがあの子を守れなかったから今度はお前を守ろうとしてんだよ。後悔しないように過ごしてきたのもこの記憶が原因さ」

目の前の彼は屋台に突っ込んだトラックを指さした

「あそこで表の桜彩輝はあの子の手を掴み損ねたんだ。まったくバカな事を考える。いや、実際にあそこで手を掴んでいたら俺の体も

お陀仏だった訳だからあのガキには感謝だな」

「どういう・・・こと？」

「あぁ、一部始終見逃してたか。やり直して見せるってのも可能だけど、面倒だ。あのガキは表の伸ばした手を自らずらした。するとトラックはガキ一人を正面からはね飛ばし、俺の体を掠らせて屋台へ突っ込んだ。掠っただけだったがそれなりにスピードが出てたんだろうな。この体ごと茂みに突っ込んだんだが、まぁ運良く助かったわけよ」

「つまり、はね飛ばされそうになった女の子はわざと彼が伸ばした手を避けて――死んだの？」

「おうよ。あのスピードなら掴んでたら確実にこっちの体も巻き込んで二人で死んでたな。だから感謝感謝。なのに表は勝手に勘違いして自分が掴み損ねたって思って、それで勝手にトラウマになってんでやんの。ザマァねぇな」

何となくの流れは掴んだ

彼の右腕が上がらなくなったのはその事による精神的な物である事。いや、それに加えてとばされた時の衝撃も恐らく入っているだろう

彼が彼女を掴めなかったことによる後悔

だからあれほどまでに、後悔したくないと言っていたのか

「ちなみにあそこにも扉があるんだが、その先はもう一つの後悔の扉と繋がっている。お前、ソーレと一緒に入ってきたな」

「それが・・・何？」

「こいつはもう一度同じ後悔をしている。伸ばした手が届かなかった。お前もその光景を見ているはずだぜ」

私にはそれが彼女の事だと分かった

つまり、ソーレの事だと

「ま、俺にとってもあいつはイレギュラーな存在だったよ。なにせ交友があるのは表だけだからな」

「まーね。僕は君のことは認めないけど、彼の一部であることは確かそうだね。だから今は手は出してないけど、それ以上僕の主をバカにしたらいくら君が主の一部だとしても怒るよ」

私は突如上空からかけられた声につられて見上げた

そこには翼を広げたソーレが居た

その言葉を聞いて彼はハンと鼻で笑う

「ハッ、逆だっつーの。あいつが俺の一部なの。これからはな。現

に今は表のあいつが消えてる間は俺がこうやって活動出来てるんだからな」

「僕の主は君みたいに弱くはない。だからすぐにきっと戻ってくる」

「何を根拠に？」

「僕の主だから」

じっとにらみ合う両者を見ていてふと私は思い出した

私がすべき事とは何なのか

私がすること。それは彼を助けること

――あなたがすべき事は、その彼が持つ後悔や自責の念を取り払う事。それが分体に力を注いでいる源――

なるほど。そういう事か。

「いいよ。なら、私が今度は君の手を探して掴んであげる。君はもちろん、離したりはしないよね。私はもちろん、離さない」

「あ？」

「唯さん？」

私は叫んだ

かつて一角天馬から直接聞かされたとある言葉を

――この言葉は君を支えてくれる人が近くにいる時だけ使うように

――

まぁ、いいか

もう面倒くさいのはこりごりだし

君が籠もって出てこないというなら、私から探してやる

使うのは初めてだけど、何とかなるよね

「オーバーアビリティッ！！」

『虹の波紋』

不思議な感覚だった

まるで自分の体じゃないようでいて、それでも自分の意思で動かせることに、私は違和感を感じる

否、これは私の体

でもそう感じないのは、恐らく自分が人という枠組みから外れてしまったからだろう

人でないなら何なのか？

獣？否

吸鬼？否

言葉で表すなら、そう、神子という表現が一番しっくりくる

「分かる」

スッと顔を上げた

「出来る」

白い翼が力強く、二度羽ばたく

「感じる！」

左手に視線を落とす

いつの間にか現れていた一本角のついた真っ白な仮面を私は迷うことなく顔につけた

まるで、当たり前の用に、紐も何もついていないのに顔に張り付いた仮面からもう一度上を見上げた

あの夜空の向こうに、私は彼を感じた

一気に跳躍する

それと同時に翼も羽ばたかせた

飛ぶ、ということはこういう事なのか

風を切り裂き、星空の元を天高く翔るその姿は一筋の光となって昇ってゆく

「おっとぉ・・・俺が許すと思うか？」

突如すぐ近くから聞こえてきた声に、私ははっと振り返る
いつのまにこんな所まで追ってきたのだと思うぐらいの余裕はあったが、それでも驚きは隠せなかった
彼の声なのに、彼じゃない

「おっと、僕がそれを許すと思うのかい？」

そんな桜彩輝の脚を何者かが掴んだ
恐らくそれには私よりも彼が驚いていた事だろう
バッと振り返る桜彩輝は自らの脚を掴んだ相手を見た
紅い瞳がぶれる

「ぬぅ・・・っ！」

ものすごい腕力で桜彩輝は真横に吹き飛ばされた
それと同時に大量の炎の玉が飛んできた
ドドドドンと爆発と煙の尾を引いて夜空に爆音が連なって響いた

「さぁ、君の足止めは僕の役目だ」

爆煙の中から、黒い一本の尾がゆらりと揺れる

やっぱりか、と小さく呟く

「君が本当に桜彩輝の裏ならば手出しはしないつもりだったんだけど・・・」

「気づいていた・・・というわけね」

大きなその尾が煙を振り払う

彼の後ろから一本の大きな狐色の尾が伸びている

「まぁね。確かに裏は表と記憶とかは共有しているだろうけど、それならば彼の現実の体は裏に乗っ取られた状態にあるはずであって、今のように自我が無くなることが裏の目的ではない。なら現実の彼の体を本当に乗っ取っているのは誰か？魔獣である君だ」

「ご名答。確かに彼の裏の枷を外して乗り移ったのは私。だけど表の彼に起きてもらう訳にはいかないのよ。ようやく手に入れた体なんだもの」

そう。何年待ち望んだ事か

「まぁ貴方にはさすがに驚かされたわよ。まさか先客が居るとはね」

「発言は正確にたのむよ。先客じゃないよ。僕は君みたいに彼の体を乗っ取っているわけじゃない。ただ、繋がれるだけ」

「ま、なんでもいいわ。さっさとどいて貰うわよ」

「はは、君の足止めが僕の役目なんだ。行かせる事は出来ないね。だって、僕は彼と彼女を守る使い魔なんだから」

感じる

――この力を使えば人が僅かながら神獣の力を使う事が出来るようになる。それと同時に身体的、精神的にも僅かの間強化される。だけどそれが対価なき力とは思わない事だよ。その力は人には過ぎたる力。だから使い終われば体や精神は疲労して暫く動かなくなることは覚悟しなければいけない――

だけど、私はこの力を使った

使った途端、世界がまるでひっくり返ったかのように新しく感じられた

彼の居場所も、すぐに分かった

私は頭上の星空との距離をどんどんと詰めていく

眼下で二つの気配がぶつかり合うのがわかった

心の中でソーレへの励ましをし、私はさらに上を目指す

そして、何も無い空間から私は彼の存在を感じ取る

そっと左手を、その何もない場所に添える

途端にぴしりと空にヒビがはいる

こんな物で隠そうだなんて・・・

はがれ落ちた空の欠片が闇へと落ちていく

そこに現れたのは、ひときわ綺麗な扉だった。しかしその扉にノブや鍵穴は無い

この扉の奥から、弱々しい彼の気を感じる

触れた扉から、彼の声が頭の中へと響いてくる

『あけて、アーヤん』

『・・・・・・・・』

答えは・・・無い

だけど、僅かに彼の気配が揺れたのが扉に触れた指先から伝わってくる

『ねぇ、君が言ったのは嘘だったの？』

『・・・・・・・・・』

『私はね、とっても嬉しかったよ』

『・・・・・・・・・』

『君が、手を伸ばしてくれたから、私は今こうして君と話をしている。凄く感謝してるし、嬉しかった』

『・・・・・・・・・』

『分かるよ。君が考えている事。前にアーヤんに言われた通り、君と私は同類だから』

『・・・・・・・・・』

『言ったよね。アーヤん。あきらめたら、終わりだって』

『・・・・・・・・・』

『言ったよね。道の先を見つめていたいって。立って前を向いていないとって』

『・・・・・・・・・』

『君が言うから、前を向いていようって、決めた』

『・・・・・・・・・』

『後から考えてみたら、君もあのときは辛かったんだろうって、思ったんだ。だから――』

『・・・・・・・・・』

『女だけど、今度は私が君に手を差し伸べるの、許してくれる?』

『・・・・・・・・・』

『大丈夫。離さない。絶対に。だから、過去なんか引きずってないで、前を見よう』

『・・・・・・・・・』

『私は、もう大丈夫だから』

思いはすべて伝えた

言い残す事は無かった

もしこれでアーヤんが扉を開けてくれなかったとしても、私は別に仕方ないと思った

私には彼がどれだけこの過去を引きずっているのかは分からない

でも、辛いけれども、忘れられない大事な過去でもあるのだ

そのせいで彼が、これまでずっと右腕が動かなくなるという現象に見舞われていたことも知っている

きっと、彼は怯えているのだ

その右手で、誰かの手を掴んでいる事に。繋いでしまったが故に、離れてしまう事を恐れているのだ

だから、後は彼が勇気を出すだけなのだ

『――――掴んで』

でも、私は確信している。彼がもう一度私の手を握ってくれる事を

――――だからさ、なんていうか・・・道の先を見つめていたいんだよ。俺。この先に待ってる事が、きっと自分を、ここから引き上げてくれるって――――

今がその時だと私は、あの一室での会話を思い出す

私が、君を、引き上げてあげる

もし、君が私の手を掴んだら、私は絶対に離さない。離したくないから

私は静かに仮面を外した

だって私は――――君の事が――――

『ありがとう』

一方、一条とソーレが彩輝の心の中で戦っている中、現実では桜彩輝の体と吸鬼が戦っていた

戦っているというより、一方的に桜彩輝の体が吸鬼を襲っている訳だが、肝心の吸鬼の少女はするりするりとその攻撃をかいくぐるだけで反撃に移ろうとしなかった

なので傍目に見れば彼が一方的に吸鬼の少女を追いつめているかのようにも見えた

とはいえその戦場に残っているのはこの二人、そして少し離れた場所からそれを見つめるシェリア、そして周囲に犇めく魔獣達だけであった

シェリアはこの戦いに介入するべきか否かを迷っていた

あの黒髪の少年は恐らく味方・・・なのだろう

だがしかしあの異形の触手、そして理性を失っているかのような言動にシェリアは少なからず判断を迷った

どう考えたところで、あの姿形はまともな人間には見えないのだ

「さて、どうしたものかしらね」

彼を助けるならば、早いほうが良いだろう

あの少女も、さすが吸血鬼というだけあって動きが人間のものではない事に油断は出来ない

対してあの彼を助けたところで、此方を味方と認識してくれるものか否か

吸血鬼に対しては殺さず生け捕りにしておきたいというのが本音ではあったが、それもまた難しい事は分かっている

同じ女という身で有りながら、吸血鬼と人間との差がどれほどの物かはさすがに想像つかない

が、少なくともあの少年を軽々と吹き飛ばした事からは恐らく、成人男性の平均以上の筋力はあるようだろうと予想する

それぐらいなら問題無いが、もしあの先ほどの男の吸血鬼に近いくらい強いというならばさすがにそれは軽視できなくなってくる

そもそも吸血鬼と実際に手合わせするのは今日が始めてであり、吸血鬼がどの程度の力を持っているのかが想像出来ないのもまた確か

不確定な賭に賭けるよりかは冷静に勝ち戦だけをするのは別に恥じる事では無いと考えているシェリアは故に物事を静かに見つめていた

少なからず怪我をしているとはいえ、この私の魔術を吹き飛ばしたのがあの少女なのは確定している

そしてその吸血鬼の少女は今桜彩輝と戦っている

その彼はというと完全にこれまでの彼とは別人のようになってしまい、それこそ手を貸すべきか、それとも止めるべきなのかの判断がつかなかった

一体何がどうして、彼がああなったのかは分からないが、どうも良くない雰囲気なのは感じ取れる

もし彼の暴走が止まらないようで、それが周囲の村へと向くようならば私もそれなりの対処をしなければならなくなってくる

それは出来れば避けたいのだけれども・・・ね

「ぐゥ・・・あアッ！」

と、突然彼の体に異変が起こった

彼女を追い回して攻撃していたのだが、突如その動きは止まる

吸鬼の方は迷うことなくそのまま一気に距離をとり、様子を見ることにしたようだ

「ウウルゥォ・・・オオオ・・・」

彼の方はというと、さらに大きく体を一度震わせ、そして右肩の触手が空中に四散した

だがその代わりに真っ黒な尾が生えてきたのである

「なんなのよ・・・まったく・・・」

完全にシェリアの理解の範疇外だった

対して吸鬼の方の少女はクスリと笑う

まるで、楽しんでいるかのようである

一度は不意打ちを食らって少年の触手に捕まった少女だったが、その拘束を逃れて以降はまるで相手にならないわというような軽やかな動きでその攻撃を避けてきていた

その余裕が出たのだろうか?それとも何かを待っているのだろうか?

そうで無ければこれ以上この場に留まる理由は無いはずなのでその方が納得がいく

「フフッ、やっと尾がでたわね。間違い無いわ。さて、貴方は一体何本目なのかしら?」

レミニアは嬉しそうにそう呟き、翼を大きく広げて再度飛行を開始した

それを追うかのように、尾を生やした少年は空を獣のように駆けていく

その姿はまるで四つ足の獣のようだ

途中、一匹のグリフォンが乱入してきた

「ガッ！！」

だがグリフォンは少年がそう叫ぶとビクリと動きを止め、次の瞬間そのグリフォンの巨体は突如意思を持ったかのようにして動いた尾によってイレータ湖へと叩き込まれた

ちょっと、少なくともグリフォンはそう簡単に倒せるような魔獣じゃないわよ

ま、私には余裕だけど

そう突っ込みを入れつつも静かに状況を見守る

彼の腕にあった触手が消え、尾が生えた以外に目立った変化は無いと、またもや彼の動きが止まった

今度は両手で顔を押さえて空中でうずくまる

その光景に、「あら」とレミニアも動きを止めた

「ぐぅる・・・・っ・・・あっ！あ・・・ああ・・・・ああああああああああ！！」

突如、彼が天に向かって大きく吠えた

心の底から、めいいっぱい叫んでいるのがシェリアにも解った

そして次の瞬間、さらに理解不能な事件が起こった

突如、彼の腕の中にあの黒髪の女性が現れたのだ

それは全くの突然な出来事だった

どこから現れたでもなく、気がついたらそこに居たのだ

「アーヤん？」

私は彼の顔を見上げていた

自分が一体今どういう状況なのかを瞬時に判断し、赤面した

お、お姫様だっこ！？

彼はきょとんとした顔で私を見て、そして微笑んだ

「ありがとう。一条さん」

「・・・・うん」

「何となく、気を失っていたときの記憶はあるんだ。だから・・・うん。ありがとう」

「どういたしまして」

私は、そっと彼の胸に顔を埋めた

あぁ、暖かい

心臓の、とくん、とくんという音が体全体に伝わってくる

嬉しい

その気持ちでいっぱいだった

「ソーレも、ありがとな」

彼の視線が腰の鞘に収まった紅い短刀に向けられる

そういえば、あの後彼女は一体どうなったんだろう？

魔獣を足止めする為に戦って、その後は？

「大丈夫。あいつはもう俺の中には居ない。その点は虹魚に感謝だな」

「え、どういう事？」

「これは仮説なんだけど、たぶん君が俺の最後の扉を開いてくれた事で、虹魚が浄化の力を流し込んでくれたんじゃないかな？そんな気がする」

「そう。じゃぁソーレちゃんも無事なの？」

「ちゃん？あぁ、そういやあいつ女だったんだな。全然気がつかなかったよ」

私はあれ？と思う

確かに彼女の自称は僕だったが、アーヤんは何度も彼女と会話をしていた記憶がある

その事を聞くと

「あぁ、確かに会話はするんだけど、なんていうのかな。耳で聞く訳じゃないからか意味だけが伝わるんだよね。字を頭の中で読んでる感じに近いかな。俺もてっきり僕っていうもんだから雄だとばかり・・・」

「じゃぁ謝らないとね」

「だな。その前に・・・」

アーヤんは目の前に向き直った

表情がしっかりとした物に戻り、その視線は吸鬼の少女に向けられる

「おい、お前、何か知っているようだな」

「あら、何の事かしら？」

「とぼけるな。あの魔獣について何を知っている？」

「さぁて、知りたいなら力ずくで聞いてみれば？」

「力ずくがご所望か。なら、いいぜ。ってことで一条さん」

「ん？何かな？」

私はそこで『少し待っていてくれ』とか『腰の短剣を取ってくれ』とか言われるのかと思っていた。思っていた、だ

あっけなく幻想は壊れた

「ちょっと飛んできてください」

・・・・はい？

たっぷり言葉の意味を理解するのに5秒ほどかかった

あれぇー？私は一体今何をいわれたのかな？かな？

「オーバーアビリティ」

！？何でアーヤんがその言葉を知ってるの！？

彩輝の体が赤と緑の魔力に包まれる

魔力が体から漏れだし、魔力は神子の本質を形作る

すなわち、彩輝は龍の神子であるため、その本質、ドラゴンを魔力が形作りはじめた

赤の魔力は真っ赤な翼を、翠の魔力は透き通るような翼を作り出した

それは魔力の色であり、またその魔力が持つ性質を表していた

紅い炎の翼と、翠の風の翼を彩輝は大きく羽ばたかせた

そして先ほどの漆黒の尾とは違い、今度は透き通る深紅の尾が彩輝の下半身から生える

その姿はまるであの山脈で見たドラゴンのようだと、唯は思った

「言いませんでした?気を失っているときの事は何でか覚えてるって」

「あぁ、言ったね。って勝手に心読まないでよ!それって外の事とかじゃ無かったの!?」

「まぁ、人の心の中であれだけ叫べば・・・・ねぇ?」

あれ?私彼の心の中で変なこと言わなかった!?

私はうーとうなりながら台詞を振り返る

そしてボンと音をたてるかのようにして顔が真っ赤になった

恥ず!!恥ずっ!!

「にゃー、にゃー・・・・」

「ってことで、飛んできてください」

「え!?だから!なんで私が飛ぶの!?いやいやいや、振りかぶらないでって、まず意味がわからなぁっっぁあああああああ!?」

私は理解が結論へとたどり着くよりも早く、ものすごい勢いで天高く放り投げられた

内心、突然過ぎて意味が分からなかった
私はものすごい勢いで雲を突き抜けた
その光景を唖然と眺めるレミニアはついその姿を目で追ってしまった
突然現れた黒髪の女性が、同じく黒髪の少年に雲の上までとばされた
「！！」
叫びながら雲を突き抜けていった女性から、今度は少年の方に視線を戻した
戻さざるを得なかった
彼が小さく何かを呟いた途端、その姿は先ほどとは一変していた
まず、火の魔力が彼を取り巻き炎の翼を作り出している
そして風の魔力が彼を取り巻き風の翼を作り出している
二つの魔力がねじれ一本の尾を作り出すが、風の魔力自体はかなり透明に近い為にその紅色の尾が綺麗に私の視界に飛び込んだ
あんな量の魔力、一体どこから出したのだと私は考えるが、検討もつかない

湖や空気中のマナに動きは無かった

ならば一体どこから出てきたのだというのか

答えに行き着けば何のことは無い

考えられる事としては二つほどあった

一つは彼が魔石を持っているという事

もう一つは私たち吸鬼の用に体内に魔力を直接有しているということ

だが魔石で具現化出来るほどの魔力が宿るものと言ったらもはや持ちきれないほどの大きさになるのでそれは無い

ならば後者か

だが、どうみても彼は吸鬼には見えないし、同族である私が見間違うはずが無い

ならば彼は吸鬼にあらず、体内に魔力を有する人間という結論に私は到達する

なんなのだ彼は

あんなおぞましい程の魔力を有し、そんなものを具現化して身に纏う？

本当にあの少年が人間なのか目を疑うわね・・・

それに加えムラがあるものの水火雷土風氷の六天を持つあの少年
よく見ればあの黒髪の女性も六天を有しているようだ

「っ！？」

考えを巡らせる私はそれを中断せざるを得なかった
何時の間に接近されたのか、かなり近い距離まで詰められている
早すぎる！
咄嗟に私は能力を発動させ、先読みをしようとする
だがそれすら遅い
読んだ瞬間にはすでに彼の拳が私を捉えるだろう
その一瞬の判断により私は全力でバックステップして距離を取ることだけを考えた
少しでも距離を取り先読みをしないと、追いつけない早さであった
彼の拳が目の前で空をきる
その隙に僅かに距離をとった私は先読みした

目の前の彼の蹴りの軌道が脳裏に浮かぶ
すぐさま私はそれを避ける体勢を取った
その瞬間、首筋に音速を超えるかのような蹴りが通り過ぎる
あんなものを食らっては、さすがの吸鬼である肉体を持つ私でさえただでは済まないだろうと冷や汗を流す
だが、蹴りを外した少年の横向きになった体は今の私から見れば隙だらけだった
先ほどの早さを見てまだ走ったり飛んだりで逃げようと思う奴は居まい
ならば逃げ切るためには何をするべきか
目の前の少年を行動不能に、倒さないと行けない
今がそのチャンスであった
私は全力の一撃を彼の脇腹へと叩き込もうとした
火力としては今ひとつかも知れないが、少なくとも多少なりとも距離を取るだけ吹っ飛ぶ事を期待はしていたのだ
当たる！
ハイスピードの攻防だったにもかかわらず、そんな事を思う位にゆっくりとしたスピードで意識が働く

刹那、私の魔力を込めた全力の一撃が空をきる
理解した瞬間には、遅かった
「人はそれを、隙という」
しまった
それすら思わせてくれない程に、私の心臓が警鐘を鳴らす
そう突然後ろからそう呟かれるほどに、余裕だというのか？
何なのだあのスピードは
吸鬼の中でも、比べたことはないが、恐らくは一位二位を争うくらいのスピードを自慢とする私ですらこのざまか
こんなもの、勝てるはずが無い
まるで、神を相手にしているかのような・・・
彼は本当に、これが自分なのかと疑った
わき上がる力も、己を取り巻く魔力を感じるのも、全てが全て自分じゃないかのような気分である

翼と尾、それだけで俺はこれが龍を模している事を悟った

ソーレのお陰か、そえとも龍の神子であるせいか

それすらどうでも良くなるぐらいに、俺の体は勝手に動いた

相手の吸鬼の少女も驚いているようである

とりあえず、全力を使わず俺は腕を振るう

だが避けられてしまう

全力でないのに俺はそのスピードに驚いた

自分で殴りかかっておいて火力が分からないというのもまた問題だったが、全力で叩けばこの少女が滅されることぐらいは承知していた

それぐらいにも自分でこの体はおかしいと思えたのだ

彼女も全力で避けているようだが、此方としてはまだまだスピードは上げられる為余裕がある

そんな彼女も、先ほどの俺を軽々と吹っ飛ばす技量と力を持っているはずなのだ

それを考えるとやはりこの体は異常なほどに強化されているのだろう

もう一発蹴りを入れるとこれも彼女にかわされてしまう

だが彼女の方もやっとこのスピードについてこられているという感じであった

と、彼女の右拳に魔力が一瞬にして溜まる

そして俺に向かってその右拳で殴りかかってくる

俺はスッと回り込むようにして楽々と彼女の後ろを取った

取ったと思った瞬間、その隙は致命傷へと繋がる

今思えば龍とは確か早さを司る魔獣だったような気がする

「人はそれを、隙と呼ぶ」

だからか、こんなに早いのは。と勝手に解釈して俺は今後の展開を考える

割と思考回路もすっきりとしている

俺はその白い髪を上から押さえつけ、そのまま高速で彼女を水中へと自分諸共叩き込んだ

俺は彼女を水中に置き去りにして一気に飛翔する

そして呆気にとられていたシェリアの腕を掴み、再飛翔

そして叫びながら落下してきた彼女を掴んでさらにさらに上へと飛

んだ

それは吸鬼を湖に叩き込んだ瞬間だった

――湖の遙か上空へと――

そんな虹魚の声が聞こえてきたのである

「よし、今だ！！」

それの姿を遠目で見たカイは叫んだ

今、魔獣達はあの桜彩輝の残した魔力の残骸に群がり始めている

周囲の町々の避難をすませ、そしてその瞬間を待っていた

味方が湖から離れ、そして魔獣が湖へと集まる瞬間を

彩輝本人に話をしていなかった為に一度湖へ行って伝えてこようか

と考えていた所であった

だがその彼は残った人間を連れ、湖から距離を取ったのである

何にせよ、今がチャンスであろう

あの魔獣が再度湖の外へと群がる前にすべてを仕留めなければなら

ない

一体何がどうなるのかはカイにも検討がつかなかったが、まぁ賭けるしかあるまい

あの数の魔獣を相手にするのはさすがに体がいくつあっても足りないのだ

湖の上空に犇めく黒い影を見ながら俺は水のマナを吸い取り、そして氷の魔力を生成する

「冷たき空、冷たき地、繋げるは氷柱の花。コールディンランス！！」

魔法陣から生まれた巨大な氷の槍が魔獣目掛けて飛んでいく

それに気がついた魔力をむさぼる魔獣の一匹が、その一撃を受ける瞬間、氷が一気に形を変え、敵を氷の花の中へと閉じこめる

そしてその飛び散った氷の破片が魔獣へと触れると、連動するかのようにその花と氷が繋がる

一度に数体の魔獣が、翼を凍らされ、生まれた氷に突き刺され、悲鳴を上げる

その光景を、山の上から見下ろす者が居た
今こそその時だと彼は思った

「今だ！打ちやがれ！！」

「おりゃぁぁぁ！！」

ガチンと留め具を外し、大砲に火種をぶち込んで蓋をする
二人そろってダッシュで茂みに飛び込み耳を塞ぐ
次の瞬間、山と湖を振るわすほどの大音響と共に巨大な一つの玉が湖を目掛けて飛んでゆく
その一発をはなった大砲はというと、何十にも地面に固定した金具ごと後ろの方へと飛んでいき、木々をへし折って山を転がり落ちていった
一方、放たれたほうのそれは緩やかな弧を描きぴたりと湖の中心へとたどり着いた
その計算はリクが計算し、ゼンが確認何回も計算しなおした通りの軌道を描いた
その瞬間、この計算を一瞬でやってのけ、火薬の量を調整したリク

をゼンはやはりという顔で見つめた
やはりこいつは、天才だ、と

「今だ！」

「いけええ！」

「吹っ飛べぇ！」

「やっちまえ！」

「今です！」

「うおおおお！」

「やれえええ！！」

「いっけえええええええ！！」

そんな思いを乗せたいくつもの叫びが、湖の周囲であがった
そして爆ぜたそれは虹色の光を四方八方へとまき散らし、湖の中心にたまっていた魔獣達を残すことなく吹き飛ばした

そんな色とりどりの光が粒となり、ぱらぱらと湖へと落ちてくる

爆風で湖に巨大な波紋が浮き上がり、その波紋は虹の粒によって色
鮮やかに輝いていた

彩輝と一条は静かにそれを見下ろし、あの懐かしさを思い出していた

『事件翌日の少年と吸鬼』

「ん・・・ぅ」

あの事件の次の日、つまり今日になるのだが、目を覚ますと俺はベッドで寝ていた

またベッドの上かと思いつつ、体を起こそうとしたわけだがそれは途中で中断せざるを得なかった

何せ体中の筋肉が悲鳴を上げたのだ

全身にピシリと何かが走った・・・気がした

まるで筋肉にヒビでも入ったのかと言わんばかりの激痛が全身に回る

腕も、足も、腹筋も、背筋も、すべてがぴたりと動きを止め、激痛に襲われた俺は思いっきり叫んだ

とりあえず俺はもう一度ベッドに倒れこむ

付き添っていた一条さんの方は何ともなさそうにぐっすりと俺の右手を掴んで座ったまま眠っている

器用な人だなと思いつつも、心の何処かで彼女に感謝した

まだ、昨日のことが鮮明に脳裏に浮かぶ

・・・！！

そうだ、彼女は・・・夕日ちゃんは・・・一体・・・

「起きたか」

「・・・カイさん」

静かにドアを開けて入ってきたのは仮面を付けた男だった

衣服はズダズタに裂けており、黒くなった血がそこら中にシミとなって固まっている

「ふむ、まずは無事で何よりだ」

「ありがとうございます」

そう。まずそれを喜ばねばなるまい

こうして俺も、一条さんも、カイさんも、他にも沢山の人が怪我を

負っただろうが、死者が出なかったのが一番の幸いだ

正直幾度と無く面倒ごとに巻き込まれてきた俺も今回はさすがに介入しすぎた気がする

結局、吸鬼との溝は深まってしまった上に完全に敵対関係になってしまっただろう

「事後報告、聞くか？それとも後にしておこうか？」

「・・・いえ、どうせ体は動かなくて退屈ですから」

「そうか。まずはそうだな。お前が神子化した後の事からだな」

俺は上空からあの虹の大輪を見下ろしていた訳だが、そこまでの記憶しかない事に気がつく

つまりその後、俺は気を失っているという事になるのだろう

「お前が水中に叩き込んだ吸鬼は行方不明。空中に陣取っていた魔獣はあの虹の爆発によって全滅した。周囲の町や村を襲っていた魔獣の殆どは自警団や俺たちで駆除したが、それでも何頭かは山や草原に逃げ込んだようだ。恐らく周囲のギルドに討伐の依頼が回されるだろうな」

カイさんはそう言って眠っている一条さんの横に椅子を持ってきて

すわる

こうしてカイさんと話をしているが、一条さんは全く起きる気配がないようでぐーすかいびきをかいている

まぁ彼女もいろいろ頑張っていたし、どうも俺に付き添ってくれていたようだから俺がとやかく言える事ではない

今は静かにしておこうというのが両者の意思だった

「そしてお前は虹の火花が消えた後、気を失って落ちてきたそうだ」

「誰かに聞いたって口ぶりですね」

「まぁな。四天王のシェリアだ。ほら、お前が最後にこいつと一緒に空へ逃げただろう。そのときの白髪の女だ」

「あぁ、あの人シェリアさんっていうんですね」

カイはコクリと頷き一つため息をついた

「あいつはまぁ、人間なんだが飛べるらしくてな。まぁそれでお前とこいつを一緒に陸まで引っ張ってきたらしい」

「お礼を・・・言わないといけませんね」

「あー、それだがあの人はもうここにはいない」

「いない？」

「あぁ。何でもあいつにはあいつの仕事があるんだと。リクも一緒につれて何処かにいっちまったよ」

「そうですか・・・」

俺はハチマキをした少年のことを思い出す

一同挨拶をしておきたかったなと悔やむが、悔やんだところでどうしようもないので諦めた

「リクもお前の無事を心配してた。もし次会う機会があったら挨拶くらいはしてやれ」

「そりゃぁ、もちろん」

「さて、次は神子化の事だな。お前、その体が神子化のせいだってちゃんと気がついているか？」

「それ以外に心当たりはありませんよ」

「これで分かったと思うが、神子化は万能の力じゃない。本来人が持つべき力では無い事から使用することは出来る限り控えることだ。だからそうして使った後は完全に動けなくなる」

俺はそれを聞きながら、たしかになと思う

体中が軋んで動かない

そんな人外の力を人の肉体に宿したのだから当たり前といえば当たり前なのかもしれないが

「ちらっとだけ見てたがな、あんな早さで動けば誰だってそうなるさ。筋肉が切れてないだけまだマシだ」

今思えば確かにあんな早さで普通、人が動けるわけが無いのである

もしもっと筋力やらがあれば何とかなるのかもしれないが、今の俺の実力でそんな事を無理矢理してしまえばこうなってしまうのは分かり切っていた事なのだ

だがその行動に俺は後悔はしていない。気分も晴れやかだ

心の中での出来事を静かに思い出す

繋いだその手は――

俺は右手に繋がれた柔らかな肌の感触を確かに感じている

「でも、そういえば一条さんも――――」

俺はそこで彼女も神子化を使っていたことを思い出す
だが彼女はたいして辛そうな様子はなくぐっすりと眠っている
ということは恐らく俺のようになっていない理由があるのだろう

「あぁ、そうか」

すぐに俺は彼女が俺の心の中で神子化を使っていたことを思い出した
恐らく現実の肉体を酷使しなかったおかげで身体の疲労は無いのだろう

「カイさんも一応神子だったってことは、使った事があるんですか？」

「いや、無い。そもそも使おうと思うことすら無かったな。というよりあんな神子化なんて初めて見たぞ。話には聞いていたが俺の知っている神子化はあんな風になるとは聞いていない。せいぜい心身の強化程度で魔力を纏うなんて普通ありえんぞ」

「あ、やっぱりそうなんですか」

あの魔力はどう考えても自分の中にあった魔力だ。それは確実である
この世界の人達は俺達とは違ってマナを魔力に変えているのだから、

もしあの状態を維持しようとするにはかなりの魔力が必要になるだろう

多少なりとも魔法というものに触れてきたからか、何となくそれはとても大変だということが俺にでもわかっていた

「・・・なぁ」

「なんですか？」

「よく、そこまで出来るよな」

最初は何のことを言っているのかがよく分からなかった

だけど、よくよく考えてみたら解らなくもない質問だった

「お前達、この世界の人間じゃないだろう。なのにここまでする義理がどこにある？」

それもそうである

そういえば何でこんな面倒な事に毎回毎回巻き込まれているんだろうなって今更ながら思う

龍とか、火山とか、大会とか、兎に角なんでこんなに全力で大陸を駆け回っているのだろうか

本当なら、静かにアルデリアとかで帰る方法を探していた・・・んだろうけど

「そうですね。確かにこの世界の人間じゃないですよ。義理も無いです。あ、でもいろんな人に助けて貰ったっていうのは感謝してますよ。強いて言うなら希望が一つあるからですかね。それと人として他人事として見過ごせない・・・ってうのもあります」

俺だって人だ

悲しいと思うときもあれば嬉しいと思うことだってある。もちろん他人の辛さや苦しみに共感することだってある

だから、ソーレの時も、大会の時も、そして今日――いや昨日の事か。どれも、自分の為に動いていたっていう訳じゃないと思う

そうしたいから、そうしている。ただそれだけなんだと思う

「早く・・・帰りたいですよ。でも、一応ヒント的なものは見つけています。だから、とりあえずは宝玉探しをしているんですよね」

希望

宝玉を使えば帰れる、という直接的な答えにたどり着けなくても、もしかしたら新しい手がかりくらいは掴めるかも知れない

来ることができるなら帰ることだって出来るはずだ

その方法は誰も知らない。誰も知らない答えを求める旅――か

途方もなく長い道のりなんだろうな

俺は窓の外を眺めた

雲一つ無い青空がそこには広がっていた

まるで自分の部屋から外を眺めているような、もしかしたらあの空が元の世界と繋がっているかのような錯覚に俺は囚われた

「あー、腹減ったー」

自然と口から漏れた声で大事なことに気がついた

そういえば昨日から何も口にしていないぞ俺！

「機嫌、悪そうだね」

「・・・まぁね」

頬杖をついたレミニアがぶっきらぼうにそう言い返し、青い空を部屋の扉から眺める

その瞳に、いつものような真っ直ぐとした意思の強さが見つからずニールは細目の顔を傾げて腕を組む

「何がそんなにご不満なのかな？誰かが死んだわけでも無ければ計画が台無しって訳でも無いんだろう？」

「あら、計画なんて大層なものを貴方に話した覚えはないのだけれども」

足を組んでレミニアはニールの顔を見つめた

その表情はやはりいつもののものではなく、やや疲れが浮かんでいるようにも見える

「おっと、そういえばそうだったね。でも、君にとってマイナスな

展開って訳じゃないんだろう？それどころかゼロの命令で動いていた三人から予想外の収穫もあったんだろう？」

つまり、マナの結晶そして宝玉と聖天下十剣の事を言ってるのだろうこの男は

それは確かにレミニアにとっても予想外の嬉しい誤算だった

予想でいえば、ゼロも私と同じ目的で動いていたのだろう。違うのは理由だ

それは兎も角、特にマナの結晶と宝玉が手に入ったのはとても好都合だ

これで手元にあるのは元から彼らが持っていた黒玉と手に入れた水玉の二つ

もう少し集まってから、と思っていたのだが、その猶予も無いらしい

一刻も早く、あれを起こさねば

力が教えてくれる未来はそう遠くない

しかし、今はそれ以上に・・・悔しい

レミニアは爪をガリッとかじった

「・・・あの少年・・・」

強く印象に残っているあの黒髪の少年

最初の衝突の時は手加減してたのだろうかと思わせる程の変貌ぶりだった

あのときは考える暇も無かったが、あれが恐らく神子化というやつだろう

話には聞いていた神子化が、まさかあれ程にまで強力な者だとは思わなかった

油断してた、とは思わない

油断していようが、していまいが、もはやその程度でどうにかなるレベルだとは思えない程だ

もしもう一人いたあの黒髪の女も同じく神子なのだとしたら、考えるだに恐ろしい事だ

黒髪、この世界ではあり得ない髪の色であった彼らは一体何者だというのか

神子の力を持ち、人間で言えば十数年程度であのレベルに達するのは不可能に近い。というよりほぼ不可能だ

何十、何百年と生きてきた吸鬼ですら軽々とあしらわれる

そんな馬鹿な事があってたまるものか。そう思うレミニアだったが、

事実私は彼に負けた
人間の子供風情に・・・

「認めたくないものね」

だけど認めなければならない
もし次戦う機会があれば、確実に私は倒されるだろう
たとえ修練を積んだところで、あれに比べれば些細すぎる足掻き
それよりも、まずやらなければならない事がある
宝玉、そしてマナの結晶と少女の魂、そして核となるペンダント
これ程までに事が上手く運んでいるのだ。今は浮かれる時だと自分に言い聞かせる

「黒玉、そして水玉。二つしか無いけれど、時間が無いわ」

「ふぅん。宝玉を使って何をするんだい？」

「予定としては私は北へ向かうわ。どれだけついてくるかは後で考えるとして、とりあえず貴方にも来て貰うわよニール」

「それはもちろん。仰せのままに。だけど、何をする気なんだい？」

私はニールに今後の予定を話す

一応は彼は私の次の位という立場に居る以上、多少なりとも補佐はしてもらわなければ困るのである

「太古の魔獣を起こすのよ。現代の魔獣の元始祖ともいえる最初の魔獣を」

ニールは「ほぅ」と呟きながら椅子へと座る

「もう少し詳しく聞きたいね。うんうんとても興味深い話しじゃないか」

そのレミニアの目的に興味を持ったニールがニヤニヤと話の続きを所望した

レミニアはどこから話そうかと迷う

「どこから話せばいいのかしらね。とりあえず、神獣と宝玉の事から話そうかしら」

レミニアは再び外を眺めた

「始まりは一匹の魔獣から始まったの。その魔獣は突如北の地に現れたらしいわ。それも瀕死の状態でね」

「うん？それってえーっと、たしかシーグリシアの辺りに伝わってる物語じゃなかったっけ？」

「それよ。まぁ、知ってるなら話が早いけど、それがこの世界に初めて現れた魔獣であり、またこの世界のすべての魔獣の親とも言うべき存在ね。神獣の親とでもいう表現が正しいかしら」

「ほうほう」

「仮説だけど、その魔獣は別の世界から来たっていうのが私の出した答えね」

「別の世界・・・かぁ。興味深い。世界が他にもあると仮定するならば、その根拠は・・・あぁ、そうか、居たね。異世界から来たアグレシオン達か」

「そうよ。貴方もゼロと一緒に戦ったと聞いたけれども、そうえいば貴方、何でその姿を保てているの？」

レミニアは再びニールに向き直り、疑問をぶつけた

その容姿は青年と呼ぶべき姿をしているが、年齢としてはゼロと同じ世代の吸鬼のはずである

ならばゼロのようにその容姿は歳を取ったものとなるはずだがとレミニアは思った

「あぁ、ちょっといろいろと・・・ね。そこは僕も研究者だからね。ま、追求はしないでほしいねぇ。あ、もしかして君も若いままの姿でいたい？」

そうニールが聞き返すとレミニアは顎に手を添え、うつむいて考えるすこしして、

「・・・遠慮するわ。むしろ早く大きくなって欲しいわ。この体だと魅力が無いと思わないかしら？」

彼女はそう言って自らの体を見下ろして胸に手を触れる

特に大きくもない体の起伏に加え、高い所にある物を取るにはわざわざ部屋で翼を広げなければならず、万人に見下ろされる感がまた溜まらなく苛立たしい

確かに美人、とえば美人なのかも知れないが、やはりまだ子供という体格である

強いて言うなら将来有望、といった所か

それを聞かれたニールは笑いながら白い髪を掻いた

「あ、それを僕に聞く？やだなぁ、そんなこと無いよ。十分かわいいじゃない」

「・・・」

「あ、別に変な意味で取らないでよ？僕が幼女趣味とかそういうのじゃ無いからさ。あ、あれ？なんで身構えてるの？」

「・・・まぁ何でもいいわ。とりあえず、その提案は遠慮しておくわね」

「そう。女の子って若いままでいたいと思うものだとばかり思っていたよ」

「どう考えたって肉体的にまだ若すぎるわよ。どんな絶望の事態よそれ。さて、脱線しすぎたわね。どこまで話していたかしら？」

「えーっと、たしかさっき言ってたのが最初の魔獣ってところ？」

「なんで疑問系よ。そういえばそんな所だったわね。その魔獣を蘇らせるのが私の今の目的。世界で最初の魔獣、すべての魔獣の始まりであり王である存在」

そう。その強さこそが私が求めている物

戦力になって貰わなければ困るのだ

「異世界の話を盛り込んだのは、異世界のことと関係しているのかい？」

細目でレミニアを見つめ、その視線の強さに私はため息をついて「そうよ」と答えた

あまりこの男は好きになれそうもないと視線を伏せた

やはりこのすべてを見透かしてしまいそうな男には、警戒感が抜けきれない

さすが、現最年長の吸鬼なだけはある

こんな口調の軽やかな老人がいるもんですかと思いつつ、なるほどどうしてこうも威圧感を放てるものかと

なるほどなるほどと頷くニールを尻目に私は話しを続ける

「それと、その魔獣は今は封じられている。それを解く為には必要な物が二つあるわ」

「へぇ。それは？」

「宝玉。そして魔獣の心臓部分に当たる、核」

私はそう言って机に置かれた二つの宝玉、そして翠鋼石のペンダン

トに視線を移した

漆黒の宝玉と水面の宝玉、そして鮮やかな緑の石をはめこんだペンダント

「なるほど。少し繋がったね。だから君は宝玉を集めていた、と」

「さて、ここで一つクイズといきましょうか」

私はにやっと笑った

「うん？クイズ？いいよー何でも来い！」

「宝玉、そして神獣、そして始まりの魔獣。これらは一体どういう関係で繋がっていると思うかしら？」

その答えを聞き、ニールは「ほぅ」と呟いた

「なるほど。興味深い」

そしてこの日より、吸鬼達は本格的に吸鬼の統率者の目的に向かって動き始めた

それを知る者は誰もいない

『事件翌日の少年と吸鬼』（後書き）

これまでにも割と次の章の伏線が散らばっていたりいなかったり。
一応次で百話。出来ればきりよく終わりたいな。

「やぁ、彩輝君。元気そうで何よりだよ」

カイさんが食事の食器を持って部屋から出て行ってしばらくすると、ドアをノックすることなく千尋ちゃんが入ってきた

いや、千尋と呼んでいいものかどうか、急に戸惑った俺は口を止めてしまう

綺麗な黒髪はいつものポニーテールではなく、解いて広がっていた

今はかわいいという表現が正しいのだろうが、大きくなれば美人と呼ばれるんだろうなと思った

「どうした？」

首をかしげながら彼女はどさっと俺の横たわると同じベッドに座った

「いや、なんて呼べば良いのかな・・・って」

俺の記憶が正しければ、彼女は湊千尋という存在ではないらしい

この肉体は俺と同じ、元の世界からやってきた少女、湊夕日のもの

らしいのだが人格の方はまた別人ということらしい
まったく、その辺の事も説明して貰わないとな

「なんだ、いつものように呼べばいいではないか」

「いや、だって――」

君にも名前があるだろう。そう続けようとして、遮られた

「何年たったか。もう、親から貰った本当の名は忘れたよ。うん。だからいいんだ。今の私はただの千尋だ。湊、では無いが、千尋だ。だからいつものように呼べ」

「あぁ、うん。で、そのちーちゃんは・・・ちゃんつけるのって可笑しいか？」

湖での短い対話や話の流れ的に推察するに、どうも彼女は俺より年上のようだ。それもかなり

別の時代、と彼女が言っていたのを思い出す

なら彼女にちゃんをつけるのはどうなのだろうかという疑問が出てきたのである

「あぁ、そのままでかまわぬよ。確かに精神的には私はお主より年上ということになるのだろうが、一応これでも妹だった事があるのでな。特に違和感は感じぬ。むしろ心地よいくらいだ」

そう彼女は微笑んで俺を見てくる

よくよくじっとその笑顔を見ると、どうしてこう、彼女には不相応で、でも違和感のない笑顔なのだろう

やはり本人で無いからなのだろうか、そう見えてしまったのだ

「それにしても、まる一日寝ておったな。ずいぶんと疲れておったと見える」

「あー、まぁ、体が痛くて動かせないんですもん。おかげで男にあーんってされました。死にたくなった」

先ほどカイさんが俺に昼食を食べさせてくれたのだが、出来ればそれは女の人にやってもらいたかったというかなんというか

「はっはっは！お主も男の子じゃの！私が先に来ておれば良かったかの？」

そう笑いながら笑顔を俺に向けてくる彼女を見ていて恥ずかしくなった俺は目を背けた

「べ、別にいいじゃないですかっ。ま、まぁ、その方が嬉しかったですけどね」

「ふむ、では後でこの者に助言しておくとしようかの」

そう言って彼女は一条さんの黒い髪を一撫でした

黒い髪が艶やかに彼女の白い手のひらから落ちる

「な、なんでそこで一条さんがでてくるんですか！？」

「なぁに、ただの気まぐれだよ。時にこの一条唯もよく寝ておるの。やはり心象世界で神子化したせいかの」

そういえば、これだけ騒いでも起きない一条さんになんで俺は違和感を抱かなかったのか

しっかりと握られた手のぬくもりの先には、瞳を閉じた一条さんの顔がある

静かな寝息を立てているが、今回は前のような酷い寝相で暴れて貰っては困る

何せ逃げられないのだ

ま、それをする気配が無い程に疲れているのかもしれない
今はとりあえず静かにしておくのが一番だろう

「・・・そろそろ一体なんで貴方が夕日ちゃんの体の中に居たのか、教えてくれませんかね？」

「おぉ、そうだったそうだった。ま、それも含めていろいろと説明しておかなければならないな」

やっと本題に入れるようだ

「まずは、私がこの体に居る理由を話そう。私は元の肉体の死後、縁あってこれまで精霊のような存在として虹魚に使役していた。ある日湊夕日や君が無へと放り出されたとき、そのまま無に留まれば存在そのものが無となって消えていただろう。そうならないようにそれぞれ手短にいた精霊が君たちを各自の出入り口である精霊台へと送った」

ということは俺を助けてくれたのは以前であった水の精霊ということになるのだろう

これまではそんなこと知らなかったが、今度あったらお礼を言っておこう。何せ命の恩人だ

「しかし精霊以外の存在があっさりと精霊台を通れる訳ではない。まぁ詳しいことは分からないから省くが、簡単に言えば精霊台に張られた魔力の壁は精霊以外の物を弾いてしまうからしい。神獣が張ったその魔力の壁を越える方法はたった一つ、その魔力を自らの物とすること」

「？つまり、どういう事なんだ？」

「つまり、君の体の中には不死龍の血流れているということだ」

そういえば、前にもそんなことを誰かに言われたことがあるようなないような・・・

「とはいえ君たちが自由自在にあの精霊台をくぐれるかというとそういう訳でもない。基本、入る者は拒まぬが出ることは許されないのだ」

「つまり、俺が龍の血が混ざって、あの精霊台を通れるようにはなったけどそれははこの世界に入るときだけって意味であってますか？」

「うむ。精霊だけは特別だがな。あぁ、勘違いしてもらっては困るが、あの精霊台が特別な訳ではなくて精霊が特別という意味だ。そもそも呼び出しさえされれば精霊台でなくても出ることができるからな」

なるほど

つまり、精霊台は精霊の意思で出入りできる場所であるが、そこは精霊だけが通れるという仕組みではなく、精霊の力で通れるようになっているだけであるということなのだろう

「さて、少し話がそれてしまったな」

「いえいえ、帰るためのヒントになるかも知れませんから。それで、理由の続きを」

「あぁ。私は身近にいた湊夕日をつれて精霊台を通ろうとした。だが、それをすれば彼女に負担になると思った」

「負担？」

「彼女はまだ幼い。だが、それに見合わぬ膨大な魔力を体内に秘めていた。意識せずとも、それは彼女の負担になっていた。それに精神的にも弱いと感じたものでな」

確かに、親と離ればなれで小学一年生が全く見知らぬ土地で生活するには多少負担が大きいだろう

だが、彼女が夕日ちゃんの体に入る理由はそれだけなのだろうか？

「それだけですか？」

「・・・そうだな。強いて挙げるなら私が不安だったというのもある。彼女はまだ幼い。幼すぎ、自らの意思で動くことが出来ないと私は判断した」

「あぁ、それはあったかもしれないな。ただでさえ何も分からないんだ。誰を信じるか、それもまた自己責任だし・・・」

「私は彼女の精神を一度安全だと思った場所に隔離し、そして彼女になりきって精霊台を通った」

「それを、俺たちに伝えなかった理由は？」

間髪入れずに俺はそこでどうしても聞きたいことを聞いた

それはつまり、何故その事を話してくれなかったかということだ

もし話してくれていれば何かが変わっていたかもしれないのに

「単純明快。もし私が正体を伝えていたら、君も一条も、本当の千尋ちゃんの事を探していただろう？それじゃ意味がないんだ。だれも知らないから安全で、今彼女をこの体に戻したところで意味は無いと思ったから話さなかった」

「・・・そうじゃないとは言い切れない。けど、だからって――」

「言い方を変えて別の視点で見てみようか。もし少女の魂がこの体に戻ったとき、君たちはそのお守りを出来るのかい？」

俺はそれ以上言い返せなかった

確かに、俺も一条さんも普通の人間とは違う力を手にしてしまっている

自分の身は自分で守れる最低限の力は持っている

いや、最低限なんてのはとうに超えているか

とはいえ、それでも普通に過ごす分には全く要らない力である

今、俺たちが旅に出ているからその力が必要になっているのであり、本来何が起こるか分からない旅に小学生の女の子を連れ回せる余裕なんてないのだ

それだけ俺は自分の力を過信していて、守れると思いこんでいて・・・

「ま、いじめるのはこれくらいにして」

「おい」

「それよりも深刻なのが吸鬼に三つの大切なものを奪われた事だ」

千尋ちゃんはまじめな顔で俺を見つめてきた

雰囲気に飲まれた俺も自然と表情が硬くなり、彼女を見返す

「まずは水玉。そして生流水。そして湊夕日の魂」

「！！」

忘れていた訳じゃないけど、やっぱり改めて思い出してみるとその事実は俺に重くのしかかってくる

「私としたことが、まさかこんな事態になるとは思っていなかった。あそこを隠し場所にした私にも責任はある。それについては本当にすまないと思っている」

「そ、それよりもっ！目的とかは分からない・・・んですよね」

「あぁ。さすがに私も吸鬼では無いからな。何を考えているのか・・・あんな魂だけを奪っていってやる事なんて想像つかん」

「そう、ですか・・・」

千尋はため息を一つついて顔を伏せる

目は活力を失っているようにも見え、だらりと垂れる黒髪にその表情は隠れている

彼女もまた、夕日ちゃんの魂が奪われたことにショックのようなものやその責任を感じているのだろう

別に、彼女を責めようという気は起きなかった
それほどまでに、これまで見てきた彼女とは思えないほどの落ち込みようだったのだ

「とりあえず、彼女の魂を取り戻す為にはまず吸鬼を追わなければならい。が、彼らがどこにいるのか私は分からない」

「それなら、僕が教えようか？」

「「！！」」

突如、開いた窓から顔を覗かせてきた存在に俺と千尋ちゃんは驚いた
ぽかんと口を開けたまま固まる千尋ちゃん
予想外過ぎる登場に俺は最初に何を言えば良いのか分からなかった

一角天馬

純白の毛に覆われ、また同じく純白の鬣が光を弾き、純白の翼が陽光を遮り影を生み出す
神獣の一角がそこにいた

「この展開は予想内であり、また予想外だった。面白い結果だ。僕

でも完全な予知が出来ないとはね。運命とは難しいものだよ全く」

「どういうことだ！？」

俺は半分ほど怒りを込めた声で言い返した

あまり強く喋ると腹が痛いので途中から声のトーンを低くした

あまりにも登場するのが遅すぎだろうという気持ちがまず一番にきた

少なからず、仲間に近い意識を持っていたのに

俺は裏切りを感じていた

何故来なかったのだと

「いやなに、君たちがイレギュラーだったってだけさ。たぶん。となると、恐らく今度の事も恐らくは完全には読めないかも・・・だね」

「何を訳の分からないことを」

「訳が分からなくていいんだよ。だって関係ないからね」

「な・・・」

なんだこいつ

一体何を考えているんだ？

俺たちがこの湖を訪れる前とは何か様子が違う気がする

「さて、今回の件に関してはご苦労様と言っておくよ。一応彼女も僕の古い友人だからね。助けてくれたことには感謝するよ」

一角天馬はそう蹄をならして礼を言う

「それと、聞きたいのは吸鬼の居場所だったね。残念だけどそれは分からない。けど、向かう先なら知っているよ」

つまり、そこでなら夕日ちゃんの魂を奪った奴とまた出会えるかもしれないという可能性があるということだ

どうして知っているのかなんて今の俺にはどうでも良かった

「本当は教えるべきじゃ無いんだろうけど、この件に関しては僕たち神獣の存在そのものがかかってるからね。一応一番平等な立場にいるべきはずの僕がこんな事しちゃいけないんだけど、でも出来れば止めて欲しいっていうのが僕個人としての意見だからね」

「一体、あいつらどこで何をしようとしてるんだ？」

「ふむ。簡単に言えば太古の魔獣の復活。君たちに以前話しただろう？あれを復活させるつもりなのさ。それにあの少女の魂を使うらしい」

！

「運命の流れは今、そこに向かっている。シーグリシアの森に――」

「あの・・・シェリアさん？一体どこに向かってるんっすか？」

リク・ヒノトとシェリア・ノートラックは今、小さな森を進んでいた

シェリアが前を歩き、その後ろをリクがついていく形である

とはいえ、ついてこいと命令されてリクはシェリアについてきた訳だが、その理由や目的をまだ聞いていない

一体自分はどこに連れて行かれるのだと先ほどから何度も聞いているというのに彼女は答える気が無いらしい

あくびをしながら昨日の戦いでボロボロになったパラソルをくるくると回す彼女を見ているとあまりにも油断しすぎではないかと思うほどだ

割と近くに村があったはずだが、それでも森には魔獣が沢山いるはずである

故に樵でも森の奥には入らないし、入ることがあるならば多少なりとも人数を集める事が当たり前である

リクも頻繁に森に出入りしていたからこそ、その危険さは分かっているつもりだ

だからこそシェリアの行動にも不安がぬぐえない

何の説明もなしに、四天王とはいえ一人でやる事じゃないっすよ・・・

「そろそろいいかしら」

すると、突然森の真ん中で立ち止まるシェリア

木以外に何もない、そんな場所だった

「あら？」

シェリアは意外そうな顔をして周囲を見渡す

その様子にリクは嫌な予感がした

リクには分かった。この痛いほど鋭い視線が自分たちに向けられている事に

ズズゥンと足音をたててそれは近づく

バキリと鈍い音を立てて巨木が倒れた

「ヴェルガルムかしら・・・」

「え、Ｓランク魔獣じゃ無いですか！？」

ぽつりと呟いたシェリアの言葉にリクは冗談じゃないと声を張り上げた

記憶が正しければウェルガルムは森に住む雷を操る魔獣だったはずだ

本来は森や山奥の静かな場所に住んでいると聞く

だが実際にはその縄張りに入るものを何キロも先から感じ取ると言われ、そのせいで周囲が静かになっているという説もあるくらいだ

その凶暴性からもいまだ研究があまり進まない生物のひとつである

Sランク＝化け物という式が成り立つのはなにも自分だけの考えじゃないはずだ

グリフォンやワイバーンなんかと比べるのもあれだが、こんな高ランクのモンスターとの遭遇率機会なんてほぼ無いに等しい

故に今はその不運を悔やんだ

「まだ病み上がっても無いのに、きついわね」

ため息をついて包帯を巻いた足をさすったシェリアだったが、焦る様子は微塵もない

そんな姿を見て、頼りになるのかならないのか分からなくなるリクであった

本来ヴェルガルムは確認された固体から縄張りの位置を天平評議会へと報告し、この周囲は危険区域として扱われていてもおかしくはない

が、リクはそんな話をこれまで聞いた覚えがない

ならばこれがもしかして人と初遭遇の固体かもしれない
まず真っ先にする行動は逃げる行動だ

一番やっては行けない事は人の肉を食わせること。つまり自分が食われる事だ

もし人肉が美味しいと思われたりなんてしたら周囲の村々へと人食いに現れるなんてこともあり得るのだ

人が群れをつくって過ごしているとはいえ、力無き者だからこそ群れをつくって力や知恵を共有する

個々が弱くても、もし対策さえ取れれば共存だって出来ないことは無いはずであるとリクは考えている

以前、森の開拓を進めていた村がウェルガルムの縄張りまで開拓してしまったとき、怒り狂ったウェルガルムによって周囲にあった大小４の村が壊滅したという話しも残っているくらいだ

かなり凶暴な性格だと予想できる

と、どんどんと地揺れが大きくなってきた

恐らく四つ足の大型獣であろう足音に、さらにウェルガルムの可能性が高まった

すると右側の奥の雑木が倒れるのが見えた

大きな四肢を持った影がぱちりぱちりと電気を纏って現れる

「き、来たっすー！？」

逃げようと振り返って走り出そうとするリクだったが、襟首をシェリアに掴まれる

「な、何するんっすかー！？早く逃げないとっ！！」

「これぐらいなら大丈夫よ。今日の夕飯にしましょう」

「！？」

腕まくりをしたシェリアの白い腕が露わになる

何で戦う気満々なんだこの人は！？

正気じゃないとリクは頭を抱えた

なぜリクはこの人についてきてしまったのかもう一度考えてみるが、やはりよく分からない

Sランクの凶暴な魔獣と戦うと分かっていたらまずついてこなかった。うん

先の戦いも凄かったが、今回の方がより恐怖を感じる

単体で町をいくつも滅ぼすことが出来る魔獣をどうやったら夕食にしようという発想が出てくるのか理解が出来ない

第一そんな大きな魔獣を二人で食べるとか余って余ってもったいないどころか・・・

「あれ、ところでウェルガルムって食べられるんですか？」

「さぁ？毒は無いと思うけど？」

再度頭を抱えてリクはしゃがみこんだ

駄目だこの人

以前から思っていたけど、やっぱり理解出来ない！！

いやまぁ、あれだけ強そうな体で電気を操っているから毒で身を守ったり獲物を捕ったり必要は無いわけだし、たぶん毒は無いんだろうけどさ

それでもなんで夕食にしようと思うわけ！？

あれ？今自分二回も同じ事を言ったような・・・

すると目の前の木がバキリと折れた

森に新たな獣道がつくられていくかのようだ

倒れた木がまるで道のように倒れ、ウェルガルムによって踏みつけられたそれらはもはや原型を留めていない

現れた巨大な魔獣が二人を見下ろす

鋭い眼光に黒と白の毛の隙間から電気が漏れている

「ぎゃ、ぎゃあぁっっすー！？」

「出たわね夕食！」

二人の目の前に現れたのはＳランク＋の魔獣、ウェルガルムに間違いは無かった

そして

「よぉ！」

「ぎゃっぁぁぁ！！」

何故か叫ぶリクを尻目にシェリアは面倒くさそうにため息をついた

何故かＳランクの凶悪モンスターの上から人が飛び降りてきた

その姿を見て落胆のため息をつく

ジャリッと音を立てて着地したの男はニッと笑ってあごひげをさすった

服装は赤を基盤にしており、髪の色も紅いためか全体的に赤い印象を受ける

年齢は２０代後半か３０代前半か、そのへんだと思われる

腰に二本の刀を差しており、飛び降りる際にフワリと舞い上がったマントが再び彼の服装を隠してしまい、纏うマントの下から覗くブーツだけが覗いている状態だ

「相変わらず湿気た面してんなシェリー！」

「死ねば良いのに・・・」

バンバンとなれなれしくシェリアの背中を叩いて男は後ろにいたリクに視線を向けた

「お？お前さんが旧神子のリクさんかい？」

その声に我を失っていたリクはハッと我に返る

あれ？おかしいな。今魔獣の上から人が降りてこなかったか？

ゴシゴシと目をこするとリクの目の前にはやっぱり真っ赤な男が立っていた

「あ、えっと、すいません。貴方は？」

「あー、俺はシェルヴァウツ・アルファナレンツだ。好きに読んでくれて構わないぜ」

・・・・え！？

実際に見たことはないが、その名前はリクも耳にしたことがある

その双刀は炎を纏い、振るわれたが最後すべてが灰燼と化すほどの剣技だとか

打ち立てられた武勇伝は数知れず

北が誇る剣士にして四天王最大の戦力、北の双刀、別名赤の剣士。

シェルヴァウツ・アルファナレンツ

その人物が今リクの目の前に立ってリクを見下ろしていた

しかし何故そんな人物が今こんな所にいるのだろうか？

「あ、えっと、初めまして。リク・ヒノトです」

「おう。さて、これで残るはホーカーとハートウィッチだけだな」

シェルヴァウツはそう言ってドサリと地面に座る
それに併せて一緒に現れたウェルガルムもドサリと鎮座した

「ホーカーは来ないよ。お仕事が忙しいみたいでね」

リクは咄嗟に頭上を見上げた
まだ若干幼さの残る若い女性の声だった
シェリアとシェルヴァウツもリクと同じように頭上を見上げた

「！？」

咄嗟にリクは視線を反らした
非常に言いづらい事ではあるが――――スカートの中が丸見えだった
リクのその反応に一瞬遅れてその原因に気がついた彼女はあらららと
笑うだけで照れる様子も恥ずかしがる様子もなく

「おっと、これは失礼」

そう言って宙に浮いていた少女はフワリと一回転して三人の間に着地した

「相変わらず恥じらいがねぇなぁハートウィッチよぉ！」

「どういたしまして」

「褒めて無いわよ」

何故かお礼を言ったハートウィッチにシェリアがぼそりと突っ込みを入れた

大きなつばつきの黒帽子をかぶった少女はあははははーと笑いながら杖をゴンゴンと自分の頭にぶつけている。見るからに痛そうな音が響く

「それで、ホーカーが来ないってどういう事？」

シェリアが聞く

何かしらの目的を持ってこの場に四天王が集まったようにリクは感じたがこの場に一人そろっていない人物がいた

唯一四天王の中で一般公開がされていない人物であり、リクもその人物を知ってはいなかった

ただやはり同僚とでも言うべき他の四天王とは面会があるらしい

「あぁ、仕事が忙しいらしくて抜け出せないらしいわ。あ、でも管轄内の旧神子達にはちゃんと収集を呼びかけたらしいってさ。・・・ところでシェル？旧神子達は？」

「んぁ？あぁ、それならほれ、そこに・・・」

シェルヴァウツが何故か鎮座するウェルガルムの方を指さした

ハートウィッチがおそるおそる近づいていく

その隙にシェリアがシェルヴァウツに聞く

「ところでなんで貴方ウェルガルムなんかと一緒に現れた訳？」

「おう。途中で良さそうな乗り物を見つけてな。ちょいとわがままだから手名付けたらちょっと懐かれすぎてな」

「・・・さぞかし目立った事でしょうね」

「おー、よく分かったな。途中の村で補給してるときにはもう凄い騒ぎだったぞ」

「想像したくないわね」

シェリアは腕を組んでシェルヴァウツに背を向ける
そりゃまぁ、その辺の村に突然Sランク魔獣が現れなんてしたら誰だって驚くし騒ぎにもなるだろう
そのうちその村の周辺に調査団が派遣されるのでは無いだろうかとリクは思う
ところで、一体これは何の集まりなのだろうか？
旧神子とかなんとか単語が聞こえた気がするが・・・
「うぁ、ちょっとシェル！？」
「いや、なんだ。その、これの方が移動に便利だったんでな・・・その点については反省している。そのうち目が覚めると思う」
リクもおそるおそる此方を見ている魔獣に近づいた
突然立ち上がって食べられないか不安だったが、自分よりも少し幼いであろう少女が1メートルほどまで接近しているのを見てリクも勇気を持って近づいた
と、視界に飛び込んできたのは数人の男女だった。それもウェルガルムの体にロープで縛り付けられていた
つまり、彼が言うにはウェルガルムでの移動の際に振り落とされな

いように縛り付けたらしいのだが、なんで横向きに縛り付けられているのだろうか？

恐らく気絶しているのだろうが、こんな状態でウェルガルムが走ったりしたのだろうか？

あぁ、きっとものすごい恐怖だっただろうに・・・

「そういうハートウィッチの連れてきた神子はどこにいるんだよ？」

「んー？そろそろ来ると思うけど？」

そう言ってハートウィッチは空に向けて杖を振り上げた

『――――ぁ――――ぁ――ぁぁぁあああああああああ！？』

次第に大きくなる悲鳴にリクは何故か嫌な予感がした

幾つか声が混ざっているようで、何人かが叫びながら近づいてくるようである

『ぎゃあああああああ！！？』

飛んできた黒点がいくつも林の切れ目から覗き見え、それらはすべ

て斜めに林に突っ込んだ

「生きてるわよね？」

ぴたりと止んだ悲鳴にシェリアは腕を組んだまま冷や汗を流しハートウィッチに聞いた

一体何がどうすれば人がこんな風に飛んでくるというのか

いや、飛ぶというより正確には飛ばされてきたという表現が正しいのか

「大丈夫よ。地面が近づいたら吸収符を使えって言ってあるから」

「・・・無責任ね」

「元神子だよ？」

「どういう理屈よ」

本当である

迎えに来たのがシェリアさんで本当に良かったとこのときリクは心の底から思ったのであった

ところで本当に、一体これは何の集まりなのだろうか？

虹色の波紋は止み、次の風は西から北へと吹き始める

運命の流れは少年を大陸の北へと誘う

そしてその流れとは別の流れに乗って動く者達もいた

とある者達はその世界を目指し

とある者達は戦を誘い
とある者達は平和を願う
そして次の物語の中心となるそれは今はただ静かに過去を想い蘇りの時を待つ
語られない物語もまた歯車の一つである
今は離れていても、いずれ歯車は互いに噛み合い回り始める
そして次の物語の歯車が回り始める
物語の波紋はまだまだ揺れるよ
さぁさ行ってみようかお次の話
ほらほら、風は北へと吹いてるよ欠片達

第3章　虹の波紋　これにて閉幕

『そして北へと風は吹く』（後書き）

謝ってばかりの後書き

第三章虹の波紋。これにて終了です。いかがでしたかね？誤字脱字だらけじゃー！って感じでいつのまにやら三章計１００話まで来てしまったｏｒｚと後悔しつついつ見直そうかと考えつつもそんな気が起きない海乃はもう駄目ですね。小説家として終わってますｏｒｚはいすいません。今度こそささっと終わらせて四章行きたかったのにー！と思いながら書いてました。えぇ。未来しか見てません。だから駄文なのだとｏｒｚ

大学も無事合格できて、ゆっくり見直しして執筆して、なんて考えてた私が馬鹿でした。そんな暇無かったですよー♪工業高校故に卒業制作が・・・卒業制作がぁぁぁぁ・・・。そんなどーでもいい後書きじゃなくてちゃんと小説の方の後書き書けってね。はいすいませんすいません。アホで誤字にも気がつかなくてすませんすいません。

本来は無かったはずの三章でした。が、その割には結構楽しめて書けた気がします。気がするだけです。三章は四章への土台として書いた訳なんですが土台というより伏線置き場じゃねーかという突っ込みは無しです。うん。やめて。突っ込まないで。えー、キリよく１００話で三章が終わった訳なんですが、もしかしたら気がついている人もいるかと思いますが、三章から出たある三人組＋グリフォンの事が最後書かれていないじゃないかと、あぁ、突っ込まないで・・・。えー、本来なら書くべきなんでしょうけどね。その事については今後ちょっと考えている事もあるのでちょっと保留です。たぶん。永久放置にならないといいなぁ、と思いながらの放置です。

今後の予定としてはちょっと迷っています。四章進むか、間章入れるかで少々苦悩しております。

物語は進めたいけど、出来れば間章で本編外の事も書きたいなと。あぁ番外編というよりは本編の補足という意味での間章です。とりあえず、四章『古今の異邦者』あるいは間章『題未定』をしばしの間お待ちください。あぁ・・・こんなんで最後までいけるのか俺？

そしてこんな未熟自己満足的な作品と長い後書きまで読んでくださった読者様に感謝感激雨霰。烈風のアヤキは皆様の力によって作者の気力が保たれています。これからもよろしくお願いします～

『北方の現状』（前書き）

間章～鳥と狼～

『北方の現状』

大陸の北方にロルワートという国があった

精霊台を保持する国の一つであり、近年隣国のガルクレスが攻めてくるかもしれないとささやかれている国でもある

北には海が、西にはガルクレス南と東を北方小国群が取り囲む国で雪多き地である

「むぅ・・・どうにかならんのか」

「なりませんね。この勢いのままだと、いずれ食われるのは時間の問題でしょう。かといって長年独裁政治を続けてきた我がロルワートの評価は隣国からもあまり良くは無いですしね」

そろそろ雪が降り積もりそうだという肌寒い時期。軍人であるルーティはつまり、現国王であるオーゼフ・ドロルに対しそう厳しく言い放った

しかめた面で大きな机に広げられた地図を見下ろしてオーゼフはため息をついた

かといってこの状況が好転するわけも無く、ただただ現状を嘆くし

かできない状況なのがこのロルワートなのであった

今は週に一度の軍事会議をしており、その広間には大きな机を取り囲むように武官文官がオーゼフと同じように地図を眺めていた

が、彼らからも出てくるのは助言ではなくため息ばかりであった

もはやどうしようもないというのが彼らの本音だったのだ

そんな中でただ一人、ルーティと呼ばれる若い部隊長の一人だけがオーゼフに対してそう強気に話している

オーゼフに対してそんな事を言えば、数年前までは問答無用で処刑されていたであろう

それでもルーティは強く言う。まるで枷が外れた獣のような勢いだと誰もが思った

「もはや我が国にあるものは何もありませんぞ陛下」

あるのはもはや蹂躙されるだけのやせた土地と生きる気力の無くなった民衆だけだ

そんな現状に今更気づくとは

ルーティもため息をつきたいくらいだったが、そのため息を飲み込んでさらに言う

これまでの行いが祟ったと思え

「とるべき、いや、とれる行動はもう殆どありませぬ。一つはこの地を死地と決めて剣をとるか、他国に亡命するか。それともガルクレスと手を取るか」

まぁこんな所だろうとこの王様が考えつく行動としてあげられそうなものをとりあえずあげてみた

根っからの騎士としてつとめてきたルーティとしては前者しかあり得ないと考えていた

こんな国、さっさと消えてしまえばいいというのがルーティの本音だった

国のあり方として間違っていると思いつつも、どうすることも出来なかった彼は騎士となって力をつけ、内側からこの独裁政治を続ける国を変えようと努力してきた

周りの太った貴族にはいつものように陰口をたたかれていたが、それでも自らの信念を貫いて努力してきた

自分が辛い人生をこの国で過ごしてきたから、そんなのはもう終わりにしないといけないのだ

本当なら国を出て真っ当な騎士を目指したかった。この国のような飾りや悪者としての騎士ではなく

だが国から出ることすら出来なかった彼は、外がどれほど自分の理想の国なのかとこの地に生まれたことを呪った

生んでくれた母や父には感謝していたが、それだけが悔しかった

だからそんな母国を変えようと、少しだけならこの手を悪に染める事を決意した

だがこの状況はなんだ

「亡命などせぬぞ。我が逃げるなどあり得ぬ。そんな王に民がついてくるはずが無かろう」

どうやら自分だけ助かろうという魂胆では無いらしい

だが、それだけだ

結局は自分の思い描いた王様の影を追っているだけだ

きれい事だけではつとまるとは思っていない

ただ・・・

「剣をとって戦う、というのも無いな。我とてバカでは無い。どちらが強いかというのは誰にでも分かる」

勝てない事は分かっている
子供でも分かることだ

「やはり手を組むのが最善の策か」

「最善？最悪の一手の間違いでしょう？こんな国の手をガルクレスが取るとお思いですか？良いところ捨て駒としていいように扱われて捨てられますぞ」

「む、ならばどうするというのだ騎士ルーティよ。それではもはや我が国は滅亡あるのみではないか」

今頃気がついたならもう貴方は王をやめるべきだ
口には出していないがそんな事を思っているのはこの場に集まっている中でルーティだけでは無いと信じたい

「そうですね・・・」

ルーティはもうこれ以上は隠す意味は無いかと判断した
ルーティの思想は決してこの国の異端者では無い
国の思想に反しているだけで多くの人々はルーティと同じ気持ちで

あるのだ

こんな国にはついて行けないと思っている多くの民の意思を背負っている

「実は勝手ながら、先日私の方から南のアルデリアに書状を送らせて頂きました」

その言葉に周囲がざわめく

一騎士としての地位はそれほど高くはない

単に部隊を纏めるというだけの地位であり、貴族の将軍達には権力は遠く及ばない

その権力の中には他国への書状も含まれている

つまりこの国の騎士として他国への書状を書くと言うことがあり得ないのである

「貴様、誰の命を受けて勝手にそのようなことをした?」

ざわめきの中、一つ大きな声がルーティに問いかけられる

ルーティの所属する部隊の将軍だった

話によってはその将軍にもとばっちりを受ける可能性がある

「これは私が個人でしたことにあります故に」

「ふん。その方が勝手にしたことならば罰を受けねばなるまいな」

あぁ、そっちの意味でか

保身のほうにまでは考えが及んでいなかったようで、あの将軍としては自分にただ罰を与えたいだけなのだろう

こんな状況ではストレス解消の方法などたかが知れている

よくよく見てみればその表情には僅かな笑みが浮かんでいた

本当に消えてしまえこんな国

「して、その接点のない遠国になんと送った?」

オーゼフが頬杖をして聞いてきた

さぁ、ここからが正念場だ

「私としては精霊台保持国会議に参加して頂くのがベストの結果だったのですが・・・。不参加の場合にのみこの書状を送るように騎

士を脅してお伝えした」

こう言っておけば彼の罪も少しは軽くなるだろう

そうなってくれなければ、この国の行く末はガルクレスが攻めずとも滅びていただろうな

「我がロルワートに攻め入ることを許可する、と」

それを伝えると貴族達が一斉に顔を赤く青く変えて

「な、なんだと!?」

「何を血迷ったかルーティ!?」

「あぁ、なんと言うことだ・・・」

周囲からは怒りやあきらめの声が飛んできた

もちろん予想できていた

こんな時に敵を増やしてどうするのだと

「我が国にはもはやこの周囲に味方はおりませぬ。ならばガルクレスと共に道を歩むのか？否、そんな事はあり得ない。領地を奪われた西フォンドールの民がどうなったかをお忘れか？」

ガルクレスの南にはフォンドールという国があった

しかしガルクレスの領土侵略にあい、国の西側がガルクレスへと奪われたのだ

それ以来はフォンドールのあった西側を西フォンドールと呼び、また現在のフォンドールを東フォンドールと呼ぶようになってしまった

そして西フォンドールの民は隣国のフェーミリアスを攻める際に捨て駒同然に扱われたのはまだ記憶に新しい

結果としてガルクレスの予想を大きく上回り、戦線を維持し続けたフェーミリアスへの侵攻を見事に止めて撃退に成功している

だが今その矛先は此方に向けられており、決して他人事では無い

「では何故アルデリアにこの地を!?」

貴族の一人が叫び立った

「我等がとれる行動はさほど無いでしょう。ですがそれは我等がと

れる行動というだけであります。結果としては他国の力を借ります。しかし近隣諸国では駄目です。我等への敵対心・・・いえ、敵対心は無くとも味方をする意味が無いという国が強すぎます。まず周りには敵しかいないことをご理解してください」

そのうえせっかく持ちかけられた精霊台保持国の会議まで蹴って、どれだけ自ら道を削れば気が済むのだと手紙を書いた当時は本気で思ったものだ

「まず、現在我々は完全に周りから見下されている立場にあります。そしてアルデリアの国が非常に我々にとって好都合、いえ、民にとって好ましい理想の政治を行っている事です。アルデリアはそもそも南方の一国に過ぎませんが、綺麗な水が育んだのかその人柄は非常に温厚な人たちが集まっています」

どこからか、フン、あの生ぬるい奴らがかとヤジが飛んだ

「恐らく大陸一二を荒らそう程の人にとって望ましい国でしょう。最も私の自己判断ですがね。まぁ最悪アルデリアでなくとも良いのですが・・・。ですので彼らにわざとこのロルワートを占領させます。この事態を抜けるにはまず王座を明け渡すことから始めねばなりませぬ」

「それでは我等は完全なる植民地では無いか！？」

「ガルクレスとの戦争を始めればそうなるのはどちらにせよ時間の

問題かと。私も一騎士として自らの勝利を願いますが、そんな期待に賭けるのはただの自殺願望者です。最早この戦において知恵だけではどうしようもありません。ただ助けを求めるアルデリアにも難点が一つ。軍事面において多少他国に比べて弱い傾向にあります。ですがアルデリアは多くの友好国や同盟国を持っています。もしかするとそれらの国々と混成軍、という可能性もありますが、アルデリアがリーダーをすれば同じ事です。書状を送ったのはあくまでアルデリアですから彼らにその権利があります」

「しかし、アルデリアがわざわざ遠いこの地を攻める理由があるか？」

「あります。恐らく、確実に何らかの形でこの地を侵略してくると思います。もはやこの戦争は大陸中に影響を及ぼすでしょう。北方小国群には良質の魔石が多数埋まっているそうですし、利権を求めている国も少なくないので攻められることに関しては不思議ではないかと」

つまり今のフォンドールの場所は北方小国群とガルクレスとの間であり、両者を遮る砦の一つとなっている状態である

北方小国群には大陸でも僅かな魔石の産地として有名だ

その地には今以上に大量の天然の魔石が埋まっていると言われている

魔石は生活にはもちろん、戦争においてもかなり重要な資源である

その資源の奪い合いで北方小国群は幾度となく争いを繰り返してきたのだ

もしこの魔石の鉱山がガルクレスに押さえられてしまえば、それはもはや鬼に金棒状態でどの国も手がつけられなくなってしまうだろう

それを止めるためには何としてでもガルクレスと北方小国群を衝突させては行けない

それだけは止めなければ、大陸中が再び先の大戦のようになってしまうだろう

そんな事もわかっていないから、ここに居る貴族や国王は未だ大きな焦りの様子を見せないのだ

どうでもいいプライドにしがみついているから、人として本当に大切なものにすら気がつけないのだ

事は我が国とガルクレスという二国間だけの問題では無いのだ

そういった状況から見ても、アルデリアにもこの国を攻める理由を作らせる事がまず第一だった

ここだけは守り抜かなければ、もっと多くのものが失われてしまいそうで

確かに自国を明け渡す行為は売国同然だ

だが、いずれ取り返す事を考えた上で選んだ領土に組み込みにくい遠方の地だ

本当の愛国民ならば、今は耐えてくれとルーティが選んだ苦渋の決

断だ

この地が他国に踏み荒らされるだけでは無く、下手をすれば此処がまさに戦争と平和の最後の砦なのだ

アルデリアにしても維持するにも本国から遠いため、ルーティの見立てでは恐らく悪くて植民地あたりが妥当だろうかと予想していた

少なくとも現時点ではだ

未来とは何が起こるか誰にも予想できないものであると悟った時にはすでに遅いのだ

「ふむ、しかし我らは古き時代よりこの地に住まい続けてきたロルワート人でもある。例えそれがいかなる理由とあろうとも、現体制を崩すわけには行かぬ。その国を愛し、守ろうとするというしっかりとした意思を持つ者こそ民衆が頼るべき王の姿であるとは思わぬかね？」

「王よ！！」

一体誰に賛同を求めているというのだ

これだけ言ってまだ理解できていないというのか！？

貴方が愛しているのはその地位だけだと何故気がつかない！！

「異議なし」

そんな声がぽつりと上がった

ルーティは振り返る

自らの主である貴族将軍だった

「この騎士隊長レオン、陛下のお言葉に心打たれました」

その隣、騎士団の貴族隊長が賛同した

「私メーデリングもどこまでも陛下にお慕いするお覚悟ですわ」

国庫取り締まり長官の貴族が手を挙げる

「我ら魔法隊も陛下に従いましょう」

魔法隊の隊長の貴族が礼をする

私も、我らも、我々も

上げられる手

ルーティの考えに賛同する人間はどこにもいなかった

十分後、ルーティはやりきれない思いでこの会議の終了と同時にこの国の終わりを悟った

自室に戻り、売国の罪で処刑を上司の貴族から伝えられた

予想はしていたが、もう取り返しがつかない

終わりだ

この国も、なにもかもが終わりだ

一体自分は何のために・・・何のために剣を振るい続けてきたのだ？

守りたいものがあったからだ

それは家族であり、国民であり、自分の心だった

それこそがルーティのすべてであった

それを根こそぎ否定された気分だった。いや、事実根こそぎすべてを否定されたのだ

ならば自分には何が残り、何が出来るというのだ

会議ではもしアルデリアが攻めて来るというならば話し合うことなく、侵略者を武力において撃退するという案でまとまった

ガルクレスに対しては同盟を結ぶ事を最優先に話しを進めるらしい
明日の朝には自分を牢屋に入れるべく使者が我が家を訪れるだろう
家族との別れをすませるためという口実で一日の猶予ができた
いっそのこと家族で国外へ逃亡するかという事も考えた
だがそれでは彼らも在任として扱われ、もし捕まれば殺されてしまうだろう
そもそも国民が逃げ出さないように警備が厳重すぎる為そんなことは自分一人ではどうにもならない

「すべて・・・俺のせいだ・・・」

ボソリと声に出してみると、自分が惨めに思えた
思い上がりも良いところだ
理想を追い求め、だが現実はどうだ?
理想の逆へ逆へと俺を引きずり込んでいく
何故上手くいかない。何故誰も分かってくれない
すべてすべて、自分のせいなのだ

そう、すべて――――――

「そんなことは無いさ」

!?

ルーティは顔を上げて辺りを見回した

自室には誰もいない。だが確かにその声は近くから聞こえてきた

と、突如ドアが開いた

そこから現れた人物にルーティは驚いた

黒髪、ニット帽、ジーンズ、指先のない穴あきの手袋、縁なしの眼鏡

「カ・・・カンバラ殿!?」

そう。ルーティの目の前に現れたのはロルワートから逃げ出したはずの神原仙(かんばらせん)だったのだ

彼がいまだに見つからなかったのも精霊台保持国会議に参加しなかった、いや出来なかった理由の一つだろう

「久しぶりだなルーティ」

「い・・・一体どうしてここへ!?それよりも、何故戻ってきたんだ!?」

ルーティが記憶する限り、このカンバラ・センという男はとんでもない男だと記憶している

まず精霊台から氷を身に纏って現れた

そしてオーゼフ・ドロルとの会談が決裂したかと思うと突如精霊殿から逃げだし、そのまま行方不明となった男なのだ

注目すべきは精霊台から現れた、というのもそうであるがどうやって精霊殿から逃げ出し、王都からも脱出したかという事である

彼は精霊殿から姿を消した日の夜、王都を取り囲む城壁の出入り口の一つを突破して郊外へと逃亡したとして指名手配中なのである

「ま、それはどうでも良いんですよ。ウーリィン、入って良いよ」

「うん」

と、これまたルーティは驚かされた

室内に入ってきたのはこれまた珍しい種族、獣人族の少女だったのだ

人の姿をしているが、獣の耳、獣の足をもち、腰からはフサフサの

尾が垂れている

その他は人と同じような外見だ

獣人族は大陸の北方のみに見られるごく少数の種族であり、またロルワートでは主に奴隷などとして扱われる種族だ

故に昔から獣人族と人族の争いが絶えることは無かったが、今ではあまりに獣人族が減りすぎたせいで反抗するための力も集まらないほどに立場が弱い種族である

そんな獣人族の少女が何故カンバラと一緒にいるのだろうか

「さて、聞きたいことはいろいろあると思うけど、今は少し手伝って欲しい事があるんだ。この国を、守りたいだろう？」

「・・・どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。こっちも都合上これ以上ガルトニールが侵略してもらうのはまずいのでね」

眼鏡の奥の瞳がまっすぐにルーティの瞳を貫いた

何を考えている？

この青年は何かを企てている。そうルーティには見えた

『北方の現状2』

「俺としては物騒なここからは離れたいところなんだけれどもね」

神原はそう言ってずれた眼鏡を指で押し上げると獣人の少女ウーリィンに扉を閉めるように指示し、視線をルーティから部屋の中央の机へと向ける

机の上には何もないが、神原はそこへ折りたたんだ地図を広げた

大陸の地図を広げて何をしだすのかとルーティは地図をのぞき込んでみると地図の至る所にマークや文字が刻まれていた

どうやらこの世界の文字では無いらしい

まぁ精霊台を超えてやってきたこのカンバラという男がこの世界の住人でないことはすでに明らかとなっているため彼の過ごしていた世界の文字なのだろう

このカンバラという男は自身の知識が悪用される事を嫌ってこの王都から行方を眩ましていたのである

ロルワートでは彼に対する意見は二つに分かれた

一つは彼の居た異世界の知識を得るために積極的に交流を深めるという友好派

もう一つは彼を過去に侵略してきたアグレシオンと同じと見て早々

に排除しようという敵対派だ

彼自身の発言で自ら望んで来たことではない事はすでにルーティも知っていたがそれが本当か嘘かという事で議論がなされた

その間に偶然友好を深めたルーティを良い人間と判断した神原は良くない空気を察知して早々に逃げる事をルーティへ伝えていた

ルーティ自身も上層部の人間にはろくな人間が居ない事を分かっていたので神原の言う事ももっともだと逃走を手伝ったのだ

結果として逃がした当日、彼を牢屋へと送り現状維持する事をオーゼフが正式に発表した

だが彼逃げた事でその日のうちに国内に指名手配された神原は騎士団から追われる事となってしまった

彼が消えて数ヶ月、まさか獣人まで連れて戻ってくるとは思っていなかったルーティは一体ここへ何をしに戻ってきたのだと彼に問うが、「今説明する」と言われ黙って待つことにした

「これにはここ五ヶ月内で戦争や内乱の起こった場所が記してある」

×マークが至る所につけられているが、その主な場所はガルクレス帝国の国境近辺であった

ここまで調べるのに土地勘の無い彼がどれほど苦労したかなど想像もつかない程に正確に記されている事にルーティは驚いた

もちろん協力者はいるのだろう。それがこの獣人であるかどうかは今のルーティにはどうでもいいことであったので聞かない事にした

それよりも聞くべき事がある

ロルワートの上層部の人間でもここまで詳しくは把握していないだろうという小さな衝突場所などを北方を中心に広範囲に、しかも細やかに記されている地図を見てルーティは再度考える

今これを自分に見せて彼は何をしようというのか

「まぁ数カ所抜けているかも知れないが説明するには今はこれで十分だろう」

「カンバラ殿は一体何を説明するというのだ?」

「いいか?今ガルクレスが北方小国群を攻めようとしている事ぐらいは分かっているだろう?」

「あぁ。それぐらいはな」

それぐらいはさすがに気がついている

恐らくこの国の中で最も危機感を持っている自身がルーティにはある

周りはまだ攻めてくることは無いと楽観視している雰囲気でいるが、もし事前に先手を打ったとしてもロルワートが勝てるという見込み

は薄いとルーティは見ている

それを実感した時にはその程度の実力しか無いくせに、これまでよくぞ侵略されなかったものだと信じられない気持ちも何処かにあるのだが

「マール、シトーレ、フェーミリアス、フォンドール、イリーユ、エステルタ、アストーン、クロロト、そしてロルワート。ガルクレス帝国に隣接するこの9国の中で最もガルクレス帝国と小競り合いが多いのはこれを見れば何処か分かるだろう？」

「これは・・・」

ガルクレス帝国と大きな戦をしているのはフォンドール、そしてフォンドールとガルクレス帝国に隣接するイリーユだ

イリーユは本来フォンドールの南に位置している国なのだが現在西と東に分断されて西領地がガルクレス帝国の領地となったためにイリーユとも隣接する形となっている

「イリーユは確かにフォンドールが突破されれば全面的にガルクレスと隣接する国になってしまう。ガルクレス帝国と戦えば勝てないと分かっているからな、出来るだけフォンドールに加勢して押しとどめたいのだろう」

「ここ最近で一番大きな戦だな、タルナー平原の戦い・・・」

ガルクレス、フェーミリアス、フォンドール、イリーユ、エステルタに跨る大陸最大の平原、タルナー平原の中で唯一国土がすべて平原の中にあるフォンドールで行われた事からあの戦争はそう呼ばれている

しかし――

「確かに、この戦争の効果は大きかった。結果として中原の国々に圧力をかけている。いつでも攻められるぞ、とな。最も今はまだガルトニールは手出しできない状況ではあるのだがね」

「だがしかし・・・これはどういう事だ」

大きく×印がつけられたフォンドールの西領地、そしてガルクレスを撃退したというフェーミリアス聖王国とガルクレスとの間に大きな×印

それとは全く別のエステルタ聖王国との国境に無数の小さな×印が地図には描かれていた

「これほどまでにエステルタとガルクレスが戦争をしていたという報告は受けていないぞ？」

「あぁ、そうだ。聞いた話だが、これは内乱のようなものだと思えば良い。早めにガルクレスに寝返って略奪などの被害を押さえようとする村もあればここがガルクレスとの戦の時のエステルタの砦と

なるという意思と誇りを持った村もある。そんな村々の争いもあればそこにつけ込む盗賊の輩も居てそこにエステルタの騎士が鎮圧に来ていたりもする。今現在一番混乱しているのはこの地域だな。地図を見れば分かると思うが、ここ最近ガルトニールと直接小競り合いを起こしているのは東ではなく南、つまり中原の国々だ」

「しかし、手は出せないと言っていたではないか？今ガルトニールが中原の国々とやりあう戦力があるとは思えないが？」

「そう、つまりこれはフェイクだと俺は見ている。中原の国々に圧力を掛けつつ、本当に狙っているのは油断しきっているこちら・・・とな」

なるほどとルーティは思った

だから上層部は今これほど楽観的に物事を見ていたのだ

事実ガルトニールが目を向けているのは南で東にあるロルワートへは向かってこないと思っているのだろう

一騎士であるルーティにはそこまで詳しい事を知る統べはない

将軍以外はほぼ全員が上の駒という風にしか見られていない。なぜ教えなければいけないのだという対応なのである

故にルーティは国外でこんな事が起こっているとは知らなかったのである

完全に情報統制がなされているこの国に入ってきた情報としてはガ

ルトニールがフォンドールを半分落としたとか、フェーミリアスがガルトニール軍を追い返したとか、それほどの大規模な事情しか耳に入ってこないのである

故にその大きな出来事だけでルーティは動こうとしていたが、本当ならばもっと多くの事を知り、他国に与える影響も考えたうえで行動しなければならなかったと反省しなければならない

「エステルタとしてはこの国境の乱れはまずいと見ている。つけいらせる隙を与えているようなものだからな。正規軍が事態の沈静化を図っているらしいが、どうもそう簡単にはいっていないらしい」

「何故だ？現在のガルクレスの動向は此方を向いているとはいえ、油断して国境警備兵を減らしているという訳でも無いのだろう？」

「確かに、情報ではかなりの兵士がこのエステルタ北方のガルクレスとの国境に集められていると聞いている。近年のガルクレスの行動の活発化に伴いこの国境の動乱。兵を出し惜しみする理由は特にない・・・が、何か妙だ」

何が妙なのかとルーティは少し考えるが、彼が首を横に振った

「いや、思い過ごしだろう。これほど内乱が起こっているのはエステルタへの信用が落ちているからだ。つまり、負けるかも知れないと思う者が居るからこの騒ぎが起きている」

「確かに。民衆が国を信じず、ならば誰が民衆を信じて剣を持たせ

ているというのだ。預けられた剣で主を斬るほどに愚かなのかエステルタの民は。敵が此方を味方と見るかどうかも分からずに剣を振るっているのか・・・」

「そうでも無いさ。それほどまでにガルクレスへの脅威は大きいのだろう。無理もない。すぐ隣のフォンドールが半分落とされてその末路を身近で見てきたんだ。それに反抗する者と怖じける者がいる事は仕方ない。まぁ目に見えない利益、この場合は平和だが・・・人によってその平和の道が分かれているのだろう」

「平和・・・自国かそれとも他国か、剣を持って対立か国にとらわれずその地を明け渡すのか・・・。どちらが良いのだろうな。使われるだけの騎士だから良く分からぬよ」

「簡単な話さ。人は力で物事を片づけようとする悪い癖がある。強い者が支配し、弱い者が支配される。どの世界もそんなものさ。大差なんてない・・・」

神原は静かに視線を落としため息をついた

ルーティは考えていた。一体カンバラは何をしにきたのだ?とこの話の果てに、何を聞かせてくれるのだろうか

「・・・一つ聞かせてくれカンバラ殿。私はただの騎士で上手く答えが見つけられない。強い、とは何なのだ?」

「それは・・・どういう事だ?」

「私は現状を打破しようと密書まで送ってこの国を変えようとした。それというのもこの国が腐敗していると感じたからだ」

「それには同意するよ。全くもって、この国は腐ってる。上層部の連中はそろいもそろって腐ってる。先ほどの演説、少しばかり立ち聞きさせてもらったよ」

どこから聞いていたのだと聞きたかったが、それを聞いたところで話を遮るだけだとルーティは話を続ける

「あぁ、だから私は変えようと思った。恥ずかしい話だが・・・な。しかし、どうやら無駄のようだ。あんな文書を送っておきながら結局は血が流れてしまう事になりそうだ」

「仕方ない。君は悪くないさ。方法がどうであれこの国の事を考えてそれを行動に移せるというのは凄い事だよ。それは王の仕事だからね。俺には想像もつかない。そんな権力も、無い」

「慰めは、いいんだ。ただ私は守りたかったのだ。昔はもう少しマシな国だったと思う。たぶん。これだけ国が腐ってしまったことに私自身が耐えきれなくなったというだけの話しだからね。単なる私の理想が招いた事態だ」

「・・・なら話を戻そう。俺は一つ提案があってここに戻ってきた」

「それは、本題だな。聞かせろ」

二人して一つの地図をのぞき込む

「これでもあんな彼女を持つと少しばかり頭を使うようになってしまってな。確かにガルクレスはこの北方小国群の砦であるロルワート近辺を侵略し、そのまま北方小国群を攻め落とすだろう」

「それはそうだろう。ここには豊富な資源がたくさんあるからな」

「あぁ。確かにそれもあるが、そうして資源を蓄えた後、ガルクレスはどうすると思う？」

ルーティは少し考え、そして

「このまま終わるとは思えないな。勢いというのは殺したくないものだからそのまま南下を始めるのではないか？」

「そう、ガルクレスにとって南下において一番悪い展開はのはフェーミリアス、イリーユ、エステルタという三つの大国がある事だ。それに一度ガルクレスはフェーミリアスを攻めて追い返されたばかりだ」

地図にはガルクレスの南に広がる三つの大国が記されている

三つの国はそれぞれガルクレスよりも領土で言えば半分ほどの土地であるが、それが三つも連なればその領土はとてつもなく広くなり

大陸を横に横断するかのように伸びる大きな砦となる

それを落とすにはさすがにガルクレスも苦戦しようとルーティは踏んでいる

もちろんどの国もロルワートがかなうわけもない強国で大陸を横断するかのように伸びるファルトの大脈と呼ばれる道がのびている国々だ

大陸の大動脈とも言えるような長く大きな道であり、それぞれの首都を通るそのファルトの大脈はまさに物流の要といっても良いほどの存在となっている

最近は北と南を繋ぐ第二の道路を建設する予定があるという噂もあるそんな場所がガルクレスの手に落ちるなど考えたくもない話だ

「ガルクレスが一番恐れているのはこの三国が手を組む事。それによって南下が出来なくなることだ。ではどうすればそれを拒めるか」

「・・・一つ一つ倒していくしか無いのでは？」

「頭を使え。視野を広く見ろ。南下されて困る者と得をする者は誰だ？南下するためには何が必要だ？知るという事は武器だ！ふむ、たとえばの話しだが・・・国を落とそうと考えるならば、俺はまず孤立をさせて補給路を断たせる。その方が周囲に余計な敵を増やさず正面から戦えるからな。とくに周りから嫌われている国ならデメリットも少なくなり、メリットが大きくなる可能性もある」

「な・・・！！」

ルーティは強いショックを受ける

そんな事があっていいのかと気がついてしまったのだ

まさにそれはこのロルワートの事では無いかと

「いろいろと調べてみて１００パーセントでは無いが、恐らく間違いない。この国に内通している者が居る」

「バカな！そんなことをして誰が得をするというんだ！！」

カンバラはこう言っているのだ。国を売って居る者がいると

「この場合敵の間諜がいるというよりかは裏切り者がいるという方が納得がいく。別にそれが誰だろうと今後の対応が変わるわけではないんだ。その詮索は意味がない」

「・・・そう・・・だな」

「気にするな。お前には関係の無い人間どもの事だ。国を堕落させ、金を受け取り、その先に何が待っているかが分かっていない者がいる。ただそれだけだ」

「く・・・信じがたいが、カンバラ殿がそういうのなら、居るのだ

ろうな」

彼の言うことは間違わない。いや、間違ったことを言わない。それがルーティが彼に抱く印象だ

彼がこの国に現れて以来、王族や貴族は彼が持つ知識に酔っていた

文明の進んだその世界の知識を得ることが出来れば、他国に比べて優位に立てると考えたのだろう

彼は客人として持てなされ、しかしその存在が隣国に漏れることが無いように秘匿した

しかし欲望深き人間は彼の言葉を聞くことなく、ただただその知識を聞き出そうとした

彼はしかし、ほとんど元居た世界の事を話すことは無かった

金を積み、女をちらつかせ、食べ物を見せつけた

程なくしてそのことに嫌気が差した彼はこの国から逃げ出したのだ

ただ逃げ出すまでの僅かな間で、ルーティとカンバラは知り合っていた

両者、何かに惹かれるようにして、出会った

同じ思いをこの国に抱いていた

そのおかげで彼は今こうしてルーティを訪ねてきている

「なぁ、カンバラ殿。何故こんな国に肩入れする？」

だがルーティには分からなかった

異境の地に単身放り出され、人としてではなくただの知識の塊として扱われた

そんな国に戻って、ガルクレスの地からこのロルワートを守ろうとする意味が分からなかったのだ

全くの他人、関係の無い土地や人を、何故彼は守ろうとするのかを

「・・・そうだな。元々は戻ってくる気も無かった。もしかしたら俺と同じように誰か迷い込んでいるかも知れないと探そうかとも思ってた。でもそれより先にやることが出てきた。何となく、今のこの国の現状とか見えてきて、俺に出来ることがあるならやるべきなのだろうと思うようになった」

「セン・・・」

小さくウーリィンと呼ばれていた獣人が呟いた

「確かに全くの他人だ。本来出会うはずではなかった。お前にも、

ウーリィンにも。でもこうして出会ったからには何か意味があると信じたい。それに、人が傷つくのは見たくない。そういう国に生まれ、そういう人に育てられた。そんな俺が、知ってしまった現状を無視するなんて出来ない」

「少し、いいかカンバラ殿？」

その会話の中で、一つ気になる事があった

確かにルーティは恐らくこの国の中で一番か二番目くらいに彼と親しい仲だと思っている。だからこうして訪ねてきてくれたのだとも思っている

しかしただ一つだけ触れてない話がある

それは彼がもともと居た世界の話だ

そもそもふれあうべきでなかったのならこれからも触れることがない方がいいと、ルーティは自らその話を遮ったのだ

つまりルーティは、カンバラがこの国に現れた理由を知らなかった。いや、理由というよりも、その時の状況を知らないのだ

神原がバスの事故に巻き込まれ、この国に来たこと。そのバスの事故に巻き込まれていたのが彼だけでは無いということを知らなかったのだ

つまり神原は他のバス同乗者がこの世界に紛れ込んでいる事を知らなかったのである

知る前に王都から逃亡していたのだから知らなくて当たり前なのだが、それを今知る

「な・・・に？」

ルーティは精霊台保持国会議の事を伝える

すると彼の冷静な目が珍しく感情に揺れる光景が見ることが出来た

「そうか、俺が居ない間にそんな話が来ていたのか。精霊台っていうのはあの台座だろう？他の国にもあるのか？」

「精霊台保持国は精霊のお膝元という意味で聖王国と呼ばれているんです」

そうウーリィンが答えた

確かにこの国には九つの聖王国が存在している

ロルワート聖王国
フェーミリアス聖王国
エルフィニア聖王国
エステルタ聖王国
フェリエス聖王国
アルデリア聖王国

リーナ聖王国
グレアント聖王国
ファンダーヌ聖王国

「・・・フェーミリアス聖王国・・・か」

「フェーミリアスがどうかしたのか？」

「ガルクレスの侵略を押しとどめた国はフェーミリアス以外にあるか？」

「・・・無いな。良くて相打ち、悪ければ完全に侵略。二つとなったフォンドールも、あれはあれでよく持ちこたえたものだ」

ガルクレスの土地はフォンドールの数倍はある。そんな国の進撃をよく国土を半分失った程度で持ちこたえたものだと思う

まぁこれ以上侵略されるのはまずいとイリーユ、それにフェーミリアスが途中から参戦してきたのだ

そこで戦火が広がる可能性も十分あったが、早々にガルクレスは矛先をおさめて退いて現在は膠着状態である

だがこれでフェーミリアス、フォンドール、イリーユとの対立が完全なものとなってしまった

元々攻められていたフェーミリアスはガルクレスに対して敵対していたが、イリーユもこの件で完全に敵対してしまった

ガルクレスにとっては攻めづらいだろう
共通の敵を持つということはそこに仲間意識が生まれるものだからだ

「この失敗を今度は生かしてくる。つまり、この国を確実に落とすために」

タルナー平原の戦いの最中、フォンドール、フェーミリアス、イリーユは中原防衛軍事同盟を組んでいる
今はまだ沈黙している中原の国々もこれに参加を表明するのも時間の問題だとルーティは見ている
ガルクレスがもし北方小国群を落とせば、確実に北と中原の国々が争う事となるだろう
それだけはなんとしてでも避けたい

「しかし、フェーミリアスがガルクレスと争ったのはこの国が腐敗した後だ。つまり国を腐敗させて落としやすくするという案はフェーミリアスが攻められるよりも前からあったという事か？」

「もし本当ならそうなのだろう。この国をどうしても落としたいという意思が伺えるな。前々から準備をして、やっと実が熟れたのだ。ガルクレスにしては収穫時に見えているだろうなこの国は」

「・・・舐められているな」

「あぁ。だから、もしこの国がガルクレスに勝つ、あるいは追い返す為にはその隙がどうしても必要だ。お前のとった行動は計算外だったが、良くも悪くも事態は進展した」

ルーティは静かに、それでもこの先の事を考えつつ神原に聞いた

「動く、か？」

「恐らく、動く」

神原の言葉通り、事態は突然のように動き出すのである

まるで待っていたと言わんばかりの勢いでそれは起こった

物語の歯車は一気に加速し始めた

『北方の現状2』（後書き）

作者自身そこまで国政とかに詳しくないのでまぁこんな感じの適当な設定ですけど、その辺は完全に初心者なんで勘弁してください・・・。

そろそろ国や地名が増え始めたので地図でも描こうかな・・・
一応手元には簡単な資料があるんですけどね、皆さん地図があった方がイメージとかしやすいかなと思ったり思わなかったり。

最近の悩みの種は笑いが掴めない。
何だろう。見ている人がにやけるような話が書けないのが悩み。コツとかあるんですかね？

『獣か人か』

この大地には人以外の生物も住んでいる

鳥も、獣も、魚も、植物も、微生物も、どれも人と同じ生きている存在である

神原仙が生まれ育った世界でもそうだった

しかし、これは予想外だ

「獣？人と呼んで良いのか？いやしかし・・・」

「っく！！驚けよお！！」

声が半分ほど裏返っている

言葉は喋れている。少なくとも意思の疎通は出来そうだ

柄にもなく俺は焦っているたがそう判断する事は出来たが未だに頭が混乱している

眼鏡も半分ずれているが、それを直す程の余裕が無い。というより

頭の中は想定外の展開で真っ白になっていた

「・・・・獣耳・・・だと・・・・」

そう、目の前の存在は確かに人型をしている

しかし人では無いのかも知れない

元の世界にはそう言うものが空想上あるというのは何となく知っていた

半分ほどオタクと化している彼女を持つ彼氏としては、出来る限り彼女の趣味に合わせるつもりでいたからそういう知識がかじった程度にはあった

というより最近はあまりに毒されすぎて少々自分でもおかしくなってきている事に気がついている

しかしなんだあの萌えやオタクというジャンルの中毒性は

煙草や飲酒を止められない人間というのはこういう気持ちを味わっているのかと思った。いや、まぁ正確には違うんだろうけども・・・

そりゃ確かに俺もこれまでは偏見がなかったとは言い切れないジャンルではあった。そこは認めよう

昔の俺は少々世間の目というものを気にしすぎていたのかもしれない

だが実は彼女がオタクだと知ったとき、そんなことはどうでもいいと思えたのだ

そんな些細な事で自分はオタクという存在を見下し、差別していたのかと思うと今では吐き気がする

だってそうだろう?彼女が、小田原早苗(おだわらさなえ)がアニメやゲームのオタクだったからといって、何故嫌いにならなければならないのだと思ったのだ

所詮は趣味でそれは誰にでも持ってるものなのだ

釣り、映画、読書、ボート、ゴルフ、それらが好きという事と何が違うのだと思ったのだ

いや、何も違わないのだ

ただ偶然彼女が萌えというものやゲームとかアニメが好きだったというだけで、それは彼女の人間性を決めるものでは決してないのだ

まぁ人にもよるかも知れないが、少なくとも彼女はまともである。・・・と信じたい

普通に大学生で、普通に勉強もできて、普通に友達もいて、普通に社会の常識を分かっていて、それで何故他人に迷惑をかけるわけでもない趣味を持っているだけで嫌われなければならないのだ

俺はオタクの人間を彼女にしたかったのではない

それを言える者は、人の本質というものを見ていない人間の言うこ

とだと俺は思う

その人の本質を趣味で決めている人間は、所詮自分の理想通りの人間を捜しているだけだ

理想の顔で、理想の性格で、自分の理想を守ってくれる人間を

好きになるという事はそう簡単な事ではないと俺は思っている

簡単であって簡単ではない事だし、よく俺がわかっていないジャンルでもある

俺なんかが語れる事では無いが、俺はそう考えている。考えの一つだと思ってくれればいい

良いところもあれば悪いところもあって、それが人間である

しかし彼女の趣味が悪いものかどうかと聞かれて、なぜそれが悪いものと言えるのだろうか

それならば、登山が趣味の人間が山にゴミを捨てることは悪くないとでもいうのか？

音楽が趣味の人間が音楽を聞きながら電車の優先席で寝たふりをするのは悪くないとでもいうのか？

否、そちらの方が、誰にも迷惑をかけていないオタクの人間よりも悪い人間であるはずだと俺は思う

俺も彼女も大学生で所詮は学生間の付き合いだと言う者もいるかも

知れないが、今を生きる俺たちにとってはそんな事どうでもいいのである

将来結婚するとか、同棲するだとか、そういうのはどうでもいいのだ

俺と彼女はただ今、一緒にいたいから一緒にいるだけだ。だから付き合っている。俺は彼女が好きで、彼女は俺が好きだから

だから今俺は彼女を愛し、彼女もまた俺を愛している

そうしてオタクである事を打ち明けられた俺は彼女の趣味のことを少しでも理解すべきだとオタクという道の世界へと足を踏み入れてしまった

彼女の趣味を俺は受け入れた。だって彼女が、小田原早苗が好きだから、彼女が見ている物を一緒に理解したかった

そこに後悔は無い。無いが・・・

結果、過去の俺から今の俺を見てみれば俺は過ちを犯し堕落したという事になるのだろう

あぁ、これは自分もなってしまえば確かに分からなくはない

確かに以前は理解不能だと思えていたものが突然変異を起こしたように俺の中では萌えという新しい感情へと変わっていった。不思議なものである

どうしてこれまでこの楽しさに気がつかなかったのだという程に俺の心は汚染されていった。完全に末期症状だ

一応好きになった相手の趣味ぐらい少しは理解してあげようと足を踏み入れたつもりが、どうやらその世界は底なし沼のように俺を引きずり込んでいった

そう。一言で堕落なのだ。落ちて堕ちて、もう這い上がれない

まぁ一応趣味の範囲は出ていない・・・はずだし、自分で自分が堕落したと思えている時点ではまだマシなのだろうと思う

彼女とも共通の話題が増え、今ではすっかり彼女のために、もとい自分の為にゲームの深夜販売に並ぶ始末

あぁ、話が少しそれてしまった

話を戻すと、俺はそれまでそう言った二次元という空想の世界の産物に対してどっぷりと飲み込まれてしまった訳だが、そこで見たものが今目の前にあるのである

もちろんその属性に関しては自分の萌の範疇外である。強いてあげるならば自分はボクっ娘が・・・っと、なんでも無い

まぁ彼女のハートはがっしりと掴めるであろうその衝撃の光景を目の前に、俺は我が目を疑ったのである

しかしこうして現にそれを目の前にすると、何を口にしていいか分からなくなってくる

こういうのをなんと言ったか?ネコミミ属性?いや違うな。ネコじゃないから獣か。獣耳属性?なんか聞いたことあるような無いよう

な・・・

つまり今目の前に、獣の耳をぴこぴこと動かしている人型の生き物が居るのである

眼鏡を外してゴシゴシと目を擦ってみるが、そこにはやはり獣の耳を動かす少女が居るという現実は変わらなかった

ついでに言うなら足は完全に獣のものだ

膝辺りから獣のようにびっしりと毛が生え始めており、足先までいくとちゃんと立派なかぎ爪まである獣の足だ

対して腕や顔の肌は完全に人と同じものである

強いて言うなら至る所に傷跡があり、元いた世界の同年代の少女とは比較にならないような切り傷だらけの腕だ

そして人には絶対無いフサフサの尻尾がピンと立っている

強いて言うなら逆立っているのだから警戒されているのかもしれない

目の前の少女は俺に対して威嚇しているのか、それとも警戒しているのか、それとも戸惑いか恐怖か、イメージ的に犬や猫と同じように解釈して良いのだろうか？

喜んだときなどは尻尾をぶんぶん振ったりするのだろうか？それはそれで見てみたい気もするがこの状況だと見れそうもないな

とりあえず俺は電源を切ってバッテリーを温存させている携帯電話

を開いて電源をつけると、彼女をパシャリと写真に撮って再び電源を切ってポケットに戻す

しかし以前開いた口がふさがらない

「て、てめぇ!!何とか言いやがれっ黒髪野郎!!」

「あ・・・あ・・・それは・・・生えているのか?」

「あ!?な、何いってんだてめー!?」

びくりと彼女は後ずさりする割にはとても威勢がいい

以前尻尾はピンと逆立っている

「あ・・・いや、これは・・・失敬。すまない、少々驚いて動揺してしまった。柄にもない。すまなかった」

眼鏡をくいっと中指で押し上げて謝罪する

「え、あ、あぁ?」

対する彼女はいまだ困惑気味の様子である

「俺は神原仙。訳あってこの森に迷い込んだただの人間だ。君は？」

「あ、私はウーリィン・ティリッシュ。見てのとおり獣人族だ・・・ってそうじゃねーっ！！」

「おお、ノリ突っ込み・・・って突っ込む所かここ？」

「驚けてめーっ！！」

「いや、意味が分からんのだが」

一蹴した

「っ！驚けってんだろー！！」

鋭く尖った犬歯をむき出しにしてグルグルシューッと喉を鳴らす

意味が分からないことだらけだった。いや、理解出来る人間がいたら凄いぞこれ

本気で意味が分からない

都市から逃げてきて目についた森に飛び込んだは良いものの、木の実でも無いかと彷徨っているうちに突然何かを叫びながら彼女が飛び出してきたのである

それも彼女が飛び出した瞬間、その飛び出した本人が木の根に躓き顔面を地面に強打しての登場である

一応驚いたと言えば驚いた。うん、驚いた。そして安心しろ。君の目的はすでに達成されているんだぞ

俺は大いに君の種族という存在に驚いている。主に耳とか尻尾とかで

「はぁ、とりあえず言葉が通じるんだ。何故俺がお前に驚かなければならないのか、それにその耳と、足と、あと尻尾か。それと獣人っていうのも少し詳しく聞きたいな」

ピンと尻尾をたてて此方を睨みつける彼女にそう言う

「く、くっそぉ・・・調子狂う・・・久々の人間だってのに・・・はぁぁ・・・」

なにやらとても落ち込んだ彼女はため息をついて肩をがっくりと落とした

どうやら俺は彼女の期待に添えなかったらしい

まぁそんなことは俺の知ったことでは無いのだけれどもね

とりあえずはいろいろと情報を聞き出さなければならない

なにせここは勝手知らない異世界である

「ウ、ウーリィン！？」

「な、何であんた生きてる人間連れてきてんだよ！！」

「何よっ！！誰も何も知らないくせにっ！！」

四方八方の同じ獣人という種族の同年代の女性から彼女は罵詈雑言を浴びせられていた、というのが今目の前で起こっている光景である

一通り俺は彼女から村へ寄る道中、獣人の暮らしというものを知った

普段は森の奥でひっそりと暮らしている種族で人のように１００名前後の群れをつくっているらしい

昔は今ほど森の奥に潜んで暮らす事も無かったのだが、今のご時世では獣人は奴隷としての扱いを受けているらしい

見つかればすぐさま町へと連れて行かれ奴隷商に売られてしまうのだという

確かに獣人一人一人の身体能力は武器を持たない人間を上回っている

しかし、ひとたび獣人の村が見つかってしまえばそこは数で押し切られてしまう

１００人ほどの集団で行動するとはいえ、全員が人と戦闘できるかと言えば出来るわけがない。半分も居れば多い方だ

そもそも獣人自体狩りをすることは出来るが人との戦闘を想定して訓練などをしている事はほとんど無い

そんな獣人達が周りを村人以上の人数の槍や剣を持って構えている戦闘慣れした人間にどうやって勝てというのか

反抗すれば人を１０や２０は殺せるかも知れないが、その程度で運命が変わるとは思えない程の実力差が今の人間と獣人との差がある

経験と数が獣人には足りなかったのである

自分と違うというだけでこうして迫害を受けている獣人の現状を知った神原は思いきって自分の事を打ち明けた

つまり異世界から来た人間であると

迫害がほとんど無いような国から来たこと。その証拠に獣人達の現状を知らなかった事や大陸には存在しない黒眼黒髪であること、同じように大陸には存在しない携帯電話という文明品やあり得ないような服の作りなどを証拠としてあげた

半信半疑ではあったが、もしそうならば俺の事を放っておけないというのもまた彼女の思うところである

獣人族は非常に温厚で他種族にも友好的な種族だと自負していたし誇りを持っていた

とりわけこのウーリィンという獣人の少女は以前人間に優しくしてもらった記憶があるため人一倍人間に友好的な獣人だと言えようが、時代と神原の種族が人間だというのがやはりまずかった

村へ寄ると俺と彼女は周囲の獣人の少女から様々な罵詈雑言を投げつけられ、やがて言葉は暴力へと変わった

神原とウーリィンに石が投げつけられた

「人間は帰れっ！！」

「そうだっ、帰れっ！！」

同じように神原にも石を投げつけてくる何人もの獣人の少女が居た

神原にはそんな石飛礫でさえ避けたり払う事が出来ない、ただの弱い人間である

「や、やめろよっお前らっ！！」

そんな俺の境遇――まぁ異世界から来たという事をこのウーリィンという少女があえて信じているとするならばだが――を知っている

からだろうか彼女はただ一人の味方という事になるのだろう

ウーリィンは同種族の彼女たちにそんなことをして欲しくはなかった

きっと暖かく迎え入れてくれると思っていた

そうでないと彼があまりにかわいそうであるし、また獣人族であるという誇りがあり彼を迎え入れてくれるという自信があったからこそこの村に彼を招いた

だが現実はそうでは無かった

人間という種族は今の獣人族には敵としか映っていなかったのだ

当たり前である。この人間が後に自分たちを奴隷として捕まえに来るかも知れないのだから

「そこまでだ」

石礫が止んだ

神原は右腕で顔を覆い隠すようにして地面に膝をついていた

服は汚れに汚れ、額からはツーと鮮やかな紅色が流れ落ちていた

「村長！」

どうやらその言葉からしてこの村の長が現れたらしい

嗄れた声からどうやら老人のようだと推測したが、そこで神原は完全に地面に倒れてしまう

腕で顔を庇ったおかげでどうやら眼鏡だけは壊れずに残っていたらしいが体中ボロボロである

獣人という事もあってだろう、とうてい少女が投げたとは思えない威力の石礫を体中に打ち付けられた神原の体は逃亡と彷徨いの疲れに耐えきれず倒れてしまった

そして彼はそのまま意識を失った

「う・・・っ、村長・・・」

ウーリィンも獣人族ということもあり最初は石礫を素手ではじき返していたが、一人でどうにかできる量では無かった

彼女の腕は痣と血でボロボロになっていた

「この青年を儂の家へと運び込むのだ。話はそこで聞こう」

「村長！」

そこで一人の獣人の少女が声を荒げた

「人間ですよっ！！」

「それもおぞましい・・・闇のような色をした髪と目っ！！」

「ウーリィンとてお主等と同じ獣人族の一人。彼女が何の考えもなく人間をわざわざ村へと連れてくると思うかね？」

「しかしっ！！」

納得できないとその獣人族の少女は声のトーンを落とさず叫んだ

「だってっ！こいつはっ！人間！なんですよっ！！」

「落ち着くのだフレティカ。人が我等を傷つけ、それで我等が人を傷つければその先にあるのは血と死体と争いと後悔のみの世ぞ」

「・・・っ！！殺すべきですっ！！」

そう言ってフレティカと呼ばれた獣人は振り返ると何処かへと歩き去ってしまった

その光景を見ていたウーリィンはハッとなって倒れたカンバラを思い出して振り返る

「誰かシャーカを儂の小屋へ呼べ。この青年とウーリィンには聞きたいことがあるからの」

「ふぅむ、異世界か。確かにその髪と目の色の人種は見たことが無いのぉ」

村長は白い髭をさわりながら隣のベッドで寝ている青年を見た

７０年近く生きてきたが、一度も村長はあのような漆黒の髪と瞳をもつ人間を見たことが無かった

ウーリィンもそれだけでは証拠にならないと、勝手ながら彼が持っていた謎の物体や服の作りから現代ではあり得ないような文明品を村長に見せた

これもまた、ウーリィン同様村長も納得できる十分な判断材料になりそうだと感じた

絶対という確証は無いが、彼が異世界から迷い込んだ人間だと判断するには決定的では無いものの、その可能性が高いと結論づけた

「青年の様子はどうじゃシャーカ」

「気を失っては居ますが、鼓動は乱れてはいないので大丈夫かと。ただずいぶんと疲労が溜まっているようですね」

そう獣人族の少女、シャーカが診察した

この村で唯一人の医療術を学んでいる彼女が大丈夫だというのだから大丈夫なのだろう

獣人族と人族では医療技術の差はかなり開いている

「しばらくは安静にして栄養をとれば直に良くなるでしょう。一応目が覚めても安静にしているようにと伝えてください。それと、何か変なことがあれば呼んでください。いつもの診療所に居ますので」

「うむ、助かったシャーカよ」

「いえいえ。種族が違い、またこの人が我等をどう見ていようが医者である私には関係の無い事なので。人も獣人も命の重みは同じであり、そこに私情は挟みません。ただ私は助けるだけです。仕事ですから。では」

そう言ってシャーカは村長の家から出て行く

大丈夫だ、と言われてもやはりまだ目が覚めないのでそんな実感は湧かないウーリィンは目を閉じたままの彼を見下ろす

シャーカは彼を助けてくれたが、味方になってくれたというわけではない

仕事柄彼女は敵であろうが味方であろうが傷ついている人間がいれば助けるような人間であり、そこに彼女の私情は無い

「さて、どうするかの」

「・・・すいません。私が人間を連れてきたばっかりにこうして揉め事になってしまって」

肩を落とす彼女に、村長はぽんぽんと手を置いた

「なに、気にすることは無い。出会ってしまったのなら放っておけばいいという訳でも無いからな。むしろこうして連れてきたお陰で人里には未だ知られてはおらぬであろうしな。だが彼女たちの言い分も分かってはおるのだろう？」

ウーリィンの脳内には未だにあの言葉がこだましている

――殺すべきですっ！！――

確かにこれは人だ

いずれ意識を取り戻せば彼は森を出て町へと帰るだろう

そして彼が獣人が居たという情報を売れば・・・森に沢山の人が武器を手にやってくる

それがあり得ない未来ではないからこそ、その未来が恐ろしいからこそ、彼女たちは恐怖と怒りを自分とこの青年にぶつけたのだ

「はい・・・」

「だが彼女たちは事情を知らない。もしこの青年が嘘をついておらず、本当に異世界から来た人間だというなら害は無いのかもしれない。だがそれは我等の甘い考え方かもしれぬ。かも知れないというだけでそうとは決まっていないが、やはり我等全員でこの青年の処遇を決めねばなるまい」

「やはり、そうなりますか・・・」

獣人族はもめ事があると村民全員でその判断をする

そのための会議を開くと村長は言っているのだ

そう言うと村長は立ち上がり、静かに部屋を出て行った

「・・・」

何も言えず、ただただ目を瞑り続ける青年をウーリィンは見下ろした

見たこともないような黒い髪に奇抜な服装と帽子

本当に本人が言うとおりこの青年は異世界から来たのだろうか？

その黒い髪をもっと間近で見てみようと彼に顔を近づける

この艶のある髪は一体どんな触り心地なのだろうか？

獣人族のように硬くごわごわとしているのだろうか？

ウーリィンはそっと、彼の黒髪に手を伸ばし――――

「話しは聞いていた」

「～～～～～！？」

彼は突如パチリと目を開けた

言葉にならない叫びでウーリィンは後ろにのけぞり、椅子に躓いて後頭部を強く地面に打ち付けてひっくり返った

ガタンガタンと椅子ごと後ろに倒れた獣人族の少女を見て神原は首を傾げる

「・・・何してるんだ？」

「な、なんでもないわよぉっ！！ばぁかっ！！」

恥ずかしくて顔が真っ赤になっていた彼女を見て神原は思った

うん、やっぱり何も変わらない、獣人族も人なんだということに

カンカンカンカン

警鐘が鳴り響く

俺は閉じたまぶたを開いて簡易ベッドから起きあがる

眠りは鐘の音によって徐々に覚めていき、周囲は慌ただしくなっている

懐かしい、と俺は少し前の出来事を思い出していた

だがそんな事をしている場合ではないと、俺は外していた眼鏡をかけた

慌ただしく小さな仮設テントから出た俺は丘の上からその向こう側を眺める

「ついに来たか」

神原のいる丘の向こうには、国境線を越えようとしている黒く小さな群れがあった

ガルトニールの侵攻がついに目の前にまで迫っているのだ

神原はその光景をしばし眺め、そして後ろを振り向く

物見の丘と呼ばれるガルとニールとロルワートの国境に位置するこの丘に、ロルワート革命軍およそ３００名が、迫り来るおよそ７００ものガルトニール軍を撃退するために集ったのである

戦争が、始まろうとしていた

『獣か人か』（後書き）

本編進めたい衝動が凄く強いです。なのに書いているのは修正と間章で本編にいつになったら戻れるのやらと思うほどの低速更新速度。あまりの進行速度の遅さに本編終わらせる前に失踪しなければ良いなと思う今日この頃。やるなら完結まで行きたいのに、なんでこんな壮大なプロットなんだ俺ｏｒｚ

『開戦の音』

神原は意外に思っていた

まさかロルワートへ向けるべき刃が真っ先にガルトニールへ向けられる事になろうとは、この革命軍を作り上げた者達の何人が予想できただろうか

神原やルーティ達が少しずつ国内から集めた改革派の人間は、気がつけば革命軍などと呼ばれるようになった

統率者は神原と騎士を辞職したルーティ、それに数名の見所のある青年達だ

今のロルワートはガルトニールや他国に対してしっかりとした警備体制を作らないと、今の国家には任せられないという不安が青年層を中心に溢れていた

それは兵の練度であったり、国民の生活レベルであったりと、これまで歪だった所を元に戻さないといけないのだと誰もが気づいていた

しかし、これまでは切っ掛けが無かった

大勢で集まっての集会は取り締まりの対象にあうためろくに話し合いもできず、またこれまでの生活苦からか民に立ち上がる元気が無かったのである

しかし、そうした苦しみによる怒りや憎しみのエネルギーは消えては居なかった

それが青年層の人間達であった

力無き女子供や老人は諦めを、中年層からは税や労働の負担に疲れ切っていた

しかし、青年層だけは若さ故のエネルギーを体内に溜め込んでいた

まだまだ若く、力もある人間達の意思は静かに心の奥底で国の転換期を待ち望んでいたのだった

そこへ神原達が広めた革命というビックウェーブを感じ取った彼らはその波に乗ることにしたのだった

彼らの下に多くの民衆がこっそりと、情報だけを共有させて水から飛び出す時を今か今かと待っていた

神原は冷静だった

今、これだけの人間を集め、国を相手取って戦うには些か不利だと感じていた

ロルワートという国は他国に比べれば戦力は低い

しかし、それ以上に民の疲弊や練度の低さが大きく、正規兵との差は埋めることの出来ない溝となっていた

戦闘になれば王都での市街戦や王城での籠城戦という事になるだろう

そうなった場合、此方に勝ち目があるのかと問われれば、無いとは

言い切れないが限りなく難しい事だと神原は考えた

それに長期戦ともなってしまえばますます状況は両者にとって劣勢になってしまう

神原が調べた限り、国内での食糧自給率は低い低いと言われていた日本よりも遙かに低い数値であっただけでなく、質も良くない事は初めて農場を見た神原でも分かるレベルだった

では貴族達はそういった食料をどうやって手に入れているか

それはもちろん輸入という事だろう

ロルワートは食料を他国、この場合北方小国軍から買っている

もちろん北方小国軍は嫌われ者のロルワートへの輸入を止める権利がある

しかしガルトニールと北方小国群との間に、北方小国群の最西端であるロルワートがあるのだ

ルーティは以前会議に置いて、我が国には何もないと言う発言をしたが、ただ一つだけロルワートが北方小国群に対して持っているものがあった

それが北方小国群の安全という手綱である

北方小国群の安全を保証する代わりに食料との交換が成り立っている、そういった現状が出来上がってしまっているのだ

もちろんガルトニールが攻めてくれれば加勢するだのといった話は出てくるであろうが、隣の国としては下手に出てロルワートとガルトニールに手を組まれてしまっては困るのだ

この革命軍とロルワート王国との小競り合いでそういった長期決戦を望むのであれば、それに準ずる資金、食料、戦力、そして時間が必要となる

革命軍には今、それがいずれも無い

時間をかければガルトニールに兵を向けられたときに革命軍と現ロルワートの正規軍のどちらもが疲弊しているようでは本末転倒である

故に、やるならば一気にロルワート上層部を落とし、ガルトニールに付けいる隙を与える間もなく体制を整える必要がある

神原はまず農業に手を加える事にした

腹が減っては戦は出来ぬという言葉が日本にはある事から真っ先に神原はそこへ着手した

剣を振る事だけが戦いのすべてという事ではない

戦いに勝って、故郷へ帰って飯が食えて、それで初めて勝ったと言えるのだ

何故民が飢えて餓えて苦しんでいるのか

それは輸入される食料の殆どが貴族達へと回っているからであり、国内で生産される食料が少ないからでもある

今はとにかく、食料を最優先させるべき事柄であると神原は考えていた

戦争をするにも何をするにも、生きていてこそ出来ることだ

ロルワートでは周囲の国に比べて飢餓の割合が多いというのは神原も自らの目で見ていた

それ故に、神原はまず命を助ける事から始めることを決めたのだ

それと同時に他国への援助を求めた

ウーリィンという獣人と出会い、国外へ出た神原はそうして準備を整えてロルワートへと戻ってきた

ガルトニール軍が王都を出兵したという知らせを持って神原は再びロルワートへと戻ってきたのだった

神原が持ち帰ったその情報は国内で最も早い知らせであった

故にまずはその事を王城へと知らせたのである

確かに今の国家は酷いものだが、これはそれよりもさらに緊急事態である

今ここで手を取ってでも戦わなければ、領地そのものが消えて無くなってしまう可能性が出てきたのである

革命軍の方は説得をし、こちらは何とか納得して貰いついでに自分

たちの国を守ろうという士気が高まった

傾向としては悪くは無い。事態はとてつもなく悪いが

だが国王の方が問題であった

返答は、そのような未確認の情報を鵜呑みにするわけにはいかないので、出兵の確認がとれしだい対策をとるとの事であった

ルーティも神原もその返答についに限界を感じた

王都から国境まで行き、そこから進軍を確認して戻るまでに最低でも3日

それも馬を使った偵察の兵だけの話であり、軍を国境につけるまでにはおよそ片道でその3日を使う事になる

その間にガルトニール軍は国境を越えるであろうし、そんな無駄な時間を待っていられないと神原とルーティは至急革命軍を収集して国境へと向かった

直接ロルワートへ開戦の知らせが届いていないという事は奇襲という事になるのだろう

まぁ直接ぶつかり合ったところで今のままでは負けることは確定しているようなものだが

最も、革命軍は対人戦の訓練すらろくに始めぬうちに起こったこの事態である

神原は勝算はゼロに近いと予想しながらも、とりあえずは国境へ向かう事を選んだ

そこで再度向かわせた偵察によってその規模が知らされた時にはルーティも神原の顔にも絶望という二文字が浮かんでいた

その規模はロルワートという国を飲み込むには余裕過ぎる程の数である

このロルワートの正規の兵の数はおよそ１０００

革命軍を足しても１３００。そのどれもが練度の低い者である

これではいくらなんでも無理だとルーティは頭を抱えた

だが、そこへ一つの知らせが入った

突如エステルタ、そしてフェーミリアスから密書が届いたのである

なんとすでにエステルタ軍２０００、フェーミリアス軍１０００がロルワートの隣国クロロトに伏せてあるというのである

そして内容としてはガルトニールの東進を止めるために派遣された軍だというではないか

そんな報告は入っていなかったとルーティは言うが、こうして現に正式な書簡が届いているのだ

もし本当ならそれほど嬉しい事は無い

３００、１０００と２０００。あわせて３３００。
７０００にはほど遠いが、少なくとも少しはまともになるはずだ
しかし・・・

「本当に信用していいんだな・・・」

軍議と呼んで良いものかは判断しかねるが、まぁ仮に作戦会議と言い直したところでとくに大差は無い
まぁそこで俺やルーティなどは顔をしかめていた

「確かに、信用するしか道は無いとはいえ・・・」

そうなのである。この申し出を受けなければロルワートがたどる道はただ一つとなってしまう

そのためにはこのフェーミリアスとエステルタの申し出を受ける必要がある

一度も両国とは話し合いをする機会が無かったため一度軍の指揮官と話をしておきたかった所だがそんな暇は無かった

知らせを伝えに来たフェーミリアスとエステルタの兵士に一度顔合わせをしようと申し出をするも、それは出来ない事になっていると

その申し出を突っぱねられた

全く持って意味が分からないこの対応にルーティは怒ったが、神原は違った

静かに、その言葉に頷いただけであった

結論から言うと３０００の兵でガルトニールとの戦闘に望まなければならないという事だ

その集まった３０００の兵は今どこに居るのだと聞きたくもなるが、それすらも伝えられなかった

「まったくどうなっているんだ！？」

ルーティはバンと机を叩き立ち上がる

こうして着実に近づきつつあるガルトニール軍の侵攻を目の前にして未だ両国の考えが読めず方針が定まらないのだ

意見は今二つに分かれている

このままガルトニール軍に突っ込むか、それとも防衛に徹底するかだ

どちらにせよ３００の兵では無理に近い事なのだが、そのどちらかを選択しなくてはならない

「・・・この丘を死守するか」

最終的に神原がその決断を下した。つまり防衛に徹するという事だもっともある程度策は考えてはいるが、それが大局を傾けるほどのものではない

せめて引っかき回せるかどうかのレベルである

時間稼ぎになれば良い方だ

魔法があるこの世界でこんな思いつきの案が通用するかどうかは分からないが、そんな淡い期待に縋るしかもはや頼るものが無いのである

小高い丘ではあるが進軍スピードが緩む程の急斜面というわけでもない

この物見の丘は二つの大きな丘がありゆるやかな谷のようになっている

その間を抜けるようにして道が続き、ガルトニールとロルワートを繋いでいる

地の利は此方にあるが、この戦力の差がその利を完全に無視している感じがある

それに加え、一体参戦を表明した二つの大国が一体何を考えているのかが分からない

これは東の北方小国軍をめぐる戦争だ

今後に全く関係が無いというわけでは無いが、あえてロルワート側について参戦する意味が分からないのである

それも正式な書簡が届いたのが国家の方では無く、革命軍へ届けられたことにも意味が分からない

現状政権は国王の下にある為に、こんな反乱軍へ国としての正式な文が届けられることは神原も予想していなかったのである

だが、もうそんな事に頭がまわるほど余裕があるわけでもない

時間が無かった

「こうしてみると・・・さすがに多いな。騎士であり統率する者として言ってはいけないのだろうが・・・勝利は絶望以下と言っても過言では無いな」

「あぁ。それは間違いない。多少の策ではどうにか出来る戦力差ではない。だが・・・可能性はゼロじゃない。不確定要素が多いうえに機動力だけで言えば此方が上だ。地の利も少ないが此方にある」

「そういうと希望がないでもない気がしてくるから不思議だな」

フフと、笑える場面でも無いというのにルーティはつい笑ってしまった

何に笑ったのかと問われれば、それは神原の前向きな姿勢にだろう
誰しもが諦めてしまうような場面だというのに、この男だけは前を向いている。下を向かず、振り返らず、ただただずっと先を眺めているような気がした
そんな彼に魅せられて、自分や、獣人の少女や、そして３００もの兵が集まったのだ
諦めきれない。そんな思いがこの物見の丘に集まっている
「諦めたらそこで終わりだ」
ルーティは顔を上げた
神原の顔には諦めの文字は浮かんでおらず、それを見てルーティは頷いた
その通りだ
始まってもいない
戦場で何が起こるか分からない
もしかしたら――――
戦女神にこの剣を捧げよう

命を落としたとしても、それは本望だ

自らの信じるそれを追い続けて死ねるなら、本望だ

この剣に、二十数年の命と曲げられぬ信念を込めて戦おう

ルーティはそう決心した

二人は仮設テントを出た

物見の丘から、まるで地を埋め尽くす絨毯のように展開した７００の兵を見下ろす

「あちらが奇襲するならば、こちらがどういう対応をしたところで文句は言えぬだろう」

本来戦争は互いに場所と時間を決めて行うものだ

出なければこの広大な土地で両軍がぶつかり合うことは難しくなる

それ故に兵にかかる負担は大きくなる。食料にも限りがある

出来るだけ効率的に戦争をするならばそうやって互いに場所と時間を定めるものである

それをしないということは騎士にとって卑怯に見える行為ではあるが、戦力に差があったり相手の守りが強固で打ち崩せない可能性が

ある場合にとられる事がある

長期戦になれば兵の多い軍は大量の食料を必要とする

僅か３００の兵で長期戦を行うのは無理に等しい

しかしそれでもなおガルトニール軍が進軍の知らせを出さずに侵攻してくるということは、一気につぶす気だという気迫が伺える

確かにぶつかり合えばガルトニールが圧勝するであろうが、確実に落としに来たな、とルーティや国民は思う訳である

今ガルトニールは国境、物見の丘の手前で待機をして動きを止めていた

此方に気がつき様子を窺っているのか、それともただの休憩なのかただ此方からすれば攻めずらい位置に軍を止めているものであるから手の出しようが無い

下から見れば小さいとはいえその丘の向こう側を見ることは出来ないために、革命軍はそこに小さな拠点を築いている

気がついていないのなら好都合、そのまま緩やかな丘の間を抜ければいい。一つ小さな策がある

此方に気がついているのならば好都合、そのまま丘を駆け上ればいい。そこにも一つ小さな策がある

とれる行動は少ないが、せめてあがくだけあがいてやる

ルーティは弓を取った

騎士としてでは無く、国に刃向かう反乱分子として、また国を守るための国民として、当たり前の行動を取ろうと

ルーティは革命軍総騎士隊長、神原は革命軍総指揮官としての配置につき、戦闘開始もいよいよ間近となった頃合いだった

大きなホラ貝のような音がこちらから見てガルトニール軍の左側の丘から鳴り響いた

と同時に、突如ガルトニール軍の右側に巨大な水の塊がおとされた

そこで仙はその上空に浮かんだ巨大な魔法陣を見つける

次第にその水色の魔法陣は黄色へと変わっていき――

轟音が響き渡る

そこへ、一匹のトトルが丘の向こう側から駆け寄ってきていた

とある人間を乗せて・・・

『開戦の音』（後書き）

なんだろうなぁ、山場をきちんと目立たせる書き方をしたいなぁと

『才能有れども我には向かず』

話は少し遡り、場所はガルトニールとフェーミリアスとの国境

「そう。ならこれで・・・チェック・メイトよ」

その言葉を口にするのは何度目だろうか

あの頃決めゼリフにしていた癖がつい出てしまったが、その言葉は私が思うよりも重かった事に今気がついて自分が嫌になる

この言葉をこうして口にするために、何百、何千という命が犠牲になっているのだと思うと小田原早苗（おだわらさなえ）は唇を噛んで顔をしかめた

「ふぅむ。いやはや、オダワラ殿の手腕には恐れ入りますな」

軍師の一人が感嘆の声を漏らす

彼は私の補佐となって動いてくれた軍師だ

まぁもちろん、こんな私にそんな簡単に多くの命を預けてくれる訳が無いとはわかっていた

恐らく保険という意味で自分についていてくれていたのだろう

結果として彼が出る場面はあまり無かったが、そのせいで私はこの戦場でよりいっそう責任というものを背負う事になった

「お礼を言われるほどの事じゃないよ。こんなの・・・酷すぎるなぁ、私」

早苗はそう呟いてレヌガンダの谷を見上げる

左右は巨大な崖のようになっており、それはガルトニールとフェーミリアスの国境に位置する巨大な山の切れ目とも言えるような、いわゆる峡谷といわれるような谷である

ガルトニールとフェーミリアスとの国境は上下に伸びる巨大なレヌガンディア山脈と呼ばれる山脈に区切られており、その山脈を越えるとガルトニール領タルナー平原が広がっている

その谷にて、つい今の今まで戦争が行われていたのである。そう、ガルトニールとフェーミリアスとの戦争である

後にレヌガンダ峡谷の戦いと呼ばれるであろうこの戦闘に置いて、フェーミリアス軍約４０００がガルトニール軍１００００を追い返したという話が周辺国に伝わるのだろう

事前に策を巡らせておいて良かったとこのとき小田原早苗は心底思ったのである

この異世界と思われる場所に来て早苗は、最初は困惑し、次に泣き、

そして現実を直視した

涙を拭いて、とりあえずはこの世界で生きぬくことを決めた

自分が出てきた精霊台という場所が他にもあるという話を聞き、もしかしたらバスに乗っていたメンバーがこの世界に居るかもしれないとその時思った

絶望するのはその確認をしてからでも遅くは無いと思ったのだ

だが、この大陸の現状を知ったおかげで小田原早苗は真っ先に彼らを捜すよりも先にやるべき事があると見抜いたのである

可能性は低いと見られていたガルトニールによるフェーミリアス聖王国への進軍を誰よりも早く察知したのだ

自分のこの国での立場は難しいものだった

今思い返してみるとこの世界の人たちの意見は三つに分かれていたような気がする

一つは小田原早苗を殺すべきだという意見

一つは小田原早苗を全面的に保護して利用すべきだという意見

一つは小田原早苗を要注意人物として監視をつけようという意見

この三つに分かれていたように思う

最初の意見を出した過激な思想の人間の思考は単純で、その理由は

後に聞いたのだが、自分と同じような異世界人が以前この世界を襲った事にあった

そうなればその考えも早苗には納得できた

今回もまたそういった事があるかもしれないという恐れがその人にはあったのかもしれない

この事は完全に自分が事故でこの世界へ来てしまった事を信じて貰うしか無かった

結果として意思が伝わったかどうかは定かではないが、早い段階で残り二つの意見が主流になった

そして利用すべきだという意見だったが、これは私が異世界から来ているという理由から来ている

服や身につけていた道具類など、この中世のような世界ではあり得ない技術である

故に自分たちよりも高度な文明が発達した世界からやってきたこの小田原早苗の知識にあやかりたいという意見である

主にこれは貴族が多くもった意見のようであったと早苗は思う

その知識を利用すればもっと成り上がれるとでも期待しての意見だったがその逆もあった

その世界の知識が自分たちに悪影響を及ぼすかもしれないという者も少なからずおり、それが第三の意見である

結論としては早苗が分かる範囲で、悪影響にならない知識だけを少しずつ伝えていく代わりにその衣食住や安全を確保するという事でまとまった

とはいえただの大学生の早苗が自分が着ているような服の織り方を知っているわけでもなければその織り機を作れるわけでもない

腕時計を作れるわけでもなければこの世界では何が常識で自分たちの世界の何が非常識なのかが分からなかったのだ

そこで小田原早苗は勉強をすることにした

この世界を知ることから始めようと

早苗はなにぶんこの大陸の形や文化など、なにも知らないに等しかったのだから

学生の自分はこうして勉強することが本分だと頭にハチマキを巻いたりしてみて、周囲の人にそれは何の効果があるのだと詰め寄られた覚えがある

結果として小田原早苗は現在のフェーミリアス王国が置かれている状況に気がついたのだ

早急に手を打つ必要があると早苗はフェーミリアス王国につかえている軍師を呼んだ

幸か不幸か、早苗は大学生であると同時にオンラインゲーム・、ユグドラシルオンラインというゲームの上位ランカーでもあったので

ある

彼女がプレイしていたのは9つの異なる世界に存在する迷宮探索系のオンラインゲームである

このゲームの面白いところはある程度ゲームが出来る人間ならば、レベルや装備で力の差があまり出ないという点にあった

そんなゲームの一番の醍醐味は『助け合い』がテーマになっているという所である

もちろんレベル制度はあるが、それは直接キャラクターのステータスにはあまり影響しないのである

レベルで恩恵があるのは初期装備から僅かながら上昇するステータスの変動がある程度の防具や武器が手に入れられる所であり、攻撃力や防御力、魔力や俊敏度などにはほぼ影響しないと言っても過言ではない

ならばどうすれば強くなるのか？

それはひとえにプレイヤーの戦闘や策略の慣れや経験の多さがキャラクターを強くするのである

レベルを上げる楽しみはステータスに影響のない、かわいかったり格好良かったりするだけのアイテムを身につけられたりする程度であるために、レベルが高いプレイヤーでも初心者プレイヤーとキャラクターのステータスで言えばほぼ差が無いのだ

そのためにこのオンラインゲームの好き嫌いの差が激しいのである

強くなりたいからレベルやステータスをあげるゲームではなく、強くなりたいなら経験を積んで慣れろというゲームなのである

キャラクターの種族は前衛である剣士、後衛である魔術師、どちらもこなせる魔法剣士の三つだけであり、キャラクターのステータスに差が出るのはこの種族の違いだけという事になる

剣士は物理攻撃力と物理防御力が高く、派手な剣の技を沢山使えるが遠距離攻撃が出来ず魔法に対する防御力が紙である

魔術師は魔術攻撃力と魔術防御力が高く、対して物理的な防御力や近接戦闘に弱いのが弱点である

魔法剣士はどれも間を取ったようなステータスであり、どちらの火力も防御力も中途半端であるのだが小回りのきく立ち回りがしやすいのが長所であるが器用貧乏にならないように頑張らないといけない

基本は４人から5人のパーティを組むことができ、自由なメンバーで冒険を進めることが出来る

大抵はそれぞれの弱点を補えるパーティやダンジョンに合ったパーティを組む。助け合いこそがダンジョンを攻略する上で大切な事なのである

そしてゲームの内容はダンジョン探索系なのではあるが、９つのダンジョンがあるらしいが未だ発見されているのは5つのダンジョンだけである

それぞれに発見条件があるらしいのだが、未だに残りの４つのダン

ジョンはどこに存在しているのか見つかってすら居ない

初期から解放されているダンジョンが二つ、発見されたダンジョンが三つ

もちろんヒントはあるのだが、そのヒントがまた意味不明な暗号でこれまで発見された三つのダンジョンも暗号を解読したのではなく、偶然見つかったものなのである

見つかっているダンジョンの暗号すら解読できないとなるといよいよこの暗号はただのダミーでは無いかという噂すらたっている程である

と、話がそれたようなそれていないような

つまり、そのダンジョンをクリアしていくのがプレイヤーのやるべき事なのである

簡単に言えばそのダンジョンは地下へ地下へと下っていく構造なのだが、下れば下るほどモンスターのレベルや謎解きのレベルが上がっていき、一つのダンジョンにつきエリアは１０００階層以上はあるらしい

すべてのダンジョンに共通する事ではあるが、一度ＨＰが全損すれば１００階層ごとに存在するセーブポイントからやり直しという過酷なルールである

それなのにキャラクターの性能は初期と変わらないようなものなのだから理不尽にも程がある気がするとプレイヤーは思い、その初期の頃にマゾゲーとしての立ち位置を確保した程である

始めたばかりの初心者でも、それ相応の知識や反射速度などが優れていれば上位の階層まで下ることが出来る

そうでないプレイヤーは経験を積めば下へ下へと下っていける。これはそんなゲームなのである

ダンジョンは全プレイヤー共有となっており、途中で出会ったパーティとメンバー交換なんかも出来れば共闘しながら進めることも可能である

だがダンジョンの幅はそれほど広く無く、戦い辛くなるうえにトラップなどを踏んでしまえば周囲を一気に巻き込んでしまう事もあるため、複合パーティとなっても精々二つか三つが限度なのである

現在一のダンジョンは全１５００階層でクリア済みでマップも完成されているため最初はこの１５００階層をクリアすると他に発見されている４つのダンジョンを探索する許可証がもらえる

この１５００階層を潜りきる前に飽きるプレイヤーが殆どなので第一のダンジョンは別名篩いのダンジョンとも呼ばれていた

古参のプレイヤーも度々友達に教えたり初心者の育成や未来の期待株探しなどをやっていたりもする光景がここでは見られ、難易度が一番軽いダンジョンである。まぁ最下層まで行くにはかなり上達する必要があるのであはあるが

第二のダンジョンは全１０００階層なのだがその難易度は第一のダンジョンよりも難しいものとなっている。これもクリア済みであるがマッピングは完全に終了していないためまだちらほらとアイテム

を探し求める上位プレイヤーがいたりする

第三、第四、第五のダンジョンは未だに攻略が終了していないのが現状である

曰く第三のダンジョンはトラップや謎解きがあまりに理不尽で難解なものとなっている。現在１６００層まで攻略が完了しているがそ１６００層の謎で約一ヶ月ほど攻略が足止めされている状態である

第四のダンジョンは敵キャラクターのレベルがこれまでの比では無いほど高い

キャラクターのステータスが変わらない以上、その経験と慣れで上達しなければならないので最前線は初見のモンスターなどがどんどんと出てきて対応が追いつかない状態なのである

主に現在多くのプレイヤーがこの第四のダンジョンの攻略を行っており、最前線は現在２０００階層ほどである。なんでも１０００層ごとに強力なボスがいるのだとか

第五のダンジョンは集団戦闘を主としたダンジョンである

パーティいくつもが集まり、それぞれの階層の扉にいるボスを倒して進むというものになっている

他のダンジョンにもボスモンスターのような存在は居るが、これほどまでにすべてのダンジョンにボスがいるというダンジョンは無い

その分謎やトラップ、モンスターが少ないダンジョンでもあり、ほぼこのボス撃破がダンジョンの主流となっているようなものである

週末や夜など、多くの人が集まる時間帯に掲示板で呼びかけをし、このボス戦闘に挑んでいる状態だが現在は主要プレイヤーは第四ダンジョンに居るためにあまり攻略は進んでおらず現在１００階層前後である

一度ダンジョンを出ればはじめから潜り直しとなり、一度途中でセーブをすればその階層の安全ポイントから復活するようになっている

死んだ場合のみ１００階層ごとのやり直しとなるが、これはその階層でのセーブとなるためログインするたびにやり直しをする必要は無い

時間を決めて前回と同じプレイヤーで攻略するプレイヤーもいればその場で新しいプレイヤーを捜す者もいる

そのため一度潜るためにはそれなりの準備と覚悟がいる

代わりに最下層までたどりつければ報酬として高額賞金と全ステータスが少しだけあがるようになっている

一つのダンジョンにつき一度だけだが、次のダンジョンに潜るためにはその少しのステータスでも高い方が良いに決まっているため、初心者は現在攻略済みの第一、第二の迷宮をクリアすることがあらたな冒険への第一歩となる

最前線までは攻略されているためにＭＡＰが攻略サイトで公開されているが、それを見ずにプレイするのが良いんじゃないかというプレイヤーもいる

効率よりも、ゲームを楽しまなければただの作業であると早苗は思っている

このゲームは、全く分からない場所へ仲間を信じて潜っていくから楽しいんじゃないか、と

人それぞれではあるが、早苗はそう思っている

そんな中で存在するのが二つ名システム

プレイヤーのダンジョン進行度や倒したモンスターの数などでそのプレイヤーに二つ名が付けられるというシステムがある

まぁもちろんステータスに差は出ないのだがそれを出す事がこのゲームの一種の楽しみの一つとも言える

そのプレイヤーが何が出来て、何が得意なのかを知る事はダンジョン攻略の決め手とも言える

高レベルの者や一種類のモンスターをひたすら倒した者、殆ど被弾しない者やダンジョン攻略に貢献した者などに二つ名が与えられる

二つ名はストックされていき、自由に変える事が出来る

ドラゴンキラー、迷宮攻略者、へたれチキン、スナイパー、クリティカルの達人、幸運の探求者や最早ゾンビ野郎等々がその一部である

そして、最前線攻略組と呼ばれる知識や経験豊富な攻略プレイヤーの一人で小田原早苗のメインキャラクター、魔術師の『サーナ』と聞かれればプレイヤーが思い浮かぶのは一人しかいない

軍略師『サーナ』を知らない最前線プレイヤーはいないだろう

プレイヤー同士で行うことが出来るいわばダンジョン攻略の息抜きとも言えるゲーム、プレイヤー同士の対戦で戦場級、大規模戦場級と呼ばれるランクの戦闘で最上位の指揮官レベルである軍略師を合計１００回以上つとめた者に送られる二つ名である

マゾゲーともたとえられるこのゲームでの貴重なストレス発散方の一つといえばこのプレイヤー同士による対戦がある

ダンジョンでのプレイヤーのデータをその階層でセーブし、キャラクターは別の場所、大闘技場と呼ばれる別エリアでの操作となる

一対一の決闘級、二対二のタッグマッチ級、十人によるサバイバル方式で行われる乱戦級、１００対１００による戦場級、そして最大規模で行われるのが大規模戦場級でプレイヤー１０００人対１０００人で行われるチーム戦がある

決闘級と乱戦級は時間内に相手を全滅させるかＨＰ残量が多いプレイヤーの勝利で決まる

が、タッグマッチ級と戦場級、大規模戦場級はそれに加えて旗取りルールというものが追加され、先ほどのルールプラス相手陣地にある旗を取れば勝利となる

そして戦場級と大規模戦場級という二つの大人数参加型の対戦にはポイント制度というものが加えられている

プレイヤーにはそれぞれ職務というものが分け与えられ、それぞれ

の職務にあった働きをした分大きなポイントが加算され、それが個人個人の隠しステータスに加算されたりして一定量溜まると次の戦争時に昇級したりする

つまり歩兵は相手を倒せば倒すほど部隊長や将軍、騎士などの職務に向かってポイントが溜まっていく

そして職務ランクの高い相手を倒すほどにそのポイントは大きく加算される

戦闘中心のそれらの職務とは別に作戦を立てる者もいる

それが軍師という職務である

これらはどれだけ良い作戦を立てて自軍の損害を減らしつつ戦うかがポイント上昇の比率に関わる

これは兵士などの加点方式とは違い減点方式で残った兵の数がポイントになってくる

そのため策略担当のプレイヤーとしては兵を出来る限り温存させる戦いをしたい

しかし戦闘担当のプレイヤーとしてはどれだけ相手を倒せるかがポイントに関わってくるので出来るだけ相手に立ち向かっていきたいところがある

加えてこれはストレス発散の意味合いが強い、所詮ゲームのゲームのためにもっぱら戦闘担当は相手に突っ込んでいきがちになる傾向がある

勝つためではなく、ストレス発散のために戦う

そんなプレイヤーの意識をどれだけ上手く掴めるかが勝負の決め所である

このプレイヤー同士の対戦はダンジョンにいても現在位置を保存した状態で戦えるため、いつでも行うことが出来る

突発的に人数が集まったりして行われるのが戦場級の対戦だ

しかし大規模戦場級ともなると滅多に２０００人もの人数が集まらない

故にいつのまにかプレイヤー同士の暗黙の了解で日曜日の午後に行われる事になっていたりする

そして片方のチームに一人だけ、軍師という週に一度のチームの作戦を決める事が許される重大な責任ある職務が与えられるプレイヤーがいる

はじめに軍師希望をしたプレイヤーの中から抽選や投票でその一人を選ぶのだが、その過去の戦歴から大規模戦場級のみでも６７戦勝率８０パーセント以上を誇る最強という枕詞をつけられる『軍略師』プレイヤーがいた

それが軍略師『サーナ』である

通常の戦場級の勝率などもはや考えるだに恐ろしい戦歴だ

故に彼女と当たったチームは相手チームの軍師がサーナだと知ると一斉に全員落胆の表情を浮かべるといわれ、一種の名物ともなっていたほどだ

彼女ほど人を使うことに長けたプレイヤーとして有名なプレイヤーはいないだろう

その中でも彼女は名の知れたという意味で上位ランカーの一人としての立ち位置を定めていた。もちろん通常戦闘での実力もある

彼女と組むプレイヤーのあまりの死亡率の低さに加え、彼女の本職は大規模戦闘、つまり第五ダンジョン通称ボスラッシュダンジョンの指揮を得意としている事からもサーナにはその二つ名とは別に『悪魔の頭脳』や『孔明（笑）』という通り名で呼ばれていたりもするつまり『助け合い』をテーマとするこのユグドラシルオンラインで、彼女は『助け合わせることが上手なプレイヤー』として有名であったのだ

人の使い方に長けており、尚かつそれをいかせる知識と作戦を考えつけるという『サーナ』である小田原早苗がここ、未知の異世界で多くの人を救い、多くの人を殺したのである

本職は大規模戦闘における戦略専門としており、またゲームを通して覚えた知識が彼女に行動を起こさせた

そしてその結果がこれだ

本当の戦場で、本当に勝ってしまった

自分の言葉で、自分の命令で、敵味方含めて、少なくない命を失ったのである

それと同時に、奪われるはずだった多くの命を救ったのである

この出来事を小田原早苗は一生忘れなかった

言葉には重みがあり、責任があり、言葉で守ることもできればまたその逆、奪うことも出来てしまうのだと早苗は実感して、そして恐怖した

そのゲームと現実のギャップが彼女の首を絞めたのである

「軽率だったかなぁ・・・」

彼女はそう呟いた

『才能有れども我には向かず』（後書き）

さて、間章は神原仙とこの小田原早苗との物語が大部分を占めます。
それと今回のゲームの話は簡単に流してくださっても大丈夫です。
特に覚えて貰うような大事な事柄は少ないのに話ばっかり長くなっちゃって・・・

『貴方の名を叫ぶ』

今早苗は戦闘のあったレヌガンダの谷の近くの町で騎士団と一緒に周辺警備を行っていた

ガルトニール軍は撤退したが、油断するのはまだ速い

早苗もそれに賛同したため、戦闘が終了してからおよそ2週間ほどの間この町で国境を警戒する事となっていたのである

仮設テントの中でボンヤリと自らの手を眺める少女は静かにため息を落とす

死んだ

生きた

殺した

守った

殺さなければ殺されていた

守るために殺した

殺したから守れた

分からない

言い訳か？

言い訳だろう

正しかった事なのだろうか

守らなければ、と思った

結果、多くの命が失われた

なら守らなければと思えば良かったのか？

いや、思わなければ死んでいた

生きているからこそそんなことに悩める。これは贅沢な事なのか？

でも、私がこの世界に来てしまったから、運命が変わったのかもしれない

私がこの世界に現れなければ、フェーミリアスとガルトニールとの戦いはもっと違う終わりがあったのかもしれない

それはもしかしたら私が定めてしまった未来とは違う、死者無き終わりだったのかもしれない・・・と

悩んだところで、そんなことに結論は出ない

結局は私が介入して、この国の人たちは死なず、あっちの国の人たちが死んだという結果に変わりは無いのだ

もしかしたらそれが逆だったのかも知れない

どっちが良かったのかなんて、私なんかには分からない

でも、自分が下した結論よりも、もっと良い未来があったのかもしれないと思うと後悔が無い訳ではない

いま小田原早苗の中に渦巻いているのは介入して多くの命が失われた事による後悔だ

それは自分でも分かっているつもりなのに、それでも後悔は消えない

戦争が此方の勝利で終わり、私は結果として生きている。だから、辛い

辛いのだ

思い出すたびに彼女は涙を目に浮かべた

ごしっと目元に浮かんだ水を拭う

彼が・・・彼が居たらな・・・と

居ない存在に心を預けたくなる衝動に、早苗は堪えきれなくなりそうだった

支えとなるべき存在や頼るべき存在も背中には無く、彼女はたった一人で異世界で生き抜かなければならないのだ

それは孤独だった

そんな孤独に、この人の命を奪ったという重圧がのしかかる

苦しかった

押しつぶされそうだった

「せ・・・ん・・・・・」

そんな誰にも届くことの無い弱音を吐いていた頃だった

彼女へ知らせが届いた

「えと・・・理由は？」

早苗が知らせを届けた兵に聞く

まったく何のために自分が王都へ呼び出されるのか、意味が分からなかった

「今回の戦闘におけるその指揮官としての立ち回りを評価して貴方を正式に我がフェーミリアス王国の騎士団に加えたいとの声があがりまして」

「ちょ、ちょっとまって、騎士団!?私を!?」

それを聞いて早苗は正気かと耳を疑った

ある程度の事はこの世界に来てから学んでいた

礼儀や文化、そして簡単な歴史も聞いていた

その中でアグレシオンという単語が自分に直接ではないにしろ、少なからず関わってくると早苗は直感で感じ取った

以前現れた異世界人、つまり自分のような人間が突然大陸を侵略しようとして大きな戦争が起こっている

自分がもしこの世界の人間ならば、アグレシオンと小田原早苗はどこが違うのだと言うだろう

現に小田原早苗はガルトニール帝国の人間を殺すためにこの国の兵士を使って立ち回った

そんな事を許された理由は、私が今のこの周辺国家の関係が歪だと感じたから

結局私はガルトニールの人から見ればアグレシオンと何も変わらない

逆に、そんな人間が地位を手に入れ、もし裏切った場合の事を考えているのかと早苗は思ったのである

「はい。ですので至急お戻りいただき、その事について会議を開きたいとの事です」

「えっと・・・」

どう言葉を返すべきかと悩んでいたところでその兵士がもう一つの伝達事項を早苗に伝えた

「それともう一つ別件で貴殿に招集がかけられております」

「今度は何？」

「精霊台保持国会議に出席して頂きたいとの知らせです」

「・・・何それ？何の会議？」

精霊台、というのは早苗も耳にしたことがある単語だった

早苗が最初にこの国へ現れた時に現れた台座の名称がたしか精霊台だったはずである

しかし、その会議の内容が分からない

「大雑把にしか聞いておりませんが、精霊台を保持する国であなたのような異世界から来たという人間について話し合うとの事です。その最重要参考人としての出席命令が出ております」

「えっ・・・それって・・・」

早苗の心に期待という一つの光が浮かんだ

その小さな期待は彼女の重荷を、一つ、また一つと取り除いていく

「他にも・・・私みたいな異世界から来た人がいるの・・・？」

「どうやらあなたと同時にこの世界へと飛ばされた人たちのようです」

言葉にならない感情が、目から涙となって、口から嗚咽となって、体中からあふれ出すかのような気分になった

会える。そう思った

彼に、逢えると

「――――ると・・・思ったんだけどなぁ」

結局私はまた戦場にいる

なんでこうなってしまったんだろうか

私はまた人の命を奪う命令をしなければいけないというのか

結局はいいように扱われているだけだと、自分でもわかっているのに

それでも、私は断ることが出来なかった

独りだったから

「畜生・・・」

つくづく自分が嫌になる

「サナエ殿。そろそろ時間ですぞ」

「あぁ、うん。そうだね。それじゃぁ最初の部隊をさっきの指示通りに動かして。後は私の判断で奇襲の指示を出すから」

「了解した」

そう言って軍師は馬に乗って丘の向こう側へと消えていってしまった

物見の丘にて私は今、フェーミリアス軍とエステルタ軍を率いてガルトニールのロルワート侵攻を止めるべく動いている

少しずつ兵を隠してクロロトという国に集め、そしてガルトニールが出兵すると同時にそこに集まった３０００の軍が物見の丘周辺に集い始める

「全く、なんで私が総指揮官なのよ・・・」

エステルタとフェーミリアスの軍師が一度集まり作戦会議のようなものを開いた

その時に各自案や策を出し合ったのだが、その中で早苗の考え方に多くの軍師が賛同しての抜擢だった

「ゲームじゃ無いってのに・・・どうにも都合良すぎるような展開じゃないのこれ？」

とまぁそんなことを考えても何も始まらない

結局は全力でこの戦争に勝ってフェーミリアスに帰るしか無いのだ

そうで無ければ、彼に会うための会議に参加させて貰う事が出来ないと脅されている

その事を条件に早苗はこの戦争に関わることを決意したのである

と、物見の丘の向こう側で大きなホラ貝のような音が鳴り響いた

パンパンッと自らの頬を叩く

全滅したら負け。勝率は１００パーセントじゃないとだめなゲーム

でも勝ち目があるなら、私はその勝負を落とさない

軍略師の二つ名は誇りだ

今だけは私は軍略師『サーナ』となる

髪が長ければ、結って決意を表したいような気分になった

一度も染めたことのない短な黒髪が、風に揺れる

カラッと晴れた晴天の下、サーナは指示をだす

何時までも怖じ気づいてくよくよしている訳にはいかない

やるしかない。勝つしかないのだ

選択肢なんて、一つしか無いというのに、私はいったい何に怯え、苦しみ、嘆かなければならないのだ

どうせこの手が血に染まるというのなら、死なない道を私は選ぶ

彼に・・・あいたいから・・・

それでも――

それでも彼に再会出来たとき、彼は胸を張ってこの血で染まった手を掴んでくれるだろうか？

早苗はその瞬間二つの道がある事が、その道の先がどうなっているのかを簡単に想像できてしまった

片方の道は私が彼に謝り、許しを請う道

片方の道は、私が壊れる道

でも、もうこの選択から逃げる事は出来ない

逃げる事は簡単だ。しかしここにいるすべての人たちの命を捨てる事になる

他の人に押しつける事は簡単でも、そんな私にこれ以上罪悪感を増やしたくないのだ

後でこうしておけばよかった。そういった事を思わないような選択をして、私は彼の前に立ちたい

弱くない、強い私で私は彼の前で在りたいのだ

「第一班、先ほどの指示通りに！第二班、一班の補佐に！行動開始っ！」

そう指示を出して早苗は丘の上へと登り、戦場を見下ろす

そこには３００の兵が丘の上に、７０００の兵が丘の下から睨み合っていた

絶対的な戦力差

それをひっくり返すのは策とそのタイミング

私はそれを扱える

途中下車なんて出来ない

自信を持たないと、兵士達に申し訳がない

彼女の小さな体には大きな責任がのし掛かっていた

「司令官ッ！！」

「ぐ・・・っ、あ、り得ん・・・あり・・・得ない！」

次から次へと報告がガルトニール遠征軍総司令官のもとへと届いてくる

どれもこれも耳を塞ぎたくなるような内容であった

「総司令官！矢が多すぎてこれ以上は前線が持ちません！」

「レイグウッド総司令官！後方連絡線が完全にフェーミリアス軍、エステルタ軍による混合軍によって分断されました！」

「右翼、未だに初撃の魔術攻撃による混乱から立ち直れません！後方の予備兵を投入しますがよろしいでしょうか！？」

「敵兵約５００が新たに右の物見の丘の向こうから出現！竜騎兵数人が新たに物見の丘前方に撃墜されました！」

「後方より敵増兵です！数およそ１００で魔術師を中心とした兵のようですっ！」

「敵兵による戦場のマナの消耗が多く、枯渇が速すぎます！速くせねば魔術を放てません！」

次から次へと入ってくる情報

対応が追いつかない

敵兵が四方八方から現れ、何故かエステルタとフェーミリアスの軍まで一緒とは一体だれが予想つくだろうか

現在ガルトニールとその二国は対立しているため、ガルトニールとの戦争で共闘するとは予想していたが、まさかそれがロルワートの方まで出てくるとは思わなかった

それでも両軍が加わったとはいえ、戦力の差はまだ此方の方に大きく分があったはずだ

それなのに

それなのに

それなのに

「どうなっている・・・くそっ!?」

もはやこの司令官には戦場の状況が把握できていないのは誰の目にも明白だった

多くの兵を動かすため、ただでさえ小回りがきかなくなっているというのに相手は次々に作戦を仕掛けてくる

まず、開幕の一撃に物見の丘の向こう側から巨大な水の塊が飛んできた

トン以上の水量を球がガルトニール軍の頭上からその右翼へと直撃した

そこへ間髪入れずエステルタとフェーミリアスから雷魔術が放たれる

どちらも集団で術式を組んでいる大型の魔術である

本来なら戦場で一発か二発放てれば良い方であるマナを殆ど消費する奇襲による魔術でガルトニール軍の右翼へ展開していた兵が全滅に近い損害を受けて戦争は始まった

とはいえ、それ以上相手は魔術を使うことが出来なくなるというハンデを負うことになる

マナを使えば、それは次に魔術を使うために必要なマナが無くなるという事だ

戦力差は大きすぎる程の差がある

それなのに、全く軍が前へと進んでいない

一体この戦場で何が起こっているというのだ

「蹴散らせ！数は此方が上なのだっ！攻めろっ！進めっ！殺せっ！中央は何をしている！？」

苛立ちは頂点へと達しそうになっている事に多くの者が気がついていた

それでも司令官は怒鳴ることを止めず、冷静になるという事を放棄しているその無様な姿に部下達は不安感を募らせた

「無理です司令官！丘の前は最初の奇襲兵による土魔法で大地が大きく崩れています！進むことは可能ですがスピードが落ちて相手の

弓兵に討ち取られてしまいます！それと相手の魔術にて土のマナが不足しています！」

「えぇい！ならば部隊を分けて両翼から回り込め！」

「それも厳しいですね。現在右の部隊は丘から開戦の一撃を受けて被害が大きくでています。兵力差が出る上に右側の丘に陣取っているエステルタ軍と中央に陣取るフェーミリアス軍とロルワート軍によっての挟撃を受けてしまいます！」

「ならば全軍左から回り込めばよいでは無いか！！」

「突撃させるというのなら、機動力の問題で多くの右翼の兵を見捨てる事になります。それにもしこの状況を相手が狙って作り出しているというのならば、がら空きになっている左の丘にも何かあると見るべきです」

「ではどうしろというのだっ！補給路は放たれた炎で塞がれ、前に進めば速度を落として矢でうたれる！右を行けば丘の上から挟撃が、左には何があるか分からないから行きたくないだと！？ふざけるなっ！それに相手の魔術の使いすぎで我が軍周辺のマナまで枯渇しているだと！？」

現在ガルトニール軍の後方は油と火によって退路が塞がれてしまっている

ここが丘でありながら草本が広がっている土地であることもあってか火の勢いはどうも衰えそうもない

かといって水の魔術を使うほどの魔術はこの戦場には残っていない
残っているのは僅かな土のマナと今こうしてガルトニール軍の後方を塞いで燃えている火のマナぐらいだ

「敵兵は分散していますが、それでも突破が難しい状況です！」

「大盾を持たせた兵を右翼へ集中させたのが仇となりましたな」

舌打ちをした総指揮官は突如隣へつけていたトトルへと乗ると剣を抜いた

「それを俺の責任にするなよ糞がッ！もういい！右翼の兵は捨てるっ！残った軍は左翼へと展開して前方の土砂を迂回して丘の防衛を落とせ！前方にトトル騎兵を並べて壁にしてでもなんとしてでもペースを引き戻せ！」

「しかしまだ生きている兵も・・・っ！それに軍を動かすとなれば補給部隊や治癒部隊はどうするのですか！？」

「金や食料なんか、ロルワートを占領すればいくらでも手に入るっ！ここで軍を全滅させてたまるかっ！！数は圧倒的に上だ！数で崩せ！！」

彼は焦っていた

初めて軍の総指揮官として今回の遠征に臨んでいる彼は何が何でも成功させて手柄をあげないといけないという焦りに駆り立てられていた

それ故に、的確な判断が出来なかった

それ故に、指揮官を信じられない者が先行して大隊は崩れてゆく

「左翼が伸びてきましたね」

「でしょうね。左の丘は手薄になっていますし、そうなるように右翼を潰したんですから。それにどうも統率がバラバラですね」

「そうですか？」

と軍師の男は首を傾げる

特に変わった様子は無いように思うが早苗は確実に微妙な違和感を感じ取っていた

「うん。本隊が左翼前方にせり出してるよね。でも右翼がそれにつ

いて行けてない。まぁ最初に魔法を打ち込んだからっていうのもあるだろうけども、それにしては右翼は右翼でばらつきが出てるし本隊からの伝達が行ってないのかな？指揮系統がしっかりしてないからああやって見苦しい形になってる」

静かに丘から見下ろす彼女は次に右方向、つまりロルワート方面の丘へと視線を向ける

物見の丘には、いくつものなだらかで大きな丘が点在している場所である

右にはロルワートの兵が僅かばかりに見えている

とはいえ正式なロルワートの兵ではなく、一般的な農民のような人たちの集まりというようにも見える

数は少ない。丘の向こう側にいるとも考えにくいだろう

そろそろ総指揮官としてロルワートの方に挨拶に行くべきだろうかいくらなんでも作戦を教えないまま共闘に入る訳にはいかないからだ

ここからはロルワートにも頑張って貰わなければならない

「じゃぁ油の管理は任せるね。ガルトニールの本隊が右翼を置いていくようなら十分距離をとってから右翼の負傷兵を治癒しに行って。第６班！治癒班の護衛にまわって！フォルン！トトルの操作できるっ？」

「はいっ！問題ありません！」

と、一人の調教師の女性が前に出た

それと同時に軍師も一歩早苗に詰め寄った

「サナエ総指揮官はどちらへ！？」

「開戦した以上、作戦を隠す必要が無いからね。一度ロルワートの陣営に行って挨拶してこようと思う。私が居ない場所での指揮権はアッドレスに任せるから」

そう言ってフォルンと呼ばれたトトルの調教師の一人と共に早苗はその背中に跨った

ブルンと嘶きのような鳴き声を上げてトトルは鼻息を荒げた

「じゃぁ、行って！」

「はいっ！」

トトルの手綱を握りしめたフォルンはその手綱を力一杯引っ張る

するとトトルは早苗とフォルンを乗せて大地を蹴ると軍師の目の前

から走り去ってしまった

「ずいぶんと・・・左翼に流れて居ますね。止められるでしょうか？」

「分からない。けど一応の作戦は伝えてきてあるし、あとは私が頑張らないと・・・」

そう言って早苗はフォルンにしがみつきながら左に見えるガルトニール軍の進軍を眺める

早苗はこれを追い返す役目を背負っている

それを自覚しないと行けない。失敗は、許されない

そしてすぐに二人を乗せたトトルはロルワート革命軍のそばまで駆け寄った

丘の上には慌ただしく動く人影がいくつも見える

しかし、あのガルトニールの大軍を見た後では心許ない人数だ

早苗はそんな事を思い、必然か偶然か、前方のとある人影に気がついた

そう、あれは――――あれは――――ッ！！

「せえええぇぇぇぇぇぇん！！！」

私は彼の名前を叫ばずにはいられなかった

彼の手には刀が握られていた

そして彼は丘の向こう側へと走り去っていこうとする

待ってと叫びたかった

ようやく見つけたのに

仙は私に気がつかず、行ってしまうのかと

また一人に・・・独りになってしまうのかと

手を伸ばしたかった

あと一分か二分、トトルで駆け寄ればたどり着けそうなその位置に

居る彼が、遠くて遠くて仕方がなかった

戦場の喧噪に私の声は飲まれた

そして彼は丘の向こうへと消え、そして・・・

声が――聞こえた――

大きくえぐられた地面を迂回してくる大きな黒い点は大きな音をたてて近づいてくる

とてつもなく恐ろしい気分にさせられたが、今は我慢しなければならない

自分がこの戦争に市民を巻き込んだ張本人なのだから、その責任があるのだ

「よし、矢の勢いを止めるな！後方は油袋の準備はできたか？よし、投げろ！」

大軍に向かって放たれる矢はかつて神原がどこかで聞いたことがあった作戦を実行していた

日本では銃で行われていたらしいが、神原はそれを弓矢で実践していたのである

まず前方の人間が弓矢を放ち、後続が次弾の準備をする

撃ち終えれば後ろへ下がり次弾の準備をする為に矢をつがえる

その間に後続が前にでて弓を放つ

その絶え間ない弓矢による牽制に加え、お返しの弓の防御には大きな木の板を用意して防御の役割の兵士に持たせて弓兵の防御に当た

らせている

相手軍の大盾を持った兵士はエステルタとフェーミリアスの開戦の一撃によって壊滅しているからか此方の矢は多くの兵を地面へとひれ伏させた

しかし矢の数や威力には限りもあり、最初は上手くいったと思ったその作戦も鎧を外した前衛の突撃部隊にしか効果は無く、追って増え始めた鎧を着た兵への有効打とはならなくなっていった

そこで弓兵を下がらせ、神原はここで次に土地を利用した攻撃に移ることを決断した

丘という戦場で此方が上、あちらが下

ということで神原はこの丘の上へ切り倒して運んだ丸太２０本ほどを用意した

丸太はすべて横にされて根と枝や葉を切り落とされた状態で横に並んでいる

「よし、あまり引きつけても威力が無くなるかもしれないな。第五射の後、一気に落とすぞ！第五射、放てっ！」

「よし、全員丸太を落とせー！」

そのルーティのかけ声で一斉に弓兵は弓を放って丸太を押し転がした

ゆっくりと、しかし次第に加速する丸太は横一列になってガルトニール軍の先頭を走る兵士達を押し流した

「油断するな！直ぐに弓を持って第６射！！そしてもう一度油袋を投げろ！火矢準備ー！よし、放てっ！」

油袋は小さな手の平大の革袋のようなもので中には油が詰まっているそれをガルトニール軍に向けて投げた後、そこに向かって火矢が放たれた

「あんまり調子にのらないで貰いたいね」

「そうそう。調子にのらないでね」

しかし、その矢がまるで見えない壁にぶつかったかのようにして突如火が消えて跳ね返されてしまった

何があったのかと仙が頭上を見上げると、その矢の影から二つの人影が現れる

片方は若い男、もう片方は若い女

両者刀を持っており、よくみれば止められた矢はすべて真っ二つに切れている

「小物の分際でよく刃向かうものだな」

「そうそう。よく刃向かうものだなー！」

びしっと俺に向けて刀を向ける女性に向けて仙は一歩後ずさる

手には護身用の刀を持っているとはいえ、剣道などやったことの無い仙にとっては振り回す以外の使い方が分からない

出来れば使いたくないのだが、ここは戦場。日本では無いのだ

自分の身は自分で守らなければならない

俺の前には何人かの革命軍の兵が居るが、どうにもあの男との戦力差は大きそうだ

何せ、３メートル越えの跳躍力に加えて横幅１０メートルから２０メートルの火矢をすべてはじき返した相手だからな

そんな猛者は此方にはひとりもいない

戦力、そしてその練度の違いをまざまざと見せつけられた俺は眼鏡を押し上げて相手を睨みつける

「大事に守られているところを見ると、お前が総指揮官か？指示とかも飛ばしていたように見えるが」

「そうそう。総指揮官なのか？」

「だったらなんだ」

「いや、総指揮官様がこんな前衛にまで出てくるなんて、よっぽどロルワートには兵が足りないんだな。もしかしてこれで全部か？」

「そうそう、これで全部なのか？」

男は辺りをきょろきょろと見回し、女は首をくたっと横に傾げた

その仕草に俺は歯ぎしりをたてた

確かにロルワートの兵はこの丘にいるメンバーで全員だ

二つの国の兵を合わせればもう少し数は増えるだろうが、この丘にいるのは３００名ほどのロルワートの革命軍だけだ

援軍を期待するには辛すぎる

今、エステルタとフェーミリアスの兵は後方とガルトニールの横からの奇襲を行って退路を断って一度は相手軍の混乱を誘った

結果として右翼が魔術で壊滅的な被害を受け、そこを切り捨てる形で現在ガルトニール本隊がこの丘を目指している

その前衛として出てきたこの二人の騎士の実力は恐らく、魔法があるこの世界の戦場でもトップレベルの実力を持っているはずだ

あんな人間がそうほいほいと沢山居るわけがない。たぶん・・・
あまり時間をとられればガルトニール本隊がこの３００足らずの兵を飲み込んでしまう

「後ろががら空きぞっ！！」
「あはっ！」

ギィンと音を立てて二つの銀色が押し合い拮抗する
ルーティが男の背後に回り、そして斬りかかったのだ
しかしその一太刀を女の方が剣を振り上げて防いだ

「ルーティ！」

「カンバラっ！矢数が少ない！一端撤退してあちらの軍と合流するぞ！」

「かるーいかるーいよー！！」

「おや、もしかしてこっちが総指揮官だったかな？」

軽いと言って男のルーティの剣を余裕の表情で受け止める女はケタケタと笑いながらルーティを押さえる

首をぐいっと後ろに傾けて振り向いた男は剣を鞘から抜いた

此方の方が強そうだと呟いて

「畜生っ！」

ルーティ一人にあの二人の相手は無理だ

そう判断した俺は咄嗟に剣を振りかぶって男に向かって斬りかかった

周りにいた革命軍の兵士数人が止める事すら躊躇う勢いで剣を振りかぶった

「おおおおっ！！」

しかし、人に向けて振るうには些か殺気が足りなかった

心の何処かでたたらを踏んでしまったのだ

気づく気づかぬではなく、無意識に、俺は躊躇っていたのだった

「最初に言わなかったっけ？」

「言わなかったっけー？」

どちらにせよ、そんな事は関係なかった

そこにあるのはただの実力差だけ

「小物のッ、分際でッ――――」

「んなっ・・・！？」

「調子にのってんじゃあぁ――――」

死んだ

そうなると理解出来た

気がつけば相手の刀が俺に向けて振り下ろされていた

俺の剣が相手を斬るよりもはやく、俺が斬られると理解できたのだった

その瞬間、走馬燈が駆けめぐった

従兄弟の結婚式や高校の修学旅行、友人の笑い声、母の作ってくれたみそ汁の味と、父の大きな背中と、そして彼女の笑顔が、一気に駆けめぐって、そして

目の前の光景に繋がった

銀色の刃に映る自分の顔が見えた

呆気にとられている、そんな自分の顔

そんな銀色の刃が一瞬にしてオレンジ色に輝き、俺の顔を掻き消した

声が――届いた――

『貴方の名を叫ぶ』（後書き）

原発含めて、地震や津波の被害が大変な事になってますね。自分に直接関係は無くても、それでも毎日心が苦しいです。ニュースを見て精神力がごりごり削り取られていくのが分かります。自分は蚊帳の外のくせに、被災者の方がもっともっと苦しくて辛いのにというのももちろん分かってます。でもそれでも自分が悲しまなくてもいいという理由にはなりません。自分は悲しみます。悲しまない方がどうかしている。自分に出来ることは募金ぐらいしかありませんが、一人でも多くの方が無事でいることを願います。同情や哀れみじゃありません。人として持ってるあたりまえの感情があるから私は辛いんです。なんか自分が何書いているのか分からなくなってきたので、このへんで締めます。小説に関係のない後書きで失礼しました

『温もりを確かめるように』（前書き）

血が出る注意

『温もりを確かめるように』

それを言葉で表すならば、それは火の翼だった

余計なものは何一つ無い、温もりを与え、汚れを燃やす、純粋なる炎

あぁ、それは、それは、それはそれは

怒りの声と共に・・・

「ウチの彼氏に何するげんてやああ！！」

「っくおっ！？」

「・・・・え？」

咄嗟にしゃがんで腕で顔を隠した俺はその聞き覚えのある声にん？と顔を上げた

いま確かに彼女の声が・・・

残り火が空中に消えていき、尾を引く炎が男を連れ去っていってしまった

「ラインッ！！」

と、ルーティと剣を重ねる女が炎に攫われた男に気をそらした
その隙をついてルーティが一気に力を強める

「うおおっ！！」

「んあっ！？」

小さな悲鳴を上げて地面に転がる女性
倒れてなお剣を放さぬのは、騎士である故のプライドか、それとも無意識か
それを見てルーティはすぐさま俺の前にまで駆け寄ってきた

「大丈夫か！？」

「女って力じゃねぇよありゃ！って、んな事より退くぞ！これ以上は押しとどめられん！」

その声の通り、矢の雨が降らなくなったとみるやいなやガルトニールの兵士達が我先にと丘を駆け上ってくる
あまり時間に余裕は無さそうだ

しかし――――

「何躊躇ってんだ!?」

「っ・・・・」

ルーティに腕を掴まれるが、俺は僅かな抵抗をしてしまった

俺は先ほどの炎の翼が通り過ぎた方向に視線を向け、つられてルーティも視線をそちらへ向ける

そこには激しく燃える二つの炎を纏った女性の背中があった

あの後ろ姿を、俺が見間違える訳がない

彼女の後ろ姿を見間違えるはずがない!!

「早苗っ!!」

駆け上ってくる兵士達や味方の兵士達の喧噪の中で、思わず俺は叫んだ

彼女に届いただろうか?

彼女は、ゆっくりと振り向こうとして――――俺はルーティに突き飛ばされた

「余所見余所見あはははははっ！！」

「っぐぁっ！！」

どしゃっと倒れた俺は直ぐに振り向き、そしてその赤さに言葉を失う

そこには、左腕を切断されたルーティが立っていた

そしてその後ろに、あの女の姿が見えた

狂気に、笑っている

「っ！！うおおっ！！」

だがルーティも騎士なりに意地見せた

斬られながらも彼は振り向いて女に向かって剣を薙いだ

切っ先が女の部分的に着けている鎧の無い腹部を的確に切り裂いた

「あああああああああ！？」

「っぐうぅっ・・・」

女の腹が横一文字に切り裂かれ鮮血が吹き出した
女は叫んで腹部を押さえて倒れ込む
しかし、腕を切り裂かれたルーティもそのままバランスを崩して地面に倒れ込む
その二人の行動の終わりに止まっていた神原仙の時間が動き出した
あわてて立ち上がり、ルーティに駆け寄る
肘から先が、１メートル離れた場所に転がっている
「ルーティッ！！」
血が止まらない
彼の下に血だまりが出来てゆく
「あ・・・あああ・・・」
頭の中が真っ白になった
なのに眼鏡についた彼の血が、どうしようもなく赤い

赤色が、消えない

膝をついた俺の隣で叫び悶え苦しむ女の絶叫も聞こえないぐらいに俺は頭の中が真っ白になってしまっていた

そんな真っ白な頭の中に、『自分のせいだ』という言葉だけが浮かんでは消えない。浮かんでは消えない

その言葉だけがたまり続けている

今は戦争中で、ここは戦場なのだという事だけが僅かに心に割り込んだ

そしてまた自分のせいだという言葉に埋め尽くされていく

目の前で苦しむルーティの姿とその血の赤さで、俺は完全に動けなくなってしまったのだ

「止血っ！！」

そうだ、血を止めないといけない

何を・・・何をすれば・・・

そこでようやく俺の頭は思考という機能を取り戻す

血を止める為には、腕を縛ればいい

その為には何が必要か

そこで俺は本やテレビを思い出した

俺は咄嗟に立ち上がって辺りを見回した

使えそうなものは・・・・・・・あった！

俺は自分の腰にある剣の鞘を腰から外す

そして服を半分脱ぎ、鞘から抜いた剣できる

それをルーティの腕に巻き、そして鞘にも巻き付けて締め付ける

「っぐぅ・・・」

「我慢しろっ！！」

たしか、止血帯法とかいったっけか

他にも方法があるのかもしれないが、俺は他の方法は知らないし、

この際名前なんてどうでもいい

この方法にも多少のリスクがあったように思うが、俺はそんな事は

忘れてしまった

それに彼の腕から吹き出す血をこれ以上見ていられなかった

血が少しずつ止まってきたのを確認して俺は締め付けている鞘を固定するためにもう一度服を巻く

ホッと一息をついたのもつかの間、女がゆっくりと立ち上がり、その影がルーティに覆い被さった

俺が顔を上げるとそこには苦痛に顔を歪める女が剣を片手に持って立っていた

「・・・！！」

「許・・・さない・・・嫌われる・・・嫌われる・・・嫌わ・・・わあぁ・・・あぁ・・・あああああああああああああ！！！」

叫びながら剣を振り上げる彼女

だがそれと同時に再び傷口が開いたのだろうか、腹部から血が噴き出し、女は苦痛に顔を歪めた

しかし女はそれを耐えてこちらに剣を振り下ろしてきた

その剣に先ほどまでの威力が無いのが目に見えて分かった

だが、それを頭の中で考えるよりも体が先に動いた

咄嗟に剣を持ち、女の剣を受け止めて膝立ちから立ち上がる

「あまり力を入れると、傷口が開くんじゃ無いのかよっ！」

女であるかどうかなどもはやルーティの中ではどうでも良くなっていた

がら空きになった、そのルーティに斬られた腹部目掛けて思いっきり蹴りを入れる

「あああああああ！！」

蹴り飛ばされて地面を転がる女はついに剣を手放して腹を押さえた

「痛い痛い痛い痛い痛い痛いいいいいいいい！？」

転げ回る女は涙を流しながら虚空に向かって叫び続ける

その光景に俺は鳥肌がたち、そして吐き気に襲われた

胃の中のものが逆流してくる

俺は我慢できずに胃の中のモノ全てを吐き出した

「ってえい！！」

十分に仙から距離を取ったことを確認すると早苗は男の顔を掴む手に力を込める

私は男の顔を掴んだまま思いっきり地面にぶつけると炎の翼を折りたたむ

確かに思いっきりやったつもりなのに、そこにはあまり手応えは無かった

バウンドして転がっていく男を見ながら私は着地する

どれほどの勢いが出ていたのかは分からないが、地面を削りながらもかろうじて着地に成功する

「頑丈なのか、私の筋力不足なのか・・・にしてもなんやこれ？炎の・・・尻尾？尾羽？」

ふりふりと早苗は腰の辺りから伸びている炎を動かしてみる

「まぁこっちは翼・・・でいいんだよね？」

そして背中から生えている炎の翼を大きく広げると火の粉が舞った

その割には熱くない

「にしてもなんなんこれ？」

脳裏に突如響いた声に言われるがまま、ある言葉を叫んだ途端この姿になってしまった

その後はもう無我夢中であまり記憶にない

「っててて・・・」

「ん」

ガシャリと胸についていた鎧を外して男が立ち上がったのを見て早苗は臨戦態勢を取る

炎の翼がより激しく燃え上がるのを早苗は感じ取る

「全く、なんだってんだ・・・」

「こっちが聞きたいねっ！」

話なんて聞きたくない。お前の声なんて聞きたくない

仙に剣を向けたのなら、私はお前を許さない

理由なんてそれだけで十分だ

なんだか分からないけど、体中に力が溢れてくる

男の大人相手なのに、私は負ける気がしない

こんな奴相手に、負けたくない！

「あんた、今あたしの彼氏に何しようとしたん」

「あ・・・？てめぇこそ、俺に一撃いれたくらいで浮かれてるんじゃねぇだろうな？」

睨み合う二人の間に火花が飛び散る

私はもう一度、この男を吹き飛ばしてやろうと大地を蹴って炎の翼を広げた

瞬間的な加速に辛うじて体や意識がついて行っている状態ではあったが、それでも相手をしっかりとその視界に捉える

思い切ってその右足を男の頭目掛けて回し蹴ろうとすると、男はその一撃を剣で受けようとしたので私は足を引いた

そのまま振り抜いていれば自分の足が切れていただろう

そして炎の翼を使って重心を移動させ、体の回転を逆向きにする

曲げた右足を伸ばし、その踵で相手の側頭部を狙う

反応しきれなかった男はその私の一撃を食らって再度吹き飛んでいった

丘をごろごろと転がる様を見て私は振り返って叫ぶ

「仙っ！！」

もはや背中の炎などどうでもよくなっていた

「はぁっ・・・はぁっ・・・・」

神原仙は目の前の自分の吐瀉物の匂いに耐えきれず、立ち上がって新鮮な空気を思いっきり吸って、吐いた

はやく・・・はやくこの場から逃げなければ

辺りを見回すとすでに半分以上の革命軍が撤退をしていた

未だ叫び続ける女を無視し、俺は急いでルーティを担いで撤退を始めた

「くそっ・・・大丈夫かルーティ！？」

「あ・・・あぁ・・・生きては・・・いる。糞いてぇがな・・・」

これまでこまめに洗ってきた洗ってきた唯一の元居た世界の服に血が付くのも顧みず、懸命に二人は丘を下る

向こう側へ見えるエステルタとフェーミリアスの軍へとルーティを治療して貰わなければならない

所詮は応急処置だ

「くそっ、もう少しだぞっ！」

そこへ小さく地面を響かせて一匹の生物が駆け寄ってくる

女の人を乗せているそれは俺とルーティの前で止まる
俺はその女の人を見上げる

「乗ってください！」

その女性は俺とルーティに手を差し伸べてきた
一瞬呆気にとられた俺だがすぐ思考を再開させると担いでいたルーティをその生き物の上に乗せた

「貴方も！」

「すまないっ」

ずり落ちそうになった眼鏡を押さえて俺は彼女の手を取った
生き物の膝に足をかけて引っ張り上げて貰うと女性は「しっかり捕まっていてくださいね！」と言って手綱を引いた

「君は・・・？」

「私はフェーミリアス聖王国、魔獣調教部隊のフォルン・レティッシェです」

「フェーミリアス・・・っ！！そうだ、早苗っ！」

俺はあの時聞こえた声を思い出した

あれは紛れもなく、小田原早苗の声だった！

聞き間違えるはずが無い

この謎の生物から俺は飛び降りようとする

しかし、それよりも先に俺の服をフォルンとか言う女が掴んでそれを引き留める

「待ってください！危ないですっ！！・・・って、えっ、サナエさんを知ってるんですか！？」

「知ってるも何も、俺の彼女だっ！！」

その言葉に、一瞬フォルンが神原の服を持つ手の力を緩めてしまった

その隙をついて神原がトトルの背中から飛び降りた

そして手短に落ちていた剣を拾ってフォルンへそう叫んだ後、神原は走り去ってしまう

「ルーティを頼む！」

「あ、はい・・・・って、え！？あのサナエさんの彼氏っ！？ってああっ！黒髪っ！？も、もしかしてカンバラさんなんですか！？」

と、フォルンが確認を取ろうと叫んだ時にはもう、その声は神原の耳には届いていなかった

戦場の音に乗って、彼の耳には早苗の声が木霊していたのだった

「さなえええええええええっ！！」

俺は力一杯彼女の名を叫び、力一杯剣を握り締め、力一杯走った

聞こえた

確かに、聞こえた

私の名前を叫ぶ、彼の声が

間違いなんかじゃ無かった

出会えた

仙が、仙がそこにいるっ！

あ・・・

そこには彼が居た

がむしゃらに走っている彼の姿がそこにはあった

やっと、やっと、やっとやっとやっと出会えた

私は小走りになって彼に駆け寄った

彼も剣を放り投げて私に駆け寄った

背中の炎の翼がゆっくりと消えていくのが見なくても分かった

なんだか、体から力が抜けていくような感覚に陥って足下がよたついてしまう

そんな私の体を、彼の手が抱きかかえてくれた

そして、ぎゅっと抱きしめてくれる彼の温もりに、私は涙を堪えきれなくなってしまう

「もっと・・・抱きしめてっ・・・」

「あぁ・・・ああっ・・・！！無事で良かった。本当に・・・良かった・・・」

あぁ、なんと彼は暖かいのだろう

あぁ、なんて彼は大きいのだろう

私はこんなにも、嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて嬉しくて嬉しくて、
たまらない

『命は灰へと燃え尽き新たな命となる』

どれほどの間、彼女を抱きしめていただろうか？

神原はゆっくりと体を離して彼女の顔を見つめた

あぁ、なんと愛おしい存在かと神原は彼女を見て思った

「こんなところで再会するとは思ってなかったよ早苗」

「私も・・・あ、あれ・・・？」

がくり、と早苗は膝をついて神原の服の裾にしがみついて笑う

「安心したから・・・かなぁ？力が入んないや・・・あはは」

その原因が神子化によるものだと知らぬが故に、彼女はそう思ってしまった

「確かに、俺もお前の顔を見れて安心したよ」

そう言って神原は早苗の体を支えた

その重みさえ、今の自分には彼女を感じる要素の一つであった

確かに、彼女は今ここに居るのだと再確認する

「とりあえず話は後にしよう。とりあえずこの場所を離れないとな」

「そう・・・だね」

丘を駆け上ってくる騎士達の足音や鎧がぶつかり合う音が近づいてくるのが分かった

もう時間はそれほど残されていない事が二人にはすぐに分かった

「よし、俺が背負う。掴まれ」

「う、うん。ごめんね」

手を差し伸べてしゃがんだ神原に、早苗は頷いた

「気にするな。こんな時ぐらい頼ってくれた方が彼氏として嬉しいもんだからな。これぐらいさせろ。それと謝って貰うよりお礼を言われた方が嬉しさ倍増だな」

「ありがと・・・仙」

「おっしゃぁ！逃げるぞ！！」

彼女がしっかりと神原に手を回し、そんな早苗を背負って神原は丘を走り抜ける

こんな場面じゃなきゃ、割と役得な状況のような気もするのになと俺は思った

背中の柔らかいのとかも、もっと堪能したかったりもするがそんな場合では無い

芝生を踏みしめ、丘を転けないように慎重に、それでも急いで駆け下りる

すぐ後ろに、ガルトニール軍の迫る音がきこえ、それが落ち着きを取り戻した神原の気を再度焦らせる

「疾風よ！裂き、貫き、射止めよ！ウィンズピック！」

「っぐ！？」

そんな中、突如背後から男の声が聞こえたかと思うと次の瞬間、神原は大きくバランスを崩して前のめりに倒れ込んだ

小田原早苗を背負っていたからか、受け身を取ることも出来ずそのまま地面に倒れてしまった仙は苦痛に顔を歪めた

「だ、大丈夫!?」

「あ、あぁ・・・大丈夫だ・・・」

「あっ!血が・・・!?」

神原の上から退いた早苗が真っ先に見たのは、神原の右足の切り傷がから流れ出ている血であった

仙は足を押さえ、その手についた血を見つめて歯ぎしりした

なんだ!?何をされた!?

飛び道具?いや、まさか魔法の類か?

辺りは何もない丘で近くには誰もいなかった筈だ

ならば一体何で足を切ったのだろうか?

そんな考えを吹き飛ばして俺は立ち上がった早苗に向かって叫んだ

「掠っただけだ!逃げないと・・・っ!?」

もしこれが魔術なら、その射程圏内に対抗策もなく何時までもい続けるのは自殺行為だ

魔術というものがどれほどの射程を有するのかは不明だが、少なくともこれ以上距離を詰められるのは良くない事は頭で理解できていた

しかしこの足では先ほどのように彼女を担いで走るのは不可能かも知れないと心の何処かで思ってしまう

「そう簡単に逃げ切れると思うなよ・・・名無しの雑魚にやられるほど、ラインドール・グリーニカの名は安くはねぇ筈だからな」

「そうそうっ！安くは無いんだぞーっ！ついでにニェカ・グリーニカの名前も安くは無いんだぞーっ・・っつつー・・・」

「おめーは黙ってろ。死に損ないの愚妹がマジで死ぬぞ。死にたいなら死んでもいいけどな」

その二人は兄妹なのだろうか

共通するグリーニカという名字や愚妹という言葉から神原は痛みを堪えながら考える

いや、待て。何故あの女の声がする！？

確かにあの女はルーティに斬られて痛みに悶え苦しんでいた筈だ

何故こうもけろっとした声を出せる！？と神原は足の激痛に耐えつつ顔だけを後ろに向ける

そこには先ほど早苗が吹き飛ばした男が立っており、そしてルーテ

ィが斬りつけた女が男に担がれてぐったりしていた

どうやらルーティが負わせた傷はかすり傷、という訳では無さそうだ

しかし血は止まっているように見える

あんな傷を負って、何故もう血が止まっているのかと仙は不思議に思うが、それを考える以上に足が痛む

「仙に何したのっ!?」

涙を堪える早苗の目を見たラインドールと名乗った男は剣を鞘に収め、やれやれといった顔で小さくため息をついた

「・・・そんな優しい目の人間がなんでこんな場所にいるのか全く理解できないね。戦闘系の魔術を見るのは初めてかい嬢ちゃん?」

「・・・」

「こいつは風の魔術。目に見ない、風の刃を生み出したり暴風で相手の動きを牽制したり出来る魔術だ。便利だぜ?何せほら」

男は手を銃の用にして仙の右足を狙う

「っぐあ!?」

「仙ッ！！」

俺の右足にもう一つ、真っ赤な切り傷が出来た

かすり傷程度の傷ではあったが、その痛みは尋常ではない鋭さを伴った

「はん。いたぶるのは趣味じゃねぇんだけどな。まぁ暇つぶしにはなるだろう？」

「暇つぶし・・・？」

早苗は理解が出来なかった

ここは戦場だ

殺し合いをする場所だ

その場に置いて、暇などという瞬間があるというのだろうか？と

「理解できないか？俺が暇な理由？」

まるで早苗の心を読んだようにニヤッと笑ってラインドールは語り出した

「ま、立ち話も暇つぶしになるか。俺は一応この遠征軍の第一部隊長、ま、前衛の指揮系統を預かってる身だ。とはいっても本来の役職はそんなちっぽけなもんじゃないんだけどな。戦う力があるかどうかってのはまた別でよ」

「なら・・・なんだっていうのよ」

「ま、それはどうでもいいか。こんな土地で戦闘する事になったのは何も予想外のことでもなんでもねぇ。戦場はこの物見の丘かロルワートでの市街戦になることは想定していた。ロルワート相手なら余裕とふんだ糞幹部がまぁ調子に乗って手柄をたてようと総司令官なんてやるからこんな事になるんだ」

ラインドールはそう言って背後の丘を見下ろした

そこには瓦解してバラバラに動くガルトニール軍があった

何故か総指揮官がトトル騎兵を連れて最前線に出て来ているわ、補給部隊は分断され退路も炎で断たれてしまっているわで酷い有様だ

大盾を持った部隊はほぼ壊滅状態。魔術を撃てない魔術師隊も似たようなものだろう

全く持って数の利を生かせていない

死んだ軍だこれは

自分が指揮すればこうもならずに済むというのに、なんて思いながらラインドールは戦場を見下ろす

「それに比べてそちらの指揮官は随分とした腕前と見える。この場合、攻めてきているこちら側の退路を断つ必要性は無い。火が収まるのを待てば住む話だし本隊が補給部隊から直接分断された訳でもない。それにも関わらず、その作戦の結果は指揮官の焦りを生んでミスを誘った。先手をうっただけの効果はきちんと出ているぞ。そちら側は指揮官が前線に兵を連れて出てきたことで補給部隊と右翼の兵達を捨てたことになって随分と戦いやすくなったんじゃないかな？」

「なら貴方はどうやってここまで来たの？あそこは土の魔術で上手く進めないようにしたはずだけれど」

「あぁ、そりゃぁあれだ。あれは軍には効果があったが、しかし個人には差して効果が無かったってだけのことさ。一部の例外が居るんだよ。目の前にいるだろう？ん？例外がさ」

ほらほらと片手を振る様子からもかなり余裕があるように見える

明確にどうやったかは口にしなかったが、つまり大軍を押さえる機能は果たしていた。しかし命令を必要とせず、彼のように個人で抜けてくる人間もまた居たという事だろう

なるほど、そこまで軍という集団から独立して動く人間がいるとは計算していなかった

「それに加えて面白い事をしているね。別の国と連携体制を取っていたとは思えないほど良い動きをしていたから全くの別行動かとも思ったけど、そうでも無いようだね。しかし――――」

男はそう言って丘からガルトニール軍を見下ろした

自らが率いる、その７０００の兵を

「しかしレイグウッドめ、面倒な事をしてくれる。おかげで少しばかり陣から出てしまったじゃないか」

ラインドールがまるで残念がるようにして丘を見下ろしたように、早苗には見えた

何を考えているのだと早苗は必死に男の思考回路を読もうとする

しかし、一体何を残念がっているのか、そしてここで話している事に意味などあるのか？

殺そうと思えば殺せる筈だ

足を怪我した男と、武器を持たない女が目の前に居るのだから

「さて、君たちはどこの出身なのかな？黒髪に黒眼。大陸広しといえどその服装があまりに異様な事ぐらいは俺にもわかるさ」

その質問に答える意味は無いと早苗は沈黙を貫いた

嘘を答えるにしても、あまり変な情報を口にしてメッキがはがれるのはよろしくない

そんな早苗の様子を見てやれやれと首を横に振るラインドール

「ま、喋りたくないなら別に良いけどね。どうせ死ぬ運命からは逃れられないんだからさ。あ、どうせなら君たち一緒に殺してあげようか？」

その方が本望でしょ？と付け加える

それに対し、早苗はゆっくりと口を開き、そして――

「お断りよ・・・まだ・・・まだ死ねる訳ないじゃないっ！！」

死はそんなに軽々しい物ではない

そう、意思を込めて男に叫ぶと男もその表情をムッとさせた

つまらない、という顔だ

まずいと早苗は思った

本能的に、まずいものを感じ取った

この男を飽きさせては行けないと咄嗟に思い、早苗は口を開いた

「そ、その・・・せ、仙と・・・その・・・ま、まだエッチな事もやってないんだもんっ！！」

「バカじゃねーのお前！？」

苦痛に耐えていた神原はブッ！？と吹き出し思いっきり早苗の頭をスパンと平手で殴った

何がどういけばそこでそんな発言を叫べるのだと神原は思わずむせてしまう

「ば、バカとはなによぉ！？私は何時でも覚悟は出来てるものっ！いつでもオッケーなんだからねっ！！」

と顔を真っ赤にして仙に叫ぶ早苗

ちょっぴり涙が浮かんでいる・・・ような気もする

演技かと聞かれれば、半分当たりで半分違う

なんで自分を殺そうとしている男の前でこんな事を言わねばならないのかというのを通り越し、人前でこんな会話をすることへの羞恥が早苗を襲う

「だからなんでそっち方面に直結したんだ早苗!?頭打ったのか!?」

「打ってないわよ!こっちだっていつまで経っても手出しされないから魅力がないのかもって傷ついてるんだからね!!分かってるの!?」

「分かんねーよ!?」

「ッ・・・ッハハハハハ!!」

そのやりとりに、顔をしかめたラインドールもついに笑い出してしまった

「面白いなお前等!いいぜ、お前等には特等席を用意してやる!!今面白い物を見せてやるぜ!」

早苗はホッと一安心した

どうやら今すぐ気まぐれで殺されるという事は無いようだ

しかしこの場から逃げる手段が早苗には思い浮かばない

時間を稼いだに過ぎないが、援軍が来るという保証は全くない
そんな命令を、早苗は絶対に出さないようにと忠告したからだ
――もし何らかの形で私が死にそうになっても、私を助けないで。指揮官になった私がもしそんな状態になったのだとしたらそれはもう作戦は瓦解して兵士達ももう私を守って戦えるような状況じゃ無いはずだから。そんな暇があるなら、その残った自分の命を守るために逃げる時間に使いなさい――
つくづく自分の命を無視した命令だと今でも思う
私を助けるぐらいなら、私を足止めにとでも考え、一人でも多く逃げて貰った方が早苗としては本望だったからだ
多くの命を奪った、奪わせた命令を出した人間が誰かに殺されたとしても、誰に文句を言えるだろうか
結局自分で戦場に突っ込んだのだから意味もない命令だったのだが、でも別に後悔はしていない
彼に抱きついて、温もりの中で果てるというのならばそれ以上に幸福な終わりは無い――いいや駄目だ駄目だ
まだ死にたくない
みんなで一緒に、仙と一緒に帰るまでは・・・っ！！

「ライン兄様。いよいよ実行に移すのですか？」

と、ラインドールに担がれたニェカ・グリーニカと名乗ったラインドールの妹が兄に尋ねる

まだ元気のないしゃべり方だが、あのときのようなパニックは起こしていないと仙は思った

「あぁ。これ以上待っても良い展開にはなりそうもないしな」

そう言ってラインドールは懐から小さな瓶を取り出した

その瓶の中には不思議な炎が漂っている

小さな炎はユラユラと瓶を照らしている

早苗はその光景に違和感を感じた

火が燃え続けるためには酸素、そして燃え続けるための燃料が必要になるはずである

燃える物も無ければ酸素も無い、あのような密閉された空間に炎は存在出来ない筈なのだ

「さて、何かが起きるか、それとも何も起きないのか」

ラインドールは小瓶を地面に置き、そして剣を抜く

剣を振りかぶり、そしてそれを小瓶に突き立てるかのようにして瓶を砕き、地面に突き刺さる

炎の種はそれと同時に剣にまとわりつくと一気にその勢いを強めた

小さな火種は一瞬にして剣を囲むように渦を巻いて、そして刀身を真っ赤に染め上げる

赤い光を放ち始めた剣に魔法陣が浮かび上がる

その光景を眺める早苗と仙は咄嗟に何かを感じ取った

特に、早苗の胸騒ぎが一段と高くなっていく

「ははっ！マジかよ！？おいおい、本当に本当だってのかよ！？」

剣に纏う炎が突如、大の字のように五つに分かれて大地を駆けた

炎はあっという間に大きな草原を五つに分断してしまい、その炎がとある地点で同時に制止する

そして炎は草原に五つの剣を浮かび上がらせた

赤みを帯びた五つの巨大な剣が空中にそびえ立っている。いや、その刀身の先は地面に突き刺さっている

「まずは一つ目だ！」

次々の地面から浮き上がる剣

浮き上がり、その刀身が地面から完全に抜けた半透明の剣はまるでガラスが割れるかのようにして砕け散り、空中に霧散していく

一本、また一本と砕けていき、そして五本全ての剣が砕け散ってしまう

すると今度はこれまで剣が突き刺さっていた地面から新たな物が突き出てきた

柱だ

剣と同じように、透けて見える五本の柱が地面から現れ、それぞれの柱に鎖が巻き付けられている

鎖は五本の柱の中心に向かって伸びている

しかし、その鎖は空中で何かを捉えているのである

肉眼では見えないが、巨大な何かがそこで鎖に絡め取られているのだ

「成功だ。言い伝えが本当で驚いたぜ！！」

「な、何をした！？」

仙が傷を押さえながらラインドールに叫ぶ

ラインドールは突如起こった戦場の異変に慌てるガルトニール軍を長めながら

「なら陣から人が出てしまう前に始めようかな。さぁ――――喰らえ！！」

ドンッと地面が突き上げるように振動したように神原と早苗は感じた

それと同時に大きく円を描いていた魔法陣が炎を吹き上げた

一瞬にして丘の麓を覆い尽くした炎はガルトニール軍の兵士達を半分以上飲み込んだ

ごうごうと燃え上がる炎の中で、いくつもの絶叫が木霊しながら燃え尽きていく光景に二人は息を呑んだ

これが現実なのかと、まるで地獄絵図を目の当たりにでもしているかのような気持ちになってしまう

「っははははは！！そうだ！もっと命を喰らって蘇れ！！」

この状況を狙って作り出したというのなら、一体この男は何者なのだと神原は思った

味方を炎の海へと誘い込んだとでもいうのだろうか？

一体何のために・・・

不気味な男の後ろ姿に神原は背筋が凍るような思いを抱いた

何故笑える

何故笑えるんだ

「お前・・・何してんだ・・・」

掠れた、それでいて聞き慣れた声がした

拳を握りしめた彼女が、再度叫ぶ

「何してんだって言ってんや！！」

「何って？察しがつかないのかい？この土地の伝説を知らない・・・様子だね、どうやら」

知っているわけがない

確かにこの世界に来て、言語や礼儀、物の名前や魔術の事なんかは一通り勉強したつもりだ

それでも、土地に伝わる伝説や歴史なんかまでにはこの短時間で両者手が回っていなかった

早苗は軍事のことで手がいっぱいになっていたし神原に至ってはそもそも王都から逃亡して森などで生活していた程である

「知らない・・・か。君たちはどうも異国風の出で立ちだからもしかしたらもっと、もっと遠くの場所から来たのかもしれないな。じゃぁこの光景を眺めながら少しこの物見の丘の話をしようか」

一言一言、男が紡ぐ言葉の間にもまた一つ、また一つと命が灰へと変わっていく

「ここにはとある魔獣が眠っている。九天の魔獣が生み出した一匹にして唯一九天の魔獣が恐れを抱いて封印したと言われる魔獣が」

「その魔獣が持つ能力は『不死』。その力を自身を生んだ九天の魔獣に奪われ、そしてこの何もない丘にたった一匹で封印されていた」

「不死の力を持つ故に、殺すことかなわず封印という形で今日までこの下に封じ込められていた」

「だがある仮説を元にすればそれが復活可能だという事に行き着いた俺とこいつはそいつを復活させる事にした」

「そして言い伝えは本当だった。バカな話だと最初は思ったが、フフ、本当ならそれはそれで好都合だと思っていたにすぎないからな。利はあれども損は無しってな」

「ま、何故って顔をしてるが、そこまで話す必要も無いだろう」

「どうせ、全員灰になるんだ」

「そして不死鳥の復活の糧となれ！！」

『生と死の化身』

「な、なんだこれはっ！？」

ガルトニール軍総司令官であるレイグウッドはトトルの手綱を握りながら、目の前で燃えさかる炎の壁の前で足止めを喰らう

突如目の前に炎の壁ができ、それらは大きな円を描いて自分たちを炎の中へと閉じこめていた

炎の円はいくつもあり、それぞれに軍が分断されてしまっていた

まず最も外側の炎の壁が軍を二つに分断し、また炎の内側には何重にも炎の壁が生まれており、縦に伸びていたガルトニール軍は完全にその数を活かすことができなくなっていた

「わ、分かりませんがレイグウッド総司令官！前方より膨大な魔力を感じます！」

魔術師の一人がそう叫んだ

前方、それは今まさに駆け上ろうとした丘の方角であった

「まっ、魔術は使えないのでは無かったのか！？」

普通に考えればもはやこの戦場は殆どのマナが消費されており、これほど大規模な魔術は発動できないはずである

しかし、今この戦場には火のマナが満ちあふれている

一体このマナはどこから来たのか？そしてこれほど大規模な術式を一体誰がどうやって行使したのか

この規模の魔術を使おうとすれば優秀な炎の魔術師が１００名近くは必要である

しかし、その人影はどこにも見あたらず、ましてやそれほどの魔術を使いながら何故未だにマナが戦場に満ちあふれているのか

それほどまでに大量のマナがこの戦場を満たしているというのか

「分かりませんが・・・とにかくこのままでは危険です！」

「ぐ・・・だがこの状況でどうしろというのだ！？」

「この場に留まっても良いことは無いでしょう。ですからあの炎を突破する必要があります。しかし、炎や熱が苦手なトトルが火に向かって走ってくれるかどうか・・・」

「トトルなどこの場に捨てて降りればいい！全員トトルを捨て後方の炎へとつっこめ！後ろの炎の勢いの方が薄い！」

「トトルを捨てれば今後のロルワート侵略の作戦に支障がでます・・・が、命あってのものですね。しかたありません・・・か」

そう呟いて魔術師の一人がトトルから飛び降りた

それに続いて他の騎士や魔術師もトトルから降りて後方の炎を見つめた

燃えさかる炎の高さは身長よりも高く、またその火力は見ただけで後ずさるほどの熱を放出して騎士達を怖じ気づかせる

「う、うおおおお！」

しかしそこで騎士の一人が意を決して炎へ向かって飛び込んだ

炎の勢いは衰えることを知らないかのように勢いよく燃えさかり、向こう側の様子は分からない程である

ただ、その向こう側からは先ほど飛び込んだ騎士の叫び声だけが聞こえてきた

苦痛に悶える、我を忘れた叫び声だ

その声がより一層に騎士達を怖じ気づかせる

「お、おい！？大丈夫か！？」

レイグウッドが炎に飛びこんだ男に向かって声を掛けるが、返事は無い

叫び声がやがて消え、全員が沈黙した

そこへ、背後から炎を突き抜けて男が一人飛び込んできた

ガルトニール軍の鎧を着けているその騎士の全身は炎に包まれていた

「うあああああ！！あついいいい！！」

「うわあ！？」

自分たちよりも少し前を走っていた騎士が外へと向かって脱出を試みた、というところだろうか

その炎は異質だった

鎧が燃えている

体中が燃えている

たった一瞬炎に触れただけで、全てが燃えている

その男の炎を消そうと一人の騎士が駆け寄ってトトルに積まれてい

た布で叩いて消そうと試みる

しかし、その炎に布が触れた瞬間、一瞬でその男へと炎が伝い、叫び声が二重となる

普通の炎とは違うようにこの場に居た誰もが感じ取った

「だ、駄目です！」

咄嗟に先ほどの魔術師が叫んだ

「この炎は触れただけで伝染します！炎のマナが地面と空気以外の物に触れた瞬間、マナが伝わって燃えるみたいです！」

「バカな！？そんな魔術、き、きいたことも見たことも無いぞ！？」

魔術師はそこで顔をうつむかせて

「しかし・・・私にはそう・・・見えました」

そう伝えた

マナを黙視できない司令官は歯ぎしりする

「こんな・・・物質へ潜り込んで破壊するマナ見たことありません・・・」

「で、ではどうしろというのだ!?ここで俺に死ねとお前は言うのかぁ!?」

崩れ落ちた魔術師の襟首を掴んで持ち上げるレイグウッド

その目に映ったのは男の涙と、そしてその背後に映る炎の壁

「私には、わかりません・・・総司令官ッ・・・・!!」

「くっ・・・!!」

その魔術師を地面へと叩きつけ、歯ぎしりするレイグウッド

「こんな、こんなところで死んでたまるか!俺は・・・俺はこんなところで死んで良い人間じゃないんだ!そうだろう!!俺はもっと、もっと、こんな、こんなはずじゃ・・・あ、あああぁぁ・・・誰か・・・誰か俺を助けろっ!!」

その哀れな総司令官の姿を見た騎士達は――彼を見限った

なぜ自分たちはこの司令官の下で働いているのだと

騎士の一人は思わず口にしてしまった

「貴方は、私たちの上に立つ人間じゃ無かったんだ。私たちより下の、人間だった・・・」

そう、誰もかが思わざるを得なかった

この場にいた騎士と魔術師はその司令官を見限ったのだ

幻滅した、と

「き、きさまぁあああああ！！」

レイグウッドがそう呟いた騎士に向かって剣を振り上げた瞬間――

――炎が全てを塗りつぶした

深紅に染まる炎は外側の円から順に塗りつぶされていく

命が果て、燃え尽きる

骨は、肉は、皮膚は、内臓は、心は、全て灰となって中央へと渦を巻く。燃えさかる炎の熱気に巻き上げられるように灰は竜巻を作る

炎で赤く染められた灰の竜巻は摩擦で雷が起こり、周囲にその音をとどろかせる

まるでその竜巻は竜のように鳴き、竜のようにうねりながら天へと舞い上がる

その光景はまるでここが普段小鳥がさえずり、小動物が草を嚙る穏やかな日常を脳裏から吹き飛ばすかのような勢いでこの場にいた全員の脳裏に焼き付けた

その巨大な竜巻に、影が映り込む

巨大な影だ

それは大きく左右に翼のような物を広げ、自身を包み込む竜巻を一気に吹き飛ばした

それは確かに鳥であった

巨大で、まるでその炎を羽毛にしたかのような色をした鳥だ

長い尾羽、チリチリと空気を焦がす翼、鋭い眼光が眼下の人間達を見下ろした

死と生の狭間から、それは見下ろしていた

「――――ッ！！」

咄嗟に目を背けた

一瞬で、目の前にあった命がこの世界から消えたのを感じた早苗は背けた目を閉じてこれが夢であることを願った

戦争を指揮する立場になったとはいえ、命を奪う事には躊躇いを無くし、悲しみを失う事は無かった

「なんで・・・」

鎖が全て吹き飛び、空中に消えていく

魔術か何かで捉えられていたそれは大きく火の粉をまき散らしながら高らかに叫んだ

「こいつは・・・でけぇな・・・」

その巨大な火の鳥の大きさに、見上げながらそう声を漏らした男の表情を見て早苗は理解に苦しんだ

何故、笑えるのかと

そして神原はその巨大な火の鳥を見て、早苗の姿を被らせた
先ほどの、炎の翼を纏ったかのような彼女の姿を思い出させるその火の鳥を見上げる
何か、関係があるのだろうか・・・？
そこまで考えいや、勘違いだろうと神原は痛みを堪えながら早苗へと視線を移す
関係あるわけが無い。あるわけが無いんだ

『我を起こしたのは誰だ?』

「俺だ!!」

四人の脳内に響くその言葉は恐らく頭上の巨大な火の鳥が問いかけたものだろう
その問いかけに、間髪入れずに男は火の鳥に向かって叫んだ
その光景を早苗、神原、そして男の妹であろうニェカもが黙ってその光景を見つめていた
ただ黙って、見つめるしかできなかった

『我は不死鳥。生と死を司る神獣にしてこの地を治める者。何を望み我の封印を解いた？』

「見返りを望んで」

『見返りか・・・。良いだろう。我に再び空を見せてくれたお前に一つだけ、我ができる事をしてやろう』

ラインドールはニヤリと笑った

まるで目論み通りという文字が顔に出ているかのようだと早苗と神原は思った

「なら、俺の使い魔となれ！！」

「な・・・！？」

「使い魔！？」

その言葉は二人が住んでいた世界でも耳にしたことがある言葉だった

日々の生活において使われる事は少なかったが、それでも漫画やアニメや小説などで見聞きした覚えが二人にはあった

そしてこの世界に置いて、二人の耳にこの世界の言語が日本語になって聞こえている以上何らかの翻訳をされている事は明らかである

もし、此方の解釈と同様の翻訳をされているならば、その言葉はアニメや小説などと同じ意味で扱われる事になるだろう

ならばこの男が言っている事はつまり、この巨大な火の鳥を手下にしようと言う事なのか

『それはできない』

しかし、火の鳥はそれをできないと拒否した

男は小さく舌打ちし、「何故だ!?」と叫んだ

『我は支配することを望まず、また支配されることを望まない。何故なら私は過去に支配され、そしてその支配者に封印されたからだ。故に我は自由を望む。自由を失い、その自由を取り戻せたことには感謝しよう。しかしお前の使い魔となるという事は、お前に支配される事になるからだ。支配に関わる願いは叶えられない』

「・・・そうか。ならもう一つの方を選ぶとするか」

あらかじめ二つの考えがあったのだろうか

この不死鳥を使い魔にする。その願いは叶えられなかった

叶えて貰っても困る願いだったが、それはもう一つの方も大差ないだろうと早苗は予想した

「お前の魔力を俺によこせ」

「そんな！そんな事をして体が持つわけ無いだろう！！」

早苗は思わず叫んだ

僅かではあるが、魔力や魔術については戦争に関わってくる事として勉強した早苗はその無謀な願いに叫ばずにはいられなかった

生身の人間が耐えられる事ではない

その不死鳥が纏っている魔力がどれほどのものなのか、それが早苗には分かったのである

『それもできない』

「・・・」

『何故ならこの力は人であるお前が扱うことができないからだ。魔力であり、魔力ではない。我の力の源は生であり死である。生が死となり、死が生となる瞬間に生まれる莫大な力こそが我の力の源。ならば生の力だけで動く人はその生と死の入れ替わりに耐えきれない。我の力を扱えるのはそこの我が神子のみだ』

そう呟いて小さな火の粉がポッと早苗の目の前で灯った

その灯火はゆらりとゆれ、そして座り込んでいた早苗の両手に収まった

暖かな炎、冷たい炎とが一瞬ごとに入れ替わりで現れる不思議な炎だった

「神子・・・？なんだそれは・・・」

「神子？え？私？私が神子？え？神子って何？」

早苗を見下すラインドール、そして突然不死鳥の神子だと言われて戸惑いを隠せない早苗

『この地で生まれ、そして散っていった瞬間に生まれるその力はこの大地へと返される。お前がその鍵である。そしてそれこそが本来の我の役目』

「私が・・・？」

『この地も緑豊かな森となろう。豊かな川が流れ、生命で溢れ、死で溢れる大地となろう。その当たり前の自然の為に、お前が我の初めての神子となったのだ』

不死鳥が一体何を言っているのか、早苗には全く理解できていなかった

しかし、自分が何らかの責務を負っている事だけは感じ取れた
そしてその事に、男が苛立っている事も感じ取った

「ふぅん。ま、言うこと聞かないなら仕方ないな。それ以外に特に願いなんて無かったし」

『我の肉体の為にお前は多くの生が死となる力をを生け贄に、そして我の肉体の復活を促した。扉の封印が砕かれた事で我はこの世界に舞い戻った。冥界の扉を開く鍵、一体何処で手に入れた?』

「ん?あぁ、種火の事か。扉ってのは閉めたときの鍵が無いと開かないっていうからな。ならあの種火はお前を閉じこめた奴が使ってたものなのか?」

『・・・そんなものがまだ残っていたとはな。何処で手に入れた?』

「さぁね。変な男がくれたのさ」

『誰だ』

「知らない男さ。通りすがりのただの男。ついでにこれもくれた」

ラインドールは懐から何かを取り出した
それは氷の入った瓶だった

氷は瓶の中でカラリと音を立てて不死鳥の放つ炎の色に染まる

『それは・・・』

「おや、これが何かご存じで？」

『あぁ、知っている。一度だけその氷を見たことがある』

「ほうほう。じゃぁあの男の言う事は案外本当なのかもな。さっきの種火の話だって本当だったし」

『なるほど。それで我を殺す気か』

「ご名答。抵抗されたときの保険って事でね。でもまぁ、ねぇ・・・なるほどねぇ。それでお前を殺すという表現になるのか。生は死。死は生。なるほど。死ぬことが無い不死鳥にとってはこれが死ぬことに値する訳か」

『やってみろ。人間風情が、そのような欠片で我を殺せるかどうか、試してみるが良い』

不死鳥は全員の脳内にそう言い残して巨大な翼を広げた

火の粉が舞い散り、その巨大な尾羽を棚引かせて不死鳥は上空へと舞い上がった

と同時に重く熱い空気が４人の体を吹き飛ばした

真っ先に体勢を立て直したのはラインドールであった

そのラインドールの横をニェカが転がっていく

突き刺した剣を抜き、そして丘の上空へと舞い上がった火の鳥を見上げてラインドールはニヤリと笑う

そんな男とは反対方向に飛ばされた神原と早苗はというと、こちらもやはり神子化して疲労する早苗と足を怪我している神原もごろごろと丘を転がった

人が転がるほど急激な斜面では無かったがあまりの風力に三人はなすすべもなく、急激に丘の中心から離れてしまう

その風は瞬く間に丘を駆け抜け、全ての炎を消し去ってしまう

それまでそこにいた筈の人影が、一つも無くなっている

文字通り、跡形もなく

「さぁ、盛り上がりはここからだぜ！」

男はそう言って小瓶の蓋を開けて中の氷の欠片を取り出した

『生と死の化身』（後書き）

毎度のように遅くなって楽しみにしている方々には何と言っていいやら・・・

『乱入者』

（この氷の入った瓶をあけ、その氷に命令をするとそれはそれは従順に従う最強の人形が出来上がります。注意して欲しいのは効果は一時間しか無いこと、そして貴方自身に刃向かわないように気をつけて命令をすることですかね。では、頑張ってくださいね）

ラインドールは男の言葉を思い出しながら瓶の蓋へと手をかける

あの男は俺を使っているつもりだろうが、そんなことはどうでも良い

俺がこれを使い、あの男がそれを見る

俺にデメリットなんてないのだから、この申し出は受けて損は無いはずだとラインドールは踏んでいた

瓶の蓋が外される

それと同時に強烈な冷気が瓶から溢れだした

冷気は空気中の水分を凍らせているのか、一瞬にして瓶の口を凍らせてしまう

思わずその冷気に驚いたラインドールはその手を離してしまい、瓶

は地面に落ちて割れてしまう

不死鳥の出した炎による熱で高まっていた気温が一気に下がり、そして氷は急速に大きくなり何かを形成していく

氷の四肢ができ、氷の尾ができ、そして氷の牙ができる

それは言うなれば狼の姿をしていた

早苗と神原は咄嗟にそう感じた

氷の狼だ

それがあっという間に4体に増えていた

「へへ、おい、お前等。あの鳥の化け物を凍り漬けにしろ」

その力が自分のものにならないと分かるやいなや、その判断を下し、後かたづけへと入るラインドール

そして氷の狼達は、氷の喉に反響する高らかな遠吠えをあげた

「お、始まったか」

その様子を遙か彼方より見つめる男が居た

巨大な翼を広げた不死鳥の大きさは、近くで見たらどれほど大きいだろうかと想像する

到底自分ではかなわないのだろうと思いながらも、いずれは――――と、吸鬼であるニールが呟いた

空から見る地上では一体何が行われているのだろうか

確かめたいが、あまり近づけば不死鳥に気がつかれてしまう

それだけは避けないといけない

まだ接触するには早すぎる

「はてさて、貴重な資料を分けてあげたんだ。面白いデータを期待してるよ」

ニールの手にもまた、ラインドールの持っていたのと同じ氷が入った瓶があった

「もう少しで、この研究も最終段階へと移行する。フフ・・・僕の研究はすでに神の領域へと足を踏み入れている。その力を手にするのも、あと少し」

そう思わないかい？アクアラグナ？

そう言葉を投げかけられた存在はゆっくりとまぶたをとじ、そして青色に光る美しい翼を広げ、そして空を泳ぐようにして飛び去ってしまう

水色の髪を青色の空になびかせながら

「・・・。もう君はその力を手にしているんだから、まぁ僕の言うことに興味なんて無いか」

不死鳥は炎の翼を羽ばたかせる

その炎の翼から飛び散る火の粉――火の粉と呼ぶには大きすぎるくらいの炎の塊を氷の狼目掛けて羽ばたく風に乗せる

氷の狼の体長は1メートル前後であったが、不死鳥の飛ばしてくる炎の塊は3メートル近い巨大な炎だ

一瞬にして物見の丘は再び炎に包まれる

それを巧みに避けながら氷の狼は不死鳥へと接近する

不死鳥は空中だが、地上からは数メートルしか離れていないために氷の狼の射程には入ってしまうのだ

確かに不死鳥は空へ逃げればそれでいい

しかし、そうなるとその氷の牙が向かう先は何処になるか

それが分かっているからこそ不死鳥は逃げるに逃げられないのだ

氷の狼は不死鳥との距離を着実に詰める

不死鳥が大きく翼を横に振る。すると大地から炎の壁が吹き出した

その炎の壁は一瞬にして氷の壁へとなってしまい、壁を乗り越えて

氷の狼が不死鳥に襲いかかる

氷で出来た牙と爪が不死鳥に触れるか触れないかのところで狼は一

瞬にして気化してしまう

解けて液体になるのかと思いきや、そのまま熱で蒸発してしまう

倒したかに思われたが氷の狼は再度結晶化して復活すると、不死鳥

を取り囲んで吼える

４つの魔法陣が浮かび上がり、その中心に巨大な魔法陣ができあがる

その中心には不死鳥がいる

途端に魔法陣が光り輝くとガキンと音を立て、丘に巨大な氷の柱が

生まれた

不死鳥が一瞬氷の中に閉じこめられたかのように思われたがその氷

もまた一瞬にして気化してしまう

解けて真っ二つになった氷の柱が巨大な音を立てて崩れ落ちる
その煙が晴れると両者が丘の上で対峙する姿があった
片や燃えさかる炎で空気を焦がし、片や痛いほどの冷気で空気を凍て付かせる
丘がまるで熱と冷気によって分断されたかのような状況である
何とかしてこの場を離れたい神原は傷を負った足をかばいながら、何とか早苗の近くまで這ってきた
背後では戦闘音が聞こえてくる
「早苗！今の内に離れるぞ！」
静かに、しかし急かすようにして神原は早苗に声をかける。しかし
「で、でも・・・体がっ・・・」
早苗の体は未だに自由に動かないままである
神獣化のリスクを知らなかったので無理もないが、それにしてもたった数分使っただけでこの疲労感である

今後使う場面があるのだとすれば、それはかなり考えて使用しなければ後が恐ろしい

足を怪我した神原と疲労で動けない早苗

その両者を影が覆い隠す

其処には一匹の氷の狼が、二人を氷の瞳で見下ろしていた

その後ろ、不死鳥は三本の氷の柱に身動きを封じられていた

氷が溶けるたびに、再度結晶化する

炎に溶かされるよりも早く炎を凍らせていき、不死鳥の姿はすでに半分凍っていた

不死鳥の叫び声が丘に響き渡る

二人は知らなかった。元々封印されていた不死鳥に宿っていた力は少ないという事を

二人は知らなかった。氷の狼は神獣を象っており、その力を宿している事を

絶対的な強者が、目の前で苦しむ様を、二人は見ている

そんな二人を、氷の狼が見下ろしている

まるで時間が止まったかのような、そんな気さえした

そして意識を戻した時には、早苗の目の前に氷の口が開かれ、そこに覗く氷の牙が今まさに早苗に襲いかかろうとしていたのである

『守りたいか？』

冷たい声がした

俺は迷わず叫んだ。「当たり前だ！」、と

神原は咄嗟に痛む体に鞭打って、氷の狼の前に飛び出した

早苗を庇うかのように

早苗を守るかのように

両手を広げ、立ちふさがった

『それはお前の命よりも大切なものか？』

また同じように答えようとして、そんな事を考えるまでもないと叫ぶ。「答えるまでも無い！」、と

すると謎の声は

『・・・いいだろう。そのお前の意思の強さ、認めて助けてやろうじゃないか』

冷たい声は、脳内から現実の世界へとすり替わるようにして言い放つ

『随分と情けない姿だな、不死鳥よ』

巨大な影が、どこからともなく現れた

氷の狼のうち二匹が逃げ遅れてその現れた影に踏み砕かれ、距離を取った二匹の氷の狼がうなり声をあげる

が、その二匹の氷の狼もまた、突如地面から飛び出した氷の柱によって木っ端微塵に砕け散る

生き物を殺した、というよりも氷を砕いたという表現の方が正しいのだろう

現れた影を取り巻くように、冷気が吹き荒れる

それは巨大な狼であった

しかし先ほどのような氷で出来た狼ではなく、全身を白い毛で覆い、その体の一部が凍っているように見える

丘に生える草木が、白い狼の足下を中心にして一瞬のうちに凍結する

『悪かった。寝起きでな』

『随分と長い昼寝だったじゃねぇか？それよりこいつはどういう事だ？』

溶かすのではなく、氷を砕きながら不死鳥はゆっくりと地面に降り立った

その近くへとのっしのっしとゆっくり歩み寄る狼

『あの男に聞いた方が早いと思うが』

『そうか。あの男が氷狼を出したのか』

狼は振り向いてラインドールを見つめる

ラインドールはジッと突然現れた狼を見つめている

ラインドールはジッと見つめ、そして観察をする

この狼は恐らく神獣であると確信していた

自身が甦らせた不死鳥と同じ空気を纏っていると感じるのである

本来、その姿を見ただけで人は神獣に恐れや敬意の念を抱くが、そのどちらも抱かないラインドールの姿を見て狼は興味を抱く

自分を見て何も感じない、その胆力に

『我は氷狼の王、氷狼王。人間。こいつをどこで手に――――』

と、狼がラインドールに、今砕いた氷の欠片を蹴り飛ばした

ラインドールと氷狼王の間にその氷の欠片が転がり、狼はその氷について問いつめようとしたのだろう

そこへ、ラインドールと狼の間にザッと何かが割って入るとその氷の欠片を踏み砕く

それは人の姿をしていた

もう少し詳しく言うならば、水色の髪で歳はまだ小さく１０代のように見える

驚くべきはそのスピードか

ラインドールはもちろん、狼にもその姿をしっかりと捉える事が出来なかったのである

不意をつかれ、一歩後退る両者は警戒をする

『何者だ人間』

「何者だてめー。次から次に割り込んできやがって」

両者は突然割り込んできた謎の少女に何者かを問いかけるが少女は口を開こうとしない

ラインドールは剣をしっかりと握った

其処へ不死鳥が声をかける

『氷狼王よ、油断するな。何かおかしいぞこの娘』

『言われなくとも感じている。似ているようで違う・・・』

氷狼王と呼ばれた3メートル近い大きさの白銀の狼はうなり声を上げ、小さな少女を威嚇する

うなり声をあげるたび、体中からあふれ出す冷気が丘を包み込む

その冷気にも、氷狼王の威嚇にも動じない少女は、ラインドールよりもさらに不気味さを感じ取る

それに加え、似ているようで違う、とある能力を持つであろう空気を纏うその少女に不思議さを感じた

無言の少女は静かにラインドールを見、首を反対側に氷狼王を見る

「お前もあの狼の仲間か？」

突如現れて氷の狼を砕いた氷狼王、その後にすぐさま現れた少女はラインドールから見れば氷狼王と仲間のように感じてしまうのも無理は無かった

この状況をどう判断し、どう行動すればいいのかがラインドールには分からなかった

「おい、クソガキ！ここはお前のような――っ！？」

キィンと鋼どうしがぶつかり合うような甲高い音が響く

ラインドールの目の前には右手に魔力で作った手刀を振り切った体勢の少女が、死んだ目でこちらを見ていた

一瞬剣を抜くのが遅れていれば、この首は飛んでいたことであろう

体勢を入れ替え、再度剣と手刀がぶつかり合う

それ以前に、なんだあの魔力の使い方は？さっきの女といい、最近は魔力を体に纏うのが流行ってんのかよ糞ッ！

そう脳内で舌打ちをした男はバックステップで距離を取る

追撃は来なかったが、少女はその自分を見ているようで、どこか遠くを、焦点の合っていない瞳に苛立つ

俺を見ずに一体何を見ているのだと

「!?」

そこでラインドールの視界が逆転した

天が地に、地が天に、そして天と地はぐるりと回転する

何が起こったのか、それを脳内で判断するよりも早くラインドールは地面に叩きつけられた

宙を舞っていたのか、俺は?

それを理解し、あぁ、投げられたのだとラインドールは投げられてから数秒遅れで気がついた

そして自分を投げたであろうあの少女の力に驚き、その少女は今氷狼王の目の前で、右手の手刀を振り上げている光景をラインドールは目にする

シュンッと振り下ろされた手刀は氷で覆われた氷狼王の前足に阻まれる

そして巨大な体を反転させた氷狼はその巨大な尾で小柄な少女を吹き飛ばした

体が軽いからか、あっけなく宙に飛ばされた少女はそれでも体勢を空中で立て直す

そして今度は先ほどの早苗と同じように、手刀のような魔力を体に纏う

魔力は手と足、腰から伸びる長い尾、そして翼のようなものへと形を変える

いや、翼というよりかは、手足にも存在する水かきのような形状からヒレのように見えなくもない形をしていた

鋭い爪と水かきの魔力を手足に纏う少女はそのままスタッと地面に着地する

そして一気に氷狼王に接近する

右手と左手の魔力を再度刀のような形に変形させる

氷狼王は大きく跳躍し、後方へと回転する

その氷狼王の後ろから現れた不死鳥が翼を大きく振るい、熱と炎が入り交じる強烈な風が丘に吹き荒れた

それまで氷狼王の足下に張っていた氷が一瞬で溶け、その熱風は少女を飲み込んだ

完全に神獣がこの少女を敵と見なして攻撃しているのは、誰の目にも明らかである

その対応は、この戦場で多くの命を奪ったラインドールよりも厳しいものだ

それはつまり、神獣はこの少女の力に恐怖、あるいは危険や異常を感じているということなのである

少女は大きく手を交差させ、そしてシャンッと魔力でできた刀を擦り合わせて体を横にした

左手を突き出し、そして右手を思いっきり熱風に向かって振り下ろす

その手刀の後に巨大な水の斬撃が生まれ、まるで空間を水で切り裂くかのようなすさまじい音を立てて熱風とぶつかった

途端に水は蒸発し、真っ白な蒸気が丘を埋め尽くす

その蒸気すら、熱風は押し返し、あっという間に蒸気が晴れる

そこに少女の姿は無い

少女の姿は後方へと下がった氷狼王と不死鳥の間に立っていた

そして両手を二匹の神獣へと突き出す

すると二匹の足下から巨大な魔法陣が浮き上がり、地鳴りが起きるとそこから大量の水が吹き出してきた

その勢いはすさまじく、一瞬にして巨大な神獣ですら宙に吹き上げるほどの威力であった

『ぬお・・・お!!』

『ぬぅううううっ！！』

二匹は力を込めて水を振り払おうとする

『何という力だ・・・！！』

『バカな、押し返せんだとっ！？』

炎の火力が上がり、氷が水を浸食しようとする

しかし、水が蒸発するよりも先に不死鳥の体を水が飲み込む。水が氷るよりも早く、押し寄せた水が氷狼王の体を突き上げる

不死鳥と氷狼王、その両者ともが神獣であり、その神獣を拘束する実力はまさに、神にも劣らぬ力である

『叫べ我が神子！死にたくなければ、守りたいものがあるなら、叫べ！！』

その狼の声が神原の耳に届き、神原はその身に魔力を纏わせた

「やめろおおおおっ！オォーバァーアビリティイー！！」

氷で覆われた足を、その少女に向かって蹴りはなったのは神原だった
突然の襲撃であったにもかかわらず、少女は右手でその蹴りを弾く
神原もこの少女には躊躇っていけないと感じてはいた
しかし、僅かながらに人を傷つけることに抵抗を持ってしまう
その中途半端な蹴りはあっさりと弾かれる
が、神原はその勢いで今度は逆の足を振り上げた
その足にも氷がまとわりついている
今度は少女は弾いた逆の手で防ぐ
小さな体であるにもかかわらず、その氷の重さも乗った一撃を難なく受け止めると右手の魔力を刀の形状へと変化させる

「どうとでもなれっ!!オーバーアビリティィ!!」

そこへ早苗が炎の翼を広げて突っ込んだ
高速で突っ込んだ早苗が右手で少女の襟首を持って地面すれすれを

飛行する

二度目の神子化をした早苗は、握った少女を思いっきり遠くへと放り投げる

二、三回バウンドし、手をついて体勢を立て直す少女に神原が追撃を行う

立ち上がった少女の腹部に、今度は綺麗に氷の足による蹴りが決まった

蹴り飛ばされた少女はものすごい勢いで地面に激突し、大きな土煙を上げて転がった

荒い息をあげる神原と早苗はその少女の行方を目で追った

一体何故、あんな少女を自分は攻撃してしまったのだろうか、そういう感情が二人の中で渦巻く

敵か味方か分からないのに、全く関係のない人間だったかもしれないのに

しかし、神原と早苗はそんな少女に恐怖を抱いていた

神獣達と同じく、あの少女を敵だと判断したのである

そこでようやく地面から吹き出していた水がはじけ飛び、神獣が解放される

氷狼王と不死鳥は地面へと墜落し、炎と氷が土煙に混ざって舞い上

がる
そこで早苗と神原も神子化が解けて地面に崩れ落ちた

「っあ・・・こりゃ・・・辛いな」

息を荒げ、神子化によるリスクの大きさを知る神原
体中の力が抜けてしまったかのように、体に力が入らないのである
そこで神原は冷たい視線を感じた
少女が、見下ろしてた
まずいと思いながらも、体が動かない
じわりと汗が額を伝う
一瞬の静寂
少女はふと上を向く
そして大きく跳躍するとそのヒレのような翼を広げてどこかへと飛び去ってしまう

「・・・助かった・・・のか？」

周囲を見渡すとその丘は最早、原型を留めていない程の有様であった

この後、ラインドールは居なくなった指揮官の代わりとなり、これ以上の進行を不可能だと判断すると撤退を命じた

折角不死鳥を甦らせたというのに、その力が自分の物にならないとなるやいなや彼はその神の力を諦めた

しかし、その強大な力を目の当たりにし、自分の持つ力のひ弱さを知った彼は心に誓う

誰の物でも無い、自分だけの、自分自身の力を手に入れる、と

ガルトニールの大軍を打ち破った勝因として、真っ先に上げられるのは神獣だろう

伝説と語り継がれる神獣出現の衝撃がこの戦争に参加した騎士達の心に深く刻み込まれた結果であろう

そのせいか、この戦いは後に鳥狼守護戦争と呼ばれることになる

この戦争を切欠に、この物見の丘には巨大な『不死』と『氷狼』と呼ばれる二つの巨大な砦が建てられる事になるのだが、それはこの物語には関係のないストーリーである

「どうだった?神獣と神子は?」

「・・・一対一なら・・・勝てる」

「そう。それはいい結果だ。体に違和感は無いかい?」

「無い・・・・ただ肋骨が一本折れたと思う」

「それぐらいならすぐに治せるさ。それにしても、随分と派手にやったね。よくもまぁ神獣二匹と神子二人を同時に相手にできたものだよ。僕なら絶対やらないね」

「そう」

「さ、これで大体の実験データは揃った訳だ」

ククッと笑った男は息を大きく吸い込んだ

「もう少しだ。もう少しで僕は神の力を手に出来る」

そんな男の様子を、後ろから追いかけるようにして飛ぶ少女は見つめていた

その表情は哀れみ、だろうか

それとも無関心、だろうか

空は少女の曇った心とは正反対の清々しい青さで少女を照らしていた

しかし、前方に広がる巨大な雲に近づくにつれ寒さが増していく

雪がちらつき始めた

『乱入者』（後書き）

プロットは出来ているのに何故かすらすらと話が進まず執筆が遅くなってしまった元凶の話。時間が掛かった割には完成度は高くない。
間章はあと一話で終わり・・・のはず

『壊れる心』

私は、誰？

君の名前は・・・アリス。

アリス？

そうだよ。綺麗な響きだろう。

それが、私の名前？

そう。君の名前だよアリス。その魂に刻み込まれた、君だけの名前だ。

その声はいつまでも心の中で響いている

水のように心に波紋をたてながら――

「さて、ずいぶんと長い滞在になってしまったわね」

シャンがそう言うと、アリスはそんなシャンを見上げて笑顔で答える

「そうだねー。でも割とそうでも無いんじゃないかな？あれから二日しかたってないし」

にっこりと笑って背中に旅の荷物を担ぐアリスのリュックには食料などが詰め込まれている

同じようにシャンも食料や旅のお供グッズが詰め込まれたリュックと、町中でも異様に目立つ大きな鎌を背負っていた

二人は町の噴水の横を通り抜けながら、町の出口を目指す

魔獣の襲撃によって大きな被害を受けたこの湖の畔に位置する町から南の土地へと向かおうとしていた

そのための準備として立ち寄ったのだが、そこで思わぬ出来事に巻き込まれてしまった

シャンはその事によって思った以上に滞在してしまったかのように感じたのだったが、アリスに言われてみるとそうでも無い事に気がつく

「それもそうね。いろいろとあったから長く感じていただけだった

のかしらね？」

「そうだよきっと。私も長く感じたもん」

「しかし、本当にいろいろありましたね。まさか本当に吸鬼が生きていたとは思いもしませんでしたが・・・」

シャンは二日前のあの事件を思い出す

吸鬼の首謀によって引き起こされたイレータ湖の事件の噂はすでに町を飛び出して各地へと拡散している事だろう

南の方でも吸鬼が大会で暴れたという噂を耳にしてシャンはこれは確実だと確信した

吸鬼は未だにこの大陸で生き続けている

これまで姿を隠していたが、何かを切っ掛けに活動を再開させているらしい

その目的は定かではないが、共闘した何人かが話すにはどうやら宝玉を集めているらしいという情報が手に入った

他にも、吸鬼は最強だとうたわれていた四天王のシェリア・ノートラックと互角に戦えるほどの実力を持っているらしいという事だ

今回の件には四天王のシェリアも関わっており、その脅威の危険度はよりリアルになった

ボロボロになった最強の存在を目にし、シェリアは吸鬼の実力を恐れたのだった

もしこれからそんな連中がこのアリスを襲ったとき、私は彼女を守れるだろうかと不安になったのだった

護衛としてアリスと旅を続けているが、自分の実力に自信がない訳では無かった

そこらの野党やギルドなどに比べれば割と強い方だと自負していたし、事実これまで対人戦で負けたという事は無かった

「うん。確かに、強かったっていうか、こう、私じゃ勝てないなって・・・」

「アリスが気にする必要は無いよ。私でさえ、勝てないよ恐らく。四天王で五分五分か本気を出さないといけないくらい強いのなら、私なんて足下に及べば良い方じゃないかな」

「謙遜することないよシャン！シャンは三人の中で一番強いんだよ！」

「・・・そうですね。頑張って貴方を守れるように精進します」

シャンとアリスは雑談を交わしながら町の外へと出た

ある程度離れた場所でアリスは上空を旋回していたグリフォンに指示を出して降下させる

そんなグリフォンにリュックから干し肉を一つ取り出して食べさせるアリスはグリフォンの黄土色の毛を撫でる

一本一本の毛が太くしっかりとしたその毛が柔らかなアリスの手に触れると、僅かながら柔らかくなったような気がした

「おいしい？」

そう言って毛を撫でるアリスのもう片方の手に持っていた干し肉を嘴をならして狙うグリフォン

「だめだよ～。そんなに食べるとご飯すぐ無くなるじゃない」

アリスはその干し肉を葉でくるんで食材用のリュックへと戻す

悲しそうな声を出して潤んだ瞳でアリスを見つめるグリフォンにアリスはたじろぐ

「しゃ、シャン～」

「はいはい。特にかわいくもないのによく同情できますね・・・ってか言葉分かるんですかこのグリフォン？とても睨まれている気がするんですが・・・」

いくら知性が高いグリフォンとはいえ、流石に習ってもいない人の言葉を理解しているとは思えないが

シャンはその強烈な眼力に後ずさる

と同時に、よくこんな生物をアリスは手名付けられるものだと関心した

アリスにだけは心を許すこのグリフォンもまた、絶対の信頼を寄せているのだろう

私やルオのように

髪を撫でてシャンは風を感じる

町の外は静かで風の音しかしないため、先ほどまでの喧噪が嘘のようだ

町の方角からは人のざわめきや再建の音が聞こえる

「にしても遅いねー」

「そうですね。デブのくせに、いつまで支度に時間を掛けているのですか」

「どうも、こんにちは」

突然声をかけられた二人は後ろを振り返る。するとそこには一人の男が立っていた

ローブを被り、顔は見えないがその風貌から旅の人間という風にも見えた

方向からしてこれから町へ向かうという様子だが、この人間が一体いつからここに居たのかが分からない

先ほど見たときは、見渡す限り誰もいなかったように思うのだが・・・とシャンは首を傾げた

「こんにちはっ！」

元気よく手を挙げてその人間に挨拶をするアリス

それに続いて戸惑うシャンもとりあえずお辞儀をした

「どうも、良い天気ですね」

「そうですねぇ。暑くてローブを脱ぎたくなるくらいだ」

晴天

その言葉がとてもよく合うほどに、空は透き通った色をしていた

「脱いだらどうですか？」

「そうですねぇ・・・そろそろその頃合いですかね」

男はローブを脱ぎ、その顔をシャンとアリスに見せる

「ふぅ、やはり、風にあたると気持ちがいいですね。たまには外に出るのも悪くない」

真っ白な単発が太陽の光を跳ね返す

「・・・？シャン？」

真っ先にシャンの異変にアリスが気がついた

目を見開き、まるで信じられないものを見ているような顔で、シャンは男を見ていた

「！？・・・何故ここに・・・」

「誰か分かった途端にその台詞は無いんじゃない？」

「お、お久しぶりです、頭領！ご無事でしたか！」

シャンはそう言って頭を下げた

「頭領？」

頭の上にはてなマークを浮かべるアリスを余所にシャンはその頭領と呼んだ男に駆け寄った

「無事？」

男はそこで暫し考え、あぁ、そういえばそうだったねと呟いた

「あの後・・・私たちがどれほど辛い思いをしたか」

「すまないね。君たちには面倒なことを押しつけてしまった」

「そんな事無いです！」

叫ぶようにシャンは男に向かって言い放つと、男は目をぱちくりと丸くする

シャンの脳裏には思い出が渦巻いていた

まだ小さな彼女を抱えてルオと森を駆け抜け、気がつけば大陸の北へ北へと逃げていた

いつまでこの逃避行を続ければいいのかと、思う程、長い長い旅だった

大陸を縦に横断し、やっと見つけた北の森に三人で住み始めたあの頃を懐かしむ

緑豊かな森へとルオが樵(きこり)として働きに出て、森で狩りをして食料を調達する

私は家事をしながらアリスの世話や教育をして小さな小屋で過ごし、生きてきた

彼女が村の祭りで仮面を被りながら同世代の子供達と遊ぶ姿を見て、自分を責めながら生きてきた

いつまで彼女をだまし続ければいいのかと

嘘をついて私が嘘の母親を、ルオが嘘の父親を演じて彼女を育ててきた

ルオとはそんな間柄では無かったが、懸命に彼女を騙し、家族を演じてきた

しかし、いつの間にか当の本人には私たち三人が誰一人として血の繋がっていない嘘の家族だと気がつかれていた

それを知った私とルオは全てを話した

それでも彼女は私たちを家族だと思ってくれた

私たちをお父さんとも、お母さんとも呼ばなくはなってしまったが、

それでもそこには不思議な絆というものがあったのだと思う

少なくとも私はそう思っている

偽りが消え、対等になった三人の旅路もしかし、今日限りなのかも

しれないとシャンは心の中で覚悟した

なぜなら目の前に居るのはアリスの――――――アリスの――――――

――

「ねぇ、その人誰？」

「え？」

シャンはそのアリスの言葉で我に返る

誰？そうか、説明しないといけない

この人が誰なのかを。アリスの何なのかを

「こ、この人は・・・」

つげて、良いのだろう

そうシャンは男に目配せする

男はゆっくりと、頷いた

「この人は、アリスの・・・アリスの・・・・・・・・実の父親だ」

「初めまして、では無いが、君の記憶に私は無いから初めましてで会っていると思う。シャンの言う通り、私は君の父親だ」

「・・・・そうなんだ」

アリスはシャンが思っていたよりも大きな反応を見せなかった

心のどこかで常に覚悟でもしていたというのだろうか？

それにしては唐突な再会に、あまりにもアリスは無表情である

まじまじと男を見上げるアリス

そして呟く

「ずいぶん若いね。お父さん」

あれ？

そこでシャンはふと気がつく

何かがおかしい

私とルオがアリスを連れて逃げ出した時から何年経っている？

あのとき赤ん坊だったアリスは今や立ち、喋り、グリフォンを手懐けるほどにまで成長している

１０年は経っている

なのに、私の記憶にあるアリスの父親である男の顔と、今目の前にいるアリスの父親の顔が、あまりに同じすぎる

時でも止まっているかのように、彼の顔が昔のままなのである

面影があるならまだ分かる

しかし、今目の前にいるアリスの父親は、１０年という月日を無視したかのような若者なのである

「ははは、君が生まれてからまだ１０年しか（・・）経っていないからね」

アリスの父親はニッコリと笑いながらアリスから視線をシャンにうつす

「シャン」

「は、はい！」

「今日まで、長く辛い事をさせてしまった。連絡を取れなかったのも悪かった。本当にすまない。そして――ありがとうは飛ばして、さようなら」

え・・・・？

何が起こったのか

それを理解するまでにどれほどの時間を要しただろうか

それすらも分からない

何故私の視界は真っ赤なのか

何故私の脇腹から血が流れ出ているのか

何故アリスが叫んでいるのか

何故アリスの父親の右手が私の体を剔っているのか

何もかもが分からない

「なにが・・・・・え・・・・・？」

「何が起こったか理解していない、そんな顔をしているねシャン・アルティ。その割にはしっかりと反射で体を僅かにずらしているじゃないか。その反応速度は人間にしては称賛に値するレベルだよ。うん」

「しゃ、しゃんっ！！」

私の服の裾を握り締めるアリスが視界に映った

「でもまぁ、理解する必要は無いんだよね。君の役目はもう終わりさ。これ程に上質な肉体へと成長したのだから研究材料としても良いのだろうけど、人間の体はもう見飽きたからね、別にいいや」

そう言ってアリスの父親はシャンの血で染まった腕を引いた

そこでようやく思考が回復する

あぁ、私――――

膝をつき、虚ろな目でアリスの父親を見上げる

「シャン！シャンッ！！」

「貴方は・・・・本当にアリスの・・・・」

血を吐きながらシャンがそう苦しそうに声を出す

そのか細い声が耳に届いたアリスの父親は細い目でシャンを見下ろした

「父親だよ。別に化けたり操られてる訳じゃない。正真正銘、アリスの父親」

「なら・・・何故・・・・」

「さっきも言ったと思うけど、もう君は用済み。必要ないんだよ。君はしっかりとアリスを育ててくれた。僕の目に間違いは無かった」

「何を訳の分からない事をいってるんだ！」

そこでアリスが父親に向かって吼えた

アリスにしてみれば訳の分からない事だらけだろう

突如父親が現れ、シャンを傷つけた

シャンにしても、自分が何故こんな事をされているのかが分からなかった

「分かるように言ってるつもりなんだけどな。じゃぁこれを見れば多少は理解できるのかな？」

そう言ってアリスの父親はニッコリ笑いながら腰に手を当て、そしてローブが背中側から盛り上がる

ローブを跳ね上げて現れたのは、二つの黒い翼

その黒い翼をアリスとシャンは少し前に見ていたが故に、言葉を失った

アリスの父親が何者であるかを知ってしまったが故に、目の前の光景を信じることが出来なかったのである

「そう言えばアリスにまだ僕の名前を教えていなかったね」

吸鬼の男はそうニッコリ笑い、自らの名前を明かした

「僕の名前はニール。ニール・メルストン。正真正銘、君の父親さ」

その瞬間、アリスの心が砕けた

目がうつろになり、足下がおぼつかない
そしてぺたんと地面に腰を打ち付ける

「よし、無事精神崩壊も起こしたことだし回収しますか」

「これであんたへの恩は無くなったも同然だな」

ニールは静かに振り向く
其処には槍をニールの首元に突きつけるルオ・カリオンが鬼の形相で立っていた
両手を上げて薄ら笑みを浮かべながらニールはルオが本気である事を確認する
自分を本気で殺す気だと思わせるような強烈な殺気を飛ばしてくるルオはピクリとも槍を動かさない

「しばらく見ないうちにまた太ったんじゃないかい？」

「かもな。旅の途中でいろんな美味い物たらふく食べたからな」

「へぇ、何が美味しかった？僕にも教えてくれよ」

「やだね。あんたへの恩や感謝はもう精算するどころかマイナス突き破って怒りや恨みになってるんでね」

「つれないなぁ。シャンやアリスにケチって言われなかった？」

「デブって言われていたが、まぁ気にはしていなかったな」

「あはは、手厳しいねぇ、シャンは。相も変わらず」

「・・・なんでだ」

「ん？」

「なんでシャンに手を出した！」

「ルオ君？君は先ほどの僕の話を聞いていなかったのかい？最初から説明しないといけない無知なのかい？」

「あの会話から何を察しろってんだ。お前が俺達を何らかの形で利用していた位にしか思わなかったね」

「そうそう。よくできました。君も、シャンも、利用していたよ。そして僕の思惑通り、アリスを立派な人間へと育ててくれた。いや、この場合は吸鬼なのかな？どっちか分かんないしまぁ人間でいいか。そしてこの状況、これこそ僕が作りたかった状況だとなんで気がつかないのかな？」

「この状況を・・・作りたかった？」

ニールは楽しそうに語り始めた

「そう、これもまた過程の一つだが、僕の研究には欠かせない行程なのだよ。発想という開始点から始まり、結果という終着点へとたどり着くためには、その道中を歩かなければならない。まだここは道中。しかし、君とシャンはその道中に出てくる大事な大事な扉の鍵だったんだよねこれが。しかし、鍵は開けてしまえば無用の品。あってもいらない。邪魔なだけ。なら、壊したって別にいいよね」

「いいわけあるかあああああ！！」

ルオが思いっきり槍をニールの喉へと突き出した

吸い込まれるようにしてその槍はニールの残像へと吸い込まれた

「君たちは僕が壊せない扉の鍵だったのさ。その点欠かすことの出来ない存在であった事は認めよう。君たち無しでは彼女（アリス）の心を壊すことが出来なかった。ありがとう、ルオ・カリオン。そしてシャン・アルティ。彼女（アリス）を絶望させる事ができる人間に育て上げた君たちに、もう一度心からのお礼を申し上げよう」

「黙れえええええ！！」

再度槍を振るうが、これまた棒が残像を切り裂いただけであった

「この後は僕が彼女を育てよう。父親である私が、アリスを育てるのさ」

そう言ってニールはアリスの片に手を触れる

ピクリとアリスが反応したかのように見えたが、しかしアリスは未だ放心状態のままである

そんな男に向かって再度槍を突く

次の瞬間にはアリスとニールの姿が消えていた

「君たちがもし僕の研究成果を見たいと言うなら、北に向かうといい。そこで僕は最後の実験を行う予定だ。あぁ、君たちは知らなかったね」

突如上からニールの声が聞こえ、上空を見上げる

そこには真っ黒な翼を広げたニール、そしてそのニールに担がれたアリスの姿があった

「僕は研究者だ」

その言葉を残してニールは北の方角へと、アリスを連れ去っていった

その場に残ったのは僅かに意識を保って倒れているシャンと、虚空へ向かって泣き叫び続けるルオの姿だけであった

『壊れる心』（後書き）

前話よりも先に出来てしまった作品。こっちはすらすら書けたのに・・・。そしてこれにて間章は終わり。次は第四章です。やっと第四章に入れる・・・一ヶ月か二ヶ月で間章終わらせる予定だったのに、気がつけばもう6月。月日が経つのは早いですね。大事な時間、無駄にしないようにしたいです。

さて、この辺りからちょっとだけまとも（？）な後書き。ネタバレ嫌な方などは飛ばして下って構いません。どうせ大したことは書いて無いのd・・・（殴

この間章は当初予定されていなかったのですが、三章の内容自体予定されていなかったものなので四章とのつなぎとして急遽書くことにしました。必要だったかと言われると必要なかった事を書きつづったような章ですが、時系列的にどうしてもスムーズに四章に入るには必要な気がしたのです。何か天命のようなものが海乃に落ちて書けよ書けよとそんな気がしたのです。話の視点は神原仙、小田原早苗、そしてアリスやシャンたちの3つです。が、短く終わらせたいという気もちが強かった為か少々内容には多少納得の行かない話があります。話の展開的に次の章に関わってくるのは・・・大体分かりますかね。アリスです。次の章は一部のクライマックスにして二部へのつなぎとなる大事な章です。予定としてはいくつかの段落に分かれる予定です。所々伏線も回収していかないといけないので・・・ｗｗプロットとはいえ多少ネタバレですが、次章のキーワードとしては、『蘇リシ太古ノ魔獣』『会議』『作り者の魂』『過去』『古今の異邦者』といった感じの構成になると思われます。吸鬼、魔獣、地球異世界組、四天王、旧神子、各国の主、そしてアリス達など、いろいろと入り乱れてごっちゃごっちゃの話しにならないといいなぁ、なんて脳内の妄想に思いを膨らませながら、あまり

ネタバレしてもあれなので、どうかこの辺で。烈風のアヤキが続いているのも読んでくださる皆様のおかげ。では第四章、“古今の異邦者”もお楽しみに。それでは

『遣り場の無い気持ちと握り拳』（前書き）

第四章　古今の異邦者

『遣り場の無い気持ちと握り拳』

一つ、それは水を
二つ、それは火を
三つ、それは雷を
四つ、それは土を
五つ、それは風を
六つ、それは氷を
七つ、それは音を
八つ、それは闇を
九つ、それは光を

九つの力の源は互いに混ざり合わぬようそれぞれ九つの石に封じ込められていた

水玉
紅玉
黄玉

地玉
翠玉
氷玉
響玉
黒玉
光玉

それぞれの宝玉は人の手に負えぬ宝物として小さな島国の大地に封じられていた

あまりに強すぎる力の塊を人間が扱えるわけもなく、人々はその力の毒を恐れ、封じるしかなかったのだ

しかしある時その島国に一匹の獣が現れる

真っ白な毛並みの獣だった

獣は大妖怪と言っても過言ではない程の強大な魔力をもっていた

九つの宝玉をその身に宿し、その力で人間界を支配しようとする

しかし、その野望はとある人間によって打ち砕かれる

大きな傷を負い逃走をはかった獣だったが、その人間の追撃によってその身は異世界にて朽ち果てる

内に憎しみや恨み、辛みといった怨念を渦巻かせながら獣は亡骸を石へと変え――静かに、ただ静かに復活の時を待ち望む

それが獣の真なる意思かは別にして――――――その怨念は雪積もる地にて渦を巻く

第４章　古今の異邦者

クロロト王国は北はロルワート、西はアリーアとアルパで北方小国群と大陸北部、西部の国を区切る四国のうちの一国である

ファルトの大脈と呼ばれる巨大な陸路はここクロロト、そしてアリーアを通ってフェリエス聖王国へと繋がっている

整備された道とはいえ、場所によりその整備状況は異なってくる

都市に近ければ近いほどその路面状況は整ってくるのに対し、都市から離れれば離れるほどそれはただの人の通った後が残る巨大な獣道のような状態になってくる

道としては機能するが、馬車などの乗り心地は最悪になってくるしスピードも出せなくなってくる

とはいえスピードが出せないわけではない

しかし乗り心地は最悪なうえ、商品などを乗せている場合は傷がつくのを防ぐためによほどの事が無い限りはスピードを出す馬車が通る事は少ない

だが現在、クロロト領のファルトの大脈で一台の馬車が猛スピードで駆けていた

馬と呼ぶには少々ごついが、トトルと呼ばれる動物に牽かれた馬車がガタンゴトンと音を立てながら荒れた道路を駆け抜ける

もちろん馬車の中の状況は最悪だ

物が飛んでは落ち、壁に叩きつけられては宙を舞い、乗組員は必死に馬車の壁にしがみつく

周囲には何もないような草原であり、そこだけが草の生えない道が何処までも続いている

このままのペースであと３０分も走り続ければクロロトの王都の正門である関所のゲートにたどり着くだろう

それまでこのペースをトトルが保って走ってくれるかが問題であった

小石をはね飛ばし、トトルが駆けるその後ろを沢山の軽い足音が近

づく度にトトルの気を焦らせる

この馬車は今、後ろから追ってくる者達に狙われているのである

「スピードあげろっ！」

切迫する護衛の憲兵の声が馬車の中からトトルを操る調教師を急かす

じわりと出る汗が調教師であり、騎手でもある男の頬を伝うよりも早く、そのトトルの駆ける動きと体に受ける風の抵抗で遙か後ろへと飛んでいく

これ以上のスピードを出せば車輪や車体、そしてトトルの体力がクロロトの王都まで持たない事が分かるからこそ調教師は焦っていた

つまり、この状況かなりまずいのである

調教師これまでも似たような状況は何度か体験したことがある

しかし、護衛が対処しきれない程にまで数が多いグレイの群れと遭遇する事など考えたことも無かった

すると調教師は後ろの馬車の天井の鍵が開く音が聞こえた

バタンと扉を押し開けて一人の魔術師が杖を追いかけてくるグレイに向けて魔術を唱える

小瓶から水を振りまき、その水が一瞬にして凍結すると氷の飛礫が

グレイ目掛けて飛んでいく

数匹、その飛礫に当たって怯んだ様子は見せたが全体のスピードは落ちる気配はまるで無い

その魔術師の魔術のレベルでは、この群れを足止めする事すらできないほどに多いのだ

「くそっ！最後の水瓶だったってのに・・・っ！」

恐らく魔術師も自らの魔術が足止めできるなんて思っていなかっただろう

商人の方も自分の力を見極められないほどにランクの低い憲兵を雇ったつもりは無かったであろうが、先ほどからそのあわてふためく商人の声は調教師の男の耳にも聞こえてきた

恐らくそれほどこのようなトラブルに巻き込まれたことの無い若手の商人なのだろう

商人に急かされ、仕方なくといったような魔術師が放った魔術はさほど効果もなくグレイの荒波に呑まれただけであった

このような場合、グレイから逃げ延びる方法は限られている

まずグレイを討伐、または追い返すという対処法がある

商人がギルドなどを雇うときは大抵これがその雇う目的となる事柄

であろうが、今回の場合は完全に１０人ほどの憲兵の数を超えるグレイの数である

勝てない戦と見て逃走を指示した憲兵のリーダーはそこまで悪い判断をしたわけでは無いとこの調教師は思っていた

数が多いと見るやいなや逃走を指示したからこそ、囲まれる前に脱出できたとも言えよう

だがその分、人数が多い馬車をトトルが引っ張る労力も距離と重さに比例して増えてゆく

徐々にその距離は縮まり、今や飛びかかれば馬車に届きそうというぐらいにまでグレイの集団の先頭が追いついてきている

そして最後の手段、これは囮を使うという方法である

囮に気を取られている隙に逃げてしまおうという作戦なのだが、この数になると囮はもはや囮というより完全な餌として扱われる

扱われるのが乗車している憲兵や商人の食料ならばまだいいのだが、旅の終盤ということで数の少ない食料をばらまいたところで囮になりすらしなかった

目先の残飯よりも、狙う本命は柔らかい人肉とトトルである。という優先順位が分かるあたり、魔獣とはいえある程度の損得の理解ぐらいはできるらしい

となるともはや、この馬車がクロロトの関所をくぐる為にはそこまでたどり着く為の囮が必要となる

となれば、もはやその方法は一つしかない

「そ、その女を捨てろっ！」

ほら、聞こえてきた

調教師の怯える声が

そうして金で雇われた憲兵の一人は少女を一人荷馬車の上にあげると自分も荷馬車の上へと上る

「嬢ちゃんには悪いがグレイの囮になって貰う」

「い、いやっ！」

この少女は前の町から偶然この荷馬車に乗り合わせた少女である

商いとして町から町を移動する馬車にはこのようにお金を払えば乗せてくれるものもある

実質、現在この荷馬車は商人である男の所有物として契約しているため全権は一部を除いてその商人にある

あくまで調教師兼騎手である男は荷馬車の貸し出しという商売を行っているのだ

偶然が重なり、囮として選ばれた少女は不幸で不憫だなと思う調教師だったが、それに口を出す事はできない

抵抗を見せる少女だったが、１５、６ぐらいの少女は流石に３０を超えた成人男性の筋力に押さえ込まれてしまう

「俺だってこんな事はしたくないが、この馬車の権利はあの商人のもんだし、俺等はそいつに金で雇われている。何も俺等もこんなところで死ぬためにこの仕事受けた訳じゃないってのは嬢ちゃんだってわかるだろ？」

「う・・・うっ・・・・」

突然の死刑宣告に、感情を押さえきれないのか静かに目元を潤ませる少女

商人に逆らえばもちろん報償はもらえないし、無銭でこの危険な仕事を請けおったともなれば憲兵の方も割に合わない

生きて帰ってこそ、意味のある仕事である

これが家族の居る者なら無銭でもこの商人の命令を無視したかもしれないが、どうやら男達がそういう人物でも無いと言う点に置いても少女の運が無かった。それで済まされるのである

「何か言いたいことはあるかい嬢ちゃん？」

言葉すら、嗚咽に呑まれてまともに出てこない少女を見て憲兵の男はため息をついた

「そうか。じゃぁ、運が無かったと思って諦めてくれ」

トン、と男は不安定な揺れる荷馬車から少女の背中を押した

バランスを崩した少女がグラリ、と地面に向かって突き落とされる

涙が宙に浮き上がり、体は重力に従い落ちていく

そして――思っていたような体を地面に打ち付ける強い衝撃が少女を襲う事は無かった

もちろん、グレイに体を食いちぎられる痛みも無かった

「っうぇ・・・？」

「っとと、間に合って良かった。大丈夫？怪我してない？」

そこには黒い髪、黒い瞳の青年が自分を抱っこして見下ろしていた

「！？・・・・！？」

現在の状況を理解できず、少女はもう少し少年を見てみる
髪が少し長いか、若干髪で目が隠れている
顔立ちは整っているが、それよりも目立つものによってさらにその表情は少女には薄れて見える
その背中に広がる真っ赤な半透明の炎の翼が、青と白の空を紅色に染めている

「随分な数だな。よく逃げ切れてたな」
「そうね。私たちが割って入らなかったらどうなってた事か」

氷の大きな足場を作ってその上に着地した仮面を付けた男の人がそう言ってグレイの群れを眺める
そんな仮面の男の作った氷の足場の横に真っ白な翼を広げて舞い降りる仮面を付けた女性がちらりと後ろを見る
馬車は止まることなく走り続けているが、少しずつスピードが落ちてくるのが遠目に見ても分かる

「さぁて、君たちのご飯は彼女じゃないんだよー」

黒髪で仮面を付けた女性はそう言うと純白の翼を広げた
それと同時に舞い上がる純白の羽毛がフワリと広がった

「ボスグレイが居ないのに、やけに集団行動に慣れてる群れだな。
珍しい」

剣を鞘からゆっくりと抜く仮面の男はその剣をグレイの群れに向ける

「立ち去れ！じゃないと俺たちはお前等を殺さなきゃならない！」

そう、少女を抱えた、赤の翼を持つ少年は叫んだ

グレイはうなり声を上げて威嚇するが、効果が無く、逆に相手のプレッシャーに押されている事に気がつく

すると一匹、また一匹と逆立てていた毛並みを戻して踵を返して荒野へと戻っていく

その様子を見送りながら少年は赤い翼を四散させる

同様に、白い翼を生やした女性もその仮面と翼を空中に霧散させる

仮面をつけた男も剣を鞘に収めて数メートルの高さから飛び降りて

此方へと歩いてくる

「立てる？」

そう問われ、無意識にこくんと首を縦に振った少女はお姫様抱っこの姿勢から自分の足で地面に立った

「怪我無い？」

その問いにもこくんと首を縦に振り、

「痛いところとかも？」

「ない・・・です」

「我慢とかもしてない？」

「しつこいわっ！」

スパンッっと黒い頭を叩いたその女性の髪もまた漆黒の流れるような艶やかな髪だ

少女が見惚れてしまう程に、これまでに見たことの無い黒色だった

「痛い！」

「五月蠅い！あ、大丈夫だった？」

「あ、は・・・はい。だいじょう・・・ぶです」

「俺の確認は信用できないのか！？できないんですか！？」

少年がその黒髪の女性に向かって叫んだ

が、女性はそれを軽く無視して少女に怪我が無いか周囲を見て回る

「うん、大丈夫みたいね」

「だから俺が確認したじゃないですか！？」

「あ、ごめん、何がなんだかわからないよね。私は一条唯」

「無視された・・・無視された・・・」

「そして今しゃがんでのの字を書いているのがあーやんこと桜彩輝。
ほら、あーやん、挨拶挨拶」

むすっとしながら立ち上がって少年は挨拶をする

「桜彩輝です」

「色目つかってんじゃねーっ！」

「はっ！？」

一条に蹴り飛ばされ、きゃっと飛び退いた少女のいた場所に転がる彩輝

意味がわからねぇとぼやきながら彩輝は一条を見上げる

「なんでそんなに意味不明なテンションなんですかっ！？」

「君が私を理解するのは百年早いな。うん」

「百年経っても理解できる気がしませんね、こりゃ・・・。にしても、一条さんも慣れてきましたか？」

「うん。やっぱり体に強く力は入らないけど、普通に過ごす分には問題なさそう。ほら」

と、手を握っては開いてを繰り返していた一条はその手を転がった彩輝に差し伸べた

その綺麗な白い手を土で汚れた自分の手で掴んで良いのかとゼロコンマイチ秒の迷いを、どうせボコボコにされたのだからドロドロの

手にしてやれと復讐心と泥にまみれた手で握ろうとして――

「あ、そうだ」

引っ込められた

もういいや、そう思って彩輝は一人うつむき無言で立ち上がる

「そういえばさっきのはなんだったの？君、馬車から落とされそう・・・ってか落とされてたけど」

一条がそう少女に尋ねる

彩輝も一応その辺の事が気になっていたので耳をすまして話を聞く事にした

「ま、何となく予想はつくけどな」

そう言ってカイが二人に事情を説明する

カイは少女に合っているかを確かめると、苦い顔をしながらも彼女は首を立てに振った

「ひっどい！そんなのって！」

と、一人感情をそのまま剥き出しにして少し離れた場所に止まる馬車を睨み付ける

歯をむき出しにしてガルルルと獣のように殺気を飛ばす唯を視線から外して彩輝はため息をついた

彩輝自身は確かにその行為に不満や苛立ちが無い訳ではない

しかし、この世界の常識が、彩輝達のいた常識と異なるのもまた事実とはいえそれが許せる行為かどうかというのはまた別の問題である

正しいかどうかで言えば彩輝は間違っていると思う

しかし馬車に乗り合わせた乗員全員が食われればいいという結末を望んでいるわけではない

今回はたまたま助けられたから良かったが、結局は手の届く範囲でしか自分たちの力は及ばないのだと彩輝は考える

だが自分手が届く範囲で、その手を握ってくれた者が救われるというのなら、彩輝は全力で助けたいし、絶対に助けるという強い意志を抱いていた

「この少女には悪いが、どうせこの子を放り出した人を懲らしめたからって、それで世界が良くなるわけではない。むしろ一の犠牲で

多を救うというのならそれは間違った判断では無い」

カイさんがそう呟いた

リーダーは時に、苦渋の決断をしなければならない時があると思う

あの馬車に乗っていたリーダーはそれが今だと判断したに過ぎない

「・・・多くの命と感情ってのを天秤に乗せなきゃいけないってのは辛いもんだ」

「そこが上に立つ人の辛い所ですね。うん。俺なら絶対に感情に偏るけど」

「それでもあんまりだ」

一人まだ頭から蒸気を出すかのように怒っている一条はそれを押さえるためか、クルリと振り向いて表情を和らげると少女に歩み寄って話しかけた

「君、これからどうするの？」

「え・・・？」

「んーと、馬車に乗ってたってことは行くところがあったんじゃないの？」

「あ・・・いえ、その・・・」

少女は言い辛そうにして視線を背けた

その様子を見て一条は手を体の前でぶんぶんふった

「あぁ、別に言いたくなかったらいいんだけど、このまま一人で行くとさっきみたいに襲われるかもしれないし、あの馬車にもう一回のって行きたいところに行くってのも一つの手だけど、流石にこんな事があっちゃあんなやつらと一緒に乗りたく無いよね」

少女はゆっくりと馬車の方を向き、そしてまた首を縦にふる

彩輝もそりゃそうだと馬車の方を向く

すると馬車から数人が降りてきた

一人は普通の服を着ているが、残りは全て軽い防具を着けたギルドの人たちのようだった

ちょうどヴェント街道で出会った『赤銅の器』のような感じだ

「いやぁどうもどうも、君たちが助けてくれたんですよね？」

そう言って真っ先に彩輝達に話しかけてきたのはまだ若い青年だった
２０前後だろうか

「商人殿ですかな？」

「はい。この度は危ないところを助けて頂き、誠にありがとうございました」

カイがそう尋ねると、ニコニコと笑いながら何度もお辞儀をする商人
しかし、その顔に彩輝は無性に苛立ちを覚えた

「本来なら彼らに任せる予定だったのですが・・・」

そう言ってパッと表情を冷酷なものに変えて後ろのギルド達を見つめた

「何しろ数が多かったものでして、流石に7、8名ではどうしようも無かったので逃げることしかできませんでした」

「確かに、２０、いや、３０は居ましたからね。彼らを責めるのは見当違いでしょう。むしろ囲まれる前にここまで逃げ切れただけでも凄いですね。よくトトルもパニックにならなかったものだ。いい調教師ですね」

「そうですな。彼には後で報酬をはずまねばなりますまい。財布は軽くなりますが、命を買ったと思えば安いものですからね」

そこでギルドの一人が進み出る

「俺等『赤銅の鉈』からも全員を代表して礼を言わせて貰う。危ないところだった、ありがとう」

「どういたしまして」

一条唯が静かにカイの後ろから静かにそう言い放つ

「あぁ、それと、さっきこの子を落とした奴は誰？あるいはその命令をした奴」

全員がその突如張りつめた空気にごくりと生唾を飲んだ

一条さんが静かに、しかしハッキリと誰だと問う

声にして出ることは無かったが、赤銅の鉈のメンバーの視線がそのお礼を言った二人、つまりギルドリーダーと商人に向けられた

無言のメッセージとはこういう事か

ギルドメンバーが責任逃れでリーダーや商人を捨てたとまでは言わないが、それでも彩輝はこのギルドに良い印象を持たなかった

「なるほど、ね」

ちらりと視線をあげて二人を見つめる一条

「部外者だし、口挟む気も無いし、私情になる。けど、私はその選択をしたあんた達が嫌い。だから早く馬車にのってください」

「い、一条さん」

「何？私、今ならこのやり場のない気持ちをあーやんにむけて微塵に千切っては挽肉にできる気がするんだけど」

「・・・・」

恐ろしくて彩輝はぽっかり空いた口を手で隠し、一条から１０歩は下がって距離をとる

なんかさっきから理不尽だ！

そしてその矛先が向いている商人とそのギルドリーダーは顔を引きつらせた

この異様な空間を作り出している張本人からは目に見えそうなほど

強烈なオーラが漂って空間をねじ曲げているかのように見えた

「・・・では、お助け頂きありがとうございます」

「私もできることならこんな事したく――」

「消えろってんじゃん！」

リーダーが静かにお辞儀をして、そして商人はなにやら弁解をしようと口を開いた

その瞬間、突如一条さんが叫んだ

握りしめた拳を、必死に止めている

振るえた握り拳にそっと彩輝が手を添える

びくりとした後、一条は彩輝の顔を見た

無言で彩輝が首を横に振るのを見ると、うつむいて後ろを向く

「悪いんですけど、お礼はそこまでにして引き取ってもらえませんか。でないとせっかく人助けをしたというのに後腐れが残ってしまいそうだ」

もう残っている、そう一条は叫びそうになるが必死に堪えた

手を握ってくれている少年の為に、叫ぶわけにはいかなかった

そうして商人とギルドは馬車に乗り込むとゆっくりと動き始めた

もちろん彩輝とカイはもし一条が何か暴力沙汰に出ようとするならば止める気ではいたが、幸いそこまで発展することは無かったので二人はホッと胸をなで下ろす

ただ彩輝は、静かに一条を眺める

ただ静かに、眺めていた

『遣り場の無い気持ちと握り拳』（後書き）

第四章スタートです。よっし、執筆頑張るぞ！それなりに長丁場になるかもなぁ・・・プロットプロットっと・・・

『夜営の一時』

「あ、カイさん。そこの肉取ってください」

「ん、はいよ」

「ありがとうございます」

「ラカーシャちゃんも、どんどんたべな」

「あ、はい。ありがとうございます。とっても美味しいです」

現在、関所の前で夜営をしている

街の門の前には幾つもの露天商が店を出しており、その近辺には専用の夜営場のような場所がある

そこには十数台の荷馬車が止まっており、酒が入ったむさ苦しい男達の声が木霊している

これだけの人が集まり騒いでいれば、いくら城壁の外で夜だとしても先ほどのようなグレイなんかは近寄ってはこない

「カイさん。なんでわざわざ街の外で店をたくさん出してるんですか？」

アヤキは道中で仕留めた魔獣の肉にかぶりつきながら聞く

「ん？あぁ、街の外なら税がかからないからな。通行税やらなんやら、まぁ俺は商人じゃないからよく分からないが」

「あぁ、なるほど」

なっとくしながらも肉を頬張る

ゲームや漫画、本やテレビなど、娯楽が少ない中での食事というのは大変に重要な娯楽なのである

正確に言えば一応小型音楽プレーヤーは持っているものの、電源を切ったまま鞄に放り込んである

必要な場面が来るとは思えないが、あちらの世界から持ち込んだ数少ない品の一つである

なにせこの世界では電気が無い

魔術の電気を試そうかとも思ったが、壊れたりするのも嫌であるしなにせ加減も分からない。そして充電器がない

これでは充電しようにも出来ない

充電器は鞄と一緒に話でしか聞いたことの無い、例の真っ暗な空間に愛用トランクス達と一緒に置き去りらしいから取りに行くことも出来ず、どうしようもないので放置状態である

「あ、ラカーシャさん、コショウ取って」

「こしょ・・・？何ですかそれ？」

「あー、それそれ」

聞き慣れない言葉に首を傾げる少女

少女といっても彩輝や一条ともさほど年齢は離れていないようにも見える年齢だと三人は思っている

この少女はラカーシャ・ミルレインというらしく、彩輝達が渡商人とギルド、基グレイの群れから助けた少女である

そんな少女は美味しそうにお肉を頬張りながら彩輝が指さした方向を見る

そこには小さな円筒形の木の容器があった

それをちょこんと掴み、彩輝が頷くのを見てそれを手渡した

木の容器を受け取ると蓋を取り外し、それを焼いている肉に振り掛ける

「この味、その調味料で出してるんですか？」

「そだよー。いやーしかし、この世界に胡椒があるとは知らなかったなー。いやでも、同じ物だから同じ名前で翻訳されて助かったよ」

そう言いながら一条は肉にかぶりつくのを三人はジッと見つめた

溢れ出る肉汁がポタポタと肉を伝って落ちていく様を見ると、更に食欲がそそられる彩輝とカイとラカーシャである

ヨダレが押さえ切れそうもないので、三人も同時に自らが持つ肉にかぶりつく

「この世界じゃ抗菌や殺菌として食料と一緒に入れておくんだ」

「あ、歴史かなんかの授業で大航海時代とかそれで珍重されたって聞いた覚えがある」

と一条さんが呟いた

へぇ、と相づちを打つが、あとの二人には何の事やらさっぱりだという風に聞き流している

「しかし、食い物にこれを挽いた粉を食い物にかけるなんて最初は不安だったが、これは凄いな」

「前にこっちで料理したことがあるんですけど胡椒とか醤油が無くてどう味付けすればいいのか分からなくて困った事があったんです

よねー。なんかよく分からない調味料ばっかりだったから味見したりしてたんだけどなんだかあっちの味に肥えちゃってるのか似た味の調味料を探しちゃうんだよね。そういや暗くて分かんなかったけどあのときの野菜入れてあった場所にも胡椒みたいなのがはいってたような気がするなぁ」

それを聞いたとき、あぁグレアントに居た時の食堂の話かー、と彩輝は一人懐かしみながら肉にかぶりつく。うん、美味い

「あの時はツキちゃんにも手伝ってなんとかまともなもの作れたけど、一人だと流石に自信ないなぁ。よく分からない食材ばっかりだったし」

「でも、こんなに美味しいと独り占めしちゃいたくなりますね」

と、ラカーシャが肉にかぶりつきながら呟いた。つまりは教えたくないと

彩輝はふと考える

向こう側の世界の知恵がこういう身近なところでも役に立つのかと、彩輝は胡椒の入った円筒形の筒を見た

胡椒一つにしても、前の世界では当たり前すぎてありがたみを感じないが、こちらの世界ではこれが市場に出回ったときにいろいろな事が起こるだろう

具体的にどうなるかは彩輝にも想像はつかなかったが、何かは起こるはずである

まず、食材、調味料としての利用価値が生まれれば胡椒の市場価格は高くなるだろう

それと同時に沢山の料理が新たに生まれるであろうし、それは胡椒だけの話ではない。まだ生ぬるい方だ

例えば衣類や医療、建築技術や工業技術などは影響が大きいであろう事は簡単に予想できる

流石に機械を作ることは出来ないが、この世界とは全く別の発展を遂げたあちらの世界の技術はこちらでは必要ないと考えられなかったものや発想自体思い浮かばない突拍子もないアイディアが沢山ある

具体的にその原因は魔術というのが一番にあがるだろう

炎の魔術が使えれば持ち運べるライターなんて生まれない

風の魔術があれば風を生み出す扇風機なんて必要ない

故にスクリューなんて発想も無いから船は手こぎか魔力、魔獣に引っ張って貰っている訳だし換気扇なんかも存在しない

他にもこちらの世界では数え切れないほどの生まれていない発想や思想がある

それがどれほどの影響を及ぼすのか、彩輝には分からなかった

所詮桜彩輝はしがない一高校生なのである

「さて、明日も早い。次は国境を越えるまで道具や食料の補充は出来ないからな」

カイが骨を炎の中に放り込み、そう言って立ちあがる

クロロトの王都に入って滞在する予定は無いので此処へは食材の補充の為に立ち寄ったのである

ファルトの大脈沿いにある大きな拠点としては次は国境を越えなければ存在しないため、ここまで人が多い場所を見るのは彩輝も久しぶりである

大陸を斜めに横断するファルトの大脈と呼ばれる巨大な道を通って随分立つなと彩輝は星空を見上げる

まるでこの夜空に浮かぶ星の点を結ぶように、いくつかの大きな街や王都を経由してどれだけの日にちが経っただろうか

まだ連れ去られてしまった夕日ちゃんは無事なのだろうか

いっしょにこの世界に紛れ込んでしまったあちら側の人達はまだ生きているだろうか

思うところは色々あるが、とりあえずは封印が解けそうだという魔獣の封印をかけなおすのが今の旅の目的である

北へ飛び去った吸鬼を追う形にもなっているので夕日ちゃん捜索も同時に行っているが、吸鬼の情報は全くといって無いに等しい

これぱっかりは、どうしようも無い

聞いても聞いても知らないと答えられるか吸鬼は今だ絶滅したままだと信じて吸鬼復活の噂が広まっていない場所もある

最初に吸鬼が現れてから随分と時が経過しているため、それぐらいの情報は回っていてもいいと思うのだが

「じゃぁ夜営の番は頼んだぞアヤキ、ラカーシャ。俺は疲れた。寝る」

「あ、はい。お休みなさい」

「お休みなさい」

彩輝とラカーシャは手を挙げて簡易テントに入っていったカイを見送る

と、一条さんが大きくあくびをするのを彩輝は見た

「私も寝るわー。なんかもう足パンパンで・・・じゃ、お休みぃ～」

「おすみなさい」

「おやすみー」

そう言って立ちあがる一条さんはポンポンとズボンを叩いて土や埃を落とすと眠そうに目を擦る

あくびをしながら手を振って簡易テントに入っていった

恐らく神子化のせいで体に負担が来ていたのだろう

かく言う俺も正直怠いが、美味しい肉のお陰でなんとか気力を持たせている感じである

今回はあまり人外すぎる力を使いすぎなかったせいだろうか、前回のような体に力が入らないという事は無かった

が、ものすごく疲れる事に変わりは無い

しかし、くじ引きでテントの見張りを見事引き当ててしまったのだから文句も言えない

怨むならハズレをひいた我が左手を怨むしかないと左手を天にかざし、同様に右手も星空にかざす

まぁ一条さんが休めるなら、自分は当たりを引いたと言ってもいいのかもしれないなんて思いながら、指の隙間から見える星々が、他の星に負けるかと自己主張するように輝いている

きれいだな

ぽつりと呟いた

こうして右手を空にかざせるのも、昔では考えられなかったな

あの事故以来心と体に傷を負い、それを魔術で内と外から治してもらって、一条さんの手を掴み、それでこうして今自分は腰に二つの剣を携えている

当たり前に両手が使える。それだけの事なのに、不思議だ

治したいと思っていても、治らなかった右肩

それが治ったというのに、喜びを感じないのは何故なのだろうか

未だに、俺はこの右手に傷を負っているのだろうか？

二度と抜けないような棘が深々と――――

そう感慨深く思慮を巡らせていると、ふと自分を凝視する視線に気がついた

顔を横に向けると、そこにはじーっと彩輝の顔を見つめるラカーシャがいた

「な、何？」

「い、いえ、なんでも無いです」

顔を引っ込め、空を見上げるラカーシャ

一体なんなんだと思いながらも彩輝は今日の事を振り返る

ラカーシャは家出をしているらしく、自分たちが北へ向かっている事を伝えるとどこに向かっているのかを聞かれた

当初は南に向かっていたらしいのだが、その最中あの事件があり、一端旅の再準備のためクロロトへ同行すると言い出したのである

というわけで明日になれば別れる事になる

偶には知らない人と喋るのも新鮮みがあって良いなと思った彩輝だったが、あんまり接点を持ちすぎないようにと思っていたのもまた事実である

異世界から来たと知られれば、どうせまた面倒な事になるのだから

「黒い・・・んですね」

「ん？」

突然呟いたラカーシャの方へと顔を向ける

星空を眺めながらラカーシャはそのまま言葉を紡ぐ

「最初は戸惑って、どうすればいいのか分からなくなったんです」

「？」

「見たことのない黒い髪と黒い瞳に、変な魔術を使って、助けてくれたのに、どうすればいいのか分からなくなって・・・」

「不安・・・だったのか？」

そう訪ねると、ラカーシャは目を閉じて俯いた

「かもしれません。でも、何となく悪い人ではないんだなって、思って・・・ねぇ、アヤキさんは海の向こう側から来たんですか？」

そう答え、こちらをジッと見つめるラカーシャ

やっぱり目はまだしも髪ぐらいは隠すべきなのだろうか

毎回のように、嘘を答えていると流石に嫌になってくる

「んー、まぁ君の知らない場所から来た、って事になるからそう言う意味では間違いでは無いかな」

そう濁して答えるしか無い

「そうなんですか。あの、海の向こうってどうなってるんですか？」

「海の向こう？」

この大陸の向こう側は現在、未開拓の地となっておりその海の先に何があるのかは分かっていない

この世界がもしこの星空のように一つの惑星なのだとしたら、もしかしたらこの海の向こう側には別の大陸があるのかもしれないが、行って帰ってきた者が居ないのだから確認のしようも無い

それにもしかしたらあの光る星のどれか一つが地球なのかも知れないと思うと、彩輝は目元に涙を浮かべた

「アヤキさん？」

「あ・・・あぁ、ゴメン。ちょっと故郷を思い出してて。親とか、兄妹とか、友人とか・・・いろいろ
・・・」

瞼の裏に焼き付いた光景は未だにくっきりと思い出せる

涙を拭った彩輝は静かにため息をついた

慣れたと思っていたのに、まだ向こうに未練があるうちはこの涙は消えてくれないのかもしれないな

この涙が出なくなる時はきっと、帰ることを諦めた時だと
その時は、この記憶は今よりももっと薄れたものになっているのだろうな・・・と

「あの、ごめんなさい。帰れない・・・んですか？」

「そうだね・・・。今のところ帰る方法が全然分からないんだ。どうすれば帰れるのか、何も分からない。答えのヒントを探してるような所かな、今のところ」

「じゃぁ、イチジョウユイさんも？」

黒髪黒目繋がりで彼女も同じような境遇だと察したのだろう
その通り、と口に出すまでもなく俺はただ頷いた

「一条さんも俺と同じ所の出身なんだけど、向こうで友達だったとかそういう訳じゃ無いんだ。うん。こっちに来て仲良くなった感じかな」

ならざるを得ない状況だったのもある意味仕方がない
誰かを頼り、誰かに頼られたい

そんな思いが俺と一条さんの手を繋いだ

俺も一条さんも、きっとこの世界に放り出された俺達はみんな心の支えを必要としていると思う

「ふぅん。あの・・・さぁ」

「ん？」

「もし良かったら、家に遊びに来ない？」

また唐突に何を言い出すかと思えば

家に遊びに来ないかだって？

俺は思わず笑みを顔に浮かべていた。そしてその顔で

「あ・・・ゴメン。気持ちだけ受け、取っておく」

「そっ・・・か」

キッパリと断らなければ後腐れが残る。それぐらいはもう経験済みだ

思い残す後悔をするくらいなら、思いっきり断らないといけない

相手を傷つけるようで、一番傷つけない事なのだと彩輝は勝手に思

っている

少なくとも彩輝だけはそう思っている

彩輝は振り返ってテントに入っていった一条の事を思い浮かべる

それに・・・やらなければいけないことがあるからな

寄り道なんてしていられない

「第一、家出中じゃなかったのか？」

「あー・・・いや・・・そのぉ・・・」

帰りたくても帰れない、そんな彩輝の話を聞いていて帰ろうと思ったことはラカーシャは口には断じて出せない

帰ろうと思えば帰れるラカーシャが軽く口に出していい事じゃない、そうふと思ったのだ

彩輝はそんなラカーシャを見てため息をついて

「別に変な気を回さなくても――」

そう彩輝が言いかけた時だった

どこか遠くから声や音が聞こえてくる
街の方ではなく、どこかから

「あっ、あれ！」

と、ラカーシャが指さす方向に小さな火の光が見えた
いくつも、いくつも灯るその炎はまるで闇夜を照らす大蛇の用にこちらへ向かってくるではないか

あれは・・・

と、周囲からもその光景を見つけた人達がざわめきはじめ、その声に起きてきた人達が荷馬車やテントから顔をだす

もちろんカイと一条も同じようにテントから這い出てきた

「すぐにぐっすり眠ったかと思ってたんですが」

「えっ、あー・・・んー、すぐ寝られるかと思ったら思ったよりもなかなか寝付けなくてねー・・・いやまぁ眠いんだけど」

目を擦り、ぼーっとした声で呟く唯を見ながら、カイは外していた仮面を取り付けた

「なんだこの騒ぎ?」

カイさんが仮面の隙間から遠くを眺める

俺と一条さんが首を傾げるがそれにラカーシャが口を挟んだ

「あれ、みなさん知らないんですか?ちょっと前に物見の丘で戦があるっていろんな国の騎士がこのへんに集まってきてたんですよ。でもあれを見る限り・・・」

「負けて敗走してきた、という様子では無さそうだな」

「ってーなると、ガルトニールに勝ったってことなんですかね」

「あのガルトニールほどの大国に勝つとなると、よほどの事が無いかぎりは無理だと思うが」

と、その軍の先頭集団が開いた街の正門をくぐっていくのをジッと見つめる彩輝

「え・・・」

「ん?どしたのアーヤん?ってちょ!アーヤん!?どこ行くの!?」

俺は、いつの間にか駆けだしていた

暗闇の中、流れるようにして街を守る城壁の中へと消えていく灯火

その一つを追って、俺は走る

まて、いくな、とまれ、とまってくれ・・・と

「アーヤん！」

そんな俺を呼び止める一条さんの声を無視して俺は走る

おい、とまれ、とまれ、こっちを向け、確認させろ！！！

俺は口を開いて――――――

「おい止まれえええ！！そこの日本人！！」

「えっ？」

彩輝が叫び、唯が彩輝の後ろで立ち止まり、そして――――――同時にこちらに顔を向ける人影二つ

「「え？」」

黒髪の青年と女性の瞳が、獣のような足に獣耳の女性に担がれた状態で桜彩輝と一条唯の姿を捉えた

『再会祝いの集い』

クロロト城下街、とある食堂にて一条唯は木のジョッキを片手に立ち上がった

二階の小さな一室を借り、再会の祝宴会が開かれようとしていた

窓から満月が覗き、涼しい夜風が流れ込んでは美味しそうな食材達の匂いを部屋にかき混ぜる

「では、全員集合という訳ではありませんが、ひとまずお互いの無事と再会を祝して、かんぱーーいっ！」

そのかけ声を合図に、一斉に木のジョッキがぶつかり合った

「いぇーいっ！！」

と、高らかに声を上げて彩輝のジョッキに早苗が乾杯をする

次々にみんなのジョッキに乾杯していくのを見て、彩輝も神原や唯のジョッキへと一つずつ乾杯する

そして最後にカイと千尋ちゃんのジョッキにも乾杯をする

カイは少し戸惑っていたが、これが向こうの世界の風習だと勝手に納得して仮面を外すとお酒を喉へと流し込んだ

と、その隣の二人も一気にお酒に口をつける

「あぁ、旨いっ！！」

「最高っ！！」

ドンっと机にジョッキを叩きつける仙と早苗

「どこのおっさんだよげぷっ」

「一条さんのほうも負けず劣らずおっさんですよ」

と、二人に即座に突っ込んだ唯がゲップをすると、彩輝もまた一条さんを横目で見ながらそう突っ込んだ

「う、うぅ～・・・」

顔を真っ赤にして机にガンガンと顔をぶつける一条さん

酔いが回ったのではなく、ただ単に恥ずかしいだけだろう

みんなが笑う

「いやぁ、二人とも凄く疲れててねー・・・これでも体を動かすのが手一杯なんだわ。あぁー染み渡る染み渡る」

と、早苗は早くもお代わりを要求する

「しかし、まさかこんなところであっちの世界の人と合流できるとはなぁ！」

神原さんは酔いが回るのが早いのだろうか、顔がいつのまにやら真っ赤である

合ったばかりのテンションとは裏腹に、現在はテンション上げ上げである

「神原さんはどこに出たんですか？あ、ちなみに俺はアルデリアっつー、まぁ南の国だったんですが」

「俺はロルワートだ。まぁ王都に居たのは少しだけなんでな、たぶんお前等よりかはこの世界の常識は知らないと思う」

「私はフェーミリアス。今回の戦争で駆りだされちゃってねー。んで戦地にて仙と再会してね」

机にもたれながらジョッキの中のお酒をグルグルと回して彩輝を見る

「ね、どう?帰る方法、分かった?」

まぁ恐らくその質問が真っ先に来るだろうとは思っていた彩輝は視線を落とし、首を横に振った

それを聞いて来るという事は、恐らく二人も帰る方法を見つけていないのだろうと容易に想像がつく

「現状、まだ分かってません。まぁ今はそれどころじゃ無いんで」

「そうだね、ここは一度全員の持ってる情報と今の状況を話し合って今後の事を考えないといけないか」

君たちが此処にいる理由とかも聞かないといけないしね。そう言って考える素振りを見せる神原

他の三人も頷いて情報交換の場が持たれた

■

「なるほど・・・そっちはそっちで色々あったらしいな」

腕を組んで椅子の背にもたれかかる神原

とりあえず俺、そして一条さんは現在自分の置かれている状況を全て話した

この世界に放り出され、そして龍に攫われ、武闘大会があり、イレータ湖での出来事、そして全ての事件に関わる吸鬼の事と千尋、いや、夕日ちゃんがとてもややこしい事になって攫われている事

そして、神子の事、北へ向かっている目的を話した

「それが事実なら、最優先は夕日ちゃんの精神の奪還、それと魔獣の封印の上書きが最優先だな」

話した事はやはり異世界、魔法や魔獣などがいる事から二人もあっさりと信じてくれた

予想以上にあっさり納得する二人を見て、彩輝がその事を訪ねてみると

『こいつ、オタクだから』

と、お互いに指を差し合いながらそう言った

「でも吸鬼がどこに向かったのか分からない以上、探しようが無いです。とはいえ、三度にわたって遭遇してるんでそのうちまたどこかで合うんじゃないか？」

「楽観しているね、彩輝君」

そう彩輝が言うと、顔を真っ赤にさせた早苗に真顔でそう言われた

楽観。確かにそうかもしれない

「優先順位は彼女の奪還が最優先です。それは理解しているんですけどね、此処までの道のりで吸鬼の話を一切聞かない。探しようがないですもん」

お手上げだ、と彩輝は器に残った飲み物を一気に飲み干した

早苗はそれを見て口を出す

「とはいえ、吸鬼とやらのアジトが北にあるのは間違いないだろうね」

「だな。話を聞く限り、南でそれだけ騒いだというのに、この辺ではまだ吸鬼が絶滅していない事を知っているのはごく僅か、噂程度の広まり方で誰も警戒していない。狙ってるとしたらそいつら、思った以上に頭が切れる」

「そうだね。それだけ騒いでいて、肝心の目的が分からない。潜伏していた期間は長いのに、ここ最近は立て続けにお祭り騒ぎ」

「目的・・・たぶん宝玉を集めてるんだと思います」

彩輝と一条は宝玉が三つの事件の中心になっている事を伝える

黒龍に埋め込まれた黒玉

大会の景品となっていた紅玉

そして見ては居ないが、湖の社から奪われたという水玉

「宝玉にどんな力があって、何のために使われるのかは分からないが良い予感はしないな。荒れ狂った黒龍、突如パワーアップするおっさん。ま、また魔術とか魔力とか、そのへんが関係してるんだろうが・・・な。流石異世界、意味が分からん」

多分お酒が入ってるから分からなくなってるんじゃないでしょーかと彩輝が呟く

早苗にお酒をつぎ足してもらうと神原さんが天井を仰ぎ見る

隣にいる早苗にも継ぎ足しながら、こんどは早苗が自分の憶測を話し始めた

「本当に・・・羽生えた人間が何集めて何しようが私たちに関係ない、って言いたいくらいよ。私たちよそ者には関係ないじゃん・・・」

「でも、その羽生えた人間に夕日ちゃんの魂が攫われてるんだけど」

瞼を半分閉じた唯が早苗にぶっきらぼうに言う

すると早苗も一条を見返してほんの少しだけ口調を強めた

二人とも、先ほどからお酒が入ったからか互いに睨み合ってる気がする

「あの、二人はこれからどうするんですか？」

其処に彩輝が割ってはいり、神原と仙に質問した

ナイスフォローと神原が親指を立てて机の下でガッツポーズした

「どうするっていわれてもねぇ・・・二人みたいに明確な目的があるわけじゃ無いし・・・それに帰る手段探す代わりにお国の方に尽

くしなさいって言われてこうして私は軍人になっちゃってる訳だし」

「居場所が、欲しいんですか？」

唯はそっと、訪ねてみた

「居場所・・・？」

「あぁ、確かに、分かるかもしれない。俺も居場所が無かったから、あんな組織つくっちまったのかも知れない」

早苗に対して問われた問いに、神原が割ってはいる

組織というのは革命軍の事だ

「私は、帰る場所が無くて、知ってる人も誰もいない世界に放り出されて、泣いてた」

そう口を開いた一条をジッと、静かに見つめる早苗

次に口に出される言葉を待つかのように

「でも、そんな手をアーヤんが握ってくれて、私は安心できる居場所を見つけた」

ね？とでも言うかのように一条さんは俺の方を見てきた
それに彩輝はどう答えれば良いか分からず沈黙してしまった

「だから、帰るまで、私の居場所はアーヤんの隣っ」

「自分勝手ね」

そう言った早苗に対し、俺は無意識に口を開いていた
開いた後に、あれ？と思った

「そんな――ことは・・・無いです。俺も、一条さんに手を取って貰って助けられたんですから、おあいこですよ」

「うん。じゃぁそういう事にしておこう」

「え、事実ですよ？」

空に籠もってしまった自分を、彼女は助け出してくれた
今でも思い出せる。白い翼を広げた彼女の姿を
と、早苗はジョッキを机の上に置き、無言で立ちあがった

突然の行動に、全員の視線が早苗に向けられた

だが早苗は、ただただ無言で部屋を後にした

不安になった彩輝は

「何か悪いこと言った？俺？」

と皆に聞くが

「夜風にでもあたりに行ったんだろ」

と、カイが静かにお酒を飲みながら一言呟いただけであった

「あー・・・俺、ちょっと様子見てくるわ。みんなは此処で待っててくれ」

と、今度は神原が席を立った

静かにドアを閉め、彩輝がもう一度

「俺、本当に何も言ってないよね？」

と確認を取った

全員、何も言わない

えぇ～、不安だ～

と彩輝は内心汗をかいていた

「どうかしたの、あの彼女？」

ドアを出ると、其処には獣人の少女ウーリィンが腕を組み壁にもたれて立っていた

彼女はお腹がすいていない、とずっと廊下に立っていたのだ

神原が出てきたあと、片目をぱちりと開けてこちらをジッと見つめてくる

「さぁ、な。俺の与り知るところでは無いが、声ぐらいはかけてお

くべきかと思ってな」

一応俺の彼女だし、と付け加える

「彼女ならあっちに行ったよ。突き当たりはバルコニーだから、たぶん其処じゃない？」

「サンキュ」

片手を上げ、そしてウーリィンが指さした方向へと歩き出そうとしたとき

「ねぇ」

呼び止められた神原は足を止める

「神原はあたしの居場所になってくれる？」

「・・・聞こえていたか」

「耳は多少いいからね」

ピコピコと獣の耳がかわいらしく動いた

静かに息を吐いた神原は自分よりひとまわり小さいウーリィンの瞳を見つめる

「お前がなって欲しいって言うなら、俺はなるよ。その責任が俺にはあるからな」

彼女の帰る場所を奪ってしまったのは俺なのだから

あの後、寝込んでいた神原の元へ、神原、そして人間を連れてきたウーリィンの処遇が通達された

村人からすれば人間に村の場所がばれるのはまずい

しかし、異世界から来たため、その恐れは必要無いという神原の言い分が信用される訳もなかった

申し訳なさそうに、裏切り者としてのレッテルを貼られたウーリィンと共に村から追放されてしまった

獣人にとって、人間は敵である

人間界では獣人は奴隷として売買されているのだから、獣人から見れば人間は恐ろしい敵である事に間違いは無い

多数派や強者が少数派や弱者を虐げるのは何時の時代でも変わりないのだ

その点、ウーリィンは人間に対して友好的であったため、神原が仲間達の言う恐ろしい人間にはどうしても見えなかったのである

森には魔獣も沢山居る事だし、獣人という種族を信じて村へ神原を泊めてあげようと連れ帰った結果、神原とウーリィンは村に拒絶された

処刑されなかっただけでもありがたいと、何かと頑張ってくれた村長にお礼を言って神原はウーリィンと共に森を出たのである

どういう説得をしたのかは結局聞けなかったが、それでも生きている事に感謝である

ただ、生まれた故郷に帰れなくしてしまったのは紛れもなく神原自身なのである

だから、この獣人の少女には何をされても文句は言えないし、言うつもりもない

「責任なんて感じなくて良いよ。私が勝手にやったことだし、後悔もしてないから」

「そう言ってもらえると救われるよ。じゃぁ」

神原は静かにウーリィンを背にして歩き始める

そんな神原の背中を、何か言いたそうな顔で静かに見つめ、見送った

「この世界にも月みたいな衛星があるんだな。にしても、お前が月を眺めてるなんて、似合わんな」

「・・・何さ。嫌味？」

「いやいや、お前に合ってるのは月を眺めてる姿じゃないだろう」

「なら何が似合うっての？」

「パソコンの前でニヤニヤとゲームやってるお前。もしくは、ぬるぽという字をみたらすかさずガッと突っ込むお前が好きだな」

「・・・褒めてるの？貶してるの？ちなみにあんたも似たようなものじゃない」

「褒めて・・・る・・・と思う。たぶん。褒めてる。うん。まぁ、そこについては悲しいかな否定は出来ないね」

「私もそんな自分を否定できないけど、やっぱそれは褒められる事じゃないのは理解してるつもりよ」

バルコニーに置かれた椅子に座って月と星空を眺める早苗の隣に椅子を持ってきて神原が座る

「何しに来たの？」

「早苗を見に来た」

「そう。どんな私が見えるの？」

「寂しそうにしてる早苗が」

「・・・・」

沈黙が訪れる

街はまだ眠ってはおらず、人々がまだ行き来して賑やかだ

風と共に運ばれてくる匂いが、二人の鼻を掠めていく

しばしの沈黙の後、神原も夜空を見上げながら口を開いた

「ごめん」

「なんであんたが謝るの？」

「いやあ・・・居なきゃいけない時に、側に居れなかったから」

「・・・・」

「君が軍を指揮しているのを知ったときは驚いた。それと同時に、辛いことを言わなきゃいけない立場になった早苗を支えてやるどころか、一緒に居ることさえ出来なかった自分が悔しい」

「・・・やめて」

「俺はお前の彼氏なのにな。ついさっきまで、お前が手を伸ばしている事に気づくことすらできなかった。彼氏失格だ」

「・・・・・・やめてよ」

「なぁ、早苗、俺を許――」

「やめてって言ってるでしょ!!何!?なんで!?なんで仙が謝るの!?対等なんじゃないの私たち!?私は・・・私はっ!!弱く、無いっ!!」

神原の言葉を遮り、座っていた椅子がひっくり返る

勢いよく立ちあがった早苗は神原を見下ろしてそう叫んだ

溜まっていたものをぶちまけるように

そんな早苗を見て、神原はニコリと笑う

「確かに、弱くはないと思う。でも、早苗は溜め込む癖があるからね。昔から、そうだった。言いたいことを言わずに溜め込んで、でも押さえていられなくなるとこうやって席を外して逃げ出す」

「っ!!」

「そういう所も含めて早苗だし、でも俺はそんな早苗が好きなんだ

けどね」

メガネの奥の瞳はややつり目の黒い瞳にニット帽

そんなニット帽を、照れ隠しのためかグッと深くかぶる

「私は・・・嫌い。こんな自分が」

「何？早苗は完璧な人間でも目指してる訳？」

「そうじゃ・・・ないけど・・・」

そう言われ、言いよどむ早苗

「俺のこと、はけ口かなんかだとおもって使えよ」

「でも・・・」

「俺はお前の彼氏なんだからさ、それぐらい受け止めてやるって言ってるんだよ」

そう言って立ち上がり、今度は早苗を至近距離から見下ろした

「それぐらいは出来るし、俺じゃそれが出来ないとでも思うのか？」

そうじゃない、と口に出したそうな顔をして早苗は首を横に振る
そこで神原はため息をついて振り返る

「つまり、俺が何を言いたいかと言うとだな」

神原はバルコニーに出た時に締めたドアを思いっきり開き――
どさどさーっと雪崩のようにしてバルコニーに溢れだしてくる人影
に早苗はお酒で火照った顔をぽかんとさせる

「お前等はいつまで盗み聞きしているんだ、と言うことだな」

「あは・・・は」

そこには笑顔を氷らせた一条唯と桜彩輝、そしてウーリィンが居た
一人静かに、カイは部屋でお酒を注いで料理を摘んでいた

「美味いな、これ」

窓から覗く月は地上を静かに照らしている

バルコニーの方は少々賑やかだったが

『迷いの森』

「さて、あそこに見えるのが国境だ」

決して小さいとは言えない大きさの川をカイさんは指さした

少し高地に居るため、現在自分たちは川を見下ろしている形となっている

「しかし、あの検問を通ると森を大きく迂回しないといけないから時間がかかる」

ふむふむと一同が頷く

「と言うわけで、今回は此方の道を使う」

カイさんは川の橋にある検問所を指さしていた指をスッと横にずらし、森を指さした

それを見て彩輝はカイさんに向き直り

「・・・つまりあの森を突っ切ると？」

と、問う

カイは頷いて歩を進め、そして――――

「どうしてこうなった」

いわゆる俺たちは迷子というやつになった

おまわりさーん

■桜彩輝・小田原早苗ペア

「ぎゃあ！気持ち悪い！！」

バンッと音を立てて不気味な植物のような魔獣が吹き飛んで木にビターンと打ち付けられる

魔獣を長い棒で吹き飛ばした張本人はブルッと身震いしてホッと一息つく

「あの、早苗さん?そんなに嫌なんですか?」

そんな早苗を見て彩輝はため息をついてとぼとぼと歩く

後ろからはギャァギャァと鳴きながらついてくる植物魔獣が群れをなす

「無理に決まってるでしょ!?この気持ちの悪い色と溶解液みたいな涎!!なんなのこの生物!?」

ビッと魔獣に指を差す早苗に、彩輝は苦笑いしながらなんとか宥めようと

「でもほら、よく見てみるとかわいく――」

「無いわよっ!!」

して失敗した。何がいけないんだ・・・ちまたじゃキモかわいいが流行っているのでは無かったのか!?

いや、あんまりはやり物には興味ないんだけどさ

「・・・みんな一体どこにいるんだ・・・」

特に神原さん！俺には早苗さんの手綱を握れないんですけどー

彩輝と早苗は鬱蒼と茂る森の中、獣道らしき道をまっすぐに進む

一体どうしてカイさんや一条さんとはぐれてしまったのか、未だに分からない

余所見もせず、ただ前を行く早苗さんについて行っていたら、俺たち二人は迷子になったのである

その早苗さんも、何故自分が迷子になっているのか理解できない様子である

多少道を外れたぐらいなら、声を出せばすぐに見つかると思ったのであるが、迷子になって叫び続けても反応が全くない

これは流石におかしいと思いつつも、まずは合流しなければとひたすら歩き続けているのであるが未だに人のひの字も見あたらない

代わりに小さな植物が追いかけてくる

その植物は早苗さんがどうしても生理的に受け付けないと拾った頑丈そうな棒で歩きながら吹き飛ばす

今のところ害は無いので彩輝も放っているが、流石に２０匹近くにまで増えているのを見るとなんだか怖くなってくる

「とりあえずまっすぐ進めば森から出るはずですし、それまでの辛抱ですよ」

彩輝がそうやって早苗をなだめる

彼女は短パンに半袖とかなりラフな格好をしており、あまりこういった森の中を歩くような格好では無い事は彩輝にも分かっていた

だからこそ早くこの森から出なくては行けない。彩輝の目線的な事に関してもだ

カイさんやラカーシャの話によると、あまり凶暴な魔獣は生息していないらしい

とはいえ何時までもこの森で迷っている訳にもいかない

迷いの森と言われるだけあり、もし、もし迷ってしまった場合は森から出て合流しようという事になっていた

森の中で探し回ると方向が分からなくなってしまうため、できる限りまっすぐ進んで森を出る事が最優先だと森に入る前に決めたのであった

「ってか、これ本当にまっすぐ進んでるの？ゲームとか漫画とか、まっすぐ進んでるようでいて実は同じ場所をグルグル回っているだけって事も・・・ここが異世界ならなおさら有り得るかもよ彩輝君？」

「う、あり得ないけど、有り得るかも知れませんね。なんか怖くなってきた。・・・よし、目印を付けよう」

彩輝はそう言って足下に落ちていた木の枝を三つ拾うと、その三本を置き直して進行方向へと矢印を作る

ついでに、と早苗はわかりやすいように石を拾って地面に『早苗最強』と書いて手をパンパンと汚れを叩く

苦笑いしながら、彩輝は「これなら戻ってきたら一発で分かりますね」と言った

「ま、これを見ることは二度と無いでしょうけどね」

「さ、行きましょうか。さっさとこんな薄暗い森を出てみんなと合流しましょう！」

そうして二人はまっすぐ進む

「なんてこった・・・」

「オゥ、ジーザス！神は我等を見放したか！！」

二人してｏｒｚと地面に膝をついた。その後ろで先ほどの妙な生物がケタケタ笑っている

二人の目の前には矢印を象る三つの木の枝。そして早苗の書いた『

早苗最強』と書かれた文字があった

早苗は『最強』の文字を消し、新たに『迷子』の文字を書き足すと、

「早苗ちゃんマジ迷子」と寂しそうに呟いたそうな

■神原仙・一条唯ペア

「迷子だ」

「迷子だな」

一方、神原と一条も迷子となっていた

「あいつ等が迷子になったのか、俺等が迷子になったのか」

「たぶん、私たちが迷子でしょうね。いえ、どう考えても絶対私たちが迷子ですよっ！」

唯は頭を抱えてため息をつく

仙も少し休憩しようとプラスチックの水筒を取り出す

「あー、なんか久々に向こうの製品（もの）を見た気がする」

「君が着ている服も向こうの物じゃないか」

そう言ってごくりと水を飲む

唯にそれを差し出すと、もう一度ため息をついてその水筒の水を飲む

「それはそうですけど・・・」

「さて、これも良い機会だ。君と二人っきりというシチュエーションもなかなか無いだろうからな」

唯は横目でメガネを押し上げた神原を見る

「彼女（さなえ）さん、怒りますよ？」

「だから今話をするんじゃないか。別に浮気してる訳じゃないし・・・」

「そういう考え、甘いですよ。ま、全員が全員そうじゃ無いですけどね」

唯は水筒の蓋をして仙に放り投げる

それをキャッチして鞄に仕舞うと、話を切り出す

「君も、石県の人間かい？」

「まぁ、あのバスに乗ってた人は全員石県の人じゃ無いですか？」

「それもそうか」

と、そこで一条は言うつもりの無かった言葉を漏らしてしまう

先日の夜の事を思い出して――――早苗さんの顔が頭をよぎる

「神原さん。あんまり早苗さんを不安にさせちゃ駄目ですよ」

「？」

クエスチョンマークを浮かべる仙に「何でも無いです」と話をそらした

神原はそろそろ行くかと立ち上がり、出発しようと荷物を持つ

その後、唯と仙は森を出るべく、緑深い森をひたすら歩き続けた

巨大な木の根を乗り越え、小さな沢で休憩したりしながら順調に進んでいた

と、再度出発したとき、沢のせせらぎに混じって別の音が聞こえる

音、というよりこれは声だろうか?男の子の声が聞こえる
すすり泣くような泣き声だ
唯と仙は顔を見合わせ、幻聴ではない事を確かめると少し道を外れてその声のする方向へと歩を進めた

「こんな所に人なんていんのかよ・・・」

「知らないわよ」

二人とも半信半疑のまま声のする方へと森を進む

こんな森の奥に、子供が一人泣いている。普通有り得るのだろうか?

迷子にしては、あまりに森の奥すぎるような、と唯は考え、それは自分の事かと思うとあながちそれは捨てきれない考えでは無い

そして

「居た」

「居たな」

二人の目の前には、少し開けた場所に生えている木の下でうずくま

る男の子が居た

少年の見た目は7歳前後、といったところだろうか

よくもまぁ一人でこんな森の奥に無事で居たなぁと仙と唯は驚きながらも少年に近づいた

「ねぇ君、大丈夫？」

一条はしゃがんで少年と同じ目線の高さで話しかける

その一条の声に反応したのか、少年のすすり泣く声が止む

「どうしたの？迷子？」

「お姉さん、だれ？」

「フフ、迷子の迷子のお姉さんだよ」

「お姉さん、迷子なの？」

「自慢じゃないけど、迷子だよ」

胸をぽんと叩いて自慢するが、断じて自慢では無いだろう

威張って言うことか、と仙はため息をつく

むしろ恥ずかしいくらいだ

「君はなんで泣いてるの？」

少年はゴシゴシと目元の涙を裾で拭う

「あのね・・・あのね・・・友達とはぐれちゃったの」

「友達？一緒に来てたの？」

「うん」

「そう。じゃぁその友達もいま迷子なんだね」

「・・・うん」

「じゃ、一緒に探す？」

「いいの！？」

パッと顔を明るくした少年を見て一条は微笑んだ

フフ、と笑みをこぼし立ち上がるともう一度胸を叩いて

「お姉さんに任せなさい！」

と、その様子を見て仙は、まぁさっきよりかは頼もしく見えるかなとこっそり思った

すると少年も立ち上がり「ありがとうお姉ちゃん！」とお礼を言って一条に抱きついた

微笑ましいな。早苗ももう少しこれくらいの母性を持ち合わせてくれたらなぁ・・・っと、これは押しつけか

「よし、じゃぁ探しますか」

「あ、あっち！」

と、立ちあがった少年が突然走り出す

一瞬あっけにとられた二人だったが、慌ててその少年を追いかける

二人ともその走り出した少年に、明らかに何かおかしい、と違和感を感じてはいた

しかし、二人ともその少年を追いかけて森の奥へ奥へと踏み込んでいってしまう

前後左右、自分が何処へと向かっているのかも分からないかのように、少年は右へ左へと木々を縫うようにして走っていく

少年の姿を見失わないように二人は必死に少年を追いかける

心の奥で、これ以上森の奥へと踏み込んでしまって良いのだろうかと足を止めかけた唯だったが、ここまで来てしまえばもう関係ないと気持ちを少年に向ける

仙も同じように、早苗と少年を止めるべきだと脳裏に警鐘がなるそれはやはり不安という言葉で表すのが一番しっくり来る

全く見知らぬ土地、地図も案内人も無く歩き回ることがどれほどまでに恐怖をかき立てるのか

しかしもはや後戻りはできないと、せめて一条唯を見失わないように追いかける事が自分にできる唯一の事であった

一人は、怖いから――――

■

「さて、困ったな」

「困りましたね」

カイは仮面の下で顔をしかめる

その様子は隣のラカーシャとウーリィンには確認できないが、三人ともそれほど大差ない内心である

ラカーシャは眉をひそめ、ウーリィンは耳と尻尾をせわしなく動かしている

寧ろ、三人の内に渦巻いているのは焦りであった

「一体いつどこではぐれたんだ・・・」

「全然気がつきませんでした・・・」

「においを感じない・・・気配も感じない・・・森の声も聞こえない」

三者三様の落胆の表情を浮かべる

「いくら迷いの森とはいえ、こうも簡単に迷うとは思っていなかったな。噂以上に厄介かもしれんな。獣人の耳と鼻でも駄目とは」

「すまない。全く何も人の気配を感じないんだ。お役にたてなくて申し訳ない」

シュンと耳と尻尾が垂れるウーリィンは俯いてそう口にした

「いや、嘆いたところで仕方がない。彼らが無事に森を出てくれるのを信じよう」

カイはそう言っては見るものの、所詮は気休めの言葉でしかない

強力な魔獣は居ないとはいえ、一度迷うとなかなか出ることが出来ないといわれる森だ

真っ直ぐ進むだけなのだから迷うことは無いと思っていたがどうやら甘かったとカイは後悔する

木漏れ日の中、その後ろにラカーシャが続きその後ろをウーリィンがとぼとぼとついていく

感情が表に出やすいんだな、などとカイは一番後ろのウーリィンを振り返ってチラリと見てみる

嬉しいときは尻尾をぶんぶん振っているのに、今では歩く動作に垂れた状態で揺れているだけだ

あの男と居たときは嬉しそうに尻尾を振り回していたというのに

それにしても、この森は何かが変だ

獣人の少女ですら他のメンバーの居場所が分からなくなるほどに彼らは森の奥へと迷い込んでしまったというのだろうか？

しかし、いくらなんでもそう簡単に迷うとは思えない

それにそんな森の奥にわざわざ迷い込むほどに無警戒だった訳でもないとなると、流石に違和感が拭いきれない

しかも、よりにもよって異世界から来たメンバーだけではぐれてしまうとは・・・

カイは失敗したなと頭を抱えたくなる

一応、迷ったときはまっすぐ進んで森を出たところで合流しようと伝えてあるが、万が一という事もある

とはいえ、ここで向きを変えてしまえば前方がどちらになるのかすら分からなくなり自分たちも迷子となってしまう可能性がある

魔術で居場所を知らせても良いのだが、瓶の水は残り少なくもはや居場所を知らせるほどの魔術を行使できそうもない

何処かにわき水や川でもあれば・・・

と、そこでカイは川のせせらぎの音が微かに聞こえることに気がつく

木の葉が擦れ合う音に混じり、その水の音はしっかりとカイの耳に届いた

「近くに川があるみたいだ。そこで一端休憩しよう。魔術を使えば居場所を知らせる事もできるかもしれない」

そのカイの意見に、ラカーシャとウーリィンは無言で頷いた

どうやらラカーシャはかなり疲れているらしく、ウーリィンは気分的に元気が出ないようだ

獣人が居るのは心強いが、これではあまり役にたちそうも無いなとふと思ってしまうカイであった

そして三人が歩を進めていくと、小さな川が目の前に現れた

透き通るような浅い川には、緑の木々と川底の石がうつっており緩やかな流れをつくっている

「おぉ、川だ」

「喉かわいたぁっ！」

冷たい水を飲みたくなったのだろうか、ラカーシャが叫びながら走り出す

カイもそれに続こうとした。その時だった

「待って！」

ガッとカイとラカーシャの襟首を掴むウーリィン

先ほどのような死んだ目から、どうも復活しているようでその瞳はしっかりとカイとラカーシャの顔を捉えていた

「どうした?」

「何か変。直感だけど・・・」

「・・・そうか。獣人の直感はバカにできないな。何がおかしい?」

「分からない。さっきから、変な気分。まるで、曲がってるような・・・」

「曲がってる?」

ウーリィンの言う事に、意味が分からないと首を傾げるカイとラカーシャ

「私にも、どう表現すればいいのか分からない。でも、あの川は極端におかしい。それは分かる」

そんなことを言われても、カイとラカーシャには透き通る水の流れる川が見えるだけで、何もおかしい所は無い

とはいえ、ラカーシャは何も気がつかなかったがカイも何か違和感を感じていた

それが何かは分からなかったが、何かが足りない、そんな気がしたのである

「ふむ・・・ではあれが川かどうか確かめてみるか」

カイは手短に落ちていた手頃な小石を拾い、それを川に向かって投げ入れる

すると、小石は綺麗な放物線を描き、コツンと見えない何かに当たって小さな悲鳴があがった後、小石は川の上を転がった（・・・・）

今、三人の目には小石が川の上に浮いているように見えている。いや、置いてあるように見える

少なくとも、あれは水では無い

「・・・いつまで姿を隠してやがる！」

周囲に漂う僅かな水のマナを使い、瓶の水をぶちまけて氷の飛礫を作り出す

それを川の方向へと放つと、ココココッと、やはり見えない何かにぶつかって地面や川のような場所の上に落ちて転がる

それと同時に、うっすらと何かがカイの視界に現れた

それを見てカイはあっ、と叫ぶ

「ピキかっ！！」

ピキというのは妖精の一種で人にイタズラをする迷惑な妖精である

姿をくらまし、知らないうちに人の五感を操って人々を迷わせる妖精のため、自分がピキにイタズラされている事に気づかない者が多い

妖精は普段、森や湖の周囲に生息するため、この森に居たとしてもおかしくは無い

とはいえ、よりにもよって人に迷惑な事ばかりするピキに出くわすというのもまた運が悪い

ばたんきゅ～と半透明の翼を羽ばたかせていた妖精は地面にふらふらと撃ち落とされた

その数、五匹

川はうっすらと消えていき、そこには何もない開けた空間があっただけだった

「こんな沢山のピキがついてたらそりゃ迷うわなぁ」

そう良いながら羽をつまんで顔の前に持ってくるカイ
妖精の大きさは大体１０センチから２０センチ前後。小さな人の形をしており半透明の翼が透き通っている

「あいつ等もこいつらに引っかかったのかもしれんな」

そうなってくると、森から出るためにはピキを倒すか振りきるしか無さそうだ

それを伝えなければ、彼らは永遠に森を彷徨い続ける可能性が出てきた

「すこしまずいかもしれんな」

カイは仮面越しに森の奥を眺める

もちろんそこには木々が見えるだけで彼らの姿は見えない

迷った彼らが自力で気がついてくれればいいのだが・・・そう願うカイであったが、

カイの予想通り４人はピキという妖精に同じ所をグルグル回るように歩かされ、完全に迷子になっていた

『迷いの森』（後書き）

ストック切れー

『迷いの森の迷子魔女』

「どうしよっか」

「どうしましょうかね」

彩輝と早苗は体育座りをして顔を俯かせたまま聞き合う

二人は完全に迷子であった

理由は分からないが、二人はベタな感じに同じ場所をグルグルしていたらしく、それに気がついたときのショックから抜け出せずに現在意気消沈した声でのやりとりが続く

「真っ直ぐ進んでなんでもとの場所に出るんだよ・・・」

彩輝はため息をつきながら愚痴を漏らす

もう出られないのではないかと思うほどに、見慣れた光景を何度も見てしまう

無限ループって怖いよね、とは誰が言った言葉か。今ならその言葉の怖さがよく分かる

二度と森から出られないと思うと背筋がゾッとする

後ろからついてくる謎の生き物たちがケタケタと笑っている。不気味だ畜生!!

せめて方位磁針や長いロープでもあれば自分が進んでいる方向が分かるというのに・・・

彩輝は改めてそうしたサバイバルアイテムが恋しくなった

最も、それらが当てになるかどうかはまた別問題だが、何かに頼っていないと不安に押しつぶされそうになる

「このままじゃぁやばい・・・とは分かっているんだけどなぁ・・・」

「どうしようも無いよね。よし、こういう場合は意見を出し合うのよっ!えーと、ぶ・・ぶ・・・」

えーと、なんて言ったっけっかなぁと呟きながら考える早苗さんを見ながら「ブレイン・ストーミングってやつですか」と答えを教えてあげる

それだ!と目をキラキラさせながら俺をビッと指さす

「あれですよね、意見をとりあえず出しまくって意見を共有させるとかなんとか、そういう奴ですよね」

「そう、それそれ!ってってことではいどうぞ!」

え、俺から？

突然振られて驚いた俺は何も考えていなかった脳裏にアイディアらしきものを羅列していく

「え、えぇ～・・・んん～・・・とりあえず、原因についていろいろアイディだしてみますか？」

「そうね、解決策から入るのは焦燥すぎるだろうしね」

「それじゃぁ・・・そうだな。迷っている原因・・・原因・・・俺と早苗さんが超方向音痴」

「もしそうなら詰んでるわね。これ以上無い程に。んー森が動いている、とか？」

なるほど、異世界だから本来なら有り得なさすぎる意見も出すべきなのか。ならば

「実は俺たちは何者かによって眠らされていてここは本当の世界じゃないとか」

「誰かに意識や感覚を操られている」

「ん～空間がゆがんで元の位置に戻されている」

「じゃぁ時間がゆがんで前の時間に巻き戻されている」

「・・・・こんなもんですかね？パッと浮かびそうなのは」

「そうね。じゃぁ解決策的なものを考えていきましょうか。そのいち！とりあえずひたすら歩く！歩いて歩いて歩きまくる！」

ここは突っ込むべき所なのだろうか？と彩輝は頭をひねる

「・・・・えーと、ロープみたいな紐を持って進む？」

「とりあえず走って走って走りまくる！！」

「・・・・えーと、一度戻って街道を使って迂回する・・・とか？」

「歩いて走って少し立ち止まってお茶を飲みながらこれまでの人生を振り返り、辛いときもあった。苦しい事もあったとほろり涙を流し、しかし、それを乗り越えた時のあの感動を思い出して――――」

早苗さんはこっちをジーッと見ながら時折身振り手振りを付け加えながら長ったらしい台詞を続ける

そこで俺は折れた

「あのですね早苗さ――」

「突っ込み遅いぞ！それでもネラーか！」

それをぶった斬って早苗さんがビッと俺を指さす

断じて某掲示板のユーザーでは無い俺は咄嗟に口から反論の声が出てしまった

「違いますよ！ってかなんですか！？早苗さんってそっち方面の人だったんですか！？」

「印象変わったかね？」

「・・・・・いえ、あまり」

その言葉に俺は不思議と印象が変わった気がしないと思い、自分でも意外だと思った

「む、では私は見るからにネラーのように見えたという事か！？」

「なんか胡座かいてビール飲んでそうな気がします」

「失礼な！！女性に面と向かって言うか普通！？そういう君こそ・・・ん？」

と、真っ赤になって蒸気機関車のように煙を頭から吹き出そうとし

ていた早苗さんは突如、その目をきょとんと丸くさせた
その焦点は自分の後ろに向けられているため、つられて俺も後ろを振り向いた

「どうかしまし・・・た？」

そこで彩輝も動きを止める

「こんな物、あったっけ？」

「いえ、全然気がつきませんでした」

彩輝と早苗は、一際大きな木に近づく

御神木のようにしてしめ縄がまわされ、その幹には巨大な木の扉がついていた

「どう思う？これで蝶々と花畑があったら超ファンタジーじゃね？」

「熊とか狸が住んでるんじゃないですか？」

彩輝は何となくその光景が絵本に出てきそうなファンタジーな雰囲気だったのでそう言ってみた

「どこの絵本だそれ、いや、獣人がいるのだからあるいは・・・」

と真面目に考える早苗を置いて、彩輝は迷うことなくその木のドアをノックした

その音を聞いて顔を上げた早苗さんがまたもや目を丸くして俺を見ていた

「っちょ！もう少し慎重にならない普通！？」

「だって迷ってもしかたないですよ。いや、俺達迷子だからもう迷ってるのか？」

「だれが上手いことを言えと言った！？」

「もしかしたら森の出口とか教えてくれるかもしれませんし、あわよくばお茶とかも出してもらえるかもしれませんよ？」

「前も言ったかもしれないけど、楽観的すぎやしないかい君！？」

「例えばですけど、もし此処でここに居るかも知れない人に何も聞かずにさっきみたいに森をグルグルして迷い続けたとします。あぁ、さっきここで話を聞いておけば助かったかもしれないなぁと思うのと、ここでドアが開いて魔獣とか熊とかが出てきて、あぁ開けなければよかったなと後悔するの、どちらがいいですか？俺は断然後者です」

「もしかしたら森を歩き続けたら出られるかも知れないし、だれか見つけてくれるかもしれないじゃん。それに、物理的に恐怖を感じるのは後者でしょ」

「それこそ楽観視ですよね」

うっと声を詰まらせた彼女を尻目に俺は話し続けた

「自分で森を出る為に何かしないと事態は進展しませんよ？まぁもちろんもし化け物が出てきたとしても、死ぬ気はありませんけどね。熊ぐらいなら、何とかなりますから」

そう言って腰のソーレと風王奏を右手でそっと触れた

それを見てもう口出しする気も失せたというような表情でため息をついた早苗

彩輝は日本に居た頃とは違い、様々な力を手に入れて僅かに調子に乗っていたとも、自信がついたとも言えるような気分になっていたもしもどうしてもまずいと思えば最後の奥の手が無いわけでも無いのである

もっとも、そうなってしまえば彼女の肩を借りる事になってしまうがと、木のドアの向こう側から足音が聞こえてきた

グッと身構えた二人の前に、ドアを開けた綺麗な女性が顔を覗かせた

「そろそろ来ると思っていました」

身構えた二人はぽかんとした顔で顔を見合わせた

中に入れてもった二人はそこが木の中であるということを忘れて部屋中を見回した

部屋は確かに外からみる木のように円柱形の大きな部屋で、壁には天井までとどこうかというほどの巨大な本棚。そして螺旋階段。そこには数え切れない程の本が敷き詰められている

その部屋の中心には巨大なデスクがあり、そこにも無数の本と紙が散らばっている

「お、おじゃましまーす」

「お邪魔します」

「適当なところに腰掛けて。今お茶と菓子を出すから」

女性はそう言ってパチンと指を鳴らす

すると突如二人の前にお盆が出現した。それも空中に浮いた状態で

そして小声で何かを唱えたかと思うと、次の瞬間にはポンポンとその上にお茶と茶菓子が出現した

彩輝は再度その女性を見てみた

後ろ姿で今何かを戸棚から探している様子の女性は、先ほど正面から見たときは凄く美しく見えたが、後ろ姿もまた美しかった

ダークグレーのローブを纏っているが、若干その突き出されているように見えなくもない部分から目をそらす

金髪、髪は短く肩の当たりで切りそろえられているようだが、癖毛のせいで揃っているようには見えなかった

「疲れているでしょう。どうぞご自由に食べて座ってください」

と、座ることも忘れていた二人はお礼を言ってお茶とお菓子を手に取ると、腰掛ける場所を探した

「あぁ、すいません」

と、再度彼女がパチンと指を鳴らすと、二人の前に学校机のような机一つと学校椅子のような椅子二つが現れた

彩輝と早苗は其処へ腰掛けるとお茶を一口分喉へと流し込んだ

それを見てニコリと微笑んだ女性も静かに自らの椅子に腰掛けた
彩輝と早苗はとりあえず色々聞きたいことはあったが、とりあえず彩輝が代表に真っ先にこれを聞く

「あの、貴方は一体・・・？」

「そうですね、あなた方は私の事を知らないのですよね。そうですね、私はダイヤレス・セブンリッチ、とでも名乗っておきましょうか」

「ダイヤレスさん、あの、聞きたいことがいろいろとあるんですが」

「えぇ。分かっています。気になりますよね。順を追って説明します。まず私が何者なのか、という問いに名前以外で答えるとするならば、そう、あなた達の言葉では魔女となるのでしょうね」

「魔女・・・」

隣の早苗さんが小さく声に出した

俺も、何故か分からないが一瞬どきりとした

そこで俺は突如脳内に浮かんだ疑問をぶつけてみる

「あの、魔女って言っても、魔法を使える女の人が魔女ってことな

んですか？」

「その解釈は、半分当たっていて半分外れています。確かに魔女は魔法を使いますが、女性の魔術師が魔女という訳では無いのです」

「じゃぁ、その残りの半分は魔術師と何が違ってるの？」

確かに、普通の人は魔法を使えない。だから使える人を魔女と呼んだ。そう俺は解釈しているし、恐らく早苗さんも同じだろう

「魔女という存在は、皆呪いというものを持っています。それが一番の違いでしょう。私の呪いは永久の迷子。私はこの呪いをそうよんでいます」

「永久の・・・迷子？」

「私は永久に、迷子なのです。目的地へたどり着けないという呪い。そのため、私は欲する物を手にすることは出来ません。逆に、向こう側からたどり着く物のみを手にすることが出来る。そういった呪いです。ですから私は目的を持って行動すると、私自身はその目的を到達することが出来ない」

「貴方、だけが」

「何も成し遂げられない。そういう事ですか？」

「えぇ、そうです。異邦の女性よ」

「！！俺達の事が分かるんですか！？」

「えぇ。しかし、私は欲さぬ情報なら手にすることが出来るのですよ、桜彩輝さん」

俺の名前・・・！

彼女の永久の迷子という呪いがどれほどの物なのかは分からない

しかし、名乗った覚えの無い自分の名前を知っており、尚かつ俺達が異邦人である事を知っている様子である

欲さぬ物以外を手に入れる事が出来る呪い

どうやらそれはデメリット以外のメリットがあるようだ

「その呪い、使い辛くないですか？」

「もう慣れましたから。欲さねば、私は全てを知ることが出来る。欲さねば、全てのものを手に入れられる。いらないものこそが、私が持つ最大の力なのです。そんな力、いらないんですけど、手に入ってしまうのだから仕方がないのです」

そう言って彼女はニコリと笑った

「そう、永遠の若さも、膨大な知識や魔力もいらなかった。本当に

欲しい物は、何も持ってないんだから、私にとっては呪いなのですよ」

「そう、なんですか。じゃぁ、えっと・・・」

「興味は無いけど、貴方の心も読めてしまう。だから先に回答しますけど、あなた方二人には今から特訓をして貰います」

「・・・・・へ？」

「・・・・・は？」

俺と一条さんはまたもや目を丸くした

唐突すぎて意味が分からないといった表情をすると、彼女は忘れていたというような顔をした

「あぁ、すいません。唐突でしたね。説明しますね。私、興味が無いけど未来が見えるのです」

「未来？」

「はい。それと同時に、様々な過去も知る事が出来るのです。本当に、興味ないんですけど趣味程度にそいった過去や未来の事、技術や魔法の事、知りたいと思わない知識を私は本にしています。これが私が唯一出来る暇つぶしなのです。別に本を書きたいと思っていないので、書けてしまうのです」

この本全部書いたのか！？

二人はバッと天井まで続く本棚に整頓された無数の本が視界へ飛び込んでくる

１０００？いや１００００か？いやもしかしたらそれ以上――

数える気も失せる程の蔵書を、目の前の女性が全て書いたというのか？

その驚きは、凄いという感想を通り越して二人に僅かな恐怖を抱かせた

そう思った瞬間、彼女はニコリと微笑んだ

「お気になさらず。あなた方がそういう人間ではないと、分かりますから。えぇと、本は私が欲すると手に出来ないかもしれないので、貴方に探して欲しいのです」

そう言って彼女は二人の前に巨大な本を置いた

分厚っ！？辞書なんてレベルじゃねぇ！？

「これは？」

「持ってきて欲しい本があります。これはその本の場所が書かれて

います。本の名は・・・前代時事記録１９刊です」

俺と早苗さんはまたもや顔を見合わせ、そして本を開いた

そして息を呑む

「にっ・・・日本語!?」

「ど、どういう・・・」

二人はあまりの驚きに声を張り上げる

この本が日本語で書かれているのならば、もしかするとこの人は―

――

そこまで彩輝と早苗が考えたところで、それを本人が否定した

「いえ、ここにある全ての本にはその人が読めるように勝手に翻訳してくれる魔法をかけています。今はあなた方が一番親しみのある、読みやすい言語になっているはずです」

「こ、これなら探しやすい！」

正直、また一から翻訳し直してさがさないといけないのかと思っていた彩輝はホッと胸をなで下ろす

そうして、綺麗に名前順に並べられた本の中からその一冊を見つけだす

しかし、途中目録の中に単動式蒸気機関やら元素やらＤＮＡシークエンシングとか、よく分からないものから聞いたことのあるような名前の本がちらほらと出てきた

この木の中の本があれば、外の世界に大革命でも起きるのではないだろうか？

「記すために書いているのに、自分では読みたいと思った本を読めないのが呪いの辛いところですね」

そう愚痴を漏らしながら、三人は螺旋階段を上って目当ての本を早苗が手にした

「１７、１８、１９・・・っとこれか」

一体どれほどの間そこに挟まっていたのだろうか

表紙に汚れは無いが、上に溜まった埃が下へと落ちていく

緑色の、蛇が縁取られた本であった

そして目当ての本を手にした三人は下へと戻ると、その緑色の本は

勝手に開いてしまう

「さて、どこから話しましょうか。まずは、過去の話しをしましょう。私が知る過去を。そして未来の事を。そしてあなた方がすべき事の指針を。しかし、その前にあと二人の主人公も到着したようです」

俺と早苗さんはキョトンとして、まだ誰か来るのだろうかとドアを振り返った

ダイヤレスさんは音もなく立ち上がり、すり足でドアまで移動するとそのドアを開いた

其処には少年が立っていた

「案内ご苦労様」

そう言うと少年はスッと消えてしまう

その後ろに、見覚えある人影二つ

「せ、仙！！」

「あ、アーヤん！？」

「早苗っ！？」

「一条さん！？」

驚く四人を尻目に、彼女はニコリと微笑んで二人を部屋へと招き入れる

「主役は揃ったみたいね。さぁ、今度こそ話を始めましょうか」

魔女はその微笑みを崩さぬままあと二人分のお茶と茶菓子を出し、学校机と椅子が二つずつ新しく出現した

『上達への特訓』

巨大な影が一直線に突っ込んでくる

彩輝は思いっきり横に飛んで転がってその巨大な動く像の突進を避ける

「どわっ!?あぶねっ!!」

「まだまだっ!」

早苗が右手をスッと横に振る

早苗の意思に従った巨大な像がバキンと音を立てて駆け寄ってくる

大駒二つが彼女の元を離れた今が好機と見て、彩輝はその軌道を読んでその進路から外れるととっさに剣を抜いた

紅い剣だ

「オーバーアビリティッ！！」

「成って龍王！！龍馬！！逃がすな！」

「うおおおおおっ！！」

剣が真っ赤に燃え上がり、深紅の炎が彩輝を包み込んで炎の翼を出現させた

体勢を低くして自身を取り巻く炎を操り、大地を蹴って一気に加速する彩輝

と、早苗の前に2体の像が割ってはいった

恐らくあれは金将と銀将だと予想する彩輝はその2体の像が持つ槍と剣の届かぬ上空へと急上昇した

そして一気に急降下しようとしたところで、早苗が新たに二つの駒を放るのを視界に捉える

なんだ？何をする気だ？

現在、彩輝と早苗、そして仙と唯という二人ペアになって特訓をしている所である

それというのも、あの魔女が自分達には力の扱いを教えると言って聞かなかったのである

この場に居ない三人の事も気になるし、もしかするともう森を抜けているかもしれない

それなのに、何時までもここでお茶を飲んだり特訓をしている暇があるかと言われると、あまり無いと言えるだろう

そもそも、早急にシーグリシアへと向かわなければならないといけない為、その旨を魔女に伝えると

『大丈夫。特訓中、私はあなた達の入る部屋の時空を操るから大丈夫です』と言って無理矢理押し込まれたのだ

第一、彼女の言う過去の歴史というのを聞いても何がなんだかよく分からなかった

というのも、過去にアグレシオンが責めてきた、とか近い未来アグレシオンが責めてくるとか、その辺りの事はなんとか理解できた

その為、自分たちは力をつけるべきだと進められたのである

でなければ、大切な物を失うと言われたのだ

しかし教えすぎると、良くない方向に結果が変わってしまうという事を恐れて彼女はそれ以上詳しいことは話さなかった

だがもしこの提案が本当なら、とても嬉しい事だと彩輝は思っていた

魔女であるかどうかはともかく、彼女は彩輝達が神子であり、人の限界を超えるオーバーアビリティを知った上で特訓をすると言って

きたのである

これまでこの力の練習はほぼ実践あるのみといった感じであり、そこらへんの魔獣では瞬殺してしまうため上達が身にしみて感じる事はあまりなかったと言えよう

『君の力は風。風を操る速き龍の神子、そして同じ龍族のつながりでその短剣の力は最大限に引き出せる。素材は上場。あとはそれを使いこなす経験が必要。そのために、貴方はただひたすら実践を行って技のキレと直感を磨く』

『貴方は知識はあるが武力が無い。炎とは生まれ、消えゆく命の象徴。貴方の力は生と死を与える不死鳥の神子の力がある。死を与える力は、人には制御できないから、貴方ができるのは無機物に意思と生と命令を与え、それを手駒として操るという事。貴方にはその力を身につける事をして貰う』

『貴方の力は運命を見定める一角天馬の神子。定められた運命を見る事は、未来が唯一を変わった事を実感できる力を持つという事。光を見る力を、誰にも惑わされず貴方は正しく扱わなければならない。貴方には自分と戦ってもらいます』

『君の力は氷。その凍てついた氷の爪と牙は氷狼王の神子の証。その氷の牙と四肢は貴方を傷つけ、他者をも傷つける力であることを自覚しなければならない。災厄を象徴する氷狼王の力、貴方はその本当の力に気がつけるかどうか、ただひたすら貴方にも自分と戦って貰います』

そう言って魔女は俺たちにそれぞれ特訓内容を告げた

俺は早苗さんと戦闘の訓練

一条さんと神原さんはそれぞれの個室にて特訓を行っているらしい

っと、考えが過ぎたか？

早苗さんの能力は３０分くらいで発現した

その能力は、物に命を与える事である

物にはそれぞれ名前や正確な使い方といった、その物を象徴するものがある

それらを正しく知り、意思を込めるとそれは本来の働きをするために動き出すのである

そこで早苗さんがそれを戦闘に使う為に考え出したのが、将棋の駒に命を宿す事であった

将棋の駒には命の炎が宿り、それぞれが自身の能力の動きをしてくる事には彩輝はすぐさま気がついていた

というよりも、将棋を持ってきていた事に驚き問いつめると、なんと自分で暇つぶし用に作ったという

そう言うと、駒をこちらに向かって投げてきた

そういう風に使うの！？とか驚いていると、駒が自分の後ろで成って龍やら馬になるわ、なんじゃそりゃ！？

しかし彩輝はその将棋を無視して早苗に突っ込んでいく

追いつかれる前に、押さえ込む!!

一気に加速する彩輝

「私まだ変身してないよ?速すぎないか彩輝君?」

「まだまだぁっ!!」

遠慮を吹き飛ばしたかのような顔の彩輝が土煙を吹き飛ばして、早苗目掛けて一直線に突っ込んでくる

「そうこなくちゃ!オーバーアビリティ!」

「うおおおおっ!二歩斬り一閃!!」

彩輝が一歩地面に足を着け、彩輝が二歩目を踏み込んで、加速

対する早苗も炎の翼と尾羽を広げ迎撃の体勢をとった

姿が消えた彩輝の前にドドンッと巨大な金と銀の像が立ちふさがった

彩輝の神速の一閃はその金と銀の像を斬り飛ばす

その切断面から早苗と彩輝の視線がぶつかり合う

しかし、それは一瞬の出来事であった

彩輝の姿は再び早苗の前からかき消え、その残像を目で追った

早苗の身体能力は現在かなり上昇しており、速さにおいて絶対を誇る龍の神子である彩輝の姿を何とか視界に納めることができた

――速いっ！？――

――遅いっ！！――

彩輝の剣が翻り、とっさにが指を将棋の駒を取り出そうとする

ガゴンッ！！

早苗をガードに入った銀色の像が大きな音を立てて炎に包まれて砕け散る

そこに彩輝は二本目の刀、風王奏を早苗に向けて突きつけた

「俺の勝ちです」

「そうだといいね」

此方に顔を向けていなくても、彼女が笑っているのが分かった

「っ！！」

彩輝は、咄嗟に下を見た

魔法陣が何重にも組まれている

それも部屋全体を覆うほどの大きさの魔法陣が順々に彼女を中心に、まるで年輪のように増えていく

「どかーん」

彩輝の目の前にいた早苗はニヤリと笑い、吹き上げた炎の壁に彩輝が阻まれた

彼女を中心に、魔法陣の上に炎が円を描いて壁を作り出していた

それも、連続発動するようで、次の瞬間には彩輝の真下で光り輝く魔法陣からも炎が吹き出した

「っく！？」

彩輝は後方に思いっきり飛んだ

途中で体勢を立て直し、翼を広げて距離を取る

まるで壁が迫ってくるように、炎は彩輝目掛けて部屋を赤く染め上げながら追ってくる

「もう決着ついただろっ！？」

「私は決着ついてないと思ってるよ。だってこうして反撃できるのに、それで決着なんてあり得ない。詰めたと思っても、相手にはまだ手段が残っているかも知れない。そして君が私を詰めたと思っているかもしれないが、逆に君がこうして私の陣地に飛び込んでくる結果を考えなかった訳じゃない」

「そーかよっ！」

彩輝は地面から垂直に飛び上がり、炎の壁の上へと翼を広げた

「女だからと、私に手を抜くのは、私自身への侮辱だ。少なくとも、私は君を殺すつもりでやってるよ。じゃないと、意味がない」

「意味わかんねぇよっ！！」

彩輝は炎の何重もの壁を上空から乗り越え、中心に立つ早苗目掛けて急降下した

ぐんぐんと加速する彩輝は刀を振りかぶる
そこまで力があるんなら、俺を倒してみろとでもいう勢いで
それに早苗も全力で答える

「私はもう、後戻りできないから、吹っ切った。でも君はそうじゃない。ましてや戦いの渦中に飛び込むつもりなら、なおさらだ！」

「炎月刃！！」

「炎が私に効くか！！」

彩輝はソーレを振るい、炎の刃を早苗に飛ばした
三日月の炎は早苗目掛けて飛んでゆくが、その炎は背中の炎の翼によって防がれてしまう

「接近戦も試してみたいね」

「そんな余裕、あるかな！」

「何事もやって見なきゃ分からないよっ！」

炎の翼が大きく開き、大きく上空へ向けて上昇する早苗

それを追って急ブレーキをかけ、直角に早苗を追う彩輝
しかしいくら鳥は空を飛べたとしても、龍のスピードには叶わない
一気に差は縮まり、二度、三度と蹴りと殴打がぶつかり合う
その度に、衝撃波が空気を揺らす

「くっ・・・！」

いくら早苗も神子化しているとはいえ、彩輝の方が一段上手であり、
またそのパワーも男子と女子の差というよりかは鳥と龍という差の
ように早苗は感じた

ぶつかり合う度に体が軋む
その隙を逃さず、怯んだ早苗の足を掴むと右腕一本で早苗を地面へ
向けて投げ落とす
体勢を立て直すよりも先にその体は地面へと叩きつけられ、岩盤が
めくれ上がるほどの衝撃で巨大な土煙が舞い上がる

「まだ・・・まだあっ！！」

が、それでも体に痛みが殆ど無い早苗は土煙を吹き飛ばし、彩輝に
向かって上昇する

その様子を、離れた場所から眺める魔女は今度は別室の神原の部屋へと入ろうとする

部屋のノブは冷たく、隙間からは白い冷気が零れていた

ドアを開けると、そこは一面銀世界が広がっていた

天井からは無数の巨大な氷柱が出来ている

床は氷の上に雪が積もり始めており、ここが室内であるという事を忘れてしまいそうになる

そして部屋の中心に、男が居る

神原だ

しかし、彼の四肢は氷に包まれており、うなり声をあげる様はまるで獣のようであり人間であるということを忘れてしまいそうだ

氷の四肢は見事なまでに鋭い爪を作り出しており、その殺傷能力は極めて高そうだと魔女は見る

よくよく見れば、体中傷だらけである

と、突如神原は全身をバネのよう伸ばすとこちらへ向かって駆け寄ってくる

四肢を巧みに使い、滑らないように、尚かつスピードを上げて迫っ

てくる

その爪が魔女を捉えようかといった瞬間、神原は見えない何かにはじき飛ばされ雪上を転がる

「早くしないと、壊死するよ」

聞こえてはいないだろうが、そう呟いて魔女は一条のいる部屋へと向かい、扉を閉めた

『上達への特訓』（後書き）

いつもより少し短いです

『間違えるはずもない、その光の向こう側にいる君を』

光の中、私は立っていた

一筋の光の上に、私は立っていた

流れては巻き戻り、後ろから前へ、前から後ろへ、世界が動いている

いや、動いているのは時間か、世界か、それとも自分か、

行っては戻り、戻っては始まり、そう、これでは渦だ

進んでは始まり、終わりは始まりで、また進む

そうした光の渦に、私は立っていた

その向こう側に、人影

あれは、そう――――――

――――いち――――う――――――!!――――

え?何?聞こえない

――――――いち――うゆい!!一条唯っ!!」

「えあ、はっ、はい!?」

ガタンと椅子を倒して私は飛び起きた

パチパチと瞬きして周囲を見渡す私を、クラスメイト達が笑う

え?え?何これ?どういう状況!?

と、寝起きの頭で考えてみるも、思い浮かぶ状況はたった一つ

「あ・・・・寝てました?」

「おー、寝てたぞ一条。珍しいな、疲れとるんか?」

「あぅー・・・・っ!!」

未だクスクスと笑うクラスメイト達

やっちまった!と一気に脳内が覚醒すると同時に羞恥心がこみ上げ

てきた

恥ずかしくなって椅子を戻すと顔を真っ赤にして俯せにした

先生は授業に戻ったが、やはり恥ずかしいので教科書で顔を隠す

なんだろう、夢を見ていた気がするが恥ずかしさで塗りつぶされたかのように何も思い出せない

二時間目の授業・・・

太陽が天高く上り、大学の昼休みを告げる授業終わりのチャイムが蝉の鳴く声と一緒に校舎の中へと響き渡る

初夏、まだ市街には蝉の声はまばらにしか聞こえないが、山の上の学校の周りではもう夏が来たかのようにセミが鳴きわめいている

「あっつ～」

ズズズズズ、と自販機で買ったリンゴジャムジュースのパックが空っぽになるまで啜る

中庭のベンチで空を見上げながら空っぽになったジュースのパックをゴミ箱へと放り込む

「ナイスシュート私」

ぼーっと、空を眺め、流れない雲を眺める

さんさんと照りつける太陽の日差しが、容赦なく照りつける

せめてもう少し風があったらな、と思う

脳裏に浮かぶ、鳥居

夏・・・浴衣・・・お祭り・・・最近行ってないなぁ

いつも通り、何も変わらない日常

――――気がつけ――――

「ゆーいー」

「やっほー。遅くなってゴメンゴメン。いやぁーひとが多いねぇ」

どこかで祭り太鼓がなっている

人混みのなかで、手を振っていた友達と合流する

友達の手にはわたあめやら焼き鳥やら、どうやら随分とお祭りを堪能していた様子である。

頭には最近テレビでやってる戦隊もののヒーローのお面がつけられ

ており、手からスーパーボールの入った袋とヨーヨーがぶら下がっている

「・・・なんかもう全部回ってみたいな格好だね・・・」

「え？まだ全部回ってないよ。鯛焼きもリンゴ飴も買ってないし、クジもやってないよ？」

「え？全部回る気なの？」

「あったり前じゃん！お金は楽しく使わないとね！」

「岡ちゃん、そのうち身を滅ぼすんじゃないかと私は心配なんだけど・・・」

「だいじょーぶだいじょーぶっ！あ、あとさっき古河さんと真北さんが居たから合流しよう！」

「ん、分かった。じゃ、その前にキュウリの一本漬け買わせて」

一条はそう言って串に刺さったキュウリが並べられているお店に向かう

「えーお祭りでそれは無いんじゃない？」

「な！これすーっごく美味しいんだぞ！」

祭りの明かりが、一条の着た浴衣を淡く照らしている

キラキラと、キュウリの水滴を照らしている

懐かしい、日常

――違う。気がつけ――

昨夜未明、――町――――の最中、――運送会社のトラックが――――の準備中――居眠り――とみられ、現在――少女が一名――宮美也ちゃん―さいが――病院へ搬送――もう一人の少年――――が――

「悲惨ねぇ」

「そうだな」

淡々とテレビから伝えられる地元のニュース

あの、お祭りの時・・・・？

私が帰った後で・・・・？

翌日、小さな花瓶が、祭りの会場にぽつんと・・・・

何故か脳裏から離れない

偶に、非日常

いや、毎日が非日常という名の日常なのだ

――――お願い！！――――

「え？引っ越したの？」

「えぇ、お墓もあっちの実家にたてたとか。たしか・・・そう、ちょっとまってて、私も仲が良かったから、年賀状の住所が・・・あれ、どこにやったかしら？」

母が引っ張り出してきた年賀状の住所をインターネットで調べてみる

あぁ、そこなのか

ならば、墓参りのついでに寄ることが出来るかもしれない

自分が気にすることでは無い他人の事なのに、なんでだろう

頭から、あのニュースと小さな花が離れないのだ

自己満足でもいいから、手を合わせておきたい

もしかしたら、あの場所に居たのは私かもしれないのだから――――

――――そう、それで私は・・・バスに乗って――――

季節外れの紅葉色

昨今の異常気象のせいだろうか？

そういえば今年の冬には少しだけ桜も勘違いして咲いていた

暇だなぁ・・・

と、そこで目についた少年

彼も一人か

普段なら絶対にしないが、なんでだろう

私は音楽を聴きながら気持ちよさそうに目を瞑る少年に声をかけた

「君も里帰り？」

――彼と出会い――

私、異世界に来ちゃったって事!?

うわ、どうしよう!?

お風呂あるかなぁ・・・・

――世界を渡り――

「おっけ、じゃぁ君はアーヤんだ!」

――彼と少女と鏡越しに再会し――

すこしだけ希望が湧いてきたっ!!

と心の中で小さくガッツポーズをした

――小さな光を見つけた――

アーヤんが来てる！？

私は夢中で走った

そして扉を開け――――

・・・・君は蓑虫（みのむし）か！？

や、やぁ・・・ってちげぇよ！！

――――小さな光は――――

もう会えなくなるなんて、思いたくなかった。だから・・・居なくならないで。勝手に

この世界で退場禁止か。こんな物騒な世界で難しいことを言いますね。まぁ努力してみますけど

彼のことも考えずに・・・・・

ごめん、勝手だね・・・私

涙に埋もれるようなくらい小さく呟いた

――――やがて光を強める――――

自分の勝手な思いを押しつけてしまいたくなる程に
宝玉の光が見せた幻影に押しつぶされそうになった
でも、そんな現実、絶対に認めてやらないと真っ向から立ち向かった
彼の傷つく姿が嫌で、私が守りたかった
絶対に、止めてみせる、と
だめ・・・だよ、アーヤん・・・っ・・・・だめだ・・・よ
――私もそれに見合える光になりたかった――
だから思いを伝えた
私は、もう大丈夫だから、と
だから、握られるだけじゃない
握りかえしてこそ、隣に立てると思った
絶対に離さない

離したくない
だから思いを伝えた
――――だって私は――――君の事が――――
好きなんだから・・・
「大好きになっちゃんたんだからあっ！！！」
光の渦の中に立っているのは私
その向こう側で彼が立っている
戻ろう
私の居場所は、もう見つけた
こんなとこ抜け出して、君の隣に立つんだから
光の向こう側にいる、君の隣に

真っ白な翼が、光の中で広がる

光の向こう側に広がる、もっと広い世界に、光を越えて

真っ白な羽が光に溶け込み、自分が一筋の光となって、君の隣へ、
一直線に

「お帰りイチジョウユイ。おめでとう。貴方はちゃんと自らを失わず、惑わされず、間違えず、正しく、運命のままに歩いてきたようだ。君が望めば、理想の君の中の永遠を彷徨うこともできたのに、そうはしなかった」

あの光の渦となって、同じ場所を何度も、何度も

地面に、大きな翼を広げて倒れる私を、魔女が見下ろす

「そこに・・・彼は・・・居ない・・・から」

その世界に彼は居ない

私の知る彼は、すべてこの世界に居る

「そう。その世界には出会いが無い。生まれてから、貴方がこの世界に来るまでしか存在しない世界。そこにはこれまでの出会いがあっても、これからの出会いは無い。そして私との出会いも無かった。しかし貴方にはその運命を見定める力がある。貴方が、その力を正しく利用出来る人間である事を力が認めたようですね。貴方が、ただただ純粋な人間であると」

白き翼が、ガラスのように割れて空中へと消える

まるで幻想でも見ていたかのようにして

「故に、貴方はこれからも出会いを続けていくでしょう。その出会いを、間違いの無い場所へと導く。それが、それこそが貴方の役目なのです。一角天馬の神子さん」

心の中で、静かに

間違えるはずもない、その光の向こう側にいる君を思い浮かべて

一条唯は静かに瞼を閉じて寝息を立て始めたのであった

『とどいたよ』

嫌だ
嫌だ
来るな
来るな来るな来るな！
走っても
走っても走っても終わりが見えない
いつまで自分は追いかけられなければいけないのだと、神原は恐怖する
神原仙は己の恐怖に追いかけられていた
何が追いかけてきている訳でもない
ただただ恐怖を感じて走っているのだ
それはつまり、恐怖に追われているようなものだ
捕まれば、奈落の底の闇までこの身が引きずり落とされてしまうような気がしてならない
一体いつまで走り続ければいいのか、自分にも分からなかった

天地は闇に覆われ、真っ暗な世界故に、神原の白い息は黒いままである

「なっ！？」

空中で早苗を見下ろす彩輝

早苗も彩輝と同じように魔力の翼を大きく広げている

だが、彩輝と違い、次第に早苗の炎の翼の火力がが増していくのが分かる

大きな衝撃波と共に、何度も何度もその翼の炎は大きく燃え上がり成長していく

「こいつが、私の本気よ。技には名前と命を吹き込むと本来の威力を出せるんだね。命を操る力があるからか、なんか分かるんだ。そうね、じゃぁちょっとだけ恥ずかしいけど叫んでみようか格好良くっ！不死鳥紅蓮炎天衝ーーっ！！」

神子化した彩輝ですら恐れるほどに、膨大な魔力の渦を作り出す早苗

炎の渦の中心にいる早苗は、炎の渦を翼に纏わせ回転しながら大きく飛んだ

炎の鳥が巨大な翼を広げ、こちらへ突っ込んでくる

あんなもの、いくらなんでもくらえばタダではすむまい

避けるか？いや、避けても何にもならない

特訓なら、ぶつかり合ってこそだろう！

避けたくなる衝動を抑え、彩輝はソーレを鞘に収めた

「頼ってばっかじゃ、悪いもんな。うおおおおっ！」

炎の翼と風の翼がそれぞれ自己主張するかのように大きく広がった

名前？そんなもの無いけど、名前があった方が強くなる？命を吹き込む？

じゃぁ試してみようじゃないか！あれだけ強力な技を出せるなら、試してみても悪くは無い！

彩輝は両手の握り拳に力を込める

「風と、水を・・・」

炎は効かない。ならば、次に自分が扱えるのは風と水だ

彩輝はこちらの世界に来てまだ間もない頃に、ディアグノの小枝で魔力を試した時の事を思い出す

いや、どうせなら全部出しちまえ！

彩輝はイメージを足に集中する

彩輝の右足に六つの魔法陣が重なり合う

「風、火、雷、土、風、氷！六天墜脚！！」

七色には足りないが、それでも虹色を思わせる美しい輝きを放つ風が彩輝の右足を包み込む

龍の本質としての風がどうやら他の属性の魔力を束ねたようだ

「う、お・・・おおおおおっ！！恥ずかしいぜえええええ！！」

ちょっと中二病的な発言をして顔を隠したくなるのを堪え、背中の翼を畳み、一気に加速する

炎の渦を突っ切って、天を貫かんばかりの勢いで舞い上がってくる炎の鳥

「いっけえええええ！！」

ガカアアンと大きな音を立てて彩輝の翼が力を込めて空を切る

早苗の纏う炎と彩輝の足を包み込む七色の風がぶつかり合う

と同時に、赤色が早苗を照らし、虹色が彩輝を照らし出す

「うりゃああーーー！！」

「うおおおおおおっ！！」

早苗は彩輝の足を炎を纏った腕で横からはじき返し、それと同時に彩輝の脚力が勝り、早苗の体を纏った炎の鎧ごと地面に押し返した

体勢を崩して墜落する早苗は最後に、弾き飛ばされた彩輝が壁に激突したのを見て自分も地面に叩きつけられた感触を味わった

その間に、魔女が現れる

「見事でしたお二人とも。無事サナエさんは神子化した貴方だけが持つ力を操る事ができましたね。生と死を司る君の力は駒のように物に命を与えるだけでないという事も実感できたでしょう。命を与

えるという力を、たとえば技なんかにも名前を、命を吹き込めば意味を持った力を手にするでしょう。その力は存在そのものに本来の力を引き出す言霊を授ける力もまた、貴方の力なのです」

「そしてアヤキさんも、見事です。私の剣を使うという助言に囚われること無く、己の力のみで新たな魔力の使い方に自ら至りました。本来、風とは自由であるもの。貴方は自由であるという事を常々お忘れ無きよう。型に囚われぬ事こそ、貴方の強みなのですから。さ、では、もう一戦お願いしますね」

ドガァアァンと、巨大な部屋の片隅に申し訳なさそうに存在していた扉が何の前触れも無く吹き飛んだ

そこから白い冷気がぶわっと漏れだした

その冷気の尾を引いて現れたのは、氷の獣のような

彩輝は目をこらして見つめた

いや、あれは・・・

「仙!?」

「えっ、神原さん!?」

「お二人には、彼の氷を溶かしていただきます。彼の氷が溶けたら、私の元へいらしてください。私は隣の部屋でお待ちしていますので」

魔女はそう言い残して、姿を消した

が、それ以上に二人の視線は神原に釘付けであった

神原の彼女である早苗に至ってはもはや動揺を隠しきれないのか、
舌も上手く回っていなければ、指がよく分からない動きをしていた

「え、は?どどっ、どどどどういいいいう!?」

「氷を溶かす?もう一戦・・・って彼と戦えって?え?神子化・・・
してるんですか神原さん・・・?」

彩輝も驚いていたが、早苗よりかは冷静でいられたため、目から入
る情報を即座に判断していた

彼の体は氷で覆われており、手足に纏った氷は獣の四肢を思わせる
形状をしている

神子化している、といえばしているのであろうが彼の様子は何かが
おかしい

何というか、人の意志を持った動きをしていないのである

挙動が、獣の用で彼が人である事に違和感を感じるのだ

「えっと、戦えば良いのかなー・・・?」

「らしいですね」

彩輝はソーレを抜いて腰を低くすると迎撃体勢を取った
一方、まだ困惑している早苗さんは神子化こそ解いていないものの、
そろそろ現状を理解して欲しい

「う、ガアアあああああ！！」

そう思った瞬間、人とは思えないほどの絶叫が部屋を揺らすほどに
響いた
氷と氷の牙の間から、彼が叫んでいるのだ
叫び終えた彼は体をグッと縮ませ、まるで獣のように敵意を剥き出
しにしてこちらへと駆け寄ってきた

「ぐっ！」

巨大な氷の右腕の一振りをソーレで受け止める
すかさず左手を振り上げる神原
その手を炎の腕で受け止める早苗

しかし、氷の腕は溶ける気配を見せない

「ちょ・・・強っ・・・きゃっ!?」

「なっ!?」

両腕を受け止められたにもかかわらず、神原は早苗を氷の腕で押し飛ばした

そこに生まれた彩輝の隙をついて彩輝を蹴って宙返りをする

「ぐっ・・・!!」

全身をバネのようにさせて再度彩輝に飛びかかってくる

彩輝は神原の宙返りの時足場にされた重さで体勢を崩していたがすぐに立て直した

「なめんな!!」

腕の軌道を読んで、ソーレで腕を弾いて弾きまくる

神原はどういう動きをしているのか、両手両足を巧みに使って氷の

重撃を彩輝の体めがけて打ち込んでくる
それを弾くたびに、火花が散って氷を閃光で染めた

「いい・・・かげんにっ！」

ガンッと振り下ろされた右腕を弾き、掬い上げる蹴りを避けて足払いをかける
ふわりと神原の体が浮いた

「しやがれっ！！」

体勢が崩れた神原の横っ腹に、ジャンプして高さを合わせた彩輝は神速の回し蹴りを叩き込む
ガツンという衝撃と共に、ビシリと氷にヒビでも入った感触が足に伝わってくる
そのまま大きく回し蹴りを振り切ると、神原の体は一度地面に大きく叩きつけられ、その反動で再度宙に浮く
その神原の頭を鷲掴みにし、大きく翼を広げる彩輝は思いっきり神原を地面に擦りながら壁に叩きつけた
またも大きく部屋が揺れる

バックステップというより、後ろに大きく飛んで距離を取る彩輝

「まさか、神原が早苗さんにまで手を出すとは思わなかった・・・」

彩輝は荒げた息を整える

どうも様子がおかしい

今彩輝と早苗も神子化をしているが、自我が無くなる変化では無い

しかし、あの神原の様子を見ていると、完全に彼女の不意をついて殴りにかかっていた

確かに彩輝も先ほど彼女と本気でぶつかりあったが、あれは両者が技を出してぶつかっていた

殺すつもりで、と彼女は言っていたが本気ではない

そこにはやはり越えてはならない一線というものがある

だが、今の攻撃は隙をついた殺傷を確実に狙う一撃だった

いくら神子化しているとはいえ、相手も神子化しているので条件は同じである

彩輝とてゾッとする殺気を帯びていた一撃だった

だが彩輝は知らない

自分も似たような状況に一度陥っている事を、覚えていないのである

あの時、湖に居た時彩輝は自らの中に潜む獣の影に体を乗っ取られていた

しかし、今回の神原の豹変はそれとは全く違う能力の象徴とも呼べる力と戦っていたのである

己の内に潜む、災厄という名の力の前には、氷の世界に閉じこめられた彼はただ逃げるしかできなかった

氷で閉ざされた壁の内をただひたすらに

彼の世界は、熱を失っていた

彼の世界は、熱を欲していた

この世界を溶かす、失われた熱いそれを、無意識に求めていた

「なんだってんだよ！？どこだよここ！？」

氷の世界はどこまでも続いている

世界に出口が無いように、この氷の世界にも出口は無い

そう思わせる程に、雪と氷の原がどこまでも、地平線の果てまで続いているのを見て神原は嘆きたくなる

何故自分がこんな場所に居るのか、どうやれば元居た場所へ、あの無機質な部屋へ戻れるのかを模索していた

魔女の言うとおり、椅子に座り、目を瞑る

たったそれだけの事なのに、魔女が何かを唱えたかと思うと一瞬にして世界は反転した

座っていたはずなのに、気がつけば自分は仰向けに倒れていた

真っ白な世界に、有彩色がぽつりと浮いている

周囲を見渡した神原はある異変に気づいた

地平線の彼方から、空間が凍り付いていくのである

離れているにもかかわらず、ミシリミシリと世界が凍りついてゆくのが分かるのだ

まるで、自分の心が端から止まっていくかのように感じたのだ

逃げた

神原は逃げた

逃げて逃げて逃げた

真っ白な雪の上に定規で引いたかのような真っ直ぐな足跡が延びてゆく

どれだけ走ったのだろうか

目の前に、小さな人影が見えた

すれ違う瞬間、真っ黒な髪の少女が居た

背は１６０センチ後半ぐらいだろうか。スラッとした体型の女性がいた

女性は動くことなく、神原が彼女を追い抜いた瞬間その顔がチラリと見えた

一条唯だった

パキンッ、と空しい音を立てて彼女の体は冷気に包まれた

一瞬にして氷の像となってしまう彼女をその目で見てしまう

「う・・・わあああああああああああ！！！」

恐怖を感じた

目に見えない

それ故に、恐ろしい

すると、またもや人影が見えてきた

真っ白な世界に、一人の少年が立っている

その少年は、桜彩輝であった

動かぬ彼を置いて、神原は走った

すれ違って何秒経っただろうか。ふと振り返ると、彼も先ほどの一条と同じように氷の像となってしまった

そして、前方に見える人影

「やめろ」

愛して

「やめろ」

愛して

「やめろやめろやめろ」

愛して愛してやまない人がそこに居た

ピクリとも動かず、まるで人形のように神原を見つめる彼女

彼女に向かっているのか、それとも彼女の向こう側に向かって走っているのか

自分が彼女に近づくにつれて、その心情は複雑なものへとなってゆく

せめて、動いてくれ。逃げてくれ。振り向いて、走ってくれ

でなければ、さっきの二人みたいに・・・彼女も・・・小田原早苗も氷に閉ざされてしまう

自分が彼女に向かって走るにつれ、その距離は縮まっていく

氷の世界の牙が、彼女に迫ってゆく

そして

流れるような、それでいて止まっているような、互いに体の向きを違えながら、二人はすれ違った

足が、止まらない

振り返って、彼女の手を取りたい

なのに何故、俺は涙を流しながら走っている？

見捨てるのか？早苗を・・・俺は・・・見捨てるのか？

――俺はお前の彼氏なんだからさ、それぐらい受け止めてやるって言ってるんだよ――

「やめろおおおおおおおおおおお！！！！」

その瞬間、神原には自分が、見えてしまった

気づかなかったから、俺は大切なものを失う

気づきたくなかったから、俺は目をそらしていたのだった

それに気づいた自分は、どうしようもなく、弱く、醜く、嘘つきな人間だったのだと気づかされたのだ

だからこそ、自分自身に向かって叫んだ

今思えばどうかしていた

何故こんな世界で革命を起こそうと企んだ？

何故知りもしない世界の人間達を庇おうとした？
何故俺は、あの国から逃げ出した？

「誰だ・・・・誰なんだ・・・・」

この体に宿っている醜い魂は
何かが変わると思ったのか？
それは偽善では無いのか？
それはお前が弱いからでは無いのか？
そんなお前に、本当に早苗が頼ったとでも思ってるのか？
拠り所にしたと思っているのか？
だとしたら、俺はとんだ笑い者だ
神原の瞳から、ぽろぽろと涙が落ちてきた

「俺は・・・本当は・・・本当はっ！！」

何も出来ない
したことも意味がない
ただいたずらに、迷惑な人間
火種を悪化させただけ
運が良かったのではない
自分が居なくても、革命軍が居なくても、二つの軍がガルトニール軍と戦っていたはずだ
自分さえ居なければ、ウーリィンも森を出る事は無かった
自分さえ・・・自分さえ、居なければ

「もう・・・」

ならば、俺は、何の為に・・・・・・

「いやだ」

そう

「いやだいやだ」

こんな自分が

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌なんだあああああああああ
あああ！！」

無性に嫌だったのだ

思いっきり振り下ろした拳は、雪に埋もれるばかり

叫んだ声は闇に溶け、溢れた涙は止まらない

渦巻く感情はただ空しく行き場を無くした

そうして心は閉ざされていく

闇という名の氷に、世界は凍て付いてゆく

誰にもその叫びは届かない

絶望と、疑惑と、嫌悪と、自虐とが渦巻く闇の雲が地平線まで続く

感情を受け止める事も出来ない雪がどこまでも続く

それが彼の目に見えぬストレスを溜めていく
自分でも気づかぬ程の闇を抱えていた、彼の心に
見上げれば、雪
黒い世界に、唯一自分以外の白という色を持つ雪が、まるでダイヤモンドダストの用に降り注ぐ
彼を暖かく包み込むように

「とどいたよ」

氷に閉ざされた世界に、その言葉が亀裂を入れた

彼の声が聞こえた

「え、でも・・・」

「そうか・・・仙はまだ・・・。気づけなくて、ごめん。でも、気づいたからにはもうこれは私の役目だな。すまないが、少し下がっていてくれないか彩輝くん」

静かな彼女の気迫に押されて彩輝は神子化を解くと、後ろへと下がった

その瞬間、訓練での戦闘と神原との戦闘の負担が体に一気にのし掛かる

神子化というのは、神子化自体にもエネルギーを使う

変化するだけなら解いた後は怠いぐらいの気持ちなのだが、激しい

動き、つまり通常人が出せないような身体の動きをさせるとドッと疲れが体に押し寄せる

とはいえこれも慣れか、倒れたりすることは無かったもののやはり彩輝はこの感覚だけはまだ慣れない

「早苗さん・・・？」

「とどいたよ」

何故か突然目つきが変わった早苗に、彩輝は何かいつもと違う彼女を感じた

強い意志のこもった言葉が、彩輝を問答無用で引かせ、強い意志のこもった瞳が、獣の視線と交差する

「仙、言ったよな？俺をはけ口に使えとかなんとか」

彩輝は数日前の出来事を思い出す

宿で盗み聞きしたあの時の事だろうか

確かにそんなことを言っていたような気がする

「じゃぁさ、遠慮無く私の拳の犠牲になってくれ」

彩輝は恐る恐る早苗の横顔をそっとのぞき込む

笑っている?

どう見ても正気を失って攻撃してくる彼氏を見て、笑えるものなのだろうか?

でもなんでだろう。なんだか嫌な予感しかしないんだけど、と内心冷や汗を流す

何故今この人はこんなにも笑顔で、生気に満ちた顔をしているのだろう

「フフフッ、獣となった君を存分にボコボコにしてあげようではないか!!」

なんでだろう。早苗さーん?

指をポキポキとならしてどうしたんですか突然!?

轟炎が早苗を取り巻く

取り巻く炎は、彼女の背中から伸びる翼の火力をあげてゆく

「ちょ、火強すぎません!?」

「このぐらいでちょうど良いっ！！」

そんなもの、自分が一番分かっていると付け加え、炎がまるで生きているかのように生き生きと燃え上がる

彩輝もあまりの熱さに距離を取って待避した

炎も文字通り遠慮無く勢いを増していく

いくら氷で身を包んだ神原とはいえ、一瞬で蒸発してしまうのではと思わせる程の火力だ

その炎の翼を広げた彼女に、獣はうなり声をあげた

「私とお前なら、これぐらいで、ちょうどだ。懐かしいくらいだ。そうだろう、仙。何、遠慮するな。何せ私は未だに、燃えて燃えて燃えまくってるんだからな！今の私は灼かな不死鳥！豊梨でもないお前が仙を閉じこめるとか、私が許さない！！私の方が、仙を愛してる！！仙の彼女は、私だっ！！だから、お前は私が焼いてやる。お前が、私に妬くとか、あり得ない」

「ガアアアアアアアアアッ！！」

獣が叫び声を上げ、冷気と熱気がぶつかり合い、周囲は水蒸気に包まれた

　それは君たちに、妬かれて焼かれた物語
それは、じわり、じわりと罪悪感が彼を閉じこめる氷の牢を作り出す。そういう、三人だけの過去
氷の狼と炎の鳥と霜の少女の、霜妬けのように、静かに二人の心に
罪悪感という罪を背負わせる過去
神原仙、小田原早苗、そして霜野豊梨という少年と少女達の物語

――――――一緒に死のうよ、仙――――――

カサリカサリと、絨毯のように敷き詰められた落ち葉を踏みしめながら歩く帰り道

日が傾く時間帯も早くなり、ついこの前まで夏だったとは思っていた世界はどこへやら

気がつけば肌寒いと、押入から引っ張り出した毛布と扇風機を入れ替えてしまう程に夜は冷え込んでしまう。そんな季節だった

辺りはすっかり椛と銀杏の二色で覆われ、その赤と黄色の葉をオレ

ンジ色の夕日が淡く照らす
そんな夕日が、目の前を歩く二人の女性を照らしている

「ほら、早くしないと置いていくぞ神原！」

「そうだよ」

長い癖っ毛をだらしなく伸ばした少女が手提げを振り回しながら俺を呼ぶ

その少女よりももう少し小さい隣の少女は長い黒髪をポニーテールで括っている

神原の方へと振り向いたそのとき、長いポニーテールがクルリと弧を描く

「置いてけよ俺なんて。女子二人がガールズトークに花咲かせてる所に入る気はねーよ」

恥ずかしいからな、とは付け加えない辺り内心自分はこの二人を異性として見ているのかもしれない

まぁもちろん、男としてはもう少し積極的になるべきなのかも知れない

思春期真っ盛り、では無いと思いたいが、年齢的にそう言われる歳だというのはまぁ自覚していたし、自分もそうなのだろうな、とは思わなくもなかった

異性として見ていなかっただけに、一度そう見てしまったらもう目を背けるしか無いじゃないか

そう考えると、今俺と彼女たちの距離は今のように、一歩、いや二歩も三歩も距離が離れているのだろう

いや、自分が距離を取っているのは分かっているのだ

しかし、距離感が、分からない

友人にそんな悩みを相談すると、「贅沢な悩みだなぁおい！！」と頭をスリッパでぶっ叩かれた

自分にとってはこれが意外に息苦しいのだから勇気をもって相談したというのに、まさか叩かれるとは思わなかった

自らの長い癖っ毛を弄っているのは小田原早苗

もう肌寒い時期だと言うのに何故か暑い暑いと上着を脱いでる

下着の線が見えて思春期の俺には毒だ

いくら見慣れた幼なじみとはいえ、流石に目を反らしたい。じゃないとポーカーフェイスがいつ崩れることやら

そしてその隣が霜野豊梨（しものとより）という少女だ

小柄で大人しい少女で何かと早苗と一緒にいるところをよく見る
学業は優秀だが運動が苦手。よく早苗や俺の後ろに隠れる癖がある
その代わりに俺や早苗に勉強を教えてくれているので、なんというか共生のような感じである

「ふん！神原が私たちに気をつかうなんて１０年と六ヶ月と三日ぐらい早いわ！」

「無駄に細けぇなぁオイ」

「ほ、ほっときなさい。それよか、ほらほら、寒いんでしょ！もっとくっつきなさいよ！！」

「や、やめんか！？」

早苗はそうやって俺の首に巻いてあるマフラーの端を持ってぐいぐいと引っ張ってくる

もちろん、身近な女性とはいえ密着すれば緊張もする。俺も男だ。
ポーカーフェイスを気取っているが、男だ

「・・・・・・近すぎんだろ」

内心、両手に花でラッキーとか思ってるのは死んでも口に出せない

手際よく、俺と豊梨を寄せて早苗が巻いていた超ロングマフラーを三人で一緒に巻く

俺を間に挟んで左右に女子が陣取ってるわけだが、有無を言わせぬ早業であっというまにマフラーで身動きが取れなくなってしまった

「そ、そうだよっサナちゃん！」

「そう？しょうがないじゃん、マフラー短いもん」

いや、三人分巻けるとか十分長いから

そう突っ込みを入れることすら、気が動転して出来ない

俺も初だな

しかし、もう少しなにかいい巻き方はなかったのだろうか

ぐるりとマフラーが首を締めるような巻き方なんだが。おい、引っ張るな、首が絞まる

早苗は鞄からピンク色の小さなコンパクトデジカメを取り出し、俺達三人が入るように腕を伸ばし、そしてシャッターをきった

もちろん、次の日俺は教室で友人達から尋問を受けた

なんだかんだで、彼女たちも美少女という部類に入るのだから、そりゃまぁ気にはなるのだろうな

無心のふりを続けるので、俺は精一杯だというのに

友人達に、俺は苦笑いを浮かべた

　小田原早苗にとっては、三人の友達関係という距離感が当たり前だった

そう思っていた。だからこそ、後に三人の関係はブログや掲示板で例えるなら大炎上してしまったのだろう

　私はガサガサと自分の部屋でお菓子を食べながら霜野豊梨とお話をしていた

俗に言うガールズトークとかいうやつだ

とはいえ、親しい私相手でも、豊梨はあまり自分から話すことは少ない

だから大体は自分が話題を振り、ちょっと乗ってきた彼女を置いていくぐらいの勢いで会話を一人盛り上げる

いや、一人でという事は盛り上げるというよりかは一人で騒いでいただけともとれなくもない

そこで、珍しく私の会話に、彼女が割って入ってきた

今思えば、そこで彼女の声を遮ってでも会話を続け、彼女の悩みを聞かなかった方が良かったのかもしれない・・・と思いかえす事もあったが、それはきっと無理だったのだろう

積み上げた物が今壊れるか、すこし先延ばしにされるかのどちらかだったのだ。彼女の真剣な顔を見て、それを私が断れるはずが無かったのだ

「・・・え？マジ？」

「うん。本気」

自分は意識したことは無かったが、どうやら彼女はそうでは無かったらしい

何が切っ掛けか、何故今言ったのか、そんなことは頭からすっかり消えてしまうくらいに驚いていた

彼女の告白を聞いたとき、少なくともその時の私は素直に喜んでいた

「そうかそうか。にしても豊梨っちが神原を好きだったとはねー。身近に居ても気がつかないこともあるものだね。うむ、よっしゃ！では私も君の恋を応援しようではないか！」

「・・・いいの？」

「良いに決まっているじゃないか！私の友達が好きな奴を見つけたというのだよ！それが例え神原だろうが、それを応援するのが友達じゃないか！」

バンバンとお菓子の粉がついた手で彼女の背中を叩いた

彼女は苦笑いをしながら、私にお礼を言った

「・・・ありがと・・・う」

今にして思えば、あの時彼女の問いかけは、私自身気がついていなかった事に彼女が気づいて聞いてきていたのかもしれない。そう思ったりもする

私が彼女の気持ちに気づかず、自分の気持ちにも気づかず、それでよく彼女に友達だと言えたものだと今にして思う

そう軽はずみな言動をしたあの時の私を後悔しないでもない

「君が彼を好きだと言うならば、私はお前達の架け橋となってやろう！」

そうして私は、神原に好意を寄せる豊梨との間を取り持ってやろうとキューピット役になることを決めた

振り返ってみると、私はまさにデビルであったと言えなくもない

悪魔の所業とはこのことか

少なくとも、その場でもう一つの返答をしていればあんな未来は待っていなかったのかもしれない

が、所詮は過去。起こった事は変えられないし、そんな未来が訪れたとも思えない

私は、あの場で、ああ答えることしか出来なかっただろう

何度やり直しても、あの時本当の感情に気がつかないことにはそんな未来は訪れなかっただろう

そして私は彼と彼女をくっつけるべく奔走した

神原には気づかれないように、私は後ろから策を練って彼女の背中を押してあげた

彼の友達や周辺人物から彼の趣味や好きな物なんかを調査して豊梨に教えてあげたりした

いろいろ教えてあげる度に、彼女は笑ってお礼を言ってくる

そして、彼の話を周りの人達から聞く度に、私の中での神原仙という人物の印象が少しずつ変わっていく

隣の家に住んでいる、生まれてからずっと一緒だった男の子だったのに、自分の知らない彼が見えてくる事に私は嬉しかったというの

もあった

彼の話を聞く度に、心が躍るようになっていった

ちょっとしたことで傷ついて、ちょっとしたことで怒って、悲しんで、そして笑う彼の姿が私以外の人達が見てきた彼だった

それぞれ別々の人のエピソードで、所詮は彼の断片なのだけども、それでも私が知っている彼と、皆が知っている彼が一緒だと思うとまた不思議な感じがした

神原への見方が１８０度変わったとまでは行かないが、斜め４５度くらいは変わったと思う

ワクワクしながら、彼の情報を聞き、そして私はその情報を豊梨に渡す

そんな日々の中で、それが芽生える

最近、幼なじみの早苗が俺の事を嗅ぎ回っているらしい

何を企んでいるのかは知らないが、とりあえず俺の情報を周囲の人から根こそぎ聞き回っているそうな

オタクでありながらその行動力の高さには恐れ入る

そもそも、ゲームやアニメが好きなオタクが引きこもりで社交性が

低い、という事自体俺の思いこみなのだろう

理解しよう、とまでは思ったことは無いが、やはりそこには人を引きつける何かがあるのだろう

スポーツも、読書も、お絵かきも、映画も、料理も、人がやりたいと思うことには何かしら人を引きつける魅力があるものだ

極端な話で言えば、性欲や睡眠欲、食欲なんかも欲と言われるだけあって強制的に人間を魅了する

最初はみんなリア充。一体何人の常人をオタクへと転生させるつもりなのだろうか

まぁそんなことはどうでもいいか。後に自身もそちら側に転生してしまうのだから

新聞欄の週間天気に、雪マークが見え始めた頃、灰色の空を見上げながら俺はここしばらく、三人で遊ぶことが少なくなったなと思った

早苗や豊梨と三人の予定が合わない日が増えたため、バラバラに合う事が多くなった

そして、決定的に気がついた事があるとすれば、二人の俺を見る目が以前と変わっているという事だ

どう変わった、と言われても困るのだがどうも前よりもジロジロ見てくる事が多くなった気がする

気配というものはあまりバカに出来ないものだ

視線も、これまでのようなものでは無い事ぐらい俺でも分かる

最初の頃はその視線は豊梨のものだと分かっていた

これまであまり二人っきりになることなど無かったため、俺も少々戸惑っていたのだろう

しかし、よくよく考えてみれば彼女が俺に好意を、友達とかそういうものではなく、恋や愛といった類の好意を寄せているのだな、と気づいた

三人で合うつもりが急に早苗がドタキャンしてきたり、一人先に帰ったりと、豊梨よりも何かと早苗の様子がおかしかった

そして俺の周囲を嗅ぎ回る早苗

考えてみれば容易に分かった

とはいえ、俺は気づかないふりをした

俺としては、このまま二人とは友達という関係を続けたかった

でなければ、早苗を独りぼっちにさせてしまうことになる

俺がもし豊梨と付き合ってしまえば、早苗は俺達に一歩引いて接してくるだろう

現に彼女は豊梨のために俺の周囲を嗅ぎ回って情報を集めているらしい

大方その情報を豊梨に渡して応援しているつもりなのだろう
自分がしていることが、後にどうなるかなんて分かり切っていて、
それでも尚豊梨の恋を応援する彼女に苛立ちを覚えた

俺は独りだった

中学生の頃、俺の周りには友達と呼べる人間は誰もいなかった
一人、私立の中学を受験した俺は毎日電車に乗って隣町の学校へと
通っていた
そんな所に知り合いが居るわけでもなく、気がつけば俺一人だけが
浮いていた

当時の俺は人と話すのが苦手、というよりは大勢で居ることがとて
も苦手であると自分に言い聞かせなければ耐えきれなかっただろう
と今にしてみれば思う

することと言えば、独りで机に向かって読書や勉強をする事が日々
の日課である

ある意味、それは逃避と言えなくもないだろう。いや、逃避だった
と断言できる

クラスの知り合いとは申し訳ない程度に事務的な事しか話すことは
無かったし、そういう態度を取る俺に近寄ろうとする奴も居なかった

することも無く、勉強や読書ばかりしていれば、勉学の時間を友達と遊ぶ事に使う同学年とはそれは学力の差がついたとしても当然の事である

勉強した分だけ知識はつくのは当たり前

同じ勉強量でも、要領よく覚えた方が多く思い出せるのは当たり前

テストの点もしかり、言われた事以上の事をすれば９０から１００点台を出せるのは当たり前

つまるところ、俺はクラスの奴らには頭は良いが、気むずかしい奴という印象をもたれていた

独りでいることにも次第に慣れた

ただ、その過程で俺は逃げる癖がついた

面倒くさい

時間の無駄

気づけばそんな拒絶の言葉ばかりを並べている自分がいて、それに気づかぬまま俺は三年生になった

そんな俺にも転機があった

よく覚えている

鉛色の空の日の事だ

俺は、接点も何もない三年生達に袋だたきにされた

殴る、蹴る、そんな方法で俺を痛めつけた

受験生はストレスでも溜まるのだろうか、俺はそのはけ口として目をつけられた

生意気、地味、ウザイ、いろいろと理不尽な理由で俺は殴られ、蹴られ、いじめられた

理由なんてなんでも良かったのだろう

そんなことをする暇があれば勉強すればいいのに、と殴られながら、蹴られながら思った

思うだけ。それがあいつ等に出来る唯一の反抗だった

これが負け惜しみ、というものだろうかと思ったりもした

思っただけ

そこで、俺は初めて思い知った

辛い・・・と

誰かに話す事もできない

相談にも、慰めてくれたりも、何も無い

ただ、其処にいる物だったことに気がついた俺は思った
何と無駄な三年間だったのだろか、と
勉強する暇があれば友達を作ればよかったのだ
本を読む時間があれば友達と遊べばよかったのだ
学生の本分は勉強をすること、と親や先生には言われるがそんなものをそのままの意味で受け取っていた自分がばからしく思えた
そんなものは、建前だというのに
勉強をするというのは建前であり、大前提
それだけしかしてこなかったから、俺は今こんなにも辛いのだ
言われなくても、みんな自分と違って、笑っている、楽しんでいる
三年間という中学生活を、楽しんで過ごしたのだ
それに比べれば、俺の過ごした三年間は白黒の世界だ
何せ、文字や数字だけ読めればよかったのだ。俺の世界なんて白と黒だけで、十分だ
　そんな俺の世界に色を付けたのは、高校に入学した時に出会った二人の少女だった
いや、性格には一人は再会という形になるか

もっと上を目指せる、そう先生達に言われていたが、俺はもう上を目指すこととかどうでも良くなっていた

中卒は流石にまずいからというのは分かっていたのでとりあえず高校には進学したが、学費も高すぎず家からも近い普通の高校に決めた

そこで俺は幼なじみと再会した

幼なじみとはいえ、家が隣同士という訳でもなく、同じ町内だったという程度でその当時はまだ親しくしていたから一応幼なじみだ

中学の時はお互いの家の間にある少し広い道路で校区が区切られていたため別の中学へ通っていた

学校自体反対側で会うこともなく、親の話なんかを聞くところによると部活で早朝に家を出て、帰ってくるのも夜遅くという事だから、普通に生活をする分には出会ったりすることは無かった

特に仲が良かった訳でもないが、悪かった訳でもない

それが小田原早苗という幼なじみだった

そしてもう一人の少女

霜野豊梨は中学時代早苗の友達だったらしい

高校では知っている相手が早苗だけだったという事や同じクラスだったということもあり、早苗にべったりらしい

「久しぶりだな神原！小学校以来か！高校でもよろしくたのむ！」

笑った彼女の顔を見て、俺はこれまでの自分を捨てる決意をした

あんな白黒の世界より、差し出された彼女の肌色の手を握り替えそうと

突然のことで頭が真っ白になっていたが、彼女の顔を見て不思議とそう思うことが出来た

久しぶりに見た彼女の笑顔は、俺の世界に色を取り戻してくれた

「あ、ああ！」

自分でも意外だった。こんな声を出せるのかと思った

と、彼女の後ろから小さな少女が出てきた

「あの、霜野豊梨・・・です。よろしくです」

「あ、うん。神原仙だ」

よろしく

そう言って、差し出された小さな手を握り替えした
それが霜野豊梨との出会いだった
とても、小さく可愛い少女だった

私は仙の事が好きだという友人の為に彼の事を調べていた
幼なじみ、とはいえ中学時代の彼を知らなかった私はまずその辺から探ってみることにした
小学校低学年の時はよくゲームをしたり公園で遊んだりした覚えはあるが、次第に周りの目が気になりだしいつの間にか合わなくなり、中学で完全に一度縁が切れている
なので、豊梨の恋の手伝いをすると言った以上、自分も何かと彼の事を知っておいた方が良いと思ったのである
一応幼なじみという肩書きはいろいろと調べるのに便利だったので有効活用させてもらった
少なくとも、引っ込み思案な彼女よりも自分が動く方がまだいいと思ったのである
そして中学時代の彼の話を友人伝いに聞いて回った

頭が良かった。へぇ、そうなんだ。私バカだからいろいろ勉強教えてもらおうかな

いつも本を読んでいた。どんな本呼んでたんだろ？あの顔で恋愛小説とか呼んでたら笑えるな

地味で印象に残ってない。ふーん。今の神原からは想像つかないなぁ。意外。そんな静かな奴だったんだ

いじめられてたらしいよ？・・・・・・なぬ？

いろいろな人から話を聞き終え、私は考えに考え、問いつめる事にした

「そうだったけど、別に何とも思ってないし、気にすることでもないぞ」

彼はそう言った

そこで私の中で神原の見方ががらりと変わってしまった

いわゆる、興味が湧いたというべき感情だった

そして、彼の事を知れば知るほど、ふれあえばふれあうほどに

彼の事が好きだと思い始めたのである

もちろん私は悩んだ

豊梨の為と思って彼を調べていたのに、いつの間にか自分が彼に執着していたらしい

本当に彼女の為に動いていたのかどうかも怪しく思うほどだった

そして悩み、悩み、私は彼女に打ち明けることにした

「私も、仙の事が好き」

打ち明けるしかなかった

どちらにせよ、自分が酷い人間なのだというのは分かってた

だから私は打ち明ける方を選んだ

少なくとも、多少気は晴れた

「・・・・・そう」

豊梨はそう小さく答えただけだった

私は今でも思うのだ。打ち明けない方が良かったのではないかと

思いこみだ、勘違いだ、そうしていれば良かったと思える未来があったかもしれないと思うからだ

「じゃあ・・・・・・・・・・ライバルだね」

長い沈黙の後、彼女は私をライバルだと言った

こんな酷い女をライバルだと言った。裏切り者、と言われる事を恐れていた私にとってその言葉は救いであった

代わりに、彼女を苦しめた事に私は気づかない。自分の保身で精一杯だったから

同じ土俵に立たせてもらえるだけ、私は彼女にお礼を言いたいくらいだ

だからこそ、私は全力で彼を自分の物にしようとした

私はそういう人間だからだ

友達でも、例え豊梨だとしても、彼だけは渡したくないという強い気持ちがすでに私の心に深く深く根を張っていた

それほどまでに、私は彼を愛していた

豊梨もまた、彼のことを好いて恋して愛していたというのに、私は自分の気持ちで精一杯だったのだ

だから気がつけなかったのかもしれないな

恋は盲目

周りなんて見えやしない

私も、彼も、彼女だって

　気づけば俺は早苗に引かれていた

彼女を中心に、俺の世界が色づいていると思った

豊梨も確かに俺の友達だ

好いてくれているのは分かっていた。だからそれに答えてあげられないのが辛くもある

友達で居たかったと思った時もあった

それが当たり前で、これからもあり続ける関係なんだと思っていた

でも、気持ちに嘘はつけなかった

通じ合う気持ちがあれば、また通じない気持ちも存在する

成就する恋もあれば、失恋する恋もある

すでに天秤は早苗へと完全に傾いていた

「うーし、これで全部か？」

俺は服の袖で汗を拭った

埃にまみれた薄暗い小屋で俺は一息ついた

「うん、ありがとう」

豊梨がそう笑ってお礼を言った

現在、俺と豊梨は豊梨の家の小屋の整理をしていた

彼女曰く、新しく買い換えるため、古くなっていらなくなったものを倉庫に仕舞いたいのだという

そこで男の俺がかり出されたというわけだ

暇であったし、豊梨のお願いとあっては断れないと二つ返事で俺は倉庫の整理を請け負った

人数が多い方がいいと、豊梨は早苗もよんでいた

が、その早苗は今三人分のお茶を入れてくると豊梨の家の中でコップを探している頃合いだろう

埃が舞い上がり、小屋の隙間から差し込む光が埃によって柱のようになって見える

「これで、全部。あ、其処に座ってて」

「そうか」

古くなった机やタンスなども小屋の奥に仕舞い、これでいつでも買い換える事は出来るだろう

豊梨はゴミ袋を一つ持って外に出てすぐに小屋へと戻ってきた

「ねぇ、一つ聞いて・・・いい？」

「ん？なんでもいいけど？」

ガタガタ、と彼女は立て付けの悪い扉を慣れた手つきで閉めた

ガチャリ、と彼女は錠前に鍵を入れて扉にロックを掛けた

その様子を不思議そうに見る俺

ゆっくりと振り返る彼女の顔は、穏やかだった

「私、仙が好き」

「・・・・・・」

遂に来たか

そう、思ってしまった

思ってしまったのだ

もうそれだけで俺はその言葉に続く問いに返す答えを一つしか持たない。持ってはいけない

「付き合って、くれますか？」

震えた声で言う彼女

勇気を出しているのが分かった

勇気を振り絞って声を出しているのが分かった

「それは・・・ごめん。出来ない」

「っ！！・・・・やっぱり」

「本当にごめん。俺・・・」

「謝らなくていいよ」

彼女はそう言って俺を見つめる

その瞳に、光は無い

奪ってしまったのだから

「分かってた。知ってた。気がついてた。仙は、私を見ていなかったから」

言葉が出なかった

「ねぇ、一つ聞いて良い？私に魅力が無かったから？」

「違う！」

俺は叫んだ

躊躇ってはいけない

其処だけは、其処だけは絶対に

「そう。嬉しい」

そう言って、彼女は笑みを浮かべた

「ありがとう。でも――――ごめんね。仙も、早苗も、悪くないから、謝らないで」

彼女が何に苦しんでいたのか、知らなかったではすまされない

どれが彼女にとどめを刺したのか

「私は、心の底から、祝福してる。誓うよ。二人に誓って。二人の友達の、霜野豊梨は祝福してる。本当に、本当に信じて。・・・だからお願い――――」

そう言ったのだ

友達である豊梨が、俺達を怨んでいないと、俺と早苗に誓って言ったのである

だから、俺は今でも彼女が俺達を憎しみ、怨んでいたとは思わない

そこは絶対に、彼女の為に、信じてあげなければいけない

それでも、その言葉は俺の心に突き刺さる

「私を絶対に、許さないで。こんな私を、怨み続けて」

涙を流しながら彼女はそう言った

壊れた彼女は、最後の力を振り絞って、笑いながら、泣きながら、
そう言った

それが、壊れなかった彼女の最後の言葉だった

今にしてみれば、あれは彼女の遺言だったのだろう

自分を、怨み続けろという、友達としての豊梨の遺言

「豊・・・梨・・・・？」

「ゴメンね。ゴメンね。ゴメンね。私が、私が壊れちゃったから、
わた、私が、友達が、壊れちゃったから・・・せ、仙をひ、独り占
め、したいからぁ・・・ご、めんね。ごめんね」

「何を言って・・・るんだ？」

突如大粒の涙があふれ出し、嗚咽で口が上手く回っていない彼女の
言葉を、聞きのがすまいと俺は豊梨に釘付けになった

小屋という密閉された空間だからか、それともこの壊れた彼女の事
を見てなのか、汗が止まらなかった

鼓動だけが早くなっていく

「さ、早苗は、だめ・・・なの。一番のと・・・もだちだから・・・。だから、仙しか、ちがう、う、裏切れっ・・・!!あ、あ、ああ・・・ち、ちが・・・っ、私・・・私はもうっ・・・もう、うらぎ・・・わ、わたしっ!!」

完全に、錯乱していた

今でも、俺は壊れた彼女の心を理解しようと思ったことは無い

あれは豊梨じゃ無い。そう思わずには、いられなかったからだ

豊梨は、壊れた自分を豊梨だと思って欲しくなかったのだろう

だから、後に壊れてしまう自分に対して怨み続けろと言ったのだ

壊れた自分を（・・・・・）怨み続けろ、と

友達としての最後の願いを、俺は未だに守り続けている

とはいえ、当時の自分はそうとうに頭が回っていなかったらしい

思い出してみるまで、彼女の言っていた意味が理解出来ていなかったのだから

彼女は壊された

愛に、嫉妬に、壊されたのだ

「――――――い・・・一緒に・・・」

燃えさかる炎が彼女の声を掻き消した

そこで俺は初めて気づく

「豊梨っ・・・！！」

小屋が、炎に包まれている事に

俺はすぐさま退路を確保しようとドアへと向かった

しかし、扉は新品の金色の錠前で固く閉ざされていた

「鍵っ！」

俺は咄嗟に振り返り、豊梨が持っていた鍵を――――

俺の目の前で、そいつは鍵を飲み込んだ

！！

そこで俺は、完全に思考が止まってしまった

そこまで、そこまでしてお前は俺を、殺したいのか

呆然と立ちつくす俺は、最早何をすることも出来ない

炎を纏った木材が、地面に落ちて埃を舞あげる

「いつまでも、い、いっしょ・・・に」

そいつはそう口だけを動かした

「だ、りゃあああああああああ！！！」

と、突然燃えさかる炎の向こう側、つまり真後ろの扉の向こう側から早苗の叫び声が聞こえてきた

小屋が燃えていた

それはもう激しく燃えていた

たった数分目を離しただけで大炎上

真っ黒な煙と煤を巻き上げて、それを一瞬呆然と眺めてしまった

現実だと理解し、自分が取るべき行動を理解し、私は一度豊梨の家へと戻った

消防へ連絡を入れ、すぐさま玄関に立てかけてあった金色の金属バットを持って飛び出した

これだけ燃えていればドアを掴むことすらできない

ならば、まだ建物としての強度を保ってる間に、中にいるであろう二人を助けなければならない

「だ、りゃあああああああああ！！！」

思いっきり振りかぶり、そして木製のドアに金属バットあて、振り抜いた

バキィッと音を立てて扉に穴があく

その金属バットは扉の鍵ごと吹き飛ばした

「仙！？豊梨！？中に居るの！？」

「あっ、ああ！！今の一撃で鍵が壊れた！蹴破るから、どけっ！！」

「うん！」

早苗は咄嗟に横に避けた

それと同時に扉が勢いよく開き、仙が転がり出てきた

「豊梨っ！！」

だが、仙はすぐさま立ちあがると燃えさかる炎の小屋に飛び込もうとした

豊梨がまだ中に居る！！

「豊梨！！」

私は叫んだ

飛び込もうとした仙の前に、巨大な屋根が炎を纏って落ちて砕ける

仙は踏鞴を踏んで表情をゆがめた

「豊梨いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

「っ！！」

彼女は、笑いながら、泣きながら、こっちを見ていた
口だけ動かして、さようなら、と動かしたようにも見えた
ありがとう、と言っているようにも見えた
幸せに、と聞こえた気がした
豊梨の小さな体は、崩れた炎の小屋に押しつぶされた

「そりゃ、私だって辛いさ!!」

氷の腕を蹴り飛ばす

「でもね、私じゃなくて、仙がそれを聞いたんだろ!私じゃない!
豊梨と最後に居たのは!!あんただ仙!!」

次いでその空いた胴体に回し蹴りを入れた

ミシリと音を立てて氷にヒビが入る

転がった仙は体勢を立て直し、すぐさま飛びかかってくる

「その仙が、豊梨に頼まれた仙が、いつまでも・・・いつまでも、居ない女の面影みてんじゃないわよっ！」

「ぐガッ！！」

下あごを掬い上げるように蹴り飛ばし、神原の体は空中へと吹き飛んだ

炎の翼が広がり、グッと縮めた足をバネのように反発させて飛んだ

「言われたとおり、怨んでやれ！！豊梨を壊したあいつを、怨んでやれよ！！あいつと一緒に見てるから、何時までも仙は囚われてるんだ！」

さしずめ、呪いの用に、霜囲いのように、檻の用に

どうしても、豊梨を怨むことになってしまう

彼の心は、ずっと霜に覆われていった

冷たく、霜焼けのように静かに、それでも確実に彼の心を蝕んだ

多分、私の中にもそれはある

でも、私がやらなきゃ、誰がやるんだ

「あたしの彼氏なんだから、自力で、なんとかしなさいよねっ！！」

一瞬にして神原の上に移動し、早苗は彼の顔をぶん殴った

回転しながらものすごい勢いで地面に叩きつけられる神原を見て早苗はハッと鼻で笑う

「って、本当ならそう言いたい所だけど、何時までも引きずっていく訳にもいかないでしょう」

地面に叩きつけられた神原を両手両足、そして翼を使って押さえ込む

「割り切れる事じゃないけど、捨てるなんて出来ない過去だけど、今のままじゃ豊梨が可哀想」

早苗は言った

「でも、仙は私だけの物よ！！」

消えた豊梨と違って、私はまだ燃えているのだ
まだまだ燃えるのだ
こんなところで彼の心を閉じこめようと、自分だけの物にしようなんて許さない
仙の彼女になっていいのは私か豊梨だけ
嫉妬心なんかに、罪悪感なんかに、そんなもので彼を渡すものか
早苗の体と、神原の体を、深紅の炎が包みこみ、燃え上がる
翼をまるで腕のように、目の前の彼の体の氷の割れ目に突き立てた
「仙、嫉妬の言葉なんか気にすることはないっ！私も悩んだ。けどっ！！豊梨の事を思うなら、私を見て！！私だけを見て！！そう、豊梨も望んだんだから、都合がいいなんて解釈でいいんだよ！！私も仙だけを見るから、だから、だから――泣かないでっ」
グッと炎の翼に力が入る
豊梨は絶対に私を、仙を怨んでいない
そう信じる事は都合の良い事だろうか？
そうなのかもしれないけど、私はそうは思わない。豊梨が、祝福してくれたのだ

嘘なんて絶対につかない豊梨が
左右に氷が引っ張られ、ミシリと音をたてて軋む
涙を流す彼の瞳に、私の心が揺らいだ

　辛かった

辛すぎた

あんな過去、変えられたら良いのに

そのためなら、なんだって出来る

豊梨は怨めと言った

憎むなんて、出来ないのに

豊梨からしてみれば罪悪感を持ってもらいたく無かったのだろう

そんな事言っても、俺も早苗も、自分を怨むに決まっているのに

俺と早苗は額を合わせて抱きしめ合った

まとわりついた氷が、ボロボロと涙と同じく重力にひかれて落ちていく

「もう、大丈夫だ」

心に刺さった棘は抜けた

吹っ切った

そう、仙は言った

嘘を絶対につけない相手に向かって

「ありがとう、早苗」

「ううん、私も、ありがとう仙」

「俺も、全力でお前だけ見るから。だから、早苗も俺だけを見てくれ」

「うん。こんなオタク女でよければ、何時までも見てていいよ」

「お前のせいで、俺も似たようなもんだろうが」

二人は、涙を拭って笑い合った

早苗と付き合っているという罪悪感は、仙の心からはもう、これっぽっちも無くなっていた

『残された罪悪感の行方』（後書き）

『心からの祝福を』

『戸惑いのティータイム』

「フフ、流石四皇の魔女、いや、今は三皇か。どうでもいい私の趣味までよく分かっている」

折りたたんだ翼を座ったまま広げ、二度小さく羽ばたかせてティーカップに注がれた液体で口元を潤す

ふむ、美味いと少女は呟いて喉を潤したそれにご満悦のようである

液体に真っ赤な瞳が映る

「気にしないで。どうでもいいから分かっちゃうなんて、口が裂けても言えないわ」

対する魔女のダイヤレスも、優雅に笑みを浮かべながらクスクスと笑う

両者が持つ特有の雰囲気、片方は鋭くも気品ある、片方は優しく優雅な雰囲気は互いに強者の余裕というものを感じさせる

「実に、実に面白い。ニールに見せればすぐにでも是非解剖したいと懇願していただろうな。連れてこなくて正解だったわ」

「勧誘に失敗しているのに、正解とはまた貴方も面白いことを」

「失敗？あぁ、まぁ分かっていて言ったからな。断る予想くらいはしていたさ。とはいえ、その返答に希望が無いわけでもないから、やれることはやるのが私だ。私はこの力はただ受け入れるだけの力じゃなく、自身に足掻けと叱咤する力なのだと思っているからな。この結果は私としては残念であるが、それで貴様が力を失うわけでも敵対するわけでもないだろうからな。ならばそれは少なくとも最悪を選択したわけではないというのは分かる」

少女はニヤリと笑う

「確かに、この力は貴方の下で使う必要は無いのだから受けいれる必然性は無いわね。でも、刃を向けるべきは貴方ではないという事もまた確か」

「ふむ、それが分かっているのならば私からは特に言う事もあるまい」

その光景を見て、彩輝と唯は我に帰ると警戒感を一気に強め、仙と早苗はポカンとして飲み物を啜る二人を見ている

「あら、もう終わったの？」

特訓が終わるのを待っていたのか、それとも終わったことを残念だと思っているのか

吸鬼の少女、レミニア・アレスティアは顔だけ振り向かせてそう言った

剣を抜く彩輝とポーチから札を取り出す唯

「どうしたんだ二人とも？」

状況を読み込めていない早苗と仙だったが、それも仕方がない

彼らはこれまでに吸鬼を見ていないから分からないのである

彩輝は警戒というよりも怒りが真っ先にこみ上げてきた

この場になぜ吸鬼が？という当たり前の疑問を持つよりも先に彩輝の脳内を彼女の振り返った不適な笑みが埋め尽くした

何故ならばこの吸鬼は湊夕日という、少女の魂を奪った張本人だからだ

「そんな殺気全開にしなくてもいいじゃない。別に私はあなた達と

争いに来た訳じゃないのだから」

「お前！夕日をどこへやった！」

レミニアは小さくため息をついてカップを机の上に置く

そして振り返りながらこう言った

「積もる話しはお茶でもしながらゆっくり話しましょう。それと、そんなに睨まれると恐いわ」

ギラリと光る鋭い犬歯を見せながら、少女は笑みを浮かべた

流石にそこまでされると彩輝や唯も調子が狂ってしまい、魔女のダイヤレスも全員分の飲み物を用意してくれたのでとりあえず席に着くことにした

そしてやっぱりまだ話が見えず置いて行かれる早苗と仙も、首を傾げながら席に座ってカップに手をのばした

「・・・・どういう状況なんだこれ！？」

「さ、さぁ・・・あ、これ美味しい」

紅茶のような良い香りが漂い、彩輝の鼻を擽る

とりあえず自分も喉が渇いている事を思い出して一杯喉に流し込む

・・・美味いな・・・

おかしいな。自分もなんかよく分からない空気に飲まれ始めている

「さて、どこから話したものかな」

「やはりレミニア殿が此処へいらした理由から、では無いでしょうか？」

「そうね。根本的に、あなた達は私たちを勘違いしているようだし、その変の認識の間違いを訂正する必要もありそうね。まずは自己紹介からかしらね。私はレミニア・アレスティア。今は数少なくなってしまった吸鬼を束ねる長の一人」

「吸鬼ってのはよく分からんが、一人ってことは何人か居るのか？」

仙が手を挙げて質問した

「束ねるのは私ともう一人の男よ。吸鬼は見た目で言えば私のように白髪に翼が生えた種族よ。その他が人とどう違うのかは知らないわね。感情はあるし、言葉で意思疎通をしてるし、そこまで違いはないのでは無いかしら？」

「なるほどね。吸鬼がほ乳類に入るのかどうかはまぁどうでもいいんだが、夕日ちゃんはどこへやった」

次に彩輝が質問した

彩輝と早苗にとっては最も聞かなければいけない事だった

その質問に唯もカップを置いて真剣な顔をした

「夕日ちゃんって、もしかして」

「バスに乗り合わせてた小学生の女の子です。訳あって肉体と魂が分離してるらしく、この女に魂が奪われてるんです」

早苗が日本人らしき名前を耳にして聞いてみると案の定そうであった事にまず驚いた

という事はこの二人はすでに夕日という少女と再会している事になる

しかし、彩輝が続けた肉体と魂が分離しているという発言によって一気に彼女がどういう状況に置かれているのか分からなくなってしまった

一緒に居ないというのは、旅に出る上で危険だからという理由では無さそうなのは分かったが

だから思わず聞き返してしまった

「え、どういう事？魂が分離？」

「よく分かんないですけど、こっちの世界に来るときにまだ精神が幼いから負担が掛かるので、精霊が眠らせた状態で肉体と魂を分離したらしいんです。でも、この吸鬼は精霊が隠してた夕日ちゃんの精神をどこかにもっていってしまいましてね」

「ふむ。それで先ほどのあの発言か」

仙は、あまり詳しい理由や理屈はともかく、現在の状況を把握する事に務めた

理由や理屈を考えていてはとても異世界でやっていけない

何せあちらの世界の常識など通じない世界なのだから

基準や比較、応用には使えても、あちらの事象が当たり前だとは捉えてはいけない

「それで、夕日ちゃんは無事なの！？」

「あの魂の事か？あぁ、それならば安心していい。まだ彼女に手出しはしていないよ」

まだ（・・）、という部分に関して彩輝や唯はグッと自分を押さえる

とりあえず現在彼女は無事なようであるが、もっと情報を引き出さねばならない

「あの歳であれ程純粋な汚れ無き魂を見つけたのは始めてだ」

この勘違いが、今後の展開を大きく左右する事となる事をまだ誰も気がついていなかった

湊夕日の肉体と精神は、精霊台を通った瞬間に分離された

その際、彼女が精霊台に満ちていた魔力とその本質を心と体に纏わせたていた

龍の風と時間、天馬の光と運命、不死鳥の炎と生誕、氷狼の氷と災厄といったように、湊夕日もまた虹魚の水と浄化という力を手にしていた

そのためただ単に彼女の心に汚れがないとこの吸鬼は思い込んでしまった

「さて、私には今あなた方と争うつもりは無いのだけれども、その殺気は押さえてもらえないかしら？」

「お前がさっさと夕日ちゃんを返してくれればな」

彩輝が口調を荒げて短刀に手を掛けた
しかしそれにレミニアは涼しい顔をして返す
「あの子はあなた達のものだったの？それは知らなかったわね。まぁいいわ。残念だけど、その願いは聞き入れられないわね」
「何故？」
唯が一歩踏み出す
その右手の指に数枚の札が挟まれている
レミニアはゆっくりと歩き出し、一条の目の前まで来ると彼女を見上げた
真っ赤な瞳と漆黒の瞳がぶつかり合う
「長き眠りにつく始まりの魔獣。その肉体は石となり、魂は欠片となり、魔力は世界に散らばった。この世界に魔法を作り出した原点。この世界に存在する全てのマナ、それを元とした自然界の現象、魔天。生物がマナを魔術として行使する。この世界の全ての生命、存在が影響を受けているそれらをまとめて、魔法と言うのだけれども、その魔獣はたった一匹でそれを世界に満たした。肉体と魂につなぎ止められていた魔法が、魔獣の死と同時にこの世界を満たした。私はその魔獣を復活させるの。欠片となった魂を肉体へと戻し、世界に散らばった魔力の塊を肉体へと戻す。その過程で、魂である欠片

をすでにある魂の器へ戻さなくてはいけない。死とは肉体から魂が抜ける事。そして魂は器と心で構成されている。記憶も、感情も、全てがその器に収まっていてこそそれはそれぞれが唯一作り、記憶され、育まれた個人の魂となる。その器は肉体から離れてしまえば壊れてしまう。だけど、魂に蓄積されたそれはこうして、残っている」

彼女は首から提げたペンダントを、小さくかわいらしい手で取って見せた

鮮やかだが、透き通るように美しい翠色の宝石がそこには埋まっている

綺麗なはずなのに、彩輝には宝石の奥に鈍色の何かが宿っているような気がした

「貴方には一度見せたかしらね。湖で出会ったときに。あの時は貴方も意識が飛んでいたんだったわね。あの時貴方の体を乗っ取っていたのはこの魔獣の魂の一欠片。神子であるが故に、同調してしまった。理由は分からないけど、力を失っていた魔獣に弱みを突かれてその右手が魔獣に支配された」

「っ！！」

彩輝は指を差された右腕に左手で触れた

確かに覚えてる。その魔獣の声を

その悪魔の囁きとも言える誘いに乗ってしまった事を、レミニアに言われて思い出した

それも目の前に居るレミニアに戦いを挑み、負けた時に

「心当たりがあるようね」

「あなた達や私たちが集めている宝玉はその魔獣が持っていた魔力の塊。九つの宝玉は魔獣とは別の存在であったらしいけど、魔獣が持っていた宝具のようなものらしいわね。心底その宝玉に心を入れ込んでいたのかしら、宝玉には魔獣の魂の一部が宿ったわ。その魂の一部がどこかで貴方と接触し、その最貴方の体に入り込んだ」

その心当たりもあった

直接宝玉を触った記憶は無い

しかし、宝玉と融合した存在と接触した覚えがある

たった一度、深紅の短剣で黒い龍を貫いたその瞬間の事だと、彩輝は思い至る

「こちらの手元には宝玉が二つ。そして魂のコアである宝石もある。そして魂の器が揃った今、私は魔獣を解き放つ」

そこで、彩輝は思い出す
その黒龍と融合していた宝玉
そしてあちらが持っている宝玉は二つ
あの時奪われた黒玉と、もう一ついずれかの宝玉をあちらが所持しているという事になる
全ての宝玉を集めなければならないという訳ではないのだろう
そうでなければ、その魔獣の復活とやらに踏み切る事は無かったでろうから

「そこで提案なんだが、君たち二人、我々の仲間にならないか？」

不適な笑みを浮かべてこちらを見上げてる

「仲間になるメリットがありませんよ」

唯はそうキッパリと迷い無く言い放つ

彩輝も同意するように頷いた

確かに、彩輝と唯が彼らの仲間になるメリットも無ければ必要も、
今の彼女の話の中には盛り込まれていなかった

「フフ、そうだろう。この話は私達やこの世界の人達にとってはメリットがあっても、君たち異邦人には関係の無い、メリットの無い。そういう話しなんだよ」

「異邦人・・・」

「とはいえ、あなた達が元の世界に戻る方法は知らないわよ。私はただ知っているだけなのだから」

小さく彩輝が口からそう漏らした

確かに自分たちは異世界からやってきた異邦人である

異邦人である事を忘れてはいけないのだと、今更ながら思い出す

「そう。私はあなた達がこの世界のものではないと知っているわ。私は、“ただ有って先を知る能力”の持ち主。確定して起こることだけ分かる能力の持ち主。あなた達が現れる事。その確定していた未来だけは分かる。そして、あなた達と同じように、再度この地に異世界の存在が現れるという事も知っている。それが、私たちに災厄をもたらす者であるという事も。だから私たちは戦うために戦力を集めているの。もう一度聞くけど、私たちの仲間にならないかしら？」

「確かにメリットは無いな。この世界にかつてのアグレシオンと呼ばれたような者達が現れるというならば、君の話を聞く限りは確定

している未来という事なんだろう？」

仙が一歩踏み出して話しに入ってくる

これまで相手が誰かも分からず、話している内容もさっぱりであったが、何とか概要を掴んで会話に参加したのであった

「えぇ、変えられない確定事項。その先をどうするかは私たち次第」

「つまりあんたの持ってる能力は未来を変える事が出来る可能性があるって能力なの？」

「違うわ」

早苗が能力について確認すると、レミニアはキッパリ違うと言い切った

「未来は決まっていること、そして決まっていない事の二つによって出来ているの。私の能力はその決まっている方の未来を知る事が出来るの。これは何をどうしても変えられない未来なの。故に私が他の人間や吸鬼と違うのは、決まっている方の未来を知り、そこから決まっていない方の未来を決める事が出来ることができる存在だと言うこと。この能力は言ってしまえば未来は変えられない。でも私が望んで行動すれば、物事はその私が望んだ未来を作ることができるわ」

「なるほどね。未来は決まっていない。絶対に起こる未来から、どういう結末になるのかは誰にもわからない。けど、君はその結末を自分の望む結末に根回しできるという訳か」

仙の問いに、レミニアは正解だと拍手した

「飲み込みが早くて嬉しいわ」

「なら、今あんたは何を見てんだ？」

早苗は仙よりも一歩前に出て小さな少女を睨んだ

早苗がレミニアに聞くと、レミニアはフッと笑って翼をゆったりと広げた

「変えられぬ未来を」

「その先の結末は、見えていないのね」

「えぇ。だからこうして私は行動している」

「一つ良いか？」

そこで、唯が手を挙げた

「あら、何かしら？」

「君は先しか見ていないのでは無いか？」

その問いに、真っ赤な瞳がきょとんとして唯を見上げた

言葉の意味が分からない、といった表情で

「どういう意味かしら？」

そうレミニアが最後まで言い切らないうちに、ズズンと空気が震えて彼女の声はその振動音に掻き消された

それは崩れた瓦礫の上に降り立った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0519g/

烈風のアヤキ

2011年10月28日22時29分発行